新訳　そして伝説へ・・・

久慈川　京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新訳　そして伝説へ・・・

【Ｎコード】
Ｎ２４３０Ｏ

【作者名】
久慈川　京

【あらすじ】
ドラクエ３の小説です。
基本、原作に沿って進んでいきます。
捻くれ者の勇者と決して期待される生い立ちの者ではない仲間たちとの波乱万丈の冒険です。
主人公は勇者なので強いですが、最強ではありません。
旅を重ねるごとに強くなっていきます。

プロローグ（前書き）

携帯版のドラクエ３をやっていてどうしても書きたくなってしまって、連載中の小説がありながら投稿してしまいました。

とてもゆっくりめな更新になりますが、よろしくお願いいたします。

プロローグ

人々は望む。

この最悪な世界から誰かが救い出してくれるのを・・・・

自分の子供たちが外で元気に走り回れる日々を・・・・・・

自分がその光景を見ながら目を細める日々を・・・・・・・

そのために、勇者が必要だった。

自分たちが平和に暮らせる日々の為に・・・・

自分以外の誰かであれば良かった・・・・・

「カミュ、起きなさい。　私の可愛いカミュ。」

とても裕福とは思えない、城下町のはずれにポツンと佇む一軒家の２階で母親が子供を揺り起こす声がした。

ベッドにはまだ覚醒しきれない少年が寝ている。
年のころ１５，６といったところであろうか。

艶のある黒髪は彼(か)の英雄から譲り受けたもの。

「・・・ああ、起きたよ。　着替えて下に行くから。」

母親の呼びかけに、心底鬱陶しそうに少年は答える。
それは、反抗期を迎える子供とはまた違う、一線を引いたものであった。

「今日はお城に行く大事な日ですよ。　すぐに着替えて降りていらっしゃい。」

母親は息子がベッドから起き上がるのを確認してから階下に降りて行った。

「はぁ・・・・・・・・・」

少年は本当に気だるそうに身を起こし、着替えの準備を始める。

寝巻きから青を基調にした服に着替え、靴を履く。
ベルトに薬草などを入れたポーチを付け、ベッドの枕元に立てかけてあったひと振りの剣を背に回して鞘についているベルトを胸の前で止めた。

この剣は、今日16歳を迎える少年の祝いとして、彼の祖父から貰ったものだ。
年期は入っているが、とても丁寧に手入れをされていて、切れ味は申し分なさそうであった。

マントを羽織った少年は、最後にサークレットを頭に付けた。
サークレットの中心には青く輝く石が付いている。
これも、16歳の祝いにと、昨夜母から手渡されたものであった。

準備が済んだ少年は一度自分の姿を見下ろし、盛大な溜息をついてから階段を下りて行った。

アリアハン

ここは、英雄を産みし国アリアハン。

昔、人と魔物はそれぞれの住み分けをし、共存共栄が暗黙の了解のもとに成り立っていた。

しかし、人間の繁殖能力は恐ろしく優秀であり、人口の増加に伴い人はその領分を広げて行くことになる。

森を切り開いて平地にし、人の往来があるところに町ができ、今や未開の土地という場所は限られてきた。

その為、住処を奪われた魔物たちは徐々に凶暴化していき、次第に人間を襲うことが多くなっていった。

それでもまだ人間の繁栄に衰えという言葉はなかったのだが、その人間にとっての平和が崩れる時が来た。

魔王バラモスの登場である。

バラモスの登場により、人を襲っていた魔物はより凶暴になり、今まで人に牙を向けなかった魔物たちまでもが人間を襲い食すようになった。

その結果、街と街の間の移動も困難となり、商品を輸送するにも傭兵を雇う分赤字になってしまうため商品の供給も満足に出来なくなっていった。

日増しに強くなる魔物の脅威は人々から笑顔を奪い、活気を消した。
そして、自分たちでは対抗できない恐怖に対し、人々は自分たちの信じる神である【聖霊ルビス】に祈るだけであった。

そんな中立ち上がった一人の青年がいた。
彼の名はオルテガ。
若きアリアハンの勇者である。

腕っ節はアリアハン随一の腕前であり、宮廷騎士たちが数人でかかっても太刀打ちできない程のものであった。
また、彼(か)の者は魔法も使うことができた。

自国の勇者が魔王討伐に立ち上がったのだ。
国王は嬉々として各国に書状を送り、その勇者への支援協力を要請。
国を挙げて魔王討伐を後押しした。

そして、オルテガは旅立った。
若くまだ幼ささえも残す妻と生まれたばかりの息子を残して・・・・・

旅立って一年、その知らせは魔王消滅を心から願う人々を絶望の淵に落とした。

オルテガ死去

国王はその知らせを聞いた時に目の前が暗い闇に覆われた。
しかし、国王の決断は迅速だった。
早急に大臣たちに命を下し兵士を招集させ、レーベの村の東にある

アリアハン大陸と別大陸を結ぶ旅の扉の破棄を命じる。
命を受けた兵士たちは、旅の扉の洞窟に分厚い壁を製作し、他国とのつながりを断った。
これにより、別大陸から強力な魔物たちがアリアハンに入ってくることはなくなった。
同時にアリアハンの他国との交流もほとんどなくなることになる。
年に何度か海上からの渡航があるが、それも海の強力な魔物たちの影響で渡航成功率は皆無に等しかった。

アリアハンの勇者オルテガの死。
たった一つの人類の希望はたった一人の青年の死によって永遠に閉ざされたかに思われた。

しかし、彼には息子がいた。
これはそんな生い立ちを持ち、後に伝説となった少年の物語である。

「カミュ、朝ごはんはできているから、席に座って。」

母親はやっと降りてきた息子に対し席に着くように促す。
すでに食卓には祖父は着席しており、料理もテーブルで主を待っている。

祖父は息子であるオルテガを４０を過ぎて授かったため、すでに齢７０を超えている。
しかし、若い時は剛の者として名を馳せていたこともあり腰も曲が

らず、その体躯はとても７０の身体には見えない。

「お爺様、おはようございます。」

少年は慣れ親しんだ自分の場所に座り、家長である祖父に丁寧に挨拶をする。

「うむ。　カミュ、いよいよ今日じゃな。　わしやオルテガの名に恥じぬようしっかりとやるんだぞ。」

カミュと呼ばれた少年は、すでに耳にタコができる程聞いている祖父の言葉にうんざりとしながらも、それを表情には出さず「はい」と答え頷いた。

「大丈夫ですよ、お父様。　カミュはオルテガ様の子です。　立派に果たしてくれますよ。」

台所から卵を焼いたものと、具がそれほど多くはないスープをお盆に載せて、にこやかな笑顔で母親が出てきた。

彼女はニーナ。
魔王討伐に行く前の諸国を旅していたオルテガと恋に落ち、１８歳という若さで妻となりカミュを身ごもった。
２０歳で未亡人となり、オルテガの功績による国からの補助や、宮

廷騎士であったオルテガの父の老後手当があったとはいえ、女手一つでカミュを育てた女性である。

「さぁさぁ、スープが冷めないうちに頂きましょう。　大事な日に登城を遅刻するわけにはいかないでしょう。」

「ふむ、そうじゃな。　カミュ、王にお会いする時に失礼のないようにな。」

堅苦しい会話を幾度も交わす母と祖父の言葉に返事を返しながらもどこか上の空でカミュは食事を済ませた。

「では、お爺様、行ってまいります。」

食事を済ませ、休む暇もなくカミュは城へと向かうことになった。

「うむ、くれぐれも王に失礼のないよう。　そして、アリアハンの勇者としてオルテガの後を継ぐのだ、その名に恥じぬ行いを心掛け

よ。　それに、勇者としてこの家を出るのじゃ、目的を果たすまではこの家の戸を開けることは許さん。　あとは・・・・・」

「お父様、その辺りで・・・登城が遅れてしまいます。」

果てしなく続きそうな祖父の小言にカミュが辟易していると、ニーナが祖父の言葉を遮った。
それは、カミュを助けるためというよりは、言葉通りに城へ行く時間を気にしているようである。

「さあ、カミュ、お城までは私も一緒に行きます。　私の後についていらっしゃい。」

自宅の敷地を一歩出ると、ニーナはその表情を一遍させ、悠然とカミュの前を歩いていく。
そう、外に出れば、ニーナは勇者オルテガの妻であり、カミュは勇者オルテガの忘れ形見なのである。

「おはよう、ニーナさん。　あら、そう・・・今日だったのね・・」

「頼んだぞ、カミュ！　魔王を倒して平和を取り戻してくれ！」

「夫とあの子の敵討ち、貴方に託すわよ。」

家を出て、城までの道で街の住人がそれぞれの想いをカミュに託す声が響く。
ある者はこの荒れすさんだ時代からの解放を・・
ある者は失った身内の敵討ちを・・・
ある者は無念にも命を落としたアリアハンの勇者へ託した希望を・・・

16歳の少年に背負わせるにはあまりに重すぎる責任と希望を嬉々として投げかける。
それに対し、ニーナはにこやかな笑顔で応対しながらも、悠然とカミュの前を歩き、一方のカミュは能面のような、表情の抜け落ちた表情で、街の住民を一瞥もせずに前を歩くニーナを追っていた。

アリアハンの城下町から城へと続く橋の麓に着くとニーナは振り返りカミュを見つめる。

「さぁ、ここからは一人でお行きなさい。　お父様もおっしゃっていましたが、オルテガ様の名を汚すようなことのないようにね。
貴方はこのアリアハンが産んだ勇者の息子なのです。　そのことは忘れてはいけませんよ。　それと、お父様はああ言っていましたけ

れど、あそこは貴方の家でもあるのですから、いつでも帰ってきていいのですからね。」

「・・・・わかったよ。」

家を出る前に祖父がカミュに言ったことをそのまま繰り返すような母の言葉に、カミュは無表情のまま返事を返し、それっきりニーナの方を振り返ることなく城門に向かって歩き出した。
「いってらっしゃい」「いってきます」という世間でありふれた親子の会話すらもなく、ニーナとカミュの別れは済んだ。

「オルテガ様・・・カミュをお守り下さい・・・・」

そのカミュの背中を見つめながら、呟くニーナ。
これが、ニーナが見るカミュの最後の姿になるとは当のニーナは考えもしなかった。

アリアハン（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

もしよろしければ、ご感想等をいただけると嬉しく思います。

アリアハン城（前書き）

連続投稿です。
短めの話を少しずつ更新して行きたいと考えています。

アリアハン城

城門につくと門の両端に槍を片手に持った兵士が一人ずつ立っていた。
見覚えのない顔、おそらく新しく配属された兵士たちなのだろう。
最近では、いかに他国との行き来を断ったとはいえ、魔王の影響からかアリアハンの魔物たちの凶暴化が進んでいた。

昔から大陸にすむスライム。
死者の亡骸を啄ばむカラスが魔王の影響で巨大化した大ガラス。
数多くの魔物たちがアリアハン大陸を住処としている。

民衆の生活を保護するため、国では討伐隊を定期的に組織し、アリアハン、レーベ間の街道周辺の魔物討伐を行っていた。
それは宮廷騎士だけでなく、街の酒場に集まる冒険者たちからも志願を募り討伐隊を組織する。
いくら宮廷騎士や旅慣れた冒険者たちといえども、相手は魔物である。
一回の討伐で多いときには数十人の死者が出ることもある。
ここ数年はその傾向が強く、城の中の兵士や騎士たちも重臣以外は入れ替わりが激しい。

「カミュと申します。　本日、アリアハン国王様にお会いしていた

だくお約束を頂いております。　ご確認をお願い致します。」

カミュとて、立つことができる歳になった途端に剣が振るえたわけではない。
基本、祖父に師事していたが、宮廷騎士であった祖父のつてで城の兵士や騎士隊長から教えを受けることもあった。
顔見知りの兵士たちであれば、カミュの顔を見れば今日ここに来た要件も解るだろうが、城門の両側に立つ彼らはカミュの顔を知っているようには見えなかった。

「むっ、少し待っていろ。」

右側にいた兵士がカミュの言葉に嘘がないことを確認するために城内へと入っていく。
カミュはその姿を見送ると、左側の兵士からの無遠慮な好奇の視線を無視し、身動き一つせずにその場で待っていた。

「確認が取れた。　国王様がお待ちだ。　城内に入った所に案内役がいる。　そいつに謁見の間まで案内してもらえ。」

戻ってきた兵士は、それでもカミュの素性を知らされなかったのであろう。
見下すような傲慢な態度でカミュへ指示を出す。

「畏まりました。　お手数をお掛けいたしました。」

カミュは城内の兵士の平民に対するそういう態度には慣れていた。
武力では一般人より強いのだろう。
そして、言葉通り命を懸けて民衆を護るために最前線に立たされるのは宮廷兵士ではなく彼らのような一般兵である。
それを考えると仕方がないことなのかもしれない。
カミュはそう思っていた。

「カミュ様、お待ちしておりました。　王様もお待ちです。　どうぞこちらへ。」

城内に入るとすぐに兵士ではなく線の細い男が立っていた。
おそらく政に携わる文官であろう。
腰は低く、それでいて眼だけはこちらを試すような光を灯している。

「ありがとうございます。　宜しくお願い致します。」

文官は一つ頷くと、カミュを先導し前に見える階段へと向かって行った。
幼い頃は、剣を習うために何度も通ったことのある城だが、ここ数年は城内に入ることもなくなった。
記憶とは違う部分がちらほらとあり、それを見つけることがカミュは不思議に嬉しかった。

「きゃ！」

女性の短い悲鳴に我に返ったカミュが見たものは、先導していたはずの文官に涙目で頭を下げている給士の女性であった。

「この私の前を横切るなど無礼ではないか！！」

「も、申し訳ございません・・・・・・」

「貴様、どこの給士だ！　所属を言え！」

「も、もう・・し・・わけご・・・ざいません。」

（またこういう場面か・・）

カミュは見慣れた光景に溜息を洩らす。
権力、腕力のある者がない者を虐げることはこの世では当たり前のことだ。
すでにそう割り切っているとは言え、気分のいいものではない。
カミュはオルテガの息子ということで文官に案内させるような立場にいるが、実質そこの給士の女性と変わらない、アリアハンの街はずれに住む一国民なのだ。

「文官殿、そこの給士の方の無礼にお怒りなのは当然ですが、よく見れば、給士の方も相当慌てたご様子。　ここは文官殿の寛大なお心でお許しくださる訳にはいきませんか？」

相変わらずな無表情で、カミュはやんわりと文官と給士の間に入った。

突然のカミュの登場に、両者ともに驚いていたが、その後は対照的な表情をしていた。

「・・・・・・カミュ様がそうおっしゃるならば・・・・もういい！　早急に仕事に戻れ！」

カミュの登場に苦虫を噛み潰したような表情をしていた文官が忌々しそうに給士に当たる。

対する給士はほっとした表情を浮かべ、深々と頭を下げフロアを出て行った。

何をあそこまで慌てることがあったのかが疑問であったが、結局自分には関係のないことだとカミュは忘れることにした。

奥の方で、「お姫様～～」という先程の給士の声を聞いたことも聞かなかったことにしておいた。

「よくぞ来た。　勇者オルテガの息子カミュよ。　面を上げよ。」

謁見の間に通され、カミュは王の前に跪いていた。
跪くカミュの右手には見下すような形でアリアハン国務大臣が立っている。

「国王様におかれましては、ご健勝で何よりでございます。」

カミュは一度顔を上げたがまたすぐに面を下げ、謁見の間に敷かれている赤い絨毯を見つめながらありきたりな挨拶を交わす。

「うむ。　さて、カミュよ。　そなたも今日で１６歳となった。
このアリアハンでは１６歳になれば一人の大人として認められる。
故にここにそなたをアリアハンの一戦士として命を下す。　勇者カミュよ、これよりこのアリアハンを出て魔王バラモスの討伐を命じる。」

（何を勝手なことを）

カミュは内心、国王の身勝手な言葉に毒づいていた。

「はっ、謹んでお受けいたします。　このカミュ、アリアハンの旗の元、国王や勇者オルテガの名に恥じぬようその命、命を賭して果たしてごらんにいれます。」

「うむ。　期待しておるぞ。　しかし、カミュ、そなたの父オルテガも一人で旅に出、そして命を落とした。　日増しに魔王の力が強まる中、一人での旅は危険だ。　城下町にある酒場には多くの経験豊富な冒険者たちがおると聞く。そこで旅の仲間を募れ。　よいな。」

「畏まりました。　このようなわが身を案じていただき有難き幸せに存じます。　仰せのとおりに致します。」

自分の身を案じてではないことはカミュも百も承知だ。
それでも未だ顔も上げずに国王へ返答する。

「うむ。　ただ、魔王討伐という目的では思うように仲間を募ることもできぬであろう。　よって、我が宮廷騎士からそなたに一人分け与える。　・・・・大臣よ。」

「はい。　これ、呼んでまいれ。」

思わぬ国王の提案に思わず顔を上げそうになったカミュだが、何とか抑えることができた。
国王から呼びかけられた大臣が、その言葉が前から指示として受けていたようにさらに下の文官に指示を出す。

しばらく経って、カミュの後ろの扉が開き足音が近づいてきた。
足音はカミュのすぐ後ろで停止し、カミュと同じように跪く気配がした。

「うむ。　カミュよ。　その者の名はリーシャ。　前アリアハン宮廷騎士隊長の一人娘だ。　女子ではあるが、今の宮廷騎士の中でもその剣技の実力は上位に入る。　そなたの旅の助けとなろう。」

（女！？）

カミュは国王の言葉に多少驚きながら、姿勢はそのままで顔だけ後ろに振り替える。
確かに女であった。

少しカールがかかった金髪は肩にも届かないぐらいの長さ。
アリアハンの一般的な女性と比べると比較的筋肉のついた体格では

あるが、筋肉隆々と言うわけでもなく、女性特有の丸みを残した引き締まった身体をしている。
跪いているのではっきりとは解らないが、背はおそらくカミュより頭一つ大きいだろう。
宮廷騎士隊長の娘として幼いころから剣の手ほどきを受けてきたのであろう、その気の強そうな瞳が物語っていた。

「はっ、国王様のご寛大なお心を決して忘れず、魔王討伐の命、必ずや果たしてまいります。」

「支度金と旅に必要な物を用意した。　大臣から受け取るように。
では、行け！　勇者カミュよ！」

国王のその言葉を聞き、支度金と袋に入った道具を大臣から受け取ったカミュは、後ろに控えたリーシャを一瞥し、謁見の間から出て行った。

アリアハン城（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

読みにくい点などがありましたら、お聞かせ願えればと思います。

アリアハン城下町（前書き）

話が短いのはご勘弁を・・・
息抜きの気持ちで書いているものですので、どうしても一話一話が短くなってしまいます。

アリアハン城下町

「ちょっと待ってくれ。　これから一緒に旅に出るんだ。　自己紹介ぐらいさせてくれないのか？」

城から出て、アリアハンの城下町に続く橋を歩いている途中でリーシャは前を歩くカミュに意を決して声をかけた。

カミュは謁見の間で出掛けにリーシャに視線を向けたきり城を出てこの橋に来るまで会話どころか顔を見ることがなかったのだ。

「・・・・・・」

後ろからの声にカミュは無言で振り返る。

謁見の間ではそれほどじっくりと見なかったが、リーシャの容姿は周りの視線を集めるに十分値するものだった。

気の強そうな切れ長の瞳。

すっと通った鼻。
薄い唇。
美人の部類に入るものだ。
来ているものがワンピースのような物であれば、街を歩くだけで男どもが声をかけてきてなかなか前に進めない状態になりそうである。
しかし、リーシャはアリアハン下級騎士に支給されるなめし皮を叩いた鎧を身につけ腰にはこれも国からの支給品である剣を差していた。

「はぁ、ようやくこっちを向いたな。　私は前宮廷騎士隊長サブリナの一人娘のリーシャだ。」

「・・・・・カミュだ・・・・・」

自分の自己紹介の後、しばらく間を置いて口を開いたカミュから出た言葉は、自分の名前だけを言う簡潔なものだった。
幾分か不満があったが、彼が自分の憧れていた人の息子だと聞いていたので、リーシャは気を取り直し、会話を続けることにした。

「剣は幼き頃から父より教わってきた。　そこら辺の男に負けることはない。　オルテガ様には幼き時分に何度か声をかけて頂いたことがある。　その息子である貴殿と魔王討伐の命を受けたことを誇りに思う。　よろしく頼む。」

そう言ってリーシャが手を差し出す。

カミュはその手をしばし眺めると盛大に溜息をついた。

「貴方が誰であろうと別段興味はない。　勇者オルテガへの憧れを俺にスライドしても無意味だ。　アリアハン国王の勅命ということで俺についてくるのなら辞退してくれてもかまわない。　理由はどう言ってもいい。　すべて俺のせいにしてくれても構わない。」

全く友好的ではない発言。
これが先程まで国王の前で雄弁に応答していた少年なのか。
リーシャは信じられない者を見たようにオルテガの息子であるカミュを見ていた。

呆然とするリーシャを見て、もう一度溜息をついたカミュは踵を返し、再び橋を歩き始めた。
カミュが歩き出したことを見て我に返ったリーシャは慌ててその後を追った。

「ちょ、ちょっと待て！　それはどういう意味だ。　私が女だからか！？　女の騎士は旅の邪魔だとでもいうのか！？」

それはリーシャにとっては許せないことだった。
幼き頃、宮廷騎士だった父サブリナには子供ができなかった。
やっと授かった子は望んでいた男ではなく女子だった。
それでもサブリナは女のリーシャに剣を教えた。
サブリナの同僚は、女子に剣を教えるサブリナを嘲笑った。

リーシャと同年代の子供たちも男女を問わずリーシャ親子を馬鹿にした。

父であるサブリナは宮廷騎士隊長まで登りつめたが、リーシャが8歳になるころ魔物討伐の際に仲間をかばって戦死した。
リーシャは父の死後も一人で鍛練を行い、同世代の子供たちの中では頭一つ飛び出した実力者になっていった。
だが、女が剣の実力を磨いてもと、周りの視線は冷たいものであった。

「そうか、名はリーシャというのか。　よい筋をしているな、さすがはサブリナ殿の子だ。私の子供が成長したら、剣を教えてやってくれないか？」

そんな中、一人だけは違った。
旅による日焼けした肌。
筋肉で武装された身体。
それが、アリアハンの勇者と謳われた、まだ魔王討伐に出る前のオルテガだった。

今回、そのオルテガの息子の魔王討伐という旅に同道できる命を受けたとき、あの時のオルテガ様との約束を果たせると喜んだ。

成長し、騎士団に入ってからも女というだけでの差別と侮蔑はあった。
ましてや、自分よりも弱い男からは嫉妬からの嫌がらせなどは毎日の様であった。
それでも、耐えてきたのは、この日の為であったのだと思った。

謁見の間でみたオルテガの息子の背は、あの頃のオルテガに比べ見劣りはするものの、１６歳という歳を考えると成長が楽しみなものだった。

だが、先程の言葉はその願望をたやすく打ち砕く。

「ふぅ・・・さっきも言ったように貴方が誰であろうと、女であろうと男であろうと興味はない。　俺は最初から一人で旅に出るつもりだった。　だから、貴方が強かろうが弱かろうが共に旅する気はないということだ。」

溜息と共に振り返りもせずにカミュが放った言葉は、憤っていたリーシャの熱を一気に冷まし、絶望に淵に落としていく。
彼は本当にあのオルテガ様の息子なのだろうか。
いや、断じてない。
彼の息子ならば、このようなことを言うはずがない。
そんな疑問がリーシャの口を開かせた。

「お、お前は、本当にオルテガ様の息子なのか・・・・・？」

呟くようなリーシャのその一言にもう一度振り返ったカミュの表情は何の感情も見いだせない、本当に生きている人間かを疑いたくなるようなものだった。
今のカミュの表情を見れば、先程までリーシャに相対していた時がどれだけ表情豊かなものであっただろう。
遠巻きに見ている者にはその違いが解らないかもしれないが、言葉

を直に交わしたリーシャには恐怖さえ感じるものだった。

「勇者オルテガの息子というステータスが貴方にとってどれほど重要なのかは知らないが、それを他人に押し付けないでくれ。そのステータスと旅に出たいというのなら、人違いだ。他を当たってくれ。」

そう言ったきり、もう話しかけるなとでも言うようにカミュはアリアハンの城下町の人ごみの中に入っていった。

（どうして、こうなったんだ？）

リーシャはカミュが人ごみに入っていってからもしばらく橋の上で放心状態にあった。

３日程前にアリアハン国王直々にお呼びを受け、魔王討伐の命を頂いた。

最初に聞いた時は、周辺の魔物討伐の言い間違いかと思ったが、そうではなかった。

討伐隊のリーダーは自分ではなく、若干１６歳の少年だった。
彼の名はカミュ。
アリアハンの勇者オルテガの息子。
生まれた時から英雄になることが決まっている少年。

羨望の念を抱いたこともある。
決して自分の父を蔑にするわけではないが、全世界に誇ることのできる勇者の血を引く子であることを素直に羨ましく思っていた。

この３日間、いつもの鍛練を強化し、自分を鍛え直した。
勇者オルテガの息子に同道するものとして恥じぬよう、アリアハンの勇者の想いを引き継ぐものとして胸を張って旅ができるようにと・・・・・・

それがどうだ・・・・・
会話して数分でリーシャの旅は終結しようとしていた。
カミュというあのオルテガの息子は、仲間と旅をするつもりはないという。
それはリーシャであろうと他の誰であろうと同じだという。

つまりは、彼はリーシャをリーシャという個人として見ていないのだ。
どれほどの屈辱だろう。
未だ、亡き父サブリナに及ばないとは思ってはいるが、今の宮廷騎士の中では自分が一番だという自信もあった。
なればこそ、旅への同道者として認めるどころか、存在すら認識しないことは最大の侮辱である。

リーシャは意識の覚醒と共に湧いてくる怒りを感じた。

「なんだと言うんだ！　あのオルテガ様でさえ一人旅で命を落としたのだ！　オルテガ様の足元にも及ばない実力でどうやって一人で魔王を倒すと言うんだ！」

突然大声を張り上げたリーシャに街の方から奇異の視線が飛んでくるが、怒りに我を忘れかけているリーシャには関係のないことであった。

「くそ！　こうなったら、意地でも付いて行ってやる。　あんな奴がオルテガ様の息子だなんて、私は認めない。　きっと養子か何かだ。　化けの皮を剥いでやる。」

自分の中の勇者オルテガ像と先程の少年とが結びつかない理由を自分の中で強引に結びつけリーシャは偽勇者となった少年を追った。

街に入り、街の門の方へ向かうと、道具屋に入っていく少年を見つけた。
旅に必要な道具でも買いに行くのだろうか？

国王から旅の道具は支給されたはずだが、とリーシャは首を捻る。

道具屋に入ると、ちょうどカミュが道具屋の主人から薬草を数枚受け取っているところだった。

「何をしているんだ？　薬草なら国王からの支給品の中に入っていたのではないのか？」

「ん？　はぁ・・・また貴方か・・・・旅の仲間は間に合っていると言ったはずなんだが。」

不意にかけられたリーシャの声に対して驚きもせず、無表情のままカミュはリーシャを見る。

カミュの口から出た言葉は、リーシャの質問に一切答えることなく、リーシャとの接触を拒絶するものだった。

「ぐっ、わ、私はアリアハン国王から直々にお前の旅への同道を命じられたのだ。　いくらお前に断られても、ついていく。」

「もう呼び名はお前に降格確定か・・・・・ふっふっ、勝手にすればいい。　ただ自分の身は自分で護ってくれ。」

意外にもカミュはリーシャの同道をすんなりと認めた。

それでも、リーシャはカミュのある一言が気に食わなかった。

「自分の身を護る？　それはこっちのセリフだ。　オルテガ様の足元にも及ばないお前が何を言っている！？　おそらく、お前の剣の腕などは私よりも劣るのだろう？　お前こそ自分の身すら護れないのではないか？」

アリアハン宮廷騎士随一だと自負しているリーシャにとって、立て続けの侮辱である。
どうしても挑発的な物言いになってしまう。
対するカミュはというと、そんなリーシャの言葉を聞いていなかったかのように、リーシャの脇を抜け道具屋を出て行った。

慌てて後を追い、リーシャはカミュの横に並び歩き出すが、一切の会話がない。
カミュはリーシャを見ようともせず、リーシャもそんなカミュに自分から声をかけるようなことはしなかった。

武器屋を通り過ぎ、アリアハン唯一の酒場が見えてくる。
リーシャはさも当然のように酒場への道を曲がったが、カミュはそのまま道を真っ直ぐに進む。

「お、おい。　国王様に言われただろう。　酒場で仲間を募るのではないのか？」

全く酒場へ向かう気がないカミュを追ってリーシャは声をかけるが、カミュはそんなリーシャに心底呆れたような溜息をついた。

「俺は、元々一人で旅に出るつもりだったと話したはずだが・・・・・それに、あんな酒場にたむろっている人間が、魔王討伐のような、ほぼ確実な死の旅についてくると思うのか？」

リーシャは息を飲んだ。

一人で旅するつもりだと言われたことを忘れていたためではない。

国王様の忠告を無視するカミュに驚いたためでもない。

カミュが、この魔王討伐という旅での死を当たり前のことと受け入れていることにだった。

普通、このぐらいの歳の人間が一国の国王からの直々の命を受けて旅立つとき、その胸には多少の恐怖はあるだろうが、希望と好奇心、そして選ばれたことへの優越感に興奮するのが当たり前だ。

リーシャですら、国王直々の命に興奮を覚えた。

それにもかかわらず、目の前の少年にはそのような感情のかけらもない。

むしろ、死という絶望が自分の未来であることを納得しているかのようであった。

「こんな他国との交流もなく、大陸から強い魔物も入ってこない国の酒場に昼から入り浸っているんだ。　どうせろくな魔物と戦ったこともない連中ばかりだろう。　あって、魔物討伐で街道沿いにいる魔物と多少の戦闘をして、それで得た給金で生活している名ばかりの冒険者さ。　そんなわが身かわいい奴らが死の旅についてくるとは思えないし、たとえついてきたとしても足手まといなだけだ。」

カミュは言い終わると、そのままアリアハン城下町の入口の門に向かう。
リーシャはカミュの言うことに反論することが出来ないことに悔しさを覚えるが、よくよく考えれば、カミュの言い分が的を得ていることを理解し、その後を追った。

「「「アリアハンの英雄オルテガの意思を継ぐ勇者カミュ、バンザーーーーーイ!」」」

「「「勇者に聖霊ルビスの加護のあらんことを!」」」

「「「頼んだぞ〜〜〜〜〜〜〜〜!!」」」

門の近づくにつれ見えてきた人だかりにリーシャは目を丸くした。
街の住民の大半が勇者の旅立ちを見送ろうと押し寄せてきていた。
口々にアリアハンから出る新しい勇者への声援を発し、羨望と期待の眼差しを向ける。
リーシャはその民からの応援を受けるわが身を若干気恥かしさもあるが、誇らしく思った。

だが、少し前を伺うと、そこには先程橋の前でリーシャに向けた、恐怖すら感じる、表情の抜け落ちた顔をして門をくぐろうとするカミュがいた。

彼はこれほどの声援を受けても何も感じないのだろうか？

リーシャはこれからの先の長い旅路に若干の不安を抱きながらもカミュに続いて門をくぐった。

アリアハン城下町（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
若干修正いたしました。
カミュとリーシャの年齢差が自分の考えているものに合わないことに気づいての慌てた修正です。
申し訳ありません。

アリアハン大陸？（前書き）

少し更新です。
意外にドラクエのＳＳを書くのが楽しいです。

大筋のストーリーだけが決まっていて、キャラクターの人格等は好きに作れますし、イベントにも囚われず、進めていけるのが大きいのでしょうか・・・

また時間がある時に更新していきます。
よろしくお願い致します。

アリアハン大陸？

「おい、まずどこに向かうんだ？」

アリアハンの城下町を出てすぐにリーシャは旅の計画についてカミュと話し合う必要性を感じ声をかけた。

「まずはレーベの村に行く。　なんにせよこのアリアハン大陸から出ないことにはどうしようもないだろう。　国王からも大陸の出かたは教えてもらってないからな・・・・大陸からの出かたも教えずに俺に何を期待しているんだ・・！」

吐き捨てるようにアリアハン国王への愚痴を言うカミュにリーシャは眉をしかめた。
王都の中でこのようなことを公に言えば、不敬罪で処罰されるぐらいのことだ。
それを、王都から離れたとはいえ、宮廷騎士の一人である自分の前で発するなどどうゆうつもりなのだろうか。
そう思い、リーシャは抗議の言葉を発しようとする。

「おい！　お前そ・・・・・」
「お待ちくださ～～～～～～～～～～～い！！」

リーシャの抗議の声は、後ろから唐突にかけられた大声に阻まれた。
リーシャは反射的に声のした方を振り返るが、カミュは相変わらず無表情で手元の地図を睨んでいた。

声は城の方からした。
見ると、一つの人影がこちらに近づいてくる。
リーシャはいざという時の為に右手を腰に差す剣の上に置いた。

「はぁ・・・はぁ・・・・はぁ・・・・・」

しばらくすると、小さかった人影が大きくなっていき、自分たちの前で停止した。
遠くからでは分からなかったが、法衣を纏ったカミュと同じぐらいの少女であった。
背はリーシャの肩ほどまでしかなく、髪は癖のない黒味がかった蒼色のものを肩の下まで伸ばし、眼は慈愛に満ちた碧眼であった。

「何者だ・・・・？」

リーシャは未だに自分たちの前で息を整えることに必死な僧侶に声

をかける。
この時点でも、カミュは地図を睨んでいた。

「はぁ・・・はぁ・・・は、はい。　わ、わたくしはアリアハンの僧侶でサラと申します。　失礼ですが、勇者カミュ様でよろしかったでしょうか？」

息が整えきれずに話し始めたため、とても流暢なしゃべり出しではなかったが、それでもきっちりと名乗りを上げる少女にようやくカミュは地図から顔を上げた。

「・・・・・・・・」
「あ、ああ、そうだ。　こっちがオルテガ様の息子のカミュだ。私はアリアハン国王から同道を命じられた宮廷騎士のリーシャという。」

顔は上げたが返事をしようとしないカミュの代わりにリーシャが慌てて名乗りを上げる。
サラと名乗った少女は、それでもにこやかな笑顔を向けていた。

「ありがとうございます。　勇者カミュ様にお願いがございます。
どうぞ、このサラも勇者様の旅への同道をお認め下さい。」

サラは言葉と共にカミュの前に跪き、まるで一国の国王にするよな

対応を取る。
その態度にリーシャは驚いたが、隣のカミュは冷たい目を向けるだけであった。

「あ、あの・・・・」

一向に返事を返さないカミュにしびれを切らし、サラが恐る恐る顔を上げる。
サラが顔を上げると、無表情で自分を見下ろす冷たい目と視線がぶつかった。
その視線と目を合わすだけで、死へと誘われるような感覚をサラは受けていた。

「い、いいじゃないか。　回復魔法が使える僧侶は旅には必須だぞ。
こちらとしては願ったり叶ったりじゃないか。」

カミュの態度にまたかという思いを持ちながら、リーシャは僧侶を仲間に加える利益を説く。

街や村から城へと延びる街道沿いにも魔物が横行する時代である。
リーシャの言うとおりに回復魔法を使うことができる僧侶を旅の時に雇う商団などは多い。
魔王討伐となれば、魔物との戦闘の数は十や二十では済まないだろう。
多少の傷程度であれば薬草で十分補えるが、深い傷となれば回復魔法でなければ治癒が出来ない。

街や城の近くであれば治療のために一度戻り街にいる回復魔法の使い手に金を払い治療をしてもらうことも可能であるが、旅に出ればそんな都合のいい形で街があるとは考えにくい。
だから、長旅には回復魔法を使える人間が必ず同行することになる。
街の教会の収入源の一つはそうした旅の同行での報酬で成り立っているのが現状であった。

「あ、あの、まだ僧侶として未熟ですので、高度な回復魔法は使えませんが、旅への同道を認めて頂けるのであれば、今以上の努力をお約束いたします。　必ず勇者様のお役に立てるような僧侶となります。　ですから、ですから・・・」

最後の方は感極まって涙声になっているサラに驚いたリーシャであったが、カミュは未だ冷たい目で見下ろしていた。

「おい、カミュ。　何か言ってやれ。　このままではあまりにも不憫だろ。」

「・・・・・・なぜ、そこまでして旅に出たいんだ?」

簡潔な疑問。
街の僧侶であれば、この時代なら食うに困ることなどほとんどない。
であるならば、比較的安全な旅に同行し、報酬をもらった方がいい。

「そ、それは・・・・」

「俺の旅は安全どころか、ただ死に向かうような旅だ。　それに報酬など払えない。　俺の旅に付いてきたとしても一文の得にもならない。　僧侶であるなら、商隊に同道して報酬をもらっていれば、地位も食も保証されるだろ。」

表情も変えずに淡々と事実を述べ、跪いているサラに対し少しの温情も見せないカミュに対し、リーシャは我慢が出来なかった。

「もういいだろ！　人には言いたくない事情もあるだろう。　この子の面倒は私が見る。　私と同じようにお前に勝手についていくさ。」

横からのリーシャの怒声に、少し視線を動かし、カミュはため息をついた。
そのカミュの態度に、益々怒りを増長されたリーシャは、そんなカミュに対し未だ跪いているサラを立ち上がらせようと腕をとった。
だが、当のサラは、そのリーシャの腕を控えめに解き、改めてカミュに頭を下げた。

「私は孤児として、アリアハンの教会の神父様に引き取って頂きました。　それまではレーベの街に住んでいました。　両親はレーベで商人をしていましたが、１２年前に私を連れてアリアハンに行く

途中に魔物に襲われ命を落としました。　母が遺体となりながらも私を護っていた時に、魔物討伐隊に同道していた神父様に救っていただき今に至ります。」

サラが自分の痛ましい過去をぽつりぽつりと、カミュの顔ではなく地面を見ながら話しだした。
その内容は、過酷な過去ではあるが、今の時代ならばどこにでもありふれている話だ。
リーシャにしてもそのような孤児なら数え切れないほど知っている。

いや、サラはその中でもとても恵まれている方だろう。
いかに平和なアリアハンといえども、街全てに王の威光が届くわけではない。
スラム街と呼ばれる一角の存在もある。
そこにいる子供は、娼婦の子か魔物に親を殺された孤児である。
盗み等の犯罪にも手を染め、雨を凌ぐ場所もない子供すらいる。

生きるために必死なだけだが、そのような子供が成長したとしても、まともな仕事に就けるわけがない。
大抵の者が盗賊稼業に身を落とすか、良くて剣の腕を磨き冒険者として生きていく者が多い。
それに比べれば、例え両親を失ったとはいえ、教会の神父に拾われ、生きていく技能を指南してもらえたことを考えれば、孤児の中では幸福な部類に入るだろう。

「それで、魔物に復讐か？」

カミュの言葉は感情がこもっていなかった。
まるで、人形に話しかけるようにサラに言葉を浴びせる。

「・・・はい・・・魔物が凶暴化したのは魔王バラモスの影響だという説が有力です。　ならば、両親の敵はバラモスです。　魔王討伐には何人もの人間が向かいましたが、未だに倒せた人間はいません。　でも、勇者様なら、英雄オルテガ様の血を引く貴方様ならと思い、ここにおります。　私の個人的な問題ですが、魔王討伐にかける想いは嘘ではありません。　勇者様、どうか、どうかこのサラの力をお使い下さい。」

復讐。
その言葉をサラは否定することはしなかった。
親を目の前で殺されたのだ。
その復讐心が消えずに成長するのも当然だろう。

ただ、その復讐の為にアリアハンの英雄と謳われた者の息子である勇者を利用することを臆面もなく言い切ったその神経にリーシャは驚愕した。

「・・・ふっ、自分の復讐の為に他人を利用する僧侶か・・・・勝手にすればいい。　まぁ、俺が断っても、そこの女騎士が既にアンタの身柄の保証はしてあるからな。」

カミュは自嘲気味な笑みを浮かべ、サラから視線を外した。
カミュの視線が外れると同時に、それまでのやり取りに対する気負

いなのか、それともこのプレッシャーこそがカミュを勇者たらしめん物なのかはわからないが、サラはその場に崩れそうになる程の疲労を感じた。

「しかし、こんなことはこれっきりにしてくれ。　この調子では、俺が許可していないにも関わらず、いつの間にか大行列を作って歩かなきゃならなくなりそうだ。　アンタ方が勝手についてくることはこの際何も言わないが、これ以上の人間は邪魔になるだけだ。」

サラは心底迷惑そうに言葉を発するカミュを信じられなかった。
サラは孤児だったため、友と呼べるものがいなかった。
街にいる子供たちは、街で商いをする者たちの子供が多い。
自然とその仲間たちで集団を作り、その他の者を排除しようとする。
その対象になるのが、孤児たちだ。
幼いころ、教会でのお勤めを終えると、神父様に「外で遊んでおいで」と言われて外に出された。
しかし、孤児であるサラと遊んでくれるような子供はだれ一人いない。
いつも遊んでいる子供たちを遠目に見て、稀に人数合わせの為に誘ってくれるのがとても嬉しかった。

子供の遊びと魔王討伐を一緒にするのはとても失礼なことだろう。
しかし、人がいることを邪魔だという気持ちがサラには理解ができなかった。

「わかったよ。　まあ、魔王討伐に行こうという酔狂な人間がそんなに多くいるとは思えないが・・・・・　サラと言ったな？　改め

て自己紹介をしよう。　アリアハン宮廷騎士のリーシャという。
国王の命で魔王討伐に同道している。　これからは長い旅になると思う。　よろしくな。」

サラが呆けたようにカミュを見ていると、先程のカミュの発言に答えたリーシャがそのまま自分に目を向け話し始めたことで我に返った。

「あっ、は、はい！　こちらこそ、宜しくお願い致します。　あっ、改めまして、サラと申します。」

自分に声がかかっていることを認識し、その内容を飲み込んで、サラは慌ててリーシャに向け頭を下げた。
その拍子にサラの肩まである髪は下へ流れ、頭の上にある僧侶を示す帽子が地面に落ちてしまった。
その帽子を慌てて拾うサラの姿にリーシャは笑いを堪え切れずに優しい笑みを浮かべていた。

アリアハン大陸？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

今、やっているドラクエ３はバラモス城へと向かっています。
待ち時間等で進めているので、進行が遅いこと。

この小説と沿ってクリアに向かえればと思っています。

戦闘？【アリアハン】

「和やかなところ、申し訳ないが、戦闘態勢に入ってもらえるか？」

リーシャとサラがお互い微笑みあっているところに、それにまったく関心を示さず、少しも表情を変えない人間が言葉を発した。

戦闘態勢という単語にリーシャは素早く反応し、腰にかけた剣を抜く。

サラも慌てて帽子をかぶり直し、腰のホルダーから使った跡がない綺麗な短剣を抜いた。

身構えてすぐに近くの茂みから、青い物体が現れた。

アリアハン大陸に住む最古の魔物、スライムである。

魔物の中でも最弱と呼ばれるもので、主に女や子供を襲う。

力がないものに飛びつき体当たりや噛みつきを攻撃の主とする魔物。

取り付いたものをその体液で溶かし消化するという、見た目に反し至極残酷な形で人を食す魔物である。

「ふっ、スライムか・・・　まぁ、着ている物は別として、見た目は女と子供だからな・・・まぁ、可哀そうだが、食事はできないだろうな・・・」

「女と子供!?　くっ、人間だけではなく、こんなスライムごとき

にまで女であることで馬鹿にされるのか！」

「・・・可哀そう・・・・？」

スライムの登場に背中の鞘から剣を抜くカミュが発した言葉に他の二人は異なる反応を示した。

スライムは最弱の魔物であるが、最古の魔物でもある。
自分の力量を過剰評価はしない。
自分の目の前にいるものが自分よりも強い存在であれば、躊躇なく逃走を図る。

今、食を求め出てきた三匹のスライムも同様であった。
目の前にいる三人のうち、子供の方の女は三匹一斉にかかればなんとかなるかもしれないが、残りの二人はいけない。
特に、女だと思っていたもう一人の方は、何故か憤怒の表情を自分たちに向け剣を構えている。
三匹のスライムには選択肢がほとんど残されていなかった。

そして、一匹のスライムが剣を構える女の発する気に怯え、恐怖から飛び出してしまった。

「ピキ――――――――――！！」

奇声を発しながら、自分に向かってくるスライムをリーシャは怒りの中でも冷静に見ていた。
一直線に何の策もなく飛び込んでくるスライムに構えていた剣を合わせる。
下級騎士に配給される大量生産の剣とはいえ、リーシャが毎日手入れを欠かさないその刃はスライムの身体に何の抵抗もなく入っていく。
それほど力も込めず、カウンター気味に入ったリーシャの一閃はスライムの身体を真ん中から真っ二つに断ち切った。

地面に落ちた二つに分かれたスライムの身体は、その形状を保つことはできず、青い粘着性のある液体に変わっていった。

あっという間に一匹の仲間が土に返ったのを見て、残りのスライムがパニックに陥っているのが見て取れた。
そんな中、カミュはリーシャの動きとスライムの動揺を見て、剣を鞘に戻していく。
サラはカミュの行動に疑問を持ったが、戦闘経験の少ないサラは自分に対しているスライムへの対応で手いっぱいになっていた。

「「ピ、ピキ――――――――――！！」」

パニックに陥っているスライムが二匹同時に剣を鞘に収めたカミュに向かって飛びかかっていった。
それをカミュは微動だにせず、拳を握り込み立っている。

スライムも必死である。
一匹はカミュの顔をめがけて、もう一匹は地面すれすれを駆け、足元に攻撃をかけていく。

「あっ、勇者様！」

サラは二匹の魔物の同時攻撃を見て、反射的に勇者と呼ばれる少年の名を口にした。
自分が信じ、憧れる勇者であれば、このような所で苦労することはないとは思っているが、それでも無意識に声を出してしまっていた。

「ピキュ！！」
「プキュ！！」

サラが危ないと思ったスライムの攻撃は二匹の潰れた声で終わりを告げていた。

カミュは顔に飛びかかってきたスライムを右拳で払いのけ、足元から腹部目掛けてきた方を左拳で地面に叩きつけていた。
カミュのカウンターを受けたスライムは目を回してはいるが、死に

は至っていない。

カミュの様子を見ると、スライムへの攻撃は手加減を加えていたことは明白である。

剣を使っていないこともそうだが、例え拳だけでもスライムを叩きつけ土にかえすことも可能であったように思われる。

サラはそんなカミュの行動に不信感を覚えた。

なぜ、魔物に手心を加えるのか？

その微かな不信感は、次に発したカミュの言葉で決定的なものになった。

「逃げるのなら、早くしろ。　追いかけはしない。　次は相手を見誤るな。」

「な、なにを！」

その言葉は、サラだけでなくリーシャにとっても信じられない言葉だった。

目の前にいる魔物を逃がそうとする。

そんな勇者がいるだろうか？

いや、それ以前に魔物を逃がそうとする者が勇者と呼べるのだろうか？

リーシャは改めて、この世界的な英雄の息子の異常さを見た気がした。

スライム達は起き上がるが、すでに戦意は消失していて、怯えた目

で自分たちの攻撃を軽くいなした人間を見つめていたが、言葉を理解することはできないまでも、相手が自分たちに追い打ちをかけてこないことを悟ると、身を翻して茂みに身を隠そうとした。
しかし、命を拾ったスライム達の希望は身を隠すことができるまであとわずかで、潰えた。

「ニフラム！」

後方からかかった声に呼応するように、二匹のスライムの周りに光があふれ、その存在を跡形もなく消していく。

聖職者である僧侶にのみ使用可能な魔法。
聖なる光で相手を包み込み、この世に生を持っていないものに効力を発揮するが、スライムのような最下級の魔物にも効果がある。

魔法を行使したサラは、右手を天に向かって広げたまま、スライムが消え去った場所を見つめていた。

逃がしたはずの魔物が目の前で消されたにもかかわらず、カミュは何の感慨も持っていないような表情で踵を返し、歩き出した。

「お、おい！　ちょっと待て！　今のは何なんだ！」

リーシャは、何の説明もなしに歩き出すカミュの肩を掴み強引に振り向かせた。
その声に我に返ったサラは、身を正して、リーシャの後ろに控える。

「何がだ？」

本当に何のことかもわからないといったふうに、カミュはリーシャの顔を眺めている。
リーシャはそのカミュの態度、表情、言動が気に喰わない。
自然と語気も激しくなり、怒鳴り散らすように言葉をつづけた。

「何がだじゃない！　何なのだ、お前は！　戦闘中に剣を鞘にしまうなんて、戦う気があるのか！　手加減をして魔物を叩き、挙句の果てには逃げろだと！　勇者が魔物を逃がしてどうするんだ！　お前は魔王を倒すために旅に出たんじゃないのか！」

リーシャの興奮度合いはとても仲間に向けて発している言葉とは思えない。
後ろに控えているサラにしても、無言でカミュを見ていることから、リーシャの意見に同意しているのは明らかだ。

そんな熱くなっている二人の言動をカミュは冷めた目で見つめながら表情も変えずに聞いていた。
一通りリーシャが捲くし立てた後、いつものように溜息をついたカミュは重い口を開いた。

「別に魔物相手とはいえ、無駄な殺生をする必要がないだろ。　スライムなんかを今さらいくら殺したとしても、俺の剣の腕前が上が

るわけでもない。　確かにアンタの言うとおり、俺は魔王討伐の旅に出た。　だからと言って、この世から魔物全てを滅ぼすつもりは毛頭ない。」

「な、なんだと！」

「！！！」

リーシャの驚きも相当なものであったが、その後ろで事の成り行きを見ていたサラは目の前が暗くなるような錯覚に陥った。

サラにとって、勇者とは人類の希望であり、聖霊ルビスの加護の下に魔物たちの手から人間の平和を取り返すことのできる世界でただ一人の人間であった。
その勇者がこともあろうに魔物を殺すつもりはないと宣言したのである。
では、何の為に旅に出たのか。
人間の敵である魔物から平和を取り戻すためではないのか？
その為に、この世界にはびこる魔物たちを根絶やしにすることは正しいことではないのか？
サラのいた教会の教えでも、魔物は悪であった。
人を殺すことを最大の罪とする教会の教えの中でも、魔物を殺すことはむしろ正義であった。

「ちょ、ちょっと待て、カミュ！」

「では、勇者様は何の為に旅に出ているのですか？　人々の幸せのためではないのですか？　魔物は人々の生活を脅かしています。子供を魔物に攫われた親は昼夜問わず涙にくれています。　私のように親を魔物に襲われ失った孤児は世界中でも数えきれません。その人達の悲しみや苦しみから救うべく立ち上がったのが勇者様ではないのですか。　魔物は人類にとって敵です。　ルビス様の護る世界を我がもの顔で暴れまわる絶対悪です。　その魔物に情けをかけるなど、ルビス様の慈悲を裏切る行為です。」

ため息交じりに話すカミュに文句を言おうと口を開いたリーシャの言葉を遮って、今まで後ろで黙っていたサラが一気に捲くし立てた。リーシャは突然のサラの変貌に驚いたが、発している言葉はリーシャの言いたいことを八割方表現しているので、その成り行きを見守ることにした。

「魔物を逃がせば、また別の人々に襲いかかります。　そうすれば、また泣く人たちが出てきます。　魔物の命など救う必要などありません！」

最後の方は感極まっているのか、サラは眼に涙を浮かべながら叫んでいた。
そんなサラの肩を抱き、リーシャは支えていた。

しかし、二人とも自分の考えをカミュにぶつけることに必死になり、それを聞いている相手の表情にそれほど注視していなかった。

サラの肩を支え、どうだと言わんばかりにカミュの目を見たリーシ

ャは、アリアハン城下での恐怖を思い出すことになる。
そこには、本当に表情を失くし、汚らわしい物を見るような本当に冷たい目で二人をみるカミュが居た。

「・・・・だから、教会の人間は嫌いなんだ・・・・」

一言。
本当にたった一言だけ。
まるで、スラム街の道端で寝ている浮浪者に吐き捨てるように・・・

自分の感情を爆発させ、詰めよった言葉を、立った一言で切り捨てられたサラはしばらく呆然としていた。
同じように、一度味わった恐怖を思い出させられたリーシャも、カミュが先に歩き出し、しばらくはその背中を呆然と眺めていることしかできなかった。

戦闘？【アリアハン】（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

この次の更新は少し遅くなると思います。

よろしくお願い致します。

アリアハン大陸？（前書き）

更新がかなり遅れてしまいました。

アリアハン大陸の話はしばらく続きます。

アリアハン大陸？

アリアハン大陸は二つの陸地から成り立っている。
大きく分けると、アリアハン城がある小さめの陸地と、レーベの村がある大きな陸地である。
その間にアリアハン城から東にそびえるナジミの塔がある小島があるが、それもアリアハン国の一部と認められている。

その陸地同士を分けている大きな川があり、昔そこに橋をかける作業がとても難航していた。
海へと続く大きな川の流れはとても速く、橋の土台となる部分が作成できなかったのである。
その為、レーベの村に向かう時は一度船に乗りナジミの塔の側で上陸し歩く方法しかなかった。

カミュがアリアハンを出た日から４０年ほど前に一人の青年が川底への橋の土台作成に成功した。
その青年は橋職人ではなく、レーベに住む鍛冶屋の息子であった。
基盤のできた橋は時間をかけながらも少しずつ作成されていき、その完成までは実に7年の歳月を費やした。

完成を迎えた橋ではあったが、その基盤を築いた青年にアリアハン国は何の恩賞も与えなかった。
今まで、何人もの名のある橋職人が挑み、すべて失敗に終わったものをレーベに住む一青年が成し遂げてしまったのだ。

アリアハンが国を挙げての資金と労力が全て無駄だったことを全世界に公表することになってしまうのである。
故に、国は青年の功績を認めなかった。
その青年は生まれ育ったレーベにも戻ることができず、行方が分からなくなってしまったと言う。
だが、その真実はアリアハン国民のほんの一握りしか知らない。

カミュ達一行はそんな橋にさしかかっていた。

「いつ見ても大きな橋だ・・・・・」

幅は馬車が横に四台並んでもまだ余り、長さは橋の袂から向こう岸が見えないほどである。
声を発したリーシャもその横にいるサラも初めて見るものではないが、その雄大さに思わず見とれてしまう程のものであった。

そんな二人の感慨をよそに、何の感情も読み取れない表情で、カミュは橋を渡り始めた。
その大きさの為、緩やかではあるが、アーチ状になっている橋をカミュは脇目も振らずに前だけを見て渡っていく。
後ろから続くサラは物珍しそうに橋の上から見えるナジミの塔やその後ろに広がる大きな海原を眺めていた。

橋を渡り始め四半刻ほど歩いて、やっと橋を渡り終えることができた。
アリアハン城下町を出て、もう随分経つ。
日が真上を越え、とうに昼時を過ぎていた。

橋を背にしばらく歩き、大きな木の麓にカミュは腰を下ろした。
前を歩くカミュが腰を下ろしたのを見てリーシャとサラもその近くの木の根に座り込む。

日頃から宮廷騎士としての鍛練を欠かさないリーシャは何ともないが、旅慣れないどころか、おそらく初めての旅であろうサラには、朝から休みなしで歩き、途中で魔物との戦闘もあり、その姿は疲労困憊の言葉がぴたりと当てはまる姿であっただけにこの休憩はありがたかった。

カミュは腰につけた水筒を取り外して口を付け、腰のポーチから干し肉を取り出しちぎって口に入れた。
ふと、リーシャやサラの方を見るとそんなカミュの仕草を呆然と眺めているのを見た。

「・・・聞くことも嫌になるが、まさか水や携帯食も持たずに旅に出たとでも言うつもりか?」

そのカミュの質問にサラは恥ずかしそうに下を向き、リーシャはカミュを睨みつける。

「私は国王様の命でお前に同道しているんだ。　国王様からその旅の資金や物資を頂いたのはお前だろう!?　それには私たちの分も含まれているんじゃないか!?」

リーシャは旅を共にする者の食糧や水その他の旅に必要なものはリ

ーダーが管理するのは当然だと答える。
実際、魔物討伐に向かう際にも、その隊の隊長が物資の管理はしていた。
隊員の数や目的地までの日数などを計算しながら隊の人間に物資を配っていたのだ。
さらに、国王から必要な資金や物資を受け取ったのは、他でもないカミュだ。
ならば、その管理から同道者への分配などもカミュがするのが筋だとリーシャは思っていた。
しかし・・・

「・・・はぁ、国王からもらった、旅に必要な物資とは、資金５０Ｇとこんぼう二本、ひのきの棒一本、旅人の服一着のことか？
そんなもの街に出てすぐに道具屋に売ったよ。　その金で薬草を買った。　それに、俺は一人で旅に出ると言ったはずだ。　勝手についてきたのはアンタだ。　ならば、アンタの物資は自分で用意するのが筋なのではないか？　それに、そこの僧侶の面倒はアンタがみると言っていたはずだ。　ならば、それもアンタが用意するのが当然だろう。」

「！！」

サラはそのカミュの発言に愕然とした。
同道は認められたはずであったが、それは自分の認識が甘かった。
確かに勝手にしろと言われたが、それでもパーティーと認められたと思っていた。

それは、今のカミュの発言で完全に否定されたのだ。
逆にリーシャはカミュの別の発言に意識がいっていた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。　国王様からの支度金が５０Ｇだと！？　そんな金額では銅の剣どころか革の鎧すら街の武器屋では買えないぞ！？　それに物資の中がこんぼう二本とひのきの棒だと！？　薬草は？　毒消し草は？　キメラの翼すらないのか？」

アリアハン国が英雄オルテガの跡目として国を挙げて送り出す勇者に与えた物資と支度金の酷さにリーシャは我が耳を疑った。
アリアハンの勇者として祭り上げて送り出すのだ。
しかも、それは城周辺の魔物退治にではなく、その魔物を統括している魔王の討伐にだ。
それなのに、アリアハン城下町で武器すらも買えない支度金だというのだ。
これでは、物資にない薬草などを購入すれば、行く先々で宿をとることすらできぬではないか。

「・・・ふぅ・・・アンタがどんな勘違いをしているかは見当がつくが、こんなものだろ。　アンタは本当にアリアハンからその剣の腕を買われて魔王討伐の同道を命じられたとでも思っているのか？」

カミュの投げかける言葉をリーシャは理解ができなかった。
それ以外に何があるだろう。

自分は、父サブリナには劣るかもしれないが、他の騎士たちとの模擬戦で一度も遅れをとることはなかったし、戦ったことはないが現騎士隊長にも負けるとは思っていない。

「当たり前だろう。　剣の実力や旅に耐えられる若さを考えれば私の他にいないと自負もしている。　それがなんだと言うんだ。」

「・・・・はぁ・・・本当に戦士という職業の人間は脳味噌まで筋肉でできているのか？」

「な、なに！？」

カミュの人を馬鹿にしたような、いや、確実に馬鹿にしている物言いにリーシャは頭に血が上った。

そんなリーシャに視線も向けず、カミュは持っていた水筒をため息交じりにサラへと投げ、腰に下げた小さな袋を手に取った。
水筒を投げられたサラは、その水筒を落とさないよう必死に両手でつかみ、そのまま口に運ぶ。

「では、聞くが、アンタはそれ程の剣の腕を持っていながら、なぜ下級の宮廷騎士なんだ？　アンタが着ている鎧は、下級騎士に支給されるアリアハン城下町の防具屋で買える＜革の鎧＞だ。　他人に誇れる腕を持つ騎士を下級騎士として扱うのはどういうことだ？」

「そ、それは、私はまだ若い。　上級騎士となれば、戦闘での経験をもとに隊を率いて魔物と戦わなければならない。　それには私の経験がまだ足りないためだろう・・」

カミュの歯に衣を着せぬ物言いにリーシャは気圧され気味に答えた。

「ふん。　では、アンタより後に騎士となり、アンタと同年代の隊長はいなかったとでも？　それと、先程の戦闘を見て、アンタの戦闘経験が乏しいとは思わない。　アンタのように前線で戦ってきた若い騎士がいたのか？」

「そ、それは・・・だが、そいつらは家柄も良く、それに若くから隊の指揮を学んでいたからだろう・・・」

なんとか言いつのるリーシャだが、その言葉使いとは逆に勢いはなくなっている。
水を飲み、幾分か落ち付いたサラは、そんなリーシャの様子を心配そうに見ていた。

「そうなのか？　ならば、前宮廷騎士隊長サブリナ殿の嫡子であり、その手解きを受けてきたアンタも立派な家柄ではないのか？　少なくとも、俺のようなアリアハン城下町の外れに住む一国民よりもずっと格式の高い家だと思うが？」

「ぐっ、そ、それは・・・」

「アンタもすでに気付いているはずだ。　なんでアンタが下級騎士のままなのか。　はっきり言えば、それはアンタが女だからだ。」

「「！！」」

リーシャにとって一番言われたくない言葉だった。
女だからと馬鹿にされないために父の死後も鍛練を続けてきた。
男の騎士にも馬鹿にされないように、力だけではなく技も磨いてきた。
それでも、下級騎士から上に行けない。
薄々は解っていたが、それでもそれは自分の力が足りないからだと言い聞かせ、無理やり納得をしてきたのだ。

「違う！　女であっても、国王様に直々にお呼び頂き、お言葉をくださった。　魔王討伐という名誉を与えてくださった。」

認められない。
これを認めてしまったら、今までの自分を否定するのと同じことだ。
だが、そんなリーシャの葛藤をカミュは容赦なく破壊する。

「おめでたいな。　要は、アリアハン国宮廷騎士団にとって、アン

タの存在は邪魔だったんだろう。　例え前宮廷騎士隊長の子でも力量が無かったり、あったとしても男であれば何も問題はなかった。
　だが、アンタはその鍛練のおかげで他の騎士をも圧倒する程の実力を示した。　宮廷内は基本、男社会だ。　たとえ技量があったとしても女が自分たちの上司になることなど、ちっぽけな国の騎士たちのちっぽけなプライドが許さないんだろうよ。」

ちっぽけという部分を吐き捨てるように強調し発した後、カミュは一息つき、今度はリーシャの目を真っ直ぐ見て口を開いた。

「だが、実力がある分、解雇はできない。　ならば魔物退治の前線に出して戦わせ、間違って父と同じように死んでくれれば、国としては良かったのかもしれないな。　でも、アンタは、功績は残しても命は落とさなかった。　ならば、死が確実視される魔王討伐に同道させようとした。　実力があるから、もしかしたら魔王討伐をしてくれるかもしれない。　もしできなくても、アリアハンとしては国内の英雄の息子と女とはいえ国内トップクラスの戦士を魔王討伐に出せば、周りの国家に示しもつくし、後々大きな発言権を得る。
　そして討伐できないと言うことは、アンタも生きてはいないということだ。　まさに一石二鳥だな。」

淡々と述べるカミュは、その顔に侮蔑も嘲笑も浮かべず、いつもの能面のような無表情であった。

サラはその話している内容もさることながら、そんな何も感じていないような顔で、人の傷を抉っていくカミュに怯えていた。
これが、自分があこがれ続けた勇者様なのだろうか？

神父様から、『あと数年すれば、アリアハンの英雄と謳われたオルテガ様の息子が魔王を討伐して下さる。　そうすれば皆に笑顔が戻る。　それまでの辛抱です。　その時はサラ、貴女たちの時代です。』　そう聞かされていた希望ある未来は、本当にこの少年が切り開いてくれるのか？
サラは貫くような視線で人を絶望に叩きこむカミュに失望を禁じ得なかった。

一方、リーシャはまだ昼時が過ぎたぐらいだというのに自分の周りが夜になってしまったかのように暗くなっていくのを感じた。
女だから上に行けないことは認めたくはないが、自分でも感じていたことだ。
言われたくないことだが、言われたとしても怒り以外には何も感じないだろう。
しかし、カミュによって齎（もたら）された可能性は驚愕のものであった。
まさか、自分の死までも望まれていたかもしれない等、リーシャは今まで考えたこともなかった。

「勇者様、何もそこまで・・・・・」

完全に沈黙してしまったリーシャを見かねて、サラが重い口を開くが、聞く気がないとばかりにカミュは立ち上がる。

「何にせよ、勝手についてくると言ったのはアンタ達だ。　魔物との闘いや、俺の言動が気に喰わないなら、いつでも去ってくれて構わない。　ついてくるなら、一々俺の行動や言動に突っかかるのはやめてくれ。　それと、俺は勇者でもなんでもない。　アリアハン

から出たばかりのただの旅人だ。　何も成し遂げていない者を勇者とは呼ばない。」

「・・・・でも・・」

サラの反論は立ち上がり歩き出すカミュの背中に空しく消えていった。

茫然自失のリーシャに声をかけ、何とかカミュの後に続き歩き出す二人であったが、その心には自分たちが描く勇者像と目の前を歩くカミュとの違いに大きな溝ができていくことになる。

アリアハン大陸？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

更新は遅めですが、少しずつ更新していき、必ず完結させたいと思っています。

これからもよろしくお願い致します。

茫然自失なリーシャを何とか促し、サラはカミュの後を追おうとしたが、すでにカミュは先に進み、その姿は小さくなっていた。
ここが広い平原だから良かったものの、森の中での移動などであれば、すでにカミュを見失い旅の終了の鐘が鳴っていたことだろう。
サラはカミュの身勝手な行動に落胆と怒りを覚えた。

それでも、今はこの勇者の後に付いていくしかない。
サラの念願である魔王討伐はこの勇者以外成し得ることはできないだろう。

魔王が登場して数年は、各国の腕自慢達が我こそはと名乗りを上げ旅立って行ったが、誰一人生きて帰ることはなかった。
それでも、血の気の多く、未来を夢見る若者たちは次々と死地へと赴いて行った。

だが、

『英雄オルテガの死』

このニュースが世界各国に行き渡ってからは、名乗りを上げる若者の数は減るどころか皆無となった。
誰しもが未来への希望を捨て、その日をどう生きていくかを考えるようになる。

街に活気はなくなり、大人たちは未来を諦めたような会話をし、魔

物に怯える自分への苛立ちを自分よりも弱いものへぶつけるようになる。
結果、魔王登場以前よりも、各国で貧富の差は広がり、階級等の貴族社会の傾向が強くなっていった。

そんな中、世界の唯一の希望である英雄オルテガの息子がここ１０年以上誰一人向かうことがなかった魔王討伐に名乗りを上げた。
育ての親である、アリアハン教会の神父の話を毎日のように聞いていたサラは、旅立つ日を今か今かと待ちわび、探り、そして勇者の旅立ちと共にアリアハンを出た。
今さらサラに帰るところはなく、またサラの悲願である親の仇を討つにはどうしても勇者の力が必要なのである。

「サラ、すまない。　もう大丈夫だ。　カミュを追おう。」

自分の意識に埋没していたサラは、突然聞こえたリーシャの声に、自分が未だリーシャの手を引いて歩いていることに気づき、慌てて手を離した。

「あ、あ、も、申し訳ありません！　私のような者がリーシャ様の手に触れるなど・・・・・ああ、どうしたら・・・本当に申し訳ございません。」

自分の手を振りほどくように離して、我を忘れたように取り乱すサラを見て、リーシャは驚きと共に腹部から湧きあがるものを抑えることができなかった。

「ふっ、あははははっ！　いや、いい、いい。　先程もカミュに話したが、私は宮廷騎士とはいえ、下級騎士であり、下級貴族だ。　父の代ではそれなりの功績を認められ、爵位を貰っていたが、父の死後は爵位も返還し、下級貴族に戻った。　だから、平民とそれほど変わらない。　だから、様は止めてほしい。　そのままリーシャと呼んでくれ。　こそばゆくなってくる。」

リーシャは下級騎士ではあるが、代々、宮廷に上がっている貴族の一つだ。
リーシャの名は正式にリーシャ・デ・ランドルフという。
ランドルフ家の現当主でもある。
父サブリナの時代に全盛期を迎え、中級貴族の仲間入りも果たし、小さくない館を建て、最大で六人程の召使いを雇うまでになっていた。
だが、父の死後、リーシャは父の爵位を相続することを国王に許されず、爵位は返還。
その財産も、高すぎる相続税の為に館を売るはめになり、六人いた召使いも一人を残し、解雇することになった。
現在は、宮廷騎士たちに与えられる国営の住宅に代々ランドルフ家に仕えている老婆と二人で暮らしている。
下級貴族とはいえ、その生活は平民出の騎士とほとんど変わらないものであった。

ただ、それも、先程のカミュの話が本当のことだと仮定すれば、何か納得のいくようなものではあるが・・・・

「い、いえ、そんな。　貴族様を呼び捨てにするなど、恐れ多くてできません。」

カミュを見失わないため、前へと進みながらも、わたわたと慌てふためくサラに、リーシャは妹がいればこんなものかと考え、先程の暗い気持ちが少し晴れたような気がしていた。

「そんなことはない。　それに、私の手に触れただけで慌てていたが、先程、カミュが口を付けた水筒を貪るように飲んでいたじゃないか。　私の手はダメで勇者様との間接的な口づけはいいのか？」

その証拠であろう。
リーシャの口から、先程まで自身を見失っていた者とは思えないような軽口が出ていた。

「え？　え？　えええ！　や、や、そんなことはありません。　そんなこともしてません。　あ、いや、しましたけど、違います！」

先程よりもずっと慌てふためくサラに、可笑しさがこみ上げて来て、リーシャは周りを気にせず大声で笑った。
そんなリーシャの様子を見て、からかわれたことに気がついたサラは、顔を真っ赤にし、リーシャから顔をそらし、カミュの後を追った。

「あはははっ・・　いや、すまない。　少しからかいすぎたな。
でも、これから辛く険しい旅を共にするんだ。　貴族や平民という垣根などなく、仲間として見てほしい。　仲間であれば、名前に様をつけるのは変だろ。」

ひとしきり笑った後、先を行くサラにかけた言葉に、当のサラは一瞬身体を強張らして足を止めてしまった。

足を止めたサラに追いついたリーシャは、突然活動を停止してしまったサラを覗き込んだ。

「・・・・仲間ですか・・・私は、仲間と認められているんですか？・・・勇者様は私たちと旅をするおつもりがあるんでしょうか？」

幾分か距離が縮まり、近づいた勇者の背中を見つめながら、サラはぼそりとつぶやく。
それはリーシャも感じていた。
今までのカミュとのやり取りからは、お世辞にも友好的な会話ができたとは思っていない。
むしろ険悪である。
リーシャにしても、今はサラの慌てる姿で気持ちが和んでいるが、先程までのカミュとのやり取りで刻まれた傷は、簡単に消えるものではない。
そんな傷をつけた相手に背中を任せ、これから先、旅を続けていけるのかというと正直自信がないというのがリーシャの今の気持であった。

「・・・確かに。　カミュの行動、言動からは私達を仲間とは認めていないのだろう。　私としても、アイツがオルテガ様の息子だとは認めたくもない。　だが、経過がどうであれ、アイツが魔王討伐に向かっているのは間違いないだろう。　ならば、私たちの目的は同じだ。　私は自身の誇りの為、サラは親の仇討ちの為。」

リーシャは視線と口調はサラに向かってはいるが、それはまるで自身に言い聞かせているように聞こえる。
そんなリーシャの心情を慮ってか、サラはしばらく俯いた後、意を決して振り返り、真っ直ぐリーシャを見た。

「・・・そうですね。　その心にどんな考えがあろうとも、目的は皆同じですね。　どんな形であれ、勇者様に同道を認められたんです。　これもルビス様のお導き。　勇者様のお考えを正していくのも、ルビス様が私にお与えになられた試練なのかもしれません。
私たち『人』は皆等しくルビス様の子。　旅を続ける中で、解り合える日が来ますよね？　それまで頑張ります。」

そう言って、胸の前で拳を握り決意を誓うサラに、リーシャは先を行くカミュの背中を見つめ、本当にサラの言うような日が来るのだろうかと苦笑した。

「旅慣れぬ身ゆえ、リーシャ様にはご迷惑をおかけすることも多いとは思いますが、改めてお願致します。」

「こちらこそ。　私は魔法は一切使えないからな。　傷の手当等はサラ頼みになってしまうだろうから、宜しく頼むよ。　ああ、それと、さっきも言ったが、様はやめてくれ。　呼び捨てでいい。　できれば、その敬語もやめてもらえると嬉しい。」

リーシャが言うように、この世界ではすべての人間が魔法を使えるわけではない。
魔法を使うためにはその個人が所有する精神力が必要となる。
その精神力を魔力という。
魔力は生まれ持ったものであるが、その量は個々人様々だ。
その魔力も、自己の能力の向上と共に少しずつではあるが上がっていく。
その構造は解明されてはいないが、人の成長、即ち精神の成長と共に魔力も変化していくようである。

そして、魔法を使う者は、自己の成長と共に変化した魔力に応じ、新たな魔法と契約を交わし、使用できるようになるのが、この世界での魔法である。
力量が足りない場合は最悪魔法の契約はできない。
例えできていたとしても、その魔力の乏しさから魔法が発動しないという状況になる。

故に、リーシャのような戦士は基本魔法が使えない。
職業故に魔法が使えないのではなく、魔法が使えないからその職業に就くというほうが正しい考えだ。
その中に例外もいるにはいるが、やはり魔法が使える戦士は、力は戦士専業よりも弱く、魔力は本業である魔法使いには敵わない。

例外中の例外は等しく皆英雄と呼ばれる男たちだ。
つまり、そう言う者たちの職業は勇者とでも言えばいいだろう。
ただ、世界中のどこかで、人の生まれ持った性質さえも変化させることができる場所があるという噂が、ここアリアハンにも流れてはいるが・・・

「・・・いえ、この口調は、もう私の癖になっていまして・・・変えるように努力はしてみますが、難しいと思います。　それに、お名前を呼び捨てにすることも、どうしても出来そうにありませんので、『リーシャさん』と呼ばせて頂こうと思うのですが・・・・」

「『さん』か・・・・まぁ、それでもいいか。　さあ、急ごう。アイツのことだ。　私たちが遅れていたら、我関せずで置いていかれてしまうぞ。」

「あ、は、はい！」

お互いに気持を若干ではあるが吐き出したことにより、胸につかえていたものを胃に落とした二人は、先を行くカミュの背中を追い駆けだした。

だが、カミュへの不満、疑惑が頭の大部分を占めている二人には、これだけの時間二人で会話し、時には立ち止まっていたにも関わらず、カミュとの差が広がっていないことに疑問に思う部分は残っていなかった。

「クキャ――――――！」

自分に向かい足に持つ人の頭部の骨を投げつけてくる大ガラスの攻撃をかわし、カミュは背中の剣を抜いた。

攻撃をあっさりとかわされた大ガラスはその鋭利な嘴を武器へと変える。

人間にはとても届かない高みまでその身を上昇させ、加速をつけ一気にカミュめがけ降下してくる。

武を持たない人間であれば、そのスピードに足は動かず、大ガラスの嘴に喉笛を掻き切られその命を落とすことになる。

今、まさに大ガラスの頭にはいつものその光景があったことだろう。

だが、今回前にしている者では相手が悪かった。

カミュは抜いた剣を構え、降下してくるカラスに照準合わせる。

大ガラスの鋭利な嘴はカミュの喉に触れることはなくあっさり身を捩りかわされた。

大ガラスが、自分の攻撃がかわされたことに気がついた時にはその胴体が二つに分かれ、死を意識する暇もなく絶命することになる。

「まだ、いたのか？　かかってくるのなら、容赦なく切り捨てるぞ。今のを見て戦う気が失せたのなら、早く行け。」

ひと振りし、付着した血糊を払った剣を懐から出した獣皮で拭きながら、カミュは近くで身を震わせている魔物２匹に声をかける。
通常のウサギよりも身体が大きく、特徴となる一本の角がちょうど眉間から生えている。
スライム、大ガラスと同じく、アリアハン大陸に古くから住む一角うさぎである。

自分たちが相対した人間の圧倒的な強さに身を震わせていた二匹であったが、その相手が持っていた剣を背中の鞘にしまうのを見届けると、脱兎そのもので逃げ出していった。

カミュは、２匹の一角うさぎの姿が見えなくなるのを確認すると、大ガラスの死骸へと向かった。
その途中に、先ほど大ガラスがカミュ目掛け投げつけてきた骸骨の残骸が目にとまった。
人間の頭蓋骨であるそれは、後頭部の部分が派手に飛び散っており、その中から、金色に光るものが出てきていた。

「・・ん？　ゴールドか・・・・へぇ、２６６Ｇか・・・。　しかし、一国の王からの支度金より、魔物から得るゴールドの方が多いなんて皮肉だな。」

カミュは、頭蓋骨の中から出てきた、ゴールドを手に取って、その数をみて苦笑を洩らす。

大ガラスの様な魔物は魔物といえカラスであり、光ったものを好む。人間を襲い、その死肉を食した後、持ち物にあったゴールドを巣に持ち帰ったのであろう。

大体の冒険者は、魔物を討伐した後に、その身体の一部で売却できそうなものを持ち帰り、街の道具屋や武器屋などに売り、資金を得る。

先程の一角うさぎ等は、その特徴である角が加工しやすく丈夫であることから、あらゆる工芸品に使われることが多く、ここアリアハンではそれ相応の金額で取引される。
リーシャが装備している＞革の鎧＜のなめし皮もまた魔物の皮から作られている。

「・・・なんだ？　また何か文句でもあるのか？」

手に入れたゴールドを腰の袋に入れ、立ちあがったカミュの前に、先ほど追い付いてきた二人が何か言いたそうな表情で立っていた。

「・・・また、魔物を・・・」

「先程言ったはずだ。　俺の行動に不満があるのなら、ついてくるな。」

「あっ・・・」

魔物が逃げるところを見ていたサラが、再び魔物を逃がす勇者に疑問を投げかけようと開いた口は、カミュの拒絶にも似た先制攻撃に閉じられてしまう。

サラの口が再び開かないことを確認したカミュは、ゴールドの入った袋を腰に結びつけ無言で歩を進めた。
その後を、強い怒りと不満が渦巻く顔でリーシャが続き、硬直が解けたサラも歩き出す。

その後も何度か魔物との戦闘はあったが、リーシャが剣をふるい、サラは補助魔法を使いながらとどめを刺す。
カミュは自分に向かってくる魔物以外には一切手を出さずに、死骸と化した魔物の身体から売却できそうな部位を切り取っていた。

「・・はぁ・・・はぁ・・・」

何度目かの戦闘を終えた頃には、サラの息遣いが荒くなり始め、サラの歩調に合わせ歩いているリーシャと先頭を行くカミュとの差が開き始めた。

「おい。　日も落ちた。　サラの様子を見ても、今日はこれ以上の

進行は無理だ。」

リーシャは自分からも遅れがちなサラに近寄り、その身体を支えながら前にいるカミュに声をかけた。
カミュは立ち止まり、ゆっくりと振り返り冷たい目でサラを見る。
その姿にリーシャはまた『ついてこれなければ置いていくだけだ。』というような言葉を予想し、カミュが口を開いていないにもかかわらず、頭に血が上って来た。

「・・・ふぅ・・・わかった。　この辺りが限界だろう。　街道からそれて少し森の方へ行こう。」

予想とは反したカミュの答えに、リーシャは呆気に取られ動けない。
支えていたサラからも息を飲む気配がしたことから、サラも予想外だったのであろう。

「・・ん？　おい、まさかここから一歩も動けないなどと、子供のような駄々を捏ねるつもりか？」

一向に動き出さない自分たちに、今度こそリーシャの予想通りの言葉が返ってきそうで二人は慌ててカミュの後を追った。

「なぁ、カミュ。　森に入る必要があるのか？　街道沿いででもいいんじゃないか？」

街道を逸れ、少し行くと、木が生い茂る森がある。
通常は森の中は魔物も多く、人々は街道を逸れることはない。
馬や馬車での行き来が当然であるので、街道沿いで火を起こし、魔物を警戒しながら夜を明かすことが多い。

「ああ、普通はそれでもいいだろうな。　だが、アンタ達は旅の支度は何もしていないんだろ？　食糧や水を手に入れるためにも、一度は森に入らなきゃならない。　それに雨が降れば、徒歩の俺たちには凌ぐ場所がない。」

森に入った後、リーシャの質問に顔も向けずにカミュは動いていた。
確かにカミュの言うとおりだ。
リーシャは食糧や水などは全く所有していない。
サラに至っては、着のみ着のまま状態に近い。

「くっ、・・・」

「・・この辺でいいだろう。　その木の根元辺りで火を熾そう。
火は熾せるだろ？」

場所を決めたカミュは、腰につけていた水筒をサラに投げ渡し、リーシャに無表情で言い放つ。

「ば、馬鹿にするな。　火ぐらい熾せる。」

リーシャはそんなカミュにむきになって抗議するが、『それじゃ、頼む』というカミュの呆気ない回答に口をつぐんだ。
カミュは腰のポーチから出したビンの蓋を開け、火を熾す予定の場所を中心に円を描くように中身を振りかけていく。

「聖水か・・・・」

リーシャの言う聖水とは、教会にて精製される水のことである。
どういう精製方法かは公表はされていないが、教会神父の祈祷により精霊ルビスの加護がある水として売り出されていて、その効力は弱い魔物であれば近づいてこれないというものである。
これの利益もまた、教会の資金源の一つになっている。

「おい、空になった方の水筒を渡せ。」

カミュから渡された水筒に夢中で口を付けていたサラの目の前に不躾な手が伸びてきた。
最初の休憩時にカミュから渡された水筒の中の水は、その後の道中でリーシャと分けながら飲み、とうに空になっていた。
先程、カミュから渡された水筒は中身が満々であったことから、カミュがこの水筒に口を付けた形跡がないことは明らかである。
自分たちに水分を残してくれていたのだろうか？
そんな疑問を思いながら、サラは腰につけていた空になった水筒をカミュに手渡した。

「火は熾しておいてくれ。　水と食料を調達してくる。」

水筒を受け取ったカミュは、森の奥へと進んで行った。
カミュの姿が見えなくなってから、サラは恐る恐るリーシャへと言葉をかける。

「水の調達って、川がある方向は違うんじゃ？」

「・・・さあな。　アイツは何を考えているのかさっぱりわからん。
とりあえず、言われた通りに火を熾そう。　これで、火も熾していなければ、帰ってきたアイツに何を言われるか解ったもんじゃない。」

火はほとんどリーシャ一人で熾した。
サラは何か手伝うとリーシャに声をかけるが、旅をしたことのないサラにできることは何もなく、大人しく腰掛けているのが最大の手伝いだというリーシャの呆れ声に肩を落とした。

火が着き、未だ戻らないカミュを待ちながら、リーシャとサラはお互いの話をするが、慣れない旅での疲れからか、サラの瞼が自然に落ちてくる。
そんなサラの様子にリーシャは苦笑しながら火に薪をくべていくが、森の中からの気配に気づき、そばに置いた剣に手をかけた。
近づく気配に緊張を高めていたが、それが、両手に何かを下げたカミュだと解ると、その緊張を緩めた。

「遅かったな。」

「ああ、少し、食料を取ってきた。」

カミュの言葉通り、その右手には魚三匹を蔦につなげたものと、ウサギ一羽、左手には果物を三個持っていた。
火の傍に腰を下ろしたカミュは蔦から魚を取り外し、リーシャが拾ってきていた木の枝で刺し、腰の袋の中から出した白い粉を振りかけ、火の回りの地面に刺していった。
そして、果物をリーシャに渡した後、残ったウサギを持って立ち上がり離れた場所で捌いていく。

リーシャはそのカミュの慣れた手つきに感心していた。
リーシャのイメージでは、英雄の息子として、剣の訓練などは行っていただろうが、基本は温室育ちとしてカミュを見ていた。
しかし、実際は、寝床の場所の確保、水や食料の調達の仕方、その調理の仕方を見ると一度や二度の経験では身につけることのできないものと感じた。

「随分、手慣れているのだな。　それにその粉は塩か？」

捌いたウサギをこれにも先程の粉を振り、木の枝に挿し火の回りに並べていくカミュの手つきに目を奪われながら、声をかけた。

「ああ。　それより、起こしてくれ。　魔力の回復には食事を取ってから眠ったほうがいい。」

「あっ、わ、わかった。　おい、サラ。　寝るのは食事の後にしろ。」

傍で丸くなって寝ているサラを少し揺らすと、サラは薄く眼を開けるが、疲れに勝てず再び目を閉じようとする。

「サラ、食事をとったら存分に寝ればいい。　今は起きて、腹に何か入れろ。　食わないと明日は歩けないぞ。」

今度は容赦なく揺さぶるリーシャの手に、さすがにサラも飛び起きる。

「す、すみません。　あ、ああ、私は何もせずに・・・お二人に何もかも任せっきりで寝てしまうなど、申し訳ありません。」

目を開け、今の状況を確認し終えたサラは、火がもたらす温かさとその周りから漂う肉の焼ける香ばしい匂いに気づき、自分の犯した失態に必死に謝罪を繰り返す。

「いや、もういいから。　さあ、食べよう。　カミュ、もう食べても大丈夫か？」

やはり、この子の慌てぶりは場を和ますとリーシャは思いながら、この食料を取ってきた功労者に確認を取る。

「いや、魚はもう少しで大丈夫だが、肉はどう考えても、今火にかけたばかりだろ？」

確認を取っているくせにすでにウサギの肉に手をかけようとするリーシャに呆れながら、汲んで来た水をサラに放る。

「むっ、そうか・・・匂いからもういいかと思ったが・・・・」

「ふふっ」

カミュの注意に、心底残念そうに串にかけた手を戻すリーシャにサラは微笑み、何度かの休憩時の時のようなギスギスした雰囲気ではなく、とても和やかな夕食にほっと胸をなでおろした。
よくよく考えれば、先程まで意見が対立していた人間同士がたった、1日で和解することなどできるわけがないのにもかかわらず・・・・

「魚はもう大丈夫だな。　ほら、サラ。」

和やかな雰囲気に笑みをこぼすサラに、リーシャは魚を一串渡し、自分は豪快に頬張る。
サラも渡された串と、頬張るリーシャを見比べ、意を決したように魚を口に入れた。

「なんだ、サラ？　こういう食事は初めてか？」

「あっ、は、はい。　神父様に引き取られてから、アリアハンから出るのが初めてですので、こういうふうに外で食べる食事は初めてです。　でも、美味しいですね。」

魚は良く火が通っていて、ところどころ焦げ等もあるが、皮はパリッとしていて、中の肉は柔らかく塩加減も絶妙であった。

「そうか。　じゃあ、慣れないとな。　長い旅になるんだ。　これからこんな食事が多くなる。　あっ、もう肉の方もいいか？」

サラの回答を本当に理解して応えているのか怪しくなるくらいに、魚を頬張り、先ほど諦めた肉に手をかけようとするリーシャの姿にサラの頬はさらに緩む。
そんなサラの様子を横目で見ながら、リーシャは食べ終わった魚の串を火の中に放り、肉の串を手にとって、口に放り込んだ。

カミュは、そんな二人の会話に全く参加せず、もくもくと食べている。
サラはリーシャとの会話を楽しみながら魚を食べ終え、いつまでも食べないと、もうすでに果物まで食べ終わったリーシャに取られてしまう恐れのある肉を取り、口に入れる。
肉の方も、脂ものっておりジューシーで美味しかった。

「・・・魚や肉はちゃんと食うんだな・・・・」

そんな和やかなムードを一瞬で吹き飛ばす言葉が小さく漏れた。
何故か、カミュの声はよく通る。
小さく呟くような一言は、それまで笑顔で食事をしていた二人の動きを止めた。

「・・・・どういう・・・・意味ですか・・・？」

突然のカミュの呟きに活動停止をしていた二人であったが、その内容の理解ができず、カミュの次の言葉を待った。

「・・ああ、どうでもいいことなんだが、魔物が人を喰らう食事は認めないのに、自分は嬉々として他の動物を食べるんだな。」

「！！」

別に糾弾しているわけでもなく、咎めるような様子もなく、ただ淡々と無表情でサラの顔を見ずに言葉を発するカミュに二人は再び言葉を失った。

「ま、魔物と人を一緒にしないでください！」

再起動を果たしたサラはカミュの言動にくってかかる。
サラには教会の教えである、『人』は聖霊ルビスの子というものが当然という前提ありきで物を考えている。
故に、聖霊ルビスの子である人と憎き魔物が同等のものとして扱われることが許せなかった。

「そうだ、お前は魔物が人間を襲うことは正しいとでも言うのか！」

それは、リーシャも同じ考えであったようで、こちらもカミュの発言に噛みついてきた。

「・・・ふぅ・・失言だったな・・・・」

あっさりと自分の非を認めるようなカミュの言葉に、ここからのカミュとの口論を予想し、身構えていた二人は拍子が抜けてしまった。

「そうです。　わかってくれてよかったです。」

サラはカミュの言葉を額面通りに受け取り、人と魔物がイコールではないことを理解してもらえたことに素直に喜んでいた。
だが、カミュの次の言葉は今までの和やかな夕食時間を無にするものであった。

「いや、そういう意味じゃない。　俺の考えに文句は言わせないのだから、アンタ達の考えを否定することを言うのはルール違反だったという意味だ。」

自分たちの考えを否定する？
なぜ？

そんな考えがリーシャとサラの頭を横切る。
アリアハンのみならず、世界中で信仰されている宗教の最大勢力は聖霊ルビスを崇めるものである。
地域によって、異なる神を崇めるところもあるらしいが、それは地図にも載らない国のことである。
ほぼ全世界の信教は聖霊ルビスの教えと言っても過言ではない。
サラやリーシャの考えを否定することは、教会の教えすなわち聖霊ルビスそのものを否定することになる。
それが、サラには理解が出来ない。
自分の考えだけではなく、聖霊ルビスまでも否定されるのだ。
目も前の勇者に絶望を通り越し、怒りすら湧いてくる。

「勇者様は、ルビス様を侮辱するのですか！」

サラの手にある肉はとうに冷めきっている。
それを串ごとカミュに向かって投げつけそうな勢いで、身を乗り出している。

「・・はぁ、本当に失言だったな・・・教会の人間の面倒くささは昔に学んだはずだったのに・・・・」

リーシャがカミュへの怒りから忘れ果てた、火に薪をくべる作業を代わりにこなしながら、カミュは心底面倒くさそうにつぶやいた。
その姿に、リーシャとサラの怒りが増幅する。

「め、めんど・・・どういうことですか!?」

「カミュ！　取り消せ！　お前が今言った言葉は、サラ個人だけではなく、教会に属している僧侶たちや人々を導いて下さるルビス様すらも冒涜するものだぞ！」

今までの和やかなムードは一変して、怒声が飛び交う世界と化した。

「・・・はぁ・・・まず、魔物が人間を襲うことだが、食事の為ならば当然のことだし、食物連鎖的には正しいことじゃないのか？アンタ達が言っている通りだと、全ての生物の頂点は人間ということになる。　頂点にいる人間は何をしても許されるが、頂点にいるものを害せば、それは悪か？」

「当たり前です。　人々の幸せを害するものは悪です。」

さも当然のことのようにサラは言い放つ。
この間違った考えを持つ勇者を正すのが自分の使命とも言わんばかりの毅然とした態度で。

「・・・そうか・・・・はぁ、王家が腐っていくわけだ。」

次に出てきた答えは、今度はリーシャの逆鱗に触れるものであった。
王家の冒涜。
アリアハンの城を出てから、時折、国家への不満を口にするカミュであったが、それでも一個人の不満として片付けるレベルではあった。
しかし、それでも今のは見過ごせるものではない。

「お前！　ルビス様への冒涜だけでも許されざる行為なのに、王家すらも侮辱するつもりか！」

リーシャも聖霊ルビスを崇めてはいるが、教会に属するサラ程ではない。
むしろ、代々仕えているアリアハン王家に忠誠を誓っている。
例え、爵位を剥奪され、平民並みの生活しか送れなくてもだ。

「・・ルビスを信仰する人間が多ければ、まず国家転覆などあり得ないだろうな。　人間の頂点に立つ王家に逆らう者はどんな理由があれ悪なのだから。　だから、王家は理不尽なことも平気でする。
なにせ民が不満に思っても、自分たちに何か害になることはないんだからな。　王家が腐れば、その周りを固める人間も腐ってくる。
王に刃向わなければ、下の人間に何をしてもいい訳だ。　よく、国家として成り立っているよ。」

「くっ！　よくも言った！　それは貴族のことか！？」

「・・・すべての貴族がそうだとは言わない。　アンタのように自分の境遇に疑問を挟まず、馬鹿の一つ覚えで忠誠を誓っている貴族もいるだろう。」

「・・馬鹿の一つ覚えだと！　抜け、カミュ！　私は貴様をオルテガ様の息子とは認めん！　偽者であるならば、ここで私が切って捨ててやる！」

カミュの容赦のない言動は、完全にリーシャの怒りに火をつけた。その様子を見ながら、これほどまで他人の怒りに触れるような言葉を選んで発するカミュをサラは不思議に思う。まるで、自分に人を近付けないようにするかのように、相手から離れていくように仕向けているようであった。

「・・・はあ、まだ話は終わっていない。　剣の相手なら明日にでもするさ・・」

腰の剣に手をかけ、構えを取るリーシャをカミュは火に薪をくべる手を止めず相手にしない。
ここで、リーシャが怒りに震えながらも剣を抜いていないのはさすがであった。
お互い剣を持つ者同士、相手が抜いてしまえば戦わない訳にはいかない。
剣を持つ者同士の、訓練ではない戦闘の終結はどちらかの沈黙、即ち死である。
リーシャは戦闘時のカミュの動きを見て、その力量を低く見てはい

ない。
若干自分に分があるように思うが、最悪同等の力量を持つと考えている。
故に怒りにまかせて剣を抜くことがなかった。
切り捨てるといった言葉は本当の希望であったが、実際それができるかどうかは別である。

「その人間と、魔物の違いっていったいなんだ？　魔物の食事が人間だっただけだろ？　魔王の影響で、人を襲う率が上がったことは確かだが、魔物がいきなり現れたわけじゃない。　昔から、魔物は人間を食してきた。　それは知っているだろ？」

沈黙するリーシャを余所に、カミュは少しサラの方を見て言葉を発する。

「し、しかし、魔物に家族を殺された人たちの悲しみはどうするんですか！？」

「・・・では、アンタがさっき食べたウサギがもし巣に帰れば小さい子供がいたとしたら？　もし、今もそのウサギを探して親ウサギが森を彷徨っていたら？　魔物に子や親を奪われた者たちが魔物に復讐を考えるように、アンタや俺らもそのウサギから恨みを買い、復讐の対象になっておかしくないはずだ。」

「違います！　人と獣は違います！」

「だから、何がだ？　知能があるかないかか？　知能がなければ、それを殺しても食ってもいいのか？　知能がないから悲しみを感じることがないとでもいうのか？　アンタ達教会の人間が言うことは、常に自分たちが中心だ。　自分たちに良いことは疑問に思うこともせず、自分たちにとって害になるものは排除の対象になる。　魔物だって子を産み、育て、子孫を作っていく。　お前が殺していく魔物だって、家族がいて、その帰りを待つ子がいるかもしれない。その子を育てていくために人を襲い、子に運ぶのかもしれない。なぜ、その生活を否定することができる？」

カミュが理論で捲くし立てる。
サラには教会からの教え以外の知識がない。
街にいれば、サラは秀才のレベルの知識があり、周りから褒められ過ごして行けただろう。
しかし、この勇者と呼ばれる少年を前にすると、自分の知識の少なさに唇をかむことが多い。

「そ、それは・・・しかし、『人』は聖霊ルビス様の子です。　その人を害することは、ルビス様への裏切りです。」

その証拠に、カミュへと出てきた反論は、最初の剣幕とはかけ離れた弱々しいものだった。
そんなサラの反論に、いつもの様にカミュは盛大な溜息をついた。

「・・・はぁ・・・また、ルビスか・・・・」

「ルビス様を、お前のような者が呼び捨てにするな！」

カミュの言葉に横合いからリーシャの檄が飛ぶ。
リーシャは信仰心こそ、サラには劣るが、決して聖霊ルビスを蔑にしているわけではない。
僧侶以外の全世界の人間と同等の信仰心は持っている。
聖霊ルビスを呼び捨てにする人間など、世界中探してみても、教会が示す異教徒以外ではカミュぐらいのものだろう。

「・・じゃあ、聞くが、アンタ方が崇め、祀っているルビス様が何をしてくれたんだ？　もし、アンタが言うように、『人』がルビスの子であるならば、魔王の登場で子供達がこれほど苦しんでいるのになぜ手を差し伸べてこない？」

「そ、それは、私たちに与えられた試練です。　ルビス様の子といえど、何から何までルビス様に縋ることはできません。　ですから、これは私たち『人』に与えられた試練なのです。」

「・・・『人』全体に与えられた試練を俺のような人間一人に丸投げしている奴らが熱心な信徒なのだから泣けてくるな。　もし、万が一、俺が魔王を倒すことができたら、それは『人』が試練に打ち勝ったということになるのか？」

カミュは、魔王討伐を若干１６歳の少年に国命として課し、自分たちは安全な城の中で、ぬくぬくと過ごす人間を思い浮かべ、その表情を多少変化させた。
カミュの表情の変化を初めてみたサラはそれにも驚いたが、それよりもカミュの言葉に衝撃を受けた。
そのような考え思いついたこともない。

「し、しかし、勇者様が生まれる前から、人々は戦っています。その戦いに終止符を打つために勇者様が魔王討伐に出たのではないのですか？」

「・・・まあ、俺のことはいい。　その戦ってきた人々だが、ルビスの子であるならば、なぜここまで差がある？　王家の下、貧しい国民から巻き上げた金で私腹を肥やす貴族がいることは知っているだろう？　何故あいつらにもルビスの加護がある？　スラム街で空腹で死んでいく子供たち、なぜ彼らにはルビスの加護は届かない？
　そもそもルビスの加護とは何なのだ？　それこそ、なぜアンタがさっきから言っている魔物に命を奪われた者たちには加護がないんだ？　彼らは『人』ではないのか？」

カミュの疑問。
それは、遺骸が届いた時の遺族の気持ちなのかもしれない。
聖霊ルビスに愛されていると言われていた英雄オルテガ、カミュの父親もまた、魔物に命を奪われている。
この疑問を教会にぶつけてくる遺族がいないわけではなかった。
教会ではこの遺族にいえる答えを持っていなかった。

唯一、『これも貴方がたに与えられた試練です』という言葉だけである。

「そ、その・・・・貧富の差は、前世での行いの差です。　彼らは前世ではルビス様の教えに背くことをしてきたのでしょう。　ですから、今生ではそれを償っているんです。」

カミュとのやり取りで、むきになっているサラは気がつかない。
共に旅する、リーシャもカミュも父親を魔物に殺されている。
更に言えば、サラの両親もまた魔物に襲われ、その命を散らしている。

敬愛する父親を前世での罪人扱いされれば通常の人間は激怒する。
しかし、カミュは驚いた顔をした後、二人の前で初めて笑いを洩らした。

「・・・くっくっ・・・前世での罪人か・・・くっくっ・・・ならば、そんな人間が死したとしても喜んでやるべきで、哀しむものじゃないな・・・罪も償ったのだから、来世ではきっと裕福な家に生まれることだろうよ・・・・・くっくっ・・」

そんな、カミュの姿にサラは狂気にも似た感情を見た。
その感情に恐怖し、唖然としていたサラとは対照的に、リーシャは苦虫を噛み潰したように顔をしかめていた。

「・・・もういいだろう。　ほら、サラも食事がすんだら、もう寝るんだ。　明日も日が昇り次第出発するぞ。」

リーシャはカミュの狂気じみた笑いによって、凍り付きそうな時間を強引に動かす。
先程のサラとカミュの最後のやり取りが自分の胸に突き刺さっているにも関わらず、その場を収めるため、サラを誘導し寝かしつけようとする。

対するサラもカミュの変貌に驚き、すでに反論する気力すらもなく、リーシャの促しに逆らおうともせずに、その身を横たえ瞼を閉じる。
未だ噛み殺したような笑いを繰り返すカミュの声を遮断するため、耳を手で覆って眠りに誘われるのを待つのであった。

アリアハン大陸？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

今回は少し繊細なところに突っ込みすぎたかもしれません。
このフォローは幕間などで書きたいと思っています。

～幕間～【アリアハン宿営地】（前書き）

いつも間にか、ユニークが１０００人を超えていました。
本当にありがとうございます。

なかなか進行しない勇者たちの足取りですが、ゆっくりお付き合いいただけると嬉しいです。

～幕間～【アリアハン宿営地】

夜も更け、あと数刻もすれば日も昇ってくるであろう時刻に、リーシャは目を覚ました。
眠る前に、見張りをすることを譲らないカミュと口論に発展したが、数刻ごとに交代で行うことで同意を得た。

それにも関わらず、カミュに起こされることもなく、ここまで眠ってしまった自分にも腹が立つが、起こそうともしないカミュに沸々と怒りがわいてきた。
文句の一つでも言おうと身を起こし、火の傍にいるはずのカミュを探すが、その姿がない。
一瞬、置いて行かれたか？　という疑問が湧きあがるが、荷物がそのままであることから、席を外しているだけなのだろう。

リーシャは昨夜のカミュの様子もあり、カミュの動向が気になり始めていた。
サラはまだ自分の横で深い眠りに落ちている。
サラの上にはいつの間にかけたのであろう、カミュが身につけているマントが掛けられていた。
自分がこの場所を離れた後のサラの身を案じはしたが、聖水が撒かれていることを考え、カミュを探すため、森の中に入っていった。

森の中では方向感覚が狂い、迷った挙句に森から出られなくなるケースも多いが、そこは宮廷騎士として数多くの戦闘を経験してきた

リーシャである。
かすかな人の気配を探り、ついにカミュの姿を視界に収めた。
そこは、木々たちがひしめき合う森の中にあって、異様な場所であった。
中央に小さな水の湧き場が存在し、そこから下流に向かい河ができている。
カミュはその湧き場の傍で、剣を振っていた。

その動きは、幼いころから積み上げてきたものに他ならない。
リーシャ自身、アリアハン随一の剣の使い手である故に、そのカミュの剣捌きを正直に美しいと感じた。
まだまだ荒削りな部分は残されているが、これから努力と経験を積めば、その剣は更なる高みへと昇っていくことであろう。

自分にあれほどの剣の才能があるのだろうか？
そんな嫉妬にも似た感覚を味わいながらカミュの動きを見ていると、どうやら一通りの型が終了したようである。

「・・・・なにか用か？」

振っていた剣を鞘におさめ、リーシャのいる場所に視線も向けずにカミュは口を開いた。

「い、いや、交代の時間になっても起こさないお前に文句を言おうとしたら、いなかったんでな。」

カミュの動きに見惚れていた自分を認識してしまったリーシャは誤魔化しも含め、幾分不機嫌そうに答えを返す。

「・・・また、文句か？　・・はぁ、余程、アンタ達は俺が気にくわないんだろうな。」

リーシャは文句を言うつもりではなかったが、カミュのその物言いに夕食時のことを思い出し、同時にその時の怒りも湧きあがった。

「当たり前だ！　なぜ、あのようなことを言った！　私はいい。確かにお前の言うとおり、国王様の側近連中に媚を売る貴族連中のようには世を渡ることができない下級貴族だ。　だが、サラは違う。自分を拾ってくれた神父を信じ、その幸福を与えてくれたルビス様を心から信仰しているんだ。　お前のような男が簡単に否定していいものではない！」

アリアハンを出てから一度もこの少年に口論で勝てたことがないのにもかかわらず、またその口火を切ろうとしている自分をおかしく思いながらも、リーシャは真剣にカミュと渡り合うことにした。

「・・・そうかもしれないな。　それでも俺は人間と同じように魔物にも生きる権利はあると思っている。」

リーシャの言葉に、表情を変えずに間を置いてから、カミュは呟いた。
その言葉は、夕食時のような熱はなく、まるで自問自答しているようなつぶやきであった。
そのまま、リーシャを背にするように水の湧き場で水を少し口に含んだカミュはその場に座り込んだ。

「生きる権利・・・？」

リーシャはカミュの様子を訝しみながらも、その言葉を聞くためにカミュの傍に近寄り、そしてその横に座った。

「・・・ああ・・・・・俺は、剣を取れるようになってから、強制的に街道の魔物討伐隊に同行させられた。　オルテガの息子ならば、それが当然のことらしかった。　魔物が出てくれば、オルテガの息子というだけで、その魔物の群れの中に単身で放り込まれた。　オルテガの息子なら、勝つのは当然だという言葉と共にな。」

不意に話し始めたカミュに驚くリーシャであったが、何よりあのカミュが自分の生い立ちを語っていることに驚いた。
もしかしたら、カミュは夕食時のことを後悔しているのかもしれない。
リーシャは勝手な解釈ではあったが、カミュの話をそう受け取り、静かに先を促すことにした。

「俺は生きるために、魔物を殺すしかなかった。　数え切れないほどの魔物を殺したよ。　傷だらけになりながら帰ってくると、教会の人間が魔法で傷を癒し、次の場所に放り込まれる。　その繰り返しだった。」

絶句した。

先を促した身でありながら、その壮絶な幼少時代に驚き、かける言葉も見つからない。

幼い身でありながら、大人たちのプレッシャーに押され、単身で魔物と戦い、傷つき帰れば、休む暇もなく戦いに出される。

例え、身体の傷は癒されても、心が壊れる。

「ある討伐隊に連行されている時に、森の中で一人の人間が行方不明になった。　そいつは討伐隊のメンバーではあったが、ろくな戦闘もせず、支給品にある酒を飲みながら俺に指図する奴だった。」

討伐隊には、夜の食事の折りに士気を上げるためと多少のアルコールが用意されている。

軍には規律が必要だが、あまり規律を締めすぎると、命をかけている分、割に合わないと言って志願する冒険者がなくなるといった理由からのものでもあった。

「当然のように、俺一人が探索隊となった。　森の入り口で討伐隊が待ち、俺が中を確認し、その男を連れてくることだ。　森の奥に入り、しばらく行くと、人間の腕が落ちていて、そこから血糊が続き、少し行ったところの巣穴まで続いていた。」

「殺されていたのか？」

答えは解っている。
巣穴まで引きずられているのだ。
生きているわけはない。

「・・・ああ、その男はとうに死んでいた。　俺の気配に気づいたのか、巣穴から一匹の一角うさぎが出てきた。　口の周りは血で汚れ、まさに今食事中でしたというものだった。」

カミュは魔物が人を襲うことを食事と言う。
リーシャはその考えを理解することはできなかったが、カミュにとって人が獣を食すことと、魔物が人を襲い喰らうことは同等の行為なのであろう。

「俺の存在を認識し、警戒を強めた一角うさぎは、その身の毛を逆立て威嚇してきた。　今考えると『去れ』という意思表示だったのかもしれない。　それでも俺は剣を抜いた。　その瞬間に一角うさぎは俺に向かって飛びかかってきた。」

そこで、一息入れるように、ほうっとカミュは息を吐いた。
まるで、その時の状況を思い出すのを躊躇うように・・・・

「無我夢中だった。　まだ歳もようやく二桁になったばかりだったし、大抵はスライムか大ガラスが相手だったからな。　一角うさぎの予想外の動きに戸惑いながら、夢中で剣を振るった。」

「二桁になったばかりだと・・・？」

リーシャはカミュの話で剣を握れるようになってからというのは、剣を振るえる歳になってからだとばかり考えていた。
しかし、今の話であれば１０歳になったばかりというのだ。
リーシャにしたって、討伐隊に同行するようになったのは、１８になるころからだ。
１０歳の少年を単身魔物の群れに放り込むなど人間の行いではない・・・

「ああ、家の者も同意していたことだ。　まさか単身魔物の群れに放り込まれているとは思ってなかったんだろう。　むしろ、率先して俺を討伐隊に同行させていた感があるがな・・・・まあ、いい。
俺も一角うさぎと戦ったことがないわけじゃなかったが、その一角うさぎは何かが違い、俺に向かってくる気迫が鬼気迫るものだった。　夢中で放った俺の一撃がたまたま一角うさぎの首をとらえ、その命を奪った。　その死骸を前にして、俺は身体の力が抜け、座りこんだ。」

カミュからもう一度溜息が洩れる。

「その時、あの巣穴から出てくる影を見た。　さすがにもう一度一角うさぎと戦う体力などない俺は、半ば諦めにも似た覚悟を決めて、出てくる影を待った。　出てきたのは、二匹の一角うさぎ。　でも、身体が異様に小さかったことからそれが今、俺が殺した魔物の子であることは容易に想像できた。　その子うさぎたちは、血を流し動かなくなっている親を見た後、怯えた目で俺を見ていた。　その身体は気のせいか小刻みに震えているようだった。」

「そ、それで・・・」

「おそらく、死んだ馬鹿な男は、あの一角うさぎの縄張りに入ったんだろう。　小さな子供がいる親は子を護るために必死で抵抗し、その結果男を殺害した。　だとしたら、人と何が違うんだ？　そう思った。　俺が子供だと安心して、剣を支えに立ち上がると、二匹はすごい勢いで逃げて行ったよ・・・・」

これで、終わりだと言わんばかりに、カミュは瞳を閉じた。
横からその姿を見ていたリーシャは、水が湧く泉のほとりで静かに目を閉じるカミュの姿がとても幻想的に見えた。

「親や子が魔物に命を奪われ、憎しみに燃える人間は多い。　討伐隊の中にもそんな人間は多かった。　だけど、人間がそうならば、俺が魔物を殺せば殺すほど、魔物の人間に対しての憎悪も増えるんじゃないかと考えるようになった。　まあ、そんな話だ。」

そう言うと、カミュは横に置いた剣を再び背に装着し、腰を上げた。

「つまらない話をした。　今のは忘れてくれ。　アンタ達の考え方の方が常識だ。　俺の考えと世間の一般常識が相容れないものであることは重々承知している。　だから、レーベの村に着いたら、アリアハンに帰ってくれ。　一人の方が気楽だ。」

リーシャに背を向けながら話すカミュに、リーシャは言葉をかけられない。
ただ単に、自分たちを否定し、受け入れないためにそういう態度を取っているのだと思っていた。
だが、実際は、自分の考えと世間の常識とがかけ離れていることを認識しているからこそ、一人で旅に出ようとしていたのだ。

「まぁ、アンタの場合、アリアハンに帰ったとしても、腐った王族から今度は貴族の称号を剥奪されて、宮廷騎士ですらなくなるかもしれないがな。」

泉から離れていくカミュがリーシャに聞こえるようにわざとらしく呟く。
その言葉を聞いたリーシャの怒りの炎は再燃した。
『もしかすると、王家や貴族への侮辱は、自分を旅から外すために敢えて口にしたのかもしれない。』
一瞬でもそう思ったことをリーシャは後悔した。

「そんな訳に行くか！　私は国王様から魔王討伐の命を受けているんだ。　たとえ何があってもその使命を投げだすことなどあり得ん！　それにサラだって同じだろう。」

こんな偽勇者の思い通りになってたまるか。
そんな思いがリーシャの言葉からにじみ出ている。

リーシャの叫びに振り返ったカミュは、またいつものような無表情に戻っていた。

「アンタの考えはわかった。　ただ、あの僧侶はどうだろうな？　教会の人間は昔から苦手だが、あれはその中でも筋金入りの者だ。　自分の身内を前世での罪人として扱われたら、大抵の者は怒り狂うぞ。　アンタもそうなんじゃないか？」

カミュの言葉を聞き、リーシャは唇を噛む。
確かに、サラの考えには納得が出来ない部分もある。
確かに貧富の差や生まれの差は前世での行いの違いという教会の教えは知っている。
その為に今生でその罪を償い、徳を重ね、そして来世での幸せを夢見る。
それが、ルビス様の加護の違いにも当てはまるとなれば別の話である。

「確かに、納得はいかない。　だが、あの時のサラはお前に追い詰

められて正常な考えから言葉を発していない。　それにサラはまだ幼い。　しかも、アリアハンから全く出たことがない。　これから、世界中を旅し見聞を広げれば、少しずつ変わっていくだろう。」

「感情で話をしている時の方が本音を話すと思うが・・・・それにあの僧侶の歳は俺とそう変わらないだろう・・・」

「お前が異常なんだ！」

「お前に続いて、すでに俺は異常者か・・・」

もう、リーシャとカミュの間でやり取りされていることは、売り言葉に買い言葉になっている。
実際、カミュは買うつもりはないのだろうが、リーシャはカミュの淡々と尚克冷静に紡がれる言葉にどうしても荒れてしまっていた。
傍から見ると、とてもいいコンビなのだが、リーシャは絶対にそれを認めないだろう。

短めに整えてある髪が逆立つような意気で迫るリーシャに溜息をつきながら宿営地に向かうカミュは、その後一言も言葉を発することはなかった。
そんなカミュの後ろを歩きながら、これから先の旅への不安がアリアハンを出た当初よりも大きくなっていることにリーシャは気持ちが暗くなっていく。

火の場所に戻れば、薪をくべることを怠っていたせいで、火が小さ

くなっている。
傍で寝ているサラも寒さを感じているのか、掛っていたカミュのマントに包まっていた。

リーシャは慌てて火に薪をくべ、火の大きさを安定させる。
カミュはその傍に座りながら、静かにその様子を見ていた。

「お前も、少し寝ろ。　ここから朝までの見張りと火の番は私がやっておく。　明日は日が落ちる前にはレーベに着くつもりなんだろ？　その為に寝ておけ。」

薪をくべながら、隣に座るカミュに声をかける。
剣を振っていたことを考えると、カミュは寝てはいないのだろう。

「・・・わかった。　少し眠らせてもらう。」

「・・ああ、ひとり旅では、眠れないだろうからな。　仲間がいるのも悪いことばかりではないだろう？」

「・・・一人なら、もうレーベの村についているだろうよ・・」

意趣返しのつもりでリーシャが放った一言は、カミュの容赦ない切り返しで、逆にやり込められてしまった。
確かに、戦闘を極力避け、休憩なしに進めば、夜中から朝方になる

かもしれないが、レーベには着いているのかもしれない。
ただ、引き下がれないリーシャは、尚もカミュに言いつのろうと顔を向けると、すでに革袋を枕にカミュは寝息を立てていた。
その顔は、先程までの捻くれた考えと物言いをする男ではなく、年相応の幼い寝顔であった。

「寝顔を見れば、サラの寝顔と大した違いはないのにな・・・」

小さな笑みを作りながらこぼしたリーシャの呟きは、安定してきた焚き火の中に吸い込まれていった。

～幕間～【アリアハン宿営地】（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

もう一つの方の小説を進めるため、この幕間を境に少しお休みします。

出来るだけ早く、更新するようにしますので、これからもよろしくお願い致します。

レーベの村（前書き）

お久しぶりです。
お気に入り登録をしていただいてる方が増えていて、とても嬉しく思っています。
これからもよろしくお願いいたします。

レーベの村

瞼の外の明るい光に導かれるようにサラは目を覚ました。
暖かい陽の光がサラを包む。

「あれ・・？　ここは・・・・・」

まだ覚醒しきれない頭でサラは自分の置かれている現状を必死に理解しようとする。
昨日からの記憶をたどり、昨夜のカミュとのやり取りにまで到達してやっと、今、自分がここに一人で寝ていたことの異常さに気がついた。

置いて行かれた・・・・

昨夜にはあれほど暖かな空気をくれた火はすでに消えてから時間がたっており、サラを寝かしつけてくれたリーシャの姿もない。
カミュだけがいないのならば、なぜか納得がいく部分もあったが、リーシャまでいないとなると違ってくる。

見捨てられた・・・・

自分の身体が恐怖と絶望に震えていくのが解る。
切望していた魔王討伐への旅への同行。
しかし、長い間憧れていた勇者は自分が考えている人物像とはかけ離れていた。

ルビスの子である人とその天敵である魔物を同類としている考え。
それは、魔物擁護の発言と同意。
それは、この世界を護る聖霊ルビスを侮辱する発言と同意。

それがサラには許せなかった。
最後には自分でも何を話したのか記憶が曖昧なぐらい感情的になってしまっていた。
最初は自分と同じようにカミュに対して敵対心を剥き出しにしていたリーシャが途中から無言になっていることには気が付いていたが、感情的になっているサラにはそのことを考慮に入れる余裕がなかったのだ。

自分は何かとんでもないことをしてしまったのかもしれない。
だから、私一人を置いてあの二人は旅立ったのだろう。

気持ちがどんどん沈んでいくサラは、そこでようやく自分が持つ先程まで包まっていた布に気がついた。
それは、勇者が身につけていたマントだった。

火の傍で寝ていたとはいえ、夜の森の気温はとても低い。
自分は寝ている最中に寒さに震えていたのかもしれない。
それを見て、マントを掛けてくれたのだろう。
それが、カミュが自ら掛けたのか、リーシャが無理やり引き剥がし

掛けたのかは分からない。　おそらく後者だろう。

「マントがあるということは・・・」

サラは素早く身を起こし、周りの状況を確認する。
マントがあるということは、先ほどまでのサラの考えが杞憂である可能性がある。
自分を置いて行ったのではなく、リーシャとカミュが何かしらの理由で席を離れているのかもしれない。

サラはマントを手に取り立ち上がる。
上を見上げると、背の高い木の葉の隙間から朝日が差し込んで来ている。
もう、陽が昇ってそれなりの時間が経っている証拠だ。
今日中にレーベの村に着くのであれば、そろそろ歩き出さなければいけない。

周りを見てみても、二人がどこにいるのかの手がかりすらない状態だ。
今、無闇に動くよりも、ここで待っていたほうが無難ではあったが、先程感じた心の内の焦りがサラを森の奥へと進ませていた。

サラには、カミュのような森の知識もなければ、リーシャのような経験もない。
当然のように奥に入ってしばらく歩くと、前後左右の場所が分からなくなった。
引き返そうにも、自分がどちらの方角から来たのかさえ分からない。
ここで初めてサラは自分がした愚かな行為に気がつく。
このままでは森の中を彷徨うだけだ。
リーシャ達が宿営地に戻り、自分がいないことに気づけば探しに来てくれるかもしれないという期待はあるが、逆に良い機会だと置いて行かれる可能性をサラは捨てきれなかった。

森で迷いそれほど時間が経過していないにも関わらず、自分の考えによって気力を根こそぎ奪われ、その場に座り込んだ。

自分は何をやっているのだろう？
経験豊富なリーシャや何故か旅慣れている様子のカミュに強引については来たが、完全に足手まといになっている。
自分の為に休憩をとらせて目的地までの日数を遅らせ、果ては勝手に出歩き迷子になっている。

「・・・・ルビス様・・・私は・・・・」

自分の状況を分析し、尚更沈んでいく気持ちから溜息混じりのつぶやきを漏らす。

ふと視線を感じ、そちらの方向に目を向けると、一羽のうさぎがこちらを見ていた。
昨日のカミュの話を思い出し、顔を顰めたサラであったが、なぜか

こちらに視線を向けたまま動かないうさぎを不思議に思い、歩み寄ろうとする。

「あっ・・・」

しかし、サラが腰を上げたと同時にうさぎは踵を返し逃げていく。
そのうさぎの姿がサラの気持ちを更に沈めていくが、うさぎはサラからある程度の距離をとると再び小首を傾げながらサラを見ていた。

「・・・なんで？　ついて来いってこと・・・？」

そんなことがあるわけがない。
そのうさぎにとってサラのような『人』を見るのが初めてだったのかもしれない。
故に、好奇心からサラを見ているが、危害が加わることがないよう距離を取っているのであろう。

勝手に良い方に解釈をしたサラは恐る恐るうさぎの方に近寄る。
うさぎが気づき距離をあける、サラが近づく、距離をあける、近づくの繰り返しをしながら、サラは森の奥へと進んで行った。

「行くぞ！　カミュ！」

本来魔物に向けるはずの剣を味方であり、世界最後の希望であるアリアハンの勇者に向けリーシャは構えをとる。

「・・・・はぁ・・わかった。　昨日、相手をすると言ったのは俺だしな・・」

心底、面倒くさそうに背中の鞘から剣を抜くカミュ。

なぜ、味方同士の争いになったのか・・

それは少し前に遡る。

カミュが気温の変化に目を覚ました時には、すでに夜が明け、少しずつ森を明るい光が包み始めたころだった。
カミュが感じた寒さの原因はすぐにわかった。
火が消えかけているのだ。
夜が明けた今となっては、朝食の準備でもしない限り必要はないのだが、見張り兼火の番をするはずの女戦士が火の傍で丸くなっているのはどういう訳なのかカミュには一瞬理解ができなかった。

火の状況を見ると空が白み始めたころに眠りに落ちたのであろう。
森の入り口ではあるが木々がひしめき合っていて日光の差し込みがわかりづらいが、もう火が消えてしまっても差支えはない。
ある程度の余熱があれば、寒さに震えるようなことはないだろう。
カミュは火に残った薪をくべ、火を安定させると、その場を後にした。

昨日剣を振っていた水の湧き場で水を汲み、顔を洗った後、身体をほぐし始めた。
寝具の中で寝ていたわけではないので、筋肉に変なストレスがかかり硬くなっている。
首をほぐし、肩、腕、腰をほぐし終わり、足の筋肉に取りかかっている時に、後方に気配を感じた。

「・・・・はぁ・・大人しく待っていることはできないのか?」

後方の気配はカミュの予想通り、リーシャであった。

「お前が勝手に一人で出発する可能性があるからな。　まぁ、マントをサラに掛けたままだったからそんなことはないと思ったが念の為だ。」

リーシャは後ろから極力気配を消してきたのにもかかわらず、近寄る前に声をかけられ、多少動揺をしながら歩み寄ってくる。

「・・・見張りや火の番を放棄して眠りこけていた人間とは思えない言い草だな。」

「うっ、そ、それは・・・」

「・・・それでなんだ？　・・あの僧侶も起きたのか？」

「い、いや。　サラはまだ寝ている。　そうじゃなくてだな・・・・また剣を振るのか？」

自分の失態をつつかれ、狼狽しながらもリーシャは昨日のカミュの訓練の様子を思い浮かべ問いかけた。
サラが起きるまで、まだ少しばかりかかるだろう。
ならば、自分もカミュと共に剣を振るおうと考えていた。

「まだ寝ているのか・・・・言い出した見張りを放り出して眠りこ

ける戦士に、昨晩から何もせずひたすらに眠り続ける僧侶か・・・・・一つ聞きたいが、このまま俺はアンタ方が付いてくることを黙認していてもいいのだろうか？」

しかし、そんなリーシャの前向きな考えも、カミュの言葉で霧散してしまう。

どうしてこうも捻くれているんだ？
しかも、その厭らしい笑いはなんだ？

リーシャは自分の血液と共に頭に上ってくる疑問に怒りが増幅されるのを感じていた。
事実、リーシャの考えるように、カミュは話しながら口端を上げていた。

「くっ、私たちが役に立たないというのか！？　いいだろう！　昨日、剣の相手をすると言ったな。　私が稽古をつけてやる。　実践と思ってかかってこい！」

売り言葉に買い言葉である。
カミュの表情を確認したリーシャは、腰の剣を素早く抜き、その剣をカミュに向かって掲げながら挑発する。

「・・・本当に頭に血が昇りやすいな・・・・よくそれで魔物討伐で死ななかったものだ。」

対するカミュは明らかに失敗したというような表情に変わり、肩を落とした。
そして、先程の状況になった次第である。

『かかってこい！』と受けに回ることをほのめかしながら、先に仕掛けたのはリーシャであった。
瞬時にカミュとの間合いを詰め、踏み込む足の動きに合わせ、右手に持った剣を横薙ぎに振るう。
必殺のスピードである。

（殺す気か！？）

対するカミュは、右手に持っていた剣を両手に持ちかえ、リーシャの剣に合わせる。
間一髪、リーシャの剣とカミュの身体の間に剣を滑り込ませその剣を受け止めた。
しかし、女とはいえ、アリアハン屈指の戦士の剣である。
カミュは勢いを殺し切ることができず、たたらを踏んだ。
その隙を見逃さず、リーシャは二撃目を繰り出す。

刺突である。

魔物と戦う時に剣を横薙ぎに振るうことは少ない。
魔物の身体は大抵人間のそれよりも堅い皮や毛におおわれている。
横薙ぎに切った場合、運が悪いと魔物の身体の途中で斬撃が止まってしまい、剣が抜けなくなってしまうこともある。
故に魔物と戦う場合、牽制以外では刺突を用いることが多い。
つまり、リーシャは本気でカミュを殺しにかかっていることになる。

「くっ！」

初手の対応を間違えたカミュは防戦一方になる。
リーシャの刺突をギリギリのところでかわし、リーシャの肩口めがけ剣を振り下ろす態勢に入るが、その前にカミュの腹部に衝撃が走る。
刺突を態勢を崩しながらかわしたカミュの腹めがけリーシャの蹴りが入っていたのだ。

「ぐはっ！」

腹部に蹴りを受けたカミュは後方に下がり際に剣を横薙ぎに振るう。

「　甘い！　」

横薙ぎに振るわれたカミュの剣を弾き返し、返す剣でカミュの首を狙い一閃。
かろうじてカミュは剣を戻し、首を狙りに来る剣を受け止めるが、リーシャは手首を返し、その剣を巻き上げた。

「！！」

剣はカミュの手を離れ、回転しながら後方の地面に突き刺さった。

「勝負ありだな！」

カミュの首筋に剣を添えながら、どうだと言わんばかりに顔を綻ばせリーシャは高らかに勝利を宣言する。
カミュは格闘家ではない。
素手での戦いができないわけではないが、剣を持ったそれには数段劣る。
なにより、剣でのたたかいで遅れをとる相手に素手で勝てると思うほどカミュは愚かものではなかった。

「・・・今の勝負は・・・負けでいい・・・」

「・・今の？・・・なんだ？　いきなり仕掛けたことを卑怯だと言うのか？　私は『いくぞ！』と言ったはずだぞ。」

リーシャはカミュが負け惜しみを言っているのだと思い、ここぞとばかりに意趣返しを図る。
リーシャの剣が首筋から離れたことを確認し、カミュは後方の剣を取り、もう一度構えをとった。

「??」

「・・もう一度だ。　アンタの力を見くびっていたことは認める・・・実践形式とはいえ、本気で殺しに来るとは思わなかった。　ならば、俺も実践と同じように魔物相手と考え相手をしよう・・・」

「あははは、なんだ?　今のは本気ではなかったとでも言うのか?」

「・・・ああ・・」

子供だ。
どれほど捻くれていようと、どんな厭味なことを言おうと、やはり年相応の子供なのだとリーシャは思った。

リーシャの見立てでは、カミュは人間相手の戦いには慣れていない。
昨夜の話の内容通り、幼いころから魔物を相手にしてばかりいたのであろう。
基本、魔物は本能によって行動をする。
人間の動きよりも素早く予測はつかないが、そこに思考があるわけ

ではない。
反面、人間の動きは魔物には劣るが、様々なことに対応できるように思考を巡らし攻撃や防御を行う。
つまり、力量の差がそれほどない人間相手にはその駆け引きが重要になる。
それは日々の訓練による経験からくるものが多い。
カミュも騎士と訓練をしたことはあるだろうが、その数が圧倒的に少ないのだ。

そんなカミュが自分の負けを認めることを拒み、子供がよく使う『今のは本気でなかったのだから負けたんだ』というような負け惜しみを言うのを見て、リーシャは内心で笑いをこらえるのに必死だった。

（次は本当に稽古をつけてやろう。）

そのように軽く考えていた。

「いいだろう。　存分にかかってこい。」

カミュを見据えながら、リーシャも剣を構える。
多少心に余裕を持ち、それが侮りに近いものになっているリーシャには、カミュの目が変わっていることに気がつかなかった。
カミュのその目は、今までの魔物の戦闘ですら見せたことのない、冷たく突き刺すような目、まさしく敵を見据える目に変わっていた。

「来ないのなら、こちらから行くぞ！」

一向に動く気配のないカミュに、今度もリーシャが先に仕掛けた。
間合いを詰めながら剣を突く。
それをカミュは自分に届く前に横にいなし、突き返す。
リーシャとカミュの剣が幾度となく交差する。

リーシャの見立て通り、カミュの剣の腕前はまだリーシャには及ばない。
しかし、その実力の差は天と地ほど離れている訳でもなかった。
少しの実力の差が勝敗を左右する世界である故のリーシャの勝利なのである。
リーシャがカミュに剣を教えるつもりで剣を交えれば、その攻防を続けることが可能であった。

「ほら、どうした？　本気で来るのではなかったのか？　これでは先程と同じだぞ！？」

カミュの足を狙った剣を弾き、カミュの肩口めがけ剣を振るいながらリーシャはカミュへの挑発を繰り返す。

「・・・頭に血が昇り冷静さを失くすだけに飽き足らず、慢心までとは・・・アンタ、本当にアリアハン屈指の戦士なのか・・・？」

リーシャの剣をかわし、一旦距離を取ったカミュは溜息交じりに呟いた言葉は、リーシャの心に火をつけるものであった。

「わかった。　稽古をつけてやるつもりだったが、お前がそう望むのなら本気で行こう。」

リーシャの目も敵を見る目に変わる。
一本目よりも本気の証拠に、再び合わせた二人の剣が発する音は今までになかったものであった。

剣を振るい、弾き、また振るい、弾くの繰り返し。
何度目かのカミュの剣を弾いた後に、リーシャの目は信じられないものを見た。

「　メラ　」

抑揚のない口調での詠唱。
それと同時に目の前に迫る火球。
リーシャは間一髪でその火球を避けるが、完全に態勢を崩した。
そしてそれに合わせるようにリーシャの横っ腹にカミュの蹴りが入り、たまらずリーシャは地面に転がる。
焦って態勢を立て直そうと起き上ったリーシャの喉元に剣先が突きつけられた。

「勝負ありだな・・・」

おそらく意図的なのであろう。
先程のリーシャの口調そのままでカミュが勝利宣言をする。
その目は先程のような冷たい視線ではなかったが、表情はなかった。

「ちょっ、ちょっと待て！」

「・・・なんだ？　まさか、魔法を使ったから卑怯だとでも言うつもりか？　俺は『実践と同じように』と言ったはずだが・・・・」

「ぐっ・・・」

完全なる意趣返しであった。
その証拠に、先程まで表情のなかったカミュの口元が片方上がり、厭味たらしい笑みが浮かんでいた。

確かにカミュは『魔物相手と同じように』と言っていた。
それに対し、リーシャもそれを了承し、途中からは自分も本気でカミュに剣を向けていた。
剣でのせめぎ合いは、リーシャに分があった。
しかし、カミュはそのリーシャの剣を何とか凌ぎながら魔法を使う隙を窺っていたのだ。
カミュの力の具合や剣の腕から、魔法は使えないと無意識に決めつけていたことがリーシャの敗因だった。

考えれば、アリアハンの英雄と謳われたカミュの父親であるオルテガもまた、剣の腕は世界中で右に出る者はいないと云われ、魔法も使うことができた。
しかし、それは真の勇者しか契約することのできない魔法だとも聞いたことがある。
それ以外の、そう、先程カミュが使用した、魔法使いが最初に契約をする『メラ』と呼ばれる火球呪文を使えたかは解らない。
なんにせよ、カミュの言うとおり、この勝負はリーシャの慢心から来た思い込みが敗因なのは確かだ。

「ぐっ・・・・・・もう一度だ！」

そう言って、再度剣を構えるリーシャをあざ笑うかの様に、カミュは剣を背中の鞘に納める。

「いや、時間切れだ・・・これ以上やれば、出発が遅れる。　それに、迎えも来てるようだしな。」

先程までリーシャに向けていた笑みを消し、カミュが視線を動かした方向を見れば、こちらを見たまま放心しているサラの姿があった。

「・・・わかった。　しかし、また勝負だ、カミュ。　この先、お互い剣の腕を磨いていかなければ、待っているのは死だけだ。　相手が思考能力を持たない魔物だけとは限らない。　その為にも人間との鍛練は必要だ。」

リーシャにとっては、苦し紛れの言葉だったのかもしれない。
こう言わなければ、カミュは自分と剣を合わせることがないと思っていた。
しかし、それに対してのカミュの対応はリーシャの想像の遥か上を行っていた。

「・・・そうだな。　アンタと対して俺の腕がまだまだだということを思い知らされた。　これからも頼むよ。」

「・・・は？」

リーシャはカミュの意外な言葉に一瞬呆けてしまう。
それもそうだろう。
昨日の夜までは、レーベの村に着いたらアリアハンに帰れと言っていた男が、直接的ではないにしろリーシャの同道を認めたのだ。

「・・・早々にここを出発しよう。　今日中にはレーベに着きたい。」

リーシャが呆けているうちにカミュはさっさと移動してしまう。
我に返ったリーシャは、先程のカミュの言葉を改めて振り返り、自然と顔を緩めながらその後を追った。

サラは木々に覆われた場所から唐突に開けた空間に出た。

ついて来いと促していると考えていたうさぎは当の昔に逃げ去っていた。

興味本位でサラを見ていたが、いくら距離を空けてもその距離を詰めてくる人間に恐怖を覚えたのであろう。

サラを置き去りに森の奥の方に一目散に逃げて行った。

サラはそのうさぎを走って追う程の間を与えてもらえず、再び森の奥深くで取り残される

形になった。

立ち止まるわけにもいかず、うろうろとしていると、頬に当たる風が湿り気を帯びていることに気づく。

水場が近くにあるのか、その周りの空気に湿気が含まれ、それが風に乗ってきたのであろう。

サラはわずかな期待を胸にその風元に足を向ける。

近付くにつれ、その期待が確信に変わっていく。

そして、不意に広がった光に目を覆った。

そこは幻想的な世界だった。

木々は周りを覆うように生い茂り、その中央から一本の川が森の下流に向け流れ、大地には芝が生え、とても自然にできたとは思えな

いほどの光景であった。

そして、その中央の池の近くにサラの探し求めていた二人の姿があった。

やっと辿り着いたことに安堵と喜びを感じ、駆け寄ろうと近づくサラの目は信じられない光景が映し出された。

二人は互いの剣を抜き、対峙しているのだ。

しかも、その二人を取り巻く空気は、サラにでも感じられる程の緊迫したものであった。

止めるために声を出そうとするが、その空気に飲まれ、言葉を発することが出来ない。

そうこうするうちに、リーシャが動いた。

リーシャの突きを剣で防いだカミュは、その後も何とかリーシャの攻撃を凌いでいた。

途中、二人が距離を空け何か話していたようだが、この距離からはその会話が聞き取れない。

しかし、サラにはカミュがリーシャを挑発したように思えた。

その証拠に、その後からのリーシャの攻撃が先程よりも苛烈になっていた。

それでも、なんとか凌いでいるカミュではあったが、勝敗が決するのは時間の問題だということはサラにも理解できた。

そんな時、サラの目にカミュの左手の動きが入ってきた。

右手の剣をリーシャの頭部めがけ振り下ろすカミュの左手が握られ、人差し指一本を立てた状態になっている。

何をするつもりなのか？

それはリーシャが頭部を狙う剣を振り払った時に判明した。

左手の人差し指をリーシャに向けると、その指から火球が飛び出し

たのだ。
それは、魔法使いと呼ばれる職業の人間が使える魔法。
生来、魔力が高い人間がはじめに契約することのできる魔法で、教会に入らない魔力を持った人間の将来を左右する魔法である。

サラは驚いた。
剣だけではなく、魔法の才能も持ち合わせている勇者と呼ばれる少年の能力に。

リーシャの剣の腕は素人の自分でもわかるぐらいに優れている。
このアリアハンの地に住む魔物たちでは相手にすらならないだろう。
そのリーシャに劣るとはいえ、あれほどのせめぎ合いが出来る腕を持つカミュも相当なものである。
その上、魔法まで使えるのであれば、本当に自分はただの足手まといにしかならないのではないか？

カミュが魔法が使えると言っても、それは魔法使いの魔法であって、回復魔法まで使えるわけではないだろう。
もし、回復魔法が使えるのであれば、それは文献などに載る存在、『賢者』ということになる。
今の世界に賢者はいない。
遠い昔、その存在がいたとされているが、魔との契約による魔法と神との契約による魔法を同時に使える存在は今現在確認されていない。

回復魔法が使えるという強みは、パーティーの中での存在感となると考えていたサラは、魔法も使えるカミュにその存在価値を否定されたような感覚を持った。
更には、リーシャとカミュの剣の腕である。
僧侶であるサラには剣の才能など皆無に等しい。

しかし、魔物との戦闘の際に、常に後ろに控えている訳にはいかない。
ただ、魔物に傷つけられた仲間を回復するだけであれば、それこそ魔王討伐には必要ないだろう。
ならば、攻撃にも使える魔法を覚えるか、剣の腕前をあの二人とまではいかなくても、魔物にダメージを与えられる程度には上げていかなければいけない。

そんなことを考えているうちに、二人の勝負は終わっていた。
どうやら、先程の魔法がカギとなりカミュが勝利を収めたようだ。
リーシャが何か悔しそうにカミュに対して言葉をぶつけているが、それを無視するようにこちらに向かってくる。
固まっていた自分に気が付きサラは二人に歩み寄る。
その時、カミュの後ろから歩きだしたリーシャの表情が少し柔らかくなっていたのをサラは不思議に思った。

三人は宿営地に戻り、火が完全に消えていることを確認した後、念のためそこに土をかけてから森を出た。
再び街道に戻った頃には完全に日が昇り、明るい日差しが街道を照らしていた。

昨日と同じようにカミュが先頭を歩き、その後ろをサラの歩調に合わせてリーシャが歩く。

その間隔はある一定の距離が刻まれ、それ以上縮まることもなければ、逆に広がることもなかった。

昨日は、頭に血が上ることも多く、気がつかなかったが、旅慣れぬサラの歩調を気遣いながらカミュは先頭を歩いていたんだとリーシャは感じていた。

相変わらず、出てきた魔物との戦闘では、自分に牙を剥いてくる魔物以外には全く興味を示さず、倒れた魔物の部位を切り取っていたし、別段サラや自分に向かってくる魔物を代わりに倒したりすることもないが、彼は彼なりに自分たちに気を使っているのかもしれない。

昨日あれほど考えが対立していた相手をなぜこのように思うのかは解らないが、何となく自分の考えが間違っていないという確信がリーシャにはあった。

昨日と同じように街道沿いには、大ガラスや一角うさぎ、そしてスライムとの戦闘があったが、カミュやリーシャの敵ではない。

サラは回復呪文を使う場面はないが、手に持つひと振りのナイフで何体かの魔物を倒していった。

昨日、サラが初めて魔物をその手の凶器で殺害したときには、その手に残る感触にしばし呆然としていたが、それを見るカミュの冷ややかな視線に気づき、カミュとにらみ合う場面もあった。

サラはその時に呟いたカミュの一言がその後魔物をその手で倒すたびに胸の奥にできたしこりが大きくなっていくことを実感するのであった。

「どうだ？　魔物をその手で殺す気分は？　爽快か？」

その言葉をカミュが発した時のリーシャは完全に我を忘れるくらいに激昂していた。
そのリーシャに呟いた一言もサラの心の奥に張り付いて離れない。

「相手が魔物だろうと、命をその手で奪ったことには変わらないだろ・・・」

昨日のカミュとの対立は必然であったと言えよう。
未だにカミュの考えは解らないし、解ろうとも思わない。
だが、カミュのその言葉は確実にサラの心に定着してしまっていた。

後ろを歩く二人が全く違う想いを胸に前を行く自分を見ているとは全く知らず、カミュはレーベに向かい歩を進めていた。
二度の休憩を挟み、何度かの戦闘を行い、日が沈み始めたころ、カミュ達一行はようやくレーベの村に辿り着いた。

木でできた柵で簡易の防壁を作り、魔物の侵入を阻み、その中で人々は集落を営む。
魔王の影響で魔物が凶暴化したことにより、アリアハンから交代制で兵士が常駐し監督を続けている。

村の入口には兵士たちの番所があり、ここで兵士たちは寝泊りをしていた。
基本、ここに派遣される兵士たちはアリアハンから募集した平民の兵士が多く、出世欲などもあまりない者が多いためか、兵士と村人の衝突などは一切起きてはいない。
周りの魔物もそれほど強い魔物ではないため、世界でいちばん平和な村なのかもしれない。

村の入り口でカミュ達三人は兵士たちに身分を言い、村の中に入る。

「レーベの村にようこそ」

村に入ってすぐに若い女性に声をかけられた。
三人の服装なども見て、旅人と見たのだろう。
にこやかな笑顔に偽りはなく、この時代にレーベへと立ち寄る旅人を歓迎している様子であった。

「ああ、ありがとう。」

いつものように全く関心を示さないカミュの代わりにリーシャが村娘に答えるが、サラはというと、休憩を挟んではいたが、慣れない旅の疲れからか、リーシャの後ろを黙々と歩いていた。

村の入り口から進み左手に道具屋の看板が見えた。
日が沈みかけているため、そろそろ店仕舞いをと考えているようだ。
カミュは魔物から切り取った売却できる部位の入った袋を持ちかえ、

リーシャに『これを売ってくる』と告げ道具屋に入っていった。
その後ろ姿に『先に宿屋を探しておく』と返したリーシャの言葉がカミュに届いたかどうかは分からないが、とりあえず早めにサラを休ませるためにリーシャは宿屋を探すことにした。

宿屋は案外あっさりと見つかった。
道具屋の向かいにある大きな建物が宿屋であったようで、入口が反対側だったため看板が見えていなかっただけであった。

カミュを待つかどうか考えたが、サラを一刻も早く休ませたいこともあり、とりあえず宿屋の入口を潜ることにした。

「いらっしゃいませ。」

入り口付近で入るか入るまいかを悩んでいたリーシャの姿を見ていたのだろう。
リーシャが店に入り切る前にカウンター越しから中年の男性に声を掛けられた。

「こんにちは。　当旅人の宿屋にようこそ。　二名様ですか?」

中年の男は営業的な笑顔でありきたりな文句を言い、こちらの人数を尋ねてくる。
それに対し、サラの手を引きながら、カウンター前にまで歩きリーシャは口を開いた。

「いや、三人だ。　できれば、二部屋用意してもらいたい。　一つは一人部屋でもう一つは二人部屋がいいんだが。」

「ああ、大丈夫だよ。　このご時世、なかなか宿屋を利用する旅人も少なくなってきているからな。　うちもガラガラさ。」

先程までの営業口調をいつの間にか取り払い、宿屋の親父は気さくにリーシャの要望にこたえる。

「一緒の部屋なら三人で6ゴールドなんだが、二部屋となると8ゴールドになるよ？　それでもいいかい？」

「ああ、それでいい。　金は後からくるもう一人の連れが持っているから、そいつが来るまでそこに座らせてもらってもいいか？」

「ああ、どうぞ。　そちらのお連れさんは相当疲れているようだな・・・ちょっと待ってな。　今、茶でも入れてやるから。」

もはや、丁寧な口調でもなくなっている宿屋の親父だが、その人柄はとても好印象が持てるものであり、リーシャの気持ちも自然と柔らかいものに変わっていく。

奥からお盆に冷たいお茶を載せ戻ってきた親父はそれをサラに渡す

と、再びカウンターの中に戻っていく。

「ああ、そうだ。　ひとつ言い忘れたことがある。　今夜の夕食と明日の朝食は出せないが、それでもいいかい？」

「夕食も朝食も出せないのか？」

なんでもないようなことかのように口を開く宿屋の親父から出た言葉はリーシャに取っては疑問が浮かぶ事柄だった。
通常、深夜の到着でない限り、宿屋の料金は夕食と朝食が込である。それがないということは、外の酒場などで夕食を取らなければいけないということだ。

「ああ、材料は多少あるんだが、生憎私の家内が風邪をひいてしまって、昨日から寝込んでいてね。　私も料理はできるが、とてもお客さんに出せるものではないから・・・・・
申し訳ないが、食事はなしでお願いしているんだよ。　もしそれでよければ、さっき言った８ゴールドを二部屋で通常通りの６ゴールドにしてもいいよ。」

「そうか・・・それでは仕方ないな・・・ん？　そうだ。　６ゴールドにしてもらうお礼に料理は私が作ろう。　材料はあるんだろ？　ついでに親父さんの分と奥さんの分も作ろう。　風邪ならば消化のいいものがいいだろうな。　台所を貸してくれ。」

「「は？」」

宿屋の親父の謝罪に対して発したリーシャの言葉は、その場を凍りつかせるのに十分な威力を持っていた。
先程までぐったりと頭を下げていたサラでさえ、その頭を勢いよく上げ、疑問の言葉を発していた。
昨夜、串に刺さった、焼きあがっていない肉を頬張ろうとするリーシャを見ていたサラだけでなく、初対面の宿屋にとっても、リーシャと料理が全く結びつかなかったのだ。

「・・・な、なんだその顔は！　私が料理も出来ないとでも思っているのか！？　サラまで何だ！？」

リーシャはそんな二人の態度に戸惑いながらも、怒りを露わにした。
そんな宿屋のカウンター越しの微妙な状況の中、勇者が現れた。

「・・・ん？　何を騒いでいるんだ？　魔物の部位は思ったより高く売れたから、ある程度の宿代は払えるぞ。」

登場したカミュはその異様な雰囲気を不思議に思いながらも、見当違いな発言をする。
そんないまいち状況を読めていないカミュにサラが事の顛末を教えてあげることにしたようだ。

「宿屋の奥様が風邪をひかれたらしくて、食事は出ないらしいんです。」

「・・・は？　そんなことで騒いでいるのか？　別に外で食べればいいことだろ？　全く食い意地まで張っているとは、たいした戦士様だ。　さすが脳まで筋肉でできているだけはある・・・」

「　なんだと！　」

カミュの発言にそれまで微妙な空気を作っていた張本人がその身体に怒りを纏い、カミュを睨みつける。
まさに一触即発の緊迫感に宿屋の親父の顔も引きつるが、サラはカミュの間違いを正すためもう一度口を開いた。

「あ、あ、違います。　それはいいのですけれど、『材料があるんだったら私が作る』とリーシャさんが言いまして・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・は？・・・・」

サラは自分が伝えた言葉に対するカミュの反応に心底驚いた。
あのカミュが呆けているのだ。
サラの発言の意味が全く理解できないといったような、完全な無防備な表情。

無表情という訳でもなく、冷たいと感じるわけでもない、本当に人間らしい表情であった。

「～～～！！　なんなんだ、お前たちの反応は！！　私が料理を作るのがそんなにいけないことなのか！？」

先の二人の反応に続き、無表情と口端を釣り上げた厭味な笑いの顔しか見たことのないカミュに人間らしい表情を出させたことの喜びなど感じることもなく、リーシャは爆発した。

「い、いや、さすがに俺もアリアハンを旅立った2日後に魔物との戦闘ではなく、食中毒で死ぬことは、できるならば願下げたいんだが・・・・・」

初めて人間らしい感情を表に出したカミュが、そのままの状態でリーシャの言葉に返答を返すが、それはただ、火に油を注いでいるだけであった。

「カミュ様・・・・その言い方はちょっと・・・」

レーベまでの道程でカミュから『勇者様』と呼ぶことを禁止され、お互いの落とし所であった『カミュ様』という呼び方でカミュに呼びかけるサラであったが、それは直接的ではないがサラも気持ちは同じであることを明確に表していた。

「～～～～～～！！　ああ、そうか、わかった。　お前たちが私をどう見ていたのかよくわかった。　まさか、サラにまでそんなふうに見られているとはな。　こうなれば意地だ。　誰が何と言おうと、食事は私が作る。　いいな！　親父、材料を見せてくれ。　献立を考える。　足りないものがあったら、私が買いに行く！」

「あ、は、はい・・・わかりました。　わ、わたしは頂きます・・・ですから、家内だけは・・・どうぞご容赦を・・・」

旅の同道者である、サラとカミュの反応を見て、不安が尚一層深まった宿屋の主人は、何とか自分の妻だけは護ろうと、先程までの気さくな口調を正し、リーシャに懇願するように頼みこむが、その主人の態度がリーシャの怒りに益々火をつける結果になる。

「～～～～～～！！　もういい！！　私は勝手に作業を開始する！　お前たちは出来上がるまで部屋で休んでいろ！！」

「「は、はい！」」
「・・・・はぁ・・・・」

雷鳴の如く鳴り響くリーシャの怒声に宿屋の主人とサラは同時に声を上げ、その横で心底疲れ切ったといわんばかりに溜息を洩らすカミュがいた。

リーシャが料理をしている間に、諦めきった表情で宿屋の主人はお客の為に湯を沸かし、帳簿をつける。
湯が沸いたことを確認し、2階の部屋で休んでいる二人のお客にそれを告げ、階下に戻っていった。

宿屋の主人の声がした時、サラは疲れから睡魔に襲われていたが、2日間の身体の汚れを清めるため、一応、カミュに先に入ることの了承を貰い1階にある浴場へと足を運ぶ。
これから起こるであろう惨劇を思うと気が重くなっていくが、まずは身体の汗を流すことにしたのだ。

一人部屋に入ったカミュは、道具屋に売った魔物の部位の分のゴールドを袋に入れ、明日道具屋などで揃える物を考えていた。
これから先、アリアハン大陸から出ることになれば、この大陸の魔物とは比べ物にならない強敵が出てくるだろう。
自分やリーシャが身につけていた、魔物の皮でできた＞革の鎧＜では身を守ることが難しくなってくるだろう。
その為にも、少しでもいいものを買わないといけない。
あの僧侶は戦闘に慣れるまでは危険が多いので、法衣の下にでも何

か身を護るものを着せた方がいいだろう。
そこまで考えて、自分が他の二人の装備品のことまで考えていることに驚き、カミュは苦笑を洩らした。

サラが湯から上がり、カミュも軽く身体を清めたころ、台所からリーシャの声が響いた。
その声は、サラにとって地獄からの呼び声のように聞こえた。
もはや、先程の人間らしい表情を消し去ったカミュが一番乗りで食堂にはいる。
その後から、ゆっくりと一歩一歩を確かめながらサラが食堂に入ってきて、最後に宿屋の主人が食堂に姿を現した。

それぞれが席に着き、サラと宿屋の主人がお互いの顔を見合せて愛想笑いをしていると、台所の方から両手に皿を二つ持ち、リーシャが現れた。

「おっ、揃ってるな。　さあ、これがお前たちが散々馬鹿にした私の料理だ。　全部持ってくるまで手をつけるなよ。」

手に持った皿をテーブルの上に並べながら、リーシャは得意げに胸を張る。
外にいたような鎧をつけている姿ではなく、鎧の下に来ている服の上からエプロンを纏い、先程まで台所の炎に当っていたためか、顔が上気していた。

サラはその姿がとても美しく、とても羨ましく見え、眩しく見上げていた。
戦闘中では考えられないリーシャの女らしさに驚いたのだ。
鎧を外し、エプロンをつければ、身体は引き締まっているが、女性らしさを損なわない丸みを帯びた美しいプロポーションだった。
女性の仕事の一つである子への授乳の為の胸は一般的に見てもそれなりに大きい部類にはいるだろう。
髪は戦闘中に邪魔にならないよう短く切り揃えてはあるが、独特の癖のあるカールがかかった金色の髪がリーシャによく似合う。

サラがリーシャに見惚れている間に次々と料理がテーブルに並んでいった。
暖かそうなコンソメのスープ。
鶏肉を炙り、その上に気持程度にソースがかけられたソテー。
野菜と共に炒められ、疲れ切った身体でも食欲が溢れ出しそうな香りを出している、これはうさぎの肉であろうか？
さらに野菜のサラダに軽く焼き色のついたパン。

どれも、湯気と共に食欲をそそられる香りを発している。
ふと、サラが隣を見ると、食堂に入ってくるまで無表情を貫いていたカミュの表情が先程宿屋の入り口で表した人間味のある唖然とした表情になり、料理とそれを運んでくるリーシャの顔とを見比べていた。

その様子がとても可笑しく、カミュとは反対側に顔をそむけ笑いを堪えていると、その方向にいた宿屋の主人も同じ事を思ったのであろう、必死に笑いをこらえていた。
お互いの状況を確認した二人に笑いをこらえることはもはや無理な話であった。

「「あはははははははははっっ！！」」

突如、爆笑する二人に驚き、カミュの表情がいつものような無表情に戻るが、料理を運んできたリーシャはそれが自分の料理を笑われたと思い、苦い顔をする。

「なんだ!?　失礼な奴らだな、人の料理を見て笑うなんて。　いいから食べてみろ。」

「ち、違うんです。　すみません。　リーシャさんの料理を笑ったわけでないのです。　ぷぷぷっ・・」

必死に弁解しようとするサラだが、一度落ちた笑いの渦から脱出することはかなわなかった。

「そんなにこの料理は変か・・・？」

先程までの剣幕はどこへやら、気落ちしたように顔を落とし、リーシャの表情は沈んでいった。
そんなリーシャの様子に一気に笑いが引いていったサラと宿屋の主人は何とか弁解をと必死に考えを巡らせ始める。
しかし、そんな三人の様子をよそに、カミュが料理を食べ始めていた。

スープをスプーンですくい一口すると、それからは怒涛のように他の料理に手をつけていく。

「あ、あの・・・・カミュ様・・・」

「ん？　料理は揃ったんだ。　食べ始めていいんだろう？」

カミュの姿に驚き、恐る恐る声をかけたサラにまるで当然のことのように答えたカミュの様子を見る限り、この料理の味は惨劇を生み出すものではないようだ。

「・・・・ど、どうだ・・・？」

今まで沈んだ様子だったリーシャは自信のあった料理を笑われたと感じていたため、カミュが食べ始めてから黙々と食べ続けるのを見て、感想を聞く。
その声は、気のせいか若干震えているようだった。

「・・・旨い。　凄いな・・・さっきはアンタの料理を馬鹿にするような発言をしたことを謝罪するよ。　ああ、それも食べていいか？」

「そ、そうか！　そうだろう！　仕方がない。　その謝罪を受け、

さっきのことは不問にしてやる！　こ、これか？　ああ、いいぞ。
まだあるからどんどん食え！」

およそあのカミュとも思えないような素直な感想に、喜びを隠しきれない様子でリーシャはカミュの前に野菜と肉の炒め物の皿を置いた。

サラはそんな二人の様子を見ながら、カミュの態度に驚きながらもどこか得心の行く部分もあった。
カミュたちと出会い、まだ2日しか立っていないが、カミュは自分に非があるときはその相手に対して謝罪することや感謝の意を表す言葉を言うことを厭わない。
そんな気がしてならなかった。

ならば、散々対立している自分に対して謝罪がないのはカミュが全くそのことに対し非がないと考えているということではないか。
自分が考えたこともない考えをカミュは持っている。
その考えを改めさせ、自分が受けてきた教えをカミュに理解させることができる日が来るのだろうか。
サラはそんな考えに没頭していた。

「・・・サラ、料理は口に合わなかったか？　やっぱりソースの酸味がきつかったか・・・？」

そんなサラの様子を心配し、リーシャが声をかけてくれている。
旅の道中ではあまり表面には出てこないが、本当にこのリーシャという女性はアリアハンの貴族らしからぬ人間だった。

平民を虐げ、貴族であることがアリアハンで生きるためのステータスとでも言うような貴族が多い中、貴族であるという誇りは持っていてもそれを驕るのではなく、平民であるサラに対しても気さくに接してくれる。
そんな優しい女性であった。

「いやいや、このソースは絶品だ。　凄いなこれは。　俺もさっきの態度を謝るよ。　いやぁ、旨い。　こりゃうちの家内にも食わせてやりたかったな。」

リーシャの味に気を良くした宿屋の主人は最初のころのような気さくな口調に戻っていた。

「ああ、アンタの奥さん用に台所に別にスープを作っておいたよ。　消化にいいもので体が温まるように作っておいたから飲ませてあげるといい。」

「そりゃ、本当かい？　ありがとう。　早速家内に持って行ってやることにするよ。　ああ、本当に美味しかったよ。　ご馳走様。」

嬉しそうに顔を綻ばせながら、リーシャに頭を下げ、宿屋の主人は台所の方へと消えていった。

「サラも食べな。　早く食べないと、昨日と違ってアンタの分も無

くなってしまうよ。」

「は、はい。　このスープ、本当に美味しいです。　リーシャさん、お料理がお上手なんですね。」

スープを飲みその味の良さに感激を覚えるサラであったが、隣のカミュの食の勢いを見ていると、リーシャの言うことも満更嘘ではない気がして、急いで他の料理も取り分けていく。

「ああ、ありがとう。　料理はうちに昔から仕えている婆やに教わったんだ。　剣の鍛錬ばかりしていたころに壁にぶつかってね。そのことを婆やに話したら、『女には女の強さがあるんですよ』と言って料理を教えてくれたんだ。」

「そうだったん・・・」

「それ食べないのなら、貰ってもいいか？」

リーシャの話に相槌を打とうとしたサラの言葉を遮り、リーシャの前にある料理にカミュが手を伸ばしてきた。

「ん？　これか？　ああ、いいぞ。　食べたかったら、食べればいい。　ほら。」

自分の分の料理まで欲しがるカミュに、嬉しそうに笑顔を向け、カミュの前に皿を持っていく。

「良いのですか？　リーシャさん食べてないじゃないですか？」

「ああ、料理は作るときに味見とかで少しずつ口に入れるからな。意外に腹が膨れるもんなんだ。」

「は、はあ・・・」

「まあ、サラも料理を作るようになったらわかるさ。」

「わ、わたしだって料理は・・でき・・ません・・けど・・・」

「ふふふっ、いや良いさ。　私だって小さいころからできたわけじゃない。　そのうち嫌でも覚えるようになるさ。」

サラの必死な様子に、リーシャは暖かい目で微笑を浮かべたまま見ていた。
サラはそんなリーシャの視線に恥ずかしそうに身を縮ませていた。

「ご馳走様。」

リーシャとサラが和やかな会話を続けていると、それまで黙々と食事を続けていたカミュが一言呟いた後席を立った。
カミュの前にあった皿は全て空になっているので、先程の言葉はお世辞ではないのであろう。
まず、カミュがお世辞など言うことができるとはサラにはどうしても思えなかったが。

「ああ、明日はどうする？」

席を立ったカミュにリーシャは明日の予定を問いかけるが、カミュは食堂の入り口に立ったまま少し考えた後、振り返りもせずまたもや火の種を投じた。

「明日は物資を少し買いたい。　店が開いたころに出る。・・・・・・アンタはこの町に残って店でもやったらどうだ？　その料理であれば客は来るだろう。」

火を投じたまま、リーシャの反応も待たず、カミュは二階の部屋に上がっていった。
カミュが発した言動をゆっくりと噛み砕き理解し始めているリーシャが爆発するまで時間は残されていなかった。

その夜、爆発したリーシャを宥め、共に洗い物などをし、部屋に戻ったが、尚も収まりきらないリーシャの怒りの捌け口になったのはサラであった。
サラはリーシャの愚痴を聞きながら、頭の中でカミュに対して怨み言を言い続けた。

レーベの村（後書き）

やっとレーベの村に辿り着けました。
ゆっくりですが、勇者一行のコマを進めて行きたいと思っています。

レーベの村？（前書き）

たくさんの方々に読んで頂いていることに、驚きと喜びを噛み締めています。
本当にありがとうございます。

これからもよろしくお願い致します。

レーベの村？

まだ、夜が明け切れてない時分に、一人の男が宿屋の階下に下りてきた。

「お早いご出発ですね。　皆様まだお休みになられていますが？」

誰もいないと思っていたカウンターから突然声がかかり、驚いてそちらを見ると、宿屋の主人が帳簿に目を落としながら筆を走らせていた。

「ああ、すでに昨夜に料金は払っているのだから、かまわないだろ。」

見つかるとは思っていなかったのであろう。
二階から降りてきたカミュは、鬱陶しそうに宿屋の主人の方に視線を動かしそのまま出口に向かおうとしていた。

「ええ、それは構いませんが、おそらく簡単には出れないと思いますよ。」

そんなカミュに視線も向けず、宿屋は奇妙な事を言った。
宿屋の主人には昨日のような気さくさはなかった。

いや、始めからカミュに対しては気さくな口調ではなかったかもしれない。

「どういうことだ・・・？」

「いえ、あのお方に貴方が勝てるとは思えませんので・・・」

その言葉と共にやっと顔を上げた主人の表情を見てカミュは咄嗟に身構えた。
主人の顔にはある感情が張り付いたままだったのだ。
恐怖。

なぜ、こんな片田舎の宿屋の主人がこれ程までの恐怖を味わっているのか？
『あのお方』とは誰のことなのか？
カミュは背中の剣に手をかけながら宿屋の出口に向かう。

まだ夜も明けきらぬ時刻。
宿屋は暗闇に支配され、カウンターにあるたった一本の蝋燭では帳簿を見ることはできても宿屋全体を照らすことは叶わない。
カミュが慎重に足を進めていると、やがて一つの人影が見えた。

「ほう？　やはり一人で行くつもりか？　主人に言っておいて正解だったよ。」

徐々に明らかになる人影とまだ聞きなれたとは言えない声。
腰に挿した剣に金髪の髪。
気の強さを表す少々つり上がった瞳は今まさに目前に立つカミュを射抜いていた。

「・・・はぁ・・・誰かと思えばアンタか・・・」

目の前に立つ人物がカミュの胃の中でいまだ消化されていないものを作った女性であることを認識し、緊張をとき剣から手を離した。

「こんな早くにどこに行くつもりだ？　お前は昨夜、今日出るのは店が開いてからと言っていたのではないのか？」

緊張を解いたカミュはもう一度身を強張らせた。
宿屋の入り口に立つリーシャの身体から立ち上る怒気がとんでもないものだったのだ。
表情は周辺の暗闇に隠れて見えないが、宿屋の入り口を中心に空気が変わっていることから、リーシャの怒りは相当なものだということは理解できた。

「お前は、私と剣の鍛錬も続けると言ったな。　それも嘘か。　アリアハンから認められた勇者は嘘しか言わないのか？」

一言一句に呪いが籠められているのかと思ってしまうほど、リーシャの発する言葉の振動が重い。　ふとカウンターに意識を戻すと、先程までいた宿屋の主人は跡形もなく消えていた。
カミュにも先程の宿屋の主人の怯え様がやっと理解できた。

「・・・以前、森の中でも話したはずだ。　俺とアンタ方の考え方は決定的に違っている。　このまま旅を続けたとしても平行線なだけだ。　俺の考えが変わることはないし、幼いころからルビス信仰をすり込まれてきたアンタ方の考えが変わるわけもない。」

すり込むという単語にリーシャに反応があったが、今はカミュの言い分を聞くことにしたようだった。
いつも即座に怒声を飛ばすリーシャが、何の返答もしないことを若干不思議に思ったカミュだが、先を続けることにした。

「もし、アンタ方がどうしても魔王討伐に出たいというなら、俺とは別に行ってくれ。　その方がお互いのためだ。」

カミュはそれだけ言って、リーシャの立つ横を通り抜けようとする。
が、それはリーシャの剣に阻まれた。

「・・・お前の考えは聞いた。・・だけど、聞いたことと理解できることは違う。　お前は魔王を倒すために出ているだけで、魔王を討伐する気は本当はないんだな？　もし、お前が本気で一人で魔王を倒せると思っているのだとすれば、お前の脳みそこそ筋肉でできているんじゃないか？」

横を通ろうとするカミュに抜き身の剣を向けながら、リーシャはカミュをまっすぐ見据えていた。

（　安い挑発だな・・）

カミュは先程からリーシャが放つ言葉に自分を挑発している感があることには気が付いていた。　だが、『魔王討伐に出ているだけで、実際に倒す気がない』という言葉はカミュの胸に刺さった。

「魔王討伐の旅に出たんだ。　魔王を倒すつもりなのは当り前じゃないのか？　一人で倒せるか倒せないかは行ってみなければわからないけどな・・・」

自分の心の中を、たった2日間行動を共にした人物に見透かされたのではという動揺を表情には出さずに話すカミュであったが、リーシャと視線を合わすことはできなかった。

「あのオルテガ様でさえ一人旅の末に倒れられたのだぞ！　なぜ、

そのオルテガ様にも遠く及ばないお前が一人で魔王を倒すことができるんだ！」

「・・・・はぁ・・・オルテガと俺は関係ないだろ。　それに俺はアンタ方が魔王討伐に向かうことを否定はしてないんだ。　アンタ程の腕があれば、あの僧侶の他に何人か仲間を募って旅に出ることはできるだろう？」

「そういうことではない！」

カミュは困り始めていた。
最初ほど殺気を放つことはなくなってはいるが、その怒りは幾分も和らぐことはなく、未だに自分の行く手を遮っているリーシャが何故これほどの怒りを感じているのかが、カミュには本当に解らないのであった。

「何が不服なんだ？　俺は俺で旅に出る。　そこで俺の力が足りず死ぬことがあっても、直接アンタに関係することでもないだろ・・・・」

「・・・・そうか。　お前は自分の重要性を何も解っていないんだな。　お前は望もうと望まなかろうとアリアハン国が認め全世界に通知された勇者なんだ。　ここ十数年、誰一人旅立つことがなかった魔王討伐に向かう全世界の人間の希望なんだ。　それが、旅の準備も碌にせず、一人で旅立った末、魔王討伐もできずに死んだとな

れば、皆の期待と希望はどうなる！？」

「それこそ、俺には全く関係のないことだ。　俺に期待や希望を背負わせるのは勝手だが、それを背負うかどうかは俺が決めることだろ？」

「！！　ふざけるな！　お前はあのオルテガ様の息子なのだろ！　オルテガ様は全世界の人間の期待や希望をしっかりと受け止めていたぞ！」

リーシャはまさしく激昂していた。
幼き頃、英雄オルテガに憧れ、その強く暖かな瞳に淡い想いを抱いていた。
そんな相手を、よりにもよってその息子に侮辱されたという思いが、リーシャの頭に血を上らせていたのだ。
しかし、感情を露わにするリーシャとは反比例に目の前のカミュの表情が消えていった。

「・・・顔を見たこともない人間を親と思ったことは一度もない。　前にも言ったが、オルテガという男への憧れや希望を俺にスライドするな。　迷惑以外何物でもない。」

「なっ！」

確かにカミュが生まれてすぐにオルテガは旅立ったのだから、カミュがオルテガの顔も憶えていないのは当然だろう。
しかし、全世界の英雄と謳われた父を誇りに思うことはあっても、ここまで拒絶するカミュをリーシャは理解できなかった。

「・・・くっ！　わかった。　じゃあ、こうしよう。　私と毎朝勝負しろ。　私に勝つことができるようになれば、この旅に私は必要ないと認める。　ただし、それまでは旅の仲間として行動してもらう。　お互いの衝突などはあるだろうが、それはこの際目をつぶろう。」

「・・・随分と勝手な条件だな。　俺がそれを飲むメリットが見当たらないんだが。」

「勝手なのはお互い様だ！」

リーシャは自分が身勝手な言い分をしていることは理解している。
ただ、そうせざるを得なかった原因は目の前の男にあると思っているので、押し通すことにした。

「・・・わかった。　どうせ、ここを押し通るにしてもアンタを倒さなければいけないのだから、結局同じことだろう。」

カミュは出口とは反対側のカウンターまで歩き、持っていた荷物を

肩から下ろし、もう一度リーシャの前まで戻ってきた。

「　主人！　この辺りに少し広めの場所などはあるか？」

「は、はい！　この店の裏が少し広い場所があります。　そこであればあまり人も来ないので大丈夫だと思います。」

戻ってきたカミュを満足気に見つめ、リーシャはカウンターに向け声を張る。
カミュが消えたと思っていた宿屋の主人は、カウンターの下に潜っていただけのようで、リーシャの声に素早く反応し、まるで、軍の上官に返答するように背筋をのばして質問に答えた。

「そうか、ありがとう。　では、カミュ、準備はいいな。」

「・・・・準備がいいも悪いもないだろ。」

諦めたような溜息をつくカミュを無視し、リーシャは意気揚々と宿屋の外に出ていった。

「　ああ、悪いけど、適当な時間になったら、あの僧侶を起こしてやってくれ。　それと朝飯を頼む。　簡単なものでいいから、悪いけど作ってくれないか？」

対するカミュは、もはや先程までの一人で旅に出ることを諦めたかのような言葉を宿屋の主人に掛けるが、その顔は先程と一緒で全くの無表情であった。

「畏まりました。　朝食の方は昨晩の食事には遠く及びませんが、ご用意させて頂きます。」

宿屋の主人の返答を聞くと、それに対し何の反応も示さずカミュは宿を後にした。

コンコン・・・・

コンコン・・・・

「・・・・う～ん・・・・」

木の扉をノックする音にサラは夢の世界から引き戻された。
昨日は、食事の後、リーシャが湯浴みに行く隙に、強引にベッドに入ったが、戻ってきたリーシャに起こされ、遅くまで愚痴に付き合わされた。

出発は店が開く時間ぐらいという話だったため良かったが、これが朝早くの出発であったのなら、完全に寝不足になり、いつも以上に役に立たないどころか足手まといになってしまうところであった。

「お客様、起きていらっしゃいますか？　そろそろ朝食が出来上がります。」

半身をベットから起こしてはいるが、未だ覚醒しきれていない頭でドア越しにかかってくる声を聞いていたが、その内容を次第に理解でき、慌てて返事を返した。

「あ、はい。　わかりました。　すぐ着替えて下におります。」

「そうですか。　別段慌てる必要もございませんので、どうぞゆっくり支度なさってください。」

その言葉の後、階段を軋ませる音が続いた。
サラはその昨日聞いたことのない声を不思議に思ったが、自分をお

客様と呼ぶのであれば、この宿の人間なのだろうと大して気にもせずに準備に取り掛かる。

サラは、そこで初めて隣のベッドが空になっていることに気がつく。
それと同時に昨日の朝に感じた恐怖が再び蘇ってきた。
いや、正確には昨日よりも悪い予感が強い。
なぜなら、隣のベッドの傍には荷物がないのだ。

サラは身支度をすることも忘れ、寝巻きのままで廊下に飛び出し、隣の部屋をノックする。
サラの鬼気迫るノックに対して無反応を決め込む部屋に、悪い予感が確信に変わっていこうとするが、頭を振りそれを払いのけると、ドアノブに手をかけてみた。
サラの考えを裏付けるように、ドアには鍵がかかっておらず、すんなりとノブが回っていく。　ノブが回り切り、ゆっくりと開いていくドアの向こうにはサラの最悪の予想通りの光景があった。

誰もいない。
本当にここに人がいたのかも疑いたくなるような冷たい空間。
荷物などもあるわけがなく、ここにいた人間がかなり前に部屋を後にしたことを表している。

サラはしばらく呆然とその光景を眺めていたが、弾かれたように階段を下りていく。
階段を降りた場所にあるカウンターには昨夜共に食事をした、この宿の主人が帳簿を見ながら、お茶を飲んでいた。

「ど、どうしたんだ!?　そんなに慌てて、服も寝巻きのままじゃ

ないか！」

突然鳴り響いた階段を駆け下りてくる音に驚いたように顔を上げた主人は、寝ぐせで跳ねまわっている髪の毛を気にすることもなく、更には着崩れた寝巻きが肌蹴ていることも気が付いていない様子で息切らし降りてきた人物を見て、驚きを通り越し呆れてしまった。

「あ、あの！　私と一緒にいた二人は・・二人はもう出発してしまったんですか！？」

「え！？　あ、ああ、あの二人な・・・」

サラの発言に、最初は戸惑った様子を見せた主人が、少し口ごもるような様子で話し辛そうにする様子をみて、サラの顔は真っ青になっていった。

「や、やっぱり・・・・私は置いて行かれたんですね・・・・」

そう言ったきり、力なく俯いてしまったサラに主人はさらに困惑した。

主人がなんと声をかければいいのか悩みながらサラを見ていると、俯いていたサラの顔から木でできた床下に水滴が落ちていることに気がついた。

その水滴は、陽が昇ってから主人が拭き掃除をしておいた床に徐々

にしみこんでいくが、その上に新たな水滴が落ち、乾く間を与えなかった。

「い、いや、嬢ちゃん、ち、違うんだよ。」

もう主人の手に負える状態じゃなかった。
主人には子供がいない。
今の妻と結婚し、もう２０年近くになり、その夫婦仲はこのレーベでも有名な程ではあるが、子宝には恵まれることがなかった。
実は最近になってようやく養子という形で子供を引き取ったのだが、その子もある事情から塞ぎ込み、なかなか部屋から出てこようとはしない。
だから、主人は小さな子供達と遊ぶことはあっても、成長していく過程の少年・少女達の心の中身を推し量る術を知らない。　そんな主人の心の負い目が更に困惑を招いていた。

「・・・うぅ・・・・うぅ・・・・ぐすっ・・」

本格的に嗚咽を漏らし始めたサラに主人はサジをぶん投げたくなった。

「あら、どうしたの？」

そこにまさに女神の如く、最愛の妻が朝食の調理が終わって奥から

出てきたことに主人は歓喜した。

「ちょうど良かった。　なんか、このお嬢ちゃんが突然降りて来て、泣きだしたもんだからよ。　困っちまって・・・」

「ふふ、そうなの？　どうしたのかしら？　もうそろそろお連れ様もお戻りになるでしょうから、ご一緒に朝食を食べた方がよろしいと思ってお呼びしましたけれど、何か不都合がおありでしたか？」

夫が本当に困り果てた表情で頭を掻く姿を見て柔らかく微笑みながら、未だに俯いたまま床に水滴を落とし続けるサラに近寄り、肩を抱くようにして落ち着かせる姿はとても子供を産んだことのない女性とは思えないほど、慈愛と母性に満ちた姿であった。

「え、ええ！　戻ってくるんですか！？　私は置いて行・・・」

「ふはははっ、まだまだだな、カミュ。　魔法が使えるとしてもそれを生かすための剣がそれではまだオルテガ様どころか、私にすら及ばない。」

「・・・くそっ！・・」

自分の肩を抱く女性の言葉に違和感を覚え、突如顔を上げ叫びだし

たサラの言葉を遮るように入口のドアを開け入ってきた二人の声をサラは聞いた。

「あら、お帰りなさい。　もう朝食はできていますので、少し汗をお拭きになってから食堂に来て下さいな。」

そんな二人に何ともマイペースな言葉を投げかけサラから離れて女性は奥の方に入っていった。

「ん？　なんだサラ、起きていたのか？　それにしても酷いな。髪は起きたままボサボサだし、寝巻きのままじゃないか？　そんなはしたない恰好で年頃の娘が男たちの前に出てきてはダメだろ。」

返事をする前に奥へと消えた女性が若干気になってはいたが、それよりも目元を濡らしながら、呆然とこちらを見ているサラの格好に眉を顰めリーシャは説教を始める。

「・・・まぁ、見られて減るほどないだろう。・・・・」

そんなリーシャの後ろから、憮然とした表情で現れたカミュが、サラの格好を一瞥し鼻で笑うように声を洩らす。

「・・えっ！？　えつ！？　えええええ！！　あっ、あっ、」

そんな二人の反応に今の自分の状況を理解したサラが素っ頓狂な声を上げ、先ほどよりも大きな音を立て階段を上っていった。

バン！

階下まで響く音を立てて閉まるドアを確認すると、リーシャは宿屋の親父の方に確認のために視線を送った。

「　いや、なんか、アンタ方に置いて行かれたと勘違いしたみたいでして・・」

主人の言葉を聞き、リーシャは目を丸くし、カミュはため息をつく。

「・・・そうか・・・あの子も薄々感づいてはいたんだな・・・・・カミュ、先程も言ったが、約束は約束だぞ。　私に勝てるまでは、勝手に出ていくことは禁じるからな。」

少し寂しく笑った後、鋭い視線を投げかけ釘を刺すリーシャにカミュは『わかってる』と一言返し、身体を拭きに流し場に向かって行った。

「それはそうと、主人。　先程の女性はもしかして奥方か？」

「ええ、紹介しそびれましたね。　お～い！」

「はい？　呼びましたか？」

主人の声に奥から女性が顔を出す。

「昨日の、お客さんのスープが効いたのか、明け方には熱も下がって、起きられるようになりましてね。　止めたんですが、お礼も兼ねて朝食を作りたいって言うんで、まぁまかせようと思いまして。　本当にありがとうございました。」

女性を自分の横に立たせて、リーシャに頭下げる主人。

「本当にありがとうございました。　昨日のスープは美味しかったわ。　できれば、今度お料理を教えてもらいたいぐらい。」

そうにこやかな笑みを浮かべ頭を下げる女性を見ると、若くはないが、年をとても良く重ねてきたことを窺えるほど綺麗な笑みであった。

「いや、そんなに礼を言われるほどのことはしてないさ。元気になって良かった。料理に関しても、宿の食事を一人で切り盛りをしてきた人に教える程のものは持っていないよ。」

おそらく自分よりも２０年近く年上の二人に頭を下げれ、リーシャは気恥かしさでいっぱいになり、逃げるように流し場に消えていった。

「ふふふっ、最近では珍しい、とても気持ちのいいお客さん達ね。」

「そうだな。」

逃げていくリーシャの背中を見つめながら、宿屋夫婦はお互いに微笑み合うのであった。

その後、リーシャが流し場で上半身裸のカミュを目の当たりにし、顔を赤くして戻ってきたのは夫婦揃っての笑い話になるのはまた別の話。

朝食とは思えない程の量と質を備えた朝食を食べ終え、カミュ一行は宿を後にする。

「また、レーベに寄ることがあったら、是非うちに来て下さいね。」

宿の出口まで夫婦揃って出てきて、カミュ達に声をかける夫婦にリーシャとサラは温かい気持ちに包まれながら、手を振っていた。

日も昇りきり、レーベの村はすでに活動を始めていた。
まず、宿屋を出てすぐにある武器屋にカミュは向かっていく。
リーシャとサラはその後について武器屋の門をくぐった。

「いらっしゃい。　ここは武器と防具の店だ。　どんな用だい？」

無骨な主人の無骨な言葉にサラは驚いたが、カミュはそんな店主の問いかけも一切無視して陳列している武器や防具に目を向ける。
店内には所狭しと商品が並べてあり、品揃えはアリアハンと大差ないが、一つだけサラの目を引く物があった。

「・・・・・甲羅・・・・・？」

そう、それは、亀がその身を守るために生来身につけている甲羅であった。
何故、亀の甲羅が武器と防具の店にあるのか、それがサラには理解できなかった。

「おう、それは『亀の甲羅』だ。　結構な守備力はあると思うぜ。」

サラのこぼした疑問に即座に武器屋の主人は答えるが、その答えも見たままのものであった。

「なんだ、サラ、それが欲しいのか？　今日からは装備品なんかも必要であれば買うことはできるぞ。　もちろん代金はカミュが払ってくれるしな。」

「えっ！？　そうなんですか！？」

主人の言葉に首を傾げているサラに横からリーシャが声をかけてくるが、その内容にサラは驚き、話題に上がった本人の方に視線を向けた。

「・・・ああ、旅に必要なものであれば揃える。　途中で死なれても面倒が増えるだけだしな。　その亀の甲羅なんかは、お前によく似合ってるんじゃないか・・？」

視線を向けられたカミュは表情を変えず肯定するが、その後に決して年頃の娘には言わない褒め言葉をつなげる。
亀の甲羅が似合うことなどを喜ぶ女性などいるわけがない。
それはサラも同様であり、決して着飾ったドレスを着たいとは思わ

ないが、それでも人並みの女性と同じように美しくありたいと思っている。

「な、なぜですか!?　亀の甲羅が似合うとは、私が鈍臭いということですか!?」

「なんだ、わかっているじゃないか・・」

「なっ!!」

自分が否定を求めるためにぶつけた疑問をあっさりと肯定で返した相手にサラは言葉を詰まらせる。

「・・・冗談はそれぐらいにして、何か買うために来たんだろカミュ?」

二人のやり取りを眺めていたリーシャは、絶句したまま顔を赤くしているサラをなだめながらカミュへと視線を移す。

「・・・オヤジ、その＞革の鎧＜をこの僧侶の法衣の下に着られるように調整してもらえるか?」

「おう、そのぐらいなら少し時間をもらえればできるが・・・調整代金も含めて１５０Ｇになるがいいか？」

壁に掛けられている＞革の鎧＜を指さしながら武器屋の主人に依頼をし、主人の要求通りの額のゴールドを取り出すためにカミュは袋に手を入れた。

「まいど。　じゃあ、寸法を取るから、そっちのお嬢ちゃんはこっちに来てくれるか？」

サラはトントンと進んでいる話についていくことができず、言われるままにカウンターの中に入り、主人に寸法を取られることになった。

リーシャは店の中の品揃えの少なさに飽きたのか、何をする訳でもなくサラの寸法取りを見ている。

「オヤジ、この大陸から出る方法なんかを知っている人間はこの村にいるか？」

寸法を取っている最中に話しかけられ、若干眉を顰めながらも主人はその問いかけにしばらく考えるそぶりを見せ、口を再度開いた。

「う～ん、アンタ達、この大陸から出たいのか？　それならば、そこの泉の近くにある家の爺さんなら話を聞いてくれるかもよ。　まあ、変わり者の爺様だから、手こずるかもしれないがね。」

武器屋の主人の言葉通り、武器屋の向かいには少し大きめな泉があり、その泉の畔に一軒の家が建っている。
サラは寸法を取られながらも、その家の美しい情景に息を漏らした。

「・・そうか、ありがとう。　・・・１５０ゴールドだったな。
ここに置くぞ。」

主人の回答に、カミュは一瞬首を向けただけで、袋からゴールドを取り出しカウンターの上に置いた。

「カミュ。　私が言うのも何なのだが、サラに自衛のための武器を何か持たせたらどうだ？　＞銅の剣＜くらいなら、サラでも扱えるんじゃないか？　さすがにあのナイフ一本じゃ、この先厳しいだろ。」

買い物はこれで終いだとでも言うように、切上げ始めたカミュを引きとめ、共に旅する仲間の武器に関しても気を配れとばかりにリーシャが声をかける。
だが、そんなリーシャを一瞥した後、カミュは呆れたような溜息を

盛大についた。

「・・はぁ・・・・・そいつが持っているナイフは、この店で売っているような唯の＞ブロンズナイフ＜じゃないだろ。　おそらく聖水で清められたナイフだ。　放っている雰囲気が違うだろ？」

「・・・＞聖なるナイフ＜か・・・・？」

＞聖なるナイフ＜
それは元々切れ味の鋭いナイフが、長時間聖水によって清められ、その刀身全体に加護を施したナイフであり、その切れ味、耐久性などは通常のブロンズナイフの比ではない。

「はい！　このナイフは、私がアリアハンを出る前に神父様がくださったものです。」

サラは、腰についている革でできた鞘を愛おしそうに撫でながら、カミュの推測を肯定する答えを発する。
そんな、サラの様子をリーシャは優しい目で見ていた。

「アリアハン屈指の戦士ならば、もっと周りの状況を冷静に分析するんだな。　自分の仲間の戦力を見誤れば、待っているのは死だけだ。」

「なんだと!!　その私にも勝てない奴が偉そうに言うな!!」

溜息交じりに挑発するカミュの言葉に、先程まで本当に優しく細められていたリーシャの目は鋭く吊りあがるように細められる。

そんな二人に苦笑しながらも、サラはカミュの言葉に驚いていた。
カミュが初めて『仲間』という言葉を使ったのである。
昨日の夕食後でさえ、リーシャに対して、村に残って食堂でもやるように言っていたはずなのに。
自分が眠っている間に何があったのかをサラは疑問に思ったが、仲間として認められたことが嬉しく、深く考えないことにした。

「・・よし！　お嬢ちゃん、もういいぜ。　寸法を変える作業に少し時間がかかるが、ここで待つかい？」

ようやく寸法取りから解放され、安堵の溜息をつきながら戻ってくるサラにカミュに噛みついているリーシャの意気もそがれてしまった。

「いや、さっき話に出た老人の家に行ってくる。　その後で取りに来るから仕上げておいてくれ。」

カミュは主人の問いかけに答えると同時に踵を返して店を出ていった。

そんなカミュの様子に主人は肩をすくめて残った二人に視線を送るが、リーシャもサラも苦笑を返すことしかできなかった。

・・・ゴンゴン・・・

・・・ゴンゴン・・・

武器屋を出た三人は、泉の畔の一軒家の玄関に立っていた。
近くで見ると、それなりの規模の家ではあるが、どこか生活臭のない雰囲気がある。
まるで、ここで何十年も通常の生活を送る人がいなかったような。
そんな雰囲気に、ノックをするカミュを見ながら、サラはもしかしたら誰もいないのじゃないだろうかとさえ思っていた。

・・・ガチャ・・・・

サラが失礼なことを考えていると、不意にドアの鍵が開き、ほんの少しドアが開いた。
ドアの隙間から、こちらを射るような視線でのぞき込む老人の眼が見える。

「なんの用じゃ？」

開いたドアにカミュが挨拶をする間も与えず、呟くような疑問がドアの向こう側にいる老人から発せられた。
その声は、お世辞にも友好的とは言えず、むしろ拒絶的といっても過言ではなかった。

「・・突然訪ねて来て申し訳ありません。　このアリアハン大陸からの出方を知りたく、貴方であれば、その方法をご存じだと伺ったもので・・」

ドアを少ししか開けず、更にはこちらが何もしていないにも関わらずに攻撃的な物言いな老人に対してのカミュの接し方にサラは息を飲んだ。
リーシャにしても、アリアハン国王との謁見の際に同席しているので、カミュの外交的な態度に関して思い出し、多少の驚きはあってもそれを表に出すことはなかったが、今までの道のりでのカミュの態度しか知らないサラにとって、今のカミュは別人に見えることだろう。

「・・・お主は・・？」

カミュの丁寧な問いかけに、すぐにでもドアを閉めようとしていた

手を止め、老人は再度カミュに疑問を投げかける。

「申し遅れました。　先日、アリアハンから旅に出ました、カミュと申します。　後ろの二人は旅の同道者です。」

不意に話を振られた二人は驚いたが、紹介された手前、名乗らないのは失礼だと考え、二人は自己紹介をすることにした。

「あ、サ、サラといいます。」

「アリアハン宮廷騎士のリーシャという。」

サラの言葉に視線だけを動かしていた老人であったが、リーシャの言葉にその双眸を大きく見開いた後、鋭くリーシャを睨みつけた。

「アリアハン宮廷騎士などと話すことは何もない！」

突然の拒絶の発言に面食らった三人は、同時に力一杯閉まるドアをただ見送ることしかできなかった。

「どういうことだ！？」

しばらく呆然としていた二人であったが、リーシャが覚醒と共にしまったドアを叩きながら先程の老人の言葉に対しての疑問をぶつけているのを見て時間が動き始めた。

「・・・やめろ。　何をしても、今はドアが開くことはないさ。　・・・はぁ・・・やはり、アンタ方を連れてくることは失敗だったかもしれないな。」

「わ、私が悪いとでも言うのか！？」

カミュの言葉にドアを叩く手を止め、その手を今度はカミュにぶつけるかのように振り向くリーシャは何故こうなったのかを理解できなかった。

「・・・おそらく、アンタ個人じゃないとは思うが、アンタの名乗りが悪かったのは間違いないだろうな。　何故だかは解らないが、あの老人はアリアハンを嫌っている。　いや、嫌っているのではなく、あの目は憎んでいるレベルのものだ。」

家のドアから離れ、武器屋の方に足を向けながら、後ろに続く二人にカミュは考えていることを語りかけた。
カミュは、幼いころから、大人に交じり魔物討伐をしてきた事実がある。
その中で大人たちが表すありとあらゆる感情を目の当たりにしてき

た。
それは、魔物に殺された親族に対する哀しみや憐み、その魔物に対しての憎悪。
そして、魔物に対してだけではなく、同じ人間に対する、羨望や侮蔑。
故に、そんな人の感情がこもる目はカミュにとって相手がどんな感情を持つのかを確認することのできる物の一つであった。

「何故だ!?」

「・・・いや、だから、何故だかは解らないと言っているだろう。アリアハン国自体への恨みか、宮廷騎士に対しての恨みなのかすらも解らない。　つまり、今は何も仕様がないということだ。」

カミュの言葉に頭では納得しながらも、心では納得が出来ないリーシャはカミュの後ろでうんうん唸っているが、サラはそんなリーシャを一先ず放置し、カミュに先程のやり取りについて話をしようとカミュの隣に付く。

「カミュ様。　あの方がアリアハンに対して特別な感情を持っていることは解りましたが、これからどうするおつもりですか？　アリアハン大陸から出ないことにはどうしようもありませんし・・・」

「・・・さあな。　まぁ、出方を知っているのは、あの老人だけではないだろう。　他を当たるさ。」

サラの問いかけに、それほど重要でもないとでもいう様に答えを返し、カミュは武器屋の門をくぐっていった。
サラは未だブツブツ言っているリーシャを促し、そんなカミュの後に続き武器屋に入ることにした。

「おう。　早かったな。　調整はもう少しでできるから、その辺でちょっと待っていてくれ。　それはそうと、うまく話は聞けたかい？」

武器屋に入ってくるカミュの顔を見ると、手元で＞革の鎧＜をいじっていた手を止め、主人が話しかけてきた。

「いや、何故かアリアハンに相当な思いがあるらしく、話すらできなかった。」

「ん？　ああ、アンタ達の中にアリアハンの国営に関わっている人間がいたのか？　それはしくじったな・・・前もって話しておけばよかったか・・」

カミュの返事に、明らかに失敗したとでもいうように顔を顰め、手を額に乗せる主人にはその理由がわかっている様子であった。

「いや、国営に関われるほど頭の良い者じゃないが、宮廷騎士なんだ。　それよ・・・」

「　なんだと!!　」

それまでサラの横で何か考え込んでいたリーシャは、カミュの発言の中に自分を侮辱する単語があることに気が付き反応したが、それでは話が前に進まないとサラがなだめる役を買って出た。

「・・ふぅ・・失礼した。　それで、オヤジはあの老人のアリアハン嫌いの理由を知っているのか?」

サラがリーシャをなだめている様子を横目で見たカミュは、話を続けるため、再度主人と視線を合わせる。

「・・・ああ、まあ原因に関しては、実際のところはわからんが、俺の親父が言っていた話だと、あの爺さんの兄貴が関わっているらしい。　詳しい内容は知らん。」

「・・・お兄さん・・ですか?」

「・・・・」

主人に言葉にカミュの後ろにいるサラや、先程まで怒り心頭だったリーシャも聞く態勢に変わっていく。　そんな二人を見て、一拍置いて再び主人が口を開いた。

「なんでも、あの爺さんと兄貴はこのレーベで暮らしていたらしいんだが、兄貴の方はレーベでは暮らせなくなったらしい。　その辺にアリアハンとの関係があるんじゃないか？」

「その兄貴の方は、もう死んだのか？」

武器屋の主人が実際会ったことがないということは、主人の見た目の年齢からいっても４０年近く前の話になる。
とすれば、カミュが問いかけた内容のようにすでに故人である可能性が高い。

「・・・そうだな。　今はどうかわからないが、うちの親父の話だと、なんでもレーベを出た後『ナジミの塔』に住んでいたって話だったがな。　まあ、うちの親父も死んじまったから、その兄貴も生きてまだそこにいるという証拠はないぞ。」

「いや、それだけ解れば十分だ。　ありがとう。　これ少ないが、＞革の鎧＜の調整を急いでくれた分ということで受け取ってくれ。」

自信なさげに話す主人に対し、カミュは礼を言って、そのカウンターに１０ゴールドを置いた。

「あ？　いや、何か悪いな。　ありがとうよ。　一応、調整は出来上がったよ。　お嬢ちゃん、ちょっとあっちで着てみてくれ。　実際着てみて、更に調整するところはするから。」

実際主人は、カミュに声をかけるために一度止めた手を、その後話しながらも再び動かしていた。
サラは主人から＞革の鎧＜を受け取ると、奥にある試着室のような場所に移動し、法衣の中に着込んだ後でてきた。

「うん。　お嬢ちゃん、どっか苦しいところとかあるかい？　見た感じはちょうどいいと思うけれども、実際魔物と出くわせば動かなきゃいけないから、動きずらそうなところは言ってくれよ。」

出てきたサラの姿を一通り見た後に主人はサラの具合を聞いてきた。
サラは主人に言われた通りに、何度か身体を動かし、動きづらいところも息苦しいところもないことを実感し、それを主人に告げた。

「そうか、じゃあそれでいいな。　そういや、お嬢ちゃんの武器は

＞聖なるナイフ＜なんだろ？　あれは滅多な事じゃ刃こぼれなんてしないが、血糊なんかはやはり付いてしまうからな。　さっき貰った金額のこともある。　アンタ方の剣の手入れが必要な時は寄ってくれ。　三人とも一回だけただで手入れしてやるよ。」

「・・・・ああ、ありがとう」

何とも豪勢そうに言う武器屋の主人であるが、全員一回ずつという制限をつけている辺り、やはり商売人なのであろう。
そんな武器屋の主人に礼を言い、三人は武器屋を後にした。

「カミュ様、ひとまず『ナジミの塔』へ向かうのですか？」

「ああ、ただ、正直『ナジミの塔』への行き方も解らない。　その情報もどこかで得られるといいんだが。」

「『ナジミの塔』であれば、地下道を通っていけば行けるぞ。」

サラの行先に関する質問に、更なる課題が出てきたと悩むカミュに後ろにいた意外な人物から答えが返ってきた。

「「・・・・・」」

「〜〜〜!!　なんだ、お前たちのその反応は！　これでも私は宮廷騎士だぞ。　アリアハン国が管理している塔の行き方ぐらい知っている!」

答えの出所に対し、言葉を失い、疑惑の目を向けるカミュと、ただ単純に驚きを表すサラにリーシャは癇癪を起した。

「・・・すまない・・・」
「・・申し訳ありません・・」

癇癪を起すリーシャに、二人は今のやり取りは完全に自分たちに非があることを認め素直に頭を下げる。　その様子に、怒りを納めてリーシャは話をつなげた。

「もちろん、アリアハン城内から続く地下道への入口には鍵がかかっており、見張りもいることから無理だが、確かレーベの村の近くの森の中にもう一つ入口があったはずだ。」

「・・・確定した情報ではないのか・・・？」

続けたリーシャの言葉に、明らかな落胆を態度で表すカミュに隣のサラは胸をハラハラさせていた。

「まぁ、今のところそれしかないのだから、行ってみるしかないだろ。」

「・・・そうだな・・」

「そうですね！」

カミュの発言に若干気を悪くしたリーシャであるが、今の自分たちの状況を再確認させることにし、行動を促す。
それに対し、仕方ないといった様子のカミュと、一段落と胸を撫で下ろすサラといった対照的な二人の反応ではあるが、今後の方針が決定された。

「あっ、すぐに出ますか？　もし少し時間があれば、教会による時間を頂きたいんですが？」

方針が決定され、いざ村の外へと歩き始めたパーティであったが、歩き出してすぐにサラのその場の雰囲気にそぐわない一言が割って

入ってきた。
サラにしてみれば、方針も決まり、行動するのなら教会で祈りをささげたいというささやかな願いであったのであろうが、その願いを聞くほどの時間はなかった。

「いや、すぐに出る。　入口の場所が確定していれば時間も読めるが、そこで探すところから始めるのであれば、一時でも惜しい。悪いが、教会に寄りたいのであれば、もう少し早く起きて行ってくれ。」

「・・・・・・は、はい・・・」

サラにとっても、カミュの言うことは理解できるものであった。ましてや、寝坊した挙句、置いてかれたと勘違いし、とんでもない醜態をさらした身としては、そんなカミュに反抗することなどできなかった。

「　サラ、大丈夫だ。　ルビス様もサラの頑張りは認めてくださるさ。　これから朝の祈りができるように早起きすればいい。　今日は夜の祈りをいつもの倍すればいいさ。」

「・・・・はい・・・」

幼子を諭すように語りかけてくるリーシャの言葉が、益々サラの羞

恥心を煽っていることにリーシャは気がつかない。
恥ずかしそうに顔を俯かせるサラを後悔していると勘違いしている
リーシャはサラの手を取りながらカミュの後を追い、レーベの村の
出口へと向かった。

レーベの村？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

書いているうちに、色々と詰め込みたくなり、いつの間にか最長の話になってしまいました。

う～ん・・・最近、勇者一行の動きに私の指がついていくのがやっとです。

彼ら一人一人のキャラが死んでしまわないように、色々とエピソードなどを交えながら旅を進めていきたいと思っていますので、これからもお願致します。

リーシャに関してはこの2話でイメージが変わってしまった方もいるかと思いますが、元来こんなキャラではありません。　この先からリーシャのカッコイイ姿はたくさん出す予定です。

ナジミの塔？（前書き）

今年最後の投稿になると思います。
皆様のご感想や、アクセス数に励まされながら書いてこれました。
ありがとうございました。

ナジミの塔？

一行はレーベの村を出て、真っ直ぐ南に進む。
既に日は高く昇り、強い日差しがアリアハンの大地を照らしていた。

「森の中とは、どの辺りなのですか？」

いつものように先頭を行くカミュとの距離を少し空け、サラは隣を歩くリーシャに問いかける。

「ああ、レーベの村から真っ直ぐ南に向かった森の中に小さな小屋があるらしい。その横に地下へと続く通路があるはずだ。」

「その小屋は森のどこにあるのですか？」

「真っ直ぐ南にだ。」

「・・・・・・」

『ナジミの塔』への通路の入口の場所を聞いたはずが、返ってきたのは目印についてで、しかもその目印の場所は何とも曖昧なものでしかないことにサラは言葉を失った。

カミュはこの曖昧な情報だけでどうやって探すつもりなのだろうか。
サラは今日の旅に一抹の不安を覚えながら、前を行くカミュの背中を見つめた。

「他に『ナジミの塔』への行き方はないのですか？」

「・・・さっき言った、アリアハン城内にある通路があるが・・・ん？　そう言えば、もう一つどこかにあったような気が・・・・う～ん、思い出せないな・・」

期待をせずに聞いてみると、何やら重要なことを呟いているリーシャの言葉に耳を傾けるが、それはすぐに落胆に変わった。

「まあ、気にしても仕方がない。　今は地下通路への道を探そう。」

それを探すのが難しいのでは？　という言葉を何とか飲み干し、サラは再び前を行くカミュに目を向けると、当の勇者はこちらに視線を向け立ち止まっていた。
何かあったのかと慌てて駆け寄るリーシャの後ろをサラも小走りについて行った。

「見つけたか？」

「・・・いや、まだ森にも入っていないだろ・・・アンタの言葉を信じるなら森の中にあるんじゃないのか？」

カミュに近づいてすぐに声を掛けるリーシャに、ため息をつきながら返すカミュの言葉はサラの顔に笑顔を出させるものであった。先程も森の中の小屋の近くにあるという話をしたばかりだというのに、まだ日差しを強く受けるこの平原で見つかるわけがない。

「そ、そうだな。　・・・森の中に小屋があるはずだ。　その近くに地下へ続く通路がある。」

「・・・小屋・・・」

「ああ、本当に小さな小屋らしいんだが・・・・」

「・・・・・」

カミュはリーシャの『小屋』という単語を聞くと、何かを思い出すように目を瞑り黙り込んでしまった。
突然黙り込んでしまったカミュにリーシャは疑問を覚え、サラは不安を覚えた。

「・・・・その小屋らしきものなら、憶えがある。」

「本当か！？」
「本当ですか！？」

しばらくの瞑想の後に突然目と共に開いた口から発せられたカミュの言葉は二人を驚かせるのに十分なものであり、更にそれは先程まで感じていたサラの不安を払拭させるものであった。

「・・ああ。　以前、森の中での休憩時に使った宿営地にそんな小屋があった。　まあ、あれは小屋というより、牢屋に近かったような感があるが・・・・たしか、古い鍵がかかっていて、中には入れなかったが・・・」

「おそらくそれだな・・・」

カミュの言葉に対して、情報源であるリーシャはしきりに頷いていた。
サラはそんなリーシャの様子に苦笑しながらも、行き先が確定し、その行き方についても先頭を歩くカミュが知っていることに安堵した。

森に入ったことで、平原を歩く時と違い、カミュと他の二人の距離は空くことなく、密着した状態での移動となる。
ここアリアハンでも例外でなく、平原に出てくる魔物よりも、森の中で生活する魔物の方が手強いのだ。　故にただの旅団や商団は街道から外れて森へ入ることは余程のことがない限りあり得ない。
ただ、それでも雨を嫌い森の入口で野営をしていて魔物に襲われたという話が減らないことから、人々の意識がそれほど強くないのかもしれないが。

現に、今一行の前に姿を現した魔物も、ここアリアハンでは中堅クラスの魔物と言ってもいいだろう。

おおありくい
この魔物もアリアハンに古くから住む魔物の一つであり、その体躯は一角うさぎよりも一回り大きい。
それが三匹に一角うさぎが二羽、今カミュ達の前に立ちふさがっていた。

腰の鞘から剣を抜き放ったリーシャは、そのまま一角うさぎに突っ込み、瞬く間に一羽を切り倒す。　一瞬の攻防に驚いた残りの一羽もその刺突によって絶命を迎えた。
二羽の一角うさぎを葬ったリーシャが後方に視線を向けると、カミュも二匹目のおおありくいをその剣で突き刺しているところであった。

その様子を見たリーシャに多少の安堵から来る油断があったのかもしれない。
残った一匹のおおありくいは攻撃を加えていたカミュでも、反対側にいるリーシャでもなく、二人の動きを呆気にとられて眺めていた人物に向かって行った。

おおありくいの動きに我に返ったサラは、慌てて＞聖なるナイフ＜を構えるが、おおありくいの動作はそれよりも早かった。
その口の中にしまわれていた、長い舌をサラ目掛けて飛ばし、ナイフを持つサラの右手にからめられた。
突然自分の手に巻きついてきた舌に驚き、その臭いまで漂ってきそうな感触にサラは硬直してしまった。　もともとの魔物嫌い故に、汚されたという想いまで持っていた。

「　サラ！！　」

追い詰められた魔物の本能を知っているリーシャは、自分の迂闊さを悔やんだ。
大抵の魔物は、人間を殺すことも自分が逃げることも敵わないとなると、その人間の集団内で瀕死の者や弱っている者、もしくは元々力の弱い者を狙い、そこから突破しようとする。

リーシャの叫びもサラの硬直を解くことはできず、その魔物特有の強い力に引かれて、サラの右手首から上の色が変わり始め、ついには＞聖なるナイフ＜を持っていることができなくなり、その手からこぼれ落ちた。

魔物へ対抗する武器をも失い、死すらも覚悟したサラの目にこちら

に飛びかかってくる魔物とは別の何かが移る。
火球であった。

カミュが二匹目のおおありくいを刺し殺し、三匹目に剣を走らせようとすると、すでにそこに最後の一匹はいなかった。
リーシャによる、一角うさぎの瞬殺と、自分たちに飛び込んでくるカミュを見て、力量の違いと命の危険を感じた一匹のおおありくいはこの場からの離脱のみを考えた。

離脱をするのなら、三方向に分かれた人間たちの間を縫うか、誰かを殺して、その方角を無人にするしかない。
狙いをつけたのは、一人何も行動を起こさず佇んでいる子供だった。
魔物の意図に気がついたのか、僧侶姿の少女はその手にナイフを構えるが、魔物の動きの方が早かった。

カミュは心底うんざりしていた。
自分の力量を図ることもできずに魔王討伐に出ようとすること自体が死を意味する。
しかも、そんな人間と共に行動した場合、その人間が一人死ぬのなら問題はないが、魔物が強くなっていくにつれその他の同行者にも危害が加わることになる可能性が強い。

女戦士の方は、その剣の腕は『アリアハン随一』といわれるだけの

ことはあった。
しかも、鍛練も怠らず、その腕はこれから先も伸びていくのは間違いない。

この先の旅で、アリアハン大陸から出れば、今まで見たこともない魔物が現れ、いずれカミュ一人での限界にぶつかることだろう。
その時は、そこで朽ち果て、魔物の食料となる。
それは、それでいい。　カミュはそう思っていた。

リーシャに関して言えば、カミュのその限界を幾分か延ばしてくれるのかもしれないが、この教会に属する少女に関しては逆だ。

「サラ！！」

リーシャの叫びと共に、サラの手からナイフが滑り落ち、その瞬間を狙ったおおありくいがサラ目掛けて飛びかかった。

「メラ」

一瞬、『見捨てるか？』という想いが胸をかすめるが、自然とカミュの左手は前に出され、詠唱が行われた。　カミュの左人差し指から出現した火球は飛び出したおおありくいに寸分の狂いもなく命中した。

サラは、おおありくいの爪が自分の左手を掠めた途端、目の前の魔物が炎に包まれていくのを呆然と見つめていた。
魔物の舌が絡みついていた右手は、魔物の飛び出しと同時に外された。
咄嗟に庇うように挙げた左手からは血が垂れている。

「サラ!!　大丈夫か!?」

血相を変えながら、自分に駆け寄ってくるリーシャを見て、やっとサラは自分の状況を確認する。

「・・・・は、はい・・」

「そ、そうか・・・左手を見せてみろ!　おい、カミュ。　薬草をくれ!」

力なく返事を返すサラを気遣い、リーシャは強く質問せず、サラの怪我の処置に入ろうとする。

「あっ、このくらい、大丈夫です。」

「何を言っているんだ！　どんなに小さな傷だろうと、魔物につけられた傷を甘く見ちゃいけない。　おおありくいの爪に毒はないだろうが、水で洗った後に薬草をつけておいた方がいい。」

リーシャの言っていることはもっともだ。
サラはこんなことでもリーシャに心配をかけてしまっていることに心苦しさを覚える。
自分は本当に役立たずだ。　役に立たないどころか、足を引っ張っている。

「　ホイミ　」

サラは右手を左手の患部に当て詠唱を行う。
詠唱と共に、サラの左手の患部は癒し光に包まれた。
おおありくいの爪によってできた裂傷が光に包まれながら徐々にふさがっていく。

「・・・へぇ・・・」

サラと出会って3日目にして初めて見たサラの魔法。
教会に属する僧侶として１０年以上教えを受けてきたのだ、サラが

回復呪文である『ホイミ』を使えることくらいはわかってはいたが、実際に使用しているところを見て、改めて感心した。

そんなリーシャの眼差しを受け、自分の不甲斐なさも合わせ、更に恥ずかしくなるサラであったが、傷に当てていた右手を離す。
先程まで、おおありくいの爪痕から血が滲みでていたサラの左腕の傷は、その傷跡も残らないぐらいに綺麗に消えていた。

「流石はアリアハン教会の僧侶というべきか。」

サラの左腕の傷が消えたことを確認したリーシャは、その腕を手に取りサラに褒め言葉をかけるが、サラは困ったような苦笑を浮かべ俯いた。
そして、思い出したように顔を上げたサラは、先程自分の危機を救ってくれた少年を目で探し、その姿をとらえると以前と同じように、被っていた帽子が落ちてしまう程の勢いで頭を下げた。

「カミュ様、先程はありがとうございました。」

「・・・・・・・」

カミュからの返答はない。
『役立たず！』と罵られるのではないかと思い、恐る恐る顔を上げるサラではあったが、そこで見た光景は罵られた方がまだ良かったと思えるほど冷たいものだった。

カミュは何も言わず、まるで何か言うほどの価値もない者を見るような目で自分を見下ろしていたのだ。
サラは心底震えた。
この勇者にとって、自分の存在は何の価値もないものなのかもしれない。

「・・・俺が仕留め損なった魔物を殺しただけだ。　礼を言われることじゃない。」

「そ、そうだぞ、カミュ。　仕留めるなら最後まで気を抜くな！」

「リ、リーシャさん！」

カミュにとっては、三匹いるおおありくいを全て仕留めきれなかったことに納得はいっていない。　自分はまだ弱い。
リーシャに剣の闘いで勝てないことは勿論、魔物に対しても、この先強い魔物に相対すれば苦戦することはこのままでは明白である。
先程、身捨てることをせずに自然に身体が動いたのは、そういうことがあるからだと結論付け、サラの感謝を否定した。

リーシャは、カミュがサラを救ったことに驚いていた。
今まで、どんな状況であっても、自分に向かってくる敵以外には全く関心を示さなかった男が、仕留め損ねたためとはいえ、サラの窮地を救うとは思わなかったのだ。
確かに、今日の朝、カミュとは自分達を仲間として扱うことを約束させたが、昨日まで、いや正確には今日の朝まで自分達を仲間と思

うどころか邪魔な存在として見ていた節のあるカミュがここまで変わるというのはリーシャにとって予想外にも程があった。
故の困惑した発言なのである。

サラは先程自分がカミュの眼差しに感じた印象とは正反対の言葉に呆気にとられた。
実際、救う価値もないと思っているのかもしれないが、もしかすると自分が取り逃がした責任を感じているのかもしれない。
やはり、この勇者は自分が憧れていた通りの人なのかもしれない。
若干、自分の都合のいいように考えていこうとする、サラの強引な楽観主義が発揮されていた。

「・・・余計な時間を使わされた。　このままでは地下道への入口を見つける頃には日が沈むな・・・」

それぞれの思いで、各々を見ていた一行であったが、カミュが上空の森の木々の隙間から見える太陽の傾き加減を見て今後の予定が狂い始めていることを洩らしたことによって現実に戻された。

「・・・そうだな・・・まあ、地下道を進むのだから昼でも夜でもあまり変わりはないがな。」

「・・・はぁ・・・アンタは地下道や塔のような＞聖水＜の効力がない場所で眠るつもりなのか？　ああ、眠るつもりがないんだな。
ならば、アンタに見張りを任せてゆっくり眠らせてもらうことにするよ。」

「・・ぐっ・・」

少し緊迫していた空気をリーシャなりに和ませようと楽観的な軽口を叩いたつもりであったが、カミュの容赦のない現実的な言葉で言葉を詰まらせた。

「・・・まぁ、アンタに任せておいて、途中で眠りこけられて全員魔物の腹の中というのは勘弁してほしいから却下するけどな・・・」

「・・・カミュ様・・・」

「～～～～～！！」

更に続けられたカミュの厭味に、サラはリーシャを気遣うように声をかけるが、リーシャは事実なだけに反論できず、唇を噛むだけであった。

「じ、時間も勿体ないですので、先に進みましょう。」

「・・・・・そうだな。」

サラの自分のことを棚に上げたセリフに、若干疲れた様子のリーシャは頷くしかなかった。
カミュ、サラ、リーシャという順序で三人は警戒しながらも森の奥へと進んで行った。

カミュの記憶は正確であった。
まるで、昨日ここに来たかのように迷うことなく道を選択し進んでいく。
カミュが討伐隊に同道していたという話は、リーシャは聞いたことがない。
理由はわからないが、カミュはリーシャが討伐隊に組み込まれた頃にもう参加をしていなかったのかもしれない。
そうすれば、カミュが討伐隊の宿営に参加していたのは4年以上前になる。
そんな昔のことを明確に憶えていて、更にはその道すらも記憶にあることにリーシャは驚いていた。

途中で、一角うさぎや大ガラス、おおありくいと魔物に遭遇しては戦闘をしていたため、日も落ち始め、少し開けた場所に出た頃には、森の中は暗闇による支配が始まっていた。

「・・・ここが俺の記憶にある場所だ。　小屋はあれじゃないのか？」

開けた場所には森に入る前にカミュが語った、小屋というよりも牢屋に近いような建物が建っていた。

「・・・森の中にこんな場所があるなんて・・・」

サラはその光景に驚いていた。
2日前に野営をした森の中で、カミュとリーシャが対峙していた場所も幻想的であったが、あそこの上空は木々の枝や葉に覆われていて、その隙間から月光や日光が差し込む程度であったが、この場所は空を隠す枝や葉は一切なく、見上げれば一面の空が広がっていた。

「　まずは、地下道の入口探しだ。　今夜はここで野営をする。幸い、なぜかここに魔物の気配はないみたいだからな。　聖水の節約にもなるだろう。」

カミュは、口を開いたまま空を見上げるサラを放って、小屋の方へ歩いて行った。
リーシャはサラの様子に苦笑しながらも、そんな背中を叩くと、カミュの後に続いた。

しばらく、三人で手分けするように入口を探していたが、徐々に日が落ち足元を照らすのは月明かりだけになってしまったため、「一旦休憩して、火を熾そう。」というリーシャの提案を受け入れることになった。

リーシャとカミュが火熾しを行っている間、手持無沙汰になってしまったサラは熾した火の為の薪や木の枝を拾っていた。
暗い足元を足を動かしながら探り、拾うという行為を繰り返していると、足に当たって飛んで行った小石が金属音を立てて転がったことにサラは微妙な違和感を覚えた。

サラは拾った枝を抱えながら、小石が飛んで行った方向へ歩きしゃがみ込んだ。
落ち葉と石や木の枝が散乱している地面は暗さでわかりにくいが、通常の地面とは違う光沢を持っていた。

「リ、リーシャさん！　カミュ様！」

突然の叫び声に、リーシャはサラの身を案じ、カミュは「またか・・」というような雰囲気で振り返った。
魔物にサラが襲われたのかと思ったリーシャはサラの周りに魔物がいないことに安堵したが、しゃがみ込んでいることに再び不安を感じ、サラの近くに歩み寄った。

「どうした、サラ！　何かあったのか！？　毒虫にでも刺されたのか！？」

自分に近づき、開口一番に心配をしてくれるリーシャに嬉しさを感じながらも、サラは自分の足元にある土でできた地面ではないものを指さす。

「これ、金属の蓋じゃないですか？　もし、地下通路の入口を塞ぐ蓋だとしたら。」

「なに！！」

リーシャはサラの指さす地面をみる。
確かにサラの言うように、下の地面は土でできたものではなかった。

サラとリーシャが足元の落ち葉などを手でどかすと、ほぼ正方形の金属による蓋が姿を現した。　リーシャはサラにお手柄だという言葉と共に微笑み、サラはそんなリーシャの微笑みに恥ずかしそうにはにかむ。
そんな二人に火を熾し終えたカミュが近付き、二人が露わにした金属の蓋を見下ろしていた。

少し重量のある蓋を、「一人で大丈夫だ」と言い張るリーシャをサラが宥め、カミュとリーシャでずらしていく。
ずらされた蓋の隙間から、地下へと続いている証拠となる風が吹いてきた。

完全に日も落ちたこともあり、穴の奥は何も見えないが、入口の渕に掛けられている梯子は奥まで続いていることは推測できる。

「よし！　これで明日は朝早くから地下道へ入ることができるな。サラお手柄だ！」

確認が終わると、今度はリーシャ一人で蓋を戻し、サラに褒め言葉をかける。
カミュも「そうだな」と言葉を発し、火の下に戻っていった。

火の下に戻った三人は、レーベの村で補充した干し肉などを口に入れ、リーシャとカミュとで一応の見張りを交代で行うことを決めて就寝した。

翌朝、サラは耳元で響く金属のぶつかる音で目が覚めた。
目もとを擦り、徐々に覚醒していく目でサラが見たものは、以前見たようなカミュとリーシャの剣の打ち合いであった。

流れるような動きではあるが、素人のサラにはお互いがお互いを殺す意図で打ち合っているのじゃないかと思うぐらいの緊迫感があった。

リーシャの振るう剣の一撃はまともに身体に受ければ、致命傷どころか即死レベルの剣であるし、対するカミュの剣もまた同じであった。

『また喧嘩か？』とも思ったが、真剣でありながら、お互いの身体に傷はないことからもそれは鍛練なのだろうと納得し、昨日自分を襲った焦燥感が再び湧き出てきた。

（自分はこのままでは置いて行かれる。）

それは、二人の鍛練を見ている時間が経過すれば経過するほど強くなり、サラにある決意をさせることに至る。

「・・・ふぅ・・ここまでだな。　まあ、すぐに超えさせるつもりは私もないからな。」

カミュの剣を弾き、腹部に剣をリーシャが突きつけたところで今日の勝負は決着がついた。
魔法を使っていないとはいえ、２日続けてリーシャに敗れたことをカミュは表情に出さないまでも悔しく思っていた。
彼もまた、自分の力量を低く見ている。
正直、一国の騎士の中でも随一と謳われた程の実力者と渡り合って

いるのだから、それはそれで認められることではあるが、カミュはそれに納得している様子はない。

「・・・・・」

いつも無表情にしているカミュが憮然とした表情に変わり、無言で剣を鞘に押し込めた。
カミュはリーシャに剣で敗れるといつも同じような表情になる。
そんなカミュの子供らしい仕草に少し頬を緩めながら、リーシャも剣を腰に戻して火の下に戻っていく。

「おっ、サラ、今日は珍しく早起きだな。」

火の近くに戻ると、先程まで夢の中であったサラが起きていたことに、リーシャは驚きを正直に出したが、その言葉はサラにとっては痛いものであった。

「・・・いつも、いつも、すみません・・・・」

リーシャは自分の軽口に、明らかに意気消沈といった態度を取るサラに慌てるが、カミュはそのやり取りを無視するように火に枝をくべていく。

「い、いや、そう言う訳ではないんだぞ、サラ。　ただ、まだ日も姿を現したばかりだったからな。」

「・・・はい・・」

リーシャの弁解に更に下を向いてしまうサラではあったが、何か意を決したように顔を上げ、リーシャを睨むように見つめた。
そんなサラの瞳にたじろぎながらも、何かサラが真剣に話そうとしていることを感じたリーシャは先程までの表情を一変させ、真面目な顔でサラと向き合った。

「リ、リーシャさん！」

「どうした、サラ？」

自分の気持ちが伝わっていることを理解したサラは、逆にそれを言い出しにくくなってしまい、真剣にこちらを見ているリーシャから視線を外し、モゴモゴと口籠ってしまった。

「サラ、何か言いたいことがあるんだろ？　焦らなくてもいい。私は、今のサラのように何かを決心したような真剣な想いを笑ったりはしない。」

「は、はい！　あ、あの、わ、わたしにも・・・剣を教えてください！」

「・・・・・・わかった。」

サラは、笑われると思っていた。
自分の願いを爆笑されることはないにしても、少なくともカミュには鼻で笑われるのではという思いがあった。
だが、リーシャは勿論、その後ろで聞いていたはずのカミュにすら、そんなサラの考えは良い意味で裏切られる形になった。
それどころか、呆気に取られたりすることもなく、少し考えただけで、その願いを受け入れてくれたのだ。　呆気にとられたのはサラだけであった。

「なんだ、サラ。　自分が言い出したことに何を呆けている？　今日はもう準備をして出なければいけないから、明日からだな。」

「あっ、は、はい！」

リーシャは先程とは違い、少し緩めた表情で、サラに稽古開始日を告げる。
サラは、この後自分に降りかかる苦難を知らずにそんなリーシャの優しさに感謝していた。
実際、剣を交えていたカミュはサラに少なからず同情していたのか

もしれない。

その後、支度をし終えた三人は、昨日見つけた地下道への入口に入るため、金属の蓋をどかす。　その中は、昨夜程ではないが奥は見えていない。　奥へと続く梯子の姿が昨日より少し見えるようになった程度であった。

「私が先に行こう。　次にサラ、最後にカミュが続いてくれ。」

未知の閉鎖空間に入るのは慎重さが重要である。
その点でカミュは反論をしようとするが、一応はこの地下道はアリアハン国が管理しているものであり、宮廷騎士として誰かを先に入れるということはリーシャの気持ち的に穏やかではないのかもしれないと考え、面倒事を起こすことをためらい、リーシャの提案に首を縦に振って肯定した。

レーベの村で購入しておいた＞たいまつ＜に火を灯した物を片手にリーシャは中に入っていく。　徐々に小さくなっていく＞たいまつ＜の火を見ながら、サラはその深さを知り、同時にリーシャの身を案じた。

「ふむ。とりあえずは大丈夫そうだな。　お～い、大丈夫だ。　降りてきてもいいぞ！」

しばらく火の行方を見守っていたが、火が小さくなることがなくなると、下からリーシャの声が聞こえてきた。

「おい。　アンタの番だ。　下を見ないようにゆっくり下りていけ。
ゆっくりでいい。　決して焦るな。」

リーシャの声を聞いたカミュは、サラに降りるよう促すが、その口調は今までのようなものではなく、少し気遣っているようなものであったことにサラは驚きながらも頷く。

カミュに言われたように足元は確認しながらも、下を覗き込むことはせず、そしてゆっくりと降りていった。　その梯子は、金属でできていたが、長年放置されていたのか、苔のような物がびっしりとつき、金属の部分はサビで赤茶けており、掴んだ手にもその色は付着していた。　苔によるすべりに気を付けながらも本当にゆっくりと降りているサラに、下にいるリーシャも、上で待つカミュも一言も文句を言わず、黙って見ていた。

そして、サラの足が硬い石でできた地下通路の床についた。
『ほぅ』と安堵の溜息を漏らし、サラはにこにこと優しい微笑みを漏らしているリーシャと笑いあった。

最後のカミュが金属の蓋を閉めながら降りてきたため、地下道内は＞たいまつ＜の灯りだけとなり、薄暗いものとなる。
カミュがその手に＞たいまつ＜を持ち、難なく降りてくるのを二人は見守っていた。

地下道に全員が降り立ち、リーシャとカミュの持つ＞たいまつ＜で周りを照らす。
洞窟というようなものを想像していたサラはその地下道にかなり人

の手が加えられていることに驚いた。　床は石畳が敷かれ、壁にもところどころに明かりを灯す台が設置さえている。　カミュとリーシャは近くの燈台に＞たいまつ＜の火を移していく。

灯された明りによって、地下道の一部が明るくなり、三人はいつものようにカミュ、サラ、リーシャという縦の列を作りながら慎重に歩を進めていく。

「息苦しくはないな。　サラ、足元に気をつけろよ。　カミュ、もう少しゆっくり進め！」

前を行くサラに気遣いながら、リーシャはカミュへと隊列を維持するように声をかける。
カミュはリーシャの声を聞き、少し歩を緩める。
あまり時間を掛けたくないのは当然だが、周辺の燈台に火を灯しながら、前を進むカミュと後方の二人の距離が空くことはできるだけ避けたい。

しばらく一本道を進むと、別れ道が現れた。
真っ直ぐ進む道と、左へ曲がる道だ。

「ここは、真っ直ぐだろ。」

「・・・リーシャさんらしいですね。」

『何事も真っ直ぐに』という言葉が妙にイメージと合うリーシャにサラは素直に感想を述べて微笑んだ。
カミュの了承があり、一行は真っ直ぐ進むことになったが、すぐに少し開けた広間、つまり行き止まりに行きつく。

「「「・・・・・・」」」

カミュ、サラの二人がある人物を見、その人物リーシャも無言で俯くといった何とも言えない空気が地下道内に流れた。
一息溜息をついたカミュは持っていた＞たいまつ＜を掲げ、周囲を照らす。
左側を照らしたが、壁が広がっており、そして右側を照らした瞬間、ある一点に緑色の物体が折り重なるように固まっているのが映り、三人は身構える。
その物体は、急な明かりを突き付けられたことに驚き散会していく。

「・・・あれは・・・・」

「・・・バブルスライムだな。　ちっ、結構な数か。」

サラは初めて見た生物に驚きを表すが、カミュが呟くように返答した。
カミュの言うとおり、バブルスライムの数は４匹。
通常のスライムよりもその体躯はつぶれたように見え、スライムが青色をしているのに対し、バブルスライムは淡い緑色の身体を揺ら

している。

「サラ、気をつけろ。　バブルスライムは毒を持っている。　それほど強い毒ではないが、傷口から入る。」

リーシャの忠告に、サラは神妙に頷くが、気をつけ方がよくわかっていなかった。
リーシャの忠告と同時に、カミュは背から剣を抜き、＞たいまつ＜をサラに手渡すと、バブルスライムに向かって飛び出した。　カミュの飛び出しを確認したリーシャもサラを庇うように立ちながら腰の剣を抜き放つ。

バブルスライムはその身に毒を有してはいるが、基本はスライムと大差はない。
その攻撃に気を付けていれば、たとえ傷を受けたとしても毒に侵されることも5分5分といったところだ。

突然の出来事に動揺していたバブルスライムはカミュとリーシャに苦もなく切り捨てられていく。　＞たいまつ＜を持たないカミュは、動転して動き出そうとする一匹目を真っ二つに切り捨て、それを見て動けない二匹目を上から突き刺した。
命の灯を失った魔物達はその形状を保つことができずに地面に溶けていく。

リーシャも一匹のバブルスライムを切り捨てるが、後方から飛んできたバブルスライムが、避けるために態勢を変えたリーシャの左腕をかすめた。

「くっ！」

リーシャは苦悶の表情を表すが、バブルスライムが地面に着地する前にその体躯を切り捨てた。　空中で二つに分かれたバブルスライムは左右に散らばり、液体へと変わっていった。

「リ、リーシャさん、大丈夫ですか！？」

「ああ、だいじょ・・・・」

リーシャが魔物の攻撃を受けたことを見ていたサラは慌ててリーシャに駆け寄る。
そんなサラに返答しようとしたリーシャだが、途中で眩暈を覚え、言葉に詰まった。

「・・・・毒を受けたか・・・・」

リーシャの様子を見て、カミュは肩にかけていた袋から一枚の葉と白い布きれを取り出し、何やら始めた。　リーシャに駆け寄ったサラは『毒』という言葉に過敏に反応を示し、カミュの動きをリーシャの身体を壁際に座らせながら見つめていた。

葉を半分に裂き、その半分を布の中に入れてもむ。
カミュが再び開いた布には、擦り潰れた葉からその液が出て、布を緑色に染めていた。

「・・・まず、これを患部に押し当てて、これでも巻いていろ。」

カミュはその布と、包帯のようなものをサラに手渡し、また作業を始めた。
小さなお椀のような物を取り出し、水筒から水を少し注ぐ。
先程の布よりもずっと薄い布で残った半分の葉を丸めたものを包み、手で絞り出すように葉液を水に溶かしていく。

「巻き終わりました。」

「・・・今度はこれを飲ませろ。　バブルスライムの毒は多少熱は出るだろうが、少し休めばその熱も引く。」

「は、はい」

サラはカミュから受け取ったお椀をリーシャの口へと運び、少しずつ飲ませていく。

即効性のある毒なのか、リーシャは先程から口も開かずにぐったりとしている。
カミュの言葉を信じているが、やはり心配であることは変わらず、サラはカミュにお椀を返しながらもリーシャの顔を心配そうに見つめていた。

「・・・・バブルスライムが群がっていたのはこれか・・・・」

一通りの作業を終え、袋に道具を仕舞終えたカミュは、先程緑色の魔物たちが折り重なるように群がっていた場所に移動し、珍しく眉間に皺をよせながらその場所を見つめた。
そこには、二つの人骨が転がっていた。
その大きさから、おそらく親子なのだろう。
大きな人骨が小さな人骨に折り重なるような配置になっていた。

なぜ、ここに親子が来たのかは解らない。
白骨の具合から見て、つい最近というわけではないが、それほど古いものではない。
おそらく、ここ数年といったところか。

骨になってなお、魔物に吸いつかれていたその様を見て、自然とカミュの表情に変化が出ていたのだ。
その骨の脇には、一本の＞銅の剣＜と、一つの袋がある。
カミュは両方を拾い、その袋の中身を確認する。
袋の中には、３２ゴールドと指輪が入っていた。

「あ、あの・・・カミュ様」

リーシャの顔から苦悶の表情が消えたことにより、その場を離れカミュの傍に寄ったサラはその骨を見て魔物への憎しみが湧いてきていた。
隣に立つカミュを見ると、その表情も険しいものであることに疑問を持ち、思わずサラは声をかけてしまった。
なぜ、自分の魔物への憎悪を否定する彼が、このような表情を浮かべるのか？
そんな疑問がサラの表情に表れていた。

「・・・これは、お前が持て。　剣の鍛練をするのであれば、＞聖なるナイフ＜では難しい。　＞銅の剣＜であれば重さも申し分ないだろう。」

カミュはサラの方を見ずに、袋の紐を締め、床に転がる人骨の手の部分に戻し、＞銅の剣＜をサラに手渡した。

「そんな、死体から物を奪うなど・・」

「ああ、この袋に入っている物は取っていかない。　だが、これはどこにでも売っている武器だ。　まさか呪いが掛けられている訳じゃないだろ。」

「そういうことでは・・・」

自分が言いたいことを全く理解できていないカミュにサラは困惑する。
呪いがかかっているということを心配して言っているわけではない。
ただ、死人が持っていた武器を断りもなく奪うのがやりきれないだけなのだ。

「・・・ふぅ、ならば、無残にも魔物に殺された親子の武器を手にとって、こいつらの恨みも晴らしてやったらどうだ?」

「うっ・・・」

サラはカミュの言葉が自分を少なからず軽視していることは理解できた。
しかし、それに反論する言葉が見つからない。
確かに、魔物への復讐のためにこのパーティーに参加させてもらっている。
そして、復讐への想いは、この親子らしい人骨を見て更に膨れ上がったことは事実だ。

「・・・・・わかりました。　・・・・・すみません、貴方の剣をお借りいたします。　そして、貴方方の無念を晴らすことを誓います。　貴方方の冥福と来世での幸福を祈ります。」

サラはカミュの持つ＞銅の剣＜を受け取り、そしてその持ち主であった物言わぬ屍に向かい、手を握り合わせてその誓いを行った。
そのサラの姿を冷めきった目でみるカミュの姿があった。

「う、う～ん。」

「あっ！　リーシャさん、眼が覚めたんですか!?」

サラの祈りが終わり、合わせていた手を解いたあたりで、意識を失っていたリーシャが覚醒を果たし、それに気がついたサラがリーシャの元へ駆け寄っていく。
カミュはサラが去った後、もう一度床に倒れている人骨を見下ろす。

「・・・来世があるとしたら、幸せに暮らせ・・・次に生を受けたら、他種族の縄張りには近づかないことだな・・・・・」

「先程は済まなかった。　ありがとう。」

自分が落ちた状況とその後の処置のことをサラから聞いたリーシャは、戻ってきたカミュに素直に感謝の意を表し、頭を下げていた。

「・・・毒消し草は基本装備の物。　一回分の宿代を使わされただけだ。」

頭を下げるリーシャから逃げるように、荷物を取って歩きだしたカミュにリーシャは『多少の厭味にも慣れるものだな』と思いながら、苦笑していた。

一行は、先程あった別れ道まで引き返し、もう一つの道を歩き出す。暗闇に支配されているが、燈台に火を灯すと、うっすらとではあるがその道が真っ直ぐな道であることが推測できた。
先程と同様にカミュを先頭に二人が続くという形で通路を歩いていく。
歩けど歩けどその一直線の通路に果ては見えず、＞たいまつ＜の効力の範囲外は真っ暗な闇が広がるだけである。
通路の途中で何度か魔物と遭遇するが、カミュ達の行く手を阻むことはできなかった。

＞たいまつ＜の火種も残り少なくなり、新しい物に切り替えようかと思っていた頃に、長く続いた一直線の通路は終わりを告げ、つきあたりに階段らしきものが見えた。

「・・・あれか・・？」

「そうじゃないでしょうか？　もうかなり歩きましたから・・・海を越えたのではないでしょうか・・・？」

サラは疲れていた。
地下であることもあり、日の光は見えないが、何度かの休憩を挟みながら歩いていることから、地上ではもう日が傾き始めている時間であろう。

しかも、最初のバブルスライムと遭遇して以来、サラはその手に慣れない＞銅の剣＜を手に持ちながら戦闘を行っていた。
最初にその姿をみたリーシャは、ため息を漏らしながら、まずは構え方から教えていた。
付け焼刃で振るえるほど剣の道は簡単なのもではない。
剣を振っているというよりも、剣に振り回されているといった姿であった。
まだまだ旅慣れたいうのには無理があるサラがそんな状態であったのだから、いつも以上に肩で息をしているのも仕方がないと言える。

カミュを先頭に階段を昇り始める。

階段を上るたびに、明るくなってくる様子が、地上に出ていることを実感させる。
昇りきったところは、石畳が一面に敷き詰められ、夕日が眩しいほどに差し込む塔の内部であった。

「はぁ～～～～」

穴が空いただけの窓らしき物がこれでもかというほど存在する壁一面から差し込む、橙色に光る夕日がとても美しく、装飾が施された石畳を更に幻想的に彩っていく。
そんな光景にサラは溜息を漏らし、感嘆の声を上げる。

「・・・もう日が落ちるな・・・落ち着ける場所を探す。　陽が落ちれば、魔物の活動も活発になる。」

「そうだな。　まあ、いい場所があればいいが。」

建物の中とはいえ、吹きさらしの風が入ってくる塔では、日が落ち、夜の帳が広がれば寒さに震えることになる。　しかも、このような塔や、先程歩いていた地下道などは＞聖水＜の効力は届かない。
大抵が魔物の住処と化している場所が多く、眠っている間に殺されていたという可能性があるだけに場所には神経を使わなくてはいけないのだ。

リーシャがサラの様子を気遣いながらも、前を行くカミュに続いて

塔内部を歩きだした。
『ナジミの塔』はその建立が何時なのかはわかっていない。
アリアハン初代国王がこの大陸に城を築く以前から立っていたとも、聖霊ルビスがこの世界を創造した時に作られたとも云われている。
柱や床の石畳には様々な彫刻や絵画が装飾としてなされており、その内部の広さも相当なものである。

「・・・なんだ・・・これは・・・」

前を行くカミュがある広間で立ち止まり、独り言を呟く姿に、リーシャとサラは首をひねりながらカミュの下へと歩く。
カミュの傍まで近付くと、その不思議な光景に二人は更に首を傾げることになった。
少し開けた場所に、木造の机とその両端に同じく木造の椅子があるのだ。
このような魔物の住処となっている塔の中に、なぜ人が憩うような設備があるのか。
ご丁寧にその机と椅子の周りには鉢植えに入れられた花が飾られている。

「・・・人がいるのか・・？　・・・こんな所に・・・？」

カミュと同じようにその不思議な光景に飲まれてしまっていたリーシャの呟きが他の二人の覚醒を促した。

「・・カミュ様！　あれは・・？」

「！！」

リーシャの声に我に返ったサラが周辺を見渡し、指差したものは、ここに来る前の野営地で地下道への入口を塞いでいたような金属でできた板であった。
リーシャが金属板に近づき、地下道への入口の時のように少しずつずらしていく。

「お、おい、階段があるぞ？」

「・・・・また地下道へ戻るのですか？」

下へと続く階段だという言葉を聞き、サラは再びあの地下道へ戻るのかと、肩を落として溜息をつく。

「・・・いや、そうとは限らないな・・・地下道から上がってきた階段のように長い階段じゃない。　下の床がここからでも見えるからな。」

「　降りるのか？」

カミュが言うようにリーシャの目にも、階下の床が見えている。
ということは、先程の階段の半分の長さもないということになる。
ならば、地下道ではなく、この塔の地下部分になるのだろう。

リーシャの疑問に、軽く頷いたカミュは、金属板を完全にどかし、
下へと階段を降りて行った。　リーシャとサラもしぶしぶカミュの
後に続くことになる。

「お、おお！　久々のお客さんだ！　いらっしゃい！」

サラはそこで信じられないものを見た。
下へ降りると、そこは完璧な家であった。
いくつかの部屋に続くドアがあり、降りてすぐの場所にはカウンタ
ーもあり、そこに一人の中年の男性が立っていた。

「・・・や、宿屋なのか・・・ここは？」

リーシャもまた、その異様な光景に言葉を失っていた。

「・・・どうやら、そうらしいな。　オヤジ、三人は泊まれるか？」

「おう、大丈夫だ。　三部屋で６ゴールドだな。」

「い、いや、ちょっと待て、カミュ。　どう考えてもおかしいだろ！　なんでこんなところに宿屋があるんだ？　というか、この男は本当に人間なのか？」

なんでもないように会話を進めるカミュ達にリーシャは待ったをかける。
確かにリーシャの疑惑は真っ当なものだ。
こんな、魔物の住処で宿屋を営むなど考えられることではない。
故に、この男が魔物が姿を変えたものではないかとリーシャは考えた。
ただ、今まで人間に姿を変えた魔物など、リーシャも見たことはなかったが・・・

「あはははっ！　お客さんが疑うのは尤もだ。　ただ、俺は紛れもない人間だ。　まあ、色々あってこんなところで暮らしちゃいるが、お客さん方を取って食おうなんてするつもりはないから、安心してくれ。」

リーシャの失礼な物言いに気を悪くした様子もなく、豪快に笑いながら答えを返す男にサラは苦手な部類の人という印象を受けていた。

「・・・しかし、言葉は悪いが、こんなところでなぜ宿屋を？　それにここではまともな食事など出せないだろう？」

「・・・・・・また、食事についてか・・・・・・」

男の言葉を信じきれていないリーシャが続けて発したものに、カミュは嘆息を漏らし、うんざりといった表情を見せる。

「な、なんだ！？　食事は大事なものだろ！　お前も、散々私の料理を頬張っていただろうが！」

「・・そ、そうですよね・・・」

リーシャとカミュのやり取りを見ていたサラはそんないつもの光景に安堵したのか、力なく言葉を発した後、近くにある椅子に座り込んでしまった。

「サ、サラ！！」

「・・・とりあえず、６ゴールドだ。　食事に関しては、気にしなくてもいい。」

「あ？　ちゃんと材料はあるぞ。　俺は元々漁師なんだ。　アリアハンの海で取れる豊富な海産物がうちの宿の自慢だ。　塔の外で小さな畑も作っているから、新鮮な野菜もあるぞ。」

袋から金を取り出し、カウンターに置いたカミュが言った言葉に、心外だと言わんばかりに胸を張って答える男に、リーシャの目は輝いた。

「ほ、本当か！？　アリアハンの海産物なら貝や魚等も結構あるのか？」

「ああ、今日取ってきたばかりだからな。　まあ、作るのは俺だから、大したものはできないけどな。」

「いや、それなら問題はない。　食事は私が作ろう。　材料と調味料、そして調理器具さえあれば、それなりのものは作れる自信はあるからな。　なあ、カミュ？」

宿屋の男に負けじと胸を張って答え、先日自分の料理を褒めた後に他人の分まで取り上げて、貪るように食べていたカミュに問いかけるリーシャの顔は先程までの疑惑の表情ではなく、意地の悪い笑みを浮かべていた。

「おお、そりゃありがたいが・・・・本当にアンタで大丈夫なのか？」

「ぶっ！」

勝ち誇るリーシャに対して放った宿屋の一言は、椅子に座ったままやり取りを傍観していたサラを直撃し、サラは盛大に吹き出してしまった。

宿屋の男の発言に続き、サラの態度に腹を立てたリーシャの喚く声が、この魔物しかいないはずの塔にあった、奇妙な宿屋に響いた。

ナジミの塔？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

結局年内にアリアハン大陸脱出は叶いませんでした。
ちんたらちんたらで申し訳ありません。
これから先、帳尻合わせで色々と省略なんてことはするつもりが全くないので、こんなスピードで勇者一行の旅は続いていくと思います。

これからもよろしくお願い致します。

ナジミの塔？（前書き）

いつの間にか2万アクセスを超えていました。
この小説を読んで下さっている方々にお礼申し上げます。
本当にありがとうございます。

ナジミの塔？

三人は塔にある奇妙な宿屋で夜を明かし、日が昇ると同時にその宿屋を後にした。
塔の壁面にある窓から、昨日の夕日とは違う眩しい光が差し込み、塔内部の装飾をまた違った趣に彩っていく。

「サラ、今日中に頂上まで行って戻ってくることになる。　少し急ぐ形になるが、辛くなったらいつでも言うんだぞ。　サラは迷惑を掛けたくないと思うかもしれないが、休みもせず無理した結果が倒れることになってしまえば、それ以上に進む速度が遅くなってしまうからな。」

「・・・はい」

出発に先立ちサラに向かってリーシャが忠告した内容はサラにとって厳しいものであった。
自分が足手まといになっているかもしれないという負い目を常に感じているサラは、今まで無理を重ねて来ている節がある。
今まで、そんなサラの無理に気付かないふりをしながら気遣っていたリーシャであったが、ここから先は、常にサラを気遣える状況にあるとは限らない。
『ナジミの塔』は今では人の往来もなく、完全に魔物の住処と化している。
近年で人が入ったと言われたのは、魔物と同様にこの塔を住処としていた盗賊を捕らえる為にアリアハン兵が入ったことぐらいだろう。

「そんなに不安そうな顔をするな。　この『ナジミの塔』は比較的低い。　あって四階部分があるぐらいだ。　順調に行けば、日が沈む頃には戻ってこれるさ。」

多少厳しい忠告をして、サラの気持ちを引き締めようと思っていたが、リーシャの言葉の影響で不安顔になってしまったサラの表情にリーシャは鬼になりきれなかった。

宿屋の入口がある広間の反対側に上へと続く階段が見えていた。
塔の一階部分を隅から隅まで見たわけではないが、まずは見える階段を昇り上へ行こうという結論に達し、三人は階段を上って行った。

階段を昇り切ると、太陽が若干近くなったためか、先程より強い朝日が目に飛び込んできたようにサラは感じた。
それは、勘違いであることをすぐに気付くことになる。
実際は、一階部分とは違い、塔の周りを囲う壁が存在していないのだ。
二階部分は、壁で仕切られた広間がいくつか存在するのだが、それらを取り巻くように作られた通路には壁が作られていない。
つまり、足を踏み外せば、地上まで真っ逆さまに落ちてしまうというものだった。

「ひっ！」

強い風が吹けば、転がり落ちてしまいそうな錯覚に陥ったサラの足はすくんでしまう。

「・・・恐怖を感じるのなら、その戦士にでもしがみ付きながら歩くんだな。　いい重りになるんじゃないか？」

「　なんだと！　」

いくら腕っ節自慢のリーシャといえども、同性のサラよりも重いとはっきり言われて喜ぶわけがない。　カミュの軽口に怒りを露わにして噛みつこうとするが、カミュの言うことを真に受けて自分の腕にしがみついてくるサラに諦めの溜息をつくことになる。

結局、塔の外側の通路を歩いている間、サラはリーシャに手を引かれる形で歩いていた。
前を歩くカミュが、幾分か内部へと足を進め始めたことを確認し、サラと共にリーシャも安堵のため息をつく。
もし、この状況で魔物と遭遇した場合、カミュ一人で戦わせることになってしまうことをリーシャは気にしていたのだ。
カミュの腕と魔法があれば、大抵の魔物に遅れをとることはないとは思っているが、数が多ければ危険もそれなりに上がっていくことになる。

「サラ、もう大丈夫だろ。　悪いが、手を離してもらえるか。」

「あっ、は、はい！　申し訳ありませんでした。」

振りほどく訳でもなく、優しく声をかけてくるリーシャに、自分のしていた行為に今気がついた様子でサラは手を離す。

「高い所は苦手なのか？」

「い、いえ・・・すみません。　別段、特別に高い所が苦手な訳ではないのですが・・・」

言い訳をするように俯き、申し訳なさそうに話すサラに、リーシャは微笑みを浮かべながら続ける。

「まあ、もう少し歩けば慣れてくるさ。　誰でも最初は足がすくむものだ。」

「リーシャさんは、以前にこの塔に上ったことがあったのですか！？」

「いや、私も初めてだ。」

「・・・・・・」

サラは自分が高所恐怖症だとは思っていない。
教会の屋根の修理をするために、屋根に上ったことは多々ある。
その際は不安定な足場にもかかわらず、歩き回りながら金槌で釘を打ったこともある。
故に、リーシャの言葉に、もしかするとリーシャも自分と同じ気持ちを抱いているのではと期待を込めて聞いたのだが、返ってきた言葉はサラの期待を大いに裏切ってくれるものであった。

「サラ！　戦闘だ。　剣を構えろ。」

前を行くカミュが立ち止まり、背中の剣に手を掛けたことを見逃さず、リーシャは戦闘開始の合図をサラに送ってきた。
リーシャの合図にサラも手に持つ＞銅の剣＜を握りしめ、リーシャの後ろに付く。

カミュが剣を抜き対峙していたのは、アリアハン大陸でも生息する地域が限られている魔物、＞フロッガー＜であった。
フロッガーは巨大なカエルの魔物である。
魔力を持って生まれたカエルが巨大化したのか、魔王バラモスの影響で凶暴化したカエルなのかは解明されていないが、このアリアハン大陸では上位の魔物に当たる。

その体は通常のカエルと同じようにぬめりがあり、剣による斬撃では傷をつけにくく、またその跳躍力で人に襲いかかり、逃げ道を塞いでくるために、アリアハン大陸では恐れられている。
だが、それはあくまでも、対する人間が普通の人間であればという話だ。

「カミュ！」

声と共にリーシャはカミュに駆け寄り飛びかかって来たフロッガーに剣を振るう。
リーシャの一閃はフロッガーの左腕を切り飛ばし、フロッガーの着地を無様なものにした。

カミュはもう一匹のフロッガーの攻撃をかわしながら剣を振るい、フロッガーを追い詰めていく。　追い詰められたフロッガーは最後の一撃とばかりに、その発達した後ろ脚に力を溜め、カミュ目掛けて飛びかかって来た。
カミュは落ち着いてフロッガーの動きを見て、剣を立ててしゃがみ込む。
しゃがみ込むカミュに覆いかぶさるように飛んでくるフロッガーの喉元にカミュの剣が突き刺さった。

突き刺した剣を抜くためにカミュに足蹴にされたフロッガーは、床に転がった後、数度の痙攣を最後に動かなくなった。

「やぁぁぁ！」

リーシャに左腕を飛ばされたフロッガーは踏ん張りがきかず、十分な跳躍が出来ない。
リーシャの攻撃を避けるにしても、片腕がないため十分に動けず、ただただリーシャの剣を無様に受けることになる。
最後の一閃がフロッガーの首を刈った瞬間に見せたフロッガーの表情は、苦しみから解放されたような安堵を含む表情に見えていた。

「まだだ！！」

フロッガーの体液の付いた剣を振って、血糊を落とし鞘に収めたリーシャに、珍しくカミュの大きな声が掛けられた。
リーシャに駆け寄ろうとしたサラは、剣を鞘に収めたリーシャの後ろに飛ぶ巨大な蛾のような生物を見た。

「@%＃$&&$」

カミュの珍しい叫び声に、振り向いたリーシャは、すぐ目の前にいた巨大な蛾が人語ではない詠唱のような音を発した途端に霧に包まれる感覚に陥った。
今まで戦っていた筈の塔の内部ではなく、全てが霧に包まれたように景色がぼやけ、カミュやサラの姿まで無くなっていた。

そのくせ、霧に包まれる前に見た蛾が神出鬼没に自分の周りを飛び回っている。

「そこか！」

リーシャは飛びまわる蛾へ剣を振るが、真っ二つになったはずの蛾が蜃気楼のように消えていき、再び別の場所に現れるのを見て混乱していく。

サラは蛾が奇声を発した後、しばらく動かなかったリーシャが突然何もないところに向けて剣を振るのを見て驚いていた。

「チッ！　マヌーサか。」

「えっ！？」

マヌーサ

教会にある経典に契約内容が記されている魔法の一つで、その効力

は脳内に及ぼす。
この魔法にかかった者は、周囲が霧に包まれたような錯覚に陥り、敵の場所を特定できなくなる。　陽炎のように現れる敵の姿に戸惑い、また剣を振るってその敵を切り裂いても蜃気楼のように消えてしまい、倒すことが敵わない。
いわゆる催眠のような魔法である。

サラもマヌーサとの契約はすでに済ませてある。
まだ使用したことはないので、実際発動するかどうかはわからないが・・・
いずれにしても、その効力に関しての知識はサラにもある。
このパーティーの中で一番の剣の使い手が幻覚に包まれているのだ。
迂闊に近づくことなどできない。

「　そこかぁぁ！　」

「　！！　」

どうしたらいいのか判断がつかずにサラは動けない。
その中で、リーシャは闇雲に剣を振るう。
その剣は、カミュに対して振るわれた。
間一髪のタイミングでかわしたカミュではあったが、連続するリーシャの剣に防戦一方になっていく。

「！？・・・なんで、俺に向かってくるんだ！？　くっ・・・メダパニにでもかかってるのか！？」

カミュの疑問はもっともである。
基本マヌーサによって、幻覚に包まれた者は敵と味方を間違えるようなことはない。
同じように脳内に影響を及ぼす、メダパニと呼ばれる混乱魔法にでもかかっていない限りは・・・・・・

「くそっ！　おい！　何を呆けてる。　あの人面蝶をさっさと片付けろ！」

「えっ、えっ、で、でも・・」

リーシャの攻撃を何とか自分の剣で防ぎながらもサラに巨大な蛾の討伐を支持するカミュではあったが、声を掛けられたサラは戸惑うばかりであった。

「・・今、あの蛾を倒せるのも、この脳筋馬鹿を救うことができるのもお前だけだ！」

幻覚に包まれているリーシャは、しつこくカミュに切りかかっている。
確かに、今のカミュにリーシャと対峙しながら魔物を倒す余裕はない。
カミュの言う通りに、今動くことができるのはサラだけなのは事実

だ。

「わ、わかりました！」

カミュの目が真剣なのをみたサラは、覚悟を決めた。
ここで自分がまた何もできなければ、今度こそこの勇者に愛想を尽かされ、置いて行かれる。その考えが頭をかすめ、緊張と恐怖で＞銅の剣＜を握る手に汗があふれる。

「ピオリム」

サラは、これも教会の経典に記載されている魔法の一つであり、一時的に行使した者の身体能力を上げる魔法＞ピオリム＜を唱る。

人面蝶はリーシャにマヌーサをかけた後、リーシャに攻撃を仕掛けようと考えていたのだろうが、そのリーシャの凄まじい動きに近寄ることができず、場所を変えながらも周辺を飛んでいた。
身体能力の上がったサラには、その人面蝶の動きが目でしっかりと追うことができていた。
ちょうど、サラの頭の高さで飛んでいる人面蝶に向け、サラは＞銅の剣＜を振るう。

人面蝶は、今まで、全く動くことのなかった僧侶が自分に向かってきたことに驚いたが、それをひらりとかわし、上空に飛びあがった。

「あっ・・・」

自分の攻撃を簡単に避けられ、更には自分の手の届かないところまで上がってしまった人面蝶にサラは思わず声を漏らしていた。

「簡単に諦めるな！　魔物は必ず、攻撃を加えるために降りてくる！　それに剣を合わせるように振り抜け！　あぁ、くそっ！　アンタ、本当に幻覚と戦ってるのか？」

珍しく良く話すカミュにサラは驚くが、自分への忠告の後、リーシャへと愚痴をこぼすカミュの姿に、今まで緊張と恐怖でガチガチだった自分の身体から余計な力が抜けていくのを感じた。
どんな形であれ、今、あの捻くれた勇者は自分を信じている。
自分であれば、あの魔物を倒せると信じてくれている。

サラはもう一度剣を構えなおし、人面蝶を見据える。
自分をあざ笑うかのように上空を飛びまわっている人面蝶は、剣を構えなおすのを見て、その動きを制止させた。
何度か羽ばたきを繰り返した後、自分に向かってその口にある牙を剥いて急降下してくる。

ピオリムの効果が続いているサラは、その人面蝶の動きを落ち着いて見詰め、カミュの忠告通りにその動きに合わせるように＞銅の剣＜を振るう。
基本＞銅の剣＜の切れ味は決して良くない。
カミュやリーシャの持つ剣のように切り裂いたり、突き刺したりといった攻撃ができず、主に叩きつける武器と言っても過言ではない

武器だ。
しかも、サラはその武器を完全に扱いきれていない。
実際、身体能力の上がっているサラが振るった剣は、絶妙のタイミングだった。
しかし、扱いきれていない武器の為、その剣の軌道にはブレが生じる。
自分の動きに合わせられたことに気がついた人面蝶は無理やり態勢を変え、サラの剣の軌道から外れようとする。
結果、またもやサラの剣は人面蝶を倒すに至らなかった。

「あぁぁ・・・」

自分の不甲斐なさに俯きそうになるサラ。

「良く見ろ！　お前の剣は魔物をかすめている！　止めを刺せ！」

気分が落ち込み魔物から目を離しそうになったサラに、後ろからカミュの声が響いた。
その声に、もう一度顔を上げたサラの目に、うまく飛ぶことができず、サラの胸ぐらいの高さをふらふらと飛んでいる人面蝶の姿が映った。
カミュの言う通り、サラの剣は人面蝶の片方の羽にしっかりとダメージを与えていた。
空を飛ぶものにとって、羽とは生命線であるとともに、非常に繊細

なものでもある。
人面蝶のような、昆虫の延長にいるような魔物にとっては顕著であり、湿気を帯びただけでもその飛行は困難となるものだ。

＞銅の剣＜を握り直したサラは、渾身の力を込めて人面蝶に向けて剣を振り抜いた。
羽にダメージを受け、避けることも叶わない人面蝶は、そのサラの剣を勢いそのままに受けることになる。
真正面から攻撃を受けた人面蝶は、床に叩きつけられ、数度羽を動かした後に動かなくなった。

「やった！」

＞銅の剣＜を持つ自分の手と、物言わぬ屍と化した人面蝶を見比べながら、こみ上げてくる喜びを抑えきれず、サラは喜びの声を上げた。

「このっ！　・・・・・・ん？　どういうことだ！！」

振るった剣を受け止めた相手がカミュであることに気がついたリーシャは、理不尽にもカミュを怒鳴りつける。

「・・・・・それは、こっちが聞きたい。　なんで、＞マヌーサ＜にかかったはずのアンタが俺に攻撃してきたんだ？　アンタにとって俺は敵と認識されているのか？」

溜息交じりに剣を背中の鞘に納めながら、カミュはリーシャに疑問を投げかける。

「・・・マヌーサ・・・だと？」

「ああ、アリアハン随一の戦士様は、上達する剣の腕とは反比例に退化していった脳みそのせいで、ある程度の知識と判断力があれば惑わされることが少ない、人面蝶ごときが唱えた＞マヌーサ＜に惑わされ、　俺に剣を振るっていたということだ。」

「・・・・カミュ様・・・その辺で・・・・・」

先程まで、自分が果たした仕事の余韻に浸っていたサラではあったが、またしても不穏な空気を醸し出す程のカミュの厭味を聞き、慌ててリーシャとの間に入ってきた。

「しかも、アンタが俺に剣を振るっているから、アンタの幻覚を解くために、その僧侶が人面蝶を倒した。　それも、何度も諦めかけながらだ。　アンタのおかげで、いきなり全滅の危機だったよ。流石に俺も諦めかけた。」

「・・・ぐっ・・・す、すまない・・・・」

「・・・カミュ様・・・」

カミュの諦めかけたという言葉を聞き、自分の達成感からの高揚が覚めていくのを感じたサラは、心配そうにリーシャを気遣いながらも、言葉を発するカミュを見て驚いた。
カミュの口端が上がっているのだ。
リーシャは何度か見たことがあるカミュの顔であるが、サラは初めて見る顔だった。
あれは、明らかにリーシャをからかい、楽しんでいる顔に他ならない。

対するリーシャは、カミュのからかい顔を理解しているが、現状を見れば、カミュが決して嘘を言っている訳ではないことも理解できるだけに、反論ができずにされるがままになってしまっていた。
剣を持つ右手が強く握りしめられ、小刻みに震えていることから、そのリーシャの堪忍袋の緒が切れるのも時間の問題かもしれないが・・・

「まあ、いい。　思わぬ時間を喰わされた。　先を急ごう。」

あれだけ挑発しておいて、『まあ、いい』はないだろう。とサラは思ったが、先を行こうとするカミュに何の反論もできずに歩きだすリーシャを見て、火に油を注ぐことはするまいと喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

その後も、魔物と遭遇するが、一度不覚を取ったリーシャに慢心や油断はなく、次々と魔物の命を奪っていく。　そんなリーシャの様子にカミュは、積極的に戦いに参加することもなく、屍となった魔物の部位を切り取り、革袋に詰めていく。
サラも、やっと自分の闘い方を見出しかけたことから、剣を振るう回数も多くなり、リーシャの取りこぼした魔物を倒しながらも、そんなリーシャの闘いを見ていた。

リーシャの闘いは凄まじく、まるでカミュからの厭味の鬱憤を晴らすような動きであった。
中でも、再び出てきた＞人面蝶＜には、流石のサラも同情を禁じ得なかった。
共に姿を現した、おおありくいやフロッガーに見向きもせず、人面蝶に一直線に向かって行ったリーシャは、人面蝶の両羽を切り落とし、飛べなくなり地面に落ちながらもまだ生きているそれに剣を突き立てたのだ。
カミュでさえ、そのリーシャの怒気を纏った姿に唖然としていた。
ましてや、おおありくいやフロッガー等はサラたちの比ではない恐怖を感じ、唖然とするカミュとサラの隙をみて、我先にと逃げ出していった。

「・・・カミュ・・・様・・・」

「ああ、少し言葉が過ぎたことは認める・・・」

鼻息も荒く、戻ってくるリーシャにこの後、魔物を取り逃がした説

教をされることを覚悟した二人は、ため息交じりに会話を交わしていた。

その後も何度か魔物と遭遇しながらも、順調に塔を登って行った。
最初のリーシャの見立て通り、『ナジミの塔』はどうやら四階構造になっているようだった。
しかし、四階部分に到達した一行はその様子に溜息をつく。

四階部分は下の階とは違い、中心に壁があり、その周りを囲むように広い通路のような部分が広がっている。　当然通路に壁はなく、強い風が吹けば真っ逆さまに落ちてしまうことになるだろう。

「これ以上、上へは進めなさそうだな・・・」

「下の階にもう一つ階段がありましたよね。　もう一度戻ってそちらに向かいましょう。」

リーシャの言葉に、一つ下の階で見つけた階段を思い出し、サラは来た道を引き返すことを提案する。
今回、戦闘でもただ見ているだけではなく、剣を振るい戦闘に参加

しているサラは、良い緊張感が続き、気力が充実している。

サラの提案を受け入れ、一行は一度下にも戻り、違う階段で再び四階部分に出ることにする。　先程、階段の上部を見たところ、光が見えず行き止まりになっているか、作りかけの階段かもしれないというリーシャの言葉から上ることをしなかったのだが、再び見てもやはり上部に光はない。
カミュを先頭に一段一段上っていくが、やはり、天井部分にぶつかってしまい、それより先に進めないようになっている。

「やはり、ダメか・・・？」

「いや、この階段は何かで塞がれているような感じだな。」

後ろからかかるリーシャの諦めの声に、天井部分に手を当てていたカミュが答えた。
カミュの言うように、塔内部は基本的に石でできているのだが、この階段の天井部分だけ木でできていた。　階段の上部の為、暗く判別がしにくいが、手触りが石や金属のような冷たさを感じない。

「・・・・・木か・・・・？」

天井の隙間に木が隙間なくはめ込まれており、更にその上から木を釘で尚も打ちつけている。まるで、この先にある何かを出すまいとしている程の厳重さである。

「・・・少し下がっていろ・・・一度燃やす。」

カミュはリーシャとサラの二人を一度階段を降りさせ、蓋をしている木に向かって左手を上げる。サラとリーシャはカミュに言われるまま、階段の下からそんなカミュの姿を見ていた。

「メラ」

カミュの指先から出た火球は打ちつけられた木に命中するが、すぐには燃え上がらない。
それ程、打ちつけて時間が経っていない木だとは思われるが、吹きさらしの風や雨が入ってくる塔の中で湿気を帯びてしまっているのだろう。
何度目かの詠唱でやっと木に火がつき、天井を塞いでいる木が燃えていった。

燃え終わり、黒い炭と化した木々をリーシャとカミュでどかしていくと、この塔の一階にあった宿屋の入口にあったような金属の蓋が出てきた。
リーシャがその金属の蓋に下から突き上げるような衝撃をかけ、そして少しずつ横にずらしていく。　最初はリーシャを持ってしてもなかなか動かなかった蓋だが、ズズズズという引き摺られる音を発

しながら、徐々に動いていく。
完全に開けた蓋から暖かな空気が流れてくる。
三人はカミュを先頭に一人ずつ上がっていく。

「お前さんたちは、誰じゃ？」

階段を上ったところは広い部屋になっており、石畳の床に寒さ防止のためか絨毯が敷かれており、机や椅子が置かれている。
その椅子には、白いひげを生やした老人が一人座っていた。

「あっ！」

「・・・失礼。　カミュと申します。　失礼ですが、貴方はレーベの村の泉の畔の家に住む方のご兄弟でいらっしゃいますか？」

人がいたことに驚きの声を上げるサラの言葉を遮り、カミュが余所行きの仮面をかぶり話し出した。　その様子を見たリーシャは、『何度見ても違和感しかないな』と思いながらも静観することにした。

「・・・ふむ。　それが誰のことを指しているのかがはっきりせん

が、わしがいたころとあの村がそう変わらないのであれば、おそらくお前さんの言う通りじゃろうて。」

カミュの質問に、少し考えるそぶりをしながらも、白いあご髭を撫でながら老人はゆっくりと肯定の意思を示した。

「まあ、立ち話もなんじゃから、適当に掛けなされ。」

続く老人の言葉に、リーシャは入口の金属蓋を元に戻し、老人の対面に座る。
それにカミュ、サラと続き、三人が老人と対することになった。

「それで・・・わしに何の用かの?」

三人が着席したのを見計らって、老人が口を開く。
老人は頬が扱け、直視するのも気が引けるほど、皮と骨になっている。

「な、なぜこんな所に一人でいるのですか?」

そんな老人の姿に我慢ができず、誰よりも先に口を開いたのはサラであった。
カミュは顔を顰める様子であったが、口を開きかけた老人に遠慮し、

言葉を飲み込んだ。

「お前さんは？」

「あ、申し訳ございません。　アリアハン教会に属します僧侶でサラと申します。」

名前を名乗っていなかった失態に、慌てて名乗りを上げ、それに倣ってリーシャも自己紹介を済ます。

「ほう・・・アリアハンの僧侶様に宮廷騎士様ですか・・・ならば、私のような老人と言葉を交わしてはいけません。　私は神敵であり、国家では罪人となっておりますのでな・・」

二人の自己紹介に力なく笑う老人はそれ以上を語らない。
疑問を口にしたサラは、なぜそうなるのかという新たな疑問が湧いてくるが、老人の雰囲気がサラの口を再び開くことを遮っているようだった。

「・・・貴方は、あの橋を作った方ですか・・・？」

「「！！」」

「ふむ・・・お若いの、どうしてそう思われるのですか？」

そんな中、沈黙を破ったカミュの言葉にリーシャとサラの二人は驚き、カミュへと視線を移すが、老人は少し目を細めただけで、静かにカミュに問いかけた。

「アリアハンの王家では汚い物には蓋をする習慣があります。　昔、あの橋の土台を築いたのは、国家が雇った橋職人ではなく、レーベに住む鍛冶屋の青年という話があります。　その青年は、功績を称えられるどころか、故郷であるレーベを追われたと聞いています。もし、貴方がその青年であれば、レーベに残る老人のアリアハンに対しての憎しみも理解できるものです。」

「な、なんだと！　そんな話、聞いたことはないぞ！」

疑問を疑問で返されたにもかかわらず、それを気にしたような素振りすら見せずに語るカミュの話は、宮廷騎士として親の代から王家に仕えていたリーシャにとって初耳のものであった。　ましてや、教会という閉ざされた社会で育ったサラにとっては尚更だ。

「・・・よく、ご存じですな。　まあ、宮廷騎士と教会に属する僧侶である貴方たちが、知らないのは当然でしょう。　アリアハン王家に仕える方々に国家の暗部を知らせるわけはありませんからの・・・」

カミュに向かって、怒鳴るように投げかけたリーシャの疑問は、カミュではなく目の前の老人から答えが返ってくることになる。

「・・・カミュ殿と言ったかの？　お前さんの考え通り、わしがその青年ということになるかの・・・しかし、そうですか・・・弟の恨みはそれ程強くなっておりますか・・・」

「「！！」」

老人からカミュの話を肯定するような言葉が出た。
それは、先程、カミュが話したアリアハン国家の行為をも肯定する言葉になる。

「わしは、４０年以上ここで暮らしてきました。　レーベに戻る訳にもいかず、この大陸を出る訳にもいかず・・・国家の罪人である私にはこの大陸で暮らすことができるのはこの魔物の住処である塔以外はありませんでしたからの・・・」

「そ、そんな・・・」

老人の告白に、サラから声が漏れる。

「幸い、妻も子もありませんし、親もすでに他界しておりましたからの。　ただ、ただ一人、弟には苦労をかけてしまったようです。　初めの頃は何度か私に食糧などを持ってきてくれていたのですが・・・・」

「何か、他にも弟さんがアリアハン国家を恨む要素があるのですか？」

「・・・ふむ・・・」

会話を途中で止めてしまった老人に先を促すように、カミュが言葉をかけるが、それでも尚老人は言いにくそうに口籠っていた。

「　カミュ！　人には言いたくないこともあるだろう！　」

尚も催促しようとするカミュに、先程まで我慢していたリーシャが口を挟む。
アリアハン国の有する暗部の一部を知り、ショックは受けていた。
それにより取り乱すこともなく、冷静に話を聞いていたが、それをカミュにぶつけてしまうことになる。

「・・・いや、よいのじゃ。　・・・お前さん達は・・・バコタという人物をしっておるかの？」

「最近、捕まった盗賊ですか？」

盗賊バコタ
アリアハン大陸で活動している盗賊で、どんな扉も開けてしまうと云われている。
つい数か月前に、住処としているこの『ナジミの塔』にアリアハン兵が踏み込み捕縛され、今はアリアハン城の牢獄に捕らえられている。

「・・・ふむ。　それは、あの弟の子なのじゃ。」

「それで、捕まったことを恨んでいるのですか！？　それは、自業自得ではないですか！？」

息子である盗賊バコタが捕まり、牢獄に入れられていることを恨んでいるというのならそれは筋違いだとサラは声を上げる。
リーシャにしてもサラに同意であったが、カミュはいつもの無表情で声を上げるサラを冷ややかに見つめていた。

「あの子は、盗賊以外にはなれなかった。　わしが原因で、母親も出ていき、父親も仕事を失い、そして周りからの侮蔑の視線を受けながら育った。　働けるところなどなく、鍛冶屋を継いだとしても、作ったものを買う者などいない。」

「そ、それでも・・・人の物を盗み、それで生きていくなんて、真面目に働いて生きている人たちに失礼です。」

生い立ちが厳しい人間は数多くいる。
それでも皆必死で生きている。
サラはそう信じているのだ。

「・・・はぁ、誰もアンタの感想など聞いてない。　それに元はと言えば、アリアハン国が橋の土台を真面目に考え、作った人間の功績を自分のものにしたのが発端だ。　それこそ、人の技術を盗んだことになるじゃないのか？　アンタ方は認めたくないだろうが、それが現実だ。」

「・・・で、でも！」

「・・・カミュ殿、良いのじゃ。　このお嬢さんの言う通り、自分の境遇に悲嘆し、甘んじたあの子が悪い。　どんな事情があれ、犯罪は犯罪。　それは弟も解っている。」

「では、他にも理由があるというのか！」

リーシャが若干憔悴した様子で、再度老人の話を促す。

少し躊躇したように、それでも決意をしたように顔を上げ口を開いた。

「・・・ここから先は、アリアハンの中枢機関に属するお嬢さん達にはきつい話になるかもしれん。　それでも良いか？」

老人の痩せこけ窪んだ瞳に、鋭い光がともり、それが眼光となってリーシャとサラの二人を射抜く。　サラはその眼光にこれから先の話に対する不安が募るが、リーシャと共に大きく頷いた。

「・・・そうか・・・わしは父の後を継ぎ、鍛冶屋になった。　弟には鍛冶の才能はあまりなかったが、バコタには名人と云われた私の父の才能を受け継いだのか、光るものをもって生まれた。　だが、鍛冶屋として生きていくことはできない。　毎日鬱憤を溜めながら暮らし、できることといえば、家の物を修理するくらいのものだ。
そんな中、あの子は一つのカギを作りだした。」

「・・・・『盗賊の鍵』か・・・？」

『盗賊の鍵』
カミュが発した言葉にあるそれは、バコタが作りだしたと云われる、簡単な作りの鍵であれば、どんな扉も開けてしまうカギという話だ。

「そうじゃ。　そのカギを作ったあの子は、報われることのない労

働よりも、盗賊稼業に身を落としてしまう。」

「「・・・・・・」」

「私の弟は、激怒したそうじゃ。　どれ程皆から蔑まれ、苦労しようとも真っ当に生きてきた弟にとって許せる事ではなかったのじゃろう。　弟はあの子を勘当し、周りの人間には死んだこととした。」

自分の子を勘当するなど、余程のことだろう。
父親として、息子に与えてしまった苦しみに負い目を感じながらも、それでも幾分かでも幸せに暮らせるようにと努力してきた自分を否定されたように感じたのかもしれない。

「レーベを出たあの子は、名前を捨て『バコタ』と名乗り、わしの住むこの塔を住処とした。」

「それが、どう恨みに繋がるというんだ！」

元来気が長い方ではないリーシャは、老人の話すことにじれったさを感じ、声を出した。
隣で、心底呆れたように溜息をつくカミュが視界に入ったが、リーシャは早く結論を言えとでも言いたげに老人を促す。

「・・・ただの、あの子一人がここに来たのではないのじゃ・・・あの子には妻と幼い子供がおった。　妻となった年若い女性は、あの子の境遇を知って尚、あの子を愛し、盗賊になるといったあの子を必死に止めていたそうじゃ。　それでも決意の変わらぬあの子についていくことを決め、三人でこの塔に移り住んだ。」

「・・・・それって・・・もしかして・・・・・」

サラには自分の思っている結末を信じたくなかった。
そんな悲しい結果は知りたくない。
しかし、老人が話し出す結末は、サラの考えていた物など遥かに飛び越えたものであった。

「＞盗賊の鍵＜を使い、盗みを行っていたあの子が、ちょっとしたヘマからこの住処を知られることになる。　アリアハンから大量の兵士がこの塔に押し寄せてきたが、すでに下の階での生活場所はあの子たちに譲り、ここで生活していたわしは気付けなかった。」

話が進むにつれ、老人の顔には皺が濃くなり、骨と皮だけの身体を尚更痛々しく見せていく。　話を聞いているリーシャとサラもこれから話される結末を考え顔を歪め、カミュは能面のような表情を更に深め、無表情になっていく。

「あの子を捕らえた兵士たちは、捕らえられる直前にあの子が逃がした、妻と子を追った。　地下道に逃げ込んだ二人を数人の兵士で

執拗なまでに追い詰め、子供の方を先に殺し、妻の方は兵士たちで何度も何度も凌辱を繰り返し・・・最後には殺したそうだ・・・・・」

「「！！」」

「・・・そうか、地下道にあった親子の骨はその二人か・・・魔物ではなく、人間に殺されていたとはな・・・」

サラは完全に俯いてしまう。
自分が先程ぶつけた言葉がどれほど酷い言葉だったのかを痛感していた。

「ちょ、ちょっと待て！　なんで、貴方がそれを知ったのだ。　アンタは階下のことは解らなかったと言っていただろう！」

「わしは、元から国家の罪人であり、神敵だからのぉ・・・・わしの所まで上って来た兵士が自慢気に話してくれたよ・・・」

肉のついていない手を血が滲むくらい握りしめ、小さな呟きのような声で老人は答えた。
その答えに、リーシャの老人が嘘を言っているのではという最後の望みも潰えた。
リーシャとしては、一般兵とはいえ、アリアハンを代表して盗賊捕縛の命を受けた者がそのような非道な行為をしたことを信じたくは

なかったが、老人は何の脚色もなく真実を語っている。　それは、先程、盗賊行為に関して話したことで窺える。

「わしはその兵士たちがここの入口を塞いでからのことはわからん。あの子が生きているのか、それすらも解らん。」

「バコタは生きています。　まだ牢獄の中でしょう。　・・・一つ聞きたいのですが、貴方がその兵士の行為を知った経緯はわかりましたが、何故弟さんはそれを知ったのですか？」

再び、余所行きの仮面を被ったカミュが老人に素朴な疑問を投げかける。
確かに、今の話では、レーベにいるバコタの父親がそのことを知る経緯が解らない。

「それは、わしにもわからん。　あの子には何人か部下のような人間がいたが、その人間が伝えに行ったのか、もしくはあの子自体が文でも託したのかもしれん。」

「・・・・・」

一連の話が終わり、『ナジミの塔』の頂上にある部屋に何とも形容しがたい沈黙が広がる。
サラは自分の発言を悔やみ、現実の重みに涙を溢す。

リーシャはアリアハン国にある黒い部分の大きさに悩み、何も知ろうとしなかった自分を悔やんでいた。
その横で、カミュは何事もなかったかのような、何も感じない表情で老人を見つめていた。

「・・・・これを・・・・・」

沈黙を破ったのは、老人であった。
その破れかけた衣服の懐から取り出した物をカミュへと手渡す。

「それは、＞盗賊の鍵＜じゃ、へまをしたあの子は、盗賊稼業から足を洗おうとしていた。　それはその前にあの子から渡されたものじゃ。　この鍵であれば、弟の家の鍵も開けることができるじゃろう。」

「でも、それじゃあ、犯罪者と同じじゃないですか!?」

「わしから託されたことを伝えなされ。　・・・・ふむ。　少し待っていなさい。　手紙も託そう。　それも一緒に渡せばいい。」

サラの心の叫びを流すように答えた老人は、その細い腕で取り出した紙に筆を走らせた。

「・・・まだ、我々の目的を話していないはずですが・・・・」

「・・・ふむ。　数か月前にあの子から噂を聞いたことがある。
魔王の支配からの解放の為、１０数年ぶりにアリアハンから旅立つ者がいると・・・・アリアハン宮廷騎士にアリアハン教会の僧侶。
お前さんじゃろ、お若いの・・・ならば、お前さんの望みはこの大陸から出ることじゃろ。」

あまりにもすんなりと話を進める老人は、カミュが感じた疑問にも、さも当然のことのように一行の目的を言い当てた。
その老人の答えにリーシャとサラは驚くが、カミュは無表情に老人を見つめていた。

「弟は、鍛冶屋の才はなかったが、それとは違うものに非凡な才を示したおった。　あ奴ならば、お前さんたちの要望に応えることもできるじゃろ・・・今の世界が歪んでしまっているのも、魔物達が横行するこの時代が影響している部分も多々あるじゃろ・・・わしはもう長くはない。　だが、今苦しんでいる子供達が少なくとも今よりも幸せに暮らせる世が来ればいいと思っておる。　その手助けをできるとすれば、わしが生きていた意味も少しはあるというものじゃ。」

続けて話す老人の言葉に、サラは再び自分の頬を流れ落ちていくものを感じた。
リーシャもまた、サラの涙を見ながら、老人の話に感じ入る所があったのであろう。

「・・・ほれ、これを持って行くがよい。」

書き終わった手紙を老人から受け取ったカミュは、無言で老人に頭を下げた。
しばらくの間、頭を下げていたカミュだが、顔を上げたと同時に老人に背を向け歩き出す。

「・・・下の階に宿屋があった。　貴方も私たちと共に下へ降りよう。　このままでは貴方の身体がもたないだろ。」

階段に脚を掛けたカミュを追いかける前に、リーシャが老人へと声をかける。
その内容にサラも同意するように頷き、老人を促すように後ろに立った。

「・・・いや、わしはいい・・・」

そんな二人の気遣いにも、顔の皺をより一層濃くしながら、優しい微笑みを浮かべて老人は頭を横に数回振った。

「な、なぜですか！？　このままじゃ・・このままじゃ・・・」

老人の悟りきったかのような笑みに、リーシャは何かを感じたように俯くが、サラには老人の言うことが理解できない。

「ありがとう・・・お嬢さん。　しかしのぉ・・・わしは少し疲れた。　これからはお嬢さん達の時代じゃ・・・」

「で、でも・・・でも！」

尚も言い募ろうとするサラの肩が優しく包まれる。
サラが顔を上げると、そこには本当に辛そうに顔を歪めながら頭を静かに振るリーシャの姿があった。
サラはそんなリーシャの姿に、老人の意志が固いことを感じ、そして、それを飲み込まなければいけないことに再び涙する。

リーシャが、自分の胸に顔を埋めるサラを歩かせながら階段まで辿り着くと、先に降りていたはずのカミュが立っている。
カミュは老人が手紙を託した時にその覚悟を感じていたのだろう。
リーシャを見るそのカミュの目がそう語っていた。
カミュに向かって一度頷いたリーシャは、サラを歩かせながら階段を降りていく。
部屋に残ったカミュは、もう一度深く頭を下げると、振り向くことなくリーシャの後に続いて階段を下りた。

広い空間に一人残った老人は深く息を吐き、虚空を見上げた。

「これでよい・・・わしは、この日の為に生きてきたのかもしれんの・・・ならば、これでわしの役目も終えよう・・・」

老人は、椅子に深く座りながら言葉を吐き出し、そして静かに目を瞑った。

一階部分に降りるまで、カミュ達は何度かの魔物との戦闘を行った。だが、全員が一言も言葉を交わすことなく歩いていた。

リーシャとサラは今日の朝まではもう一度、あの宿屋に泊って行こうと考えていた。
だが、今はとてもではないがそんな気分にはなれない。
出来れば、早々にこの塔から離れたいと二人は思っている。

「・・・カミュ・・・＞キメラの翼＜は買っていないのか？」

そんな思いが、リーシャの口から言葉としてこぼれていた。
少し前を歩くカミュは、その言葉に足を止め、二人の顔を見るよう

に振りむく。
カミュが二人を見て感じた印象は、『顔面蒼白』。
それ程、二人の顔色は酷かった。

「・・・はぁ、アンタはいつの時代の人間だ？　今のアリアハン大陸で＞キメラの翼＜を置いている道具屋などあるわけがないだろう？」

「ど、どういうことだ！」

カミュが溜息交じりに発した言葉に、リーシャは驚いた。
いつもと違うのは、サラがそんなリーシャに驚いていたことだろう。

「アンタは国からの補助があって、何度かの魔物討伐の際に＞キメラの翼＜を使ったことがあるんだろう・・・だが、今のこの時代にアリアハン大陸の道具屋がどうやって＞キメラの翼＜を入手できるんだ？」

「！！」

「・・・ただでさえ、＞キメラ＜自体が希少なのに、こんな外の世界との交流を断った大陸に入手できる方法があるわけがないだろう。
アンタが使った物も国が昔入手して宝物庫にでも入れて置いた物じゃないのか？」

＞キメラの翼＜
希少な魔物＞キメラ＜が持つ二つの翼を胴体から切り離したものであり、頭に行きたい場所をイメージしながらその翼を空高く放り投げると、翼から発する魔力によってその場所に運ばれるという非常に便利な道具である。
＞キメラ＜自体、非常に強力な魔物であり、一匹の＞キメラ＜から二枚しか取れないため、昔から希少価値が高かったが、他大陸との交流を断ったアリアハンではすでに一般の者では手に入らない程のものとなっていた。

「・・・サ、サラも知っていたのか？」

「は、はい。　私のような者は、その存在を文献などで知るだけで、実物を見たことさえありません・・・」

一国の宝物庫にしかないものである。
サラのような教会に住む一少女が目にすることなどあり得るはずがない。

「・・・そうだったのか・・・」

自分の無知さと、この塔からすぐに離れられないことから更に落ち込むリーシャの様子を見ていたサラも、同様に気分が沈んでいく。

リーシャの言う＞キメラの翼＜を使うのならば、塔の外に出てすぐにレーベまで戻ることができるはずだ。　しかし、それが使えないとなると、またあの地下道を通らなければいけないのだ・・・・あの親子の屍がある・・・・

そうこうしている内に、一行は一階へと続く最後の階段を下り終えていた。
もう一度、あの地下道を通るのであれば、その前に宿屋で身体を休め、明日移動した方がまだ良いとさえサラは考える。
この塔の内部で眠ることができるかどうかは別にしても、このままの状態であの地下道を歩くなどできる訳がなかったのだ。　それはリーシャも同様であった。

「・・・・はぁ・・・わかった。　とりあえず、塔の外に出るぞ。」

一階に降りてから、サラが歩き出さないことに対して、カミュは呆れかえったように溜息をつき、外へ出るために歩き出す。
カミュの行動を不思議に思うが、付いていくしかないため、サラはカミュに続いて歩きだしたリーシャの後に続いた。

「・・・それで、どうするんだ？　一つぐらい＞キメラの翼＜を持

っていたのか？」

塔の一階部分からでた外部は、見渡す限り海であった。
そもそも『ナジミの塔』は小さな島にあるのだ。
サラが日暮れの海風に当たっている横でリーシャはカミュへこれからの行動を問いかける。

「　ルーラを使う。」

「なに！？」
「えっ！？」

＞ルーラ＜
その効力は＞キメラの翼＜と全く同じ魔法である。

「カミュ様は＞ルーラ＜が使えるのですか？」

サラの疑問はもっともだ。
通常、初級の修行を終えた魔法使いが覚える魔法であるが、それを魔法使いでもないカミュが使うと言ったのである。

「・・・俺が初めて覚えた呪文だ。　必要にかられてな。」

「「・・・・」」

サラの疑問に答えたカミュの言葉に、カミュの幼少時代の片鱗を見たことのあるリーシャは言葉に窮していた。　サラもリーシャの様子から、カミュのその答えにこれ以上疑問を挟んではいけないような気がして、黙りこむ。

「俺の腕を掴め。　つかんだら絶対に離すな。」

そんな二人の様子を気にするわけでもなく、カミュは詠唱の準備に入る。
二人は躊躇しながらもカミュの腕をしがみつくように掴んだ。

「　ルーラ　」

カミュの詠唱の言葉と同時に、カミュを中心に魔力の光が三人を包み込む。
サラが、自分の身体が宙に浮いたのを感じたのも束の間、三人の姿は空高くに舞い上がり消えていった。

ナジミの塔？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

キメラの翼に関しては、こういう形にさせていただきました。
皆様のお考えなどもおありだとは思いますが、おそらくこの先も簡単に買える代物ではない形で進めていくつもりです。

レーベの村？（前書き）

今回も、少し重たい話になってしまいました。
二話連続で重たい話にするつもりはなかったのですが・・・・

レーベの村？

「サラ、もう大丈夫だ。」

サラは、リーシャがそう自分に掛ける声で、目を瞑っていたことに気がつき、慌てて周囲を確認する。　そこは、つい先ほどまでいた見渡す限り海であった小島ではなく、周辺が平原のレーベの村の入口付近であった。

＞ルーラ＜は魔力により術者を運ぶが、時間までは超えることはできない。

遠くへ行こうとすれば、それなりに時間がかかってしまうのだ。

実際、塔の外で潮風に当たっていた時は日が半分ほど沈んだ夕暮れ時であったが、今サラには近くにいるリーシャの顔すらもはっきりとは確認できないほど周辺に夜の帳が広がっていた。

一行がレーベの村に入ると、外に出ている人間はほとんどいなかった。

それぞれの家には明かりが灯され、煙突からは暖かな煙が立ち上っている。

入口にある番所にも明かりが点けられ、入口の門にも篝火が焚かれていた。

門に立つ兵士に身分を伝え、村に入ることを許されたカミュ達は、店仕舞いがおわり、どこか物悲しい雰囲気を漂わせる通りを歩き、

宿屋へと足を向けていた。

「・・・カミュ様、一つお伺いしてもよろしいですか？」

先頭を歩くカミュに、小走りで追いついたサラが遠慮がちに問いかける言葉にカミュは無造作に振りかえる。サラの顔色は塔内部にいたころよりも良くはなっていたが、それでも心の奥に残る暗い物を隠しきれてはいなかった。

返事はしないが振り返ったことで、質問を許されたと考えたサラはそのまま、レーベの村に着いてから考えていたことを口にした。

「・・・カミュ様は以前にレーベに来たことはなかったのですか？地下道の入口のあった小屋の場所に行ったときにレーベに寄ることはなかったのですか？」

「・・・そう言われれば、そうだな。　ルーラが使えるのなら、アリアハンを出てすぐにレーベに来ることができたんじゃないのか？」

サラの発した疑問の内容に、リーシャも思いついた疑問を口にする。確かに二人が言うように、カミュがレーベの村の記憶があれば、＞ルーラ＜によって瞬時に移動することが可能であっただろう。

「・・・ふっ、レーベに来たことがあれば、そうしている。　俺は討伐隊に同道した時は村には入れない。　周辺警備か、夜通し魔物

と戦っているかのどちらかだ。　そんな人間に村の記憶などある訳がないだろう。」

「「！！」」

カミュが受けてきたものがどういったことかを知っているリーシャにとっては、そのカミュの言葉に更に驚く結果となる。　傷つき戻れば、回復魔法で癒され再度戦場に送りこまれ、村の中で眠ることも許されず、村周辺で夜通し魔物と戦わされる。　自分が所属していた討伐隊がしてきたことの苛烈さにリーシャは聞いたことを後悔する。

カミュが言っている意味を理解できないサラは、首を傾げながら、一気に意気消沈してしまったリーシャを不思議そうに見ていた。

「こんばんは、当旅人の宿屋にようこそ。　・・・おっ、この前のお客さんかい。　また、うちに寄ってくれて嬉しいよ。　この前と同じ部屋でいいかい？」

宿屋の戸を開けると、先日と同じようにカウンターの中で帳簿と睨めっこしていた主人が、一行をみて、嬉しそうに声を上げた。

この宿屋を先日出てからあった様々な出来事に参り気味であったサラとリーシャは、そんな宿屋の主人の優しい微笑みに自分達の心が癒されていくのを感じていた。

「ああ、この前と同じで頼む。　・・・確か、８ゴールドでよかったか？」

カウンターに向かって、腰の革袋からゴールドを取り出したカミュは、そのまま階段の方に向かっていく。

「ありがとう。　今日はちゃんと夕食もあるから、出来上がるまでは部屋で一休みしていてくれ。」

宿屋の主人の言葉に、リーシャとサラの二人もカミュに続いて階段を上り部屋へと入っていった。　主人は妻に来客を告げ、三人分の食事の用意を頼むと湯を沸かすために風呂場へと向かった。

サラが、主人の沸かしてくれた湯で身を清めた後に食堂に入ると、すでにカミュと主人が席に着いていた。　自分が遅れてしまったのかと思い、慌てて席に着くサラにやわらかな微笑みをたたえながら主人は口を開く。

「普通は、お客さんと一緒に食事をすることなんてあり得ないことなんだけれど、家内も貴方方がすっかり気に入ってしまって・・・あの戦士様のお言葉に甘えてご一緒させてもらうことになったんだ。」

「えっ、ああ、リーシャさんでしたら、きっとそう言うでしょうね。私は全く構いません。　大勢で食べたほうが楽しいでしょうし。」

宿の経営者が客人と食事を共にするなど聞いたことはない。だが、厨房の方から聞こえてくる声の主はそんなことを気にはしないだろう。

自分の身分に誇りを持ってはいるが、それを押しつけることも振りかざすこともしない女性だ。　サラは日を追うごとに、そんなリーシャという人間を人として好きになっていく自分を実感していた。

「・・・本当に人が悪いな。　こんなに料理が上手なのに、私なんかに教えてほしいなんて、厭味以外なにものでもないですよ。」

両手に皿を持ち、隣にいる女性とにこやかに会話をしながら、リーシャが厨房から出てきた。　両手に持つ皿からは湯気と共に食欲を誘う匂いも立ち上っている。

「ふふふ。　うちの主人が余りにも貴方の料理を褒めるものだから、

悔しくなってしまってね。　少し、意地悪をしてみたの。」

宿屋の妻が持つ大皿からもリーシャが持つ皿と同じように良い香りがしている。
サラの隣に座っているカミュもその匂いに唾を飲み込んでいた。
二人が何往復かして、次々と食卓に料理を並べていく。
数々の料理が放つ匂いにサラもノックダウンしてしまいそうな状況に陥った頃にやっと全ての料理が出揃った。

「こら！　カミュ、まだ手をつけるな！」

料理が出揃ったことを確認し、料理に伸ばそうとした手をリーシャに叩かれたカミュは明らかに不満そうに眉を顰めた。

「ふふふ。　ごめんなさいね。　もう一人、まだ来ていない子がいるから呼んできますね。」

そんな二人のやり取りに微笑みながら、宿屋の妻は厨房とは反対側にある戸の中に入っていった。

「・・・他にお客様がいらっしゃったのですか？」

「・・・いや・・・お客じゃないんだ。　私達には子供ができなく

てね。　つい最近に養子をもらったんだ。　少しきつい目にあった子なんだ・・・その影響でなかなか心を開いてくれなくてね・・・」

サラの問いかけに、宿屋の主人は珍しく俯きながら、哀しそうに言葉を紡いでいく。
カミュはまったく関心を示していなかったが、サラはそんな主人の言葉に何か引っかかるものを感じていた。

「・・・辛い目に・・・？」

「・・・ああ、あの子は両親とアリアハンからこの村に向かう途中で魔物に襲われてね。　母親が傷だらけになりながら、あの子をこの村まで連れて来たんだ。」

「・・・では、ご両親は・・・」

「父親は、妻と子を逃がすために死んだようだ。　母親の方も、番所の兵士にあの子を預けるとそのまま息を引き取ったそうだ・・・」

「「・・・」」

自分と全く同じような過去を持つ子供がいることにサラは言葉を失う。

サラはその子供とは逆にレーベからアリアハンに向かう途中で魔物に襲われた。
三者三様の想いを感じていると、先ほど閉まった戸が再び開く音が食堂に響いた。
そこから、先ほど入っていった宿屋の妻と一緒に4，5歳の少年が食卓に向かって歩いてくる。　主人が言った通り、暗く物思いに沈んだ表情をし、心を閉ざしている。

「さあさあ、こっちに座って。　今日はお客様と一緒に食べさせて頂くから、いつもより賑やかよ。　・・・ごめんなさいね、お待たせしてしまって。」

宿屋の妻に導かれるまま席に着いた少年は、食卓に並ぶ料理を見る訳でもなく、自分の手元を見詰めたまま動かない。　宿屋夫婦はそんな少年の姿を沈痛な面持ちで見ていた。

「・・・もういいか？」

食卓に着く全員が言葉を発することさえもできなかった場で、ただ一人関心を示していなかったカミュがその場の空気にすら何の関心も示さずに食事をとる許可を求めた。

「え、ええ、そうですね。　いただきましょう。」

その言葉を皮切りに食事が始まった。
例の如く、スープから口にしたカミュは、おそらく、リーシャやサラにしか気がつかない程の満足そうな、表情に小さな小さな変化を起こし、他の料理へと移していく。

「カミュ、前から言おうと思っていたが、食事の前の祈りをお前に言うのは無駄だろうが、食事を作ってくれた人に対しての礼儀はしっかりとしろ。」

料理を、掻き込むように口に入れるカミュに、ため息交じりにリーシャがたしなめる。
サラは、そのリーシャの言葉に少なからず驚いた。
カミュが、ルビス様への祈りをしないことを容認したような発言をしたのだ。
サラにとって、今日の糧が自分にあるのも、ルビス様の加護の賜物だという教えを受け、それを本心から信じている。
カミュが祈りをしないことを本当は快く思ってはいないが、それを言い出すことはできなかったのだ。

「・・・ん？　ああ、そうだったな・・・すまない。　いただいています。」

「「「　ぷっ！　」」」

リーシャの言葉に素直に従ったカミュが発した言葉はどこか間の抜

けたような言葉で、リーシャとサラは唖然としてしまったが、カミュの普段を知らない宿屋一家は総じて吹き出してしまった。

意図的ではない趣向により、食堂が和やかな雰囲気に包まれる。
その証拠に、先程まで料理の美味しさに多少表情が緩んでいたように見えたカミュの顔が憮然としたものに変わっていた。

なぜ、カミュはリーシャの言葉はわりと素直に聞くのか？
和やかな笑いの中、サラはふと疑問に思った。
カミュはリーシャの前だと、表情の変化を見せることが多い。
皮肉気な笑みや、怒り表情、からかいの笑みや不機嫌な顔。
日常的なことでのリーシャの注意には素直に従うことも多々ある。

何故？
カミュは、リーシャに一目惚れでもしたのか？
リーシャも、カミュの素行に寛容になっている。
自分が知らない間に二人の中で何か進展があったのか？
サラは、自分の考えがただの勘違いではないように感じ始めた。

たった、1週間やそこらで、あれだけいがみ合っていた者同士が恋仲になどなるわけがない。　サラの盛大な勘違いは、後々二人の逆鱗に触れることになるが、それはまた別の話。

食堂にきた時は、料理に手をつけようとしなかった少年でさえ、ゆ

っくりではあるが、料理を口に運び始めていた。　そんな様子を、宿屋夫婦が優しい眼差しで見ている。
その家族の優しさをサラは若干羨ましく見ていた。

「　そう言えば、お客様のことをお聞きすることは大変失礼なのですが、お客様方の旅の目的は何なのですか？　・・・・商団の護衛というわけでもなさそうですし・・・・」

主人は、いつものような砕けた調子の言葉ではなく、宿屋と客という部分に遠慮をした様子でカミュとリーシャのどちらともつかない方へ問いかけた。
これには妻の方も同じ疑問を持っていたのか、子供へと向けていた視線を上げ、興味を示した。
リーシャは、一度カミュとサラを見る。　カミュは食事を続けていて、リーシャの視線に気が付いていない様子だったが、サラに一つ頷くと主人の問いに答えるため咳払いをした。　その様子が若干滑稽であったことで、サラの顔に笑みが浮かぶ。

「私達は、魔王討伐の命を国王様から受けて旅を始めた。　こっちは、英雄オルテガ殿の息子のカミュ、こっちはアリアハン教会に属する僧侶のサラ、そして私は宮廷騎士のリーシャという。」

リーシャが語る言葉が進めば進む程、宿屋夫婦の表情から笑顔が消えていき、その顔色が青を通り越して土色に変わっていった。

「も、申し訳ございません！　貴族様とは知らずにとんだご無礼を！　ましてや、食事の席に同席してしまうなど・・・・・お許しください！」

リーシャの言葉が終わった途端、夫婦揃って、椅子を立ち、その場で膝を折り平伏してしまった。　サラは宿屋夫婦の変貌ぶりに驚いたが、カミュはその様子を冷ややかに見た後、リーシャへと批難の視線を向ける。
当のリーシャはその状況が理解できず、ましてや何故自分が批難の視線を受けるのかも理解できていなかった。

「い、いや、顔を上げてくれ。　そんな気はないんだ。　それに共に食事をすることを提案したのは私だ。　許す許さないの問題ではない。」

何とか絞り出したリーシャの言葉は本心のものであろうが、宿屋夫婦は床に平伏したきり動こうとしない。　サラも呆然とした状態からは立ち直ったが、今の状況に戸惑い、どうすれば良いのか答えが出せず、うろうろとするのみであった。
そんな中、口に入れた物を飲み込み、ため息をつきながら、無関心を通していたカミュが口を開いた。

「貴族と言っても、貴方方を罰するほど権力もない没落貴族だ。　俺にしたって、貴方方と同じ様な、アリアハン城下町の外れに住む平民の出だ。　こっちの僧侶は元は孤児。　貴方方が恐れるような存在じゃない。　席に戻ってくれ。　今、話した通り、貴方方と共

に食事をすることを望んだのはこっちだ。　できれば、前の時のように食事を続けたいんだが・・・・」

没落貴族と言われた時、リーシャの額に筋が立ったようにサラには見えたが、カミュの口調に本当にこの宿屋夫婦を気遣うものを感じたのであろう。　カミュの話に口を挟まず黙って聞いていた。

「・・・は、はい・・・」
「・・・・」

ようやく顔を上げた夫婦の表情は、食事をとる前の自然の笑顔とは似ても似つかない、堅く引き攣ったものであった。
その表情にリーシャはやるせない思いになり、サラは改めて貴族と平民との垣根の高さを実感した。
ただ、この場にいた者の中で一人だけは違っていたのだ。

「お兄ちゃん達は、魔王を倒しに行くの？　これから、魔物とたくさん戦うの？」

「こ、これ！」

今まで口を開くことが全くなかった少年が不意に言葉を発したことに、食堂にいる全ての人間の視線が少年に集まった。
主人は、今までのやり取りで一息ついた途端の義息子の一言に大い

に慌てた。

「ああ、そうだな。　魔王を倒すためには、ここから先数多くの魔物と戦うことになるだろうな。」

少年を見つめながらも口を開こうとしないカミュに変わって、リーシャが少年に返答する。
そのリーシャの答えに、今まで心痛な面持ちで食事をしていた少年の顔に変化が現れた。

「じゃあ、いっぱい、いっぱい魔物を倒してね！　あいつらは・・・僕のパパとママを・・うっ・・うっ・・」

少年の胸の内を明かされ、先程の余韻が残る食堂内は更に重苦しい雰囲気に飲まれていく。両親が自分の目の前で死んでいくのを見て、心に傷がつかない人間などいない。
同じような境遇を持つサラには、その心が痛い程わかる。
幼い少年の悔しさ、歯痒さをぶつけられ、リーシャも決意を新たにする。
ただ一人、カミュだけは食事の手を止め、表情を失くしたまま、少年を見ていた。

「約束します。　貴方に代わって、魔物たちに正義の鉄槌を下すことを・・・そして、魔王を倒して、平和な日々を取り戻すことを・・・」

最初に口を開いたのはサラであった。
少年を真っ直ぐに見詰め、胸に手を置き、少年の願いを受け止めるように頷く。

「・・・・うん！・・・」

流れる涙を腕で拭い、顔を上げた少年の顔を、リーシャは優しく眺めるが、ふと隣に座るカミュの手が止まっていることに嫌な予感が発動し、ゆっくりをカミュの方を見て頭を抱えたくなった。　そこには、あの表情を失くしたカミュがサラと少年のやり取りを見ていたのだ。

まさか、ここで以前の宿営地でのような話をするつもりなのか！？
リーシャは、カミュが少年に向かってあんなことは言わないだろうという思いはあるが、自信がない。
せっかく、少年の返事に、先程まで土色だった宿屋夫婦の顔色も戻ってきたというのに、ここでまた雰囲気をぶち壊すつもりなのか・・・・リーシャは僅かな望みをカミュに託すしかなかった。　『余計なことは言うな』・・・と。
そんな、リーシャの懇願を余所に、満を持してカミュの口が開かれた。

「・・・魔物を倒していくのも俺の役目だ・・・お前にはお前の役目がある。　お前は幸いにも引き取ってくれた夫婦がいる。　産みの親を忘れろとは言わない。　だが、これからは、今お前の両隣で

お前を心から心配している二人を護るために強くなれ。　それは、魔物に対してだけじゃない。　貴族等にも対抗できる力だ。」

リーシャはカミュが発する言葉が頭に入ってきたが、あまりにも予想外な為、理解が追い付かない。　必然的に呆然とカミュを見つめることになる。
それはサラに至っても同じことであった。

「・・・・ち・から・・？」

ただ、少年一人だけは、カミュの言葉をしっかりと聞いていた。
彼のような年の子供にとって、剣を取り魔物に向かっていくカミュのような青年は憧れの存在となり得るものなのだ。

「・・・ああ、この世の中、俺の隣で呆けた顔をしているような、抜けた貴族ばかりじゃない。　そういう者たちから、お前の周りの人間を護る力だ。」

「　なっ！！　」

突然自分に振られたことに驚いたリーシャであるが、カミュが自分に向けて発した言葉は、明らかな侮辱とは取り辛いものだった。
カミュは、貴族が平民を虐げていることを言っているのだ。　その貴族たちの中にリーシャを含めていないことを暗に示しているとも

言える。
『抜けた貴族』という部分に怒りがこみ上げるが、それが発散できない歯痒さをリーシャは噛み締めることとなった。

「お前という個人を、自分という存在を、しっかりと見てくれる人間がいることは、本当に幸せなことだ。」

「・・・・・うん・・・・」

「お前には、二人の父と二人の母がいる。　すぐにその幸せを感じろとは言わない。　いずれそれが分かる時が来る。　その時に自分の周りの人間を護れる力を持て。」

「・・・・うん・・・・」

静寂が支配する食堂にカミュの言葉だけが静かに響く。
大きな声でもない、強い声でもない、どちらかと言えば呟くような声で淡々と話すカミュの言葉が食堂にいる全ての人間の心を飲み込んでいた。

「・・・・カミュ・・・・・」
「・・・カミュ様・・・・」

カミュが、少年を労わるように、そして導くように話す姿にサラは呆然としていた。

『これは、暗に自分の魔物への復讐という考えを否定しているのでは』とも考えたが、カミュの瞳は純粋に少年だけを映していることがそうではないことを示している。

サラは益々この勇者という存在が解らなくなっていく。

教会の教えを無視し、聖霊ルビスを侮辱し、意にも解さないと思えば、哀しみと苦しみに苛(さいな)まれている少年を導くような言葉を発する。

どれが彼の本性なのか・・・

彼の考えの根底にある物は何なのか・・・

「・・・お前が持つ、周りの人間を護る力がどんなものなのかは分からない。　それはたぶん、お前がこれから先、生きていく中で見つけるんだと思う。　お前にはたくさんの選択肢が残ってるんだ。」

「・・・・せん・・たく・・し・・？」

「・・ああ、今のようにずっと塞ぎ込んだまま横にいる二人を悲しませることや、お前を護るために死んでいった両親の為にも前を向いて生きること。　そして、前を向いたお前が目指す先を決めるのもお前だ。　それは一つだけじゃない。　ゆっくり考えて見つければいいさ。」

「・・・・・うん・・・・」

少年はカミュに引き寄せられるように、一言一句を聞いている。
その隣にいる宿屋夫婦はいつの間にか涙していた。
リーシャは、そんなカミュが眩しく見えた。
彼の過去の一部しか知らないリーシャは、自分が思っているよりもずっと過酷で、ずっと哀しい過去をこの勇者が持っていることを改めて感じることとなる。

「・・・ご馳走さま・・・」

言うことはもうないとばかりに少年から視線を外し、スープの残りを飲み干した後、カミュは席を立った。

「・・・お兄ちゃんも・・・頑張って魔王を倒してね・・・」

食堂を出ていくカミュの背中に少年は声をかける。
その声にカミュは一度立ち止まるが、応えることも振り向くこともせず、そのまま食堂を出ていった。

カミュが出ていった食堂は、先程と同じような静寂が支配していた

が、それは重苦しいものではなく、どちらかと言えば戸惑いに近いものであった。

「「「「「・・・・・」」」」」

カミュと会話をしていた少年の目は、先程まで悲観にくれていたものではなかった。

未だにカミュの話していた内容の8割以上を理解できてはいなかったが、それでも塞ぎ込んでいた心の扉の鍵は開いている。　後はその扉を押し開く能力を少年が持つだけなのであろう。

再度食事を始める少年の様子を宿屋夫婦は涙で滲んだ視界で捉え、更に涙する。

リーシャはやっと新たな親子としてのスタート地点に立った3人を優しい瞳で見つめながらも、この空間を作り出した1人の勇者に思いをはせる。

彼をオルテガ様の息子とは認められなかった。　彼の考え、行動を見ていて、どうしても許せないものは数多くあった。　しかし、何度か周りへの気遣いや優しさを感じさせるものがあったのも事実なのである。

今も、1人の少年を導いていった。　人一人の悲しみや苦しみを理解し、そしてその道を示すことなど誰でもできることではない。

もし、リーシャが同じ事を少年に話したとしてもそれを素直に受け止めてくれたかどうかは正直わからない。

それは、魔王討伐に向かう勇者への憧れが少年の胸の内にあったという理由もあるかもしれないが、それでもあれ程心に浸透させることは他の人間には無理であろう。

それが、英雄と云われる人間たちの持つ不思議な魅力なのかもしれない。
そう、リーシャは考えていた。

「リーシャさん・・・カミュ様はどういう人なのでしょうか・・・？」

部屋に戻り、寝巻きに着替えながらサラがリーシャに呟いた。
あれから、食事が終わり、この部屋に入ってくる今まで、サラは一言も言葉を発することなく、何かを思いつめているような様子であった。

「・・・私にも解らない。　ただ・・・一つ言えるとすれば、アイツは私達が考えているような幼年時代は送っていないんだろうな・・・」

リーシャとしてもそう答えるしかなかった。

カミュから以前聞いた話はある。
だが、リーシャはその話を自分の口でサラに言うことはしなかった。
それは、カミュが語ることだと思っていたのだ。

サラとカミュの確執は深い。
根底にある考え方が１８０度違うのだ。
それは、いくら話しても平行線を辿るだけで、もしかすると、魔王バラモスを倒したとしても交わることはないかもしれない。

「・・・そうですね・・・私は正直、カミュ様という人が解りません。　カミュ様がどんな想いを持ってこの旅に出ているのか・・・」

「・・・ああ・・・」

「カミュ様は、ルビス様を蔑にされるような方です。　私におっしゃっていたことは、今でも私は理解できませんし、納得もできません・・・・」

「・・・・・」

サラは、上半身が裸のまま、寝巻きの上着を手に持って、うわ言のように呟く。
年齢の割に膨らみきっていない胸が露わになっていることにも気が付いていないようだ。
最も、見ているのは同性のリーシャだけなのだから、気にすること

はないのだが・・・

「・・・私は・・・ルビス様を蔑にし、魔物を擁護しようとするカミュ様のお考えを許すことはできません。　魔物は私達の生活を脅かす罪悪です。　それは今も変わりません。　だから、私は魔王討伐の旅に同道させて頂いています。　私が本来進むことができた幸せを奪った魔物達に復讐するために・・・・」

「・・・そうか・・・」

サラの上着を持つ手に力が籠る。
もはやあの上着は皺で酷いことになっていることだろう。
だが、リーシャはサラが初めて自分から『復讐』という単語を口にしたことに何故か気持ちが沈んでしまった。

「・・・でも・・・・あの子は、私が魔物を倒す約束をした時もあんな顔をしてくれませんでした・・・・カミュ様は、あの子の魔物に対する憎悪や両親を失った悲しみ苦しみを否定しませんでした・・・それでも、あの子は・・・魔物への想いは消えなくても・・復讐を考えることはないかもしれません・・・・」

「・・・・・」

「・・・私は・・・私は・・・カミュ様が・・・あの子に話した言

葉を否定することができません・・・」

最後は持っている上着に顔を埋めてしまった。
そこで、リーシャはサラが何を話したがっているのかがやっと理解できた。
サラは恐れているのだ。
自分の考えが変わっていってしまうことを・・・

サラの中で両親を殺した魔物達への憎悪が消えるわけではない。
ただ、自分がその想いによって歩んできたものが間違いとまでは言わないが、他の道があったのではないかという考えが浮かんで来ているのだろう。
あの少年が、前を向いて歩きだそうとしているのは、カミュという存在が大きいことは間違いがない。　それに比べ、自分は後ろ向きに進んでいるのではないか・・カミュが言う、両親の代わりに育ててくれた神父様を蔑にしてしまっているのではないか・・

「・・・今はそれでいいんじゃないか？　サラの目的が変わる訳じゃないだろ？」

リーシャの言葉に顔を上げないまま、サラは頷き返す。

『自分を含め、まだまだ視野が狭い』
それが、リーシャがここ数日で感じたことだった。
サラは勿論、カミュに至ってもこのアリアハンから出たことはない。
故に、自分達の世界はアリアハン大陸だけなのだ・・・
色々な出来事に対し、良いことなのか悪いことなのかの判断がその

狭い視野の中でしかすることができていない。
だから、今は『自分の価値観について考える』、ただ、それだけで十分じゃないか。
サラの話を聞きながら、リーシャはそう思っていた。

「さぁ、もう寝よう。　明日はいよいよアリアハンから出るための準備だ。　いつまでも裸のままで風邪をひいてはここまでの苦労が無駄になってしまうぞ。」

「??・・・・あっ！」

リーシャの言葉を聞き、自分がまだ着替え途中で、しかも上半身が完全に裸のままであることにサラは気づき、慌てて寝巻きに着替える。
その姿は、握りしめ過ぎた上着のせいで皺だらけのみすぼらしいものになっていた。

「・・ふっ・・ふっ・・・あはははは！　サラ、その寝巻き、皺だらけだぞ。　いくらなんでも握りしめ過ぎだ！　あはははは！」

「・・・うぅぅ・・・」

今までの重苦しい雰囲気をぶち壊しにしたリーシャの笑いと、自分の間の抜けた姿を恨めしそうに見詰めた後、サラは無言でベッドの

中に入っていった。

サラがベッドに入るのを確認し、笑いを徐々に納めていったリーシャもまたベッドに入り込む。　部屋を照らしていたランプの明かりも消え、部屋全体を静寂と闇が支配する。

「・・・サラ・・・誰しも同じだ。　朝からの様々な出来事や話が、全て正しいのか私にも解らない。　だが、この世の中には私達が知らないことが山ほどある。　ならば、知っていけばいい。　まだ旅は始まったばかりだし、サラは若い。　色々なことを知り、考え、そして答えを出せばいい。　焦る必要はないさ。」

暗い部屋に響く、リーシャの独り言のような呟きは、隣のベッドに入っているサラの耳にもしっかりと届いていた。

「・・・・はい・・・・」

サラの返答を最後に二人の会話は途切れ、しばらくするとリーシャの静かな寝息が聞こえてくる。　その寝息を聞きながら、サラはベッドの中で自分が眠りに落ちるまでの間、考え続けていた。

翌朝、宿屋一家に見送られて宿屋を出た三人は、泉の畔にある家に向かって歩き出した。
宿屋夫婦に手を引かれ見送りに出てきてくれた少年を見るサラの表情は、どこか優れないものであったが、自分達の素性を知り、深々と頭を下げている夫婦に余計な気を遣わせない様に笑顔を作っていた。

つい2日前に訪れた家の戸の前に立つ頃には、サラは勿論、リーシャの表情までもが沈痛なものに変わっていた。　塔での話を思い出しているのであろう。　たとえそれが事実だとしても、どう伝えればいいのであろう。　この家に住む老人は事の全てを知っているのだろうか？　様々な考えが、浮かんでは消え、二人を悩ましているのだった。

ゴンゴン・・・・

そんな二人の想いを余所に、カミュは再びこの重い扉をノックする。
その音に二人の身体が緊張という感情に包まれた。

ガチャ・・・

しばらくして、遠慮がちに空いた扉の隙間から、先日と同じように覗く瞳が見えた。

「・・・また、アンタ達か・・・話すことなど何もないと言ったはずだ！」

これまた先日と同じように、こちらの話を聞く気もないとばかりに、扉を閉め、鍵まで掛けられたしまった。
三人は大きな溜息を同時に吐くが、その溜息が示すものは、カミュと他の二人では違ったものであった。

「・・・仕方ない・・・できれば使いたくはなかったんだが・・・」

カミュは腰につけた革袋から、塔の老人から託された鍵を取り出し、そのまま扉の鍵穴に差し込んだ。　サラは、差し込む瞬間に何かを呻いたが、鍵を手にしたカミュの手は止まることはなかった。

ガチャ・・・

かかっていた鍵は、まるでその扉の鍵を差し込んだ時と同じように簡単に開けられ、それを確認できる鈍い金音を響かせた。
鍵を革袋の中に戻し、ドアノブに手をかけたカミュは扉を押し開く。
開かれた扉の先には広い広間が広がっている。

「・・・いくぞ・・・」

カミュの言葉に、あまり乗り気になっていない二人はゆっくりとカミュの後ろに続いて行く。　勝手に鍵を開け、他人の家に入っていく罪悪感が、リーシャとサラの胸に湧き上がる。

入った広間はかなりの広さを持ち、中央にはこれまた大きな囲炉裏のようなものがあった。
囲炉裏には大きな壺とも鍋ともいえないものが火に掛けられており、何かを煮詰めているのか湯気が立っていた。
鍛冶をしていた人間がいなくなって幾年か経ったためか、鍛冶に使用する道具らしき物はあるが、埃をかぶり錆だらけの状態でころがっている。

「・・・上か？　カミュ、どうするんだ？」

広間に先程の老人が見当たらないことから、階段を目に留めたリーシャがカミュへと尋ねる。　カミュはそれに返答はせず、無言で階段に向かって行った。
必然的に、リーシャとサラもそれに続くことになる。

「ワン！　ワン！　ウゥゥゥゥゥ・・・」

二階に上がってすぐに、カミュ達は犬の襲来を受けた。
突然走り寄り、吠えだした声に、サラは危うく階段を踏み外しそうになり、リーシャに腕を掴まれる。

「なんじゃ、お前たち！　どうやって入ってきた！　わしは鍵をかけたはずじゃ！」

犬が吠えだした声にカミュ達の存在に気がついた老人は、今まで手にしていた紙を机に置き、犬の下に歩いてくる。

「・・・申し訳ありません・・・『ナジミの塔』にいらっしゃったご兄弟から手紙とこの鍵をお預かりしました。　お渡ししようとお伺いしたのですが、話をする前に扉を閉められてしまいましたので、失礼とは存じながら、この鍵を使用させて頂きました。」

かなりの剣幕で詰め寄ってくる老人に、動じた様子もなくカミュは淡々と言葉を繋ぐ。
犬に引き続き、すごい剣幕で怒鳴る老人にサラはリーシャの後ろに隠れてしまう。

「・・・兄弟だと！？　それに、それは・・・あの子の鍵・・・」

＞盗賊の鍵＜を目にした老人は、纏う怒気を鎮め、カミュが取り出した手紙を受け取った。

そのまま、未だにカミュ達に敵意を向けている犬の頭を撫で、先ほど座っていた椅子に腰を下ろす。　そんな主人の様子に犬も唸るのを止め、老人の足元に丸まるように座った。

「・・・掛けなされ・・・」

手紙の封を切りながら、老人は自分の前の席に座るようカミュ達に促す。
促されるまま三人は老人と対峙するように座る。
サラは犬に対し多少警戒しながら座ったが、もはやこちらに犬が関心を示すことは、老人に敵対心を持たぬ限りなさそうであった。

老人が手紙を読む間、三人は言葉を発することなく、ただ静かに読み終わるのを待つ。
老人はゆっくりとまるで噛み締めるように一文一文を読んでいく。
読んでいた手紙を机に置き、老人が溜息をついたのは、結構な時間が経ってからであった。

「・・・済まなかったの・・・お主たちにそれほどの使命があったとは知らなんだ。　大陸を出るには、他大陸とを結ぶ旅の扉へ続く道を塞ぐ壁を取り払わなければならぬ。　これを持っていけ。」

「・・・これは・・・？」

「それは、『魔法の玉』じゃ。　わしが作ったものじゃが・・・そ

れを壁に取り付けてその紐の部分に火をつければ壁を壊せるじゃろう・・・うむ、火を付けたのならば、壁から距離を取ることを忘れるな。　近づけば、怪我をする。」

老人が机の中から取り出し手渡された物は、丸い毬程の大きさの球だった。
毬よりもずっしりとしていて重量感があり、更にその球体のある個所から一本紐のような物が飛び出ている。　老人が言う火をつける部分がここなのであろう。

「ありがとうございます。」

球を受け取ったカミュは、老人に頭を下げる。
それに倣うように、リーシャとサラも軽く頭を下げた。

「・・・よいよい・・・それで、兄は・・・？」

「「「・・・・・・」」」

兄の安否を気に掛ける老人に対し、三人は言葉に詰まった。
手紙の中には書いていなかったのだろう。

「・・・・」

そんな老人の目をしっかりと見据えてカミュが2・3度首を横に振る。
その様子を落胆した様子もなく老人は見ていた。
手紙には書いてはいなかったが、おそらく覚悟はしていたんだろう・・・

「・・・そうか・・・これで、わしは完全に天涯孤独となってしまったのう・・・　お主たちは兄のことを知っているのか・・・？」

「・・・はい。　塔の中で色々とお聞きしました。」

「・・・そうか・・・兄も報われぬ人生であったが・・・・わしも兄も最後にお主らのような若い希望の力になれた。　もうそれでよかろう・・・」

老人の独白に、サラはもう老人の目を見ていられなくなってしまった。
彼らが悪いことなど何一つなかったのかもしれない。
国や教会の罪人として括られてはいるが、それが全て正しいことではないのかもしれない。
サラはまた悩むのであった。

「・・・嫁や孫も帰ってこぬ。　兄がそのような状況であれば、二

人ももう生きてはなかろう。」

「「「！！！」」」

老人が発した一言にリーシャとカミュは目を見開き、サラは弾かれたように顔を上げる。
まさか、バコタの家族の安否を知らなかったとは思わなかったのだ。

「・・・知らなかったのですか・・・？」

「・・・うむ・・・この子がな・・・あの子の手紙を持ってきてくれたのじゃよ。　傷だらけになりながらもな・・・手紙には妻子の身柄のことが書いてあったのじゃが・・・帰ってきたのはこの子だけじゃった。」

「・・・そうですか・・・」

老人が知らなかったとは思っていなかったサラは、反射的に問いかけて、返ってきた返答にまた気持ちが沈んでいく。

「・・・知っておるのか？　お主たちは？」

「・・・いえ・・・その・・・・」

サラには答えられない。
あの塔の老人の言うことが全て本当のことだとしたら、そんな酷なことはない。
今は優しげな瞳をした老人の胸に再び憎悪の火を灯してしまうことになることをサラは恐れた。　リーシャも老人の真っ直ぐな問いかけに言葉を窮していた。

「奥さんと子どもは、『ナジミの塔』からレーベへ抜ける洞窟で魔物に襲われ命を落としていました。　その犬に手紙をたくしたのでしょう・・・」

「ワン！　ワン！」

カミュが答えた言葉は、リーシャとサラの予想する言葉ではなかった。
嘘。
それは、アリアハンが犯した罪を覆い隠す嘘。
なぜ？
リーシャとサラの胸にカミュに対する疑問が浮かび上がる。
今まで、老人の足元で静かに眠っていた犬でさえ、まるで嘘を言うなとばかりにカミュに吠えかかる。

「・・・そうじゃったか・・・あの子たちには少しも良い思いをさ

せてあげられなかった・・・」

「ワン！　ワン！」

未だにカミュに吠えかかる犬を見つめながら、リーシャは何とも言えない気持ちになる。
アリアハン国に仕える者として、何と言えばいいのか。
謝罪をするべきなのか・・・

「あ・・・」

リーシャが老人に声をかけようとした時に、リーシャの眼前にカミュの手が挙がった。
まるで『言うな』とでも言うように。
リーシャにも解っていた。
今、自分が謝罪の言葉を述べて何になるのか。
老人の気持ちを軽くするどころか、傷を更に抉ることになるのではないか。
結果、リーシャは口を噤み、押し黙ってしまう。

「・・・おぉ・・・すまんの。　引き止めてしまったようじゃの・・・お主たちの旅は長い・・・これから色々な困難にもぶつかるじゃろう・・・時間はいくらあっても足りないくらいじゃ。　こんな老人の話に付き合わせるわけにはいかん。　ほれ、もう行くがよい。」

「「・・・・・」」

「・・・ありがとうございます。　では、この＞魔法の玉＜を頂いて行きます。」

「・・・うむ・・・」

最初に扉の前で出会った時とは違い、優しげな微笑みで送りだそうとする老人に、またしてもサラが口を開いてしまう。

「・・・あの、一緒に・・・」

「サラ！！」

そのサラの提案を予測していたのであろう。
リーシャがサラの言葉を途中で遮る。

「・・・ありがとう、お嬢さん。　じゃが、兄があの塔を出ずに最期を迎えたように、わしも生まれ育ったこの村で死を迎えたいのじゃ・・・」

「・・・・あ・・あ・・」

「サラ、行こう・・」

サラは兄弟そろって申し出を断られ、その決意を理解しながらも、何故という想いを捨てきれなかった。　そんなサラの手を取り席を立つリーシャは、サラを連れだって階段の方に向かっていく。

「・・・では、失礼します・・・」

「・・・うむ・・・わしが言うのも可笑しいが、世の中は色々な思いが渦巻いている。　それに飲み込まれぬよう、しっかり自分の道を歩みなされ。」

老人に向かい一つ頷いた後、頭を下げたカミュも階段の方へ向かっていく。

「ワン！　ワン！　ワン！」

カミュ達が階段に辿り着くと、犬が益々吠えながら噛みつかんばかりの勢いで飛びかかってくる。サラはリーシャの後ろに隠れるが、犬の目的はカミュのようだった。

「どうしたのじゃ？　いつもはこのようなことはないのにのぉ。」

老人が飼い犬の予想外の行動を不思議に見つめるが、三人には何となくその犬の行動の理由が理解できた。
カミュのマントの裾を口で掴み、椅子の方へ引っ張ろうとする。
まるで、『もう一度座り、話をしろ！』とでも言うように・・・
カミュはその様子を、無表情に見つめていたが、やがて座り込み、優しく犬の頭を撫で出した。

「・・・すまない・・・許してくれ・・・」

カミュは犬の頭を優しく撫でながら、犬と目線を合わせ語りかける。
この家に一人暮らす老人に真実を伝えられないことへの謝罪を・・・
カミュの後ろ姿を見たサラは視線を落とす。　リーシャはサラが泣き出してしまう前にその場を立つことにし、『先に行く』と告げ、サラを伴い階段を降りて行った。

「クゥン・・・・」

しばらくカミュの目を見つめていた犬は、諦めにも似た鳴き声を漏らし、首を下げて老人の下へ戻っていく。
その泣き声にどれほどの罵声が織り交ざっていることだろう。
もし、彼が飼い主の惨殺される現場を見ていたのならば、そのことを伝えることが出来ないもどかしさをどれほど悔やんでいるのだろう。
そして、それを伝えられる筈の人間が真実を話さないことにどれほ

どの憤りを感じていることだろう。

カミュは無表情のまま、離れていく犬の後ろ姿を見つめていた。

「ふぉふぉ、どうやら、久しぶりに若い人たちに会い、寂しくなったようじゃな。」

「では・・・」

「ふむ。　気をつけてな・・・」

そんな犬の心情を図る術を知らない老人の言葉に返すことなく、カミュはもう一度頭を下げると、送りだす言葉を背に階段を下りた。

「・・・カミュ様・・・どうして・・・」

老人の家を出て、しばらく歩いたところで、サラが口を開く。
何故嘘をついたのか？
それをカミュに問いかけているのだろう。
自分の口からはとても真実を話すことはできなかったのに、口を開き嘘を告げたカミュに対し疑問を投げかける。　事情を知っている人間からすれば、勝手な言い草である。

「・・・何もかも事実を知るということが、決して幸せに結びつくことでもないだろう。」

「「・・・・」」

カミュから返って来た答えに、サラもリーシャも返す言葉がなかった。
正に今、サラは真実を知ったばかりに思い悩むことになっている。
その先にあるものが幸せに結びつくか等、今のサラには分からない。

「・・・でも、いずれバコタさんが帰って来た時に知ることになりますよね・・・」

「・・・いや、それはない。」

サラは今、自分達が言わなくても、いずれ真実は老人の耳に入ることを言っていた。

しかし、そのサラの言葉を否定したのは、カミュではなくリーシャだった。

「・・・どうしてですか・・？」

「・・・それは・・・」

サラの言葉を反射的に否定はしたが、その理由については言いにくそうにするリーシャにサラは嫌な予感がした。
そして、その嫌な予感を現実にしたのは、やはりカミュであった。

「現状のアリアハンでは、バコタが帰ってくることはない。」

「・・・どういうことですか・・・？」

「今、アリアハン国では民達の不満の捌け口がないからだ。」

「・・・え！？」

サラはカミュが話していることの内容が理解できない。
なぜ、バコタの帰還にアリアハン国民の感情が関係してくるのか・・？

「アンタのように親を魔物に殺されたり、子を殺されたりした人間の怒りの捌け口はどこへ向かう？　魔物か？」

「・・・当然です・・・」

「それは、アンタが魔物に対抗する能力があるからだ。　じゃあ、ない人間は？　魔物を憎んでも自分では魔物に向かっていくことが出来ない人間は？」

「・・・それは・・・」

魔物に家族を襲われ、失い、途方に暮れた人間は数多くいる。
その中には、魔物への復讐の念を募らせ、自ら討伐に出る人間もいるが、大多数は泣き寝入りになってしまう。
大黒柱である男を失った家族は、生活するのもままならず、路頭に迷うことになる。

「そう言う人間の不満が行き着く先は、国家やそれに準ずる施設だ。
それ以外にも、国の要人達への不満なども多く上がっているだろう。　その為にも捌け口を国が作っていく必要がある。」

「・・・・・」

「まだ解らないか？　自分達より境遇が悪い人間がいればそれに対する優越感が現れ、一時的にでも不満は発散される。　ならば、国がそういう人間を作ってしまえばいい。」

「・・・何を・・・するん・・ですか・・？」

聞いてはいけない。
サラの中で、そんな警告がなっているが、サラはカミュに先を促してしまった。

「・・・・公開処刑だ・・・」

しかし、促した先を答えたのは、サラの後ろを歩くリーシャだった。
サラはリーシャの発した言語の意味を頭の中で理解するまでに数秒の時間を要した。

「・・・罪を犯した罪人を、国民皆の前で処刑する。　『この人間は、他の人間にとって厄災となった人物であり、魔物と同じだ』とな。　それも、バコタ程の大物であれば、処刑までの日取りも早くなるだろう。」

リーシャを見つめていたサラの後ろから、カミュが先を話し出す。

頭の中の混乱に拍車をかけるように、前から後ろから答えが出てくることにサラは目眩がしてきた。

「・・・そんな・・・そんな・こと・・」

「それは、国を統べる者が考える国民感情の操作として当たり前のことだ。　簡単に批難できるものじゃない。」

「でも・・・でも！」

「・・・サラ・・・それが事実だ。　殺人などの罪を犯した人間の処刑はそういう形で行われる。　それはサラも知っていただろう？　その人間がどういった人間なのか、どういう生い立ちなのかは国民には関係ないんだ。」

リーシャも、宮廷にいる際に何度かこの処刑に立ち会ったことがある。
ただ、その頃はそんな罪人たちの内情など考えもしなかった。
罪を犯した人間が裁かれることは当然とさえ思っていた。
それはサラも同じだ。
教えに背く者、国家の罪人となった者、そういう人間が裁かれるのは自業自得と考えていた。

「俺が聞いていた話じゃ、バコタは盗賊だが、殺しは一切やってい

ない。　だが、最近スラムでも事件が起こっていない。　だから、アリアハン大陸一の盗人であるバコタを国を挙げて捕縛したんだろう。」

「「・・・・・」」

「・・・おそらく、あの老人もそれは解っていたんだろうな・・・」

カミュはそう言うと、止めていた足を再び動かし、先を歩いていく。
余りにも大きな衝撃を受け、サラは呆然としていた。
そんなサラの背中に優しくリーシャの手が触れた。

「・・・サラ・・・冷たいようだが、バコタのことは私達の旅とは関係のないことだ。　殺しはしていなくとも、罪は罪。　それは、あの老人も、そしてバコタも覚悟の上だろう。」

「！！」

サラはリーシャの言葉に驚き、落胆した。
リーシャは、カミュとは違い、自分と同じように考えてくれていると思っていた。
裏切られた。
サラはそんな思いを持ち、横に立つリーシャに鋭い視線を向けて、後悔した。

リーシャの顔は、今にも泣き出しそうな程、歪んでいたのだ。

リーシャとて、全てを飲み込むこと等できる訳ではない。
カミュのように、全ての事柄に諦めという感情を持ち、自分に関係ないと割り切ることなどできるはずがなかった。
それでも、このパーティーの中で最年長の自分が取り乱す訳にはいかない。
その想いが言わせた言葉だった。

「・・・行こう・・・サラ」

「・・・はい・・・」

二人は重い足を引きずるように、前を歩くカミュを追っていく。
それぞれの消化しきれぬ想いを溜めこんで・・・

レーベの村？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

本当は今回でアリアハン大陸から出るところまで書こうと思っていたのですが、書いているうちに文量がとんでもないことになっていましたので、二話に分けることにしました。

後半部分も、大体書き終えているので、週末には更新できるかと思います。

よろしくお願い致します。

いざないの洞窟（前書き）

ＰＶが４万を突破していました。
ありがとうございます。

今回も、何か予想以上に長くなってしまいました。
書きたいことが多すぎますね・・・・

カミュが向かった先は、先日来た武器屋であった。
中に入ると、まだ開店したばかりということもあり、客もおらず、店主がカウンターに座りながら武器の手入れをしているところだった。

「おっ、いらっしゃい。」

カミュ達三人が入って来たことに気がついた店主は、その厳つい顔に精一杯の営業スマイルを貼り付け歓迎を現してくる。

「・・・すまない、先日言っていた好意に甘えさせてくれるか？」

「ん？　ああ、剣の手入れのことか？　いいぜ、どれをするんだ？」

先日、金額を多めに払ったカミュ達に店主が約束したサービスをさっそく使おうとするカミュに対し、拍子抜けしたような顔をしながらも、店主は快く承諾した。

「ああ、俺のこの剣と・・・アンタもするだろ？」

自分の剣を背中の鞘ごとカウンターに置き、リーシャへと声をかけるカミュに、先程まで下を向いていたリーシャは顔を上げる。

「あ、ああ、そうだな。　これも頼む。」

「ん、確かに預かった。　少しの時間でできると思うから、適当に店内を見ていてくれ。」

「ああ、わかった。　それと、すまないが、この＞革の盾＜も3つくれ。　それぞれの手に合うように加工してもらいたいんだが・・・」

「おう、ありがとうよ。　じゃあ、剣を研いでいる間に盾を装備してみて、不具合を確認しておいてくれ。」

そう言うと、店主は店の奥の作業場に入っていった。

「この先は、どんな魔物が出てくるか分からない。　万全の用意をしておく。　盾も必要になるはずだ。」

サラはカミュから手渡された盾を両手で抱えながら、自分の盾の具合を確認しているカミュを見ていた。

なぜ、何事もなかったように振る舞えるのか？
カミュにとって、この一連の出来事は関心を示す価値もないものなのだろうか・・・
今のカミュの姿に無理をしている様子はみえない。
やはり、彼は人としての感情を持っていないんじゃないだろうか・・・

「サラ、あまり考えるな。」

「・・・リーシャさん・・・」

そんなサラの肩に手をかけ、覗きこんでくるリーシャは、まだ無理をしているようだが、それでも普段通りに接しようとしているのがわかる。
そんなリーシャの優しさに、サラは昨日の夕食時に感じた疑問をぶつけてみることにした。

「あ、あの・・・リーシャさん・・？」

「・・・ん？　どうした？」

リーシャは左腕に＞革の盾＜をつけ、具合を確かめながらサラを見ずに返答する。

「・・・リーシャさんは、カミュ様のどういったところが好きになったんですか？」

「・・・はぁ！？　な、なに！？」

突然ぶつけられた、サラ特製の大型爆弾にリーシャは思わず大声を張り上げた。
サラの問いかけの内容は聞こえていなかったカミュも、突然上げられたリーシャの奇声に振り返り、訝しげに二人を見ている。

「な、何を言っているんだ、サラ！？」

「えっ、えっ？　リーシャさんとカミュ様は、あの・・・そういったご関係に・・・なられたのではないのですか・・・？」

自分がこの堅物な戦士に投げつけた大型爆弾の威力を理解していないサラは、突如としてとんでもないことを言い出したサラに凄い剣幕で詰め寄ってくるリーシャの圧力に対し、昨日確信していた自信と共に声まで尻すぼみになっていく。

「なっ！？　なにが、どうなって、そうなったんだ！？」

もはや、完全なパニックに陥ってしまったリーシャは発する言動もめちゃくちゃであった。
これは、もしかしたら、照れているのでは・・・
先程萎んでいった自信が再び膨らみ始めてきたサラは、カミュに聞こえないようにリーシャに話しかける。

「い、いえ、何となくなのですけれど、リーシャさんのカミュ様への対応が、最初の頃より柔らかくなったような気がして・・・」

「どこがだ!!??」

「あ、あ、いえ・・・」

もう、リーシャの声は怒声になっている。
確かに根も葉もないことを突然言われれば、頭に血が昇るのも当然だ。
ましてや、リーシャは色恋には全く縁がない生活を送ってきているだけに尚更である。

幼い頃から父より剣を学び、父が死んでからは宮廷に入り剣を磨いた。
異性からの視線など、リーシャの剣への羨望よりも嫉妬の方が多く、とても甘い香りのするものとは程遠いものであった。

「・・・サラ・・お前が何をどう勘違いしたのか全く理解でき

ないが、アイツのような捻くれた奴とそんな関係になることは間違ってもない。」

サラの両肩を痛いぐらいに掴み、ゆっくりと否定をするリーシャはそれこそ鬼の形相に近い表情であった。　しかし、もはやリーシャを姉のように慕い始めているサラにはそんな鬼気迫るリーシャの変貌も通じなかった。

「あっ、も、もしかして、照れていらっしゃるのですか・・？」

サラが発したその言葉は、リーシャの顔から表情を無くさせるのに十分な威力を持っていた。　まるで、カミュを彷彿とさせる無表情。
そんなリーシャに自分が言ったことの重大さに気が付き始めたが、もう遅かった。

ゴツン！

盛大な鈍い音と同時に、サラは自分の頭部に凄まじいまでの痛みを感じた。
目の前に火花が飛ぶ。
眩暈と共に、一瞬サラは自分が立っているのかも分からくなる程の衝撃だった。
まがりなりにもアリアハン随一の戦士の拳骨を受けたのだ。

「・・・そうか・・どうやら、私はサラを甘やかしすぎたのかもしれないな・・・」

サラに対し振り上げた拳骨をしまいながらも、未だに表情を取り戻さないリーシャは、サラに向かい何やら不穏な空気を出している。
落ちぶれたと言えども貴族。
平民の出であり、しかも孤児であるサラが本来対等に話せる人物ではない。
何を話していたのか聞こえていなかったカミュでさえ、今のリーシャが放つ雰囲気に間に入ろうとしていた。

「・・・サラ、今日の朝の訓練は、確か剣の素振りだけだったな・・・？」

「・・・えっ？・・・あ、は、はい・・・」

痛む頭に手を伸ばしかけたサラにリーシャが問いかける内容にサラの脳裏に疑問符が浮かび上がる。　しかし、近寄っていたカミュはリーシャの言葉に何かを理解したのであろう、それ以上近寄ることはせず、見守ることにした。

「・・・まがりなりにも魔物との実戦を経験しているサラに素振りだけは失礼だったな。　明日からは、私が直々に稽古をつけてやる。
まぁ、簡単な模擬戦だな・・・」

「えっ？・・・・・・・　えぇぇぇぇぇ！！」

リーシャとの模擬戦・・・
それはいつもカミュと剣を打ち合っているあれのことだ。
剣を持って数日のサラには無理な話に決まっている。
リーシャは自分を殺すつもりなのか？
サラはリーシャの言葉を理解すれば理解するほど、その身を恐怖が支配してくる。

「・・・あ、あの・・・リーシャさん・・？」

「ん？　なんだ、サラ？」

「ひっ！」

恐る恐る顔を上げたサラが見たものは、先程まで無表情だったリーシャの貼り付いたような満面の笑みだった。　無表情だったリーシャを見た後だけに恐怖が大きい。
サラは、痛む頭をさすろうと手を伸ばしながら目を伏せた。

「・・・・あ、あぁぁぁぁぁ！！」

「！！　今度はどうした！？」

突然上がったサラの奇声に、笑みを張り付けていたリーシャも驚き声を上げる。

「・・・私の帽子が・・・・・・・・・へこんでしまってる・・・・」

先程、リーシャが下ろした拳骨は、サラの脳天をとらえるために、サラが被っていた僧侶帽を突き抜けていた。　その際に当然帽子に拳骨がぶつかり破壊したのだ。
通常、僧侶が被る帽子は、その形状を崩さないためという理由と頭部を守るという理由で、その内部をなめし皮で覆っているのだ。
つまり、その強度は通常の＞革の帽子＜よりも高いことになる。
リーシャにあっさり破壊されたが・・・

「・・・柔な帽子だな・・・　そうだちょっと待ってろ・・・・」

自分が破壊したことを全く意に介さず、何かを思いついたように店内を見渡すリーシャに、サラはへこんだ帽子を頭から取り、直に頭をさすりながら溜息を吐く。

「おっ、あった、あった・・・」

そんな言葉と一緒に戻ってきたリーシャは、帽子を外したサラの頭に取ってきた何かを被せる。　サラは突然のことで、目を丸くしながらリーシャの顔を見つめていると、そのリーシャの顔は徐々に崩れていった。

「・・・ぷっ、あはははははははは！　サラ、良く似合ってるぞ！　あはははは！　それを被って、昨日の皺だらけの寝巻きを一緒に着たらもっと似合うぞ！」

「・・・ぷっ・・」

崩れていったリーシャの顔は、爆笑という結果を生み出していた。腹を押えながら笑いだすリーシャは、もう止まらなかった。その状況で、やっと自分に被せられたのは＞革の帽子＜であることに気がついた。普通の装備品のはずが、リーシャにあれだけ盛大に笑われると、恥ずかしい物のように感じてくる。　カミュにまで噴き出されたことが、その感情に拍車をかける。

「・・・それに＞亀の甲羅＜でも背負ったらどうだ?」

「ぶっ！　あはははははは！」

更にカミュの追いうちにブレーキのかかり始めたリーシャの笑いに再びアクセルが踏まれ笑いの段階をステップアップさせた。

「・・・なんだい・・？　いやに賑やかだな？」

リーシャの笑い声が響きわたる店内に、店主が戻ってきた。手にはカミュとリーシャの剣を持ち、あまりにも賑やかな店内に苦笑していた。

「あっ！　こ、これも直してください！」

未だに笑い収まらないリーシャに顔をそむけ、頭から＞革の帽子＜を取り払ったサラは、手に持つ僧侶帽をカウンターに置き、店主に修理を頼みこんだ。

「ん？　ああ、僧侶帽か・・・まあ、直せなくはないが、何せ特製品だからな、ちょいと値が張るぜ・・？」

「・・・えっ？」

店主の言葉に、ゴールドが必要なことを始めて気が付き、サラはカミュに向けて視線を向けるが、そこに立っていたカミュは、とても良い答えが返ってくる様子ではなかった。

「・・・自分の懐から出せよ・・・」

案の定、カミュから帰って来た回答は出せないというものであった。

「・・・どうすんだい？」

「うぅ・・・リーシャさんが壊した物なのに・・・」

「サラ・・・何か言ったかい？」

「い、いえ！　何も！　・・・・・修理をお願いします。」

本来ならば、壊したリーシャが出してくれても良いはずだ。
そう思った、サラの胸のうちはあっさりと見破られ、先手を打たれた。
サラの投下した大型爆弾の結果は、サラの剣の訓練の過酷化とアリアハンから持ってきていた少ない資金の減少というサラにとって最悪な状況に陥れるものであった。

武器屋を出た後、一行はその足でレーベの村から出ることになった。
村からアリアハンへ向かう道と反対方向に歩き出す。

「カミュ、他大陸に行くための旅の扉は、『いざないの洞窟』と呼ばれる洞窟内にあるはずだ。　この先の山道を超えた先に、その洞窟はある。」

リーシャがカミュの横に立ち、これから進むべき道を指し示している。
そこから、少し離れた所でサラはしょんぼりとしていた。
未だにリーシャの拳骨を落とされた頭部はじんじんとした痛みを伴い、おそらく、たんこぶができているだろう。

「サラ！　行くぞ！」

リーシャの声に顔を上げると、もうすでに二人は先に歩き出していた。
慌てて、サラはその後を追いかける。

一行はレーベの村からひたすら東へ向かう。

途中に出てくる魔物は、『ナジミの塔』に住む魔物達等もいた。
カミュやリーシャの敵ではなかったが、剣を持ち始めたサラにとってはどれも難敵であり、しかも、レーベの村の一件以来、極力サラ単独で魔物に向かわせるようになったリーシャは手を貸すことをギリギリまでしなかった。
サラの身に危険が迫るとリーシャが救ってはくれるが、二人が既に魔物を片付け終わった後も一人で魔物と対峙しなければいけないことはサラにとって辛いものだった。
中でも、山道に入ってすぐに姿を現した＞魔法使い＜の時は、サラにとって苦い思い出となる。

日も高くなり、見渡す限り草原だった所を抜けたあたりで、道が傾斜になり始め、そのまま山道へと入っていった。山道を歩くことを知っていたカミュとリーシャは、日が暮れる前に山道を抜けるためにここまでの道で休憩を挟まずに来ていた。
そのため、サラの息遣いは若干荒れていて、歩む速さも衰えていた。

そんな矢先、先頭を行くカミュの足が止まったのを視界の隅で確認したサラは、『休憩か』と胸を撫で下ろしたが、その期待はもろくも崩れることとなる。

「・・・」

無言で背中の鞘から剣を抜き放つカミュの姿に、サラは大いに落胆する。
剣を抜いたということは、また魔物との戦闘の合図なのだ。
しかし、リーシャに続いて、腰にさした＞銅の剣＜を抜き、身構えた先に出てきたのは人であった。　黒に近い色のフードを頭からすっぽりと被り、異様な雰囲気を持ってはいるが、姿形は人のものである。　それが三人、脇道から姿を現した。

「　サラ！　気を緩めるな　」

一瞬ほっと息を吐いたサラにリーシャの檄が飛ぶ。
何を言っているのか理解ができなかったサラの視線の先にいる、フードを被った一人がサラに向け右手を掲げた。
サラがそれを視認したと同時に、フードの男の掲げた手から炎を纏う球体がサラ目掛けて飛んできた。　サラがそれを『メラ』だと認識できたときには、避けることも防ぐこともできない距離まで迫っていた。
思わず目を瞑ってしまったサラは、予想していた衝撃と熱が来ないことを不思議に思い、目を開けると、そこにはレーベの村で新調した＞革の盾＜を掲げたリーシャの背中が見える。

「　サラ、あれは人じゃない。　＞魔法使い＜という魔族だ。　」

リーシャが振り返らずに告げた言葉にサラは驚く。
＞魔族＜
獣のような魔物とは違い、知能が発達したもの。

本能で人を襲う魔物とは違い、理性を有し、理知的に獲物を追い詰めることができる者。
それをサラは教会にある、書物の中でしか見たことがなかった。

この世界の魔物には大きく分けて、二種類の魔物が存在する。
自然に存在する獣のような姿形を持ち、知能が低く本能で人を襲う魔物
魔王バラモスが登場するまでこの世界には存在していなかったが、魔王と共にこの世界に現れた魔族。　知能は高く、時には魔物を従えていたりすることもある。

今、三人の前にいる＞魔法使いも＜その中の一種であった。
魔王と共に現れ、アリアハンが旅の扉を封じる前にこの大陸に渡って来た種だ。

サラが人の姿をした魔物に戸惑っている間に、カミュは一人の＞魔法使い＜を切り捨てていた。　カミュの剣によって袈裟切りに切られた＞魔法使い＜は肩口から盛大に血を噴き出し、山道を赤く染めながら崩れていく。
サラには、それが人が倒れていくように見えた。

「　サラ！　呆けるな！　」

リーシャの声に我に返ったサラは再び剣を握る手に力を込めるが、その手は震えていた。
初めて見る人型の魔物。
それは、魔物＝獣の図式が成り立ってしまっていたサラの心に大きな波紋を作り出していた。

「くそ！」

再びリーシャに向かい『メラ』を放ってきた魔法使いを火球をかわしながら突き出したリーシャの剣は、魔法使いの胸を突き抜け、背中からその刀身を表す。
フードの奥にある口のような部分から、血液を吐き出す姿が、サラの目の裏にこびり付いた。

サラが動けないことに気がついた＞魔法使い＜が、一点突破を考え、サラに向かい攻撃を繰り出してきた。『メラ』による目くらましを仕掛けた後に、そのまま突進してくる。
サラは自分に向かってくる魔法を辛うじて避けることはできたが、態勢を崩したため魔法使いの突進に対処する術がない。

「サラ！」

リーシャの叫びが空しく響いた。
サラは、リーシャの叫びを耳にし、苦し紛れに手に持つ＞銅の剣＜を振り抜く。
それが、サラの持って生まれた運なのか、サラの言う『聖霊ルビス』の加護の賜物なのか、サラが振るった剣は、カウンター気味に突進してきた魔法使いのフードに隠れた眉間部分に吸い込まれていく。

元々打撃系の武器である＞銅の剣＜がまともに眉間を打ち抜いたのだ。
いくら非力なサラの剣とはいえ、その衝撃は相当なもの。

魔法使いは頭部から噴水のように血液を撒き散らし、崩れるように倒れていった。

「・・・あ・・・あ・・・」

自分の剣が起こした事象を確認したサラは、声にもならない呻き声をあげる。
リーシャは一息、安堵の溜息を洩らし、サラに近寄っていく。
カミュは、魔法使いの持っていた物資などを革袋に入れた後、そんなサラの様子を冷ややかに見ていた。

「サラ・・・・何度も言うが、あれは人ではない。お前は人の命を奪ったわけではない。」

リーシャは、今サラが何を考え、何に押しつぶされそうになっているのかが解っていた。
リーシャも討伐隊に入隊したばかりの時、あの魔法使いに遭遇したとき、恥ずかしことだが今のサラと同じような状況に陥ったことがあった。
魔物と言えば、その姿は獣のようなものが多い中、突如出現した人型の魔物。
討伐隊に入隊する以前から、その存在は知っていたが、初めて目にした時、殺人に近い行為をすることに手が震え、足がすくんだ。

「・・・は、はい・・・」

「サラだけじゃない。　私も、初めてあれと対峙した時には、同じ葛藤があり、殺した後は、今のサラと同じように罪悪感に苛(さいな)まれた。」

「リーシャさんもですか・・・？」

「・・・ああ、恥ずかしいことだがな・・・あの時は、今のサラの歳よりも下だったかな・・・」

「私よりも・・・」

リーシャの告白に、今まで胸を締め付けるようにあった罪の意識が軽くなったような錯覚に陥る。

「ああ。　だが、どんな姿形をしていても魔物は魔物。　私が属すアリアハンの国民達の生活を脅かす存在に変わりはない。　・・・・そう考えるようにした。」

「・・・そうでしたか・・・」

自分と同じような葛藤を、アリアハン随一の戦士が駆け出しの時分

に持っていたこと。
そして、それを克服するための考え方を聞き、サラも項垂れていた頭を決意を持って上げる。　顔を上げたサラをリーシャは優しく見つめていた。
すぐに克服できるものではないが、そのために歩き出すことを決意したことをそんなリーシャに伝えるためにサラはリーシャに向けて微笑んだ。

「・・・獣であれば殺してもいいとは、随分都合がいい話だな。」

その時、微笑み合う二人の表情を凍りつかせる言葉が後ろからかかった。
今まで、前にいたはずのカミュがいつの間にか二人の後ろに移動していた。

「　なんだと!?　」

カミュの言葉に、いつものように過剰に反応するリーシャに反し、サラはその真意を知りたくなった。

「・・・では、カミュ様は、なぜ魔物を殺すのですか？　カミュ様も今まで数え切れないほどの魔物を倒して来た筈です。」

リーシャのいつも通りの反応を受けていたカミュは、突然自分に向

け強気な発言をしたサラの方に視線を向け、少し考えるそぶりをした後、その口を開いた。

「・・・俺に敵意を向けたからだ・・・魔物であれ、人間であれ、俺の存在を無にしようとする者ならば、殺す・・・それが、旅に出る時に決めたことだ。」

「・・・人間でも・・・」

「ああ、たとえ人間でもだ。」

サラは予想外の答えに言葉を失った。
まがりなりにも世界を救う存在である勇者が、その救うべき対象の『人』を殺すことを宣言したのだ。

「・・・もしかして・・・もう・・・すでに・・・」

サラの考えは最悪の方向に向かう。
それは、カミュが既に人間を殺しているのではないかということ。
そして、もしそうだとすれば、殺人者を国家や教会を上げて勇者として送り出したことになる。　サラにとって信じることができず、そして許すことのできないことだ。

「・・・何を考えているのかは解るが、残念ながら、まだ人は殺したことはないな。」

「・・・本当か・・・？」

「・・・俺がアンタ達に嘘を付くメリットが見当たらないが・・・？」

サラの問いかけに答えるカミュに、横にいたリーシャから再度確かめるような言葉が飛ぶ。

リーシャにとっても、カミュが人を殺したことがないかを確かめたかった。

もし、他国と戦争にでもなれば、自分のような宮廷騎士は前線に立って、他国の兵士を殺していくのが仕事となるが、ここ数十年、魔物が横行し、国同士の争いは皆無になっている。　魔王の登場により、人同士で寄り添っていかなければ生きてはいけないからだ。

故に、現在では、犯罪者ぐらいしか人を殺すような存在はいない。

「・・・で、アンタ達はこれから先、何の目的で旅を続けるんだ？」

「・・・は？」

再び開けれたカミュの口から出た、自分達に向けられた質問にリーシャは素っ頓狂な声を上げた。　サラもリーシャの横で首をかしげ

ている。

「・・え？　魔王討伐の旅ではないのですか？」

「・・・目的が魔王の討伐ならば、この先、魔物であれ人間であれ、自分達に敵意や害意を持つ者を倒していかなければ、自分達が目的も達せずに死ぬだけだぞ。　悪いが、俺はそんな気はない。　自分の力量不足で殺されるならまだしも、何もせずに死ぬことは断る。」

「「・・・・・」」

続けられたカミュの言葉に、リーシャとサラの二人は返答に窮していた。

確かに、カミュの考えは否定が出来ない。

最終目的は魔王の討伐だ。

それは、世界を救うため、人々を今の苦しみから救うための旅。

そんな旅をしている自分達に敵意を向ける人間にされるがままにしていれば、自分達の使命も果たせずに、土に還る可能性も否定はできない。

「何れにしろ、俺は魔物だから殺すわけじゃない。　これから先もそれは変わらない。　魔物であれ、俺に敵意を見せず生活をしている魔物なら殺すことはしない。」

「・・・傍で人が襲われていても・・・ですか・・？」

カミュは言葉と共に二人に背を向け歩き出していた。
サラはそのカミュの背中に向けて、疑問を投げかける。
それは、サラにとって最後の境界線だった。
そんなサラの内情を知ってか知らずか、珍しくカミュは立ち止まり、少し考えるように天を仰いでから、口を開いた。

「・・・実際、その場に立たないと解らないな。　それが魔物にとって食料という死活問題なのか、単純に襲っているだけなのか・・・襲われている人間も襲っている魔物にも言い分があるだろうからな・・・」

「・・・カミュ・・・」

リーシャは、以前カミュから聞いた言葉を思い出した。
『魔物にも生きる権利はある』
人の中にも、弱い魔物をいたぶり殺す者はいる。
それは、世間では肯定されてはいるが、カミュはそれを許さないのだろう。
そんなことをリーシャは考えたが、それ以上に、サラに対して自分の考えをカミュがこれ程語ることに驚いた。

仲間として見るというリーシャとの約定はあるが、自分を曝け出すことを義務付けた覚えはない。
これは、カミュの心情の変化なのか？

考えてみると、カミュの一連の言葉は、言い方は最悪だが、サラを悩ます罪悪感を軽減させる効果がないとは言い難いものだ。
『自分を襲ってくるものを殺すのは正当な行為だ』と言っている。
その真意がサラに届いているかは解らないが・・・・

「・・・できれば、日が暮れる前に山道を出たい。」

再び背を向け歩き出したカミュに、リーシャもサラも黙って従うしかなかった。
カミュが話したことを二者二様の想いを持ったまま・・・

その後も、山道には魔物が多く、今まで出会っていなかった魔物等も一行の前に立ちはだかった。
尻にある針に潜む毒によって、人の神経を麻痺させ、動けなくなった人を食す『さそり蜂』などは、アリアハン大陸にいる魔物の中でも最上級の魔物だ。
針による攻撃を回避しながら、その胴体を切断していくリーシャとカミュをサラは呆然と見ていることしかできなかった。
サラは、その姿を見ていて、『カミュの考えを否定するにも、その

行動を止めるためにも力量が足りない』ことを改めて実感し、今後のリーシャによる稽古を真剣にすることを決意するのであった。

魔物との遭遇の多さに、一行の計画は崩れ、山道を抜ける前に日が沈み始め、周辺を赤く染め始めた。　そんな太陽を忌々しげに見つめ、軽く舌打ちした後に振り向く。

「・・・予想より時間がかかった。　このまま進んでも日が完全に沈んでしまえば、方向感覚も狂う。」

「そうだな・・・この周辺で、休める場所を探そう・・・」

カミュの申し出を快諾したリーシャは、周辺を見回し、火を熾せるような場所を探し始める。　サラにとっても、この申し出は渡りに舟であった。　朝から、休憩をほとんど取ることもなく歩き続け、戦い続けてきたため、今まさにサラの膝は笑っている状況だったのだ。

やがて、宿営地を決め、リーシャは火を起こし始める。
その周りを囲むように三人は座り、レーベで買った干し肉を炙り食していく。
そんな中、リーシャが、干し肉を噛み切りながら、おもむろに口を開く。

「そう言えば、サラ・・・・はむはむ・・・先程、サラの歳の話になったが・・ああ！　噛み切れないな！　・・・・実際、いくつなんだ、サラは？」

「・・・え？」

干し肉を口にいれ、もごもごしながら話すリーシャの言葉を何とか聞き取った、サラであったが、質問の意図が見いだせない。

「・・・いや、カミュと同年代だとは思ってはいるが、はっきり聞いたことはなかったからな・・・別に深い意図があるわけではないんだ。」

「え？　あ、はい。　１７になります。」

「・・・はぁ・・？」

リーシャに対しての回答であったが、返答したのはカミュの間の抜けた声であった。
良く見ると、リーシャも口に入れた干し肉を噛むことを忘れてしまったように、唖然としていた。

「・・・どうしたんですか・・・？」

「・・・アンタ、俺より年上だったのか？」

二人の姿に、何か変なことを言ってしまったかと思い、わたわたとするサラに対して発したカミュの言葉は、非常に失礼な言い草だった。

リーシャも、そんなカミュの言葉に我に返り、何かを思いついたような笑顔を見せる。

「この中では、お前が一番年下ということになるな。　これからはその辺をわきまえた言動をするんだな。」

「ぷっ！」

リーシャが得意げに話す姿が滑稽で、思わずサラは噴き出してしまう。

カミュは一瞬不機嫌そうな顔をしたように見えたが、すぐに元の無表情に戻っていた。

「旅に年功は関係ないだろ。　ただ先に生まれたというだけだ。その証拠に、少なくとも俺はアンタよりも賢さは持ち合わせているつもりだ。」

「なんだと！」

「俺は＞マヌーサ＜にかかって、味方を攻撃したりはしてないはずだが・・・？」

「ぐっ・・・くそっ、古い話をいつまでも・・・・」

サラはいつの間にか、こんな二人のやり取りに慣れてきている自分がいることに驚いた。
旅に出たばかりの時は、リーシャの怒声を聞くたびにどうしようかと慌てたものだが、今は笑みを零し、食事を続けながら二人を見ていることができる。
それが良いことなのかどうかは解らないが、少なくとも、少しずつ仲間として行動し始めていると感じていた。
怒鳴りながらも、本気で怒っている訳ではなさそうなリーシャと、時に口端を上げながら話すカミュのやり取りは、サラが眠るまで続いた。

翌朝、日が昇ると同時に山道を歩き始め、日が高くなる前に平原に出ることができた。
平原を地図を見ながら歩くカミュを先頭、魔物を警戒しながらリーシャが最後尾といういつもの布陣で目的地を目指す。

途中に一軒の家が立っており、その中には＞いざないの洞窟＜を管理しているという老人が住んでいた。　その老人と話をし、その家から北にある湖の畔に＞いざないの洞窟＜に続く道があるという情報を得て、一行は北に歩を進めた。

老人の話の通りに、北に進むと、周りを山に囲まれた澄んだ湖があり、その畔に地下へと続く階段があった。　十年以上も前に閉じられた場所へ続く階段とは思えないほどに手入れがされており、滑って足を踏み外したりする心配もなく、一行は地下へと降りて行った。

「貴方は、カミュ殿ですか？」

階下に降り、一本道を進んだ先に、何人かの兵士が立っていた。
着ている鎧は、リーシャが着ている物と同じもので、それがアリアハンの兵士であることを物語っていた。

「・・・はい。　カミュと申します。」

いつものように外行きの仮面を被ったカミュにリーシャとサラはお互いの顔を見合せて苦笑しあう。

「国王様から話は聞いております。　どうぞお通りください。」

「・・・国王様から・・・？」

リーシャの問いかけに、表情を崩さず、一人の兵士が答えるために前に出る。
それはリーシャも良く知る、宮廷騎士の一人であった。
上級貴族の出で、剣技や指揮力はほとんどないが、父親とその家柄の力で、宮廷部隊長までのし上がった人物である。
そして、常にリーシャを嘲っていた人物でもあった。

「久しぶりだね・・・どういう風にこの大陸を出るつもりなのかは知らないが、国王様からそこの若い奴が大陸から出るところを見届けるようにと指示を頂いたんでね。　あまりに遅かったんで、使命の重さに逃げ出したのかと思ったよ。」

「なに！？」

その七光（ななひかり）の言葉に一瞬頭に血が上りそうになったリーシャだが、よくよく考えると、毎日のように交わされるカミュの皮肉の方がずっと身に詰まされるものであることに気付き、抑えることにした。
このボンクラの言っていることは、全く自分には関係のないことだ。
カミュ流に言うと、『名前を覚える必要性も価値もない人間の戯言（たわごと）』

だ。
別段敵意と殺意を向けてきたわけじゃない。
相手にする必要はない。
そうリーシャは考えることにした。

一向に噛みついてこないリーシャを不審に思ったが、その部隊長はリーシャを無視し、カミュへと声をかける。

「・・で？　どうやってこの壁の向こうにある旅の扉に向かうつもりなんだ？」

「・・・・下がっていてください。」

サラは後ろの方でやり取りを見ながら、カミュの外行きの仮面にも二通り物があることに気がついた。
一つは、本当にカミュが敬意に近いものを持って相手に接している時のもの。
もう一つは、全く相手にする気もない人間に対するもの。
サラは不謹慎ながらも、もし、今あの部隊長がカミュの態度に腹を立て、剣を抜いたとしたら、カミュはどうするのだろうと考えていた。
しかし、少し考えた結果、簡単に切り捨てた後、『こいつらを洞窟内に捨てておけば魔物に食われる。　アンタ方が話さなければ判明しないことだ。』と何の感情も出さないカミュしか思い浮かばない自分の頭を振り、考えることを止めてしまった。

そんなサラの関係ない脳内会議を余所に、カミュは＞魔法の玉＜を

壁に引っ掛けていた。
壁に取り付けられた＞魔法の玉＜から紐が飛び出ている。
その紐にカミュは小さく、『メラ』によって火をつけた。

「　下がれ！　」

火をつけ走って戻ってくるカミュの言葉にその場にいた全員が数歩後ろに下がる。
そして、カミュが自分達の場所まで辿り着いた時、凄まじい程の爆音と眩いばかりの閃光が地下のそれ程広くない広間を包んだ。

「・・な、なんなんだ、いったい！　お前たち！　何をした！」

耳をつんざくような爆音に、兵士たちの全員の耳が機能しなくなる。
声は発しているが、聞こえないのだろう。
もはや、怒鳴り散らしているとしか聞こえない程の音量で問いただしてきた。

全員の耳の機能が回復した後に、カミュが兵士たちに説明をする。
＞魔法の玉＜の出所は明確にせず、『ナジミの塔で見つけた古の道具』とだけ答えた。
部隊長は完全に納得はできないが、余りにも信じられない光景だったため、追及を諦めることにしたようだった。

「・・・では、私達は参ります。　お勤めご苦労様でした。」

全く心のこもっていない労いの言葉をかけ、カミュは先へと進む。
その後を、小走りにサラが追って行った。

「ふ、ふん。　精々頑張るんだな。　まあ、魔王討伐ができなければ、アリアハンにお前が帰ってくる場所などないだろうがな・・・」

「・・・・」

やはり、カミュが語った内容は事実だったのか・・・
リーシャは、部隊長の一言に、腹を立てるよりも、その事実が確認できたことが何よりも哀しかった。
出来るならば、自分が魔王を討伐し帰ってくるまで、自分を育ててくれた古い使用人であるあの老婆だけは無事でいてほしい。
そう、思いながらリーシャは二人の後を追った。

カミュ一行の姿が、洞窟の奥へと消え、広間には近衛兵達しかいなくなった。
誰もが、先程ここであったことが信じられない心境であり、皆口を開くことをしなかった。

「・・・何を呆けている！　これより国王様の命を遂行する。　外で控えている職人たちを呼び作業に当たらせよ！　くそっ！　派手にぶち壊しやがって！　何を使ったのか知らないが、時間をかけるわけにはいかない。　早急に壁を修繕するぞ！」

部隊長の指示の下、部下である兵士たちが慌ただしく動き始める。
外に職人を呼びに行く者、弾け飛んだ瓦礫を片付け、修繕の準備をする者。
部隊長が言うようにそれは時間との戦いである。
いざという時の為に部隊全員を連れてきてはいるが、他大陸の魔物と対峙したことのない人間たちだ。　何がどうなるか予想もつかない。
先に進んだカミュ達が取りこぼした魔物達が、こちらに向かってく

る可能性もある。
その為にも、最低限の防壁はすぐに作っておかなければいけない。

部隊長は国王の命と叫んだ。
つまり、アリアハン国は、自国が送りだした勇者を自国で締め出すつもりなのだ。
アリアハン大陸から出れば、後は勝手にやってくれということなのだろう。
しかし、国としても、魔王討伐は願うが、自国の民をこれ以上苦しめないためにも絶対的に必要なことであった。
それが、この行動として表れたのだ。

更に地下に進んだカミュ達は、入り組んだ洞窟内を彷徨いながらも、着実に前に進んでいた。　しかし、洞窟内部は長年の放置により劣化が進んでおり、ところどころ床が抜けていて進めなかったり、壁が崩れていて進めなかったりと、行ったり来たりを繰り返していた。
　その中でも、魔物の変化がサラに負担をかける。

「サラ、大丈夫か？」

「・・・はい・・・ホイミ・・・」

サラの詠唱と共に淡い光がサラの患部を包み癒していく。
先程の、一角うさぎの上位種である、アルミラージとの戦闘でその鋭い角により腕に傷を負った。
魔物は、アリアハン大陸では見たことのない種のものばかりだった。
そして、その魔物達の力量も、アリアハン大陸の魔物とは大きく違っていたのだ。
カミュとリーシャはいつも通りに斬り伏せてはいくが、やっと剣が振るうことができるようになったばかりのサラにとっては厳しいものだ。
リーシャがよくカバーしてくれてはいたが、少しの気の緩みでサラの腕はアルミラージの角の攻撃を受けることになる。

「・・・すまない・・・今日は少しやりすぎたかもしれないな・・・」

リーシャがサラに謝っていること、それは、今日の朝の山道でのことだろう。
朝、日が昇る前に起こされたサラは、すでに剣の稽古とは名ばかりなカミュとの模擬戦を終えたばかりのリーシャに剣を構えるように言われた。
最初は戸惑っていたサラであったが、自分から頼み込んだことでもあるため、リーシャに大人しく従い、出発までの間、リーシャに剣を打ち込むことになったのだ。

「・・・当然だな。　剣を持つのも初めてに近い相手に、あれ程のことを最初から求めることがおかしい。　俺にはアンタがコイツを殺そうとしているようにしか見えなかったがな・・・」

「そ、そんなことあるわけないだろ！」

「・・・・何故口籠るのですか・・・？」

サラはカミュの言葉に、一瞬口籠ったリーシャに一抹の不安を抱いたが、そんなことはないだろうという希望を胸に問いかけてみた。

「サ、サラまでか！？　私の時は最初からあんな感じだったんだ！　私がサラに害意を持つ訳がないだろ！」

「・・・はぁ・・・脳筋戦士と同様に考えられたら、普通の人間は倒れるぞ・・・」

「　なっ、なんだと！　」

こんな魔物が蔓延（はびこ）る洞窟内でも全く雰囲気を変えない二人がサラにはとても頼もしく映る。　それと共に、完治した腕を見ながら笑いがこみ上げてきた。

「ふふふ、大丈夫です、リーシャさん。　私もいつまでもこのままでは駄目ですので、これからも稽古をお願致します。」

「そ、そうか。　うん、わかった。　たが、その日の旅に支障をきたさないようにしよう。　すまない、今日は私も張り切りすぎたかもしれない。」

困ったような表情で頭を下げる、リーシャの貴族らしからぬ行動に今度はサラの方が慌ててしまった。　手を大きく振りながら、リーシャに顔を上げてもらい、一行は再び洞窟の奥へと歩を進めていった。

「こっちじゃないか？」

先程、稽古について話した階から一つ降りた階層は、階段を降りたところから三方向に分かれていた。
右・中央・左の三つである。
リーシャが示したのは階段を降りて左の方向であった。

「・・・そうですね。　とりあえず行ってみましょう。」

リーシャの言葉に同意するサラの一言で一行の進行方向が決まり、左へと進路を取る。
真っ直ぐ進むと、更に右に折れる道があり、そこに大きな扉があった。

「・・・鍵がかかっているな・・・」

「ほら見ろ！　そんな立派な扉があるんだ。　やはりこっちだろう。」

「＞盗賊の鍵＜では開きませんか？」

一人得意げに語るリーシャを無視し、カミュはサラに言われた通り、革袋から取り出した＞盗賊の鍵＜を鍵穴に差し込む。

カチャン

乾いた金属音と共に鍵が開き、カミュと未だに得意げに鼻を鳴らすリーシャの二人で大きく重い扉を押し開いて行く。

開かれた扉の先に続く通路を三人は奥へと進んでいった。

「・・・・行き止まりですね・・・・・」

「「・・・・」」

サラの言うとおり、その通路は少し進むと壁にぶつかった。
この壁が、＞魔法の玉＜で破壊する必要がないものであれば、間違いなく行き止まりだ。

「・・・・戻りましょうか・・・・」

溜息交じりなサラの提案に、カミュは素直に頷き、もと来た道を戻っていく。
リーシャも何とも言えない表情を作りながら後に続く。

「・・・こっちじゃないのなら、中央の道だな・・・普通は中央の道が怪しいものだ。」

「・・・リーシャさん・・・」

リーシャの言葉にサラは曖昧に返事を返すが、再びリーシャの提案

通り、降りてきた階段から中央にある通路を進むことになる。

「「・・・・・・・・」」

「・・・はぁ・・・もう進路に関しては、アンタは黙っていてくれ。」

再びあった鍵のついた扉の先は壁であった。
言葉が出ないサラとリーシャは無言で壁を見上げていたが、カミュは溜息交じりに辛辣な言葉をリーシャに投げかけた。

「くっ・・・・」

悔しそうに顔を歪めるリーシャには申し訳がないが、サラもカミュの申し出に賛成であった。『ナジミの塔』への地下通路のときから、リーシャの指し示す道は行き止まりばかりなのだ。サラやカミュでなくとも溜息が出て当然だろう。

気を取り直し、残った右への通路を進む。
ここにも、先程までの二本の通路と同じように扉があったが、その扉の先は今までとは違っていた。

扉を開け、進んだ先には、少し開けた広間があり、中央には渦を巻いている小さな泉があった。

「・・・これが、旅の扉・・・？」

サラが確認するように口を開くが、残る二人も知識こそあれ、実物を見るのは初めてだった。　故にサラの問いかけに確かな回答が出来ない。

「・・・おそらく、そうだろうな・・・」

「・・・これに、飛びこむのか・・・？」

カミュの自信なさ気な答えに、リーシャは弱気な質問を更に返す。
そんな二人のやり取りにサラは不安になってきた。
少し、泉を眺めながら考えていたカミュではあったが、意を決したようにリーシャを見つめ口を開いた。

「俺から先に入る。　状況上、これが旅の扉に間違いはないだろう。」

「・・・わかった。　その後にサラを入れ、私が最後に続こう。」

「・・えっ!?　私ですか!?」

「なんだ?　サラはここに残るのか?　最後にサラを残しては魔物が出て来た時の対応が出来ないだろう。　二番目に入れば、向こうにはカミュがいる。」

「・・・はい・・・」

リーシャの当然の心配に反論することができず、リーシャの申し出を受けるしかサラにはできなかった。

「・・・先に行く」

リーシャとサラのやり取りを尻目にカミュが旅の扉へと飛び込んでいった。
眩い光と共にカミュの姿が旅の扉の中に消えていく。
それを見届けたリーシャが、サラの背中に手を置き、先を促してく

る。

心細そうにリーシャを見上げたサラの目を見つめ、リーシャが一つ頷いた。

サラも覚悟を決め、リーシャに頷き返した後、目を閉じ、鼻を摘まんで旅の扉に足から飛び込んでいった。

カミュの時と同じように光を伴って消えていったサラを見送った後、リーシャもまた、周囲への警戒をしながら飛び込んだ。

暗い洞窟内が最後の光に包まれた後、再び闇と静寂が支配した。

「国王様、先程魔法兵士から報告があり、勇者一行がアリアハンを出たようでございます。」

大広間にて食事中のアリアハン国王に国務大臣が火急な用事と近寄り、話した内容に、国王は手に持つフォークとナイフを置き、しばし目を瞑った。

「・・・そうか・・・それで、＞いざないの洞窟＜は？」

「はっ！　ご命令通り、兵士と職人達により、再び閉じさせております。」

「・・・うむ。」

その大臣の報告に安堵したためか、国王は食事を再開した。
時折何かを考えるように、手を止めながらも食事を続けていく国王の姿は、締め出す形になってしまったカミュ達への懺悔のためか、それとも魔王討伐に馳せる想いか、それは横に立つ大臣にも解らないものであった。

いざないの洞窟（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

やっと、アリアハン大陸脱出です。
ここから、本当の旅が始まります。
このペースじゃ、いつになったらダーマぐらいまで行くのか想像もつきませんが・・・

ゆっくりペースですが、これからもよろしくお願いいたします。

※勇者一向装備品等（前書き）

とりあえず、アリアハン大陸離脱時のパーティの装備品一覧です。

※勇者一向装備品等

名前：　カミュ

素性：　アリアハンの英雄オルテガとその妻ニーナとの息子

年齢：　１６歳

装備：　頭）　サークレット（中心に青く輝く石がはめ込まれている）

身体）　革の鎧

盾）　革の盾

武器）　騎士の剣

※祖父から譲り受けたもので、その強度は＞鋼の剣＜より劣る

魔法：　メラ

ルーラ

※現在使用が確認されたもの

名前：　リーシャ

※正式名称は　リーシャ・デ・ランドルフ

素性：　アリアハン下級貴族並びに宮廷騎士

※父の代では中級貴族として爵位も拝命していたが、父の死後、爵位を返還し、下級貴族となる

年齢：　２２歳ぐらい？

※現在詳しい年齢は確認されていない。

装備：　頭）　なし

身体）　革の鎧

盾）　革の盾

武器）　騎士の剣

※アリアハン宮廷騎士に配給される剣。
大量生産品であるため、カミュの持つ祖父の剣よりも劣る強度

魔法：　使用できない

名前：　サラ

素性：　アリアハン教会僧侶
　　元孤児

※元はレーベの商人の娘であったが、アリアハンに向かう途中で両親を魔物に襲われて亡くし、その後、アリアハン教会神父に引き取られ、僧侶として育てられる。

年齢：　１７歳

　※その容姿や体型から、幼く見られることが実は若干コンプレックスとなっている

装備：　頭）　僧侶帽

　※　中をなめし革で補強されており、単純な＞革の帽子＜よりも防御力は高い

　身体）　革の鎧

※　僧侶の一般的な服装である法衣の下に着込む形で装備している。

盾）　革の盾

武器）　銅の剣

※バコタの妻子の遺骨の傍にあったもの。
それが、バコタの妻の物なのか、それともアリアハン兵士の物なのかは定かではない

聖なるナイフ

※初期装備品であったが、リーシャから剣を習うために、今は腰に挿したままである

魔法：　ホイミ
ピオリム
ニフラム
マヌーサ？

※　マヌーサは契約は完了しているが、行使したことがない為、発動するかは定かではない

ロマリア城（前書き）

ＰＶが５万に届きそうです。
しかも、ユニークも７０００人・・・
私以外にもドラクエ好きは数多くいるとは思いますが、これほど多くの方に読んでいただけるとは思ってもみませんでした。
本当にありがとうございます。

今回もちょっと長めです・・・（汗

ロマリア城

サラは、自分の顔を照らす熱気に目を覚ました。
森程ではないが、周辺を木々に囲まれた美しい場所である。
サラの感じた熱気の元である焚き火が中心で赤々と燃えており、その光が周辺の闇を照らしていた。
＞いざないの洞窟＜に入る頃は、まだ日も傾いてはいなかったが、洞窟内で結構な時間を要し、また、サラが気を失っていた時間もあったのか、空には星が輝き、周辺は夜の帳が広がっていた。

「　ん？　サラ、眼が覚めたのか・・？」

サラが夜空に広がる星の輝きに目を奪われていると、横からリーシャが声をかけてきた。
サラが目を覚ました時にはそこにはいなかったのであろう。　その手にはうさぎを二羽持っていた。

「あっ、リーシャさん・・・申し訳ありません。　・・・・ここは・・・？」

「ああ、ここは、おそらくロマリア大陸だろう。　あの旅の扉はロマリアに通じているはずだからな。」

「・・・・ロマリア・・・・」

ロマリア王国
アリアハンと同じように王権による統治をおこなっている国であり、その大陸の大きさから広い領土と、大きな生産力を持ち、産業などもアリアハンとは比べ物にならない力を持っている国である。

「ああ、アリアハンからの出ることはできた。　ここからが本当の旅になるだろうな。　カミュとも話し、まずはロマリア城に向かいロマリア国王様に謁見する。　とは言え、すでに日が落ちた。　今日はここで休む。」

「あっ、は、はい。」

頷いたサラの頭をうさぎを持っていない手で撫でた後、火に薪を数本くべ、リーシャはナイフでうさぎを捌き始めた。　その手つきはやはり慣れたもので、うさぎが解体されていくのを直視できないサラに見えないように捌かれていた。

リーシャがうさぎを捌き終わった頃に、カミュも戻ってきた。
その手に種類の違う魚と、ねぎのような物を持っていた。
魚は川でとれる種類ではないことが見て取れることから、この近くの海でカミュが取ってきたのかもしれない。

「カミュ、魚は捌くのか？」

「・・・アンタは魚を生で食べる趣味でもあるのか？」

ナイフを水で清めながらの問いかけに対してのカミュの答えに、リーシャは口籠った。

基本、料理を得意とするリーシャであれ、アリアハン国民である以上、魚を生で食す習慣はない。　ソテーにしたり、煮込んだり、焼いたりして食すのが普通だ。　はるか遠い所にある国ではそういう習慣があるらしいが・・・

「・・・流石に私も生で食べる習慣はない・・・焼くのなら串が必要だろ？」

「・・・・」

カミュの厭味に近い物言いに反論せずに串を渡すリーシャを眺めながら、サラの頭の中には先日のことが横切っていた。　途端に、リーシャの拳骨が落ちた場所が痛み、余計なことは口に出すことはしなかったが・・・・

串にうさぎの肉とカミュが取ってきたねぎを交互に刺し、そのまま焚き火の周りに直に刺していく。　魚の方も同様だった。　焚き火を囲うように三人が座り、身体を温めながら肉などが焼けるのを待つことになる。

「ロマリア国王様に謁見された後は、どこに向かわれるのですか？」

いままで、焦点が合っていない瞳で炎を眺めていたサラが、ふと思いついたように顔を上げ、カミュの方を見ながら口を開いた。

目的は魔王討伐の旅ではある。

アリアハンを出てから今まで、サラは確認したことはなかったが、一言に魔王討伐とは言っても、実際その魔王がどこにいるのか、どう進めば近づいていけるのかが分かっていない。　故にサラはどこに行くのも、カミュの判断についていくしかないのだ。

「ロマリア国王様との謁見内容次第だが、ロマリアの南東に＞アッサラーム＜という街があるらしい。　その街は大きく、栄えているというから何か情報が入るだろう。」

答えはカミュの横にいるリーシャから返って来た。

カミュやリーシャにしても、魔王の居場所が分かっている訳ではない。

一つ一つ情報を掴みながら前進していくしかないのだ。

「おそらく、魔法兵士がアリアハンからカミュが出たことを伝えてはいるだろう。　援助が受けられるかもしれない。」

「・・・・はぁ・・・・」

「な、なんだ!?」

「・・・アンタの幸せな頭にはつくづく感服するよ・・・」

リーシャの続く言葉に、盛大な溜息を洩らしたカミュは、頭に血が上りかけたリーシャの血流にさらに拍車をかける。

「　なんだと!!　」

「あれだけ、アリアハン国のやり方を見てきて、まだそんなことを言えるアンタを尊敬する。　これほどの忠義者を外に出そうと躍起になっているアリアハンもアリアハンだがな・・・・」

「・・・・くっ・・・・」

カミュの言う通り、アリアハンを出るまでに、リーシャもサラもアリアハン国の裏側を何度か見てきた。　それは、とても許容できるものではなかったし、むしろ拒絶感さえ覚えるものだった。　それでも、リーシャは宮廷騎士なのだ。

「・・・ロマリア国王に謁見したとしても、援助など受けることなどできる訳がない。　他国が推挙する人間を擁護すると思うのか?」

「で、でも・・・今、世界の国同士、人間同士で争っている場合ではありません。　それは一国をお治めになる国王様であれば、ご理解されているはずです。」

カミュが言った内容に、今度はリーシャではなくサラが噛みつく。
その言葉に、カミュは『・・・お前もか・・・』とでも言いたげな視線を向け、溜息をついた。

「それが、理解できないから国王なんだろ。　会ったこともないが、どこも同じだろ。　自国の立場と自分の立場を第一に考えていることだろうよ。　でなければ、オルテガの死の時にあれほどアリアハンに批難が集中するはずがない。」

「「　！！　」」

オルテガの死。
その情報は、アリアハン国を絶望の淵に追い込むものだった。
しかし、それは決してアリアハンだけではない。
アリアハン国王が世界に向けて発した援助申請を受け、様々な国がオルテガの旅を援助してきた。　それは資金援助であったり、物資であったりと様々であったが、世界中が一人の青年に期待と希望をかけたことは事実なのである。
その国々にとって、その援助した相手が何も成さないまま命を落とすということは、ただ資金・物資をどぶに捨てたようなものと同じ

となる。　その矛先はそれを押し出した国家。　それによりアリアハン国は世界中の国々から糾弾を受け、その立場を急落させ、現在のような辺境国というレッテルを貼られることになったのだ。

もちろん、その家族への影響もあったことだろう。
オルテガの家への援助打ち切りの話は何度となくあった。
オルテガの台頭を快く思っていなかった、国家の重役に位置する貴族たちや文官を牽引するもの達等、それはかなりの数に上った。
オルテガの今までの功績を、国命によって命を落としたにも関わらず、無にしようとしていたのだ。　その数は、日を追うごとに数を増し、激しくなってくる他国からの糾弾により、ついに国王の判断が下ることになる。
カミュの家は、オルテガの功績による恩赦を停止された。
残った収入は、祖父が宮廷騎士として残した功績に対する僅かな恩赦だけであった。

「謁見が叶ったとしても、援助の申し出どころか、下手したら余計な依頼を押し付けられることになるんじゃないか・・・？」

カミュは、無表情で夢も希望もないことを言う。
その言い方、内容に二人は言葉に窮した。
以前リーシャが言ったように、カミュの生い立ちは自分が考えていたよりもずっと過酷なものであったのかもしれない。　親のいない孤児たちは、今日食べていく物もなく、毎日に絶望している。　それに比べればいいとはいえ、カミュは魔物ではなく人間に人生を狂わされた人間なのかもしれない。　リーシャはそう思った。

「・・・も、もう、焼けただろ！　ほら、明日も早い。　サラもさっさと食べて、早く寝ろ。」

「あっ、は、はい！」

強引に話題を変えるように、刺さっていた串を取り、頬張り始める。重い空気に溜まりかめていたサラも、そのリーシャの行動に乗っかり、慌てて魚が刺さった串を手に取った。

そんな二人の様子を呆れたような溜息を吐き、水を口に含んだカミュの横顔に浮かぶ僅かな悲壮感が、隣でねぎを口に入れていたリーシャの頭の中に無意識に残っていた。

翌朝、焚き火の火を土をかけて消し、一行は北へ向けて進路を取った。

というのも、昨夜カミュが取ってきた魚は、南方にある海で取ってきたもので、その話から、南には海しかないことを知った一行が目指す先は北と決まったのだ。

いつものように、カミュを先頭に歩き出す。

しばらくは広く見渡す限り平原が続き、周囲の海から吹く潮風が心地よい。
サラは、なびく自分の蒼味がかった髪を押えながら、壮大な平原を目を細めて見つめていた。

その内、前を横切っていく馬車が見えた。
馬二頭に引かれた、かなり大きめな荷台には、白く大きな幌が被さっており、その内部は見ることが出来ない。
先頭には一人の男が手綱を引き、馬車を制御している。
その風貌は商人には見えず、むしろならず者と言っても過言ではないものだった。
歩くカミュ一行と徐々に距離が離れていく馬車をサラは何か胸につかえるような感じを持ち眺めていた。

「あの馬車は、おそらくロマリア城に向かっているんだろう。　あれと同じ方向に向かおう。」

同じように馬車を見ていたリーシャは自分達の向かうべき方向を示してくれた馬車の後について行くように指示を出し、それにカミュも頷いたことから、進路を若干変更し、馬車が向かった方角へ歩きだすことになった。

馬車の車輪の跡を追いながら数刻歩くと、不意に先頭を歩くカミュが背中から剣を抜いた。
その様子にリーシャも腰の剣に手を置き周囲を警戒する。
サラも銅の剣を抜きリーシャとは反対方向に警戒の目を向ける。

見渡す限り平原なだけに、それはすぐに確認できた。
草原を歩く一行を挟み込むように、両側から現れた魔物は、左手には巨大な芋虫のような魔物、右手にはアリアハン大陸に出てきたフロッガーのような巨大なカエルだった。

芋虫のような魔物はその大きな体躯に無数の足をつけ、こちらを威嚇するように身体を置きあがらせてくる。
魔物の名はキャタピラー。
見た目は、蝶類の幼虫のような姿形ではあるが、芋虫とは違い、その背中は硬い鎧のような皮膚で覆われており、剣で切り刻んだり、突き刺すことが容易ではない。

カミュは右手に剣を持ったままキャタピラーに突っ込んでいき、左手を掲げ『メラ』と唱える。　カミュの指先から飛ばされた火球は、狂いなくキャタピラーに命中し、キャタピラーが苦悶の表情を見せ、わずかな時間ではあるが隙を作る。
その隙を利用し、カミュはキャタピラーの懐に入り、剣を上から降り下ろした。

ガキャーン

まるで金属と金属がぶつかったような音を上げ、カミュの振り下ろ

した剣は上へと弾かれる。　完璧な振り下ろしだったにも関わらず、その剣を弾かれたことに驚きを隠せないカミュには若干の隙ができた。

『メラ』の炎から抜け出したキャタピラーはそのまま態勢を崩したカミュに体当たりのように突進し、カミュの身体は後ろへ飛ばされる形となった。

「　サラ！　」

カミュが魔物に遅れをとる姿を初めて見たサラは、その光景を不思議な眺めのように呆然としていたが、リーシャの声に我に返り、間近に迫った巨大なカエルの攻撃をかわすことができた。

「　サラ！　そのカエルは毒を持っているようだ！　気をつけろ！　」

リーシャの言葉を裏付けるように、巨大カエルが振り下ろした手の先にあった木の枝に付く葉は、毒液を掛けられたように煙を吹きながら萎れていった。

＞ポイズントード＜
その名の通り、その身に毒を持ち、その毒にて人間を犯して食す魔物である。
その毒はバブルスライムよりも若干強い性質を持つ。

「この！」

サラに近づいてきたポイズントードをリーシャが手に持つ剣で突き刺した。
後ろからの刺突は、正確に魔物の脳天を貫通し、その傷跡から赤ではない体液がこぼれる。
剣を抜き、もう一匹のポイズントードに身構えたリーシャは、飛んでくる舌にその剣を絡められた。　ポイズントードの唾液が滴る舌が剣に絡まり、力比べとなる。
サラは、以前おおありくいと力比べをしたのを思い出し、魔物の力の強さにリーシャの身を心配した。
しかし、そんな心配は、このアリアハン随一の戦士には無駄なものだった。

「ふん！」

「ギニャーーーーー！」

しばし力比べをしていたリーシャは剣を横に寝かせ、逆に舌に剣を這わせたと思ったら、そのまま力任せに舌を斬りちぎった。
リーシャに舌を切られたポイズントードは、力のぶつける場所を失い、奇声を発しながら後ろへころがっていく。
そこには、現在キャタピラーと戦闘中のカミュがいた。
カミュはキャタピラーから剣を背け、その剣を転がって来たポイズントードの眉間に突き刺す。　眉間に剣が深く突き刺さったポイズ

ントードは手足をバタつかせた後、その力も尽き絶命した。

ポイズントードから剣を引き抜いたカミュは、その剣を横薙ぎにキャタピラーに向け振るった。　カミュの剣は、ちょうどカミュに向かってその体躯を上げていたキャタピラーの腹部を薙ぎ、数本の脚と共にその体液を飛ばす。

背中を覆う金属のように厚い殻と違い、腹部は通常の昆虫のように柔らかく剣でも傷が付くことを理解したカミュは、怯んだキャタピラーの喉元に剣を突き刺し、その剣を下に滑らせていく。

大した抵抗もなく滑るカミュの剣は、キャタピラーの喉元から腹部までを切り裂き、剣を引き抜き、カミュが距離を空けたのと同時にその体躯から盛大に体液を撒き散らし、キャタピラーは崩れ、沈黙した。

残るはキャタピラー一匹。

傷一つない三人に敵う訳もなく、切伏せられていった。

「　ふぅ、何とかなったな。　流石はロマリア大陸の魔物だ。　アリアハンとは比べ物にならないな。　まさか剣が通じないとはな・・・」

最後のキャタピラーを切り倒したリーシャは、剣に付いた体液を振り払い、鞘に収めながら、今対峙した魔物達の感想を漏らす。

サラは何もしなかったにもかかわらず、どっと疲れが出て、その場に座り込んでしまった。

「・・・カミュ様が飛ばされるところは初めて見ました・・・・」

「・・・・」

サラの正直な感想に、カミュは一瞬顔をしかめたが、そのまま表情を失くし、その瞳でサラを射抜くように見つめる。

「あっ、い、いえ、そういう意味ではないのです！　ただ、驚いてしまったというだけで・・・別にカミュ様が弱いとか・・・そういう・・・意味・・・では・・・」

「・・・・」

サラが言葉を紡ぐにつれ、カミュの視線が厳しくなってくるのを感じ、尻すぼみになる。

「いや、実際その通りだ。　カミュはまだまだということだな。」

「・・・・」

サラの言葉を肯定するように、頷きながら腕を組むリーシャにカミュの視線が突き刺さる。
そんなカミュの視線もどこ吹く風で、リーシャはサラを立たせなが

ら笑っていた。

「ん？　なんだ？　悔しかったら、せめて私に勝てるようになれ。」

「・・・ちっ・・・」

続くリーシャの言葉に、舌打ちをしたカミュは剣を背中の鞘に収め、先を歩いて行く。
リーシャはそんなカミュの態度に軽く微笑みながら、起き上がったサラの手を放し、カミュの後に続いた。
リーシャの優しい微笑み、カミュの拗ねたような態度、サラの頭の中でそれらが結びついた先は、やはりレーベで考えていたことと同じであった。

その後も何度か戦闘があったが、カミュとリーシャの活躍により、何とか魔物を撃退し、一行はロマリア城城下町の門前に辿り着く。
ロマリア城はアリアハンと同じように、ロマリア城下町までを一括りに城壁で覆っている。この門をくぐった先には城下町が広がり、

ロマリア国民の生活がある。
その先に王族が住み、また国政を司る者たちが働く本城がそびえ立つのだ。
門は、アリアハンのそれよりも大きく、そこから続く城壁の高さもアリアハンとは比べ物にならず、城壁の長さも肉眼では果てが見えない程であった。

門の横には番所があり、兵士たちが待機している。
そこに、先程カミュ達の前を横切った馬車が止まっていて、何やら兵士たちと会話をしていたが、決着がついたのか、門の中へ馬車ごと入っていった。

「・・・さっきの馬車ですね・・・」

「商人か何かだろ。」

「・・・商人にしては、らしくない格好でしたけど・・・」

サラの呟きに、リーシャは気にした様子もなく答えるが、サラは先程感じた以上の胸騒ぎを感じていた。　立ち止まってしまったサラを促し、一行は番所に向かう。

「　止まれ！　」

城下町の護衛も兼ねている兵士が門の両側に立っており、その手に持つ槍をカミュの前で交差させ、その行く手を遮った。
これも、城下町に住む国民を守るための仕事である。
それは、カミュ達も解っていた。

「アリアハンから来ました、カミュと申します。　後ろの二人は従者となります。」

「・・・アリアハンから・・・？」

「はい・・」

アリアハンという国名を出すと、右側にいた兵士は訝しげな顔をした。
左側にいる兵士は、一目で嘲りの顔だと解る表情を浮かべ、カミュ達一行を舐めるように見ている。

「・・・私は、ここ数年ここの門を任されているが、お前たちは初見だな・・・それ以前に来たことがあるのか？」

「・・・いえ、ロマリアには初めて訪れました。」

カミュの返答を聞いた右側の兵士は更に思案顔を深め、疑わしい者

を見るようにカミュを見る。　左側の兵士はもはやにやけ顔を隠そうともせず、サラを見ていた。

「・・・では、『ルーラ』で来たわけではないのだな。　どうやって来た？」

「・・・旅の扉で来ました。」

「旅の扉だと！！　あれが開通したというのか！？」

ロマリアにも、アリアハンが旅の扉を封印し、行き来が出来なくなっていることは知られている。　自国の安全だけを考えた卑怯な行為であり、アリアハンは臆病者の国だと嘲る人間は多数いる。　未だにニヤニヤと厭らしい目でサラやリーシャを見ている左側の兵士は間違いなくその部類の人間なのであろう。

「はい。　ですが、おそらく、我々が旅の扉に入ってから再度封印が施されたと思われますので、使用はできないでしょう。」

「「「！！！」」」

カミュの言葉に驚きを表したのは、何も門兵だけではなかった。
その言葉に、サラとリーシャの顔にも驚愕の色があらわれていた。

まさか、自分達がアリアハンを締め出されるとは考えてもいなかったのであろう。

「へっへっ、やっぱりアリアハンだな。　腰抜けの卑怯者ばかりの集まった国らしいや。　自分達が犯した罪の尻拭いもせずに閉じこもったまんまだ。　けっ！」

驚きから立ち直れない三人に対し、予想していたのか、初めから決めつけていたのかは解らないが、左に立つ兵士がその手にある槍を下ろし、嘲るような笑いと言葉を一向に向けていた。

「くっ！　なんだ・・・」

その言葉に頭に血が上りそうになるリーシャをカミュの手が押える。ただ、リーシャの顔前に出されただけであるが、その威圧感はリーシャでも声を紡ぐことはできない。　力の強さという面では、まだリーシャに分があるが、こういう交流面では明らかにカミュの方が上なのだ。

「失礼しました。　ロマリア国王様には、話は通っていると思います。　謁見をお許し頂ければと思い、ここを訪れました。　城下町に入る許可を頂ければと思うのですが。」

そう話す、カミュは一通の書状を右側の門兵に手渡した。

それは、アリアハン城を立つ際に、国務大臣から手渡された物資の一つで、アリアハン国王の花押が押された認可状であった。　他国の街や城に入る際にカミュ達の身分を証明するものだった。

「・・・ああ・・・・・・・・うん、確かに・・・入れ」

カミュから手渡された書状にじっくりと目を通した兵士は、許可を出し、槍を下げた。
その兵士に一礼した後、カミュは門を潜っていく。
リーシャは左側の兵士に、未だ収まり切らない怒りの視線をぶつけその後を追う。

「　ふん！　お前たちの国がどれだけのことをやったと思ってるんだ！　卑怯者が！」

「・・・・」

通り抜けざまに罵声を浴びせられ、リーシャの顔色が変わるが、それは再度カミュによって抑えられることになる。　サラは何故ここまで罵倒されるのかが理解できず、顔を俯かせながら門をくぐった。

「何故止める！　あそこまで祖国を馬鹿にされて黙っていろと言うのか！」

門から離れたところで、今まで抑えていた怒りの感情が爆発し、その矛先は前を歩くカミュへと向かう。　サラはリーシャを抑えるようにリーシャの腰に手をかけるが、そんな力ではリーシャの突進は止められない。

「・・・アンタは本当に馬鹿なのか・・・？　アンタはロマリアの国敵にでもなりたいのか？　ロマリアでアリアハンの人間が問題なんか起こしてみろ、今の人間を見て解るように反アリアハン感情が爆発してすぐに戦争になるぞ。」

「・・・ぐっ・・・しかし、お前は悔しくはないのか！？」

「・・・はぁ・・・アンタはこの俺に愛国心でも期待していたのか？　それこそ、アンタの脳はどういう構造になってるんだ？」

「なっ、なんだと！！」

「・・・カミュ様・・・」

カミュの言葉は、サラにも信じられなかった。
レーベの生まれであるサラであっても、国籍はアリアハンであり、長く生活をしてきたアリアハンに対し、国の騎士であったリーシャ程ではないにしろ愛着はある。
故に、あの兵士に対し、やはり抑えてはいるが怒りの感情は持っていたのだ。
ただ、リーシャが我慢し、カミュもそれを抑えていると思い込んでいたからこそ、下を向き堪えてきたのだ。

「あの兵士が言うように、アリアハンが送りだした者が世界中での英雄というわけじゃない。それはアリアハンに近ければ近いほど、憎しみに近いものも持っているんじゃないか？」

「なに！？」

サラは更に続いたカミュの言葉を理解が出来ない。
彼が言う英雄とは、紛れもなく、アリアハンの英雄オルテガであろう。
つまり、それは彼の父親なのである。
それを憎しみの対象と平然と言いのけるカミュが信じられなかった。

「そいつの旅の為に国家が提供する資金や物資の出所は、大抵その

国に住む人間達だ。　無理な搾取を受ければ、国民の生活水準は間違いなく下がるだろう。　今、この城下町を見ると、その片鱗は見えないが、それはここ十数年の中での国民の踏ん張りか、それとも為政者の手腕なのかは解らない。　どちらにしても、そんな状況に追い込む原因を作った国がそれに対しての後始末もせずに自国の為だけに鎖国したということは事実だからな。」

それは、リーシャも同じであった。
自分が仕える国とそして幼い頃からの憧れの人物をこれほどまでに愚弄されたことに目の前が暗くなるほどの怒りを覚えたのだ。

「　カミュ！！　お前は父親をなんだと思っている！！　」

リーシャはカミュの胸倉を掴み、怒りに燃えた目でカミュを睨みつける。
そのリーシャの姿を抵抗することなく受け入れ、冷やかな目でカミュは見つめ返していた。

「・・・前も話したと思うが、アンタがオルテガにどんな想いを持っているのかは知らないが、俺には理解が出来ない。　俺はあれを英雄とは思わないし、ましてや身内とも思ったことはない。　この話は平行線を辿るだけだ。」

「　貴様！！　」

「リーシャさん！　落ち着いて下さい！」

カミュの言葉に、今まで我慢していた怒りに更に倍以上の怒りが上乗せされ、リーシャは掴んでいる腕を放し、カミュに向かって殴りかかろうとする。
サラは、周囲からの奇異の視線を感じ、リーシャの行動を止めるため、その背中に抱きつくような形でしがみ付いた。

「・・・はぁ・・・アンタにはアンタの、俺には俺の考え方がある。それを押しつけることもしないし、逆にアンタの考えに染まることもない。　それを理解した上での旅じゃなかったのか？　それに、今俺が言ったことをあの門兵が証明したのを見ただろ・・・アンタがどう思おうと、この国ではアリアハンもオルテガも崇拝する対象じゃないってことだ。」

「・・・・ぐっ・・・・・」

「で、でも、この国の人たちの中に魔王に向かって行った人がいましたか？　魔王に立ち向かおうとする人間をその成否だけで判断するなんて・・・」

リーシャはレーベの宿屋でカミュと交わした約束の中には考え方については何も入っていないことを思い出し、言葉に詰まる。
確かに、「お互いの衝突については目をつぶる」と言っていた。

それは何もサラとカミュの間だけではない。　リーシャとカミュの間のことも含まれているはずだ。
言葉に詰まるリーシャの後ろから、サラは自分の考えをカミュにぶつけてくる。
しかし、それは本来カミュにぶつけるには筋違いの話だった。

「それこそ、ロマリア国民には関係のない。　力のない人間、その日を過ごすことに必死な人間に魔王を倒せという方が馬鹿げた話だろう。　要は勝手に国から討伐に向かい、勝手に死んでいった人間のおかげで苦しんだという事実、それだけだ。」

「・・・勝手に死んだだと！！」

「　リーシャさん！！　」

まだ血が上って飛びかかろうとするリーシャをサラは必死で押さえる。
そんな二人を余所に、カミュは周りを気にした様子もなく、ただ怒りに燃えるリーシャの目を無表情に見ていた。

「アンタ方がどう思っていようと構わないが、この国の人間にはこの国の人間の主張がある。　これからロマリア国王に会いに行けば、おそらく今以上の理不尽な言葉を浴びせられる可能性もあることだけは理解してくれ。　それでなければ、旅の邪魔だ。」

淡々と、リーシャとサラに話すカミュの言葉は抑揚がなく、それこそ人形相手に話しているようなものであった。
サラはカミュの話を納得はできないが、理解はできた。
ロマリアで問題を起こせば国同士の戦争となる。
リーシャやサラが一時の感情に流されたことの結末は、多くの人間の死に繋がるのだ。
旅を続けるどころか、それは大袈裟に言えば、人の歴史に終止符を打つキッカケになりかねない問題だということだ。

「・・・・わかりました・・・・」

「・・・・」

カミュはそのままメイン通りを歩き、真っ直ぐ王城に向かい歩を進める。
その後を、未だに目に怒りの炎を残し、前を歩くカミュの背を睨みつけるリーシャが続いた。　リーシャとて、カミュに言われるほど馬鹿ではない。　カミュが何を懸念しているのかは十分に理解している。　しかし、理解することと心で納得することとは違うのだ。
その冷めやらぬ怒りの全てをカミュにぶつけるしか、今のリーシャには自分を抑える方法が見つけることができなかった。

「で、どうするんだ！？　このまま王城に向かうのか！？」

先程も感情を捨てきれていないリーシャは、カミュに行先を訪ねる声がほとんど怒鳴り声になっていた。
そんなリーシャをサラも抑えることはせず、カミュも気にした様子もなく歩いて行く。

「いや、宿屋を手配しておいた方がいいだろう。　今日は謁見が終われば、ここに泊まることになるだろうからな。」

カミュの言葉に、二人は反論することはせず、宿屋を探すため歩き出した。
その時、左手の方から声がかかった。

「いらっしゃい、いらっしゃい。　今日は良い武器を仕入れといたよ。　寄って行っておくれ。」

三人は声のかかった方向を確認すると、そこには盾に武器が重なった独特の看板を掲げていることから武器屋であろう店が開いていた。

店先で、主人であろう人間が手を叩きながら客引きをしている。

「おい、兄さん。　旅の人たちだろう？　見て行ってくれよ。」

「どんな武器があるんだ？」

店主の言葉に興味を引かれたのか、珍しくカミュが街の人間の声に耳を貸した。
カミュが店の方に歩いて行くことに驚きながらも、リーシャとサラもその後を追う。

「おっ、ありがとうよ。　今日はな、これさ、これ。　この＞鉄の槍＜が仕入れられてな。　どうだい？　王宮の兵士たちが使っている槍よりもいいものだと思うぜ。」

「・・・・」

店主が差し出した＞鉄の槍＜は柄の先に鉄製の刃が付いているごくありふれたシンプルな槍であった。　王宮の兵士達が使っている物と大した違いはない。　店主の商売トークなのだろう。　カミュは、それが理解できていたため、そのことを責めることはしなかった。

「・・・いくらだ？」

「おっ、買ってくれるのか？　６５０ゴールドになるぜ。」

店主の答えに、少し考えるそぶりをしてから、カミュはリーシャへと振り返り、口を開いた。

「・・・アンタは槍も使えるのか・・？」

「あ？　な、なんだ、突然。　私はそんなもの要らないぞ。　この剣で十分だ。」

突然振られた話題に、リーシャは驚きながらも、自分の腰に下げている剣を軽く叩きながら、カミュへと返答をするが、その答えはカミュが期待していたものではなかった。

「・・・はぁ・・・誰もアンタの為だとは言ってないだろう。　その僧侶にも、これから先は戦闘で役に立ってもらわなければ困るんだ。　アンタが槍を使えるのなら、教えられるだろう。　非力な人間であれば、＞銅の剣＜より射程距離が長い槍の方が戦いやすいんじゃないか？」

「・・・わ、私ですか！！」

リーシャとカミュのやり取りを、我関せずで眺めていたサラは、それこそ飛び上らん程に驚きを表していた。

「一概にそうだとは言えないだろう。　槍のような長い武器はそれなりの訓練をしなければ、手足の様には動かせない。　一朝一夕に使いこなせる武器ではないぞ。」

「だからこそ、アンタがいるんだろう。　それにここまで来る間に出てきた魔物たちを見てなかったのか？　あれは、アンタでもなければ、もはや＞銅の剣＜でどうにかなる魔物じゃない。」

「・・・あ、ああ・・・」

カミュの言うことは尤もだ。
あの硬い殻に覆われた魔物などは、とてもじゃないが＞銅の剣＜で叩き潰せるような相手ではない。　それこそ、殻ごと突き刺すような鋭利な武器でないと太刀打ちはできないだろう。　それは、リーシャも解っていることだった。

「わかった。　槍は私が教えよう。　・・・任せろ。　伊達に宮廷騎士をしてきたわけじゃない。　大抵の武器は使いこなすことはできる。」

「え、えぇぇぇ!!　リ、リーシャさん!?」

少し考えた後、リーシャが発した言葉は、サラの戦闘訓練の過酷化を宣言されるものであり、サラは驚きと共に天を仰ぎたくなるような心境であった。

「・・・決まりだな・・・親父、その槍をもらおう。　それと、そこに掛けてあるのは何だ?」

「ありがとうよ!!　ん?　これか、これは＞鎖帷子（くさりかたびら）＜っていう防具だ。　細い金属を編み込んだものでな。　まあ、刺突には弱いが、剣等で切りつけられても傷はつかないって代物だ。」

「・・・なるほど・・・じゃあ、それももらう。　コイツに合うよう仕立ててくれ。」

カミュは店主が指差す防具をサラに合わせるよう指示を出す。
サラはその言葉に更に驚くことになる。

「カ、カミュ様!!　わ、私ばかり、そんな・・・・」

「・・・何を勘違いしているのか知らないが、アンタがこの中で一番危険なんだ。　命が惜しければ、下に着ている＞革の鎧＜を脱い

で、これに変えておけ。」

「そうだぞ、サラ。　ゴールドのことは気にするな。　確かに旅にはゴールドが必要だし、私達の旅はそれほど裕福な旅ではない。たが、使うことを惜しみながら旅をしていても、命を落としてしまえば、そこで終ってしまう。　私達もこの＞青銅の盾＜という物を買っておくさ。」

そう言って、自分の懐から出す訳でもないにも関わらず、すでに自分用の盾に目をつけていたリーシャは店内に置いてある＞青銅の盾＜を手に取り、店主に渡し、サイズを合わせるよう指示を出していた。
カミュはその様子を呆れたように眺め、自分の＞青銅の盾＜を手に取り、具合を確かめることにした。

「おう、ありがとうよ。　お嬢さん、こっちに来て一度試着してみてくれ。」

「・・・は、はい・・・」

つい何日か前にあった出来事を彷彿とさせるようなやり取りに、サラはどこか達観したような顔をしながら、店主に言われた場所に歩いて行く。

「・・・そう言えば、私達が来る少し前に馬車で来た人たちがいましたけど、あの人たちから商品を仕入れているのですか？」

サラは、店主に寸法を合わせてもらいながら、街に入る時に感じた疑問を店主に投げてみた。　あの馬車を動かしていた人間は、とても商人とは見えない姿だったが、もしかしたら、色々な場所でものを仕入れて、店に提供するために旅をしている一団なのかもしれない。　そう考えたのだ。
だが、店主から返ってきた言葉は、サラの想像を遥かに凌駕するものであった。

「　とんでもない！！　あんな奴らから仕入れるものなんて、うちの店で取り扱う訳ないだろ！　その前にあんな奴らから買うものなんてない！！　」

それは、怒りの感情を含ませた怒鳴り声だった。
突然の怒鳴り声に、目を丸くしたサラであったが、すぐに店主が何故怒りを露わにしているのか疑問がわいてきた。

「・・・どういうことだ・・・？　あいつらは何者なんだ？」

しかし、店主に疑問を投げかけたのは、サラではなくリーシャであった。
サラと店主のやり取りを何気なく眺めていたリーシャであったが、店主の変わり様に、サラと同じ疑問を持ったのだ。

「・・・あいつらは・・・・奴隷商人だよ。　今の時代、自分達の子供を口減らしの為に売る親も少なくない。　そこから買ってきたのか、それとも攫ってきたのかは知らないが、定期的にここにやってきては奴隷を売っていく。　その後、適度にこの城下町で遊んでいくから街は潤うが、俺は嫌いだ。」

「・・・奴隷商人・・・・？」

「・・・・」

魔王が現れ、世が乱れたと言えども、それほど世情が変わるわけではない。
『奴隷』という存在は、それ以前から存在する。
それは、孤児であったり、攫われてきた者だったり、罪人であったりと様々であるが、大抵は、碌な扱いを受けていない。

「・・・そんな・・・一体誰がそんな、奴隷なんかを買うというのですか？」

サラは、孤児ではあるが、教会の神父にはそのような扱いを受けてはいない。
アリアハンには奴隷商人など来ることは、サラの記憶の中にはなかった。
故にそんな状況があることが信じられないのだ。
ただ、先程、店主に疑問を投げかけたリーシャと、最初から一言も発していないカミュはそんなサラをそれぞれの表情で見つめていた。

「・・・誰って・・・そんなの貴族以外いねえだろうが！　この国には奴隷商人から奴隷を買えるほど裕福な人間なんて、貴族達しかいねえよ。」

「・・・えっ・・・？」

サラは想像できなかった。
国を担う人材であるはずの貴族が奴隷商人から、奴隷を買い、虐げているということが・・・
思わず、リーシャの方に顔を向けるが、リーシャの表情を見て愕然とした。
あれは、知っていたという表情。
知っていて、それをサラが知ったことを心配するような表情。
つまり、アリアハンでも、貴族が奴隷を持っていたという事実に他ならない。

「・・・それにな・・・あいつ等は、女ばかりなんだよ、連れてく

るのが・・・奴隷として買われた女どもの扱いなんて知れてるさ。」

「・・・慰みものか・・・」

今まで一言も発していない、カミュがぼそりと呟くような言葉を発した。
それは、サラに絶望を感じさせるのに十分な威力をもったものであった。

「リ、リーシャさん・・？」

サラは救いを求めてリーシャに縋ろうとするが、その懇願は振り払われることになる。

「・・・サラ・・・貴族の中にはそういう人間もいる。　もちろん少数ではあるが、奴隷商人から奴隷を買い、自分の欲求を満たそうとする人間がな。　だが、今は国にそれを取り締まる法律がない。」

「・・・そんな・・・」

サラは教会で祈る時のように、胸の前で手を合わせ、リーシャを見つめることしかできなかった。

この時代、このような城下町で暮らしている人間は、ゴールドさえあれば食に困るようなことはない。　そして、五体満足であれば、労働内容さえ選り好みしなければ、資金を稼ぐ方法がある。　しかし、辺境の村などでは、自給自足の生活が当然である。　作物が取れるうちは良いが、天候などにより不作が続けば、それに比例して生活が苦しくなってくる。　そうなれば、扶養家族が不要家族になるのも時間の問題なのだ。

まずは歳をとり、労働力として戦力にならない老人たちが対象となり、近くの山などに捨てられる。　その後は、未だ食すだけの小さな子供達の順番になるのだが、そこでゴールドに変える方法が出てくるのだ。

それが奴隷商人だ。

奴隷商人に自分達の子供を二束三文で売り払う。　元は食費が掛るだけの存在だった者がゴールドに変わるのだ。　嬉々として我が子を売り払う親も出てくる。

むしろ、そのために子を生し、母乳から離れる頃に売り払う親までもいるのだ。

我が子に名前すら与えず、全く関心を示さない。

教育も施さず、その子の将来を憂うこともない。

それが、今の時代なのだ。

「・・・調整は終わったか・・・？」

そんな二人の心の葛藤にまったく関心を示すことなく、店主に向かって仕事の進み具合を問いただすカミュの表情は能面のように冷めたものだった。

「あ、ああ、すまない。　余計な話をした。　頼む、忘れてくれ。」

「・・・別にアンタの今の話を上伸しようとは思わないさ。　それぞれ想いはあるだろう。　だが、よく知らない人間に自分の内心を語るのは止めることだな。」

「・・・・ありがとう。　肝に銘じておくよ。　じゃあ、商品はこれだ。　＞鉄の槍＜と＞鎖帷子（くさりかたびら）＜と＞青銅の盾＜が二つ、全部で１６３０ゴールドだが、今の話を黙っていてくれるのなら、１５００ゴールドでいいよ。」

先程、店主が語った内容は、完全な貴族批判だ。
このロマリアでは、どれ程の罪になるのかは解らないが、国民にとってしてはいけないことなのは万国共通な事柄であろう。

カミュは、再度、店主に公言しない約束をし、カウンターに袋から取り出したゴールドを置いて行く。

「・・・親父が言っていた、奴隷商人がこの街で遊ぶというのは、どういうことだ？　悪いが、見た限り娯楽がそれほどあるようには見えないんだが・・？」

カミュから受け取ったゴールドを引き出しに仕舞っていた店主にカミュが話しかける内容は、店主の話を先入観なく、全て聞いてきた

ことを主張するものだった。

「・・・ああ、それなら、ほら。　そこの階段を降りて行けば解る。」

「「「・・・・・」」」

店主の指さす先には、地下へと続く階段が存在していた。
その先に、店主が言う娯楽があるのだろう。

「・・・わかった。」

「ああ、ありがとうよ。　また何かあったら寄ってくれ。」

店主の謝礼の言葉を背に、カミュは階段へと歩を進めていく。

「　カミュ！　行くのか？　」

「・・・何があるのか見てみる。」

リーシャの問いかけにも、振り向くことなく答えたカミュは、ずん

ずんと進んでいく。
リーシャとサラは顔を見合せながら、それに続くしかなかった。

「　血肉湧き躍る『闘技場』へようこそ！　」

階段を下りた一向に真っ先に声をかけてきたのは、陳妙な格好をした男だった。
蝶ネクタイに燕尾服、宮廷の舞踏会に出るかのような格好なのである。

「・・・・闘技場・・・・・？」

「　はい！　ここは、魔物たちを戦わせる闘技場です。　どの魔物が勝ち残るか予想して頂き、あちらでその券を買っていただく運びとなります。　見事予想が当たれば、そのオッズに伴った配当が戻ってきます。　ジャンジャン稼いでいってください！」

「・・・・魔物を・・・・・」

闘技場という言葉に疑問を投げかけたサラの言葉に対し、男が返し

てきた言葉は、カミュの表情から熱を奪った。
咄嗟にリーシャはカミュの横に立ち、いつでも抑え込めるように備える。

「・・・カミュ様・・・行きましょう・・・？」

そんなリーシャの動きを視界の脇で捕らえたサラは、ここから出ることをカミュに提案するが、カミュは一つ首を振った後、奥へと進んでいった。
慌ててその後を追うリーシャとサラはその先で驚くべきものを見ることになった。

中央には、下を見下ろすような展望席が設置されており、その下には、周囲を壁で丸く覆ったまさしく闘技場があった。
その円のいたるところに、鉄格子があり、おそらくそこから魔物を出すのであろう。
その光景をカミュは冷たい目で見下ろしていた。
周りをも凍りつかせるような雰囲気を纏って・・・・

「 長らくお待たせいたしました！ これより本日１０試合目を行います。 皆さん闘技場にご注目下さい！ 」

そんな中、会場全体にアナウンスが響き渡った。
そのアナウンスに呼応するように、周囲の人間の狂気じみた声援が闘技場を震わせる程の大音量となる。

続く魔物の紹介のアナウンスの後に闘技場内の鉄格子が三つ開き、中から、大ガラス、フロッガー、おおありくいの三匹がのそのそと中央に集まってくる。
何か、特殊な魔法が掛けられているのか、それとも何か特殊な薬品が撃ち込まれているのか、魔物達の目は焦点が定まっていないような正気の目ではなかった。

「では、戦闘開始です！！」

アナウンスと共に一斉に動き出した魔物達は、身体というお互いの武器を使い、襲い合っていく。それを見ていた観衆の熱気も更に増し、闘技場を包む空気も異様なものになっていった。

大ガラスがおおありくい目掛け急降下をし、その鼻先を鋭い嘴で抉ると、フロッガーがその長い舌で大ガラスの体躯を叩き落とす。
叩き落とされ、一瞬動きが止まった大ガラスにおおありくいの鋭い爪が突き刺さった。
数度痙攣した後、大ガラスはその息を引き取る。
大ガラスの死骸を満足そうに見ていたおおありくいをフロッガーが襲いかかる。
体当たりによって弾き飛ばされたおおありくいは、先程大ガラスに切り裂かれた鼻先から血を撒き散らせながら転がり崩れる。
倒れ込んだおおありくいにフロッガーはその発達した後脚で大きく跳躍し、その大きな前足で押しつぶすように顔面に着地した。
フローガーの全体重を掛けられたおおありくいの顔面はまるで花火のように弾け飛び、その内部を形成するものを派手に撒き散らした。

「・・うぉ・・・・おぅぇ・・・・」

サラは直視ができず、吐き気を抑えるように口元に手を置く。
そんなサラの顔を自分の胸に押しつけるようにリーシャはサラの身体を抱きかかえた。

「　勝負あり!!　フロッガーの勝ちです!!　お賭けになっていた方々おめでとうございました!!」

戦闘の終了を告げるアナウンスの後、今まで以上の声になっていない音が闘技場を取り巻く。　それはもはや人間が発するようなものではないようにサラには聞こえた。

そして、再び闘技場の鉄格子が開き、十人程の兵士が出てきて、残ったフロッガーを切り刻んでいった。
無残な死骸と化したフロッガーを引き摺るように運び出し、他の二匹の死骸も綺麗に片づけられた。　魔物は負けても勝っても、待っているのは死だということだった。

「・・・これが、『人』のすることか・・・・」

「・・・カミュ・・・」

その様子を能面のような表情で見つめていたカミュがぼそりと呟く。

その言葉に、リーシャも、魔物に恨みを持つサラも何も言うべき言葉を持ち合わせてはいなかった。

「・・・・＞メダパニ＜か＞毒蛾の粉＜で自我を消されていたんだろうな・・・・」

「・・・カミュ様・・・」

「・・・出るぞ・・・」

カミュの表情は、二人が見たものの中でも、一番と言っていいほど冷たいものだった。
その表情が、カミュの心を雄弁に語っている。
熱気と狂気が未だ渦巻く闘技場を、三人はそれぞれの想いを持ったまま後にした。

武器屋の正面に位置する場所にあった宿屋に入るまで、誰一人口を

開くことなく、カミュが宿屋の主人に宿の手配をし、一度それぞれの部屋に入るまで会話はなかった。

カミュが、ここまでの道程で手に入れた魔物の部位を売り払って戻ってきてから王城に上がることになり、サラとリーシャは荷物を置いた後、宿屋の広間でカミュを待っていた。
その間にも、二人の間には会話はなく、ひたすら先程の光景が頭の中で繰り返されるという地獄のような時間であった。

狂気に満ちた人々の表情と発する奇声。
魔物達の正気を失った瞳。
それらを煽るような主催者のアナウンス。

それら、全てがサラの頭の中をぐるぐると回っている。
自分がどこにいるのか、自分は何を成す為に旅を続けているのかすらわからなくなりそうなものだった。

そんな時間が経過していく中、カミュが戻ってきた。
手に持つ袋は中身がなくなったているため、萎んでいる。

「・・・王城へ向かう・・・」

未だに、その表情は能面のようなままでカミュは謁見に向かうという。
リーシャは渋い顔をしていたが、反論を挟もうとはしなかった。

「止まれ!!」

王城の城門の前には、街の門と同じように兵士が立っていた。
街と違うのは、立っている兵士の階級が上らしいことだった。
着ている鎧にはロマリアの国章が記されており、正規の軍の兵であることがわかる。

「アリアハンから来ました、カミュと申します。アリアハン国王様からの書状も持参しております。」

「アリアハンからだと!!」

カミュの外行きの話し方に、街にいた兵士と同じような反応が返ってくる。
その様子に再び、リーシャは顔を顰めるが、サラが腕にしがみ付いているため、何とか気持ちを抑えることに成功した。

「卑怯者のアリアハンの者が今さら何の用だ!!」

「ロマリア領を通る許可を頂きたく、ロマリア国王様へのお目通りをお取次ぎ頂きたいのですが。」

普通一介の兵士が、国家に対しての侮辱をすれば国際問題になりかねない。
しかし、それでもロマリアの兵士がこのような態度に出るのは、恨みの深さだけではなく、単純にアリアハンを辺境国として侮っているのであろう。
戦争になっても勝てると・・・・

「ふん!!　ここで待っていろ!　一歩でも動くな!」

カミュが手渡したアリアハン国王の書状を持ち、一人の兵士が城内へと消えていく。
アリアハンとは違い、平民と彼らのような兵士には高い垣根はないのかもしれない。
アリアハンへの憎しみが同じものだからなのか、彼らのような兵士が平民出身のもので組織されているのかはわからないが・・・

「許可が下りた。　このまま真っ直ぐ歩けば、謁見の間に続く階段がある。　それを上れ。　それ以外の余計な場所には行くな。いいな!」

戻ってきた兵士は、相変わらず横柄な態度で、カミュ達にあれこれと指図をする。
リーシャの拳は怒りに震えてはいるが、カミュは涼しい顔で聞き流していた。

「ありがとうございました。」

カミュは兵士に一つ礼ををした後、城門をくぐっていく。
リーシャを促し、サラもその後を続く。
すれ違いざまに、大きな舌打ちが聞こえ、リーシャが顔を上げそうになったが、必死なサラの腕に我に返り、大人しく城門をくぐった。

言われた通りの階段を上った先に、広く開けた広間があり、その前方には二つの玉座が存在した。　ひとつには恰幅が良く、口に黒い髭を蓄えた中年の男が座り、もう片方には年若い見目麗しい女性が座っていた。
おそらく、年の頃から、中年の男がロマリア王で、その隣に座るのが王女なのであろう。
また、ロマリア王の傍には、アリアハンと同じように大臣らしき人物が立っていた。

「そなたが、あのオルテガの息子のカミュであるか？」

「はっ！」

前に進み、跪いたカミュの一歩後ろに、リーシャとサラの二人も同じように跪く。
そんな一行に国王自ら語りかけてきた。

「・・・ふむ。　顔を上げよ。　・・・なるほど、良い目をしておるの・・・」

「・・・・・・」

カミュは答えない。
真っ直ぐロマリア国王を見つめ、その真意を探ろうとしていた。

「・・・アリアハン国王からの書状は目を通した。　そなたは、あのオルテガ殿と同じように魔王討伐に向かうとな・・？」

「・・・はい、アリアハン国王様より、そのように命を頂いております。」

「・・・そうか、アリアハン国王からも援助願いが来ておる。しかしの・・・そなたも知っての通り、度重なる魔物との闘いや、以前のそなたの父への援助で国は見た目以上に疲弊しておる。そなたの力量も解らない段階で援助というのも難しい。」

「・・・はっ・・・」

国王の話は、カミュの予想していた通りだった。
援助など断るつもりなのだろう。
確かに成功するか分からない魔王討伐の旅の援助を毎回毎回していられないというのも国を預かるものとして当然の発想であろう。

「・・・そこでじゃ、そなたの力量を見るためにも、今この国を騒がしている盗賊の討伐をしてもらいたい。その盗賊は、このロマリア城から盗みを働いた不届き者だ。生死は問わん。その盗賊が盗んだものを取り返して見せよ。それができた時、ロマリアはそなたを真の勇者として認め、惜しみなく援助をすることとしよう。」

なんという勝手な言い草であろう。
カミュは援助など頼んではいないのだ。
ただ、ロマリア領の通行許可が欲しいだけである。
それを、ロマリア王家の失態の尻拭いをすれば認めるなど、王族でなければ鼻で笑われるようなことを平然と言ってのけるロマリア王にカミュは呆れていた。

「はっ！　確かに承りました。　その盗賊の名と、王城から盗まれた物をお教え下さい。　必ずや陛下の御前にお届けいたしましょう。」

「「・・・・・」」

カミュの返答に後ろに控える二人は、言葉を失くしていた。
断ることはできないが、不快感ぐらいは表すのではとリーシャは考えていたのだ。

「・・・うむ。　良き返事じゃ。　その盗賊の名は『カンダタ』という。　最近ロマリア国内で盗みを働いてはいるが、根城は分かっておらん。　盗まれた物は『金の冠』じゃ。　そなた達の良い報告を期待している。」

「はっ！　では、これにて・・・・」

「・・・しばし待て・・・・」

盗賊の名と盗難物を聞いたカミュは早々にこの場を離れようとするが、一拍置いて、目の前に座る国王から再度声がかかった。

「・・・・」

「・・・ふむ。　そなた、本当に良い目をしている。　そなたのような者が一国の王となるべきなのかもしれん。　どうじゃ？　この国を治めてはみんか？」

「・・・・は・・・？」

「「！！」」

続くロマリア国王の言葉は、カミュを含めた三人を混乱の渦に陥れた。
この王は何を言っているのだ。
そういう考えが、三人の頭に同時に浮き上がってくる。

「　国王様！！　」

「　良いではないか。　この者が王となれば、否が応でも『金の冠』を取り戻さねばなるまい。　同じことではないか。　ならば、このような若者に国の未来を託した方が良い。　娘と婚姻させ、婿となれば、王位を継ぐことも可能であろう。」

「・・・しかし！！」

カミュ一行を放って、国王と大臣の話は進んでいく。
未だ混乱から抜け出せないサラではあったが、当のカミュと、その後ろに控えるリーシャの頭は冷静さを取り戻していた。

「どうじゃ、カミュ？　一度、試してはみないか？　そなたが出来そうにないと思えば、再びわしが王の座に戻ろう。　これは約束しよう。」

そう続けるロマリア国王の横に立つ大臣を見ると、どこか諦めたような顔でこちらを見ている。　まるで、カミュがやると言っても良いと思っているかのようだ。
更に、国王の横に座る王女にしても、にこやかな笑みを崩すことなく、こちらを見ている。
サラもリーシャも顔を上げないまでも、視界の隅にそれを入れ、不思議に思っていた。

少しの静寂が謁見の間に流れた後、カミュの口が開かれた。

「・・・畏まりました。　国王様の申し出、謹んでお受けいたします。　ただ、私は未熟な身ゆえ、いつ王としての職務を投げだすかわかりません。　このことは国民には告げずに置いて頂きたいのですが。」

「　！！　」

「　カミュ様！！　なん・・・・」

カミュの答えに驚いて声を上げそうになったサラの口をリーシャの手が塞いだ。
サラは何故という表情でリーシャを見るが、リーシャは未だ顔を下げたままであった。

「・・・ふむ、そうか。　それも良い。　一度試してみよ。　政務で解らないことがあれば、この大臣に聞くがよい。　それでは今日より、カミュが国王じゃ！　皆の者良いな！　」

良いわけがない。
しかし、大臣や周りの兵士たちの顔は、怒りや戸惑いなどは微塵もなく、どちらかと言えば呆れに近いものが混じっている表情だった。
ロマリア国王からマントが掛けられたカミュは、玉座に座り、そこからリーシャ達を見ることになる。

「　供の者たちよ、表を上げよ。　」

大臣の声にようやく顔を上げることを許された二人は、玉座に座るカミュを見る。
サラは、疑問と困惑が混ざった表情でカミュを見上げていたが、リ

ーシャはどこか達観した様子で玉座に座るカミュの瞳を見詰めていた。

「　カミュ王、この者たちはどうされますか？　」

「・・・・宿を取っているはずだ。　今日はそこに止まり、旅の疲れを癒してくれ。」

「・・・・と、言うことだ。　下がって、今日はゆっくりと旅の疲れを癒すがよい。」

大臣からリーシャ達の処遇を聞かれたカミュが発した答えは、簡素なものだった。
今日の夜のことだけ。
これから先のことなど、何一つ言っていない。

いったいどうしろというのだ。
ここまで来たのに、どうすればいいのだ。
サラはそんな気持ちを抑えきれなくなり、口を開きかける。

「・・・・わかりました。　では、これにて・・・・」

だが、隣にいたリーシャの言葉にサラは言葉を発する機会を失い、そのままリーシャに連れられるように謁見の間を後にした。

「何故ですか!?　何故何も言わなかったのですか!?　リーシャさんはこのまま旅を止めるおつもりですか!?」

王城から出ると、日も落ち始め、街を赤く染め始めている時分になっていた。
王城と街を結ぶ橋を歩き終わり、街に入ってすぐ、サラの感情は爆発し、矢継ぎ早にリーシャへと謁見の間で渦巻いた疑問をぶつけた。
リーシャは、立ち止まり、ゆっくりと振り返った後、真面目な表情でサラを見つめる。
サラはリーシャの表情に後の言葉をつなげなくなり、押し黙る。

「・・・サラ・・・ここから先の旅の為にも言っておく。・・・・・これから先、数多くの国家に行き、そこの謁見の間にて国王様とお会いすることがあるだろう。　その際、謁見するのは私達ではない。」

「・・・えっ?」

急に話し始めたリーシャの意図が掴めず、サラはもう一度聞き返す形で、言葉を発した。

「謁見の間で、国王様とお会いし、お言葉を頂戴するのは、カミュだ。　私達はその従者なのだ。」

「・・・そんな・・・」

「私達だけの場合は、私もカミュの気にはしない。　普通に話し、時には対立して罵声を浴びせることもある。　しかし、他国の代表と相対する時は、カミュは魔王討伐に向かうアリアハンの勇者であり、それに同道する私達は付き従う者なのだ。」

「・・・・・」

「サラには納得がいかないかもしれないが、そういうものだ。　私達は謁見の間でお許しの言葉がない限り、顔を上げることもできないし、ましてや言葉を発することなど以ての外なんだ。　アリアハンを代表している人間はカミュだけということだ。」

リーシャの言っていることは、宮廷で働く人間にとっては当然のことである。

国王となれば、例え貴族だとしても、おいそれと話すことはできない。
ましてや、他国の王族ともなれば、国家を代表して謁見する時にしか、言葉を発することは許されない。
だが、平民出のサラには雲の上の存在過ぎて、想像が難しいのだ。

「・・・では、リーシャさんは、このままカミュ様がロマリア国王様となって、旅を終わらせてしまうのも仕方がないというのですか！？」

「・・・そうは言わない。　サラ、よく考えてみろ。　あのカミュが何の考えもなしにあんな申し出を受けると思うのか？　サラもここまでカミュを見て来たんだろ？　アイツが・・・魔物よりも国家や貴族、王族の方を嫌悪している節のある、あのカミュがあんな申し出を喜んで受けると思うのか？」

「・・・・それは・・・」

「・・・何か考えがあるんだと思う。　何かは私には解らないが、アイツがそうする理由があると思っている。　だから、今夜は宿屋で休めと言ったんだろう・・・おそらく、明日にはアイツは国王という職を辞退するつもりなんじゃないか・・・」

確かに、カミュは今日の宿のことだけを話していた。
それの意味することなど、サラは頭に血が上り考えもしなかった。

しかし、リーシャの言うとおり、あのカミュが何の理由もなく、貴族や王族になるとは思えない。　自分やリーシャが考えつかないことをするつもりなのかもしれない。
その時、突如サラの頭に閃いたものがあった。

「・・・もしかして、闘技場をつぶすつもりでは！！」

カミュが闘技場で見せた表情は、今までで一番のものであった。
そこには怒りや哀しみ、色々な感情が混じりあった結果の無表情ではないかとサラは感じていたのだ。　故に、その元凶の闘技場を廃止するのではとサラは考えた。

「・・・いや、それはないだろう。　前に話した国民の不満の捌け口が、ロマリアではあの闘技場なのだろう。　それはカミュも理解しているはずだ。」

「・・・・そうですか・・・・・」

「　なんにせよ、今私達が考えたところで、何かが解るわけじゃない。　今日は、カミュ王のご好意に甘えて、宿屋でゆっくりと疲れを取るとしよう。」

リーシャは、サラの頭を軽く叩いた後、宿屋へと向かっていった。
サラはどこか釈然としない思いを残し、リーシャの後を追った。

その後、久しぶりに個室を取った二人は、湯浴みをし、ゆっくりと食事をとった後、少し早めにベッドに入った。

暗く、一寸先も見えない闇に覆われた王城の廊下を一人の青年が歩いて行く。
手には、少し前に大臣から借り受けたランプを持ち、辺りを照らしながら慎重に歩を進めていく。　それは、衣装を替えたカミュであった。

リーシャの考え通り、カミュはある目的の為にロマリア国王の申し出を受けていた。
今、その目的を達するため、夜の廊下を一人歩いているのだ。

「・・・ここか・・・？」

カミュの足は、一つの扉の前で止まり、その扉の上部に掲げられたプレートをランプで照らした後、その扉を開き中に入っていった。

カミュが入っていった後、廊下には再び暗闇が戻る。
どのくらいの時間がすぎたであろう。
再び扉を開け、戻ってきたカミュの手には、ランプの以外のものもあった。
扉を閉め、歩き出したカミュは、それを小脇に抱えるようにして歩き、寝室へと戻っていった。

ロマリア城（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

国王譲渡は、ゲーム中では『金の冠』奪還後なのですが、ちょっと考えがありまして、原作より早めにしました。

ようやくロマリア大陸始動です。
これからもよろしくお願いいたします。

ロマリア城？（前書き）

いつも沢山のご感想をありがとうございます。
今回は少しというか、大分短めです。

ロマリア城？

翌朝、サラは日の出と共に目覚めた。
昨晩早くにベッドに入ったためであろう。
十分な睡眠により、身体の疲れも大分取れている。
サラは早々に着替えを済ませ、宿屋を出てロマリア教会へと向かった。

宿屋から、少し王城の方向に歩くとアリアハン教会よりも若干大きめな教会が見えてきた。
屋根には、聖霊ルビスが天に向かって手を合わせている彫像が掲げられている。
この世界では、聖霊ルビスを崇めることは万国共通の宗教なのだ。
例え、いがみ合っていても、人は皆等しく聖霊ルビスの子なのである。

教会に入ると、まだ日が昇って間もないというのにすでに先客がおり、ルビス像に向かって跪き手を合わせていた。　年老いた老婆であったが、サラが入ってきたことに気が付いていないのか、微動だにせず、静かに祈っている。
サラは、老婆の祈りが終わった後にしようかと考えたが、この後にリーシャとの稽古が控えていることから、老婆の隣に跪きお祈りを始めることにした。

「若いのに、良い心がけと思ったが、その服装からすると僧侶様でありましたか？　いや、シスターとお呼びした方がよろしいのかな・・・」

真剣にお祈りを続けるサラに不意に声がかかる。
声のする方に視線を向けると、お祈りが終わった老婆が顔の皺を濃くした笑みを浮かべ、サラを見ていた。

「あ、いえ、シスターと呼ばれる程の者ではありません。　未だ修行中の身です。」

「これは、これは。　立派なシスターとお成りなさい。　貴方のような若い方ならば、色々と悩むこともお有りでしょう。　でも、何事も貴方を成長させる試練とお考えなされ・・・悩み、考え、前に進むことこそが人を成長させる一番のものです。」

「・・・はい・・・ありがとうございます。」

何か自分を見透かされているような、そんな不思議な感覚にサラは包まれる。
サラが今持っている悩み。
それは、ルビス様を前にして話せるような内容ではない。

「・・・僧侶様・・・この世に絶対はありませんよ。　ルビス様は『人』を子としてお考えになられます。　子であるからこそ教え導くことはありますが、子の考え、子が歩む道を否定し阻害することなどありません。」

「・・・あ、あなたは・・・」

「・・・申し訳ありませんな。　悩める若者に説教をするのも年老いた婆様の楽しみの一つでしてな・・・ついつい・・・」

押し黙ったサラに対して老婆が続けた言葉は、聞き方によってはルビス信仰を否定しているようにも聞こえるものだった。　熱心にお祈りをしていた老婆が、それも教会の中でそのようなことを話すことにサラは驚き、そして呆れた。
サラが呆けた顔で老婆を見ていると、やわらかな笑みを保ったまま、老婆もまたサラを見ている。　そんな不思議な空気が教会内に流れる。

そんな空気を破ったのは、やはり彼女だった。

「　サラ、お祈りは済んだか？　」

教会の扉が開き、眩いばかりの光と共に中に入ってきたのは、姉のように思い始めている頼りになる戦士だった。

「リーシャさん・・・」

「・・ほっほっ・・お連れさんかね・・？」

「あ、は、はい。」

悠然とこちらに向かって歩いてきたリーシャは、サラの隣にいる老婆の存在に気が付き、軽く一礼した後、正面のルビス像に向かって手を合わせる。

リーシャの姿はすでに旅立てるような恰好で、それはつまり、お祈りが終わると同時にサラにとって地獄に近いリーシャとの鍛練が開始されることの証明でもあった。

別段暑くもないのに、額から汗の雫が垂れ落ちてくるのを感じながら、サラはリーシャのお祈りができるだけ長くかかるように祈るのだった。

「サラ、行こう。　おそらく今日、ここを立つことになるはずだから、今日は軽めの鍛練にしよう。」

「あ、はい！」

祈りの終わったリーシャが振り向きざまに言った言葉は、サラの胸を撫で下ろさせるものであり、自然とサラの返事も明るくなる。

そんな二人のやり取りを見ていた老婆もまた、顔の皺を濃くし、笑みをこぼしていた。

「ほっほっ、悩みは死すまで無くなることはありません。　どうしようもなくなったら、またここに寄りなされ。　心の内のお聞きするだけであれば、この老婆にもできますゆえ。」

「・・・・はい・・・・あなたは・・・この教会の・・・」

「・・・はい。　この教会で司祭をしております。」

「!!　失礼いたしました!」

司祭となれば、教会を任されている者と考えて遜色はないだろう。
サラを育ててくれた神父様も司祭である。
ルビス信仰では、司祭とは役職である。
対し、神父とは呼称であって役職ではないのだ。
更に、その役職は、男女問わず与えられる。　故にこの老婆が実質ロマリア教会の管理者であると考えていいということになる。

「いや、いや、お気になさいますな。　今、私は法衣を着てはいませんよ。　ですから、ただの老婆と思ってくだされ。」

「・・・はい・・・ありがとうございます。」

身分を明かされ、老婆と思えなどとそれは無理な話だ。
熱心な信徒であるサラにとって、司祭程の人間と面と向かって話すことなどできない。
現に、今のサラは、ルビス像にしていたように老婆の前で跪いている。
昨日、一国の国王を前にして、立ちあがり言葉を発しかけたようなサラとは違う。
サラにとって、同じ雲の上の存在でも、国王と司祭とではサラ自身が感じる畏れ多さの実感が違うのだ。

「サラ、時間があまりない。　行こう。」

このままでは埒が明かないと感じたリーシャの声で、ようやく立ち上がったサラは、深々と司祭に頭を下げ、先をゆくリーシャを追い、教会の門を開いて外へ出た。
残された老婆は、未だ温かい笑みを浮かべながら、サラの出て行った門を見ていた。

「カミュ王、お目覚めでしょうか？」

ノックと共にかかった声に、すでに目が覚め、着替えを済ませていた。
濡らしたタオルで顔を拭いていると、ドアのノックと中を確認する声が聞こえてくる。

カミュに割り当てられた部屋は、王が暮らすような部屋ではなく、一般に他国の貴族等の客賓が通されるような部屋であった。
このことからも、王室全体がカミュを王として担ぐ気は全くないことが伺えた。

「・・・はい。　どうぞ、お入り下さい。」

カミュがドアに向かい了解の意を示すと、遠慮がちにドアは開かれ、外から給士が顔を覗かせた。　それなりの年齢を重ねた女性であり、おそらく若い頃から、このロマリア王宮に仕えている者なのであろう。

「お食事をご用意しています。　皆さまも、もうそろそろお集まりになる頃ですのでお急ぎください。」

とても、一人の給士が国王に掛けるものとは思われない内容を告げた後、カミュを案内することなく、給士は下がっていく。
来いと言われても、食事をとる場所がどこだか分からないカミュは、少し考えたが、あまり遅くなっても失礼と考え、とりあえず外に出ることにした。

部屋を出るが、謁見の間までの道程は知っているが、食堂の場所が右か左かも分からない。
とりあえず、謁見の間からこの部屋までの間に何もなかったことを思い出し、謁見の間とは逆方向に歩きだした。

「あら、カミュ王、おはようございます。」

カミュが廊下を歩いていると、不意に横から声がかかった。
驚くこともなく、そちら側に顔を向けると、にこやかな笑顔を湛えた王女が立っていた。
この王女は、謁見の間でカミュ達が謁見をしている時から、その後の食事の時、更には夜に就寝の挨拶をするまで、まるで作り物の仮面をかぶっているのではと思うほど、常に笑顔が張り付いていた。

「・・・おはようございます、王女様・・・」

「あら、随分と他人行儀ですのね・・・これから我が夫となるお方が。」

カミュの返しに、初めて笑顔という仮面を取って、明らかな不満顔を表す。
その表情は、元来の美しさを持つ王女に可愛らしさというエッセンスを加えた、男という性別に生まれたからには惹かれずにはいられない、そんな表情であった。

「・・・いえ、それは・・・」

しかし、それは、一般の男性ではというもので、当のカミュは全く興味を示しておらず、何やら口籠っているのも、また違う理由によるものであるようであった。

「ふふっ、まあ、よろしいですわ。　さあ、食事に参りましょう、あなた。」

「・・・・」

再び笑顔の戻った王女であったが、その笑顔もまた、先程までの仮面のようなものではなく、心から楽しんでいるような花咲く笑顔であった。
カミュは、一瞬驚いたように目を見開くが、小さな溜息を吐いた後、王女に腕を取られ、食堂へと歩き始める。

食堂での食事は、カミュと王女の二人以外にも、老人が一人同席し

ていた。
歳を考えると、おそらく先代のロマリア王と考えて間違いないだろう。
カミュに対し、興味の欠片も示さないところは、他の重臣たちと同様で、この場に明らかに不似合いなカミュを空気として扱っているようでもあった。

「どうしたのですか、あなた？　食事が口に合いませんか？」

カミュの手が止まっていることに気がついた王女が、カミュへと声をかけるが、その表情や物言いを聞くと、完全に面白がっているのが理解できる。
この状況を明らかに楽しんでいる。
常に周囲の人間に興味らしきものを示したことのないカミュでさえ、今自分が置かれている状況に内心焦りに近いものを感じていた。

「・・・すまんの。　お主もあのどら息子の我儘に付き合ったのであろう。　あ奴は、昔から遊び好きであったが、歳をとり、子ができてもその辺は全く変わっておらん。　政（まつりごと）も国務大臣と、その子に任せっきりでな・・・」

「！！」

突然話し始めた、先代の言葉にカミュは心から驚きを表す。
カミュがここまで驚くことなど、それほどある訳でもない。

先代が『その子』と示した人間は、カミュの隣で、カミュをからかう様に面白がっている王女その人であったのだ。
つまり、国政に王女が絡みながら、国務大臣を陣頭に行っているということになる。
王女とはいえ、一国の国政を司るとなれば、中途半端なことはできない。
まともな大臣であれば、才がないと感じれば、前に出てくることを許さないだろう。
ということは、今のロマリアは、国務大臣が無能なのか、それともこの横で楽しそうに笑っている王女が有能なのかのどちらかになる。

「・・・では、あの闘技場等も・・・」

「うむ。　案は、その子が出した。　実際指揮したのは大臣じゃがな。」

昨日見た闘技場。
その存在は、カミュの心象では最悪なものである。
ただ、国の取る政策として考えれば、あれほど優れたものはない。
『人』にとっての憎しみの対象たる『魔物』同士の戦いを賭けの対象にする。
その対象である魔物は、死という決着がつくまで戦わせ、最後に生き残った物も人間の手によって大観衆の前で殺される。
民の不満の捌け口としては、これ以上のものはないと言っても過言ではない。

「ふふっ、私は思ったことを口にしただけですわ。　それをどう実現させるかは、全て我が国の重臣たちの腕です。　優秀な家臣たちを持っているからこそできたことです。」

手で口元を押さえながら、謙遜するその姿は、自分の頭脳や才能に絶対の自信を持っている表れであろう。
もしかすると、このロマリア国の頭脳は彼女なのかもしれない。

朝食も取り終わり、部屋に戻ろうとするカミュの横に、再び王女が並んできた。
廊下に出て、周囲の人間の姿がなくなるまで、一言も発することなく、カミュと同じスピードで歩いてくる。

「・・・何かご用でしょうか・・・？」

堪りかねたカミュが、王女に向き直り口を開く。
そんなカミュの行動も予測していたように、やわらかな笑みを浮かべながら王女も歩むスピードを落としていく。

「そうですね・・・・・目的のものは見つかりましたか？」

「！！」

少し、顎に指を置いて考えるそぶりを見せた王女が発した言葉に、カミュは表情にこそ出さなかったが、驚きで言葉が出なかった。

「・・・なんのことでしょう・・・」

「あら、別にとぼける必要はないですわよ。　少し見ただけですが、貴方のような方が自らの使命を投げてまで王になりたいとは思わないでしょう。　ですから何か目的があるのではないかと思っただけですわ。」

カミュの、何を言っているのか分からないとでも言うような言葉に、王女は間髪入れず反応する。　それは、まるで、『私にはお見通しですよ』とでも言いたげな得意気な様子であった。

「ご心配には及びませんわ。　貴方のようなアリアハンから来た人間が、ロマリアでなにか事を起こせばどうなるかは知っていらっしゃると思いますもの。　でしたら、例え貴方がこの城から何かを持ち出したとしても、それは、この国には必要のないものであって、それも、例え失ったとしても、それに誰も気がつかないようなもの

なのでしょう？」

「・・・・・・」

「ですから、私は、その事で事を荒げることは致しません。　それに、貴方は今日にはこの城をお出になるつもりなのでしょう？」

「・・・・・はい・・・」

自分の考えが正しかったことを証明できたことに満足そうな王女は、畳みかけるようにカミュ へと言葉を繋いでいく。

「やはり、そうでしたのね。　ああ、口調も元に戻してくださって構いませんわ。　それこそ、私を王女としてではなく、平民のように扱ってくださいな。」

「・・・・・」

「ふふっ、私は、こう見えて結構貴方を気に入っているのですよ。　たった一日ですけど夫婦となりましたし。　お父様の言うとおり、意志の強い目をされておりますしね。」

「・・・・」

王女が一方的に話す中、カミュの口は開くことなく、徐々に表情がなくなり、能面のような無表情へと変化していく。
王女の言葉の何かが、カミュの心を動かしたことは間違いがない。
だが、それはプラスではなくマイナスの方向にではあるが。

「そうですわ！　カミュ殿、あなたが魔王バラモスを倒した暁には、本当に私と婚姻を結び、このロマリアの王となりませんこと？　魔王を倒した勇者であれば、一国の王となっても誰も文句は言いませんわ。　どう？　良い考えでしょう？」

王女は自分が考えた案が、とんでもない名案だと言わんばかりに、柏手を打ち、目を輝かせながらカミュの返事を待った。

確かに、カミュが魔王を倒したとなれば、カミュの名声は瞬く間に世界中へと広がるだろう。　それこそ、彼の父オルテガも遠く及ばないほどに・・・・
そんな、英雄がロマリアという一国の王となり、先代王の血を引く王女を妃として迎え、その間に子を成せば、ロマリア王国は世界で並ぶもののない程の国となることは間違いがない。　それこそ、全世界を統一できる程の・・・・

おそらく、この賢女である王女はそこまで考えての発言なのであろう。
もし、カミュが魔王討伐を成し遂げられなければ、それは死を意味する。

つまり、ロマリア王国としては、ノーリスクハイリターンなのである。

しかし、王女の視線の先には、王女の可愛らしさ、美しさ、聡明さに照れたように顔を綻ばせるいつもの男たちとは全く正反対の表情で立つカミュの姿があった。

「・・・・はぁ・・・・・王女様、失礼を承知で、先程の王女様のお言葉に甘えさせて頂きます。」

「え・・ええ・・」

無表情のカミュの様子に、たじろぎながらも返事を返す王女の姿は流石と言ってもいいのかもしれない。
リーシャや、サラでさえ、このカミュの無表情には足が竦みかねないというのにだ。

「ここ十数年での国家の立て直しに関しての賢策、見事だと思います。　今このロマリアが国家として成り立っているのも、王女の力なくしてはなかったことでしょう。　」

「そ、そうね・・・」

「その上で敢えて言わせて頂きます。」

「ええ・・」

「俺は、賢しげな女は嫌いだ。　平民と同じようにというのなら、この国に来ている奴隷商人にでも売り飛ばしてやろうか？」

「！！」

突然豹変したカミュの姿に驚き目を見開く王女。
自分の言葉の何が気に食わなかったのかさえ、理解が出来ない。

対するカミュも同じだった。
こんなことを言うつもりもなかった。
自分の物言いが、仮にも王族に向ける言葉ではないことは分かっている。
しかも、発している言葉は、カミュ自身も勝手さに身悶えてしまうような内容なのだ。

昨日見た、闘技場の実情。
それの発案者の、平民と同じようにと言った一言が、カミュの中の何かを弾けさせた。
この王女は知らないのかもしれないが、この城で働く貴族達の中に平民の奴隷を蹂躙している者達もいる。　闘技場で働く人間の中には魔物に誤って殺された人間もいるだろう。
平民とは、王族や貴族が考える程、平穏な暮らしをしているわけではない。

人間皆平等とでも言うのなら、それ相応の立場で話せとでもカミュは思ったのかもしれない。

しかし、当のカミュもまた自分の発言に困惑していた一人であり、なぜこんなことを言ったのか、何に腹を立てたのかさえ理解していなかった。

そんな中、先に立ち直ったのは、王女の方であった。

「・・・そ、そうですか。　残念ですわ。　まあ、私も自分の損得の勘定もできず、感情だけで判断をするような脳なしは御免です。　今の私への言葉は、平民と同じようにと言った私にも落ち度がありますから、不問に致します。」

立ち直った王女の表情に憤怒の気配は微塵もない。

謁見の間で見たような張り付いた笑顔を見せながら、カミュへと返答するところは流石一国の王女であり、その国政を担う賢女なのであろう。

「・・・失礼いたしました・・・」

「お父様は、いつものように闘技場へ向かっていることでしょう。　そちらへ行けば会うこともできるはずですわ。」

「・・・ありがとうございました・・・」

「いえ、それでは、ごきげんよう。」

頭を下げるカミュにちらりと視線を向けるだけで、王女はそのままドレスのスカートを翻して歩いて行く。

頭を上げたカミュは、王女の後ろ姿を見送ったあと、自室に入り、剣とサークレット等の武具を身につけ、王城を出るために外へと向かった。

「うぅ・・・・うぅ・・・」

リーシャとの稽古が終ったサラは、宿で用意されている朝食を食べるのに四苦八苦していた。　今日から、剣の素振りに加え、槍の立ち回りも入ったのだ。

教会での言葉とは違い、リーシャの訓練は厳しく、槍など持ったことのないサラはその重みと重心の取り辛さに何度となく尻もちをついた。

アリアハン城を出た時には、肌荒れもしていない綺麗なものだったサラの手は、今や、剣の素振りと槍の稽古でマメだらけになっている。
マメができ、そのマメが潰れ、そしてその上にまたマメができる。剣の素振りでの力の入れ具合がやっと解りかけていただけに、新たな武器の登場で、サラの手には新たなマメがぎっしりとできていた。その為、食事をとるためのフォークやスプーンが思うように持てない。

「ははははっ、サラ、最初は誰しもそうだ。　そのうち、今、マメができている場所の皮が厚くなって、ちょっとやそっとではマメなどできなくなるぞ。」

「うぅ・・・それはそれで嫌です・・・」

女性にとってごつごつした手になることを好ましいと思う人は少ない。
いや、目の前に座るリーシャならば、『この手を見る度に、自分が強くなっていることを実感する』と嬉しそうに言いそうだとサラは思ったが、自分の身の危険を感じ口にすることはしなかった。

「そうも言ってはいられないだろう？　これから先、旅は過酷になってくる。　それこそ、私とカミュだけではどうにもならないことがあるかもしれないのだ。　そんな時、サラも剣や槍で戦力となれば、私としては心強い。」

「・・・・はい・・・・」

リーシャの顔を見れば、それはサラを乗せるために言っているのではないことぐらい、サラにも解る。　リーシャは心からそう思っているのだろう。
だからこそ、サラも心苦しいのだ。

「・・・でも・・・カミュ様は本当に旅を続けられるのでしょうか？」

「ん？　それは、大丈夫だろう。　朝食を取り終わったら、城門の方まで行ってみよう。」

サラの別の心配事に、そちらは全く心配していないとばかりに、リーシャは卵を口に放り込む。　その姿にサラは、溜息を付くしかなかった。

リーシャとサラが城門に辿り着き、しばらく経つと、城門に立つ兵士たちが何やら話した後に、城門が開いた。
城門から出てきたのは、王が纏うマントではなく、旅へと向かう為のマントを羽織ったカミュであった。

「・・・なんだ、もう来ていたのか・・・？」

リーシャ達の下まで歩いてきたカミュは、リーシャとサラの存在に大した驚きもせず、まるで当たり前のことのように言葉を交わす。

「ああ、サラは不安がっていたが、私はお前が王になど、なれないことは解っていたからな。」

「・・・そうか・・・」

得意げに胸を張り、『どうだ』と言わんばかりに話すリーシャの姿に、後ろに控えるサラは笑みを溢す。

「実際、今日中に王位を返上するとは思っていたが、ここまで早いというのは正直予想外だった。　お前、追い出されるようなことをしてきたのか？　まあ、お前を夫として迎えなければいけない王女様にとってみれば、何とか破談の方向に向かわせたいと必死になるだろうがな。」

続くリーシャの言葉に、サラは、当然のこととして、朝早くから城門に向かうことになった我が身を憐れんだ。　同時に、確信もなくこの時間から城門で待つことにしたリーシャの行動に脱帽したい気分になったのだ。

当のリーシャは、カミュの行動を見抜いていた自分に大層満足気で、カミュに対して無謀な戦いを挑んでいた。

「・・・はぁ・・・やはり、女は多少抜けていたり、馬鹿であったりした方が楽でいいな・・・・」

「　な、なんだと!!　」

カミュは、そんなリーシャの挑戦には乗らず、一つ深い溜息をついたあと、リーシャからあからさまに視線を外し、呟きを洩らす。

カミュの発言は失礼極まりない。
明らかに、それはリーシャを指していた。
誰と比較してなのか、どんな想いを込めているのかは、サラには想像もできないが、心底呆れ顔で溜息をつくカミュの姿は、とても印象的であった。

「それで、すぐに出発するのか？」

「いや、まずは闘技場に向かう。」

もはや恒例になりつつある、不毛な戦いを繰り広げた後、リーシャはカミュに今後の方針を尋ねるが、返ってきた答えはリーシャとサラの二人には驚きのものであった。

何故向かうのか？

その理由を述べることもなく、カミュはさっさと闘技場に向かって歩き出してしまう。

リーシャは別として、サラにとっては、あの闘技場は極力近寄りたくない場所の一つとなっていた。

武器屋の前にある階段を降りると、昨日と同じように、珍妙な格好をした男が歓迎の挨拶をかけてきた。　その男の言葉を完全に無視するように、カミュは辺りを見回した後、目標を定めたように一直線に歩いて行く。

何が何やら解らないリーシャとサラは、昨日と同じような歓声とも奇声とも判別できない音の中をカミュに続いて歩いて行く。

「・・・国王様・・・」

ある人物の真横に立ったカミュが、その人物に囁くように出した言葉にサラは驚いた。
その人物は、みすぼらしい恰好をしてはいるが、まさに昨日謁見の間にて拝顔したロマリア国王その人であったのだ。

「・・ん？　おお、これはこれは、カミュ王ではありませんか・・・ですが、私はこの上にある道具屋の隠居です。　ひと違いではありませんか？」

「・・・国王様・・・・今の段階で私を『王』と呼ぶ者は、昨日あの場にいた者以外はおりません。　間違っても道具屋のご隠居にそれを知る方法はありませんよ・・・」

「・・・おお、これはしくじったわ。　・・・・で、いかがしたのじゃ。」

ロマリア国王は、カミュの問いかけに対して惚けることに失敗し、姿勢をただした後、もう一度カミュに向き直った。　その姿は、やはり一国の王が持つ威厳が見え隠れしていた。

「・・・はい。　やはり、私のような若輩者には、国王という重責に耐えることのできるだけのものはございませんでした。」

「・・・ふむ。　そんなはずはない。　わしには、『王』として

の能力など微塵もない。　だが、その分、人を見る目というのは備わっていると自負している。」

確かにロマリア国王の言うとおり、この国王には人を見る目があるのかもしれない。
それでなければ、若い王女の資質を見抜き、案を出させ、その案を実行するための人物を見抜いて国務大臣という地位を与えたりはしないだろう。
愚王という者にも、二種類存在する。
政治や軍部、またはその時勢を顧みることを全くせず、民を苦しめ、国を滅亡に追いやる者。　逆に自分の能力を信じ過ぎ、何もかもを自分一人でやろうとし、家臣達を信用することなく潰していく者もまた、国を滅ぼす愚王である。

今、目の前にいる国王は、確かに個人の能力としては国王として及第点にも届かない者かもしれない。　しかし、周りの者を信じ、その人物たちを適材適所に配置することのできる王なのかもしれない。
そう、カミュは考えていた。

「・・・確かに、王女様や国務大臣、それにその他の文官や武官の方々を見ると、国王様の目は確かなものだと感じています。　ただ、私のような若輩者では、今は国王様の期待にお応えする自信がございません。　私では、成すことができたとしても、この闘技場の廃止ぐらいな物です。」

「・・・なんと!!　お主、この闘技場のもつ意味合いが理解できぬとでも申すのか?」

「いえ、それは存じておりますが、何分アリアハンの田舎者ですので、賭け事というものに対しての免疫がございません。　一度廃止してから、他の方法を考えることになるでしょう。」

「・・・むむむ・・・・あいわかった。　この闘技場は、制作にもかなりの時間と資金がかかっておる。　そう簡単に廃止するわけにもいかん。　わしの楽しみの一つでもあるしの。　やはり、お主には、その姿が一番似合っておるのかもしれんの。」

「・・・申し訳ございません・・・」

サラが未だ、この闘技場に不釣り合いなロマリア王の存在に呆けたままになっている間に、話が進み、サラが気付いた時には、すでに決着がついている頃であった。
リーシャは、淡々と話を進めるカミュを見ながら、素直に感心する。ロマリア国王の自尊心を傷つけることもなく、自分の意の方向に話を進めていくその話術に。　祖国アリアハンを田舎と吐き捨てはしたが、この場では仕方がないことだと納得もしていたのだ。

「・・・よいよい。　では、わしは城へ戻るとしよう。　お主たちはこのまま旅立つが良い。　『金の冠』を我が前に持ってくること期待しておるぞ。」

「・・・はっ・・・」

場所が場所なだけに跪くことはしなかったが、手を胸に置いて、頭を下げるカミュを満足気に頷きながら見詰め、ロマリア国王は階段を上っていった。

「良かったです。もしかしたら、カミュ様はこのまま旅を止めてしまうのではと考えてしまいました。」

ロマリア王の後ろ姿を見送った後に、サラは安堵の溜息と共に自身が今まで不安に思っていた胸の内を吐き出す。

「だから言っただろう。それは心配ないと。」

サラの様子に、再び胸を張り答えるリーシャの姿に、珍しくカミュは苦笑する表情を出した。カミュの表情の変化を見て、自然とサラも笑顔が戻る。

三者三様の和やかな雰囲気を保ちながら、三人は地上へと続く階段を上っていった。

「死にてぇのか！！」

階段を上り終えた途端に三人の耳に入って来たのは、人の怒鳴り声と、馬の嘶(いなな)きだった。　武器屋のカウンターに先程までいたはずの主人はおらず、武器屋と宿屋の間にある道には多くの人だかりができていた。

先程の罵声の発生源であろう人間は、昨日見た馬車の操縦士であった。
道に唾を吐きかけたそれは、手綱を引き、馬車を再び動かし、街の出入口へと走らせて行った。

カミュ達三人が立つ武器屋側とは反対側に、武器屋の主人が倒れている。
サラがそれを確認し、慌てて駆け寄った。
リーシャもその後に続き、カミュもゆっくりと道を渡っていく。

「大丈夫ですか！？」

倒れ込んでいる武器屋の主人にサラが声をかけると、その体躯がゆっくりと動き始め、主人の腕の中から、一人の少年が這い出てきた。
出てきた少年は、未だ気を失っている武器屋を一瞥したが、そのまま泣きながら走って行ってしまった。　その姿にサラは声をかける隙を見つけられず、走り去る少年を見送るだけしかできなかった。

リーシャが気を失っている武器屋の身体をそっと起こし、頭部などに外傷がないかを確かめた後に、再度仰向けに寝かせた。

「・・・うぅ・・・・」

すぐに武器屋の意識は戻り、その目を開けていく。

「大丈夫か・・・？」

「・・・うぅ・・・ああ、なんとかな・・・」

リーシャの問いかけに回答し、身体を起こす様子からは、どこも異常がなさそうに見えるが、状況的に考えて、あの馬車から子供を救うために飛び出し、子供を抱えたまま反対側へ突っ込んだのだろう。馬車と接触していたら、どこか打っているかもしれない。

「・・・馬車とは接触はしていなさそうだな・・・」

「・・・ん？　ああ、間一髪だったがな。」

武器屋の無事が確認でき、ほっと胸を撫でおろすサラの後ろから、今まで傍観していたカミュが前に出てくる。

「・・・しかし、なぜあいつ等はそれほど急いでいたんだ・・・？
こんな街中であそこまでのスピードを出す必要性が理解できないが・・・」

カミュの疑問はもっともである。　いかに城下町の正門へ続く街道と言えども、そこまで広いわけではない。　馬車がすれ違うのも一苦労する程の幅しかないのだ。　そんな状況であれほどのスピードで馬車を走らせれば、人をはねる可能性も出てくる。

「・・・ああ・・・実は、城門近くで、あいつ等の馬車の幌が捲れてな。　その中が偶然見えたらしい。　中には一人の女の子供がいた。　売れ残りなのかもしれない。　それを見た子供が騒ぎ出したら、人が集まってきちまって、この状態になった。」

「・・・・子供・・ですか・・・？」

つまり、馬車の中の売れ残った奴隷がいることに気がついた一人の子供が騒ぎだした為、元々奴隷商人を快く思っていない、ロマリア国民の感情を揺さぶられて、大人も含め馬車を囲むように騒ぎ始めたのだ。
奴隷商人としても、一人二人の民ならば、高圧的に出ることも可能ではあるが、群衆となれば、逃げるよりほかなかったということなのだろう。

「・・・それにな・・・奴隷商人と門兵が話している内容を聞いてしまった奴がいたらしく、そいつが言うには、その中にいた少女は、売れ残りではなく、奴隷商人のお気に入りということだ。」

「「・・・・・・」」

「　どういうことですか！？」

カミュと、リーシャの二人は、武器屋の言葉が指し示す先が見えていたが、サラには見当がつかない。　自然とその声も荒くなっていった。
サラの声にリーシャの顔は悔しそうに歪み、武器屋も再度俯いてしまう。

「・・・奴隷商人達にいいように嬲(なぶ)られた後、殺されるということだ。」

「えっ！！」

カミュが呟いた言葉にサラは絶句する。
武器屋は更に呻いていた。

「な、何とかならないのですか！？」

「・・・ならない・・・」

「リーシャさん！？」

サラの呟きに返ってきたのは、リーシャの答えだった。
リーシャは、カミュに馬鹿にされることはあるが、一応は国の中枢にいる宮廷騎士だ。
冷静に判断しなければいけないことには、非情ともいえる冷酷さを見せる。

「・・・アンタは奴隷全てを解放でもするつもりなのか？　奴隷や孤児、この世界には報われない人間など数多くいる。　そんな人間全てを救うつもりなのか？　誰がその面倒を見る・・・アンタか？　食糧、資金、住処に仕事、誰がそれを世話するんだ・・・？」

「・・・そ、それは・・・で、でも！」

「・・・話にならないな・・・」

話を途中で打ち切ったカミュは、そのまま街の出入口に向かう。
リーシャは、未だに顔を上げないサラの頭に手を置くが、何も言う

ことが浮かばず、黙ってサラを促す。
信仰の理想と、教会の中だけでは知りえない現実とのギャップにサラは押しつぶされそうになる。　しかも、その現実を知らないのは、このパーティーの中で自分だけなのだ。
それが、更にサラの心を苦しめる。

ロマリア城？（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

うぅぅ・・・なんか、中途半端ですね・・・
実は、これも本当は、城を出た後も書いているんですが、城を出た後、切りのいいところまでいくと、４００００字を超えてしまいそうなんです・・・
ですので、仕方なくここで区切らせてもらいました。

次話は早めに更新します。
よろしくお願いいたします。

ロマリア大陸？（前書き）

早めの更新です。
ＰＶやユニークを見ると、ここ最近、突然増え方が急になってきていて驚いています。　お気に入り登録の数も多く、本当に喜んでいます。
ありがとうございます。

門を出たところで、カミュは二人を待っていた。
リーシャはそのカミュに一つ頷くと、いつも通りの隊列を組み、歩き出す。

リーシャには、カミュの言っていることは理解できていた。
確かに言い方は最悪ではあるが、言っていることは正論である。
それにサラが納得するかしないかではなく、それを飲み込んでいかなければいけないのだ。
故に、リーシャはこのことで、サラを擁護するようなことは一言も発しなかった。

「・・・ここから、北に行けば、カザーブという村があるらしい。
噂によれば、カンダタ一味は北に向かって逃亡したらしい。そこに行けば、多少なりとも情報が入るだろう。」

「・・・そうか・・・」

「・・・・」

歩きながら、地図を広げたカミュは、これからの行先を告げるが、返ってきた返事は、気のないリーシャのものだけであった。

サラは、未だに俯いたまま、カミュの後ろをただ付いて行くだけである。

サラは、ロマリアで新調した＞鉄の槍＜を背中に背負い、今まで腰に下げていた＞銅の剣＜は売り払った。　その背中の槍の重さに潰されてしまいそうな歩き方のサラを心配そうに眺めるリーシャであったが、やはり掛ける言葉が見当たらない。
今、口を開いてしまえば、叱咤激励となり、それが、更にサラの心の負担になりかねないのだ。

サラを気にかけながらも、そこはアリアハン随一の戦士、自分達に近寄る不穏な影の存在にいち早く気がついた。

「　カミュ！　魔物だ！　」

先頭を行くカミュに、警戒を投げかけると、リーシャは腰の剣を素早く抜く。
リーシャの声を聞いたサラも、顔を上げ、背中の＞鉄の槍＜を掴む。
如何なる状態であろうと、敵との遭遇での対応を誤らないサラの成長に自然とリーシャの口元が緩んだ。

カミュも背中の剣を抜き、こちらに歩み寄る魔物に注視する。
その姿は野生の狼のように見える。
狼であるならば、傷つけることなく追い払うこともできる。
しかし、徐々に近づいてくるその姿を見て、三人は絶句した。

陽光に照らされたその狼らしき獣の目は眼球がこぼれ落ちて下に垂れ下がっており、その腹部の肉は削げ落ち、中の肋骨や内臓が見え

ている。
とても生きているものの姿ではないのだ。
それが三匹、狼とは思えない程のスピードで、一行を取り囲むように近寄ってくる。

「ひっ・・・」

意気込んで槍を構えたサラは、その魔物の姿の異様さに悲鳴を上げてしまう。
明るい日差しの中で見てもその姿は異様である。
その身体から瘴気や異臭すら撒き散らしていそうなほど、それは腐りきっていた。

＞アニマルゾンビ＜
狼などの死骸が魔王の魔力によって、ゾンビとなって魔物化したもの。
その肉体は腐敗が進み、腐り落ちている。
それでも、生への執着なのか、この世への未練なのか、魂の休息をせず、とどまり続ける。

剣を手に持ちカミュが駆ける。
アニマルゾンビの一匹に狙いを定め、その剣を振るった。
所詮、死体である身体を動かしているアニマルゾンビの動きは遅い。
カミュの剣は、腐りきっているその身体に吸い込まれ、頭部から上半身の途中までを二つに分けた。　腐った異臭を放つ体液が飛び散る。　その臭いは、通常の人間であれば耐えることなど不可能な程のものであった。

体液を浴びないように素早く剣を抜き、カミュは飛びのくが、剣で顔面を二つに分けられたはずのアニマルゾンビは、その異臭漂う体液を撒き散らしながらも未だ活動をやめようとはしない。

「メラ」

カミュの一刀で腐り落ちていた眼球を完全に落としてしまったアニマルゾンビはもろにその火球を受けた。腐った肉体が『メラ』の炎で焼かれ、その臭いを更に増す。

二つに分かれた顔面を焼かれ悶えるアニマルゾンビに、カミュは再度剣を振るった。

先程とは異なり、正面からではなく、側面から繰り出されたカミュの剣は、再びアニマルゾンビの身体に抵抗なく滑りこみ、上半身と下半身を真っ二つに分ける。

顔面を炎で焼かれ、下半身と分けられたアニマルゾンビは、成すすべなくこの世につなぎとめていた魂を昇華させていった。

カミュの戦いぶりを見ることもなく、残る二匹は、リーシャに襲いかかっていた。

動きの遅いアニマルゾンビの攻撃がリーシャに触れることなどできるわけがない。

何の策略もなく飛び込んできたアニマルゾンビを、リーシャはかわし際に両断するつもりで身構えた。

「ウォォォォォン」

リーシャに飛びかからず、静観しているようだった方のアニマルゾンビが突然、遠吠えのような鳴き声を上げる。
その鳴き声が響いた途端、先程まで、十分に避けることが可能であったはずの攻撃を、リーシャは避け損なった。　飛びかかって来た爪を簡単に避けるはずが、リーシャの着込んでいた＞革の鎧＜の肩当てを弾き飛ばしたのだ。
リーシャの身体に傷はつかなかったが、触れられる筈のない攻撃を受けたことにリーシャは驚いた。　しかも、リーシャの返しの剣すらも、アニマルゾンビに避けられてしまったのだ。

「　リーシャさん！！　」

「　なんだ、これは！？　」

リーシャの様子がおかしいことに気がついたサラがリーシャの名を叫ぶが、当のリーシャは自分が陥っている状況が把握できていない。
サラの目には明らかに、リーシャが手を抜き過ぎているように見えるのだが、そうではないらしい。　どうやら、リーシャ自身はいつものように剣を振るっているつもりのようだった。

「　くそ！　おい！　アイツに『ピオリム』をかけろ！　」

「　えっ？　あ、は、はい！　」

二匹のアニマルゾンビに翻弄され始めているリーシャの援護に走るカミュが、サラの横を駆け抜けざまに指示した内容は、身体能力向上の魔法の行使だった。
サラは理由が分からないまでも、それをする必要性はカミュの言葉の強さで理解できた。

「 ピオリム 」

その対象となった人間の身体能力を向上させる魔法をリーシャへと唱える。
軽い光に包まれ、アニマルゾンビの緩慢な攻撃に四苦八苦していたリーシャの動きが戻った。 常時の剣速を取り戻したリーシャの剣は、一匹のアニマルゾンビの身体に吸い込まれていく。 寸分の狂いもなく、アニマルゾンビの首をリーシャは刈り取るが、先程のカミュの時と同じように、それではこの魔物の魂を昇華させることはできなかった。

首の根元から斬り落とされ、地面に転がった頭と、首の部分から粘着性があり異臭を放つ体液をこぼしながらも、未だに動くその身体に向かって、後ろからカミュの『メラ』が放たれる。 炎に包まれる胴体部分に、再度リーシャが剣を走らせ、ようやくその活動が止まった。

「 ニフラム 」

残る一匹に、カミュとリーシャが目を向けるのと同時に、サラの詠

唱が響いた。
聖職者の本来の仕事。
迷える魂の浄化。
その為にある魔法の正常な行使であった。

しかし、聖なる光に包まれ消えるはずのアニマルゾンビの身体は光の中にはあるが、一向に消える気配がない。　動きこそ止まってはいるが、この光が収まれば、再びカミュ達に襲いかかってくることであろう。

「うぅぅぅ・・・・・・ニフラム！！」

それに対し、サラがとった行動は、再度の詠唱。
魔法の重ねがけであった。
行使するために天に向かって掲げていた手とは反対の手を再度天に掲げ、諸手を上げる形でのニフラムの行使である。

更に強い光に包まれたアニマルゾンビの身体は、本来腐り、落ちていくだけの肉が、反対に上へと上がっていく。　徐々に光によって天へと運ばれる身体は、数秒の後に欠片も残さず消えていった。

「　サラ、よくやった。　」

「あ、はい。　！！　リ、リーシャさん、その腕は！？」

嬉しそうに駆け寄ってくるリーシャの声に、思わず返事を返してしまったサラであったが、そのリーシャが片腕を押えながらこちらに向かってくるのを見て、慌てふためく。

「ん？　ああ、あの魔物の攻撃をよけ切らなくてな・・・少し傷をつけられた・・・」

「えええ！！　は、早く診せてください！」

すぐ近くまで来たリーシャの抑えている方の腕を取り払い、患部を注意深く見る。
幸い、傷は深くなく、爪で抉られてはいるが、なんとかサラのホイミでも治療が可能な範囲のものだった。　サラは急いでリーシャの患部に手を当て、ホイミを詠唱する。
患部を暖かな光が包み、リーシャの傷口を塞いでいった。

「・・・念のため、＞毒消し草＜も当てておけ。」

ホイミを効力で傷口が塞がれていくのを確認したカミュが、腰につけた革袋から一枚の毒消し草を取り出し、サラへと手渡す。

「そ、そうですね。　腐敗している体液などが身体に入っていたら、毒に侵されるかもしれません。」

半分に割った毒消し草を患部に当て、残りの半分を水の溶かしリーシャに手渡す。
一つ礼を言い、リーシャはその水を飲み干した。

「・・・しかし、あれはなんだったんだ？　急に身体が重くなったというか、言うことを利かなくなったというか・・・・」

「・・・ボミオスだろうな・・・」

「・・・それで、カミュ様は、私に『ピオリム』を唱えるよう言ったのですね。」

ボミオス
対象の身体能力を向上させる＞ピオリム＜とは正反対の効力をもり、その術の対象の身体能力を下降させる。
対象となった者は、通常の動きをしているつもりなのだが、身体がいうことを利かないような錯覚に陥り、動きが緩慢になっていく。

カミュはリーシャの動きから、アニマルゾンビに『ボミオス』をかけられた可能性を考え、サラに『ピオリム』を唱えることを指示したのである。
もし、身体能力が低下させられていたのであれば、反対の呪文を唱え身体能力を戻せばいいのだ。

「そ、そうか、すまなかった。　ありがとうな、サラ。」

「・・・・礼を述べる前に、いい加減、その抗魔力の弱さを何とかしてくれ。」

「・・・ぐっ・・・・」

以前のマヌーサに続いての失態を突かれ、リーシャは言葉に詰まる。
サラは、そんな二人のやり取りを心配そうに見ていた。

「・・・魔法の知識があるだけでも、幾分かは違うはずだ。　剣の鍛練が終わった後にでも、そいつに魔法の知識を教えてもらうんだな。」

「そうですね！　私でよければ、お教えします。」

「・・・・わかった。　そうすることにするさ・・・・」

カミュの言っていることは正論である。
魔法の特性、効果などについての知識があれば、下位の魔物が放つ魔法ぐらいでは惑わされる可能性が少なくなるのも事実。
カミュやサラと違い、魔法に触れる機会が少なかったリーシャは、魔法についての知識が明らかに不足していた。

カミュの言葉に、苦々しい表情をしているリーシャに気が付くことなく、サラは自分がリーシャの役に立てることを喜び、諸手を挙げて賛成の意を伝えている。
そんな、サラの様子に、断ることが出来なくなったリーシャは、しぶしぶ了承することになった。

休憩を兼ねたリーシャの手当を済ませ、再び一行は北へ向かって歩き出す。
途中、以前遭遇したポイズントードやキャタピラーなどと出くわすが、対処方を見つけていたカミュ達は、それほど苦戦することなく、魔物を倒していく。

ロマリア大陸に入ってから、カミュが魔物を見逃すことが少なくなっているが、それは、魔物達の力量がアリアハンとは違い、カミュ達を恐れて動きを止めたり、逃げだそうとしないことが原因であろう。

しばらく歩き、日が真上に上ってからいくらか経つと、順調に北へ向かう一行の前に、木々が生い茂る森が見えてきた。
周辺の草原を阻むように広がる森は、北へ行くには抜けざるを得ない。

おそらく、この分では、森を抜ける前に日が落ち夜の闇が支配することになるだろう。

カミュにそのことを伝えられた一行は、ロマリアを出る時にサラが託された道具袋の中に聖水があることを確認し、森に入るため、歩き出した。

森へ向かって歩き出すと、前方に見憶えのある馬車が停車していた。

それは、間違いなく、あのロマリアにいた奴隷商人の馬車であることにサラは気が付く。

「・・・・カミュ様・・・・」

「・・・・まだ、問答を続けるつもりか・・・？」

サラがカミュに向かって口を開くが、その内容を予測しているカミュは冷たく突き放すように呟いた。

「・・・で、でも・・・」

「・・・アンタは、以前俺に言ったはずだ。　貧富の差は、前世での行いの結果だと・・・」

「　えっ？」

尚も言い募ろうとするサラに、完全に立ち止まったカミュは、珍しくサラの目を見て語り始めた。　その様子に驚いたサラは、言葉が出てこない。

「あの馬車に乗せられている奴隷の子供は、親に売られたのか、それとも攫われてきたのかは知らないが、どちらにしても裕福とは言えない育ちだ。　つまり、アンタが言うような、前世でルビスの教えに背くような行いをした人間なのだろう。」

「・・・カミュ・・・」

サラの目を見て話すカミュに、リーシャは、レーベの村の宿屋での一幕が頭を横切った。
どこか、諭すような、相手の考えを導くような、そんな、無表情ではあるが、冷酷ではない話し方であったのだ。

「・・・アンタの言う、ルビスの教えの通りならば、この世での償いをしている最中ということになる。　奴隷として売られ、奴隷商人に辱めを受け、そして殺されることが償いとなるのならば、早々に死んで、幸福な来世を迎えさせてやった方が、その子供にとっても幸せなんじゃないのか？」

「・・・そ、そんな・・・・」

「アンタがあの森の中で、俺に言ったことは、そういうことだ。
この世には、ルビスという聖霊の下に、必要な命とは別に、死んで当然で不必要な、そして生きる価値も権利もない命があるとアンタが言ったんだ。」

「そ、そんな・・・・こと・・は・・」

「・・・カミュ・・・」

サラは、カミュの言っていることが理解出来ない。
自分はそんなことは言っていないはずだ。
そんな考えなど持ってもいない。
『人』の命をそんな風に軽く考えたこともない。
なぜこんな酷いことを自分は言われなくてはいけないのか・・・・
それが、サラには解らなかった。

リーシャは、カミュの無表情が闘技場等で見せたものではなかったために、静観していることにしたが、その内容の過激さに、間に入ることすらできなかった。
カミュの言っていることは、以前サラの発した言葉の揚げ足を取って、曲解している物だ。
ただ、聖霊ルビスを崇めない人間など、リーシャがまだ見ぬ異国の異教徒しかいない世界で、カミュのような考え方をする人間もいなければ、教会の教えをそのように解釈する人間もいない。　つまり、サラもリーシャも初めて聞く解釈なのである。

「アンタはあそこにいる奴隷を救うために泥を被る覚悟があるのか？　前世でのルビスに対しての罪人を救うということは、教会に属するアンタにとっても罪になるんじゃないのか？」

「！！」

「・・・・」

そんな規則はない。
そんな規則があれば、サラとて今生きている訳はないのだ。
親が魔物に襲われ、天涯孤独となった自分を拾い、育ててくれたのも教会の司祭職にある神父様であった。

「　そ、そんなことはありません！　」

カミュの残酷ともいえる糾弾を受け、下がりきっていた顔を勢いよく上げたサラの瞳は、何かを決意したような、そう、リーシャに剣の師事を頼み込んだ時のような瞳であった。

「　この世に死んで当然の命なんてありません！　誰しも生きて幸せになることは許されているはずです。　生きる価値がないものなんていません！　」

カミュの目を見て、自分の内にあるものを吐き出したサラは、その叫びを聞き終わった後のカミュの表情を見て驚いた。
カミュが微笑んだのだ。
ただ口元を緩めるだけの微笑みではあったが、それは口端を上げる皮肉気な笑いでもなく、鼻で笑うような嘲笑でもない、そんな優しい微笑みだった。

「・・・そうか・・・・それには、同意見だな・・・・」

カミュはその言葉と共に、馬車のある場所に一直線に歩いて行った。
サラは、カミュの微笑みの理由は分からず、ただその不思議な光景に呆然としたままカミュの背中を見送ってがいたが、不意に肩に置かれた手に、そちらに顔を向けると、そこにはサラと同じようにカミュの背中を見つめるリーシャの姿があった。

「・・・サラ、・・・今のお前の言葉が、おそらくこれから先、お前を大いに苦しめることになるだろう。」

「えっ？」

サラは突然言われたリーシャの言葉が理解できない。
何故、自分の言葉が自分を苦しめることになるのか。
自分は何も間違ったことは言ってないはずだ。
なのに、何故・・？

「・・・だが、カミュと同じように、私も同じ意見だ。・・・・・・・・例え、それが、これから先、私を苦しめるものであったとしてもだ。」

「・・・リーシャさん・・・」

リーシャは、ポンとサラの頭を掌で叩き、もはや、馬車に辿りついているカミュの後を追う。　サラは、そのリーシャの背中もしばらく見つめていたが、我に返り、慌てて後を追った。

「　しかし、兄貴も面倒なことをするもんだよな・・」

「・・・ああ、流石に城下町では肝を冷やしたぜ・・・」

止めた馬車の近くで、二人の奴隷商人が休憩を兼ねて話していた。
話している内容から、彼らが兄貴と呼ぶ存在が近くにいないことが分かる。
用を足しに行ったのか、それとも馬車の中なのかは分からない。

「それに加え、趣味も悪いと来たもんだ。　あんなガキじゃ、面白みもないだろうによ。」

「ああ、それに、こんなことをしてるのを頭(かしら)に知られちゃ、俺たち自体がやばいからな・・・結構な値をつけた馬鹿貴族もいたんだから、さっさと売っ払っちまえばよかったんだよな。」

柄の悪い恰好をした二人は、何やら愚痴を言い合っている。
それは、おそらくこの馬車の中にいる奴隷の少女に関してのことなのであろう。

「だよな・・・しかも、あんなガキじゃ、俺達は全く楽しめねぇしよ。　どうせ殺すのも俺らの仕事なんだろ？　流石にガキを殺すのは気が引けるな。」

「嘘を言うな！　お前がそんなたまなわけねぇだろ！」

もう一人の奴隷商人の切り返しに、二人は盛大に笑い合った。
さも、楽しいことを話しているように・・・

「・・・ああ、楽しんでいるところに悪いんだが・・・」

「「 ああ？ 」」

楽しい談笑の中に割り込んでくる声があった。
二人が同時にその方向を振り向くと、そこには、頭に蒼い石のはめ込んであるサークレットをつけ、背中に剣を背負っている男が立っていた。

「 なんだ、てめぇは？ 」

一人の奴隷商人が立ち上がり、突然現れた男の方へ近づいて行く。
もう一人は、にやにやと汚らしい笑いを絶やすことなく、その男を眺めていた。

「・・・少し尋ねたいんだが、その馬車に乗っている奴隷は、お前たちが買ってきたのものなのか？ それとも、攫ってきたものか？ 」

「 ああ？ なんだ？ そんなこと、お前には関係ねぇだろうが！ 」

直接的すぎる質問を奴隷商人にぶつける男は、先程、サラとのやり取りの後に馬車へと向かったカミュであった。
そんなカミュの不躾な質問に、奴隷商人は鼻息荒く返答し、再び二人で笑いだした。
いったい何がおかしいのか、とでも言いたげな表情を浮かべたカミュが、尚も質問をつなげる。

「・・・いや、もし、買い取って来たのならば、その金額を払うから譲ってもらいたいんだが・・・」

「はぁ？　何を言ってやがるんだ？　俺達の買値で奴隷が買えるわきゃねぇだろうが！」

奴隷商人達は、カミュの申し出に呆れかえってしまう。
彼らも、まがりなりにも商人を名乗っているのだ、仕入値で売却しては利益など取れやしない。

「それによ、どんなにてめぇが奴隷を欲していても、この娘は無理なんだよ。　兄貴のお気に入りだからな。」

「・・・端金（はしたがね）で買い叩いてきたものを偉そうに・・・」

「「　なんだと！！　」」

カミュの切り返しに、一気に頭に血が上った奴隷商人達は、商人が持っている筈のない腰にぶら下げた剣に手をかける。

「　抜くな！！　」

「「！！」」

剣に手をかけた二人に、今まで呟くような話し方だったカミュの声質が変わる。
その威圧感に、二人の奴隷商人は声に詰まった。

「・・・抜けば、斬るぞ・・・」

「！！　ふ、ふざけんな！　」

カミュの最後通告を無視し、二人は剣を抜いて、カミュへと斬りかかっていく。
素早く背中から剣を抜き、二人の襲撃に備えたカミュの剣が振るわれる。
一刀目で、右側から襲いかかってくる奴隷商人の剣を持つ左手を斬り飛ばし、二刀目で、左側からの者の右腕を斬り落とした。

「「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」

利き腕を失った二人の悲鳴が周囲に轟く。
その声にまったく関心を示さず、剣を一度振るい、血糊を飛ばす。

「・・・カミュ・・・」

「・・・カミュ様・・・」

やっとカミュに追いついたリーシャとサラは、絶叫に近い悲鳴をあげながらのた打ち回る奴隷商人を見て、『人』に対しても、容赦なく剣を振るうカミュの冷酷さに言葉を失っていた。

「・・・で、いくらで買ったんだ・・・？」

未だに腕から血を流し続け、地面を転がる奴隷商人の身体を足で抑えつけたカミュは、先程の質問を繰り返す。
その姿には、先程、サラに微笑んだ優しさは微塵もなく、鬼さながらのものであった。

サラは、二人の奴隷商人に駆け寄り、その腕にホイミをかけて行く。
二人の腕が暖かな光に包まれ、斬り飛ばされた部分の止血がなされ、赤々とした肉が皮に覆われて行く。　元来、ホイミでは、傷などは

癒せるが、身体の欠損した部分までも復活させることはできない。
それは、最上級の僧侶が使えると云われている蘇生呪文も例外ではない。この世で唯一、そのようなことができる物があるという伝説はあるが、それもあくまで伝説の域を出ないものであった。

「どうした、何騒いでやがるんだ！」

サラが二人の治療が終わった頃に、後ろの茂みから一人の男が出てきた。
その姿は、腕を失った二人とは一線引いたものであり、この男が、先ほど二人が言っていた、『兄貴』と呼ばれている男であることが一目でわかる。

「な、なんだ、てめぇら！！」

「「あ、兄貴！」」

カミュ達の存在に気がついた男は、自分に駆け寄ってくる二人の弟分の腕が失っているのを見て、更に動揺を深めた。
そんな男の心の動きを余所に、カミュが一歩前に出る。
男は、カミュのその動きに恐怖から、腰の剣に手をかけようとするが、初めから剣を抜いている者と、これから抜く者では勝負は見えていた。
男が剣を抜くよりも早く、カミュの剣が男の喉元に突きつけられる。

「・・・抵抗はするな。・・・・殺すつもりはない・・・」

「な、な、何が・・も、目的なんだ・・・？」

喉元に剣がチラついているため、男は思うように話すことができていない。
二人の弟分もまた、兄貴分の後ろに隠れ震えていた。

「・・・この馬車にいる奴隷の娘は、攫ってきたのか・・・？」

「あ、ああ？　な、何言ってやがる？　しっかりと親から・・買い取ってきたに決まってるだろうが！」

「・・・・そうか・・・いくらだ・・・？」

「ああ！？　それがてめぇに関係あんのか！？」

まがりなりにも、二人の弟分を持つ奴隷商人だ。
すでに心の動揺は抑えることに成功し、剣を突き付けられながらも、カミュと対等にやり取りを行い始めた。

「・・・勘違いするな・・・殺す気はないが、殺さないとは言ってない。　そこの奴隷の買値を教えろと言った。　ああ、嘘を言うな・・・ふっかけられる相手じゃないことは解るだろ？」

「・・・・・」

剣を持つ角度を変え、再び男の喉元に突きつけたカミュの剣は、男の喉の皮を破り、血を滲みださせた。

「・・・・２０・・・ゴールドだ・・・」

「・・・２０・・・」

「！！」

緊迫したカミュの様子に、男は少女の買値を白状した。
その金額に、サラもリーシャも絶句した。
高いのではなく、人一人の値段としては安すぎるのだ。

今のこの世界で、２０ゴールドで買える物など、たかが知れている。
宿屋に2泊すればなくなる。
食費としても、一週間も過ごせない。

「・・・４０ゴールドだ・・・少なくとも倍にはなっただろ・・・」

リーシャとサラが活動停止になっている横で、カミュが男から剣を外し、革袋から硬貨を取り出し男に足元に投げた。
剣が喉元から離れたことに、男は安堵の溜息を吐き、鋭い目つきでカミュを睨みつけた後、硬貨を拾い上げ、弟分を引き連れて、森へと入っていった。

「・・・カミュ様・・・」

剣を背中の鞘に納め、馬車の方に歩くカミュの背中を、サラは複雑な想いで見送った。

リーシャは今回の一件には、極力前に出ないよう心掛けていた。
その辺のゴロツキに手こずるカミュではないし、更にこのサラとカミュとの間でのやり取りが、この先の旅で重要な起点になることを感じていたからだ。

カミュが馬車の後ろから、中に入ると、幌によって日光が遮られているため、薄暗く、奴隷を運んでいたためか、中は独特な臭いが籠っていた。

その奥で、一人の子供が、縄で足と手を縛られ、手を縛っている縄は、馬車の側面につながっており、その子供をつるすような格好になっている。
カミュは、縄を剣で切り、子供の身体の自由を返還してやる。

手足を動かすことができるようになった子は、カミュを不思議なものでも見るように小首を傾げながら見ていた。

その子供は、年の頃は二桁に届くか届かないかに見える。
別段、食事を取り上げられ、成長に異常をきたしているようには見えないため、見た通りの年齢で間違いはないだろう。
髪は、不衛生の為に虫などが湧かないように、耳が隠れるくらいに短く切り揃えられてはいるが、ロマリアの武器屋が言っていたように性別は女で間違いはないだろう。

奴隷とはいえ、貴族に売り払う商品であるため、餓死寸前では値が下がるのだ。
故に奴隷商人達は、食事の量の制限はするが、必ず何かを取らせる。
そんな食費を含めて、貴族達にかなりの金額を吹っ掛けるのだ。
故に奴隷として売られるのは、食の細い女が多く、屈強な男の奴隷などは皆無に等しい。

「・・・歩けるか・・・？」

手足の自由が利くようになり、立ちあがった少女を見上げる形となったカミュの問いかけに、少女は首を縦に振ることで返答する。
少女の答えを確認したカミュは、少女の背を押すような形で馬車の

外へと促していく。
自分の背を押すカミュの顔を確認するように振りかえる少女に、カミュは頷きで応えた。
そのカミュの頷きに、自分が出てもいいのだと理解した少女は、馬車の外へと踏み出した。

外は、真上を通り過ぎ、傾きかけている太陽の放つ西日が周囲を赤く染め始めていた。
暗い馬車のなかから出た少女は、眩しそうに目を細め、目が慣れるまで、その場に立ち尽くす。

「・・・大丈夫・・？」

「　！！　」

目を瞑るようにしていた少女を心配し、サラは確認の意も込めて少女に触れようとする。
少女は徐々に慣れ始めた目に映った、サラを興味深げに見ていたが、ある一点に目を向けた途端、息を飲むような、声にならない悲鳴をあげて、少女に遅れて馬車から出てきたカミュのマントの蔭に隠れてしまう。

「・・・えっ・・？　・・・・なんで・・・？」

マントの蔭に隠れ、カミュの腰にしがみつくようにしながら、怯え

た目でこちらを窺う少女にサラは愕然とする。　先程まで夕日に輝いていた、短く切りそろえられた濃い茶色をした髪は、今やカミュのマントに隠れて見えなくなってしまった。
自分よりもカミュの方が安心できるとでも言うのだろうか。

「・・・サラ・・・どうやら、お前の服装が怯える原因みたいだぞ。」

「・・・えっ!?」

リーシャの言う通り、カミュのマントの陰から見ている少女の目は、サラの法衣に止まっている。　それは、法衣を見たことがないからなのか・・・・

「・・・奴隷商人が、子供を買い取る時に教会の人間と偽っていることもあるらしい。　もしかすると、この子を買い取った時も法衣を身にまとっていたのかもしれないな。」

リーシャが言う予想の内容に、サラは大いに憤慨した。
自分が深く信仰する聖霊ルビス様、その証であり誇りでもある法衣をそのような目的に使うなど、言語道断なのである。

「・・・大丈夫だ。　私達はお前に危害は加えない。　・・・・おいで。」

一人憤慨するサラを放っておくことにしたリーシャは、少女の警戒心を解くようにゆっくりと優しく声をかける。
しばらくは、マントの蔭に隠れ、カミュの腰にしがみついていた少女だが、少しずつ顔を出し、リーシャの目を見つめるようになった。

実は、少女に話しかけている時、リーシャは必死に笑いを堪えていたのである。
なぜなら、少女にマントと腰を取られたカミュが、今までリーシャが見たことのないような困惑した表情を浮かべていたのだ。
少女を引き剥がすこともできず、ただただ困惑するカミュが、可笑しくて仕方がない。
それが、自然な笑みとなり、少女の警戒心を解かせたのかもしれない。

「・・・ん。　・・・・名前は・・・？」

「・・・・」

顔を恐る恐る出した少女に、リーシャは続けて柔らかな質問をする。
しかし、少女は答えない。
『もしかすると、親に名前すらもらえていないのかもしれない。』
という考えが頭に浮かび、リーシャは後悔に顔を歪めてしまう。

「・・・・・・・メルエ・・・・・・」

そんな、リーシャの顔の歪みを、自分が話さないことに悲しんだとでも感じたのだろうか、小さな小さな声で、名前だけを単語のように少女は溢した。

「そ、そうか！　メルエか！　うん、良い名だ！　私はリーシャだ。　よろしくな。」

少女の答えに、喜びを顔全体で表すリーシャは、自己紹介をするために自分の名をメルエと名乗った少女に宣言する。
そんなリーシャに、こくりと一つ頷いたメルエは、続いてマントを掴みながら、そのマントを羽織っているカミュの顔を、まるで『貴方のお名前は？』とでも言うように見上げた。

「・・・カミュだ。」

カミュの自己紹介にも、一つ頷くことで返事をし、そのまま、またマントの中に隠れる。

「　ちょ、ちょっと待って下さい。　私の名前も聞いて下さいよ。」

先程の憤慨から立ち直ったサラが、自分の名前も聞かずに再びカミュのマントに隠れてしまったメルエに哀願するように話しかけた。

そのサラの様子に、先程のカミュの表情を思い出させられたリーシャは、笑いのツボに最後のひと押しを加えられ、爆笑してしまう。

「あはははははっ！」

突然響き渡った、リーシャの笑い声に、ビクッと身体を跳ねさせたメルエは、尚更マントを身体に巻きつけるようにして隠れてしまう。その動きに、カミュの表情はますます困惑を極めて行く。その表情にリーシャの笑いは熱を増す。といった循環が出来上がり、サラがメルエに自己紹介ができるまで、かなりの時間を要することになるのだ。

ひとまず、リーシャの笑いも沈静し、状態が落ち着いた中、カミュが口を開いた。

「・・・で、どうするんだ・・？」

それは、サラに向かってかけられる言葉。

『この少女を救ったのはいいが、どうするんだ?』という意味。
カミュにしてみれば、サラの願いを聞いて、救っただけというのかもしれない。

「・・・・・」

未だにカミュのマントの裾を握るメルエは、カミュとサラの両方の顔を見比べている。
サラは、そんなメルエの視線を感じ、尚更言葉が出てこない。
そんな二人の膠着状態を破ったのは、やはりリーシャであった。

「連れて行けばいいじゃないか・・・」

「・・・はぁ・・・本当にアンタはどうしようもない馬鹿なんだな・・・」

「　なんだと!!　」

「俺達の目的は分かっているはずだ。　そんな死への旅に、こんな子供を連れていくつもりか?　それこそ何の為に救ったんだ!?」

珍しく語気が荒いカミュに、意見を述べたリーシャも、言葉が出なかったサラも驚きを隠せない。　ただ、カミュの横に立つメルエだ

けは、カミュのマントを握る手に力を込めていた。

「・・・・メルエも行く・・・・・」

「・・・・はぁ・・・・見ろ、アンタの馬鹿な発言のお陰で、こんなことになる。」

メルエが発した言動に、心底疲れ切った様子で溜息をつくカミュは、リーシャへと怒りに燃えた鋭い視線を投げかけた。

「ま、まぁ、いいじゃないか。　どちらにしろ、こんな所に置いて行くことはできないのだから、カザーブまでは一緒に行くしかないだろ？」

「そ、そうですね。　とりあえず、カザーブまでは一緒に向かいましょう。」

リーシャの言い訳のような言葉に乗っかるようにサラは同意を示す。
カミュの視線はますます厳しくなり、サラは俯いてしまうが、リーシャはそんなカミュの変化を好ましく思っていた。
あのカミュが、二桁の歳になったかならないかの少女に翻弄されているのだ。
これ程面白いことなどあるわけがない。

「よし！　メルエ、ここからの道は危険が一杯だ。　カミュの傍を離れるな。」

「おい！」

カミュの抗議の声を無視するかのように、マントの裾を握ったまま、こくりと頷いたメルエにリーシャはにこやかな笑みを作った。
そんなやり取りに、俯いていたサラも顔を上げ、笑顔を見せるのだった。

ロマリア大陸？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

ロマリアに入って、三話目なのに、まだロマリア城からそれほど離れない・・・

本当に前に進んでいるのかすら怪しい・・・

カンダタもいなくなっちゃうかも・・・

～幕間～【ロマリア野営地】（前書き）

いつも読んで頂き、ありがとうございます。

ご感想やご指摘など、たくさん頂ければ、嬉しく思います。

よろしくお願い致します。

～幕間～【ロマリア野営地】

「カミュ、馬車はどうするんだ？」

マントの裾を握ったままのメルエを引き摺るように森に入ろうとするカミュに、リーシャが放置されたままの馬車について尋ねた。

「あのゴールドに馬車の代金までは含まれていない。　そのうちにあの奴隷商人達が取りに戻ってくるだろう。」

「　しかし・・・」

「・・・それに・・・・」

馬車があれば、メルエのような幼い子供がいても、行軍速度の心配はない。
そう思って言い募ろうとするリーシャに、カミュは自分のマントの裾を握って放さない少女に視線を移すことで、その申し出を拒絶する姿勢を見せる。

「・・・そうだったな・・・メルエ、すまない。」

今まで、奴隷として縛られ、運ばれるために乗っていた物に、再度乗りたがるわけはない。
それを理解したリーシャは、メルエに向かって謝罪の言葉をかけたが、メルエはただ、首を横に数回振ったのみであった。

少し、気不味い雰囲気のまま一行は森へと入っていく。
もはや、夕日も沈みかけ、夜の静けさが森の中に漂っていた。

カミュとリーシャで、今夜の野営地を絞り、火を熾していく。
その間、サラは周囲から薪として使える木の枝などを探し、拾っていった。

簡単な食事を終えた後、焚き火の傍でうつらうつらと船を漕ぎ始めたメルエをリーシャが横たえ、カミュからはぎ取ったマントを掛けてやる。
まだ幼さが十分に残る寝顔を見て、リーシャに優しい笑みが浮かび、メルエの綺麗な茶の髪を手で梳いて行く。

その後、リーシャは、今日のアニマルゾンビとの戦闘後に話した通りに、サラに魔法についての講義を受けることになった。
幼い頃から、剣だけを磨いてきたリーシャに取って、初めて聞くことも多く、何度も聞き返すようなことがあったが、サラは嫌な顔一つせずに、懇切丁寧にリーシャの疑問に答えていく。

その講義の中には、時折サラの職業柄、聖霊ルビスにまつわる話も織り交ぜられていたが、リーシャとてアリアハン国民である以上、聖霊ルビスを崇めている一人であるため、そんなサラの話も真面目に聞いていた。

サラの講義を受け始めてどのくらいの時間が立ったであろう。不意に、傍で寝ていたはずのメルエが、むくりと起き上った。

「・・・ん？　どうした？　まだ寝ていてもいいんだぞ。」

「・・・・」

リーシャの優しい声にも、うまく反応できていない様子で、目を擦る仕草をするメルエに、サラは笑みをこぼした。

ようやく、寝惚けから覚醒したメルエは、掛っていたマントを握りしめ、周囲を見渡し始める。　その様子に、カミュを探しているのだと感じたリーシャは、今さらながら、カミュがいないことに気が付く。

「カミュか？　多分、その辺にいるとは思うが、少し待っていれば、戻ってくるさ。」

その声に、少しリーシャの方を見たメルエであったが、マントを持

ったまま立ち上がり、周囲を歩きまわる。　それは、まるで、迷子になった子供が親を探しているかのような必死さであった。

サラには、何故メルエが、そこまでカミュを頼みにするのかが理解できなかった。

別段、特別な優しさをカミュがメルエに向けているようには見えない。

メルエの傍でも、サラから見れば、いつものカミュにしか見えないのだ。

「あっ！　お、おい！」

リーシャの声に、自分の考えに没頭していたサラの意識が戻される。

メルエが、野営地を抜け、森に入って行ってしまったのだ。

「サラ！　私はメルエを連れ戻しに行く。　ここは、聖水をかなりの量使用しているから安全だ。　火を絶やさぬように待っていてくれ。」

サラが頷く間も与えず、リーシャはメルエの後を追い、森へと入っていった。

呆然とするサラであったが、今から自分が追いかけても仕方がないことを感じ、ここで待つことにした。

どこをどう歩いたのか分からない。
だが、親を探す帰巣本能なのか、メルエはカミュの下に辿り着いた。

そこは少し開けた場所で、周囲を木々が囲んではいるが、先程の野営地を一回り程小さくしたような平地がある場所だった。
そこにカミュはいた。

胡坐をかくように、地面に座り、目を瞑っていた。
カミュの周りは、なにか暖かな風に包まれ、淡い光を放っている。
メルエにはそれが何か分からなかったが、不思議と違和感を覚えなかった。

「・・・どうした？　眠れないのか？」

メルエが近付くと、カミュが目を開く。
カミュのたった一つの行動で、先程まで感じていた、カミュの周囲を満たしていた物が霧散していく。　それにメルエは小首を傾げるのだった。

「・・・・・何・・・・・？」

「・・・ん？　・・・・ああ、魔法の契約だ・・・・・」

メルエの発した、意図の掴みとれない単語だけで、カミュは何を言いたいのかを正確に理解する。『何をしていたのか？』とメルエは聞いているつもりなのだろう。

「・・・・・けい・・・やく・・・・？」

「・・・ああ・・・」

カミュの目の前まで移動してきたメルエは、小首を傾げたまま、カミュの表情を見ている。
それに、頷くようにカミュは答えた。

「・・・・・さっきの風・・・・・」

「・・・・・ん？　・・・・お前・・・魔力の流れが見えるのか？」

「・・・・・？？？」

メルエが、先程感じた、カミュを取り巻く風。
それは、魔法の契約時に契約者が纏う魔力そのものだったのだ。
その流れが視認できるということは、その人物もまた魔力を有して

いるということになる。

別段、この世界で魔力を有していることは、それ程珍しいことではない。

しかし、二桁に届くか届かないかの子供に、他者の魔力を視認できる程の魔力があるとなれば別の話である。

「・・・・ちょっとここに座ってみろ。」

カミュが立ち上がり、何やら地面に円をかいた後に、そこに幾何学模様のようなものを書き、メルエを呼んだ。

カミュが何をやっているのか理解はできないが、その声にメルエはこくりと頷き素直に従う。

メルエがカミュの書いた円の中に入り、腰を下ろすと同時に、円に沿うように淡い光が溢れ出し、メルエを包んでいく。

「・・・??・・・」

しばらくの間、メルエを包んでいた光は輝き続け、そしてまるでメルエの中に吸い込まれるように納まっていく。

「・・・まさか、本当に契約が完了するとはな・・・」

「・・・？？？・・・・」

その様子を傍で見ていたカミュの顔に、珍しく心からの驚きの表情が浮かぶ。
そんなカミュの表情に、不安になって来たメルエは、飛びあがるように円を飛び出し、カミュの下に駆け寄っていく。

「・・・メルエ、向こうに指を向けて、『メラ』と唱えてみろ・・・」

駆け寄ってきたメルエに、カミュは違う指示を出す。
カミュの顔を見上げていたメルエは、またこくりと頷いた後、言われた方向に右人差し指を向けた。

「・・・メラ・・・」

ゴォォォォォォ

メルエの呟くような『メラ』の詠唱と共に、人差し指から凄まじい音を立て、岩のような大きさの火球が飛び出した。

「あっ！」

「・・・なっ！？」

メルエから飛び出した火球の規模に、尚更目を見開いたカミュであったが、その後に起こったことに、ついらしくない叫びを上げてしまうことになる。

木々しかなかった、火球の進行方向には、運悪くメルエを探しに来た、リーシャが突然姿を現したのだ。

メルエを探し、森に入ったリーシャであったが、あの小さな身体がどこに向かったのか皆目見当もつかない。　ましてや、闇に閉ざされた森の中である。

ロマリアで見つけた『ランプ』を購入しようかどうか迷ったが、その燃料である油が高級なため、再びたいまつに落ち着いた。

そのたいまつを持っての探索となるが、難航していたのだ。

そんな中、自分の右手の茂みから、淡い光が輝いたことに気が付き、腰の剣に手をかけながらそちらへと歩いて行く。

しかし、近くまで近寄ったときには、その光は消えてしまった。

途方に暮れそうになったリーシャが最後に掻き分けた茂みの先に、突如昼になったかと思う程の熱気と光が飛び込んできたのである。

「・・・・なっ！？」

咄嗟に左手に持つ、＞青銅の盾＜を顔面に掲げ、その光から目を護ろうとしたリーシャに、更なる衝撃が襲った。

＞青銅の盾＜を持つ左腕に何かがぶつかり、その力にリーシャは吹っ飛ばされる。

何が起きたのか理解できなかったリーシャではあったが、魔物の襲来を考え、素早く態勢を立て直し、腰の剣を抜き放った。

「・・・・まいったな・・・・」

しかし、リーシャの耳に聞こえてきたのは、魔物の雄たけびや、奇声ではなく、もはや聞き慣れてきた、自分と共に旅する捻くれ者の声であった。

「　カ、カミュ！　お、お前・・・・何をする！　」

「・・・いや、すまない・・・悪気があったわけじゃない。」

「・・・・・・」

リーシャの激昂に、カミュは素直に謝罪の意を表し、その傍にいたメルエは、カミュの後ろに隠れてしまう。

「・・・メルエ・・？　ここにいたのか・・・・それより、カミュ！　今のはなんだ!?　まさか、メルエにいいところを見せようと、魔法でも見せていたのか!?」

メルエの存在に気がついたリーシャは、ほっと胸を撫で下ろし、一つの問題を解決したとばかりにカミュに詰め寄ってくる。
リーシャの剣幕に、メルエは更にカミュの後ろで小さくなり、カミュの足を掴むその手にも力がこもっていった。

「・・・少し落ち着いてくれ・・・俺も多少混乱しているところだ・・・」

「・・・お前が混乱？」

カミュと混乱、全く結びつくことのない単語に、リーシャの頭に疑問符が浮かぶ。
しかし、カミュの顔はいたって真面目だ。
別に口端を上げている訳でもない。

「・・・ああ、落ち着いて聞いてくれ。　・・・信じられないかもしれないが、今、アンタがその盾で受けた『メラ』は、俺が放った

ものではなく、メルエが放ったものだ。」

「・・・メルエが！？」

カミュの言葉に、リーシャの声は自然と大きくなる。
その声量に、カミュに隠れたメルエの身体は大きく跳ね上がる。

「馬鹿も休み休み言え！！」

「・・・いや、アンタの気持ちは理解できる。だが、事実は事実だ。」

「メルエが魔法を使えるとでも言うのか！？」

「・・・いや、今までは使えなかったんだろうが、たった今、契約が完了した。」

リーシャは、完全に混乱している。
カミュの言っていることは理解できるが、うまく飲み込めないのだ。

「お、お前！　メルエに魔法の契約をさせたのか！？　何を考えている！？」

「・・・それについては、謝るほかない。　魔力の流れが見えるらしいから試しに魔法陣の中に入れてみたら、契約が完了してしまった。」

「　お前は馬鹿か！？　」

「・・・・アンタに言われると、かなり堪えるな・・・」

いつも、馬鹿だと言っているリーシャに、馬鹿扱いされたことに、若干肩を落とすカミュであるが、リーシャの詰問は終わることを知らなかった。

「　お前は、メルエに魔法を教えてどうするつもりなんだ！？　まさか、旅に連れていくつもりか！？」

「・・・いや、そのつもりはない・・・」

「　お前が私達に言ったのだぞ！　しかも、あれ程の威力の魔法が使える少女を引き取ろうとする人間がどこにいる！？　お前は、メルエの将来をも暗い闇に閉ざすつもりか！？」

もはや、リーシャはカミュの胸倉を掴み、その瞳は怒りの炎に燃え、カミュを糾弾していた。　そのリーシャにカミュは反論する言葉を持たず、ただ、言われるままになっている。

リーシャの言うように、普通の村でメルエの里親を探そうとすれば、魔法などという物はむしろ邪魔にしかならない。　普通に暮らし、普通の幸せを願うのならば、魔法など百害あって一利なしなのだ。

魔物に襲われた時の対処にはなる。
だが、それは普通であった場合に限る。
今の『メラ』がメルエの放ったものであるならば、それは十歳前後の子供が唱える威力のものではない。　『メラ』だけで言えば、カミュ以上のものなのである。
強すぎる力は、畏怖の対象になる。
魔物を退治した時などは、周囲の人間に喜ばれるかもしれないが、時が経つにつれ、その力が自分達に向けられやしないかという疑心を生み、そして恐れられるようになる。
メルエが行使した能力はそういう類のものなのだ。
魔力をその身体の内に微塵も所有していないリーシャでさえ、契約時の魔力の流れによる発光を視認できた程の・・・・

もし、喜んで引き取るとなれば、それは跡目のいない、魔法武官の家か、それとも研究材料としてしか見ない魔法学者の場所しかない。

「・・・すまない・・・俺の考えが足りなかった。」

「・・・くっ・・・」

カミュは、本当に珍しく、謝罪を繰り返す。
そんな様子に、リーシャもカミュを責め続けることができなかった。
カミュも理解しているのだ。
自分が犯した罪を・・・・

「・・・・・・メルエ・・・・ダメだった・・・？」

そんな中、今までリーシャの声量に怯え、カミュの後ろに隠れていたメルエが、少しだけ顔を覗かせて、リーシャとカミュの顔を見上げる。
その顔は、形の良い眉毛をハの字に歪め、怯えきったものであった。

「・・・いや、メルエは何も悪くない・・・・」

カミュはそんなメルエの頭を撫でながら、何も知らない少女に非がないことを伝える。
リーシャも、それ以上は何も言えず、ただメルエを見つめることしかできなかった。

「・・・さあ、戻ろう。　・・・もう夜も更けた。　眠らなければ、明日が辛くなる。」

「・・・ああ・・」

リーシャが、不安そうなメルエの手を引き、野営地の場所に戻っていく。
リーシャに手を引かれながらも、カミュの存在を確かめるように、何度も何度も振り返るメルエに、カミュもその足を動かさざるを得なかった。

「あっ！　メルエちゃん！　・・・・無事で良かったです。」

野営地に戻った、三人の姿を確認したサラは、満面の笑みを浮かべ駆け寄ってくる。
そんな、サラの言葉に、何が不満だったのか、リーシャの手を握りながら、あからさまにメルエは顔をしかめた。

「・・・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・」

「えっ！？　あ、は、はい。　では、メルエ、無事でよかったです。　それでは、私のこともサラと呼んでくださいね。」

しばらくサラの顔を眺めていたメルエが、ぼそりと呟いた一言に、サラはすぐに何を言いたいのかを理解した。
そのサラの答えに、満足そうに頷くと、メルエは先程寝ていた場所に戻り、カミュのマントを被って横になった。

「ふふっ・・・ん？　どうされたのですか？　お二人とも顔色が優れませんけど・・・」

「・・・ああ、大丈夫だ・・・」

「・・・・・」

メルエとは違い、何とも難しい顔をしている二人を不思議に思い、声をかけるが、返ってきた答えは表情と同じく重苦しい雰囲気漂うものであった。

「サラも今日はもう休め。　ここは、聖水を多量に使用したためか、魔物の気配が全くしない。　今日は見張りを立てずに休める。　ゆっくり休め。」

「あ、は、はい。」

何があったのか聞こうと口を開きかけたサラを制するように、リーシャが就寝することをサラに勧めてきた。　それは有無も言わせぬ迫力をもったものであったため、サラは自らの寝床にはいる他なかった。

リーシャも、すでに静かな寝息を立てているメルエの傍に横になり、目を閉じる。

願わくば、隣で安らかに眠る少女の将来も安らかなものであることを祈りながら・・・・

「　おい！　起きろ！　カミュ、起きてくれ。　」

カミュは、耳元で声を出さないように抑えている叫びに目を覚ました。

まだ、森の中は暗闇が支配しており、日が昇るまでは、まだかなりの時間があることが分かる。　ゆっくりと身体を起こすカミュの肩

を、リーシャが激しく揺すっていた。

「・・・・起きた。　そんなに揺らすな。」

「　カミュ、メルエがいない！　」

「・・・何・・・？」

リーシャの言葉に周囲を見渡すと、確かに火の傍で丸くなっているのはサラだけである。
先程までメルエが眠っていた場所に、少女の姿はなく、身体に掛けられていたカミュのマントも一緒に消えている。

カミュは、少し前に、火に薪をくべる為に目を覚ましていた。
その時には、確かにメルエはそこに寝ていたはずだが。
夜の暗さから、その時からそれほど時間が立っていないことが分かる。
つまり、カミュが薪をくべ、少し眠りに落ちている間にいなくなっているのだ。

「　カミュ、どうする！？　」

横で、開く口の大きさと声量が一致していないリーシャは、いつになく焦っているのが一目で分かるほど狼狽していた。

カミュにしても、この狼狽している戦士にしても、それなりの者である。
魔物や襲撃者が襲ってくれれば、その気配に目を覚ますはずだ。
それがないということは、気配を消すことのできるものか、警戒に値しない小動物かのどれかということになるのだ。

「・・・ひと先ず、落ち着け。　少し周辺を探す。　何か盗られた物などはないか？」

もし、昼に相対した奴隷商人などが再び現れていたら、眠りこけている三人など、とうに殺されているはずだ。　いや、その前に、カミュやリーシャが目を覚まさない訳がない。

「いや、盗られた物などは何もない。」

すでに、その可能性は確認していたのであろう。
カミュの問いかけに、リーシャは即座に答える。
カミュは、リーシャの言葉に頷きながら、自分の荷物を確認していた。

「・・・なるほど・・・・」

「　何か盗まれていたのか？　」

カミュが呟いた一言に、何か手掛かりでも見つけたのではと、必死の形相でカミュの肩を掴んだ。　カミュは、いつも以上に狼狽するリーシャの姿に、正直戸惑っていた。
昼にあったばかりの少女の身の上をここまで心配するリーシャが不思議だったのだ。

「・・・いや、メルエの行き先が、何となくだが見当がついた。」

「本当か!?」

「・・・ああ、連れてくる。」

「・・・私も行こう・・・」

メルエが何故いなくなったのか見当がついたカミュは、その予想場所に向かおうとする。
付いてくることを言い出したリーシャの言葉に、頭を振って拒絶の反応を示して。

「何故だ!?」

「・・・聖水の効力もいつまで持つか分からない。　ここにいてく

れ。」

カミュの言葉に、言葉に詰まったリーシャを置いて、カミュは森の中へと入っていく。

「・・・やはり、ここだったか・・・？」

「　！！　」

突然後方からかかった言葉に、驚き振り向くメルエの怯えた表情は、小動物そのものだった。　そこは、先頃カミュが、魔法の契約をするために魔法陣を敷いていた場所であった。
そこに、カミュの持つ袋に入っていたはずの魔道書を広げたまま、メルエはおそらく自分で描いたであろう魔法陣の中に座っていた。

「・・・俺の魔道書を使って、何をしている・・・？」

「・・・・」

カミュの静かな問いかけに、ビクッと身体を震わせたメルエは、俯き黙り込んでしまう。

そんなメルエの様子に、溜息をつきながら、カミュはメルエへと近づいて行った。

「・・・別に怒っている訳じゃない・・・契約をしていたのか？」

「・・・・」

傍に来たカミュの手が、自分の頭に柔らかく載せられたことに、安心したのか、メルエは黙って一つ頷く。

「・・・・・これ・・・・・」

メルエは近くに広げてある魔道書を手に持ち、あるページを指さしてカミュに見せるように持ち上げた。

「・・・ヒャドか・・・・・」

「・・・・・・・・ヒャ・・・ド・・・・・ヒャ・ド・・・・・ヒャド・・・」

カミュの答えに、メルエは一言一句確かめるように、噛みしめるように反復する。

そして、何度か同じ言葉を繰り返した後、納得がいったのか、また違うページを選び出す。

「・・・・・・これ・・・・・」

「・・・・これは『ギラ』だな・・・・・」

「・・・・ギ・・・ラ・・・・・・ギラ・・・」

そこに来て、カミュには、メルエの行動に思い当たることがあった。

「・・・メルエ、お前は字が読めないのか？」

「　！！　」

メルエは、カミュの問いかけに、驚きと戸惑い、そして哀しみを混じり合わせたような表情をし、目を見開く。

そのメルエの態度が、カミュの考えが間違っていないことを示していた。

おそらく、メルエの両親は、メルエに対して教育は全く施さなかったのだろう。

だが、それは責められることではない。

今の時代、読み書きができない子供が大半である。

ある程度の収入がある家に生まれた人間であれば、親なり近所にいる知識がある者の教えを請い、読み書きや計算などを覚えることができるが、貧しい家に生まれれば、そもそも親自体が読み書きができない。　故に子供に教育をと考える親の方が稀なのである。

そういう世の中だからこそ、国の中枢に蔓延(はびこ)る人間は、教育を受けることができる貴族がその割合を大きく占める。

メルエは、カミュの言葉に完全に俯いてしまい、先程まで次々と魔道書のページをめくり目を輝かせていた少女の姿は微塵もない。

そんな、メルエの姿に、カミュは手のひらをその頭に乗せ、優しく撫でた。

「・・・字が読めないことは、珍しいことじゃない・・・すまない、そんなに落ち込むな。」

「・・・・・」

カミュの慰めのような言葉にも全く反応を示さないメルエに、カミュは困りきってしまう。

カミュは、実際人との接し方が分からない。

幼い頃から友人などいなく、子供達と遊んだことなどないのだ。

「・・・で、他に契約した魔法はあるのか？」

一向に顔を上げないメルエに、カミュは溜息をついた後、話を続けることにした。

「・・・・・これ・・とこれ・・・・・」

「・・・・スカラ・・・・・・と、リレミトだな・・・・効力は解るのか？」

「　？？　」

カミュの言う、魔法の名前を反復していたメルエは、カミュの言葉に小首をかしげた。

もう一度溜息をついたカミュは、メルエにその魔法の効力を話し出す。

「・・・理解できたか？」

再度確認したカミュに、大きく頷いたメルエは、再び魔道書を開き

始める。
その行動にカミュは驚きを増した。

「・・・・これ・・・・・」

「・・・・メルエ・・・・・お前はどこまで契約できたんだ・・・・・？」

「・・・・ここまで・・・・・」

「・・・・凄いな・・・・・それはルーラだ・・・・・」

「・・・ルー・・・・ラ・・・・ルーラ・・・」

再び反芻し始めたメルエを、驚きの表情で見つめていたカミュは、メルエへの懸念が浮かび苦い顔になる。

「・・・・メルエ・・・・よく聞いてくれ。」

「　？？　」

「・・・お前が、魔法の契約ができたことはわかった。　だが、その魔法は、俺達の前以外では使うな。　他の人間が周りにいるときは絶対に使うな。　・・・わかったな。」

カミュの忠告は、リーシャが心配していることへの予防策である。
メルエが魔法を行使すればするほど、平穏な生活を送る可能性を狭めることになる。
それは、リーシャも、もちろんカミュも願うことではない。
だが、それを聞くメルエは悲しそうな表情で、カミュを見つめていた。

「・・・・・メルエは・・・・・変・・？」

それは、怯えにも似た感情。
自分が異常だから、カミュは認めないのではないかという疑念。
そして、カミュやリーシャに拒絶されることが、今のメルエに取って一番の哀しみなのかもしれない。

「・・・いや、そうじゃない。　俺だって、メルエの歳と同じぐらいの時に、『ルーラ』の契約を終えていた。」

「・・・・」

カミュはメルエの横に腰を下ろし、ゆっくりと話し出す。

奴隷から解放されるべき少女に向かって。

「・・・俺は、メルエの歳とそう変わらない頃から、魔物と戦っていた。　俺も、メルエと同じように法衣を纏った人物は畏怖の存在だったんだ。　いくら怪我をしても、傷を治され魔物に向かわされる。　だから、『ルーラ』を覚えた。」

「・・・・・一緒・・・？」

「・・・ああ、一人で戦って、傷ついて、それでもまた戦わなければいけなくて・・・・逃げ出したかったんだろうな・・・・『ルーラ』を使えば、家に帰れると思った。」

「・・・・帰れた・・・？」

カミュの独白に近い話に、こくりこくりと相槌を打ちながら聞いているメルエは、所々で疑問を挟む。　メルエの方を見ずに、カミュは一つ一つ答えて行った。

「・・・・帰れた。　だが、追い出された。」

「　！！　」

「・・・魔物から逃げ出すような人間は、孫でもなければ子でもないとな・・・・」

満身創痍でなんとか、残りの魔力を振り絞って、契約を終えたばかりの『ルーラ』を唱え、家に辿り着いたカミュに待っていたのは、祖父と母親の叱責と罵倒であった。

討伐隊を置き去りにし、自分一人が魔法を使って逃げ出したことを責められたのだ。
英雄の子として有るまじき行為であり、恥じるべき行為であると。
そして、家を再び出された。
その身体の治療も受けることも叶わずに・・・

実情は、違ったはずなのである。
カミュはたった一人で魔物の中に放り込まれていたのだ。
討伐隊など名ばかり。
討伐の６割以上はカミュが行っていたと言っても過言ではなかった。
　それをカミュの家族は知らなかった。　いや、たとえ知っていたとしても変わらなかったであろうとカミュは考えていた。

「・・・だから、俺もメルエと同じようなものだ。」

その言葉と共に、やっとカミュはメルエの方を向き直る。
その表情は苦笑を浮かべていた。

「・・・メルエ、魔法を使えることが、お前の幸せにつながるとは言えない。　寧ろ、使えない方が、この先平穏な暮らしができるはずだ。」

「・・・・・」

メルエには、カミュの話している難しい言葉は理解ができていない。だが、何を言いたいのか、何を自分に求めているのかは、何となくだが理解できていた。

「・・・だから、それ以上、契約は行うな。　必ず俺達が、お前が平穏に暮らせる場所を探してやる。　それまでは、魔法ではなく、言葉や文字などをあの僧侶に教われ。」

「・・・・・・」

カミュの最後の言葉に、今まで黙ってカミュを見つめていたメルエは、その頭を大きく横に何度も振った。　完全なる拒絶である。

「・・・・メルエ・・・・・」

「・・・・・・・た・・・・・る・・・・」

「・・・なんだ・・・？」

メルエの顔はまた項垂れてしまった。
微妙に肩を揺らす、その姿に、カミュは何とも居た堪れない思いになっていく。

「・・・・・・また・・・・捨てられる・・・・・？」

「！！」

「・・・・・・い・・・・・・や・・・・・」

やっとの思いで吐き出したのであろうメルエの言葉に、カミュは絶句する。
自分が、良かれと思って話した話で、尚更メルエを追いこんでしまっていたのだ。

「・・・・魔法・・・おぼえる・・・・・・そしたら・・・・・・一緒・・・・？」

「・・・・メルエ・・・・・」

「・・・・メルエも・・・・・行く・・・・・」

おそらく、あの奴隷商人達に聞かされていたのだろう。

『お前の親は、お前を金で売っ払ったんだ。　お前は捨てられたんだ』と・・・

それは、メルエのような歳の子供にとって、どれ程、心に傷をつけるものであったろう。

そんな自分の状況を知りながらも、自分を救ってくれた人間たちと一緒にいたいというその一念で、魔法の契約を一人でしていたこの小さな子供にカミュは言葉を失った。

「・・・・・メルエ・・・・・・いっぱい覚える・・・・・だから・・・・だから・・・・」

もはや、メルエの目には溜めに溜めていた涙が溢れ出し、その頬を濡らしていた。

おそらく、メルエの目には、カミュがはっきりとは映ってはいない。

それでも、真っ直ぐと見つめる少女を、カミュは胸に抱いた。

「・・・・・・わかった・・・・・・」

小さなメルエの身体は、カミュの胸にすっぽりと収まり、その手に持っていた魔道書は地面へと落ちていく。　カミュの胸の中で、すすり泣くような声を上げるメルエをカミュはそのまま抱きしめてい

た。

「・・・・落ち着いたか・・・・・？」

自分の胸の中のメルエの肩の震えが収まったことを確認したカミュが、そっと剥がす。

カミュの胸の部分は涙で濡れてはいたが、もはやメルエの目には涙はなかった。

代わりに、真っ赤に腫れあがった目と、頬に残る涙の跡が、その哀しみの度合いを理解させる。　カミュに向かって、こくりと頷いた後、もう一度魔道書を拾い上げるメルエの手をカミュが止めた。

「・・・今日は、もうお終いだ。　するのなら、明日以降にしろ。　それに・・・たぶん今は、『ルーラ』までが限界だろう。　メルエが成長してから契約が可能になる。」

「・・・・せい・・ちょう・・・？」

「・・・ああ、簡単に言うと、大きくなってからだ。」

カミュの言葉に納得が言ったのか、こくりと頷いた後、拾い上げた魔道書を閉じ、胸に抱いたメルエは、少し微笑んだ。

「・・・その魔道書は、メルエが持っていろ。　俺が見たくなったら、メルエに借りるから、失くすな。」

カミュもまた、メルエに口元を綻ばせながら、微笑む。
再び、頷いたメルエは、踵を返し、野営地への道を戻っていく。
その後ろ姿を見ながら、カミュもまた歩き出した。

メルエが先に森の中に入って行ったことから、野営地への道は分かっているんだろう。
確かに、ここは、野営地からそれほど離れてはいない。
危険はないだろう。

「・・・・・連れていくのか・・・・・？」

メルエの背中を追っていたカミュの横から、突然かけられた声。
それは、待つように指示を受けていたのにもかかわらず、やはりメルエへの心配で付いてきていたリーシャであった。

「・・・お前に、メルエを連れていくことへの覚悟はあるのか？

魔法は使えるが、子供だぞ。　その命を背負えるのか？」

「・・・・・」

続いたリーシャの言葉に、カミュは黙って真っ直ぐリーシャを見ていた。
そんなカミュをしっかりと見ながら、リーシャは言葉を続ける。

「・・・カミュ、私やサラのように、お前に勝手に付いてくることになった者と違い、メルエはお前が連れていくことを決めたんだ。
それは、しっかりと憶えておけ。」

「・・・・ああ・・・・」

「・・・お前が連れていくと決めた以上、もう反対はしない。　私にとっても妹のようなものだ。　何も、お前一人で護りきれとも言わない。」

リーシャは、真面目な顔で言葉を続けていたが、メルエを妹のようにと言うあたりで、カミュの口端が上がっていることに気がついた。

「・・・なんだ・・・？」

「・・・いや、メルエはアンタにとって、妹というよりは娘なんじゃないのか？」

「なに！？」

失礼な話だ。
メルエぐらいの子供がいるとすれば、それ相応の歳でなければいけない。
リーシャは憤慨する。

「わ、わたしはそこまでの歳ではない！！」

「・・・へぇ・・・初耳だな・・・じゃあ、いくつなんだ？」

「なっ！？　くっ、女性に対して年齢を聞くことは失礼に当たると知らないのか！？」

リーシャの怒りとは反対に、カミュの口端は上がっていく。
自分とメルエの話を立ち聞きしていたリーシャへの報復なのか、その手を緩めることはなかった。

「・・・俺の記憶が正しければ、アンタは、あの僧侶に対して、

何の抵抗もなく年齢を聞いていたはずだが・・・？」

「あ、あれは、サラの場合、明らかに年齢は若い部類に入るではないか！？」

「・・・ほう・・・じゃあ、アンタは明らかに歳がいっている部類に入るということか・・・」

「ち、ちがっ」

もはや、完全にペースをカミュに握られてしまったリーシャは、わたわたと手を震わせながら、動揺している。
その様子を、カミュは笑いをこらえるように眺めていた。

「まぁ、アンタがこの中で最年長であることは分かっている。おそらくメルエよりも２０年ぐらい多く生きているんだろうな。」

「そんな歳ではない！！」

更に挑発を繰り返すカミュであったが、リーシャの怒声を聞く様子もなく、リーシャに背を向けて歩き出した。

「最年長のアンタの言葉は護るさ。」

「・・・・カミュ・・・・・」

最後にカミュのこぼした言葉が、リーシャの熱を冷ましていく。
リーシャに言われないまでも、すでにカミュの覚悟は決まっていたのだろう。
それ以上は、お互い話すこともなく、野営地に戻る。

すでにメルエは戻っており、カミュのマントに身を包み、静かな寝息を立てていた。
リーシャは、苦笑しながら、その身体を包み込むように抱き、瞳を閉じる。
メルエという少女の体温の温かさを感じながらリーシャは眠りに落ちて行った。

～幕間～【ロマリア野営地】（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

今は、まだ、何とも言えませんが、とりあえずしばらくはメルエがパーティーの一人となりました。　カミュ一行の心の成長にも、大きく関わる人物の予感です。

ちょっと更新が遅れるかもしれませんが、頑張ります。

戦闘？【ロマリア】（前書き）

ＰＶ７００００を突破していました。
ユニークも８０００人を・・・・

びっくりです。
Ｆａｔｅを書いている傍らに進めているはずが、更新できるところまで書いてしまったので、とりあえず更新します。
これも、続きがあるのですか、２話に分けます。
ちょっと短くなってしまいますが、申し訳ございません。

戦闘？【ロマリア】

勇者一行の朝は早い。
まず、まだ日が昇り始める前にカミュが起き、暖をとるため火を安定させる。
続いて起きてきたリーシャとカミュの鍛練とは名ばかりの勝負が始まり、それが佳境に入る頃にサラが起床してくる。
サラの意識が覚醒すると、今度はリーシャによる地獄の特訓が始まるのだ。

その後に、昨晩から加えられた、サラという講師を迎えた授業が始まる。
リーシャは魔法の知識を。
そして、メルエは字と言葉の授業を受ける。
意外と言っては失礼だが、サラの授業は解りやすいものであった。
うろ覚えであった魔法について、リーシャは四苦八苦している様子であったが、メルエは初めて知ることに興味を示し、次々へとサラに質問を繰り返す。
メルエの勢いに始めは圧されていた感もあるサラであったが、熱心な生徒程、教師として教えがいのある者はいない。　サラは、一つ一つメルエの質問に答えながら微笑んでいた。

朝日が上り、周囲を明るくし始めた頃に、ようやく朝食を取り始める。

ただ、朝食と言っても、鍋などを使えるわけではない。
保存食として持っていた干し肉と、カミュやリーシャが取って来た

果物を食すことになる。

果物を口いっぱいに頬張っているメルエの口元を、微笑みながら手にした布でふき取っていたリーシャが不意にカミュに向き直り口を開いた。

「そう言えば、アリアハンを出た時から気にはなっていたのだが、カミュ、お前のその剣はアリアハンの騎士剣ではないのか？」

「・・・ああ、アンタの見立て通りの剣だ。」

背中から剣を抜き、その剣をリーシャに手渡す。

リーシャは手渡された剣の柄に彫られているアリアハン国章に目を留めた。

先程まで、果物を頬張っていたメルエも面白いものでも見るように、リーシャの横から眺めている。

「メルエ、あまり近づくな、危ないぞ・・・・・カミュ、お前、この剣をどうしたのだ？　少なくとも、この剣は下級騎士程度では手に入らないような代物のはずだ。」

身を乗り出すように剣を見ようとするメルエの頭を押さえながら、リーシャは疑問を口にした。　何もリーシャもカミュが剣を盗んできたとは思っていない。

ただ、中級騎士以上の者しか手に入れることの出来ない筈の剣を持

つカミュを不思議に思っただけなのだ。

「それは、俺の剣ではない。　俺の祖父の物だ。」

「祖父・・・・？　・・・・ああ、お前の祖父というと、オルテガ様の父君のオルテナ様か・・・・・なるほど・・・・・」

リーシャにとって英雄であり憧れの存在であるオルテガ。
その父もまた優秀な騎士であった。
もちろん、リーシャが生まれる以前に宮廷騎士として在籍していたため、その存在を話で聞く限りのものしか、リーシャも知り得ていなかったのだが・・・・
その剣の腕は、アリアハンでは右に出るものはおらず、常に戦場では前線に立っていたと聞く。　ただ、オルテガやカミュのように魔法を使うことはできず、その身に魔力を宿してはいなかった。

また、アリアハン宮廷騎士で随一の腕を持ってはいたが、責任を持つことで前線に立てなくなるという理由から、騎士隊長の勅命を辞退したという逸話も残っている。
その際に、当時のアリアハン国王から、前線に拘る猛将ぶりへのお褒めのお言葉と共に賜った剣があると云われている。
おそらくその剣が、今リーシャが手に持つ騎士剣なのだろう。

「・・・・これが、国王様から賜ったとされる剣か・・・・・」

「それ程にすごい剣なのですか！？」

リーシャが呟いた一言に、サラもまた過剰に反応する。
そのサラの反応に、リーシャの腕の下から剣を眺めていたメルエは身体を跳ねさせる。

「どんな曰くがあろうと、剣は剣だ。　ただ、鉄を型に流し込んだ物にすぎない・・・」

「・・・お前は・・・・仮にもお前の祖父が国王様から直接賜った剣だ。　その事実だけでも大変栄誉なことなのだぞ！」

カミュの発言に対し、リーシャの発する言葉まで荒々しくなり、ついにメルエはリーシャの傍から逃げ出し、カミュの隣に移動した。

「・・・ふぅ・・・この話は、前も言ったが平行線だ。　話題を出した俺が悪かった。」

自分の足を掴んでくるメルエに溜息を一つ溢したカミュは、未だ鼻息の荒いリーシャに話の終了を提案する。

「お前はっ！！　お前は何故、そのように考えるんだ！！　自分の父だけでなく、祖父までもが一国の英雄なんだぞ！　誇りに思いこ

そすれ、蔑むことにはならないはずだ！！」

リーシャは、本当にカミュのこの考えだけは理解が出来ない。
自分の父であるサブリナは、宮廷騎士隊長という一国の英雄には及ばない地位ではあるが、そんな父をリーシャは誇りに思っている。
仲間を救うためにその人生に幕を下ろした父を・・・

だからこそ、理解できない。
宮廷騎士隊長のリーシャの父サブリナのように国内の話ではなく、全世界にその名が轟いているオルテガを父に持つカミュが、その父を誇りに思わないことが・・・
人それぞれの考え、想いがあるのは、リーシャとはいえ理解しているつもりだ。
しかし、アリアハン国内に数々の逸話を残している祖父や全世界に英雄として名を残す父を侮辱するカミュが許せない。
それは、昨夜にカミュがメルエに話していた内容を聞いていても許せないものなのだ。

「・・・・・・・リー・・・シャ・・・・・怖い・・・・・」

しかし、その怒りは、横から響いたか細い声に霧散していくことになる。
カミュに向かっていたリーシャの怒りに燃えた瞳の端に、怯えた目でこちらを見ているメルエの瞳が映った。

「メ、メルエ。　こ、これは違うんだぞ。　何も、メルエを怒って

いる訳じゃないんだ。」

メルエの怯えた様子にしどろもどろになるリーシャには、先程まで立ち上らんばかりに纏っていた怒気はすでになく、幼子を怖がらせてしまった言い訳に四苦八苦する姿になっている。

リーシャに余裕はなく、この三人の中で初めてメルエが名前を口にしたのが、自分の名前だったことにも気が付かない。　後にサラからその話を聞き、得意顔でカミュに自慢することになるのは、また別の話である。

「・・・・・・・」

リーシャは、なだめるように手を伸ばすが、それに反比例するように、メルエはカミュのマントの中に隠れて行く。　その二人の追いかけっこがサラには可笑しくて仕方がない。

いつもなら、剣呑な雰囲気での出発となる所が、メルエの行動で和やかなものに一変していった。

朝食を取り終えた一行は、順調に歩を北に進め、昼前には森を出ることになる。
森の中では、大した戦闘もなく、メルエが魔法を使う場面も全くなかった。
当のメルエも、昨夜カミュに言われたためか、カミュの指示がない限り使う気がないようにも見える。

昨日出現した、キャタピラーやアニマルゾンビとの戦闘は、リーシャとカミュがキャタピラーを片付け、サラが＞ニフラム＜の行使によってアニマルゾンビを光の中に消していくといったものが続き、メルエはサラの後ろでその様子を眺めることが多かったのだ。

森を抜けると、途端に道が傾斜を強くし、山道に入ったことが解る。
山道に入ると、今まで軽快に歩いていたメルエの足の進みが緩やかになり、前を行くカミュのマントの裾を握っていられなくなった。
先頭を歩いていたカミュの後ろにいたメルエは徐々に後退して、サラの横を歩き、最後にはリーシャに手を引かれる形になっていった。

「　カミュ！　少しスピードを落とせ！　」

メルエの様子にカミュに指示を出す。
少し苛立ちを含めていたリーシャとそれを眺めていたサラは振り向いたカミュの表情を別々の想いで見ていた。

振り向いたカミュの顔は、明らかに『しまった』というような顔をしていたのだ。
それは、メルエのことを考えていなかったことへの後悔なのか、そ

れともリーシャの言葉に対してのものなのか。　おそらく前者であろう。

そのカミュの表情に、リーシャは顔を緩ませる。
カミュは、何故かメルエが同行することになってから少し変わった。
それは、ほんの些細な変化ではあるが、自分の内にある感情を表に出すことが多くなってきた。　その些細な変化がリーシャにとっては、どこか微笑ましいものだったのだ。

逆にサラにとっては、どこか釈然としないものがある。
自分の時は、『ついてこれなければ置いて行く。』とでもいうようなものだったにも関わらず、メルエに対しては、優しさを見せるからだ。
リーシャにしてもそうだ。
何かにつけ、メルエを気にかけている。
それは、自分の姉を取られたという子供の感情に近いものだったのかもしれない。

「悪かった・・・・・だが、この分じゃカザーブにつく前に日が暮れるな・・・・」

「・・・・・・・メルエ・・・だいじょうぶ・・・・歩ける・・・・・」

気恥かしさからなのか、空に顔を向けながら謝罪をこぼしたカミュの何気ない一言に、メルエは気丈にも顔を上げ、再び歩き出す。
そのメルエの姿に、カミュの表情は困惑を極めて行った。

「メルエ、いいんだ、ゆっくり歩こう。　カミュ！！　カザーブにそれほど急ぐ用があるとでも言うのか！？」

「・・・・リーシャさん・・・・」

急ぐ用など、魔王討伐以外あり得ない。
それをまるで急ぐ必要がないかのようにいうリーシャを、サラは信じられないものでも見るように見つめていた。

「・・・・わかった・・・・」

驚愕に固まるサラを余所に、カミュが速度を極端に落とし、歩き始める。
そんな二人の様子に、サラは尚一層驚きを感じ、しばし呆然としていた。

「サラ！！　何をしてるんだ！　置いて行くぞ！！」

「　！！　」

前方からかかったリーシャの声に対し、サラは釈然としない想いを

抱いたまま、頬を膨らまし、一行の後を付いて行くのであった。

「な、なんでこんな所に!!」

一行が速度を大幅に緩め歩いた先で、リーシャは素っ頓狂な声を上げることになる。
それは、山道の中腹に入り、日も陰り始めたころだった。
何度か魔物たちとも遭遇し、疲れの見えるメルエを休ませ、歩き続けた先にそれはいた。

「リ、リーシャさん、落ち着いて下さい。」

「い、いや、サラ。これが落ち着いていられるか!?」

リーシャをなだめようとサラが声をかけるが、それは徒労に終わる。
それを目にしたリーシャの目は驚きに見開かれたままであったのだ。

「な、なぜ、こんな山道に・・・・・・・・か、かにがいるんだ!?」

リーシャが驚いたもの。
それは、本来は海にいる＞かに＜であった。

「・・・・・」

「・・・・はぁ・・・・山にも＞かに＜はいるだろう・・・・」

「それでも、それは川などがあった場合だろ!?　ここに水辺などないぞ!?」

メルエの何とも言えない視線とカミュの心底呆れかえったような反応に、多少戸惑いながらもリーシャは常識を口にする。

「・・・・・・・リーシャ・・・・・・変・・・？」

「なっ！！　私はまともだぞ！　まともでないのは、こんな山奥に出てくる＞かに＜の方だろ！？」

満を持してメルエの口から出た言葉に、リーシャは慌てて弁明をするが、メルエはカミュのマントに隠れてしまう。

「　魔物なのですから、どのような場所に出てきても不思議ではないでしょう！！　そ、そんなことよりも、戦闘準備をして下さい！！　」

そう。
一行の目の前に現れたのは、＞かに＜三匹ではあるが、それは普通の＞かに＜ではない。
その体躯はカミュどころか、リーシャよりも大きなもので、明らかに魔物であった。

＞軍隊がに＜
このカザーブ近辺の山々を住処とする超大型の＞かに＜である。
元々は普通の＞かに＜であったのかもしれないが、何かの突然変異からなのか、その体躯が大きくなり、水辺の動物を食しているうちに魔物と化したと云われている。
住処を水辺から陸地へと移し、山岳に住処を置く。
その大きなハサミは、人間の身体など何の抵抗もなく切り裂き、腹部にある牙の生えた口で食していく。

しかし、料理を得意とするリーシャにとって、海辺にいる筈の＞か

に＜が山岳地帯の川っぺりでもない場所にいるのが未だに信じられなかった。

「ちっ！　・・・メルエ・・・悪いが、マントを放してくれ。」

メルエの手がマントから放れたことを確認したカミュは、背中の鞘から祖父の剣を抜き、＞軍隊がに＜目掛け駆けていく。
カミュの行動に目を覚ましたリーシャも慌てて腰から剣を抜いて後を追った。

カミュが行動に移したのを見て、＞軍隊がに＜達も隊列を整え出した。
元来単独で行動することが少ない魔物のため、戦闘においても単独で敵に当たることはしない。　向かってきたカミュを囲み込むように横に身体を移動させていく。

「カミュ！！」

敵に囲まれそうになるカミュに遅れ、到着したリーシャは一体の＞軍隊がに＜の体躯に体当たりをかける。　リーシャの突進を受けた＞軍隊がに＜はカミュとの距離を離されるが、ひっくり返されるほどではなく、態勢を立て直した。
囲い込まれる心配のなくなったカミュが、２匹の＞軍隊がに＜の内の一体に狙いを定め、剣を振るった。

パキーン！！

カミュの剣が＞軍隊がに＜の身体に振り下ろされると同時に、金属の乾いた音が周辺に響く。
その音の元凶であるカミュの剣の刀身が、＞軍隊がに＜の身体ではなく、遥か後方の地面へと突き刺さった。

「　！！　」

「　く、くそっ！！　」

根元から折れてしまい、今や柄の部分しか残されていない剣を忌々しげに見たカミュは、その柄を放り投げ、＞軍隊がに＜から距離を置くように飛び退く。
しかし、飛びのいた先に、先程リーシャに吹き飛ばされた＞軍隊がに＜が残っていた。

「　カミュ様！！　」

サラの叫びが響く。
カミュの身体は、＞軍隊がに＜の持ち上げた大きなハサミに吸い込まれるように納まった。
万力のような強い力に、カミュは呼吸もできないくらいの締め付けを受ける。

いや、ロマリアで新たに購入した＞青銅の盾＜がなければ、カミュの身体は上半身と下半身に分けられていただろう。

「カミュ！！　くそっ！　並みの剣では、傷一つつけられないのか！？」

カミュを救いに行こうとするが、明確な手だてがなく、リーシャは二の足を踏んでいた。
カミュはそのハサミから逃れようとするが、手に持つ武器もなく、魔法を使うために指を動かすこともままならない。
その時・・・

「リーシャさん！　あの魔物の甲羅めがけて力一杯に、その剣を振り下ろしてください！」

リーシャの横に立つサラが、カミュを挟む＞軍隊がに＜を指さし怒鳴ったのだ。

「サラ！　何を言っている！？　カミュの剣を見ていなかったのか？　私の剣は、おそらくカミュの剣よりも強度が劣る。　あの二の舞を踏むだけだぞ！」

「大丈夫です！　私に手だてがあります。」

『状況を掴めていない』
サラの言葉に、そう感じたリーシャは、自分の剣の強度を伝えるが、返ってきたのは珍しく自信に満ちているサラの答えであった。

「何か手があるんだな？　・・・・・・・・・わかった！　任せたぞ、サラ！！」

自分の問いかけに、尚も自信に満ちた頷きを返すサラに覚悟を決めたリーシャは、剣を握りしめカミュを拘束する＞軍隊がに＜に向かっていく。
リーシャが＞軍隊がに＜の攻撃を避け、右手に持つその剣を振り下ろすタイミングに合わせて、サラは詠唱を開始した。

「ルカニ！！」

サラの詠唱と共に、＞軍隊がに＜の身体は光に包まれた。
＞軍隊がに＜を包んでいた光が収束したその瞬間に、リーシャの渾身の一撃がその甲羅に襲いかかる。
先程のカミュの剣とほぼ同じ軌道を描きながら振り下ろされたリーシャの剣は、カミュの剣とは違う結果を生み出した。
剣は、甲羅に弾き返され折れることはなく、まるでやわらかな肉にナイフを入れるように＞軍隊がに＜の体躯に吸い込まれていったのだ。

「ギニャ――――――――――!!」

凄まじい雄たけびを上げながら、その身体を半分に切り裂かれた＞軍隊がに＜は、地へと伏していく。　命の灯を失った＞軍隊がに＜のハサミを自力でこじ開け、カミュも身体の自由を取り戻した。

＞ルカニ＜

術者から発せられた魔力に包まれ、その身体を覆う物の耐久力を弱らせる魔法。

例えば鎧を纏った人間については、その鎧が脆くなり、通常の剣等は通さない堅固な鎧であろうと、真っ二つにすることができる。

魔物であれば、その体躯を覆う硬い殻や硬い体毛の強度を脆くし、剣や槍での攻撃を可能にする。

「サラ!!　よくやった!!」

「はい!」

自分の剣が生み出した結果ではあったが、その原因を作ったのがサラであることを認め、リーシャは後方にいるサラに労いの言葉をかける。

その言葉に心底嬉しそうに頷くサラを、今まで事の成り行きを見守っていたメルエがどこか悔しそうに見つめていた。

「・・・・・まだ二匹か・・・・・」

ようやく呼吸を整えたカミュは、残る二匹の＞軍隊がに＜の戦意が衰えていないことを感じて身構えるが、その手には対抗する武器がない。

「　カミュ様！！　」

そのカミュの様子を見ていたサラは、手に持つ＞鉄の槍＜をカミュめがけ放り投げる。
今のサラの力量であれば、いかに＞鉄の槍＜を所持していたとしても、あの硬い魔物に対抗するだけの攻撃を繰り出すことは不可能だろう。
ならば、カミュが持っていた方が良い。

＞軍隊がに＜の攻撃を警戒しながらも、サラから投げられた＞鉄の槍＜を掴みとったカミュは、使いなれた剣ではなく、槍に適した構えを取る。
カミュの構えを見て、リーシャは感心した。
伊達にアリアハンの勇者と呼ばれている訳ではないのだと・・・

「　右の魔物に先程の魔法をかけます！！　」

サラの提案に大きく頷いたリーシャとカミュは、二人で一体の魔物に攻撃を加える為に飛びかかる。　サラの詠唱と共に光に包まれた魔物にカミュの槍が突き刺さった。

だが、それは浅く、槍を突き入れたカミュを振り払うかのように＞軍隊がに＜のハサミがカミュを襲う。　そのハサミを今度はリーシャの剣が斬り飛ばした。

槍を抜き、もう一度差し込もうとするカミュに向かって、忘れ去られていたもう一体の＞軍隊がに＜のハサミが襲いかかった。

「・・・・・・・ヒャド・・・・・・・」

「　えっ？　」

呟くような詠唱。
そして、その隣にいたサラの間の抜けた声。

詠唱の言葉と共に、その術者の指先を取り巻く空気が冷気を纏い、カミュに向かおうとする魔物目掛け襲いかかる。　大気を凍らせる程の冷気が魔物に直撃し、その体躯を包み込んでいく。　徐々に凍りついていくその身体は、最後には氷の彫像のように＞軍隊がに＜の動きを停止させた。
後顧の憂いを失くしたカミュとリーシャは、残る一匹に止めを刺し、それぞれの武器を鞘と鉾に納める。

「　メルエ！！　よくやった！！　」

剣を腰に納めたリーシャが、メルエの傍に駆け寄り、その頭を乱暴

に撫でまわす。
髪の毛が乱れていくのを気に留める様子もなく、メルエは嬉しそうに目を細めていた。
サラは、メルエが発した詠唱のショックから未だ立ち直ることができず、その光景を呆然と見るのであった。

「・・・・さっきは助かった。　・・・・すまない・・・・」

そんなサラを現実に戻したのは、らしくないカミュの一言であった。
あのカミュが、戻ってきて早々、サラに向かって頭を下げているのだ。
サラは、尚更ショックを受け、それこそ今尚そこで凍りついている＞軍隊がに＜のように彫像になってしまった。

「・・・・・・・メルエは・・・・・・？」

固まってしまったサラを呆れるように見ているカミュのマントを引く力に視線を下げると、若干頬を膨らまし気味のメルエが、カミュに何かを期待したような目を向けていた。

「ああ・・・・メルエもありがとう。　助かったよ。」

表情はいつも通り、無表情を貫いてはいるが、言葉に優しさを含ませながらメルエの頭を撫でるカミュと、嬉しそうに目を細めながら

その手を受け入れるメルエをリーシャは微笑みながら見るのであった。
サラの彫像が、行動を再開したのは、他の三人が出発の準備を完了した頃だった。

「　カミュ！！　あの柄を捨てるつもりか！？　」

準備が完了し、歩き出す一行の最後尾からリーシャはふと目に留まった先程サラが投げてよこした槍を手にするために放り投げた折れた剣の柄を指差し、カミュへと声をかけた。

「・・・・刀身がない剣を持って行ってどうするんだ？」

「　！！　お前・・・・あれは国王様から賜ったものだろう！！
それに祖父殿から頂いたものではなかったのか！？　」

振り向くカミュが表情も変えずに呟く言葉に、再び朝の怒りが湧きあがり、リーシャは激昂する。　再燃したリーシャの怒りに、メル

エはカミュのマントに隠れてしまう。

「祖父から貰ったものではあるが、まだ死んでもいないから形見でもない。　それに俺にはアリアハン国王から賜ったものということに価値を感じてはいないからな。　そんな柄だけになった剣を後生大事に持っていても、自分の身を護る術にすらならないだろう。」

「・・・・ぐぐぐ・・・・」

カミュが言うとおり、カミュの祖父オルテナは未だアリアハンにて健在である。
祖父から譲り受けたとはいえ、カミュにとっては自分の身を護るための武器の一つでしかないのだ。
その考えが、リーシャの中で飲み込むことができず、また争いの種になる。
サラにとっては、アリアハン国王からの賜りもの等は想像もつかないが、リーシャの様子からそれがとても名誉なことだということが理解できた。
しかし、サラにとっても遥か雲の上の話過ぎて、リーシャとカミュの確執に頭が追い付いてこない。　困惑を極めるサラにとって、頼みの綱は彼女だけしか残されていなかった。

「・・・・・・・・リーシャ・・・・また怒る・・・？」

「・・・メ、メルエ・・・いや、怒ってはいない・・・大丈夫だ・・

・」

サラが望んだ人物が口を開いたことによって、何とか感情を抑え込んだリーシャは、引き攣った笑いを浮かべながら歩きだした。

サラは、そんなリーシャの様子にほっとしながらも、このような形での抑えはいつまでも続かないと感じていた。

カミュの考え、理想、価値観は、リーシャだけでなくサラとも遠くかけ離れている。

それは、必ず衝突する程の物であり、この先交わる可能性など、どちらかが相手の考えに染まらない限りあり得ないものであるのだ。

いずれ、カミュとリーシャ、もしくはカミュとサラが大きな溝を作る程の衝突をする可能性をサラはこの時感じていた。

戦闘？【ロマリア】（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

カミュの人格が多少柔らかくなってきています。

徐々にメンバーに変化が見え始めましたが、急には変わりませんよね・・・

～幕間～【カザーブ村近辺山岳地】（前書き）

なぜか、息抜きに書いている方が、さくさくと進んでしまいます。
すみません・・・・

～幕間～【カザーブ村近辺山岳地】

カミュの予想通り、山の山頂近くまで上った後、下山し始めた頃に日が落ちてしまった。
一同は、野営を行うための準備をするため、野営の適地を探し、火を熾していく。
いつも通り、火を熾している間、サラは薪となる小枝などを拾い集める。

「サラ！　私達は、食物を探しに行ってくる。　火の回りには聖水を撒いてあるから心配ないとは思うが、気をつけてくれ。」

「えっ？　あ、は、はい。」

火の傍で呆けたように火を見つめているメルエの頭を撫で、リーシャはサラに声をかけた。
すでにカミュはこの場所を離れている。
山中であることから、獣や果物を取ってくるつもりなのだろう。
サラの返事に一つ頷いたリーシャは、そのまま山中に入って行った。

火に定期的に薪をくべながら、サラとメルエは大した会話もなく火を見つめていた。
基本的に無口なメルエではあるが、特にサラに対しては全く口を開かない。
最初のようにサラの法衣に怯えた様子を見せることはないが、極力サラを避けているようにも感じる。

「・・・・メルエは魔法が使えるのですね・・・・・」

「・・・・・」

沈黙の空気に耐えられなくなったサラが、今日自分の目で見た出来事をメルエに対して確認を取るために声をかけた。
そのサラの問いかけにも、メルエはわずかに視線を向けた後、かすかに頷くだけであった。

その後は、また元の静けさが戻る。
『何故魔法が使えるのか？』
『いつから使えるのか？』
『誰に教わったのか？』
『カミュやリーシャは知っていたのか？』
聞きたいことは山ほどあったが、メルエの態度がそれを拒絶しているようにサラには感じていたのだ。

どれくらい時間が経っただろう。
未だ、カミュとリーシャは戻らない。
辺りは完全に夜の帳が下り、メルエとサラの間にある焚き火が唯一の灯りとなっていた。

そこで、黙っていることに何の違和感もなかった為、サラは今まで気がつかなかったが、メルエの視線が火の下ではなく、あらぬ方向に向かっていることに気が付いた。
メルエは座っている位置に変化はないが、首を動かし、闇に染まる山中を見ているのだ。
少なからず、その口元は動いているようにも見える。

「・・・・メルエ・・・？　何を見ているの・・・・？」

メルエの奇怪な行動に、自分の中で嫌な予感が働いていることを故意的に無視し、サラは恐る恐るメルエへ声をかけることにした。
サラの声に、虚空を見ていたメルエは、そちらの方向に向かって少し口を開いてからサラの方に向き直った。

「・・・・・女の子・・・・・・」

「えっ？　・・・・・どういうこと？」

メルエがサラに向かって語った内容は、サラが理解できるものでは

なかった。
メルエの言葉は極端に短い。
それが幼いころのトラウマからなのか、言葉自体の知識がないからなのかはサラには分からない。　だが、今まさにメルエの言動では意味が掴めないことは事実なのだ。

「・・・・女の子・・・・いた・・・」

「えっ？　今、そこにいたの？」

続いたメルエの言葉にサラが聞き返すと、メルエは一つ頷いた。
メルエは、先程まで見ていた場所に女の子がいたと言っているのだ。
少なくとも、サラには見えなかった。
ということは、メルエがサラと会話をしたくない故に嘘をついているのか、それとも本当にサラには見えない誰かと話をしていたかのどちらかということになる。

メルエが、そこまで姑息な手段を使ってまで、サラとの会話を拒むとは考え辛い。
ならば、やはり本当にあの場所に少女が立っていたことになるのだ。
とすると、それはこの世の存在ではないものということ。
まさしく本職のサラが相手にするべき存在である。

「　メ、メルエ！　何処にいるのですか！？　」

「・・・・・・もう・・・・・いない・・・・・・」

突然立ち上がり、サラが発した声は、若干裏返ったものであった。
そして、それに対するメルエの返答は、相反するような冷めたものである。

「・・・・・・あの子も・・・・・・・サラが・・・・・嫌い・・・・？」

「えっ？　メ、メルエ・・・・・『も』って、メルエは私の事が嫌いなのですか？」

メルエの発言の一部分に引っかかりを感じたサラは、恐る恐るといった感じにメルエへ真意を問いただすが、無情にもメルエの首は縦に振られることになる。

これ程面と向かって、自分のことを嫌いだとはっきり言われたことは、孤児であるサラにしても今まで一度もなかった。
孤児であるが為、周りの子供たちから揶揄されることも多かったが、メルエの目は真剣そのものだ。　それがサラの心を大きく抉っていく。

「ど、どうしてですか・・？」

やっと絞り出した言葉は震え、サラの心境を物語っていた。

「・・・・メルエのこと・・・・・どこかに・・・・連れていく・・・・・」

「そ、そのようなことしません!!　私は偽者の僧侶ではありません!!」

メルエが口にした内容は、つまりサラがメルエを買い叩いた奴隷商人の扱した僧侶と同じように、メルエをどこかに売り飛ばそうとしているというものだった。

サラは思わず声を張り上げる。

聖霊ルビスに仕える自分が、そのようなことをする訳がない。

なぜ、同じくルビスの子である『人』を売り飛ばすような真似をしなければいけないのだ。

サラはそう考えていた。

しかし、ルビス信仰をカミュのように曲解すれば、前世でのルビスへの裏切りを犯したはずであるこの世の弱者は、その担い手に何をされても文句は言えないということになるのだが・・・

「ほ、本当ですよ。　私はメルエをどこかに連れていくことなんてしませんよ。　それに、そのようなことをしたら、それこそリーシャさんに殺されてしまいますよ。」

必死にメルエに対し弁明を繰り返すサラを、メルエはじっと見つめていたが、納得がいったのか、一つこくりと頷いた。
メルエの頷きにほっと胸を撫で下ろし、メルエの方ももう一度見ると、すでにメルエの視線は再び虚空を見つめている。

「・・・メ、メルエ・・・・また来ているのですか・・？」

聞きたくはない。
聞きたくはないが、聞かねばならない。
そんな決死の思いでサラはメルエに問いかけた。
恐れるサラに、メルエは振り向きざまに頷くのだった。

「カミュ、戻る前に言っておきたいことがある。」

山中での戦利品をそれぞれ抱えたリーシャとカミュは、申し合わせ

た訳ではなかったが、途中で鉢合わせになった。
カミュの手には木の実や果物。
リーシャは右手で猪を引きずっていた。

「・・・話の前に・・・アンタはこんな山奥で、焚き火を使ってそんな大きな猪をどうやって調理するつもりなんだ・・・？」

「ん？　鍋を作るわけにもいかないからな・・・・まあ、最終的には丸焼きにでもすればいいだろう。」

驚くべきことを平然と言い張るリーシャ。
それは、カミュにとっても驚きを隠せないものだった。

「・・・はぁ・・・正直、アンタが本当に女なのかも疑問に思うことがある・・・」

「・・・カミュ・・・言葉に気をつけろ・・・今の私は、先程からのお前への怒りを何とか抑えているのだ・・・お前の不用意な発言でいつ斬りかかってもおかしくないほどにな・・・」

カミュの失礼千万な言葉に、リーシャは地面を見つめながら小刻みに震え出し、猪から離した手を腰の剣にかけていた。
リーシャの纏う怒気は、周辺の木々を揺らし、休んでいた鳥たちを羽ばたかせた。

「おい。　まさか丸腰の人間相手に剣を抜く気か？」

「・・・お前なら、何とかなるだろう・・・・」

カミュの言葉通り、昼間の戦闘でカミュは剣を失っている。
その為、獣等の食料の調達をリーシャに任せたのだ。
しかし、顔を伏せたまま、地鳴りのように響くリーシャの答えに、
流石のカミュも表情こそ崩さないが、その額から一筋の汗が滴り落ちていた。

「・・・・ふぅ・・・・ここは押さえておいてやる・・・」

緊迫した時間が過ぎ、お互いがお互いを牽制し動けない状態が続いた時、止めていた息をリーシャが大きく吐き出すことによって、この場の空気が一気に緩む。
リーシャの手が腰から離れたことを確認したカミュも大きく息を吐き出した。

「カミュ、お前はどんな生活をしてきたのだ？　どうやったら、今のお前のような考え方が生まれるんだ？　私には理解が出来ない。

お前の言うように、このままお互いの主張をぶつけ合ったとしても平行線のままだろう。　だからこそ、お前の考えや価値観の根底を私は知りたい。」

「・・・・・・」

「ここまでくる道程で、私は今まで見たことのなかった『人』の暗い部分を見た。　いや、知っていて、敢えて見ようとはしなかったのかもしれない。」

リーシャは、顔を上げないまま、一人独白のように呟きを始めた。
その内容は、カミュの知っている頑固一徹な戦士のものではなかった。

リーシャは、カミュに言われるほど頭の固い人間ではない。
それは、今までの行動に少しではあるが、表れていることもあった。
自分に理解できないこと、納得の出来ないことを無闇に拒絶するのではなく、その考えはどうして生まれたのかを知る必要性を知っているのだ。

「私は、お前がロマリアの闘技場で発した言葉が忘れられない。
魔物を擁護するわけではないが、私もあの闘技場に渦巻く淀んだ空気に吐き気を抑えるのに必死だった。」

「・・・・・・」

独白を続けるリーシャに対し、カミュは黙して何も語らない。
ただ、リーシャのその下げた頭を見つめるだけであった。
その表情は、冷たい訳でもなく、かと言ってメルエに向けるような優しいものでもなく、ただ単に何も考えていないような無表情。

「・・・カミュ・・・お前は、我が祖国で何を見てきたのだ？」

「・・・・・アンタに話すような内容じゃない・・・・・」

リーシャの絞り出すような声は、直後に発せられたカミュのたった一言で霧散することになる。　それは、冷酷なまでの拒絶。　メルエの加入により少なからず開きかけているように見えたカミュの本心へと続く扉が再び閉まってしまった音だった。

「　！！　」

リーシャは勢いよく顔を上げた。
その表情は怒り、哀しみ、悔しさ、色々な感情が相まってかなり歪んだものになっていた。　それほどリーシャにとって、カミュへのこの問いかけは覚悟を決めたものだったのだ。　それを無碍に切り捨てられた。　それがリーシャには許せない。

そんなリーシャに向かいカミュが口を開いたのは、リーシャが、も

うこのまま剣を抜き、カミュを切り捨ててしまおうかと思い、腰に手を伸ばした時だった。

「・・・アンタはそのままでいいさ。　俺の内情など知る必要はない。　『何事にも真っ直ぐに』向かっていけばいい。　俺に歩み寄る必要もどこにもない。」

「・・・カミュ・・・」

カミュは先程リーシャと相対するために地面に置いた果物を拾い上げ、踵を返し歩き始めた。　リーシャはしばらく呆然としてカミュを見ていたが、不意に立ち止まり、もう一度振り向いたカミュの言葉に、再び剣を構えることになる。

「ああ・・・アンタは大分良く言えば、真っ直ぐな人間だが、一般的には『猪突猛進』という言葉がよく似合う人間だったな・・・・だったら、それは共食いということになるのか・・・・」

「～～～～～！！　・・・・カミュ・・・・覚悟はいいんだな・・・今度という今度は、いかにお前が丸腰であろうと、切り捨てるからな・・・・・」

リーシャは地面に横たわる猪の亡骸を指さすカミュを斬り捨てるため、その腰の剣に手をかけ、大きく歩幅をとった。

目は憤怒の炎に燃え、一刀両断の構えである。

「・・・その猪は、アンタが捕って来たんだ。　調理はアンタに任せる。」

そんなリーシャに構うことなく、カミュは先に進んでいく。
リーシャは怒りの向ける矛先を失い、立ち尽くしてしまった。

「・・・・何をしているんだ？　メルエが腹を空かせて待っているぞ。」

「　くっ！　わかっている！　今行く！！　」

先に進むカミュの口から出た名前に反応したリーシャは、地面に横たわる猪の足を掴み上げ、カミュの後を追って歩き出した。

「少し寄り道をして行く。」

「どこに・・・・？」

「向こうに水場があった。　まぁ、＞かに＜はいなかったがな・・」

「！！」

先程の自分の混迷ぶりをつつかれ、リーシャは再び血が上り始める。本当に斬り捨ててしまった方が、自分の精神衛生上いいのではないのかと悩むリーシャであった。

「メルエ！　こっちに来て！」

サラは、メルエが未だに虚空を見ていることに身を震わせながら自分の下にメルエを呼ぶ。

しかし、当のメルエは、サラの声が聞こえていないかのように、全くサラに関心を示さない。　それがサラの恐怖心を尚一層かきたて

た。

「メ、メルエ・・・・その子は一人なの・・・？」

動こうとしないメルエに掛けるサラの声は、先ほどとは打って変わって心細いものになっていた。　やっとサラの方に顔を向けたメルエは、ゆっくりと頭を横に振る。

「・・・・・・・・お母さんと・・・・・一緒って・・・・・・」

「　ふ、ふたりなの！？　」

焚き火の灯りに映し出されたメルエの顔が、夜の闇に覆われた山中に浮かび上がり、サラの恐怖心を煽っていく。

「・・・・・・・・今は・・・一人・・・・・」

「メ、メルエ！　早くこっちに来て！　そ、その子は、も、もう『人』ではないの！」

サラの必死な叫びに、メルエは小首を傾げる仕草をする。
サラが何に怯え、何に目くじらを立てているのか、メルエにはさっ

ぱり解らなかった。
自分はただ、少し離れた場所でこちらを見ている少女に気が付き、そちらに顔を向けていただけなのだ。　その少女は自分の存在に気がついたメルエに優しく微笑みかけてきていたし、メルエが聞けば、それに対して答えてくれている。

不思議そうに自分を見つめるメルエに痺れを切らしたサラは、震える指先に力を込め、メルエの傍に駆け寄る。　そのまま、メルエの肩にかかっていたカミュのマントごとメルエを胸に抱き包む。

「・・・・？？・・・・」

サラの胸の中でモゴモゴと動くメルエに構わず、メルエの見ていた方向に視線を向け、サラは口を開いた。

「　メルエは生きています。　貴方方とはもはや違う存在なのです。　メルエを連れて行かないでください！　」

教会では、死者の魂が現世に彷徨い続けることを良しとはしない。彷徨い続ければ、その内にある未練や後悔、憎しみや悲しみが増幅し、魔物へと変化してしまうと云われているからだ。
また、死者の魂は生者の魂をも引き込むと恐れられ、その魂を救うことも本来は僧侶の仕事の一つと言われている。

しかし、実は、サラはその仕事が得意ではない。
実際、死者の弔いの為に、何度か育ての親である神父について行っ

たことはあるが、除霊をしたことはないのだ。

「・・・・・・・・・プファ・・・」

マントに包みこまれたまま、サラに抱かれていたメルエが何とかマントからの脱出に成功し、胸一杯に新鮮な空気を吸い込む音が辺りに響いた。

「・・・・・・・サラ・・・・苦しい・・・・・」

「えっ？　あ、ご、ごめんなさい。　メルエ、大丈夫でしたか？」

未だに虚空を睨んでいたサラの下からメルエの不満の声が聞こえ、サラはその腕に込めた力を緩める。

少し息が楽になったメルエは、軽くサラを睨むように視線を動かした。

「・・・・・・もう・・・いない。・・・・・・・・・やっぱり、サラ・・・・嫌い・・・」

「　え、えぇぇぇぇ！！　」

顔を出したメルエの頬は軽く膨れ、サラから視線を外した後に呟いた一言は、サラに大きなダメージを与えるものだった。
サラは、自分の恐怖の対象が去ったことよりも、メルエの一言に盛大な声を上げることになった。　だが、メルエの改めての拒絶は、先程のものとは違い、どこか拗ねたような軽いもので、理由が分からないまでもサラが自分の身を挺して護ろうとしてくれたことは理解できていたのであろう。

「　何を騒いでいるんだ！？　」

わたわたとするサラの後方からかかった声に、サラの胸の中にいたメルエが顔が上げ、もぞもぞと自分を拘束するサラの腕を外し、その声の下へと駆けて行った。

「　あっ・・・　」

駆けていくメルエの方向をどこか名残惜しそうに見ていたサラだが、その方向にいた声の主であるリーシャが手に持つ大きな獣を見て両目を見開いた。
駆け寄ったメルエは、リーシャの足に掴まる間際にその獣の存在を認識すると、慌てて方向転換しサラの腕の中に戻って行く。

「ふふふっ・・・・なんだ？　メルエ、これが怖いのか？」

メルエとサラの反応を可笑しそうに微笑みながら、リーシャは手に持つ獣を高々と掲げる。
その様子に尚一層怯えを増したメルエは、サラの腕の中ですっぽりとカミュのマントに包まってしまった。

「・・・はぁ・・・そんな馬鹿でかい猪をどうやって食べるつもりなんだか・・・」

声と共にリーシャの後ろから現れたカミュは、その手に果物を抱え、呆れたような表情を見せていた。　カミュの声に再びマントから顔を出したメルエは、その手にある果物を見て嬉しそうな微笑みを洩らす。

「　だから、最終的には丸焼きにでもすると言っただろう！　」

「・・・丸焼きですか・・・・？」

「・・・・・・・・メルエ・・・焼き・・・・・？」

カミュに向かって怒鳴るリーシャに先程までの鬱憤が残っている様子は見えない。
純粋にカミュの言葉へ反論しているだけなのだろう。
カミュの考えに納得したわけではない。
だが、リーシャは、カミュには自分の考えと他者の考えに大きな隔

たりがあることを認識しているにもかかわらず、それでも自分の価値観を変えることが出来ない経験があるのだということが理解できたのだ。

「ば、ばか！　メルエを焼くか！　この猪の毛を排除した後、そのまま焼くんだ。」

「・・・・そんなに食べられるのですか・・・？」

「・・・そこにいる大食漢である戦士様が平らげてくれるさ・・・」

「・・・・・・・・メルエも・・・・・・いらない・・・・・」

リーシャの申し出に三者三様の答えが返ってくる。
どれも、好意的な反応ではない。

「～～～！！　お前たちは・・・・・」

「さっさと調理を始めないと夜が明けるぞ。」

三人の答えに、身を震わせながらも耐えていたリーシャは、カミュの声に諦めたようなため息を吐き、猪を解体するために少し離れた

場所に移動していった。

「メルエ、まだ食べては駄目ですよ。」

「・・・・・・・サラ・・・・嫌い・・・・・」

カミュが置いた果物に早速手を伸ばそうとしたメルエにサラの小言が飛ぶ。
対するメルエは、自分の手を止めるサラに再び頬を膨らましていた。

「・・・・うぅ・・・嫌いでも駄目です。　カミュ様がメルエを甘やかすからいけないのです！」

「・・・・はぁ・・・・アンタは何から何まで人のせいだな・・・・」

予想外の方向転換にカミュは呆れたような溜め息を吐き、何かを作っていた。
果物から目を外したメルエは、そんなカミュの手元を興味深げに覗き込む。

「・・・・・・何・・・・・・？」

「ん？　ああ、まさか猪を丸焼きで食べるわけにはいかないからな・・・・」

メルエの簡略化された問いかけにカミュは手を休めることなく、言葉短めに答える。
傍にあった石で土台のようなものを作り、その上に、先程果物と一緒に手に持っていた少し大きめだが薄く平らな石を載せる。
サラはテーブルを作っているのかと思ったが、四人で囲むには小さすぎる。

上に載せられた石は、泥や埃などは乗っていない。
むしろ、洗ったためなのか全体が水で濡れていた。

石で組んだテーブルの下に、サラが拾い集めた木の枝を薪を組むように置き、リーシャが置いて行った＞たいまつ＜から火を移す。
石の下で燃え始めた薪の炎によって、上に載せられた石が徐々に乾いて行く。
時間がたてば、この石自体が熱せられ、触ることが出来ないほどになることは容易に理解できる。　それではテーブルとしての役割などできるわけがない。

「なんだ・・・何を拾って来たかと思えば、それを作るためのものだったのか？」

メルエとサラが、カミュの作り出した石のテーブルに見入っていると、猪の解体を終えたリーシャが割と薄めに切った猪の肉を持って

現れた。

「串に刺すしかないかと思ったが、それなら焼くことができそうだな・・・・こうなれば何か野菜でも欲しいところではあるが・・・・」

「リーシャさんは、これが何か分かるんですか?」

「・・・・・」

石のテーブルを見て嬉しそうに頷くリーシャに、サラとメルエは小首を傾げながらその用途を問いかけることしかできなかった。

作成が終わったカミュは、もうすでに場所を離れ、焚き火の傍に腰をおろしている。

リーシャはそんな二人の様子を見て、軽く微笑んだ後、言葉で答えを返さずに行動に移した。　猪の血であろうか、少し赤く染まった手で猪の肉を取り上げ、そのまま石の上に置いたのだ。　まだ石全体が熱しきれてはいなかったが、リーシャが置いた猪の肉は、かすかな焼ける音を発して煙を立ち昇らせる。

「・・・・わぁ・・・・・」

「・・・・ホゥ・・・・・・」

焼ける肉の様子にサラとメルエの二人は、それぞれの感嘆の声を上げた。
その様子に満足そうに頷くリーシャは、石の状況を確認しながら何枚かの肉をのせて行った。

「カミュ！　塩をくれ。」

焼けてきた肉を見ていたリーシャがカミュに調味料を依頼すると、その方角から、小さな革袋に入った塩が放り投げられてきた。
塩を振り終わった肉を木の枝で挿しひっくり返す。
それを何度か繰り返し、完全に焼けたことを確認した肉をリーシャはサラの口に放り込んだ。

「！！　ハフッ　・・・・ハフゥ・・・・・おいしいです！」

突然放り込まれた肉に、目を白黒させながら口を動かしていたサラが、飲み込むと同時に味の良さを満面の笑みで報告する。

「・・・・・・メルエも・・・・・・」

そのサラの姿を横目に眺め、メルエもリーシャに向かって口を開け

る。
その姿は、ひな鳥が親鳥に餌をねだる姿にそっくりだった。
リーシャはそんなことを感じながら、焼けた一切れの肉をメルエの小さな口に火傷をしないように入れて行く。
先程のサラと同じように、口に入った肉の熱さにモゴモゴと口を動かしながらも何とか飲み込んだメルエもまた、その顔に笑みを浮かべるのだった。
あれほどあった猪の肉もなくなり、果物を食しながら一行は火を囲むように座る。
メルエはリーシャとカミュの間に座り、満足そうに果物を頬張っていた。
「猪の肉は意外と美味しいものなのですね。」
「・・・・・・・・美味しかった・・・・・・」
サラの言葉にメルエも同意を表わし、何かをねだるようにリーシャ

を見上げる。
リーシャはメルエの視線が何を意味するのかは解らないが、満足そうなメルエの姿に顔を綻ばした。

「・・・・・・・もっと・・・食べる・・・・・・」

「な、なに!?」

しかし、そんなメルエの口から出たのは、リーシャの予想の遥か上をいくものだった。
先程の食事では、リーシャ程ではなかったが、その小さな体では信じられない量をメルエは腹に納めていたのである。
それが、まるでまだ食べ足りないとでも言うような意味の発言をするのだ。

「い、いや、もう猪の肉もない。」

「・・・・・・・また・・・・捕ってくればいい・・・・」

やっと絞り出したリーシャの言葉にメルエは不満そうに頬を膨らましていた。
サラは、出会ってたった数日なのにもかかわらず、赤の他人であった自分達に我儘を
言うメルエを不思議に思った。

いや、メルエは、それが我儘だと理解していないのかもしれない。

「メルエ！！」

サラと同じようにメルエの我儘に苦笑していたリーシャの反対側から、今まで黙っていたカミュの声が響いた。
それは、珍しい程の声量であり、声を掛けられたメルエは身体を跳ね上がらせた。

「・・・・・・・・」

恐る恐るカミュの方に顔を向けるメルエが見たのは、今まで自分には向けたことのない表情をして自分をみるカミュの姿だった。

「・・・メルエは・・・まだ腹が空いているのか？」

静かに語るカミュの言葉に、返答を否応なくされたメルエは、ゆっくりと首を横に振る。
そのメルエの後ろにいたリーシャもまた、カミュの目に吸い込まれていくような感覚に包まれる。　ただ一人、サラはカミュが何を話すつもりなのか、それを聞き逃すまいと次の言葉を待っていた。

「・・・・・ならば、メルエは魔物以下の存在だな・・・・・」

「「「　！！　」」」

カミュが次に発した言葉に、三者三様の驚きがあったが、三人が同時に感じた感情は絶望であったのかもしれない。
この世界で、魔物以下となれば、それこそ生きる価値のないものであり、ルビス信仰の中では、存在自体が許されざるもので、何度輪廻転生を繰り返しても、決して許されることのないものであるということなのだ。

「・・・・・・なんで・・・・・・？」

「メルエ、魔物は人間を食すことは知っているな？」

メルエは、カミュに怒られることを覚悟して怯えた目を向けながら、こくりと頷いた。
それを見たカミュは、話の先を続けて行く。

「魔物は人間を食べる。　だが、それは自分の食欲を満たすためだけだ。　腹が減ったときに人間を襲い、それを食す。　だから基本は必要以上の人間を襲わない。　必要以上に人間を襲うのは知能のある魔物だけだ。」

「・・・・・ち・・のう・・・・？」

メルエが予想していたような怒鳴り声ではなく、まして手が出ることがないカミュの話をメルエは聞き入る。

「・・・ああ、知能や理性があり、人間を襲うことに愉悦を感じるような魔物だ。　自分より弱い者を自己の楽しみの為だけに虐殺するような者。　まあ、俺もそんな魔物はまだ見たことがないがな。」

「「「・・・・・・・・・」」」

「メルエ、それは人間にも言えることだ。　メルエが腹を空かせているのだとすれば、食料の為に獣を捕って来よう。　だが違うんだろ？」

カミュの真剣な眼差しに、メルエは黙って首を縦に振る。

「それでもメルエが獣を捕って来いというのならば、それはただ単に獣の命を弄んでいるだけだ。　人間の中にも、自分よりも弱い相手をいたぶり殺す者もいる。　メルエもそういう人間なのか？」

「・・・・・違う・・・・・メルエ・・・・違う・・・・・」

もはや、メルエの目には涙が溜まり始めていた。
自分が言ったことがどれほどのことなのか、それを完璧に理解したわけではない。
ただ、自分が考えもせずに発した言葉が、いけないことだったのではないかという思いを持ったことだけは確かであった。

「メルエ・・・・・メルエも俺も、自分が生きるためには何かを食べなければいけない。　でも、それはどこかで必死に生きようとしているものの命を奪っていることだ。　いつか逆に自分が誰かの食料として命を奪われる時が来るかもしれない。　それは憶えておいてくれ。」

一つまた一つとメルエの目から涙が頬を伝っていく。
それでもメルエは唇を噛みしめ、気丈にもカミュの目を見て頷くのであった。

「・・・・メルエ・・・おいで。」

涙を流し、肩を震わせながらもカミュに向かって頷くメルエの後ろ姿を、痛々しく見ていたリーシャが、カミュの口がもう開かないことを確認し、メルエを自分の下へと導く。
緊張で硬くなった身体を振り向かせ、リーシャの胸の内に顔を埋めたメルエは、ようやくその緊張を解き、すすり泣くように嗚咽を漏らした。
リーシャは自分の胸に顔を埋めるメルエの短く刈り揃えた茶色い髪

の毛を優しく撫でる。

サラはそんな一連の出来事を見ていて、昔、アリアハン城下町で見たことのある親子の図式が思い浮かんだ。　悪戯をし、父親に怒られ泣いている子供を母親が優しく慰める。　そんな図式だ。

カミュが話していたことは辛辣な内容なのにもかかわらず、この場の空気はとても優しいものであった。
ただ一人、魔物は悪と信じきっている女性を除いて。

「　カミュ様！　では、なぜ貴方は魔物を殺しながら魔王の討伐に向かっているのですか？　カミュ様の考えでは、魔物に食料として襲われた人間は諦めるしかないということになります。」

場を満たしていた優しい空気を切り裂くようなサラの声が響いた。
だが、カミュもリーシャも驚く様子はない。
まるで、サラの発言を予想していたかのように、動じることはなかった。

「カミュ様の言い分では、魔王を倒す意味がありません。　今のまま、魔物の横行を許し、人々が襲われても構わないと言っているのと同じです！　ならば、なぜカミュ様はアリアハンを出たんですか！？」

サラの声は、アリアハンを出て初めての夜にカミュと口論した時のように激しいものに変わっていた。　ここまでの道程、リーシャが

我慢してきたのと同じように、サラもまたカミュの価値観を認められず内に溜めていた物も多かったのだ。

魔物も人間も、命を食し生きていることに変わりはない。
その対象が、人間か獣かの違い。
カミュはそう言っているのだ。

サラにとっても、ロマリアの闘技場で見た魔物同士の戦いは、『人』による魔物の命の弄びに見えなくもなかった。　だが、魔物達は人間を襲っているのだ。　サラの中で自業自得という言葉を使い、その気持ちを抑えるようにしてきた。

また、サラはこの旅が始まってから、教会の中だけでは決して見えないものを見ることになる。
それは、決して良いものばかりでない。
サラの価値観に大きく影響を及ぼすようなもの。
だが、人の考えなど簡単には変えることが出来ない。
今まで、その考えの下に形成してきた自分自身をも否定することになるからだ。
故にサラは葛藤している。
それが、カミュへの問いかけにもなっているのだろう。

サラが立ち上がり、その拳を握り締めながら叫ぶ姿を静かに見つめながら、カミュはようやくその重い口を開いた。

「・・・・・俺は、生きていくための選択肢を許されてはいなかったからな・・・・・」

「「　！！　」」

それは、聞き逃してしまいそうなほど小さなもので、カミュの口から出た途端に目の前の炎の中に吸い込まれていった。
だが、その小さなカミュの呟きは、確かにこの場にいた全員の耳に聞こえていた。

「　カ、カミ・・・・・」

「明日も早い・・・・もう休め・・・・・」

尚もカミュに語りかけようとするサラの言葉を遮って、カミュは火の傍に身体を横たえて話の終了を告げた。
リーシャの腕の中のメルエも泣き疲れてしまったのか、いつの間にか寝息を立てていた。
リーシャとサラ、それぞれに別々の複雑な想いを抱いたまま夜が更けていく。

～幕間～【カザーブ村近辺山岳地】（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
今回の話は、賛否両論あると思います。

少し、色々と詰め込みすぎかなとも思ってはいます。
ロマリアを出て、４話目ですが、未だカザーブにも着かない一行を見捨てないでいただければ幸いです。

過去～カミュ～（前書き）

今回は少し短めです。

過去～カミュ～

カミュは、１０歳になったばかりの時に出会った一角うさぎとの戦闘以来、魔物との戦闘において無意味な殺生をしなくなった。
自分達を食料とし、襲いかかってくる魔物に剣を振るうことはあっても、逃げようとする魔物や恐怖で動けない魔物などには剣を構えることもしなくなったのだ。

自分に剣を振るわないことを理解した魔物が再び森に返って行く。
自然とカミュを侮り、食料を捕縛するために襲いかかってくる魔物か若しくは自身の身の危険を感じて窮鼠となった魔物しか相手をすることがなくなった。
日一日と身体も成長し、剣の腕もめきめきと上達はしていくが、その力をやみくもに振るうことはなかったのだ。

しかし、一角うさぎとの戦闘から2年ほどたった頃に事件は起こった。

「どういうつもりだ！！　なんでお前はあの魔物を逃がしたんだ！！」

常に一人戦場に放り込まれていたため、カミュが魔物を数匹逃がしていてもそれを見咎める者はいなかったが、今回の討伐では、カミュに二人の人間が付いてきていたのだ。
成長したとはいえ、まだ子供と言っても過言ではない歳のカミュには、周りに注意を払う意識が全くなかった。
自分が行っていることが、周りの人間にとってどう映るのかを考えることはなく、ましてそれに対して激昂されるとは思ってもみなかったのだ。

「・・・・・」

「何を黙っているんだ！！　ふざけるなよ！！」

カミュが相手の激昂ぶりに困惑しているのを、元々表情の変化の乏しさから、ふてぶてしく黙っていると見た男の感情に更に火をつける。

この男の激昂ぶりには訳もあった。
周囲の反対を押し切って、カミュの討伐の方向に珍しく付いてきた人間は、アリアハンの英雄と呼ばれたオルテガの息子の戦いぶりを一目見たいと言った若い一組の男女であり、しかもその男女は恋仲という幼いカミュには全く理解できない存在。
女性は魔法を少し使え、男性は剣を使う傭兵まがいの人間。

いつものように討伐隊の隊員達に方向を示され、それに黙って頷き隊を離れ歩き出したカミュに首を傾げながらもついてきた二人ではあったが、この行動をすぐに後悔することになる。

「な、なんだ・・・・これは・・・・」

カミュの父オルテガは、まさしくアリアハンの英雄だった。
それは、アリアハンに住む子供達にとって自分達の身近にいる分、聖霊ルビスへのものよりも強い信仰が生まれる程のものである。
カミュについてきた男女にとってもそれは変わらない。
彼らもまた、幼い頃に旅立つオルテガの姿を興奮して見ていた者達の一人であった。

そんな英雄の子。
自分達の憧れであり、嫉妬すら感じる存在のカミュが、自分達がオルテガを見送った年齢と変わらない歳で魔物の討伐をしていると聞

いて、何としてもその雄姿を見たいと思っていた。

そんな二人が付いて行ったカミュの行く先には、彼らが見たこともないくらいの数の魔物が奪い合うように何かの肉を貪っていたのだ。
それは、彼らの少し前に出発した討伐隊の人間の肉。
実は、カミュ達三人が同道していた討伐隊には、斥候の人間から前を行く討伐隊の全滅の情報は入っていたのだ。
しかし、それをカミュには伝えず、討伐隊が魔物に襲われた場所に向かわせた。

討伐隊の人間の数も相当なものなら、それを食す魔物の数もそれに輪をかけた数である。
確かに、カミュの魔物討伐は見られるかもしれない。
しかし、この数を相手にするとなれば、自分達の命すらも危うい。
いかに英雄の子とはいえ、まだまだ子供のカミュがこの数の魔物を全て駆逐することができるとは思えない。
そうなれば待っているのは死のみだ。

「・・・あ・・・あ・・・ああ・・・」

「く、くそっ!!　ど、どうなってるんだ!!　おい!　どうするんだよ!!」

言葉を失った女性は、恋人に身を寄せる。
女性を抱きかかえた男は、この状況を飲み込むことができず、その理不尽な怒りをカミュにぶつけることしかできなかった。

「・・・・・」

「お、おい！！　どうするんだって聞いてるんだ！！」

もはや、英雄の子に対する発言ではない。
ましてや、子供に対して尋ねる発言でもない。
完全にパニックに陥っている。
それ程、目の前に広がっている光景は、この男女にとってはまさしく地獄であったのだ。

もはや命の灯が消え失せている『人』であった物に群がっている魔物達。
皮を引き千切り、肉を貪るその口は血液で真っ赤に染まっている。
女性魔法使いの方は、その光景に嘔吐を繰り返す。
まるでカミュ達の存在に気が付いていないように魔物の群れは食事に夢中になっていた。

「・・・うぇ・・・・」

「大丈夫か！？　もうここから離れよう。」

嘔吐をやめない女性の肩を抱き、男はこの場からの離脱を提案する。
カミュ自体の戦闘力は分からないが、所詮は子供。
自分達二人の力量を考えても、とても三人で相手ができる程の数で

はない。

「・・・・・ギッ！！」

しかし、女性を抱きながら踵を返した男の目の前に、食料にあり付けなかった魔物達がよだれを垂らして立ち塞がっていた。
討伐隊の肉に群がる魔物達の数ほどではないが、少なくともカミュ達の倍の数は優に超えている。

「　キャ――――――――――――――！！　」

目の前の魔物の数に半狂乱の声を上げる女性。
その声に驚いたように、今まで肉に群がっていた魔物達もまたカミュ達の方向に顔を向ける。
最悪の状況。
今、目の前にいる魔物達だけでも精一杯なのにもかかわらず、後ろにいる魔物達まで加わるとなると、三人の生存は絶望的と言ってもいい。

その時、一匹の一角うさぎが、声を上げた女性に向かって飛び出した。
もはや混乱の極致にいる女性に、魔法を詠唱する暇などない。
肩を抱く男が剣を抜く間もなく、一角うさぎの角が女性の太ももに突き刺さった。

「キャ――――――――!!」

一角うさぎは突き刺さった角を引き抜き、距離を取る。
再び大きな叫びを発した女性は、男に支えられながらも立っていることができず、太ももから盛大に血を流しながら崩れ落ちた。

女性が崩れ落ちるのと同時に支えていた男もまた、地面に膝を突く形となった。
その機を見て、魔物達が一斉に動き出す。
先頭を切ったのは、大きなカエル。
＞フロッガー＜であった。

その大きな後ろ脚からの驚異的なバネで、男女の上に飛び上がって来た。
『もうダメだ・・』
男がそう覚悟を決めて目を閉じた時、人間のものではない叫びと、酷く生臭い液体が自分に降りかかってきた。

恐る恐る目を開けると、そこには、座りこんだ自分達よりも若干高い位置で両手で持った剣を天に向かって掲げるカミュと、その剣に貫かれ、喉元から体液を噴き出させている＞フロッガー＜の姿があった。

「す、すまない・・・」

先程まで怒鳴り散らしていた相手、しかも自分達より一回り以上も小さな少年に救われたことに男は驚きを隠せない。

英雄の息子とはいえ、少年であるカミュをどこか侮っていた自分に気がついたのであろう。
＞フロッガー＜から剣を引き抜いたカミュは、そのまま前方にいる魔物の群れに突っ込んでいく。

「「・・・・・・」」

女性の足の応急処置をしながら、無言で魔物を切り裂いて行く少年の後ろ姿を見ていることしか男はできなかった。
前方だけでなく、後方にその倍以上の数の魔物達がいることも忘れて・・・

カミュは所々で、憶えたばかりの火炎呪文を唱えながらも、魔物の群れを駆逐していく。
数に頼っているところのあった魔物達に次第に焦りが見え始める。
半分も魔物の首を落とした頃辺りから、カミュに襲いかかってくる魔物の数がピタリと止まった。　カミュから距離を取るように後ろに下がり、遠巻きに見るようにカミュを見ているのだ。

その様子を見ていた男は、好機とばかりに自分も剣を抜こうとするが、自分の腕の中で額に大粒の汗を滲ませる恋人が気にかかり、カミュの応援には動けなかった。
いや、カミュが半分を駆逐するまで、恋人を口実に動こうとはしなかった。

「　何をしている！！　今が好機だ！　早くしろ！！　」

しかし、人間、自分の危機が遠のいたことを実感すれば、声は出る。
自分の手を全く煩わせてはいないにもかかわらず、魔物の返り血で衣服がどす黒く変わりつつあるカミュへ投げかけた男の言葉は、それでも尚カミュを魔物に向かわせようとするものだった。

「・・・・・・」

しかし、その声を受けたカミュは、しばらくの間、魔物達と睨み合いをした後、一匹の魔物が逃げだすのを見て剣を鞘に納める。
男だけでなく、未だに角が刺さった部分が焼けるような痛みを主張している女性魔法使いも、そのカミュの行動に驚愕する。

一匹また一匹と姿を消していく魔物達を呆然と見ていた男は、剣を鞘に納めてしまったカミュが戻ってくるのを見て、状況を理解した。

「どういうつもりだ!!　なんでお前はあの魔物を逃がしたんだ!!」

男は戻ってくるカミュの胸倉を掴み、そのまま持ち上げる。
少年であるカミュの身体は軽々と持ちあがり、その足は完全に地面を離れてしまった。

「・・・・・まだ向こうに魔物がいる・・・・・」

「「　！！　」」

首を絞められながらも、顔色一つ変えないカミュが漏らした言葉に、首を絞めている男だけでなく、足から血を流しながら倒れている女性も今の状況を改めて認識し直した。
カミュの言うとおり、食事を終えた魔物達は仲間たちを斬り捨て終わったカミュをじっと見つめていた。

「　お、おい！！　どうするんだ！！　」

再びその顔に恐怖と焦りの表情を張り付けた男が胸倉を掴んだままカミュに怒鳴りつける。
女性は足の痛みに苦悶の表情とその額に大粒の汗を滲ませながらもカミュを睨みつけていた。　彼らにしたら自分達を傷つけた魔物を逃がすカミュはもはや憎しみの対象に近い存在となりかけていた。

「・・・・・手を離してくれませんか・・・・・」

「　く、くそっ！！　」

現状、自分の頭がパニック状態にもかかわらず、カミュが異様に冷静なことに男の苛立ちは益々ヒートアップしていく。　カミュを文字通りに放り投げるように手を離した男は女性に近寄り、魔物の群

れを見ながら叫び声を上げることしかできなかった。
起き上がったカミュは、そんな男の狂い様に関心を示すことなく、女性の近くに近寄り、患部である太ももに手を当てる。

「な、何をするつもりだ!!」

「や、やめて!!」

もはや、カミュという存在を魔物と同等の位置まで落としている男女は、カミュの行動が奇怪なものに映り、恐怖の対象となっていた。

「ホイミ」

しかし、そんな男女の在り方にも関心を示すことなく、カミュは静かに詠唱を始める。
カミュの詠唱と共に淡い緑色の光が女性の太ももを包み込み、一角うさぎの角が突き刺さった大きな穴を塞いでいく。
実際は傷を塞いで止血をした程度であり、内部の損傷などを復元させるまではいっていない。

「・・・・・・血は止まりましたが、動かないようにして下さい・・・・・・」

言葉少なめに話をするカミュに、自分の患部を呆然と見ていた女性は慌てて首を縦に振る。
まさか回復呪文を使えるとは思っていなかったのであろう。
基本、経典に載っている魔法は、聖霊ルビスの祝福を受けた僧侶しか使用が出来ない。
魔道書に記載される魔法との契約を行った者は、経典の魔法は二度と契約することが出来ないことはこの世界では常識である。
それなのに、カミュは先程『メラ』を使っていたにもかかわらず、今まさに経典の魔法である『ホイミ』という回復呪文を使用したのだ。

「・・・・・・・」

女性の足の応急処置を終えたカミュは、魔物の群れに向かって再び剣を構える。
女性の傷を治したカミュを、男は憎々しげに睨みつけていた。

「　えっ？　」

しかし、その異様な緊迫感は、足の痛みから若干解放された女性の間の抜けた声に霧散する。　女性の声に、カミュに向けていた視線をその奥にいる魔物に向け直した男は驚きを隠せなかった。
魔物の群れが引き揚げて行くのだ。
絶対的有利な立場にいたのは、間違いなく魔物の方である。

如何にカミュが奮闘していたとしても、数の暴力には敵う訳がない。
それでも、こちらに襲いかかることなく一匹また一匹とその場を後にしていく。

カミュはしばらくその様子を見ていたが、魔物の半数以上が森に消えて行ったのを見届けてから剣を鞘に納めた。　その様子を、再び男女が憎々しげに見つめる。　おそらく、逃げて行く魔物達を追撃しろとでも言いたいのだろう。
魔物達が消えて行った後には、魔物に食い散らかされた元『人』であった骨が散乱するだけであった。

「　何故魔物を追わないんだ！？　お前はオルテガ様の、英雄の息子じゃないのか！？　」

余裕を取り戻した男は、再びカミュに問い詰める。
その表情は怒りに燃えており、自分の発言自体が感情的なものであることにすら気が付いていない様子であった。
地面に座り込んでいる女性も同様の意見なのであろう。
幼い頃より、『魔物＝悪』という構図を作られてきた男女にとって、魔物を倒す力があるにもかかわらずそれをしないカミュに怒りしか湧いてこなかったのだ。
自分達では、魔物に立ち向かうことすらできなかったのにだ・・・・

「・・・・・・」

「　くそっ！！　また黙秘か！？　」

黙して何も語らないカミュに侮蔑の眼差しを向け、男は女性を背負い他の討伐隊に合流するように歩き出した。
反対にカミュは魔物に食い散らかされた骨が散乱する場所に向かっていく。

カミュはこういう場所に一人で向かわされ、魔物の討伐を行うことが多いが、大抵はすでに人間が襲われ食された後である。
つまり、もはや生きた人間などいない所に放り込まれているのだ。
故に、遺族の元に遺品を持ち帰るために拾い集めるのもカミュの仕事の一つなのだ。

「・・・・・」

骨が散乱し、血の海が広がるその場所を、若干１１・２歳の少年が立つその光景は異様なものである。　靴に血をべっとりと付けながらも周辺を探し、血に染まった指輪や肉片のこびりついたロケットなどを拾い集め、持っていた革袋に一つ一つ入れて行く。
革袋に入れて行く前に一つ一つ持っていた布で拭いていくカミュの表情は、先程まで男女に見せていた物とは違い、哀しみに歪ませたものであった。
それは、幼い身なのにもかかわらず、このような仕事をさせられている自分に対しての憐れみなのか、それとも無残にも食い殺された『人』の原型を留めていない物に対しての哀しみなのか・・・・

「　おい！！　何をしているんだ！！　早くしろ！　」

ゆっくりと作業を続けるカミュの後ろから、女性を背負った男の呼ぶ声が聞こえる。
彼らにとってみれば、もはや死者となり果てた者達よりも自分の身の安全が大事なのである。　それは責められることではない。　むしろ当然の感情であるし、今生きている人間がこの先も生きられるような対策を取ることの方が死者の弔いよりも優先されるのも当然の処置であることは明白だ。

遺品を拾い終えたカミュを先頭に、街道に向かって歩き出した一行は、魔物との遭遇もなく、無事に討伐隊との合流を果たす。
合流と同時に怪我人である女性魔法使いは、同行している僧侶の治療を受けるため奥のテントへと運ばれていく。
残ったのは、討伐隊の面々とカミュに同行した男、そして遺品が入った革袋を討伐隊に手渡すカミュとなった。

「　やはり、襲われた後だったか・・・」

カミュから遺品を受け取った隊長らしき人物は、その革袋のずっしりとした重みから、先に進んでいた討伐隊の全滅を理解した。
『やはり』という言葉に、その状況を予想していたにも関わらず、カミュを一人で向かわせたことが分かる。

「か、数も相当なものでした。　襲っている魔物とは別に、私達の後方から更に魔物が増え窮地に陥りました。」

隊長に対しても、黙して語らない姿勢を崩さないカミュに代わって男が状況の説明をする。
自分達が感じた恐怖を少しでも伝えようと、身振り手振りを加えて。

「・・・だから、あれほどコイツについて行くことを反対したんだ。」

「し、しかし、コイツはオルテガ様の息子ですよ！！」

一般的な考えさえ持っていれば、この二人の発言はおかしい。
後にカミュと共に旅に出る二人の同道者がこの場所にいたとしても、この二人に敵意を向けていたかもしれない。

「コイツ一人なら何とかなるんだ。　傷を負って戻ってきても回復させて、また向かわせればいい。」

「・・・・・・」

「・・・が、今回は傷一つないな・・・本当に戦闘を行ってきたの

か？」

服に多少の魔物の体液が付着してはいるが、カミュに傷はない。
靴に赤い血がついてはいるが、それはカミュのものではないのは見て解る。

「まさか、お前は討伐隊が襲われていくのを黙って見ていたわけじゃあるまいな・・・」

「い、いえ、私達が到着した時には既に全滅しており、魔物に食われているところでした！」

カミュに向かって鋭い視線を向ける隊長の様子に、このままカミュが黙秘を続ければ、自分の身にも危険が及ぶと判断した男が弁明を口にする。
カミュから目を離すことなく男の話を聞いていた隊長は、少年であるカミュとしばらく睨みあった後、視線を外し背を向けて自分の場所へと戻って行く。

「し、しかし、コイツは魔物を逃がしました！」

しかし、その後に男の口から発せられた言葉に、戻りかけた隊長の足が止まる。
周囲を取り巻くように立っていた隊員達の眼の色も変わっていく。

「・・・どういうことだ・・・」

「は、はい。　コイツは、魔物達を何匹か倒した後、魔物が襲いかかってこなくなると剣を鞘に納めました。　しかも討伐隊を襲っていた魔物達に対しても斬りかかることもなく、魔物が引いて行くのを黙って見ていました。」

「「「「「「「「　！！！　」」」」」」」」

男の発言に、周囲を取り巻く空気が一変する。
それは怒気と殺意。

男の発言は、その場にいた者であれば、頭を抱えたくなるほどの勝手な言い分。
勝手についてきたにもかかわらず、魔物の攻撃を受けて足に傷を負い足手まといになる女性魔法使いに、パニックを起こし怒鳴り散らすことしかできなかった男。
そんな足手まといを二人も抱え、どうやって魔物と対峙すればいいというのか・・・？
しかし、そんな内情はこの場にいる人間には解らない。
例えカミュがその状況を話したとしても、取り合ってすらもらえないだろう。

「　お前・・・・仲間を襲っていた魔物達に一太刀も浴びせなか

ったのか!?　」

「「「　ふざけるな!!　」」」

その仲間の危機に自分達は行かず、少年一人を放り込んだ人間たちがカミュの行動を責めるため、その包囲の輪を徐々に縮めて行く。
カミュは、その周囲の圧力にも表情を変えることなく、どこか諦めにも似た感情を持って、周囲で目を血走らせる『人』であるはずの集団を見ていた。

「　何とか言ってみろ!!　」

「　この野郎!!　」

黙ったままのカミュに業を煮やした隊長が、怒声と共にその拳をカミュの頬に叩きこんだ。
それを機に、拳を受けて倒れ込んだカミュに、周囲の隊員達が群がって行く。
倒れ込んだカミュの腹を蹴り、顔面を蹴る。
もはや収集のつかない状況に陥った討伐隊は、我先にとカミュへ制裁を加えて行く。
カミュに同行していた男もその輪に加わり、蹲(うずくま)るカミュの腹部を力一杯にけり上げていた。
当事者である人間までもその輪に加わったことにより、その制裁は更に加熱していく。

何も知らない人間が見れば、先程討伐隊に群がる魔物と今カミュに群がる『人』に何の違いがあるのか疑問に思うのではなかろうか。いや、今の時代に魔物と『人』を同じ生き物として考える人間は、群がる討伐隊の中心で頭を抱え蹲る少年しかいないのかもしれない。

「　英雄オルテガ様の息子じゃないのか!?　お前が次代の勇者なんだろ!?　お前が魔王を倒さなければいけないんだ!!　魔物を逃がすような真似しやがって!!　」

英雄オルテガの息子
その事実は、通常であれば多くの国民から称えられ、そして期待と共に大事に育てられる筈だった。　しかし、アリアハン国は英雄であるオルテガの功績を公式に無にした経歴がある。
憧れをもっていた人物の地位の陥落。
それは、多くの国民の心のギャップを生みだした。
国が認めることを止めた英雄。
しかし、国民の頭には今もその雄姿が焼き付いている。

その矛先は、家族へと向かったのだ。
オルテガの父。
オルテガの嫁。
これは、オルテガと同様の知名度があり、それなりの交流もあった。
しかし、オルテガが死んだ時にまだ赤子であったその息子は、国民にとって、様々な感情の捌け口となる。

それは、今尚魔物に怯える生活を余儀なくされているこの時代への不満。

魔王に対して何の対抗策もないことへの苛立ち。
そして、自分達をこの苦しみから解放してくれるという期待と希望。
そのような感情の全てがこの小さな少年の成長に多大な影響を与えていた。

カミュにしても、その腕と魔法を持ってすれば、この討伐隊の半数の息の根を止めることは可能であったかもしれない。
しかし、一国民にしか過ぎないカミュが、国が組織した討伐隊のメンバーを殺したとなれば、アリアハンで暮らすことはできない。
それどころか、厳格な騎士であった祖父の手によって、カミュのその首は瞬時に斬りおとされることだろう。
故に、まだ少年にすぎないカミュは、ただ身体を丸め、この暴力が通り過ぎるのを待つしかできなかったのだ。　暴力を振るっている討伐隊もカミュが家の者への報告もしないことを知っていたし、たとえ報告したとしても、それを家の人間が信じないことを分かった上での行為なのだ。
気が済むまで暴力を振るった後に、回復魔法で痣までも消してしまえばいい。
それぐらいにしか考えていなかった。

それは、本当に『人』の行為なのか・・・・

そんな想いを胸にカミュは上から繰り返される暴力を受けていた。
右から左へと身体を振り回されながら。

身体の揺さぶりに耐えていたカミュは、余りにもその揺さぶりが大きく、ゆっくりとその目を開けると、小さくなった焚き火の灯りに映し出された、心底心配そうに顔を歪めるメルエの顔があった。

「・・・・・・・・起きた・・・・・・・・・・・・？」

カミュの目が開いたことに、心配そうな表情を残したままメルエは言葉少なにカミュに確認をとる。　その様子に、寝ている間にどれほどカミュがうなされていたのかが垣間見えた。

「うなされていたのか・・・・ありがとうメルエ。　もう大丈夫だ・・・・・」

「・・・ん・・・」

礼と共に頭に乗せられたカミュの手に、心底安心したようにメルエは表情を緩める。
改めて確認すると、リーシャとサラは未だ夢の中のようだ。
唯一カミュの対角線上にいるメルエだけが、カミュの変化に気が付き、掛っていたカミュのマントを放り投げたまま傍に駆け寄ったのだろう。

カミュが頭を撫でているうちに、再び睡魔が襲ってきたのか、メル

エはカミュの太ももに崩れ落ちて行き、そのまま静かな寝息を立て始めた。
カミュは一つ苦笑をすると、自分が枕代わりにしていた革袋にメルエの頭を載せ、マントを取りに行く。
マントを眠るメルエに掛けた後、焚き火に薪をくべてながら、まだ明けるまで時間のかかるであろう夜の空を見上げた。
空は雲一つなく、空一面の星達と、優しい月の光が地面へと降り注いでいた。

過去～カミュ～（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。
なかなかカザーブに辿りつけません。
脇道にそれすぎですよね・・・・

次話ではカザーブ村の中での話です。
よろしくお願い致します。

カザーブの村？（前書き）

いつも間にかＰＶが９００００。ユニークが１００００人になっていました。
本当にありがとうございます。

少しでも面白いものを書ければと思っています。
これからもよろしくお願いいたします。

カザーブの村？

朝を迎えた一行は、朝食を取る。
朝食の際に、メルエはリーシャの後ろに隠れながらチラチラとカミュの方に顔を出していた。　その様子を不思議に思い、カミュが声をかけるが、カミュの声を聞くとまたリーシャの後ろに隠れてしまった。

「・・・何なんだ？」

「あははっ、メルエはお前が怖いんだよ。　また怒られるんじゃないかと思ってな。」

疑問を口にするカミュに答えたのはリーシャだった。
朗らかな笑顔を浮かべながら、背にメルエを隠して話すリーシャを忌々しげに睨みつけるカミュの目はいつもよりも迫力に欠けていた。

「・・・・・」

「・・・はぁ・・・メルエ、俺は別に怒っている訳じゃない。昨日話したこともメルエには憶えておいて欲しかっただけだ。」

再びリーシャの背中から少しだけ顔を覗かせてきたメルエに溜息を吐きながらカミュは話しかける。

明け方に自分を心配して必死になって起こそうとしてくれ、起きたことに安心すると自分の膝枕で眠ってしまったはずのメルエが今朝になって自分に怯えているということをカミュは不思議に思っていた。

「あははっ、嫌われたな、カミュ。」

「・・・・・・嫌い・・・・じゃない・・・・・・」

尚も笑いながら話すリーシャの言葉に、先ほどよりも顔を出したメルエが反論する。

言葉の抑揚に伴わない、強い目を向けるメルエにリーシャは少し戸惑った。

「・・・・・メルエ・・・・・・カミュ・・・・・嫌い・・・・・じゃない・・・・・」

「そ、そうか・・・」

「・・・・むぅ・・・・・」

続くメルエの言葉にリーシャはたどたどしく答え、サラは昨晩自分に向けられたメルエの言葉とカミュへの言葉の違いに不満を持ち、頬を膨らませていた。

「もう一度言うが、俺は怒ってない。　だからメルエが怯える必要はない。」

「・・・・・・・」

しばらくカミュを見つめていたメルエは、こくりと一つ頷くと、リーシャの背中から身体を全て出し、カミュの傍に座りなおした後、朝食の果物を口に入れ始めた。
そんな様子を微笑みながら見つめるリーシャと、『何故自分よりもカミュの方がメルエに好かれているのか』とカミュを睨みつけるサラの姿があった。

朝食を取り終わり、再びカザーブへと一行は歩み始めた。
果てしなく続きそうな山道を、途中に何度か休憩をはさみながらもひたすら北上する。
昨日はへばっていたメルエも、旅慣れてきたサラに不思議な対抗心を燃やし、弱音を吐くことなくカミュの後ろを必死について行った。
カミュの歩く速度がいつもよりも若干遅いことを感じ、サラは釈然としない想いを抱くが、リーシャはそんなサラをも励ましながら山道を進んでいった。

途中では、何度か魔物との戦闘もあり、昨日リーシャが混乱に陥った＞軍隊がに＜や、アリアハンに住む＞さそりばち＜の上位種に当たる＞キラービー＜などであり、リーシャの剣、メルエの魔法、サラの補助魔法などの活躍で問題なく駆逐していく。

「なんだ、カミュ。　今日はあまり役に立たないな。　お前もサラと一緒に槍の稽古でもした方がいいんじゃないか？」

扱えるとはいえ、本来の武器ではない＞鉄の槍＜を使っているカミュは、この旅に出て初めてパーティーの中で戦闘中に出番がなかった。
それは、カミュが自ら出ることを拒んだ訳ではなく、実は今カミュに厭味を言っている張本人がメルエとサラの力量を上げるため、カミュを抑えていたのだ。
今思えば、ただ単にこの厭味を言いたかっただけなのかもしれない。

「・・・・・・カミュ・・・・・・・・ダメ・・・？」

「ふふふっ、そうですね。　今回はメルエの方が凄かったですね。」

「あはははっ、その通りだな。　カミュはダメだ。」

メルエの好意を受けるカミュへの嫉妬から、サラは珍しくカミュへ攻撃的な言葉を発した。
リーシャに至っては、先ほど＞キラービー＜を両断した剣に付着する体液を振り払った後、メルエの言葉を肯定し、豪快に笑い飛ばしていた。

「・・・そうだな・・・＞かに＜の登場にパニックを起こすような騎士よりも、メルエの魔法の方がずっと役に立っていることは確かだな。」

「　な、なんだと！！　」

しかし、リーシャの笑いもいつものように長続きはしない。
そのやり取りはもう見慣れた光景になりつつあり、サラもあたふたすることなく見守っていた。

「・・・・メルエが・・・・・・一番・・・？」

「ふふふっ、そうですね。　メルエが一番ですね。」

リーシャとカミュのやり取りをそのままに、サラもにこやかにメルエの問いかけに答える。

昨日の焚き火での出来事以来、メルエは自分からサラに話しかけてくるようになった。

それは、言葉は少ないものの、しっかりとサラの目を見て話しかけるもので、サラはそのことを心から喜んでいた。

山道を下りきった一行は、周囲を山々に囲まれたのどかな盆地に辿り着く。

見渡す限りを山々に囲まれたそこは、山からの吹き下ろしの風は吹いているが、自然豊かで、空では鳶の鳴き声が響くような場所であった。

ただ、そんなのどかな場所にも魔物は出現するのか、所々に『人』の手で作られた物の残骸や、『人』そのものの骨などが埋葬されることなく野ざらしになっていた。

埋葬するための『人』が出て来ることができない程に危険な場所な

のか、『人』を手配する余裕がないのかは解らないが、その骨は新しいものから古いものまで様々であった。

人が踏み歩いた土が道のように続くところを一行は歩き続ける。
山を降りしばらく歩くと、前方に簡易な柵で覆われた集落が見えてきた。
おそらくあれが『カザーブ村』なのであろう。

入口の門のようなものの場所まで歩くが、その周囲に駐在所のようなものはなく、兵士が門番をしている様子などもない。
カミュが木で作られた門につく金具で叩き、村への来訪を知らせるが、しばらくは村から何の反応もない。

何度も門を叩き、声を上げ続けると、門の中側にある見晴らし台の上に人影が現れた。

「アンタ達、何の用だ!?」

「旅の者です。今晩の宿をこの村でとらせて頂ければと思い訪れました。」

何かに警戒するような物言いでカミュ達一行を拒むような仕草をした男であったが、一行の中に少女と言っていい程の子供が混じっていることに気が付き、門を開けることを了承した。

徐々に開いて行く門の向こう側が一行の目に飛び込んでくる。
村の中の様子にメルエを除く一行は息を飲んだ。

「遠いところ大変だったな。　さあ、何もない村ではあるが、ゆっくりしていってくれ。」

門を開き、中に一行が入ったことを確認すると、再び門を閉めて行く。

男の表情は先程のように警戒心に覆われた者ではなく、山道を歩いてきた旅人の労をねぎらうような優しい表情に変わっていた。

門を閉め終わった男は、カミュ達に一言告げると、村の奥へと歩いて行ってしまった。

「・・・・・・・さびれている・・・・・・・」

「・・・・酷いな・・・・・」

男の姿が見えなくなり、改めて周囲を見渡したサラが発した言葉に、リーシャも同意を示す。　メルエは二人の様子を不思議そうに眺めていた。

「・・・・なるほどな・・・・」

そんな三人を余所に、カミュは一人納得したように頷いていた。

「何が『なるほど』なんだ？　この村の惨状はどういうことなんだ？」

カミュが一人で納得している内容が理解できないリーシャがカミュへと問いかけを洩らす。
リーシャと共にサラもカミュに視線を向けたことから、同じ様に理解できていないのだろう。　メルエに関しては、初めて見る生まれた場所以外の集落に目を輝かせていた。

「・・・つまり、この村がロマリアに取っての暗部そのものなんだろう。」

「　！！　どういうことだ！？　」

「宿を取る前に食事にしよう。　そこで話す。」

リーシャの声量の大きい問いかけに、周囲の視線を気にしたカミュが場所を変えるよう提案し、サラも同じ事を気にしていたため、すんなりと場所の移動に移ることになった。
ただ、メルエだけは、少し寂しげな表情を映し出していた。

村の一番奥に酒場があり、そこで食事を出しているということを聞き、一行は酒場へと場所を移す。　酒場に入ると、寂れた村に相応しい寂れた雰囲気を漂わせる内装で、客も二人きりという、なんと

も言い難いものであった。

「いらっしゃい。　空いている席に適当に座ってください。」

カウンター越しに、マスターであろう男の声が響き、その指示に従って全員が一つのテーブルを囲うように座る。　メルエを椅子に座らせたリーシャが最後に席に着き、水を持ってきたマスターに、適当に食事を持ってくるよう注文した後、先程の話題へと戻って行く。

「で、カミュ。　どういうことなんだ？」

口火を切ったのは、やはりリーシャ。
サラもカミュを注視している。
メルエだけが水を口に運んでいた。

「アンタ方は、ロマリア城の様子を見たか？」

「ああ、それがどうした？」

「・・・はぁ・・・ロマリア城下町は比較的落ち着いていた。　だが、本来なら考えられないはずだ。」

「・・・何故ですか・・・？」

カミュが話す一言一言にリーシャやサラが疑問を挟む。
二人とも頭が悪いわけではない。
だが、育ってきた環境で、自分の目で見たものをそのまま信じるという体質が身に付いているのだ。　そこに疑問を挟むという考えに辿り着く前に納得してしまう。

「・・・ある英雄と呼ばれる男の為に、各国が相当の支援を出した。
それは、魔王という最悪の根源を討伐するためのものだ。　半端な量ではない。　それこそ一国が傾く可能性がある程の量だろう。」

「「「・・・・・・・・」」」

『ある英雄と呼ばれた男』
それこそ、カミュの父であり、アリアハンが誇る英雄『オルテガ』その人であろう。
そんな誇るべき父の名前すら呼ばないカミュに、再び怒りが湧きあがるリーシャではあったが、昨晩のカミュとのやり取りで、そこを追求するのは後回しにすると決めたばかりだった。　故にその怒りを飲み込むことにした。

「支援の為に、国庫にある財産を全て吐き出す訳がない。　前にも言ったが、その物資や資金のほぼ全ては、国民に重税などを課して搾取したものだ。　そうすれば、当然国力が弱まる。　国の生産力

を支える国民を虐げるのだから、生産力が上がるわけがない。」

「で、でも、城下町は潤っていました。　とても搾取が続けられた様子はありませんでしたよ。」

カミュの言葉に挟まれたサラの疑問は当然のものである。
ロマリア城下町は、寂れてはいなかった。
国民は普通に生活し、店には商品が並び、買い物客などで賑わいも見せていた。

「だから、不思議なんだ。　本来あり得る形ではない。　ロマリアはアリアハンとの交流も多かったことから一番多く援助を行っていたはずだ。　最初は、あの王女が色々と奔走して国を立て直したと思っていた。　だが、この村の現状を見て、その考えは違うことが解った。」

「　だから、どういうことなんだ!!　」

言い回しが回りくどいカミュの言葉に、痺れを切らしたリーシャの大きな声が飛ぶ。
店にいた二人の客の視線を浴び、恥ずかしそうにするサラとは対照的に、そんなことを気にも留めないリーシャは真っ直ぐカミュを見つめる。

「・・・はぁ・・・少し声量を落としてくれ・・・」

「・・・リーシャさん・・・」

「・・・・リーシャ・・・・うるさい・・・・」

「うぅ・・・すまない。」

サラやメルエにまで、嫌な視線を浴びせられリーシャは声を落とした。
サラはリーシャを見た後、再びカミュへ先を促す。

「つまり、搾取はこの村からだけだったんだろう。」

「！！　しかし、この村にはそんな資金が出るようには見えません。」

カミュの言葉にサラが反論を返す。
寂れたとはいえ、本来の村の姿はアリアハンにあるレーベの村とそれほど大差があるわけではないだろう。　ならば、膨大な資金援助分の搾取などできるわけがない。

「もちろん資金の全てがこの村から出たとは言わない。　だが、ロマリアの武器屋に聞いたが、この村の特産は『鋼（はがね）』だそうだ。『鋼』は鉄を練成したもの。　つまり、この村は周囲の山が鉱山なのだろう。」

「・・・この山々は鉱山なのか・・・」

「ああ、鉱山から取れる『鉄鉱石』を他国などに売却することで国は資金を得る。　ロマリア国に属する村の鉱山だ。　国有化すれば、この村の男たちを安い賃金で雇い鉄鉱石を掘らせて生産量を上げればいい。」

「じゃあ、この村の人達は・・・」

「・・・使い捨てだ・・・・」

サラの呟くような疑問にカミュが身も蓋もない回答を返す。
その解答は絶望。
何の希望もないものであった。

リーシャとサラが顔を伏せたところに、マスターが料理を運んでくる。
肉と豆を炒めた物に、生野菜のサラダ。
塩で味付けしただけのようなスープ。
正直、ロマリア城下町で食べた食事に比べれば、貧相極まりない。

それでも初めての食事らしい食事にメルエは目を輝かせて顔を近づけている。
メルエにとって、カミュの話す内容には興味が湧かないらしい。
カミュやリーシャ達と行動ができれば、どうでもいいのかもしれない。

「・・・・メルエ、食べてもいいぞ。」

カミュの許可が下り、嬉しそうに頷いたメルエはフォークを鷲掴みにして皿に乗った豆を突き刺し始める。
メルエの必死な様子に沈みかけていた空気が再び和む。
メルエの加入により、このパーティーの気分が深く沈みこむことが少なくなっていることを感じ、リーシャはメルエの頭を撫でつける。

「・・・・？？？・・・・・」

「いいんだ。　気にせずゆっくり食べろよ。　誰もメルエの分を取り上げたりはしないから。」

不思議そうに見上げるメルエの頭をなで続けながら、リーシャは柔らかな微笑みを浮かべる。　サラはそんなリーシャの様子を複雑な思いで見てはいるが、内心はメルエに感謝していた。

「・・・国に献上する『鉄鉱石』の他にわずかに残った鉱石で、剣や鎧などを造って売ったり、山々にある薬草類で商売をしようとはしているだろうが、こんな辺鄙な村に人が来ることはまずない。　自然と金の収入はなくなり、自給自足の生活になって行ったんだろう。」

メルエのおかげで和んだ空気を犯すような毒をカミュは続けて吐き出した。
一息つけたリーシャとサラはカミュの言葉を再び聞く態勢を取る。

「ロマリア国は、この村を犠牲にすることで対外的な視線の的である城下町の優雅さを守ったことになる。　犠牲にされた村は朽ち果てないようにギリギリのところで保たれているんだろう。　村の住民が全ていなくなれば、鉱山を掘る人間すらもいなくなってしまうからな。」

「「・・・・・・・・」」

カミュが話す内容は、所詮全て推測の域を出るものではない。
だが、ロマリア城下町を見た後にこの村を見れば、カミュの言葉の信憑性は何倍にも膨れ上がる。　それは疑う余地がない程に・・・・・

「・・・・・・カミュ・・・・・・食べない・・・？」

「・・・ん・・・？」

暗く沈む雰囲気をただ一人理解できず、全員が食事に手をつけないことを不思議に思い、メルエがフォークを口にしながら声をかけてきた。

話が一段落ついたカミュはメルエに視線を向けると、メルエの皿の上の料理は半分以上無くなっていた。

「・・・・カミュ・・・・魔物以下・・・・？」

「　ぶっ！？　」

「　なに！？　い、いや俺も食べるぞ。　ちゃんと食べる。　」

「あははは っ、カミュもメルエには片なしだな！　あははは っ」

不意に発したメルエの言葉にサラは盛大に吹き出し、リーシャは大笑いする。

昨晩カミュがメルエに言ったことを、そのままメルエに言われ、カミュは慌てて否定をする。　その驚きようは、リーシャもサラも初めて見る姿であるが、そのメルエとのやり取りは不思議と違和感がない程自然なものであった。

「カミュ、話は解った。　それは今も続けられていると思うか？」

「・・・いや、おそらく今は鉱山の採掘は国から派遣された人間が行っているんだろう。　だからこそ、ここに男たちがいる。　この村は収入源を国に奪われ、自給自足でしか生き残っていけない村になっているんだろう。」

メルエの言葉で一斉に食事を始めた一行ではあったが、リーシャが再び話を戻したことでカミュがその手を止めて話し始めた。

「食事をし終わったら、武器屋に行く。　俺の剣を新調しなければいけないし、新しい防具があるかもしれない。　それに、流石にメルエの服を何とかしてやらなければいけないだろう。」

カミュの言うとおり、メルエの服は奴隷として運ばれた時のままで、＞布の服＜一枚なのである。　しかも、湯浴みもしていないことから、正直発している臭いも結構なものである。
カミュ達は気にはしていなかったが、やはり酒場のマスターや他の客から奇妙なものを見るような視線が注がれている。

「そ、そうですね・・・メルエの服は新調しましょう。　女の子がいつまでもこんな格好では可哀そうです。」

このカミュの意見には一も二もなく、サラは賛同の意を表す。
リーシャもまた頷くことで同意を示した。

食事を終え、カウンターのマスターの場所に行く間に、他の客の横を通った。
その客は、若い男女であり、食事はすでに終え談笑を楽しんでいるところであった。

「だからね、その村はエルフを怒らせた為に、村中の住民が眠らされたわけ！！」

「そんな村がどこかにあるだなんて信じられないよ。」

何気ない会話ではあるが、『エルフ』という単語が、一行の耳には残った。
『エルフ』とは人々の間で魔物と同様に恐れられている。
その魔力は魔物以上といわれ、寿命も人間よりも遥かに長い。
ただ、繁殖能力は魔物よりも更に低く、その人口は人間の数％にもならない。

「・・・エルフ・・・？」

サラはその男女の会話に引っかかりを感じるが、カミュがカウンターへさっさと向かってしまい、慌ててその後を追うことにした。

「　ご馳走さま。　いくらだ？　」

「ああ、ありがとうございました。　5ゴールドで結構です。」

カウンター越しにグラスを磨いていたマスターが、カミュの問いかけに答える。
その勘定にカミュは革袋からゴールドを取り出し、カウンターに置いた。

「マスター、この辺りにカンダタ一味は出没するのか？」

「！！　アンタ達、まさかロマリア王からカンダタ様の討伐を依頼されてここに来たのか！？」

カミュがゴールドを置きながら発した自然な問いかけに、マスターは過剰と言えるほどの反応を返してきた。

「いや・・・」

「そうだ。　カンダタ一味が盗みを働き続けることで、国王様をはじめ、民が困り果てているということだったからな。」

マスターの様子に疑問を感じ、否定の言葉を口にしようとしたカミュの横合いから、よせば良いものをリーシャが割って入って来た。

「くっ、ロマリア王の狗かよ！　食事なんか出すんじゃなかった。もう出て行ってくれ！　そしてここに二度と来るな!!」

「えっ!?　ちょっ、ちょっと待って下さい。」

「　うるさい!!　早く出ていけ！　」

突如変貌したマスターの様子に、サラが慌てて抗議をしようとするが、全く取り合う気もないようだ。　まさか、村の一般人に手を上げるわけにもいかず、されるがままに店の外へと追い出されてしまった。

「・・・・・・はぁ・・・・・・・」

「な、なんだ？　わ、私が悪いとでも言うのか！？」

店の戸が閉じられ、外に追い出されたカミュ達は未だに状況を掴みきれてはいなかった。
カミュの溜息と同時に送られた呆れたような視線を受けたリーシャは、開き直りに近い反応を返す。

「・・・あのな・・・俺はアンタにこの村の状況の予測を話したはずだ。　もし、俺が話したことがこの村での事実であれば、この村の住人がロマリア国に良い感情を持っていないことぐらいわかるだろ。」

「・・・・・」

「アンタは本当に脳味噌まで筋肉なのか？　少しは考えてくれ。今後交渉や、情報収集の場では口を開かないと約束してくれないか？　アンタが口を開いて碌なことになったためしがない。」

「・・・ぐっ・・・」

「・・・カミュ様・・・」

カミュの言うとおり、ここまでの旅でリーシャが相手の感情を逆立てたことは多い。
それは、サラや張本人であるリーシャも十二分に気が付いていることだった。
元々一人で旅をするつもりであったカミュにとって、サラやリーシャの発言や行動に怒りを感じることは多々あったのであろう。
それでも、サラやリーシャのようにその怒りを表に出し、相手にぶつけるようなことはしてこなかった。
しかし、今回は、村の状況の予想を話した直後の出来事だっただけに、カミュの怒りが臨界点を超えてしまったのかもしれない。

「・・・・・カミュ・・・・怒ってる・・・？」

しかし、リーシャを糾弾するカミュのマントの裾を掴んでいたメルエが、カミュの顔を見上げて問いかける姿に、再び場の雰囲気が変わっていく。

「・・・・怒っていない・・・・・」

「・・・・・・ホント・・・・・・？」

「・・・・怒るにも値しない・・・・・」

メルエの目を見ることもせず、カミュは答えると、そのまま武器屋へと足を向けた。
メルエはマントの裾から手を放し、リーシャの前に立つ。

「・・・・カミュ・・・・・怒ってない・・・・・だから・・・・・大丈夫・・・・・・」

「・・・メルエ・・・・」

何かを訴えるように、優しく語るメルエの姿に、リーシャもサラも言葉が出てこない。
もしかすると、メルエは『人』と『人』の争いを絶えず見てきていたのかもしれない。

「メルエ、私は大丈夫だ。　ありがとう。　さあ、カミュの所へ行こう。」

「・・・・・」

リーシャがメルエの頭に手を乗せ、微笑むと、今まで心配に歪んでいたメルエの表情が緩み、こくりと一つ頷くのだった。

「いらっしゃい。何がご入用で？」

リーシャ達が追いついた時、カミュは武器屋の門を入るとこことだった。

入った先は、ロマリアやアリアハンよりも小さな武器屋で、陳列されている商品も所々埃が被っている状態であった。

「この村の特産は『鋼』だと聞いてきたんだ。＞鋼の剣＜なんかは置いていないのか？」

「おっ、今時この村の特産を訪ねてくるなんて珍しいね。あるよ、＞鋼の剣＜は。それにアンタが着込んでいるのは＞革の鎧＜だね？これも特産になるんだが、＞鉄の鎧＜もある。よく見て行ってくれ。」

カミュの問いかけに武器屋の主人は気を良くしたのか、次々と商品を出してくる。

店の中に陳列されている埃の被った物ではなく、店の奥から出してきている辺りがとても良心的な人間に見える。

「ほぉ・・・これが＞鋼の剣＜か・・・・」

店主が出してきた一振りの剣を見たリーシャが感嘆のため息を漏らす。
鉄を型に流し込んだだけのリーシャの剣とは違い、何度も練成を重ねた剣は、その刀身の輝きも違う。　切れ味も相当なものなのであろう。

「オヤジ、その剣を一振りくれ。・・・・・・アンタもこの剣に変えておくか？」

「・・・・・・むぅ・・・・・・」

＞鋼の剣＜の輝きに目を奪われていたリーシャは、カミュの問いかけに即答することができなかった。　リーシャの持つ剣は、下級騎士に配給される大量生産の剣で、その剣にアリアハンの国章等はついてはいないが、それでも長年苦楽を共にし、手入れもしてきた大事な剣であり、愛着もある。　それをここで捨て去ることを決断できなかった。

「リーシャさん。　これから先は、良い武器に変えて行った方がい

いのではないですか？　魔物もアリアハンとは比べ物にならない程ですし、このロマリア大陸を出れば、更に強い魔物が出てくることが予想できます。」

「・・・・・むぅ・・・・・・」

カミュの言葉に続き、珍しくサラがリーシャに意見をすることに若干驚きながらも、リーシャは更に悩む。

「・・・・はぁ・・・・まあ、好きなだけ悩んでくれ。　オヤジ、この＞鉄の鎧＜だが、動きづらくはないか？　これじゃあ、重騎兵だぞ。」

「う～ん。　まあ、そうだねぇ。　重騎兵とまでは行かなくても、少し動きに制限されるかもしれないな・・・・」

カミュの言うとおり、＞鉄の鎧＜は首から腰まですっぽりと鉄で覆うような鎧で、お世辞にも俊敏に動けるような見かけではない。魔物と対峙するカミュ達にとって、行動を制限されることは決して良いことではない。

「オヤジ、この＞鉄の鎧＜を改良してはくれないか？　肩当てと、胸当てを残す形でいい。」

「う～ん。　それじゃあ、＞鉄の胸当て＜になっちまうぞ？　まあ出来なくもないが・・・」

カミュと武器屋の主人がああだこうだと防具について議論している間、リーシャは未だに悩み、サラは物珍しげにうろうろとするメルエを世話していた。

「　よし！！　私の剣もこれにしよう。　」

リーシャが意を決して顔を上げた時には、防具の買い物も終わり、商品を受け取ったカミュがカウンターに代金を置いているところであった。

「・・・はぁ・・・まだ悩んでいたのか？　もうアンタの分の剣も買っておいた。　防具も新調したから、着ている＞革の鎧＜とその剣を置いてくれ。　オヤジが引き取ってくれるらしい。」

「・・・あ、ああ・・・」

自分の一大決心を無碍に流されたにもかかわらず、サラやメルエの視線もあり、いそいそと装備品を着替えて行く。

「それと、オヤジ。　この娘に合うような服は何かないか？」

しおらしいリーシャを余所目に、メルエを前に出し主人に見立ててもらうため話を続けるカミュは、先程のリーシャとの衝突がなかったかのような平然とした対応であった。

「ん？　う～ん・・・うちは＞旅人の服＜は置いてないしな・・・・・あったとしても子ども用はないからな。」

「・・・そうか・・・」

メルエの服装を見て、一瞬顔をしかめた主人であったが、真剣に自分の店にあるもので代用できるものはないかと考えてくれている辺りは善人なのだろう。

「あっ！　うちでこの子に出せるのは、あれぐらいしかないな・・・・」

不意に何か思いついたように手を打った主人は、そのまま店の奥へ

と入って行った。
しばらくして出てきた主人の手には一つの帽子。
三角にとがった帽子の周囲につばが付いているものだった。

「この＞とんがり帽子＜ぐらいしかないな・・・お譲ちゃん、これをかぶってみるかい？」

「・・・・」

主人からの問いかけに、こくりと一つ頷いたメルエは＞とんがり帽子＜を手に取り頭に乗せてみる。　少し大きいが、ブカブカという訳ではなく、メルエの頭に綺麗に収まった。

「おお、それはカンダタ様がどこからか持ってきたもので、うちで売却したものだが、その小ささから買い手がいなくてね。　格安の３０ゴールドでいいよ。」

「・・・メルエ、気に入ったのか？」

頭に乗った＞とんがり帽子＜のつば部分を嬉しそうに持つメルエにカミュが問いかけると、今までで一番の笑顔をカミュに向けながらメルエは大きく頷いた。

「・・・そうか。　３０ゴールドだったな。　オヤジ、この辺で子供の服を売っているところはないか？」

「ありがとうよ。　う～ん、この村では基本的に子供服は親が自ら作る物だからな・・・売っている場所はないと思うが・・・」

自給時自足の村である。
当然、自分達や子供の服に至るまで、母親が布から作成したりするのであろう。
子供達は、親や兄弟のお下がり等を着ることも少なくないはずだ。
故に、商売として防具ではない洋服などは成り立たないのだろう。

「・・・そうか・・・悪かったな。」

武器屋の主人の謝礼を背中越しに聞きながら、一行は武器屋を後にする。
無言で武器屋を出るカミュの後ろを、初めて被った帽子を何度も被り直しながら、嬉しそうに続くメルエの姿をリーシャはどこか痛々しげに見守っていた。

「アンタ達だね。　カンダタ様の討伐の為にこの村に来ているってのは。　アンタ達を泊める宿はここにはないよ。　さあさ、出て行った。」

武器屋を後にし、宿屋に向かった一向に待っていたのは、酒場の主人から事の内容を聞いていたのであろう宿屋の女将からの冷たい拒絶であった。

一晩泊まりたいというカミュの言葉の後、一行の姿を改めて確認した女将の言葉は、交渉の余地もない程のもので、血の気の多いリーシャだけではなく、冷静沈着なカミュまでも一言も言葉を発する間もなく宿屋を追い出されることとなる。

「アンタ達も宿屋を追い出されたのか・・・」

宿屋を追い出された一行の前に一人の男が現れ、カミュ達の状況をあらかた予想できたと言わんばかりに話しかけてきた。
『も』という部分に、その男も宿が取れなかったことを暗に示している。

「・・・アンタは・・・・」

「ああ、私はカンダタが、なんでもどこかの塔をアジトにしているという噂を聞きつけてここまで追ってきた。　しかし、村の人間に情報を確認しようと思ったのだが、アンタ達と同じようにこの様だ。」

カミュの問いかけに、カンダタの情報と共に自分の境遇までも男は話し出した。
リーシャは、酒場での自分の失言の結果がこの状況を呼んでいることを改めて突き付けられ項垂れてしまう。

「・・・どこかの塔・・・？」

「ああ、この村の西に塔があるらしいのだが、詳細が解らなくてな。この村でその塔の内部に詳しい人間でもいないかと思ったのだが・・・」

男が話す情報は、カミュ達にとっては初耳のもので、その価値は計り知れない。
カミュは突如現れたこの男が何か企んでいるのではとも考えたが、心底困った表情を浮かべる男の内部を窺うことはできなかった。

「　あ、あの！　何故、この村の人達はこれほどまでに、盗賊であるカンダタを擁護するのですか？　」

疑惑の視線を向けるカミュの横から、今まで事の成り行きを見守っていたサラが口を開いた。　その内容は、顔を伏せているリーシャも思っていたことであった。

「　ん？　ああ、どうやら、カンダタはロマリア王都で盗みを働いた後に根城にしている塔に向かう前にこの村で金を落としていくらしい。」

「・・・金を落とす？」

男の答えにリーシャの顔が上がった。

「この村で宿を取り、酒場で酒や食事をたらふく頼み、そして武器屋で武器や防具を揃えて行く。　早い話が、カンダタ一味はこの村にとって金づるなんだよ。」

「・・・金づるですか・・・」

「すまない。　言葉が悪かったな。　カンダタ一味は、本来貴族や豪商などからしか盗みは行わない。　そして盗んだ金や物を使って、この村のような貧しい村々に落としていく。　この村のような自給自足しか生きて行く術がない村々にとっては、村という集落を維持

するためにもカンダタ一味はありがたい存在という訳さ。」

「・・・・義賊ということか・・・・」

続く男の言葉に、ようやくリーシャの口が開いた。
カンダタ一味が盗みを働く相手は、国民から金を巻き上げ私腹を肥やす貴族か、商売で大きな財産を築いた商人に限定されるということらしい。
私腹を肥やす貴族は論外として、大きな財産を築いた商人には、少なからず商いをする中で後ろ暗いことがあるだろう。　しかし、基本は自ら稼いで作った金である。　盗んでいいというものではない。
それでも、貧しい人間にとっては、疾しいことをして稼いだ金をばら撒いてくれるカンダタ一味は義賊と映るのだろう。

「そう言うことだな。　しかし、この村の人間は解っていない。
例え、カンダタの標的が貴族や豪商だとしても、盗賊は盗賊だ。
自分達の邪魔になったり、自分達の障害となれば、アイツらは容赦なくその人間たちを殺すだろう。」

「・・・・・・」

「現に、王都でも奴らが逃げる過程で、罪もない一般国民が犠牲になっている。　必要となれば、人も殺すし人も犯す。　それが盗賊だ。　だからこそ討伐できる時に討伐するべきなんだ。」

いつの間にか、語る男の口調は熱くなっていき、その拳を握り締めながら熱弁を振るっていた。
もしかすると、この男の身内はカンダタ一味の犠牲になった者なのかもしれない。

「しかし、根城も判明している中、何故ロマリア王国程の国が討伐隊を組織しないんだ？」

「・・・・カミュ様・・・」

そんな男とは対照的に、熱の全く感じられない口調でカミュが発した言葉は当然の疑問。
国の大罪人とも言えるカンダタを、何故国を挙げて捕縛しないのか。
その罪状を見る限り、アリアハンを揺るがせた盗賊『バコタ』の比ではないはずだ。

「討伐隊は何度か組織されたさ。　しかし、それも悉く(ことごと)あしらわれた。」

「・・・国が組織した討伐隊で敵わないのならば、それこそアンタ一人でどうにかなるレベルの話じゃないだろう・・・」

「・・・わかっている。　私は別に国から依頼を受けたわけじゃない。　これは私個人の問題だ・・・」

男は悔しそうに俯く。
やはり、この男が持つ感情は、カミュの後ろに立つサラと同じく『復讐』なのだろう。

「カンダタ自体を討伐するのが目的でもない。　その一味にいる人間が目的なんだ。　カンダタを追えば必然的にそいつにもぶつかるはずだからな。」

「「・・・・・」」

男の内情を推測することができたリーシャとサラはその口を固く閉ざしたままであった。
メルエだけが、その中身を図る術を持たず、カミュのマントの裾をつかんだまま、男を見詰めていた。

「・・・すまない。　つまらない話を聞かせてしまった。　この村に泊まる所がない以上、村の外に出て野宿するしかないな。　私はまだ日の光があるうちに宿場を探すよ。　アンタ達も早いところで見切りをつけて今日休む場所を探すんだな・・・」

しばらく俯いていた男の顔が上がり、一度太陽を見上げた後、その

まま村の出口へと歩いて行った。

「・・・・カミュ・・・・・すまなかった・・・・・・」

「　リーシャさん!?　」

男の背中を見えなくなるまで眺めていた後、カミュの方を向き直ったリーシャがおもむろに頭を下げる。　リーシャが頭を下げるという初めて見た光景にサラは驚きの声を上げた。

「・・・悪気はなかったとは言え、私の不用意な発言の結果がこのような事態を引き起こしたのは紛れもない事実だ。　その為にこのパーティーの全員が身体を休める場所を失い、メルエに至っては身体を清めることすらできなくなった。　本当にすまなかった。」

「・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・」

メルエですら、そんなリーシャの姿に見入っている。
リーシャにとって、酒場での発言に悪気がなかったことは本当のことだろう。
ただ、それでも村での宿泊を不可能にしてしまったことは事実なのだ。
その為に、旅慣れぬメルエやサラの疲労回復の手段を奪い、そしてカンダタ討伐への情報収集を困難にさせてしまったということがリ

ーシャの胸に圧し掛かってきていた。

「・・・・別にアンタが言わなくても、結局こうなった可能性が高い。　この村を訪れる理由が、現段階ではカンダタ一味ぐらいしかあり得ないんだからな。」

「・・・カミュ様・・・」

カミュの言葉通り、この村を通り抜ける理由は、あの男の情報を信用するとするならば、カンダタ一味の根城となっている西にある塔に向かうためというものしかあり得ないのだ。
必然的に、カミュ達がカンダタ一味でなければ、カンダタ討伐の為に動いているということになる。　大々的に組織されたものではなかったとしても、村の住民に悪感情を持たれることは間違いないだろう。

実際は、『カザーブ村』を抜けて辿りつける場所は他にもあるのだが、この時点でのカミュ達には知る由もない。

「この村にもう用はないな。　日も暮れてきた。　外に出て野営の準備をしよう。」

空を見上げながらのカミュの言葉に、リーシャやサラも頷き、村の出口へと歩き出す。
メルエは未だに、初めてカミュ達から買い与えられた『とんがり帽子』を嬉しそうに何度も被っては脱ぎ、被っては脱ぎを繰り返しながら歩いている。
その様子に、リーシャの罪悪感が更に増長していく。

帽子一つであれほどの喜びを表すのだ。
カミュはああ言うが、もし、リーシャの一言がなければ、宿屋の女将にでも頼めばメルエの服ぐらい作ってくれたかもしれない。　宿屋で湯浴みをさせ、新調した服を着せてやればどれ程喜んでくれたであろう。
リーシャは思わず目を瞑ってしまった。

「　おっと！！　」

その時、帽子に気をとられているメルエの方向から何かとぶつかった音が聞こえ、リーシャの目は開かれた。

そこには、大きく尻もちを付くメルエと、これまた大きな荷物を担いだ男の姿があった。
男の年齢は３０過ぎと言ったところか。
どことなく影を匂わす風貌で、呆然と尻もちを付くメルエを見つめ

ていた。

「メ、メル・・・」

「アン!!」

慌てて駆け寄ろうとするサラとリーシャの声を掻き消す程の声量で、男はメルエに向かってどこの誰かも分からない名前を叫んだ。
後ろの状況に気がついたカミュもメルエの下に歩み寄ってくる。

大きく名前を呼んだにもかかわらず呆然と立つ男。
そんな男を訳も分からないというように見るリーシャとサラ。
奇妙な空気が辺りに流れていた。

「・・・・・違う・・・・・メルエ・・・・・・」

そんな空気を破ったのは、いつものようなリーシャの声ではなく、未だ地面に尻を付けているメルエの少し憤慨したような声であった。

「・・・あ、あっ、すまない・・・・・大丈夫かい？　怪我はないか？」

メルエの反論に我に返った男は、メルエを立たせるために手を差し

伸べながら、その安否を確認する。　男の手を取り立ち上がったメルエは、即座にカミュのマントの中へと消えていく。　カミュももはや慣れたもので、メルエが立ち上がると少しマントを広げ誘導するようにメルエを受け入れた。

「本当にすまない。　少し考え事をしていて、周りを見ていなかった。」

「いや、こちらこそ注意を怠っていました。　そちらが謝ることではありません。　幸い怪我もないようですし、むしろそちらの荷物に損傷はありませんか？」

メルエをマントの中に導いたカミュは、対外的な仮面を被り男と相対した。
リーシャとサラもカミュの言っているように、幼いメルエの行動に注意を払うことを怠っていた非がこちらにあることを感じ、カミュと共に男へ軽く頭を下げた。

「ああ、こっちの荷物は全く問題はない。」

「そうですか。　お急ぎのところ申し訳ありませんでした。」

男の荷物についての回答を貰ったカミュは、再び軽い会釈を男に返す。

そんなカミュの姿に男は苦笑しながら荷物を持っていない方の手を何度か降って答えた。

「・・・・・・・アン・・・・・・・誰・・・・？」

そんな大人の対応をする一行とは別の所から声がした。
いつも間にかカミュのマントから顔を出したメルエが、先程男の口から出た名前を聞いてきたのだ。

「ん？　・・・・・・ああ・・・・・・・」

「こ、こら！　メルエ！」

答え難そうな男の姿に、リーシャはメルエに視線を送りその言動をたしなめる。
リーシャの声にメルエは再びカミュのマントの中へと逃げ込んでしまった。

「あ、いや、いいんですよ。　すまなかったね、名前を間違えてしまって。」

「・・・・・・・」

男の謝罪に再度顔を出したメルエは、その頭を数回横に振ることで、『気にしていない』ということを男に伝える。　男はメルエの返事に苦笑に近い微笑みを返した、

「・・・・・アンというのは、おじさんの娘の名前なんだ。　ちょうどメルエちゃんと同じぐらいの歳でね。　一瞬見間違えてしまってね。　娘と他人を見間違えてしまうなんて親として失格だね・・・・あはは・・・・・・」

「「「「・・・・・・・」」」」

男の乾いたような笑いを含んだ言葉に、一行はかける言葉が見つからない。

『アン』という名前を口にし、メルエを見詰めていた男の表情はどこか心を失っている様子であった。　自分の娘と見間違ったとしても、何か事情がなければそんな表情は浮かべないはずだ。

しかし、その事情までも聞きだすような資格はカミュ達にはない。

必然的に言葉が出ないようになる。

「・・・・もしかして、アンタ達かい？　カンダタ一味の討伐に来たって言うのは・・・？」

黙り込む一行をしばらく眺めていた男が、今思いついたとばかりにカミュ達の素性を聞いてきた。　その言葉にリーシャは再びその口

を閉ざしてしまうのだった。

「・・・そうです・・・」

「・・・カミュ様・・・」

否定するだろうと思っていたサラは、カミュが男の問いかけを肯定したことに驚き、声を漏らした。　リーシャも顔を上げカミュを見詰める。

「そうか、じゃあ、宿は取れなかっただろう。　この村じゃ、カンダタ一味は救いの神だからな。」

「「「・・・・・・・・・」」」

「そうだな・・・なんなら、うちに来るかい？　小さな家で、宿屋のように設備は整っていないが、野宿をするよりは幾分かはマシなはずだ。」

「いえ、そこまでして頂く訳には・・・」

男の申し出に、若干の疑心の視線を送りながらカミュは答える。

リーシャやサラはどうだかは分からないが、カミュにとって『人』の好意と言う物程信じられないものはないのだ。
常に、『人』の裏側を見てきたカミュだからこそ、『人』の好意には何か企みが隠されているのではないかと疑ってしまう。
それが、純粋な好意であろうが、カミュには判断する経験がないのだ。

「その娘とぶつかったのも何かの縁だろう。　私は、この村の住人と違って、カンダタを崇拝している訳じゃないからな。　まあ、無料でと言うのが嫌なら、うちの商品を買っていってくれ。」

「・・・・商品・・・・？」

「ああ、うちは宿屋の北側で道具屋をやっているんだ。　品揃えはそんなに豊富ではないが、旅をしているのなら必要な物もあるだろう？」

サラが挟んだ言葉にも律儀に答える男に、リーシャとサラは好感を持った。
未だに男に疑惑の目を向けるカミュのマントが下から引かれる。

「・・・・・・カミュ・・・・・・・・行く・・・・・・？」

下からカミュを見上げるメルエは、純粋にカミュが行くと言えばい

く、行かないと言えば行かないという様子である。
もはや、リーシャとサラの二人の心は男の好意に甘える方向に傾きかけている。
カミュにしても、メルエやサラをこの村で暖かなベッドで休ませた方が良いことくらい理解はしていた。
未だ、下から受けるメルエの視線に頷く他、カミュには選択肢がなかった。

「・・・すみません・・・では、お言葉に甘えさせて頂きます。」

「ああ、そうか。　じゃあ、ついてきてくれ。」

そう言って、荷物を持ち直した男は、一向に背を向け歩いて行く。
一つ大きなため息をついたカミュは、未だにマントの裾を掴むメルエを促して男の後を追った。　カミュが自分達の前を過ぎて行くのを確認した後、リーシャとサラも男の背中を見ながら後に続く。
皆が先を行く男の背中を見ながら歩いて行く中、ただ一人、メルエだけは皆とは違う方向を見ていた。

カザーブの村？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これも2話に分けました。

カザーブの村での出来事も、書いていくうちにあれもこれもと詰め込みすぎなのか、かなりの量になってしまいそうです。

う～ん。

カザーブの村？（前書き）

連続投稿です。

連休を利用して、紙に書いていたものをガーっと打ち込みました。

カザーブの村？

日も落ち始め、辺りが薄暗くなってきた頃、一行は男の家である道具屋に辿り着いた。
男の家は大きな家と言う訳ではないが、この村の中では宿屋に次ぐ大きさの建物で、それこそロマリアにある道具屋よりも大きな家であった。

「ただいま。　さぁ、何もない家ではあるが入ってくれ。」

家のドアを開け、男はカミュ達を中へと導く。
男の帰りを待つ人間がいるのか、男は自分の帰宅を告げる言葉も発していた。

「ああ、おかえり。　ん？　その方達は？」

中に入ると、初老の男が出迎えに出てきた。
年齢から考えて、道具屋の男の父親であろう。
その顔には年輪を表す皺が濃く刻まれ、実年齢が予測し辛い。

「ああ、今夜の宿に困っていてね。　少し縁があって今日はうちに泊まっていってもらおうと思ってさ。」

「すみません。　勝手なこととは重々承知していますが、宿が取れなく困っていたことは事実でして、ご好意に甘えさせて頂くことになりました。」

男の紹介にカミュが前に出て、いつもの仮面をかぶった口調で挨拶をする。
カミュの言葉に後ろでリーシャとサラも軽く会釈を行った。

「そうでしたか、それは大へ・・・・・・・・アン！！」

父親の方は、そんなカミュの対応に笑顔で対応しようとするが、カミュが前に出たことによりマントに隠れていたメルエが現れると、メルエの姿を見た途端、先程の男と同じ様に同じ名前を叫んだ。

「・・・・・・・違う・・・・・・・・・」

またもや自分の名前を間違えられたことに憤慨したメルエは、頬を膨らまし『アン』と呼びかけた老人を睨みつける。
サラは、メルエの物怖じしない言動と態度に焦るが、老人の表情を見て、その心配がないことを知り、安堵した。

「そ、そうか。　すまなかったの。　いやいや、まぁ、懐かしい顔を思い出してしまい、思わず名を呼んでしもうた。」

泣き笑いのような表情で老人はメルエへと謝罪をし、道具屋の男と顔を見合わせると、苦笑を浮かべた。
そんな二人の表情に、サラは何か事情があることを感付いたが、それは聞いていいものなのかを悩む。

「さあ、何もないところですが、一晩ゆっくりとして行ってください。」

「ありがとうございます。　お二人でお住まいなのですか？」

サラが自分の中の疑問を抑えておくことができずに口へと出すことにした。
カミュは明らかに呆れたような顔をしていたが、リーシャもまたサラと同じような疑問を感じていたのであろう。

「いえ、家内がおりますが、生憎身体を患っておりまして、床に伏しています。」

「あっ、申し訳ございませんでした。」

「いえいえ、お気になさらずに。　ただ、男二人ですので、食事など至らぬ点も多いかとは思いますが、ゆっくり疲れをとってください。」

自分がした質問の回答が予期せぬものであったため、反射的にサラは頭を下げるが、老人は軽く笑いながら手を振っていた。

「食事なら、私が作ろう。」

「「・・・・はあ・・・・」」

自分の出番だとばかりに声を上げたリーシャに、道具屋親子は先程とは打って変わって気のない返事を返す。
しかし、リーシャにしても自分に対しての周囲の反応にはもう慣れていた。

「何を言いたいのかは予測できるが、自分で言うのもなんだが、私の料理の腕は確かだぞ。　疑うのなら、そこにいる二人に聞いてみろ。」

リーシャが指差した場所には、カミュとサラが立っている。
親子はおもむろに視線を向けるが、実は親子だけでなく、カミュは下からメルエの視線も感じていた。
『お前はリーシャの調理する猪の肉をたらふく食べただろ』とカミュは言いたかったが、何も言わずにただ道具屋親子に向かって一つ頷いた。

「だ、大丈夫です。　リーシャさんはお料理がとても上手ですので。」

「そ、そうですか・・・あまり材料などもありませんが、でしたらお願致します。」

「承った。　では、台所を見せてもらえるか？」

満足そうに頷いたリーシャは、男と共に台所に消えて行く。
残されたカミュ達は、老人と相対することとなる。

「湯を沸かしましょう。　まずは身体を清められた方がよろしいでしょうな。」

老人は、三人の身体を見てそう提案した。
実際、カミュやメルエは気にしていなかったが、ロマリアを出てすでに野営で数日過ごしている。　その間、川等もなかったことから身体を清めること等もできなかった。
サラは自分の体から発せられる汗の臭いなどを結構気にしていたので、老人の申し出はかなり嬉しかったはずだ。

「何から何まで、申し訳ない。」

「気になさるな。　このような村では、本来は旅人あっての村なのだ。　旅人が困っていれば手を差し伸べる。　それが昔は当たり前だったのだがな・・・・」

カミュの感謝の意に、老人は少し遠い目をしながら村のあり方への疑問を口にした。
確かに、このような村では、いかに『鉄鉱石』が採掘できたとしてもそれを国家相手に売却できる術がない。　必然的にそれを元に作成した物を旅人などに買ってもらい生計を成すことが生業となるのだ。

「・・・・・・・・・アン・・・・は・・・・・・？」

老人とカミュの会話の中、この家に入ってから自分の名前しか口にしてなかったメルエが不意に話しだした。
自分と同じぐらいの娘がいると聞いていた為に、その所在を知りたかったのであろう。
しかし、それは事情を察しているカミュやサラにとってはタブーと言っていい程の内容であった。

「　メ、メルエ！！　」

堪らずサラが、カミュのマントの中にいるサラを叱責するが、何故サラが慌てているのかが解らないメルエは小首を傾げている。
メルエにとって、カミュやリーシャの叱責は恐怖を感じるようだが、サラの叱責には全く動じる様子がない。　メルエにしてみれば、カミュやリーシャは父や母、もしくは兄や姉と同じ感覚なのだろうが、サラに関しては、良くて自分と同等の友人という位置か悪ければ自分より下の人間として見ているのかもしれない。

「・・・・ふむ・・・・・アンはもうこの世にはおりません。
もう3年になりますかな・・・・・村の外で母親と共に魔物に襲われておりました。」

「「・・・・・・・」」

メルエの問いかけに目を瞑っていた老人は、自分の中の膿を吐き出すようにゆっくりと話し出す。　その内容にカミュとサラは言葉を見つけることができなかった。
予想していたとは言え、他人にそのことを話す老人の心情を考えると、かける言葉が見つからなかったのだ。

「・・・・・・・・山で・・・・・・・・？」

「ん？　そうじゃな。　山中で二人の遺体は見つかった。」

だが、メルエにはまだ他人の心情を推し量る術が備わっていない。
故に、老人の表情からその心情を量ることができず、自分が持った疑問をそのまま吐き出していたのだ。

「・・・魔物に・・・心中お察しいたします。」

魔物に殺されたと聞いたサラの表情はあからさまに歪み、その胸の内に『憎悪』の火がともり始める。　未来のある少女が魔物に襲われ命を落とす。　サラにはそれを魔物の食事の為と納得することはどうしてもできなかった。

「・・・・・・・・山に・・・・・・・・・女の子・・・・・・・いた・・・・・・」

「ん？」

「メ、メルエ！」

「・・・・・・会ったら・・・・・・名前・・・聞く・・・・・・」

メルエが老人に向かい、何かを話そうとしている。
常に単語だけを並べるように話すメルエが、一生懸命に何かを話そ

うとしている姿に、サラはその内容を察した。

「・・・・・・アン・・・・・・だったら・・・・・・連れてくる・・・・・・」

「・・・・メルエ・・・・・・」

サラは全てを理解した。
メルエは昨晩のことを言っているのだ。
サラには見えなかったが、メルエには見えていた少女。

メルエにはその少女が魂だけの存在だということが解っていない。
メルエには、はっきりと見えていたのであろう。
しかも、あの時のことを思い出すと、メルエは確かに会話をしていたようにも見えた。

故に、老人がいかに魔物に襲われ命を落としたと言っても、メルエにはそれが飲み込めないのであろう。『遺体が見つかった』とは言っていたが、魔物に襲われたのならば、骨だけなっていた可能性が高いはずなのだが。

「・・・・メルエ・・・・それはできないの・・・・・・もう出来ないのよ・・・・」

老人に向かって一生懸命自分にできることをすると伝えるメルエの

姿に、サラは思わず涙を流していた。　すでにカミュのマントから身体の全てを出しているメルエの身体を後ろから抱き締めたサラは、そのまましくしくと泣き始めた。
そんなサラの姿がメルエには理解できない。
『何故泣くのか？』
『何故出来ないのか？』

「メルエちゃん、ありがとう。　もし、メルエちゃんが会った女の子が、アンであったら、『私達は心配いらないから、ゆっくり休みなさい』と伝えてくれるかな？」

「・・・・・・」

メルエの言葉を子供の戯言とせず、老人はメルエの言葉を有り難く受け取っていた。
そして、メルエに仕事を託す。
メルエは、しばらく老人の目を見た後にこくりと一つ頷いた。

「・・・ありがとう・・・さぁ、湯を沸かそう。　メルエちゃんも手伝ってくれるかの？」

少し潤んでいた目を一擦りした老人は、次の行動に移るため、年齢に見合わない大きな声を上げる。　手伝いを依頼されたメルエは、また一つ頷いた後、未だに自分に縋り付きながら涙を流すサラを引き摺るように連れて老人の後について行った。

一人残されたカミュは、何かを考えるように目を瞑って、大きな溜息を吐く。
それは何を意味する溜息なのか。
それは、近くにあった椅子に座り天を仰いでいるカミュにしか分からない。

湯が沸いた後、リーシャが調理中だったため、サラがメルエを連れて浴場に向かっていった。　その際に、メルエが少し怯えた表情でカミュに助けを求めていたが、カミュはそれをあえて無視することにした。　その時のメルエの絶望にも似た表情を思い出すと、流石のカミュも口元が緩んでしまう。

「・・・そうか・・・あいつ等はまだ山中を彷徨っているのか・・・・・」

父親からメルエの話した内容を聞いた道具屋の男は、テーブルを上に置く手を握り締めて、唸るような声を絞り出していた。

「・・・・・・・」

「これ、トルド！　お客人の前でそのような顔をするな。　まだ、アン達だと決まったわけではなかろう。」

『トルド』というのが、この道具屋の名前なのであろう。
父親に窘められ、ようやくカミュの存在を思い出したように顔を上げたトルドは『すまない』と一言言葉を放つが、再び俯いてしまった。

「・・・このようなことを聞いていいのか迷いますが、何故奥様とお子様は村の外に出たのですか？」

村の外は魔物が蔓延る危険地帯だということは知っていたはずだ。
それでも、妻と子の女二人で外に出たには訳があるのだろう。
そう考えていたカミュは、会話を始める為に口を開いた。
他人の内情に自分から干渉することの少ないカミュには珍しいことだった。

「・・・わからない・・・」

「・・・・・」

しかし、トルドの答えは予想外のものであった。
トルドの父親も同じ様に顔を下げたことから、父親も知らないのであろう。

「・・・普段は絶対に村の外には出なかった。　出る理由もなかった。　・・・何故かあの日に限って出て行ったんだ。」

「・・・そうですか・・・」

「いや、出て行ったんじゃない。　アイツは近くに買い物に出る時や水汲みに行く時にすら、あそこに書置きをしていく奴だった。」

トルドが指差す場所には、壁にかかった黒板があり、石灰を固めたようなもので文字などを書けるようになっていた。

「それが、書置きもなかった。　俺は連れ出されたんじゃないかと思っているんだ。」

「・・・誰にですか・・・？」

カミュは静かに話の続きを促す。

父親の方の顔は、話が進むにつれて表情を一段と歪めて行った。

「あの時はちょうどこの村にカンダタ一味が来ていた。　そして、妻たちが居なくなった日にカンダタ一味もまたこの村を出て行った。」

「トルド！！」

トルドが真相を語ろうと口を開いた拍子に、父親の大きな声が響いた。

「あの娘達は、魔物に襲われたのだ。　山中で魔物に襲われて命を落としたのだ。　お前も見ただろう。　あの娘達の骨を・・・・」

「ああ、傍に矢が数本落ちていたがな・・・・」

「・・・・矢・・・・・？」

父親はトルドに言い聞かすというよりは、自分がそう思い込もうとしているような節があった。　それは、返したトルドの言葉に込められた一つの単語が示していた。

「ああ、弓矢の矢だ。　妻たちの遺品と一緒に矢が数本落ちていた。」

「・・・それは・・・」

「この辺りの魔物で弓矢を使う魔物はいない。　必然的に人間のものだろう。　妻と娘の死に関係はないかもしれない。　だが、俺は・・・・・」

「・・・トルド・・・それこそ、この方達には関係のないことだ。
もう、よしなさい。」

トルドの独白はどこまでも続くような感じで進められていたが、父親がそれを止めた。
父親の言うとおり、個人的な話で、カミュ達には関係がない話だ。

「・・・わかっている。　だけど、納得いかないんだ。　本当に俺の妻と娘は魔物に襲われたのか？　アンタ、カンダタの討伐に向かうんだろ？　だったら頼む。　その真実を聞いてきてくれないか？
頼む！」

「　トルド！！　」

ここにきて、カミュはやっと、何故トルドが自分達を家に招いたかがはっきりと理解できた。　最初からこれを言うつもりだったのだろう。
カミュ達がカンダタ討伐に向かっていることは、トルドとの最初の会話で認めていた。
つまり、トルドはカミュ一行の実力が確かならば、必ずカンダタ一味との接触があると踏んでいたのだ。

「・・・・・・・わかりました・・・・・・・」

「　お客人!!　」

カミュの了承の言葉は、トルド親子には意外なものだったのだろう。
父親はカミュをたしなめるように言葉を発し、トルドに至っては完全に言葉を失っていた。

「・・・・真実が解るかどうかはお約束できませんが、それに向けて行動することはお約束します。」

「　そ、それで構わない。　ありがとう。　頼む。　」

トルドも真実を知るためにこの家を飛び出していきたいと何度も考えたのであろう。
ただ、年老いた両親、しかも母親の方は嫁と孫を同時に失ったショ

ックで寝たきりになっていて父親もその母の看病でつきっきりの状態で置いて行くわけにはいかなかった。
だからこそ、自分でその真実を知るための行動が出来ない悔しさを噛みしめながらもカミュに託すしかなかったのだ。

「よし、ある程度仕込みはできた。」

そんな三人の中に流れる空気を全く無視した声が居間に響いた。
巻くってあった袖を元に戻しながら台所から戻ったリーシャである。
久しぶりに調理をしたことに喜びを感じているのか、充実した良い笑顔を作りながらの登場。　カミュはそんなリーシャの顔をしばらく見ていたが、いつものように溜息を吐いた。

「ん？　何かあったのか？」

「いや、なんでもない。　料理の仕込みが終わったのなら、メルエ達が出てきたらアンタも湯浴みをしてきたらどうだ？」

カミュの表情に自分が場違いであるような感覚を持ったリーシャがカミュへと問いかけるが、返ってきたのは溜息交じりの回答であった。

「いや、私は食事が終った後に入らせてもらおう。　サラとメルエが一緒に入っているのか？　ならば、カミュがその後に入ればいい

だろう。　カミュが上がった後に食事にしよう。」

溜息混じりながらも、女性である自分に湯浴みを先に勧めてくれたカミュの心遣いに幾分感謝しながら、リーシャは席についた。
カミュもそれ以上リーシャに勧めることはせず、自分が次に入ることを了承する。

その後、身体から湯気を上げて浴場から出てきたメルエの姿にリーシャとカミュは少なからず驚いた。　黒に近い茶だと思っていたその髪の毛は、明るく綺麗な茶であり、少し日に焼けたように褐色がかったものであった肌は、透き通るような白になっていたのだ。
髪の毛は、奴隷として買われた頃から洗うことができずに埃と油にまみれていたのであろう。　肌も、垢と埃や泥等で色を変えられていたのかもしれない。

「驚きましたか？　私もメルエの身体や髪を洗って行くうちに驚いてしまいました。」

サラも言葉通りにメルエの変貌に驚きながら世話をしていたのであろう。

「その服はどうしたんだ？」

メルエの変貌はそれだけではなかった。

リーシャが問いかけた通り、湯上りのメルエはカミュに買ってもらった＞とんがり帽子＜こそ、その手に持ってはいるが、服装は今まで来ていた＞布の服＜ではなく、緑を基調とした可愛らしい服に変わっていたのである。

「ああ、お下がりで申し訳ないんだが、＞布の服＜一枚ではあまりにも可哀そうだと思ってね。　アンの着ていた物なんだが、サイズもピッタリのようだし貰ってもらえないか？」

「・・・いいのですか・・・？」

「家の中で眠らせているよりも、メルエちゃんのような女の子に着てもらえれば服も喜ぶだろう。　それに思い出になる物はたくさんある。」

カミュの問いかけに、哀しみを帯びた笑みを浮かべながら、トルドは優しく答える。

実はトルドも、アンの服を着たメルエを見た時に不覚にも涙が出そうになっていたのだ。

正直、アンとメルエはそこまで似ていたとは言えない。

だが、なぜかその面影を想わせるのだ。

「メルエ、お礼を・・・」

「・・・・??・・・・・」

サラがメルエの背中を押し、トルドへ感謝の意を示すことを促すが、当のメルエは何をすればいいのか分からずにサラの顔を見て小首を傾げている。

「メルエ、おいで。」

そんなメルエにリーシャが呼びかけ、メルエがとてとてと自分の下へ駆け寄ってくるの見ながらリーシャは顔を綻ばせる。

「メルエ、人から何かをしてもらった時には、感謝の言葉を伝えるんだ。　メルエはトルドさんから娘さんの服を頂いた。　メルエが今まで着ていた＞布の服＜より着心地がいいだろ?」

「・・・・・」

メルエを傍に寄せ、諭すように一から教えるリーシャにメルエは真

面目に頷いている。
サラはその様子に再び母子の姿を思い浮かべることとなった。　それは、サラだけではなく、トルドもトルドの父もアンとその母を思い起こしていた。

「感謝の言葉は何か分かっているな？　カミュや私、それにサラもメルエに対して言ったことがあるだろ？」

「・・・・・・あり・・・がと・・・う・・・・？」

「うん。　そうだな。　じゃあ、今度はメルエがその言葉をトルドさん達に言う番だ。」

リーシャの言葉にこくりと頷き、確認の意をこめてメルエはカミュの方を見た。
カミュも自分に視線を向けたメルエに対して頷き返す。
カミュの頷きを見たメルエはトルドとその父の前まで移動していく。

「・・・・・・ありが・・・とう・・・・・・」

「・・・ぐすっ・・・い、いや、良く似合っていて・・・よかった。」

「・・・そうじゃな。　よう似合っておる。」

今までの一行のやり取りにトルドの涙腺は壊れていた。
トルドの父も同じである。
そんな二人とメルエを見て、なぜかサラまでも涙を流していた。

自分の言葉でトルドを泣かせてしまったらしいことに驚いたメルエは、リーシャとカミュの方を慌てて振り向くが、そこにあったリーシャの優しい笑顔を確認し、安堵する。

その後、寝ていたはずのトルドの母も、トルドに抱きかかえられながら一行の前に姿を現し食事を共にすることとなり、精神的な面から体力を失くしていた母親の方は、意識等はしっかりとしていて、メルエの姿を見て涙を流しながら微笑み、その姿にまたトルド親子は涙するという何とも言えない優しい雰囲気が、数年ぶりにトルド家を満たしていった。

食事も終え、後は眠るだけとなり、ベッドが二つしかないということから一つのベッドをサラとメルエで使い、もう一つをリーシャが使うことになった。　カミュはというと、居間の暖炉のそばに毛布を敷き、その上で寝るという、野宿とあまり変わらないものとなる。
そして夜が更けて行った。

家の中を闇と静寂が支配する真夜中。
家の者が誰も起きていないことを証明するように、家の中では物音一つしない。

そんな中、サラは何故か目が覚めた。
目を開いても、その先は真っ暗な世界しか広がっていない。
しばらくして、目も闇に慣れ、周囲の物の輪郭が確認できるようになって初めて、サラは自分の覚醒の理由が分かった。

メルエがいない。

いざ寝るとなった時、てっきりメルエはリーシャと一緒に寝ることを希望するだろうとサラは思っていた。　しかし、リーシャが割り当てたものはサラとメルエが一つのベッド眠るものだった。　考えれば、身体が大きなリーシャとよりも、サラとメルエの二人の方が窮屈な思いをすることなく眠ることができることは解る。

しかし、いかに自分と会話をするようになったとはいえ、母親のように慕うリーシャと共に居たがるのではと思われていたメルエは、素直に頷き、サラと共にベッドに入ったのだ。
そのメルエの体温の温かさを感じながら眠りに落ちて行ったサラであったが、その温もりが失われ目が覚めたのだろう。

もしかすると、やはり夜中に恋しくなり、リーシャのベッドに移ったのではないかとも思い、リーシャのベッドまで移動して、掛っている毛布を少し上げてみるが、中にはリーシャしかいない。

「うん？　どうした、サラ？」

自分に近づく気配がサラのものであることが分かっていたリーシャは、サラのしたいようにさせてはいたが、その奇妙な行動に声を掛けざるを得なくなる。

「あ、い、いえ、なんでもないです。」

「なんだ？　まさか、その年にもなって一人で眠れないとでも言うつもりか？」

「　そ、そんなことありません！　」

リーシャの言葉は、完全にサラを子供扱いしているものであり、サラは思わず声を上げる。
正直、サラはアリアハンにいる頃、一人で眠るのが怖くなったことは何度もある。
神父様と一緒に除霊に向かった後や神父様から勉強のためにと除霊の話を聞いた夜だ。
しかし、そんな夜も自分のベッドで毛布に包まり耐え、誰かのベッドにもぐりこむことなどありはしなかった。

「・・・サラ・・・声が大きい。　メルエが起きてしまうだろう。
なんでもないのなら、もう寝ろ。　明日も朝の礼拝が済んだら鍛

練だぞ。　寝ておかなければもたない。」

「・・・は、はい・・・すみません・・・少し用を足してきます。」

「・・・・早く寝ろよ・・・・・」

サラの言葉を聞き、再びリーシャは毛布をかけ直し眠ってしまった。
その様子を確認し、サラは部屋の戸を開け外に出る。
この部屋にもいないとなると、メルエが外に行ったのは間違いない。
カミュのところかとも思ったが、居間の暖炉の傍で、座りながら眠るカミュの姿を見てメルエがいないことはすぐに分かった。
ならば、やはりこの家にもいないだろう。
つまりは外。

『まさか、アンを探しに山の中に入ったのではないか？』
そんな最悪の考えがサラの脳裏に浮かぶ。

音をたてないように家の戸をあけ、外に出た。
村の中も人工的な明かりは皆無で完全に闇に支配されていたが、満月に近い月明かりが明るく村を照らしているおかげで、足元に注意を払う必要はなかった。

村の中央の通りを歩き、右手に泉を見ながら村の出口の方向にサラは歩を進める。
左手に昼間に寄った武器屋があるが、当然その明りは消えており、戸も閉まっている。

そのまま真っ直ぐ歩くと、左手に教会が見えてきた。
その教会は、アリアハンやロマリアの教会とは違い、墓地も併設されているようで、教会の右手に柵で覆われた墓が見える。

「えっ！？」

自分の中で湧きおこる、夜の墓地への恐怖を鎮めるため、できるだけ墓地の方向を見ないようにしていたサラであったが、確認のためとちらりと見た視線の端に月夜に明るく輝く茶色の髪をした小さな人影を見つける。

「メ、メルエ！？」

恐怖心を抑え込み、もう一度墓地を見ると、やはりその人影はメルエに間違いない。
一つの墓の前に佇んでいるように見える。
こちらに背を向けているので、その表情までは確認できないが、サラは焦燥感にかられて教会に急いだ。

教会に辿り着き、息を切らせながらその大きな扉に手をかけると、何の抵抗もなく扉が開く。　基本教会は、夜中だろうが早朝だろう

が、救いを求める者にその扉を閉ざすことはない。　不用心と言えば不用心ではあるが、神父などが済む住居にはしっかりと鍵がかかっている。

教会の内部に入ると、礼拝堂が広がり、前方にはルビス像が天に向かって祈りをささげている。　ルビス像の後ろや、天井にはステンドグラスが貼られており、月夜に照らされ綺麗な色彩を放っている。

その美しさに、アリアハン時代を思い出し、祈りを捧げようかと思ったサラであるが、まずはメルエを探さなければと墓地へと通じる道を探すため周辺を見渡した。

ルビス像へと続く赤絨毯の道から外れた右側に、小さな一つのドアを見つける。

完全に閉まっていないドアの隙間から月光が漏れていることから、そのドアの先が外であることを示している。

ドアノブに掛ける自分の手が小刻みに震えていることを意図的に無視し、サラはドアをゆっくりと引いて行く。

ステンドグラスを通してのものではない、直接的な月光にサラの目は一瞬眩んだ。

何とか慣れてきた目を見開き、メルエを探すと、一つのお墓の前で男性と思われる人間とメルエが話しているのが見える。

「　メルエ！　こんな夜中に外に出ては駄目ですよ。　」

人と話していることに幾分か安堵したサラは、メルエへの叱責も兼ねた呼びかけをしながら近づいて行く。

メルエはサラの声に気が付き、ゆっくりと近づいて来るサラを不思

議そうに見つめていた。

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・」

「そうですよ。　メルエが一人で出て行ってしまうから、探しにきたのです。　何をしていた・・・・・・！！」

メルエに近づいたサラは、発していた言葉を途中で飲み込んでしまう。
メルエの足元に男性が転がっているのだ。

「メ、メルエ・・・・何をしたのですか・・・？」

「・・・・・・・・寝てる・・・・・・・・」

「えっ！？」

男性が倒れている＝死人
そう考えてしまったサラが、震える声でメルエに問いかけると、返ってきた答えは簡潔明瞭な物だった。
驚いて確認すると、確かに地面に転がっている男は、ゆっくりと身体を揺らしながら小さないびきをかいていた。

「・・・・よかった・・・・・・」

ほうっと息を吐き安堵を表すサラの視線が、自然とメルエが対峙していた男の足元に移る。
メルエの姿を確認していたことで忘れてはいたが、確かにメルエは男性と話をしていた。

恐る恐る、その足元から視線を上げて行く。
先程とは違い、今や手だけではなく、サラの身体全体が小刻みに震えていた。

「・・・あ・・・・・・あ・・・・・・あ・・あ・・・あ・・・・・・あ・・・・・・」

「やあ、今晩は・・・君はこの娘のお姉さんなのかな？　私はこの村では偉大な武道家として知られている者だ。」

サラが見上げた男性。
非常識にも、今サラに向かって自己紹介をしている男性は、サラにもしっかりと見えている。
先日の女の子のように、メルエだけが見えている訳ではない。
ただ、その姿は、はっきりとは見えているがその身体の向こうにある景色まではっきりと見えるのだ。　つまり、その男の身体は透けている・・・・・

「・・・あわわ・・・・・あわ・・あ・・・・・」

「・・・・・・・・・アワ・・・・・？」

完全に尻を地面に付けてしまったサラは、うわ言のように何か言葉を発してはいるが、それが何なのか判別できない。　メルエもまた、サラの言葉の意味を図りかねて、小首をかしげていた。

「・・・・ふむ・・・・そうだの・・・これも何かの縁。　お主たちに良いことを教えてやろう。」

サラのパニックに全く関心を示さず、その武道家を名乗る男の魂は話を進めて行く。
すでに、サラの目は白目をむき始めており、発している言葉通りに口端に泡が出来始めている。　普通の人間ならば、それが危険な状態なのが解るのだが、そこにはメルエしかいない。　サラの状況より、武道家の魂の話し出す内容の方がメルエの興味を引いていた。

「私は、素手で熊を倒したと噂になってはおるが、実は＞鉄の爪＜を装備していたのだ。　アハハハッ、非力なものでも装備品で変わっていく。　忘れるな・・・」

「・・・・・・」

サラがいよいよ危なくなっている横で、メルエが武道家に向かってこくりと頷く。
そのメルエの頷きに満足そうな笑顔を浮かべた武道家はその姿をゆっくりと景色と同化させていき、サラは、残る黒目の端でその姿を捉え、そしてそのまま意識を失った。

「おい！　おい！」

サラは自分にかかる声と、揺さぶられる身体に意識を覚醒させていく。
ゆっくりと目を開けると、自分の顔を覗き込むカミュの顔と、その横から心配そうに顔を歪めたメルエの顔が映った。

「・・・・・・・・起きた・・・・・・・・？」

サラの目が開かれたことに安堵したように言葉を漏らしたメルエの表情から歪みが消えて行く。　カミュはそんなメルエの頭を撫でながら、再びサラに向き直った。

「大丈夫か？」

「え、えっ？？　あ、は、はい。　あれっ、私、何でこんな所に・・・・」

サラは、意識は取り戻したものの記憶が混乱していた。
いや、無意識にサラの頭脳が感じた恐怖を忘れようとしていたのかもしれない。
しかし、彼女の仲間達はそんなことを許す程甘い人間たちではなかった。

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・あわ・・・・・あわ・・・・・・言ってた・・・・・」

「・・・はぁ・・・幽霊を見て失神する僧侶とはな・・・・・」

「なっ、なっ・・・・・」

メルエの冷たい実況中継。

止めを刺すようなカミュの一言。
サラの記憶は、否応なしに復元されていく。

「い、いやぁぁぁぁぁ！！」

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・うるさい・・・・・・・・」

「・・・・まだ夜更けだ・・・・・騒ぐな・・・」

記憶の覚醒による叫びも、この二人は許してくれない。
もはや残された選択肢は泣くことだけであった。

「・・・・・・・・また・・・・・・・・泣いた・・・・・・・・・・」

メルエは本当に自分のことが嫌いなのか？
そう感じずにはいられないほどにメルエの言葉は冷たいものだった。

こつん

「　！！　」

しかし、そんなメルエの容赦のない攻撃は意外な人物によって止められた。
拳を軽くメルエの頭に落としたカミュは、突然頭を叩かれたことへの驚きに見開くメルエの目を見据えて苦言を呈す。

「・・・コイツはメルエが夜中に出て行ったことを心配してここまで来たんだ。　今回悪いのはメルエ、お前だ。　本来なら、メルエがコイツに謝らなければいけないんだ。」

「・・・・・・・」

メルエは、カミュの目が真剣なのを理解し、自分が叱責を受けていることを理解する。
幼い頃から、罵倒や暴力を受けたことは何度もあるが、これ程真剣に叱られたことのないメルエの目に自然と涙が溢れていった。

「後で、しっかりとコイツに謝るんだ。」

「・・・・・・・」

溢れる涙を抑えることをせず、唇を噛みしめながらこくりと頷いたメルエの頭をカミュが優しく撫で、そんなカミュの仕草に、必死に抑えていたメルエの涙腺が崩壊する。

「さあ、メルエ。　あの脳筋戦士も呼んできてくれ。」

ぼろぼろと涙を溢すメルエは、それでもカミュの頼みに大きく頷き、道具屋への道を駆けて行った。
残ったのはカミュとサラ。
自分の失態の全てを知られたことへの恥ずかしさもあり、サラは口を開くことが出来ない。

「・・・カミュ様・・・このことは・・・リーシャ様には・・・・」

やっと開いた口から出た言葉は『せめてリーシャだけには隠してほしい』という体裁を繕うための自己防衛だった。
そんなサラの最後の望みも、カミュによって断ち切らることとなる。

「・・・お前、立てるのか？」

「　えっ！？　」

サラはカミュの言葉を理解するのに時間を要した。
立つ？
そう言えば、腰から下に力が入らない。

「・・・幽霊を見て・・・腰を抜かし、失神する僧侶か・・・・」

「うぅぅ・・・・どうしてメルエは、よりによってカミュ様をお呼びしたのですか！？」

それはサラの切実な叫びであった。

最初からリーシャを呼んで来てくれれば、カミュに知られないようにすることはできたかもしれないのに。　メルエが今日の出来事を詳細に伝えることができるとは思えないし、必要がなければ話すこともしないだろう。

それなのに、よりにもよって真っ先に伝えたのがカミュなのである。

居間の暖炉の傍という、部屋に戻る途中にいたとはいえ、何もカミュを呼ばなくてもいいではないか・・・・というサラの叫びであった。

その叫びは、次のカミュの言葉で絶叫に変わる。

「・・・それにな・・運ぶだけなら俺だけでもできるが・・・・言い難いんだが・・アンタ・・・・失禁している・・・・・」

「　えっ、えっ！？　えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！　」

カミュから告げられた最後通告。

それは、サラを奈落の底へと落とすとんでもない爆弾であった。

腰を抜かし、失神。

おまけに失禁までとは、もはや、余すところなく隅から隅まで網羅

だ。

「うぅぅぅ・・・・・ぐすぅ・・・・・うぇぇぇぇぇん・・・・・」

「お、おい・・・」

サラに残されたものは、もう泣くことしかなかった。
17歳にもなるレディと言っていい程の女性が、自分よりも年下の男性に失禁したことの事実を告げられる。
こんな屈辱があるわけがない。

逃げ出したくても、下半身に力が入らない。
記憶を消去したくても、覚醒した記憶が消え去ることはない。

サラの悲痛な泣き声は、現場に着き、事の顛末を知ったリーシャが、カミュを追い出した後まで、この寂れた村の墓地に響いていた。

カザーブの村？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

また、ご感想など頂ければ嬉しいです。

ロマリア大陸？（前書き）

ＰＶが１０万アクセスに手が届きそうになってます・・・・
すごい・・・ありがとうございます！！

土日に更新しようと思っていたのですが、書きあがってしまったので、更新致します。

リーシャは、カミュの剣筋を受けながら、嫉妬にも近い感情を抱く自分に苛立っていた。
正直、あと何日自分はこの男を相手に優勢を維持できるのだろうか。
カミュの剣を弾き、自分の剣を突き入れる。
もはや、リーシャにもカミュに手心を加える余裕などない。

カミュの突き入れてくる剣を払い、その剣を横薙ぎにカミュの腹部に斬り入れる。
払われた剣を強引に戻し、カミュはリーシャの剣を受け止めた。

しばらくの力比べが続くが、無理やりな態勢であるカミュの分が悪い。
剣を滑らせ、リーシャとの距離を取ろうとするが、それを許す程リーシャは甘くはなかった。　剣を滑らし後方に引こうとするカミュと同じスピードでそれについて行く。
リーシャの剣を離しきれないカミュは、その剣を横に薙ぎ、リーシャの剣を弾いた。
その行動を予測していたリーシャは弾かれた反動を利用し、がら空きになったカミュの左胸に蹴りを入れる。　カミュにはその蹴りに対応する余裕はなく、リーシャの足はカミュの左胸に吸い込まれていく。

「・・・ゲホッ！！」

「・・・ふぅ・・・残念だったな。」

胸を強く打たれ、呼吸が止まったカミュの首筋に剣を突き付けたリーシャが口を開く。
以前と違い、リーシャの呼吸も若干乱れている。
それが、カミュの成長を如実に示していた。

「・・・カミュ、何か悩んでいるのか？　今日のお前の剣はどことなく覇気がない。」

リーシャはカミュの成長は認めたものの、今のカミュの剣に迷いがあるように見えていた。
しかも、カミュに語りかけるリーシャの表情を見ていると、その理由も理解している様子である。　要は確認の儀式なのであろう。

「・・・・・・」

呼吸はすでに回復している筈のカミュからは、答えが返ってこない。
それがまた、リーシャの疑問を肯定していることになっている。

「・・・メルエのことか・・・？」

「・・・・・」

続くリーシャの言葉に、胸を押えながら膝を着いていたカミュは立ち上がり、リーシャの脇を抜けようと歩き出す。

「・・・メルエをここに置いて行くべきかを悩んでいるんだろ？」

「　！！　」

リーシャにはカミュの考えていることが本当に解っていたようだった。
推測の域ではなく、もはやその口調は断定である。
しかし、カミュは足を止めたものの振り向くことはしなかった。

「別に、お前が連れて行くと決めたことを覆していると責めるつもりはない。　お前が見て、メルエが幸せに暮らせると思うのなら、そうすればいい。」

「・・・・・」

リーシャの声は、その言葉通りにカミュを責めるようなものではなかった。
むしろ、本当にそう思っているのだろう。
数日前に出会ったばかりのメルエを可愛がってはいるが、その処遇に関しては、カミュに一任していることもまた事実なのである。

「・・・ここで暮らすとしたら、あの親子はメルエを本当に可愛がってくれるだろう。　それは間違いない・・・・・ただ、これだけは言っておく。　ここで可愛がられるメルエは、『アン』という娘の代わりだ。　あの親子は否定するだろうが、メルエは常に『アン』という少女を重ねられて見られるだろう。」

「・・・・・・」

「・・・お前が悩んでいるのは、そこなのだろう？　『アン』という少女の代わりに愛されることがメルエにとって幸せなことなのか・・・それをよく考えて答えを出せ。」

リーシャが話すことは、カミュが考えていることと全く同じ内容であった。
おそらく、あの道具屋にメルエを置いて行き、トルド一家と暮らせば、メルエは家族全員から愛を注がれる毎日を送ることができるだろう。

だが、それは本当にメルエとして愛されているのか・・・
彼らが失った『アン』という娘・孫の代わりとして愛されるのではないか・・・
それが本当にメルエにとって幸せなことなのか・・・

カミュが昨日の夜、溜息を吐きながら考えていたことはそこであったのだ。

それをリーシャは、その場にいなかったにもかかわらず、正確に見抜いていた。
このコンビは、どこか深い所で似通っているのかもしれない。

「・・・・アンタは・・・・・そこまで人の心情が理解できるのに・・・・・・」

「ん？　なんだ？」

「・・・・いや、なんでもない・・・・」

カミュの考えを全て理解していたリーシャに振り向いたカミュは、どこか悔しそうに顔を歪めながら何かを呟くが、それを最後まで話すことはなかった。
途中で話を止めてしまったカミュを不思議そうに見ているリーシャの視線に耐えられなくなったかのように、カミュは話題を変える。

「・・・今日はあの僧侶の鍛練はないのか？」

「ん？　いや、サラもメルエもまだ寝ている。　明け方まで起きていたんだ。　今日ぐらいゆっくりさせてやるさ。」

メルエもサラも、日付が変わっている頃まで起きていたため、早朝

鍛練に参加していなかった。　いや、サラに至ってはほぼショックで寝込んでいるような状態と言っても過言ではない。

「・・・まあ、あんなことがあれば、起きてくることが出来ないのも無理はないな・・・」

「　カミュ！！　そのことは、もう言うな！　サラも昨日のことは忘れたいと思っているはずだ。　いいか？　今後そのことに触れることは禁止するからな！　」

カミュが言っているのは、昨晩のサラの失態だ。
リーシャとしても、もし自分がそんな姿を晒すことになれば、旅を続けられないだろう。
いや、その前に手に持つ剣で自分の首を刎ねるかもしれない。

「・・・わかった。　しかし、メルエはどうするつもりだ？　流石にメルエの口までは責任は持てない。」

「・・・それなら、昨晩メルエと二人で話した。　幸いなことに、サラの失禁のことは夜であったためにメルエは気がつかなかったらしい。」

メルエは、サラが気を失っていることに気が付くとすぐにカミュを呼びに道具屋へ駆けた。

そして、サラを心配し、しゃがみ込むカミュの後ろから覗いていたため、サラの失態は気を失ったことしか知らないのだ。

サラの腰が抜けたことも、ましてや最大の恥辱の部分も、メルエが去ってからカミュが話したことで、メルエに気がつかれていない。メルエが解るとすれば、サラが幽霊と呼ばれるものが怖いということだけである。

「・・・なるほどな・・・」

「ああ、カミュ、これにはお前の配慮に感謝する他ない。」

「・・・そこまで考えていた訳じゃない・・・」

カミュはそう答えるが、リーシャはそうではないと思っていた。サラの失態に気がついた段階で、メルエを必要以上にサラに近付けることをせず、すぐに注意を自分に向けた後、その場を立ち去らせたこと。

それが、女性であるサラに対する配慮でなくて何だというのだ。

「ふふっ、まあ、そう言うことにしておこうか。」

天邪鬼のように否定するカミュを微笑ましく見るリーシャが気に入らず、カミュは鋭い視線を向けるが、表情のあるカミュに恐怖を感

じなくなったリーシャはどこ吹く風である。

「しかし、メルエはあんな夜中に、ただ幽霊に会うために外に出たのか？」

「・・・さあな・・・」

リーシャに答えるカミュは言葉とは裏腹に何かを解っている様子であった。

メルエが夜中に外に出る理由など、カミュには一つしか思い浮かばない。

それは、おそらく外れてはいないだろう。

「・・・そうか・・・まあ、メルエのことはお前に任せたぞ。メルエを置いていくにしろ、連れて行くにしろ、今のお前なら真剣に考えた結果だろう・・・ならば、私達はそれに反対を唱えることはない。」

リーシャは、メルエがパーティーに加入してからカミュは変わったと感じていたが、それはリーシャに関しても同じなのである。

リーシャの今の言葉は、決してアリアハン大陸では出なかったものだろう。

『今のカミュであれば、真剣にメルエの幸せを考えるはず』

リーシャが考えていることは、ある意味、カミュの人柄を信じているということになる。
何度も衝突を繰り返し、価値観や見聞の違いをまざまざと見せつけられているのにもかかわらず、リーシャはカミュのその人間性を信用し始めているのだ。
リーシャ本人がそう思っていなくても・・・・

「・・・・・・」

そんなリーシャに、カミュはパッと見では分からないぐらいの悔しそうな表情を再び浮かべ、無言で踵を返し道具屋へと向かうのであった。

サラとメルエが起床した際、サラは鍛練に遅れたことを必死にリーシャに謝るが、リーシャは優しく微笑みながらそれを許した。

何度も頭を下げていたサラが、リーシャの後ろから現れたカミュの姿を発見した時の表情は、後にメルエにからかわれるものとなる。

それはまさしく絶望。
この世であり得ないものを見たような、自分の生を諦めたような、
そんな表情。
目を見開き、顔は青ざめ、歯が噛み合わない。
昨晩の失態を見られたということは、サラにとって恥ずかしいとい
うレベルではなく、もはや死を望むレベルのものなのかもしれない。

「・・・随分遅い起床だな。　大事なお祈りとやらはしなくても良
かったのか・・・？」

「　えっ！？　」

カミュの言葉通り、サラは起きてから日課の礼拝をしに教会に向か
ってはいなかった。
それは、ショックにより忘れていたのではなく、潜在意識の中で故
意に教会に向かいたくないという表れであったのかもしれない。

教会に足を踏み入れれば、否応にも昨晩のことが思い返される。
ルビス像に祈りを捧げている最中にそのことを思い出せば、サラは
きっと、こんな試練を自分に与え給うた聖霊ルビスに愚痴を言って
しまうだろう。
それでは、聖霊ルビスの下にいる僧侶として失格である。

「今日はいいだろう。　サラ、今日は部屋でお祈りをしろ。」

「あっ、は、はい！」

容赦のないカミュの指摘に、顔をしかめたリーシャがサラへと妥協案を出し、思わぬ助け船に青ざめていたサラの顔に生気が戻る。
しかし、それもサラの後方から忍び寄る小さな影に即座に奪われた。

「・・・・あわ・・・・・あわ・・・・・」

「メ、メルエ！　うぅぅぅ・・・・」

サラをからかうように、昨日意識を失う前のサラの言動を真似するメルエが服も寝巻きのままでサラの後方から現れたのだ。
そんなメルエからの揶揄に、再び暗い影を背負ったサラは顔を俯かせる。
他人の機微を感じることを学んでいないメルエにはそれが楽しいものとして理解されたのだろう。

ゴツン！

再び昨夜のサラの口調を真似しようとしたメルエの頭に衝撃が走る。
昨晩、カミュに落とされた拳骨の衝撃とは比べ物にならない程の痛みがメルエの頭部を襲った。

「メルエ、サラが嫌がっているだろう！　人の嫌がることをすることはいけないことだ。」

メルエが見た方向にあったのは、出会ってから初めて自分に向けられたリーシャの怒り顔であった。
メルエには何故、自分が叩かれたのかが理解できていない。
自分は面白いと思ったことをしていただけなのだ。
訳が分からず、助けを求めようとカミュの方を見るが、そこにいたカミュにメルエを受け入れる様子がないことに、メルエの胸中に不安が広がって行く。

「メルエ、今メルエがサラにしたことは、サラにとってとても嫌なことなんだ。　メルエを心配して、夜中に探しに来てくれたサラに対して、メルエは嫌なことをするのか？　感謝の気持ちも表わさずに、メルエは大事な仲間を傷つけるのか？」

常に自分を優しく包んでくれていたリーシャが豹変したことに、しばらく驚いていたメルエであったが、尚も続くリーシャの叱責に、昨晩と同じように無意識に目に涙が溜まって行く。　今のリーシャには、昨日のカミュのように優しく諭すような雰囲気はない。

「　あっ、メルエ！　」

リーシャが怖くなってしまったメルエは、その場から逃げることを

選択した。
とてとてと走り、味方だと信じるカミュの所に辿り着き、そのマントの中に潜り込もうとする。　しかし、それは唯一の味方と信じる者によって阻まれた。

「　！！　」

「・・・・・・・」

カミュによってマントに隠れることを阻害されたメルエは、その双眸を大きく見開き、溜まっていた涙を床に溢す。
味方だと信じていた相手に裏切られたメルエの目には新たな涙が溢れ出し、もはや止めることが出来ない。　そんなメルエと視線を合わせるようにしゃがみ込んだカミュは、ゆっくりとメルエに語りかける。

「・・・メルエ・・・昨日、俺とした約束は果たしたのか？」

「　！！　・・・・・・・・・・・・」

静かなカミュの声に顔を上げたメルエは、しばらく黙りこんでいたが、観念したようにゆっくりと首を横に振った。
そのメルエの様子に小さな溜息を吐いたカミュは、メルエの肩に手を乗せる。

カミュの手が自分の両肩に乗ったことに身体を跳ねさせたメルエであったが、それ以上の暴力が自分に及ばないことを理解し、再びカミュの顔をその涙の溜まった瞳で見詰めた。

「・・・・・・謝り方が解らないのか・・・・・・？」

「・・・・・・・・」

カミュの言葉に、メルエは黙ったまま、頷きもせずに佇んでいる。
再び小さな溜息を吐き、カミュは再度口を開いた。

「・・・・・感謝の言葉は昨日言っただろう・・・・・？」

「・・・・・・・・」

今度はメルエの首が縦に動く。
それを確認し、カミュは言葉を続ける。

「まずは、夜中にも関わらず、メルエの身を心配して探すために歩き回ってくれたあの僧侶に感謝の言葉を。　自分のことをあれ程に心配してくれる人間がいることは、メルエにとってとても幸せなことなんだ。」

「・・・・カミュ様・・・・・」

「・・・・カミュ・・・・・」

「・・・・・・・」

カミュの言葉にサラとリーシャの二人も驚きを隠しきれない。
あのカミュがサラの擁護をしているのだ。
メルエは、涙が流れ続ける瞳を拭うこともせず、カミュの目を見つめ、小さく頷いた。

「・・・・謝り方は、あの戦士に聞け。」

しかし、再び突き放され、先程自分に拳骨を落とした相手に突き出されそうになると、メルエの目に怯えの感情が現れる。

「・・・大丈夫だ・・・あの戦士は、脳味噌は足りないが、訳もなくメルエに暴力を振るう人間じゃない。　メルエが悪いことをしない限りは心配する必要はないさ。」

「・・・・・・」

「・・・カミュ・・・・覚悟はいいのか・・・？」

真剣に見つめ合うメルエとカミュの二人を見ていたリーシャが、カミュの一言が引っ掛かり、怒りを露わにする。

そんないつものやり取りに近い状況になって初めて、サラの表情にも余裕が生まれてきた。

リーシャの怒りを余所に、カミュにこくりと頷いたメルエは、恐る恐るといった印象を持つ足取りで、再びリーシャの下へと戻ってきた。

「・・・・・」

何かを期待するような、メルエの涙の溜まっている瞳に、リーシャはカミュへの怒りを内に戻し、メルエと会話をする方を選んだ。

「・・・・メルエは謝り方が分からないのか・・・・？」

「・・・・・」

リーシャの言葉に、今度は素直にメルエが頷く。

その動作に未だに流れるメルエの涙が床に落ちて行った。

「私達が謝罪をしているところを見ていただろう・・・？」

「・・・・・すま・・・・ない・・・・・？」

「　ぶっ！！　」

リーシャに返したメルエの言葉にサラは盛大に吹き出してしまう。
確かに自分達の行動を見ていたとしたら、カミュにしろリーシャにしろ、その言葉しか言っていないはずだ。　これは、リーシャの問いかけが悪い。

しかし、自分が一生懸命に考えて発した答えを笑われたことに、怒りと悲しみを宿したメルエは、吹き出したサラに鋭い視線を送る。

「・・・ご、ごめんなさい・・・」

メルエの視線の強さに、サラは条件反射的に頭を下げて謝ってしまった。

「・・・ふぅ・・・メルエ、今、サラが言った言葉が謝罪の言葉だ。
人は相手に謝る時には『ごめんなさい』と謝る。　それが万国共通の言葉だ。　サラは今、メルエに笑ったことを謝った。　今度はメルエの番だぞ。」

「・・・・・・・」

どこか納得しきっていない様子のメルエではあったが、サラが自分に謝罪をしたことは理解できた。　カミュの言うとおり、昨晩サラが自分を心配してくれていたことも理解している。　故に、メルエはリーシャに小さく頷くのだった。

「・・・・・・・」

「メ、メルエ・・？」

いざ、サラの前に移動したメルエであったが、何の抵抗があるのかなかなか口を開かない。
もしかすると、サラには不本意だろうが、メルエにとってサラはライバルに近い存在なのかもしれない。

「・・・・・・・あり・・・が・・・とう・・・・・・・」

「　は、はい！！　」

ゆっくりと、本当にゆっくりと口を動かすメルエの言葉を聞き逃さ

ないようにサラは耳を澄ませる。

「・・・・・・・・・ごめん・・・・・な・・・さ・・・・・・・・い・・・・・」

「は、はい！　もう大丈夫ですよ。」

メルエの内情が分からないサラは、一生懸命自分に向かって感謝と謝罪の意を表そうとするメルエがとても愛おしい者に映る。
謝罪を言い終わったメルエを、サラはその胸に掻き抱いた。
モゴモゴとサラの腕の中で動いていたメルエではあったが、先程までの緊張が抜けて行くのを感じ、再び涙を流し始める。
結局、サラの胸でメルエは声を殺して泣くことになった。

「・・・少し話をしたいのだが・・・」

朝食を取り終えたところで、不意にトルドが口を開いた。
食卓には昨日の夕食時と同じようにトルドの両親も席に着き、総勢

7人での賑やかな食事であったため、重苦しく口を開くトルドに全員の視線が集まる。

「・・・アンタ達は、そんな小さな子供まで討伐のメンバーとして扱うのか・・・？」

全員の注目に耐えられなかったのか、トルドは下手に溜めを作らず、考えていたことをそのまま吐き出した。
それは、今朝カミュとリーシャが語っていたことである。

「そ、それは・・・」

しかし、黙って鋭い目を向けるカミュとリーシャの代わりに答えたのはサラ。
それは、いかにも曖昧な、確固たる決意を持ってトルドの意見に対抗することができないものであった。

「アンタ達はいいかもしれない。　お二人が差しているのは、この村で売っている＞鋼の剣＜だろ？　その剣は、そんじょそこいらの人間に振るえる程のものじゃない。　しっかりとした腕を持っているんだろう。　お譲さんだって、法衣を纏っているんだからどこかの僧侶さんなんだろ？　身を守る魔法も使えるはずだ。　だが、メルエちゃんは幼すぎる。」

トルドは、自分の問いかけに答えたサラでも、目を瞑って腕を組んでいるリーシャでもなく、後ろから鋭い視線を向けるカミュだけを見つめて語っていた。
対するカミュも視線をトルドから外すことなく、その疑問を真っ向から受けていた。

「し、しかし・・・」

「・・・サラ・・・」

トルドの言葉に反論しようと口を開くサラを、リーシャが静かに抑える。
リーシャの声に振り向いたサラに、リーシャは尚も首を横に振ることでサラの言葉を許さなかった。

「カンダタは義賊を謳ってはいるが、所詮盗賊だ。そんな場所にこんな小さな少女を連れて行くことを俺は認められない。」

「・・・だったらなんだと言うんだ・・・？」

やっと開いたカミュの口から発せられた言葉は、この家に入ってきてから初めて余所行きの仮面を取り払ったものであり、その豹変ぶりに、トルド一家は驚くことになる。
久しく見ていなかったカミュの能面のような表情のない顔。

「・・・メルエちゃんをうちで預かりたい・・・」

「「・・・・・・・」」

「そ、そんな・・・・」

驚きはしたが、カミュから目を離さず紡いだトルドの言葉に、カミュとリーシャは何も語ることなく、サラは言葉を失っていた。

「・・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・・」

その時、一行の話を今まで黙って聞いていた張本人が、満を持して口を開いた。
一行の視線がその発言下に集まると、そこには、食事をしている最中には横に置いてあった＞とんがり帽子＜をしっかりと被り、鋭くトルドを睨むメルエの姿があった。

「　し、しかし、メルエちゃん！　君はまだまだ小さい。」

「・・・・・・・いや・・・・・・・メルエも行く・・・・・・」

メルエの言葉に、トルドは反論するが、メルエはその言葉を聞く耳を持たず、椅子から降りてカミュの下へと駆けて行く。
カミュの下へと辿り着いたメルエは、カミュのマントの裾を掴み、その顔を見上げて自己主張をした。

「・・・メルエ・・・決めるのはお前だ。　ここにいればメルエは今までのような不自由をすることなく暮らしていけるはずだ。」

「・・・・・・・・」

カミュの言葉に、メルエは全力で首を横に振る。
完全なる拒絶。
リーシャはこの時、メルエの決意を感じた。
おそらくこの先、どんな人間が現れても、メルエはカミュの傍を離れることはないかもしれない。　例え産みの親が彼女を再び引き取りたいと言ってもメルエの首は縦に動かないのでないかとリーシャは思った。

「・・・わかった・・・申し出はありがたいが、そう言う訳だ。
メルエはこのまま俺たちと共に行く。」

「し、しかし!!」

「・・・アンタの心配も十分に理解できるが、これは俺達の問題だ。
もし、このまま強引にメルエをここで引き取ったとしても、このままでは、決してメルエはアンタ達には懐かないだろう。　むしろ、俺たちから引き剥がした人間として恨みの対象となるかもしれない。
ここまでお世話になった人間にそんな想いを抱かせたくないというのも俺の気持ちだ。　わかってほしい。」

尚も言い募ろうとするトルドをカミュは静かに拒絶する。
相手の気持ちを配慮しながらのものではあるが、逆に反論することが出来ない程の拒絶である。　それはトルドにも届いたのか、そのまま場に押し黙る沈黙が流れた。

しばらく黙ってテーブルを見つめていたトルドではあったが、おもむろに立ち上がると、後ろにある小物入れから小さな箱を取り出して戻ってきた。

「・・・ならば・・・これを持って行ってくれ・・・」

カミュの傍まで来たトルドは、しゃがみ込んで、その箱をメルエの手の上に乗せる。
メルエは、不思議そうにその箱とトルドとカミュを何度も見比べていた。

「・・・・これは・・・・？」

「開けて見てくれ。」

トルドの答えを聞いたカミュはメルエへ箱を開けることを促す。
こくりと一つ頷いたメルエは、その手にある小さな箱の蓋を開いて行く。

そこには、小さな棒しかなかった。
先の尖った短い棒には持ちやすいように布が巻いてあり、その尖った先端は金属にはあり得ない色をしていた。

「・・・？？？・・・」

開けた箱の中身が全く分からないメルエが、箱を開いたまま小首を傾げる。
それはカミュも同じで、箱の中身に皆目見当もつかない。
リーシャやサラも同様であった。

「・・・それは、＞毒針＜だよ。」

「ど、どくばり！！」

問いただすように向けられた四人分の瞳に怯むことなく、トルドは箱の中身の正体を明かす。　その内容にサラは驚きを返すが、カミュやリーシャは納得し、メルエに至ってはその品の本質が解らず反

対側に小首を傾げていた。

「昔は、この道具屋で売っているような、ありふれたものだったのだが、今はおそらくその一本しか残ってない。　それで急所を刺せば、人間は勿論、魔物でさえ一撃で仕留められる。」

「・・・それ程のものなのか・・・」

「これなら、いくら非力なメルエちゃんでも、魔物と戦うことはできるだろう？」

トルドの話す内容に、そこまでの品と理解できたリーシャが素直に感嘆を表す。
メルエは箱から毒針を取り出し、しげしげと眺めていた。

「・・・しかし、ここまで短い武器では、相当魔物に近づかなければ意味がないだろうな・・・」

カミュの言うとおり、魔物の急所をこの短い＞毒針＜で刺すためには、ゼロ距離まで近づかなければいけない。　それこそ危険という物だ。

「当たり前だ！　それは、いざという時の為の武器だ。　メルエち

ゃんに魔物を近付けないのが、アンタ達の役目だろう。　それでも魔物に捕まったりした場合の最後の手段としてくれと言っているんだ！」

トルドはカミュの物言いに、憤慨したように怒鳴りつける。
もはやカミュは、トルドにとって、メルエと暮らすことができる未来を奪った悪者であったのだ。

「なるほどな・・・よかったな、メルエ。」

「・・・・・」

トルドの説明を理解したリーシャは、メルエを見下ろして微笑みを浮かべる。
その使用目的を未だに理解しきれていないメルエだったが、リーシャの笑顔から、それが良いものだと理解し、一つ頷いた。

「・・・・・あ・・・りが・・・とう・・・・・」

「　！！　うぅぅ・・・ぐすっ・・・いいんだよ・・・気をつけるんだよ・・・」

昨日学習した感謝の言葉を自発的に発したメルエに、トルドの涙腺

は再び制御不能に陥る。
サラもその様子を静かな微笑みを浮かべていた。

「カミュ殿・・・・少しよろしいか・・・？」

そんな居間での空気を少し離れた所で見ていたカミュは、突然掛けられた声に振り向くと、トルドの父親が暗い顔をして立っていた。

「・・・ああ・・・」

「・・・では、こちらに・・・」

未だに居間で響く笑い声から少し離れた場所まで移動させられたカミュは、トルドの父親の真意を測りかねていた。
深刻そうに俯くその顔から、あまり楽しい話題ではないことが窺える。

「・・・実は、迷ったのですが、カミュ殿にはお話しておこうと思いまして・・・」

「・・・なんでしょう・・・」

再び仮面を被り直したようなカミュの言葉に、父親は話を始める。

「あの子の言葉に気を悪くしないでください。」

「・・・いや、全く気にしてはいませんが・・・・」

「そうですか・・・よかった。　あの子は必死なのです。　ロマリア国から収入源を奪われたこの村を立て直すことに・・・・」

謝罪から始まった父親の話は、カミュには考えつかないものであり、その証拠に、カミュは父親が何を言いたいのか分からずに、次第に表情を失くしていった。

「・・・あの子には、私達にない商才がありました。　私達の代では細々とした商いをしていましたが、あの子の代になってから、商売は大きくなり、＞薬草＜や＞毒消し草＜の販売だけではなく、この地方独特の＞満月草＜などの販売も始め、アクセサリー等の販売、そしてこの地方で古くから伝わっていたあの＞毒針＜の独占販売など・・・・」

「・・・・・・」

「それが、ロマリア国の鉱山国有化で全てが変わりました。　国内の人間の覇気が日々失われ、それに伴い人々の来訪も皆無になって行く。　この村に残されたのは滅びゆくだけとなりました。」

父親の話は、昨日カミュが仲間に語った予測が当たっていることを物語っていた。
それと同時に、寂れた村の道具屋に似つかわしくない立派な住居の理由も明らかになる。

「そのような時も、行動に移したのはあの子でした。」

「・・・・カンダタか・・・・」

父親の話の流れで、行きつく先が予測でき始めたカミュが話に入る。
カミュの割り込みに、気を悪くすることなく、父親は大きく頷いた。

「その通りです。　あの子はカンダタ一味を村に入れることを提案しました。　当初村の住民は盗賊を村の内部に入れることに猛反対しましたが、カンダタが通りかかる時に、あの子が必要な物資を一味に販売し利益を得ていることを知り、反対意見も次第になりを潜めて行きました。」

「・・・・・・」

ロマリア界隈でも有名になりつつあったカンダタの一味を村に引き入れることは、通常村を破滅へと導くようなものである。　村の住人にしてみれば当然の反対だったのであろう。

「村への出入りを許可されたカンダタ一味は、この村に膨大なゴールドを落としていきました。　それは、店の種類を問わず。　教会にさえも寄付という名目でゴールドを渡しています。」

「　！！　」

カミュは最後の一言に驚きを示す。
食堂、宿屋、道具屋に武器屋。
それらにゴールドを落とすことは需給の面から見て当然のことだろう。
しかし、教会にまで寄進をしていくということがカミュには信じられなかった。
教会が崇める『聖霊ルビス』は、カンダタのような盗賊を前世での罪人として冷遇している。　およそ、盗賊が『聖霊ルビス』を崇める理由がないのだ。

「・・・教会へのゴールドは、連中が酒に酔った時のものですから、

定期的に寄進していた訳ではありません。」

「・・・・・・」

カミュの驚きの意味を察したトルドの父親は、慌てて訂正をし直した。

「ただ、この村が今も尚、村としての形状を保っていられるのも、カンダタ一味がもたらしたゴールドのお陰といっても過言ではありません。　そして、あの子はカンダタ一味がゴールドを落としやすいように色々な趣向も凝らしていきました。」

「・・・・それでか・・・・」

「ええ、だから、あの子は自分の妻と子がいなくなり、そこにカンダタ一味の影がちらつくことに誰よりも後悔したのです。　自分のやってきたことが間違いだったのかと日々苦しんで来たんです・・・・」

最後の方は、もはやトルドの父親の言葉は声になっていなかった。息子が苦しみ塞ぎ込んでいくことを傍で相当悩み苦しんだのであろう。

妻や子を失い、そしてその影響で母親まで倒れる。

その原因は全て自分が作ったのかもしれない。
それは、一人の人間の心を壊すには十分な威力を持っていただろう。
しかし・・・・・

「・・・・それで・・・・アンタは俺に何を望んでいるんだ・・・・・？」

一部始終を冷ややかな無表情で見つめながら聞いていたカミュの言葉は、その場の空気を凍らす程に冷たいものであった。
そんなカミュにトルドの父親は絶句する。

「・・・一晩の宿と暖かな食事には、本当に感謝している。　だからこそ、アンタの息子の願いは自分にできる限りのことをすると約束した。　それ以外に何を求めているんだ？」

「・・・い、いえ・・・」

「例え、真実を知ったとしても、過去が戻ってくるわけじゃない。
むしろ今よりも酷い状況になるのかもしれない。」

「・・・それは、わかっております・・・」

カミュが語る言葉は、正論であるが、他人を突き放す冷たいものであった。
トルドの父親も、勿論トルド本人も理解していること。
それを敢えて突き付けるカミュの姿は、トルドの父親には鬼のように映っていただろう。

「・・・メルエは、貴方方がどう望もうと、ここに置いて行くことはできません。　貴方方の気持ちも理解はできますが、それとこれとは別です。　メルエ本人も我々と行動することを望み、我々もメルエと行動することを望んでいます。」

「・・・・そうですか・・・・」

最後に、カミュは再び仮面を被り直す。
トルドの父親の目的はやはりメルエであった。
希望も覇気も失いかけている自分達に、メルエという光を与えてほしいという願い。
しかし、口調を丁寧にした分、カミュの言葉の拒絶の強さが明確に示されていた。

「・・・・時間をとらせてしまいました。　申し訳ございませんでした。」

最後にカミュに向かって頭を下げ、居間に向かっていくトルドの父親の背中は、初めて会った時よりも更に小さくなってしまったよう

な錯覚を受ける。
いや、なまじメルエという希望の光を見せられたことにより、その落胆が加えられ、気力が尽きてしまったのかもしれない。　それ程、彼らの絶望は強かったのであろう。

「本当にありがとうございました。」

道具屋の前でサラが声を出して頭を下げる。
リーシャやカミュもトルド一家に向かって頭を下げているのを見て、メルエも慌てて頭を下げた。

「・・・いえ、いいのです。　お気をつけて・・・」

未だにカミュとの対話のショックを引きずっている様子のトルドの父親の顔色は優れない。
トルドも未練がましく頭を下げるメルエを見つめていた。

「・・・しっかりメルエちゃんの身を守ってください・・・」

「ああ、言われなくても、メルエは私の命に代えても護って見せるさ。」

トルドの絞り出すような声にリーシャが笑顔で答えた。
朝は、カミュに対してあのように言ったリーシャではあったが、実際はもはやメルエに対し相当な愛着を感じていたのだ。
その証拠に、トルドが『メルエを引き取りたい』と言った時に、リーシャの表情は固まってしまった。　無表情に近いように見えてはいたが、内心は焦燥感に襲われていたのだ。
故に、カミュがそれを断る発言をした時には、溜めていた息を吐き出し、全身の力が抜けて行った。　そんな自分の心の変化にリーシャは驚き、そしてどこか喜ばしかった。
それが今、トルドに答えるリーシャの表情に出ていたのだ。

「・・・・・」

トルドが確認を込めてみた方向には、無表情に頷くカミュの姿があった。
その横には、彼が欲してやまない、生前の娘と同年代の少女がマントの裾を掴んでこちらを見ていた。

別れの儀式も済み、カミュ一行は村の出口を向かう。
トルド一家は、入口の木の門が閉じられるまでその背中を見つめていた。

「それで？　何処に向かうんだ？」

村から出て、再び平原にでた一行が向かう場所を、メルエの手を引きながらリーシャがカミュに問いかける。

「村の西の方面に向かうと『シャンパーニの塔』という塔があるらしい。　おそらく宿屋の前であった男が言っていたのはあの塔だろう。」

「・・・シャンパーニの塔・・・？」

＞シャンパーニの塔＜

アリアハン大陸にある＞ナジミの塔＜と同じように有史以前に建立されたと思われる塔だが、＞ナジミの塔＜とは違い、近くに海はあるが港はなく、何の為に建立されたのか現在の研究者達を悩ませている塔である。

「ああ、数年前からカンダタ一味のアジトとなっているらしい。トルドが教えてくれた。　盗賊たちだけではなく、魔物の住処ともなっているようだがな。」

「では、一先ずそこに向かう訳ですね。」

サラの問いかけにカミュは静かに頷く。
未だにカミュの目を見ることのできずに、サラは明後日の方向を向いてカミュに問いかけていた。　そんなサラの様子に、メルエは何かを言いたそうな表情をしていたが、鉄拳を恐れて何とか言葉を飲み込んでいた。

村を背に西の方角に進み、山道へと入って行く。
四方全てを山に囲まれている＞カザーブ＜から出るには、どこに向かうにしても峠を越えなければいけない。

＞カザーブ＜へと進む山道と違い、メルエの足は軽やかだった。
カミュが、自分をあの村に置いて行こうとしなかったこと。
カミュ達が自分に帽子といえ、物を与えてくれたこと。
そして、あれほど自分を怒ったリーシャが、今はすでにいつもの優しいリーシャに戻っていること。
それらの全てが嬉しく、被っている＞とんがり帽子＜のつばの部分を常時触りながら笑顔を作っている。

サラはそんなメルエの姿に心が和んでいく。
昨晩の失態に関して、リーシャからはカミュとリーシャの二人しか

知らないことを聞いていた。　メルエには、自分がうわ言のようなものを口にしながら失神したことしか気づかれてはいないという。カミュにしても昨晩のことを口にする様子はなく、リーシャがサラの嫌がることをすることなどあり得ない。
そんな安心感から、サラは昨晩の出来事を強引に頭の隅に追いやっていた。

「メルエ、そんなに走ると疲れてしまいますよ。」

「・・・・・・・・・大丈夫・・・・・・・・・」

サラの微笑みを混ぜた忠告に、メルエは若干むっとした表情を浮かべ、反論する。
メルエは何故か自分に対しては、強硬な態度を取る。
そのことに少し疑問を持つサラではあったが、子供の強がりとして受け止め、やわらかな笑顔を浮かべた。

山道の中腹まで来たときに、先頭を歩くカミュの背中の剣が抜かれた。
戦闘の合図である。
カミュの姿を見たサラが、背中に担ぐ＞鉄の槍＜を構え、最後尾でメルエの手を引いていたリーシャもまた腰の剣を抜き放った。

しかし、山の木々の隙間から不穏な空気は流れてくるが、その元凶であるはずの魔物の姿が一向に見えない。

一瞬、自分だけが見えないのではと思ったサラではあったが、カミュやリーシャも辺りの様子を探っていることから、全員が魔物の姿を確認できていないことが理解できた。

「メルエ！　私の傍を離れるな！」

「・・・・・・」

リーシャの叫び声に、カミュの下へと移動しようとしていたメルエが大きく頷き、再びリーシャの足下に戻る。
リーシャも目を凝らして魔物の姿を探すが、その姿は未だに見えない。

「「「　！！　」」」

もしや、魔物ではない何かが発する殺気なのかと勘繰り始めたころ、周囲に変化がおこる。
まるで、霧が立ち込めるかの様に一行の周りが曇り始めたのだ。
一行を取り囲むように発生した霧のような煙は、次第にその姿を固定させていく。

カミュの持つ＞鋼の剣＜が上段に構えられ、徐々に収束していく煙を一閃するが、煙を霧散させるだけの効力しか発揮しない。
必然的に、煙が完全にその姿を現すまで、見守るしかなかった。

剣を構えたまま何もできない一行の前にようやく魔物がその姿を現した。
灰色に染まる煙が円を描くように集まり、その中央に顔のような物が浮かび上がる。

＞ギズモ＜
その繁殖方法及び、生態は全く解明されていない魔物の一つである。
雲のような煙のような身体を持ち、魔法を使いながら人々を襲う。
＞ギズモ＜の食事の状況を見た人間がいないことから、どのように人間を食すのかも解ってはいない。　ロマリア大陸に住む魔物の中でも中位に属する魔物だ。

「　ふん！！　」

煙が収束されたことを確認し、カミュの剣が再び振り下ろされる。
カミュの顔の位置をふわふわと飛ぶ＞ギズモ＜に抵抗なく剣が入って行くが、顔の浮かびあがる中央から真っ二つにされたにもかかわらず、その表情は変わることなく嫌な微笑みを浮かべたまま、再び元の形状に戻って行く。

「　なっ！！　」

カミュの剣の行方を見ていたリーシャは、その魔物の構造に驚きの声をあげた。
サラも同じ様に目を見開き、＞ギズモ＜を見ている。

今のカミュの攻撃の一部始終を見ていていれば、剣での斬撃では効力が乏しいことがはっきりと証明されたのだ。
パーティーとして、カミュとリーシャの剣に頼りがちである一向にとって、深刻な問題が浮き彫りとなってしまった。

「・・・カミュ、どうする・・・？」

一旦、リーシャの傍まで後退したカミュに、周囲への警戒を緩めずリーシャが問いかける。
メルエもリーシャの足元からカミュを見上げていた。

「・・・剣での攻撃では、ほとんど意味がないとなると・・・」

「・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・の・・・・・・」

「ああ、メルエの出番だな。」

カミュが＞ギズモ＜の方から視線を離さずに話し始める内容を聞き、途中でメルエが口を開く。　メルエのたどたどしい言葉にかぶせるようにもう一度、今度はメルエに視線を落としながらカミュは答えた。

「・・・・・・・・・新し・・・い・・・・・・覚えた・・・・・・」

「なにっ？　新しい魔法を覚えたのか！？」

カミュの言葉に頷いた後、メルエから発せられた言葉に、再びリーシャが驚きの声を上げる。　メルエがルーラまでの約7種類の魔法の契約が済んでいることをカミュから聞いた時、リーシャは驚きを通り越して呆れてしまった。
成人の魔法使いでも、ルーラを覚えるのに何年もの修行や鍛練が必要なのだ。
それをメルエはこの歳で階段を飛び越えるように契約を済ませ、使用することができるという。　更には新しい魔法の契約も済ませたというのだ。　正直、異常にも程がある。
元々、魔法に特化した家の出なのか、それとも突発的な才能なのかは解らないが、メルエの魔法の才能は、おそらくこのパーティーの中だけでなく、世界中の＞魔法使い＜と呼ばれる人間の中でも飛び抜けたものなのかもしれない。

「リーシャさん！　カミュ様！　メルエと一緒に少し下がっていてください！」

リーシャの驚いた顔に満足そうにメルエが頷いた時、三人と少し離れた場所にいたサラの声が響いた。
声に気が付き、視線を＞ギズモ＜からサラへと移すと、すでにサラは詠唱の構えに入っていた。　その様子に何か魔法を行使しようとしているのが解る。
しかし、カミュ達が今までの旅で見てきた限り、サラが行使できる

魔法で、あの魔物に有効的な魔法はないはずだ。

「サ、サラ・・・」

「バギ！」

リーシャがサラに問いかけと共にメルエの魔法の行使を伝えようと口を開くのと同時にサラの魔法詠唱の声が辺りに木霊した。

サラの詠唱と共に、サラの周囲を取り巻く空気という空気がうねりを上げ始める。

しかし、サラの変化に気がついた＞ギズモ＜の内の一体が人語ではない音で詠唱を行った。

＞キズモ＜の詠唱と同時にその口から火球がサラ目掛けて飛び出した。

それは、カミュの得意呪文である＞メラ＜と同様の大きさを持つ火球である。

「サラ！」

リーシャは、＞ギズモ＜から発せられた火球の狙いがサラであることに声を上げる。

しかし、サラの手が上がり、その指先が四体の＞ギズモ＜に向けられると、渦巻いていた空気は一斉にサラが指し示した方向へとまる

で風龍のように突っ込んでいく。
真空の風は怒涛の勢いで、飛んできた火球を飲み込み霧散させながら＞ギズモ＜の集団へと向かっていく。

「「「　！！！！　」」」

戦闘に取り残されたような状況になった三人は、サラが行使した魔法の威力に驚き、言葉を失った。
サラが起こした風の渦は、＞ギズモ＜四体を巻き込み、その流動的な体躯を切り刻んでいく。　凄まじいまでのスピードで、四方八方から真空の刃を受けた＞ギズモ＜達は、風が収まり辺りに静けさが戻ると、跡形もなく消えていた。

「・・・・・・ふぅ・・・・・よかった。　うまくいきました・・・・」

振り上げていた手を下ろし、額の汗を拭ったサラは、安堵の溜息と共に充実感に満ちた言葉を溢した。

「　サ、サラ！　凄いな！　新しく魔法を契約できたのか！？　」

「　あっ、リーシャさん！　は、はい！　持ってきていた経典の中に攻撃呪文がありましたので。」

＞バギ＜
教会にある経典の中に存在する魔法の一つで、経典から魔法を契約する僧侶の唯一と言っていい攻撃魔法である。
術者の詠唱と共に、周辺の空気に動きが起こり風を産み出す。
その風が真空となり、対象に襲いかかる。
真空の刃に襲われた対象は、その刃で体躯を切り刻まれる。

「・・・・・・・・」

「・・・ふっ・・・」

リーシャに褒められ、頭を撫でられて笑顔を作るサラを、カミュのマントの裾を掴んでいる少女が頬を膨らませながら見ている。

そんなメルエの表情に苦笑しながらも、カミュはサラの成長に驚いていた。
アリアハン大陸を旅する時には、全くの足手まといといっても過言ではなかったサラが、先日の戦闘でも今回の戦闘でも、勝利に大きく貢献している。　いや、今回に限っては、サラ一人で戦闘を終わらせているのだ。
メルエが加入するまでは、全く頼りなかった僧侶が、徐々に『人』を導く者としての能力を開花させ始めているのかもしれない。

「　メルエ、大丈夫でしたか？　」

リーシャからのお褒めの言葉に、上機嫌でメルエの安否を確認しようとするサラが見たのは、決して有効的とは言えないメルエの表情であった。

「・・・・・・・やっぱ・・・り・・・・・・サラ・・・・・・・嫌い・・・・・・」

「えっ！？　えぇぇぇぇぇ！！」

メルエを護ることに貢献できたと自画自賛していたサラにはいささかショックな言葉。

しかし、驚くサラの耳に続いて入って来たメルエの声は更にサラを落ち込ませるものだった。

「・・・・・あわ・・・・・あわ・・・・・・・・」

「メ、メルエ！！　ううううう・・・・・・・・」

機嫌を損ねてしまったメルエの口に戸は立てられない。

今朝、拳骨と共にあれ程リーシャに叱られた言葉を、メルエは再び口にするのだった。

「・・・あははははっ・・・・・メルエ、それは今朝、もう口にしないと約束したはずだろ？」

メルエの言葉を聞き、リーシャが再びメルエを諫める。
しかし、その表情は柔和な笑みを浮かべており、諫めてはいるが怒ってはいないことを示していた。

「・・・・・・メルエ・・・・・新しい・・・・・・・・の・・・・・・・」

「・・・メルエ・・・新しい魔法は今度見せてもらう。　その時までとっておけ。」

リーシャの言葉に俯いてしまったメルエが途切れ途切れに話す言葉を理解したカミュは、メルエの頭に手を乗せて慰める。
最後にカミュから『楽しみにしてる』と言われたメルエは、顔を上げてこくりと頷いた。

メルエにとって、未だに魔法を使うことが、このパーティーの中で自分の存在価値を示すたった一つの方法だと思っている節があった。
せっかく、その機会が巡って来たのに、同じ様に新しい魔法を習得したサラによってその出番は奪われてしまった。　そして、本来自分にもたらされるはずだったリーシャの褒め言葉をサラが受け取ったのだ。
メルエにとってそれは何よりも悔しいことだったに違いない。

「うぅぅぅ・・・・メルエは私が嫌いなのですか・・・？」

「・・・・・・・・・嫌い・・・・・・・・・」

「うぅぅぅぅぅ・・・・」

両親の生前も教会での生活でも一人っ子として育ったサラにとって、メルエは初めてできた小さな妹のようなものなのである。
そんな妹から嫌われているというのは、サラには耐えがたいショックだった。

「・・・・・・・・じゃない・・・・・・・・」

メルエの表情は、悔しそうに歪んではいるが、事実を語っているのだろう。
口では『嫌い』と発しているが、どんなことを言っても自分を気にかけてくれているサラを悔しいながらも嫌いにはなれないのだろう。
リーシャに褒められるサラを見ていると、悔しくなる。
カミュにお礼を言われているサラを見ると邪魔をしたくなる。
でも、メルエもサラが好きなのだ。

「　メ、メルエ！！　」

溜を作ったメルエの言葉を聞き、サラは嬉しそうに笑顔を浮かべ、メルエを抱きしめた。
サラの腕の中でモゴモゴ動くメルエに構わず、サラはその少女をしばらく抱きしめていた。

ロマリア大陸？（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

何か・・・メルエがどんどん幼くなってしまっているような・・・・

すみません・・・

しかも、最近はサラとメルエの蔭にカミュとリーシャが隠れてしまっているような気が・・・・リーシャの母性恐るべしです。

ロマリア大陸？（前書き）

最近土日は、書き物ばかりしているような気がします・・・

一行は山道を抜けるまでにも、何度か魔物に遭遇し、戦闘を行った。大抵は、以前遭遇した＞アニマルゾンビ＜や＞キラービー＜、そして＞軍隊がに＜であり、カミュとリーシャによってことごとく排除されていった。

カミュやリーシャも、サラやメルエの陰には隠れているが、ロマリア大陸に入ってから、剣の腕が上がっていることは確かである。

剣での攻撃の効きにくい魔物が多くなっている中、闇雲に剣を振るうのではなく、どこをどう攻撃すれば有効な攻撃になるのかを常に考えながら剣を振るっている。

自然とその剣の軌道は鋭く研ぎ澄まされ、それを振るう身体も無駄な動きが少なくなる。

彼らが、自分の力量のレベルアップに気が付いているかは定かではないが、＞軍隊がに＜をサラの補助魔法の助けなしに倒しているのは、何も＞カザーブの村＜で購入した＞鋼の剣＜という武器の変化だけが原因ではないだろう。

ただ、もう一度一行の前に姿を現した＞ギズモ＜は、再びサラの＞バギ＜の前に消えうせることとなり、一度ならず二度までもサラによって、自分の新魔法の行使を妨げられたメルエの機嫌はますます下降していった。

「うううううう・・・・・・メルエ・・・・・・」

「・・・・・・」

先程の戦闘から、一言も口を聞いてくれなくなってしまった少女にサラはほとほと困り果てていた。　実際、サラが＞ギズモ＜を倒した時のメルエの表情は、その手に掴むマントの持ち主であるカミュと同じような無表情を貫いていた。
メルエのその表情に、怒りの度合いを感じ取ったサラは、先程から頭を下げ続けているのだが、メルエはその口を開こうともしなければ、表情を緩めることもない。

「・・・メルエ、いい加減許してやったらどうだ？　カミュも言っていただろ？　メルエの新魔法は使うべき時が必ず来る。　その時にメルエの実力を見せてくれればいいと。」

「・・・・・・」

サラの困り顔を不憫に思い始めていたリーシャは、メルエを宥める為に声をかける。
リーシャの隣を歩いていたメルエは、その声に頬を膨らませてリーシャを見上げた。
今まで、カミュのような表情を失くした顔をしていたメルエに、頬を膨らませた不満顔ではあるが、表情が生まれたことに若干安堵し

ながらリーシャは溜息を漏らす。

「メルエが、活躍の場をサラに奪われたと怒る気持ちが分からないでもないが、私達は仲間なんだ。　私やカミュの剣では倒しにくい魔物はメルエとサラが、メルエとサラの使う魔法が効きにくい魔物は私とカミュが。　そうやって協力していかなければ、これから先でもっと強い魔物が現れた時に苦労することになる。」

「・・・・・・・」

「メルエは、これから先も私達と旅を続けるんだろ？」

「！！　・・・・・・・・・・」

リーシャの顔を見上げ、その言葉を不満そうに聞いていたメルエであったが、最後の問いかけに、力強く頷いた。
メルエの返事に満足そうに頷いたリーシャはメルエの肩に手をのせ、笑顔を見せる。

「それなら、サラと仲直りだな？　メルエにも、もちろんサラにも魔法では活躍してもらわなければならない。　それに二人は違う魔法を使うだろ？　メルエに使えない補助魔法をサラが使う。　メルエが使う攻撃魔法の威力は、どう頑張ってもサラには使えない。」

「・・・・・・・」

「メルエ、メルエの魔法は私達全員を助けてくれる魔法だ。　だから焦らなくてもいい。　これから、私達がメルエと共に旅する道は果てしなく長いのだから。」

「・・・・・・・・」

リーシャの言葉はメルエをどこか途中の町や村で置いて行くものではなかった。
それがメルエには嬉しい。
メルエは、リーシャの顔を見上げながら笑顔で頷いた。

「　メルエ！！　」

「・・・・・・・・・・でも・・・・・・・サラ・・・・・・嫌い・・・・・・・」

「　あぅっ！　」

メルエの表情の変化を少し前を歩きながらも確認したサラは、メルエに笑顔を向けるが、冷たいメルエの言葉に珍妙な声を上げた。

山道を抜けて平原に出るまで、魔物がうろつく場所に似つかわしくないリーシャの笑い声が響いていた。

平原に出てから休憩を取り、休憩中に地図を見ていたカミュが指し示す方角へ一行は再び歩を進める。　平原を西に進むと、肌に触れる風に塩分が混ざっているのを感じ始め、一行の鼻に潮の匂いが広がってきた。

リーシャの隣を歩くメルエが、不思議そうにリーシャを見上げる。
もしかすると、メルエは海を見たことがないのかもしれない。
若干鼻につくその香りに顔をしかめているメルエの表情がおかしく、リーシャは笑顔をつくった。

「メルエは、海を見たことはないのですか？」

「・・・・・・・・・う・・・・・み・・・・・・・？」

リーシャの代わりに発したサラの疑問に対し、メルエは小首を傾げて言葉を反芻する。

その様子にリーシャとサラの疑問は確信に変わった。

「・・・そうか・・・メルエが生まれ育ったところは内陸の町か村なんだろうな・・・・」

「・・・そうですね・・・」

「・・・???・・・」

リーシャがそのメルエの言葉に、考えた憶測を口にし、それにサラも同意を示すが、当のメルエは二人の会話内容が分からず、反対側に首を傾げていた。

これから先に盗賊との戦闘が控えているかもしれない者達と思えない程の和やかな雰囲気が流れるが、それは一人だけ会話に参加していなかった先頭を行くカミュによって壊される。

例の如く、カミュが背中の剣を抜き放つ。

その合図に、今まで笑顔をつくっていたリーシャとサラの顔も引き締まり、警戒しながらもそれぞれの武器に手をかける。

現れたのは＞軍隊がに＜が二匹。

魔物の方もこちらに気がついたが、襲いかかってくる様子はなく、戸惑っている様子だった。

「カミュ様！　魔物は戸惑っています！」

魔物達の様子を見て、自分達の好機を理解したサラが先頭で剣を構えるカミュへ声をかけるが、カミュは動こうとしない。
それればかりか、しばらく魔物と睨み合っていたカミュが、ハサミを上げ威嚇を始めた＞軍隊がに＜を見て、その剣を背中の鞘に納めてしまったのだ。

「なっ！？　何をしている！」

「カミュ様！！」

アリアハン大陸以来となるカミュの行動に、驚きの声を上げたリーシャとサラは武器を構えて魔物に向かおうとするが、それはカミュが上げた両腕によって阻まれることとなった。

「・・・・行け・・・・」

ハサミを上げて威嚇を続ける二匹の内の一体がカミュの様子をじっと見つめた後、そのハサミをゆっくりと下ろす。
もう一匹の＞軍隊がに＜は、なぜか威嚇をしていた＞軍隊がに＜の後ろで終始動かず、成り行きを見つめていた。

「くっ！　カミュ！　お前は何を言っているんだ!?」

怒鳴るリーシャに一瞥をすることなく、カミュは＞軍隊がに＜の方を見つめている。
そんなカミュを見るサラの表情は、最近あまりなかったカミュとの衝突時と同じ憤怒に耐えるような厳しい顔をつくっていた。

しばらくカミュと見つめあっていた＞軍隊がに＜は、成り行きを見守っていた方の＞軍隊がに＜から徐々に離れていき、ある程度の距離を保つと、もう一方も離脱を始め、カミュ一行との距離を離していく。

「！！」

突如、カミュの手が上がり横に立つサラの口を塞いだ。
サラは、詠唱を始めていたのだ。
おそらく、覚えたばかりの攻撃呪文である＞バギ＜を使用しようとしたのであろう。

「ぷはっ！」

＞軍隊がに＜の姿が見えなくなって、カミュはサラの口から手を離した。
リーシャはカミュを見つめている。
息が回復したサラもまた、息を整えながらもカミュを睨む。

そんな二人の様子に一人だけ訳が分からないメルエは、リーシャとサラの様子に若干怯えながらもカミュのマントの裾を掴んでいた。

「・・・どういうことですか・・・・・？」

サラがカミュを糾弾する。
それは、魔物を逃がしたという行為。
それは、仲間達の行動までも制限した行為。
それら全てについてであった。

「・・・カミュ・・・・」

しかし、サラ以上の糾弾をすると思われていたリーシャは、何故か悲哀に満ちた表情をしながらカミュを見ていた。
サラはそんなリーシャを不思議に思いながらも、再びカミュへと視線を移す。

「・・・何がだ・・・？」

「　な、何がではありません！！　何故魔物を逃がすのですか！？
何故私達が魔物を倒すことまで妨害するのですか！？　」

平原に響くサラの声量は凄まじく、カミュのマントを掴んでいたメルエは、マントから手を離し、両耳を塞ぐ。
しかし、カミュの顔は能面のような無表情で、そのサラの叫びに更に表情を失くしていった。

「 カミュ様!! 答えてください! 」

「・・・お前は見えなかったのか・・・?」

「 何がですか!? 」

質問を質問で返すカミュにサラの苛立ちが募る。
しかも、カミュの言っている意味が理解できないから尚更だ。

「・・・・一匹何もしてこないで後方に控えていた＞軍隊がに＜がいただろう・・・・」

「 そ、それが、どうしたというのですか!? 」

サラとカミュの問答はリーシャを彷彿とさせるほど堪え性がないものだった。
サラの怒りが凄まじいのか、それともサラが本当は答えを解っているのかは解らないが、サラのその姿には焦燥感すら感じられた。

「・・・後方に控えていた＞軍隊がに＜の後ろには、小さな＞かに＜が二匹ほどいた・・・」

「　！！　」

「・・・・・・」

カミュが言うように、後方にいた魔物は何かを庇うようにしていた。
リーシャは、実際そのことに気が付いていた。

「　そ、それで見逃したとでもいうのですか！？　新たな脅威となる子供の魔物を見逃したのですか！？　」

「・・・ああ・・・」

「・・・・カミュ・・・・・」

魔物は『人』にとって悪以外何物ではない。
そう信じているサラには、新たな脅威となる魔物を見逃したと平然というカミュを信じられないものを見たような表情で見つめていた。

何故？
この人間は、『人』に勇気と希望を与える勇者ではないのか？
『人』の天敵とも言える魔物、しかもこれから成長し脅威となる子供を何故見逃すのか。
それがサラには理解できない。

「な、何故ですか！？　何故魔物を見逃すのです！？　カミュ様が見逃した子供が成長し、凶暴な魔物となって『人』を襲ったとしたら、カミュ様はどう責任を取るのですか！？」

「・・・どうもしないが・・・」

「なっ！？」

サラが必死に行う疑問にカミュは一言だけ答えた。
その一言に、文字通りサラは言葉を失った。
世界中の人間が希望を託す勇者が、『人』に対する責任放棄を口にしたのだ。
サラは絶望すら覚える。

「ど、どういう・・・こと・・・ですか・・・？」

もはやサラには怒鳴ることもできない。
カミュにその真意を確認したい一心で口を開いた。

「そのままの意味だ。　別にあの魔物達がこの先『人』を襲ったとしても俺の知ったことではない。」

「・・・カミュ様は・・・勇者ではないのですか・・？」

「前も言っただろう？　俺は何も成してはいない。」

サラの頭で信じていた勇者像が音を立てて崩れて行った。
ここまで、色々な事があったが、それでもサラはカミュこそが勇者と心のどこかで信じていた。　それが完璧に裏切られたのだ。

「・・・お前も、メルエを助ける時に言っていたはずだが・・・？」

「な、何をですか・・？」

「『この世に死んで当然の命などない。　生きる価値がないものなどいない。』とな。」

「　そ、それは！！　」

確かにサラはメルエを救う時のカミュとの問答の際に、そのような言葉を発したことを憶えてはいた。　しかし、それはサラにとって『人』に対してのものであり、魔物は含まれていなかったのだ。

「俺はあの時、お前の言葉に同意した。　今、逃がした＞軍隊がに＜の子供にしろ生きる権利があるのじゃないのか？　しかも、一匹は身を捨ててでも後ろに控える子供とおそらく妻を護ろうとしていた。　そこまでするものに生きる価値も権利もないというのか？」

「　し、しかし！！　」

ここにきて初めて、サラはあの時リーシャがサラに言った言葉の意味を知ることとなる。

『今のお前の言葉が、おそらくこれから先、お前を大いに苦しめることになるだろう。』

今思えば、リーシャはこうなることを予想していたのかもしれない。そして、あの時のカミュの小さな笑顔は、この時を予想し、自分をいたぶることへの楽しみの笑みだったのかもしれない。
その証拠にリーシャは、先程から一言も口をきかず、黙ってメルエの肩に手を置き、サラを見つめていた。

「お前が魔物に恨みを持つ経緯も知っている。　だが、先程の魔物

の姿と、お前を護ろうとして死んでいった親達の姿と何が違うんだ？」

「！！」

カミュが言った一言に、サラの顔は戸惑いの表情から怒りの表情に変わっていく。
自分が誇りにすら思っている親を侮辱された。
それは許されないことだった。
サラが憎悪を瞳に宿し、カミュを見上げたその時・・・

「カミュ！！　今の発言は取り消せ！　そこまでの言い分は理解した。　それでも、人の親と魔物を同類として扱うな！」

今まで黙って成り行きを見ていたリーシャが怒鳴り声を上げた。
メルエの肩に手を置いたまま口を開くリーシャの瞳は怒りを宿してはいるが、それは憎悪ではない。

「サラ！　サラも落ち着け。　カミュ！　サラに謝罪をしろ！
今のは明らかにお前の失言だ！」

自分達の傍まで歩いてきたリーシャは、サラの気持ちを鎮静させるために、サラの肩を抱きながら、語りかける。
カミュは無表情ではあるが、いささか自分の言葉が過ぎたことは認

めているのだろう。
それ以上、サラを糾弾することはなかった。

「・・・・すまなかった・・・・言葉が過ぎた・・・・」

その代り、カミュはサラに向かって頭を下げる。
自分の考えが、この世界では異常なのは解っていたはず。
しかし、この旅で自己の考えを他者に話す機会が多かったため、自己防衛にも似た配慮を忘れていたのだ。
それは、カミュは気が付いていないが、仲間となったリーシャやサラに対する甘え以外何物でもないだろう。

「・・・ただ、魔物だろうが『人』だろうが、命は命だと俺は思う。
アンタ方は納得しないかもしれないが、この旅が続く限り、俺はその考えを捨てることはない。」

「・・・・カミュ・・・・」

「では、カミュ様は、魔王バラモスが子供を護っていたら、魔王討伐も諦めると言うのですか!?」

その証拠に、続いて出たカミュの言葉は、その内心を他者に話し、己の考えを他者に理解してもらおうとするものに近かった。
しかし、カミュの謝罪を聞いてもその瞳に宿った憎悪が消えること

もなく、サラは尚も問答を続けようとする。

「・・・さあな・・・その場にならないと答えられない。」

「それでは答えになっていません!!」

「・・・・俺は・・・・・『人』自体、護る価値があるものなのかすら分かっていない・・・・・」

「えっ？」

答えをしつこく求めるサラは、珍しく口ごもりながらカミュが返してきた言葉に、憎悪に満ちていた瞳を驚きに見開くものに変化させ、言葉を失ってしまう。
リーシャもまた、初めて見るカミュの苦しみに近い苦痛な表情に戸惑いを隠せない。

「・・・・・・メルエ・・・・・・・・」

そんな苦しみに似た表情で想いを吐き出したカミュの手をメルエが握っていた。
どこか痛いのか？
何か哀しいのか？

とでも問いかけるようにカミュを見上げるメルエの瞳は哀しみを宿していた。

「・・・・・大丈夫だ・・・・・」

「・・・・・・ん・・・・・・・・」

カミュがどういう考えを持っていようと。
どんな想いを抱きながら苦しんでいようと。
このカミュの手を握る少女を救ったことは紛れもない事実なのだ。

カミュが救わなければ、メルエは少女に身でありながら女としての最大の恥辱を味わい、絶望に苛まれながらその命を散らしていただろう。
リーシャは、カミュの考えに全面的に賛成はできない。
しかし、メルエはルビス教では、前世の咎人という位置づけになっている。
つまり、魔物とほぼ同類の扱いなのである。
そのメルエを救うということは、信仰に関係なく、命ある全てが等しく生きる権利があるとを認めることになることを否定が出来ないのだ。

「・・・・・カミュ様、私はカミュ様の考えを認めることはできません。　私は『人』の幸せを奪う魔物を許すことはできませんし、そんな魔物の命を価値あるものとして考えることなどできません。」

「・・・・そうか・・・・・」

「これから先、カミュ様が魔物を逃がすようなことがあっても、私はそれを追って葬ります。」

「・・・・・『人』の幸せを奪うものが必ずしも魔物だとは言えないがな・・・・・・」

カミュの言葉に再び眉をしかめたサラであったが、気を取り直し、カミュに言葉を投げかけ続けた。

「カミュ様が何を考えているのかは私には全く理解できませんが、カミュ様が魔王に向かって旅をしていることには間違いはありませんよね？」

「・・・・・・・・」

「でしたら、私は旅を続けます。　魔王バラモスに近づくことができる可能性があるのは、今の時代カミュ様だけです。　悔しいですが、それが今の現状です。　ですから、私はカミュ様について行きます。」

無言で頷きもしないカミュの態度を肯定と受け取ったサラは、自分の想いを吐き出した。
そのサラの姿を見て、リーシャはサラの成長を認めざるを得なかった。
今まで、カミュに噛みつくことはあっても、ここまで自分の想いをはっきり口にすることのなかったサラがカミュに対して毅然と話しているのだ。

その内容は決して仲間が交わすようなものではない。
以前リーシャが考えたようにこの二人の考えが交わることは永遠にないもののような気さえする。　お互いの妥協点は、魔王バラモスの討伐という物だけだ。　それも、今のカミュの言葉を聞く限り、いつ挫折するか分からない。　リーシャは再びこのパーティーの行く末に暗雲が立ち込め始めて行くのを感じていた。

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・嫌い・・・・・・・・・・・・・」

呆然とするリーシャ。
無表情にサラを見るカミュ。
内に静かなる憎悪の炎を燃やすサラ。
そんな三人を見ていたメルエが目に涙を溜めながら発した言葉は拒絶。

「・・・メルエ・・・き、嫌いでも結構です。」

対するサラが発した言葉もまた拒絶であった。

サラはカミュとのやり取りで頭に血が上っている。
今は、カミュを庇うためのようなメルエの言葉に感情を露わにしてはいるが、冷静になったとき、彼女は後悔するだろうとリーシャはサラを見ながら思っていた。

「・・・・・うぅぅ・・・・・・・・・ぐずっ・・・・・・・・」

いつも、メルエの『嫌い』発言に慌てるだけだったサラが強硬な態度をとったことによって、メルエはもうどうしたら良いのかが分からない。
メルエに残されたことは、その双眸に溜まった涙を重力に従って下へと落としていくことだけだった。

「メルエ、こっちにおいで。」

「・・・・・・」

重苦しい雰囲気でお互いを傷つけるようなやり取りに、最も心を痛めていたのは、この幼いメルエなのかもしれない。
メルエは、言葉に反してサラを気に入っているのだろう。
だから、そんなサラと自分を救い出してくれたカミュとの争いがたまらなく嫌だったのかもしれない。

とてとてと自分の方に歩いてきたメルエの身体を抱きしめながらリーシャは考える。

どうすれば、このパーティーが前に進むことができるのか。
しかし、その答えが出てこない。
それは、何もリーシャの頭が悪いのが原因ではないだろう。

その後、誰一人口を開くことなく、平原を歩き始める。
方向を変えて南に下って行き、川にかかった橋を渡ると、一行の視線の先に高々とそびえ立つ一つの塔が見えてきた。
距離はまだあり、根元は見えないが、『ナジミの塔』よりも塔としては大きいのかもしれない。

「・・・・あれが『シャンパーニの塔』・・・・」

サラが発した言葉に誰一人反応は示さなかった。
先程の争いから、メルエがサラに近づくことはなく、リーシャもまたそんなメルエの手を引いていたため、答える余裕がなかったのかもしれない。

「おそらく、あそこに着くまでに日が落ちる。　今日はこの辺りで

一度野営してから明日塔に入ろう。」

先頭を歩いていたカミュがリーシャに向かって口を開く。
先程のサラとのやり取りなど忘れてしまったかのような、カミュのその態度にリーシャは疑問を感じていた。

カミュは、『人』としての心を持ち合わせていないのではないか。
あれ程のやり取りをした後なら、後悔や憤怒といった感情が表に出ていても仕方がないはずだ。　ましてや、先程はカミュの言い分など誰も聞くことはなく、カミュにしてみれば言われっぱなしのものだったはずだ。

「わかった。　メルエ、向こうの森の入口に行こう。　向こうについたらサラと一緒に薪を集めてくれ。」

カミュの言葉にリーシャが頷き、突然の雨に備えて森の中に入ることを提案する。
その際に、いつものようにメルエに仕事を与えるが、当のメルエはそのリーシャの発言に、怯えたような目を向けながら首を横に振った。

「ん？　どうしてだ？　前はちゃんと薪を集めてくれただろう？」

「・・・・・・・」

メルエの必死の様子に、疑問を持ったリーシャが問いかけるが、返ってきたのはまたしても首を横に振る否定的なものだった。

「・・・・メルエは、私と集めるのが嫌なのだと思います・・・・」

その答えを出したのは、そんなメルエの様子に悲しそうな微笑みを浮かべたサラであった。
そんなサラの答えが正解であることを示すように、サラの声に怯えたメルエがリーシャの後ろへと隠れてしまう。
サラは、メルエが隠れてしまったことを確認し、笑みの影を一段と濃くした。

「・・・・薪は私が集めます。　メルエはカミュ様かリーシャさんと果物などをとってきてください。」

「・・・・・サラ・・・・・」

サラはそう言うと、リーシャの脇を通って、一人森に向かって歩き出した。
その背中は、先程までカミュに向けていた憎悪の炎の欠片もなく、ただ哀しみだけを宿していた。

「・・・・・・・・・」

カミュ、リーシャ、そしてメルエの三人はその後ろ姿をただ見送るしかできなかった。

メルエが悪いわけではない。

自己の拒絶を恐れる少女にとって、軽々しく口にしていた『嫌い』という言葉を返されたのだ。　それは、メルエに嫌われてもいい。

　つまりメルエのことは嫌いだと言われたのと同じ事のように感じたのだろう。

ただ、メルエはサラが激昂したことを恐れているのではないのだ。

それは、再び自己を否定されること、拒絶されることへの怯え。

言葉とは裏腹に気に入っているサラという人物から突き放されることを恐れてのこと。

故にメルエは、これだけ怯えても尚、サラのことが好きなのだ。

それが理解できるから、リーシャは何もメルエに言うことが出来ない。

メルエの怯えも理解できるし、先程のサラのメルエに対する言動も理解できるからだ。

そんなパーティー全員の心の中と同じように、今まで晴れ渡っていた空にも暗雲が立ち込め始めていた。

森の中に入ってからサラが火を熾し、食料を取りに行っていた他の三人が戻ってきた頃、雲行きが怪しかった空から、大粒の雨が降り始めた。
木が鬱蒼と茂る森の中であったため、雨に打たれることはなかったが、それでも身体が感じる気温は下がり、肌寒さを感じた一行は自然と火の回りに集まる形となる。

夕食を取る際も、お互いに口を開くことはなく、黙々と食事をこなしていく。
メルエは俯きながら、いつもよりもゆっくりしたペースで食事を口に運ぶ。
その様子を気にかけながらも、掛ける言葉が見つからないリーシャは心配そうにメルエを見つめていた。

「・・・・・・・・」

カミュは、軽く食事を済ませ、今は背負っていた＞鋼の剣＜の手入れを始める。
サラは、そんな三人の様子に気まずさを感じ、この空間を誰が作ってしまったのかを理解しながらも自分の行動を後悔すまいと心に決めていた。

「カミュ、この様子じゃ明日も雨だろう。　明日の塔の探索はこの雨じゃ危険ではないか？　足元も滑りやすくなっているだろうし、おそらく『ナジミの塔』のように吹き曝しになっているだろうからな。」

「ああ、確かにそうだろうな。　しかし、それこそ何時止むか分からない雨を気にしている時間はないな。　さっさとカンダタから＞金の冠＜を取り戻してカザーブにでも帰った方がいいだろう。」

沈黙が続く食事風景の中、リーシャが口にしたものは、雨の心配というより、おそらく雨の影響によるメルエの心配なのだろう。『ナジミの塔』も上の階に上がれば、塔の外側に壁はなく、上空の風に吹かれ態勢を崩せば地上まで真っ逆さまに落ちてしまうようなものであった。　おそらく、この『シュンパーニの塔』もそう変わりはないだろう。

そうなれば、この雨によって塔の内部は水浸しになっている可能性が高い。
雨の影響で、塔の床は滑りやすくなり、ただでさえ歩みがたどたどしいメルエが足を踏み外すことも考慮に入れなければとリーシャは考えているのだ。

それはカミュも頭には入っているだろう。
それでも、空模様を見れば、一日ぐらいで止むような気配はない。
目に入る限り、空には黒い雲が広がっており、上空には風がないのか、雲の流れはとても遅いのだ。

とすれば、雨の降りしきる中、例え森の中といえども、何日も野営をするわけにはいかない。　火を熾してはいるが、人の体温の低下は否めなく、長くその時間が続けば、それこそ幼いメルエの体力が持つかどうか分からないのだ。
故にカミュは強硬策を取ることにした。

「・・・わかった。　お前がそう決めたのなら、それでいい。」

「・・・リーシャさん・・・」

サラは、大人しくカミュの案を受け入れるリーシャに違和感を覚える。
先程のサラとカミュのやり取り中も、カミュに対して言った言葉は、サラへの謝罪の要求だけだ。　決してカミュの考えを否定することはなく、そればかりか『言い分は理解した』と言ったのだ。　冷静になって初めて、サラはリーシャのその言葉の異常性を理解することとなる。

「とりあえずは、ここの火は絶やさないように気を付けてくれ。雨による寒さが厳しくなるはずだ。　メルエ、俺のマントにしっかり包まって火の傍で寝ろ。　ここなら雨の雫が落ちてくることもないだろう。」

リーシャの理解を得たカミュは、次々と指示を出していく。
特にメルエの身体に気を遣う部分に、サラは驚きと共に若干の悔し

さが込み上げる。
カミュはメルエを、旅を共にする大事な仲間と認識しているのだろう。
いや、むしろ家族に近い感覚で見ているのかもしれない。
では、自分はカミュにとって仲間として見られているのか？

「それとメルエ、今日は夜のあれは禁止だ。　わかったな？」

「　！！　」

「「あれ？」」

続くカミュの言葉に、メルエは驚きで目を見開く。
だが、リーシャとサラはその言葉の真意を読み取れずにいた。

「・・・・・どう・・・・・して・・・・・・？」

「・・・気がつかれてないと思ってたのか？　とにかく、今日の夜は禁止だ。　わかったな？」

「・・・・・うぅぅ・・・・・・・」

「・・・・はぁ・・・・メルエ、そんなに焦るな。」

メルエの『何故知っているのか』という問いに、若干呆れ顔で念を押すカミュ。
しかし、尚も唸り声を上げて首を縦に振らないメルエに、カミュは優しく諭す。
＞とんがり帽子＜を脱いだメルエの頭に手を置きながら、諭すカミュにようやくメルエもその首を縦に振ることになった。

「あれとは何ですか？」

一部始終を見ていたサラがカミュへと問いかける。
それは、あの衝突があってから初めての二人の会話となった。

「・・・・ああ、それは・・・・・」

「　ダメ！！　」

しかし、カミュがサラに応えようとしたとき、この場の全員を固まらせる程の声が森の中に響く。
あの言葉を途切れ途切れにしか話したことのないメルエが、はっきりとそれも周囲に響くような声量でカミュの言葉を遮ったのだ。

「・・・・メルエ・・・・・」

「・・・・・・・・・ダメ・・・・・・・・・言うの・・・・・・ダメ・・・・・」

驚きにメルエの名を口にするサラを余所に、再度いつもの口調に戻ったメルエが、カミュのマントを抱えながら拒絶を繰り返す。

「・・・・わかった・・・・・」

メルエの懇願するような瞳に、カミュは静かに頷いた。
サラは、再び悔しさに似た感情を胸に抱くこととなる。

何故、メルエは自分に教えてくれないのか？
自分だけがこのパーティーからはみ出してしまっているのではないか？

そんな想いがサラの胸に渦巻くのだった。
しかし、サラの横で訳が分からないという表情でメルエを見ているリーシャの姿には気が付いていなかった。　もし、気が付いていたのなら、メルエが隠していることを知らないのが自分だけとは思わなかっただろう。
いや、カミュの言葉にメルエが驚いていたのだから、メルエはここにいる全員に対して隠していたことが理解できたはずだ。

雨雲によって、いつも照らしている月の光もすべて隠れてしまい、
焚き火の火だけが唯一の灯りとなる中、火の周りで横になっていた
一つの人影が起き上がった。

「・・・・はぁ・・・・・またか・・・・・」

カミュは火の傍で膝を抱え身動き一つしない人影に向かって盛大な
溜息をついた。
リーシャだ。

「 おい！ いい加減にしろよ。 」

「 ！！ 」

珍しく怒気を含ませたカミュの声に、丸くなっていたリーシャは勢いよく顔を上げた。
火の傍で薪をくべている内に眠気に負けてしまったのだろう。
それはほんの数分かもしれない。
火の状況から考えてそれ程長い時間眠りに落ちていた訳ではないことは解る。

「・・・カミュ・・・」

「アンタな・・・これじゃあ、俺達はおちおち寝てもいられないじゃないか！　アンタを信用して見張りを任せているんだぞ！」

「　！！　す、すまない・・・・気をつける。」

感情を剥き出しにするカミュの姿に、リーシャは素直に頭を下げるしかなかった。
それは、カミュの言葉の中に『信用して』という言葉が混じっていたことも大きな原因ではあるとは思うが・・・・・

「・・・頼む・・・疲れているのは解っているが、メルエやあの僧侶には魔物の気配を感じることはできないのだから。」

「・・・・・すまない・・・・・」

カミュの心境にどんな変化があったのだろう。
カミュの言葉には、リーシャの疲れを考慮する言葉どころか、メルエやサラに至るまでも気を配っているのだ。
それが感じられたからこそ、リーシャは再びカミュに向かって頭を下げた。

「・・・・・メルエ・・・・・は・・・・・・？」

「　！！　」

リーシャの謝罪を横目に、カミュは何気なく他の二人を確認しようとして首を巡らし、一点を見つめて止まってしまった。
そのカミュの言葉に、リーシャも動きが止まる。

「・・・・・あの馬鹿・・・・・・」

何故か、カミュもリーシャも夜のメルエの動きを察知できない。
気配が動くのを感じないのだ。
それが何故なのか、カミュにもリーシャにも理解できない。

「・・・・ん？・・・・・・ど、どうかしたのですか？」

カミュとリーシャのやり取りに、身体を横たえていたサラが目を覚まし、目を擦りながら事の次第を問いかけてきた。
カミュは、サラの顔を見ても何の返答もせず、周囲を再び確認し始める。
そんなカミュの態度に溜息を吐きながらリーシャが答えた。

「メルエが居なくなったんだ！　この近くにいることは間違いないと思うんだが・・・」

「　えっ！？　どうしてですか？　はっ！　ま、まさかカミュ様が言っていたことですか？　」

リーシャの答えに、しばらく呆けていたサラだったが、頭の回転が正常に戻ると、すぐに夕方にカミュがメルエに言っていたことと結びつけた。
その表情、話し方全てが、いつものサラであり、そこにあの暗い影は差していなかった。

「　カ、カミュ・・・ど、どうするんだ！？　」

「・・・はぁ・・・落ち着け・・・例え魔物が出てきたとしても、メルエならば夜明けぐらいまで魔物と戦うことはできるだろう。」

「し、しかし！！」

メルエのこととなると何故か我を忘れてしまうリーシャのパニック状態を見て、カミュの方は逆に落ち着きを取り戻す。
しかし、カミュも言葉とは裏腹にメルエを案じていることはその表情を見ればすぐに分かった。

「手分けして探しましょう！！　今、私達がここでメルエを案じても仕方ありません。」

「そ、そうだな。」

その二人の慌てぶりを余所に打開策を講じたのは、意外にもサラであった。
サラの冷静な判断に、ハトが豆鉄砲を食らったような顔をしてリーシャが頷き返す。

「では、リーシャさんは向こう。　カミュ様が向こうで、私はあちらを探します。　一刻程経ったら、見つけても見つからなくても、ここに集合ということでいいですね。」

「・・・ああ、わかった・・・・」

きびきびと指示を出すサラに、面を食らいながらカミュも頷く。
実際、カミュはメルエの目的を理解しているだけに、それほど心配はしていないが、雨により避難していた魔物達の警戒心を刺激しメルエが襲われやしないかという部分が気にかかっていたため、素直にサラの指示に従ったのだ。

三方に散ったカミュ達は、それぞれの手に＞たいまつ＜を持ち、森の中を彷徨い始める。
リーシャがメルエを呼ぶ声は、逆方向を探しに行ったサラの耳にもしばらくの間聞こえていた。　それも次第に遠くなり、聞こえなくなったころ、サラは雨でぬかるんだ地面に残る小さな足跡を見つける。

その足跡を追っていくと、サラは妙に開けた場所に出くわした。
そこは、森の中でも一際大きな木々がそびえ立ち、その木々の伸ばす枝と葉のおかげで雨の雫一つ落ちてこない。　そんな場所であった。

真っ暗なその空間に＞たいまつ＜の火を向ける。
サラはここに来て、自分が真っ暗な暗闇の森の中、自分が一人で歩き回っているという事実に気がついた。
メルエのことを聞いてから、必死な想いが大部分を占め、そのことに気が付く余裕はなかった。　故に大胆にも、頼りになる二人とは別方向を選択し、ここまでの道を歩いてきたのだが、開けたところに出て、そこへ火をかざす瞬間にサラの心は冷静さを取り戻し、恐怖心を呼び起されてきたのだ。

「　ひっ！！　」

サラは自分がかざした火の先に、二つの光る物を見て悲鳴を押し殺した。
その二つの光は、しばらくはじっと動かなかったが、急に上昇し、ある一定の高さを保ったままサラの方向に向かってきたのだ。

「　ひっ！　ひぃぃぃ！！　」

「・・・・・・・」

サラは恐怖で膝が笑い始め、その場を動くことが出来ない。
しかも、一度照らすために掲げた＞たいまつ＜を落としてしまい、足元以外を暗闇で覆ってしまったため、更に恐怖が増していく。

「・・・・・・・・何・・・・・・・・・・・・？」

「へっ！？」

二つの光が次第に大きくなり、ぼんやりとその光を象る影が見えてきたとき、その光は言葉をサラに掛けてきた。
その声はサラの知っている声であり、間抜けな声を上げることとなる。

「メ、メルエですか！？」

「・・・・・・・・・」

サラの記憶にあるこの声の持ち主の名を呼ぶと、その二つの光は、ゆっくりと上下に動いた。　その反応に『ほう』と溜息を漏らし、足元に落ちた＞たいまつ＜を掲げるとそこにはメルエが首を傾げて立っていた。

「よ、よかったぁ・・・・メ、メルエ、駄目じゃないですか。一人で歩いては・・・」

「・・・・・・・」

「本当に心配したのですよ。」

「・・・・サラ・・・・・・・メルエ・・・・・・・嫌い・・・・・・なった・・・・・・」

サラの安堵の溜息と、語りかける内容に、メルエは意味不明な言葉を綴っていた。
サラは何のことか分からない。

「えっ？　どうしたのですか？」

「・・・・・・・サラ・・・・・・メルエ・・・・・・嫌い・・・・・？」

メルエはその言葉を言うと俯いてしまった。
サラは、全ては理解できなかったが、何が言いたいのか要点だけは解った。
つまり、メルエは自分がサラに嫌われたのではないかと心配しているのだ。

「そんなことはありませんよ。　私がメルエを嫌いになること等ありません。」

「・・・・・・・ホント・・・・・・・・・？」

「本当です。　そんな心配はいりませんよ。　例えメルエが私を嫌っても、私はメルエを嫌いにはなりません。」

「・・・・・・・・・」

力強くメルエに宣言するサラは、先程までのような怯えは一切なく、むしろ胸を張って答えている。　そんなサラにメルエは小さく微笑み、そしてこくりと頷いた。

「ところで、メルエはこんな夜中にひとりで何をしていたのですか？」

「・・・・・・・・・」

メルエの笑顔に心が晴れ渡るような感覚を覚えたサラは、少し気分を良くし、メルエに何をしていたのか問いかけるが、メルエは言いにくそうに俯いてしまった。

「　あ、い、いえ！　メ、メルエが言いたくないのなら、いいのですよ？　」

「・・・・・・言わ・・・ない・・・・・・？」

メルエの様子に調子に乗っていた自分の心を悔い、サラは慌てて弁解を始めるが、そんなサラを窺うように見上げ、メルエは話し出す。

「えっ！？　も、もちろんです。　誰にも話しません。　メルエと私の秘密です！」

「・・・・・・・・ひ・みつ・・・・・・？」

「はい！！」

メルエはサラの答えに訳が分からないのか首を傾げていたが、満面の笑みで頷くサラの表情に自分の言ったことを了承したことを感じ、そのサラの腕をとった。
不意に握られた手を引きずられるように、先程メルエがいたであろう場所までサラは連れて行かれる。

「・・・・・・・・ここ・・・・・・・・・」

「・・・魔法陣・・・？」

サラの答えに、メルエは黙って頷いた。
つまり、いつぞやのように、メルエは魔法の契約をしていたのだろう。

「メルエは、新しい魔法の契約をしていたのですか？」

「・・・・・・・・・」

「ん？　違うのですか？　契約できたのですか？」

「・・・・・・・・・」

サラの最初の問いに全く動かなかったメルエの首は、二回目の問いには、ゆっくりと横に振られた。　つまり契約の魔法陣は敷いたが、契約が成立しなかったのだろう。
それは、メルエの魔力が足りないのか、それともメルエの力量が契約完了まではまだないのか。　それは解らなかったが、契約ができずメルエが哀しんでいることだけはサラにも理解ができた。

「メルエは、毎日契約の儀式をしているのですか？」

「・・・・・・・」

メルエはサラの問いに素直に頷く。

実は、メルエは最初にカミュに契約の仕方を教わってから、毎夜、魔道書を持ち出して契約の儀式を行っていたのだ。

カミュの契約を見た時が夜中だったこともあり、メルエの頭の中には契約儀式＝深夜の儀式という構図が成り立っていたのだろう。

「メルエ、魔法の契約の仕方は誰に教えてもらったのですか？」

「・・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・」

メルエの答えに、若干顔を顰めたサラではあったが、その表情をすぐに戻し、もう一度メルエとの話をするため、空模様とは裏腹に乾いている地面に座り込んだ。

サラの様子に、メルエもその隣に座り込む。

「カミュ様は、メルエに魔法陣さえ敷けば契約できると教えたのですか？」

「・・・・・・・・・・」

サラの問いかけにメルエの首は横に振られる。

「では、メルエも魔法は簡単に契約できないことを知っているのですね？」

「・・・・・・・大き・・く・・・・・・・なって・・・・・から・・・・」

「ん？　そうですよ！　メルエが身も心も成長してからです！　だから、焦っても仕方ないですよ。　毎日新しい魔法を覚えられるということはありません。」

メルエは、カミュが言っていた言葉を思い出しながら、一生懸命サラに答えている。
それが解るから、サラも真剣に教えていた。

「メルエの気持ちも解ります。　私も、アリアハンの教会でお世話になっていた頃、早く魔法を覚えたいと思っていました。」

「・・・・・・・・サラ・・・・・も・・・・・・」

「はい！　でも、やっぱりメルエのように契約ができなくて、何度も泣いてしまいました。」

「・・・・・・サラ・・・・・・すぐ・・・・・泣く・・・・・・」

「うっ！　そ、それはメルエも同じですよ！」

「・・・・・・メルエ・・・・・・違う・・・・・」

その会話は、諭すように話すサラの雰囲気とは裏腹に、姉妹などが交わす会話のように和やかな、そして微笑ましいものであった。

「うぅぅぅぅ・・・・・それでいいですよ・・・・・とにかく！私もメルエと同じように早く魔法を覚えたいと思っていたのです。」

「・・・・・また・・・・・泣く・・・・・？」

「な、泣きません！・・・・・メルエこそ私のことが嫌いなのではないですか・・・？」

「・・・・・嫌い・・・・・じゃない・・・・・」

この二人の会話は全く前に進まない。

しかし、今度は間髪入れずに帰って来たメルエの答えに、サラは笑顔をつくる。

「よかった・・・私はね、メルエ。　今がとても充実しています。リーシャさんがいて、メルエがいて・・・・そして・・・・・カミュ様がいて・・・・・」

「・・・・・・サラ・・・・・・・・」

カミュの名を口にする時に若干顔を顰めたがそれでも、自分の中の気持ちを正直にサラは吐き出しているようだった。

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・嫌い・・・・・？」

「・・・どうでしょう？　確かにカミュ様の考えには納得いかないことばかりですし、怒りを覚えることもあります。　でも、カミュ様は私がアリアハンの教会にいるだけでは知りえなかったことを色々と教えてくださいます。　それに・・・・・」

『嫌い』か『嫌いじゃない』かの二通りしか『人』に対する評価を知らないのか、メルエの問いかけは酷く単純なものだった。
しかし、サラはカミュをその二通りの感情では計れないと感じていた。

「それに、カミュ様は勇者様です。　きっと、いつか分かってくださると信じています。　最近、カミュ様の優しさが少しだけ解るのです。　それはね、メルエのお蔭なのですよ。」

「・・・・・・メルエ・・・・・・？」

「はい。　メルエに接するカミュ様を見ていると、優しさを感じます。　とても冷酷に思っていたカミュ様は、やはり人々をお導きになる勇者様だと思うことが多いのです。　何故、あのような考え方をするのか理解はできませんが、もう少しカミュ様を見てみたいと思うのですよ。」

「・・・・・・カミュ・・・・・・勇者・・・・・・じゃない・・・・・・」

「　えっ？　」

今までサラの話を静かに聞いていたメルエが、サラの話に反論したのだ。
それに驚き、メルエの方に視線を向けると、メルエはサラの方をじっと見ていた。

「・・・・・カミュ・・・・・は・・・・・・・・・カミュ・・・・・・」

「!?　・・・・メルエは知らないかもしれませんが、カミュ様はこの全世界で勇者様として認められているのですよ?」

「・・・・・・・・違う・・・・・・・・・」

「　???? 」

メルエの必死の反論はサラには届かない。
カミュを勇者と信じているサラには、何故メルエがここまでむきになっているのかすら理解が出来ないのだ。

「メルエにとってはそうなのですね。」

故に、サラは無難な言葉を返すのみとなるが、幼いメルエはそれをサラも理解したと思い、頷くのだった。

「さあ、メルエ戻りましょう。　こんな寒い所にいたら身体を壊してしまいます。　リーシャさんもカミュ様もメルエを心配して探していますよ。」

「・・・・・・」

サラの呼びかけに頷いたメルエは、魔法陣の傍に置いてあった魔道書を大事そうに胸に抱えてサラの後ろについて元の道に辿るため歩き出した。

「あ、あれっ？　ここからどう行ったら戻れるのでしょうか・・・・？」

「・・・・・・・・こっち・・・・・・・・・」

しかし、最後まで締まらないサラの一言に、メルエが前に出てサラを先導することになってしまった。

「カミュいたか!?」

「・・・・・いや・・・・・・・」

一刻を優に過ぎ、リーシャが野営地に戻る途中でカミュと出くわし、メルエの所在を問いかけるが、返ってきたのは良いものではなかった。

「・・・そうか・・・ちっ、どこに行ったというんだ!?」

「あの僧侶の方かもしれない、一度戻ろう。」

カミュの提案にリーシャも頷き返し、二人は野営地に向かって走る。カミュもリーシャも途中で魔物に出くわしたのか、抜き身を剣を握っていたことに気が付き鞘へと戻しながら走った。

野営地に戻ってリーシャは周辺を見渡すが、サラの姿はない。もしかすると、自分達が襲われたように魔物に襲われたのではないか?

攻撃呪文を＞バギ＜しか使えないサラにとって、強力な魔物が何体も現れた場合、苦戦することは必至だろう。

「・・・・・・おい・・・・・・・」

そんな最悪な状況を考え、顔を青くしていたリーシャは、肩を叩かれ我に返った。
肩を叩いた人間に振り返ると、カミュが火の近くを指さし、呆れ顔で溜息をついていた。

「・・・・・・・ん・・・・・・・・？」

カミュの指さす場所を、目を凝らして見てみると、火の傍に置いてあったカミュのマントが異様に膨らんでいる。
カミュは呆れたように自分の寝床に歩いて行ってしまった。
リーシャは確認の為に火の傍まで進むが、途中で溜息を漏らしてしまう。

「「すぅぅ・・・・すぅぅ・・・・」」

そこには、カミュのマントに包まったサラとメルエが可愛らしい寝息を立てていたのだ。
メルエを抱きしめ、幸せそうな寝顔を見せるサラに、リーシャは呆れを通り越して笑みまで浮かんでしまった。

おそらく、メルエを見つけて戻っては来たが、リーシャもカミュも戻ってはいず、暖を取るためにメルエと共にマントに包まって火に

あたっている内に二人とも眠りに落ちてしまったのだろう。

何と人騒がせなことだろう。
しかし、そんな二人をリーシャは怒る気はなかった。

カミュはすでに身体を横たえ、眠りに落ちている。
今度こそ、カミュに厭味を言われないよう、リーシャは焚き火に薪をくべながらカミュとの交代時間まで見張りを続けるのだった。

雨はやむ気配はなく、未だに木々を揺らし大きな雨音を立てている。
この分では、リーシャの予想通り、明日も雨は降り続いていることだろう。

ロマリア大陸？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

ご意見やご感想など、たくさん頂ければ嬉しく思います。

よろしくお願いいたします。

シャンパーニの塔？（前書き）

お気に入り登録をして頂いた方々、ありがとうございます。
今回は多少短めですが、宜しくお願い致します。

シャンパーニの塔？

メルエが目を覚ますと、他の三人はもうすでに剣の鍛練を終えていた。
カミュは森に果物などを取りに行っているのだろう。
火の回りにはリーシャとサラしかいない。
周囲は昨晩とあまり変わらない程の明るさしかなく、それが今日の天気も雨であることを物語っていた。

「ん？　メルエ、起きたのか？」

メルエの身体が起き上がるのに気が付き、リーシャの首が動く。
どうやら、鍛練後の魔法についての勉強をサラとしている様子だった。

「メルエも文字の勉強をしますか？」

「・・・・・・」

続いて掛った声の主であるサラも、カミュと衝突していたサラではなく、昨晩メルエと話していたような優しいサラのままであること

に嬉しくなったメルエはサラの問いかけにこくりと頷くのだった。

その後、果物を両手に抱えたカミュの帰還と同時に朝食となり、それを食べ終わると三人は森を出る準備を始めた。

＞カザーブ＜で購入したメルエの為の少し小さめのマントをリーシャがメルエに着せ、冷たい雨の中でも体温の低下を抑える為の処置をする。

最初は自分に着せられるマントを不思議そうに見ていたメルエではあったが、マントというカミュとお揃いのものを自分も着せられたことを素直に喜んでいた。

「さあ、行こう。　カミュ、この雨では視界も悪い。　離れずに行こう。」

「ああ。　しかし、あまり時間をかければ体温を奪われる。　ある程度のスピードで行く。　アンタには悪いが、メルエのことを頼む。」

リーシャの提案を認めながらも、できるだけ早く塔内部に入るため

にリーシャにメルエのことを頼むカミュの姿を、リーシャはもはや驚くこともせずに受け入れた。

「・・・わかった。　サラ、メルエの手を引いて歩いてくれ。私は最後尾を歩く。」

「あっ、は、はい。　メ、メルエ・・・私でいいのですか？」

「・・・・・・」

リーシャの声に慌てて返事を返すサラは、昨日のメルエの態度を思い出し、手を引くのが自分でいいのかをメルエに恐る恐る問いかけるが、しっかりサラの目を見ながら頷くメルエを見て、その頬を緩めた。

「　よし！　カミュ、行こう！　」

昨晩、共に眠る二人を見てはいたが、若干心配の残っていたリーシャは、サラに向かってしっかりと頷くメルエを見て、明るい声でカミュに出発を促した。

雨はその激しさを更に増し、一寸先すらも見えないという状況になり、メルエの手を握るサラは自分の視界からカミュが消えてしまわないよう必死に歩き続けた。
豪雨と言っていい程の雨であるからだろうか、塔へと続く道で一行は魔物と一切遭遇することがなかった。

いや、実際、魔物と遭遇しながらでも、天気の良い晴れた道の方が一向にとっては良かったのかもしれない。　昨日は見えていた塔は全く見えず、サラは自分達が本当に塔へと向かっているのかすら分かっていなかった。　豪雨により衣服は下着までが濡れてきており、そのための体温の低下、そして体温の低下による体力の低下。　特に幼いメルエには厳しい物に違いないだろう。

「早く、中に入るんだ。」

塔の入口に辿り着いたカミュは、メルエの手を引くサラの腕をとり、塔の内部へと導いていく。
突然握られた腕にサラは驚き顔を上げるが、体力が心配なメルエのことを考え、カミュに導かれるまま塔の内部へと入って行く。
その後を、最後尾を歩いていたリーシャが続き、最後にカミュが中に入って行った。

塔内部は、とても盗賊のアジトとは思えないほど静まり返っており、

激しい雨音だけが響いている。　カミュは内部を確認しながら壁伝いに進んでいった。　ずぶ濡れの衣服を気にしながらも、その後をサラ、メルエ、リーシャの順に進んでいく。
少し進むと、例の如く左右への別れ道に出た。

「ここは右じゃないのか？」

「　リ、リーシャさん！？　」

「・・・？？？・・・」

別れ道で立ち止まったカミュに最後尾からいつもの声がかかる。
その声に『またか！！』という想いからサラが声を上げ、その様子を理解できないメルエの首が傾いた。

「・・・ふぅ・・・アンタが右だと言うのなら、右が行き止まりということか・・・」

「　ど、どういう意味だ！？　」

先頭を行くカミュから溜息交じりの言葉が漏れ、その内容にリーシャは声高らかに反論しようとするが、振り向いたサラの目を見て、口を噤んでしまう。

カミュとサラは、リーシャの当てずっぽうには散々苦汁を舐めさせられているのだ。
それを責めることはないが、『またか』という想いまでは隠そうとはしていない。
それはサラの目が物語っていたのだ。

「えっ？　あ、あれ？　カ、カミュ様!?」

しかし、そこから起こしたカミュの行動に、サラの目は驚きに包まれ、素っ頓狂な声を上げることになる。
カミュは自分でも言ったように、リーシャの指し示した方向が行き止まりである可能性が高いと理解しているにもかかわらず、その方向に向かって歩き出したのである。

呆然とするサラを置いて、カミュの後をトテトテとメルエが続き、その後ろを若干得意気にリーシャが歩いて行った。
釈然としない想いを胸に残しながらも、サラは皆の後ろについて行く選択肢しか残っていなかった。

「「「・・・・・・・」」」

しかし、やはりその先には周囲を壁に覆われた少し開けた空間があるだけであった。
サラにとっては当然の結果と言えるこの状況にサラは溜息をつきそうになる。
リーシャはリーシャで、この結果が悔しいながらも、皆に申し訳がないと言う気持ちが強く、項垂れていた。

「・・・・・何・・・・・・？」

そんな二人それぞれの反応を余所に、メルエが口を開いた。
メルエの視線の先には、この場所に先頭で入って行ったカミュ。
メルエの声に顔を上げた二人もカミュへと視線を向ける。

全員の視線を向けられたカミュは、マントの中で抱えていた革袋を逆さにし、塔の床に何かを落としていた。
その革袋は、本来カミュが換金目的である魔物の部位を入れておくものだ。
カミュは革袋の中身を換金した後、この革袋を洗ってから干しているため、魔物の体液で満たされていることはない。

カミュの行動を不思議そうに見ていた三人の目に、革袋から出てきたものが映る。
それは、大量の枯れ木だった。

「・・・枯れ木・・？　何をするんだ？」

「・・・はぁ・・・薪を取り出したら、することなど一つしかないだろう。」

革袋の中身を見て、その用途を問いかけるリーシャに、溜息を吐きながらカミュは答える。
確かに、このような塔の中での行動としては少し妙な部分はあるが、この状況で枯れ木を取り出したとするならば、カミュの言う通り、することなど一つだろう。

濡れたマントを脱ぎ、カミュは火を熾し始めた。
全員の衣服はずぶ濡れの状態である。
今の天候や気温を考えれば、衣服が乾くよりも先に体調を崩しかねない。
故に、火を熾し衣服を乾かし、暖をとって体力の低下を避けようというのだ。

「・・・随分用意がいいのだな・・・」

「・・・普通に考えれば分かることだろ？　ただ、これは一度きりだ。　この後は、暖を取る為の火を熾すことはできない。」

メルエは、カミュの手元で煙を上げ始めた木々に目を輝かせている。
カミュやリーシャを困らせたり、それによって自分を疎ましく思われたくなかったのかもしれない。　口には出さなかったが、相当肌寒さを感じていたのだろう。

「・・・暖かいですね・・・」

火がともり、揺らぐ炎を囲みながら、四人は自分の身体を包む衣服を乾かし、身体を温めようと火に近づいた。

「こ、こら！　メルエ！　そんなに火に近づくな！　服が乾く前に燃えてしまうぞ。」

「　！！　」

リーシャに腕を引かれ、メルエはリーシャの腕の中にすっぽりと収まった。
冷たい衣服によって冷え切った身体に、リーシャの体温による温もりは心地よかった。
自然とメルエの瞼が落ちてゆく。

「あっ、メ、メルエ！　寝ては駄目ですよ！」

「！！」

瞼が落ち、夢への旅路を歩み始めようとしたメルエをサラの叫びが引き戻す。
驚きと共に開いたメルエの目は、自分の心地よさを妨げたサラへと鋭い光線を発するのだった。

「うぅぅ・・・そんな目をしても駄目です。」

「あははっ、そうだぞメルエ。　まだこの塔に入ったばかりだ。衣服が乾いたらすぐ出発だぞ。　眠るのはまだ早い。」

「・・・・・・」

メルエの視線に怯えながらも気丈に言い放つサラの様子に、リーシャは笑い声を上げ、自分の膝に乗るメルエの頭を撫でながら諭すが、メルエは眠い目を擦りながら不満げに頬を膨らませていた。

「さあ、さっさと服を乾かしてしまおう。」

「・・・・・・」

尚も優しく声を掛けるリーシャにしぶしぶながら頷き返すメルエにサラはほっと胸を撫で下ろした。
サラの気が緩んだその時、火に集まる全員の前に出てカミュが背中の剣に手をかけた。

「何でこんな所に女とガキがいやがるんだ？　ここは悪名高い＞シャンパーニの塔＜だぜ！？」

現れたのはカミュが警戒していた魔物ではなく、二人の男だった。
容貌はガラが悪く、目は血走ったように赤く、無精髭とも言えないものを蓄えた人間である。　一目見ただけでとてもまともな仕事をしているような人間ではないことが分かった。

「　何の用だ！？　」

「　おお怖い。　アンタ達こそ、この塔に何の用だ？　」

メルエを膝に抱いたまま、凄むリーシャに何の恐れも抱いていないように、男の内の一人が肩を竦めながらカミュ達の目的を聞き返す。
リーシャの怒気に近い程のものに動じない程の実力者なのか、それ

ともそれを感じ取れない程度の者なのかは解らない。
しかし、疑問を疑問で返しながら不用意に近づいてくる男達の様子から、おそらく後者なのだろうことは推測できる。
その証拠に・・・・

「・・・それ以上近づくな・・・」

カミュが背中の剣を素早く抜き、前を歩く男の喉元に突きつける行動が男達には見えていなかった。　剣を突き付けられた男は、若干怯(ひる)む様子を見せるが、一歩下がることによって再び厭らしい笑みを浮かべた。

「　なんだよ？　俺達とやる気なのか？　」

「へへへっ。　こいつら、ここが誰のアジトなのか知らねぇんじゃねぇのか？」

単純に見れば、４対２の構図である。
幼い子供が見た所で、数の上では圧倒的にカミュ達が有利だ。
それぐらい、この男達も解っているだろう。

「　そうかもしれないな。　へへっ、仕方がねぇから教えてやるが、俺達はカンダタ一味だ。　まさか、カンダタの名前も知らねぇとは言わねぇよな？」

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

「　おお、恐怖に声も出ないか？　へへへっ、おい坊主、その三人の女達を置いて行くんなら、お前の命は見逃してやってもいいぜ？」

だが、男たちから見れば、四人のうち三人は子供と見えるのだろう。メルエは言うに及ばず、少女と言っていい。

サラにしても、カミュより一つ年上とはいえ、見た目はレディと言うにはまだ早いように見える。　そして、カミュは唯一の男ではあるが、少年から青年に変わる頃の年相応の子供に映ったのだろう。

残るリーシャは、剣を腰に差しているとはいえ、所詮女性だ。

ロマリアの騎士達を幾度も撃退してきたという自信がある彼等にとって、それは対した脅威にはならないと判断したのだろう。　それが彼等の口調と態度が物語っていた。

「　へへっ。　そうだぜ？　命は大切にした方がいいぜ、坊主。この三人の女どもは俺達が責任を持って可愛がってやるからさ。」

男達の態度と言動から、その実力を確認したのか、カミュが＞鋼の剣＜を鞘に戻す。

「　カ、カミュ様！！　」

「「・・・・・」」

カミュの行動に、サラが驚きの声を上げる。
まさか、カミュがこんなならず者を恐れたということはないだろうが、『いい機会だ』と言って自分達を見捨てるのではという考えをサラは振り払うことができなかったのだ。
それに対し、カミュと同じように『いつでも斬り捨てられる』と見ていたリーシャと、状況をいまいち掴めていないながらも、カミュとリーシャの態度から良い人間ではないことを理解したメルエはただ黙って成り行きを見ていた。

「そうだぜ、それでいい。　後は俺達に任せて、さっさとこの塔から出て行きな。」

「へへへっ、久々の上玉じゃねぇか？　あの僧侶と剣士は俺達で楽しむとして、あのガキはどうする？」

カミュが剣を鞘にしまったことにより、先程よりも余裕を大きくした二人が、カミュが消えた後のことを話し始める。
それは、リーシャとサラにとっては我慢できないことであり、ましてやサラにとっては男二人相手では一人で対処できるものではなかった。

「ああ？　そうだな・・・・ああ、前にしたように狩りをすればいいんじゃねぇか？」

「おお！　そりゃいい。　この塔の中でガキ狩りか。　でもよ、あの時は夜の森だったからな。　ちょっと簡単すぎるんじゃないのか？」

「・・・・なんだと・・・・・？」

しかし、続く男達の話の内容にいち早く反応したのは、憤るリーシャでも、顔を青ざめさせたサラでもなく、剣を鞘に仕舞い戦闘態勢を解除していたカミュだった。

「　ああ？　」

「・・・もう一度、詳しく話してもらおうか・・・？」

女達を置いて、早急に塔から立ち去ると思われていた少年に自分達の話の腰を折られたことに男達は腹を立てる。
しかし、挑発的な返しをしながら振り向いた先には、先程と同じような無表情ながらも全てを凍らせるような雰囲気を纏うカミュが立っていた。

「ああ!?　まだいたのか、坊主!　お前にもう用はないんだよ!　さっさと消えちまいな!」

「・・・・・お前らになくても、俺にはあるんだ・・・・・・」

「なっ!!」

怒気を通り越した殺気に近いものを纏ったカミュの返答が、挑発的な言動を繰り返していた男達の口を縫いつけた。

「・・・・何度も言わせるな・・・・お前たちが話していた内容を詳しく話せ・・・・・」

「・・・カミュ様・・・」

「・・・カミュ・・・」

地獄の底から響くような低い声に、サラは久しく感じていなかったカミュへの恐怖を思い出す。　リーシャの方は、カミュの背中から漂う殺気の原因に見当がつき、果たして自分がカミュの怒りを止めることができるのかを悩んでいた。

「て、てめぇ、誰に上等な口を利いてんのか分かってやがるのか！？」

それでも、カンダタ一味としてのプライドなのか、それとも身も竦むような思いを誤魔化すためなのか、男達は虚勢を張る。
そんな男達を冷ややかに、そして威圧的に睨むカミュの姿に、男達とは別に後方に控えるサラは恐怖で身体が硬直していくのが分かった。

最近は、メルエの加入により、カミュの物腰は幾分か柔らかいものになった。
サラに対しても、＞カザーブ＜の村での出来事のように多少は気を使ってくれるようになった。　勝手についてきた厄介者ではなく、旅の仲間として見てもらえるようになったのではないか。　そうサラは感じていたのだ。

しかし、今のカミュの後ろ姿に否応にもその異常さを受け入れさせられる。
あの勇者は、本当に人も魔物も同じと思っている。
例え人であったとしても、何の躊躇いもなく斬り捨てるだろう。

最近感じる優しさやメルエに対しての困惑など、表情に変化を生みだすカミュに自分は甘えていたのではないか？
もし、カミュがその気になれば、自分等何の躊躇いもなく斬り殺されるのではないだろうか？

一般的な常識であれば杞憂に終わるはずのサラの心配は、自力で立っていられなくなったサラがリーシャの身体に捕まったその時に現実のものとなる。

「ギャーーーーーーーー!!」

鞘に納めたはずの剣がカミュの右手に握られていたのだ。
カンダタ一味の男達と問答をする気など毛頭ないカミュは、男達の挑発が終わるか終らないかの瞬間に背にある鞘から＞鋼の剣＜を抜き放ち、男の腕を斬り落としたのだ。

「あ・・あ・・・」

「「・・・・・・・・・」」

恐怖から言葉がうまく出てこないサラ。
空中を漂い、枯れ木の如く地に落ちた男の肘から先を黙って見つめるリーシャとメルエ。
そして、仲間の腕が一瞬にして消えうせたのを見て、自己の中での恐怖が明確化した男。

「て、て、てめぇ・・・・・・」

「・・・・・話せ・・・・・」

腕から盛大に血を噴き出させながら、床を転げまわる仲間を見ながら、カミュへと怒りを表す男であったが、返ってきたカミュの静かな一言で、明確化した恐怖心が怒りを覆い隠す。

「あっ。」

その時、今まで全く口を開かなかったリーシャが、場にそぐわぬ間抜けな声を上げる。
恐怖に居たたまれなくなった男が踵を返し逃げだしたのだ。

しかし、力量の差がある者から逃げ出すことなどできない。
それは、魔物対人間も、そして人間対人間でも同じことである。

「ギャーーーーーー!!」

先程まで雨音しかしなかった塔の一階部分に、再び絹を裂くような悲鳴が轟く。
悲鳴と共に、逃げだそうとした男の大柄な体は地に伏すような形で崩れ落ちた。

先程の男の肘から先を飛ばしたように一閃されたカミュの剣は、逃げようとした男の膝から下を斬り飛ばしたのだ。
自己の大柄な体を支える杖の片方を失った男は膝から血を垂れ流しながら苦悶の表情を浮かべ、悲鳴を上げ続ける。

サラは二人の男の甲高い悲鳴を聞き、更に恐怖心を増していった。

何故、カミュは話を聞く前にこのような行動に出たのか。
人々を導く勇者であるカミュが、例え盗賊といえども『人』である男達に行った行為は、決して納得できることではない。
しかし、恐怖からサラの口から言葉が紡ぎだされることはなかった。

「・・・・・言え・・・・・お前らがしたことを・・・・・」

「「　ひぃ！！　」」

血を噴き出しながら転げまわる二人を足で踏みつけながら、更に剣を突き付けるカミュの姿は、サラにとって魔王にも思えたことだろう。
しかし、それはサラ一人だけだったのかもしれない。
なぜなら、同じ様に恐怖を感じる筈のメルエや、カミュの行動を諫めようとする筈のリーシャはその双眸を細め、黙って光景を眺めていたのだから。

「・・・あ・・・あ、あ・・・い、今・・・治療を・・・・」

やっと口から吐いて出た言葉は、サラの人柄を滲ませるものだった。
『どんなものであろうと、失くしていい命はない』
カミュに言ったサラの言葉は、こと『人』に関しては嘘偽りはないのだろう。
しかし、言葉と共にようやく動き出したサラの足は、一人の青年の冷たい言葉に遮られた。

「・・・・必要ない・・・・・・」

静かだが有無も言わせぬ威圧感を持つその言葉に、サラはその発言元であるカミュを見た。
そこにいたのは、とても『人』とは思えない程の冷酷な目をした無表情に立つ一体の石造のような勇者。

「・・・おい、お前たちの傷は致命傷ではないが、このまま長く治療をしなければ死を招く。　もし、治療を受けたいのなら話せ・・・」

「・・・カ、カミュ様・・・」

更には脅し。
とても、人々の希望が取る行動ではない。
何がカミュをここまで冷酷にさせたのか。
剣を鞘に納めた時のカミュは、無表情ではあるがここまで殺気立ってはいなかった。

「・・・・話さないのなら・・・・死ね・・・・・・」

「　ひぃっ!!　は、話す!!　」

しかし、サラが考えていたのとは違い、この場にいる人間だれ一人として、カミュの発言を脅しとは思っていなかった。
リーシャですら、カミュは二人の男を殺すつもりだと感じていたのだ。

それを誰よりも明確に感じたのは、血を流しながら床を転げまわっていた男達であろう。
二人の男は、自分達の身体を襲う激痛に顔を歪めながらも、カミュの言葉に従うことを大声で示していた。

男達が、カミュの顔色を窺いながら話した内容は、嘘偽りのないものだった。
それは、嘘を言おうとすると、何故それが解るのかは理解が出来ないが、カミュの剣が喉元に食い込んでくるのだ。
自然と男達は真実を話すこととなる。

全てを話し終わった時、男達が見た物は、本当に何も感じられない表情をした少年と、その後ろから鋭い視線を向ける少女の眼差しだった。

「・・・・・・それで、全部か・・・・・・・・？」

「　は、はい！　」

話が終わってから、誰一人口を開こうとしなかった重苦しい空気を破る一言がカミュの口からこぼれ、今やカミュに対して敬語になってしまった男達は、それぞれの患部を押えながらも何度も首を縦に振る。

その滑稽とも言える姿に対しても、誰一人表情を緩めることはなく、逆に肯定を繰り返す男達に殺意に似た感情を持っていた。

「・・・・・・・・・・イ・・！！！　うぅぅ・・・・・・・・・」

「　メ、メルエ！！　こんな所で魔法を使うな！　」

その証拠に、カミュの後ろでリーシャの足につかまりながら成り行きを見ていた幼いメルエでさえ、男達に指先を向け魔法の詠唱を行おうとしていたのだ。

メルエの不穏な動きに咄嗟にとったリーシャの行動がそれを止めは

したが、リーシャ自身もメルエの行動を止めたことが果たして正しいことなのか判断できずにいた。

「お、お前の言うとおり、ちゃんと話したんだ。治療をしてくれ！」

「ううぅ、いてぇよ・・・・・」

足を斬り飛ばされ立ち上がることもできない仲間の代わりに、身体を起こした男の方が、先程のカミュの言葉の遂行を嘆願する。しかし、先程自分から志願して動き出そうとしたサラでさえ、その男の嘆願に動こうとはしない。いや、動けないのだ。

「・・・・・何の事だ・・・・・・・・？」

「なっ！？」

それは、カミュの纏う空気が先程と全く変わらないどころか、サラの行動を抑制してしまう程に鋭かったのだ。もし、カミュのその眼差しが、その言葉がサラに向けられたものだとしたら、サラは再び＞カザーブ＜で見せた失態をここで見せることになったかもしれない。それ程、カミュの纏う怒気、殺気は凄まじいものであった。

「・・・・俺は、お前達と約束した覚えはない・・・・・・」

「ふ、ふざけるな！！　お前は、話せば治療をすると言っただろう！！」

治療を望む男達にカミュが返したのは、果てしなく冷たい一言。
その表情はとても冗談を言っているものではなかった。
怒りと共にカミュへ食ってかかるが、男達の胸には絶望感が広がって行く。
それは、次のカミュの言葉と行動で確定した。

「・・・・『治療を受けたければ話せ』と言っただけだ。　治療をこちらがするとは言っていない。　お前達を生かすとも言っていないはずだ！」

「イギャーーーーーーーー！！」

カミュの言葉は男達を奈落の底に突き落とすものだった。
しかも、カミュは持っていた剣を再度振り、カミュに怒鳴り散らしていた男の足をも斬り飛ばしたのだ。

「カ、カミュ様！！」

腕と足を斬り飛ばされた男は、盛大に血を撒き散らしながら地面を転げまわる。
再び轟く、闇を切り裂く悲鳴に、皮肉にもサラの口はやっと動くようになった。

「触るな!!」

しかし、治療の為に動こうとしたサラに、今まで聞いたこともないような怒声が降りかかる。　振り返ったサラは、声の主であるカミュを一睨みし、その声を無視して男達の治療に入る。

＞ホイミ＜を詠唱したサラの右手を淡い緑色の光が包み、その手をかざしていた患部を照らしていく。　光と共に患部の痛みも和らいでいき、苦痛に歪んでいた男達の表情も同様に和らいでいった。

「・・・サラ・・・」

「・・・・・・・・」

カミュの制止も聞かずに治療を始めたサラの名前を溢したリーシャの表情は、何とも言えない歪んだものであり、その横に立つメルエのサラに向ける視線は冷ややかな物だった。

「・・・服は乾いたな・・・・・？　・・・・・・・行くぞ・・・・

・・」

「ま、待って下さい！　この方達はどうするのですか？」

治療をするサラを冷めた目で見ていたカミュであったが、興味を失くしたように後ろを振り向き、リーシャとメルエの着ている服を確認し、出発を告げる。
しかし、その確認の対象にサラは入っていなかった。

「カ、カミュ様！　質問に答えてください！！」

自分の方を向くことなく、足を進めるカミュにサラは我慢できずに叫び声に近い声を上げた。　それでもカミュはサラを振り返ることなく歩いて行く。

「・・・そのまま放置していればいい・・・血の匂いに誘われて来る魔物達の恰好の餌になるだろう。」

「そ、そんな！？」

「「ひぃぃ！！」」

振り返ることなく呟いたカミュの言葉にサラは自分の耳を疑いたくなった。
とても『人』の所業とは思えない。
しかし、リーシャやメルエにしてみれば、今芋虫のように転がっている二人の男達の所業も『人』のものとは言えない。　云わば自業自得なのだ。

「・・・それに・・・アンタこそどうするつもりだ？」

「　は？　」

ようやく振り返ったカミュは、冷たく冷えた目をしたまま、サラに意味不明な問いかけを投げかける。　サラはカミュの言っていることが何のことなのか全く見当もつかない。

「・・・昨日、アンタが俺に言ったことをそのまま返す。　そいつ等を助け、生かすことで、またそいつ等の被害に合う人間がいたら、アンタはどう責任を取るつもりなんだ？」

「　えっ？　」

「・・・アンタにとって、俺の行動全てが気に食わないのも解るが、たまには自分の頭だけで考えてみるんだな・・・・」

その言葉を最後にカミュは、開けた場所を出て行った。
その後をとてとてと歩くメルエが続き、そのメルエを保護するようにリーシャもあるいて行こうとする。
サラは、リーシャぐらいはサラの意見に同意してくれるだろうと考えていた。
しかし、それは見事に裏切られる結果となる。

「リ、リーシャさん！！」

それでも諦めきれないサラはリーシャへと言葉を投げかける。
その希望も振り返ったリーシャの目を見て絶望へと変わって行った。

「・・・サラ・・・カミュの言葉を全面的に支持するわけではないが、今の私はメルエとカミュの怒りを抑えることで精一杯だ。　そいつ等には今、命があることだけでも感謝してほしい。」

それは詭弁。
リーシャがサラと同意見であれば、カミュへと怒りをぶつけていただろう。
それをしないということは、カミュ寄りの意見なのだろう。

「・・・・そ、そんな・・・・」

メルエはサラを一瞥もせずにカミュを追って行く。
リーシャもその言葉を最後にその場を後にした。

残ったのは呆然とするサラと、＞ホイミ＜により傷が塞がったものの、己から出た血溜まりの中で絶望の淵に落ちている二人の男達だけとなる。

「お、おい！！　た、たすけてくれ！！　お前、僧侶なんだろ！？　まさか、このまま俺達を見捨てて行ったりはしないよな！？」

「・・・・・・」

サラには答えられない。
自分一人で何ができると言うのだ。
大柄な男二人を担ぎだすことなど不可能に近い。

「な、何とか言えよ！　僧侶が嘘を付くのかよ！？　俺達はちゃんと話しただろ！？」

「！！」

男の言葉にサラの顔が上がる。
男達が話した内容が鮮明にサラの頭に呼び起された。

男達は、サラの表情の変化、いや感情の閉鎖を知ることになる。
それと同時に自分達の未来へと続く扉も閉じたことを理解したのだ。

「お、おい・・・ま、まさか・・・・」

「たすけてくれよ!!」

徐(おもむろ)に立ち上がったサラを絶望の表情で見上げる男達。
しかし、そんな男達の嘆願も、もはやサラには届かなかった。
法衣の裾を皺ができるほど握りしめ、しばらく男達に背を向けるように立っていたサラは、決意をしたように顔を上げ、猛然と走りだした。

「・・・あ・・・・あああああ・・・・」

誰も居なくなってしまった空間に、もはや燃え尽きようとする焚き火と、焚き火の灯りがあるにもかかわらず目の前が真っ暗になってしまうような感覚に陥った男達だけが残った。

やがて、焚き火の炎も消え果て、その広間を冷たい空気が支配する。
血の臭いが充満する中、何とか這ってでも移動をしようと試みる男達の前に大量の影が差す。　塔の一階部分に再び絹を裂くような悲鳴が轟くが、その悲鳴も一瞬の内に潰え、『人』ではないものの咆哮と肉を裂き、骨を砕く音だけが響いていた。

シャンパーニの塔？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回は、2話に分けることにしました。

次話は男達が話した話の内容についてです。

過去～アン～（前書き）

今回は・・・・ちょっと・・・・・

過去～アン～

「はぁ・・・はぁ・・・」

日が西の大地に沈み切り、夜の帳が降りてからすでに数刻の時が経ち、所々に立つ木々たちも眠りについた山中を一人の少女が駆けて行く。
日が沈んだ頃から走り続けていた少女の息は呼吸困難に陥っているかのごとく粗い物になっていた。

「・・・はぁ・・・はぁ・・・うっ、ごほっごほっ・・・・」

呼吸困難の末、咳込みながら口の中に溜まった唾とも痰とも言えない液体を少女は吐き出した。　もはや、少女の顔の穴という穴から様々な液体が出ており、年の頃7．8歳という少女の愛らしい部分は全く見られない。

数刻前までに彼女と共に居た母親は、少女が走り始める少し前に目

の前で動かなくなってしまっていた。いつでも優しく、常に少女に向けられていた暖かい微笑みはもう二度と見ることは叶わない。

少女の名は『アン』。
この山の麓にある＞カザーブ＜という村にある道具屋を営む男の一人娘である。
過疎化が進む村の中、道具屋夫婦に生まれた待望の子であり、常に両親の愛を一身に受けていた少女。
その少女が何故、このような山中を一人、涙と鼻水で顔を汚しながら駆けているのか。
それは、太陽が傾き始めたころまで遡ることとなる。

＞カザーブ＜の村は子供が少ない。
過疎化が進み、若者と言える人間自体が少なくなってきているのだ。
最近では旅人も少なく、村に移住してくる人間も皆無に等しい。

故にアンには遊び相手がいなかった。
もの心ついた頃から一人で遊ぶことが当たり前になっていた。
大抵は家の中が多いのだが、天気も良く、陽が暖かい日等は、外に出て何をする訳でもなく、花を見たり虫を見たりしながら歩きまわることが彼女にとっての遊びとなっていた。

この日も、朝から雲一つなく晴れ渡った空は、まるで神の慈悲を降り注ぐような暖かさを運んでいた。
昼食を終えたアンは、母親に外に出ることを告げ、村の中を歩き始める。
自宅を出て、アンのお気に入りの場所である湖に浮かぶ島のような場所に足を進めていた。

そこにはいつも老人が火を熾し何かを焼いている。
この老人はアンの祖父とも仲が良いらしく、アンと解るとにこやかにほほ笑みを返してくれる。
初めてこの場所に足を運んだアンの『何を焼いているの?』という問いかけに、いつもと同じ微笑みを浮かべた老人が火の中から二つの芋を取り出しアンに手渡してくれたことがあった。
それから、ここはアンのお気に入りの場所となったのだ。

「ほほほっ、アンよ。　今日はお芋さんはないぞ。」

「うん!　アンはお昼ごはんを食べてきたからいらないわ。」

アンが笑顔で現れたことに嬉しそうな微笑みを浮かべた老人は楽しみにしているだろうと思って声をかけるが、アンからは笑顔と共に

違った答えが返ってきた。

「そうか、そうか。　そう言えばもうお日様がてっぺんを越えてしまっていたの。」

「おじいちゃんはお昼ごはんを食べてないの？」

まるで昼を過ぎたことを忘れたかのようなことをいう老人を心配し、アンは一度家に戻り何か食べ物を持ってこようかと考えていた。

「いやいや、わしはいいんじゃよ。　腹も大して空いておらんしの。」

「おなか減らないの？」

「うむ。　アンの様にお転婆ではないからの。　動かなければそんなにおなかは減らんよ。」

「　アンはお転婆じゃないわ！！　」

自分を心配してくれるアンの優しさに尚一層顔の皺を深めた老人は軽い冗談を言ったつもりだったが、アンにとっては酷い心外な言葉

だったようだ。
しかし、頬を膨らまし、老人から顔をそむけるアンの姿が尚更可愛らしく、老人の笑みは増していくのであった。

「それよりも今日はどこに行くのかな？」

「もう！　アンは怒ってるんだからね！」

「すまん、すまん。　で、アンはどこへいくのじゃ？」

話をそらそうとした老人の目論見にアンの許可は下りなかった。
頬を膨らまし、腰に手を当てる少女の姿は、可愛らしい以外の感想を持つことはできないのだが、老人は慌てた様子を作り、頭を下げることにした。

「今日はね、お花を摘んで、それを教会に持って行くの！」

「ほぉほぉ、そうか。　それは良いことじゃ。」

「　うん！！　」

今鳴いたカラスがもう笑う。

そんな言葉がぴたりと当てはまるように機嫌を直したアンに老人の頬は再び緩んだ。
アンが花を大切にしていることは老人も知っていた。
アンが花を摘むのは、いつものことではない。
一月に一度と言ってもいいだろう。

この心優しい少女は、頑張って咲いた花を簡単に摘んでしまったりはしない。
月に一度、教会に並ぶ墓に供える為に毎日水をやっていた花を摘むのだ。
それが今日だった。

「じゃあ、もう行くわね。」

「うむ。　転ばないように気を付けて行くんじゃぞ。」

「　もう！　アンはお転婆じゃないの！！　」

「ほぉほぉ、そうじゃった、そうじゃった。」

老人の切り返しに再び頬を膨らましたアンであったが、老人の笑顔に自然とアンの顔にも笑顔が戻って行き、大きく手を振りながら、老人のもとを離れて行った。
老人は小さく手を振りながら、何度も振り返るアンを優しく眺めていた。

この老人がアンの姿を見るのはこの太陽のような明るい笑顔が最後であった。

「こんにちは！」

大きく重い扉を身体全体で押し開けたアンは、日光がステンドグラスを通って醸し出す鮮やかな色合いに目を細めながら、泉の畔にいる老人と同じように笑顔を絶やさない神父の到来を待っていた。

「アン、いらっしゃい。」

「こんにちは、神父様。今日はお花を持ってきたの。」

アンの予想通り、いつものように笑顔を向けながら、神父が登場する。

教会に行く途中にある、アンの花壇から摘み取った瑞々しい花達を誇らしげに神父に見せ、今日の来訪の理由を告げた。

「そうですか。　それは、それは。　いつもありがとうございます、アン。」

その笑顔が更に優しさを増し、神父は深々と自分の腰ほどしかないアンに頭を下げる。
それは、毎月行われる二人の儀式。
最初は、自分に頭を下げる神父に戸惑っていたアンだったが、『これが感謝を示すということです』と神父から教えられてからは、それを素直に受け取ることにしたのだ。

「　はい！　」

「では、お墓の方に供えてくれますかな？　私がするよりも、アンのような子に供えてもらった方が、皆喜ぶでしょう。」

「はい、神父様。」

「ふふふっ。　アン、そこは否定して頂くと、私としても嬉しいのですが。」

無邪気に自分の提案を了承するアンに、神父は思わず苦笑してしまった。
まだ、謙遜や社交辞令が解らない歳なのだから仕方ないのだが、神父の言葉に不思議そうに首を傾げるアンに笑いがこぼれたのだ。

「いえ、なんでもありません。　さあ、日が陰る前にお願いしますね。」

「　はい！！　」

話を戻した神父の言葉に、元気よく頷いたアンは、『ルビス像』に続く赤絨毯からそれた所にある扉へと向かって行った。
その後ろ姿を微笑みながら見ていた神父もまた、自分の仕事へと戻って行く。

「♪～～ふん～～～ふんふ～～」

機嫌よく鼻歌を口ずさみながら、アンは手に持つ花を墓の前に供えていく。
アン程の子供にとって、お墓に物を供えることが楽しいという子供は少ないだろう。

しかし、アンはこの墓が並ぶ場所から見る＞カザーブ村＜がとても好きだった。
周囲にそびえる山々、そこから心地よい風が降り、立ち並ぶ家の前に干してある洗濯物をなびかせる。　活気があるとは言えないが、ここから聞こえる人々の声が、それぞれの生活が存在することを認識させていた。
決して華やかではないが、確実な営みがある。
それが何よりアンに安心感をもたらすのだ。

アンが口ずさむ歌も、古くからこの村で歌われていた歌。
生まれた頃から、子守歌代わりに母親が歌ってくれていた歌なのだ。
アンは機嫌が良い時、楽しい時には、自然とこの歌を無意識に口ずさむようになっていた。

「こんにちは、アリさん。　今日は何を見つけたの？」

墓地の土の上を這いまわる蟻を見つけ、アンは声を掛ける。
アンにとって、この村にある物、この村で生きているものは全てが見ていて楽しいものだった。
それと言うのも、最近村に出入りするようになった盗賊が最初に来た時は、村中の人間が外に出てこなかった。　アンも例外ではなく、両親に抑えられ、外に出してもらえなかった。　ここ最近になってやっと外に出してもらえたのだ。
故に、外の景色、肌に触れる風、暖かく照らす日光。
その全てが、アンにとって喜ばしいことだった。

教会に戻り、神父から水差しを借りたアンは、墓地の周辺に咲く花

々に水をやって回る。
山からの吹き下ろしの風で傾いた花には、小枝を支え木にし、土から根が出そうになっているものは再び土をかけてやる。
その作業の合間にも、虫達を見つければその後を付いて行く。
そんなアンの一人遊びも、足元が見え辛くなった頃に終わりを告げる。
アンを迎えに母親が来たからだ。

「アン、暗くなる前に帰ってこなきゃ駄目でしょ。」

「あっ！？　ご、ごめんなさい・・・・」

一人遊びに夢中になっていたアンに苦言を呈すこの女性がアンの母親。
アンを産んで既に１０年近くも経つが、その美貌は衰えず、＞カザーブ＜でも人気のあるこの母親がアンは大好きだった。

「ふふっ、気をつけるのよ。　今日はお母さんと一緒に帰りましょ。」

「　うん！！　」

アンが項垂れてしまうと、厳しい顔をしていた母親もすぐに笑顔が

こぼれ、言葉と共にアンに手が差し伸べられる。
母親の笑い声に嬉しそうに顔を上げたアンは、大きな声を上げて、母親の手をとった。

「あら、アン？　まずは、神父様にお礼を言ってから、手を洗わせて頂きましょうね。」

自分の手を握るアンの手が、土と埃でザラザラとした感触があることに気がついた母親は、にこやかにアンに向かって言葉をかけた。
アンが土いじりや色々なことに興味を示していることを知っている母親は、それを咎めることをしない。
幼い頃に、自分の感触で触れ、見ることが子供の成長に必要なことだと知っているのだ。

二人は、墓地を出て神父に挨拶を済ませた。
教会の洗い場で、母親と二人で手を洗うアンは終始笑顔を絶やさなかった。

教会を出ると、日は大分傾き、周辺を赤く染め始めていた。
各家に灯りが灯り始め、夕食の支度の為、煙突からは煙が出ている。
村の外を歩く人達もすでに居なくなっており、遠くに見えるアンの自宅である道具屋も店仕舞いを済ませていた。

「さぁ、アン。　早く帰りましょ。　お父さんもお腹を空かせて待ってるわよ。」

「うん！　アンもお腹が空いたわ。」

手を繋ぎながら家路を急ぐ母子。
普通の村であれば、何の違和感もない、ほのぼのしい光景。
そんな母子の幸せは、唐突に終焉を迎える。

「　な、なんですか！？　」

手を繋ぎ、笑顔で見下ろしていたアンに影が降りたかと思うと、周辺が突如夜になったかの如く闇が広がる。
何事かと顔を上げた母親は、自分達を囲む大勢の屈強な男達を見た。
アンは、恐怖から母親の腰にしがみつき、怯えたように目を瞑っていた。

「へへっ、流石は＞カザーブ＜自慢の若奥さんだ。　噂以上にベッピンじゃねぇか。」

「本当だぜ。　こりゃ、道具屋なんかにゃ勿体ねぇ。」

周囲を取り囲む男達が、母親を見て口々に何かを語りだす。
周囲を完全に包囲されているため、周りから見れば、『またあいつ等が集まって何かやっている』としか見えないだろう。

そう、この男達こそ、ここ1年ほどで村に出入りするようになった盗賊一味であった。

「な、何をするんですか？　そこを通して下さい。」

「へへへっ、声もいい声じゃないか。　あの時はどんな声で鳴いてくれんだろうな。」

母親は恐怖に身がすくむ中、それでもアンを護ろうと毅然とした態度で立ち向かうが、盗賊たちの耳には全く届いていなかった。
それどころか、何か不穏なことを言い始めている。

「大声を出しますよ！　何を・・・・・うぅぅぅ・・・・」

身の危険を感じた母親の言葉は最後まで発することが叶わない。
男達の内の一人が後ろから、母親の口を塞いだのだ。

「ああ、いけねぇや。　そんな態度に出ちゃ。　俺達は何もする気はなかったんだぜ。　それが、大声なんか出されたら村の連中に気付かれちまう。」

「そうだぜ。　そんなことになってお頭に話が行っちまったら大事だ。」

「こりゃ、もうしょうがねぇな。　連れて行くしかねぇだろ。」

最初から逃がす気など毛頭なかったことは男達の態度を見れば明白だ。
それにも関わらず、自分達を正当化するような言葉と下種な笑い声に、母親は絶望する。

「おい、このガキはどうするんだ？」

「あぁ？　連れて行くしかねぇだろ。　この場面を見られちまったんだからな。　俺はガキには興味ねぇからお前らにやるよ。」

「俺達もいらねぇよ。　ギャハハハッ」

母親と同じように口を押さえられたアンは、男に抱えられるように持ち上げられ、別の男がアンと母親の口を布のようなもので塞ぎ、歩き出した。
下種な笑い声を周辺に響かせ、日が傾き、隣にいる人間の顔すらもはっきりとは見えなくなり始めた＞カザーブ＜の村を出て行く。

母親は最後の気力を振り絞り抵抗をするが、一人の男からの腹部への強烈な拳を食らい意識を失った。
総勢１０人にもなろうかという男達は、ぞろぞろと村の外へと歩い

て行く。
門番に不審に思われないように、二人を担ぎ上げた男達を取り囲むように男達が周囲を歩く。　しかし、あまり歓迎していない人間たちが村から出て行くのを門番がわざわざ止めるはずもない。　すんなりと男達は村を出ていくことができたのだ。

アンは頬に暖かな空気がかかる感触に目を覚ます。
静かに目を開けると、目の前には焚き火による炎。
その周りを１０人程度の男達が囲み、酒を酌み交わしていた。

アンは、先程の出来事を思い出し、母親を探すために起き上がろうとするが、そこで初めて自分が木に縛り付けられていることを知った。

「ギャハハッ・・・ん？　おお、お譲ちゃんのお目覚めだ！！」

「「「「――――オオォォォ――――」」」」

アンの目覚めに気がついた男が周囲にそのことを告げる声を上げると、『待ってました』とばかりに喜びの歓声が湧きあがる。

「へへっ、しかし、すげぇ事考えるよな。」

「違いねぇ。　子供の目が覚めるのを待って、実の子供にも見せてやろうって言うだからよ。」

「ギャハハハ。　まあ、楽しけりゃいいだろうよ。」

アンには男達の会話の内容が理解できない。
全ての男達が自分を見て、下種な笑いをしている。
それでも、アンにはそれに構っている暇などなかった。
母親を見つけなければと、何度も左右に首を振り、周辺を見渡す。
しかし、その行為も下種な笑いを繰り返す男達にとっては格好の酒の肴となってしまうのだった。

「ん～？　おお！　お譲ちゃんが、母親を探していらっしゃるぞ！」

「「「「「「「――――――ギャハハハハッ――――――」」」」」」」

屈強な男達の大きな笑い声は、アンにとって恐怖以外の何物でもない。
何故このようなことになってしまったのか？
ほんの数刻前には、暖かな日の光の下で花を愛で、山から吹き下ろ

す心地よい風に髪をなびかせていたはずなのに・・・・

「　おい！　お母様をお連れしてやれ！　」

戸惑い、目に涙を浮かべるアンを余所に、一人の男が別の男に向かって声を上げる。
声を上げた男の下にいる人間なのか、『へい！』と間の抜けた返答をした男が火から離れ、アンとは逆方向へ歩いて行く。

「　お、お母さん！！　」

火から離れた二人の男が連れてきた母親は、服装などは乱れていないが、抵抗をした時に暴力を受けたのか、その美しい顔の右頬が赤く腫れ、涙の跡を残していた。
暗くなり始め、火の灯りが頼りな場所で、アンにそれを確認することはできず、やっと唯一頼りとする母親が現れたことに安堵に近い叫びを上げた。

「・・・・ア、アン・・・・・」

「へへへっ、感動のご対面だ。　ギャハハハ。」

アンの叫びに項垂れていた母親の顔は上がり、絶望に打ちひしがれ

た表情を浮かべる。
アンだけでもなんとか逃げていてほしかった。
母親は、自分の運命はすでに諦めていたのだろう。
しかし、娘だけはという想いは未だ捨て切ることはできなかった。

「　む、娘だけは！　私をどうしてもいいです。　でも、娘だけは、娘だけは・・・・」

それが、盗賊達への懇願という、世間が知れば全く意味のない行為と嘲笑われる行動に出ていた。　そしてやはり世間の考え通り、それは徒労に終わる。

「ギャハハハ、安心しな。　娘の前でたっぷりアンタを可愛がってやるから。」

「　！！　・・・・うぅぅ・・・・」

母親の嘆願など聞く気もないのだろう。
下種な笑い声を発している口から涎を垂らしながら、優越感に浸ったような表情を浮かべて男は笑う。

「まあ、俺達がすることを見てしまったんだから、お譲ちゃんには悪いけど、生かしておくことはできねぇよな。」

「ちげぇねぇ。　ギャハハハ」

「・・・そ、そんな・・・・」

男達が口々に話す内容が、母親を更なる絶望の淵に落としていく。
それは二度と這い上がることが出来ない程の深さを持つもの。
男達の話の内容は、二人の死を意味する。
しかも、母親はその前に死をも超える程の恥辱を受け、アンはその母親を強制的に見せられるという耐えがたいトラウマを埋め込まれる。

「　さあ、野郎ども、始めようぜ！　」

「「「「「「「「――――――オオォ――――――」」」」」」」」

中心人物のような男の掛け声に、その他大勢の人間が声を揃えた。
それは、盗賊達にとっての饗宴の始まりを意味し、アンと母親にとっては地獄の始まりとなる合図となった。

男達は我先にとアンの母親に群がって行く。
木に縛り付けられるアンの目と鼻の先まで母親は引き連れられ、服を剥ぎ取られていく。

「キャーーーーーーーー！！」

アンの耳に切り裂くような母親の悲鳴が轟き、アンは目を瞑る。
だが、傍にいた男がそれを許さなかった。

「目を閉じるな！！　しかっりと見るんだよ。　お前の母親の喜んでいる姿を。」

アンにはとても母親が喜んでいるように等見えない。
苦痛にゆがみ、今まで見たことのないほど大きく口を空け悲鳴を上げる母親が喜んでいる訳がない。

「や、やめてぇーーーー！！　ア、アン、見ないで！！」

「へへへっ、一番乗りは俺だ。」

叫び声を上げ続ける母親がアンと湯浴みをする時のように一糸纏わぬ姿に変わった時に、中心人物を見られる男が下半身を露わにし、母親に覆いかぶさった。
手足を他の男達に抑えられている母親は、抵抗することも叶わない。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「うるせぇ！！　おとなしくしやがれ！！」

泣き叫ぶような母親の叫びは、圧し掛かった男の拳に途切れた。
何度も何度も母の上で動く男がアンには気持ち悪い物にしか見えなかった。
あれであれば、虫の方が遥かに可愛い。
いや、魔物の方が良いぐらいだ。

その後、満足したように母親から離れた男が他の男達に頷くと、次々と男達が母親に覆い被さって行く。　母親もその頃にはすでに叫ぶ気力もなく、涙も枯れ果てたのか、目は虚ろとなり、その眼差しはもはや『人』と呼べる色をしていなかった。

次々と男達が入れ替わり立ち替わり母親の上で蠢いて行く。
甘い物に群がる蟻のように、いや、それは懸命に餌を運ぶ蟻たちに失礼なのかもしれない。

そして、周囲にいた男全員が母親を虐げ終わるまで、アンは顔を背けることも、目を閉じることも許されることはなかった。　１０人もの男の欲望を一身に受けた母親は、ぐったりと横たわる。

「・・・お・・・・お・・かあ・・・さん・・・？」

「　！！　　い、いやぁぁぁぁぁぁぁ！！！！　」

人形のように色を失った瞳をして虚空を見つめていた母親が、アンの呟きで正気に戻ってしまった。　それは耐えがたい苦痛を思い出させる。
夫以外の人間に身体を奪われ、しかもその恥辱を最愛の娘に一部始終見られていた。
女性にとって、そして母親にとって、この事実は人間を崩壊させるのに十分なものだった。
しかし、そんな母親の、自分の精神崩壊からの自己防衛のような叫びは、今まで散々楽しんでいた人間によって止められる。

「うるせぇ！！」

「ぐふっ！」

アンの目に飛び込んできたのは、胸の真ん中に太く鋭利な刃物が突き刺さった母親の姿。
アンの母親を真っ先に組敷いた男が、母親の叫びが耳触りとばかりに、腰に差していたナイフのようなもので胸に突き刺したのだ。
水を飲むときにむせたような音を口から発したのを最後に、アンの愛する優しい母親は胸から盛大に赤い液体を噴き出し、動かぬ人形となってしまった。

「あ～あ、死んじまった。　俺はもう一回しようと思ってたんだがな。」

「いいじゃねぇか。　まぁ、血で真っ赤に染まっているが、硬くなる前にやっちまえよ。」

「ギャハハハ、そうだ、そうだ。」

アンの目は見開き、今目の前で起こったことが何なのかも理解できない。
これは夢じゃないのか。
もうそろそろ、母親の優しい声で揺り起こされるのではないのか。
アンのそんな儚い希望は、アンの周りを取り囲む男達の常軌を逸した会話に握りつぶされる。　母親は死んだのだと・・・・・

「何言ってやがる。　それに俺達にはまだ楽しみが残ってるだろ？」

中心人物であろう男が宥めるように周囲の男達を見回し、最後にアンへと視線を向ける。
呆然と母親の死体を眺め、『夢なら早く冷めて』と願っていたアンは、その男の視線に目の前が真っ暗になったような感覚に陥った。
追い打ちをかけるように、男の宥めに反応したその他の男達が歓声を上げる。

「　よ～し、お前ら。　今持っている有り金全部をここに出せ。
持っているゴールド全部だ。　隠していたりしたら命はないと思え

よ！」

「何を始めんだ！？」

男の提案に盗賊達はしぶしぶと言った感じで、焚き火の近くに自分の持っているゴールドを置いて行く。　１０人分の盗賊の有り金だ。
それは、次第に山になって行き、それを見ていた盗賊達が再び歓声を上げ始めた。

「これで全部だな？　よし、じゃあ、今からこのガキの縄を解く。ガキを山に放してから・・・そうだな半刻後に狩りを始める。このガキを狩った奴がここにあるゴールドを独り占めだ！」

「――――――オオオォ――――――」

地鳴りのような歓声が山全体に響き渡り、アンの恐怖心を増大させる。
正直、アンは男が何を言っているのか解っていない。

「おい。」

男の掛け声に、アンの近くにいた盗賊がアンを縛りつけている縄をナイフで切り、アンを解放する。　自由の戻った身体に戸惑い、『

やはり夢だったのでは』という希望を持つアンの視線の先に再び血ダルマになった母親の姿が映る。

「お、お母さん!!」

もつれる足を何とか動かし、母親の傍に駆け寄るが、それは母親の姿をしてはいたが、もはや物言わぬ肉塊となっていた。

もう、あの優しい微笑みをアンに向けてくれることはない。
もう、あの暖かな食事を作ってくれることもない。
もう、アンの髪を洗い、拭いてくれた後に優しく梳いてくれることもない。
もう、父親と微笑み合いながら、『アン』と呼んでくれることもないのだ。

目を見開いたまま、首から下を真っ赤に染める母親を見て初めて、アンはその現実を理解した。　わずか7，8歳の少女にとって頭の許容範囲を大きく逸脱する情報。
しかし、アンは理解せざるを得なかった。

「お、お母さん！　お母さん！　うぅぅ・・・お母さん!!」

それでも、血で染まった母親の身体を何度も揺すりながら、再び笑いかけてはくれないかと声をかけ続ける。

だが、命の灯が消え果てた身体はアンの悲痛な呼びかけに何の反応も示さない。

「・・・い、嫌だよぉ・・・・お母さん!・・・・ねぇ・・・・お母さん!!」

「おい!　いつまでやってやがる!　お前には最後の仕事があるんだよ!」

理解しながらもそれを飲み込むことを拒絶し続けるアンに痺れを切らした男は、母親の傍で座り込むアンの強引に立たせ、引き摺るように焚き火の近くまで移動させる。

「いやぁぁ!　お母さん!!」

「うるせぇ!!　ここでお前も殺してやろうか!?」

引き摺られながらも、尚母親を呼び続けるアンを男が殴りつける。屈強な男の手加減なしの拳を受け、アンの小さな身体は軽々と宙に待った。

強い衝撃と共に地面に落ちたアンの鼻からは赤い血液が流れ、ここ最近でやっと生え変わって来た歯が口内で折れていた。

「・・・うぐっ・・・・ごほっ・・・うぇ・・・・・」

口から血を吐き出し、目からは涙、鼻からも血を流しているアンの顔はもはや少女の愛らしいものではなかった。　それでも、周囲の男達の表情は愉悦に歪んでいる。
まるで、それが今から始まるショーの幕開けとばかりに・・・・

「　おい！　ほら、早く逃げろよ。　そんなとこに這いつくばってちゃ、つまんねぇだろうが！　いいか？　俺達から逃げることができたら死ぬことはねぇんだ。　必死になって逃げな。」

「ギャハハハ、逃げられりゃいいけどな！」

懸命に顔を上げようとしたアンの泥と血で汚れた髪を掴み、男はドスの利いた声でアンに促す。　その言葉に再び周囲の盗賊たちから野次や笑い声が響き渡る。

「・・・うぅぅぅ・・・ぐずっ・・・・・」

それでも立ち上がったアンは、もう一度母親の姿を見た後、もはや完全に闇と化し始めた山の中に走り込んでいく。

「　おしっ。　野郎ども！　半刻後だ。　半刻経ったら、武器は何でもかまわねぇ。　剣であろうが槍であろうが、それこそ弓だって

かまわねぇ。　とにかく仕留めた奴がゴールド総取りだ！　張り切って行けや！」

「――――――オオオォ――――――」

盗賊達の狂った雄たけびが、闇のカーテンをかけたカザーブの山々に響く。
それは、これから始まる狂宴の始まりを意味していた。

逃げ出したものの、アンはどこをどう走ったらいいのか全く分からない。
それもそのはず。
アンはやっと家の外を出ることを許されたばかりだ。
村の外に出たこと自体、これが初めてである。

幼いアンの脚力ではどうしてもスピードは出ない。
おまけに、肺活量も少ないため、すぐに息が切れてしまう。
それでもアンは懸命に走った。

もはや、息が切れることなど構ってはいられない。

息が切れても、それにより肺が悲鳴を上げ、呼吸をするたびに喉に焼けるように痛みが走っても、アンは夜の山道を駆け続けた。

どこをどう走ったのかさえ分からない。

家では、眠るまで多少の明かりをつけたまま母親に手を握ってもらいながら眠るアンも、今ばかりは山を支配する暗闇を怖がっている余裕はなかった。

『もう＞カザーブ＜の村が見えてくる頃だろうか？』

『もうすぐ、いない自分と母親を探しに来た父親と会えるころじゃないか？』

そんな希望が頭に浮かびながら懸命に走るアン。

しかし、現実は無常。

アンの幼い足では、たった半刻では盗賊達の声が聞こえない距離までも移動することができていなかった。

突如上がった歓声とも怒号とも知れない叫び声にアンの足が止まる。

もう、半刻が経ってしまっていた。

「・・・うぇ・・・・お母さん・・・・・お父さん・・・・・・ぐずっ・・・・」

夜の闇の恐怖。

先程まで見ていた光景の恐怖。

そして今まさに上がった咆哮への恐怖。

幼いアンにとって、もはや泣くことしかできなかった。
呼吸困難になるほどに息は切れている。
もう走ることなどできない。
アンは近くの茂みに隠れた。

「こっちには来てねぇのか？　こっち側だと思ったんだけどな。」

アンが隠れた茂みのすぐ近くを盗賊の男が手に持つ剣を振り回しながら歩いてくる。
アンは息を殺し、手を口に当てながら、木の根元にある茂みにしゃがみ込んでいた。

「あ～あ、いねぇのかよ。　ちきしょう！」

剣を振り回しながら、アンの隠れている茂みを通り越し、男は暗闇へと消えていく。

「・・・はぁ・・・ごほっ・・・・・」

知らず知らずに止めてしまっていた呼吸を戻し、アンはせき込んでしまった。

「ああ？」

暗闇に消えて行ったはずの男の声が聞こえ、こちらに戻ってくる気配をアンは感じた。
もはや猶予などない。
このままここにいれば、間違いなく殺される。
それくらいはアンにでも理解できた。
結果、最悪な選択をしてしまう。

全速力でその場から逃げたのだ・・・・

「おっ、やっぱりいやがったな。待ちやがれゴールド！」

賞金の対象としてしかアンを見ていない盗賊は、幼いアンの歩幅を考慮にいれ、決して走ることなく、早足で追いかける。
狩りは簡単ではつまらないとばかりに、執拗にアンを追い詰めていく。
剣を高々と掲げながらアンを追う。

アンは懸命に走った。
小さく短い歩幅ながらも、その回転数を上げ懸命に前へ前へと踏み出していく。
しかし、後ろの男との距離は広がらない。
いや、縮まりもしないのだ。
だから、アンは諦めることをせずに懸命に走る。

「ほらほら、どうした。　そんなんじゃ追いつかれちまうぞ！」

賞金がすぐ目の前まで来ていることが盗賊の余裕を生んでいるのかもしれない。
アンのスピードが緩まれば、自身の歩くスピードも緩める。
アンに希望を与えながらも、絶望を味あわせ、その表情に愉悦を感じているのだ。

「はぁ・・・はぁ・・・・ぐずっ・・・・はぁ・・はぁ・・」

盗賊の目論見通り、涙や鼻水をすすりながらも懸命に走るアンは、後ろから追ってくるその男しか見ていなかった。
故に、前から聞こえる弓を引き絞る音が聞こえていなかった。

「　あっ！！　」

アンを追う盗賊の叫び声に、後ろを振り返りながら走っていたアンの顔が前方に向けられる。

「・・・・ごふっ・・・・」

アンが振り返るのと同時に、その小さな胸に矢が突き刺さった。

アンには何が起きたのか理解が出来ない。
息を吐いていた口からは真っ赤な液体が出てくる。
先程まで呼吸困難に近いながらも、しっかりと空気を吸うことができた胸は、今はもう思うように動いてはくれない。

「　！！　」

高速に回転していたアンの短い脚は、そのスピードを落とし、もはや前に出すことも出来なくなった。　アンの視界が、霧がかかったように霞んでいく。
もう、どこが痛くてどこが苦しいのかすら分からない。
アンの身体が地に沈みそうになる。
霞がかかりながらも、わずかに見えていたアンの目が、前方で再び弓を構える男の姿を捕らえた。　それは、真っ先に母親を組敷いた男。　それは、アンを殴り、号令を掛けた男。

トスッ！

その男の姿が、アンがこの世で見た最後の映像となった。
再び引き絞られた弓から放たれた矢は、膝を地面につけたアンの額に突き刺さったのだ。
糸が切れた人形のように、アンの身体は崩れ落ちて行った。

「　汚ねぇぞ、兄貴！　俺が追い詰めていたんだぜ！　」

「ああ？　俺は言っただろ、『武器はなんだっていい』と。　剣なんかを振り回しているてめぇが悪いんだろ。　とにかく賞金は俺のもんだ。」

アンを後ろから追っていた盗賊の不平をどこ吹く風で聞き流し、男は弓を背負い直す。
男の言っていた通り、武器は何を使ってもいいことになっていた。
しかし、それを言うのなら、この１０人の中で、今回弓を持っているのは、矢が２本刺さったままになっている少女を引き摺っている男だけなのである。
必然的に他の盗賊は、剣や槍などの直接的な武器となってしまう。
そう考えれば、最初から結果が解っていた出来レースのようなものだ。

「・・・ちくしょう・・・わかったよ。　その変わり、そのガキを見つけたのは俺なんだ。　少しぐらい分け前をくれてもいいだろ？」

しかし、兄貴分に当たるこの男に直接そんなことは言えるはずがない。
故に口から出たのは最大限の譲歩案なのであろう。

「　ああ？　仕方ねぇな。　気持程度にはやるよ。　」

「　本当か！？　やったぜ！　でもよ、そのガキや母親の死体はど

うするんだよ。　村の連中が見つけたら問題になるぜ。」

「そんなことは心配する必要はねぇんだよ。　夜の山じゃ、魔物がうじゃうじゃいる。　そのまま放っておけば、魔物が掃除してくれらぁ。」

既に母親の死体は魔物が食している最中かもしれない。
アンの死体は仲間の確認の為、運ばなければならないが、母親と同じ所に置いた後で、宿営地を移せば、それだけで証拠は隠滅されると考えているのだ。

「そりゃそうだな。　流石頭がいいぜ。」

二人の男達の笑い声が、夜も深まり周辺が暗い山中に木霊する。

これが、男達が死の恐怖からカミュに話した事実。
メルエが詠唱を行うほど怒りをあらわにした内容。
そして、常に冷静沈着なカミュを鬼に変えた原因である。

過去～アン～（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回は、自分で書いていてもかなり重かったです。
かなりお叱りなどもあるとは思いますが、先に進むためには必要なイベントとして書かせていただきました。

シャンパーニの塔？（前書き）

本編に戻ります

サラが一向に追いついた時、カミュ達は戦闘状態にあった。
相対しているのは、ロマリア大陸に入ってすぐに遭遇したキャタピラーのようだった。
形状は、キャタピラーのように背中を固い殻に覆われていて、数多くの足を持っている。
それが三体。
カミュとリーシャが剣を振り、一歩後ろでメルエが詠唱に入っていた。
慌てて一向に近づくサラに鋭い声が届く。

「サラ！　不用意に近づくな！　こいつらはキャタピラーではない！」

「えっ！？」

リーシャの声に拍子を抜かれたサラは、魔物への警戒を緩めてしまった。
その結果、固い殻に覆われた芋虫のような魔物は、その無数にある

足の一部をサラに振り下ろし、反応が遅れたサラの左手を切り裂いた。

「サラ！！」

サラが左腕を切られ、血飛沫（ちしぶき）を上げながら倒れ込むのを見たリーシャは、サラを攻撃した魔物を剣で牽制しながらサラに駆け寄った。

「・・・・うぅぅ・・・・・」

「サラ！　大丈夫か！？」

リーシャはサラの様子を見て、更に声を上げる。
痛みに苦痛の表情を浮かべながら押さえている左腕からは真っ赤な血が吹き出し、押さえきれていないためにサラの右手を真っ赤に染め、更に床に血液が滴っていたためだ。

「ちっ！」

そんな二人の様子を視界の端で捉えたカミュは、盛大な舌打ちをしながら、自分に向かってきた魔物の足を＞鋼の剣＜で斬りおとした。
盛大に苦悶の鳴き声を発した魔物を一瞥し、カミュはメルエの場所まで後退した。

「・・・・・・・魔法・・・・・・・使う・・・・・？」

「・・ん？　ああ、今なら一ヶ所に集まっているな。　できるか？」

「・・・・・・」

今までカミュとリーシャが交差し、なかなか詠唱が完成しなかったメルエだったが、リーシャが下がり、カミュも戻ってきたことで魔法使用が可能になったことをカミュに伝え、そしてカミュの回答にこくりと頷いた。

カミュに足を斬り落とされ、怒り心頭といった魔物、そして、リーシャに牽制され、距離を保った魔物が一ヶ所に集まっている。

狙ったわけではなかったが、それは魔法を効率よく使うならば都合が良かった。

「・・・・・ギラ・・・・・・」

詠唱と共に、三体の魔物に向けたメルエの右腕から熱風がほとばしる。

メルエが唱えた呪文は、カミュ達と出会った最初の夜に覚えた呪文の一つ。

＞ギラ＜
魔道書に記載されている攻撃呪文の一つ。
簡単に言えば、灼熱呪文である。
＞メラ＜のように火球が飛び出す訳ではなく、火炎と共にその周囲を熱風が襲い、焼け野原へと変える。
その範囲はある程度に広がり、＞メラ＜の火球の様に敵単体に向けられるものとは用途が異なってくる。

メルエの腕から発せられた火炎が、芋虫のような魔物の周辺に広がる。
その熱に身体をうねうねと動かしながら耐える姿は、芋虫そのものの姿であった。
周囲に魔物の焼け爛れていく異臭が広がり、魔物を焼いていた炎が収まると、そこには無残な魔物の姿が残されていた。

「・・・・す、すごい・・・・」

左手を押えながら、その光景を魅入られたように眺めていたサラは、メルエの放つ魔法の威力に圧倒されていた。
炭の様に黒焦げになった魔物が二体。
リーシャの牽制を受け、他の二体と若干距離があった一体は、身体全体が焼け爛れ、身体を覆っている殻が溶けている。

ザシュッ！

炭化していない一体にはまだ息があった。

あの状態で生きているということは、想像できない程の苦しみを味わっていたことになる。

カミュの突き出した＞鋼の剣＜が、その苦しみから魔物を解放したのだ。

痙攣しているように動いていた魔物の身体は、その一突きによりピクリとも動かなくなった。

「・・・・ん・・・・・」

「・・・？・・・・あ、ああ、よくやった。　メルエ。」

魔物に止めを刺して戻ってきたカミュに向けて、メルエは何かをねだる様に頭を突き出してきた。　初めは何をしているのか理解できなかったが、それが頭を撫でてもらいたいのだと気がついたカミュは、褒め言葉と共にメルエの頭を撫でる。

気持ち良さそうに目を細めてそれを受けるメルエ。

「　サラ、大丈夫か！？　お、おい、カミュ！　早く薬草を！　」

しかし、そのメルエの幸せな時間は、焦燥感にかられたリーシャの声で終わりを告げる。

カミュの手が自分の頭から離れてしまったことに、メルエは残念そうにしながらもリーシャを睨むことはせず、そちらに足を向けるカミュの後についてサラ達のもとへと歩いて行く。

「・・・はぁ・・・アンタは慌て過ぎだ・・・まず体内に入った毒を抜かなければ、いくら薬草を使ったところで、傷口が膿んでくるだけだ。」

「な、なに!?　毒を受けたのか、サラ!!」

「ぐっ!・・・・・・わかりません・・・・・」

カミュが発した溜息交じりの言葉に、更に驚きの声を上げたリーシャは血が流れ続けるサラの左腕を掴み、声を掛ける。傷口を握られ、激痛に顔を歪めるサラは傷の痛みからなのか、毒からなのか分からない眩暈に悩まされていた。

「カ、カミュ!　早く＞毒消し草＜をよこせ!」

「・・・リ、リーシャさん、大丈夫です・・・・」

「大丈夫な訳あるか!!　毒を受けているとしたら、早めに解毒しなければ、最悪死にいたるんだぞ!」

リーシャは、完全にパニック状態だ。

朦朧としながらも、自分をそこまで心配してくれるリーシャをサラは嬉しく思っていた。
仲間と認めた人間をそこまで想うことができるリーシャという人間性は、確かに好感の持てるものなのであろう。

「・・・完全に取り乱している戦士様は放っておくとしても、解毒はしておいた方がいい。　幸い＞毒消し草＜の数には余裕もある。」

「・・・・サラ・・・・・死ぬ・・・・・・ダメ・・・・・・」

リーシャに続き、カミュ、メルエと言葉は違えど、サラを心配するような言葉に、サラの瞳は潤みそうになった。

サラは、先程の盗賊との一件で、確かな溝ができたと感じていた。
それは、サラとカミュに限ることではなく、サラに向けるメルエの視線、リーシャの言葉から、自分と他の三人との関係はここで終ってしまうのかもしれないとまで考えていたのだ。

それほどの出来事。
サラの根底にある物すらも大きく揺さぶり、崩してしまうかもしれない程の大きなもの。
それは、何もサラだけではなく、パーティー全体にも言えることだった。

「・・・だ、大丈夫ですよ、メルエ。　私は死にませんよ・・・・

キアリー・・・」

視界が霞んできた瞳をメルエに向け、優しく微笑んだサラは、左腕を右手で押さえたまま詠唱を行った。
＞ホイミ＜を掛けた時とは違う色を放つ淡い光がサラの患部を照らしだす。
徐々に弱まる光と共に、サラの視界が開けていく。

＞キアリー＜
教会にある経典の中にある呪文の一つ。
身体を侵す毒を解毒するための魔法。
この魔法が教会にある経典内にしかないため、必然的に僧侶しか使うことが出来ない。
故に、＞毒消し草＜等で浄化しきれない程の毒等は教会に赴き神父などに解毒してもらう。
それも、教会の資金源の一つなのだ。

「　ホイミ　」

解毒の光が収まると、サラは続けて＞ホイミ＜の詠唱を行う。
＞キアリー＜とは違う、淡い緑色の光が再びサラの左腕を包み、ぱっくりと裂かれていた傷口を塞いでいく。

「　凄いな！　サラ、解毒の魔法も覚えたのか！？　」

「・・あ、・・・は、はい・・・・・」

傷口は塞がっても、失った血液はそう簡単には戻らない。
多少貧血気味なサラは、疲れたような声を出してリーシャへと答える。
しかし、座りこんだまま、こちらも見つめるリーシャの方を見た際に、その後ろに立つメルエの頬が膨らんでいることを感じたサラの脳は覚醒された。

「あ、あ、で、でも、メルエの新しい魔法も凄かったですよ！私じゃ、あんな魔法は使えません。わ、私なんて、驚いて呆然としてしまいました！」

「・・・・・・・・新しい・・・・・・・じゃない・・・・・・・」

「えっ！？　そ、そうなのですか？」

サラが呆然としてしまったのは事実なのだが、メルエの機嫌を取るために多少大袈裟に話すサラに返ってきた答えは、予想外のものだった。

「・・・・・・・・・前に・・・・・・・・覚えた・・・・・・」

「　えぇぇぇぇ！！　そ、そうなのですか！？　メ、メルエ、貴女はどこまで魔法を習得しているのですか・・・？」

サラはここにきて初めて、メルエの魔法の習得率の凄さを実感した。
若干１０歳に満たないような少女が習得するレベルの魔法の数ではない。
貧血気味であることすらも忘れて、サラは大声を上げてしまっていた。

「メルエ、先程は凄かったぞ。　よくやった。」

「・・・・・・ん・・・・・・・・」

サラが普段通りの様子に戻ったことに安心したリーシャは、まだ労うことをしていなかったメルエの頭に手を乗せ、優しく撫でた。
再び到来した至福の時にメルエは目を細める。

「・・・新しい魔法は、また今度見せてもらうさ・・・もう、いいのか？　いいのであれば、先に進むぞ。　日が落ちる前にはここを出たい。」

「　少しくらいサラを休ませてやれ！　」

「・・・あのな・・・アンタは何日かけてこの塔を上るつもりだ？
まぁ、休もうが休まなかろうが、アンタの示す道を歩いていたら同じだろうがな・・・」

「ぶっ！」

サラを気遣うリーシャの叫びに返したカミュの言葉は、サラのツボを突いてしまった。
リーシャにも自覚があるだけに、その顔は見る見る赤くなっていく。
それは、恥ずかしさからなのか、それとも怒りからなのか・・・・

「ふっふっふっ・・・・・カミュ、サラ・・・・覚悟はいいんだろうな・・・・」

サラは噴き出した後に胸に込み上げてくる笑いを抑えることができず、くすくすと溢していたのだが、顔を伏せていたリーシャの声を聞き、その笑いも腹の底に引っ込んだ。
まさか、リーシャがカミュだけでなく自分までも対象にするとは思わなかったのだ。

「あ、あ、リ、リーシャさん？」

サラの顔から笑いが消え、青くなってきているのは、決して貧血だけが原因ではないだろう。　カミュにとってはいつもの行為である

為、涼しい顔をしているが、サラにとっては初めてに近い。

「・・・・・・・もう・・・・・・行く・・・・・・・」

しかし、そんな二人の戯れのような行為は、リーシャの手が離れたことを不満に思っていた小さなお姫様によって幕を閉じられた。

「　そ、そうですね！　私は大丈夫ですので、もう行きましょう！　」

メルエの呟きはサラにとって渡りに舟だった。
とてとてと先を進むメルエとカミュが先行し、サラ、リーシャが後ろを続く。
リーシャとしても、先程まで一行を包んでいた重苦しい雰囲気を思っての行動だっただけに、怒りを治めた後にもかかわらず、笑顔を浮かべていた。

「しかし、あの魔物はキャタピラーではなかったな。」

「そ、そうですね。　キャタピラーが毒を持っているはずありませんからね。」

歩きながらリーシャが漏らした疑問は、サラも同様に考えていたも

のだった。
若干、キャタピラーよりも色が濃かったような気もするが、見た目はキャタピラーと変わらないように見えていたのだ。

「おい、カミュ。　あの魔物は何なのだ？」

リーシャはその疑問を前を行くカミュに尋ねる。
リーシャの声に振り返ることなく、カミュの答えは返ってきた。

「あれは、＞毒いもむし＜だろう。　何の変異かは知らないが、キャタピラーが毒性を持ったものだと言われているらしい。　俺も遭遇したのは初めてだから、詳しいことは解らない。」

＞毒いもむし＜
その名の通り、毒を有した芋虫である。
キャタピラーの様に背中を固い殻に覆われており、その行動もキャタピラーに酷似していることから、魔物研究者の間では、キャタピラーの上位種とされている。
何らかの変異か、環境への適応なのかは解明されてはいないが、毒性を持つことになったキャタピラーではないかと考えられていた。
芋虫と呼ばれてはいるが、それが蛹（さなぎ）となり、羽化をするかとなると、その過程や結果を見た者はいないのだが・・・・

「・・・なるほどな・・・・しかし、この塔の周辺では見なかったが、この塔にしかいないのか？」

「・・・さぁな。　アンタは少し魔物の知識も詰め込んだ方がいいんじゃないか？　ああ、魔法に続き、魔物の知識まで無理に詰め込むことは筋肉の脳味噌には酷だったな・・・」

カミュの答えを聞き、頷いたリーシャが更なる疑問をカミュにぶつけると、返ってきたのは失礼千万な答えだった。
今度は先程とは違い、本気の怒りによる血液上昇が始まった。

「　カミュ！　先程から言いたい放題言ってくれるな！　そこまでして私と決着を着けたいのなら受けてやる！　」

腰の剣に手を掛けるリーシャの目は本気だ。
サラは、そんな二人のやり取りを見て、不謹慎にも笑顔を浮かべ、笑い声を溢してしまった。

「　な、なんだ？　サラ、私は本気だぞ！？　サラには悪いが、アリアハンの勇者はこの＞シャンパーニの塔＜で魔物に打ち倒されて死ぬことになったんだ。　」

「ふふふっ、ありがとうございます。　私はもう大丈夫です。」

「　ち、違うぞ、サラ。　お前に元気がないのを気にしていた訳で

はない。　今の私は本気で怒りを感じているんだ！」

リーシャの怒りに、見当違いの言葉を返すサラに対し、リーシャは目を白黒させる。
確かに、先程は若干演技の部分はあったのだろう。
しかし、今回のリーシャの怒りは本物だ。
その証拠に腰の＞鋼の剣＜は半分以上、刀身が出ている。
今まさに抜き放とうとしていたのだ。

しかし、そんなリーシャの弁明もサラには通じなかった。
にこやかな笑顔を向け、リーシャに頷き返すサラに、流石にリーシャも怒りを鎮める他なくなる。

「・・・茶番は終わったか・・・？」

「・・・・・早く・・・・・行く・・・・・」

そんなリーシャとサラのある意味微笑ましいやり取りも、その他の二人の冷たい言葉で終わりを告げた。　しかし、リーシャ達のやり取りを茶番と言い捨てるカミュの表情も無表情ではあるが、冷たい雰囲気を持つものではなかった。

再び歩き出した一行は、順調に一階部分を探索していく。
先程の別れ道からは、ほぼ一本道だった。
一本道と言えども、それは塔の一番外側の部分を回り込むような道で、大きくカーブを描いている。

途中で、＞ギズモ＜や＞軍隊がに＜などと遭遇はしたが、その程度の魔物は、もはやカミュとリーシャの剣、そしてサラとメルエの魔法の敵ではなかった。
＞ギズモ＜をサラのバギで吹き飛ばし、＞軍隊がに＜はカミュ、リーシャが斬り、そしてメルエの＞ヒャド＜で凍らせる。

「・・・・・・・また・・・・・・サラが・・・・・・倒した・・・・・・」

「えぇぇ！？　メ、メルエも魔法で倒したじゃないですか？」

「あははははっ。　メルエ、皆で力を合わせると言っただろ？」

サラの＞バギ＜で吹き飛ばされていく＞ギズモ＜を見て、メルエは渋い表情を作っている。
頭では、サラの攻撃呪文を認めてはいるが、幼いメルエの心では納得が出来ないのだろう。

「・・・・・これで一階部分も終わりだな・・・・・・」

後方での三人のやり取りを余所に、魔物達の死骸の後ろに見える階段を見つけ、カミュは二階部分へと足を運んでいく。

二階部分に上がる階段を上ると、小さな広間のような空間に出る。
その空間から一歩出ると、そこはひどい有様だった。

「　カミュ！　慎重に進んでくれ！　メルエは私から離れるな！
サラは私とカミュの間でカミュを見失うなよ！」

後方からリーシャの大きな声がかかる。
それ程周囲の音が大きいのだ。

二階部分から＞ナジミの塔＜と同じように、塔を覆う壁が存在していないのだ。
外の豪雨と言っていい程の雨と風が直に塔の中に入ってきている。
通路は強い風と雨で水浸しとなり、一歩踏み外せば、真っ逆さまに落ちていくことは間違いない。

雨のおかげなのか、塔の外周に魔物の気配はないが、探索をする程余裕はなかった。
乾いたばかりの衣服は再び濡れ始め、徐々に体温を奪っていく。

「カミュ！　とりあえず、少し中に入れるところを探せ！　左側に行こう！　先程の階段があった空間の横に同じような空間があるはずだ！」

「・・・・・・」

リーシャは懲りない。
サラは、雨風の中、必死に目を空けながらそう思った。
あれ程、自分が示す先が行き止まりだと知っているのに、まだ道を指し示そうとする。

しかし、カミュはサラと違う印象を受けた。
リーシャも自分の方向音痴ぶりは解っているのだろう。
故に、まずは雨風を防ぐため空間に入ろうとしたのだ。
自分の指し示す方向に行き止まりの空間があると信じて・・・

だから、カミュもリーシャの発言通りに進路を左に向けたのだ。

しかし、無情にもそれが仇となる。
リーシャが指し示した左側にはいくら歩いても塔の中心部分に進む通路はなく、やっと雨風を防ぐことのできる壁がある場所に辿り着いたのは、二階に上がる為の階段のある空間の真反対に当たる場所まで歩いてからだった。

もはや、衣服に意味を見いだせない程に全身は濡れており、メルエに至っては寒さの為、小刻みに身体を震わせていた。

「・・・すまない。　もう少し早くにあると思ったんだが・・・・」

「・・・気にするな・・・先頭を歩いていたのは俺だ。　アンタに責任はない。」

ずぶ濡れになり、身体を震わせるメルエやサラを見て、リーシャは素直に頭を下げる。
しかし、そんなリーシャの考えていたことが、自分の予想通りだったと感じたカミュは、そんなリーシャの謝罪に対して気に病む必要性を否定した。
リーシャはカミュの言葉に驚き、しばらくの間放心したように立ち尽くしていたが、寒さに震えるメルエの呟きに我に返る。

「・・・・・・・メラ・・・・・・・」

「　！！　」

寒さを和らげるためのメルエの詠唱と共に、薄暗かった周辺に明かりが灯り、全貌を現すと、その光景にサラは息を飲んだ。

そこには無数の死体。
いや、もはや皮も肉も存在していない骸骨達の墓場であった。
鎧や衣服を纏っている者もいるが、ほとんどが骨だけの存在になっていた。

「・・・紋章はロマリアのものだな・・・・カンダタ討伐隊の人間たちか・・・・」

カミュが言うように、骸骨の一体が身に纏う鎧に施された紋章は、ロマリア王国のものであった。　何度か編成されたカンダタ討伐隊のなれの果てなのだろう。

塔まで辿り着いたが、カンダタ一味に返り討ちにされ、一ヶ所に集められた後、魔物の餌になってしまったのかもしれない。
剥ぎ取られた衣服などが散乱しているが、骨は一ヶ所に固まっていることから、間違いないと思われる。

「・・・・酷い・・・・・」

「確かにな・・・・死者の弔いもせず、こんな形で放置するなんて人の所業じゃない。」

その光景に呟いたサラの言葉に同意するように、リーシャが口を開く。
しかし、カミュは何の感情も見いだせない表情でそれを見つめていた。

「・・・自らを守るために他者を害するのは当然だろ。　それに・・

・立場が逆ならば・・・カンダタ一味がロマリア兵に殺されていたのなら、首領であるカンダタ以外の遺体は同じような扱いを受けていたはずだ。」

「で、でも!!」

「・・・・・・・メラ・・・・・・・・」

カミュの言葉に即座に反応したサラの反論は、再び唱えられたメルエの詠唱にかき消された。
メルエの指先から現れた火球が周辺に散乱する骸骨達が身に着けていたであろう衣服の残骸に着火し、燻(くすぶ)りながらも小さな炎を発し始めた。
衣服についた血液や肉片等が焼ける異臭が漂うが、炎が上がり始めたのは確かである。
しかし、メルエのその行為は、サラにとっては死者への冒涜に映った。

「メ、メルエ！　亡くなった方の衣服に火をかけるなどしてはいけません！」

「・・・・・・・・・・寒い・・・・・・・・・・」

「寒くても駄目です！　その方達は、国の為にここまで来て、無

念にも命を落とした方々なのです。　その方々に敬意を払うことはあっても、その方々の遺品を手に掛けることはしてはいけません。」

サラが何故自分を叱責しているのかメルエには解らない。
故に、自分の状況を正直に答えたのだが、それでもサラの叱責は止まなかった。
困惑したメルエはカミュとリーシャに顔を向けるが、リーシャはどうしたものかと渋い表情を浮かべるだけで援護はしてくれなかった。
代わりに答えたのは、やはりサラの天敵たるカミュだった。

「・・・死んでしまった者に遠慮などする必要はないだろう。　遺品となりそうな物に火をかけた訳じゃない。」

「　そう言うことではありません！　死者とは言え、『人』であった者に敬意を払うべきと言っているのです。　」

カミュの答えに満足するどころか、火に油を注いだ形となり、サラの言質は苛烈なものになって行く。　サラは、先程感じたカミュへの恐怖を忘れていた。
魔物と対峙してから流れる穏やかな空気がそうさせていたのだ。

「・・・死者は何も感じない。　今、生きている者こそ考慮に入れるべきだ。　このまま暖をとらずにいれば、体温は低下し、最悪メルエの体力は底を尽きるぞ。」

「・・・そ、それは・・・」

カミュの言い分はサラにも理解できる。
しかし、だからと言って、何も理解していないメルエが、死者の物には何をしてもいいと思ってしまうのではという危惧がサラにはあったのだ。

「サラ、サラの考えが正しい事も尤もだ。　だが、カミュの言い分にも一理ある。　ここは、死者達へ感謝しながら、申し訳ないが暖を取らせてもらおう。」

「・・・・はい・・・・・」

調停に入ったリーシャの言葉に、サラは不承不承頷いた。
サラが敗北したことが、自分の正当性を認めた物だと感じたメルエは微笑みながら火の傍に近づこうとするが、前に進まない。
襟元を何かに掴まれているのだ。

「メルエ、サラの言うことは間違ってはいない。　例え寒かったとしても、本来ならば、死者の持ち物を無碍に扱うことはいけないことなんだ。　先程、メルエはあの男達に怒りを覚えただろう？」

「・・・・・・」

襟元を掴んでいたのはリーシャだった。
早く火に当たりたいと思っていたメルエではあるが、リーシャの表情を見て聞かなければいけないことなのだと感じ、リーシャの方を真っ直ぐと向く。

話の内容は、サラの意見を肯定するもの。
それ故に、最初はメルエも若干不貞腐れ気味だったが、リーシャの話の後半に先程の盗賊の話が出てくると、メルエの表情も変わり、真剣に頷き返すようになった。

「私も、メルエと同じだ。　殺してやりたいと思った。　少し違うかもしれないが、もし、アイツ達がアンの遺品も持っていたり、その遺品を無碍に扱っていたりしたら、メルエはどう思う？」

「・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・」

「そうだな。　私も嫌だ。　メルエ、死者の遺品の中には、その人を思い出させる大事なものがあるかもしれない。　それと同じように、その人間を表すものもあるんだ。　だから、本当であれば、メルエが先程したことは許されることではないんだ。」

一つ一つ諭すように話すリーシャの話の内容にサラは頷いているが、それを聞くカミュの表情は冷たいものだった。　まるで、全く関心を示していないような、馬鹿なことを言っているとでも思っている

ような態度であった。

「死者となれば、何も言うことはできない。　だから、私達のような生きている人間が死者の尊厳を守らなければいけないんだ。　わかったな、メルエ。」

「・・・・・・」

最後に自分の頭に乗せられたリーシャの手を見上げ、メルエはこくりと頷いた。

「ならば、ここにいる死者達に感謝をしよう。」

「・・・・・・・・・あり・・が・・とう・・・・・・・・・」

メルエが頷くのを優しい笑顔で見つめ、リーシャは更にメルエに促す。
もう一度頷いたメルエは、一ヶ所に集まっている肉も皮もない死者に対して頭を下げ、感謝の言葉を発した。

通常ならば、恐怖心すら覚える場所で流れる場違いのような穏やかな空気。
それにサラの頬も緩んだのだが、そうは問屋が卸さなかった。

「・・・アンタは、幽霊はダメなのに、完全な骸骨は大丈夫なんだな・・・・・」

「はぅ！　なっ、ど、どういう意味ですか！？」

「・・・そのままの意味だが・・・」

「あ、あれは・・・あれは急に出てきたから驚いただけです！　べ、別に常に怖がっている訳ではありません！」

誰がどう聞いても嘘。
サラの弁明をカミュだけではなく、メルエもリーシャも若干呆れ気味に聞いていた。

サラは誰にでも見ることができる骸骨は死者が残した遺品と同じ物として考えていた。　しかし、魂、つまり幽霊となれば、常に見えている訳ではない。　しかも誰でも見える訳でもない。
実を言えば、サラは幽霊を見たのは、＞カザーブ＜が初めてなのだ。僧侶としての除霊という仕事が得意ではない理由は、サラには霊魂というものが見えないからなのだ。　しかも、自分には見えないものが、神父や他の僧侶には見えており、その場所について行かなければいけない。

どこにいるのか解らないもの。
見えないだけで、自分のすぐ隣にいるかもしれないなどと言われれ

ば、誰でも恐怖を感じるだろう。　見えないけれど確実にいるものというトラウマがサラにはあったのだ。

「・・・・あわ・・・・・あわ・・・・・」

「　メ、メルエ！！　」

コツン

「もう言わない約束だろ、メルエ。」

「・・・うぅぅ・・・」

再びメルエがサラをからかい、リーシャに窘められる。
そんな和やかな一時が激しい雨音が響く塔内で営まれた。

「・・・行くぞ・・・どうせ、再びここを出れば衣服は濡れる。
中途半端に乾かした所で無駄だ。　体も温まったらすぐに出る。」

死者達の衣服も残っているものが多いわけではない。
もとより衣服を完全に乾かすなどできる量ではなかった。
それを解っていた為、リーシャはカミュの言葉に頷き返した。

死体置場を出ると、やはり外の雨脚は緩んでいることもなく、むしろ雨も風も強くなっているかのようだった。
そんな場所へと出ていく手前にカミュがサラに話しかけてきた。

「アンタの盾はまだ＞革の盾＜だったな。　この＞青銅の盾＜を使え。」

「えっ！？　そ、それは？」

何故自分にカミュが装備していたはずの＞青銅の盾＜を渡してくるのか、サラには見当がつかなかった。盾はもういらないというのだろうか？

「俺の分は、ロマリアの兵士が使っていた物を使わせてもらう。
アンタにそっちを渡しても死者の物ということで使わないんだろう？」

「えっ！？　まさか、先程の方々の遺品を持ってきたのですか！？」

カミュの言うことが本当であれば、サラがメルエに話していた内容を無視されたことになる。

「ああ、死者の遺品とはいえ、もはや遺族の手に帰ることのない物だ。　あいつ等の無念がカンダタ一味に向いているのならば、俺達が持っていっても何も言わないはずだ。」

「で、でも！」

「使う、使わないはアンタの自由だ。　ただ、この先のカンダタ一味が一階で見たような雑魚ばかりではないことは先程の兵士たちの死体を見ても解るはずだ。」

曲がりなりにも一国の紋章を背負っている兵士たちが十人以上死んでいるのだ。
カンダタ一味の力量を不当に低く見積もるわけにはいかない。

「・・・・わかりました・・・・」

納得はいかない。
だが、カミュの言葉にも一理ある。
先程のリーシャの言葉を借りて、サラは無理やり納得することにした。

来た道を戻る形で歩きだした一行を、強い風と、その風によって叩きつけてくるような冷たい雨を全身に受けながら前へと進んでいく。
サラは、先程渡されたカミュのお下がりとなる＞青銅の盾＜を顔の横に掲げ、雨によって視界が悪くなり、前を行くカミュを見失うことを避けて進んでいった。

元の位置まで戻った時には、全員が再びずぶ濡れになってはいたが、今度は、リーシャがメルエに壁側を歩かせ、暴風壁のようにメルエの横をピッタリと歩いていたため、メルエの身体はマント以外それ程濡れてはいなかった。

「このまま、真っ直ぐ進む。　ここから先は道が狭くなる。　足を滑らせるな。」

前を行くカミュから後方の三人に声がかかり、この先についての注意事項が告げられた。
カミュの言葉に大きく頷いた三人は、今までと同じ隊列で進んでいく。
カミュの話す通り、通路が急激に狭くなり、踏み外せば、地面まで真っ逆さまという状況を四人は進む。

サラは必死に壁に手を付きながら。
メルエはリーシャの腕に掴まりながら。

やっと一行が塔の中心に向かう通路を見つけ、中に入る。
サラはここまで自分が息を止めていたことに初めて気が付き、慌てて目一杯空気を肺に入れ込む。
メルエも頭からすっぽりと被っていたマントを取り、大事な＞とんがり帽子＜が濡れていないかを確かめていた。

「ふふっ、メルエ、大丈夫だ。　帽子は何ともない。」

帽子の隅々まで確かめているメルエに優しい微笑みを浮かべたリー

シャは、少し湿っぽいメルエの髪を梳いてやった。
目を細めながらその手を受け入れるメルエは、年相応の少女のようで、サラにはつい先程、地獄の業火のような魔法を行使した魔法使いには見えなかった。

「・・・衣服を乾かしている暇はない。　このまま上へと進む・・・」

「・・・わかりました・・・」

やっと豪雨から解放され、和む一行の気をカミュの言葉が再び引き締める。
おそらく、この上あたりから、カンダタ一味の本拠になっているのだろう。
その証拠に、階段の上から暖かな空気が降りて来ている。
通常暖かな空気は上へと昇るものだが、下までその空気が降りてくるということは、人工的に空気を暖めている可能性が高い。

「・・・・・・・行く・・・・・・・・」

「・・・メルエ・・・」

しかし、リーシャはメルエの様子が少し気がかりだった。
一階部分での一味の人間の話を聞いて以来、メルエの目に何かが宿

っている。
リーシャはその何かに見覚えがあったのだ。

それは、アリアハン大陸で魔物を見るサラの瞳に宿っていたものと同じもの。
それは、＞カザーブ＜の村で見たトルドの瞳に宿っていたもの。
そして、もしかすると自分の瞳にも宿っていたのかもしれないもの。

リーシャは不安だったのだ。
幼いメルエが抱えるものとしてはあまりにも重く、あまりにも大きすぎるものを彼女が背負ってしまったのではないかと・・・・

「・・・カミュ・・・」

それが言葉に出てしまう。
しかも、それは先頭を行くカミュに向けて。

何故カミュへなのか。
リーシャは今までの人生の中で弱気になることなど滅多になかった。
そんな弱音に近いものを漏らした相手が、よりにもよって『人』の感情など一切考慮にいれないであろうカミュであったのだ。
リーシャにも自分が何故そんな言葉を発してしまったのか、解っていなかった。

「・・・わかっている・・・いざという時は、何とかする・・・・」

しかし、リーシャの声で振り返ったカミュから発せられた言葉は、そんなリーシャの弱気を払うのに十分な威力を持った言葉だった。
リーシャは何も言っていない。
それなのにもかかわらず、このアリアハンが掲げた勇者には通じていたのだ。

詳しい内容など一切会話の中に入っていないにも関わらず、それがリーシャにも伝わった。
カミュに力強く頷いたリーシャは、後ろに控えるサラを促し、カミュに続いて上へと続く階段を上り始めた。

階段を上って行くと、上から漏れていた光が徐々にその明るさを増していく。
今日のように、真っ黒な雨雲に空が覆われている日にこのような光が差すことなど、人工的な明かり以外にはあり得ない。

「あん？　なんだてめぇら？」

リーシャが昇り切る前に、先頭のカミュとメルエが上階のフロアに辿り着き、そこにいたのであろう人間たちとやり取りをしている声が聞こえた。
リーシャのすぐ前を昇るサラを急がせ、リーシャも上のフロアに足を踏み入れると、そこは完全な一つの部屋になっていた。

石畳の塔内部に赤い絨毯が敷かれ、机に椅子、更には壁側に暖炉もある。
暖炉は赤々と炎が燃え盛り、フロアの温度を暖かく保っている。
一階や二階部分と違い、ここには外の雨音すら聞こえてこない。

そこに、5，6人の男達が杯を手にしながら座っていた。
状況から考えて、彼等がカンダタ一味なのは間違いないのだろう。

「 何なんだって聞いてるんだ！ てめぇら、ここがカンダタ一味のアジトだって知ってるのか！？ 」

「 おう！ よく見りゃ女じゃねぇか！？ 」

「 本当だぜ！ しかもいい女じゃねぇか！？ 」

「 なんか、余計なもんまで混じっちゃいるがな。 」

「たかだか一人じゃねぇか！？」

薄汚い男達が、口々に一行を見て、その汚い口を開く。
その様子にサラは顔をしかめ、リーシャは眉をひそめた。

「・・・・・・・・アン・・・・・・・・・・殺した・・・・・・・・？」

しかし、瞳の奥に重く暗い何かを宿し始めた、この少女には男達の言動など耳に入ってはいなかった。
その少女の姿に、リーシャは再びカミュに視線を向ける。
視線の先のカミュは、今度はリーシャの方を見ずに首だけを縦に動かした。

「ああ！？　なんだお譲ちゃん？」

「・・・アン・・・？　どこかで聞いたことあるな・・・？」

「ギャハハハッ。　お譲ちゃんよぉ、悪いが俺達は殺した人間の名前を一々憶えてらんねぇんでな。」

「ちげぇねぇ。　ギャハハハ」

「おお！　あれじゃねぇか？　昔、そのお譲ちゃんぐらいのガキを狩りした・・・」

それが決定打だった。
この５人の男達は、間違いなくアンとその母親の殺害に関与していたのだ。
それが、メルエにも分かった。

「おい！」

「・・・・・・・イ！！！！・・・・うぅぅ！！」

メルエの詠唱が始まるよりも一瞬早く、カミュがリーシャに声を上げる。
カミュのその声に、リーシャは急ぎ隣に立つメルエの口を塞ぐ。
詠唱を邪魔されたメルエは、珍しく半狂乱の様になりながら、リーシャの腕から逃れるようにもがくが、幼いメルエが屈強なアリアハンの騎士を振り切れるわけがない。

「な、なんだ、てめぇ・・・ギャ――――――！！」

そんなメルエとリーシャの二人のやり取りを眺めていた男達であったが、気を取り直し、声を上げようとした時、彼等にとって地獄の始まりである叫び声が響いた。

リーシャに声を上げた、カミュは一気に男達に肉薄していたのだ。
近付き様に背中から剣を抜き、一番前にいる男の足を薙ぎ払う。
鋭く鍛え抜かれた＞鋼の剣＜が男の太ももから下を斬り飛ばした。

「て、てめ・・・・・・・ギャ――――――――！！」

「・・・カ、カミュ様・・・」

続いて、返す剣で近くにいた男の腕を斬り飛ばし、そのままその男の太ももに剣を突き刺した。　肩口から腕を失い、足には太い剣が貫通している。
カミュは剣を抜くために男を蹴り飛ばす。
もんどりを打って倒れ込む男の肩口からは盛大に血液が流出していた。

サラは再びカミュへの恐怖を思い出す。
本当に先程まで、無表情ではあったが、恐怖を感じるものではなかったはずなのに、リーシャに声をかけた途端にカミュから立ち上ぼる雰囲気は一変していたのだ。

「　お、おい、ちょっと待てよ。　何なんだお前ら・・・意味が分からねぇよ。　」

「　お、おい！　逃げるぞ！　こんな奴ら構ってられるか！？　」

残る三人の内、二人が目の前で剣を握る青年への恐怖を抑え、行動に出た。
カミュ達が昇って来た階段の対角線上にある、上の階へと続く階段へと駆けだしたのだ。
しかし、力量に差があるものから逃げ出すことなどできはしない。

「ギラ！」

いつものように呟くような詠唱ではなく、力強い詠唱。
それが、術者の怒りを表していた。
逃げる男達の背に向けて掲げたカミュの右手から熱風が巻き起こる。

「あ、あれは・・・」

サラは言葉を失った。
先程の戦闘でメルエが使った魔法。
魔道書に乗る攻撃呪文。
本来は魔法使いしか使えない筈の呪文。

「「ギャ――――――――！！　た、たすけてくれぇ！！」」

燃え盛る火炎の中、男達と思われる黒い影が二つ蠢いている。
男達を取り囲むように巻き起こった炎は、サラの目にはメルエが起こしたそれよりも小さいように見えた。

炎が収束し、下に引かれた絨毯等もあらかた燃えきったその後に、二人の男であった物体が姿を現す。
サラの感じたように、カミュの放った＞ギラ＜はメルエのそれよりも威力を抑えたものであったためか、男達は消し炭のように炭化したものではなかった。

「・・・・うぅ・・・うぅ・・・・・」

「・・・・あがっ・・・・・・・」

しかし、あの様な状態であれば、瞬間に炭化する程の威力の魔法を受けた方が彼らにとっては良かったのかもしれない。
身体は焼け爛れ、皮が剥がれ、肉が焼けおち、呼吸すらも定かではない。
それでも生きているのだ。
生きているよりも、死んだ方が良かったと考える程の苦痛を味わっているだろう。

もし、これがカミュの意図的な行為なのだとしたら・・・・
サラはそれが怖くて仕方なかった。

そんな呆然とするサラの前にいた最後の一人となった一味の男は、震える足を引きずりながら階段を上ろうと必死に移動していた。

それに気が付き、そちらに視線を向けたカミュはもう一度腕を掲げる。

それを止めたのは、意外な人物だった。

「・・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「メ、メルエ！」

カミュの掲げられた腕に掴まったのはメルエだった。

５人の内、あっという間に４人を片付けてしまったカミュへ、不満と若干の怒りを滲ませた表情をしていた。

そんなメルエの様子に更に不安を掻き立てられたリーシャは、未だにカミュの腕にしがみ付くメルエを後ろから抱き締めた。

一行が予期せぬアクシデントに戸惑っている間に、階段に辿り着いた男は、震える足で立つことが出来ないため、這いつくばりながら階段を上って行った。

「・・・上の連中に気づかれたな・・・」

リーシャがメルエを引き剥がしたことにより、自由を取り戻した腕を軽く振りながら剣を背中の鞘に納め、カミュは未だに呻きながら横たわる男達へと歩いて行く。

「・・・カ、カミュ様・・・な、何を・・・・・」

「・・・カミュ・・・・」

サラはカミュの行動に眩暈を覚える。
メルエを胸に抱くリーシャも言葉を失っていた。

「　た、たすけてくれ。　な？　頼む・・・」

「・・・・・・」

剣を受け、足から血を流し続け、立つことも敵わない男達の襟首を掴んだカミュは、その命乞いに耳を傾けることなく、先程上って来た階段から男達を落としていく。
まるで家庭で出たゴミを捨てるように・・・・
何の感情も感じさせない表情で、カミュは二人の男を階下に落としていく。

「　ギャ――――――――――――！！　」

石でできた階段に身体を打ちつけながら転がり落ちていく男達の叫

び声が遠くなっていく。
おそらく彼らの末路も、血と肉に飢えた魔物達の餌となってしまうのだろう。

サラは唇を震わせながらその光景を見ているしかできなかった。
メルエは何も感じていないようなカミュのような表情を作る。

二人の男達を階下に落とし終わったカミュは、続いて呻き声を上げ続けている二人へと近づいて行く。
リーシャは止めべきかを悩んでいた。

「・・・・うご・・・・うぅう・・・・」

男達であったものに近づいたカミュは、そのまましゃがみ込み、手を二人の上半身に掲げる。　その姿に他の三人は見覚えがあった。
それは、何度かサラがしていた態勢。

「・・・ホイミ・・・」

そう、本来聖職にある僧侶にしか使用することが出来ない魔法。
教会にある経典にその契約方法が記されている回復魔法の詠唱だった。

「・・・カ、カミュ・・・お前・・・」

「・・・ど、どうして・・・」

カミュの行動に対し、発したリーシャとサラの疑問の言葉は根本的に違っていた。
リーシャは、『何故回復させる必要があるのか?』という疑問。
そして、サラは『何故、＞ホイミ＜が使えるのか?』という疑問。

しかし、本当はこの時点で、カミュの考えていることがリーシャには大凡(おおよそ)見当がついていた。
それでも、それを飲み込むことをリーシャのどこかが拒絶していたのだ。

カミュが当てた掌から淡い緑色の光が瞬き、男達を癒していく。
焼けただれ、肉も溶け落ちていた男達の顔面が奇麗に修復されていく。
だが、＞ホイミ＜程度の回復呪文であれば、これが限界であった。
逆に、カミュにとってみれば、それで十分だったのかもしれない。
男達にほんの数時間の命が残るだけで・・・・

「 あ、あ、あ、た、たすけてくれ! 」

「 いてぇよ・・・・」

口が動くようになった男達は、身体を蝕む痛みを我慢しながら、カミュへと命乞いを繰り返す。 しかし、その男達の姿を見下ろすカミュの表情は氷のように冷たいものだった。
先程と同じように男達の頭に残った髪を鷲掴みにし、階下へと続く

階段へ引き摺って行く。

「た、たすけてくれ――――――!!」

「死にたくねぇよ!」

男達の悲痛な叫びがサラの耳に残って行く。
それでもサラは口を開くことができなかった。
無言で男達を引き摺って行くカミュが『人』には見えなかったのだ。

「・・・・・カミュ・・・・・・嫌い・・・・・・・」

再び男達を階下に突き落とし終えたカミュへ、初めてメルエが嫌悪感を表した。
それは、サラの様に恐怖を感じたものではなく、自分の出番を奪ったカミュへの怒り。
アンの話を聞いた時から、メルエの胸に渦巻いていた憎悪に近い感情を吐き出すことができなかったことへの憤り。

「・・・・メルエ・・・・・俺のことを嫌うのは構わない・・・・・だけど、お前はアンとは友達なのだろう・・・・?」

「!!・・・・・・とも・・・・だち・・・・?」

メルエは、嫌ってもいいと言われ、自分を嫌いになったのではないかと身体を震わせたが、その後の聞き覚えのない言葉に首を傾げた。

「メルエ・・・カミュは、メルエとアンは仲が良いのだろう？　と聞いているんだ。」

「・・・・・・」

カミュの言葉の補足をするためにリーシャが口を開く。
その言葉に、再びメルエの首が傾いたが、しばらく考えた後にこくりと頷く。

「うん。　だからだ。　だから、メルエの代わりにカミュがあいつ等に剣を振るったんだ。」

「・・・・？？？・・・・・」

メルエにはリーシャの言葉が理解できない。
それはサラも同じだった。

「メルエ、アンはメルエに会った時に、あいつ等を殺してと言った

のか？」

「・・・・・・」

メルエは少し考えた後、首を横に振った。
アンはメルエに優しく笑いかけていたはずだった。

「メルエの気持ちは解る。　私もメルエと同じようにあいつ等を許せない。　でも、カミュもそして私もメルエに『人』を殺してほしくないんだ。　それは、私は会ったことはないが、アンも同じじゃないかと思う。」

「・・・・・・」

「・・リーシャさん・・・」

暖炉の炎が赤々と燃え、周囲の壁に血液が飛び散っている部屋の中で、リーシャはメルエの帽子を脱がし、頭に手を乗せる。
サラはリーシャの話す内容が何となくだが理解できた。
それは、カミュが全ての罪を被ったということ。

「メルエ、ここからは少しメルエには難しくなるかもしれない。」

「・・・それでは、アンタにとっても難しくなるんじゃないか・・・？」

「う、うるさい！　お前は少し黙っていろ！」

リーシャの話の腰を盛大に折る声が、先程までの無表情を少し崩したカミュから上がる。
むきになって怒鳴るリーシャに口端を上げるカミュのそれは、もしかすると照れ隠しなのかもしれないとサラは見当違いのことを考える。

「カミュは納得しないかもしれないが、今の世の中で魔物を倒すことは奨励されている。　つまり認められているんだ。　だけどなメルエ、『人』を殺すということは忌むべきものとして嫌悪される。」

「・・・・・・」

「『人』を殺す者は、アンを殺した盗賊達ような奴等だけだ。　そして、そう言う人間は普通に暮らすことなどできない。　村に入っても忌み嫌われ、隠れて住んでいたとしても、気付かれれば追い出される。　もし、メルエがあいつ等を殺したとなれば、アンもメルエをそういう目で見てしまうかもしれない。」

「・・・・・・・いや・・・・・・・」

自分の話を一つ一つ頷きながら、真剣に聞いていたメルエが、最後のリーシャの言葉に首を横に振りながら発した言葉にリーシャは満足そうに頷いた。

「そうだな。　私やカミュも、メルエがそういう目で見られるのは嫌だ。　だからメルエには手を出させなかった。　もし、もう一度メルエがアンに会った時にまた笑って話せるようにな。」

「・・・・・・でも・・・・・・カミュ・・・・・・」

リーシャの言いたいことはメルエも理解できた。
本当の意味で理解できたかどうかは定かではないが、納得はした。
しかし、それならば、手をかけてしまったカミュはどうなるのか？
メルエは不安な表情を浮かべカミュの方へ顔を向ける。

「・・・俺は大丈夫だ・・・元々、俺はどうなろうと普通に暮らすことなどできないのだから・・・・」

「・・・カミュ・・・はっ！　メ、メルエ、カミュもあいつ等を殺してはいないぞ！」

「・・・生きている方が辛いでしょうけど・・・」

カミュの言葉は、まるで自分に言い聞かせるような呟きだった。
一瞬、カミュを見つめてしまったリーシャが気を取り直し、メルエへまだ盗賊達が死んでいないことを告げるが、それも隣で放心状態にあったサラの故意的な呟きにより意味を無さなかった。

「・・・メルエ・・・これから先、俺と旅をする中で、こういう場面があるかもしれない。　だが、お前が罪を被る必要はない。　それらは全て俺に被せればいい。　お前が苦しんだり、悩んだりをすることはないんだ。」

「・・・・カミュ・・・・お前は・・・・」

「・・・元々、俺はそういう存在だ・・・」

アリアハンが国を挙げて送り出した世界の希望。
綺麗な言い方をすればその通りだろう。
しかし、裏を返せば、世界中の人間が、自分の命が惜しいがために、この勇者一人の命を犠牲にしているとも言える。
世界の黒い部分も、世界中の欲望も、全てをこの青年と言うにはまだ若い少年に背負わせているのだ。

「・・・・・・・」

リーシャの言葉も、もちろんカミュの言葉も半分程しか理解していないのだろうが、メルエはカミュにこくりと頷いた。
メルエの頷きを満足そうに見つめ、リーシャは軽くメルエの頭を撫でた後、再びその頭に＜とんがり帽子＞を被せた。

「わ、私も、メルエに『人』を殺してほしくはありません・・・でも、あの行為は酷過ぎるのではないですか！？」

会話に置いて行かれていたサラがようやく口を開く。
リーシャの話の中に、自分の名前がないことを実は不満に思っていたのかもしれない。

「・・・サラ・・・」

『人』である者の命に格差はないということを根底に持つサラは、やはりどこか納得がいかなかった。
確かに、あの盗賊達の所業は許されざるものではあるが、カミュのしたことは余りにも酷過ぎるのではないか？　ひと思いに殺すことをせず、いたぶり殺しているようにさえ感じる。　ましてや＜ホイミ＞までかけて傷を癒しておきながら、魔物の餌とする為に階下へ放り投げるなど、悪魔の所業ではないかとサラは感じたのだ。

「・・・その戦士が話した話と矛盾するが、俺はあいつ等を『人』とは思っていない。」

「ど、どういうことですか!?」

しばし、サラの目を見据えてからカミュは重い口を開いた。

「・・・聞きたいんだが・・・アンタはあいつ等がした行為は『人』がする所業だと思っているのか?」

「そ、それは・・・しかし、カミュ様がしたこともまた、彼らと同じことではないのですか?」

サラは引き下がらない。
この旅を始めて、もはや何度目かすらも分からない程のサラとカミュの問答が始まる。

「・・・そうかもしれないな・・・俺に何かを裁く権利などない。
ただ、命を自己の快楽の為にいたぶり殺したあいつ等に憎しみを感じただけだ。 魔物以下であるあいつ等を『人』とも、ましてや『魔物』とも思わない。 その辺に転がるゴミと同じだ。」

「・・・そ、そんな・・・」

サラはカミュが漏らした考えに絶句する。
これが世界を救うと信じていた勇者の姿なのか？
自分はこの勇者に何を望めばいいのか？
サラはこの旅に同道する意味を見失いそうになる。

しかし、アリアハン大陸であれば、おそらくサラと同じような想いを持ったであろうリーシャは、違う感想を抱いていた。
カミュは、アリアハン大陸では、サラの糾弾に自己の考えなどあまり話すことがなかったはずだ。　話の途中でサラの存在自体を拒絶するような言葉を発したり、話す意味がないと黙りこんだりというのが常であった。
それが今は、しっかりとサラに告げている。
それは、果たしてカミュの変化なのか、それともリーシャのカミュへの見方が変わったせいなのかは解らなかった。

「・・・時間をかけすぎた。　メルエ、服は乾いたか？」

「・・・・・」

もう話は終わりだとでもいうように、視線をメルエに向けたカミュの言葉に、メルエは一つ頷くことで返した。

「・・・上へ進む・・・カンダタ本人がいるか分からないが、『金

の冠』はこの塔にあるはずだ。」

一行がとうに忘れていた、カンダタ一味を追っている理由を述べ、カミュは上のフロアに続く階段に足をかけた。
カミュ、メルエ、リーシャと続き、階段を上って行く。

一人残されたサラは、今尚、先程までカミュが立っていた場所を焦点の定まらない瞳で見つめていた。
その時、階下から悲痛な叫び声が上がった。
おそらく、血の臭いと肉の焼ける臭いに誘われた魔物達が、カミュによって階下へ落とされた者達を発見したのだろう。

サラは叫び声を聞き、ようやく覚醒を果たす。
自分が目指すのは、魔王ただ一人。
その為にも、ここで立ち止まるわけにはいかない。
強引に自分の心を抑え込み、サラは立ち上がった。
胸に去来する様々な葛藤は、このメンバーで旅を続ける限り無くなることはないだろう。
それでも、サラは前に進むことにしたのだ。

サラが階段を上りきった頃、階下では魔物達の咆哮が響いていた。

シャンパーニの塔？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

次話はついにカンダタ登場になると思います。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

シャンパーニの塔？（前書き）

今回はちょっと長めですね・・・

シャンパーニの塔？

サラが上のフロアに足を踏み入れた時、すでに三人はカンダタ一味と対峙をしていた。
カミュ達三人の前にいるのは、身体に＞鉄の鎧＜と思しき物を着込んだ男達が三人。
そして、先程階下から命からがら逃げ出した男がその後ろで座り込んでいる。
しかし、そんな四人よりも、サラの目を引き付けたのが、中心に立つ大柄で筋肉質な大男だった。　その威圧感は凄まじく、カミュが能面を被った時と同等、いやそれ以上にサラには感じられた。
おそらく、この大男こそが、『カンダタ』その人なのであろう。

「・・・・お前だったのか・・・・」

「・・・・・・・」

しかし、カミュとメルエ、そしてリーシャの三人は、サラとは違う方向を見ていた。
それは、＞鉄の鎧＜を着込んだ男達の中心に位置する場所に立ち、最もカンダタと思われる大男に近い場所に立っている男だった。

サラにも、その男には見覚えがある。
それは、ロマリア城下町を出てすぐの森の前。
サラがメルエに初めて会った場所・・・

そう、その男は、あの奴隷商人であり、手下のような者から『兄貴』と呼ばれていた男だったのだ。

「 て、てめぇらは!! 」

向こうもカミュ達の顔を覚えていたのであろう。
見覚えのある顔を見て、驚愕の表情を浮かべていた。

そう言われれば、先程カミュの纏う空気に気を取られていたが、後ろで座り込んでいる男の右手は、手首から先がない。
あの時、カミュに腕を斬り捨てられた男に違いなかった。
おそらく、カミュの＞ギラ＜で燃やされた男の一人の左手は同じように手首から先はなかったことであろう。

「 貴様が・・・アンとその母親を・・・」

リーシャが怒りに歯を食いしばる。
実は階下でカミュが盗賊を斬っている時から、メルエはそのことに気が付いていた。
それもあって、カミュの手を止めたのだ。
自分とアンの苦しみを味あわせるために・・・

「 おいおい、ここまで辿り着いたことは褒めてやるが、ここの主である俺を無視するとはいい度胸じゃねぇか？」

カミュ達四人の視線が部下の一人に向けられていることに若干の苛立ちを表しながら、大男は口を開いた。

「・・・アンタが・・・カンダタか・・・？」

「おうよ！　この俺様がこのロマリア大陸に知らぬものはいない、大盗賊のカンダタ様だ！　よく覚えておきな！」

「・・・ゴミに名前があるなど、迷惑以外何物でもないな・・・」

「なんだと？」

アリアハンの勇者とロマリアの義賊と謳われる男の対峙。
それは、サラの想像を遥かに超えた緊迫感を有する対話だった。
カミュの挑発的な物言い。
そして、それに返答するカンダタの凄みの聞いた声。
どれも、通常であれば身震いを起こす程のものだった。

「奴隷の売買や、村の人間を拉致し殺害するような組織の親玉の名を覚える必要などないということだ！！」

最後の言葉から睨み合いを続ける、カミュとカンダタに変わって、リーシャが腰の剣に手を掛けながら声を張り上げる。
リーシャの手の動きに、隣に立つメルエも構えを取り始める。

「ああ!?　奴隷売買?　何を言ってやがるんだ!?」

「ここに来て、まだ白を切るつもりか!?」

「・・・・・」

リーシャの怒鳴り声に、しばし宙を見ていたカンダタは、何を言いたいのか全く分からないとでも言うように言葉をリーシャに返す。
リーシャの頭にはもはや完全に血が上ってきていた。
カミュ、メルエを抑えるのに冷静さを保ってきたつもりではあったが、リーシャ自身もまた、胸に沸々と湧きあがる怒りを溜めに溜めてきていたのだ。

「か、頭(かしら)!　こんな訳の分からねぇことを言ってやがる奴らなんて、さっさとやっちまいましょうぜ!」

「・・・貴様・・・」

そんなカンダタとリーシャのやり取りに慌てたように、部下の中心

人物であろう男がカンダタへ声を掛ける。
それが、メルエを馬車に押し込めていた張本人であることを知っているリーシャは、怒りに我を忘れそうになる。
しかし、その一歩手前でリーシャの目の前にカミュの手が挙がった。

「・・・アンタがカンダタで間違いないんだな・・・・」

「ああ!?　さっきから、そうだと言ってんだろうが!?」

カミュの呟きに、先程から自分一人が事情を飲み込めていない苛立ちからカンダタは更に声を張り上げる。

「そうか・・・ならば・・・『金の冠』を出せ。」

「カミュ！　こいつらは奴隷売買も行うような奴らなんだぞ！
そんな奴等が交渉等に応じる訳はないだろ！」

カミュの言葉に、交渉をしようとしていると感じたリーシャは、カミュの胸倉を掴む勢いで詰め寄って行く。　しかし、カミュから返ってきた答え、そして視線はリーシャの口をそれ以上開かせないものだった。

「・・・あいつ等には、それ相応の報いを受けさせるさ・・・だが、

カンダタへの要件は『金の冠』だ。」

「・・・てめぇら・・・さっきから何のことを話してやがる？　俺は盗賊ではあるが、奴隷の売買などやったことはねぇぞ・・・」

「　まだ言うか！　そこにいる奴等が奴隷の売買をしていることは私達が見ているんだ！　」

「・・・なんだと・・・」

カミュの言葉に氷ついたリーシャであったが、カンダタの一言に再起動を果たし、再び声を荒げた。
リーシャの言葉を聞いたカンダタは、その指し示す先にいる自分の部下たちに視線を向けた。

「　な、何を言ってやがるんだ！　か、頭、こいつらの言ってることなんて出鱈目ですぜ。　俺達がそんなことをする訳ないじゃないですか！　」

「・・・・・メルエも・・・・・・・連れて行かれた・・・・・」

焦る男の言葉に、満を持してメルエの口が開く。
奴隷として買われ、売られそうになった少女の言葉は、何よりも説

得力を持つ。

「・・・てめぇら・・・」

「か、頭！　俺達は嘘なんて吐いちゃいませんぜ！　か、頭は、俺達の言葉より、こんなどこのどいつかも分からねぇ奴等の言葉を信じるんですか！？」

「そうですよ！　まずはこいつ等をやっちまいましょう。　話はそれからしましょうぜ。」

メルエの言葉に、部下を見るカンダタの目は鋭さを増す。
それに怯え始めた部下たちは、カンダタと目を合わせないためなのか、さっさとカミュ達との戦闘に入りたいためなのか、＞鉄の兜＜のような物を頭に被った。
カミュ達との戦闘を望む理由もまた、『死人に口なし』というものを実行するためなのかもしれない。

「・・・・・・わかった・・・・・・こいつ等を片付け終わったら、次はお前たちだ。　覚悟を決めておけよ・・・」

しばし、部下たちを睨みつけていたカンダタだったが、何かに諦めたように、呟きを洩らした後、腰から巨大な武器を取り出し、カミュ達に向かって構える。

その武器は斧らしき物。
しかし、それは木こりが使うような＞鉄の斧＜ではなく、戦闘用に作り変えられた斧だった。

「へへへっ、残念だったな。　お前たちにはここで死んでもらうぜ。」

カンダタの威圧感から解放された男は、下種な笑みを浮かべながら、カミュ達に向かって腰から剣を抜いた。
それが、戦闘の合図。

「　メルエ！！　」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

部下たち全員の武器が抜かれたことを確認したカミュが、メルエへと合図を送る。
カミュの言葉に短く答えたメルエは、素早く詠唱の態勢に入った。

「・・・・・・・・・・イオ・・・・・・・・・・」

いつもよりほんの少し力の入った詠唱。
それは、カミュ、リーシャ、サラの三人も初めて聞くメルエの詠唱。

散々、メルエが出したがっていた新しく契約を済ませた魔法であった。

メルエの詠唱と共に、三人の部下、いや、奴隷商人から『兄貴』と呼ばれていた男の目の前の空気が振動を始める。
何事かと考える暇を与えず、振動を始めた空気が圧縮されていき、突如弾けた。

カミュ達に見えたのはそこまでだった。
一瞬、『兄貴』と呼ばれていた男の前が真っ白になったかと思うと、凄まじいまでの爆発音を響かせ、視界が奪われたのだ。

メルエに声をかけたカミュですら、その光景に呆気にとられた。
爆発音のすぐ後に、＞ギラ＜よりも強い熱と風が周囲を取り巻き、カミュの耳に耳鳴りを残していた。

ようやく視界が戻った時に見た状況に、再びカミュは絶句することになる。
爆発の中心であったであろう男は吹き飛ばされ、左半身がほぼ失われていた。
左腕は初めから無かったかのように消滅しており、左足は太ももの所で皮一枚で繋がっている。　鎧で覆われていなかった部分は焼け爛れ、血と露わになった肉で赤々と剥き出しになっていた。

他の二人も、規模こそ違え、その被害は甚大と言って差し支えはないだろう。
熱風により、器官が焼けたのか、呼吸困難に陥っている者。
そして、爆発の際の光に目をやられ、目が見えなくなっている者。
生きてはいるが、もはや生きることすらも苦痛と言った状況だった。

＞イオ＜
魔道書に記載されている攻撃呪文の一つ。
＞メラ＜や＞ヒャド＜、そして＞ギラ＜とも全く違う系統の魔法。
それは、爆発呪文。
詳しい原理は解明されていないが、大気中にあるものを術者の魔力を触媒にして圧縮し、その力を一気に解放させることにより強大な爆発を引き起こす。
その威力は術者によるところも大きいが、広範囲に及び、対象を爆発の直撃以外にも、熱風等のダメージを与えるものである。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

その光景から真っ先に立ち直ったカミュがある方向に視線を向ける。
そこには驚きながらも、立ち直りかけていたリーシャの顔があった。
カミュの視線に気が付き、目線をカミュに合わせたリーシャが一つ頷いた。

「・・・・・・・・・まだ・・・・・・・・もう・・・・・一回・・・・・・・・・」

「メルエ！！　もういい！！」

もう一度詠唱に入ろうとするメルエに声を張り上げ近寄ったのはリーシャ。
そして、反対に息も絶え絶えなカンダタの部下たちに真っ直ぐ向かっていったのはカミュ。

リーシャとカミュの心の中にあるのは、ただ一つの想い。
『メルエに人を殺させてはいけない』

メルエの詠唱を止めたリーシャがカミュに視線を向けた時には、カミュの＞鋼の剣＜が一人目の喉に突き刺さった所だった。
喉を焼かれ、呼吸が出来ない者の喉を突き刺し、その命を奪っていた。

もはや助からない命を楽にさせる為に奪ったとも見えなくもないが、サラにはカミュが遂に明確に『人』を殺したとしか見えていなかった。
メルエの魔法の威力に続き、カミュの行為に呆然とし、周囲が見えなくなっていたサラには致命的な隙が生じていた。

「　呆けているなよ、譲ちゃん！　」

カミュが、二人目の男に剣を向けた時にはもはや遅かった。
部下たちに気を取られ、最も目を離してはいけない人物から注意をそらしてしまっていたのだ。

カンダタ一味の総大将であり、その一味の掲げる名前を持つカンダタである。

カンダタは、強力な魔法を使った魔法使いでもなく、それを護るように立つ戦士でもなく、そして部下の一人を殺害した少年でもない、法衣を纏い放心している僧侶に目をつけた。

「ぐふっ！」

サラは、目の前にカンダタの顔を確認したと思うや、腹部に強烈な痛みを感じた。
それは、あまりの衝撃に意識を手放してしまいそうになる程のもの。
カンダタは一瞬でサラとの距離を詰め、豪快にサラの腹部を蹴り上げたのだ。

内臓を破壊されたかと思う程の衝撃を受けたサラの身体は、その体重の軽さから、完全に空中に浮き上がる。
意識が薄れていく中で、サラはカンダタらしき足が踏み込むのを見た。

「じゃあな、譲ちゃん。」

後方に仰向けの状態で飛んだサラの腹部に、いつの間にか振り上げていたカンダタの斧が振り下ろされる。
戦闘用として鍛え上げられた斧である。
まともに入れば、サラの身体など真っ二つにされることは明白である。

「ちぃ！」

「サラ――――――――！！」

リーシャの叫びが木霊する。
リーシャにはカンダタの斧の軌跡が見えていた。
あのまま振り下ろされれば、間違いなく、サラの上半身と下半身は永遠の別れを告げ、同時にサラの人生も幕を閉じるという結末が・・・

その時、リーシャの叫びの少し前に舌打ちをしたカミュの手がサラ目掛けて上げられた。そして、カミュが何かを呟くのと同時に、カンダタの斧が間近に迫っているサラの身体が光に包まれたのだ。

「・・・・駄目だ・・・・・」

光に包まれるサラを見ても、リーシャの見ている結末は変わらなかった。
リーシャはカミュがサラに＞スカラ＜か＞スクルト＜をかけたのだと思ったのだ。
それでは間に合わないと・・・・

＞スカラ＜　＞スクルト＜
魔道書に記載される、数少ない補助魔法の一つ。
それは、術者の魔力を対象の身体に纏わせることにより、致命傷な

どを防ぐことのできる魔法である。
対象になった者は、術者の魔力が薄い膜として身体を覆い、敵の攻撃などを微妙にずらすことができ、致命傷を避けることができるのだ。
二つの呪文の違いは、一人に向けて使うか、対象を複数にするかの違いである。
その場合、術者は一人であるため、纏わせる魔力の量は変わらず、必然的に対象が複数より一人の方が効力は高くなる。

ガキィィィィィィィィン

しかし、光に包まれるサラに振り下ろされたカンダタの斧は、リーシャが予想していた結末を産むことなく、全く理解不能な効果音を立てたのだ。
それは、サラの身体が斧によって叩き切られる、あの肉を潰すような音ではなく、まるで硬い金属同士をぶつけ合ったような凄まじい音。

ドシィィィィィィィン

リーシャは目の前で起こったことを飲み込めずにいた。
凄まじい金属音を響かせたサラの身体は、石でできた床に落下するが、落下音もまた異常な音を塔に響かせたのだ。

「・・・・ふぅ・・・・なんとか間に合ったみたいだな・・・・・」

「て、てめぇ、何をしやがった!!」

「サラ!!」

剣を先程階下の部屋から逃げ出してきた男の太ももに突き刺しながら言葉を漏らすカミュに、カンダタは金切り声をあげる。
その間に腰の剣を抜いたリーシャが、カンダタを牽制するように剣を振るい、サラの下へと辿り着く。メルエもまた、右手をカンダタに向かって掲げながらリーシャの後を追った。

そこでリーシャが見たものは、完全にリーシャの頭では理解の範疇を超えたサラの姿だった。
サラの姿は、カンダタに蹴り上げられたままなのである。
意識を失い、倒れているだけならわかるが、その身体はリーシャの持つ＞鋼の剣＜ような光沢を持ち、また色合いもそのものであった。
恐る恐るその身体に触れてみると、体温を全く感じられないような冷たさ。

「ホイミ」

カンダタの剣幕にも動じず、メルエが真っ先に＞イオ＜の対象とした奴隷商人の男にカミュは回復呪文を掛ける、淡い光を受けた男の身体は、傷口などが少し塞がり、呼吸も可能となる。
意識は失っているが、呼吸が復活したことを確認したカミュは、再

びカンダタへと向き直る。　あまりに常識を逸脱した出来事にカンダタと言えども、カミュの不意を突くことすらできない程に困惑していた。

「　カ、カミュ、サラに何をしたんだ？　サラは大丈夫なのか？　」

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・」

リーシャに置いても、珍しく怒鳴り散らすことはせず、カミュにサラの状態を問いかけていた。　その横に立つメルエも心配そうにサラを見つめる。

「・・・・少しの間、鉄になってもらっただけだ。　しばらくすれば元に戻る。」

「　鉄にだと！！　」

リーシャに返したカミュの言葉に、いち早く反応したのはリーシャではなくカンダタだった。　文字通り目を丸くし、カミュを見据えるカンダタの表情は、とても大盗賊の親玉には見えないものだった。

「　何だそれは！　そんな魔法見たことも聞いたこともねぇぞ！　」

「・・・どちらにせよ、アンタには関係ないことだ・・・」

続くカンダタの叫びを、カミュが斬り捨てる。
サラの状態がどうなっていようと、カンダタには関係ないと・・・

しかし、カンダタにとっては、仕留めたと思った相手が鉄になっていたでは納得がいかない。　しかも、自分に向かってくる相手は四人パーティーだ。　ならば、カンダタの攻撃を受けた後回復呪文で仲間の傷をいやしてしまう可能性のある僧侶をまずは消してしまおうとする目論見も外れてしまったのだ。
まあ、それもカミュが＞ホイミ＜を使ったことにより、意味をなさなかった可能性は、カンダタも否定はできなかったが・・・

「　カミュ！　では、サラは大丈夫なんだな・・・」

「・・・ああ、時機に戻る・・・」

「そ、そうか・・・・・よかった・・・・」

カミュの言葉に、自分が戦場にいることを覚えているのかと聞きたくなるくらいにリーシャは脱力感を表し、目に光るものを浮かべていた。
それが、彼女の優しさなのだろう。
一度は諦めかけた命が救われたことに、心底喜びを表す。

カミュも、そんなリーシャの姿をしばし見ていたが、もう一度カンダタに向き直る。

「ふっ、ふはははっ、ちげぇねぇ、ちげぇねぇ。　あの状態が何であろうと、俺様には関係のないこった。　しかし、てめぇは何者だ？」

「・・・・別段、アンタに名乗る必要もない・・・・」

「ふはははっ、そいつも尤もだ！　この様子だと、てめぇらが言っていたことも、どうやら真実のようだな・・・・」

自分の問いかけを、カミュに再び斬り捨てられたことを気にもせず、豪快に笑い飛ばす姿は、とても奴隷の売買や拉致殺害を行っている棟梁には見えない清々しさがあった。

「・・・アンタの仲間はここにいる者だけではないだろ・・・・？」

「ん？　ああ、他の地方にも手下どもは散らばっている。」

「・・・アンタの一味は大きくなりすぎた・・・」

お互いが相手の目から視線を外さずに語りあう。
手にした武器を下げてはいるが、いつ相手がその武器を掲げても対処できるように。

「カ、カミュ、どういうことだ?」

鉄になったサラの身体を労わるように触りながらも、リーシャは二人の会話を聞いていた。
もう一人メルエの方は、サラは無事だと安心したためか、今のサラの状態を純粋に楽しんでいるようにさえ見える。

「・・・大きくなりすぎた組織が行き着く結末は、国であろうと一味であろうと同じ・・・」

「・・・破滅か・・・」

リーシャの問いかけに中途半端に答えるカミュの言葉を補足したのは、その大きくなりすぎたと言われる組織の親玉であった。

「 は、破滅だと・・・」

「・・・ああ、そこへ辿り着くのには大きく分けて二通りあるが、結局行き着く先は同じく、崩壊あるいは破滅だ。」

「・・・・・・」

リーシャがカミュの答えに言葉に詰まっている横で、我関せずのメルエが鉄となったサラの頬をペシペシと叩いている。
緊迫してきた話も、メルエに取ってはサラの状態以上に興味のあることではなかった。

「・・・二通りとは・・・？」

それでも尚、リーシャはカミュに問いかける。
それが、自分の祖国アリアハンにも当てはまる可能性が高いことは、カミュの口ぶりから理解できていた。

「・・・上が腐るか、下が腐るかの違いだけだ・・・」

「・・・・・」

カミュが言うことは、組織が大きくなれば、全構成員へ指示伝達等が行き届かなくなり、必然的に影の差す部分ができてくる。　目の届かない場所。　何をしても見つからず、当事者たちさえ黙っていれば明るみには出ない部分。
組織が大きくなれば大きくなるだけ、その影の面積も大きくなる。

それを作り出すのが、組織の上に立つ者たちなのか、それとも上層部の監督は行きとどかない末端の者なのかの違いだけだというのだ。
それは、組織の規模は問わない。
盗賊一味だろうと、国家であろうと、教会等の法人施設であろうとだ。

「ふっ、ふはははは っ。　小僧、てめぇの言う通りかもしれねぇな。　確かに俺達の一味は大きくなりすぎた。　俺の目が届かないところも多くなった。　そっちの姉ちゃんの言うとおり、義賊が聞いてあきれるわな。」

その言葉と同時にカンダタは斧を構えなおす。
それが当然のように。

「だがな・・・例え俺が与り知らぬ所で手下がやったことも、全てカンダタ一味のやったことだ。　それを知らぬ存ぜぬで済ますつもりはねぇ。　『金の冠』も、てめぇらが持つ復讐の念も俺から奪いたけりゃ、掛ってきな!!」

再び、フロア全体を凄まじいまでの威圧感が支配する。
先程まで感じていたよりも巨大なそれに、カミュですら額に汗が滲む程であった。

「うぅぅん・・・あ、あれ・・・私・・・何故・・？　あれ、

生きている・・・」

「・・・・・・起きた・・・・・・」

カミュもリーシャもカンダタの放つ威圧感に飲まれそうになる程の緊迫感の中、どこか間の抜けた声を上げながらサラが覚醒する。
カミュの呪文の効力が切れたのであろう。
サラの身体は元の体温を取り戻し、鋼色をしていた身体も人肌の色に戻っていた。
相変わらずペシペシとサラを叩いていたメルエが、どこか面白くなさそうな表情を浮かべていた。

「サラ！　説明は後だ！　来るぞ！」

「えっ！？　あ、は、はい！」

カンダタから視線を外さずに、リーシャはサラへ檄を飛ばす。
そのリーシャの剣幕に飛び起きたサラもまた、背中の＞鉄の槍＜を構え、カンダタへと視線を向ける。　メルエもまた、＞とんがり帽子＜のつばを掴んで深く被り直し、戦闘態勢に入った。

「　おらぁ！！　」

先手はカンダタ。
一瞬の早業で、リーシャとの距離を詰め、手にした斧を横薙ぎに振るう。
そのスピードに避けることが叶わないと感じたリーシャは、左手に装備する＞青銅の盾＜でカンダタの斧を受けた。
凄まじい衝撃がリーシャの身体に響く。
確かに盾で防御したはずなのに、小柄ではないリーシャの身体がふわりと宙に浮いた。

「メルエ!!」

受けた盾を持つ左手に痺れを感じたリーシャの様子を見て、カミュがメルエへと声を上げた。　そのカミュの声だけで、メルエはカミュの言わんとすることを理解した。

「・・・ん・・・・・・スクルト・・・・・・」

先程、リーシャが、カミュがサラにかけたと勘違いした魔法。
パーティー全員に、メルエの魔力が行きわたり、その身体に薄い魔力の膜を作り出す。
自分の身体を魔力が包む感触を確認し、カミュがカンダタめがけ走り寄り剣を振るう。
しかし、リーシャを吹き飛ばした斧を戻していたカンダタはカミュの剣をその斧で薙ぎ払った。　本来の力が違うため、弾かれた勢い

でカミュの態勢は僅かに崩れる。　そんな僅かな隙もカンダタは見逃さなかった。
態勢を崩したカミュを、左手に持つ＞鉄の盾＜のような物で押し出し、もう一度カミュに斧を振り下ろした。

「　くっ！　」

「・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・」

咄嗟にカミュも手に持つ＞青銅の盾＜で防ごうとするが間に合わない。
しかし、先程＞スクルト＜を唱えたばかりのメルエが後方から異なる呪文を詠唱する。

メルエの指先から生じた冷気は真っ直ぐカンダタが斧を持つ右手に向かい、その手を凍りつかせようとする。

「　ちぃ！！　」

メルエの冷気に気が付き、強引にカミュへの振り下ろしを止め、カンダタは身体をよじるが、避け切ることができず、脇腹付近に＞ヒャド＜の冷気を受けた。
カンダタの着ている衣服が凍り、脇腹も皮膚の色を変色させた。

「そこだぁ！」

カンダタがメルエの魔法に怯んだのを確認し、走り込んできたリーシャが剣を横薙ぎに払う。その剣速は並みの者ならば対処できない程のスピード。

「甘い！！」

だが、そこは大所帯を束ねる盗賊の棟梁。
左手に持つ＞鉄の盾＜をリーシャの剣の軌道に合わせた。

「ルカニ！」

「な、なんだと！」

カンダタは確実に防いだと思っていた。
リーシャの剣の軌道は変えられない。
ならば、＞鉄の盾＜に弾かれ、態勢を崩すところに斧を叩き込んでやろうと・・・

しかし、そんなカンダタの目論見は、先程から戦闘に参加していなかった、死に損ないの僧侶の叫びによって崩されてしまった。

リーシャの剣が、カンダタの盾にチーズでも切るかのように吸い込

まれて来るのだ。
＞鉄の盾＜の上部分をすっぱりと斬り飛ばし、自分に向かってくる剣をカンダタは紙一重で避けることに成功する。
しかし、その代償に、カンダタの頬はぱっくりと裂け、血が滲みだしていた。

「く、くそっ。　えげつねぇ魔法を使いやがって！」

自らの血液の流出を確認したカンダタの目が明らかに変貌した。
それは明確な殺意を宿した目。
ここにきて、ようやく四人を敵と認識することにしたのかもしれない。
カミュやリーシャを侮っているようにも感じるが、この大男にはそれだけの実力があった。

アリアハンが誇る宮廷騎士、そして駆け出しだが着実に成長している僧侶。　更には膨大な魔力を秘めた魔法使いに、アリアハンが国を挙げて送り出した勇者。
これ程のパーティー等、世界中を探しても見つけることなど出来ない。

それでも、その四人を相手に、ここまで頬の傷一つで済んでいるという事実が、カンダタの力量を示していた。

「　死ね！　」

カンダタは、怒りに燃えた目をしたまま、自分の盾の防御力を落とした元凶に斧を振るう。
そのスピードはやはり先程に比べて、遥かに速い。
サラは、咄嗟に手に持つ＞鉄の槍＜を放り投げ、ここに来る間にカミュから手渡された＞青銅の盾＜を両手で抱えるように持ち直した。

ガィィィィィン！

「きゃあ！」

両手で持った盾で受け止めたにもかかわらず、サラの身体は宙を舞い、石畳の床を転げていく。吹っ飛んだサラを追っていこうとするカンダタの目の前にカミュが姿を現した。
横合いから突き出された剣を、その手の斧で弾き返し、カンダタはカミュと何度か突き合いを繰り広げる。
三度目のカミュの剣を弾き返そうと斧を振るうカンダタの視界に別の剣が入ってくる。
リーシャの剣だ。

アリアハン宮廷騎士としての誇りがリーシャには存在する。
本来、『人』との闘いでは、騎士は一対一の闘いを誉としている。
しかし、リーシャにも、カミュにも解っているのだ。
一人では、カンダタには勝てないということが・・・
故に恥じも外聞もなく、二人がかり、いや四人がかりでカンダタと対しているのだ。
仲間の命を守るため、何より自己の命を守るために・・・

「ち、ちきしょう！」

間一髪カンダタはリーシャの剣を、半身だけになった盾で防いだ。
いくら実力がカンダタの方が上と言っても、天と地ほどの差はない。
次第に、カンダタは圧されていく。

「・・・・・・・イオ・・・・・・・・・」

一度、カミュとリーシャがカンダタから距離をとった一瞬を見計らって、メルエが先程の爆発呪文を唱える。
カンダタの半身しか残っていない盾の手前の空気が圧縮され、瞬時に弾け飛ぶ。
空気の圧縮に気がついたカンダタは、左手の盾を放棄した。
盾から手が離れるか否かで爆発が起こり、カンダタの持っていた＞鉄の盾＜が粉々に吹き飛ぶ。

しかし、メルエの唱えた＞イオ＜は、先程手下の奴隷商人に向けて唱えたものよりも、明らかにその威力が低下しているように見えた。
カミュがメルエの方に視線を向けると、その小さな身体は、肩で息をしているように小さく波打っている。

「一気にケリをつける！」

「　はっ！　やれるものならやってみやがれ！　」

リーシャへと声をかけるカミュの言葉に手にした斧を構えなおしたカンダタが反応した。
＞鋼の剣＜を突き入れるカミュ。
それを弾くカンダタ。

弾くことで振られた斧の隙に剣を刺し入れるリーシャ。
身をよじるカンダタ。

「　ぐっ！！　」

身をよじってリーシャの剣をかわしたカンダタの返しの斧が、リーシャの手を切り裂く。
一歩後退したリーシャに近寄ったカミュは、素早く患部に手をかざした。

「　ホイミ　」

「カ、カミュ・・・」

切り裂かれたリーシャの腕の傷は見る見る塞がって行く。
その傷が深いことを悟ったカミュは、二度詠唱を行い、再びカンダタへと向かっていった。

しばし、カミュが自分を治療してくれたことに放心しそうになったリーシャではあったが、すぐさま気を取り直し、カンダタへと向かっていく。

「くそ！　回復呪文まで使えるんだったな！」

カミュが先程、自分の手下達に行っていた行為を思い出し、カンダタは忌々しそうに唾を吐き捨てる。
確かにカンダタからすれば、攻撃を与えても、回復呪文で治療されれば、その攻撃は意味を成さないことになってしまう。

カミュの剣がカンダタの肩口めがけ振り下ろされる。
カンダタはそれを再度斧で弾き、走り込んできたリーシャの腹部に蹴りを繰り出した。

カンダタの攻撃を予想していたリーシャはその蹴りを難なく避ける。
避けられるとは思っていなかったのか、カンダタは微妙に態勢を崩すが、何とか立て直し、カミュに注意を向けて、目を見開いた。
そこには、左手人差し指を自分に向けるカミュがいたのだ。

「メラ」

言葉に抑揚のない詠唱と共に、カミュの指先から火球が飛び出す。
それは、カンダタの顔面目掛け飛んできていた。

リーシャは、避けられないと思った。
そして万が一避けられても、次の攻撃で仕留めるつもりで、カンダタへ走り込んでいたが、火球が目の前に迫っていたカンダタの行動は、リーシャの予想を超えていた。

「うぉぉぉぉぉぉ！！」

カンダタは、カミュの放った＞メラ＜を避けもせず、受けもせず、そのまま火球目掛けて斧を振り下ろしたのだ。
その行動はカミュとしても予想外だったのか、目を見開き、一瞬行動が遅れてしまった。

「カミュ！！」

リーシャの叫びが響く。
『やられる！』
そうリーシャは思った。

それはカンダタも同じだった。
『獲った』と思ったことだろう。
その後に、＞メラ＜により、若干の火傷を負おうかもしれないが、それで一人を戦闘不能にできるのならば御の字だった。

しかし、カンダタは、その存在を完全に忘れていたのだ。
戦闘開始直後に、自分が最も脅威になり得ない存在だと考えていた少女を・・・・

「バギ！」

突如としてカンダタの右腕を中心に風が巻き起こる。
その風は瞬時に真空と化し、カンダタの右腕を切り刻んでいく。

「うぎゃぁぁぁぁ！！」

カンダタ目掛け飛んできていた＞メラ＜の火球すらもその真空に吹き飛ばされる。
切り刻まれたカンダタの右手から斧すらも吹き飛んでいった。

血が滴る右腕を押えながら、詠唱が聞こえた方向にカンダタが視線を移すと、もはや座り込んでしまったメルエを庇うように立つサラが右腕を自分に向けて掲げている姿があった。

カンダタが回復呪文しか能がないと考え、真っ先に殺しにかかった僧侶がカンダタの唯一の攻撃手段を奪ったのだ。
そして、それはカンダタの敗北を意味するものだった。

「・・・終わりだな・・・・」

右腕を抑えるカンダタの喉元に剣を突き付けるカミュ。
それを見届け、リーシャはメルエとサラの下へ駆け寄った。

「俺の負けだな。」

斧は、サラの＞バギ＜で吹き飛ばされ、もはやカンダタから遠く離れてしまっている。
反撃するには、流石のカンダタも無手ではカミュに敵う訳もない。

「メルエ！　大丈夫か！？」

少し、離れた所で疲れ果てているメルエを気遣うリーシャの声が聞こえている。

「・・・・・・良い仲間だな・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・・・・・・」

カンダタの呟きに、カミュは視線を外し、リーシャがメルエを胸に抱いている姿に目を向ける。　そこに隙ができた・・・・

ドォォォォォン！！

カミュは胸に大きな衝撃を受け、後ろに吹き飛ばされる。
その場所は、奇しくもリーシャ達が集う場所に程近いところであった。

「ふはははっ。悪いな、俺もまだこんな所で死ぬわけにはいかないんでね。約束は約束だ。『金の冠』はここに置いておいてやる。じゃあな。」

カンダタは、豪快に笑いながら片足を上げ、そのままその足を床に落とした。

「メルエ!!」

「き、きゃあ!」

カミュの叫びと、カミュ達が立つ場所の床が抜けるのは同時だった。
続いて、サラの叫び声が上がる。
床が抜けた瞬間に、カミュが何故自分に声をかけてきたのかを理解したメルエは、自分をしっかりと抱いてくれているリーシャの腕の中から、疲れを振り払い詠唱を行う。

「・・・・・・スクルト・・・・・・・・」

落下していくパーティーの身体を再びメルエの魔力が包みこみ、薄い防御膜が出来上がる。
落下しながら剣を鞘に納めたカミュは、落下による衝撃に供える為、受け身の態勢に入った。

無事に受け身を取りながら、何とか衝撃を和らげたカミュが、態勢を立て直した後、その近くにメルエを抱いたリーシャが落下してきた。

「　きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！　」

その後に、その盛大な叫び声にも負けない程の破壊音を立てて、木でできたテーブルを派手に破壊しながらサラが落下してきた。

「　メ、メルエ、大丈夫か？　」

「・・・・・・・」

腕の中にすっぽりと納まっているメルエの状態を確認するためにリーシャは声を掛ける。
それに対し、腕の中から若干上目使いでメルエはこくりと頷いた。

「・・・いたた・・・メルエのかけてくれた＞スクルト＜のおかげで助かりました。　ありがとうございました。　あれがなければ、私はどうなっていたか・・・あいたた・・」

「そうだったな。　ありがとう、メルエ。」

「・・・・ん・・・・」

テーブルだった木片を身体に付着させながら、サラが近寄ってくる。
如何に＞スクルト＜で強化されていたとはいえ、木のテーブルに直撃した痛みはあったのだろう。　身体のあちこちを押さえていた。

「・・・もう一度、上に上がるぞ・・・」

「　あっ、カミュ様、お待ちください。　」

階段に足を掛けそうになったカミュが足を止め、サラの言葉に振り返った。

リーシャとメルエも、サラが何を言うのかと若干不安なものを感じ、サラを見つめる。

「・・・なんだ・・・？　文句なら聞き飽きたが・・・」

「　違います！　あ、あの・・・私はどうして生きているのでしょうか・・・カンダタに蹴飛ばされ、斧を目にしたところまでは記憶にあるのですが・・・」

しかし、リーシャやメルエの不安は杞憂に終わる。
サラは、ただ、自分がどうなっていたのかの疑問を訊ねただけであった。

「・・・・・サラ・・・・・・硬くなってた・・・・・」

「　え!?　やっぱり死んでしまっていたのですか!?　で、では、蘇生呪文を・・・？」

「　あはははっ。　違う、違うぞ、サラ。　サラは『鉄』になっていたのだ。　」

メルエの言葉に、死後硬直のことを言っていると勘違いしたサラは、自分を蘇生させる程の事が出来る人間がいたことに驚きの声を上げ

るが、横から豪快な笑い声と一緒に出てきたリーシャの言葉に、驚きを通り越して言葉を失ってしまった。

「・・・・て、鉄・・・・・」

「ああ、鉄だ。　ん？　そう言えば、あれは何という魔法なんだ？」

「魔法？　魔法で鉄になったというのですが！？」

魔法という言葉に、サラは過剰に反応を示す。
このパーティーで魔法に重きを持つ者は、サラとメルエだ。
その一人であるサラはそんな効力のある魔法を聞いたことがない。
いや、魔道書の方を網羅していないため、もしかすると魔道書にある上位魔法なのかもしれないが、もしそれならメルエがその魔法の名前を口にしてもいいはずだ。

「・・・・・・・＞アストロン＜だ・・・・・・・」

「＞アストロン＜？　そ、そんな名前の魔法、聞いたこともありません。」

「私もないな・・・・・魔道書にあるのか、メルエ？」

カミュがその魔法の名前を口にしても、やはりサラには聞き覚えのないものだった。
それは、リーシャにしても同じのようで、魔法使いとしての才能の片鱗を見せ始めるメルエに問いかけるが、メルエもゆっくりと首を横に振った。

まず、第一に、まだメルエは全ての文字を読める訳ではない。
ようやく自分の名前の文字を読み、そして書くことができるようになったばかりだ。
そんなメルエに魔道書の中にあるかどうかを尋ねるリーシャもリーシャであったが、メルエの反応にサラまでも納得してしまう。

「・・・・通常の経典や魔道書には載っていない・・・・」

「・・・では、古の賢者が残した最上位魔法ということですか！？」

この世界には、もう何十年と『賢者』は存在していない。
しかし、数十年前にはたった一人、『賢者』と呼ばれる人間がいた。
その人間は、魔と神の魔法を使いこなし、経典や魔道書には載っていない魔法をも使うことができたという。
その魔法は、ホイミの様な回復呪文を一度に複数の人間に掛けることができたり、魔道書に記載されている攻撃呪文の威力を跳ね上がらせたものだったりと、鍛練を続けた僧侶や魔法使いにも使用できないものであった。

その『賢者』が自分の使用していた魔法の契約方法や効力などを記した書物がこの世のどこかに存在するという伝説がある。
ただ、誰も見た者はいなく、また手にした者も当然いないことから、その話の信憑性はかなり怪しいものではあるが。

「・・・いや、この魔法は、契約者を選ぶものらしい。」

「もしや！　それは、勇者だけが使えるという、あの魔法か・・？」

「　えっ！？　そんな魔法が・・・・」

経典にも魔道書にも記載されていない魔法。
そして、本当にあったとしても、おそらく『賢者』の残した書物にも記載されていないだろう魔法があるとリーシャは言う。

この世には、教会が持つ経典に載る、神との契約魔法。
そして、魔道書に載っている魔との契約魔法の二つがある。
『賢者』が使用していた魔法も、その例外に洩れてはいない。

ただ、その他に例外的に後に英雄と呼ばれる人間だけが使う魔法があると云われている。
それは、有史以来、現代に至るまで、等しく英雄と呼ばれる人間だけが手に入れることのできる魔法。
しかも、その英雄は同じ時系列に二人と存在しないと云われる。
そして、その魔法は、その昔英雄と呼ばれ、その力を手にした者が

後世の若者に残すため、その契約方法と効力を書き残していた。

だが、その魔法は余りにも強力なため、一つの魔法につき一冊とし、世界中に分散されることになった。　主に国家の国宝として保管されることが主ではあったが、近年では使用できる英雄が出現せず、その存在すら忘れ去られかけている。

「・・・お前・・・ま、まさか・・・ロマリアで・・・」

「・・・ああ、ロマリアの図書室の中にあった。」

「だから、お前は国王になったのか!?　し、しかも、国宝とも云われる物を、ロマリアから盗んできたというのか!?」

リーシャには大方理解することができた。
先程のカミュの発言で、リーシャの脳の中でバラバラになっていた摩訶不思議な出来事が高速に繋がって行く。

しかし、それはアリアハンの勇者が盗みを働いたという結論に達することになる。
ロマリアで、その書物の存在を知る人間が何人いるか分からない。
いや、もしかすると、もはや国王ばかりか、財務を担当する人間すら知る者がいないかもしれない。
それでも、犯した罪は罪。
リーシャの持つ雰囲気が久しく見なかった剣呑な物に変わっていく。

「・・・始めはそのつもりだったが、王女と話す機会があったために許可をもらうことができた。」

「　何!?　それは本当だろうな・・・？」

「・・・何度も言うが、俺がアンタに嘘を言わなければいけない理由が分からないんだが・・・アンタに嘘を言ってまで自分を正当化する理由がない。」

旅を続けているのも、リーシャ達が付いてきているだけだと暗に示す内容。
嘘を言ってまで自分を正当化し、ついて来て欲しいとは思っていないとでも言いたいのであろう。

「・・・カミュ様しか使えない魔法・・・」

「・・・・・・・・カミュ・・・・・・・ずるい・・・・・・・・・・」

何かを思い悩むようなサラとは別に、微妙に着眼点がずれているメルエがカミュに嫉妬を露わにする。　魔法が自分の存在価値という考えが抜けきれていないメルエらしい発言と言えばそれまでだが・・・

「そ、その＞アストロン＜？　で、私は『鉄』にされたのですか？」

「・・・ああ・・・」

＞アストロン＜
前述の通り、古より英雄と謳われる才のある人間しか契約することが出来ない魔法。
それ以外の人間が契約の魔法陣を作成しても、契約が履行されない。
効力は、対象をある程度の時間『鉄』に変えてしまうもの。
しかも、その『鉄』は通常の鉄とは違い、熱などで溶けることもなく、何で打ちすえても欠けることもない。　故に、＞アストロン＜によって『鉄』に変えられた者には、どんなに切れ味の鋭い武器も、どれほど強力な魔法も効くことはない。
絶対無敵の存在となるのだ。
ただ、『鉄』となった者も自ら動くことも出来なくなり、また思考することもできなくなる。
非常に使いどころが難しい魔法でもあるのだ。

「・・・そうですか・・・で、では、カミュ様、たすけて下さり、ありがとうございました。　あのままでは確実に私は死んでいました。」

カミュの言葉に、自分が九死に一生を得たのはカミュのお陰だったこと認識し、サラはカミュに対し深々と頭を下げた。
本当は、心のどこかで今回もまた、自分の命があるのはカミュのお

陰なのだろうという思いもあったのだが、サラは改めて確認の意も含めて訊ねていたのだ。

「確かに、そうだな。　あの時は流石にサラの身体が真っ二つになることを疑いもしなかったからな。」

「・・・リーシャさん・・・酷いです・・・」

「　い、いや、それは仕方がないだろう。　カミュの魔法だって間一髪というタイミングだったんだぞ！　」

再び笑顔に戻ったリーシャが笑い話でも話すように、あの時のサラの状況を口にするが、サラにしてみればそれは笑えるどころか、血の気を引かせてしまうのに十分な威力を持ったものだった。

「・・・もういいか・・・？　さっさと『金の冠』をもらって、この塔を出るべきだな。」

「そ、そうですね。」

三人は、カミュの言葉に頷き、もう一度上へと続く階段に足を掛ける。
おそらく、もはやカンダタは消えているだろう。

上のフロアに続く階段は、この階段しか見つけられていないが、アジトとしている一味には他に脱出方法があるのかもしれない。

上のフロアに戻った四人の視界に、目を覆いたくなるような惨状が広がっていた。
先程、カンダタが居た場所にあの大男はすでにおらず、その代わりに、光輝く『金の冠』が置かれていた。

しかし、四人の視線の先はそれではなかった。
カンダタとやり合う前に戦闘不能に陥っていたカンダタの手下四人全て、首から上がなくなっていたのだ。

メルエの＞イオ＜によって完全に虫の息だった奴隷商人をはじめ、下の階から逃げて来た者や、閃光により目をやられた物も首を落とされていた。
カンダタがあの戦闘用に改造された斧で首を落としていったのであろう。
ただ、カミュがその喉を突き刺した者までも首を落とされている。
もしかすると、カミュが突き刺した人間はまだ息があったのかもしれない。

それでなければ、カンダタがわざわざ首を落としていく必要性が説明できない。

「・・・・酷い・・・・・」

「・・・もはや、用済みということか・・・？」

その光景にサラは眉を顰め、リーシャはカンダタの仕打ちに怒りを覚えた。

「・・・いや・・・あれは、カンダタの優しさだ・・・」

「ど、どういうことだ！　この状況が優しさだと！」

リーシャには、カミュの言っていることが全く納得できなかった。自分の部下の首を斬りおとすことが優しさなど聞いたことがない。ましてや、部下たちも、自分の組織の長に殺されることを望むわけがないのだ。

「・・・はぁ・・・もし、カンダタがあいつ等を殺さずに置いておいたらあいつ等はどうなっていたと思う？　ああ、もはや歩くこともできない人間達を連れていける訳がないということが前提だが・・・」

「・・・もしかして・・・」

カミュの言葉に、サラは何かを思いついたようだった。
リーシャにはまだ解らない。

「・・・・・・・メルエが・・・・・・・・・やる・・・・・・・・」

「　はっ！？　」

メルエの言葉にようやくリーシャもカミュが言う結論に達する。
あの手下達は、自分達の憎しみの対象と言っても過言ではない存在。
もちろん、自分の身内や、自分の身に何かをされた訳ではない。
しかし、許せない存在であることは間違いないのだ。

「・・・メルエにさせるかさせないかは別としてもだ。　あいつ等が生きていたのなら、それ相応の報いを受けさせるつもりだった。
それこそ、『早く殺してくれ』と願う程の報いをな。」

「・・・カミュ様・・・」

いつもと同じカミュの無表情。

しかし、そこには、静かな怒りと、静かな悲しみが入り混じっているようにリーシャは感じていた。
それが、自分の手で報いを受けさせることができなかったことなのかというと、おそらくそうではないのだろうと・・・・・

サラは、カミュの言動が恐ろしく、その報いの内容まで聞くことができなかった。
聞いてしまえば、もはや、カミュの目を見る事等、永遠に出来なくなるような気がしたためだ。

「・・・『金の冠』をとって、早々にこの塔を出るぞ。　このままだと、この雨の中野宿をすることになる。」

カミュは、何かを振り払うように、視線を手下達の死体から外し、『金の冠』の場所へと歩いて行く。そのまま、目的の物を手にして戻ってきたカミュへ、リーシャは疑問に思っていたことを聞くことにした。

「カミュ、野宿をする必要はないだろう。　塔の外に出れば、またお前の＞ルーラ＜で＞カザーブ＜に戻ればいいだろう？　一度あの村には行ったのだから。」

「・・・はぁ・・・流石は短絡的な考えしか思い浮かばない脳だけはある。」

「な、何だと!!」

しかし、返ってきたのは、リーシャを挑発する内容ではあるが、心底疲れ切ったカミュの言葉だった。

「・・・はぁ・・・まぁいい。メルエ、お前は今＞リレミト＜は使えるか？」

「・・・ん・・・・・リレミト・・・・・・・？？？？・・・・・」

カミュの問いかけに、こくりと頷いたメルエは、脱出呪文を詠唱した。

＞リレミト＜

魔道書に載っている、＞ルーラ＜と並ぶ移動呪文の一つ。

対象を頭に浮かべた場所へ飛ばす＞ルーラ＜と異なり、＞リレミト＜は洞窟や塔などの入り口付近へと移動するための呪文である。

原理は解っていないが、＞ルーラ＜と違い、＞リレミト＜は時間すらも飛び越える。

それは、何も、過去に戻ったり、未来へと進めたりするものではなく、術者の魔力により、粒子と化した対象を瞬時に入り口付近に運んでくれるのだ。

「・・・・・できない・・・・・」

＞リレミト＜の詠唱を行ったはずが、魔法が発動しない。
そのことに、哀しそうに眉を下げ、メルエは俯いてしまう。

「・・・いい、大丈夫だ。　発動しないのは当然だ。　魔法力が枯渇に近い状態なんだろう。　俺も同じだ。　アンタにかけた＞ホイミ＜が限界だった。　元来俺の魔法力はメルエやそこの僧侶程高くはないからな。」

「　な、何!?　では、この豪雨の中、再び歩いて＞カザーブ＜へ戻るというのか?　＞キメラの翼＜は!?・・・・・・・・・ないんだったな・・・・・・」

魔力がある人間と言えど、無限に魔力が続く訳ではない。
枯渇したからと言って、生涯魔法を使えなくなるという訳ではないが、魔力と言えど人間の力である以上、しっかりとした休養を取り、体力気力ともに回復しなければ魔法の使用はできなくなる。
つまり、メルエもカミュも、例外なく疲労困憊であることを示していた。

「リ、リーシャさん・・・仕方ありませんよ。　下の階で少し休んでから出発しましょう。　外に出れば雨で濡れてしまいますので、下の暖炉の薪を少し持っていきましょう。」

「・・・そうだな・・・ん？　メルエ、そんなに落ち込むな。　メルエのせいじゃない。　元々歩いてここまで来たんだ。　さっさと帰って、ゆっくり眠ろう。」

魔法が使えなくなってしまったことに顔を伏せているメルエを慰めながら三人は階下へと降りて行った。
生きている人間がカミュ以外誰も居なくなったフロアで、カミュはもう一度首から上のなくなったカンダタの手下達に視線を送る。

「・・・良かったな・・・楽に死ぬことができて・・・」

心まで凍りつくような表情で、カミュが呟いた言葉は、誰も居なくなった＞シャンパーニ＜の塔の最上階に溶けて行った。

シャンパーニの塔？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

今回で第二章を完結させようとしたのですが、書いているうちにいつの間にか、２００００字を超えていまして・・・・

２話に分けました。

ご意見、ご感想など頂ければ、とても嬉しく思います。

ロマリア大陸？（前書き）

アクセス数が１５万を超え、ユニークも１６０００人にも・・・
更には、レビューすらも頂きました。
皆様、本当にありがとうございます。
ご期待に応えられるような物を書いていけるように頑張ります。

むせ返る様な血の匂いと、人の焼けた臭いが漂う部屋の中で、一行は未だに炎が生きている暖炉で暖をとった後、暖炉の近くに束ねられていた薪を袋に詰め、階下への階段を降りて行った。

降りたフロアは静まり返ってはいたが、未だに止むことのない雨音が周囲に響いており、一歩フロアから出ると、乾いたばかりの衣服がまた体温を奪う布と化してしまうことが予想できる。

更には、いたる所に人骨が散乱しており、ほんの少し前まで、ここで地獄絵図が拡げられていたことも容易に想像できた。

フロアへと最後に降りたサラは、周囲に散乱する人骨を見て足を止めた。
この惨状は、先頭を行く、アリアハンの勇者と謳われるカミュが起こしたものと言ってもいい。　直接止めを刺した訳ではないが、カミュが殺したと言っても遜色はないはず。
それが、サラの心に棘として残っていた。

「　サラ、あまり思い詰めるな。　この世には『因果応報』という言葉もある。　この盗賊達が行ってきた所業がそのまま返って来たとも考えられるはずだ。」

「・・・・・はい・・・・・・・で、でも・・・・・・・」

足を止めたサラに少し前を歩いていたリーシャが見かねて声をかけてくる。
サラも、リーシャの言っていることは理解できる。
それでも、どうしても納得することが出来なかった。

『人殺しは重罪』

それを幼い頃から植え付けられているサラにとって、相手がどんな人物であろうと、『人』である以上、殺すことを容認することはできないのだ。

『盗賊たちの所業が許されないとしたら、カミュが行ったこともまた許されることではないのではないか』

サラはそればかりを考えるようになる。
しかし、サラのその考えは、カミュという人物が決して相容れぬ者であることを意味していた。
そして、二人の考えにどこか似通っているものがあるということも・・・・

『人間が食事の為に獣を殺し食すことも、魔物が食事の為に人間を殺し食すことも同じ』

と考えるカミュの思考。

『盗賊達が快楽の為に人の命を散らすことも、憎しみに駆られ盗賊

達を斬殺することも同じ』

と考えるサラの思考。

それは、全く違うようでどこか通じるものがある。

「・・・・・・・・」

自分を心配そうに見るリーシャの視線に気が付きながらも、サラは自分の心の中に芽生えた考えに苦しみに似た悩みを抱え、反応を返すことができなかった。

「・・・・サラ・・・・」

それは、カミュを許せないという自分の考えが、結局自分自身もその対象になり得るということに思い当ってしまったからでだった。

例え、食事の為とはいえ、自分の親を殺した魔物達を、その『復讐』の念から手当たり次第殺すことは、自分が抵抗を感じているカミュと同じことなのではないかという疑問。

そして、それを認めた時点で、自分の旅が終結を迎えてしまうという恐れ。

その考えは、サラを苦しめ、そして悩ませる。

『人と魔物は違う』

と何とか自分の心を抑えつけようとするが、そう考えれば考える程、『魔物』を生物として考えない自分と、盗賊を『人』として見ていないカミュと何が違うのかという思いに駆られ、堂々巡りを繰り返

す。

「カミュ！　私はサラと共に歩く！　メルエを頼む！」

そんなサラの葛藤は、フロアから外に出て、降りしきる雨の中に出ても尚続いていた。
放心状態に近いサラの身を案じ、リーシャがその横を伴走するように歩く。
カミュは、リーシャの言葉に返事を返すことはなかったが、メルエを風下のマントの中にいれ、雨風を防ぐ形で、壁伝いに歩を進めていった。

先程、この道を通った時と同じように魔物の影や気配は一切ない。
しかし、ある意味、魔物よりも悪い、横殴りの雨風が一行の体温を奪い、体力を削って行く。　いつの間にか、堂々巡りだった思考もストップしてしまったサラはリーシャに庇われながら歩を進めていた。

「カミュ！　そこは真っ直ぐではなかったか！？」

「・・・・・・・・・」

先頭を行くカミュは、後ろからかかる見当違いなナビゲーションを無視し、壁伝いに歩を左へと移す。
ようやく雨風を防ぐ壁に囲まれたフロアに出たことに、全員が安堵

の溜息をついた。
リーシャの言葉とは違い、フロアの奥には、階下へ続く階段が見える。

「・・・・はぁ・・・・いい加減に自覚してくれ・・・・」

「　ぐっ！！　」

カミュが吐いたため息は、サラやメルエの溜息とは微妙に用途が違っていたようだ。
溜息と共に吐き出された言葉に、リーシャは言葉に詰まる。

「・・・・・・・・・」

雨風の脅威が止んだことへの安堵から、サラの思考は再び活動を始めていた。
それが、表情にも表れ、険しい表情を作ったまま黙り込んでしまっている。
リーシャもサラの様子を心配してはいたが、もう一人、そんなサラをじっと見つめる人物がいた。

「一度下に降りてから火を熾そう。」

サラやメルエの体力を心配したリーシャの提案を拒む理由もなく、全員が頷き、階下へ続く階段を降り始める。
雲に覆われた空から入る光は乏しく、階段は暗闇に支配されていた。
カミュがメルエの手を取り、リーシャがサラを支える形で、階段を降りて行く。

階段を降り終わり、持ってきていた薪を組んで火を熾す。
次第に大きくなる炎の周りを一行で囲み、暖をとり、衣服を乾かす。

火の傍に座ってからも、考え込んでいるようなサラ。
しかし、何故かメルエまでも何やら寂しそうに俯いていた。

「メルエ、どうした？」

サラだけでなく、メルエまでもが黙り込んでしまったことに困惑したリーシャがメルエの肩に手を置き声をかけるが、メルエは尚更下を向いてしまう。

「・・・・メルエ・・・・？」

その様子に、『身体を冷やしたことで、体調を崩してしまったのでは？』とカミュもメルエへと声をかけることになった。
しかし、そんな二人の心配していた内容とは違う答えが、先程からじっとサラを見つめていた少女から返ってくることとなる。

「・・・・・・・ごめ・・・ん・・・・・・なさい・・・・・・・・」

「・・・は・・・・？」

「　ど、どうしたんだ、メルエ！？　ど、どこか身体の調子が悪くなったのか！？　」

いきなりの謝罪。
その言葉に、カミュが以前見せたような、呆気にとられた表情を浮かべる。
カミュが呆けてしまったことにより、メルエの謝罪の意図を問いただす役目は、リーシャとなってしまったが、リーシャの問いかけに、メルエはただ下を向いたまま首を横に振っただけであった。

「　一体どうしたんだ？　首を振るだけでは分からないぞ。　メルエは何故、私達に誤っているんだ？　」

メルエの反応に落ち着きを取り戻したリーシャは、湿気を帯びているメルエの＞とんがり帽子＜を取り、その頭に手をのせながら、優しく声をかける。
そんな三人のやり取りに、今まで己の思考の海に潜っていたサラの顔がようやく上がった。

「・・・・・メルエ・・・・・・魔法・・・・・・使えない・・・

・・・」

「何!?」

メルエは下を向いたまま、ぽつりぽつりと謝罪の理由を話し出す。
それは、リーシャの予想の遥か斜めを言ったものであり、しかも、俯いているメルエの顔辺りから床に落ちて行く水滴は決して、先程まで叩きつけられていた雨のものではないことがリーシャだけでなく、カミュやサラにも理解できた。

「・・・・・だから・・・・・ここから・・・・・出れない・・・・・」

「そ、それは・・・・・」

「・・・・・・だから・・・・・サラ・・・・・・元気・・・・・・ない・・・・・・・?」

『それは、メルエのせいではない』

そう言おうとしたリーシャの言葉は、尚も必死の言葉を繋ごうとするメルエの言葉に阻まれた。
そして、繋げられた言葉を発しながら、顔を上げたメルエの涙の溜まった瞳は、真っ直ぐサラを見ていた。

「・・・メルエ・・・」

そんな幼い少女の瞳を見て、サラは恐怖を感じる。
このような純粋な少女の暖かな視線を受ける資格が今の自分にあるのかと・・・

しかし、それ以上に喜びを感じたのも事実だった。
自分をこれほどまでに心配してくれる『人』がいるのだと。
思考の海に溺れてしまっていたサラの様子に、これほど責任を感じてしまうほど好意を持って接してくれる『人』がいることに。

サラは、自分自身、教会の管理をしている神父に拾われ、育てられたことから、僧侶になるのは当然のことだと思っていた。
自分が今、こうしていることができるのも、『聖霊ルビス』様のご加護があってこそのもの。
ならば、そのルビス様を信仰するのは当然であると。

しかし、サラ自身気がついてはいないが、彼女にはそれしかなかったというのも事実なのである。　孤児ということで、一時的なもの以外の友人と呼べる存在はなかった。　自分を気にかけてくれる存在は、両親なきサラには神父とルビス像しかいなかったのだ。

「・・・メルエ・・・大丈夫です。　私は少し考え事をしていただけなのです。」

「・・・・・・」

「それに、この塔から出ることができないのは、メルエの責任ではありませんよ。　もし責任があるとすれば、メルエの魔法力が枯渇してしまうほどに疲労させてしまった私達の責任です。　だから、メルエがそのような顔をする必要はありません。」

自分は何を迷っているのだろう。
親の仇を取るために、魔王への『復讐』を誓ったその日から、覚悟はできていたはずだ。
確かにそれは、『人殺し』をする覚悟ではない。
しかし、どんなことがあっても、その『復讐』をやり遂げるのだという覚悟だ。

それは、自分の殻に閉じこもり、幼く純真な少女に悲しい表情をさせることではない。
自分に好意を持って接してくれ、これほどまで自分を心配してくれる少女を泣かせることでもない。
サラの目に再び覚悟の炎が灯り始めた。

「・・・サラ・・・・・元気・・・・・・？」

「　はい！　元気ですよ。　私の場合、メルエのように戦闘でほとんど役に立っていませんから、魔法力も余っています。　だから、メルエが謝ることなど、全くないのですよ。」

「そ、そうだぞ、メルエ。　魔法が使えないのがダメというのならカミュだって同じだ。」

「・・・最初から魔法を一切使えないアンタは全くの役立たずということになるがな・・・」

「　な、なんだと！？　」

メルエの問いかけに、自分の内にある苦悩を飲み込み笑顔で答えるサラの瞳は、塔を登る前と発する光が変わっていた。
しかし、サラに倣ってメルエを何とか励まそうと口を開いたリーシャの言葉は、即座に皮肉気に口端を上げているカミュによって斬り捨てられた。
サラとは違い、この二人のやり取りはいつも変わらない。
それが、メルエにも、そしてサラにも嬉しかった。

「・・・・・・・」

全員の言葉に、目に涙を溜めたまま、こくりと頷いたメルエの笑顔は、塔内部での出来事で荒んでいたパーティーの心を和らげる優しいものだった。

「　よし！　衣服も乾いてきたな。　出発しよう。　・・・カミュ、

お前は常に後ろに気を付けて歩くんだな・・・」

リーシャが最後にカミュへ言った言葉は『後ろのサラやメルエを気にしろ』という意味なのか、『私の剣に気をつけろ』という意味なのかを考えてしまうような不穏なものであった。

「・・・・・・はぁ・・・・・・・」

カミュのため息は、未だに火の勢いの衰えない焚き火の中へと吸い込まれていく。

これぐらいの休憩では、自分もメルエも魔法力が回復することはない。

つまり、自分達の足でこの塔を降り、＞カザーブ＜までの道程を歩かなければならないということだ。

一行は、再び＞シャンパーニ＜の塔の内部を歩き出す。

雨と風をその身に受けないということが、これほど素晴らしいことなのだということをサラは初めて感じていた。

そんな感動を吹き飛ばす声がサラの後方からかかった。

「メ、メルエ、見てみろ。　大きなきのこが生えているぞ！　あれだけの大きさなら、料理のし甲斐がある。」

疲れ果てている一行にとって、何とも形容しがたいその内容に、サラは顔をしかめながら振り向く。

「・・・・・きの・・・こ・・・・・・？」

誰よりも早く振り向き、リーシャの傍へと小走りに移動したメルエは、リーシャの指差す方向に目を凝らした。
暗がりの中で、確かにきのこらしきものが地面から生えているのが見える。
それは、リーシャやメルエだけではなく、サラにも確認できていた。

「・・・本当に・・・きのこ・・・ですねぇ・・・」

「よ、よし、あれをとってきて、先程の場所まで戻り、もう一度火を熾してから、炙って食べることにしよう。」

自分の見識が間違ったものでなかったことが、サラの言動によって証明されたと考えたリーシャは、きのこらしき物が生えている場所へと近づいて行く。

「・・・・・メルエ・・・・・も・・・・行く・・・・・・」

「メルエはここで私と待っていましょう。　リーシャさんに任せた方がいいですよ。」

そんな後方でのやり取りに、再度溜息を吐きながら、カミュは振り向き、そして目を見張った。

「　お、おい！　それはきのこじゃない！　魔物だ！！　」

振り向きざまにカミュが見たものは、大きなきのこのような形をした物に不用意に近づくリーシャであった。　しかし、こんな塔の中にきのこなど生えている訳がない。　例え生えていたとしても、＞毒キノコ＜の可能性の方が高く、そんなものを食そうとしている人間がいること自体がおかしいのだ。

それを注意しようとしたカミュであったが、リーシャが近づいたきのこは＞毒キノコ＜よりも達の悪いものであった。

「　ちっ！　お前たち、呼吸を止めろ！！　」

「　えっ！？　」

メルエの元に駆け寄りながら、カミュが出した指示は、サラにとって意味がよく理解できないものではあったが、カミュの表情を見て、それが適切な指示なのであろうことを理解し、鼻と口を押さえた。
メルエは駆けてきたカミュのマントの中に潜り込み、同じ様に鼻と口を手で覆った。

「　な、なんだ・・・・・・・・・・と・・・・・・・・・」

リーシャがきのこに手をかけようとしたその時、その現象は起こった。
突如として振り向いた巨大きのこには牙の生えた大きな口と、ぎょろっとした目が付いていたのだ。
それに驚いたリーシャが声を上げようとするが、リーシャの声が喉を通ったその時に、きのこの大きな口から、甘ったるい息が吐き出された。

声を上げようと息を吸い込んだリーシャは、そのきのこが吐き出した息をもろに吸い込んでしまった。　その息は甘く、リーシャの脳を蝕んでいく。
徐々に意識が薄れ、それは何日も徹夜をした後にベッドに入った時のような、逆らうことのできない睡魔に似たものであった。

「　お、おい・・・・まさか・・・・」

あっという間に睡魔に負け、崩れ落ちてしまったリーシャに、カミュは愕然とする。
曲がりなりにも、アリアハン宮廷騎士の中でも屈指の実力を持つ戦士のはずだ。
これ程、簡単に敵の術中に嵌るとは、流石のカミュも予想だにしていなかった。

「えっ、えっ!?　ど、どうなっているのですか？」

「・・・・・・リーシャ・・・・・・寝た・・・・・・」

困惑を隠しきれないサラに、メルエの淡々とした声が突き刺さる。
サラがこのパーティーで最も頼りにしている女戦士は、床に倒れ込むようにして寝息を立てているのだ。

「呆けるな！　メルエは、後ろに下がっていろ！　おい、お前も＞鉄の槍＜で攻撃をしろ！　鍛練は積んできたはずだ。」

「は、はい！」

横たわるリーシャの周りには、先程きのこと間違えた魔物が三体。
獲物を食すのは後回しとばかりに、カミュ達の方に全体で向かって来ている。

＞おばけきのこ＜
その姿は、巨大なきのこそのものであり、その生態は全く解明されていない。
基本きのこなどは、木に自然と生えてくるものであるというのがこの世界での常識であるため、この魔物の繁殖方法は全く持って解ってはいないのだ。
＞シャンパーニ＜の塔周辺でしか出没しないため、何らかの要素がこの塔にあるのではないかというのが研究者達の考えであった。
きのこと勘違いをし、近づいてきた人間を、その口から吐き出す＞甘い息＜で眠らせてから集団で食す魔物である。
＞甘い息＜は神経性のものであるため、吸い込まなければ影響はない。
また、少量であれば効果も薄いが、大量に吸い込めば、しばらくその人間は覚醒することがない。　激しく揺さぶったり、叩いたりすれば覚醒は早まるが、それも個人差があったりするのだ。

「　カミュ様、行きます！　」

背中から剣を抜いたカミュよりも速く、サラが槍を構えて駆け出した。
サラとしても、ロマリア城下町を出てから毎日、朝と夕にリーシャから稽古をつけてもらっているのだ。　ここまで、カミュやリーシャの剣技、そしてメルエの攻撃魔法によって、サラが槍を振るう場面などなかったが、カンダタのような相手でなければ、その槍での攻撃は十分に通用するものとなっていた。
＞おばけきのこ＜との距離を一気に詰めたサラは、＞鉄の槍＜の穂

先を魔物目掛けて突き出した。　サラの突きは、カミュやリーシャに及ばないまでも、アリアハン大陸の魔物であれば一撃で倒せるようなスピード。
しかし、ここはロマリア大陸。
しかも、大陸でも中位に位置する＞シャンパーニ＜の塔の魔物である。
サラが突き刺せると確信した突きを＞おばけきのこ＜はギリギリのところで身を翻した。

その大きな口を皮肉気に歪ませた＞おばけきのこ＜であったが、サラとて、＞ナジミの塔＜で＞人面蝶＜と対していた時のサラではない。
突き刺した穂先をそのままに、両手を返すことによって、＞鉄の槍＜の柄を＞おばけきのこ＜が身を返した場所目掛け振るったのだ。

「ギュエ！」

避けたと思った槍の穂先に注意を向けていた魔物は、横から飛び込んでくる柄の部分に全く気が付いていなかった。
＞鉄の槍＜の柄で横っ面を殴られた＞おばけきのこ＜は、潰れたカエルのような声を出して吹っ飛んでいく。

自分の力量が思っていた以上に上がっていることに、自分自身驚いてしまったサラに一瞬の隙ができる。　一体を倒したとはいえ、三体のうち一体である。　残る二体の内の一体がサラ目掛けて飛びかかって来た。

自分の失態に気がついたサラは、続いて来る衝撃に供えて身体に力

を入れて目を瞑った。
しかし、いくら待っても衝撃などは来ず、聞こえてきたのは、荷物でも落としたような重量のある物が床に落ちる物音だけであった。
恐る恐る目を空けたサラが見たものは、真っ二つに斬り裂かれた＞おばけきのこ＜だったものの残骸と、剣に付く体液を飛ばしているカミュの姿だった。

「・・・・呆けるな・・・・と言ったはずだ・・・・」

「・・・申し訳ありませんでした・・・」

「アンタが吹っ飛ばした魔物はまだ生きている。　そっちはアンタに任せる。」

カミュの言うとおり、サラが先程、槍の柄で吹き飛ばした魔物は、もう一度起き上がり、サラに向かって飛びかかろうと力を溜めていた。
サラは、カミュに向かって一つ頷くと先程自分が吹き飛ばした＞おばけきのこ＜に向かって槍を構えた。

暫しの膠着状態。
今度は、サラから不用意に近づくこともなく、＞おばけきのこ＜の方もまた、サラの動きを注視して動かない。
その時間は、どのくらい続いただろう。
数分かもしれないし、ほんの数秒であったのかもしれない。

先に動いたのは＞おばけきのこ＜の方であった。

サラの後方を見て動き出したことから、カミュがもう一体の＞おばけきのこ＜を斬り捨てたのであろう。

均衡した腕同士の戦いの中では、隙を見せた方が負ける。

動き出した＞おばけきのこ＜も魔物ながらそれを理解していたのかもしれない。

サラに向かって走りながら、それでも動かないサラに向かって、再び牙の生えた口を開き、息を吐き出した。

何も眠らせようとしたわけではない。

少量でも吸い込めば、意識が混濁し隙ができる。

それが目的だったのだろう。

しかし、サラは曲がりなりにも、アリアハン教会に属する僧侶である。

一度見たものをすっぱりと忘れるわけがないのだ。

動かずに、そして魔物から視線も外さなかったサラは、＞おばけきのこ＜が口を開くのと同時に息を止め、そして、手に持つ＞鉄の槍＜を渾身の力を込めて突き出した。

「ギョエ――――――――――――!!」

吸い込まないまでも、下がるか避けるかするだろうと考えていたのか、＞おばけきのこ＜は突き出されるサラの槍をまともに食らうことになる。

突き出された槍は、大きく開いた＞おばけきのこ＜の口に吸い込まれるように入り、そのまま＞おばけきのこ＜の身体を貫通した。

断末魔の叫びを上げ、サラの槍に突き刺さったまま絶命した＞おばけきのこ＜の重みに耐えきれず、サラは＞鉄の槍＜の穂先を床につけてから引き抜いた。

魔法ではなく、自らの腕で魔物を倒すことができたサラは、全身を襲う疲労感と共に、胸の奥から湧きあがるような興奮を抑えきれないまま、カミュやメルエのいる後方を振り向くが、そこで見たものは、そんなサラの抑揚感を凍りつかせるものだった。

「メラ！！」

カミュの周囲を飛び回る二体の魔物。

それは、以前アリアハン大陸で見たような人型をした魔物である＞魔族＜と呼ばれる者達。

背中からコウモリの羽根のような物を生やし、口は耳近くまで裂け、その口の中の犬歯は魔物の牙の様に尖っていた。

＞こうもり男＜

吸血種である魔族の最下級種である。

上級種の吸血魔族から血を奪われて吸血種に堕ちた、『人』であっ

た者達のなれの果てとも言われているが、定かではない。
その背にはその名の通りコウモリの羽を生やし、空を飛び、人間の生き血を食料とする魔物。他の魔物と違い、人間の肉を食らうことはないが、一度吸いつけば、身体中の血液を吸いつくされ、干からび命を落としてしまう。
本来、夜にしか現れないが、塔や洞窟など、日光の届きにくい場所には生息することがある。

「ちっ！」

先程、カミュが詠唱した＞メラ＜は、カミュの周囲を飛んでいる＞こうもり男＜達に向けたものではない。
現れた＞こうもり男＜の数も、先程の＞おばけきのこ＜と同じく三体。
その内二体がカミュの周囲。
ならば、もう一体は・・・・・

サラがカミュの唱えた魔法の行き先に視線を向けると、そこにいたのはメルエ。
この＞シャンパーニの塔＜に入る前にリーシャに着せてもらったマントを振りながら、周囲を飛行する＞こうもり男＜を威嚇している。

今のメルエには魔法が使えない。
もしかすると、カミュが唱えた＞メラ＜程度なら詠唱が可能かもしれないが、当のメルエにはそのようなことに気が付く余裕はなかった。
＞リレミト＜が発動しなかった時点で、『もう自分には魔法が使えない』と思い込んでいるのだ。

「メルエ！！」

先程のカミュの＞メラ＜はしっかりと＞こうもり男＜に直撃していた。
しかし、それが本当にカミュの最後の魔法力だったのだろう。
その威力は通常の時よりも明らかに劣っていた。
＞こうもり男＜が身に纏っていた衣服を焼き、その素肌に若干の火傷を負わせた程度のダメージしか与えることができず、むしろ、身体に傷を負った＞こうもり男＜はその傷を癒すために躍起になってメルエの血液を欲しているようにも見えた。

「・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・・・」

何度も、小さな身体で懸命にマントを振り、＞こうもり男＜を牽制するメルエではあるが、それも時間の問題である。
一番近いカミュの周囲には鬱陶しく飛び回る＞こうもり男＜が二体。
メルエの危機に珍しく取り乱し気味なカミュがその二体を斬り倒し、メルエの下に向かうまでには暫し時間を要する。
そして、サラからメルエへの距離は空き過ぎていた。

それでも、サラがメルエの場所に＞鉄の槍＜を構えて駆け出し、カミュが一体の＞こうもり男＜の羽を斬り飛ばした時、ついに＞こうもり男＜の手がメルエの肩を捕まえた。

「「　メルエ！！　」」

この旅に出て初めて、カミュとサラの声が重なった。
羽を失い、地面に落ちた＞こうもり男＜の眉間に剣を突き刺し、メルエに駆け寄ろうとするカミュの表情にも絶望感が漂っている。

『もう駄目だ』

サラも、そして諦めという言葉とは縁遠いカミュも、メルエに向かう足を止めはしなかったが、心ではそう感じていた。

しかし、二人が絶望に目を覆いたくなったその時、メルエの右腕が動いた。
手探りのような動きで、腰元に持って行ったその小さな手で、そのまま＞こうもり男＜の首筋を殴り付けたように見えた。

「　ギャ――――――――――――――――――！！！　」

メルエのような幼い少女の力で殴り付けたところで、どうにもならないと考えてしまっていた二人の耳に信じられないような叫び声が轟く。

その叫び声の主である＞こうもり男＜は、メルエの肩を掴んでいた両手を離し、そのまま床に落ちて、数度の痙攣を起こした後、その息を引き取った。

サラも、常に無表情を貫くカミュですらも、その信じられない光景

に暫しの間、呆然と佇んでしまう。
サラに至っては、その手に握る槍を床に落としてしまっていた。

しかし、それは本来、戦場にあるまじき行為。
自分の命はいらぬという程の愚行。
カミュが倒し、そして今メルエが倒した＞こうもり男＜は合わせて二体。
しかし、この場に出てきた＞こうもり男＜は三体のはずだ。

「キョエ――――――――――！！」

後方からかかる、耳を劈(つんざ)くような叫び声に、自分の失態に気がついたカミュが慌てて振り返った時はすでに遅かった。
降下しながらカミュの喉元めがけて振り下ろした爪は、もはや、手に持つ盾も剣も間に合わない場所まで来ていた。

「ゴフッ！」

しかし、ある種達観したように受け入れるつもりであったカミュの喉元に、その爪が届くことはなかった。
＞こうもり男＜の振り下ろした腕だけでなく、その身体自体も空中で停止していたのだ。
それを止めたのは、＞こうもり男＜の胸を後ろから貫通して飛び出ている剣先。

「・・・すまない・・・また迷惑をかけた・・・」

その剣の持ち主は、アリアハン国屈指の騎士。
眠りを誘う息を吐き出した魔物の死と共に、その効力も薄まり覚醒を果たしたリーシャである。

「・・・・・もう・・・慣れた・・・」

「ぐっ！　返す言葉もない・・・・」

剣の持ち主がリーシャであることを確認したカミュが、リーシャの謝罪に溜息を吐き出しながら発した答えは、無意識に近い厭味となり、リーシャの心に突き刺さる。

「メルエ！　大丈夫ですか！？」

「・・・・・・・・うぅぅ・・・・・・・・ぐずっ・・・・・・・」

サラがメルエに駆け寄ったことを表す声を聞き、カミュとリーシャもメルエの下へと急いだ。　リーシャがそこに辿り着くと、メルエは手にしていた物を落とし、リーシャの胸に飛び込んでいく。

戦闘の時に魔物と一人で対峙したことなど、今まで一度たりともな

かったのだ。
その恐怖は相当なものだったのであろう。
無我夢中で何とか魔物を撃退はしたが、リーシャの顔を見た途端、今までの緊張と恐怖から抑えていた感情が溢れ出し、涙となってメルエの顔を濡らしていた。

「・・・怖かったな・・・すまない、メルエ。　私があんな様だったから・・・お前を護るとトルド達に誓ったのに・・・・本当にすまない・・・・・・」

「・・・・・・・・えぐっ・・・・・・・・・えぐっ・・・・・・・・・」

メルエが＞こうもり男＜を倒す少し前にリーシャは覚醒を果たしていた。
メルエの危機に駆けだそうとした時に、メルエの手が動いたのだ。
リーシャもその光景に息を飲んだ。
しかし、すぐ目の前にいる＞こうもり男＜がカミュ目掛けて攻撃を加えようとしているのを見て、自然と身体が動いていた。

「・・・・そうか・・・・これか・・・・」

リーシャがメルエの身体を優しく抱き締め、その小さな背を撫でている横で、カミュはメルエが落とした物を拾い上げ、感嘆の声を上げる。

「・・・それは・・・」

「・・・＞毒針＜だ。　トルドはしっかりメルエを護ってくれた。」

カミュの手にある物を見て、サラも言葉に詰まった。
それは、＞カザーブ＜で最後までメルエがこの塔に行くことを反対していた人物がくれた物。
そして、『自分は護ることが出来ないのだから、代わりに護ってほしい』とカミュやリーシャに願い、頭を下げた男がくれた物だった。

「・・・トルドは、アンにこれを持たせてやれなかったことをずっと悔やんでいたのかもしれないな・・・」

「・・・カミュ様・・・」

『まただ。』

サラはそう思った。
また、カミュはこのような表情を見せる。
それは、物悲しく、そして人の心を思い遣っているような表情。

『人』を『人』とも思わない言動や行動を繰り返すカミュが、時折見せるこの表情がサラには理解できなかった。
『何故、こんな表情をすることができる人間が、あのような残酷な

行動を取れるのか？』
そう思えて仕方がないのだ。
それが、今のサラの限界だった。

『人』の心の矛盾。
そして、十人十色の思考や理想。
それを考慮に入れるキャパシティーがサラにはまだないのだ。

「もう大丈夫か？　うん。　よし、行こう。　早く帰ってゆっくり休もう。」

「・・・・・」

メルエの泣き声が止んだことを確認し、リーシャがゆっくりと自分の胸からメルエを引き剥がす。　メルエは自分に優しい笑顔を向けるリーシャに、こくりと頷いた。

「・・・しかし、やはりアンタは、魔物の性質や特徴も頭に入れた方が良さそうだ・・・」

「　ぐっ！　わ、わかっている！！　今回は私が悪かった。　それは謝る。　」

「・・・今回『も』だ・・・」

自分の非を認め、謝罪をするリーシャに容赦のない揚げ足取りが待っていた。
＞ナジミの塔＜に引き続き、今回も失態をしたことの自覚があるだけに、リーシャは悔しくとも唇を噛むことくらいしかできなかった。

リーシャから離れたメルエは、カミュが血糊を拭き終えた＞毒針＜を受け取り、大事そうに腰のホルダーに仕舞い込んだ。
メルエにとって、この＞毒針＜は命を救ってくれた物と言うだけでなく、カミュの言う通り、アンとメルエを繋ぐ物でもあるのだ。

「・・・メルエ、お前はその戦士の傍を離れるな。そいつもここから先は無闇矢鱈に魔物に近づくような馬鹿はしないだろうからな。」

「ぐっ！　わ、わかっている！　メルエ、私の傍を離れるな。カミュの傍にいるより安全だということを証明してやる。」

そんないつも通りの二人のやり取りを聞きながら、一行は先を急いだ。

塔の一階部分に辿り着いた一行は、再び豪雨の中に身を晒すために準備を行う。
メルエのマントを頭から被せるように着せた後に、カミュのマントの中に入れる。

塔の扉を開けると、肌に突き刺さるような雨が叩きつけられる。
いつもの様に、先頭をカミュ、そしてそのマントの内部にメルエ、その後をサラ、最後尾をリーシャと言った隊列を組み、間を空けないように、歩き出す。

雨風は、塔に入った時よりも酷くなっているようにも感じ、サラには目を開くことすらも難しい状況であった。
塔に入る前に野営をした森は、進行方向からは少し逸れており、休憩をする為にその森に入るのであれば、＞カザーブ＜に一歩でも近づいた方がいいというのが全員の認識であった。

視界をも覆うような横殴りの雨は、魔物の登場をも遮っており、進行速度が遅いにも関わらず、一行が魔物と遭遇することはなかった。

「・・・・・メルエ・・・・大丈夫か？」

「・・・・・・・」

先頭を行くカミュが、目を開けることすらも困難な状態で、マントの中にいるメルエに声をかける。　いくらカミュのマントによって護られていると言えども、この雨と気温では、幼いメルエの体温の低下は避けられない。
休憩を挿みたくとも、雨風を凌げる場所がないのだ。

カミュの言葉にマントの中で頷く仕草をするメルエではあるが、その身体に感じている寒さは相当なものなのであろう。　小刻みに震えているのがカミュにも伝わっていた。

それでも、何とか橋を渡り、＞カザーブ＜の周囲を囲む鉱山の山々に入る為の山道に辿り着く。

「カミュ！！　この辺りで一度休憩をしよう！　日も落ちてきた！」

「このまま進む！　夜道は危険だが、今は火を熾せる場所がない！」

山の中の木々たちも、昨日から降り続く大雨の影響で濡れきっている。
それは、大地も同じこと。
下に落ちていた枯れ木も水分を多く含み湿気ってしまっている。
これでは、薪を常備している訳ではないカミュ達に火を熾せる訳がない。
故に、苦渋の決断として、カミュは幼いメルエや、女性であるサラやリーシャの状況を考えても強硬策を実行するのだった。

「くそっ！　サラ、大丈夫か！？」

「は、はい！」

山は登って行くにつれ天候が激しくなる。
雨雲が近付くためなのか、風が上空を踊っているからなのか、暗い闇が支配し始めた山は、もはや一寸先も見えない程に雨風が激しくなっていった。
後方を歩く二人でさえ、前にいる人間の姿すら見え辛くなっているのだ。
サラは先頭を歩くカミュが、迷うことなく、暗闇の中を突き進んで

いくことが信じられなかった。
何故、カミュは道を誤ることなく、暗闇の中も歩けるのか？
もしかすると、自分が救われた＞アストロン＜という魔法と同じように、それがカミュを勇者たらしめんものなのかもしれない。

「・・・・・・・・・」

メルエは、カミュのマントに覆われながらも、その隙間から自分が歩いて行く道をしっかりと見据えていた。
激しい雨風と、夜の闇によって視界は悪いが、自分がカミュの邪魔になってしまうことを何よりも嫌うメルエは、カミュの足元を気にしながらも前方に目を向けて歩いている。

そんなメルエの前方の一角に、雨風が止み、暗闇さえも払っている場所が目に入った。
大きな木の下にぽっかりと穴が開いたように雨が降り注がない場所ができている。
そこには、メルエの知っている少女と、その少女の肩に手を乗せた女性が立っていた。
メルエがカミュのマントにしっかりと包まれているにもかかわらず、その二人の目は真っ直ぐメルエを見ていたのだ。

アンである。
にこやかな笑顔を向け、メルエに向かって小さく手を振っているその姿は、塔の内部でリーシャがメルエに話したような感情をメルエに対して持っていない証拠。
アンの肩に手を乗せ、もう片方の手をアンと同じように振っている女性はおそらくアンの母親であろう。　こちらもやさしい笑顔をメ

ルエに向けていた。

メルエは二人の姿を確認し、そしてその優しい笑顔に嬉しさがこみ上げ、カミュのマントを開き、木の根元に向かい手を振り返す。
突如マントから顔を出したメルエに驚いたカミュであったが、ある一点に視線を向け、笑顔を作りながら手を振るメルエに何かを察し、メルエの邪魔にならぬよう、それでも雨がメルエに当たらぬようにマントを操作しながら前に進む。

「・・・メルエ・・・アンに手を振るのはいいが、足元には気をつけろよ・・・」

それでも、幼いメルエの疲れが溜まった足元への注意も怠らない。
自分が見ているアン母娘がカミュにも見えるのだと勘違いしたメルエは、嬉しそうに微笑みながらカミュを見上げ、大きく頷いた。

そんな二人のやり取りはサラやリーシャには見えない。
雨風の影響もあるが、カミュのマントに覆われているメルエの動きは見えないのだ。
故に、この山のとある一点のみを包む、暖かい空気にも気がついてはいない。
しかし、それは責められるものではないだろう。
雨も風もないその一点は、メルエにしか感じることが出来ないのだ。
メルエの行動の内容を察したカミュであっても、メルエの視線の先は雨が降りしきり、ずぶ濡れになっている木しか見えていないのだ。

メルエが手を振り終わり、再びカミュのマントに包まる状態に戻る。
その頃になると、先程まで外気に触れている肌に突き刺さるように降っていた雨の勢いも、少なからず弱まりを見せ始めた。

「ふぅ・・・ひと先ず落ち着いたな・・・サラもメルエも大丈夫か？」

「は、はい。　なんとか・・・・・」

「・・・・・・」

被ったマントを取りながら声をかけるリーシャに、サラとメルエはそれぞれの返答を返す。
サラとリーシャはずぶ濡れになってはいたが、カミュにガードされていたメルエは幸い、ほとんど濡れていなかった。
大事そうに抱えていた＞とんがり帽子＜を再び被り直し、メルエは嬉しそうに空を見上げる。

「ふふふっ、メルエは何か良い事でもあったのですか？」

「・・・・アン・・・・・・いた・・・・・・」

「そ、そうか！　良かったな、メルエ。」

くるくると回るメルエに微笑みを浮かべながら訪ねたサラの問いに対してのメルエの答えは、リーシャの心をも弾ませるものだった。
メルエがこれ程嬉しそうにしているのだ。
それは、アンがメルエに微笑んでいた証拠であろう。
それがリーシャにも嬉しかった。

＞とんがり帽子＜のつばを掴みながら空を仰ぎ、天から降り注ぐ雫を受けながらも嬉しそうに歩きまわるメルエにサラもリーシャも自然と頬が緩む。
しかし、久々に訪れた、そんな和やかな空気は突如終止符を打たれた。

「・・・おい、メルエ・・・あまりはしゃぎ過・・・！！」

「！！」

「メルエ！！」

カミュがくるくると回るメルエを窘めようとした時にそれは起こった。

和やかな空気が流れてはいたが、ここは山の中腹に位置する場所。
しかも、昨晩から、豪雨と言っていい程の雨が降り続いている。

地盤が脆くなっていたのだ。
バケツをひっくり返したような雨は山の地面の吸収力の許容を遥かに超えていた。
メルエが踏みしめたことが原因なのか、それともすでに限界を超えていたのか。
メルエは隣にそびえ立っていた大木と共に後ろ向きに崖下へと落ちて行く。
メルエの表情は、何が起きているのかすらも解っていないものであり、何かを掴もうと前に出された手は宙を掴んでいた。

「メルエ――――――――!!」

その場にいた全員が一斉にメルエに向かって駆けだす。
リーシャの叫びは雨が降り続く闇に溶けていく。

「!!」

絶望に落ちそうになるリーシャの目に、奇跡が映る。
一番メルエに近かったサラが、宙を漂うメルエの腕をしっかりと掴んでいたのだ。

「うぅぅぅ・・・・」

しかし、如何に幼いメルエとは言え、サラ一人では持ち上げることなどできない。
しかも、踏みしめる大地の地盤は、雨によって緩んでいる。
踏ん張りのきかない足ではメルエを支えるだけでも手一杯なのだ。

「サラ！　メルエの手を離すな！　すぐに行く！」

何とかメルエの腕を握っているサラに声をかけ、リーシャはサラの下へと駆け寄ろうとする。
しかし、それがいけなかった。
緩みきった地盤にとって乱暴に走り込む衝撃は追い打ちとなった。

「キャ――――――――――！！」

「サラ！！」

「くそっ！！」

地盤がサラの足元から崩れていく。
その後を追って飛びこむリーシャ。
リーシャの腕は間一髪、支えを失い、天を仰ぐサラの腕を掴んだ。
しかし、飛び込んだリーシャに踏みしめる大地等はない。

そのまま崖下へと吸い込まれていく。

リーシャは諦めにも似た感覚で、天を仰いだ。

自分の腕にかかる重みが、自分も落ちていることにより、全くと言っていいほど無くなっていた。

雨を降らしていた真っ黒な雨雲が広がる空。

日も落ち夜の帳が広がるその空に、リーシャは太陽にも似た光を見た。

地を踏みしめる感覚もなく、無意識に伸ばした手を力強く握られる。

それは、リーシャの父であった宮廷騎士隊長サブリナのような暖かく、そして安心感を与える力強い腕。

もう一度、見上げるリーシャの目には、一瞬父サブリナの面影が映った。

「くっ！　お、おい、何とか上げられるか？」

「はっ！？」

自分の腕を力強く握っていたのは、認めることを拒否し続けている相手。

アリアハンの英雄の息子でありながら、そのことを誇りに思うどころか、迷惑とすら考えている親不孝者。

それでも、自身の思考や理想を理解しようとはしない仲間の腕を必死に掴むカミュの姿だった。

「いや、サラを上げることはできるが、サラに掴ませるものがない。」

リーシャの言葉通り、今のリーシャ達三人は、カミュの片腕だけで支えられている。
そのカミュも、崩れかけた大地に立ってはいるが、もう一方の腕で太い木の枝を掴み身体を支えていたのだ。

例えサラを引っ張り上げたとしても、そのサラ掴ませるものは、崩れかけている大地しかない。　それは現状では危険すぎることとなる。

「くそっ！」

どこか掴むことができるものはないかと周囲に目を向けたリーシャの上から、カミュの舌打ちが聞こえたと同時に、リーシャの身体は重力に従い、下に落ち始める。
カミュが掴んでいた木の枝が、その木の根ごと大地から抜けてしまったのだ。
そのまま重力に従い、崖下に落ちて行く一行。
それでもそれぞれの腕を決して離さずにいるのは、ここまでの旅でできた各々の絆なのだろうか。

崖下へと落ちて行くカミュの頭には不思議と後悔はなかった。
余計なことをしたという想いが全くない訳ではない。

それでも、あの状況で咄嗟にリーシャの腕を掴んだ自分の行動を悔やむことはなかった。
見上げた空は、真っ黒な雲が広がり、星一つ見ることが出来ない。
先程まで叩きつけるように頬を打っていた雨も、その勢力を弱め、自然の恵みと呼ばれる程度のものに変わっていた。

『この旅もここまでか』

カミュの胸に諦めとは違う、現実を現実として受け止めるような達観した想いが去来する。
生まれた時から決められた道を歩くことを強要され、ようやく自分の見識だけで活動することを許されることになった旅も、予想していなかった同道者の出現によって、様変わりする。
魔法の才能の塊のような幼い少女の出現もまた、旅の様相を変化させる要因となった。
それら全てが、今のカミュの心の変化を生み出したのかもしれない。

カミュが旅に出る時に覚悟をしていたような、魔物と戦い、それに敗れて死ぬわけでもなく、はたまた他国で恨みや憎しみの対象として糾弾されて殺される訳でもない。
迷惑以外何物でもなかった同道者と、途中で自分が連れて行くことを決めた妹の様な存在の命を救うために手を伸ばした結果としての死。
真っ黒な雲が広がる空を見上げながら、カミュの口元は皮肉気に上がっていた。

「　！！　」

その時、空を見上げるカミュの目に、先程リーシャが見た光が映り込む。
例え雲が晴れたとしても、既に夜の闇が広がる空に日光などが差す訳がない。
その不思議な光景に目を奪われながら、カミュは目を凝らした。

光は次第にその明るさを増し、突如カミュ達の落下速度が停止する。
落ちながらも、何かを掴もうと伸ばしていたカミュの腕が何者かに掴まれたのだ。
眩く光る光の中に、カミュは確かに人影を見る。
メルエと同じ年頃の少女が、その両腕でカミュの腕を掴んでいる。
その後ろには、女性の様な人影があり、顔まではっきりとは見えないが、柔らかな微笑みを浮かべていた。

カミュは、魂や幽霊などというものを見たことはない。
魔物の中にその手のものがいない訳ではないが、カミュが相手をしたことはないのだ。
しかし、メルエの行動や言動を見ていると、そういう存在は自分に見えなくとも存在するのだろうとは思っていた。

故に、自身の腕を微笑みを浮かべながらしっかりと掴んでいる、暖かな光を纏う人影を見た時に、それが、メルエが山の中で見、そして先程手を振っていた相手なのだと理解した。
その不思議な光景を、現実のものとして受け入れたのだ。

「・・・あ、あれは・・・」

そんなカミュのもう片方の腕をしっかりと握りながら、リーシャも

また、カミュと同じ光景を目にして言葉を失っていた。
カミュの腕を握る反対の手が掴んでいるサラは全員が落下を始めた当初に気を失っていた。
気を失いながらも、メルエの腕に爪が食い込む程に握る力を緩めていないことは称賛に値する程のことだろう。　そんなメルエも魔法力の枯渇や、ここまでの疲れなどもあり、意識を失っていた。

その光の中にいる人影を見た者は、カミュとリーシャの二人。
しかし、見たことのあるメルエの同意を得なくとも、二人はそれがアンとアンの母親なのだと理解したのだ。

魅入られるように、吸い込まれるようにその光と光の中にいる人影を見ていたカミュとリーシャの意識も次第に薄れていく。

『ここで意識を失ってはいけない』

そう自分を戒めても、贖(あがな)うことなどできない程の衝動。
お互いの腕を先程以上の力で握ることで、意識の覚醒を図るが、抵抗空しくカミュ達の意識は刈り取られていった。

ロマリア大陸？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

これで第二章は一応完結となります。

一行の装備品などを次は更新します。

ご意見やご感想をお待ちしています。

※勇者一行　装備品一覧（前書き）

装備品の一覧です。
アリアハンとそれほど変化はありませんが、新たな仲間メルエも入っています。

※勇者一行　装備品一覧

★装備品一覧

【名前】：　カミュ

【素性】：　アリアハン国が掲げる勇者

※古代英雄が残した魔法の契約を完了したことから、後の世に名を残す可能性を示す。

【年齢】：　１６歳

【装備品】：

頭）　サークレット（中央に青く輝く石がはめ込まれている）

胴）　鉄の鎧・改
※武器屋によって、肩と胸、そして腹の部分を残しながらも動きやすく改良したもの

盾）　青銅の盾
※ロマリアで買ったものは、サラへと譲渡したため、シャンパーニの塔で拾ったもの

武器）　鋼の剣

【魔法】：
メラ
ルーラ
ギラ
ホイミ
アストロン

【名前】：　リーシャ　（リーシャ・デ・ランドルフ）

【素性】：　宮廷騎士

【年齢】：　？　（パーティー最年長であることには間違いはない）

【装備品】：

頭）　なし

胴）　鉄の鎧

※カミュと同じく、武器屋の手によって動きやすく改良された物

盾）　青銅の盾

武器）　鋼の剣

※以前の配給品は愛着があったが、泣く泣く武器屋に引き取ってもらう

【魔法】：　使用不可

【名前】：　サラ

【素性】：　アリアハン教会所属の僧侶

※自分の内にある葛藤と苦悩を繰り返し、成長を見せ始めている

【年齢】：17歳

【装備品】：

頭）　僧侶帽

胴）　鎖帷子（くさりかたびら）

※一般的な法衣の下に着込む形で装備している

盾）　青銅の盾

※元はカミュがロマリア城下町で購入したもの

武器）　鉄の槍

　　聖なるナイフ

【魔法】：

ホイミ

ニフラム

ピオリム

ルカニ

バギ

マヌーサ

キアリー

【名前】：　メルエ

【素性】：　元奴隷
※どこの出身なのか、親がいるのか等は全く解っていない
　それは、カミュ達が聞かないということだけでなく、メルエにも正確には解らない

※魔法使いとしての才能に恵まれており、幼い歳で魔法を習得する
　その習得スピードも通常の魔法使いの数倍の速さ

【年齢】：6～8歳？
※素性と同じように、メルエ自身が年齢を把握していない
　その知識の少なさから、見た目よりも幼い可能性もある

【装備品】

頭）　とんがり帽子
※一般的な魔法使いが被るような三角形の帽子
　カミュ達に買ってもらったメルエの大のお気に入り

胴）　アンの服
※アンの父親であるトルドからもらったアンのお下がり
　女の子らしいものであるが、お転婆のアンに合わせ動きやすいものである

※その上に、＞カザーブ＜で購入したマントを羽織っている

盾）　なし

武器）　毒針

※＞カザーブ＜の道具屋であるトルドから身を守る手段として譲り受けた物

本来であれば、彼の娘であるアンに渡されるはずだった

【魔法】

メラ
ヒャド
ギラ
イオ
スカラ
スクルト
ルーラ
リレミト

※勇者一行　装備品一覧（後書き）

読んで頂きありがとうございます

一応、まだロマリア大陸ですが、カンダタ編として一区切りさせました。

ノアニールの村？（前書き）

お気に入り登録数が１００件を超えていました。
ありがとうございます。

アリアハンを出た当初の一行の行動のＢＧＭは？の『冒険の旅』だったのですが、メルエ加入後、私の頭の中では？の『果てしなき世界』に変化してしまいました。

皆さんはどうですか？

ノアニールの村？

メルエは閉じている筈の目からも解る程の眩い光に目が覚める。
眩しそうに、それでもゆっくりと開いたメルエの目には理解しがたい光景が広がっていた。

「・・・？？？・・・」

目を開いたはずなのに、目の前がはっきりと見ることが出来ないことを不思議に思い、メルエは小首を傾げる。
更に、身体を起こすとそこは、雨が降り、足元がぬかるんだ山道ではなく、一面が鼻をくすぐるような微香を放つ花に囲まれた場所だった。
そのことに、尚一層メルエの首の傾きが深くなる。

「・・・・・・カミュ・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・

・？」

周囲を見渡すが、メルエが呼ぶ名の者達が見当たらない。
一面の花の中を駆け回りながら、メルエは何度も自分と共に歩く仲間の名前を呼ぶが、いつもならすぐに返事を返してくれる暖かな声は聞こえなかった。

「・・・・・うぅぅ・・・・・・ぐずっ・・・・・・・」

常人が見れば、冷たいと感じる無表情ながらも、常に自分を気にかけてくれる青年。
時に厳しく、時に優しく、母の様に姉の様に自分を包み込んでくれる女性。
自分が何か悪いことをしたとしても、必ず最後には笑って許してくれる少女。

まだ、数日しか共にしてはいないが、それでもメルエの始まったばかりの人生に夢と希望を与えてくれた三人がいない。
それは、メルエの胸に絶望を落とした。
自然と駆けまわる足のスピードも落ちて行き、その双眸には涙が溜まり始める。
そのまま、メルエは立ち止まり、天を見上げながら泣き始めてしまった。

「もう！　泣いてちゃ駄目なんだよ。　泣いていたら幸せも寄ってこないんだよ。」

「　！！　」

もはや、声を上げることも厭わなくなったメルエに、後方から不意に声がかかった。
その声にしゃくりあげるように涙を流していたメルエの呼吸が一瞬止まってしまう。

聞いたことのない声。
しかし、なぜか聞き覚えのある声。
メルエの歳とそう変わらないような幼い声。

勢いよく振り返ったメルエの涙でぬれた目に映ったのは、メルエの想像していた通りの人物だった。

「・・・・・・・アン・・・・・・・・？」

「うん！　私はアン。　よろしくね！　・・・お名前聞いてもいい・・・？」

メルエの問いかけに満面の笑みを浮かべながら頷いた少女は、メルエが＞カザーブ＜に行く途中の山道で見た人物。
そして、先程は木の根元に母親と共に立ち、手を振ってくれたアンその人であった。

「・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・」

「メルエ・・・・・メルエ・・・・・・・うん！　いいお名前ね！」

メルエの名乗りを聞き、その名を何度か反芻した後に、アンは光輝く太陽のような暖かな笑みを浮かべる。
その笑顔に、先程まで絶望に苛まれていたメルエの心も和んでいく。

「メルエ、よかったら私と一緒に遊びましょ！？」

「・・・・・・・！！・・・・・・でも・・・・カミュ達・・・・・・いない・・・・・・」

続いたアンの魅惑的な提案に、笑顔を作りながら頷きかけたメルエであったが、先程感じた絶望を思い出し、首を横に振った。

「う～ん。　大丈夫よ。　ちょっとだけだから。」

「・・・・・・・」

それでも眉を下げて、首を縦に振らないメルエに、アンは若干困っ

た表情を作って小首をかしげた。

「う～ん。　あの人達は大丈夫。　みんな元気よ。　今は眠っているけど・・・だから、少しの間だけ・・・あの人達が起きるまでだけ、私と一緒に遊びましょう・・・ダメ？」

「・・・・・」

困ったような、こちらを窺うようなアンの自信無さげな表情にメルエはしぶしぶながら首を縦に振ることになる。

元々、メルエはアンを疑うことなどない。
アンが大丈夫と言えば、カミュ達は大丈夫なのだろう。
アンが少しの間と言えば、アンと遊び終われば自分はカミュ達の下に帰ることができるのだろう。
そう感じていた。

「・・・よかった・・・あはっ！　メルエは、お花は好き！？　私は大好き！」

「・・・？？？・・・お・はな・・・？」

安堵の表情を浮かべたアンだったが、突如としてメルエの手を握り話題が切り替わるのは、幼い子供特有のものなのであろう。

そんなアンの姿に、同年代の人間が周りにいたことのないメルエは戸惑うが、アンに手を引かれるままに一面を覆い尽くすような花の中へと進んでいく。

花の中を駆け回り、メルエは生まれて初めて楽しいという感情を持ったかのようにアンに笑顔を向け、アンもまた、メルエの笑顔を釣られるように満面の笑顔をメルエに向けていた。

追いかけっこの様に一頻り駆けまわった後、二人は花々に囲まれる地面に座り込む。

アンは傍に咲く花を摘みながら器用に手を動かし始めた。

メルエはアンが何をしているのか見当がつかず、ただ、アンの手元で何かが作られていくのを首を傾げながら見守っているしかなかった。

「あのね・・・メルエ・・・・・あのね・・・・・・」

「・・・？？？・・・・」

手を止めずに、下を向きながら何かを言い出しきれないアンの言葉にメルエの首は一層曲がっていく。
何も言わないメルエに意を決したように顔を上げたアンの表情は不安を隠しきれない、そんな表情だった。

「・・・あのね・・・私と・・・私と・・・お友達になってくれる・・・？」

不安そうにメルエを窺いながら口を開いたアンの言葉は、メルエには聞き覚えのある単語だった。
それは、カミュが自分に問いかけていた単語。
そして、リーシャが解り易く噛み砕いてくれ、自分が肯定した単語。

「・・・・・・アンと・・・・メルエ・・・・・・仲良し・・・・・・」

「えっ！？　あ、う、うん！　じゃあ、メルエとアンは今日からお友達ね！」

「・・・・・・違う・・・・・・」

「えっ！？」

メルエの言葉に嬉しそうに顔を輝かせ、確認の意味を込めて発したアンの言葉は、メルエが首を横に振ったことで否定された。
そのメルエの態度に、輝いた花は急速に萎んでいく。

「・・・・・・・・もっと・・・・・・・・前から・・・・・・・・」

「う、うん！　ず、ずっと前からお友達だね！　・・・うぅぅ・・・ぐずっ・・・・・」

萎んだ花は、メルエという太陽の、微笑みという名の光と、アンの流す嬉しさに満ち溢れた水によってその輝きを取り戻す。

「・・・・・・アン・・・・・すぐ泣く・・・・・・サラと・・・・同じ・・・？」

「ぐずっ。　ち、違うもん！　そ、それにメルエだってさっき泣いてたでしょ！」

「・・・・・メルエ・・・・・泣いてない・・・・・」

「　うそ！　さっき泣いてたもん！　『カミュ・・・リーシャ・・・』って！」

「・・・・違う・・・・・」

メルエの言い方に頬を膨らませ否定するアンの言葉を、メルエもまた頬を膨らませながら否定する。
しかし、そんな時間も長くは続かない。
どちらからとも言わず、頬が緩み、頬笑みを浮かべていた。

初めてできた同年代の友人。
初めて交わす子供同士の会話。
初めて行う無邪気な意地の張り合い。

アンもメルエも、今していることは全て、生まれて初めての行為ばかりであった。
相手の自分と同じような笑みに、同じ感慨を持っていることを感じ、照れくさそうに微笑む。　そんな一時の幸せ。

「・・・・できた・・・・・できちゃった・・・・・」

「・・・???・・・」

そんな二人の幸せな時間が過ぎるのは早かった。
アンが手元で作っていた物の完成。
それがまるで哀しい出来事のように俯くアンをメルエは不思議そうに見つめる。

「はい！　これ、メルエにあげる！　私とお友達になってくれたお礼・・・・ぐずっ・・」

「・・・ありが・・とう・・・・また・・・・アン・・・・・泣く・・・・・・？」

アンは自らの作品をメルエの＞とんがり帽子＜に掛けてから、再び俯き嗚咽を漏らしだす。
先程と同じように返すメルエの言葉にも、反応を示さないアンにメルエの首が傾いた。

「・・・ぐずっ・・・とっても綺麗よ、メルエ。　・・・ぐずっ・・・私ね・・・メルエのこと、ずっと忘れないから・・・うぅぅ・・・もっと早くにメルエと・・・・会いたかった・・・・な・・・・・」

「・・・・メルエ・・・・＞ルーラ＜使える・・・・・いつでも・・・・会える・・・」

嗚咽を漏らしながら言葉を絞り出すように話すアンの姿にメルエの胸にも何かがこみ上げてくる。　それは、メルエの言葉に何も言わずに首を横に振るアンを見て涙に変わっていった。

「・・・・・なんで・・・・・・？」

「・・・ぐずっ・・・メルエとはもう会えないの。　だからアンのことも憶えていてね・・・私の初めてのお友達がメルエでよかった・・・・」

「・・・・・いや・・・・・・うぅぅ・・・・・・」

もはや、メルエの目から零れ出す雫を留める手段は何もなかった。
メルエの手をアンが握り、そのアンの手をメルエも強く握り返す。
忍ぶような嗚咽は、盛大な泣き声となり、言葉を発することもない。

しばし、二人が泣き続けていると、不意にアンの顔が上がり、後方を振り向いた。
未だにしゃくりあげながら、嗚咽を続けるメルエも、顔を上げてアンを見詰める。

「・・・ぐずぅ・・・も、もう・・行かなきゃ・・・お母さんが・・・呼んでる・・・」

「　！！　・・・・いや・・・・メ、メルエも・・・・・行く・・・・・」

置いて行かれる。
初めてできた同年代の友達。

その友との別れは、経験のないメルエにとって絶望を感じるのに十分な物だった。
その絶望の重さにメルエは考えるよりも先に言葉が出てしまう。

「・・・ぐずっ・・・ダメでしょ・・・メルエは・・・うぅぅ・・・メルエはあの人達と一緒に行かなきゃ・・・」

「　！！　」

「・・・アンも・・・メルエとずっと遊んでいたいけど・・・でも・・・ダメだから・・・メルエには・・・きっと・・もっと楽しいことが待っているから・・・・」

アンと共に行くことを口にするメルエに対して返ってきた答えは拒絶だった。
しかし、それはとても優しい拒否。
初めての友であるメルエを案じたもの。

もはや、先に続く未来への道が閉ざされたアンにとって、輝くような眩い道が広がっているメルエの未来は妬みを持ったとしても仕方がないものにもかかわらず、それを少しも出さずに、友であるメルエを諭すアンは、メルエよりも精神的にお姉さんなのかもしれない。

「・・・・・・アン・・・・・・・メルエと・・・・・・行く・・・・・」

「・・・ありがとう・・・でも・・・行けないわ。　アンはお母さんと一緒に行くから・・・だから、メルエともここでお別れ・・・・ぐずっ・・・・元気でね・・・・アンのこと忘れないでね・・・・」

「・・・・・いや・・・・・・・アン！」

初めて上げるメルエの叫び。
しかし、叫んだ名前は周囲を覆う花達の香りの中に溶け込んでいった。

目の前にいる筈のアンの姿が消えていく。
光に吸い込まれるように、光から差し伸べられる手に導かれるように。
それは、メルエにとって哀しみに押しつぶされるようなもの。

「・・・いっぱい、いっぱい・・・ありがとう・・・メルエ。　メルエに会えて良かった・・・ばいばい・・・」

「・・・うぅぅ・・・メルエも・・・・・・アン・・・・・・好き・・・・・」

「う、うん！　アンも・・・メルエのこと・・・ぐずっ・・・大好き！！」

二人の会話はそれが最後だった。
お互いの気持ちを伝え、手を振り合い、そして別れた。
もう、メルエの前に、太陽のような微笑みを浮かべる少女はいない。
咲誇る花々の中、メルエは一人すすり泣くのであった。

「・・・・・・・・エ！・・・・・・・・ルエ！！」

徐々に覚醒していく意識。
花畑の中にいたはずが、強引に糸を手繰り寄せられるようにメルエは現実へと引き戻される。

「・・・・・・」

「メルエ!!　よ、よかった・・・メルエ、私が解るか!?」

「・・・・・・リーシャ・・・・・・」

「そうだ!　どこか痛むところはないか!?　気分が悪いところはないか!?」

ゆっくりと開いた視界に、一番早く飛び込んできたのは、メルエが母や姉の様に慕うリーシャであった。　眼尻に光る雫を溢れさせ、メルエが目を開いたことを心から喜ぶ姿にメルエの胸にも安心感が広がっていく。

自分の名をしっかりと呼んだメルエの横たえていた身体を抱き上げ、リーシャはメルエの身体のいたる所を確認するように撫で上げる。

「・・・目が覚めたか・・・」

「・・・・・・カミュ・・・・・・・・・」

「よかったです。・・・本当に良かったです・・・・・ぐずっ・・・・・」

「・・・・・・・サラ・・・・・・・・・」

リーシャの腕の中から、周囲を見ると、珍しく安堵の表情を浮かべるカミュと、感極まって涙を流しながら喜ぶサラの姿がメルエの瞳に映り込む。
それは、態度こそ違え、皆の内心が同じであることを示していた。

「・・・メルエも起きた・・・地図によれば、おそらくこの先に村があるはずだ。」

「な、何!?　お前、この状況で歩き出すというのか!?　メルエは今目覚めたばかりなのだぞ!?」

「だからこそだ!　雨は止んだとはいえ、大地も草木も濡れている。　火を熾すことが出来ない以上、このままでは体温の低下は避けられない。　メルエは俺が背負う。」

メルエの目覚めに安堵の表情を浮かべていたカミュの顔はすぐに引き締まり、一行の出発を促した。
しかも、それに反発を示すリーシャに向かって、口を開いたカミュの言葉は珍しく語気も荒く、それがカミュの心配度合いの大きさを示していた。
それはリーシャにもしっかりと伝わっていた。

「・・・そうだな。　わかった。　だが、メルエは私が背負う。」

「　えっ！？　」

そんな緊迫を感じる空気も、やはりこのアリアハン屈指の戦士の言葉で霧散することになる。　あまりの突拍子のない言葉に、隣にいたサラは唖然とした表情を浮かべる。

「・・・はぁ・・・何に対して張り合っているのか解らないが、今、俺もメルエも呪文を唱えられない以上、魔物の相手はほとんどアンタとその僧侶に任せることになるんだ。　そのアンタがメルエを背負っている訳にはいかないだろう。」

「　ぐっ！　わかった・・・」

カミュの言葉には一理ある。
しかし、サラはカミュの言葉に驚きと微(かす)かな喜びを感じる。

カミュの言葉の中には、『信頼』の二文字が見え隠れしているように感じたのだ。
サラには、魔物との対峙の時、リーシャとサラを頼っているという意味に聞こえた。
それは、旅の同道者ではなく、旅の仲間として見ていることの証拠ではないかと・・・

「そ、そうですね。　任せて下さい。　さあ、リーシャさん、行きましょう。」

「お、おい！　サラ！」

そんな気持ちがサラの行動に表れる。
未だに悔しそうな表情を浮かべるリーシャに声をかけ、先頭を歩きだそうとしていた。

「・・・・・・・」

「ん？　メルエどうした？」

「・・・・・・帽子・・・・・・・」

何かを探すように周囲を窺うメルエに声をかけたリーシャは、不安そうに眉を下げて答えたメルエの言葉に、やわらかな笑顔を浮かべた。

「帽子なら、ほら、ここにある。　被せてやる。」

「・・・・ん・・・・・」

メルエの頭に帽子を被せたリーシャに前方からサラの声が再びかかり、リーシャは苦笑のような笑みを浮かべながら歩き出した。
メルエは傍で待っていたカミュの下へと歩いて行く。

「・・・ん・・・メルエ・・・帽子についているそれは・・・」

「・・・???・・・」

傍に寄って来たメルエの一点を見つめて呟いたカミュの言葉を不思議に思ったメルエが、その視線の先にある、先程リーシャに被せてもらった＞とんがり帽子＜を脱いで見ると、そこには、アンが掛けてくれた作品である『花冠』がかかっていた。
メルエの目が驚愕に見開かれた後、その冠の花にも負けぬ輝く笑みを浮かべ、カミュに視線を戻す。

「・・・・・・・アン・・・・・・・・・くれた・・・・・・・」

「・・・そうか・・・お礼は言ったか・・・・・？」

「・・・・・・」

メルエの表情を見て、カミュはその言葉の内容を追求しようとはしなかった。

カミュもリーシャも、あの時確かにアンとアンの母親という二人の存在を見た。

それは、夢なのかもしれないし、幻想なのかもしれない。

しかし、カミュはどちらでも構わないと考えていた。

カミュは、自分達が今生きているのは、あの二人のお蔭なのだと目の前で花咲くように笑うメルエを見て、信じることにしたのだった。

メルエの＞とんがり帽子＜に掛けられたアンの花冠は生涯枯れることはなく、メルエの進む未来をメルエと共に見ていくことになる。

いつもとは違い、先頭をリーシャ、続いてサラ、そして最後尾にはメルエを背負うカミュという布陣で一行は歩き出した。

カミュ達が、地崩れによって落とされた場所は、カミュが見ている地図で言うと、＞カザーブ＜の北北西に位置する場所だと予想される。

山々に囲まれた＞カザーブ＜には、東西南北全てに抜ける山道が存在するのだが、西に抜ける山道の＞カザーブ＜寄りの場所から転落した一行は、北の方角に抜けてしまったらしい。

一行が気を失っている間に夜が明けてしまったらしく、東からは昨日までの雨が嘘のような眩しい太陽が昇り始めていた。

雨が止み、魔物が活動を開始する夜中であったにもかかわらず、気を失っていた全員が五体満足なのは、おそらくメルエの友達が護ってくれたのであろうとカミュは人知れず思っていた。

「おい！　カミュ。　方角はこっちでいいのか？」

「・・・ああ・・・このまま北に抜けて、平原に出たら西へ進む。」

太陽が昇り始め、方角も読めるようになったこともあって、一行の行軍速度はスピードを上げる。

メルエはカミュの背中に乗りながら、先程までのアンとの話をたど

たどしくではあったが、一生懸命にカミュへと話していた。
その話を、嫌な顔もせず、ましてや鼻で笑うこともせずに真面目に頷きながら聞くカミュの姿勢に、メルエの話は益々熱を増していった。

そんなメルエも、話疲れたのか、それとも魔法力や体力の限界だったのか、カミュの背中で可愛らしい寝息を立て始めていた。
今では、そんなメルエの寝顔を見る為に、先頭にいたリーシャも、一歩前を歩いていたサラもカミュの両脇に陣取りメルエの幸せそうな顔に頬を緩めていた。

「カミュ！　後ろに下がれ。メルエを起こすなよ！」

そんな一行の静かな時間も、不意に来訪した招かざる客に終焉を迎える。
リーシャが腰に下げていた＞鋼の剣＜を抜き放ち、サラもまた背中に背負った＞鉄の槍＜を構える。

目の前に現れたのは、アリアハン大陸で見た＞大ガラス＜によく似た魔物。
カラスには間違いないだろうが、その羽根の色は若干アリアハンに居たものとは異なっていた。　それが二匹、上空から一行を睨みつけていた。

「サラ！　おそらくあれは＞大ガラス＜ではない。　似てはいるが、違う魔物として考えろ！」

「は、はい！！」

＞デスフラッター＜
リーシャの予想通り、それは＞大ガラス＜ではない。
その上位種に当たる魔物。
＞大ガラス＜よりも若干体格も大きく、その嘴の鋭さも比ではない。
更に、その体格に似合わず、動きの素早さも＞大ガラス＜とは段違いである。
おそらく、＞大ガラス＜が一度攻撃を繰り出す間に、対象に向かって二度の攻撃が可能な程の素早さと言っても過言ではないだろう。

「せい！」

夜が明けたばかりの朝日を背にしてから急降下してきた＞デスフラッター＜の攻撃を見る限り、知能も＞大ガラス＜よりも高いことが窺える。

目を細め、眩しさを堪えながらも降りてきた＞デスフラッター＜を避け、リーシャは剣を振り下ろす。
しかし、リーシャの剣も身を翻した＞デスフラッター＜に容易く避けられてしまった。

「リーシャさん、下がって！」

悔しそうに顔を歪めたリーシャであったが、後方からかかったサラの声に＞デスフラッター＜の一撃を剣で弾き、後方へと飛び退いた。

「　バギ！　」

リーシャが下がったことを確認したサラの詠唱。
サラの周囲に風が巻き起こり、真空を生み出していく。
サラの指が＞デスフラッター＜に向けられると同時に、唸りを上げて風が＞デスフラッター＜目掛けて吹き荒れる。

「　ギシャ――――――――――！！　」

魔物の悲痛の叫びが周囲に轟き、真空の刃が収まったそこには一匹の＞デスフラッター＜の細切れになった死体が落ちていた。

『一匹？』

サラのそんな疑問は、自分の斜め上空から聞こえる羽ばたき音が答えていた。
サラの指が向けられる一瞬早くに一匹の＞デスフラッター＜は上空へと移動していたのだ。

「　えっ！？　」

サラが驚いて顔を上げた時には、すでに＞デスフラッター＜は攻撃態勢に入っていた。
迫りくる脅威にサラは目を瞑る。
しかし、目を瞑る際に視界の隅で動く気配を感じた。

「ギニャ――――――――――――!!」

そう、残った＞デスフラッター＜は失念していたのだ。
自分達が対峙しているのが魔法を行使した僧侶一人ではないことを・・・

目を開いたサラが見た物は、羽を失い地面に落ちた＞デスフラッター＜に剣を突き刺すリーシャの姿だった。

「ふぅ・・・やはり、ここらの敵も少しずつ強くなっていくな・・・」

「あ、ありがとうございました。」

剣に付着した魔物の体液を飛ばすリーシャに、サラは頭を下げる。
そんなサラに微笑みを浮かべながら手を振ったリーシャは、本当にリーシャの言葉通り、後ろに下がったまま戦闘に参加しなかったカミュの下へと歩いて行った。

「まさか本当に戦闘に参加しないとは思わなかったぞ。」

「・・・アンタがするなと言ったんだろう？　メルエを起こすなと・・・」

「・・・ん？　ま、まあそうなんだが・・・」

「・・・はぁ・・・アンタの頭が悪いことは知っていたが、まさか少し前に自分が発言した内容まで忘れる程とは・・・その魔物の方がマシなんじゃないのか・・？」

メルエを背負いながら盛大な溜息を吐くカミュは、地面で動かぬ肉塊となった魔物を顎で差して暴言を吐く。

そのカミュの言葉に青筋を立てながら、震えているリーシャの右腕にはまだ＞鋼の剣＜が握られていた。それらを結びつけた時に起こりうる惨劇の可能性を見たサラが慌てて二人の間へと割って入った。

「　ま、待って下さい！　リ、リーシャさん、カミュ様はメルエを背負っています。　剣等振ってしまえば、メルエも怪我をしてしまうかもしれません！　」

もはや、サラの中ではリーシャがカミュ目掛けて剣を振るうことは確定事項のようだった。

先程まで仲間意識が芽生え始めていたような雰囲気を漂わせていた

パーティーであったが、ほんの一言二言でいつも通りに戻ってしまう。
それが、このパーティーの良いところなのかもしれない。

「ぐっ・・・カミュ・・・次の鍛練の時は憶えていろよ・・・」

「・・・俺よりもアンタの方が忘れているんじゃないのか・・・？」

「・・・・・ふふふっ・・・・・カミュ・・・静かにメルエを下せ・・・」

カミュの口端がいつもの様に上がり始める。
リーシャをからかっていることは明らかだ。
それは、傍で見ているサラにも、当事者であるリーシャにも解るものだった。
故に、尚更リーシャの頭に血が上っていっているのだろう。

「リ、リーシャさん！　も、もう歩きましょう。　メルエをゆっくり休ませるためにも、早く町に向かわないといけません。」

サラの一理も二理もある言葉に、しぶしぶリーシャは手に持つ＞鋼の剣＜を鞘に納めた。
そのリーシャの姿に『ほっ』と胸を撫で下ろしたサラが先頭に立ち、再び一行は西に向かって歩を進めた。

「この村か・・・？」

先頭を歩くリーシャが、その佇まいを呆然と見上げ声を発した。
サラも同じ感想だったらしく、ただただ、眼前に控える村を眺めていた。

一行がカミュの持つ地図の通りに歩き、その地図に名前だけが記載されている村に辿り着いたのは、東から上った太陽が、西に半分ほど沈み始めたころだった。
その間に何度か戦闘を行ったが、メルエを背負うカミュが参加することは一度もなかった。
それだけ、リーシャにしても、サラにしても戦闘レベルが上がっている証拠だろう。

ただ、カミュの参戦しない闘いでは、必然的にサラの魔法使用頻度が上がってしまうため、村に辿り着く頃には、サラの魔法力は枯渇に近い状態になっていた。
そんなサラをリーシャが支え、未だに静かな寝息を立てるメルエをカミュが背負った状態で辿り着いた村は、一行の疲れを倍増させるような佇まいだった。

「・・・なんなんだ・・・この村は・・？」

再度口を出たリーシャの疑問は当然であろう。
その村は、外界との隔たりを表す柵こそあるが、人の営みの気配など一切ないのだ。
村の入口に立つ門を起点に続く柵にも、その門にも分厚い埃や泥がこびり付き、もう数年以上も人の出入りがないのではないかと疑いたくなるような物だった。

「・・・とにかく中に入る。　話はそれからだ。」

「あ、ああ」

「そ、そうですね。」

カミュの言葉に一行は通常は中からしか開けることがない門を押し

あける。
城下町の入口にそびえる門でも、城へと続く城門でもない、普通の町や村の門は通常外からでも人が押しあけることは可能なのである。

村を見た時は、流石のカミュも『廃墟か?』と疑いたくなるようなものであったが、門をくぐり、中に入るとそんな疑問が生易しいものだったことに気が付くことになる。
門をくぐった三人はその光景に言葉を失った。

「・・・・なんだ・・・これは・・・・・?」

その光景を目の当たりにし、カミュが言葉を溢す。
それは、通常では考えられないもの。

「・・・あれは・・・銅像なのか・・・・・?」

「・・・そんな・・・これ程多くの銅像を誰が?」

リーシャやサラが発した内容は、その村の中に人の姿をした彫像がいたるところに立っていることだった。
この村は、＞カザーブ＜や＞レーベ＜よりも大きな村である。
その敷地、建物の具合などを見ても、生活水準が前述の二つの村よりも高いことは明白である。

しかし、その村で生活をしているのは、人の姿形を象った彫像なの

である。
その彫像の形は様々で、村の中を歩いているような恰好や、しゃがみ込んで何かの作業をしている様なもの、少し村の奥に向かって歩けば、店のカウンターに立って客と思しき彫像の相手をしているものまである。

「・・・とりあえず、休めるところを探す。」

リーシャとサラの混乱具合を余所に、カミュが村の奥へと進んでいく。
メルエを背負うカミュが歩き出したことから、周囲の異様な光景に戸惑っていたリーシャとサラも、お互いの顔を見合せながらも後に続いた。

周囲に立ち並ぶ人型をした彫像を傍目にしながら進んでいたカミュであったが、ふと近くに立つ彫像の傍を通る時に珍しく目を見開き、その彫像に触れた。

「・・・・・生きている・・・・・」

「 な、なにっ!!??? 」

ぼそりと呟いたカミュの言葉に、すぐ後ろでメルエの様子を確認しながら歩いていたリーシャが驚愕の声を上げる。
その叫びに驚いたサラが何事かとリーシャの傍に寄って来た。

「ど、どういうことだ、カミュ！」

「ど、どうしたのですか？」

「・・・これは、彫像でも銅像でもない。『人』だ。」

カミュが口にしたもの。
それは、今この村に立ち並ぶものが生きた人間という驚きの事実。
カミュが手を触れたそれは、体温とまでは呼べないまでも『人』の温もりを宿していた。
更には、かすかではあるが呼吸の様な息遣いを感じる。
時がとまったように、そして身体が固まったように動かないが、それは生きている『人』であったのだ。
サラは、その驚愕の事実に言葉を失った。

「『人』だと！？　どういうことだ！　何故、『人』がこのような姿になっている！」

「・・・はぁ・・・アンタと共にアリアハンから出てきた俺にそれが解る訳がないだろう？」

余りの出来事に、若干混乱気味のリーシャは、その理由をカミュに

詰め寄るが、カミュの言うとおり、リーシャが解らないことをカミュが全て知っているという訳ではない。

「理由は解らないが、ここにある人型をしたものは全て、この村の住人だった者達だろう。　何らかの理由で時が止まっているのか、もしくは固まってしまったのか・・・とりあえず、まだ生きていることには違いない。」

「　カ、カミュ！　もしや、＞シャンパーニの塔＜でお前がサラに使った魔法の影響がこの村にまであったんじゃないのか！？　」

「・・・はぁ・・・アンタは本当に馬鹿なのか・・・？」

勢いよく振り向いたリーシャの発言に、メルエを背負ったままのカミュは盛大に溜息を吐く。　リーシャの言っていることは、誰が聞いてもおかしいことが理解できる。　しかし、リーシャも混乱しているのだ。

「・・・＞アストロン＜に離れた所にいる人間まで巻き込む程の効果はない。　それに、アンタもそこの僧侶が元に戻るのを見ていただろう？」

「そ、それはそうだが・・・」

「・・・何もかもを俺の仕業にしたくなるのも解らないでもないが、少しはその頭で考えてくれ・・・」

「　そ、そんなことはない！　い、いや、すまなかった・・・」

カミュのどこか諦めたような溜息は、リーシャの心に刺さった。
リーシャにも何故だかわからないが、カミュのその自虐的な物言いは哀しく感じたのだ。
混乱していたとは言え、自分の発言をカミュにそう解釈されてしまったということが・・・

「・・・もしかして・・・」

そんなリーシャとカミュのやり取りを耳に入れることなく、今まで何かを考え込んでいたサラが不意に口を開いた。
何か思い当たることがあったような口ぶりに、カミュとリーシャの顔が揃ってサラの方へと向けられる。

「サラ、何か知っているのか？」

「あっ、は、はい。　本当かどうかは解りませんが、＞カザーブ＜で食事をした場所にいた若い方達が話していた内容にそのようなことがあったような気が・・・」

自分の頭の中の引き出しを順に開けていくように考えを巡らすサラに、掴みかからん程の勢いでリーシャは先を促した。

「た、確か・・・どこかの村では、『エルフ』の怒りに触れ、村中の人間が眠らされてしまった・・・というような内容だったかと・・・」

「眠らされた!?　こ、ここにある彫像は、眠っているだけの人間だというのか!?」

サラは＞カザーブ＜の酒場で話をしていた若いカップルの話を思い出していたのだ。
どこかの村で『エルフ』という他種族の怒りを買い、その村の住人全てが永久に覚めることのない眠りに落とされてしまったとい話。
それは、今、その姿を目の当たりにしているリーシャにも俄かには信じがたいものだった。

「・・・なるほどな・・・・『エルフ』独自の道具か魔法でこうなったという訳か・・・・」

「その通りでございます。」

「「　！！　」」

サラの話にカミュが独自の解釈を入れた言葉に、予想外の方向から返答が返ってきた。
その突然の来訪者にリーシャとサラは驚いてその方向を振り返るが、メルエを背負うカミュだけは解っていたかのように平然とその声の主を見ていた。

「この村への旅人など十数年ぶりです。　ようこそ、＞ノアニール＜の村へ。」

カミュ一行に歓迎の挨拶を述べるその人物は、髪の毛や下に長く延びる髭も真っ白に染めた老人であった。
近付いてくる老人に警戒を向けるリーシャであったが、老人と相対するカミュが身動き一つしないことに気が付き、その警戒を緩める。

「・・・・・貴方は・・・・・？」

「はい。　私はこの村で暮らす者です。　こんな所で立ち話もなんですから、私の家へどうぞ。」

「　この村の住人だというのか！？　では、何なのだ、この光景は！？　」

「リ、リーシャさん。　話はこの方のご自宅で聞きましょう。　まずは身体を少しでも休めないと・・・・」

彫像のように『人』が眠る村の住人であると言う老人の提案を無視して詰め寄るリーシャにサラが掛けた言葉は切実なものであった。

メルエに話したように、サラにはカミュやメルエよりも若干ではあるが魔法力の余裕があった。　しかし、ここまでの道中での戦闘による呪文詠唱により、その蓄えも尽き、更には未だに使いこなしているとは言い難い＞鉄の槍＜での戦闘で心身ともに疲れ切っていたのだ。

やつれた表情を見せるサラの提案に、リーシャも頷く他なかった。
リーシャがカミュを見、そして目が合ったカミュが頷いたことによって、一行は＞ノアニール＜の住人と名乗る老人に導かれて一軒の家に入っていく。
その家は、周囲の家とは違い、生活感に満ちていた。

老人の後を、メルエを背負ったカミュ、サラ、リーシャの順に戸をくぐっていく。
家の中は、小さいながらも整理されており、暖炉に点る火が部屋の空気を暖かな物にしていた。

「狭い家ですが、そちらに座りなされ。」

「・・・・・」

老人に勧められるまま、一行は暖炉の近くに座る。
メルエは老人が指差す椅子を繋げ、身体を横に寝かせた。
しばらくすると、奥に消えた老人が手に湯気の立つカップを三つ持って出てくる。

「さぁさぁ、まずはこれでも飲んで身体を温めなされ。　随分身体が冷えているでしょう？」

にこやかな笑みを浮かべながらカップを差し出す老人の姿は、本当に久しぶりな旅人の到来を歓迎しているようだった。
最初は警戒心を持って対していたリーシャもその警戒感を緩める。
サラに至っては、ようやく腰を下ろせる場所を得て、一気に脱力感に襲われていた。

「・・・それで、私達に話とは・・・」

しかし、一行の中でカミュだけは未だにこの老人に対して含む所があるようだった。
口調はいつものように仮面を被ったカミュのものではあったが、その表情は冷たい無表情。
相手が何を言い出すのか半ば察しているような態度であった。

「・・・そうですな・・・どこから話せばいいのか・・・・」

「・・・それ程の話なのですか・・・？」

老人の呟きに真っ先に答えたのはサラ。
椅子に腰かけ、老人の差し出した飲み物を口に含みながらも老人の話を聞いていた。

「・・・ええ。　これは、私の息子と、その恋人に関する話なのです。」

「・・・恋人・・・？」

老人はぽつりぽつりと過去を話し出す。
そこから紡ぎだされる話は、サラが以前に読んだことのあるような物語。
一人の青年と、一人の女性が生み出す哀しい人生の物語。

「・・・そんなことが・・・」

「・・・はい。　お恥ずかしい話ですが、今、この村の惨状は全て私の責任なのです。　私があの子たちを認め、そして祝福していれば・・・」

老人の話が終結を迎える頃には、老人が持ってきた飲み物も全て冷え切り、小さな部屋を満たす空気は重く、暗いものになっていた。
サラの呟きに対しての老人の答えは、『全ての責任は自分にある』という、リーシャやサラにとって何ともやりきれないものであった。
しかし、カミュの表情は、先程よりも更に冷たいものに変わっていた。

「・・・それで・・・？」

その心情は、満を持して口を開いたカミュの言葉に表れていた。
ここまでの老人の話に何の感情も湧かなかったような口調。
まるで、『自分には全く関係のないことだ』とでも言うような態度。

その言葉にサラは思わずカミュの顔を振り返ってしまった。

「うむ。　旅の方にこのようなことをお頼みすることは筋違いなのは解ってはいますが、どうか、＞妖精の里＜に住むエルフの女王に『夢見るルビー』を探して返してやってくだされ。　そうしなければこの村にかけられた呪いが解けませぬのです。」

「・・・・それをなぜ私達に・・・・・・」

老人が頼み事を口にしても、カミュの姿は変わらないものだった。冷たい瞳、そして口調も仮面をかぶっているが、底冷えするような冷たいもの。
サラはただただカミュの表情を見つめていることしかできなかった。

「見たところ、貴方方は旅慣れたご様子・・・」

「・・・私以外はすべて女性。　しかも、一人は年端もいかぬ幼子だが・・・？」

カミュの疑問に対する老人の答えにも、カミュは冷たく答えるのだった。
しかし、そんなカミュの冷たさにも、当の老人は怯む様子もない。

「貴方方はご自分達では気が付いておられませぬか。　貴方方が纏う雰囲気が物語っております。　この時代にこの村に足を運ぶ者などおりません。　この村はどこかへの通過点でもないロマリア大陸最北の場所。　＞カザーブ＜からの山道を通ってここに来られたという事実だけでも十分それは証明されております。」

「・・・・・」

老人が言うように、基本的に＞ノアニール＜に特別な用事がない限り、この場所に人は渡ってはこない。カミュ達にしても、山中でのアクシデントがなければ、この村を訪れることなどなかったであろう。

「おそらくあの子が向かった先など、西にある洞窟ぐらいしかありませんでしょう。」

「・・・貴方が向かえばよろしいのでは・・・？」

「西の洞窟には、魔物が住んでおります。　私の様な老人ではとてもではありませんが、生きて帰ってくることなどできませんでしょう。」

その老人の言葉にサラは息を飲んだ。

『初めから行き先が解っていたのならば、何故こうなるまで放置していたのか？』

そんな疑問がサラの頭の中に渦巻く。
しかも、それを何の関連性もない自分達に頼む。
それがどれほど無責任なことなのかをこの老人は気付いているのだろうか？

「貴方達は装備もしっかりと整えなさっておる。　ロマリアの騎士様なのではないでしょうか？」

カミュ、リーシャの身なり、そしてサラの僧侶とはっきり分かる服装を見て、老人は再度カミュに疑問を投げかけて来た。
その質問に何も答えようとはしないカミュの後ろから信じられない横やりが入った。

「ロマリア騎士と一緒にしないで頂こう。　私達はアリアハンから魔王討伐に出た者だ。」

「　リ、リーシャさん！　」

「・・・・・この馬鹿が・・・・・・」

アリアハン宮廷騎士としての誇りなのか、それともカミュが言った

ようにただの馬鹿なのか、名乗りを上げてしまったのは、パーティーが誇る剣の使い手だった。

「な、なんと！　では、貴方様は『勇者』様でございますか？　これはとんだ失礼を。」

「・・・ちっ！」

リーシャの答えに驚きから目を見開き謝罪をする老人に対して、リーシャによって仮面を破壊されたカミュは盛大な舌打ちを行う。

「それでは、話がお早い。　勇者様、是非、この村をお救いくだされ。」

「・・・私達は先を急ぐ身ですので・・・」

「な、なんと！　勇者様はこの村を見捨てられるということですか！？　この世界に住む『人』に希望と平穏をもたらすのが『勇者』としての責務のはず。　それを放棄するのですか！？」

「お、おい・・・ご老体・・・」

先程とは打って変わった剣幕になった老人に若干気圧されながら、ここにきてやっと自分の失言に気がついたリーシャは老人を制するため声をかけようとする。
しかし、一度火のついた老人の感情を消すことはできなかった。

「『勇者』なれば、この村を救うため、恐ろしき『エルフ』の怒りを鎮めてこられるのが当然ではないのか!?　魔王を倒して救われる世界に、この村の住人は不必要だとでもおっしゃるのか!?　そなたも『勇者』を名乗るのであれば、全ての『人』を救うためにその身を捧げるのが使命であろう!?」

「・・・そ、そんな・・・」

もはや激昂に近い程の老人の剣幕。
そしてその物言いにサラは、口元を押さえ、俯いてしまう。
リーシャにしても、自分の失態が招いたこととは言え、老人の物言いに良い感情を抱いていないことはその表情から理解できる。
カミュに至っては尚更であろう。
しかし・・・・

「・・・わかりました。　＞妖精の里＜には明日にでも向かいましょう。　『エルフ』側の話も聞いてみないことには、何ともお答えはできませんが、この村の呪いを解くように最善を尽くしましょう・・・」

老人の要望の一切を全て引き受けるようなカミュの言葉。
リーシャとサラはそんなカミュの顔を思わず振り返ってしまった。
そこには、最近自分達に見せることが少なくなってきた能面のような無表情を張り付けたカミュの姿があった。

「そ、そうですか。　それを聞いて安心いたしました。　こちらこそ出過ぎたことを言ってしまい申し訳ありませんでした。」

「・・・カミュ・・・」

カミュの答えに満足したのか、老人は先程まで吊りあがっていた眉と瞳を下げ、口調を治した後、カミュに向かって一つ頭を下げた。

通常、ロマリアとアリアハンという違いはあれど、リーシャに至っては一村民が声をかけること等できようはずがない貴族なのだ。
しかし、今回の名乗りに『宮廷騎士』の言葉は出ていない。
オルテガの死の以前は、『魔王討伐』を謳って旅立った者達が数多くいた。
魔王という最悪の根源である者に挑もうとするものは、皆等しく『勇者』だったのだ。

カミュが先日リーシャ達に見せた＞アストロン＜のような英雄独自の魔法の存在などは平民が知るはずもない。　いや、リーシャの様な貴族とて、その存在は都合の良い伝承とさえ思っているのだ。

「この村は、皆等しく眠っております。　宿屋などには空き部屋が

たくさんありましょう。　少し埃を被っているかもしれませんが、眠ることはできるかと思います。　どうぞお好きにお使いなされ。
　食糧は、私が細々と作っている野菜などがありますので、それを持って行っていただければよろしかろう。」

老人の物言いへのショックから立ち直れていないサラや、自分の胸に渦巻く感情を抑えることに尽力しているリーシャを余所に、老人は今夜の一行の宿についての話を進めていく。

「・・・・・・うぅぅん・・・・・・・」

そんな中、先程の老人の怒鳴り声に目が覚めてしまったのか、メルエが目を擦りながら身を起こした。
周囲の状況について行っていないため、何かを探すように周囲を見渡し、見つけた＞とんがり帽子＜を被った後、リーシャの足元へと移動してくる。

「メルエ、起きたのか・・・行こう。　今夜はベッドの上で眠ることができそうだ。」

再度奥に消えていった老人が両手に抱えながら持ってきた野菜と少量の肉を受け取り、リーシャはメルエを促し、外へと歩いて行く。
その後ろを俯きながら、力ない足取りでサラが続いて行く。

「よろしく頼みましたぞ、『勇者』様。」

「・・・・・・」

先程とは全く違うにこやかな笑顔を向けてカミュに念を押す老人に、軽く会釈をしてカミュも外へと出て行った。

宿屋は老人の言う通り、彫像のように眠りに付く客がいない部屋が三部屋空いていた。

一室をカミュ、そしてもう一室をサラ、最後の一室をリーシャとメルエで分け、休むことになった。

いつもとは違い、サラ自ら別室で一人になることをリーシャに頼み

込んできたことから、何か思うことがあったのだろうと考えたリーシャは首を縦に振った。

埃の被った浴場を洗い、湯を張って、順番に入る。

リーシャが厨房を借りて作った料理を食べる頃には、再びメルエに睡魔が襲ってきていた。

フォーク片手にこくりこくりと舟を漕ぐメルエに苦笑しながら、リーシャが部屋へと運び、残った食器類の片付け等は、サラとカミュが行う。

メルエを部屋に運び、ベッドに横たえたリーシャは、窓から差し込んでくる月明かりに照らし出されるメルエの明るい茶の髪を梳きながら考えていた。

「・・・メルエ・・・お前が一番アイツを解ってやれるのかもしれないな・・・」

サラは今頃、一人で考え込んでいるだろう。

＞シャンパーニの塔＜での出来事、そしてこの村の老人の話につい

て。
彼女は真面目すぎるのだろう。
何事も右から左へと流すことが出来ない。
故に、『生きる権利を有する者は＞人＜だけなのか？』とその胸を痛めているに違いない。

リーシャがそう考えるのにも訳があった。
それが、先程の老人の物言いだ。
本来それはカミュに向けられたものであって、決してサラやリーシャが思い悩むことではない。
しかし、今のサラには、それが身勝手なものに映ったのかもしれない。

そう。
『今の』なのだ。
アリアハンを出た直後のサラであれば、もしかすると老人と同じ考えを持っていたかもしれない。　いや、老人と共にカミュを糾弾していただろう。

しかし、今日のサラはそれをしなかった。
この旅に出て、カミュが歩むべき『魔王討伐』へと続く道の険しさを知り、そして僅(わず)かではあるが、カミュが抱える苦悩の片鱗を見て、自分達が出来ないことの全てを『勇者』に背負わすことへの疑問が生まれてきているのだろう。
それが、自覚しているか否かにかかわらず・・・・

それは、リーシャとて同じである。
あの老人の発言は、カミュを一人の人間としては見ていなかった。
例え『勇者』と呼ばれていようと、カミュも命ある『人』であることに間違いはない。

『人』である以上、傷つけば痛みを感じ、それが酷ければ命を落とすこともあるのだ。
しかし、老人の言葉の中にそれを理解している節はどこにもなかった。
それに対し、リーシャは怒りを覚えたのだが、振り返ると、『自分も同じではなかったか？』という恐怖も湧きあがってくるのだ。

「・・・・・うぅぅ・・・・・」

「　！！　」

月を見上げながら考えに耽っていたリーシャの手元で、すすり泣くような声が聞こえる。
ふと手元に目を落とすと、メルエの目から一筋の涙がベッドへと流れていた。

リーシャは、その雫を指で拭き、優しくメルエの頭を撫で続ける。
この宿屋で皆それぞれが悩み、考え、そして涙している中、この少女の涙だけは悲しみに彩られたものでないようにと祈りながら・・・・

ノアニールの村？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回もまた長くなってしまいました。

次は『妖精の里』です。

ついにエルフ登場です！

エルフの隠れ里？（前書き）

たくさんのご感想をありがとうございます。
いつも励みにさせていただいております。

今回はとても長いです・・・
完全に今までで最長となります。
分けようかとも思ったのですが・・・長すぎて読み辛かったとしたら申し訳ございません。

「カミュ！！　起きているか！？」

辺りも薄暗く、まだ日も昇りきっていない明け方に、カミュは怒鳴り声と、中の状況も確認しないまま突入してくるその声の主に叩き起こされることになる。
気配すら感じる余裕も与えられずに、些か不機嫌になりながらカミュは身を起こした。

「・・・・何の用だ・・・・？」

「起きたか？　まあいい。お前の衣服を全て出せ！」

「・・・・は？　追い剥ぎか、アンタは？」

入ってきて早々のリーシャの物言いに、状況を掴みきれないカミュはベッドに半身を起したまま呆然と答えるが、当のリーシャはそんなカミュの返答に不服なようだった。

「何を言っている？　洗うんだ。　お前のマントや衣服もアリアハンを出てからそのままだろう？」

「・・・洗う・・・？　・・・誰がだ・・・？」

「　決まっているだろ！　私がだ！　」

不服そうにカミュへと口を開いたリーシャの言葉に更にカミュの頭は混乱してくる。
リーシャの申し出は衣服の洗濯だというのだ。

「・・・は？・・・アンタが洗濯するのか・・・？」

「　だから、そうだと言っているだろう！？　今日は＞妖精（エルフ）の里＜に行くのだろう。　時間的に考えて里に向かうだけならば昼近くに出てもいいはずだ。　それなら皆の衣服を洗濯し、干した所でこの天気ならば昼前には乾くだろう。」

「・・・・・・」

カミュもリーシャの言う通り、今日は＞妖精（エルフ）の里＜に行くだけで、もう一度この村に帰って来るつもりだった。

だが、そのことをリーシャに話した覚えもない。
何よりも、出発する時間も計算して、全員の衣服を洗濯するという提案をするリーシャにカミュは珍しく口をポカンと開けたまま、提案主であるリーシャを見つめていた。

「な、なんだ？　は、早く衣服を渡せ！　早く洗ってしまわなければ、昼前に乾かなくなるぞ！」

「・・・あ、ああ。　い、いや、ちょっと待て・・・衣服を洗濯している間、俺は何を着ていればいいんだ？」

カミュの表情を見ていて、自分が言ったことが何か恥ずかしいことの様に感じたリーシャは、カミュの衣服を強引に脱がすような勢いで迫っていく。
そんなリーシャの気迫に押されるように、首を縦に振ったカミュだが、何かに気がついたように疑問を投げかけた。

「ん？　ああ、別に裸で昼まではベッドで眠っていてもいいんだぞ。お前も疲れは溜まっているはずだからな。」

「・・・はぁ・・・アンタも裸で洗濯をするつもりなのか・・・？」

「　ば、馬鹿を言うな！　」

「村の住人は皆眠りについているんだ。　誰も見る者はいないのだから、構わないだろう？」

カミュの問いかけに厭らしい笑みを浮かべ、言葉を返すリーシャ。
それは、言葉こそカミュをからかっているようだったが、内情はカミュの身を心配するものも含まれていた。
しかし、そんなリーシャのちょっとしたからかいは、瞬時に口端を上げたカミュの言葉で我が身に倍返しで返って来ることになる。

「　そんなことができるか！　ふぅ・・・部屋の引き出しの中に、宿屋が用意している部屋着が仕舞ってある。　洗濯をしている間はそれを着ていればいいだろう。　ほら、さっさと脱げ！　」

「・・・くっくっ・・・わかった。　脱いで下へ持って行く。」

カミュに対し声を荒げるリーシャの顔は赤かった。
それは、怒りに血が上っているからなのか、羞恥に顔を染めているからなのか・・・
何れにしろ、珍しいカミュの忍ぶような笑い声に驚いたリーシャは、しばらく呆然とした後、慌てたように部屋を出て行った。

リーシャが出て行った後、カミュは着ている衣服を脱ぎ、部屋にある部屋着に着替え、壁に掛けてあったマント等も抱えて、階下へと降りて行った。

下に付くと、十数年間眠りについた村に似つかわしくない子供のはしゃぎ声が聞こえてくる。
言わずと知れたメルエの声だ。

カミュと同じように部屋着に着替えているリーシャとメルエ、そしてサラまでもが、一つずつ桶を前にして衣服を洗っていた。

「ほら、メルエ、もう少し力を入れないと汚れは落ちないぞ。」

「ふふふっ。　メルエ、泡が顔に付いていますよ。　ほら。」

「・・・・・」

カミュは、余りにも微笑ましく、自然なその光景に失念していたが、メルエが声を上げて笑うなど、未だ見たことはなかった。
そのメルエの笑顔は、傍にいるリーシャとサラの笑顔をより濃いものにしていく。

「・・・・・カミュ・・・・・・？」

そんな家族の一コマのような光景にしばし見入っていたカミュの存在に気がついたメルエが振り向き、手に泡を大量に付けながらカミュの足元へと歩いてくる。

「あ、ああ、おはよう、メルエ。　衣服を持ってきた。」

「・・・・ん・・・・・」

カミュの言葉に、メルエはカミュの洗濯物を受け取るようにその小さな手を前に出した。

「い、いや、俺も自分で洗うさ。」

「・・・・・・ん！・・・・・・・」

メルエの手に戸惑い、それを断るカミュではあったが、手と顔に泡をつけたメルエが珍しい程強硬に再度手を突き出す姿に、しぶしぶ洗濯物をメルエへと渡す。

カミュの洗濯物を受け取ったメルエは、花咲くような笑顔を向けた後、桶の方へと戻っていく。　そんなメルエの姿に自然とカミュの口元にも優しい笑みが浮かんでいた。
メルエの行動を目で追っていたリーシャとサラはカミュの表情の変化に目を見開くが、二人に見られていたことに気が付き、再び表情を消すカミュに、笑いがこみ上げてくる。

メルエは、今、三人で行っている洗濯が楽しかった。
洗濯など、一時期は毎日のようにしていた。
いや、させられていた。
しかし、その時は手に付く泡も、朝の冷たい水も大嫌いだった。

だが、今は泡も水も、とても素敵な物に感じている。
隣で自分の手元を見ながら一緒に洗ってくれるリーシャがいて、反対側で微笑みながら自分の衣服を洗っているサラがいる。
そんな洗濯が心から楽しかった。
だから、カミュの洗濯物も受け取った。
メルエは、まだこの時間を終わらせたくなかったのだ。

「ほら、メルエ。　メルエはカミュのマントを洗ってやれ、それ以外はこっちに渡せ。」

「・・・・・・・」

洗っている桶の中に次々と洗濯物を入れられることはあっても、桶から洗濯物を抜かれることなど経験したことのなかったメルエは、不思議そうにリーシャを見上げるが、そのリーシャの表情が優しい

笑みであることを確認すると、笑顔を作ってこくりと頷いた。

ただ、自分の洗濯物を取り上げられたカミュは、三人が洗い終わるまで、後ろで三人の姿を見守るしかなかった。

「カミュ、一つ聞いても良いか？」

洗濯物を全員で物干し紐に干した後、リーシャの作った朝食を食堂で食べている時に、メルエの口元を拭っていたリーシャがカミュへと問いかけを発した。

「・・・なんだ・・・？」

「＞妖精（エルフ）の里＜へ行ってどうするつもりなんだ？　あの老人の話を聞く限り、簡単に許されるような話ではないだろう？」

「・・・そうですよね・・・」

リーシャの疑問は当然の疑問。
昨日の老人の話を聞く限り、エルフの怒りは相当なものであることが分かる。
しかも、それも老人側の言い分でもなのだ・・・
それがエルフ側の言い分ということになると、話は昨日以上のものになる可能性が高い。
リーシャもサラもそれが懸念材料となっている。

「・・・だろうな・・・おそらくあの老人も何度も＞妖精(エルフ)の里＜へは足を運んだのだろう。　だが、会ってももらえてはいないのだろう。　それ程までにエルフの怒りは凄まじい。」

「・・・・でしたら・・・・」

「た、戦うのか・・・？」

カミュの言葉に反応したリーシャの言葉に、カミュは盛大な溜息をついた。
サラも自分の言葉に続いたリーシャの言葉に驚いて振り返っている。

「・・・はぁ・・・アンタは本当に馬鹿なのか？　いや、何度も聞

いているから、本当に馬鹿なんだろうな・・・」

「 な、なんだと！ 」

「今の俺達が、どう足掻いても＞エルフ＜という種族に対抗はできない。 それが解らないアンタでもないだろう？」

「・・・そ、それはそうだが・・・だとすればどうするつもりなんだ？」

＞エルフ＜の内蔵している魔力は、人外のものである。
それは、カミュ一行がここまでに対してきた魔物では比べ物にならない程のもの。
カミュ一行の中にも魔法の才能を開花させ始めている少女はいる。
その少女の才能は成人の魔法使いよりも数段優れているかもしれない。
しかし、それでも『人』の枠内の話なのだ。

「・・・話してみるしかないだろう・・・」

「 話だと！？ 」

「 そ、そんな・・・カミュ様は＞エルフ＜に話などが通じると思

っていらっしゃるのですか！？」

人外の能力（ちから）を有しているが故に、＞エルフ＜は太古より『人』から恐怖の対象として見られてきた。
それこそ、『人』にとっての魔物と同類の様にだ・・・
サラのカミュへの疑問はそこから来ている。

『人』は聖霊ルビスの子である。

という教会が広める教えに基づいた疑問。
聖霊ルビスの加護があるのは『人』である者だけというのが、教会が広く世界に発信しているものである。
それは、逆を解せば、『人』以外の生物には聖霊ルビスの加護は届かず、生きる権利すら認められていないということ。
如何に言語を有し、文化を築いていたとしても、話すら通じぬ低俗な存在として評価されているのだ。　余談になるが、それは聖霊ルビス以外を崇める異教徒も同じとなる。

「・・・あの老人の話を聞けば、＞エルフ＜も俺達の言葉は通じているはずだ。　言語が同じであれば、話はできるだろう。」

「・・・それでも・・・」

「・・・ふぅ・・・アンタの様な教会の人間が考えることは大体解

る。　しかし、俺にとっては、人を快楽のために殺す盗賊や、自分が国で一番偉いのだと踏ん反り返る国王などよりも＞エルフ＜の方が遥かに話は通じるはずだと思っている。」

「・・・カミュ・・・」

一番偉いと踏ん反り返る国王とはアリアハン国王のことなのか？
その疑問が浮かぶリーシャであったが、カミュの考え方をこれまで見てきた分、ここで激昂することはなかった。
それよりも、カミュが魔物だけではなく、＞エルフ＜までも『人』と区別することがないことに純粋に驚き、そしてどこか納得していたのだ。

基本的に、カミュは他人を差別することがない。
それは決して良い意味ではない。
自分以外のものは総じて他者なのだ。
誰をとっても、それが『人』だろうが、『魔物』だろうが、『エルフ』だろうが変わらない。
カミュの心の中の線引きは解らないが、皆興味のない他者という括りなのかもしれない。

リーシャはただ、『自分も、自分達もカミュにとって、初めて会う＞エルフ＜と変わらない位置にいるのだろうか？』という疑問だけが心に残っていた。

「この村から＞妖精（エルフ）の里＜までは、そう掛からないはずだが、昼過ぎに出るのであれば、付く頃に夜になる可能性もある。　今の内に

身体を休めておけ。」

カミュのその言葉を最後に、一行の朝食は終わりを告げる。
そのままカミュは二階にある自分の部屋へと上がっていき、残ったリーシャ達も食器の片付けが終わった後、各自の部屋で身体を休めることにした。

一行が干してあった衣服に着替え、＞ノアニール＜の村を出たのは、リーシャの目測通り、太陽が頂上を過ぎたころだった。

村を出た一行はそのまま真っ直ぐ西へと歩き出す。
汗の臭いが染み付いていた衣服は、太陽と微かな石鹸の匂いが漂う。
メルエは自分の衣服から漂う匂いと、いつも包まっているカミュのマントの匂いに満面の笑顔を作りながらカミュの後ろを歩いていた。

リーシャやサラがそれぞれの胸の内に＞エルフ＜の存在の大きさを抱えている中、メルエに至っては全く関係のないことだったのであろう。

メルエは教育を受けていない分、カミュと同じように生き物を差別はしない。
簡単に言えば、『好き』か『嫌い』の二種類しかないのだ。

「カミュ、方角はこっちでいいのか？」

後ろからかかるリーシャの声に、先頭を行くカミュは一度振り向くが、答えることなく再び歩き出す。
カミュが迷いなく進むのであれば、それが正しいのだろうというアリアハンを出てからの常識と化した事柄がなければ、カミュの態度にリーシャは腹を立てていたかもしれない。

「メルエ！　あまりはしゃぎ過ぎると転んでしまうぞ！」

「・・・・・・・」

「うふふっ。」

お気に入りの＞とんがり帽子＜もアンの花冠を外してから洗い、アンの花冠の匂いと同様に良い香りに包まれたことがメルエにはとても嬉しかった。
何度も何度も帽子をとっては、花冠を見、そして被り直す。
リーシャの注意にも、笑顔を見せながら頷く様子に、サラは自然と頬が緩んでいった。

そんな和やかで微笑ましい時間も、いつもの様に無粋な乱入客によって壊されてしまう。
先頭を歩くカミュが背中の鞘から〉鋼の剣〈を抜いたのだ。

「リーシャさん！」

「わかっている！　サラ、私の後方へ！　カミュ、メルエを頼んだぞ！」

カミュの剣が抜かれたことにより、サラとリーシャも戦闘態勢に入る。
せっかくの良い気分を邪魔された形となったメルエの機嫌も急降下していく。

剣を構え、カミュが見据える先に、魔物の群れが出現する。
その姿を見たサラが以前見た時と同じように呻き声を上げて口を押さえた。

辺りに瘴気と異臭を放つような腐りきった身体。
瞳は垂れ下がり、涎なのか腐敗した体液なのか区別できないものを口から垂れ流している。

「ウゥゥゥゥゥゥ」

「メルエ！　詠唱の準備をしろ！」

リーシャがメルエに魔法の行使を促す。
だが、メルエの表情は先程まで不機嫌に膨れていた物とは違い、眉はハの字に下がり、瞳は自信なさ気に潤んでいた。

「・・・大丈夫だ・・・もう魔法は使える。　メルエが昨日ぐっすり眠ったのなら大丈夫だ。」

「・・・・・・」

メルエが心配している内容に気がついたカミュが、メルエの肩に手を置き、諭すように語りかける。　メルエはカミュを見上げ、下がっていた眉を上げ、力強く頷いた。

狼と言えない程のスピードでゆっくりゆっくりとカミュ達を取り囲んでいく魔物達。
その数は４体。
以前現れた＞アニマルゾンビ＜に酷似している魔物。
だが、＞アニマルゾンビ＜よりもその身体の腐敗は凄まじく、もはや元の色など想像が出来ないほどの色をしていた。

＞バリィドドッグ＜
アニマルゾンビと同様、狼などの死体が魔王の影響で蘇った魔物である。
アニマルゾンビよりも現世に留まっている期間も長く、その身体の

腐敗は進み、近づくだけでも周囲に腐敗臭が漂い、通常の人間であれば嘔吐を繰り返してしまう程のものであった。
現世に留まる期間が長い分だけ、人の死肉を食らう機会も多く、腐敗臭に加え、凄まじいまでの死臭も纏う魔物である。

「ウォォォォォォオン！！」

カミュ達が戦闘態勢に入り切る前に、一匹の＞バリィドドッグ＜が遠吠えの様な声を上げる。
その遠吠えに、魔法の行使の可能性を感じたカミュは意識をしっかりと保つため、口の中の肉を奥歯で噛み切った。

意識が薄れることはなく、一見何の影響も受けた形跡はなかったが、一瞬パーティー全員の身体が弱く光っていたことからも何らかの魔法を行使されたことは間違いがない。

「・・・気をつけろ。　神経性の魔法ではないようだが、何かしらの魔法を行使している可能性が高い。」

カミュの言葉に頷いたリーシャが、一匹の＞バリィドドッグ＜に狙いを定め、一刀を振るう。
リーシャの剣速はいつもと同じ。
つまり＞アニマルゾンビ＜が行使した＞ボミオス＜ではないことがわかる。

ロマリア大陸に入り、確実に腕を上げているリーシャの一刀は、動

きの緩慢な＞バリィドドッグ＜の身体へ吸い込まれるように入っていく。

腐りきった肉に入って行ったリーシャの剣は一体の＞バリィドドッグ＜の首を斬り落とした。

異臭を放つ体液が零れ落ち、周囲をとてつもなく不快な臭いが漂う。

「・・・・・ギラ・・・・・・」

体液が身体に付着しないように飛び退いたリーシャの帰りを待っていたかのように、メルエの詠唱が完成した。

メルエの右腕から発せられた熱風は、首の落ちた＞バリィドドッグ＜とその後ろに控えていたもう一体を包み込むように炎を生み出した。

「　キャイーーーーーン！　」

首の落ちた一体は、完全に炎に包まれ、その腐敗しきった身体を燃やしていく。

後ろにいたもう一体もまた、周囲を炎に満たされ、逃げ場もなく叫び声を上げながら地獄の業火に包まれていく。

「・・・すごい・・・」

カミュに、再び呪文の詠唱が可能なことを教えられたメルエは自信を持って詠唱を行った。
そのメルエの自信に応えるように、その腕から巻き起こされる炎は、＞シャンパーニの塔＜で使用した時よりも威力を増していたのだ。
そして、いつもの様にその威力に見惚れてしまったサラは、残る魔物の行動を見落としてしまう。
出現した＞バリィドドッグ＜は４体。
そして炎に包まれた物は２体。
ならば、残る魔物の数は２体のはずなのだ。

「サラ！」

「はっ！？」

リーシャの声に我に返ったサラが見た物は、緩慢な動きをしながら自分に牙をむける＞バリィドドッグ＜であった。
リーシャの声が早かったため、今なら、左手に持つ＞青銅の盾＜が間に合う。
頭で考えるよりも早く、サラの左手が上がり、＞バリィドドッグ＜の牙を抑えたかに見えた。

「キャ――――！！」

しかし、サラが完全に防御をしたと思われた＞バリィドドッグ＜の牙が青銅でできている筈の盾を食い破ったのだ。
手に持っていた＞青銅の盾＜を容易く破られたサラの左腕は、牙が突き刺さり、盛大にその生命の源である血液を流し始める。

「ちっ！　＞ルカナン＜か！？」

カミュが舌打ちと共に、サラに襲いかかった＞バリィドドッグ＜を斬り捨てる。
切り捨て際に＞メラ＜を放ち、その斬り口に火球を送り込む。
斬り捨てられ、体内を焼かれた＞バリィドドッグ＜は絶叫を上げながら絶命した。

残る魔物は一体。
再度詠唱しようと手を挙げたメルエを抑え、＞バリィドドッグ＜にリーシャの剣が振るわれる。

「防御力が下げられている！　敵の攻撃は盾で防ごうとするな！」

「わかった！」

魔物へと向かったリーシャに向け、カミュの言葉が飛ぶ。
カミュの方に視線を向けることなく、リーシャは理解したことを示し、迎撃態勢に入っていた＞バリィドドッグ＜の牙をかわし、その

胴体に＞鋼の剣＜を滑り込ませる。
派手に腐敗した体液を飛び散らせ、上半身と下半身を分断させた魔物は、その内臓を引き摺りながら、尚もリーシャへと牙をむける。

「メラ」

大きく開けられた＞バリィドドッグ＜の口の中に、カミュの指先から発せられた火球が吸い込まれていく。
体内へと入って行った火球により、喉を起点に焼かれていく魔物は断末魔の叫びを上げることもできずに地に伏していった。

「サラ！　大丈夫か！？」

魔物の掃討を確認したリーシャがサラへと駆け寄っていく。
＞バリィドドッグ＜の牙が突き刺さっていたサラの左手からは真っ赤な血液が流れ落ちている。　それは、昨日の雨が乾いた大地へと吸収されることなく、血溜まりを作っていた。

「・・・毒は受けていないようだな・・・」

「・・・・・・サラ・・・・・・・痛い・・・・・・・？」

リーシャに続いて到着したカミュの安堵を含ませた言葉に、メルエの心配そうな声。
それは、ここ最近悩みがちであるサラの乾いた心を潤していく。

「だ、大丈夫ですよ、メルエ。　・・・・・ホイミ・・・・・」

痛みに歪んだ顔に、無理に笑顔を作り、サラは回復呪文を詠唱する。
穴が空いたような左手首を淡い緑色の光が修復していく。
一度の詠唱では全てが修復されず、再度サラは＞ホイミ＜を唱えた。
最近では、＞ホイミ＜一回では修復しきれない傷が多く、サラは最下級回復魔法である＞ホイミ＜の限界を感じていた。

「・・・しかし、あの魔物が唱えた魔法は何だ？　前に身体能力が落ちたものと同じか？」

「・・・はぁ・・・俺はアンタに防御力が下げられていることを伝えたはずだが・・・」

「そ、そうだったな！　では、あれは＞ルカニ＜か！？　」

カミュの防御力低下という言葉に、リーシャはここ最近受けていた授業の内容を必死に思いだす。　そして辿り着いた答えを自信を持って答えるが、それはカミュではなく、彼女の講師をしていたアリアハン教会の僧侶によって否定されてしまった。

「いえ。　＞ルカニ＜は単体に効力を発揮する呪文です。　あの魔物が遠吠えをした瞬間、私達全員の身体が光りました。　であれば、おそらくあれは複数を対象とする呪文＞ルカナン＜だと思います。」

「・・・はぁ・・・アンタ、しっかりと教えを受けているのか？」

「　くっ！　少し間違えただけだ！　効果は合っているんだ！　あながち不正解という訳でもないだろ！　」

サラの容赦のない採点。
呆れたようなカミュの呟き。
リーシャは居た堪れない気持を抑えきれず、顔を赤くしながらカミュへと唾を飛ばす。

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

「・・・ん？　ああ、メルエ、よくやった。　また魔法が使えることは解ったか？　」

拳を握り締めながら羞恥に耐えるリーシャに、そこまでの会話を全く無視するように、＞とんがり帽子＜を脱いだメルエがリーシャへと頭を突き出してきた。

もはや、メルエが魔法によって魔物を倒した時の恒例となった儀式。
お褒めの言葉を掛けながら、リーシャが優しく頭を撫でてやると、
メルエは嬉しそうに頬を緩め、目を細めていた。

「さ、さあ、行きましょう。　私の傷ももう大丈夫ですので。」

カミュがリーシャをからかい、リーシャが怒る。
そして、それに割り込むようにメルエが現れ、場が和む。
そんな、このパーティー独特の流れが出来始めていた。
サラはこの空気が好きになりかけている。
そんな空気の中にいる自分も・・・・

それから先、何度か魔物と遭遇しながらも順調に歩を西に進める一行は、日が傾き始め、西日と変わる頃に木が鬱蒼と生い茂る森へと辿り着いた。

「・・・老人の話では、この森の中に＞妖精（エルフ）の隠里＜があるらしい・・・」

「・・・こんな所まで、あの方は一人で来ていたのですか？　・・・・それなら、＞西の洞窟＜と呼ばれる洞窟にだって・・・・」

「・・・いや、それは無理だ、サラ。　洞窟内は逃げ場がない。それに基本的に洞窟内では聖水の効力は届かない。　ここまでなら聖水を大量に自身の身に振りかければ、なんとか来ることもできよう。」

＞ノアニールの村＜を出て、この村まで歩き、そして森の中を通って＞妖精の里＜まで老人が来ていたということに、サラは昨晩から感じていた疑問をつい口に出してしまった。
しかし、それは即座にリーシャによって否定される。
確かにリーシャの言う通りの行動をとれば、太陽の光が届く所であれば魔物を寄せ付けない状況を作り出すことも可能であろう。
それでも、リーシャの言葉を聞いても、サラの表情は晴れなかった。
それがサラの苦悩の深さを如実に表していた。

「・・・あの老人のことはこの際どうでもいい・・・・・・・・行くぞ。」

冷たく言い放ったカミュが先頭に立って森の中に入って行く。

表情が優れないサラも、考えるのを中断し、カミュの後を追って森の中に入って行った。

「・・・あの老人は、エルフに会ってもらう以前に、里に辿り着けてもいないみたいだな・・・」

森に入ってしばらく歩いた時、不意にカミュが口を開いた。
その言葉にリーシャは不思議そうに森の中を見渡すが、特に変わった様子もない。

しかし、森に入ってから、一行は魔物に遭遇はしていない。
いや、魔物の気配すらも感じていないのだ。
このような広い森の中で魔物と遭遇しないことは珍しいというよりも、異常なことなのだ。

「・・・どういうことだ、カミュ？」

リーシャの疑問に振り返ったカミュの顔は呆れ顔だった。
『また、何か変な事を言ってしまったか？』
という不安がリーシャを襲うが静かにカミュは口を開いた。

「・・・アンタは何も感じなかったのか？　そっちの僧侶は気が付いていたみたいだが・・・？」

「なに!?　サラ、何かあったのか!?」

「えっ!?　あ、い、いえ、何か違和感があるだけです。」

そうなのだ。
カミュは、森に入ってから、奇妙な感覚に襲われていた。
一瞬、眩暈のような感覚を覚え、目を瞑った後に開いた瞳に映った森は何か違和感があった。　それは、カミュだけではなく、サラも感じていたのだ。

「・・・おそらく、＞エルフ＜の結界か何かだろう。　里に『人』を近付けない為の処置なのか、魔物が森に入り込まない為の処置なのかは知らないが・・・」

「結界だと!?」

カミュの考えは、あながち的外れとは言えないものだった。
『人』と『エルフ』という異種族は、昔から相容れない者として争いを続けてきていた歴史がある。　しかも、それは大昔の話ではない。

故に、『エルフ』が『人』を敵として認識していてもおかしくはない。
『人』が魔物とエルフを恐れるように、『エルフ』も人と魔物を排他しようとしても何ら不思議なことではないのだ。

「・・・そんな・・・話し合いにも応じようとしないのですか・・・？」

「・・・はぁ・・・そんなことは、アンタのような教会の人間もまた同じだろう・・・」

「　そ、そんなことは!?　」

サラが漏らした感想に、カミュが冷たく呟く内容は、サラにとって許容できないものであった。　しかし、ここまでで『人』の醜い部分を知ってしまったサラにはカミュに強く反論するだけの自信がなくなってきていることもまた事実であった。

「・・・メルエ、どうした・・・？」

俯いてしまったサラを一瞥した後、カミュは、会話に参加せずに一点を凝視しているメルエに気が付いた。
メルエは木の上の方を見上げていたのだ。

「・・・ま・・・まさ・・か・・・・・・また・・・・なのですか・・・？」

カミュの声に顔を上げたサラはメルエを見て、以前の宿営地での出来事を思い出してしまう。
メルエだけが見える住人達。
それがここにもいるのではないかと・・・

「・・・・あれ・・・・・」

「 ん？　ああ。　メルエ、あれは『リス』だ。」

振り返ったメルエは、見上げていた木を指差し、首を傾げる。
そんなメルエの指差す方向を見て、リーシャは微笑みを浮かべながら、メルエが見ていた小動物の名前をメルエに教えた。

メルエは『リス』を見たことがなかったのだろう。
リーシャが紡ぎ出した小動物の名を、何度か反芻した後、嬉しそうに微笑み、再び木の枝の上で木の実をかじるその動物を見上げていた。

「　ふぅ。　驚かせないで下さいよ、メルエ。　」

「なんだ？　サラは幽霊でも見つけたとでも思ったのか？　怖がりだな。」

「　ち、違いますよ！　わ、私は僧侶です。　霊の存在など恐怖の対象ではありません！　」

「ほう・・・そうなのか？」

安堵の溜息を洩らすサラに対して言葉を掛けるリーシャの頬は明らかに緩んでいる。
からかっていることが丸解りだ。
そんなリーシャの心の中が透けて見えたサラは、顔を赤くしながら反論する。
その声は自然と大きくなり、森の中に木霊した。

「・・・・・・あ・・・・・・・」

そんなサラの叫びに驚いてしまった『リス』が木の枝で食べていた木の実を口に頬張り、逃げだしてしまう。
残念そうに肩を落とし、サラに振り返ったメルエの目は鋭く睨みつ

けるものだった。

「あ、あの・・・メルエ？」

「・・・・サラ・・・・・嫌い・・・・・」

「はうっ！」

久しく聞いていなかったメルエの拒絶。
可愛く頬を膨らましながら睨みつける姿は、リーシャにとって微笑ましいものであったが、当のサラにとっては、十分痛いものとなっていた。

「さて、どうしたものか・・・」

そんな一行の和やかムードもカミュの一言で吹っ飛んでしまう。
森に入ったはいいが、正直今のカミュには、この森から里に行くことも出ることも儘ならなかった。

「・・・・・リス・・・・・・」

カミュと同じように途方に暮れていたリーシャとサラであったが、

突如メルエが、先程見ていた小動物を再び見つけて、そちらに駆けだしてしまう。
三人が気付いた時には、メルエが駆けだした後だった。

「お、おい！　メルエ！」

「・・・・まったく・・・・」

メルエを追ってリーシャが駆けだす。
そんな状況に、諦めの溜息を吐いたカミュは、ゆっくりと歩き出した。
取り残されたサラは、自分の身を覆うような不思議な感覚に戸惑いながらも、一度周囲を見渡した後、カミュ達を追って森の奥へと走って行った。

「メルエ！　勝手に走っていっては危ないだろ！」

「・・・・・・・リス・・・・・・・・・」

考えていたよりも速いメルエの足に、四苦八苦しながらやっとその小さな身体を捕まえることに成功したリーシャは、メルエの帽子を取って、軽く拳骨を落とす。

リーシャの拳骨を受け、手を頭にのせたメルエの眉はハの字に下がり、か細い声で言い訳を口にした。

「メルエ・・・メルエが『リス』を初めて見て、嬉しくなるのも解る。　だがな、こんな森の中を一人で走り出してしまったら、迷子になってしまうだろう？　そんな事になってしまったら、私達と二度と会えなくなってしまうかもしれないんだぞ。」

「・・・・・・・・いや・・・・・・・・」

「そうだろ？　私もメルエと会えなくなるのは嫌だ。　だから、一人で勝手にどこかに行ってしまわないでくれ。」

「・・・・・・・・・」

リーシャの真剣な表情。

そして、真剣な訴え。

メルエの未来への道を抉じ開けてくれた人物をこれ程困らせてしま

った。
その事がメルエは非常に悲しかった。
目に涙を溜めながらこくりと頷くメルエに、リーシャは笑顔で頷いた。
お互いを想う二人には周囲に気を払う余裕はなかった。

「・・・・・・すごいな・・・・・・」

故に、その空間の異様さに気が付いたのは後から来たカミュとサラの二人であった。
そこは、カミュですら目を見張る程、異様な光景があった。

「・・・カミュ様・・・これは・・・・・」

木々が奇妙に曲がり、アーチを描いている。
その木々は枯れ果てた物ではなく、青々と葉が茂っており、人工的に無理やり曲げたというよりも、自然にそのような形になったと言われても納得してしまうような代物であった。

両側の木々がアーチを描いた木々のトンネルは、カミュ達を歓迎するかのように、その奥へと誘う。
導かれるように、誘われるように、メルエがその木々のトンネルの中へと足を踏み入れた。

「メ、メルエ！　私の話に納得したのではなかったのか！？」

「・・・・・・メルエ・・・・・・走ってない・・・・・・」

先程自分がメルエにした注意を無視される形となり叫ぶリーシャに、不思議そうに振り返ったメルエが＞とんがり帽子＜のつばを握りながらリーシャへと反論を始める。

そんなメルエに溜息を吐きながらリーシャは何故かカミュへと視線を移す。

リーシャの視線を受け、カミュは一つ頷き、メルエの後に続いて木々のトンネルへと入って行った。その後を、リーシャとサラも続き、先が暗い闇に閉ざされるトンネルの奥へと進んでいくことになる。

「・・・ここが、＞妖精（エルフ）の里＜ですか・・・？」

トンネルを抜けた場所に佇み、サラが呆然とそこから見える景色に

見入っていた。
そこは木々が生い茂り、花が咲き乱れ、心地よい風が吹いている。
馬が近くを通り、その馬を引いているのは、『人』に見えるが、『人』成らざる者。
『人』どころか『魔物』よりも強い魔力を持つ『エルフ』であろう。

「・・・・すみません・・・・・ここは＞妖精（エルフ）の里＜でよろしいでしょうか？」

呆然とするサラを放って、カミュが一人のエルフに話しかけた。
そのエルフは年若く、サラと同年代に見える。

「ええ、ここは＞妖精（エルフ）のかくれ里＜よ。　あっ！？　アナタ方、人間ね！？　人間と話すことなどできません！」

にこやかに振り返り返答したエルフの女性は、カミュの姿を見て、驚愕の表情を浮かべた後、脱兎の如く、里の奥へと逃げて行った。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　カ、カミュ・・・どういうことだ・・・」

「・・・・・・・・・」

凄いスピードで走り去るエルフに驚き、声を上げたリーシャは、追う様に挙げた手のやり場を失くし、手を挙げたまま眉尻を下げ、カミュへと振り返った。
しかし、カミュの表情は濃さを増した無表情が張り付いていた。

「・・・カミュ様・・・」

「・・・とにかく中に進む・・・」

リーシャの表情を見て、不安が広がったサラまでもカミュの方へと視線を向ける。
二人の表情に自然とカミュのマントの裾を握っていたメルエの手の力も強くなる。
カミュは、三人の視線を一身に受け、里の奥へと目を向けながら一言だけ答え、歩を進めた。

「貴方方『人間』には物を売りませんわ。　お引き取りあそばせ。」

里の奥に入ると、一件の店が開いていた。
里の状況を聞こうと、カミュが声をかけた所、身も蓋もない言葉が返ってくる。

「いや、物を欲っしている訳ではないのだ！」

「お引き取りあそばせ・・・」

リーシャが弁明をしようと口を開くが、それに被せるように口を開いたエルフの言葉はまたしても拒絶。
仕方なく、一行は店を離れた。

「ひぃ！　人間ね。　キャ――――！！　攫われてしまうわ！」

店から離れた場所に立っていたエルフの女性に至っては、カミュ達の姿を見るや、叫び声を上げて逃げ去ってしまう。

「・・・どうしてこのような・・・＞エルフ＜を攫うなど・・・・」

「・・・実際にそういうことがあったのだろう。　何もなければこれほど『人』を恐れ、拒絶することはない。」

「・・・そ、そんな・・・」

逃げ去っていくエルフの背中を見つめながら溢したサラの言葉は、カミュによって斬り捨てられた。
今、目の前で起こっている状況がサラにはいまいち掴みきれない。
何故このようなことが起こっているのか。
何故、自分達がこれ程拒絶されなければいけないのか。

いつも一行以外の他人にあまり興味を示さないメルエまでも、どこか怯えたような瞳をカミュに向けていた。

「・・・はぁ・・・相当嫌われているな・・・老人が言っていた女王に会うことなどできるのか・・・？」

「　ど、どうするんだ？　カミュ、このままでは話等、夢のまた夢だぞ。」

嘆息と共に吐き出されたカミュの言葉に、リーシャも同意を表す。
確かに、この里に入ってからの住民の反応を見る限り、とてもではないが友好的とは言い難く、この里の長である女王もまた同じ感情

を『人』に対して持っていることも明白である。

「・・・みんな・・・・・・メルエ・・・・・・嫌い・・・？」

「メルエ・・・・・いいえ、メルエのことが嫌いなのではないのです。　ただ・・・・・」

歯切れの悪いサラの答えに、メルエの首は傾き、救いを求めるようにカミュを見上げる。
メルエの視線が自分から映ったことに気が付いたサラもまた、このパーティーのリーダーであり、この世界の勇者である青年へと視線を移す。
自然と三人全員の視線が再びカミュへと集まって行った。

「・・・ふぅ・・・ここでこうしていても仕方がない。　とりあえずは、女王がいる場所へと移動する。」

「移動と言っても、女王様のいる場所など解るのですか？」

「・・・少しは自分で考えてくれ・・・まずは、ここから見える中で一番大きな建物を目指す。」

全ての疑問を自分に向けてくる仲間達に、若干疲れた顔をしたカミ

ュが、方針を説明し歩き出した。　疑問を投げかけたサラも、気不味い表情を浮かべその後を付いて行く。

「何用か？　ここは我らが女王様がおわす館。　そなた等の様な『人間』が立ち入って良い場所ではない。　お引き取りあれ。」

「・・・・・」

カミュが指差したこの里一番の大きさを誇る建物には、これまた女性のエルフ騎士が門番をしていた。
その姿はどこかリーシャを彷彿とさせるような立ち振る舞いで、カミュのマントの裾を握っていたメルエは、門番とリーシャを交互に見比べていた。

「・・・初めまして。　私は、アリアハンのカミュと申します。
この近くの村、＞ノアニール＜について女王様とお話をさせて頂きたく、お取次ぎをお願いしたいのですが。」

「先程申したはずだ。　そなた等『人間』と話す事など何一つない。
早々に立ち去れ！」

仮面をつけたカミュの言葉にも、冷たく突き放す門番。
話をする以前の問題なのだ。

「・・・はぁ・・・どこにおいても、戦士という職業は脳筋馬鹿ばかりなのか・・・・？」

「・・・カミュ・・・それは私も含まれているのか・・・？」

カミュの小さな小さな呟きは、隣にいるアリアハンからの付き合いになる戦士にだけは聞こえていた。

カミュの物言いには腹が立つ。
この門番が行っていること、言っていることは仕事柄、当然のことでもある。
しかし、リーシャも、この門番の頭の固さには溜息を吐きたくなっていたのだ。
その門番と自分がイコールで結ばれてしまうことに、リーシャは些か落胆していた。

「私達は『人間』ではありますが、女王様をはじめ、＞エルフ＜族

に危害を加える気は全くございません。　何卒、お取次ぎをお願致します。」

「ふん！　そんなことが信じられるとお思いか？　我らがどのような苦しみを味わったかを知っているのならば、そのような言葉が口から出ることなどあり得はしない。」

深々と頭を下げるカミュの嘆願も、この門番には演技にしか見えていなかった。
そして、頭を下げていたカミュも、門番の最後の言葉に、諦めにも似た表情を浮かべて顔を上げることしかできなかった。

「・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・何か・・・・・・・・・ダメ・・・・？」

カミュ、リーシャ、サラの三人が、エルフの長と会うことを半ば諦めかけた時に、今までマントの裾を握りながら、門番を見つめていたメルエが口を開いた。
つい先日、初めての友達を得て、『他人』からの好意という存在を初めて知ったメルエは、他人からの拒絶に関して敏感になっている。
カミュ達一行は、もはやメルエにとって家族の様なもの。
それ以外の『人』からの嫌悪、敵意というものは、その小さな胸を締め付けるようなものだった。

メルエから見れば、『人』も『エルフ』も大した違いなどない。
いや、もしかすると、カミュ達さえ剣を抜かなければ、『魔物』と

て、先程目にした＞リス＜とそう違いがないのかもしれない。

「む！？　幼き者、そうではない。　何もそなたが悪い訳ではないのだ。　う～む。　どう申せばよいか・・・うぅぅ・・・・」

「・・・・・」

そんなメルエの純真な問いに、真剣に考え込んでしまう門番を見て、カミュの口元に変化が表れる。

良くも悪くも真面目なのだ。
『人』を嫌悪してはいるが、それは個人ではないのだ。
メルエという人格を否定している訳ではない。
それでも、『人』を許すことが出来ない。
それが、この門番を悩ませている。

カミュは、何故かこの門番の姿を好ましいと思った。
凝り固まった固い頭の中に自分の感情や考えがあるにもかかわらず、それでも自分の中で新しく考えようとする気持ちがあるこの人物を。
それは、最近少しずつ変化を見せ始めている誰かに似ているからなのかもしれない。

「う～む。　はっ！？　あっ！　か、畏まりました。　・・・・・
女王様がお会いして下さるそうだ。　失礼なきよう気をつけよ。」

「え！？」

「・・・ありがとうございます。」

メルエの問いに尚も頭を捻っていた門番の女性エルフは、突如何かに導かれるように顔を上げ、まるで誰かと会話をしているような仕草をした後、門を開け、カミュ達を中へと促した。

門番の変貌に驚きの声を上げるサラ。
カミュは門番に恭しく頭を下げる。
そして、それを見ていたメルエも、門番に可愛らしく頭を下げる。
メルエの姿に、今まで険しい顔をしていた門番の頬も少し緩んだ。

「・・・少女よ。　一つだけ憶えておいてくれ。　私達は皆、そなたのことを嫌っている訳ではない。　ただ・・・そなたと同じ『人』が犯した行為を忘れる事が出来ないのだ。　できるならば、そなたの様な瞳を我らに向けてくれる『人』が育ってくれることを願っている。」

「・・・・・・」

カミュに続いて門へと入ろうとするメルエに向かって語った門番の言葉は、サラの胸に矢の様に突き刺さり、思わず顔を上げてしまった。

『人』が犯した行為。
それがどれほどの事なのかは解らない。
ただ、＞エルフ＜全体にここまでの感情を持たせてしまう程の事なのは間違いがないだろう。
それ程の事なのにもかかわらず、同じく『人』であるメルエに対し、笑顔を作ることができる彼女にサラは再び悩みだす。

果たして、自分はこのように『魔物』に対し笑顔を向けることができるのだろうか？
親を殺されたということは、とてつもない哀しみであることは間違いがない。
しかし、この里を見た限り、＞エルフ＜達はそれ以上の哀しみを受けた可能性を否定はできない。
サラは、また深い悩みに落ちて行くのだった。

「よくぞここまで辿り着けましたね。貴方方の中には、余程純粋な者がいるのでしょう。ここへの入口に辿り着くことは、通常の『人間』には到底不可能なはずです。」

案内された先の広間に着くと、前方の玉座に一人の女性が座っていた。
歳の頃は解らない。
門番の女性とそう変わらない歳にも見えるし、若干上にも見える。
いや、もしかしたら下なのかもしれない。

＞エルフ＜は人間の寿命とは比べ物にならない程の寿命を持つ。
それは、数百年単位であり、長寿となれば千年を超える者もいるかもしれない。

「・・・初めてお目にかかります。　私はカミュと申します。　女王様に拝謁できる栄誉を賜り、有難き幸せに存じます。」

「・・・知っております。　ふむ。　そなた等がここに来ることができたのは、そこの幼き者のお蔭なのですね。　これ、そなたの名は？」

「この者は・・・」

「よい！　直答を許します。　して、そなたの名はなんと申す？」

女王の問いに、答えようとしたカミュの言葉を途中で遮り、もう一度女王はメルエへと問いかける。
リーシャと一緒に可愛らしく膝をついていたメルエは大いに困惑していた。

横にいるリーシャがメルエの小さな背中を軽く押してあげることで、ようやくメルエの顔が上がった。

「・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・」

「ほう・・・メルエと申すか・・・・ふむ。　そなたにも、何か懐かしい風を感じますね。」

「・・・???・・・」

メルエの名乗りに何やら考え、意味深な言葉を残す女王にメルエは小首を傾げていた。
それは、カミュ達も同じ。
特に、サラは、女王の＞そなた『にも』＜という部分に引っかかりを覚えていた。

「・・・それは良いとして、そなた等『人間』がここに一体何の用ですか？　我々は『人』であるそなた等とは関わり合いを持たぬことにしておる。　用がないのなら早々に立ち去るが良い。」

「・・・はい。　此度は女王様に嘆願を致したく、ご尊顔を拝しました。　この近くに＞ノアニール＜という村がございます。　その村の住人は全て十数年の眠りに落ちております。　それらは、女王様のお力ということをお聞きいたしました。　できますれば、眠り

を解く方法をお教え頂ければと・・・・」

カミュの言葉を、女王は無表情に聞いていた。
一切の感情が見えない表情。
それはカミュのそれと大した違いはない。
そこに嫌悪と敵意が隠されているか否かの問題であった。

「・・・断る・・・何かと思えば、そのようなことか。　そなた等『人』は自分達の窮地になれば、そのように申してくる。　自分達が行ってきた行為も忘れてな。」

「・・・・・・」

「・・・ふむ。　そなた達は皆まだ若い。　故に知らぬことかもしれん。　しかし、実際に起きた出来事であることに変わりはない。　我々『エルフ』はそなた等『人』の十倍程の寿命を持つ。　つまり、そなた等『人』が忘れ去ろうとしている罪をその身に受けた者達もまだ生きているということ。　『人』が忘れても、『エルフ』は忘れぬ。」

カミュの嘆願を容赦なく斬り捨てた女王は、黙り込んでしまった一向にぽつりぽつりと過去の『人』と『エルフ』の歴史を語り出した。

「『人』はこの世界で、一番遅くに生まれた種族であった。　神が

作り、聖霊ルビスが護るこの世界には、すでに他の種族が生活をしていた。　それぞれにそれぞれの生活場所を作り、暗黙の了解の下、不可侵を約束していた。」

「・・・・・・」

「生まれたばかりの『人』は余りにも弱かった。　故に、聖霊ルビスは我々『エルフ』に『人』の守護を依頼されたのだ。」

「　ル、ルビス様が！？　」

その内容に、前回ロマリアでの謁見時にリーシャに言われたことを忘れてサラが声を上げる。　それは、この世の守護者である『聖霊ルビス』が『人』の守護を他種族である『エルフ』に頼んでいたというのだ。　それは、教会が教えていることを根底から覆す内容である。

「そなた等『人』は都合の良いように、話を作っているのであろう。　我々『エルフ』は脆弱な『人』の生活を様々な面で助けた。　時には『魔物』からの脅威を取り除き、時には生活に必要な知識を与え、また、『人』の中にも魔力を持つ者達には魔法を教えた。」

「・・・・・・・」

「時が経ち、『人』は独自の集落をつくり暮らし始めた。　我らも、『人』が窮地に陥った時のみ手を差し伸べる形となり、彼等の独立を喜んでいた。　しかし、『人』は我らや聖霊ルビスが考えるよりも、遥かに貪欲であったのだ。　そして、神は『人』に『エルフ』や『魔物』以上の能力を与えていた。　何か解るか・・・・？」

「・・・繁殖能力ですか・・・？」

過去を語る女王が不意にその話を止め、一向に疑問を向けてくる。
それに答えたのは、『聖霊ルビス』がこの世に落とした希望と云われる勇者。
その勇者の答えに女王は満足そうに頷いた。

「そうだ。　『人』の増加は我々『エルフ』にとって脅威と感じる程の速さだった。　数を増やした『人』は一つの所では留まらず、大陸を移動し、更に数を増やしていった。　当初、寿命の短い『人』であれば、それほどの数にはならないだろうと思っていたが・・・」

「・・・子や孫ですか・・・」

「うむ。　『人』は年月を経て行くうちにその数を更に増やしていく。　また、『エルフ』が魔法に頼ること、『魔物』が翼などに頼ることを『人』は試行錯誤を繰り返し、文化として成長していった。　船なるものを作り、大陸同士を結び、移動を繰り返してはその数

を増やす。」

サラもリーシャも女王の話に聞き入ってしまっていた。
自分達が知らない遥か昔の出来事。
女王の話では、ほんの一瞬の様に話してはいるが、人間が生まれ、子孫を残し、船などを作ったとなれば、それは気の遠くなるような時間を要することであろう。

「その内、『人』は同種族同士での争いを始めた。　我々『エルフ』では考えられないことだ。　同じ種族として生きる者達が手を取り合わない等・・・・しかし、それも『人』の数が増えすぎたためなのだろう。」

「・・・・・・」

続く女王の言葉に、サラは顔を伏せてしまった。
確かに、人間は他国同士での争いを絶えずしてきた。
今、まさに『魔王』という存在が皆の心を纏めてはいるが、それも討伐されれば、どうなるかは分からない。

「我々は、『人』同士の対立に関与はしなかった。　しかし、我々の住処を脅かす可能性が出てくれば、守護すべき対象であろうと排除してきた。　それが、『人』に恐怖を植え付けたのかもしれん。
　いつしか、『人』は『エルフ』に牙を向くようになった。　我々が施してきた恩も忘れて・・・・」

「・・・しかし、『エルフ』と『人』では・・・」

堪らず、サラが声を上げる。
ここは、＞エルフのかくれ里＜とは言え、その長がいる謁見の間。
カミュの従者であるサラが口を開いて良い訳がない。
リーシャは慌ててサラを抑えようと手を上げるが、玉座に座る女王自らの手によって遮られた。

「よい。　確かに、『エルフ』は『人』よりも遥かに高い魔力を有している。　しかし、基本的に力などは『人』よりも劣るもの達が多い。　そして、数が圧倒的に少ないのだ。　ここでは語るまいが、我々の繁殖方法は、『人』とも『魔物』とも違う。　我々は基本、『人』でいう性別というものは女性しか産まれない。」

「・・・では、どうやって・・・」

曲がりなりにも、サラは17歳になる女性であり、子を成す方法などの知識は有している。
人間では、男と女という性別の違う者達が最低一組いなければ、子を成すことなどできない。

「それを『人』であるそなたに語る気はない。　数の暴力の前に我々は次々と倒れていった。　見た目は女性という者達ばかり。　攫

われ、奴隷として売られた同朋も多いだろう。　基本的に他種族の『エルフ』と『人』では子を成すことなどできはしない。　故にそれを幸いとばかりに『人』に蹂躙された者達も数多くおり、『人』よりも寿命の長い我々は心の傷を抱えながら長い年月を生きなければいけなかったのだ。」

「・・・そ、そんな・・・」

「親を目の前で殺された子供や、身内を目の前で凌辱された者、我々が救うことのできなかった者達は数多い。　それ程のことをしてきた人間が我らに頼み事など良くも言えたものだ！」

人間が成してきた黒い歴史。
それを目の前に広げられ、サラは言葉を失った。
リーシャにしても、女王が虚言を発している訳ではないことぐらい理解できる。
故に、唇を強く噛み、下を向いて震えることしかできなかった。

「・・・わかりました・・・ただ、今回の＞ノアニールの村＜での事はそれとは別と考えてもよろしいのでしょうか・・・？」

リーシャもサラも、何の反論もできず、ただ俯くしかできなかった場面で、ただ一人口を開いた者。　それは、やはり全員が最近何かにつけ信頼を置き始めている青年だった。

「・・・全く関係がない訳ではない。　ただ、『人』が私にとって最も忌むべき存在になったということだ。」

「・・・そ、それは・・・」

「そなた達が生まれる前の話になるかもしれん。　私には一人娘がおった・・・」

女王が話し始めた内容は、＞ノアニール＜で老人から既に聞いていた話。
『人』と『エルフ』の哀しい恋の話。
しかし、次の女王の言葉に、一行の全員が息を飲んだ。

「・・・私の娘『アン』は、一人の人間を愛した・・・」

「「「　アン！？　」」」

「　！！　」

カミュを除く全員が、女王の口から出たその名前を叫んでしまう。
それは、常に場を弁え、頭を下げているリーシャですら勢いよく顔を上げて声を上げてしまう程の衝撃のある名前だったのだ。

「・・・そなた等が何を驚いているのかは知らぬが・・・我が娘『アン』は我ら＞エルフ＜の至宝である『夢見るルビー』を持って、その男の下へ行ったまま帰ることはなかった。」

「・・・・・・・」

「所詮は『エルフ』と『人』・・・アンは騙されたに違いない。おそらく、『夢見るルビー』もその男に奪われ、この里に帰ることもできずに辛い思いをしていたことだろう。」

「・・・そ、そんなことは・・・」

女王の言葉の中には思い込みの部分も多々あった。しかし、それを単なる思い込みだと口にできる程、一行は人生という名の経験を積んではいなかったのだ。女王が見てきた『エルフ』と『人』の歴史。それに対して、軽々と発言が出来るほど、カミュもリーシャも、そしてサラも自惚れてはいなかった。

「・・・本来、私は人間等、見たくもない。今回はただ、そなた等の中に純真な存在がいただけのこと。理解したのなら、早急にここから立ち去るがよい。」

カミュは、『ここまでか』と理解する。
これ以上は、どうあってもこの女王とまともな会話などできようはずがない。
後ろに控えるリーシャとサラに目配せをし、退室することにする。

「・・・・・・・アン・・・・・・・・」

リーシャに促され、背中を押されながら歩いて行くメルエがぽつりとその名を溢した。
それは、彼女の最初の友であり、二度とは会えない存在。
そして、女王の最愛の娘にして、おそらく二度とは会えない存在。
リーシャ達三人全員が退室したことを確認し、カミュも深く頭を下げ、女王に背を向けた。

「・・・待て・・・」

「・・・何かございましたでしょうか？」

「・・・あの幼き者は、最後に我が娘の名を呼んでいた。　それに、そなたの従者達もまた、我が娘の名を叫んでいた。　何故だ？」

立ち去るカミュを止め、女王が訪ねたこと。
それは、カミュですら辛い記憶となり始めている事柄だった。

「・・・メルエには、つい先日に生まれて初めての友ができました・・・その少女の名が『アン』と申します。」

「・・・そうか・・・その者は健やかに育っているのか？」

「・・・いえ・・・その『アン』も同じ種族である『人』の手によって命を落としています・・・・」

「・・・・・すまない・・・・・あの幼き者には辛いことを思い出させてしまったようだな・・・・しかし、そなた等もまた、そのような『人』の姿を見て、何故『人』を救おうとする？」

メルエの心情を思い、『人』であるはずのカミュへと頭を下げる。
その姿は、やはり『人』の保護者である『エルフ』の長としての威厳があった。
そして、その後ろに続くカミュへの疑問。
それは、物心ついた頃からカミュの根底にある疑問でもあった。

「・・・今の私には、女王様のご質問にお答えできる回答を持ち合わせておりません・・・それでも尚、女王様が答えをお望みであるのならば・・・・・・・私もまた『人』です。」

「・・・そうか・・・」

「・・・では、これにて、失礼いたします。」

もう一度、深々と頭を下げたカミュは、謁見の間を出て行った。
傍の者達を人払いした謁見の間には、玉座へと座る女王だけが残された。

「・・・アン・・・・母はどうすれば・・・・」

『人』の保護を聖霊ルビスより言い遣った『エルフ』の長の呟きは、虚空の彼方へと吸い込まれていく。

＞エルフのかくれ里＜を出て、森を抜けきるまで、一行の中で誰一人その口を開く者はいなかった。　いつもは楽しそうに歩くメルエですら、何かを思いつめたように下を向いて歩いていた。　その手を引くリーシャもまた、メルエの様子を気にしながらも自分の中で消化しきれない想いを抱いていたのだ。

里に入っている内に、いつの間にか日は落ち、森を抜ける頃には、空に大きな月が輝く夜と化していた。
背中にある森の中から、フクロウの鳴き声が響き、月明かりしか光がない平原は足元もおぼつかない程の闇に閉ざされていた。

「・・・・・・・・・」

そんな中、ふと顔を上げたサラは、リーシャの手を握りながら、進行方向ではない方向を凝視しているメルエに気が付く。

「・・・ま、またですか、メルエ・・・もう驚かそうとしても駄目ですよ。　それとも、こんな夜中に何か動物を見つけたのですか？」

サラは、そのメルエの視線の先を恐る恐る見ながら、メルエを窘める。
しかし、メルエから返ってきた言葉は、サラの恐怖心を倍増させるものだった。

「・・・・・・・・・何か・・・・・・・・・来る・・・・・・・・・」

「　へゃっ！！　」

静かに呟くメルエの声。
その真剣さに奇妙な声を上げるサラ。
そして、メルエの言葉に対し、剣に手を掛けるカミュとリーシャ。

ガシャン　ガシャン　ガチャン　ガチャン

暗闇に支配され、一寸先も見えない平原の先から響く奇妙な音。
それは、金属を擦り合わせるような音。

「・・・・あ・・・・あ・・・・あわ・・・・・・・・」

「・・・・・・あわ・・・あわ・・・・・？」

暗闇の平原に、その音の主が月明かりに照らし出される。
その姿にサラは、以前＞カザーブ＜で上げた意味不明な言葉を発する。
暗闇を凝視していたはずのメルエがそのサラの姿を見て、真似を始めた。

「カミュ！！」

「・・・あれは・・・ロマリア王国の鎧か・・・？　何故こんな所に・・・・？」

カミュとリーシャは剣を抜き放ち、そして戦闘へと突入するために身構えた。
しかし、その現れた者の姿に、リーシャはカミュの名を叫び、カミュはその姿を冷静に分析し始める。

「鎧だと！！　あれは人が着ているのではないのか！？」

「・・・わからない・・・・しかし、あの鎧からは生気が全く感じられない。」

カミュはリーシャの問いに短く答えると、カミュ達の方向に真っ直ぐ進んでくる全身をすっぽり包む鎧を着た者に向かって、剣を構えて駆け出した。

ガキ――――――――ン！！！

鎧に向かって躊躇なく振り落としたカミュの＞鋼の剣＜は鎧騎士の左腕にある盾によって防がれた。　それでも、カミュは離れ際にもう一度剣を振るう。

ゴキ――――――ン！！！

「　なに！？　」

「「「　！！！　」」」

カミュが振るったその剣は、鎧騎士が身に着けている兜に直撃し、その面甲が上がった。
その面甲の中を見た一行は息を飲んだ。

そこに見えたのは一切の闇。
人の目の部分が見える筈のそこには何もなかった。

＞さまよう鎧＜
無念の死を遂げた国家の鎧騎士が魔王出現による影響で肉体無き鎧だけが現世を彷徨うことになってしまった者。
鎧に染み込んだ無念と怨念のみにて行動しているため、人と魔物の区別なく襲いかかる。
その身に魔力を有している訳でもなく、ただ、生前に所有していた剣を振り続ける者。
その攻撃力は生前の騎士に相応しくかなりの威力を有する。

「カミュ！！」

「メルエ！　ヒャドをぶつけろ！！」

全員が＞さまよう鎧＜の実態に動揺を起こすが、真っ先に立ち直ったのは、やはり国は違えど同じ騎士であるリーシャだった。
そのリーシャが剣を抜き、＞さまよう鎧＜に向かう途中にカミュへと声をかけ、カミュはメルエへと魔法の行使の支持を出す。

「・・・・・・ん・・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・」

リーシャの振るった剣が再び＞さまよう鎧＜の盾に弾かれ、リーシャ自身の身体が離れたその瞬間を見計らって、メルエの魔法が発動する。

大気が凍りつく冷気が＞さまよう鎧＜へと真っ直ぐ向かっていく。
本能からなのか、それとも意図的なのか、＞さまよう鎧＜の盾はメルエの放った冷気を受け止めるように動いた。
まともに冷気を受けた盾は、その盾を持つ左腕部分諸共凍り付き、その機能を失う。

「やあぁぁぁ！！」

再度斬りかかったリーシャの剣が凍り付いた＞さまよう鎧＜の左腕を叩き壊した。
ガラスが砕け散るように、氷像と化していた左腕が砕け落ちる。

「ルカニ！」

「ふっ！」

左腕を失い、一瞬の隙ができた＞さまよう鎧＜にカミュが追い打ちをかけ、その右肩へ＞鋼の剣＜を突き入れる。　直前にサラが唱えた＞ルカニ＜によって防御力が低下している＞さまよう鎧＜の甲冑にカミュの剣が抵抗なく突き刺さった。

「グォォォォォ」

人とも魔物とも言えない叫びが、暗闇の平原に響き渡る。
カミュ達の優勢は明らかだった。
しかし、剣を素早く抜き放ったカミュが瞬時に飛び退き、メルエが次の詠唱に入る時にその形勢は大きな変化を起こす。

＞さまよう鎧＜から全員が離れたその時、突如として＞さまよう鎧＜を淡い緑色の光が包み込んだのだ。　それは、カミュ一行にとって何度も見てきた光。　サラが、そしてカミュが使用することのできる癒しの光。

カミュ達の見立てが正しいことの証明に、先程カミュが空けた甲冑の穴が塞がって行く。

＞ホイミ＜

それは、本来教会が保有する経典にしか載ってない筈のもの。

そして、神の祝福を受け、聖霊ルビスの加護がある者にしか使用することが出来ない魔法。

驚きに目を見開く一行の前に現れたのは、アリアハンを住処にする最古にして最弱の魔物であった。

それは、＞スライム＜。

しかし、その＞スライム＜は青く半透明な身体は同じでも、身体の下に黄色い多数の触手を垂らし、空中をふわふわと漂っていた。

「な、何故!?」

「か、回復呪文だと!?」

＞ホイミスライム＜

最古の魔物であるスライムの上位種と云われる魔物。

地を飛ぶように、這うように徘徊するスライムとは違い、空中を漂う。

その身体から伸びる触手を使い何かを掴み、使用することも可能な知能も持つ。

しかし、その最大の特徴は、魔法が使えるということ。

しかも、それは神の祝福を受けた魔法＞ホイミ＜。

その存在自体が教会の教えを根底から覆す存在となり得る魔物である。

教会では、契約中の人間を襲い、何かの手違いで契約を済ませてしまったスライムが進化したものとして伝えられており、教会が崇める＞聖霊ルビス＜を侮辱する魔物として討伐の対象とされている。

「くそっ！　ホイミが使える魔物か！？　メルエ！　まずは、あのスライムからだ！」

「・・・・・・ん・・・・・・・ヒャド・・・・・・・」

カミュの言葉にこくりと頷いたメルエは、先程まで＞さまよう鎧＜に唱えるつもりだった魔法を急遽変更し、＞ホイミスライム＜へと向ける。
大気を凍らせる冷気が真っ直ぐ＞ホイミスライム＜へと向かうが、その魔物は張り付いたような気味の悪い笑みを浮かべたまま、その冷気をひらりとかわした。

「・・・・・・・・・あ・・・・・・・・・」

自身の魔法を避けられたことにメルエは驚いた。
今までの魔物には、避けられたことなどないのだ。

「メルエ！」

そのメルエの隙を見逃さず、瞬時に近づいてきた＞さまよう鎧＜が剣を振り下ろすが、間一髪その剣はリーシャの＞青銅の盾＜によって防がれる。

「くっ・・・サラ！　あのスライムを頼む！」

「は、はい！」

思っていた以上の力で押しこまれる剣を必死に盾で防ぎながらリーシャがサラへと檄を飛ばす。　メルエを護りながらでは、リーシャとて＞さまよう鎧＜に致命傷を負わせることは難しい。　ましてや軽傷では、＞ホイミスライム＜によって傷を癒されてしまう。

本来、回復呪文で鎧などの傷を修復することはできない。
しかし、鎧に染み込んだ怨念や無念で動く＞さまよう鎧＜にとって、その鎧は身体その物。
故に、回復呪文によって修復が可能となっているのかもしれない。

「やぁぁぁぁぁ！！」

サラが手に持つ＞鉄の槍＜を＞ホイミスライム＜目掛けて突き入れる。

しかし、ふわふわと空中を漂う＞ホイミスライム＜はその槍をひらりと避けてしまった。

「　メラ　」

しかし、＞ホイミスライム＜が相手をしているのは、何もサラだけではない。
避けた後方から、カミュの唱えたメラの火球が襲いかかる。
身を翻した先へ予測したように着弾した火球は＞ホイミスライム＜に直撃する。

瞬間炎に包まれた＞ホイミスライム＜に再度サラの＞鉄の槍＜が襲いかかる。
一瞬で消え去った炎によって身体の一部が溶けた＞ホイミスライム＜の眉間部分にサラの槍が突き刺さった。

不気味な笑顔を張り付けていた＞ホイミスライム＜の表情が歪んだように見えたのも一瞬。
命の灯が消えた魔物は、その形状を保つことが不可能となり、ずるりとサラの槍から地面へと滑り落ち、粘着性のある液体へと変化していく。

「　リーシャさん！　」

＞ホイミスライム＜を倒したサラは、メルエを護りながら剣を振るうリーシャの応援に向かうために振り返るが、そちらもすでに佳境

へと入っていた。

「・・・・・・・・・イオ・・・・・・・・・」

リーシャと共に＞さまよう鎧＜から距離を空けたメルエが先日覚えた爆発呪文を唱える。

魔法力に余裕のあるメルエが唱えたそれは、以前見たものよりも大きな威力を誇り、弾け飛んだ大気と共に＞さまよう鎧＜の右腕も吹き飛ばした。

「よし！　メルエ良くやった！」

剣を持つ右腕を失い、攻撃手段を失った＞さまよう鎧＜など、もはやリーシャの敵ではなかった。　地面を蹴って高く跳びあがったリーシャの振り下ろす剣が、先程サラが唱えた＞ルカニ＜によって脆くなっている甲冑に脳天から吸い込まれていく。

兜から股までを斬り裂かれた＞さまよう鎧＜は、その体躯を真っ二つにして地面へと倒れていく。　しばらくメルエを庇いながら立っていたリーシャであったが、鎧が全く動きださないことを確認し、剣を腰の鞘へと納めていった。

「・・・ふぅ・・・」

「・・・回復呪文が使える魔物がいるとはな・・・これからの旅は少しきつくなりそうだ。」

剣を鞘におさめ、息を吐くリーシャに、カミュは初めて現れた魔物についての感想をこぼしながら近寄ってくる。
そのカミュの言葉にサラは再び思考の渦へと飲み込まれていくのだ。

回復呪文が使える魔物がいるということ。
教会の伝えることを鵜呑みにすれば、それは何かの手違い。
しかし、先程のエルフの女王の話を聞いた後であれば、何か納得のできる事でもあったからだ。

世界で一番遅く生まれた種族である『人』。
それは、逆に言えば『聖霊ルビス』の加護を『人』以前に受けていた種族があるということになる。
サラだけでなく『人』が忌み嫌い、ルビスを蔑にすると云われている『魔物』もまた、加護を受けていた種族ということにもなるのだ。

「・・・サラ・・・」

再び、黙り込んでしまったサラを心配そうに窺うリーシャ。
それは、サラの悩み、考えが何かを理解している表情である。
リーシャとて、僧侶程ではないにしろ、『ルビス教』の信者であることに変わりはない。

魔物が回復呪文を使う。
それが意味することが何なのかが分からない年でもない。

「・・・・・行くぞ・・・・・・夜が更ければ、魔物達の動きも活発になる。　明日は＞西の洞窟＜へと入ることになるはずだ。早々に村に帰って休む。」

そんな二人の葛藤を知ってか知らずか、カミュはその事に全く触れようともせず、村への道のりを歩きだした。
リーシャとサラの様子に首を傾げていたメルエもまた、カミュのマントの裾を握り、後方のリーシャとサラを何度も振り返りながらも先を歩き始めた。

「さぁ、サラ・・・考えるのは、村の宿屋に入ってからにしよう。まずは身体を休めよう。」

先を歩くカミュ達に遅れないよう、リーシャはサラの背中を軽く押し、＞ノアニール＜への道を歩き出す。
サラは、リーシャの言葉に無言で頷いた後、とぼとぼと月が照らす道に足を踏み出した。

久しく見ていなかった、雲一つない月夜。
戦闘をしている内に空の雲が全て流れてしまったのか、先程よりも強い月の光が、一行が向かう＞ノアニール＜への道を明るく照らし出していた。

エルフの隠れ里？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

今回の最後の戦闘は、？の『戦闘のテーマ』を思い浮かべながら書いておりました。　皆様の中ではどんな音楽が鳴ったでしょうか？

ご感想、ご意見をお待ちしております。

西の洞窟（前書き）

ＰＶが２０万を超え、ユニークも2万人を超えていました。
読んで下さっている方々、本当にありがとうございます。

さて、今回も相当長いです。
皆さんのペースで読んでいただければと思います。

東から朝日が上り、夜という幕を上げ始めた頃、＞ノアニール＜の宿屋の外では、カミュとリーシャが剣を交えていた。

サラの鍛練はすでに終了しており、カミュとリーシャのせめぎ合いを地面に座りながら眺めていた。

メルエはここにはいない。

まだ、宿屋の部屋のベッドで睡眠中である。

今のメルエにとっては、文字や言葉の学習よりも、しっかりとした栄養と、十分な睡眠が一番必要なことなのだ。　それを三人は解っていた。　故に、無理に起こしたりせず、自然にメルエが早起きをした時だけ、文字や言葉を教えることが暗黙の了解となっていた。

サラの目から見て、カミュとリーシャの剣の力量はアリアハン出立時に比べ、格段に上がっているように見える。　しかし、『どちらが上なのか？』と問われると答えに窮してしまうものでもあった。

それは、アリアハン大陸にいた頃を知っていれば、おかしなこと。

カミュとリーシャは、雲泥の差はないにしても明らかな力量の差があったはずである。

「くそっ！」

カミュは、リーシャの剣を紙一重でかわしながら、舌打ちをした。
カミュとて、アリアハンから出てから自分の剣の腕が上がっていることは実感していた。
それは、魔物との戦闘でも明らかになっている。

しかし、目の前にいるアリアハン屈指の戦士まで届かない。
『もしかすれば、その差は縮まっているかもしれない。』
そう思い、毎朝挑んではみるが、その希望は必ず打ち砕かれる。

何故？
宮廷騎士とはいえ、相手は女性。
基本的に純粋な力であれば、女性より男性の方が強くて当たり前。
では、目の前の人間が異常なのか？

しかし、カミュの頭はそれを否定する。
確かにまだ力では及ばないかもしれないが、物を持つような力はいずれカミュが追い抜くことはできるだろう。

カミュにとって、目の前に立つリーシャという壁は途方もなく高い物に見えていた。

越えなければならない者。
されど、容易に越えることが出来ない者。

「・・・はぁ・・・はぁ・・・残念だったな、カミュ。　今日も私の勝ちだ。」

「・・・・・・」

カミュの中では、＞レーベの村＜でリーシャと約束した内容など、もはや気にはしていなかった。　しかし、この目の前の高い壁を越えない限り、一人旅など到底不可能であることもまた事実であったのだ。

「　お疲れ様でした！　」

地面に座り込み、リーシャを見上げていたカミュとその前に立つリーシャにサラが汗を拭くための布を手渡す。
受け取った布で顔を拭いたリーシャの顔は清々しく晴れ、とても美しかった。

「・・・カミュ・・・今日はどうするんだ？」

「今日の行動は夜に話したはずだが・・・？」

鍛練を終え、休憩を兼ねてその場に座り込んだリーシャは、顔をカミュへと向けて今日の予定を尋ねる。　それに関してのカミュの答えは簡素なもので、多くを語らない。

「・・・確かに聞いた・・・しかし、本当に＞西の洞窟＜へ向かう気なのか？」

リーシャの疑問。
それは、カミュにとって困惑するに値するような代物だった。
＞ノアニール＜で話を聞き、＞エルフのかくれ里＜で話を聞けば、自然と行く先は＞西の洞窟＜ということになる。
何故それに疑問を挟むのか？
それがカミュには理解できなかった。

「・・・ああ・・・アンタが何に疑惑を感じているのか知らないが、＞西の洞窟＜へ行くが・・・」

「お、お前は・・・・お前はそれでいいのか!?　この村にそれほど義理がある訳ではないだろう。　それでも行くのか!?」

「・・・元々、俺はそういう存在だと言ったはずだが・・・・」

何か、感情の堰を切ってしまったように、リーシャが叫び声を上げる。
その瞳は真剣そのもの。
何かをカミュへと訴えたいが、それが自分でも分からない為、うまく伝えることのできないもどかしさを感じているような叫びだった。
しかし、感情を露わにするリーシャとは反対に、カミュは＞シャンパーニの塔＜で語った言葉を再度リーシャへと語る。

「あの老人は・・・・お前を『人』として見ていない！　それでも、お前は行くというのか!?　お前には・・・お前には自分の意思はないのか!?」

続くリーシャの言葉。
その言葉をリーシャが発した瞬間、その場は凍り付いた。
カミュの目を見て叫んでいたリーシャですら、その口を閉じることを忘れてしまう程の威圧感。　先程まで、無表情ながらも『人』としての暖かさを持っていたカミュの顔は、何の感情も見えない能面と化していたのだ。

「・・・・アンタが・・・・それを言うのか・・・・・？」

「・・・な・・・なに・・・・？」

カミュが放つ相手を恐怖させる程の威圧感の中、リーシャはそのカミュが紡いだ言葉の意味を脳内で必死に消化しようとする。
だが、それを理解すれば理解する程、リーシャの心の中に自責の念が生まれてきた。
それは、時間が経てば経つだけ、リーシャの心を蝕み、壊していくことだろう。
それ程のものだった。

「し、しかし、カミュ様。　＞エルフの里＜でのエルフの対応は・・・・酷過ぎるのではないでしょうか？　いくら『人』と『エルフ』が争っていた歴史があるとは言え、話し合いにも応じないなど・・・・」

「・・・では、逆にアンタに聞きたい・・・もし、昨晩遭遇した＞ホイミ＜を唱えるスライムが、アリアハンの城下町に入ってきて、『自分はホイミを使える。だから怪我をした人間を治療させてくれ』と言ってきたとしたら、アンタはそれを許すのか？」

「・・・そ、それは・・・」

「『自分は知能のある魔物で、人間に危害を加えるつもりはない』と門の前で叫ぶ魔物を町の中に入れるのか？」

「・・・・・・・」

サラには答えられない。
カミュの言う例え話。
それは、内容こそ違え、昨晩サラが悩んだことと同意のものだったからだ。

「・・・城下町や村に魔物が入り込んだとしたら、例え『人』に危害を加えていなかったとしても、その来訪の意図も、そして害意の有無も確かめずに、兵士たちが討伐をするだろう。『エルフ』があれ程『人』を憎んでいるにもかかわらず、俺達は生きてあの里から出ることができた。それだけでも、俺は『エルフ』に対して敬意を表するに値すると思っている。」

「・・・・カミュ・・・・・」

「・・・アンタ達の考えが、この世界の『人』の常識であることは知っているが、アンタ達は実際に目で見て、その耳で聞いているはずだ。アンタ方こそ、そろそろ自分の意思で考えることをしたらどうなんだ？」

これで話は終わりだとでも言うように、カミュは立ち上がり、宿屋へと戻って行く。
取り残される形となったリーシャとサラはそれぞれの胸にそれぞれの想いを抱くこととなる。

メルエの起床と同時に、リーシャが朝食の準備を始める。
カミュは剣の手入れを行い、サラは寝ぼけ眼のメルエが顔を冷たい水で洗うのを手伝ってやっていた。

食卓に四人全員が揃い、食事を開始するこの時が、メルエはたまらなく嬉しく、自然と顔には笑顔が浮かぶが、その他のリーシャとサラの表情は優れない。
メルエは不思議そうに小首を傾げた後、自分の皿に乗るハムの様な肉を一つサラの皿の上に乗せた。

「・・・メルエ・・・？」

「・・・・・・・・・・あげる・・・・・・・・・・」

「えっ!?　だ、大丈夫ですよ。　メルエはしっかり食べないと・・・」

自分の皿に一枚の肉を置いて、笑顔を向けるメルエにサラは驚いた。
このような小さな少女に心配をされてしまう程に自分の顔が歪んでいたことを知り、サラの気分は更に落ち込んでいく。

「そうだ。　メルエには魔法で頑張ってもらわなければいけないのだから、しっかり食べておけよ。」

「・・・・・・・・でも・・・・・・・・サラ・・・・・・・・元気ない・・・・・・・・・」

「　だ、大丈夫です！　私は元気ですよ。　あっ!?　もしかすると、メルエは自分の嫌いな物を私に渡そうとしているのではないですか!?　」

無理に笑顔を作りながら発したサラの言葉は、メルエの自尊心を大きく傷つけた。
元気であることのアピールに軽口を叩いただけであったが、メルエ

にしてみれば、心配を無碍にされたと感じたのだろう。
メルエの頬は見る見る膨れ上がっていく。

「あっ、い、いえ、メルエ？　本当はそんなことは思っていないのですよ。　し、心配してくれたのですよね？」

「・・・・・・・サラ・・・・・・・・嫌い・・・・・・・・・」

「　はぅっ！　」

「　あははははっ　」

プイっと横を向いてしまったメルエに、サラは困惑を極める。
慌ててメルエへと弁解を繰り返すサラの姿は、重く沈んでいたリーシャの心をも、幾分か軽くしてくれた。

リーシャにしても、今朝のカミュとのやり取りで胸に棘が刺さったままになっていた。
それは、容易に抜ける物でもなく、そしてその傷口から何かが漏れ続けていることもまた、否定しようのない事実であった。

朝食も終わり、＞西の洞窟＜へと向かおうと村の出入口へと歩く一行の前に、先日の老人が現れた。　今朝、話していた事の中心人物である老人の顔を見たリーシャは、その表情を歪ませる。

「おはようございます、勇者様。　今日はお早い出発なのですね。」

「・・・・・・」

貼り付いたような笑顔を作り、声をかけてくる内容には若干棘を含ませているように感じる。　昨日、昼過ぎにこの村を出たはずが、今朝にはもう村に帰ってきていたというカミュ一行の行動に何かしら思う所があったのかもしれない。

「今日は、どちらへ向かわれるのですか？」

「・・・西の洞窟です・・・」

「　おお！！　そうですか。　では、＞夢見るルビー＜を探しに行ってくださるということですね！　」

昨日、この村を出て、戻ってきたということは、この村に掛っている呪いを解くために行動していることは理解できてはいたはずだが、老人はカミュ達に念を押す為に、今朝一行の前に現れたのであろう。『アンタ達は勇者一行なのだろう？　この村で休んだだろう？』と・・・

「これで・・・十数年続く、この村の眠りも解かれる・・・」

「い、いえ。　もし、＞夢見るルビー＜が見つかったとしても、エルフの女王様がこの村の呪いを解いてくれるとは・・・・」

早くも『眠り』という呪いが解かれることを見ている老人に、横からサラが楽観視できないことを告げるが、その言葉は、結果的にサラやリーシャの悩みを更に大きくさせるものになってしまった。

「ふぉふぉふぉ、何をおっしゃいます。　例え、エルフの女王が許さず、この村の呪いを解くことを拒んだとしても、勇者様がおられるのですから、何の心配もしておりません。」

「・・・それは・・・」

老人が口にした一言。
それは過剰な期待。
要約すれば、『エルフ側が拒んだとしても、アンタ達が何とかしてくれるのだろ?』ということ。
それは、サラの深読みかもしれないが、『いざとなれば、エルフと戦ってでも呪いを解け!』というようにも聞こえた。

「西の洞窟は、魔物が巣食っております。　僅かではありますが、こちらをお持ち下さい。」

老人が手渡してきた物。
それは、麻でできた袋だった。
中には、薬草が数枚と毒消し草が数枚。
町の道具屋で揃えられる物だった。

「・・・ありがとうございます・・・では・・・・」

「お気をつけて。　どうぞ、この＜ノアニールの村＞をお願致します。」

頭を下げる老人を振り返ることなく、カミュは村の出口へと歩を進める。
サラは、そんな二人の姿に対し、胸にしこりを残したまま旅立って行くのだった。

昨日歩いた時とはまた違った憂鬱感。
それが、リーシャの胸にも、サラの胸にも広がっていた。
朝食時から、優れない表情の二人を心配するように、今日のメルエの手は、カミュのマントではなくリーシャの左手を握っている。

「・・・・・・・リーシャも・・・・・・元気・・・・・・ない・・・・？」

「ん？　あ、ああ、大丈夫だ、メルエ。　ちょっと考え事をしていただけだ。」

「・・・・・・・」

リーシャを見上げながら心配そうに声をかけるメルエに、リーシャは顔を上げて笑顔を向けるが、それでもメルエの瞳の色は変わらない。

メルエの瞳。

それは、サラだけではなく、リーシャも時々悩まされる。

純真で無垢な瞳。

奴隷として売られる前には様々な苦痛があったであろうに、それを思わせない程の澄んだ瞳。　その瞳に見つめられると、自分が浅ましく、汚らしい物の様に感じてしまうのだ。

しかし、サラもリーシャも気がついてはいない。

今、メルエがその瞳の色を取り戻したのは、自分達の影響なのだということを。

赤の他人であり、しかも奴隷として売られ、身分も出自も分からない自分に対し、何の躊躇いもなく、無償の優しさを向けてくれる人間の存在が、自然とメルエをも変えているのだということに・・・・

道中、何度か＞バリィドドッグ＜や＞デスフラッター＜と遭遇し、戦闘を行いながら一行は＞西の洞窟＜を目指した。

気分が落ち込んでいるサラも、戦闘となれば、そこは勇者カミュの従者。

自分達へ襲いかかってくる魔物達を次々と斬り伏せていく。

最近は槍の使い方にも慣れ始めたサラは、素早い＞デスフラッター＜のスピードに惑わされることなく、冷静に動きを見極め、槍を突き出す。
今朝、カミュに極力魔法の使用を抑えるように言われたメルエは、要所要所でその魔法を使用することにしていた。
しかし、ただ一人だけ、昨日とは違った人間がいたのだ。

「えっ？」

そう。
それは、＞デスフラッター＜を槍で突き刺したサラが振り返った先にいた人間。
貴族としての誇り、宮廷騎士としての誇り、何より自分自身への誇りを持ち、常に凛と立つサラの憧れでもある女性。

その女性が、剣を腰の鞘に納めたのだ。
女性の前には、まだ、生きている＞デスフラッター＜が羽ばたいているにもかかわらずだ・・・

「・・・・・・」

カミュもまた、アリアハンから共に行動をしてきたその戦士の変化に驚いていた。
リーシャの前で羽ばたいていた＞デスフラッター＜は、隙を見つけたとばかりに、大空に飛び去って行く。

リーシャは、ただその魔物の姿を目で追っていた。

「リーシャさん!!　ど、どうしたのですか!?　ま、まさか、どこかお怪我を・・・」

「・・・・いや、大丈夫だ・・・・・」

慌てて近寄るサラの問いかけにも、どこか上の空といった様子で、リーシャが返答を返す。
その姿に、サラの胸に浮かんだ、ある疑惑が確信へと近づいて行く。

「・・・・で、では・・・何故・・・・・?」

聞きたくない。
よりにもよって、リーシャからその言葉を聞きたくはない。
それでも、サラの口は自然と動き出す。
『何故、魔物を逃がしたのか?』と・・・・

「・・・・・今日は＞西の洞窟＜を探索するんだ・・・・・・・あんな魔物に構っている時間はない・・・・・・」

『嘘だ!』
サラは瞬時にそう頭の中で叫んでいた。

今では、サラでさえ、自分一人で討伐できる魔物である。
ましてや、カミュよりも上の剣技を持つリーシャであれば、気にするような時間をかけるまでもなく、魔物の息の根を止めていただろう。

それでも魔物を仕留めなかった理由。
それがサラには理解できた。
いや、理解してしまったのだ・・・

「さ、さあ、行こう！　日が落ちる前には＞西の洞窟＜からは出て来たい。」

「・・・ああ・・・」

リーシャの行動に、表情に出さないまでも驚きを浮かべていたカミュは、その口端を少し上げて、リーシャの声に答える。
空元気ではあるが、後ろを振り返ったリーシャの表情に、メルエは笑顔で頷いた後、再びリーシャの手を掴み歩きだす。
戦場であった場所には、ただ一人、新たな悩みを抱えたサラだけが残った。

「・・・・・・・サラ・・・・・・・・早く・・・・・・・・」

「！！　あ、は、はい！」

それでも、サラを気遣うように振りかえったメルエの声に、弾かれたように顔を上げたサラは、胸に渦巻く様々な想いを抱えたまま歩き出すであった。

「・・・・ここか・・・・・？」

その洞窟は、＞エルフの隠れ里＜から南に行った森の中にひっそりと存在していた。
それ程大きくはない入口がぽっかりと口を開いている。

周囲には木が生い茂り、鳥のさえずりすら聞こえるその場所は、とても魔物が巣食うような場所には見えない。
ただ、入口から覗かれる洞窟内は、暗い闇に覆われ、どれほど深いのかも想像が難しいものだった。

「・・・＞たいまつ＜の準備もしているな・・・入るぞ・・・」

カミュの言葉に全員が頷きを返し、一行は洞窟内へと足を踏み入れていく。

太陽がまだ真上にくる前ではあるが、日光がもたらす暖かさがあった外とは違い、一歩踏み入れた洞窟内は、身体を震わせる程の冷気が立ち込めていた。

「メルエ、私の手を離すなよ。」

「・・・・・・」

中の様子に若干怯え気味なメルエへ、リーシャは優しく声をかけ、メルエの手を強く握った。　先程より力強く手を握られたメルエは、嬉しそうに頬笑みを返しながら小さく頷く。

その二人の様子を、サラはどこか遠い所の出来事の様に見ていた。

まだ、先程の戦闘での出来事が頭から離れないのだ。

サラにとって唯一の味方と言ってよかったリーシャは、今ではサラとは異なった考えを持ち始めているように感じていた。

しかし、それが表面に出てしまうと、薄々感じていたことが確信へと変わり、サラの胸の中で複雑な感情へと変わっていく。

「カミュ！　右へ抜ける道があるぞ！？」

「・・・はぁ・・・アンタが言うのなら、そっちは行き止まりだぞ？」

「な、なんだと！？　そ、それは行ってみなければ分からないだろ！」

そんなサラの苦悩を余所に、リーシャとカミュがいつも通りのやり取りを始めていた。
リーシャが道を示した事へのカミュの反応は、当たり前と言えば当たり前の物だった。
しかし、それに納得しないリーシャの叫びに、再び大きな溜息を吐いたカミュは、リーシャの言う通りに右へと進んでいった。

「・・・・・・・」

「・・・わかったか？　何故かは知らないが、アンタは行き止まりを探知する嗅覚があるとしか思えないんだが・・・・」

「・・・・・リーシャ・・・・・・ダメ・・・・・・？」

リーシャが示した先、それはサラとカミュが予想した通りの場所。

自然に岩でできた壁が立ちふさがり、前へと進むことが出来ない空間。
一言で言えば、『行き止まり』。

その結果が示すものにリーシャは肩を下げる。
リーシャの右手を握るメルエの上目使い気味の疑問が、リーシャの心を更に抉って行った。

「あれ？　これは・・・・？」

リーシャが唇を噛みしめる姿を横目にサラが何かを拾い上げた。
それは、サラがアリアハンを出てから数回しか使わずに、腰に差したままとなっている鋭く光るナイフに形状が酷似している物だった。

「ん？　それは・・・＞聖なるナイフ＜か？」

「あ、は、はい。　おそらくそうだと思います。　でも、何故このような場所に・・・・？」

気を取り直したリーシャがサラの手の中で光る物の名を口にし、サラもまたそれに同意を示す。　しかし、サラにも何故ここに＞聖なるナイフ＜があるのかは解らなかった。

「・・・・・・メルエが・・・・・・・・持つ・・・・・・・」

「だ、駄目ですよ、メルエ。　危ないです！」

サラの持っている＞聖なるナイフ＜へ手を伸ばそうとするメルエを必死に避けるサラの姿は、リーシャから見ても滑稽なものだった。
自然とその顔に笑顔が浮かんでくる。

「・・・・・・サラ・・・・・・・嫌い・・・・・・・・」

「うぅぅ・・・嫌いでも、駄目です。」

サラが言うように、メルエに刃物を持たせることは、危険なことかもしれない。
しかし、見方によっては、すでにメルエの腰に差さっている＞毒針＜は＞聖なるナイフ＜以上に危険な物とも言える代物だ。

メルエは、サラの腰に、今サラが持っているナイフと似た物を差していることを知っていた。　故に、自分に＞聖なるナイフ＜を渡そうとしないサラは、幼いメルエから見れば『ずるい！』としか見えなかったのかもしれない。

「あはははっ！　メルエ、諦めろ。　それは、誰か他の人の物だ。
この洞窟に持ち主がいるかもしれない。」

「・・・・・・・」

笑い声と共にメルエに声を掛けるリーシャの言葉に、サラとやり取りを繰り広げていたメルエが頬を膨らませながら振り向く。
しかし、その後の真面目な表情に戻ったリーシャの言葉に、眉を顰めながらも素直に頷くしかなかった。

「それに・・・そのナイフは、もしかしたら遺品かもしれない。死者の物であるのなら、遺族に届けてあげよう。　前に教えただろ？」

＞シャンパーニの塔＜でリーシャから聞いた、『死者を尊ぶ』こと。
それを、メルエも思い出し、首を縦に振ったのだ。

「メ、メルエ・・・」

「・・・・・でも・・・・・サラ・・・・・・嫌い・・・・・・」

「　はうっ！　」

メルエの姿に安堵を漏らしたサラに告げられた言葉は、またしてもメルエ得意の戯れであった。

サラの落胆する姿に、再び笑い声をあげたリーシャの目に、サラの後ろに立っていたカミュの行動が目に入った。
注意深く、周囲を見回し、＞たいまつ＜を上に掲げたカミュが、その背中の剣に手をかけたのだ。
それは、もはやパーティー全員の暗黙の了解となった『戦闘の合図』。
魔物の襲来を知らせるものだった。

「メルエ！　こっちへ来い！」

リーシャは傍にいたメルエの腕を引き、自分の下へと引き寄せる。
その声に、サラも背中の槍を取り、持っていた＞たいまつ＜を上に掲げ、カミュが見た物を見ようと目を凝らした。

「！！」

「・・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・」

その姿にサラは息を飲み、メルエはリーシャの足にしがみ付くように怯えた様子を見せる。
そんな二人の前に、彼女達にとって、最も頼りになる二人がそれぞれの剣を抜き放ち、立ち塞がる。

洞窟の上空には、六つの光。
その姿は＞たいまつ＜の炎の光に照らし出され、全貌を現す。
天井にぶら下がるように逆さまに立つ人影。
どうやって岩でできた洞窟の上部にしがみついているのかは解らないが、確かにそれは人型をした魔物であった。

それは、以前、一行が＞シャンパーニの塔＜で遭遇した魔物に酷似した者。
メルエの命を脅かしたあの魔物である。
リーシャの足で震えるメルエの姿が、その魔物に植えつけられた恐怖の度合いを測ることを可能にしていた。

＞バンパイア＜
こうもり男の上位種に当たる吸血種の魔族。
こうもり男と同じように、人の生き血を好み、カラカラに干乾びるまで吸いつくす。
ただ、手下のような者達を増やすために、全てを吸いつくさず、吸血種としての遺伝子を送り込むことがあると云われている。
その結果、＞バンパイア＜よりも下級種となる＞こうもり男＜が生まれたというのが、世の学者たちの中で有力とされている説である。

「メルエ、大丈夫だ。今回は必ず私が護ってやる。安心して呪文の詠唱を行え。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

怯えるメルエの上から降り注がれる暖かく、力強い言葉。

その言葉はメルエの胸の奥から勇気を湧き起こす。
今にも羽ばたきそうな＞バンパイア＜に向かって右手を掲げ上げたメルエは言葉を紡ぎ始める。　自分が母の様に姉の様に慕う女性の期待に応える為に。

「　メルエ！　＞イオ＜は使うなよ！　」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・」

メルエが口を開く寸前にカミュが叫んだ忠告に、軽く頷いたメルエは、右腕から冷気を生み出す。　それは、カミュの声に羽ばたき始めた一体の魔物の背中から生える羽に直撃した。　冷気に包まれた羽は徐々に凍り付く。　自分の意志で動かすことが出来なくなった羽に困惑したまま一体の＞バンパイア＜が地面へと落ちてきた。

「　よし！　よくやった、メルエ！　」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「ふふっ、頭を撫でるのは後だ、メルエ。　今は、こいつ等を倒してしまおう。」

地面に落ちた＞バンパイア＜の胸に剣を突きたて、その命を奪った

後、リーシャは頭を突き出してくるメルエに微笑んだ。
いつものお褒めの作業を断られたメルエは、若干頬を膨らますが、リーシャの言葉に素直に頷き、剣を振るカミュとリーシャの邪魔にならぬよう、サラの傍へと下がっていく。

「カミュ！　そっちは任せたぞ！」

「・・・・ああ・・・・・」

一瞬の目配せの後、頷き合った両者は、背中の羽を羽ばたかせて飛び回り始めた＞バンパイア＜にそれぞれ向かっていく。
＞こうもり男＜の上位種とは言え、能力に格段の違いはない。

それは、日々成長を続けるこの二人にとって致命的だった。
別段、撹乱する魔法を唱える訳でもない＞バンパイア＜は、向かってくる二人の剣速をかわすことなどできなかった。

身を捩り、何とか避けようとする＞バンパイア＜の右腕を斬り飛ばしたリーシャの剣は、そのまま＞バンパイア＜の胸に吸い込まれていく。
右肩から血液の様な体液を噴き出しながら、床に落ちた＞バンパイア＜は数度の痙攣の後、その活動を停止させた。

振り返ったリーシャの目に、＞バンパイア＜の鋭い爪を剣で弾き、返し際に肩口から剣を斬り入れるカミュの姿が映った。
カミュの左腕には、今＞青銅の盾＜はない。
昨日までカミュの左腕にあった盾は、今リーシャの左腕に装備され

ている。
先日の戦闘で盾を失ったサラへリーシャが盾を譲り、カミュがリーシャへと盾を譲ったのだ。　初めは、自分より力量が劣るカミュが盾を自分に渡そうとするのを拒んだリーシャであったが、カミュの最近の言動が、仲間を想ってのものであることに思え始めていたリーシャは、その盾を受け取ることにしたのだ。

「・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「ん？　ああ、よくやった、メルエ。」

カミュが最後の＞バンパイア＜を倒したことを確認したリーシャの横から、移動してきたメルエの頭が突き出される。
メルエの姿に笑みを溢しながら、＞とんがり帽子＜を取ったその頭をリーシャが撫で、それをメルエは目を細めながら受ける様子に、戦闘にほとんど参加しなかったサラの顔にも自然と笑顔が浮かんだ。

「・・・・先に進む・・・・・」

そんな微笑ましいやり取りも、カミュの一言で幕を閉じた・・・・

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

かに思われたが、リーシャの手から離れ、カミュの下へと移動してきたメルエの突き出す頭に、歩き出そうとしていたカミュも溜息を吐くことになる。

メルエの頭を撫で終えた一行は、洞窟の奥へと進んでいく。
洞窟内は所々水が滲みだしているような場所見える。
その水は、毒に侵されている様子などもなく、綺麗に澄んでおり、魔物達の影響で濁ってしまった洞窟内の空気を浄化しているようであった。

「おや？　こんな所に人が入ってくるなど・・・・」

「「「　！！　」」」

メルエがカミュのマントの裾を掴みながら、空いている手で壁から滲み出る水を触っていると、不意に広がった空間で、前方から聞いたことのない声がかかった。

驚き、剣や槍を構えようとするリーシャとサラを制し、カミュが＞たいまつ＜を声の発信元へと向けると、そこにはサラと同じような服装をした初老の男が立っていた。
男の前には、壁からにじみ出た水が溜まり、小さな泉ができている。

「・・・貴方は・・・？」

「あ、はい。　驚かせてしまったようですね。　私はロマリア教会に属する僧侶です。」

「・・・・ロマリア教会の・・・・・」

男の答えに、サラはロマリア教会で会った、女性司祭を思い出す。
慈悲深い微笑みを浮かべ、人を導くような優しい言葉を話す老婆の姿を。
彼女ならば、今自分が胸に抱えている悩みに対し、どのような言葉をかけてくれるだろう。
それは、ルビス教会の司祭としての叱責か、それとも人生というエルフにとっては一瞬のように短い旅の先輩としての言葉か。

「・・・ロマリア教会の僧侶様が、このような所で何を・・・」

対人用の仮面を被ったカミュの言葉に、僧侶は少し困ったような顔をした後、苦笑に近い笑顔を一向に向けた。

「実は・・・この洞窟のどこかに、体力や気力を回復させる『聖なる泉』があるという噂がありましてね。」

「では、その噂の真意を確かめる為に、わざわざロマリアからここまで・・・・」

僧侶の言葉にサラは呟きで返す。

『聖なる泉』という噂が流れているにもかかわらず、＞ノアニール＜の呪いの噂が伝わっていない訳がない。

＞ノアニール＜の話は、通常は国家レベルのものである。

エルフの話を聞いた後に、サラが真っ先に感じた疑問。

『何故、ロマリア国は動かないのか？』

国家レベルの問題にもかかわらず、十数年も放置されている問題。

『カンダタ』問題は、国で討伐隊を出し、更には他国が掲げる勇者と呼ばれる存在に依頼までした国とは思えない程の対応。

その疑問は、僧侶の言葉によってサラの胸の中で大きくなっていった。

「はい。　何故、このような場所にそんな泉が湧いたのか解りませんが、何やら哀しげな呼び声に聞こえるのですよ・・・・」

「・・・哀しげな・・・」

サラの呟きは周囲を岩の壁に覆われた洞窟内に寂しく響いていた。
僧侶の言っている『哀しげな呼び声』とは、『人』との哀しい恋をしたエルフである＞アン＜のものなのであろうか。

「・・・それで、泉を調査しにきた貴方が何故ここに留まっているのですか？」

干渉に浸るサラを余所に、それまで黙って両者の話を聞いていたカミュが口を開く。
自然とパーティー全員の視線が再度、僧侶の下に集まることになった。
その視線のせいなのか、僧侶は恥ずかしげに頭を下げ、弱々しく語り始める。

「・・・それが、途中で武器を落としてしまったらしく、攻撃呪文を使用できない私としてはこれ以上先へは進めず、戻ることも叶わずとなってしまいまして・・・」

「・・・武器を・・・？　サラ、さっきの＞聖なるナイフ＜じゃないのか？」

「えっ！？　あ、ああ！　は、はい。　これではありませんか？

」

僧侶の言葉に思い当たる節があったリーシャはサラを振り返るが、自分の考えに没頭していたサラは、慌てた様子で顔を上げ、先程拾ったナイフを取り出した。

「おお！　それです。　良かった・・・」

「・・・・・」

サラからナイフを受け取って胸を撫で下ろす僧侶の姿を、カミュはいつもの様に表情を失くした顔で見つめていた。

ナイフ一本あるかないかで何が変わるというのか。
サラの様に『バギ』でも使うことができるのであれば理解できるが、この様子では回復呪文といえど、最下級の＞ホイミ＜しか使えないのだろう。
＞ホイミ＜と＞聖なるナイフ＜一本で切り抜けられる程、この洞窟の魔物は弱くはないというのが、カミュの見立てであった。

「・・・大変失礼ですが、貴方はこのまま洞窟から出た方がいいでしょう。　幸い出口はすぐそこです。」

「い、いや、しかし・・・私には泉の調査という・・・・」

カミュの申し出に対する僧侶の反応を見る限り、僧侶自身もカミュのいうことを肌で感じていることが窺える。
ロマリア国家からの命なのか、それとも教会からの指示かは解らないが、それを放棄することへの抵抗と、自身の身の安全が天秤にかかっている様子であった。

「・・・この洞窟を住処にしている魔物は、ロマリア城付近の魔物よりも強力なものが多いようです。　貴方一人でこの先に進むのはかなり困難になると思います。」

「　そ、そうです。　私はアリアハン教会の僧侶でサラと申します。　同じ教会の人間として、その調査は未熟ではありますが、私が引き継ぎますので。」

カミュの提案にサラが後押しする。
被せるような誘惑に、僧侶の心は大きく動き始めていた。

「・・・しかし・・・貴方方は・・・」

「私達は、魔王討伐のためにアリアハンから出た者だ。　私はアリアハン宮廷騎士のリーシャという。」

「・・・魔王討伐に・・・では、オルテガ殿のご子息・・・」

「ああ、ここにいるのが、その息子であるカミュだ。」

揺れ動く心を押えながら、一行の身元を尋ねる僧侶に驚愕の事実が告げられた。

ロマリア国の人間にとって、アリアハン国は卑怯者の国とされている。

アリアハンで英雄であるオルテガもまた、『魔王討伐』という使命を果たせなかった男。

しかし、それは大部分を占めるが、決して国民全員の感情ではない。

中には、アリアハン同様に、オルテガを勇気ある者、『勇者』として見る者もいるのだ。

それは、教会に属する人間等に多く見られる。

魔物＝悪とする教会に属する人間にとって、例え志半ばで倒れたといえども、全世界の人間を救うために立ち上がり、魔物に立ち向かっていった人間は英雄となり得る資格を備えている者と考えているのだ。

「そ、そうですか・・・貴方が・・・オルテガ殿の・・・・わかりました。　貴方方に比べれば、私など何の役にも立たないでしょう。
私はここを出ることにしましょう。」

明らかに胸を撫で下ろした表情。

自分の力量では、この洞窟の奥へと進むことが難しいということを、

この僧侶が一番理解していたのであろう。
自分に課せられた命を誰かに委ねてしまうことを咎められるのではという危険を考慮に入れられない程に追い詰められていたのかもしれない。

「・・・・・・・メルエの・・・・・・・・」

「・・・・メルエには＞毒針＜があるだろう？　それとも『アン』の＞毒針＜では不満なのか・・・・？」

「　！！　」

メルエは、僧侶に手渡された＞聖なるナイフ＜を物欲しそうに見つめ、愚痴を溢した。
そんなメルエを見て、カミュが発した言葉は、メルエにとって胸を鷲掴みにされたような衝撃を受けるもので、弾かれたように顔を上げたメルエの首は千切れんばかりに横に振られることとなる。

僧侶が去った後、一行は再び洞窟の奥へと歩き始める。
奥へ進むにつれ、洞窟内に漂う冷気は濃くなり、肌に感じる気温もまた低下していった。

暗く狭い道を進む一行は、各人との距離を空けず、カミュを先頭に歩を進める。
途中、＞バンパイア＜や＞バリィドドッグ＜等の魔物と遭遇し、戦闘を行いながらも進む一行の前に下へと続く坂道が出現する。

「・・・カミュ・・・」

「・・・ああ。　進むしかないだろうな・・・」

どうするかと尋ねるリーシャに対して、一つ頷いたカミュの反応に、一行はその坂を下へと降り始める。

下へ下へと続く長い坂道を下って行くと、今度は上り坂。
カミュへと確認の為、視線を向ける一行。
頷くカミュに、一行の足は再び前へと進み始める。

「・・・どうなっているんだ？」

リーシャの呟きは、全員の耳に届いてはいたが、誰一人その問いに明確な答えを出せる者はいなかった。

坂を上り終えた場所は少し開けた場所。
壁からにじみ出ている水が溜まっている。
しかし、一行の視線の先には、再び現れた下へと向かう坂道だったのだ。

「・・・・また・・・・上るのですか・・・・・？」

「・・・嫌なら帰るんだな・・・」

溜息と共に吐き出したサラの呟きは、カミュによって即座に斬り捨てられた。
無表情で吐き捨てるカミュの方を見て、サラは考えずにはいられなかった。

カミュは、今の言葉が自分ではなく、メルエの言葉だったら、あそこまで冷たい言葉をかけただろうか？
リーシャであったら、あそこまの無表情で言葉を吐き捨てたであろうか？

サラの中にいつでも残る疑問。
自分はカミュに仲間として認めてもらっているのだろうか？
教会の教えや考えを何よりも忌み嫌うカミュが、その教会に属している自分を認めてくれるのだろうか？

それは、カミュの一挙一足に表れているようにサラは感じていた。
そして、今朝のリーシャの行動。
それが、このパーティーの中でサラの存在だけを更に浮き彫りにすることになってしまった。

「ほら、サラ、行こう。　もう少しだ。」

カミュと睨み合った状態のサラにリーシャの意識的な声がかかる。
サラとカミュの様子を遠巻きに見ていたメルエも、サラの手を引くために傍に寄って行く。

「　あっ、は、はい。　頑張っていきましょう。　」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

リーシャの言葉、メルエの表情、それが一時的ではあるが、いつでもサラの心を前に向けてくれる。
サラの手を取り、歩き出そうとするメルエの姿にサラの表情にもささやかな笑顔が戻った。

再び上り始めた一行を待ち受けていたもの。
それは、坂を上り終わる前に登場を果たす。

「・・・前もって言っておくが、あれは決して＞きのこ＜ではないぞ・・・」

「わ、わかっている！　馬鹿にするな！　それに例え＞きのこ＜だったとしてもあんな色のものを食そうとするものか！」

現れた者は魔物。
それも、カミュの言うとおり＞シャンパーニの塔＜でリーシャが間違えた＞きのこ＜の様な魔物。
ただ、その体躯の色素は決して食物とは言えない毒々しいものだった。

＞マタンゴ＜
おばけきのこの上位種と云われているが、その生態などは謎が多い。
きのこのような形をしてはいるが、その体躯の色は毒々しく、見る

からに毒キノコと解るようなものである。
おばけきのこと同じように、牙の生えたその口から甘い息を吐き、対象の神経を麻痺させ眠らせてから食す。
上位種とはいえ、その力量等は＞おばけきのこ＜と大した差はない。

坂道の途中に現れた＞マタンゴ＜は全部で三体。
リーシャは、すでに腰から剣を抜き構えを取っていた。

「・・・わかっているとは思うが・・・アイツが口を開いたら息を止めろよ。　また眠りにつかれたら面倒だ・・・」

「　わ、わかっていると言っているだろ！　」

「・・・・・・リーシャ・・・・・寝てた・・・・・・」

「　メルエ～～～～　」

カミュの忠告に五月蠅そうに答えるリーシャの横から無邪気な声がかかる。
それに対し、地の底から響くような声を出すリーシャに、メルエは一目散にカミュのマントの中へと避難していった。

とても魔物を目の前にしている人間たちのやり取りではない。
しかし、決して侮っている訳ではない。
目の前の魔物程度では動じることがないだけなのだ。

「先に行くぞ！」

剣を抜いて飛び出したのはリーシャ。
剣を右手に持ち、一体目掛けて駆けて行く。

しかし、リーシャが倒したのは、最初に目標にしていた＞マタンゴ＜ではなかった。
リーシャの飛び出しに驚いた＞マタンゴ＜が後方に引いた反面、横合いからもう一体の＞マタンゴ＜がリーシャ目掛けて体当たりをかけてきたのだ。

意表を突かれる形となったリーシャであるが、対応は冷静だった。
急遽足を止め、横合いから飛んでくる＞マタンゴ＜に照準を合わせ終わると、＞鋼の剣＜を躊躇なく突き出す。
カウンター気味に突き出された剣は、＞マタンゴ＜の胴体に吸い込まれ、きのこの串刺しが出来上がった。

「サラ！！」

前回の教訓から素早く剣を魔物から抜き、飛び去るリーシャ。
後方へと飛びながらサラへ掛け声をおくる。
それは、魔法の行使の合図。

「はい！」

「待て！！　息を止めろ！！」

「バ・・・・・！！！」

リーシャへのサラの返答と、カミュの声は重なってしまった。
サラが詠唱を開始しようとしたその時、残る二体の＞マタンゴ＜の口が一斉に開いたのだ。

カミュの言葉にメルエとリーシャは慌てて息を止める。
だが、リーシャの要望に応えようと詠唱を始めていたサラだけは、呪文を紡ぎ出すために息を吸い込んでしまっていた。

＞マタンゴ＜二体から発生した甘く眠りに誘う息は、詠唱を始めたサラだけが吸い込んでしまうこととなる。

「・・・はぁ・・・またか・・・」

崩れ落ちていくサラの体躯を素早く支えたカミュは、大きな溜息を吐いた。
そんなカミュの姿にリーシャも居た堪れない。
眠ってしまったのはサラではあるが、そのキッカケを作ったのはリーシャである。
結果論になるが、リーシャがサラに攻撃呪文の詠唱を支持しなければ、この事態は起きなかったかもしれない。

「・・・まぁ、あと二体だ。　何とでもなるだろう。」

「そ、そうだな。　私とカミュで一体ずつ倒せば終わるだろう。」

近くにサラの身体を横たえたカミュが出した結論に、リーシャも大げさに頷く。
しかし、そんな二人の考えは、あっさりと覆されることとなる。

「・・・・・・・メルエ・・・・・・・・やる・・・・・・・」

「ん？　別にメルエがやらなくても大丈夫だ。　私とカミュで何とかなる。」

それは、今まで出番のなかったパーティー最年少の少女からの言葉。
それに対し、やわらかく制するリーシャの言葉にも大きく首を横に振り、納得しようとしない。

「・・・・・新しい・・・・・・・覚えた・・・・・・」

「　な、なに！？　」

「　！！　」

その少女の言葉に、目の前にまだ魔物が残っているにもかかわらず、カミュとリーシャは驚きを隠しきれず、胸を張って答えるメルエの顔を振り返ってしまった。

いくらなんでも、魔法習得のスピードが速すぎる。

それが、カミュとリーシャの感じた感想だった。

メルエの魔法の才能は、カミュやリーシャも知ってはいる。

しかし、それでもメルエの歳でこの習得速度は異常であったのだ。

「・・・・わかった。　メルエ、頼む・・・・・」

「・・・・・・ん・・・・・・・」

諦めに似たようなカミュの言葉に、メルエは力強く頷きを返す。

そのまま、こちらの様子を窺っていた＞マタンゴ＜二体へ右腕を向けると、いつもと同じように呟くような詠唱を始めた。

「・・・・・・・・・ベギラマ・・・・・・・・・・」

瞬間、メルエの傍にいたカミュとリーシャの頬にまで火傷を負わせそうな程の熱気がメルエの右腕から発生した。

それは、渦の様な熱風となり、一直線に＞マタンゴ＜へと向かっていく。
熱風が着弾した＞マタンゴ＜の周囲に、凄まじい炎が広がっていく。
まさしくそれは炎の海。

声を発することも、ましてや逃げる余裕なども与えられないまま、
＞マタンゴ＜はメルエの右腕から出現した炎に包まれていった。

＞ベギラマ＜
その名の通り、＞ギラ＜の上位魔法になる。
灼熱呪文としての効力は＞ギラ＜を遥かに上回り、その炎はすぐには終息を迎えない。
その炎は大地を焦がし、上空の空気すらも焼き払う。
現在、古の賢者が残した魔法を使える人間がいないこの世界では、魔法使いと呼ばれる職業の人間が使える攻撃呪文の中でも上級に位置する呪文である。

「・・・・おい・・・・・本当か・・・・・？」

「　カ、カミュ・・・・・メルエは一体・・・・・・」

メルエが作りだした光景は、カミュとリーシャの行動を止めてしまう程のものだった。
炎が未だ収まらない前方では、すでに活動を停止しているであろう＞マタンゴ＜らしき影が見える。
それは、もはや原型を留めてはいないだろう。
それ程の炎なのである。

メルエは未だに字をすべて読むことはできない。
故に、少し前に、魔道書に載っている全ての魔法の名をカミュに尋ねていた。
最初は、もう全ての契約を終えてしまったのかと驚いていたカミュであったが、メルエのたどたどしい説明を受け、納得して全ての名を教えていたのだ。
故に、メルエが新しい魔法を覚えたとしても、カミュが知らない場合が多々出てくる。
＞シャンパーニの塔＜で行使した＞イオ＜や今回の＞ベギラマ＜もそれに当たるものだった。

「・・・・・・・ん・・・・・・・・」

驚きに声を失っていた二人を呼び戻したものは、帽子を脱ぎ、頭を突き出すメルエの声だった。

「・・・あ、ああ・・・凄いな・・・メルエ・・・・・」

「・・・・・・」

若干顔を引きつらせながら、メルエの頭に手を乗せるリーシャとは違い、カミュは炎の収まった先にある黒焦げの物体を見て目を瞑ってしまっていた。

それは、魔物への哀悼なのか。
それとも、目の前の惨劇を作った術をメルエに与えてしまったことへの後悔なのか。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

リーシャの手を受け取り、『今度はカミュの番』とばかりにカミュへと頭を突き出してくるメルエにようやくカミュの目は開かれた。

「・・・・・・!!・・・・・・・・メルエ、顔を良く見せろ。それに右腕もだ!」

「ど、どうしたんだ!!」

メルエの頭に手を乗せようとしたカミュはメルエのその顔と右手に残る痛々しい火傷の跡を見つけ慌てて手をかざし始めた。
そのカミュの様子に、リーシャが慌てて近寄ってくる。

「・・・ホイミ・・・・少し跡が残ってしまうな・・・・・メルエ、いいか？　とりあえず、今使った＞ベギラマ＜は、しばらく禁止だ。」

「・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・」

「・・・・駄目だ・・・・・」

「・・・・・・・・・・うぅぅ・・・・・・・・・・・・」

カミュの言葉に反論を返すメルエに再度戻ってきた言葉は、有無を言わせぬ程の迫力を持ったものだった。
カミュがここまでの迫力を持って言うということは、メルエの反論は認めないということであることぐらいメルエにも理解できた。

「ど、どういうことだ、カミュ！？」

「・・・メルエが使った＞ベギラマ＜は、まだメルエには早かったということだ・・・」

「・・・しかし、発動していたぞ・・・？」

本来、魔法を使用する者、僧侶や魔法使いと呼ばれる者達は、自分の力量に応じて契約を行い、行使を可能とする。
力量に合わなければ、契約ができなかったり、魔法が発動しなかったりするのである。

しかし、メルエは発動した。

ならば力量不足というのは当てはまらないはずである。

「・・・いや、正確には、暴走に近い。　本来、魔法は術者に被害が及ぶことはない。　＞メラ＜を放った術者の指先が燃えて火傷を負ったり、＞バギ＜を唱えた術者の腕が切り刻まれたりはしないんだ。」

「　？？？・・・・・どういうことだ？」

「・・・はぁ・・・つまり、メルエには、この魔法を行使するための魔法力を制御することができていない。　自分が使用する魔法に対して過剰に魔法力を注いでいるのか、もしくは過剰に魔法力を吸い取られているのかは知らないが、メルエはまだ自分の魔力を制御しきれていないことは確かだ。」

「・・・・・・・うぅぅ・・・・・・・・」

カミュの説明の間もずっと、メルエは上目使いでカミュを見上げ唸り声を上げている。
魔法しか存在意義を見いだせていないメルエにとって、その魔法を奪われることは何よりも避けたいことだったのだ。

「・・・はぁ・・・メルエ、唸っても駄目だ。」

「・・・・・・・ぐずっ・・・・・・・・」

「・・・何も『一生使うな』と言っている訳じゃない。　メルエがこの先、魔法を使いながら旅を続けていくうちに制御できるようになる。　契約ができ、呪文も発動出来たんだ。　それは遠い話じゃない。」

目に涙を溜め、鼻をすすり始めたメルエに、流石のカミュも困ったように譲歩案を出した。

メルエの姿に、傍によって頭を撫でていたリーシャも、カミュに釣られたように困り顔になってしまっている。

「・・・メルエの魔法が凄いことは、ここにいる全員が知っている。だが、その魔法でメルエが傷つくことは誰一人望んでいないんだ。わかってくれ。」

「・・・・カミュ・・・・・」

「・・・・・・ん・・・・・・ぐずっ・・・・・・」

メルエと視線を合わせ、真剣な表情で話すカミュの言葉に、メルエは鼻をすすりながら頷くのだった。

「ほら、右手も出せ。」

「・・・・・・ん・・・・・・・」

メルエの右手にカミュがホイミをかけ、火傷の治療を始める。
若干の跡が残ってしまうが、メルエの顔と右腕の治療が終わりに近づいたころ、ようやく治療の本職である僧侶が目を覚ます。

「あ、あれ？　私・・・・・あっ！！　申し訳ありません！」

上体を起こし、周囲を確認するように首を動かしたサラは、ようやくその状況を理解する。
慌てて起き上がり、仲間の下へと走りより、勢いをそのままに頭を下げた。

「大丈夫だ、サラ。　先程は仕方がない。　むしろ、私がサラに声をかけなければ起きなかった事態だ。　私の方こそすまなかった。」

「　そ、そんな！　リーシャさんは悪くありません！　私が未熟なせいで・・・・」

頭を下げるサラ。

それを制して、逆に謝罪を口にするリーシャ。
お互いがお互いを気に掛ける。　そんな普通のやり取り。
しかし、そんな常識的なやり取りは、アリアハンが掲げる勇者には通じなかった。

「・・・どちらにしろ、もう少し魔物の習性について理解しておいてくれ。　今回はまだ三体だったからいいが、アンタ方二人が眠ってしまった後、七体も八体も残っていたら全滅の危機だ・・・」

「　ぐっ！　」

「　はうっ！　」

カミュの歯に衣着せぬ物言いに、リーシャもサラも言葉に詰まってしまう。
眠りに落ちた人間二人を庇いながら、魔物を倒すのは至難の業だ。
メルエの広範囲にわたる魔法を使用すれば可能なことは可能なのだが、それをリーシャもサラも口にはしない。

彼女達にとっても、メルエは幼い子供であり、何より妹同様の存在なのだ。
出来るならば、無理はさせたくない。
しかも、リーシャに至っては、先程のメルエの姿を見ている。
メルエにあんな思いをさせたくはないのだ。

「・・・・・・・・もう・・・・・・・・行く・・・・・・・・・」

何とも言えない空気が漂う中、右手の痛みがなくなったメルエが、その右手でリーシャの左手を握り、先へと促す。

それは、いつもリーシャとサラ、そしてカミュさえも突き動かすことのできる力。

抑揚もなく、呟くような小さな声にもかかわらず、力強い声。

「・・・・ああ・・・・行こう・・・・・」

メルエの声に一つ頷いたカミュを先頭に一行は再び坂道を上りはじめた。

今や、時に彼ら一行を結ぶ楔となり、時に彼ら一行を突き動かす動力となり得る少女を引き連れて。

「・・・・・・・これは・・・・・・・・」

「　す、すごい。　」

坂道を上り終わったその先に広がる光景は、一行をすっぽりと飲み込む程のものだった。
そこは、水が壁から染み出しているのではなく、地下から湧き出したように中央に泉となって広がっている。
その泉を囲むように四方を柱が、まるで泉を護るように、そして泉を優しく包み込むように立ち並んでいた。

「・・・・魔物の気配が全くない・・・・」

カミュの言葉通り、この坂道を上がりきった広間には泉が湧き出ている以外、邪悪な気配は何一つない。
それとは相反するような、慈悲深く、清らかな空気が広がっているだけであった。

「・・・・・・・・お水・・・・・・・・・」

「　あっ！！　メ、メルエ！！　」

その空気を肌で感じたためか、それとも単純に喉が渇いただけなのか。
メルエが、いち早く泉へと駆け出していく。
未だにどんな物なのかすら解っていない物に駆け寄るメルエを制止しようと伸ばしたリーシャの手は、横から上げられたカミュの手によって止められた。
泉に辿り着いたメルエが泉の水を掬おうと右手を泉の中に入れたその時、一行は不思議な光景を見ることになる。
メルエの右手が、まるで＞ホイミ＜を掛けた時の様に光りはじめたのだ。
いや、正確には＞ホイミ＜程度のものではなかった。
それは、回復呪文であるならば上級に位置する魔法と同等か、もしくはそれ以上の光だろう。
「・・・・メルエの右手の火傷が・・・・・」
「　や、やけど！？　」
リーシャの言葉通り、光に包まれたメルエの右腕に残されていた火傷の痕が薄れていく。
メルエの火傷の存在自体を知らないサラが素っ頓狂な声を上げるが、カミュもリーシャもその不思議な光景に魅入られ、サラの問いかけに答えることはできなかった。

「・・・・メルエ、顔にもその水をつけてみろ・・・・」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

自分の腕を包む光を不思議そうに見つめていたメルエの後方に移動したカミュが声をかけ、メルエはそのカミュの言葉にこくりと頷いて従った。

火傷の痕が綺麗さっぱり消え失せた小さな右手で再び掬った泉の水を、メルエが頬の火傷痕に掛けると、右腕と同様に緑色の光を伴い傷跡を消していった。

「・・・すごい・・・ど、どういうことなのですか？　この泉が＞聖なる泉＜なのでしょうか？」

全員が泉に手を入れているメルエの傍まで移動した後、サラが疑問を口にした。
それは、この＞西の洞窟＜に入ったばかりの頃に出会ったロマリア教会の僧侶が口にしていたもの。

「　あ、ああ、おそらくそうだろうな・・・・・・・カミュ、しかし、この泉は何故このような場所に？」

「・・・・はぁ・・・・いつも思うのだが・・・・アンタが知らな

いことを俺が知っていると思う根拠を俺は知りたいのだが・・・・」

「そ、それは・・・・カミュだからだ！」

「ぶっ！？」

いつもの様に解らない事柄をカミュへ尋ねるリーシャに、カミュは答えを与えなかった。
リーシャが期待していた答えとは別の言葉に、リーシャ自身戸惑い、そして結局自身もあながち的外れでもないような答えを叫んでしまう。
その珍回答は、久しぶりにサラの笑いのツボを刺激したらしく、サラは思わず吹き出してしまう。

「・・・・・・おいしい・・・・・・・」

そんな恒例ともなりつつある三人のやり取りを余所に、すでにメルエは泉の水を口に含んでいた。　清らかで優しい空気を纏う泉の水とは言え、そのメルエの行動を注意していなかったことを三人は悔やんだ。
メルエは何も知らないのだ。
危険性などの注意をしていなければ、この先どんな行動に出るか分からない。
サラは、メルエへの教育に力を入れることを心に決めた。

「・・・・なるほど・・・・・掛ければ傷などを癒し、飲めば気力や魔法力を回復させるのか・・・・万能だな・・・・・」

そんなサラの静かな決意を尻目に、カミュはメルエと同じように泉の水を口に含んだ後、納得したように頷いていた。

「・・・・・それは凄いな・・・・・気力や魔法力も回復するのか・・・・・？」

「・・・ああ、まぁ、アンタにはそっちの方は関係のないことだがな・・・・」

「・・・・カミュ、回復の泉もある・・・・・ここで一晩と言わず、二晩でも稽古をつけてやろう。　どんな傷も癒し、気力も回復させるのであれば、多少無理もできよう・・・」

確かにカミュの言う通り、『魔法力の回復』に関してはリーシャには関係がない。
しかし、リーシャにも気力が萎えることぐらいはある。
誇り高き宮廷騎士ではあるが、リーシャは自身が女性であることも捨ててはいない。
カミュの言葉は女性であるリーシャに対する配慮に欠けているのだ。

「ふふっ、でも、回復できる泉がここにあるというのは強みですね。この先、少し手強い魔物が出てきたとしても、もう一度ここに戻ればいいのですから。」

「・・・はぁ・・・アンタはここで何日過ごすつもりなんだ？　例え、傷や気力が回復するにしても、食料がない。それとも、アンタはこの洞窟に住む魔物を食料とするつもりなのか？」

「そ、そんなことはしません！」

カミュとリーシャのやり取りを微笑ましいもののように笑顔で見つめていたサラは、カミュの逆襲に合う。
カミュの言う通り、食料がなければ、例え傷が回復したとしても『生物』であれば飢えで命を落としかねない。
それは、何も『人』だけではない。
『エルフ』も、そしてサラが忌み嫌う『魔物』であろうと食料がなければ、その生を全うすることなどできはしないのだ。

「・・・回復は終わった。先に進む・・・・」

いつもの様に、突然話を切り上げたカミュが先へと進み始める。
その後をリーシャが歩き、傷や魔法力を回復させたメルエが続いた。
サラも、慌てて泉の水を口に含み、仲間の後を追うこととなる。

＞聖なる泉＜をでた一行は、洞窟の更なる奥へと足を進める。
もはや、この＞西の洞窟＜に入ってからかなりの時間が経過していた。
＞聖なる泉＜で気力も回復しているため、一向に自覚はないが、おそらく洞窟の外では完全に日も落ち、夜も更けた頃だろう。

更に、塔のように階段のようなものがない為、自覚し辛いが、坂道を上り下りを繰り返し、相当地下へと潜っている。
水が壁から流れ出たり、所々では上層部分から瀧の様に落ちてきているため、空気の出入りはあるのだろう。
現に、カミュとリーシャの持つ＞たいまつ＜の炎の火が小さくなってきている訳ではない。
一行が息苦しさを感じることもない。

「しかし、随分と奥に行くのだな・・・・・こんな所まで、『人』が来るのか？」

奥へと進む中で発したリーシャの疑問は、＞ノアニール＜の若者と

＞エルフ＜の『アン』のことを言っているのだろう。
確かに魔物の住処である洞窟の最深部へと続く道を歩いて来ても、ここまでそれらしき姿は確認されていない。
つまり、＞ノアニール＜の老人の話が本当であるならば、二人は更に奥へと向かったということになる。

「・・・さあな。　まず、あの老人の話は仮定にすぎない。　ここにその二人が来たという確証がない以上、行ってみなければ分からない。」

「で、では、ここまで来て、無駄足という可能性もあるということですか？」

＞聖なる泉＜を出て、ここまで進む途中だけでも、一行は五度も魔物と遭遇していた。
この洞窟を根城とする＞バンパイア＜がほとんどだったが、先程は＞マタンゴ＜四体と＞バリィドッグ＜三体という異色な組み合わせ。

メルエの＞ギラ＜と、サラの＞ニフラム＜、そして、カミュとリーシャの剣技で退けることはできたが、なかなかの苦戦であった。
そんな魔物との戦闘を繰り返しながら進んできた道が、全くの無駄であったとしたら、それはサラにとってかなりの精神的ダメージを受ける代物である。

「・・・・・サラ・・・・・・・早く・・・・・・・・」

カミュの言葉に足が止まってしまったサラに、メルエの容赦ない一言が掛けられる。
サラの問いかけに答えることがなかったカミュは、もうすでに地下へと続く坂道を下り始めていた。

「あっ！　ま、待って下さい。」

最近パーティー内で置いて行かれそうになる頻度が増しているサラの叫びが洞窟内に響き渡った。

「「「「・・・・・・・」」」」

先程の坂道を下り終わった一行は、再びその光景に飲み込まれる。
今回は、誰一人声を上げることすらできなかった。
それ程の広大な景色。

地下から湧き出ている水が、泉という形ではなく、一面を覆い尽くしている。
むしろ、見渡す限りの地下湖と言っても過言ではない。
申し訳程度にカミュ達が立つ地面があるようなものだった。

そこは、先程の＞聖なる泉＜周辺と同じように、魔物達の気配はない。
あるのは、慈悲深い澄んだ空気と、そこに微かに混じる物哀しい空気だけであった。

「・・・・・カミュ・・・・・」

「・・・・奥へ行こう・・・・」

カミュへと視線を移したリーシャの呟きに、一つ頷いたカミュは、地下湖の中心に位置する場所にある浮島の様な場所へと歩を進めていく。
リーシャの手を離し、カミュのマントの裾を握ったメルエも周囲を興味深く見渡しながら奥へと歩いて行った。

「「「「・・・・・・・・・」」」」

そして、一行はついに見つけることとなる。
＞ノアニール＜の住民全てを巻き込んだ騒動の発端となった二人を・・・・

「・・・・そ、そんな・・・・」

「・・・・やはり・・・・」

その姿は、すでに変わり果てていた。
愛し合った二人の姿は、生きている時の姿を想像することすらも拒むように、骨だけになっている。　折り重なるように重なった肉体は、魔物の食料になることもなく朽ちはて、土へと返っていた。

十数年の時間が立っているのだ。
先程のカミュの言葉通り、食料がなければ、例え＞聖なる泉＜があろうと、餓死してしまうだろう。

「・・・何故・・・何故、死を望んだのですか・・・？」

「・・・・サラ・・・・・」

白骨に静かに語りかけるサラの言葉。
それは、『人』を導く僧侶の問いかけ。
餓死することが解っていても、この洞窟から出ようとせず、この場所で死を迎えた若い二人への心からの疑問であったのだろう。

「・・・・・・・あれ・・・・・・・・・・」

「・・・ん・・・・？」

白骨を見つめるサラとリーシャとは別に、メルエが白骨の傍にあった小さな木箱を発見し、カミュへと伝えていた。
それは、本当に小さな木箱。
女性が自身の身につける装飾品などを入れるようなとても小さな箱だった。

「・・・・カミュ・・・・・それは・・・・？」

「・・・・・・・・」

木箱を手にしたカミュへとリーシャとサラも近寄ってくる。
メルエにも見えるように、カミュは一度しゃがみ込んでからその木箱へと手を掛ける。
ゆっくりと開いて行く木箱の中には、小さな木箱には似合わない程の大きな赤い宝石と、一つの手紙が入っていた。

それこそが、おそらく＞エルフの至宝＜である『夢見るルビー』なのだろう。
大粒の赤く輝く宝石。
それは、女性であれば誰しも魅入られる程の輝きを放っていた。

『夢見るルビー』に魅入られる、リーシャ、サラ、メルエの三人。
だが、カミュは、ルビーの他に木箱に入っていた手紙を手に取った。
ルビーの入った木箱をサラへと手渡し、数枚に及ぶ手紙を開き読みはじめたカミュの表情は、読み進めるに従い、その表情を失くしていった。

最後まで読み終わったカミュは、手紙をリーシャへと手渡し、深い溜息を吐いた後、ここからでは見ることも叶わない天を仰ぎ、目を瞑った。

西の洞窟（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

最近、ドラクエ音楽を聴いていることは書きましたが、？の小説を書いているため、？の音楽が多いです。
その中でも、最近は？の『勇者の挑戦』に聞き入っています。
あの音楽に合わせた物を早く書きたいという想いと、本当にあれに合う文章が書けるのだろうかという恐怖があります。

過去～アン【エルフ】～（前書き）

今回も長くなってしまいました・・・・

今回はエルフのアンについてのお話です。

過去～アン【エルフ】～

優しい陽の光が降り注ぐ芝生。
周囲の木々を宿り木にしている小鳥たちのさえずり。
それは、通常、実に心地よく、そして心が躍るもののはずである。

しかし、一人の女性にとってそれは、毎日繰り返される日常の一コマ。
決して変化することのない刺激も心の躍動もない毎日の始まりを意味していた。

「・・・はぁ・・・毎日、毎日同じだわ。」

溜息と共にこの里での暮らしに不満を呟く娘の名は『アン』。
この＞エルフの隠れ里＜を治める女王の一人娘である。

エルフ達は、広いこの世界の中で、今ではこの里以外にはほとんど存在しない。
元々、繁殖能力が乏しいエルフではあったが、度重なる争いにより、その数を更に減らしていった。

世界のどこかに、ここと同じような＞隠れ里＜が存在するのかもしれないが、そんな噂はここまで届いては来ない。
もう数十年、数百年とエルフはこの＞隠れ里＜でひっそりと暮らし

ているのだ。
まるで、『魔物』や『人』から身を隠すように。

「・・・なんで、私達がこんな風に隠れて暮らさなければいけないのかしら・・・」

それが、生まれて２０年程しか経たない、エルフにとっては赤子同然に幼い『アン』には理解が出来ない。
エルフの女王の一人娘であるアンには、エルフの中でも有数の魔力が備わっていた。
それを生きている物に向けたことはないが、『流石は女王の子』として育ってきたアンにとって、同族達が『魔物』や『人』に怯えるように暮らす意味が理解できないのだ。

「・・・はぁ・・・森の外はどんな所なのかしら・・・・」

「アン様、ここにおられましたか。　女王様がお呼びです。」

溜息を繰り返すアンに不意にかかった声。
その声の主は、母である女王の側近とされるエルフの戦士であった。
魔力は高いが、筋力の弱いエルフにおいて、稀に生まれてくる筋力の高いエルフは、代々エルフの長の親衛隊として重宝される。
目の前でアンに跪いているエルフも同様であった。

「・・・はぁ・・・わかりました。　すぐに向かいますと伝えてください。」

「畏まりました。」

溜息と共に吐き出されたアンの言葉に、女王の側近は恭しく頭を下げ、アンの母親である女王の待つ屋敷へと下がって行った。

大抵、女王である母から呼び出される時は、何かのお咎めである。心当たりがありすぎるアンにとって、母親の呼び出しは溜息を吐いてしまうほど憂鬱なものであった。

「アン様、おはようございます。　今日は良い天気ですね。」

「・・・おはよう・・・私の心は、曇り空だけどね・・・・」

「また何か女王様に叱られることをなさったのですか？　アン様もそろそろしっかりなさいませんと。」

さわやかな笑顔で挨拶をくれた里の住民に向けるアンの表情は、言葉通り曇ったものだったが、それがいつもの事なのか、住民は気にした様子もなく、零れるような微笑みを浮かべたままアンとの会話を続けていた。

「・・・じゃあ、私はお母様の所へ行ってくるわ・・・・行きたくはないけれど・・・」

「ふふふっ、はいはい。　アン様に心当たりがおありなのでしたら、覚悟を決めて早めにお顔を出された方がよろしいですよ。」

「・・・・心当たりが多すぎて、どれだか分からないわ・・・・」

優しい笑みを浮かべたままの里の者に別れを告げ、アンは母親が待つ、女王の屋敷へと足を進めた。

「アン様、お待ちしておりました。」

「・・・ふぅ・・・お母様は、中にいるの?」

「はい。　先程からお待ちになっております。」

屋敷の入口に、先程アンを呼びにきた側近が立っていた。
恭しく頭を下げる側近の態度に何故かアンは溜息を溢す。

アンは、母親の周囲にいる者達には辟易していた。
確かに自分は女王の娘であることは間違いない。
しかし、次期女王かと問われれば、それは否なのだ。

元来、エルフの長は世襲制ではない。
長い年月を生きるエルフにとって、それを纏める者にはそれ相応の能力が必要となってくる。
それは、魔力の量であったり、エルフとしての質であったりするのだが、アンは自分がその素質を持っているとは思っていない。
母親の様に常に笑顔を見せずにいることなどアンには無理な注文であったし、周りのエルフ達全ての態度が、今目の前にいる側近の様な態度であれば、それこそアンは窒息死してしまう。

「こちらです。」

「・・・ふぅ・・・わかってるわ。　一人で行けます。」

先導しようとする側近をその手で制し、アンは女王の待つ謁見の間へと進んでいった。
これ以上、母の周囲を固める者達と共に居れば、アンの呼吸は止まってしまいかねなかったのだ。

「・・・・待っていましたよ、アン。」

「・・・お母様、今日はどのようなご用件ですか?」

娘である自分ですら、物心ついた頃から目の前の玉座に座るエルフの笑顔を見たことがない。　里を護るエルフの長としての顔しか、娘のアンも見たことがないのだ。
母親としての優しさも、暖かさも、そして厳しさも感じたことはない。

「アン、貴女はまた里の外へ出ましたね。　何故、私の言うことを聞けないのですか!?」

アンは、何度か里の外の森へ出ることがある。
しかし、それはこの里の中では禁忌の行為。

例え、『結界』があり、魔物や人が近寄ることがないとは言え、エルフの中ではまだ生まれたばかりの赤子同然のアンが外に出ることは大きな危険を伴うのだ。

「・・・でも・・・魔物も出ないですし・・・・」

「『結界』は絶対ではありません。　＞魔物＜も＞人＜も迷い込んでくる可能性もあるのです。」

アンの弁解は母親によって斬り捨てられる。
女王にとって、自分の娘であるアンが率先して里の規則を破ってしまえば、里の者達に示しが付かないと考えている。
それは、アンを通常の里の住民と同列に考えていない証拠でもあるのだが、若いアンにはそれが解らない。

「・・・でも・・・」

「『でも』ではありません！　貴女のその勝手な行動に何人のエルフが動いたと思っているのですか！？」

言葉を発しようとするアンを制するように、女王が言葉を被せる。
女王の言うとおり、アンの行動によって、アンの捜索の為に数多くのエルフが動いた。
アンがいなくなるのは今に始まったことではないが、曲がりなりに

も女王の娘である以上、その安否は最重要事項となるのだ。

「・・・はぁ・・・いいですね。　今後は里から出ることは固く禁じます。」

「わ、私は、籠の中の鳥ではありません！　私は女王の娘という前に、普通のエルフの娘です！」

再度、静かにアンに語りかける女王の言葉に、アンは素早く反応を返す。
それは、悲痛な叫びであるとともに、自分の立場や存在を軽く見るような発言と女王には聞こえた。
女王は、一度目を瞑った後、再度厳しい表情を作り直しアンを見つめる。

「・・・同じことです。　アン、貴女は私の唯一人の娘なのです。
貴女は一人のエルフの娘である前に、この里の女王である私の娘。
それは、貴女がどれ程否定をしようとも、外れることのないものなのです。」

「・・・・・・・・・」

女王の言葉は、アンの期待していたものではなかった。
このような時ぐらい、アンを女王の娘としてではなく、普通の母子

として接してほしかったのだ。
しかし、今も尚、玉座に座る母親の顔には、女王としての仮面が付けられている。
いや、元々それは仮面なのではなく、素顔なのかもしれない。
そう、アンは思っていた。

「・・・お話はそれだけでしょうか、女王様？　・・・でしたら、これで下がらせて頂きます。」

アンの精一杯の抵抗。
自分を女王としての視線からしか見ない母親に対しての精一杯の皮肉をぶつけ、素早く身を翻したアンは、謁見の間から足早に退出していった。

「・・・ふぅ・・・」

アンの出ていった謁見の間に、女王の溜息が洩れた。
目を瞑り、天を仰ぐように顔を上げた女王の表情は雲っている。

女王には、アンの感じている不満が理解できていたのだ。
アンが生まれた時には、すでに女王としてこの椅子に座っていた。
やっと生まれた愛しい我が娘を腕に抱く暇もなく、里に住むものと、世界中に散らばったエルフの保護に奔走していたため、アンに寂しい思いをさせてしまっていたことを悔やんでもいる。

しかし、エルフを護る為には、そうするしかなかったのだ。
『人』は神から与えられた、繁殖能力と、努力という才能を持っていた。
知識も魔力も『エルフ』には及ばず、身体能力は『魔物』には及ばないが、他種族にはない、新しく何かを『産み出す』ということにかけては『人』に敵う者などいなかったのだ。

そして、彼等は他種族の脅威へと成長していった。
傍観を決め込んでいたエルフにすら牙を向けるようになる程に・・・
・

「・・・アン・・・・・貴女がどれ程否定しようとも、次期女王は貴女以外にはいないのですよ・・・・」

目を瞑ったまま女王が呟いた言葉は、エルフの未来に関すること。

『人』との争いも、今は膠着状態に入っている。
原因は魔王バラモスの台頭である。
それ以前から、エルフを護るかのように魔物が人を襲うことが多くなってはいたが、魔王の登場という決定的な出来事にエルフと人の争いは沈静化していったのだ。

おそらく、このまま魔王バラモスが人を支配したとしても、逆に人が魔王を討伐したとしても、『エルフ』と『人』との争いは終止符を打ったままだろう。
女王はそう考えていた。
それならば、自分の役目も、もうあと百余年。

人との争い、それに対する報復を考えるエルフ達。
それを抑え、一つに纏める為には、エルフ内を厳しく律し、そして率いていかなければならない。
女王として即位したときには『人』との争いの真っただ中だった為に、女王はその感情を胸の深い底へと隠したのだ。

「・・・・アン・・・・・」

だが、それももう必要なくなるだろう。
これからはアンの様なエルフが上に立つ時代。
アンは、『自分は女王の娘というだけで、次期女王ではない』と思っていることだろう。
しかし、女王は、身贔屓ではなく、次期女王はアンしかいないとすら思っていた。

確かに、魔力の量や質では、アンは現女王である自分には敵わないだろう。
しかし、アンには自分にはない物を数多く所有しているのだ。

通常女王の娘となれば、周囲のエルフからの扱いも変わってくる。
それこそ、自分の周囲にいる側近たちのような態度が当然とも言え

るのだ。
しかし、アンに対しての里の者達の反応は違う。
それは、里一番の若い者ということを差し引いても、アンへの接し方は異常なのだ。

長く続いた争いにより、数が減り、世界中に散らばってしまったエルフを、これから先、纏めていくのは厳しい規律でも、女王としての威光でもなく、アンが持つような暖かさだと女王は考えているのだ。
まるで里にいるエルフ全体が一つの家族であるように接し、お互いで助け合い、叱咤激励しながら前へと進めていく。
アンにはその能力があると思っていた。

「・・・誰か！」

「はっ、ここに・・・」

「アンの護衛を頼みました。　できるだけあの子の自由に。　しかし、身の安全を最優先に。」

「はっ。　畏まりました。」

とても難しい注文である。
それでも、控えていた側近は表情一つ変えることなく、恭しく頭を下げると、謁見の間を出て行った。

残ったのは、またしても女王唯一人。
もう一度目を瞑り、何かを考えるように思考の渦に落ちていく女王の姿があった。

女王の屋敷を出たアンは、その胸の内に色々な想いを持ったまま、里の中を歩いていた。
基本、女王の屋敷とアンの自宅は違うため、あの屋敷はアンの家ではないのだ。
幼い頃から、自宅と呼ばれる場所に、アンが起きている時間帯に女王である母が帰ってきたことは数える程しかないが・・・・

「・・・私はもう子供じゃないのよ・・・魔法だって覚えたし。」

家への道を歩きながらアンは愚痴を溢し始める。
確かに『人』であれば、成人として扱われる歳ではあるが、アンはエルフ。
長寿のエルフの中では赤子も同然なのだ。

それが、若いアンには不満なのである。

「・・・アン様、女王様はご心配なのです。　女王様は心からアン様を愛しておいでです。　愛しているからこそ、里の外へ出ることを禁じているのです。」

「・・・お母様は、私を女王の視点からしか見ていないわ。　私は、お母様に甘えたことも我儘を言ったこともないわ。」

屋敷を出てすぐに、護衛及び監視の役目を担った側近が近付いてきて、アンに言葉をかける。　アンは、その側近の登場に驚く様子もなく、答えを返した。

『今、愚痴をこぼしている内容、里の外へ出る行為自体が我儘なのでは？』

という疑問が側近のエルフの頭に浮かんだが、『そこはまだ子供なのだ』と口には出さなかった。

「そんなことはございません。　女王様はアン様を想って言っているのですよ。」

「はいはい！　もういいわ。　もう私はこのまま家に帰るから、監視は必要ないわよ。　貴女も暇じゃないんでしょ？」

鬱陶しそうに側近の言葉を遮り、アンは家へと向かう道を歩いて行く。
女王の側近に対し、そのような態度を取ること自体、アンがその他の里の者達と違うということにも、アンは気が付いていない。

「アン様、くれぐれも里の外にはお出にならぬようにお願い致します。『結界』がある森とは言え、何が起こるか解りません故に。」

「はいはい。わかっているわよ。」

アンの態度を気にかけた様子もない側近の続く諫言には、アンは振り向くこともなく答え、家へと入って行った。
戸がしまったことを確認し、側近は女王の屋敷へと下がっていく。

この分では、今夜は家から出てくることはないだろう。
明日の朝、再び護衛に戻れば良いと考えての行動であったが、この側近も指示を出した女王も後々、このときのことを悔やむことになる。

里の中は静まり返り、薄暗い。
まだ、太陽は地平線からその顔を出し始めたばかりの刻限に、アンは家を出ていた。

強く拘束されれば、尚更強く反発したくなる。
それは、子供特有のものであるが、女王の娘であるアンも例外ではなかった。
母親も側近も里の外の森は危険が伴うと言うが、アンは森の中で『魔物』はおろか、『人』に出会ったことすらない。

『この前が大丈夫であったのだから、今日も大丈夫。』
そういう子供ならではの言い訳がアンにはあったのだ。

故に今日もまた木々がアーチを描く門を潜り、里の外へと足を踏み出す。
側近が迎えに来るであろう刻限までには戻れば良いと考えて・・・・

森の中は今日も静けさに包まれていた。
朝の早い鳥たちの囀りや、小動物達の姿。
里の中だけの生活を送っていたアンにとって、日々変わる森の色合いは、その心を弾ませるものであった。

朝露を掬い、木々を見上げる。

大きく広げた枝々に色付く葉達によって、上ったばかりの太陽の光は遮られているが、それでも森の中は徐々にその色合いを鮮やかにしていった。

「ふふっ、やっぱり、魔物の気配なんて全然ないわ。　お母様も心配し過ぎなのよ。」

確かにアンの周囲に魔物の気配はない。
『結界』の影響もあるだろうが、基本的にこの森に魔物が入ってくることはなく、暗黙の了解として、互いの領域を区別しているようであった。
以前に一度、アンも森の中に迷い込んだ魔物を見たことはある。
その時はアン一人ではなく、女王である母親と数人の側近が一緒であった。
思えば、あれ以降、アンに対する里の外出禁止令が出たのだった。

エルフの里の民も、食料などを取るためにこの森に入ることはある。
しかし、その時には必ず護衛をつけることになっている。
決して、アンのようにたった一人で森に入ることはないのだ。

「・・・でも・・・魔物の気配はないけれど・・・何か今日は違うわね・・・？」

アンが感じたのは、森の中のざわめき。
魔物の様な邪悪な気配はないが、それとは違う森の中の生物たちの喧騒があった。

それは、焦りや興味。
内に秘める魔力の高さからなのか、アンにはそれを感じることができていた。

「・・・あっちの方ね・・・・」

森の声にならないざわめきの方向へと歩を進めるアン。
それは、危険に遭遇したことのない子供の行動。
恐怖や警戒心よりも興味が勝ってしまった結果であった。

森を進むと、アンが感じるざわめきは大きくなっていく。
それは、森にある全てのもの達の意識がそこに向かっているようであった。

そしてアンは出会うこととなる。
彼女の運命を大きく左右する存在に・・・・

そこは、森の木々たちが作る動物達の憩い場。
立ち並ぶ木々がぽっかりと開けた空間。
優しく降り注ぐ朝日がその空間を照らしだし幻想的な光景を作り出

していた。

その空間にある切り株に腰を落とし、集まってくる小動物や鳥たちに食料を与えながら、自分の口へも運んでいる一人の青年がいた。

『・・・人間・・・？』

木の陰に隠れながらその光景を見ていたアンは、その青年が何なのか分からない。

生まれて２０年、里の外に出たことがないアンは、『人』を見たことがない。

そして、男という性別も・・・

その人間らしい青年は、穏やかに微笑みながら手に持つパンを千切りながら、周囲に集う動物達へと与えており、朝日が照らし出すその姿はとても優しげに映し出していた。

青年の様子では、おそらくこの森に入ったのは初めてではないのだろう。

何かの拍子で迷い込んでしまったが、入口付近であったため、何事もなく出ることも可能であったのかもしれない。

そして、森に入った時に魔物の気配がないことに気付き、何度か足を運んでいたようだ。

『・・・あれが人間？　聞いていた話と違うわ・・・穏やかそうな生き物ね・・・』

アンは遠目に見ながらその青年の動きをじっと見ている。
その内、食料を与え終えた青年は、ゆっくりと立ち上がり、野草などを入れた籠を抱えて森を出て行った。
森の出口に向かう青年の後姿を、動物達が見送るように見つめる中、アンもまたその青年の後ろ姿に魅入ってしまう。

青年の姿が全く見えなくなった頃に、やっと我に返ったアンは、自分がいつの間にか森の出口付近まで来てしまっていたことをようやく会得する。
それは、側近たちが自分を迎えに来る刻限にまで間に合わないことを意味するものだった。

「い、いけない！　また怒られてしまうわ！」

弾かれたように身を翻し、里への道をアンは全速力で走りだす。
アンの声に驚いた森の動物達もまた、それぞれ森の中へと散って行った。

「・・・アン様・・・今までどちらに・・・？」

家に辿り着くと、そこには石像のように固まったまま門の前に立ちはだかる側近がいた。
家に辿り着く少し前に息を整えていたアンは、カモフラージュの為に持ち出していた水桶を抱えてにこやかな笑顔を側近に向ける。

「おはよう。　水を汲みに行っていたの。　少し、そこで話し込んでしまって、遅くなってしまったわ。」

「・・・そうですか・・・・できるならば、水汲みも私が来てからにして下さい。」

「はいはい。　気をつけるわ。」

水を並々に注いだ水桶を両手で抱えているアンに側近は溜息を吐く。
いつも、里の外へ出たアンならば、夕方まで戻ることはないため、アンの言葉を信じることにしたようだった。

そして、アンにとって、これまで過ごしてきたような退屈な毎日とは違う日が始まった。
里に暮らすエルフ達との会話もいつもと色合いが違う。
アン自体は気が付いていないが、里の住民はアンの変化に少なからず気が付いていた。
いつもより笑う回数が多い。

笑顔をよく見せるアンではあるが、今日のアンの笑顔はいつもよりも輝いていたのだ。

アンの頭の中には、常に今日見た光景が思い浮かんでいた。
それは、誰かと会話をしている最中でも、一人で洗濯をしている時でも、つい呆けたように思い浮かべてしまっていたのだ。

それは、アンのつまらない退屈な日々を変えてくれるような予感のする光景。
アンはそんな予感に胸震えていたのだ。

その日から、明朝の森訪問が始まった。
毎日毎日、朝日が昇る前に起き、側近が迎えに来るまでの時間はアンにとって心が躍るものとなっていく。

アンが出会った青年は、毎日森に現れる訳ではなかったが、それでもアンは雨の日も風の日も森へと訪れた。
それは、愛しい者に会いに行く女性の様に健気に。

そして、歯車は動き始める。
それは、アンにとって幸せの始まりなのか、転落への序章なのか・・・

その日、いつもの様にアンは里を抜け出し、森へと歩いて行く。
いつもの場所、いつもの光景。
そこに、いつもの様に朝日に照らし出され、美しく輝く青年がいた。
その周囲には、やはり動物達。
朝露に濡れた野草を籠いっぱいに取り終え、休憩を兼ねて朝食を取る青年の姿に、アンは魅入られた。

ここ最近は、アンの心の中をこの青年が占める割合が大きくなっていた。
それは淡い恋心なのかもしれない。
しかし、経験のないアンには理解できない感情であった。

一人の人間を見つめるアンは、いつもよりも近付いてしまっていた。
アンの気配に真っ先に気が付いたのは動物達。
与えられたパンをかじっていたうさぎが、ぴくりと耳を動かし顔を上げたかと思えば、そのまま森の中へと逃げ去ってしまった。
うさぎに続くように次々と森の中へと動物達は逃げ去っていく。

「　！！　」

動物達の行動に驚いた青年は、周囲を見渡し、その視線の先にアンを捉えて止まった。

アンは自分の姿が人間に見つかってしまったことに身体を強張らせるが、視線を止めた青年の柔らかな笑顔に緊張が解けていく。

「・・・初めまして・・・君は誰・・・？」

「えっ！？　あ、あの・・・」

突然掛けられた声に、アンは戸惑い口籠る。
そのアンの様子に笑みを深めた青年は、優しく手招きを返してきた。

「・・・僕は、＞ノアニールの村＜に住む、ギルバード。　君はこの森に住んでいるの？」

「あ、う、うん。　私はアン。　貴方はこの森に毎日来ているの？」

アンの問いかけは、答えを知っている物。
青年を毎日見かけている訳ではないのだから、何日に一度ということは間違いがないだろう。

「いいや。　毎日ではないけど、この森には不思議と魔物がいないから、たまに野草やきのこを取りにね。」

「そ、そう・・・」

いつの間にか青年がすぐ前にいる。
それは、青年が近づいたわけではない。
切り株に座る青年にアンが近づいて行ったのだ。

「この森の中には、村があるのかい？」

「いいえ、村ではないわ。　貴方は・・・・『人間』なの？」

「　えっ！？　人間って・・・・・君は違うのかい？」

近づいても優しく微笑む青年に対し、警戒感を解いてしまったアンは、不用意な質問をぶつけてしまう。　それは、アンの素性を明らかにしてしまうほどに危険なもの。
しかし、それがどれ程危険なものなのかをアンは理解できていない。
アンの母親である女王に話したのなら、極刑に値する行為だと叱責を受ける可能性すらあるものだった。

「・・・ええ・・・私はエルフ。　この森にある＞エルフの隠れ里＜に住むエルフよ。」

「・・・・エルフ・・・・・」

『人』に話してしまった以上、もはや＞隠れ里＜でも何でもない。アンの母親である女王が、長い時をかけて培ってきたエルフの歴史を、アンは今まさに一瞬の内に不意にしてしまったのだ。

「へぇ～。　君がエルフなのか・・・・僕も初めてみるよ。　でも、君の様な美しい子がエルフなら、世間でいうエルフの話は大袈裟なんだろうね。」

「・・・・噂・・・・・？」

「あ、ああ、いや、なんでもないよ。　それより、君はここに毎日きているのかい？」

『人』の間で噂される『エルフ』がどんなものなのかがアンは気になったが、苦笑の表情を浮かべるギルバードにそのことを追求することができなかった。

「ええ、毎日森には来ているわ。」

「そうなのかい？　なんだ。　だったら、もっと前に声をかけてくれれば良かったのに。」

苦笑から柔らかな笑顔に再び戻ったギルバードの表情にアンは見とれてしまう。
人間の噂ならアンも数多く聞いている。
エルフとみれば、襲いかかり、連れ去ろうとしたり、殺したりするというようなもの。
しかし、目の前で微笑む青年には、そのような感じは一切なかった。
『もしかすれば、猫を被っているのかもしれない。』
等とは、経験の少ないアンには思い浮かばなかった。
ただただ、『人』というものも母親が話しているような存在ではないのではないかとしか思っていなかったのである。

そんな二人の出会い。
その出会いから、二人は何度もこの森で逢瀬を重ねることとなる。
ただ、同じ時刻、同じ場所で会い、他愛もない会話を繰り返すだけ。
それでも、アンはその日常の変化が何よりも楽しかった。

やがて、お互いが種族という大きく、とても高い壁を越え、恋に落ちていく。
それは、それほど時間を要するものではなかった。
相手に名前を呼ばれるだけで心が躍り、会えない時間を相手のことを考えることで潰す。
そんなありふれた恋愛に、『エルフ』と『人』という相容れないも

のが陥って行く。

「・・・アン・・・」

「・・・ギルバード・・・」

朝日が昇る前のそんな短な時間を毎日、それこそ、雨が降ろうが雷が鳴ろうが過ごしていく。

しかし、そんな甘い時間も唐突に終わりを告げる。

毎日毎日、朝早くから水汲みに行くアンに対し、ついに女王の側近が動いたのだ。
夜から見張りをつけ、アンの起床と共に気付かれないよう行動を監視する。

案の定、アンは朝早くに家を出て、里の出口へと向かう木々のアーチを潜って行く。
そして、どんどん森の出口へと進んでいくアンを側近の一人が制止しようとするが、その側近の動きそのものを制止する手が挙がった。
それは、いつもアンを護衛していたあの側近。

女王の親衛隊の隊長を担う女性だった。

「今しばらく、アン様の行動を追う。　余計なことはするな。」

「　はっ。　」

そのまま数人の親衛隊は、アンの後ろを気付かれないように追っていく。
そして辿り着く。
『エルフ』と『人』の禁忌の地へと。

「・・・隊長・・・これは・・・・・？」

「・・・・・・・・・・」

親衛隊の一人が声を発する。
それは何かに脅えているように震えていた。

「・・・・全員、帰還する・・・・この場で見たことは他言無用だ。

良いな？　もし、誰かに口を割った者がいた場合は、私がこの手で裁く。」

暫しの沈黙の後、隊長である側近が口にした言葉は、かなり理不尽なものである。
現実、裁かれる者は、目の前で『人間』と抱き合っているアンであることは誰の目にも明らかだった。

しかし、誰の反論も受けることなく、隊長は身を翻して里へと戻って行く。
慌ててその後を追う少数の親衛隊は、何かを問いかけようとして、隊長の顔を見た瞬間、その口は針と糸で縫いつけたように開くことが出来なくなった。

彼女の表情は、それほど厳しく、そして哀しみに彩られたものだったのだ。

「・・・・アン・・・・よく顔を出せましたね。」

アンは今、女王の謁見の間に跪いていた。
いつも見慣れた光景。
今日もまた、家に帰った後、母親である女王から呼び出しがかかった。

しかし、今日はいつもと違う部分が目に入る。
常にアンと謁見する際は、アンと女王の二人だけである。
例え、親衛隊と言えど、女王とアンの謁見中は広間に入室しては来なかったのだ。

それが、今日に限って、女王の座る玉座を囲むように親衛隊が立ち並び、アンの後方にも控えていた。
そして、女王の言葉。
何かを含んだような、奥歯に何か詰まったように口を開いたのだ。

「お母様が呼んだのでしょう？　別に私もここに好んで来ようとは思いません。」

「・・・・アン・・・・・」

アンの言葉に、周囲を囲む何人かの親衛隊の表情が変わった。
それは、今までアンに対し向けたことのないような表情。
敵として見るような冷たく、厳しい表情。
自分に向けられた敵愾心剥き出しの視線にアンは怯える。

「・・・・アン・・・・貴女のような娘が、里の外の森へ出かける

ことは少なからず目を瞑っていました。　しかし・・・・・貴女が森で『人間』と会っているという報告を受けました。　それに相違はないですか・・・・」

怯えるアンに対し、呟くように溢した女王の言葉に、アンの瞳は大きく見開かれた。
それは、ギルバードとの逢瀬が発覚したということより、今まで里の外に出ていることすら黙認されていたという驚愕の事実に。

「・・・それは・・・」

「・・・・・事実なのですね・・・・・」

アンの煮え切らない答えに、目を瞑り深い溜息を吐いた女王。
その女王の瞳が再び開かれた時、アンは思わず声を上げそうになった。
目を開いた女王の表情は、今までアンが見たことのない表情。

今まで、自分は母親の女王の顔しか見ていなかったと思っていたが、それが誤りであることに気が付く。
今、自分の目の前にあるその表情が、まさしくエルフの民を護る女王の顔。
自分が見て来たものは、母親としての情を捨てきれていない顔だったのだ。

「アン。　貴女が行った行為は、万死に値する行為。　当分の間、自宅にて監禁とします。　常に親衛隊の監視をつけ、許可なく自宅から出ることを固く禁じます。」

「・・・そ、そんな・・・」

「異議は認めません！　貴女が行った行為は、この里に住むエルフ全員を危険に晒す行為。　貴女は我々エルフの民を裏切ったのです。　その罪を自覚なさい！」

アンは目の前が暗くなっていくのを感じた。
女王の言葉は絶対。
それは、もう二度と外へは出られないということ。
そして、二度とギルバードには会えないということ。

その絶望的な事実にアンは気付かない。
アンが恐怖すら感じた女王の表情の中にまだ母の情が隠れていることを。
アンの生存が許されている。
それは、母の愛以外何物でもないことを。

親衛隊の護衛と言うよりは監視を伴って、アンは自宅へと辿り着く。
この戸を開け、中に入ってしまえば、もはや外に自由に出ることなどできない。

『逃げ出そうか』
とも考えたが、周囲をがっちりと囲む親衛隊に隙などない。
むしろ、逃げだした瞬間に腰に差す剣にて斬り捨てようと考えている者までいるのではないかと疑ってしまうほど、目を血走らせている者までいた。

「・・・アン様・・・大人しく家に入って頂きたい。　女王様の慈悲を無駄にしないで下さい。」

悲痛の表情を浮かべ、口を開いた隊長の言葉に、アンは諦めたように自宅の戸に手をかけ、絶望への扉をくぐって行く。

家の中は、アンの心の中を映し出したように暗く、静寂に満ち満ちていた。
一際大きな音の様に、戸の閉まる音が響く。
戸が閉まる音の反響も収まり、静寂が戻った部屋で、アンは一人崩れ落ちた。
自分に起きた不幸を嘆くように、呪うように。

あれから、幾日も過ぎた。
その間、アンはほとんど家から出ることはなかった。

心配した親衛隊の隊長が家の中に入ると、椅子に座り、一点を見つめて涙を流すアンの姿を見つけた。
食事も碌に取ってはいないため、女性特有の柔らかな丸みを帯びた身体は、病的に痩せている。　顔に生気はなく、何かうわ言の様に呟く姿は悲痛なものであった。

「・・・アン様・・・」

隊長が家に入ってきたことも、言葉を発したことにも気がつかないように、一点を見つめて口を開くアンが呟く言葉は、あの『人間』の名前かもしれない。

確かに女王の判断は正しい。
そして、アンが行った行動は、エルフ全体を裏切るような行為であったことも事実。
通常ならば、処刑と言う形で命を散らすはずが、今も尚、健康的ではないが生きてはいる。

しかし、それは、本当に良かったのか。
ここまでの苦しみを与えて、生き長らえさせるのであれば、命を奪ってしまった方が良かったのではないだろうか。

女王の娘というステータスを考慮に入れずに、隊長はそう考えてしまった。

「・・・アン様・・・今日は良い天気です。　たまには女王様にお顔を見せてはいかがでしょうか？」

そんな考えが、隊長の口を動かしてしまった。

常に流れ落ちていた涙の為、赤く染まってしまったアンの瞳を哀れと思い・・・

「・・・・・・・・そうね・・・・・・・・・・」

ようやく、隊長の存在に気が付いたアンは、焦点の定まらない瞳を動かし、隊長の提案に首を縦に振った。　その姿は、隊長の言葉を理解できているとは到底思えないものだった。

「はい。　では、参りましょう。　女王様もお喜びになるでしょう。」

アンの肯定に、隊長は表情を幾分か和らげ、アンを外へと導いて行く。

このことを、後々まで悔やむことになるとは知らずに・・・

「アン！　よく来ました。　ちゃんと食事をとっていますか？　顔色が優れませんよ？」

「・・・はい・・・お母様・・・」

謁見の間に久方ぶりに姿を現したアンの姿に女王は言葉を失った。アンが行ったことへの事後処理である里の民の心を静める為、昼夜を問わずに奔走していた女王はアンの自宅へ帰ってはいなかった。

この期間に仕事漬けだった女王もまたやつれてはいたが、アンはその比ではなかった。

美しく艶やかだった髪はその輝きを失い、生気と好奇心に充ち溢れていた瞳は虚空を見つめるように儚かった。

「・・・アン・・・貴女の悲しみが解るとは言いません。　ただ、貴女の未来は長いのです。　それこそ『人』の道の数十倍になる程に・・・・」

「・・・・・それでも・・・・・・それでも私は・・・・・・」

「・・・・・アン・・・・・・」

女王の言葉に再びアンの瞳に涙が浮かぶ。
娘の姿に、女王も言葉を繋ぐことができなかった。

今ここには、親衛隊等の女王の側近はいない。
女王とアンの二人だけであった。

「・・・・アン・・・・ならば、母として願います。　アン、食事をしっかりと取り、生きて下さい。」

「・・・・・・・・・」

女王が見せた母としての顔も、今のアンには届かない。
いや、むしろ女王の言葉など聞いていないかのように、ただ一点を見つめていた。
アンの視線のその先にあったものは赤く輝く大粒の宝石。
エルフの長が持つことを許される＞エルフの至宝＜。
玉座にはめ込まれたその至宝をアンは見つめていたのだ。

「・・・・アン・・・・少し待っていなさい。　良い物を持って来

ましょう。」

反応を示さないアンの姿に、女王は何かを思いついたように玉座を離れ、奥へと消えて行った。
空っぽとなった謁見の間。
残された者はアン一人だけ。

そこからのアンの行動は早かった。
玉座に近づき、はめ込まれている赤く輝く宝石を抜き取る。
そして、周囲を警戒しながら、謁見の間を離れていく。

謁見の間から廊下へ続く戸を開ければ、親衛隊達が待ち構えている。
しかし、アンにとってこの屋敷は幼い頃からの遊び場。
誰も知らない抜け道等も心得ている。

通気口を通り、謁見の間から脱出。
その後は他の部屋から部屋へと移動し、誰にも会わないよう細心の注意を払いながら動いた。
幼い頃より成長したアンであれば通れない場所も、ここ幾日かで痩せ衰えたアンの身体であれば可能であったのだ。

無事、屋敷の外へ出たアンは、息つく暇もなく走り出す。
自由と希望、そして輝く未来が待っている筈の里の外へ。
愛しき『人』の待つあの場所へと。

「待たせました・・・・・・・・・・アン・・・・・・・・？」

何かを手に持ち、謁見の間に戻った女王の目には誰もいない空間が広がっていた。
アンがいない。
待ちくたびれて帰ってしまったのか？
それはない。
もし、そうであれば、側近が一言告げに来るはずである。

「！！　誰か！？　誰かおらぬか！！」

奇妙に思い、見渡した謁見の間に、感じてはならない違和感。
その違和感の正体に気が付いた女王は、久しく上げていなかった程の声量で側近達を呼び寄せる。

『ギルバードなら、いつもの場所で待ってくれているはず。』
アンは、その想いだけを胸に走り続ける。

アンの予測は正しかった。
アンが現れなくなったその日から、ギルバードはアンと逢瀬を重ねたあの場所に毎日来ていた。
仕事も手につかなくなり、ほとんど一日中、森の中の切株に座っているだけだったのだ。

「ギルバード!!」

「!!　アン!!」

引き裂かれた糸が修復されていく。
引き寄せられるように抱きあう二人。
何年も会っていなかったかのように、お互いの存在を確認し合った。

「ギルバード、急ぎましょう。ここにいれば、里から追手が来るわ。」

「わかった。　僕の村に一緒に行こう。　そして、一緒に暮らそう、アン。」

手と手を取り、二人は森を抜け出していく。
アンにとって未知の世界への旅立ち。
しかし、そこに感慨など感じる余裕はなかった。

『この『人間』と共にいたい。』
アンの想いは、唯それ一点のみだったのだ。

「・・・・女王様・・・・・間に合いませんでした・・・・・アン様は森の外へ出てしまわれたようです。」

日も落ち、夜の帳が落ち始めた謁見の間で、玉座に座り目を瞑っていた女王に掛った報告。
それは、エルフにとって最悪の結果であった。

「・・・・それ以上、追う必要はありません・・・・・」

「　し、しかし！　＞夢見るルビー＜が・・・・」

目を開いた女王が口にした言葉に、すかさず反論を返す側近に対して女王は鋭い視線を向ける。

「・・・例えアンと言えども、＞夢見るルビー＜の力を解放することなどできません・・・」

「　しかし、邪悪な心を持つ者が持てば・・・・」

「・・・確かに、『人』の手に渡っただけではどうすることもできないでしょうが、魔王等の手に渡れば、あるいは・・・・・」

鋭い視線のまま、口を開いた女王の言葉に、謁見の間に集まったエルフ達から次々と言葉が飛び交い始める。
既に事は、女王とアンの二人の問題だけではなくなっているのだ。

「・・・わかっています。　今回の件では、エルフの民全てを巻き込んでしまいました。　私にはすでに女王としての資格はありません。」

「・・・それは・・・」

言葉が飛び交う謁見の間に女王の静かな声が響き渡る。
その言葉に、周囲の声がピタリと止まった。

誰も、今の女王に不満がある者等いないのだ。
『人』との争いの中では先頭に立って戦い、争いが沈静化すれば民を導く力を持つこの女王には、皆感謝こそすれ、思うところなどないのだ。

確かに、争いが沈静化した後も、血気に逸る者がいなかった訳ではない。
元来、温厚な種族であるエルフでも許容できる範囲がある。
それを権力で抑えるのではなく、諭し導きながら民全員の視線を前へ向けさせたのは、目の前で自分の悩みや悲しみを押し殺して話す女王その人なのだ。

「・・・恐れながら・・・このような時だからこそ、我らエルフを率いることができるのは女王様だけだと心得ます・・・アン様のことは、確かに『許せぬ』と言う者もいるでしょう。　しかし、おそらく・・・アン様は『人間』に誑(たぶら)かされたのです。　アン様は外の世界を知らぬお人。　悪いのはアン様ではなく、あの『人間』です。」

「そ、そうです。　何も女王様がその責を負う必要などありません。」

「皆の言う通りです。　＞夢見るルビー＜とて、魔王に渡ることなどないでしょう。　それに、云い伝えでは『邪悪』なる者では使うことなどできないと云われていますし。」

女王の言葉に反論を唱えたのは、やはり親衛隊の隊長。
アンを幼い頃から見てきていた者であった。
彼女の一言が、周囲を囲むエルフ達への救いの手となる。

女王の引責退陣など認めたくはない。
しかし、アンの行為はすでに里のエルフ全員の周知の事実となっていた。
アンの責＝親である女王の責。
その構図を崩すためには、アンの責を無にするしかない。
ならば、『人』に負わせればよいのだ。

「・・・・・わかりました。　私の娘が犯した罪です。　私にできる限りのことをしていきます。　皆には苦労をかけます。」

玉座から立ち上がり、深々と頭を下げる女王の姿は、女王と言うよりは、子供の失態を謝罪する親そのものだった。
その姿に言葉を失う者、涙を溢す者。
それは、各人皆違いはしたが、想いは同じだった。

それから時は流れる。

アンはギルバードと共に＞ノアニール＜の村に辿り着き、ギルバードの父に『恋人』と紹介され、女っ気のない息子に突如現れた嫁候補に父親は素直に喜んだ。

共に暮らし、洗濯をしたり料理を作ったり。

里で過ごしていた時とやっていることは変わらないにもかかわらず、アンの心は軽やかだった。

しかし、そんなアンの幸せも長くは続かなかった。

それは共に暮らし仲睦まじい二人に対するギルバードの父親の『結婚は何時するのか?』という問い掛けから始まった。

その場は言葉を濁したギルバードであったが、その夜、アンに『父親にアンがエルフであることを話す』ことを決意したと告白する。

『エルフ』と『人』の歴史を幼い頃から物語の様に聞いていたアンは、ギルバードの提案に迷うが、彼の強い決意と愛を信じ、首を縦に振ることとなった。

「・・・僕は彼女と結婚しようと思う・・・」

その言葉から始まったギルバードの言葉。
次の日の夜、父親を含めた三人で夕食を取り終えた後のことだった。

「そうか！　うむ。　アンのような娘であれば文句はないぞ。」

「・・・そうか、良かった。　それなら親父に言っておくことがある。」

「なんだ？　暮らしのことなら心配するな。」

「・・・そうじゃない。　落ち着いて聞いてほしい・・・・」

意を決したように口を開き始めたギルバードの言葉を聞いていた父親の表情は、最初に見せていた微笑みとは真逆の表情へと変貌していく。

そしてついに感情が弾けた。

「エ、エルフだと!!　馬鹿も休み休み言え!!　エルフなど息子の嫁に向かえることができるわけがないだろ!!」

「今、アンなら文句はないと言ったじゃないか!?」

「ふ、ふざけるな!　エルフだと知っていれば、そんなことは言わなかった!　わしを騙していたのだな!?　エルフと知っていれば、家に等上げなかったものを!」

父親が示した感情は激昂。
アンが『エルフ』だということが彼の逆鱗に触れたのだ。

「アンはアンだ!　『エルフ』だろうと『人』だろうと関係ないだろ!」

「お前は『エルフ』の恐ろしさを知らないのだ!　今は大人しくしているかもしれないが、この娘がその気になれば、わしやお前など一瞬の内に殺されてしまうのだぞ!」

「アンはそんなことはしない!」

感情をぶつけ合う父とギルバード。
突如変わった家の中の空気に、傍にいたアンは驚き戸惑う。

何故？
何がいけないのか？
少なくとも、アンの周囲にいたエルフ達は、理由もなく人間を殺すような者はいなかった。
この父親は、何をそこまで怯えるのかがアンには理解できなかった。

そして、自分に浴びせられる罵声。
これまであれほど優しかった父親の豹変ぶりにアンの思考回路がついていけない。
アンの素性が『エルフ』というだけで、昨日のアンと今日のアンが変わる訳ではないのにもかかわらず、何故ここまでの罵声を浴びなければいけないのか。

結局この日、ギルバードと父親はケンカ別れの様になり、離れのように建てられたアンとギルバードの家へと帰ることになった。

そして、アンは知ることになる。
何故、彼女の母親が『エルフ』達を隠していたのかを。
何故、『エルフ』が『人間』を怯えるような態度を示すのかを。

父親の豹変ぶりを見た次の朝、アンが見ていた＞ノアニールの村＜の景色が一変していた。

いつもの様に朝の挨拶を交わそうと、村人に近づくと、その村人は一瞬怯えた表情を見せた後、アンの挨拶に答えることなく逃げるように自宅へと引っ込んでいったのだ。

最初は何かあったのだろうかと思ったアンであったが、村人は全員例外なく同じような態度をアンに取り始めた。
おそらく、昨日のギルバードと父親の口論を聞いていた村人がいたのだろう。

「・・・おはよう・・・ございます・・・」

「　！！　　ヒィィィィ！！　」

一対一で声をかけると、必ず悲鳴を上げて逃げてしまう。
そして、遠巻きで見つめる数人の村人が、まるで汚物でも見るような目でアンを見ているのだ。

アンは、その視線を感じ、初めて恐怖を感じた。
これ程の悪意ある視線を受けたのは生まれて初めてだった。

そして、それは日を追うごとにエスカレートしていく。
少数では、アンの存在自体に怯えて逃げる村人であったが、それが集団となると次第にアンの姿を見ても逃げ出さなくなった。

「まだいるわよ、あの亜人。」

「ほんと。エルフなんでしょ。私達人間の村に来て何をするつもりかしら。」

「あまり言うと、聞こえてしまうわよ。エルフは魔法で人間を焼いた後に食べてしまうらしいわ。」

「「「「えぇぇぇぇぇぇ」」」」

そんな話は聞いたこともなければ、人間等食べたこともない。
わざと聞こえるように話しているのではないかと思う程の声で話す村人の言葉はアンの心に暗い影を少しずつ落としていく。

村に住む子供の中には、アンが洗う洗濯物に泥をかける子供も出てきた。
しかも、その子供の親は近くにいて、戻ってきた子供をしかるどころか、まるで『良くやった』とでも言うように、その子供の頭を撫でていたりもする。

アンは、泥で汚れた洗濯物を再度洗いながら、自分の瞳から流れる涙を抑えることができなかった。

そして、ついに村人達が動く。
その日、まだ日が昇り切らぬうちから、戸を叩くノックの音にアンは目を覚ました。
それは、等間隔に響くノックで、とても人が手で行っているものではなかった。

不思議に思い、隣で眠るギルバードを起こし、玄関へと出てみた二人が見た者は、獣と化した『人』の姿だった。

「・・・・ギルバード・・・・・」

「・・・・アン・・・・僕の後ろに隠れるんだ・・・・・」

玄関の戸を空けたそこには、村人全員がアンとギルバードの家を囲むように立っていた。
その中央にはギルバードの実の父親まで見える。
思い思いの武器を手にした大人たち。
手に石を握った子供達。
そして、全員に共通した悪意ある炎を宿した瞳。

「エルフはこの里から出ていけ～～～！！」

「「「「「　出ていけ！！　」」」」」

誰かが叫んだ言葉に、村人全員の声が重なる。
その言葉と同時に、子供達は手にした石をアンとギルバードの二人目掛けて投げつける。

「痛い！」

「アン！！」

一人の子供が投げた石が、アンの肩に直撃した。
衝撃と痛みに声を上げるアンだったが、当の子供は罪悪感を感じるどころか、身の毛もよだつような微笑みを浮かべ、胸を張って親を見上げていた。

「ここは『人間』の村だ。　エルフが暮らす場所なんてない！早急に村から出ていけ！」

「！！」

その言葉を発したのは、アンがこの村に来たことを誰よりも喜び、誰よりも優しく接してくれていたギルバードの父親だった。
アンの心は絶望に打ちひしがれる。

「くそっ！　アン！　もう中に入ろう。」

父親の姿に舌打ちをしたギルバードは、次々と飛んでくる石つぶてからアンを護りながら家の中へと導く。
アンはもはや顔を上げることすらできなくなっていた。
ギルバードに引かれるまま家へと入り、ベッドに横になったまま動かなくなった。

二人が家の中に入っても、尚続く外からの罵声。
そして扉にぶつかる石の音。
それらの音から身を護るように毛布を頭まで被り、その中で更に耳を塞いで震えることしかアンに選択肢は残っていなかったのだ。

アンは、初めて『人間』の恐ろしさを垣間見た。
少人数では、怯えるだけで何もできない『人間』が、人数が増えただけであれ程強気に変貌する。
数を増やした中には、それほどアンや『エルフ』の存在を嫌悪していない者もいたかもしれない。
それでも、数の暴力の前では自分の考えを押し通すことはできないのであろう。

子供達が良い例だ。

彼等は、もしかすると『エルフ』という存在自体知らないかもしれない。
それでも、『親達が行っているのだから、それは正しいことなのだ』と考えているのだろう。
しかし、その顔に浮かぶ表情は実に醜い。

「・・・・アン・・・・ごめんよ。　僕が父に話そうとしなければ・・・・・」

「・・・・いいえ、ギルバードの責任ではないわ。　やはり、『人』と『エルフ』では・・・・・」

『エルフ』の住む里を追われ、『人』が住む村でも拒絶されたアンの心は折れかけていた。
毛布を頭からすっぽると被り、小刻みに震えるアンの姿をギルバードは見ていられなかった。

「・・・・アン・・・・この村を出よう。」

「　えっ！？　」

ギルバードの突然の提案に、被っていた毛布を取り、アンが顔を出す。
余りの提案に、アンの耳には外の騒音が入ってこなかった。

「・・・アンにはすまないと思ってる。　でも、ここに居ても僕達二人は幸せにはなれない。　二人で村を出よう。」

「・・・でも・・・どこへ・・・？」

「・・・わからない。　アンが住んでいた＞隠れ里＜は駄目なのかい？」

計画性など全くない。
そんなギルバードの提案はアンとしても簡単に了承できるものではなかった。

「・・・里は無理よ。　『エルフ』は『人』を嫌っているわ。　もし、里の中に入ったとしたら、今度はギルバードが攻撃の対象となるだけよ。」

「・・・でも・・・・もう、僕達はこの村には住めない。」

ギルバードの言うことは真実であった。
いや、ギルバードは『エルフ』に誑かされた者として、村人から同情をもらえるかもしれないが、アンは無理である。
『エルフ』と言う存在を恐れ、アン個人を見ようともしない『人』

に何を話しても、何を示しても無駄に終わるだけだ。

「・・・とにかく今夜、村を出よう。　このままでは、いずれ村の皆は何をしでかすか解らない。　アンの身が危険なんだ。」

「・・・ええ・・・・わかったわ。」

真剣な表情で、愛しい女性の身だけを案じるギルバードにアンは首を縦に振らざるを得なかった。

村人達の攻撃も止み、それぞれが各家に戻って眠りについた深夜。月明かりだけが頼りになる村の中を、周囲を警戒しながら歩く二つの影。

アンとギルバードである。
お互いの手を取り、村の門をくぐる。
ギルバードと繋ぐ手と反対のアンの手には、小さな木箱が握られて

いた。
もう二度と帰ってくることなどできない村をしばらく見つめた後、ギルバードはアンの手を引き平原を歩き出した。

行く当てなどない。
お互いの身体に大量の＞聖水＜を降りかけ、魔物を寄りつけないようにはしているが、どこをどう歩けば良いのかが分からない。
＞エルフの隠れ里＜しか知らないアン。
＞ノアニールの村＜しか知らないギルバード。
二人の行先は、自然と初めて出会った森へと向かっていた。

森の入口まで来て、アンの足が止まった。
不思議に思いギルバードが振り向くと、アンは思い詰めたように俯いていた。

「・・・・アン・・・・・？」

「やっぱり無理よ。　この森に入ってしまえば、お母様に気づかれてしまうわ。　そうすれば、また離れ離れになってしまうわ。　私はもう貴方と離れたくない。　離れるぐらいなら死んだ方がマシよ。」

顔を上げたアンの瞳には涙が滲んでいた。
悲痛な叫び。
それはギルバードの心に突き刺さる。

「・・・わかったよ、アン・・・僕達は永遠に一緒だ・・・・・・・
行こう。」

「・・・ええ・・・」

アンに笑顔を向け頷いたギルバードは、進行方向を１８０度変更し、
二人が初めて会った森とは真逆の森へと踏み込んでいく。
行き先に見当がつかないアンは、それでもギルバードに頷き返し、
歩を進めて行った。

「アン、大丈夫かい？」

「・・・ええ・・・」

二人が向かった先。
それは、＞ノアニール＜の真西に位置する場所にぽっかりと口を開
ける洞窟だった。
＞西の洞窟＜と呼ばれるその洞窟には多数の魔物が生活をしている。

森で束ねた木々に、アンが魔法をかけ明かりを取りながら中に入って行ったが、洞窟内のような天の恵みのない場所では＞聖水の＜効力は及ばない。

必然的に、何度か魔物と遭遇することとなるが、アンの魔法で距離を取り逃げることで難を逃れていた。
ギルバードも『アンを護る』という一念で能力を限界まで引き出し対応をしていたため、お互い傷一つなく、洞窟の奥へと進んで行く。

「ぐわっ！」

「キャ――――――！！　ギルバード！」

しかし、魔物との戦闘などしたことのない二人には常に緊張感を保つようなことはできなかった。　洞窟内にできた傾斜を登りきり、ほっと一息ついた時、横合いから出てきた腐った狼にギルバードの腹部が喰いちぎられたのだ。

慌ててギルバードに近寄ろうとするアンを塞ぐように、腐った狼＞バリィドドッグ＜が立ちふさがる。
アンも仕留めてから食そうと考えているのだろう。

「・・・許さない・・・許さない・・・・・」

しかし、＞バリィドドッグ＜を睨みつけるアンの瞳に怒りが浮かび

上がっていた。
今まで一度たりともこれ程怒りを覚えたことはない。
女王に里の外へ出ることを禁止された時も、村人から石を投げられた時も、村人から『エルフ』としての存在意義を否定された時も。

「我が前から消え失せよ！　ベギラマ！！」

アンの振りかざした右腕から凄まじい熱風が吹き荒れる。
熱風はアンを仕留める為にゆっくりと近づいてきていた＞バリィドドッグ＜に直撃し、炎の海へと変化していった。
炎の海に溺れる三体の＞バリィドドッグ＜。
断末魔の叫びを上げる暇もなく、その身体を消し炭へと変えていく。
怒りに燃えた瞳で、＞バリィドドッグ＜を見つめていたアンは、その後ろで倒れるギルバードの姿を見つけ、瞳の色を戻していった。

「！！」

傍まで近付き、アンは言葉を失った。
地面に倒れるギルバードの身体はもはや虫の息だった。
服部を食い破られ、内臓が出始めている。
地面は血の海と化していて、その原因である液体は今も尚ギルバードの身体から流れ落ちている。

「ギルバード！　ギルバード！」

「・・・・アン・・・・・・よかった・・・・無事なんだね・・・・」

動かすことのできない首を無理に動かし、アンを見つめたギルバードの瞳は焦点が合っていない。　かすかにアンの姿を確認し、安堵の言葉を溢すが、それも痛々しいものだった。

「　動かないで！　なんで・・・なんで、私達がこんな・・・・誰か・・・誰か・・・助けて・・・・」

「・・・・アン・・・・・もう僕は・・・・・」

「　ギルバード！！　」

アンの悲痛な叫び。
ギルバードのか細い声。
魔物の気配もなくなったその空間にそれだけが響いていた。

その時、奇跡が起こる。

目を瞑ってしまったギルバードの身体を抱き抱え、涙を流すアンの胸元から眩いばかりの赤い光が放たれたのだ。

突如起こった出来事に、アンは胸元から光の出所を探る。

胸元から出てきたのは、＞エルフの隠れ里＜から持ち出し、着のみ着のままで抜け出した＞ノアニール＜からも持ってきた＞エルフの至宝＜。

【夢見るルビー】

それは、長く続くエルフの歴史の中で最古の品。

この世界にエルフが生まれ落ちた時に＞聖霊ルビス＜から与えられたと伝えられし物。

それは、代々エルフの長が所有することになっていた。

純粋な者が持ち、心からの願いを向けた時、その赤く輝く宝石はその願いを＞聖霊ルビス＜へ届けると云われている。

「！！？？」

ルビーの放つ光は、それを仕舞っている木箱から漏れ出し、もはや木箱全体が光っているようですらあった。

恐る恐る木箱を空け、中のルビーを取り出したアンは、その光の強さに目が眩む。

視界を失ったアンの耳に地響きのような音が入り、その音と共に、

アンが座る地面が大きく揺れ動き始めた。

「キャ――――」

大きく揺れる地面に愛しき者が攫われないよう、アンは叫び声を上げながらも血だらけのギルバードの身体をしっかりと抱き抱えた。
やがて、＞夢見るルビー＜から放たれていた光が収まると同時に、地面の揺れも収まって行く。

「えっ？」

揺れが収まるが、まだ視界が戻らないアンの足元が濡れ始める。
それは、次第に上がっていき、アンの胸までを覆い尽くした。

視界が戻り、アンの目に入ってきた光景はとても信じられない光景だった。
アンとギルバードを囲むようにそびえ立つ四本の石柱。
そして、アンの足元からは、冷たく澄んだ水が湧き出している。
アンの膝元で横になっていたギルバードの身体は水面に浮かび上がっていた。

今まで洞窟内を覆っていた魔物の邪悪な空気はなく、静かな澄んだ空気が広がっている。
何より不思議なことは、あれだけ血を流していたギルバードの身体に傷がなくなっていたのだ。

「・・・ギルバード・・・・ギルバード！！」

「・・・・・うぅん・・・・・・アン・・・・？」

そして、二度と目を開けることがないと思われたギルバードの瞳が開いた。
愛しき人の生還。
その余りにも信じられない出来事に、アンの涙腺は崩壊した。

「・・・・これは・・・・何をしたんだい、アン？」

「・・・・・・ぐずっ・・・・・うぅぅ・・・・わから・・ない・・・・ただ、＞夢見るルビー＜が・・・」

ギルバードの胸に顔を埋めながら差し出されたアンの手に握られた赤い宝石を受け取り、ギルバードは何かを考え込むように黙り込んだ。

「・・・アン・・・この宝石に願いをかけたから僕の傷は治ったのかな・・・？　だったら、僕を『エルフ』にしたり、アンを『人間』にしたりすることもできるんじゃないのか！？」

「・・・・えっ・・・・！？」

ギルバードの話は、アンにとっても願ってもないことだった。
そんなことができれば、アンとギルバードは二人で暮らすことができる。

アンはギルバードに言われた通り、もう一度＞夢見るルビー＜を握り、懸命に願う。
しかし、＞夢見るルビー＜は光らない。
それでも諦め切れず、何度も何度も試みるが、赤い宝石は暗闇に覆われた洞窟の中で輝きを取り戻すことは二度となかった。

深い溜息を吐き、希望を失った二人は、疲れた体を起こし、再び洞窟の深部へと歩き出した。　数度の魔物との接触もあったが、警戒心を怠らなかった二人は、何とか最深部へと足を踏み入れる。

そこは、更に幻想的な世界が広がった空間だった。
先程、ギルバードの傷を癒したものと同じ水が溢れ、地底湖を作っている。
その中心にまるで浮いているように地面が続いていた。

地底湖の中央まで歩き、二人は手をつないだままその場に座り込んだ。

「・・・アン・・・僕達はこの世界で生きることができなかったけれど、ずっと一緒だよ。」

「・・・ええ・・・ずっと一緒よ。」

そして、再びアンの膝枕でギルバードは眠りについた。
そのギルバードの髪の毛を愛おしく撫でながらアンは寝顔を見つめていた。

幾日が過ぎ、アンは未だにギルバードの髪を撫でていた。
もはや、ギルバードの身体は動くことはなく、冷たく冷え切っていた。
例え、傷を治す水が湧き上がっている場所でも、食料がなければ生物の活動は停止する。

生物としての生命力はやはり『エルフ』であるアンの方が上だった。
二日間泣き続けたアンであったが、今は、虚ろな目で虚空を見上げている。
もう、アン自体の命も長くはない。
アンの頭の中にここまでの出来事が蘇ってくる。

仕事ばかりの母親を追って、母親の仕事場である屋敷に行き、そこで何でもない毎日の出来事を母親に話す。　そんなアンの話を仕事中にも関わらず、笑顔は見せずとも静かに聞き、一つ一つ答えてくれる母。

外で遊んでいて怪我をしてしまった時は、政務を放り駆けつけ、自らの魔法で癒してくれた母。　遊んでいた内容を話すと、こってりと叱られ、痛みは消えても泣いてしまった自分。　それでも最後は『無事でよかった』と抱きしめてくれた母。

蘇ってくるのは、膝元で静かに眠る愛しい『人』ではなく、いつも厳しく、自分に笑顔を向けてくれたことのない母親の顔ばかりであった。

「・・・・うぅぅ・・・・お母様・・・・・・」

次第に込み上げてくる感情を抑えることが出来なくなったアンの双眸から涙の雫が溢れ出す。　それは、母への溢れる想い。

勉強も魔法もアンは母親から教わった。
常に仕事場に顔を出すアンに嫌な顔をせず、母の玉座の近くに小さなテーブルを作り、政務の傍らで字を教え、魔法を教え、そして生き方を教えてくれた。

『アン、良いですか。　我々＞エルフ＜は、＞人＜の守護を聖霊ルビスから託された種族。　それを誇りとしなさい。　＞人＜は弱い。弱いからこそ、怯え、備え、そして牙を剥きます。　だからと言

って、＞人＜は単体では生きることができはしません。　彼らは集まり、力を合わせることで何かを作り出す種族。　我ら＞エルフ＜はそれを遠くから見守り、保護していく誇り高い種族なのです。』

その母の教えの一つがアンの頭に不意に浮かんだ。
＞人＜への復讐を唱える者達を諭し、エルフとしての誇りを蘇らせた女王の想い。

アンが＞ノアニールの村＜で村人達から仕打ちを受けた時、アンの胸には怒りよりも哀しみが真っ先に湧きあがった。
それは、自分の境遇に関する悲哀だと考えていたが、違ったのだ。

『何故、＞人＜はこのように弱いのか。　何故母の様に考えることが出来ないのか』

その想いが、アンに無自覚の感情を呼び起こさせていたのだ。
ギルバードが＞バリィドドッグ＜に傷つけられた時のアンの天突く程の怒りは、愛しい『人』が傷つけられた為ではなかったのだ。
誇り高き『エルフ』の誇りである『人』の守護と言うものを傷つけられたことへの怒り。

アンは無意識に母の教えを思い出していたのだ。
心に刻まれた『エルフ』としての誇り。
それは、アンの母親である女王がアンに残したもの。
アンが一度も母親としての顔など見たこともないと思っていた母の愛は、しっかりとアンに刻まれていたのだ。

初めて知った、大きく暖かな母の愛。
胸に込み上げる熱い思いに、アンの涙は止まらなかった。
アンは、＞夢見るルビー＜の入っている木箱を空け、その中にある、
一枚の紙とペンを取り出す。
そして、涙で滲んだ視界の中、震える指で文字を書きはじめた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

親愛なるお母様

先立つ娘の不孝をお許しください。
私達は『エルフ』と『人』。
どうせ叶わぬ仲ならば・・・・・
天国で一緒になろうと思います。

アンは、お母様の娘に産まれてこれたことを誇りに思います。

アン

短い手紙を書き終え、ペンと共に木箱に入れて蓋をし、地面に木箱を戻す。
もう一度ギルバードの髪を愛おしそうに撫でたアンの顔は、美しい笑みを浮かべていた。

「・・・ギルバード・・・約束よ。　私達はずっと一緒・・・・・」

静かに目を瞑ったアンの身体は、二度と動くことはなかった。
静寂と澄んだ空気が満たした空間には、地底から湧きだす＞聖なる水＜の音しか聞こえなかった。

過去～アン【エルフ】～（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

今回もなかなか暗い話になってしまいました。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしています。

エルフの隠れ里？（前書き）

今回は少しコンパクトにしました。
それでも長いかな・・・・

エルフの隠れ里？

「・・・カミュ・・・」

「・・・なんだ・・・？」

＞西の洞窟＜から、メルエの＞リレミト＜によって瞬時に脱出した一行は、日も完全に落ちた森を抜け、平原へと出た。
平原を＞ノアニールの村＜に向かって歩いている最中、サラと共に歩いていたメルエのマントが緩んでいることにサラが気づき、メルエのマントの紐を結ぶため、一行が立ち止まる。
その僅かな時間で、リーシャはカミュに、その重い口を開いたのだ。

「・・・メルエは・・・・・メルエは何者なんだ・・・・・？」

顔を上にあげ、サラに首元の紐を結びなおしてもらっているメルエの姿を横目で見ながら話すリーシャの姿は悲哀に満ちたものだった。

実は、あの時、手紙を読んでいたリーシャ達を余所に、赤く輝く＞夢見るルビー＜をメルエがその手に取ったのだ。
赤く美しい光を讃えるその宝石の輝きに、メルエの頬はにこやかに緩む。

その時、一行の視界は完全に失われた。
メルエが持つ＞夢見るルビー＜が突如凄まじいまでの光を放ったのだ。
声を上げる暇もなく、一行の視界が奪われ、それぞれの頭の中に強制的に情報が送られてきた。

それは、この＞西の洞窟＜という地に＞夢見るルビー＜を運んできたエルフの記憶。
エルフの長である女王の娘にして、『人』との禁忌を犯した娘の記憶。
その情報とは、アンが経験した行動が里を出たその時から始まり、この地で果てるその時までを映していた。
しかも、それはアンが見た物、聞いた物だけではなく、感じた感情までも頭の中に送り込まれて来るものだった。

「・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「・・・な、何なんだ、今のは！」

突如現れ、突如消え失せた情報に、戸惑い、取り乱す一行。
その姿が、全員が同じ時に同じものを見たことを物語っていた。

リーシャがカミュに問いかけた内容は、その時の事なのだ。
何故、あのような出来事が、メルエが＞夢見るルビー＜に触れた時に起こったのか。
メルエが原因なのか、そうではなく＞夢見るルビー＜が勝手に起こした現象なのか。
それがリーシャには解らなかったのだ。

「・・・さあな・・・・俺には分からない・・・・・」

「し、しかし、メルエが触れた瞬間に起こったんだぞ。」

カミュの相手にしていないような口ぶりに、リーシャの声は大きく

なる。
しかし、再び、振り向いたカミュの表情は、いつもの無表情。
しかも、リーシャの思い違いでなければ、それは冷たく相手を突き放すような瞳をしたものだった。

「・・・では、なにか？　・・・アンタはメルエの正体が、『エルフ』や『魔物』であったとしたら、その態度を変えるのか？」

それは、リーシャに取って心外な一言。
そういう意味でカミュに問いかけたわけではない。

「　馬鹿にするな！！！　例えメルエが『エルフ』であろうと、それこそ『魔物』であったとしても、メルエは私の妹だ！！　」

感情を露わにし声を荒げ、カミュを睨みつけるリーシャの瞳に信じられないものが映り込む。　その映像にリーシャの口は閉じられ、逆に目は大きく見開かれた。

微笑んでいるのだ。
それは優しい微笑み。
今までリーシャに向けられたことのないもの。
皮肉気に口端を上げた物でもなく、相手を嘲笑するようなものでもない。
純粋に心から湧きあがったような、優しく柔らかな微笑み。
それを、目の前に立つカミュは浮かべていた。

「・・・・・そうか・・・・・・・・・・安心した・・・・・・」

「なっ！」

続いたカミュの一言で、リーシャは自分がカミュの浮かべる微笑みに魅入っていたことに気が付く。
そして、驚いた。
カミュが『安心した』と呟いたのだ。
それは、カミュとしてもリーシャと同じようにメルエを大事に思っている証拠。

メルエへの接し方を見れば、カミュの想いは解ってはいたが、そこまでメルエのことを考えているということは、正直リーシャの中で予想以上だったのだ。
驚きと共に、理由の分からない、喜びに似た感情がリーシャの胸に浮かんでくる。

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・呼んだ・・・・・・？」

そんなリーシャの感情を余所に、名前を呼ばれたメルエが、マントを結び直した後にリーシャへ近づいてくる。

「あ、ああ。　なんでもない。　さあ、メルエ、村へ戻ろう。　も

う日が暮れた。」

「・・・・・ん・・・・・メルエ・・・・・・眠い・・・・・・」

「ふふふっ、まだ眠っては駄目ですよ。」

カミュの反応。
メルエの反応。
それが、＞西の洞窟＜で知ったアンの過去によって沈んでいたリーシャの心を浮かび上がらせた。

それは、サラも同様だった。
エルフのアンの記憶によって、『エルフ』と『人』についての悩みを深くしていたサラには、眠そうに目を擦るメルエの姿が有難かった。

以前、カミュがサラに言った言葉。

『俺は・・・＞人＜自体、護るべき価値のあるものなのかすら分かってはいない・・・』

その言葉がサラの頭の中で何度も反復されていた。
今回、アンの記憶を垣間見た時、最初サラは自分勝手なアンの責任だと思っていた。
しかし、アンが＞ノアニール＜で受けた仕打ちは、『人』の業。

『人』以外生きる権利も価値もないのか？
とサラに問いかけたカミュの答えに、今のサラははっきりと答えることが出来ない。

眠らされた＞ノアニールの村＜の住民達。
果たして、それは理不尽な仕打ちなのか？
彼等がアンに行った行為の代償ではないのか？
ともすれば、あの老人の頼みを聞く必要など最初からあったのだろうか？

サラはメルエに微笑みながらも、胸の中で葛藤を繰り広げていた。

「さあ、メルエ。」

「・・・・・ん・・・・・」

リーシャはメルエへと声をかけ、手を差し出す。
目を擦っていた手をリーシャに向け、にこやかに微笑むメルエ。
そんな二人の姿は、姉妹と言うよりは親子に近いものだった。

「・・・どうした・・・？　アンタは戻らないのか？　置いて行くぞ。」

「　えっ！？　あ、は、はい！　」

今まで自分の行動など意に介さなかったカミュが、自分に声をかけてくれたことに驚き、そしてサラの中に喜びに似た感情が湧きあがった。

「・・・・カミュ様・・・・・一つお伺いしてもよろしいですか・・・？」

「・・・・・・・」

だからだろう。

サラは、絶対に自分の考えと相容れないカミュへ問いかけてしまった。

振り向くだけで、肯定も否定もしないカミュへサラは口を開く。

「・・・カミュ様は・・・【エルフ】の民のことを知っていたのですか・・・？　それに、＞ノアニール＜の村人の行為のことも・・・・」

「・・・・・・・・・」

カミュは何も答えない。

ただ、サラの目を見ていた。

「あ、あの・・・・」

「・・・アンタが俺から何を聞きたいのか解らないが・・・アンタの様な考え方を持つ者が、この世界では＞通常＜の『人』だ。この世界の『人』は大抵が＞通常＜な者が多い。ならば、容易に想像ができるはずだ・・・」

「！！」

カミュの一言にサラの表情は凍りつく。
一番言われたくない言葉。
一番指摘されたくない場所。
そこをピンポイントに突かれたのだ。

「・・・はぁ・・・もうアンタも気が付いているだろうが、この世に生きる生物は何も『人』だけじゃない。アンタには育んできた価値観があるのかもしれないが、それは絶対じゃない。それは、俺を見ていて解っているはずだ。」

「・・・・・」

核心を突かれてしまったサラには、カミュの変化に気が付く余裕は

すでになかった。
カミュの言葉は、いつもの様なサラを突き放すようなものではない。
サラの目を見、そして自分の心を少しではあるが溢している。
それは、先程見せたリーシャへの笑顔がきっかけなのか。
それとも、サラが悩んでいることへの手助けのためなのか。

「・・・でも・・・それならば、カミュ様はどうして＞ノアニール＜を救おうと・・・？」

サラの言葉は、カミュがこのような結果を予想していたにも関わらず、何故元凶とも言うべき村の住民を救うために動こうとしているのかという問い掛けだった。
それに対し、カミュの表情は再びいつもの様な冷たい無表情に変わっていく。

「・・・何度も言うが・・・俺はそういう存在だ・・・・・」

「・・・・カミュ様・・・・・」

歪んでいる。
自分の存在自体を否定するようなカミュの言葉にサラは二の句をつなげることができなかった。
自分が感じる憎しみや悲しみを捨て、決められた道を歩むように。

周囲の人間が示した人物像を演じるように。
カミュは唯、歩いているのだ。

「・・・・行くぞ・・・・・」

「　は、はい！　」

それでも、今回のカミュの行動によって、『人』だけでなく『エルフ』の心も救われることになるだろう。
それは、＞ノアニールの村＜の老人の言葉を鵜呑みにせず、＞エルフの隠れ里＜に住むエルフ達の対応に怒りもせず、そしてどちらの言い分にも偏ることのないカミュだからこそ、皆が救われる結果に導くことができたのかもしれない。

もしも、カミュがもっと早くに、それこそアンとギルバードが出会い、逃げだす前にここを訪れていたとしたら、彼女達は命を散らすことがなかったかもしれない。
命を捨てるという選択しか残されない状況に追い込まれることはなかったかもしれない。
サラは、この旅に出て初めて、信じていた勇者像にカミュが重なる想いがした。

森から出た一行は、リーシャの提案により、一同がカミュの下へと集まる。

皆それぞれがカミュのマントや足を掴み、それを確認したカミュが詠唱を開始した。

「ルーラ」

瞬時に光に包まれた一行は、空の彼方へと飛んで行く。

ノアニールのいつもの宿屋で一泊した一行は、アンの愛したギルバードの父親であろう老人に会わぬよう、明朝太陽が顔を出したのと同時にノアニールの門をくぐった。

連日の好天。
太陽を遮る雲一つない青空。
それは、誰の心を表すものか。

女王の娘アンの心や行動を知り、それぞれがそれぞれの想いを胸に抱いていた。
このパーティーの中でその表情や態度が変わらないのは、カミュだけ。
リーシャやサラは勿論、メルエもまた何か思う所があるのだろう。
その表情にはいつもと違う影が入っていた。

「・・・・・囲まれたか・・・・・」

先頭を歩いていたカミュの溢した一言。
それが、後方を歩く全員の顔を上げる原因となった。

顔を上げたリーシャの面前には、腐った狼。
＞アニマルゾンビ＜と＞バリィドドッグ＜がカミュ達一行の周囲を取り囲むように歩いてきていた。
風下に位置しながら近寄ってきていたためとは言え、その腐敗臭に気が付くことができなかったことをリーシャは後悔していた。
しかし、リーシャの手を握っていた小さな少女は、目に怒りの炎を浮かべる。

「・・・・・メルエ・・・・・・・・・やる・・・・・・・・・」

「メルエ！　＞ベギラマ＜は使用禁止だぞ！」

「・・・ベギラマ・・・？」

決意と共にリーシャの手を離したメルエの目を見たカミュが洞窟内で警告した言葉を再びメルエに投げかける。
その聞きなれない呪文に、サラが首を捻るのとは対照的に、メルエはカミュを一瞥し、大きく頷いた。

「・・・・・・ギラ・・・・・・・」

メルエの腕から、洞窟内で唱えた物より縮小された熱風が腐った狼の群れに放たれた。
着弾した熱風によって火柱を上げ燃え上がる大地。
しかし、六体いた魔物の内数体は、その炎から逃げ出そうと、身を動かしていた。
それも、パーティー内最年少の少女によって阻まれることになる。

「・・・・・・・・・イオ・・・・・・・・・・」

立て続けの詠唱。
それが、この小さな少女の怒りの度合いを表していた。
炎から逃げるように動いていた＞バリィドドッグ＜達を包み込むよ

うに空気が圧縮し、弾け飛ぶ。

「・・・・メルエ・・・・・」

怒りのメルエの右腕から発せられた魔法の威力に、リーシャの表情は哀しみを湛えていた。
メルエの怒り。
それは、＞夢見るルビー＜を手に取った時に流れてきた感情が乗り移ったようなものだったのだ。　誇りを踏みにじられた＞エルフ＜としてのアンの怒りそのもの。
それが、リーシャには哀しかった。

「・・・・・・・・ベギ・・・・・・・」

「　メルエ!!　禁止だと言ったはずだ!!　」

「　!!　」

尚も怒りにまかせ詠唱を行おうとするメルエに、カミュの厳しい叱責が飛ぶ。
怒りに燃えていたメルエの目の光が瞬時に怯えに似た物へと変わっていく。

既に、＞バリィドドッグ＜達は、原型を留めてはいなかった。

そこにあるのは、もはや物言わぬ物体。
それを見ながら、洞窟内で見せたようにカミュは目を瞑り溜息を吐いた。

「・・・・・うぅぅぅ・・・・・・」

先程までの怒りはどこへやら、メルエは上目使いにカミュへと視線を送るが、カミュがメルエに視線すら向けないことに、俯いてしまった。

「・・・メルエ・・・」

「・・・カミュ・・・」

そんなメルエの姿を心配そうに見つめる二人。
しょんぼり落ち込むメルエに近寄るサラ。
何かを考え込むようなカミュの姿に、彼が苦しんでいる内容に察しがついているリーシャ。

「・・・ふぅ・・・メルエ・・・・」

もう一つ溜息を吐いたカミュに名を呼ばれ、びくりと身体を震わすメルエ。

そんなメルエにカミュは近づいて行った。

「・・・・・メルエ・・・・・・言うことが聞けないのなら、魔法全てを禁止するぞ。」

「・・・・・・・・いや・・・・・・・・」

カミュの言葉に怯えたように眉を下げ、全力で首を振る。
それは、叱られた子供の様だった。

「・・・嫌なら・・・言うことを聞いてくれ。　何も、俺はメルエを嫌って言っている訳ではない。　何度言っても、メルエが俺の言葉を無視するのなら、メルエを＞ノアニール＜に置いて行くことも考えなければいけない。」

「　！！！　」

「　カミュ！！　言い過ぎだ！　」

続くカミュの言葉に、俯いていたメルエの顔は弾かれたように上がる。
傍で聞いていたリーシャも、そのカミュの言葉に声を荒げて抗議を表現した。

しかし、カミュの表情は、ピクリとも動かない。

「・・・言い過ぎだとは思わない。　厳しいかもしれないが、メルエが無理な魔法を使い怪我をした場合、誰がその責を負うんだ？　アンタか？　洞窟内で見たと思うが、今、ここにいる人間が使うことのできる回復魔法で、メルエの魔法の暴走による傷を完全には癒せない。」

「・・・・・・いや・・・・・・・・いや！」

カミュの言葉に涙を浮かべながらも首を振るメルエの声は、叫び声に変わっていく。
やっと見つけた自分の居場所。
それを奪われる。
それがメルエに恐怖に似た感情を湧きあがらせたのだ。

「　カミュ様！　わ、私が、もっと効力の高い回復魔法を覚えます！　それなら、メルエの怪我も癒すことができるはずです。」

「・・・サラ・・・」

今まで成り行きを見つめていたサラがその口を開く。
それは僧侶としてのレベルアップを誓うもの。
それは、今のサラには非常に高い目標。

必死なメルエを見て、サラはそれを解った上で決意したのだ。

「・・・はぁ・・・そういうことじゃない。　俺は、メルエが約束を破ったことを言っているんだ。　先程も言ったが、何も永久に使用を禁止した訳じゃない。　ただ、今のメルエでは無理だと、俺も、そこの戦士も判断したんだ。　それを破るのであれば、結局は戦闘の足枷となるだけだ。」

「・・・カミュ・・・」

「自爆に近い形で怪我を負ったメルエを庇いながら戦闘を毎回行うつもりか？　それに、無理な魔法行使は、メルエの成長の妨げにもなるはずだ。」

カミュが言う言葉に、ようやくリーシャは得心する。
カミュは、心底メルエを心配しているのだ。
メルエに戦う術を与えてしまった自己の罪を自覚し、ならば全力でメルエを護ると決めているようなカミュの覚悟を見たような気がした。

「・・・そ、それは・・・・」

「アンタが、＞ホイミ＜以上の回復魔法を使用できるのであれば、それに越したことはない。　だが、それとこれは話が違う。　メル

エ、いいか？　もう一度言う。　＞ベギラマ＜は禁止だ。　いいな。」

サラに向けていた顔をメルエに再度向け直し、カミュはメルエへ言葉を投げる。
それは念を押すというよりは、それよりも強い力を感じるものだった。

「・・・・ぐずっ・・・・・」

カミュの強い言葉に、目に溜めた涙を落し、鼻をすすりながらも、メルエは深く頷いた。

「・・・メルエ・・・おいで。」

そして、メルエはいつもの様に、優しく両手を広げるリーシャの腕の中へと収まって行く。
サラは、そんな二人の姿を見て、この三人のやり取りに自分が入っていけないのではと少し寂しさを感じていた。

故に気がつかない。
カミュの言葉に、サラのレベルアップを奨励する言葉が入っていたことを。
何も、このパーティーの中で心境に変化を見せているのは、常に悩むサラやリーシャだけではないのだ。

この表情に乏しい、アリアハンが掲げる勇者にも変化は見えていた。

＞ノアニール＜を出る頃には、少し顔を出していただけの太陽が真上に上る頃、一行は＞エルフ＜達の住む里を護っている森の入口の前に到着する。

ただ、一行は、森の前に着いてからある事柄に悩むこととなった。
それは、エルフの里への行き方。
先日は、メルエの純粋さにより到達できたが、その頼りのメルエも、再度案内を頼むリーシャに弱々しく首を横に振るだけであった。

「ここで、立ち止まっていても仕方がない！　まずは森へと入ろう！」

「・・・はぁ・・・入るのはいいが、出られなくなる可能を少しでも考えているのか？」

猛然と森へ入ろうとするリーシャを留める為、苦言を言うカミュであったが、すでにリーシャの姿は森へと消えていっていた。

「・・・・カミュ様・・・・」

「・・・仕方がない・・・・」

リーシャに続くように入って行ったメルエを見て、サラがカミュへと指示を仰ぐが、もはや二人が完全に森に入ってしまった以上どうしようもないということが事実である。
カミュの諦めにも似た溜息を聞き、サラも森へと入っていく。
それに続く形でカミュも森へと歩を進めた。

「・・・カミュ・・・どうするんだ？」

「・・・はぁ・・・それは俺が聞きたい。　俺の忠告も聞かずに森へと入ったのはアンタだぞ？」

「・・・・・・リーシャ・・・・・・・一番先・・・・・・・」

「・・・リーシャさんですね・・・」

森へ入ったはいいが、入った途端に方向感覚を狂わせたリーシャが、カミュへと指示を仰ぐが、それに返ってきたのは、パーティー全員からの冷たい反応だった。
全員の冷たい反応に言葉を詰まらせるリーシャであったが、確かに森へ入る後方でカミュの声が聞こえたことを思い出し、頭を下げる。

「・・・はぁ・・・入ってしまったのはどうしようもない。　これからどうすかだが・・・」

「メルエ？　やっぱり何も解りませんか？」

「・・・・・・ん・・・・・・・」

溜息を再び吐き出すカミュを横目に、サラがもう一度メルエに話かけるが、それは静かに首を振るメルエの姿に落胆することになる。

しかし、その時、一行は再び不思議な光景を目の当たりにすることとなる。

明らかな落胆を示すサラやリーシャの横で、申し訳なさそうに視線を落とすメルエの懐から赤く輝く光が漏れだしたのだ。

それは、一行が＞西の洞窟＜で目にした物と同じ光。

＞エルフの至宝＜である＞夢見るルビー＜が放っていた光に間違いないもの。

それがメルエの身体を包み込む程の勢いで漏れ始めたのだ。

「　えっ？　」

「　ま、またか！？　」

その光を見つめるサラは驚き、リーシャに至っては再び先日の様な他人の過去を見せられるのかと警戒心を露わにする。

しかし、それは懐から木箱を取り出したメルエの行動で、杞憂に終わることとなる。

何事も起らないことを不思議に思う一行を余所に、メルエは興味深そうに木箱を開け始める。

「　メ、メルエ！！　」

慌てたリーシャがメルエに駆け寄ろうとするが、時すでに遅し。

まるで木箱を蓋が開くことを心待ちにしていたかのように、中に控

えていた赤い宝石の輝きが増していく。
再び、＞西の洞窟＜と同じように視界が奪われる一行。
しかし、それは一瞬のことだった。

「　！！　」

「うわ～～」

「　こ、これは・・・・」

その後の出来事は、正に神秘的と言う言葉がよく似合うものだった。
目が眩む程の光を放った＞夢見るルビー＜が、まるで本来自分がいるべき場所を示すように、ただ一点だけを目指して光を放ったのだ。
一本の線と化した光は、太陽の光が届きにくい森の中で赤い光線となり、カミュ達を誘うようにその光を放ち続ける。

「・・・カミュ・・・これは・・・・」

「・・・何度も言うが、アンタが解らないことの全てを知っている訳じゃない。　だが、この光が＞エルフの隠れ里＜を指し示している可能性は高いだろうな・・・」

「では、この光に沿って歩くのですか？」

自分の胸から真っ直ぐ伸びる光に興味を示し、その光線の行方の間に自分の手をかざしたりしながら上機嫌なメルエとは別に、他の三人の表情は固かった。

それは、＞エルフの至宝＜という情報しか持ち合わせていないカミュ達にとって当然の疑惑だろう。　得体も知れない物が指し示す方向に歩くということがどれ程の危険を含むものかを知っている人間にとっては尚更である。

「　メ、メルエ！　だから勝手に行くなと言っているだろう！　」

面白そうに光が指し示す方角へと歩き出すメルエに、リーシャは慌てて声をかけるが、本気で怒ってはいないリーシャに対し、メルエは先程のカミュに対してとは正反対に、柔らかな笑みを浮かべて振り向いた。

そんなメルエの様子に溜息を吐いたカミュは、先頭を切って、その後を追って歩き出す。
そしてリーシャやサラも続くのだった。

「・・・私は、生まれてから、これ程立て続けに不思議な経験をしたのは初めてだ。」

「・・・はい・・・私もです・・・・・」

目の前に広がる光景に、嘆息を漏らしながらリーシャが呟き、それに同調するようにサラも言葉を紡いだ。

今、一行の目の前には、先日見た美しい木々のアーチが誘うように立ち並んでいる。
それは、＞エルフの隠れ里＜に続く入口。
やはり、カミュの予想通り、＞夢見るルビー＜の放つ光線は、ここまでの道程を指し示していたのだ。

先程まで、メルエの手の中で一筋の光を放っていた赤い宝石は、もうその輝きを失い、静かにメルエの手の中に納まっている。
役目は終えたとばかりの姿。

一行が唖然とする中、メルエはその宝石を木箱の中に戻し、再び懐の中にしまい込んだ。
そして、そのままメルエが先頭を切って、木々のアーチを潜って行った。

里の中は、先日と変わらない。
カミュ達の姿を確認したエルフ達は、驚愕の表情を浮かべた後、逃げて行く。

そんなエルフ達の姿に、サラは心を痛める。
アンは＞ノアニール＜でこんなやりきれない想いを抱いていたのだろうか？
そう考え、サラは首を振って考えを振り払う。

彼女は一人だった。
今の自分の様に、心強い仲間達がいたわけではない。
ならば、彼女が抱いた想いは、今自分が感じているものの何倍も厳しいものだったのだろう。

「・・・・行くぞ・・・・」

そんなサラに心強い言葉がかかる。
メルエに変わり先頭を歩くカミュが、真っ直ぐ女王の居る屋敷に向かい歩き出したのだ。

「・・・サラ・・・行こう。　エルフ達の態度は気にするな。　種族によって想いは違う。　ただ、それだけのことだ・・・・」

「・・・はい・・・」

サラを気にしてかけてきたリーシャの言葉。
だが、言葉の内容とは違うものを胸に抱いていることは、リーシャの表情を見れば明らかだった。

リーシャもまた、サラと同じように心を痛め、今までの自分の価値観との板挟みにあっているのだろう。
自身が築き上げてきた価値観が打ち砕かれ、世界の真実を目の当たりにする苦しみに似た感情をリーシャもサラも抱えていたのだった。

「またお前達か・・・何の用だ？　先日は例外であることぐらい、お前達の方がよく解っているだろう？」

屋敷の門に着くと、そこには待ち構えていたように先日と同じ側近が立っていた。
彼女こそ、女王の側近達で組織される親衛隊の隊長を務めるエルフ。
女王とアンを最後まで護り通そうと奮闘した者であった。

「・・・申し訳ございません。　どうしても女王様にお伝えし、お

渡ししたい物があり、無礼を承知で再度上がらせて頂きました。」

「・・・・・・・」

カミュの真摯な対応に、エルフのエリートでもある彼女は、その目を真っ直ぐ見つめる。
カミュのマントの裾を握ったメルエもまた、彼女を真剣に見上げていた。

「・・・・・・・アン・・・・・・・・・」

「・・・・アン様に関わることなのだな・・・・？」

そのメルエの呟きに、視線を向けた隊長は、確認を込めて言葉を繋げる。
そして、その言葉に、カミュ達全員が頷くのを見て、一度目を瞑ってから溜息を吐いた。

「・・・わかった・・・・通れ。　女王様は謁見の間にいらっしゃる。　失礼のなきよう。」

「・・・・ありがとうございます。」

隊長の言葉にサラは目を見張る。
里にいる住人達の反応から考えれば、通してはもらえないだろうと思っていた。
しかし、現実はサラの考えていたものとは正反対なものだった。
人間を嫌う・・・いや人間を憎んでさえいるエルフのそれも女王を護る側近が、よりにもよって自分達『人』を女王の許しもなく通すことが信じられなかった。
自分の横を通り、謁見の間に向かう四人の背を見つめながら、隊長は考えていた。
『何故、自分は通してしまったのだろう?』
それは、女王の側近として、女王の『アン様の守護』という命を果たせなかったことへの負い目からなのか。それとも、あの先頭に立っていた男という性別の『人』の持つ蔑みや恐怖等の感情の見えない混じり気のない真っ直ぐな瞳のせいなのか。
何れにせよ、女王の許可なく謁見の間へと続く門を開けてしまった

以上、厳しい沙汰があることだろう。
それはもはや承知の上であった。
しかも、エルフの敵と言っても過言ではない『人間』を通してしまったのだ。
死罪は免れないだろう。

それでも、彼女の心に『後悔』の二文字はなかった。
何故かそれが自分のできる最良の行動だったように思えて仕方なかった。

「・・・・アン様・・・・・」

自らが敬愛する人物の娘の名を呟く隊長の表情はどこか晴れやかなものであった。

「再びここを訪れるとは、先日の私の話を聞いていなかったのですか？」

謁見の間に入った途端、厳しい視線と共に向けられた冷たい言葉にサラは身が竦んでしまう。　女王から発せられる威圧感はそれほどまでに強いものであった。

「お怒りは御尤もです。　ただ、女王様にお伝えしたき儀とお渡ししたき物がございます。」

「・・・・・・・これ・・・・・・・・・」

女王の前で跪く一行の一番前で、カミュが口を開くと、待ちきれない様子で、メルエがその懐から木箱を取り出し、立ち上がった。

「・・・・それは・・・・・」

「メルエ!!」

「よい！　幼き者よ、それをこちらに・・・・」

メルエの行動を咎めようと口を開いたリーシャを抑えるような、女王の強い言葉が謁見の間に響く。
女王に命を受けたメルエは、木箱を両手に抱え少しずつ玉座へと近づいて行く。

「・・・・・・・ん・・・・・・・・」

文字通り、礼儀を知らないメルエは、無造作にその木箱を女王に手渡す。
そんなメルエの作法に気を悪くした様子もなくメルエの手から木箱を受け取り、蓋をゆっくりと開けて行く。

「・・・・・・・アン・・・・・・・泣いてた・・・・・・」

「メ、メルエ！！」

いくらなんでも、メルエの言動は無礼すぎる。
例え『エルフ』と言えども、相手はそれを束ねる言わば【国王】の様な存在だ。
とても、メルエの様な一少女が気軽に話して良い存在ではない。

「・・・・良いのです・・・・そうですか・・・・あの子は・・・・・」

メルエの言葉に軽く視線を向けた後、女王は木箱の中にあった手紙に目を通し、全てを把握したように呟いた。
そして、中にある＞夢見るルビー＜を手に取り、一度目を瞑り黙り込む。

「・・・？？？・・・」

そんな女王の姿を不思議に思い、首を傾げたメルエであったが、先程からこちらを鋭く睨むリーシャの視線に気付き、慌ててカミュの傍まで戻って行く。
カミュの傍で、跪いたメルエは、極力リーシャと目を合わせないようにしながら、カミュのマントの裾を力を込めて握っていた。

「・・・・・・・これを・・・・・・持って行きなさい・・・・・・・」

「・・・・これは・・・・・」

「＞目覚めの粉＜です。　これを風に乗せ、村の人間達に振りかければ、村人達の眠りも覚めるでしょう。」

その言葉にパーティー全員が驚きに目を見開いた。

先程、女王が＞夢見るルビー＜を手に取り、目を瞑ったということは、その宝石内に宿る娘の記憶をカミュ達と同じように見たと考えることは容易である。
あの、村人から迫害を受けていたアンの姿をだ。

それなのにもかかわらず、＞ノアニール＜の呪いを解くと言っているのだ。
サラにはそれが不思議でしょうがなかった。

「・・・女王様は・・・見たのではないのですか？」

「　サラ！！　」

リーシャは、メルエに続きサラまでも、立場を弁えぬ行動に出たことで頭を抱えたくなった。　通常、サラやメルエ、リーシャでさえ、このような場所で口を開くことはおろか、身動きすらもしてはいけないというのに、よりにもよって、疑問をぶつけるなど言語道断の行いであるのだ。

「・・・そうですか・・・・そなた等も見たのですね、我が娘アンの記憶を・・・？」

「・・・・はい・・・・・」

女王の問いかけに、サラが反応することを遮るようにカミュが返答を返す。
カミュの言葉に、女王は少し目を瞑った後、再度口を開いた。

「そなた等は・・・『何故、人間達に迫害されたアンを見て尚、人間の眠りを覚ますのか？』と思っているのでしょうね・・・」

「「「「・・・・・・・」」」」

女王の言葉は、謁見の間にいる女王以外の者全てに共通する疑問であった。
女王として、エルフが受けたと言うだけでも許されないことのはずだ。
それが、自分の娘となれば、尚更のことである。
『人』に対し、更なる憎しみを覚え、復讐を考えても可笑しくないという程のことである。

「・・・我が愛する娘が、最後まで護り通した『エルフの誇り』を、母である私が汚す訳にはいきません。」

「　！！　」

サラは、女王の言葉に胸を鷲掴みにされたような衝撃を受けた。
娘を傷つけ、死へと追いやった『人』への嫌悪や憎しみを捨ててまで、娘であるアンの誇りを護る女王の大きさを目の当たりにし、言葉を失ったのだ。
母と父を魔物に殺され、ただその『復讐』の為だけに旅に出た自分。

『人』である男性を愛したが、その愛した男性と同じ『人』によって死に追いやられながらも、エルフとしての誇りを胸に、それを恨むことをせず、死を受け入れたアン。
そのアンの結末すらも誇りとして受け止める女王。

それは、サラが言い訳の様に自分に言い聞かせていた、種族の違い、価値観の違い、育ちの違い等では片付けることなどできないものであった。

「・・・私が、もっとアンの話を聞き、そして、あの子たちの生きる道を一緒に探してやれば、あの子たちが死を選ぶことはなかった。
私の責も大きいのです。　あの子がこの里へ帰って来ることができなかったこと自体が私の罪・・・・」

「・・・・・・・アン・・・・・・・お母さん・・・・・・・好き・・・・・」

自分を責めるように言葉を発し、目を瞑る女王に対して、メルエが再び口を開いた。
言葉をたどたどしく繋げながら話すメルエの姿に、リーシャは止めるのを失念してしまう。

「・・・ありがとう・・・幼き者よ。」

メルエの声に目を開いた女王は、メルエに視線を向け、本当に微か

に微笑んだ。
その微笑みにメルエもまた微笑み返す。

一瞬の微笑み。
すぐに表情を戻した女王は、再び厳しい目をカミュ達に向け、口を開く。

「・・・アンの最後を伝えてくれたこと。　そして、『エルフの至宝』を取り戻してくれたことは、礼を言います。　しかし、私が『人』を許せない想いは変わりません。　用が済んだら早々に立ち去りなさい。」

「・・・・・はっ。　失礼いたします。」

女王から＞目覚めの粉＜を受け取ったカミュは深々と頭を下げた後、立ち上がる。
それと同時にリーシャやサラも立ち上がり、謁見の間から出て行く。

「・・・そなたは暫し待て・・・」

メルエの手を引くリーシャも出、残すはカミュ一人となった時、女王から声がかかった。
振り返ったカミュは、女王の視線を受け、再び玉座の正面に移動し、跪いた。

「・・・そなたの目・・・見覚えがある。　昔、この里へ迷い込んだ『人間』が居た。　その者の瞳によく似ておる。」

「・・・・・・・・・」

顔を上げたカミュの瞳を覗き込むように見つめる女王の言葉に、カミュは何も答えない。
いや、答えられないのだ。
先に続く言葉を聞きたくないがために。

「・・・・確か・・・・『オルテガ』といったか・・・・・」

「　!!　」

「ふむ。　そなたの縁者か・・・？」

カミュの反応に、女王の疑問は確信へと変わる。
それ程、カミュの身体に動揺が走っていたのだ。

「しかし、そなたの瞳と似てはいるが決定的に違う部分もあるな。」

「・・・・・・・・」

「そなたも、魔王の討伐の為に旅をしておるのか？」

「・・・・はい・・・・・」

女王の問いかけに、ようやくカミュは反応を返す。
しかし、それはどこか弱々しいものであった。

「ふむ。　そうか・・・・以前、そなたは私に『人を護る理由』について答えることができなかった。　それは今も変わらぬか？」

「・・・・はい・・・・・」

「・・・ふむ・・・」

『人を護る理由』
それは、カミュが物心ついた時から模索し続けている事柄だった。
そして、未だに答えが見つからない。

「・・・・ふぅ・・・・ここからは、アンの心を解放してくれた感謝の意を込めて話します。」

「・・・・・・」

「貴方は、これから先、この世界を旅する中で、様々なことを見るでしょう。　その中には今回の様な『人』の醜い部分を見るとき、逆に『人』の美しさを見るとき等、貴方の悩みを大きくするものもあるでしょう。」

女王の口調がいつの間にか変わっていた。
母が子を諭すような優しい口調。
これが、『人』を守護し、導く『エルフ』の本来の姿なのかもしれない。

「もし、貴方が迷い、悩み、前へ進むことを躊躇う時には、あの『幼き者』を見なさい。」

「・・・・メルエを・・・・」

カミュは、知らず知らずに女王の雰囲気に飲まれていた。
常に冷静沈着で、周囲に流されることなどないカミュにしては珍しいものだった。

「ええ。　あの『幼き者』は貴方を見ています。　貴方を見ている

からこそ、あの『幼き者』の瞳は美しい。　何者の考えにも染まらず、自らが見聞きしたもので判断する。　貴方が迷い、悩む時、あの『幼き者』の瞳が貴方に答えを指し示してくれるでしょう。」

「・・・・・・はい・・・・・・・」

「貴方の瞳に似ている『オルテガ』と貴方の瞳の決定的違いは、貴方が答えを見つけた時、自ずと理解するでしょう。」

女王の話は終わった。
具体的な教えは何もなかった。
だが、カミュは、何か心に楔を打ちつけられたように感じていた。

「外へ出れば、私の真面目な側近が、待っているでしょう。　その者に『貴女の判断は正しかった。　罪は問わない。』と伝えてあげて下さい。」

「・・・・・畏まりました・・・・・では、失礼いたします・・・・・」

そして、女王とカミュの対談は終わりを告げた。
色々なものをカミュの胸に残して・・・・・

誰一人居なくなった謁見の間の玉座に一人座り、一枚の手紙を見つめる女性がいた。

「・・・・アン・・・・・」

愛しい娘の名を呟き、たった一枚の紙切れとなってしまった娘を胸に掻き抱く。

女王と呼ばれ、エルフを護るために奮闘してきたが、たった一人の自分の娘の身すら護ることができなかったことを悔やみながら・・・・

「・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・・・・うぅぅ・・・・・・・・・・」

今日、この日だけは、女王ではなく、唯の母親に戻る。
愛しい一人娘の死を悲しみ、涙を流す母親に。

圧し殺すような嗚咽が、静寂と夜の闇に覆われた謁見の間にいつまでも響いていた。

エルフの隠れ里？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

今回の一場面は、ある映画の一場面を思い出す部分があると思います。

とても好きな場面で、この部分でどうしても使いたかったんです。

色々とお叱りなどもあるかもしれませんが、お許し下さい。

ご意見、ご感想をお待ちしています。

ノアニールの村？（前書き）

前話の２話に分けた部分の続きです。
早めに更新となりました。

ノアニールの村？

＞エルフの隠れ里＜から出て、森に戻る頃には日も傾き、森の中は暗闇を帯びていた。
思いのほか、カミュ一行は里で長い時間を過ごしていたようだった。

カミュを先頭に森の出口に向かって歩きはじめる。
その後をリーシャに手を引かれたメルエが続く。
一行の間に会話は何もない。
それが、全員の心を顕著に示していた。

落ち葉や枯れ木を踏みしめる音だけが森の中に響く中、不意にサラが呟きを溢す。

「・・・・＞カザーブ＜のアンは、エルフのアンの・・・・生まれ変わり・・・・」

本当に何気なく溢したサラの独り言は、思わぬ結果を生みだすことになる。
一言も話さずに歩き続けていた一行の雰囲気が明らかに変わったのだ。

「・・・・なんだと・・・・・？」

そして、それは先頭を歩いていたカミュの一言で爆発する。
振り向いたカミュの顔は、表情を失くし、能面の様なものになっている。
何度となく、その顔を見たことがあるサラにとって、そのカミュの表情は自分の奥底にある恐怖を呼び覚ますものとして十分なものだった。

「カ、カミュ！！」

慌てたようにカミュを制するリーシャであったが、もはや、カミュを止めることはできない。能面のような表情で、顔から奪った感情を吐き出すようにカミュは口を開く。

「・・・生まれ変わり？　エルフとして死んだ者は、聖霊ルビスに背いた者として、死後もその罪を償っているというのか？　生まれ変わった先でも、その罪によって１０年も生きられずに死ぬことが決められていたとでも言うのか？」

「・・・・そ、そんなことは・・・・」

サラが言う輪廻転生の考えは、この世界では常識ではある。
その為、前世で聖霊ルビスに背いた者は、今生でその罪を償いながら生きるというのが、教会が広める教えでもあるのだ。

「アンタが言っているのは、そういうことだ！　アンタが僧侶として、どれほど聖霊ルビスを崇めているのか知らないが、二人のアンの死をくだらない教えで汚すな！」

「　！！！！！　」

「　カ、カミュ！！　」

見たことのない程の激昂。
カミュがこれ程感情を露わにするのを、リーシャもサラも初めて見る。

サラは、そのカミュの感情をまともに真っ直ぐ受けたことによって、その身を強張らせている。　そんなサラの近くに駆け寄ったリーシャもその胸にある動揺を隠すことができていなかった。

「・・・・・・・・アンは・・・・・・・・・アン・・・・・・・・・」

そんな二人を見上げるように、下から小さな声がかかる。
感情をむき出しにしたカミュとは違い、哀しさを滲ませながらも、優しく微笑む少女。
『人』のアンの唯一の友人にして、『エルフ』のアンの心を解放した張本人。

「・・・ごめんなさい、メルエ。　そういう意味で言ったのではなかったのですが、それでも無神経でした。　本当にごめんなさい。」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

メルエの哀しみを感じさせる笑顔を見て、サラは自分の言った言葉の重みを理解し、頭を下げる。　そんなサラにメルエは微笑みながら頷いた。

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・また・・・・・・・・泣く・・・・・・？」

「　な、泣きません！　だ、大丈夫です・・・・・・ぐずっ・・・・・・」

メルエの茶化すような言葉に、反論するサラであったが、最後には溢れた涙を抑えることができなかった。

「・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・ダメ・・・・・・・・・」

サラの泣き顔を見たメルエは、カミュへ振り返り、厳しい目を向ける。
それは、いつもの逆の姿。
カミュに叱られ、涙を流すメルエという構図を覆すものだった。

「そうだな。　言っていることは解るが、メルエの言う通り、言い過ぎだ。」

「・・・・ごめんなさい・・・・・・・言う・・・・・」

いつの間にかメルエの後ろに立ったリーシャがメルエの援護に回り、メルエはカミュにサラへの謝罪を要求する。
そんな二人の後ろで、サラは泣き笑いに似た表情を浮かべていた。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・カミュ・・・・・・・・・＞ノアニール＜・・・・・置いてく・・・・・」

無表情のまま、何も言わないカミュに、メルエが追い打ちをかける。
それは、メルエがカミュに言われた言葉。
しかし、それはメルエが嫌なことであって、決してカミュが嫌がることではない。
むしろ、アリアハンを出た当初であれば、願ったり叶ったりの事で

あろう。

「・・・・ふぅ・・・・わかった・・・・言い過ぎた・・・・すまなかった。」

それにも関わらず、カミュは頭を下げた。
そんなカミュの姿にリーシャは多少の驚きはしたが、頭を下げたカミュに柔らかく微笑むメルエと共に表情を和らげる。

「　い、いえ！　今のは、私が無神経だったのです。　カミュ様が謝る必要などありません！　」

しかし、カミュが頭を下げるなど、考えもしなかったサラは完全に面を食らっていた。
カミュにしてみれば、＞エルフの隠れ里＜で女王との話の中に出てきた存在への苛立ちをサラにぶつけてしまったという、唯の八つ当たりに近いものであったため、素直に頭を下げることにしたにすぎないのだが・・・・・

サラは、教会の教えを全て否定するわけではない。
しかし、それが全てだとは、今のサラにもはっきりと断言することが出来ない。
『エルフ』という民を見て、それを取り巻く『人』の過去を見て、サラの心は少しずつ変化をきたしていたのだ。

故に、面を食らっていたとは言え、教会の教えを『くだらない』と

吐き捨てたカミュの言葉を否定しなかったのだ。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

二人のやり取りを微笑みながら見つめていたメルエが、満足そうにカミュのマントの裾を握り、先を促した。

剣呑になっていた空気は一気に和み、一行は再度森の出口に向かって歩を進める。

メルエという存在の大きさを、リーシャは改めて認識することになった。

夜も更けた頃、一行は＞ノアニール＜の門をくぐり、十数年の眠りにつく静寂が支配する村の中に入った。

「・・・カミュ・・・すぐに＞目覚めの粉＜を使うのか？」

「・・・いや・・・明日でいい。」

少し表情に疲れの見えるリーシャがカミュへと言葉をかけるが、それは明らかに『明日にしよう』という投げかけに聞こえるものだった。

案の定、カミュにもその言葉に秘められた想いは届いたのか、カミュは溜息交じりにリーシャの物言わぬ提案に同意した。

「そ、そうですね。　ギルバードさんのお父様にも立ち会って頂かないといけませんし。」

「・・・・・・・メルエ・・・・・・・眠い・・・・・・・・」

カミュの言葉は、満場一致で可決された。
そのまま、一行は宿屋に入り、それぞれ湯浴みをした後に就寝することになる。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

翌朝、カミュの目の前に泡の付いた手を突き出すメルエに、カミュは再び自分の着ていた物を渡すことになる。

先日、皆で一緒に行った洗濯が気に入ったのか、朝日が昇るか昇らないかの時刻にメルエによって叩き起こされたリーシャがカミュの部屋へ怒鳴り込んできた。
それは、メルエに対して怒っている訳ではなく、呑気に寝ていたカミュへの理不尽な怒りであった。

そして、現在に至る。

「ふふふっ、村の方々に目覚めてもらうのは、洗濯物が乾いてからですね。」

「そうだな。　十数年眠りについているんだ。　目覚めるのが数時

間遅れても、文句は言わないだろう。」

メルエと共に桶を囲む二人が話しているものは、彼の老人に聞かれでもしたら、それこそとんでもない剣幕で怒り狂うであろう内容だった。

終始笑顔のこぼれる二人に挟まれ、メルエは幸せそうな笑顔を浮かべながら桶の水の中に入った手を懸命に動かしながら服の汚れと戦っていた。

「これは、勇者様。　朝早くから衣服の洗濯とはご苦労様ですな。」

「「「　！！！　」」」

そんな和やかな空気を一変させる声が響く。
それは、先程まで全員の話題の中心にいた人物だった。

サラは先程までの会話が聞こえていたのではと訝しむが、言語の端々に厭味を含ませてはいるが、村人の解放を後回しにしていることには気が付いていない様子にほっと胸を撫で下ろした。

「＞夢見るルビー＜は見つかったのでしょうか？」

まるで、『アンタ達は、やることをやっているのか？』とでも言いたげな老人に、リーシャは苦虫を噛みしめたような表情を浮かべた。

どちらかと言えば、この常にカミュ達に厭味を吐き続ける老人が、この村の惨状の原因であると言っても過言ではないのだ。
それでも、この老人はカミュ達へ厭味を繰り返す。

それが、サラに対してカミュが言った『そういう存在』という者であることの哀しさなのかもしれない。
サラは、老人の表情に嫌悪感を覚える。
それが、自らが信じてきた道を自らで脇へと逸れた証拠であることに気がつかずに・・・

「・・・はい。　＞夢見るルビー＜をエルフの女王様にお渡しし、この村の呪いを解くことの許可を頂きました。」

「　な、なんですと！　では、この村は眠りから覚めるのですね！　」

リーシャやサラが感情を表情に出してしまっている中、カミュは静かに老人と相対する。
そのカミュの言葉に、老人は目を見開き、そして心からの喜びを表

した。

この老人にとっても、自分だけが取り残され、村の人間が全て眠りという呪いを掛けられたことに責任を感じていたのかもしれない。もしかすると、それも、『自分の息子が犯した罪のせい』と考えているのかもしれないが。

「で、では、何をのんびりと洗濯などをしているのですか!?早く村人の呪いを解いて下さい！」

「・・・村人の呪いは、解くつもりです。ただ、もうしばらく、この者達の洗濯が終わり、衣服が乾く午後までお待ちいただけませんか？」

「アンタ達の衣服など、どうでもいい！それよりも十数年の呪いに苦しむ『人々』を救うのが先決であろう！」

「このっ！」

カミュの言葉に、十数年の呪いが解けることを知った老人は、早くしろと急かす。

そこに、呪いを解くために奮闘したカミュ達への労いの言葉もない。

カミュ達の旅の疲れを癒す時間も与えようとはせず、ただただ自分達の都合を押し付けるだけ。

そして、その老人の態度が、ついに獅子を眠りから覚ました。
他者との交渉時には絶対に間に入ってこないことを約束した人間。
アリアハンから出発した勇者をアリアハンの英雄の息子とは認めなかった女性がその青年を庇うように老人の前に立ち塞がったのだ。

「ならば、言わせて頂こう。ご老体、貴方が何をしたのか？
エルフの娘を多数で迫害し、実の息子と駆け落ちをしたにもかかわらず、その行方を探そうともせず・・・」

「お、おい・・・」

「カミュは黙っていろ！そして、その結果、エルフの女王の怒りに触れ、村に呪いが掛けられたのにもかかわらず、エルフの里へ謝罪にも行かない。それで、赤の他人であり、何の縁もない人間にそれらの責任を丸投げし、その人間が奮闘したことに対し労うこともせず、発した言葉がそれか！？」

サラやメルエはもちろん、カミュですら、ここまで怒気を発しているリーシャを見たことがない。
いつもカミュと繰り広げているやり取りの中で、カミュのからかいに怒りを見せることはあったが、それは納めることのできるレベルだ。
決して、以前交渉の場への介入を禁止したカミュの言葉を無視し、まして怒鳴り上げることをする程の怒りではなかった。
老人も、目の前に立つ、腰に剣を差した女性戦士の怒りに怯えを見

せた。
元来『人』は弱い。
弱いからこそ、仲間を集い、そして大義名分を探す。
その後ろ盾があってこそ、他者に対し強く出ることができるのだ。

「だ、だが、それが『勇者』であろう？」

「ふざけるな！　例え、『勇者』であろうと『人』であることには違いがない！　傷つけば倒れ、死に至ることもある。　それ程の苦労をしてきた同じ『人』を労うことすらも出来ないのか！？」

「・・・・・リーシャさん・・・・・」

「し、しかし、こうしている間も、村人達は呪いを受け苦しんでいる。　その苦しみから救いたいと思うのは間違っているとでも言うのですか？」

リーシャの激昂に劣勢になりながらも、老人は尚も食い下がる。
しかし、老人のその反論に、リーシャの表情から怒りが消えた。
そこに残ったのは、哀しみとも憐みともつかない微妙な表情。

「・・・長い眠りについているだけの村人に苦痛を感じることがあるのか？　しかも、それにしたって、私から見れば『自業自得』とすら思える。　貴方方が行った行為によって受けたアンの傷はも

っと深く苦しいものだったろう。　私は、ご老体やこの村の人間がアンに行った行為を、同じ『人間』として軽蔑する・・・・・」

「　なっ！！　」

それだけ言うと、リーシャは顔を下げ、俯いてしまう。
老人としても、自分達がした迫害という行為の一部始終をこの勇者一行が知っているはず等ないと思っていたのだろう。
まさしく言葉を失っていた。

「・・・・・もういい・・・・・」

止まってしまった周囲の時間を再び動かしたのは、『人』である『勇者』と呼ばれる青年だった。　リーシャの前に再び立ち、老人の顔を見る。

「・・・・・・・・・」

カミュにまで、先程リーシャにぶつけられた蔑視の言葉を浴びせられるのではと老人は身を硬くするが、カミュから出た言葉はそうではなかった。

「・・・・供の者の言葉はお気になさらずに・・・・午後まで待っ

てほしいと言ったのは、理由があるのです。」

「・・・・理由・・・ですか・・・？」

予想とは違った言葉に、老人は呆気にとられたように言葉を溢す。
カミュの後ろに下がったリーシャもカミュの顔を見つめることしかできなかった。

「はい。　女王様から頂いた呪いを解く為の道具は、風が必要なのです。」

「・・・・風・・・・ですか・・・・？」

「はい。　ご覧の通り、今はこの村に風が吹いてきていませんが、午後になれば風も出て来ましょう。」

カミュの言葉通り、今この村には風が全くと言っていいほど吹いてはいない。
女王が言っていた＞目覚めの粉＜の使用方法は、『風に乗せて』というものであったことは事実である。

「そ、そうでしたか・・・・そうとは知らずに、申し訳ございませんでした。　では、私はこれで。　午後に入り、その道具を使用す

るときには是非同席させて下さい。」

「・・・はい・・・」

そう言って、老人はそそくさとその場を後にする。
まるで、自覚していた自分の罪から逃げ出すように。

残った一行には気不味い空気が流れていた。
激昂したリーシャ本人は当然として、それを傍観していたサラにも、
そして庇われた形となったカミュにも。

しかし、それを破ったのは、またしてもパーティーの癒しとなる少女だった。

「・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・」

「おっ!?　な、なんだ?　どうした、メルエ?」

今まで、手に泡を付けながら呆然とその光景を眺めていたメルエが、
リーシャの腰元に抱きつくように駆け寄ってきたのだ。
突然のメルエの行動に面を食らうリーシャではあったが、メルエを
しっかりと抱きよせ、その背中を撫でている。

「・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・好き・・・・・・・・

・・」

「ん？　そ、そうか・・・・ありがとう・・・・私もメルエが大好きだ。」

メルエにとって、老人とカミュのやり取りは、老人が一方的にカミュを攻撃しているように見えていたのであろう。

カミュを虐める老人に対し、立ち上がり、やっつけてしまったリーシャを眩しげに見つめながら、カミュを救ってくれた恩人に自分の気持ちを吐き出したのだ。

気不味い雰囲気に気持を沈めていたリーシャは、メルエの真っ直ぐな好意に嬉しそうに微笑み、メルエを抱く腕に力を込めた。

「さあ、メルエ、洗濯を終わらせてしまおう。　昼までに乾かさないといけないからな。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「そ、そうですね！」

メルエの笑顔に気を取り直したリーシャの掛け声で、三人は再び泡の静まった桶に向かって歩き出した。

皆がカミュに背を向け、桶へと歩き出す中、その中の一人の背に向

かって、カミュが軽く頭を下げていたのを誰も見ることはなかった。

雲一つない青空の中、カミュ達の洗濯物は順調に乾き、太陽が真上に上がる頃には、洗濯物を薙ぐように風が吹き始めていた。

乾いた洗濯物を取り込み、それに着替えたカミュ達は、先刻の老人を呼び出し、村の中央に当たる宿屋の入り口付近に集まった。

「して、どうなさるおつもりなのですか？」

先程のリーシャの怒りの余韻が残っているのであろう。
少し、遠慮気に口を開いた老人に、カミュは袋の中に仕舞っていた小さな巾着を取り出して見せた。

「・・・これは、＞目覚めの粉＜と呼ばれる物だそうです。」

「ほう・・・＞目覚めの粉＜とは何とも皮肉な・・・」

あれ程、カミュ達に皮肉を言っていた人間が、その粉を皮肉な物として受け取る神経がサラには理解できなかった。
それは、リーシャも同様で、呆れと憐みを浮かべた瞳で老人を見ていた。

「・・・では、始めます・・・」

「お、お願いします！」

カミュの言葉に返事を返したのは老人唯一人。
他の三人の胸の内にある想いはそれぞれにしか分からない。

巾着の様な袋から、カミュは自分の掌に中の粉を出していく。
予想と反して、金色（こんじき）に輝くその粉は、見方によっては砂金の様にも見えなくもない。
ただ、実際手にしているカミュにしてみれば、その粉は手のひらに山盛りに乗せているにもかかわらず、羽根の様に軽く、何も重みなどを感じさせない物だった。

「あっ！？」

それは誰の声であっただろう。
その声が聞こえたと同時に、＞ノアニールの村＜から音が消えうせた。

カミュの掌に出された＞目覚めの粉＜は風にさらわれ、舞い上がり、そして村全体を覆っていく。
それは、あたかも金色(こんじき)の絨毯が敷き拡げられていくように村の上空を覆っていった。

空に舞い上がった金色の羽が村全体に行き渡り、次第に降り注ぐように舞い降り、人々の上に落ちて行く。

外で談笑をしている人々に。
井戸の周りで水を汲んでいる人に。
そして、風は、戸や窓の空いた建物の中まで金色の粉を運び、建物の中にいる人々の上にも＞エルフの優しさ＜を運んでいく。

それは、個人の怒りや憎しみを二の次にし、最愛の娘の誇りを護った人物の優しさ。
どんな種族よりも誇り高く、そしてどんな人間よりも暖かさを持つエルフの慈愛。

そして、＞エルフの慈愛＜は、アンが暮らし、そして短い時間の中でも確かに幸せを感じていたであろう村の営みを戻していく。

「あ、あれ？」

「ふぁ～～～あ、あれ？　なんでこんな所で・・・・」

人々は目覚め始めた。

歓喜の雄たけびを上げ、もはやカミュの隣から移動していった老人の背中をサラは見ていた。　その胸に色々な想いを抱きながら。

リーシャはカミュを見ていた。
あれだけの仕打ちを受けて尚、『それが人だ』と言い切ることのできる全世界の人々の希望と言っていい青年を。

メルエは見ていた。
いつもと変わらぬ無表情ながらも、その瞳に微かな優しさを湛えるその青年の瞳を。

「・・・・宿屋に置いた荷物を取って、村を出る・・・・」

人々の笑い声、話声が戻り、本来の村としての喧騒が戻った村を背にし、カミュは宿屋へと向かう。
その後を三者三様の想いを抱きながら続いて行った。

「あら？　この荷物、あなた方のなの？」

リーシャが荷物を置いていた部屋にはすでに人が入ってきていた。
おそらく、眠りにつく前に部屋を出ていたのであろう。
若い女性であった。

「あ、すまない。　少し置かせてもらっていた。」

「それはいいのですけど。　なんだ、オルテガ様が忘れ物をして行ったのかと思ったわ。」

「な、なに!?」

いない間に使っていたのは事実。
その事実にリーシャは素直に謝罪をするが、女性から返ってきたものは、想像以上の言葉だった。
戸の外で成り行きを見ていた他の三人も、女性の言葉の内容に驚きを隠せない。

「ああ・・・オルテガ様はやはり行ってしまわれたのですね・・・森で魔物に襲われていた私を救い出してくれたあの方は、やはり昨日この村を出て行ってしまったのね。」

「き、昨日だと!?」

リーシャは言葉の内容をそのまま受け止めていたため、驚きの声を上げるが、戸の外に居たカミュとサラは得心がいった。
おそらく、女王がこの村を眠りにつかせる前日に、オルテガはこの村を出て行ったのであろう。

「・・・・行くぞ・・・・・」

驚くリーシャに、後ろから冷たい声がかかる。
そこには、先程瞳に秘めていた優しさのかけらもないカミュが立っていた。

「あ、ああ。　すぐに行く。」

もう一度頭を下げ、部屋を後にしたリーシャが戻った一行は次にサラとメルエの寝ていた部屋へと入って行く。

「　おお、この荷物はアンタ方のか？　勝手に置いてもらっちゃ困るだろ。　」

「　あ、も、申し訳ありません。　」

この部屋も部屋の主が戻ってきていた。
その姿は国家の正式な騎士には見えないが、それでもそこそこの実力を備える戦士なのだろう。　鍛えられた肉体は、筋肉隆々とまではいかないが、立派な体つきをしていた。

「・・・ふむ。　そちらにいるのは連れの人間か？　なかなかの面構えをしている。」

その男は、後ろに立つカミュに視線を向け、言葉を溢し始めた。
四人は全く聞いてもいないにもかかわらず話し始めた男に呆気にとられた。
もしかすると、十数年眠りにつき、会話すらしていなかったことへ

の反動なのだろうか。

「しかし、あのお方程ではないな。」

「・・・・あのお方・・・・・？」

男の言葉に、嫌な予感はしていたが、サラは聞き返さずにはいられなかった。
いや、サラが聞かなければ、リーシャが聞き返していただろう。

「うむ。　俺は世界中を旅し、色々な戦士を見てきたが、あのアリアハンのオルテガ殿こそ真の『勇者』と言えるだろう。」

「　オ、オルテガ様か！？　」

リーシャは驚きの声を上げるが、その横にいるカミュの表情は更に冷たいものへと変わって行く。　そんなカミュを心配そうに見上げるメルエの手に力が入った。

「ほう、オルテガ殿を知っているとは、アンタ方はアリアハンの出か？」

「そうだ。　この男はそのオルテガのむす・・・・うぐっ」

男の問いかけに反射的に返したリーシャの答えは、その口を抑え込むカミュの手によって無理やり止められてしまった。

「なんと！　そなたはあのアリアハンの勇者オルテガ殿の息子だというのか？」

「・・・・いいや・・・・人違いだ・・・・」

途中で止まったリーシャの言葉をしっかりと聞いていた男が、カミュへとその真意を問いかけるが、間髪入れず否定が返ってきた。
そのカミュの答えに、サラは目を見張り、口元を押さえられているリーシャの瞳には怒りではなく、哀しさが宿った。

「・・・そうか、オルテガ殿はつい昨日まで、その隣の部屋に泊まっていたはず。　何でも『魔法のカギ』を求めて＞アッサラーム＜に向かうと言っておったが・・・・」

男が示す、この部屋の隣の部屋。
それは昨日までの数日間、奇しくもカミュが寝泊まりしていた部屋であった。

村の人々の時間が止まっているだけに、十数年という月日は経って

いるが、オルテガが出て行ってから誰も泊まっていない部屋に、次に泊まったのが実の息子であるというのも何か運命めいたものを感じずにはいられない。

「・・・しかし、それが果して本当に昨日のことだったか・・・不思議なことに十数年眠っていたような気もするのだ・・・・」

そんな男の独白に適当に相槌を打った四人は、カミュの泊まっていた部屋に向かう。
アリアハンが誇る世界の英雄オルテガが泊まったと言われる部屋に・・・

部屋に入り、既に纏められていた荷物を取ったカミュは、早々に部屋から出て行く。
それは、一刻も早くこの部屋から出ようとしているようにすら見える。

「・・・・カミュ様・・・・・」

「さあ、行こう、サラ。」

カミュを止めるようなことをせずに、リーシャは仲間達の背中を押し、部屋を後にする。

最後に自分の憧れでもある英雄が泊まっていたと云われる部屋を一瞥して。

外に出た一行は、昨日までとは全く違う村の雰囲気に驚いた。

十数年の埃などが積もっている部分を皆で手分けしながら掃除をし、笑顔を浮かべながら談笑をする。　そんなとても暖かな空気。

サラは、このような暖かな空気を醸し出す村人達が何故あのような行為をしてきたのか、それが解らなかった。

しかし、カミュに言わせれば、『それが人』なのだ。

時にはどんな者より慈愛を持ち、そして時にはどんな生物より残酷になる。

それが、まだ経験の浅いサラには到達できない。

「おっ！？　アンタ方、旅人だね？　いい所に来た。　何かしばらく商売をしていなかった気がして、無性にやる気になっているんだ。　安くするから見て行ってくれないか！？」

自分の考えに没頭しているサラの耳に突如響いた声。
それは、宿屋の向かいにある道具屋の主人の声だった。

主人の言葉通り、やる気になっているのであろう。
わざわざカウンターから出てきて、自ら呼びこみの様な事をしている。
すぐに村を出ようとしていた一行であったが、厄介な相手に目をつけられてしまった。

「・・・・いや・・・・急ぐ・・・・・」

「おっ！？　お譲ちゃんが着ている服は、＞みかわしの服＜と同じ素材じゃないか！？」

カミュの返答を遮って発せられた主人の言葉に、一行の視線は一斉に主人が指差したメルエへと向かった。
突如、話を振られたメルエは、驚いた表情を浮かべ、リーシャの後ろに隠れてしまう。

「・・・・オヤジ・・・・＞みかわしの服＜とは・・・・？」

「ん？　ああ。　この村の特産でな。　羽根の様に軽い素材でできた服で、魔物等の攻撃を避けやすくする服だ。　まあ、避けやすくするってだけで、１００％避けられるわけではないけどな。　それに結構丈夫でな。　なかなか切り裂くこと等できないよ。」

カミュの質問に丁寧に答える主人。
その答えにカミュは少し考え込んだ。

そう考えれば、思いつくこともある。
武道の経験もないメルエが、＞シャンパーニ＜の塔でこうもり男の攻撃を何度となく避けていた。
メルエの魔法の暴走時に、メルエの右腕に火傷を残したが、服に燃え移ることはなかった。
それもこれも、＞みかわしの服＜と同じ素材でできた＞アンの服＜のお陰であったのだ。

「・・・ふぅ・・・そうか・・・もう何度も、トルドとアンに救われていたのだな。」

「・・・ああ・・・そうだな・・・・・」

道具屋の主人の話を聞いたリーシャが溜息と共に溢した言葉にカミュも同意を示す。
メルエがここでこうしていられるのも、全てとは言わないが、トルド一家のお陰と言っても過言ではなかったのだ。

「良かったですね、メルエ。　メルエはいつでもアンと一緒なのですね。」

「・・・・・アンと・・・・・・メルエ・・・・・・お友達・・・・・」

「はい！　そうですね。」

リーシャとカミュの話を聞いていたサラがメルエへそのことを話し、メルエの答えを聞いて、とても綺麗な笑顔を見せる。
自分達は、四人だけで旅をしている訳ではないのだ。
色々な人の想いや願い、哀しみや喜びと一緒に旅をしている。
サラの心には、その事が強烈に残された。

「・・・オヤジ・・・＞みかわしの服＜は今あるのか？　それと特産の武器等もあるか？」

「お、おお！　＞みかわしの服＜ならたくさんあるぜ。　寸法を整えないといけないから少し時間はもらうが。　それと、特産ねぇ・・・・おお！　＞魔道師の杖＜ってのがあるぜ。」

「・・・・・魔道師の杖・・・・・？」

主人がしばし考えた後に言った武器の名前は全員が聞き覚えのないものであった。
特産の武器と言えば、大抵は剣や槍だったりするが、杖というのは初めて聞いたのだ。
故に、サラはその武器の名前を反芻する。

「この杖はな。　まあ、魔法使いが良く持っている杖と形は似ているんだが・・・・この先端についた石が特殊なんだ。」

一度店に入り、戻ってきた主人の手には、木でできた光沢のある杖が握られていた。
木が捩じられたように一本に纏められた杖で、主人の言うように先端には赤黒い石がはめ込まれていた。

「何が特殊だと言うんだ?」

「ふふん。　それはな、この杖にはめ込まれた石を相手に向け、呪文の詠唱ではなく、ただ念じれば、＞メラ＜が飛び出すって代物だ。」

リーシャの問いかけに、自慢気に胸を張った主人が発した一言に、パーティー内での反応は真っ二つに分かれた。

「メラですか！？」

「魔法力がなくても使えるのか！？」

目を輝かせ、主人が持つ＞魔道師の杖＜を食い入るように見つめるサラとリーシャ。
それとは反対に、明らかな落胆を示すカミュ。
そんな三人を不思議そうに小首を傾げながら見るメルエ。

「どうだい？　買っていくかい？」

「カミュ！？」

親父のセールストークにつられ、カミュへと振り返るリーシャの瞳は爛々とと輝いていた。
同じく、攻撃魔法の幅の狭いサラの目も輝いていた。

「・・・はぁ・・・メラの魔法ならば、俺も、そしてメルエも使える。　第一、アンタに魔法は必要ないだろう？　アンタは剣を片手に持ち、その杖をもう片方に持って魔物と戦うつもりか？」

「で、では、私が！」

リーシャに駄目出しをするカミュ。
落胆するリーシャに、今度はその横からサラが名乗りを上げた。

「・・・こう言ってはなんだが・・・アンタがその杖で＞メラ＜を唱える暇があるのなら、俺かメルエが詠唱した方が早い。それに、アンタは＞メラ＜を放つよりもやるべきことがあるだろう・・・」

「はぅ！」

カミュが言っているのは、昨日サラがカミュに宣言した内容。
僧侶としてのレベルアップのことである。
サラにもカミュの言わんとすることが理解できたため、それ以上は何も言えなかった。

「・・・オヤジ・・・＞みかわしの服＜をこの僧侶に合わせてくれ。」

「はいよ。　ありがとよ。　じゃあ、こっちに来てくれるかい？」

カミュの言葉に主人は笑顔でサラに手招きする。
いつもと同じようにサラだけが装備を整えることに、遠慮がちなサ

ラだが、リーシャの手が背中に触れたことで、主人の方へ歩いて行く。

「・・・・そうか・・・・」

サラを待つ間、品揃えを見ていた一行だったが、不意に開いたカミュの口に視線が集まった。

「どうしたんだ、カミュ・・・」

「・・・・・・・」

訝しげにカミュに問いかけるリーシャの足元にメルエまで駆け寄ってくる。
見上げるようにカミュを見ているメルエの表情は笑顔であった。

皆での買い物。
そして、それはサラだけではなく、もしかしたらまた自分も何か買

ってもらえるのかもしれないという期待が滲みでていた。

「・・・ああ・・・もしかしたら、さっきの杖がメルエの暴走を抑えるかもしれない。」

「 なに!? 」

そのカミュの言葉が、自分に杖を与えられる可能性を含むものであったため、メルエの笑顔が濃いものに変わって行く。
逆に、予想外の言葉に、リーシャの表情は驚きに彩られていた。

「・・・メルエの魔法は、これまで、自身の指や腕から発していた。まあ、それは俺も同じだが・・・それを＞魔道師の杖＜を媒体にすることによってメルエに被害がいかないようにすることができるんじゃないかと思っただけだ。」

「 じゃ、じゃあ、メルエにあの杖を買ってやるのか？ 」

「・・・・・・・・メルエの・・・・・・・・・・」

リーシャとメルエの目の輝きの意味合いは違う。
自分にも魔法を使うことができる道具を手にすることができるというリーシャの喜び。

自分の武器を買ってもらえるというメルエの喜び。

「お待たせしました・・・・・・へ？　何かあったのですか？」

奥から戻ったサラが見た者は、爛々と目を輝かせたリーシャとメルエがカミュと見つめ合っている異様な光景だった。

「・・・オヤジ、その＞魔道師の杖＜も一本くれ。」

「お、おお！　ありがとうよ。　今、＞みかわしの服＜を手直ししているところだから、もう少し待ってくれ。」

サラと一緒に出てきた主人の手に＞みかわしの服＜はない。
おそらく、この主人の妻などが奥で手縫いをしているのだろう。

「・・・ああ。　いくらだ？」

「おお、店に入ってもらう時に『安くする』と言っちまったからな。
全部で４４００ゴールドだが・・・・・そうだな、３５００ゴールドでいいさ。」

気前よく値引きする主人は、本当にやる気に満ち満ちていたのかも

しれない。
その表情には、商売をすることへの力が漲っている。
カミュがゴールドをカウンターに置き、受け取った＞魔道師の杖＜をメルエに手渡す。
メルエは、嬉しそうに＞魔道師の杖＜を抱きかかえるように受取り、笑顔をカミュへ向ける。

「・・・・・・ありが・・・・・・とう・・・・・・」

「メ、メルエ、後で一度私にも使わせてくれ。」

カミュに向かってにこやかにお礼をするメルエに、横からリーシャが待ちきれないように声をかけるが、メルエは杖を抱きかかえたままリーシャに背を向けてしまう。
『メルエ～～』
という涙声が聞こえるが、カミュは残りのゴールドをカウンターに置くことにした。

「確かに・・・・ありがとうよ。　そろそろ出来る頃だと思うんだが・・・・おっ！　できたようだ。　こっちに来て着てみてくれ。
微調整は着てからするからな。」

「あっ、は、はい。」

メルエとリーシャのやり取りを笑顔で見ていたサラは、不意に掛けられた主人の声に慌てて奥へ入って行く。

「・・・ふぅ・・・だから、アンタが魔法を使っても仕方がないと言っているだろ。」

「　カ、カミュは魔法が使えるから解らないかもしれないが、魔法力がない者にとって魔法を使えることは憧れなんだ！　」

溜息と共に吐き出したカミュの言葉に、リーシャはらしくない反応を示す。
そんな自分の心を素直に吐きだすリーシャに目を見開いたカミュではあったが、その口端は徐々に上がって行く。

「・・・メルエ、一度ぐらい使わせてやれ。」

「・・・・・・・・・メルエの・・・・・・・・・」

カミュの言葉にメルエが小さく反論を溢す。
子供特有の独占欲。
それは、微笑ましいものであるのだが・・・・・

「頼む。　メルエ、一度でいいんだ。」

小さな少女に懇願する屈強な戦士という構図はかなり滑稽に映る。
それを見てカミュはもう一度大きな溜息を吐いた。

「・・・メルエ、それを使って＞メラ＜を使用している横で、メルエの＞メラ＜を見せてやれ。　そうすれば、その杖を使って＞メラ＜を使用することが無意味だと解るはずだ。」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

カミュの言葉は、メルエが心の底で持っていた恐怖を的確に指していた。
それは、自分以外の人間が魔法を使うことへの恐怖。
それが、自分の存在価値を否定することになるのではないかという恐怖。
それをカミュは見透かしていたのだ。

カミュの言葉は、メルエの魔法を否定するものではなかった。
そればかりか、メルエの魔法の方が強力なことを知っているというような発言。
それがメルエには嬉しかった。

「ありがとう、メルエ。　では、外に出てから、一度使わせてくれ。」

メルエから杖を受け取ったリーシャは、自分の身長の半分にも満たない少女に頭を下げる。
それは、ただ単に礼を言ったのではなく、リーシャ自身、メルエを唯の子供として見ていない証拠でもあった。

「お待たせしました。」

そんな三人のやり取りが終息に向かった頃、奥からサラが出てきた。
今まで来ていた法衣と全く変わらない姿。
その姿にメルエは小首を傾げる。

「中の＞鎖帷子＜はこっちで引き取らせてもらうよ。　法衣も引き取ろうか聞いたんだが、法衣は脱ぎたくないと言うんでね。　＞みかわしの服＜の中で、法衣と同じ『青』に染めていた物を使ったんだ。」

主人のその言葉に、カミュ達三人は、全く変わったように見えないサラの姿に納得がいった。　僧侶が着る法衣についている前掛けのようなものを付け替えたのだろう。

「本当にありがとうよ。　何か久々にお客さんを相手にしたような気分だ。　また来てくれ。」

人の良さそうな主人の笑顔に見送られ、一行は村の外へと歩を進める。

サラは、道具屋の主人の笑顔に思うところもあったが、それを表情に出さずリーシャの後について行った。

＞ノアニール＜の村の住民達は、自分達が十数年の眠りについていた事など知る由もない。

ロマリア大陸最北端の村故に、他の村や町との交流がある訳でもない為、隣に住む人間の姿が十数年前のものと同じであれば、それに気が付くことはないだろう。

そして、それは、自分達が犯した罪を自覚することがないのと同義。

その罪を削ぐために奮闘したカミュ達一行に感謝することもないと

言うこと。
おそらく、あのギルバードの父親は、決して村人達に事実を告げることはないだろう。
自分だけが歳を取ってしまっている状況で、その事実を話すことなく土に還って行く。

永遠に報われることのなく、誰も知ることのない旅は、カミュ達の心と＞ノアニール＜の西にひっそりと住むエルフ達の心にだけ残って行く。

ノアニールの村？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回も戦闘シーンを書けなかった・・・・
ここ最近、戦闘シーンを書いていないような・・・

おそらく、次話で第三章も終わりです。
う～ん。
しかし、「ルーラ」があると、一度行った場所での戦闘シーンを入れるのが難しい。　わざわざ歩かなくても「ルーラ」で一っ飛びですものね。

ロマリア大陸？（前書き）

今回はかなり短いです。

実はこの話でこの3章を終えようと思ったのですが、そうするとかなり長くなり、最悪５００００字を越えてしまうことに気がついたため、分けました。

もしかすると3話ぐらいになるかもしれません。

＞ノアニール＜を後にした一行は、再びカザーブへ向かう道を歩く。
空は雲一つない青空。
先程、＞ノアニールの村＜全体に『エルフの慈愛』を行き渡らせた風は、今も尚、心地よい風となって一行の髪をなびかせている。

サラは今回の一連の出来事に、今までの自分の価値観を大きく揺り動かされた。
それは、サラの１７年という年月が無駄であったと思わせる程に大きなもの。
しかし、サラの目の前を歩く、メルエの手を引いたリーシャの表情は晴れやかなものである。　それが、サラには不思議で仕方がない。
サラと同じように、自分の中にある積み上げてきたものの崩壊ということが、リーシャにも起こっていることは確かだ。
ならばなぜ・・・・

「リーシャさん・・・少しよろしいですか？」

「ん？　どうした、サラ？」

そんな自分の中の疑問をサラは吐き出すことにした。
サラの表情を見た、リーシャは何か思う所があったのであろう。

手を引いていたメルエを促し、カミュの下へと送りだす。
メルエは不思議そうにサラとリーシャを見比べた後、前を行くカミュの下へと駆けて行った。

「・・・ありがとうございます。」

「いや、いい。　それで、どうしたんだ？」

メルエがカミュのマントの裾を握り、カミュがリーシャ達を一瞥した後、また歩き出したのを確認したサラは、重い口を開き始めた。

「リーシャさんは、大丈夫なのですか？」

「・・・何がだ？」

カミュ達に遅れないように、ある程度の距離を保ったまま歩きながら、リーシャ達の会話は始まった。　それは、終世サラの心に残るものとなる。

「・・・私は、今まで信じてきたものが解らなくなってきました。
今回のエルフの女王様の話、そして村の人達の行為。　何が正しくて、何が間違っているのか・・・・」

「・・・・サラ・・・・それは、私も同じだ。」

「で、では！」

やはり、サラが思っていたように、リーシャの心も同じ事を考えていたのだ。
救いを求めるように、答えを求めるように、俯いていたサラの顔はリーシャへと向かって勢いよく上がった。

「・・・・私は、アリアハンを出た頃、カミュを『人』とは思っていなかったのかもしれない。　あのご老体のようにな・・・・」

「・・・・・リーシャさん・・・・・」

リーシャが始めた独白。
それは、自分の罪を認める行為。
『人』として通常の考えかもしれないものではあるが、それでもリーシャは罪として考えている証拠であった。

「・・・確かに、私達が信じてきた『人』としての常識は覆されたかもしれない。　だがな、サラ。　私はそれが全てではないと思うんだ。」

「・・・全て・・・」

「ああ、何も私達が信じてきたもの全てが間違いでもない。　あのご老体とて、私達から見れば『悪』に近い。　しかし、見方を変えれば、眠りという呪いを掛けられた村人の為に、逃げ出そうとせずに奮闘していた者だ。　それは、罪の意識かもしれないし、責任を感じていたのかもしれない。　それでもたった一人で、あの村を何とかしようと思っていたことは確かなはずだ。」

サラは、リーシャの考えの深さに驚いた。
別にリーシャを馬鹿にしていた訳でも、侮っていた訳でもない。
ただ、姉の様に慕う、この戦士があの村であれ程の怒りを見せたのだ。
その中で、感情とは別にこのような考えを持っているとは考えていなかったのだ。

「・・・『人』はエルフから見れば、儚い生を送る者かもしれない。　それでも、その中で必死にもがいている者もいる。　それが他種族に対して残酷に映るかもしれない。　だけど、カミュの言う通り、それが『人』なのだと私は思うことにした。」

「・・・リーシャさん・・・」

「　サラ、何も今見てきたものが『人』の全てではないだろう？

私達は『人』の暖かさや、優しさ。　その素晴らしさも知っているはずだ。　おそらく・・・・カミュはそれを知らないのだろう。
哀しいことだがな・・・・」

リーシャの言う通り、サラは『人』の素晴らしさを知っている。
魔物に両親を殺され、孤児となった自分を実の親の様に育ててくれた神父。
それは、決して偽りの愛ではなかった。
本当に大事に、本当に厳しく、そしてそれ以上に暖かく育ててくれた。
アリアハンを出ると告げた日には、とても辛そうに顔を歪め、それでも自分の為に＞聖なるナイフ＜を手渡してくれた。

『必ず、生きて帰って来なさい。』

という言葉と共に。

「　はい！　」

「　サラ、私達はこれからもっと大きな世界を見て行くだろう。
その先にこれ以上に残酷な『人』の一面を見ることもあると思う。
だが、私は信じている。　それが『人』の全てではないと。」

サラは、このアリアハン屈指の戦士が眩しく映った。
最初は優しさや頼もしさは感じたが、同時に頭の固い人物という印象も受けた。

しかし、今目の前にいる人物にそんな雰囲気はない。

自分が見た物を事実として受け止め、その上で自己の中で消化をし、それでも前を向こうとするこの女性をサラは改めて好きになった。

「・・・サラ・・・今私が言ったことは、サラの質問に対しての答えになっていないかもしれない。　私達は知らないことが多すぎる。　教会の教えに異論を唱えるつもりもなければ、ましてルビス様を蔑にする訳でもない。　しかし、私はこれから先、自分の中の想いが変化していくと思っている。」

「・・・・はい・・・・・」

「私は・・・・それを否定することを止めた。」

リーシャの言葉。
それは、物事をありのままに受取り消化すること。
その上で自分の信じていることも曲げない。
そんな強い決意だった。

「　はい！　私も・・・・私も自分が変わって行くことを否定しません。　それが、僧侶として正しいことなのか・・・それは解りませんが・・・・・」

「・・・・サラ・・・・私は、本来僧侶という職業は・・・・いや、その上にいる神父様や司祭様というものは、暗闇に怯える人々を光のある方へ導いて行く存在だと思う。　サラがそういう存在になるためにも、これから先色々な物を見て行く必要があると思う。」

「　はい！　」

迷いは晴れた。
リーシャの言う『本来の役目』というのなら、他人の迷いを晴らすのがサラの役目なのであろうが、そこはまだ未熟な者ということだろう。

「さあ、行こう。　私達の旅はまだ始まったばかりだ。」

「　はい！　」

少し前までの様な暗い影がなりを潜めたサラは、笑顔をリーシャに向け、再び歩き出す。
その一歩が、今までの自分からの脱却の様に。
そして、新たな旅の始まりを告げるものの様に。

「戻ってきて早々だが、剣を抜いてくれるか？」

カミュとメルエは、少し先で立ち止まっていた。
リーシャとサラを待っていたのだろうか。

しかし、それはカミュの声によって否定された。
カミュとメルエの行く手を遮るように、もはや馴染顔と言ってもいい魔物が立ち塞がっていたのだ。

大きなハサミを掲げ、相手を威嚇するような＞軍隊がに＜
何度嗅いでも慣れることのない、腐敗臭と死臭を放つ＞バリィドドッグ＜
それぞれが三体ずつ。
計六体がカミュとメルエの前で戦闘態勢に入っていた。

「ちっ！　サラ、メルエを頼む。」

「はい！」

駆け寄ったリーシャが、腰の剣を抜き放ち身構える。
リーシャの言葉を受けたサラもメルエの前に立ち、背中の槍を手に取った。

「・・・・・・メルエも・・・・・・」

「メルエ、今回は魔法はいい。　少し後ろに下がっていろ。」

サラの後ろから、戦闘参加の意思表示をするメルエに、すかさずカミュの声がかかる。
そのカミュの言葉に不満そうに頬を膨らますメルエであったが、それを口に出すことはなく、買ってもらったばかりの＞魔道師の杖＜を片手にサラの後ろに下がった。

「カミュ！　準備はいいか？　魔法を使われると面倒だ。　先にあの狼もどきを倒してしまおう。」

リーシャは、以前＞バリィドドッグ＜が使用した＞ルカナン＜を警戒していた。
スピードこそ襲いが、＞ルカナン＜をかけられた状態で攻撃を受け

れば、決して楽観視できない程の傷を負ってしまう。
しかし、彼女が声をかけた青年は違う考えを持っていた。

「いや、＞軍隊がに＜の方から始末する。　あの狼の攻撃は油断しない限り当たることはない。　しかし、アンタの心配している＞ルカナン＜を掛けられた状態で、あのかにの攻撃は少し厄介なことになる。」

カミュは、スピードの遅い＞バリィドドッグ＜の攻撃に脅威を感じていなかった。
反面、大きなハサミを持ち、そのハサミも万力の如き力を有する＞軍隊がに＜の攻撃力を警戒していたのだ。

「わ、わかった。　サラ！　逆にあのかにの守備力を下げてくれ！」

「はい！」

リーシャは、カミュの提案に頷き、後方でメルエを護るサラに魔法の行使を要求する。
リーシャの考えが理解できたサラは、大きく頷いた後、右手を魔物達に向け、詠唱を始めた。
サラの詠唱が始まったことが確認できたカミュとリーシャは、それぞれ手に剣を構え、＞軍隊がに＜へと向かって走り出した。

「ルカナン！」

カミュとリーシャが＞軍隊がに＜の下に辿り着いた頃、サラの詠唱が完成し、その魔法が言霊となって行使される。
サラが唱えたのは、初めての魔法。
以前使った＞ルカニ＜の広範囲魔法であり、今敵として前にいる＞バリィドドッグ＜が得意とする魔法。

サラがその魔法の名を叫ぶと同時に、カミュとリーシャが対峙していた三匹の＞軍隊がに＜の身体が淡く光り出す。
通常、全体的に自分の魔法力を行き渡らせるため、その効果は単体目的の魔法よりも劣る。
しかし、ロマリア大陸に入り、強敵との戦闘を繰り返してきた二人は、＞軍隊がに＜と初めて相対した時とは違う。
効果が薄いとは言え、サラの唱えた＞ルカナン＜で十分であった。

「やぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

走り込みながら振り抜いたリーシャの＞鋼の剣＜は、何の抵抗もなく＞軍隊がに＜の身体へと吸い込まれていく。
あたかもケーキにナイフを入れるかのように。

固い殻で覆われていた身体を二つに斬り裂かれた一匹の＞軍隊がに＜はそのままそこで命の灯を吹き消された。
自分の身を護ってくれるはずの固く頑丈な殻が役に立たなくなっていることを見た他の二匹がたじろぎ、逃げ出そうとするがそれは叶

わなかった。

「・・・・・・・・」

普段なら、逃げようとする魔物を追うことのないカミュが、一匹の＞軍隊がに＜を突き刺すように剣を突き入れる。
絶叫の様な雄たけびを上げ、＞軍隊がに＜は絶命した。
カミュの心の中がいつもと同じでないことを示すような行動。
それは、＞エルフの隠れ里＜＞ノアニールの村＜で立て続けに聞いた、ある人物の名前が影響しているのかもしれない。

残り一匹の＞軍隊がに＜を始末する間、その力量の差に三体の＞バリィドッグ＜は呆然と見ているしかできなかった。
そんな魔物の様子を見ていたメルエが、おもむろに先程買ってもらった＞魔道師の杖＜を＞バリィドッグ＜に向けて掲げる。

「・・・・・・・・ギラ・・・・・・・・・」

いつもと同じ抑揚のない、呟くような詠唱。
カミュ達と出会い、ようやく魔法という自分の存在意義を見つけた少女の唯一の武器。
それは、経験を重ねるごとに威力を増していっていた。

「・・・・・・・・・?????・・・・・・・・・」

しかし、ほとばしる炎となって＞バリィドドッグ＜を包み込むはずの＞ギラ＜の熱風はメルエの掲げる＞魔道師の杖＜の先から発生することはなかった。
不思議そうに自分の手にある杖の先を見ていたメルエであったが、その表情に徐々に焦りの様なものが浮かんでくる。

「・・・メルエ・・・？」

「　！！！　」

前に立っていたサラの自分の名を呼ぶ声に、メルエは弾かれたように顔を上げる。
その顔は、焦り、哀しみ、そして絶望が彩られていた。

魔法こそが存在意義。
それは、どれ程カミュやリーシャに大事にされていると感じようと。
どれ程サラに優しい言葉をかけられようと、メルエの中で変化することはなかった。

その魔法が使えない。
それは、カミュ達と一緒にいることのできる資格を剥奪されたように感じたのだろう。

「　サラ！　メルエを護れ！　魔物から目を離すな！　」

メルエの姿に一瞬の驚きを示したリーシャであったが、そこは戦士。
即座に気持ちを切り替え、サラへと指示を出す。
リーシャの言葉に、我に返ったサラは、再び槍をもつ手に力を入れ直し、＞バリィドドッグ＜と改めて対峙した。

「カミュ！」

「一体は任せる。」

カミュは剣を構え、猛然と＞バリィドドッグ＜に向かっていく。
カミュの動きに気がついたリーシャが声をかけるが、それに対し短く応え、そのまま二体の＞バリィドドッグ＜が集う場所に突っ込んでいった。

「サラ！　何かカミュを援護できる魔法を！」

「は、はい！」

残る一体に剣を振りかざしながら、リーシャはサラへカミュの援護を指示する。
自分に声がかかるとは思わなかったサラは慌てて返事を返しながらも、片手を上げ詠唱を始める。

「マヌーサ！」

サラが詠唱を完成させたと同時に、先程の＞軍隊がに＜とは違った光が二体の＞バリィドドッグ＜を包み込む。
それは、以前＞ナジミの塔＜でリーシャが惑わされた魔法。
幻に包まれ、相手を見失ってしまう幻覚魔法。
使用するのは初めて出会ったが、サラは契約をすでに終えていたのだ。

元々動きの鈍い＞バリィドドッグ＜の動きにカミュが傷つくことは皆無に等しかったが、それでも全く攻撃が当たる気がしない程、ありもしない方向に攻撃を繰り出す＞バリィドドッグ＜にカミュはサラに素直に感謝した。

「ふん！」

カミュは、ありもしない方向を向く＞バリィドドッグ＜に剣を振るい、その体躯を両断する。
上半身と下半身を分断されても動く腐乱死体の頭部を突き刺し、その活動を停止させ、残るもう一体へとカミュは剣を向けた。

「・・・・・ギラ・・・・・・ヒャド・・・・・・！！！！」

そんなカミュに、後方でもはや泣き声となり始めたメルエの声が聞

こえてくる。
何度も何度も＞魔道師の杖＜を突き出し、呪文を唱えるメルエの姿は哀しいものに映った。

「・・・・メルエ・・・・・」

「　！！！！　」

そんなメルエの姿に名前を再度呼ぶサラ。
メルエは、とうとう癇癪を起したように＞魔道師の杖＜を投げ捨てた。
乾いた音を立て、平原に転がる＞魔道師の杖＜。
そして、涙の溢れる瞳を残るたった一体の＞バリィドドッグ＜に向け、その小さな手を挙げた。

「　メルエ！　ダメだ！　」

「　！！！　」

しかし、そんなメルエの詠唱は、このパーティーのリーダーである一人の青年に阻まれた。
それは、メルエが兄の様に父の様に慕い、そして先程のメルエの癇癪の原因となった杖を買い与えた人物。
そんなカミュの声に、メルエの腕は下がった。

そんな緊迫した空気の中、メルエが投げ捨てた＞魔道師の杖＜を拾い上げた人物がいた。
一体の＞バリィドドッグ＜を片付け終わった戦士。
そして、＞魔道師の杖＜を使用することを心待ちにしていたリーシャである。

「お、おい！　アンタが魔法を実戦で使うな！」

メルエの行動により、一度＞バリィドドッグ＜から距離を取っていたカミュが、リーシャへと声をかけるが、リーシャの耳にそれが届くことはなかった。

＞魔道師の杖＜を握り、何やら念じ始めたリーシャ。
そして、そのリーシャの願いに応えるように＞魔道師の杖＜の先に嵌め込まれた宝石が光り始めた。

「くっ！」

光を放った瞬間、リーシャの持つ＞魔道師の杖＜の先から、小さな火球が放たれた。
それは、本当に小さな火球。
メルエが使う＞メラ＜に遠く及ばず、カミュが使う＞メラ＜にも及ばない程の火球。

しかも、それは＞バリィドドッグ＜に向かって飛んでいくことはな

かった。
杖の先から発生した火球は、敵である魔物ではなく、味方であるはずの先程声をかけてきたカミュ目掛けて飛び出したのだ。

「カミュ様!!」

カミュは、今、盾を所有していない。
小さな火球とは言え、盾で防げない以上、避けるしか方法がないはずだが、まさか味方に攻撃されるとは考えていなかったカミュは虚を突かれる形となっていた。

「・・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・・・」

放ったリーシャですら、カミュに当たってしまうことを覚悟したその時、先程カミュから魔法を直に使用することを禁じられたメルエが詠唱を完成させた。

冷気の塊が、リーシャが放った＞メラ＜目掛け飛んでいく。
元々、杖という道具から出た魔法と、魔法の才能の塊であるメルエが唱えた魔法とでは、その性能には雲泥の差がある。
故に、メルエが唱えた＞ヒャド＜は正確に火球を打ち抜いた。
相殺されるように掻き消えた火球ではあったが、威力の違う魔法の為、メルエの唱えた＞ヒャド＜の冷気が辺りを包み込み、周囲に広がった。

「カミュ様、大丈夫ですか？」

「カミュ！　すまない！」

慌てたようにカミュに駆け寄るリーシャとサラ。
メルエは、叱られることを恐れるように、徐々に近づいていく。
残っていた＞バリィドドッグ＜は、一行のドタバタ騒ぎの隙をついて逃げ出していた。

「・・・はぁ・・・馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが、ここまでとは知らなかった。」

「なっ！？」

近寄ったリーシャに吐き捨てるように言葉を漏らすカミュの表情は無表情だった。
それは静かな怒りの証拠。
リーシャは言葉を失った。

「アンタの様に、魔法を使用したことのない人間が、いきなり実戦で使用できるわけがないだろ。　魔法のタイミングも、距離感も、何もかもが分からない状態でどうするつもりだったんだ？」

「・・・・・・」

「・・・カミュ様・・・」

カミュの言っていることにリーシャは反論が出来ない。
それもそのはず。
カミュの言っていることは正論なのだ。

「・・・そこの僧侶ならまだ解る。　魔法の発現を体感しているのだから、その感覚は身体が憶えているだろう。　だが、アンタは違う。　メルエ、二度とこの戦士に＞魔道師の杖＜を渡すな。」

カミュは、＞魔道師の杖＜の持ち主であるメルエへと視線を向け、再び禁止事項を増やした。
それに対し、俯いた顔を上げ、カミュの目を見ながら、メルエの口が開いた。

「・・・・・・・・メルエも・・・・・・・・いらない・・・・・・・」

＞魔道師の杖＜を持っていれば、魔法が使えない。
メルエにとってそれは、唯一の武器である魔法を禁止されたのと同じなのだ。

「・・・・はぁ・・・・・・」

「・・・・メルエ・・・・・」

メルエの答えに、カミュは深い溜息を吐く。
それは、『どいつもこいつも』という言葉がピタリとはまる表情であった。

「メルエ、杖を持って魔法が使えないのは、修練不足だ。メルエの持つ魔法力を杖に行き渡らせてないだけだ。それができれば、杖の先からメルエの思う通りの魔法が飛び出す。」

「・・・・・・・・・いらない・・・・・・・・・・」

カミュの言葉に納得せず、再び首を横に振るメルエ。
それを心配そうに見つめるサラ。

「ダメだ。先程、俺を救ってくれた事には礼を言う。ありがとう。だが、今のままじゃ、メルエは＞ギラ＜や＞イオ＜以上の強力な魔法は契約できても使うことはできないぞ。」

「・・・・・・・・いや・・・・・・・・・」

「・・・だったら、杖から魔法を出す練習をしよう。　何もメルエ一人でやる必要はない。　俺も、そこの僧侶も手伝う。」

「・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・」

もはや、駄々を捏ね始めた子供だ。
メルエは何を言ってもただ首を横に振るばかり。
カミュは困り果ててしまった。

「・・・・・メルエ・・・・・今回、私がメルエを注意することはできない。　だが、お願いがある。」

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・？」

そんなカミュの横から、今まで顔を下げていたリーシャが口を開く。
自信なさげに眉を下げたリーシャは、メルエに対し、注意ではなく願いがあると言う。
そのリーシャの姿に横に振られていたメルエの首は止まり、そして傾いた。

「・・・・やはり、私には魔法は無理だった。　これから先、魔法を使おうとは思わないだろう。　だがなメルエ・・・・これから先

の旅では、魔法が必ず必要なのだ。　それは、サラの使う補助魔法でもなく、カミュが使う鉄になってしまう魔法でもない。　メルエが使う敵を攻撃する魔法だ。」

「・・・・・・・メルエの・・・・・・・・？」

「ああ、もちろんサラの補助魔法も必要だ。　だが、剣が効かない敵に対しては、メルエの使う攻撃呪文がどうしても必要になる。その時、メルエがまた自分の使う魔法で怪我でもしたら、やはり私もメルエに魔法を禁止するだろう。」

リーシャは、メルエと視線を合わすようにしゃがみ込み、そしてゆっくりと話す。
今まで駄々を捏ねるように他者の話に聞く耳を持たなかったメルエも、そんなリーシャの言葉を静かに聞いていた。

「逆に、メルエが杖等を使いながら、今以上に強力な魔法を使用することができれば、これ程心強いことはない。　戦闘で私やカミュを救ってくれるのは、サラやメルエの魔法だ。　その為にも、杖を使って魔法を使用することを練習してはくれないか？」

「・・・・・・・・魔法・・・・・・・・・出ない・・・・・・・」

リーシャの真摯な願いに、メルエは小さな呟きを返す。

それはメルエの恐怖の大きさを物語っていた。

「ふふっ、それはメルエが練習をしていないからだ。　私だってカミュだって、メルエぐらいの歳で、今の様に剣が使えた訳じゃない。何度も何度も練習を繰り返し、剣を振るってきた。」

「・・・・・・・・・練習・・・・・・・・・・・・？」

「・・・・リーシャさん・・・・・」

リーシャの言葉は、メルエの心に沁み込む。
それはサラも同様であった。
今は自信を持って剣を振るうリーシャもカミュも、やはり額に汗し、更には何度も傷を受け、そして今の剣技を手にしたのだ。

「メルエ、私には魔法の使い方が分からない。　だからメルエの魔法の練習で教えることはできないが、いつでもメルエの傍にいよう。メルエが練習で挫けそうになる時、嫌になる時、その時は私の所へおいで。　一緒に話をしよう。」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

ついに、メルエの首が縦に動いた。

それは、リーシャの願いを受け入れた証拠。
そして、これから続く辛い練習を受け入れた証拠。

サラは、リーシャを眩しそうに見上げた。
幼いメルエを諭し、導くリーシャの姿を。
それは、サラが憧れ、そしてこの先目指す道しるべとなる者の姿だった。

「・・・それはいいが、アンタにはそれ相応の罰則を与えたいんだが・・・・」

そんな感動が取り巻く空間をぶち壊しにする声が、リーシャの後ろからかかった。
それは、先程リーシャによって火球をぶつけられそうになった『勇者』だった。

「い、いや、カミュ。　先程はすまなかった。　まさか、お前の方に飛んでいくとは思わなかった。」

「＞ナジミの塔＜での事といい、アンタは無意識なのか自覚があるのか知らないが、余程俺を亡き者にしたいんだろうな・・・」

「　そ、そんなことはないぞ！　」

カミュの言葉にむきになって反論するリーシャ。
しかし、敵の＞マヌーサ＜にかかり、カミュに対して攻撃を繰り返していたリーシャの姿を知るサラにとって、カミュの言葉の方がどこか説得力のある物だった。

「・・・・・・・リーシャ・・・・・・カミュ・・・・・・・嫌い・・・・・・？」

「いや、メルエ、そんなことはないぞ。　確かに認められないこともあるが、嫌ってはいない。　それこそ、殺そうなどとは思ったこともない。」

追い打ちをかけるメルエの言葉に、リーシャは更に慌てる。
故に見えていなかった。
カミュの口端がいつの間にか上がっていることを。
逆にサラは見てしまった。
リーシャをからかうことを楽しむようなカミュの表情を。

「・・・・まあ、いい。　罰則に関しては、おいおい考えるさ。」

「・・・・・罰則はやはり与えるのですね・・・・・」

慌てるリーシャを残し、カミュは詠唱の準備を始める。
先程はサラとリーシャが話していたため、平原を歩いていたが、行く目的地が決まっていて、その場所が一度行ったことのある場所である以上、カミュ達に歩く必要などないのだ。

「・・・・・・・???・・・・・・・」

＞ルーラ＜の詠唱に入るカミュに近寄ろうとしたメルエが何かを見つけ、＞バリィドドッグ＜の死体の近くに座り込んだ。

「　メルエ？　何かあったのですか？　」

「・・・・・・これ・・・・・・」

メルエの行動を不思議に思ったサラは、メルエの傍に近寄り、メルエがしゃがみ込んでみている物を覗き込んだ。
そんなサラにその物を持ち上げ、見せるメルエの表情は不思議な物を見るような瞳であった。

「・・・・・これは・・・・・・何かの『種』ですか・・・・・？」

「・・・・・・・・た・・・ね・・・・・・・？」

それは、小さく細長い種の様な実。
メルエの小さな手でも人差し指と親指でつまめる程の大きさしかない。

「メ、メルエ！　それは、魔物の死体から出て来たものじゃないか？　あの腐った魔物が食した物の中に何かの果物でもあって種だけが残っていたんじゃないのか？　汚いから触るな。」

不思議そうにその種を見つめるメルエとサラの後方からリーシャの声がかかる。
その言い分は当然だろう。
腐乱死体と化し、腐敗臭と死臭を撒き散らす魔物の体内にあったとしたら、それ自体も異臭を放っているはずだ。

「・・・でも、嫌な臭いはしませんね・・・？」

それに答えたのは、メルエではなく冷静に分析していたサラ。
その種が何か不思議な物であるという、何か言い表せない勘が働いていた。
それはメルエも同じで、カミュに与えられたメルエ分の水筒から水を出し、その種を軽く洗った後、大事そうに＞ノアニール＜で＞魔道師の杖＜と一緒に買い与えられた、肩掛けのポシェットにしまい込んだ。

「メルエ～～～～」

「・・・・・・・・メルエ・・・・・見つけた・・・・・・・・」

見つけた自分の物であるという、子供ながらの主張。
肩から斜めにかけているポシェットを軽く叩き、メルエは軽く微笑む。
そんなメルエの微笑みにリーシャも諦める他なかった。

メルエがカミュに駆け寄ったことを皮切りに、一行がカミュの下へと集合する。
全員が自分の衣服を掴んだことを確認したカミュが、詠唱を開始した。

「ルーラ」

カミュの詠唱の言葉と同時に鮮やかな魔法力の光が一行を包み、上空に飛び上がる。
目的地は、誰も口にしていない。
しかし、口にしなくても全員の考えは同じだった。

メルエの友人の故郷。
そして、常にメルエを護ってくれていた武器や防具を与えてくれた人物のいる村。
そこに行き、辛く悲しい事実を伝える義務を誰もが胸に抱いていたのだ。

ロマリア大陸？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

ちょっと短すぎましたかね？

次は、皆さんの予想通り、あの村です。

やはり、避けては通れませんよね・・・・

カザーブの村？（前書き）

今回も短めです。
次で、確実に第3章が終了します。

次の話まで、短めとなりますが、おそらく第4章から再び長い文章になることが予想されます。
書きたいことが多すぎて・・・・

カザーブの村？

一行が辿り着いた村は、夕刻が近付き、本日の営みを終了させる準備を始めていた。
店を出している者達は、店仕舞いを始め、各家からは夕食の準備をしているのか煙突から煙が出ていた。

そんな夕刻時の慌ただしさが表れている村の中を一行は、たった一つの家目指して歩いていた。
そこは、メルエの初めての友人である『アン』の生まれ育った家。
一行の足取りはやはり重く、誰一人この村に入ってから口を開くことはなかった。

ゴンゴン

店仕舞いを終えていたその道具屋には人影はなく、カミュがその扉をノックする。
その後ろには表情を硬くしたリーシャにサラ。
そして、少し哀しみを帯びた表情をしているメルエが控える。

ガチャ

遠慮気味に開けられた扉から出てきたのは、アンの父親。
先日会った頃より、若干衰えたように見えるその顔が、彼の苦悩を表しているようだった。

「おっ！？　おお！　アンタ達か！？」

「お久しぶりです。」

カミュ達の顔を見た道具屋の主人トルドは、その表情を輝かせ、一行の来訪を心から喜んだ。　特に、一番後ろにいるメルエの柔らかな笑顔を見て、トルドも優しい笑顔を浮かべた。

「まあ、入りな。　メルエちゃんも元気そうで何よりだ。」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

リーシャとサラの表情を見て、何か感じるところもあったのであろう。
トルドは、一行を中へと導いて行く。
最後に戸をくぐるメルエに声をかけることも忘れなかった。

中に入ると、ちょうど夕食の用意をしている最中であったのだろう。
トルドの父親と母親も食卓につき、談笑している最中であった。

「どうせ、また宿屋に泊ることができなかったんだろ？　今日はうちに泊まるといい。」

「すまない。　ありがとう。　夕食の準備なら、私も手伝おう。」

トルドの暖かな提案に一度頭を下げたリーシャが、自分の得意分野で礼をしようと鎧を外し、腕まくりをする。

「おお！　ありがとう。　またアンタの作った料理が食べられるのなら嬉しいよ。　その間に湯を沸かすから、湯浴みでもしておきな。」

笑顔を作るトルドは、メルエの方を向けて湯浴み勧める。
そのトルドの言葉に、父親が立ちあがり、湯を沸かすために浴室へと向かって行った。

「・・・何から何まですまない・・・」

「いいさ。　アンタ方は、『メルエちゃんを護る』という約束を果たしてくれた。　それが俺には嬉しいだけだ。」

カミュの礼に対して、トルドは笑顔で答える。
その言葉に、リーシャの表情は曇った。

「・・・いや、実質、メルエを護ってくれたのは、貴方だ。」

「・・・・・ん・・・・・？」

続くカミュの言葉にようやくトルドの顔がカミュへと向けられた。
そこには頭を下げるカミュの姿。
その光景に、トルドだけではなく、リーシャもサラも驚きを隠せなかった。

「・・・貴方がメルエに譲ってくれた＞毒針＜と＞みかわしの服＜がメルエを何度も護ってくれた。　心から感謝している。」

カミュの口調は、仮面を被ったものではなかった。
リーシャやサラに向けるものと同じもの。
それは、唯の他人としてトルドを見ていない証拠。

「・・・そうか・・・・良かった。　メルエちゃんを護ることができたんだな・・・・」

「・・・・・・ありが・・・・・・とう・・・・・・・・・」

メルエの上半身を折るようなお礼に、トルドの瞳に涙が溢れてくる。
再び上げられたメルエの眩しい笑顔が、彼の娘であるアンの姿と重なって行った。

「　ぐずっ・・・いや、メルエちゃんが元気そうで良かった。　アンも喜んでいると思うよ。」

「・・・・・・・・アンと・・・・・・メルエ・・・・・・・・お友達・・・・・」

たどたどしいメルエのその言葉がトルドの涙腺を崩壊させる。
彼は自身の娘を護ることができなかった。
しかし、愛娘の大事なたった一人の友人を護ることができたのだ。

「　そ、そうかい！　メルエちゃんはアンと友達になってくれたんだね。　ありがとう。　本当にありがとう・・・・・うぅぅ・・・・・」

「・・・・これ・・・・・・・・・アン・・・・・・・・・くれた・・・・・」

もはや、手で顔を覆うように涙を流すトルドにメルエが更に追い打ちをかける。
被っていたお気に入りの＞とんがり帽子＜を脱ぎ、そこに掛っていた花冠を指差し、トルドに向かって掲げたのだ。

「　そ、それは！！　」

それは、アンが得意としていた花で作った冠。
アンの母親であり、トルドの妻である女性がアンに教えた物。
初めて自分で作った花冠をトルドに向け自慢げに見せるアンの表情が思い出される。
そして、その初物は枯れはしているが、今もトルドの部屋の引き出しに大事にしまってあった。

「・・・・うぅぅ・・・・メルエちゃんは、アンと会ったんだね・・・・そうか、羨ましいな・・・・・うぅぅ・・・・・」

にこやかにほほ笑むメルエの表情に向かって泣き笑いを浮かべたトルドであったが、もはや限界だった。
近くにあったテーブルに突っ伏すように泣き崩れる。
そんなトルドの背を、自らも大粒の涙を溢しながらも、優しく撫で

る母親の姿があった。

泣き崩れるトルドに、自分がいけないことを言ったのではないかと不安になるメルエの頭をリーシャが優しく撫でつけた。
そんなトルド家の空気にサラも涙を拭うのも忘れていた。

湯を沸かし終えた父親が戻り、状況をリーシャが説明すると、トルドと同じように父親も泣き崩れてしまったことから、湯浴みも夕食もかなり遅くなってしまう。

ようやく落ち着いたトルド一家を席に座らせ、リーシャは料理の為に厨房へ、メルエとサラは湯浴みをするため浴室へと移動していく。
残されたカミュは、居心地のあまり良くない居間で、トルド一家と共にすることとなる。

「・・・それで・・・・妻達のことは分かったのか？」

それぞれがそれぞれの場所に消えて行ったことを確認し終えたトルドは、確認したかった項目をカミュへと問いかけた。
それは、一家全員の共通する疑問だったのであろう。
父親も母親も身を乗り出すようにカミュへと視線を向けていた。

「・・・・できれば、夕食後にお話したかったのですが・・・・・」

「いや、今さら話を聞こうが聞くまいが、夕食が喉を通らないことには変わらない。　ならば、早く真実を知りたいんだ。」

カミュがトルドの家を訪ねてきたこと。
その事実が大体のことを予想させる。
カミュの判断次第では、この小さな村など通り過ぎても良かったはずだ。
ここにカミュ達がいるということは、カンダタから『金の冠』を取り返したということを示すもの。　それであれば、この村など通らずロマリア城に行ってもいいはずだ。
カミュ達であれば、山の中で野宿をすることにも慣れているはずだ。

それでもトルドの家に立ち寄った。
そのカミュの真摯な行動がトルドは嬉しかった。

「・・・わかりました・・・・」

トルド一家の視線を受け、カミュは一度目を瞑り、溜息と共に目を開いた。
それは、真実を告げる決意をした証拠。
サラやメルエがいない時に話したいとは考えていたが、それが今に

なったことへの心の整理を終了させた証拠だった。

「・・・結論から言うと・・・貴方方が思っていた通りです。」

「「「　！！！！　」」」

カミュの最初の一言で、全員が息を飲んだ。
アンとその母親がカンダタ一味に殺されたという事実。
そして、この先はその凄惨さを知ることになるのだろう。

「・・・アンと母親は、この村に残っていた十人程のカンダタの子分に連れ出され、殺されました。」

「　くっ！　やっぱりか！　くそっ！　俺が、俺がカンダタをこの村に入れなければ・・・」

「・・・トルド・・・落ち着きなさい。　まだ、話は終わっていない。」

カミュの言葉に激しくテーブルを拳で叩いたトルドを父親が制する。
しかし、カミュもこの先を話すつもりはなかった。
それは、余りにも酷で、余りにも衝撃の強い話になってしまうからだ。

「カミュ殿・・・・話し辛いのは解ります。　しかし、ここにいる者は皆覚悟をしておりました。　どうぞ遠慮なく、お話し下さい。」

父親の真っ直ぐな瞳。
その隣に座る母親の病弱ながらも強い光を放つ瞳。
その視線を受け、カミュも覚悟を決めた。

「・・・わかりました。　ただ、まず最初に言っておきます。　アンと母親の殺害にカンダタは一切関与していませんでした。　子分達の独断です。　まずそれは間違いないでしょう。」

その言葉を皮切りに、カミュは自分が子分たちから聞いた話をトルド達に話し始めた。
話しを脚色することなく、自分が聞いた通りに話す。
いや、脚色する必要などないほどの事実であったのだ。

嗚咽とテーブルを叩く音が響く居間。
そこは、誰も入ることの許されない空間であった。

リーシャも調理が終わっていたが、台所から居間へ入ることができず、サラとリーシャも湯浴みから上がっていたが、湯冷めを気にする余裕もなく、居間への入口で立ち尽くしていた。

「・・・・これが、私が知った事実です。　それに関与していた子分達の話なので嘘はないと思われます。」

「・・・・・・・うぅぅ・・・・・・・アン・・・・・・・」

カミュの最後の言葉に、今まで気丈に話を聞いていたトルドの母親は泣き崩れた。
父親の方も顔を歪め涙を流していたが、妻を気遣い、抱えるように持ち上げ、ベッドのある寝室へと運んでいく。
居間に残るのは、カミュとトルド。

「・・・・・すまない・・・・・・こうなることは解っていた。　ただ、どうしても事実を知りたかったんだ・・・・」

「・・・・・・・・」

カミュは何も言わない。
ここで何を言っても仕方がないことだと知っているのだ。

「・・・・その子分達は・・・・・・？」

「・・・・一人残らず死にました・・・・」

「アンタ方が殺したのか！？」

仇の生死を問うトルド。
それに短くカミュは答えた。

「・・・・私一人で殺しました。　まぁ、その内四人程は、事実を知ったカンダタに殺されていましたが・・・・」

「・・・・そうか・・・・すまない・・・・・・そんな汚れ仕事をアンタの様な人間にさせてしまって・・・・」

「・・・・いえ、元々そういう存在です・・・・」

カミュの返答は、今の外にいるサラやリーシャも聞いたことがある言葉。
自分という存在自体を否定してしまうような、そんな哀しい言葉。
その言葉にリーシャは目を瞑った。

「・・・・最後に聞いて良いか・・・・・？」

「・・・・はい・・・・・」

「・・・・アンタ方はアン達に会ったのか・・・・・？」

最後の問い。
それは、先程メルエが話した言葉を確かめるものだった。
正確に言えば、カミュはその問いに答えることはできない。
あれが、幻なのか事実なのかすらカミュにも解らないからだ。

「・・・・正確には解りません。　メルエが会ったことは確かでしょう。　ただ、メルエだけでなく、私達全員がアンと貴方の妻に救われています。　おそらくそれも事実だと思います。」

そう言って、カミュはトルドにあの雨が降りしきる山中での出来事を話した。
その話を聞きながら、トルドは目を見開き、そして泣いた。

「・・・そうか、あいつ達はアンタ方に礼をしたかったんだろうな・・・そういう優しい妻と娘だったから・・・・」

「私達が生きているのも、貴方と貴方の妻、そしてメルエの友人であるアンのおかげです。　こちらこそ感謝しています。」

「・・・・ありがとう・・・・・ありがとう・・・・・・」

カミュの最後の言葉に、トルドは再びテーブルに頭を落とし、泣き崩れた。
その鳴き声は、もう何年も溜めこんでいた涙。
妻と娘が消え、その死の理由も分からないまま溜めこんでいた感情を一気に爆発させたものだった。

哀しく、やり切れない空気が居間に漂う中、一人の少女が居間へと入ってくる。
少女は、台の上に置いてあった自分の帽子を手に取り、そしてトルドの傍へと駆け寄って行く。

「・・・・・・・これ・・・・・・・あげる・・・・・・・」

「　そ、それは・・・・・・ありがとう・・・・・・でも、それはアンがメルエちゃんにあげた物。　メルエちゃんが大切に持っていておくれ。　その方がアンも喜ぶだろうから。」

「・・・・・・・・・」

アンがトルドに渡そうとした物。
それは、先程トルドに見せた花冠だった。
メルエにとっても命の次に大事な物といっても過言ではない物。
それでも、今のトルドを見ていて、メルエはトルドに渡すべきと考えていたのだろう。

故に、トルドの拒否に戸惑い、リーシャのカミュの方へと視線を送る。
その時には、居間にリーシャもサラも入ってきていた。

「・・・それはメルエが持っていろ。　それは、アンとメルエの友達としての証だ。」

視線を送ったカミュではなく、横から現れたリーシャから返答が返ってくる。
その言葉に、メルエは眉を下げながらもこくりと一つ頷いた。

「・・・本当にありがとう。　アンタ方のお陰で、ようやく事実を知ることができた。　何もないところだが、今日はゆっくりして行ってくれ。」

無理やりの笑顔を浮かべながら、そう言ったトルドではあったが、『先に休ませてもらう』という言葉を残して自室へと入って行った。

残った四人は、重苦しい空気の中で食事をとり、そして就寝する。
サラとメルエは同じベッドで眠る。

メルエを大事そうに抱えたサラの姿が、メルエを労わるサラの心を表していた。
そんな隣のベッドに、リーシャの姿はなかった。

「何をしているんだ？」

誰もが寝静まり、村を静寂が支配する夜中。
リーシャはトルドの家から出ていた。

気持ちの整理がつかず、夜風を浴びようと外へとでた。
トルドの家から出ると、空一面を覆う星達。
そして、大地を照らす月明かりに、意外と町は明るかった。

そして見つけた。
村の中央に位置する場所にある泉の真ん中で一人空を見上げる青年を。

「ん？　ああ、アンタか？」

「こんな夜中に何をしているんだ？　まさか、＞盗賊のカギ＜を使って盗みでも働こうというのか？」

言葉の内容とは別に、リーシャにはカミュの心の中が何となく想像できていた。
その証拠に、リーシャの表情は薄い笑顔である。

「・・・・少しな・・・・・」

「・・・そうか・・・＞レーベ＜の時の様に、トルド達に真実を伝えずに誤魔化すべきだったのかを考えていたのか？」

「　！！　」

図星だった。
カミュが考えていた事。
それは、果たして過酷な真実をトルド一家に伝えるべきだったのかということだった。

くぎは刺しておいた。
実際、この村を出る前に父親の方に真実が幸せには結びつかない可能性があることは伝えてある。
しかし、それは言葉だけのもの。

『覚悟はできている』
とはいえ、その内容の悲惨さに心が壊れてしまうことはある。
母親の方が寝室へ戻ってしまったこと、そして連れて行った父親も戻らなかったこと。
それが、カミュを悩ませていた。

「・・・私が何を言っても、お前は悩むのだろうな。　だが、私はあれでよかったと思う。　お前が誤魔化した所で、トルド達が真実を求めることは止めないだろう。」

「・・・・・・・」

「そして、いずれ真実にぶつかる。　それならば、アンとその母親に出会ったメルエのいる私達が、彼女達の事を伝えてやる方がいいだろう。」

リーシャはカミュの方は見ず、空に輝く星を見上げながらぽつりぽつりと言葉をつなげていく。　自分の言葉ではカミュの中で何かが変わることはないということを感じながら。

「・・・そうかもしれないな・・・」

「それに・・・・＞レーベ＜の時とは違う。　おそらく、お前が真実を話さないことに抗議するのは、今度は物言わぬ犬ではなく、メ

ルエだ。　お前はメルエの澄んだ瞳に耐えることができるのか？」

＞レーベの村＜では、老人に真実を話さなかったカミュ。
それに対して、リーシャもサラも何も言わなかった。

おそらく今回も、カミュが真実を話さなかったとしても、リーシャもサラも何も言わなかっただろう。
しかし、今回はその他にメルエがいる。
アンの唯一人の友人であるメルエが・・・・・

＞レーベ＜で吠えかかって来た犬の様に、メルエが喚き散らすとは思えない。
だが、『何故？』という瞳でカミュを射抜くことになっただろう。
それは、この村を出て、旅を続けて行く中でずっと・・・・

「・・・無理だろうな・・・」

「ふふふ・・・お前もメルエには敵わないのだな・・・・・・・あの時メルエは『アンは笑っていた』と言っていた。　もう、山中でアンを見ることもないかもしれない。　私達はできるだけのことをした。　後は、トルド達が自分の力で立ちあがるだけだ。」

一瞬優しい笑顔を浮かべたリーシャだったが、トルド達の今後を考えたのだろう。
厳しく表情を引き締め、言葉を続けた。

「・・・冷たいかもしれない・・・突き放すように感じるかもしれないが、これから先は私達に出来ることはない。　だが、真実を知らずに悩み、苦しむよりはいいのではないか？」

「・・・・・アンタ・・・・・少し変わったか？」

何の脈略もないカミュの返答に視線を動かしたリーシャは、驚いた。カミュの表情が、かすかではあるが、笑みを浮かべているものになっていたのだ。

つい先日、メルエのことを話した時に見せたような、作りものではない笑顔。
それを浮かべるカミュをリーシャは呆然と見つめてしまった。

「・・・・・すまない・・・・・少し気が晴れた。」

呆然とするリーシャに一言溢したカミュは、そのままトルドの家に戻って行く。
我に返ったリーシャはそのカミュの後ろ姿を見送り、そしてもう一度、星達が輝く夜空を見上げた。

「・・・・変わったか・・・・・そうかもしれない・・・・・・・この先、私はどこへ向かっていくのだろう・・・・・・」

リーシャの呟きは、静寂が支配する夜の村の中へと溶けて行った。

翌朝、いつも遅くまで寝ているメルエを起こし、サラとカミュの指導の下、メルエの鍛練を行う。　その間に、カミュとリーシャの模擬戦等も挟みながら朝食の時間までを過ごした。

リーシャが村の市場に寄り、食材を買ってトルドの家に戻ると、まだ家の中は静けさが広がっていた。
それは、家人が誰も起きてきていない証拠。

少し表情を歪めたカミュの肩を叩いたリーシャはそのまま台所に入り、食事の準備を始める。　自分達の朝食だけではなく、おそらく今日は起きてこないであろうトルドの両親の為に、栄養のあるスープ等も作る。

そうこうしている内に、ようやくトルドが居間へと顔を出した。

「　おお、すまない。　客人に食事の準備などさせてしまって・・・・」

「・・・いや・・・いいさ。」

おどけて見せるトルドの顔は、昨日とは打って変わってやつれを感じさせるものだった。
それ程、カミュが齎した情報は、トルドにとって重い物だったのだ。

「親父も、お袋も今日は休ませようと思う。　悪いが勘弁してくれ。」

「・・・ああ・・・・そのほうがいい。」

予想通り、余りのショックに両親は起きる気力を削がれているのだろう。
カミュは無表情のまま小さく頷いた。

「　あ！　おはようございます。　」

「・・・・・・・・・・おはよう・・・・・・・・・」

そこへ、顔を洗い、身体の汗を拭いてきたサラとメルエが居間へと現れる。
早く起き、少し眠そうなメルエにトルドの表情も幾分か和らいだ。

「ああ、おはよう。　昨日はよく眠れたかい？」

「・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・眠い・・・・・・・・・」

いつもより一刻以上早い時間に起きたメルエは、目を擦りながらトルドの質問に答えるが、そのメルエの言葉が余りにも珍妙で、サラとトルドは同時に吹き出してしまった。

「あははははっ。　まあ、朝食を食べよう。　アンタ方は今日にはこの村を出るのだろう？」

「・・・・ああ・・・・そのつもりだが・・・・」

トルドの質問は、確認の意も込められていた。
カミュ達には、この村に用事などあるはずがない。
唯一つの約束を果たしに来てくれただけだろうことはトルドにも解っていた。

「・・・そうか・・・じゃあ、アンタ方の武器などを見せてくれ。
これでも鍛冶もできるんでな。」

「・・・・助かる・・・・・」

カミュ達の心意気に返すものがトルドにはない。
故にせめてもの恩返しに、カミュ達の武器を手入れしようというのだった。

「・・・・・・・・・・これ・・・・・・・・・・・何・・・・・・・・・・？」

そんなトルドの行為に頭を下げるカミュの横から、自分のポシェットを持ってメルエが割った入ってくる。
その手には、ポシェットから出した小さな「種」の様なものを手にしていた。
それは、昨日メルエが＞バリィドドッグ＜の死体の傍で見つけた物。

「ん？　これは・・・・・メルエちゃん、これはどうしたんだい？」

「・・・・・・・落ちてた・・・・・・・・」

メルエの手から「種」を受け取ったトルドは鑑定を始めた。
その頃、ようやく朝食を作り終えたリーシャが両手に皿を持ちながら居間へと現れた。

「よし、できたぞ！　・・・・ん？　何をしているんだ？」

居間に戻り、目に映った不思議な光景にリーシャはカミュへと疑問を投げかける。
その問いに、顎で示すようにトルドを指し、リーシャの視線をトルドの手元へと導く。
そこで、リーシャにも何をやっているのかが理解できた。

「う～ん。　拾ったのかい・・・・・これはね・・・・・俺の記憶違いでなければ、『かしこさの種』っていう道具だな。」

「「「「・・・・『かしこさの種』・・・・・」」」」

トルドの言葉に、その場にいた全員の声が重なった。
誰もが聞いたことのない名称であったのだ。

「ああ、これを食すと、食した者の『かしこさ』を少し上げる効力があると云われている。　まあ、俺も使ったことがないから、それが目に見えて解るような効力があるのかどうかは解らないがな。」

「・・・・・・・・・・！！　な、なんだ？　何故、私を見るんだ！？」

トルドの話を聞いたカミュ、サラ、メルエの三人の視線が一斉に一人の女性に向けられた。
その一斉に動いた視線に、リーシャは戸惑う。

「・・・・いや、アンタの頭も若干でも良くなるのかと思ってな・・・・」

「　な、なんだと！！　私に『かしこさ』が少しもないとでも言うのか！？」

カミュの失礼な言動に、久しぶりにリーシャが激昂する。
久しく見ていなかったその光景にサラは不謹慎ながらも笑顔を浮かべてしまった。

「・・・・・・・リーシャ・・・・・・・食べる・・・・・・・・？」

「　メ、メルエまで！　食べる訳ない！　それにそれはあの腐った狼の体内にあったものだろう！？　そんな物を食せる訳ないだろ！」

「それに関しては、大丈夫だと思う。　元来「種」は種類が色々あるが、それ自体神聖な物らしく、実や種が何かに覆われており汚れることはないと云われている。　それに、もし、アンタの言うように魔物の体内に入っていたとしたら、その魔物の『かしこさ』を上げてしまい、もはや原型は留めていないはずだ。　おそらく体毛にでもくっついていたんじゃないか？」

メルエがリーシャにその種を差し出すが、リーシャは全力でそれを拒絶する。
しかし、拒絶する理由を傍観者であったトルドが真っ向から否定した。

「　な、なおさら嫌だ。　なぜ、腐敗した魔物の体毛についていた物を食べなければいけないのだ！　それに、私はそこまで馬鹿ではない！　」

拒絶を表すリーシャに白い視線が集める。
全員からの視線にリーシャはたじろぎを見せるが、そこで弱気になれば、あの不快な物を食べなければいけなくなると感じ、必死の抵抗を見せた。

「・・・ああ・・・・罰則が残っていたな・・・・・」

そんな中、不意に口端を上げる嫌な笑みを浮かべながら、カミュが

口を開いた。
その言葉が、リーシャには地獄からの声に聞こえてくる。
確かに、昨日リーシャが起こした失態により、カミュは火傷の危機を被った。
しかし、その罰がこの「種」を食べることでは、流石に割に合わない。
下手すれば、命にかかわるかもしれないのだ。

「ふ、ふざけるな!!　あんな『種』を食べれば、食中毒で死ぬかもしれないんだぞ！」

「・・・・俺も、アンタに何度か殺されかけているが・・・・・？」

「そ、それは・・・・死んでいないだろう!?」

もはやリーシャの頭は大混乱だ。
何故、自分ばかりにその役目が回されているのかが解らない。
別にサラであっても、メルエであってもいいはずだ。

「・・・・その『種』を食べても死なないかもしれないだろう？」

「死んでしまうかもしれないじゃないか!?」

カミュは口端を上げながらからかうように。
逆にリーシャは心底必死だ。
そんな応酬が繰り返される中、突如全く違う声が響き渡る。

「ふっ・・・・あははははっ！　くくっ、あははははははっ！」

「ぷっ・・・・・あははははっ」

堪え切れなくなった、トルドが最初に吹き出し、我慢に我慢を重ねていたサラがそれにつられて大声で笑い始める。
その横で、二人の笑顔を見比べながら、メルエも笑顔を見せる。

「くくくっ・・・・・・・・」

そして、リーシャと対峙していたカミュもまた、珍しく声を漏らして笑ったのだ。
一瞬の出来事に、リーシャの思考が追い付かない。
そして、ようやく思考が開始されたリーシャの顔は見る見る赤くなり、瞳は怒りの炎を宿し始めた。

「お前たち！　私を愚弄していたのか！？」

「あはははは！　い、いや・・・そんなつもりはないよ。　あははは・・・あれが『かしこさの種』というのは本当だしな・・・あはははは・・・・」

もはや、トルドも弁解になっていない。
笑い声を押えながら事実を伝えようとするが、八対二の割合で笑い声が多ければ、リーシャの気持ちを逆撫でするだけだ。

「～～～～～～～！！　私は、そんな物を絶対に食べないからな！！」

「・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・かしこく・・・・・・・」

「メルエまで私を馬鹿にするのか！？　いいだろう・・・わかった。　全員今日の朝食は抜きだ。」

笑顔のメルエが『種』を手に持ちながら、リーシャに掛けた言葉がギリギリで繋がっていたリーシャの堪忍袋の緒を切ってしまった。
リーシャが持ってきた湯気の立っている朝食は、すでに全員の目の前に並べられている。
その状態で食せないとなると、かなり精神的なダメージを受けるだろう。

「・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・」

「嫌でも駄目だ！　メルエもサラも朝食は無しだ。　カミュの分は今後一切私は作らないからな！」

もはや止めることは不可能だった。
一行の食事は、野宿でない限り、基本的にリーシャが作っていた。
それが食せなくなるということは、自分で作るか、もしくは食さないかしかないのだ。

「・・・・・・・・・・・ごめん・・・・・なさい・・・・・・・・・」

「あっ！　わ、私も、申し訳ありませんでした。」

すかさず謝罪の為、頭を下げるメルエとサラ。
メルエに至っては、もはや涙目である。
生まれて初めて暖かな食事をメルエは知ってしまった。
もう、その暖かな食事を奪われることに耐えることはできないのであろう。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・リーシャ・・・・・・・・・ごめん・・・なさい・・・・・ぐずっ・・・・・」

それでも返事を返さないリーシャの足元に寄って来たメルエが何度も頭を下げ、リーシャを見上げる。
その姿に、段々とリーシャ自身が悪いことをしているような気持ちになって行く。
そして、ついにリーシャは折れた。

「・・・反省しているか・・・？」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

「は、はい！」

リーシャの言葉に、メルエとサラは大きく頷いた。
二人の表情に、リーシャは厳しい顔を作ったまま、頷く。

「・・・今回だけだ。　許してやる。　さあ、朝食を食べよう。カミュの分は三人で分けよう。」

「・・・いや、俺も悪かった。　少し度が過ぎた。　すまなかった。

」

カミュの席に置いた皿を取り、分けようとするリーシャに対し、最後にカミュの頭が下がった。
カミュとしても、『食』が大事なことは承知である。
ただ、以前のカミュであれば、自分で何かを作っていた可能性はあるのだが・・・・・

「・・・・わかった。　じゃあ、座れ。　言っておくが、私はあんな物は食べないぞ！」

「・・・ああ、もうアンタの頭の悪さは諦めることにするさ・・・」

「・・・お前は・・・・本当に食事はいらないらしいな・・・・」

せっかくリーシャの許しを得たにもかかわらず、収まり始めた火に再び油を注ぐようなカミュの言動に、サラは驚き、メルエは怒った。

「・・・・・カミュ・・・・・・ダメ・・・・・・」

「・・・ああ・・・すまなかった・・・」

「あはははははっ。　あ、あんまり笑わせないでくれ・・・・・あはははははっ・・・」

リーシャとカミュのやり取りに続き、メルエとリーシャにサラとリーシャ。
最後にメルエとカミュに、カミュとリーシャ。
休む間もなく続く、どこかほのぼのとしたやり取りにトルドの笑いはなかなか収まらない。

「　トルド！　私は真剣だ！　」

いつまでも笑い止めないトルドに、リーシャは叫ぶ。
そこに、年長者に対しての敬意など欠片もない。
あるのは、親しみを込めた叱責。
それが、トルドにとって、何よりも嬉しく、そして可笑しかった。

朝あった重苦しい雰囲気など、どこかに霧散していき、変わって生まれたのはどこか暖かく優しい空気。
その空気の中、笑い声が絶えないまま、五人は朝食を終えた。
残念なのは、最後までトルドの両親は居間に姿を現さなかったことだろう。

食事を終え、トルドにそれぞれの武器を手入れしてもらった時、トルドはメルエの持つ＞魔道師の杖＜に気がついた。

「メルエちゃんも、杖を持つようになったのか？」

「・・・・・・・ん・・・・・・・」

誇らしげに杖を掲げるメルエに、トルドは表情を緩めた。
それは、杖を掲げる為に手を挙げたメルエの腰に、大事そうに＞毒針＜が装備されているのが見えたこともあるだろう。

「うん。　どこから見ても、立派な魔法使いだ。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

メルエが魔法を使うことをトルドには話していない。
しかし、長年道具屋を営むトルドには、メルエが纏う魔力がおぼろげながらも見えていたのかもしれない。
そんなトルドの褒め言葉に、メルエは満面の笑みを持って応える。
しかし、すぐにメルエは表情に陰りを見せた。

不思議に思って、下げてしまったメルエの顔を覗き込むようにトルドが姿勢を変えると、不意にメルエの口が開きだした。

「・・・・・・・・アン・・・・・・・・の・・・・・・・・これ・・・・・・」

メルエが指し示したのは、先程トルドが目に留めた＞毒針＜だった。
メルエにとってそれは、トルドの物ではなく、アンの物。
故に、アンの花冠をトルドにあげるか、この＞毒針＜を返すかしかないのだ。

「いいや、それもメルエちゃんが持っていておくれ。　それがアンの代わりにメルエちゃんを護ってくれるのなら、これ程嬉しいことはない。」

しかし、その返還もトルドは許さなかった。
もう、決定的な死というものからメルエを護っている武器。
ならば、この先もメルエの護身刀となってほしいというのがトルドの願いだった。

「・・・・・・・ん・・・・・・・ありが・・・・・とう・・・・・・」

「ぐずっ・・・・うん・・・・メルエちゃんも元気でな・・・・・・・」

武器の手入れを終え、トルドの家を後にする一行に手を振るのはトルド一人だった。
トルドの両親は最後まで自室から出てこなかったのだ。
それがサラの心に不安として残って行く。

人を導く者として、何かをしようと思っていた矢先の出来事。
自分に何かできることがあったのではないだろうか？
もっとかける言葉があったのではないか？
サラはそう思わずにはいられなかった。

＞カザーブの村＜の門をくぐった一行は、再びカミュの下へと集まる。
カミュの袋の中にある『金の冠』の奪還を依頼した人間の待つ城へ向かうために。

リーシャもサラもその人物に聞きたいことは山ほどあった。
しかし、その場で言葉を発することができる唯一の人物がそのことを問いかけるかは解らない。
それでも、何故か、リーシャにもサラにも『カミュはそれを追求す

るだろう』という自信があった。

「ルーラ」

それぞれの想いを乗せ、一行の身体は上空へと浮かび上がる。
そして、日が高くなった空へと消えて行った。

カザーブの村？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

進行速度がとてつもなく遅い小説ですね・・・・

改めて自分でもびっくりします。

まだロマリアとは・・・・・

色々なご意見、ご感想をお待ちしております。

ロマリア城？（前書き）

この後は、少し間を置く形になるかもしれません。

ロマリア城？

重税により寂れた村と、エルフの力によって長い時を止められていた村を見てきたカミュ一行にとって、一際大きく見えるようになった城門は沈みかけの太陽の光によって赤く染められていた。

「今日は、どうするんだ？」

正直、＞ルーラ＜によっての移動なだけに、一向に疲れはない。日も沈み始めていることから、今日の謁見は無理であろう。であれば、宿で休むしかないのだが、リーシャやサラは今起きたばかりの様な感覚を拭えないのだ。

「・・・宿に入るしかないだろうな・・・」

「で、でも・・・何も疲れてはいませんよ・・・」

カミュの返答にサラが思っていることを返す。
ロマリアから出たばかりで目的地の姿を見ていない時は、ここから＞カザーブ＜まで、三日以上という時間をかけたのだ。
その先の旅もそうだった。
サラの頭の中には、疲れてへとへとになってから宿に入るという構図が成り立っていたのであろう。

「・・・ならば、アンタ一人で、この辺りの魔物と戦ってきたらどうだ？　それこそ、飛躍的に力量が上がるかもしれないぞ・・・」

「・・・そ、そんな・・・・」

カミュの軽口を何度も受けているリーシャは、それが『カミュなりの冗談なのではないか？』ということに何となく気が付いていたが、サラに至っては、その経験がないことから冗談として受け取れず、言葉通りの意味として真に受けてしまっていた。

「そうだな。　サラは僧侶として、上位の回復魔法を覚えると宣言していたしな。　この辺りの魔物であれば、サラの＞バギ＜で十分通用するだろう。　頑張れ、サラ。」

＞カザーブ＜で受けた愚弄の報復なのか、リーシャはカミュの言葉に乗っかり、サラへと意地の悪い言葉を投げかける。

「・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・・・がんばる・・・・・・・・・」

それにメルエまで同調した。

『四面楚歌』

そんな言葉が今のサラに当てはまるようなものだ。

「・・・メルエまで・・・うぅぅ・・・」

「・・・・・・・サラ・・・・・・・・・また・・・・・・・泣く・・・・・？」

「な、泣きません！　もういいです！　一人で行ってきます！」

メルエの言葉で追い詰められてしまったサラには開き直るしか道がなかった。

城門に背を向け、再び平原へと歩き出そうとするサラの後ろからトルドの家で響いたような暖かい声が響く。

「あははははっ、冗談だ、サラ。　そう意固地になるな。　あははははっ。」

「・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・行かない・・・・・・・・？」

リーシャの笑い声。
しかし、それとは反対にメルエは小首を傾げてサラを見つめた。

「こら、メルエ。　あまりサラをいじめるな。」

「・・・うぅぅ・・・・リーシャさんもメルエも、本当は私のことを嫌っているのではないですか？」

自分のことを棚に上げてメルエを窘めるリーシャを恨めしそうに睨みながらサラが愚痴をこぼす。　その瞳は、悔しさからなのか、安堵からなのか、若干涙が溜まっているように微かな光を帯びていた。

「・・・宿屋に荷物を置き、空いた時間に魔物の部位を売る。その後は、買い物なり、それぞれの鍛練なりをすればいいだろう・・・」

三人のほのぼのとしたやり取りを全く無視するように、カミュが門に向かいながら提案をし、それに頷いたリーシャもメルエの手を引きながら門に向かっていく。

一人取り残される形となったサラは、頬を軽く膨らませながら、一行の後を追って城下町へと続く門へと歩き出した。

「なんだ？　またお前たちか？　臆病者のアリアハンの奴等と・・・ん？　もう一人ガキが増えたのかよ！　ぎゃははははっ、女に子供を旅に出すなんて、卑怯者が治めるアリアハンらしいや。」

カミュ達がロマリアに初めて訪れた時と同じ門番が、カミュ達の顔を憶えていた。
口を開いたのは、あの時もリーシャを挑発した人物だった。

「おい！」

「なんですか！？　その通りでしょ。　アリアハンのお陰で、我々がどれ程の苦労を強いられたか・・・・」

門のもう片方の脇に控えた上官のような兵士が窘めるが、その兵士の口は止まらない。
それ程、ロマリア国民の感情は反アリアハンに傾いているのだと感じずにはいられない物だった。

しかし、それは、このロマリア大陸に入ったばかりの頃ならばだ・・・

「・・・貴方は、＞カザーブ＜か＞ノアニール＜のご出身なのですか・・・・？」

口を開いたのは、アリアハンを代表する者。
その唐突な発言に、当の兵士だけでなく、リーシャもサラも驚いた。
まさか、ここでカミュが口を開くとは思っていなかったのだ。

「　は？　そんな田舎の出身じゃない。　俺はロマリア生まれのロマリア育ちだ。」

カミュの問いに答えた兵士は、自分に質問をしてきた青年の表情が変わって行くのを見た。
いや、正確には、変わっていくのではなく、無くなって行くのをだが。

「・・・ならば、それ以上は言わない方がよろしいでしょう。
貴方の恥となります。　それに、私はアリアハンからロマリア国王への使者も兼ねております。　あまり無闇な言葉を発言しない方がよろしいかと。」

初めて見るカミュの仮面を被ったままの攻撃。
仮面を被り、口調は丁寧だが、その内容はかなり辛辣な物だ。
『余りにも無礼と感じれば、国家レベルの問題へと発展します』
と暗に仄めかしているようだった。

「・・・すまない・・・・部下の失礼を許してほしい。　許可証は先日拝見した。　一人増えてはいるが問題はないだろう。」

カミュの瞳に気圧された兵士の代わりに上官がカミュ達へと対応を再開した。
メルエという存在を容認し、門を開けるように指示を出す。
その間も、カミュの変貌ぶりに驚いたままの兵士は呆然とその様子を眺めていた。

「さあ、通ってくれ。　ようこそ、ロマリアの町へ。」

門が完全に開いたことを確認した上官は、カミュ達を促すように、先日は発しなかった歓迎の言葉もつけ手を門の中へとかざす。
カミュは上官に一礼した後、門の中へと入って行った。
その後をサラとメルエ。
最後にリーシャが門を潜って行く。

「・・・自国の民だけを護るために他国を切り捨てた国と、自国の民すらも護ることをせず見て見ぬふりをする国。　どちらが卑怯者なのだろうな・・・・？」

「　なっ？　」

未だに呆然としている兵士の横を通り抜けざまに、リーシャは自分が思っている疑問をぼそりと呟いた。
おそらく、その意味は、ここにいる兵士たちには理解できないだろう。
それは、カミュ達四人と、そしてこの街を抜けた先にある城に住む何人かにしか理解できないことなのだから。

「・・・・カミュ様・・・・・」

先頭を歩くカミュの名をサラは思わず呟いてしまう。
まさか、カミュがあそこで争いの種になりかねない発言をするとは思っていなかったサラにとって、先程のカミュの発言は釈然としないものだったのだ。

「・・・・・・・・・・アリ・・・アハ・・・・・ン・・・・・・・・・・」

そんなサラの横で手を引かれていたメルエが違う呟きを洩らす。

それは、先程の兵士が口にした国名。
リーシャやサラ、そしてカミュが生まれ育った国の名前だった。
今までの旅で何度か出てきた単語ではあったが、メルエにその説明をしたことがなかった。
故に、メルエの中で解らないままだった『アリアハン』という単語が思わず口から出てしまったのであろう。

「ん？　それは、私達の故郷の国の名だ。」

「・・・・・こ・・・きょう・・・・？」

後ろからかかったリーシャの答えに、メルエは再度首を傾げる。
解らない単語が次々と出てきて混乱しているようだった。

「故郷とは、『生まれ育った』場所という意味ですよ。」

「・・・・・・」

小首を傾げるメルエへ、隣を歩くサラが答えるが、その答えを聞いたメルエの表情はいつになく沈んで行った。
先頭にいたカミュもまた、後方での会話を耳に入れ振り向くが、メルエの表情を見て、深い溜息を吐く。

「行くぞ。宿屋に荷物を置いた後は、メルエの魔法の鍛練をする。」

メルエが感じている不満を察したカミュが、その不満が漏れる前に蓋をしてしまう。
それが正しいかどうかは分からない。
しかし、今現在、メルエの故郷がどこか解らない以上、この問答はするだけ無駄なのだ。

「ん？　あ、ああ、そうだな。メルエ、私は見ているしかできないが、サラが鬼の様に見えたら、いつでも私の所へ来いよ。」

「お、鬼って・・・・そんなに私は怖くないですよ！」

カミュの意図に気がついたリーシャは、メルエに軽口を叩き、その軽口にサラが過剰に反応を示す。確かに、リーシャに魔法のいろはを教えているサラは、時に厳しい教師と変貌する時がある。

「私の時は、『本当にサラか？』と思う程、厳しい時があるからな。メルエも気をつけろ。」

「・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

「メ、メルエまで！　言葉や字を教えている時はそんなことはないでしょう！？」

しゃがみ込んだリーシャの笑顔に、沈んでいたメルエの表情にも明るさが戻る。
リーシャの目を見て頷いたメルエに、サラは再び雄たけびを上げた。

メルエを護るように会話を進める三人。
それが彼等の中に出来始めた絆だとすれば、それは、メルエを中心に出来上がっている物なのかもしれない。

宿に荷物を置き、外に出た一行はメルエを中心に円を描くように腰を下ろす。
メルエは、＞魔道師の杖＜を手にし、壁に向かって杖を振るように魔法の詠唱を行う。

「・・・・・・・・・メラ・・・・・・・・・」

いつもは詠唱と同時にメルエの指から、カミュのより大きな火球が出てくるのだが、杖の先からは何も出てこない。
元来念じるだけで＞メラ＜が発生するものではあるのだが、メルエが行っているのは、自身の魔法力を使っての詠唱なだけに杖の先からは何も生まれはしなかった。

「・・・・・・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・・・・」

「メルエ、落ち着いて、指から出る炎と同じように、杖の先から炎を出すようにイメージをして。」

杖の先を恨めしそうに睨みながら唸るメルエにサラは声をかける。
実際、サラの言っていることは、自身の経験を踏まえている物だった。

試しに、サラが杖を持ち、杖の先をリーシャの腕につけ＞ホイミ＜の詠唱を行ってみると、杖の先が淡い緑色に光り、リーシャの腕にあった細かな傷を癒したのだ。
杖に魔法力を通し、魔法を発動させる。
それをサラは実践していた。

「・・・・・・・・・もう・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・」

「メルエ・・・まだ始めたばかりですよ？」

自分の思い通りにも行かないことにメルエは癇癪を起こし始める。
元来メルエは、サラの様に考えて呪文を行使している訳ではない。
契約すらも、字の読めないメルエは感覚で契約を行っているのだ。
カミュから教えてもらった魔法の名を、手を掲げながら詠唱する。
唯それだけで、メルエの身体に眠る魔法力が動きだし、魔法が発動していた。

故に、メルエにアドバイスを繰り返すサラの言っていることが理解できないのだ。
理解している者にとっては当たり前の事でも、理解できない者にとっては何を言っているのかも解らないのだ。

『魔法力を杖に通して』
という言葉にしても、メルエにとって、どうやって杖に魔法力を流すのか？
まず、魔法力とは何なのかが理解できない。

「・・・メルエ・・・・焦らなくてもいい。　俺も昔は、何故自分が魔法を使えるのかすら解らなかった。　メルエの中には呪文を完成させるための能力（ちから）がしっかりとあるんだ。　まずは、メルエの中にあるそれを感じることだな。」

「・・・・・・・・・」

「メルエ、おいで。」

カミュの言葉もぼんやりとしか理解できない。
それが悔しく、哀しいと感じているメルエの表情はどんどん雲って行った。
そんなメルエの表情に気がついたリーシャは、自分の下へとメルエを呼び寄せる為に声をかけた。

「リーシャさん！　まだ、始めたばかりですよ。　余りメルエを甘やかしては駄目です。」

しかし、そんなリーシャの気遣いは、メルエに魔法を教える教師に阻まれる。
実際、まだメルエが杖を振るった回数は一ケタ台だ。
外に出て一刻も経っていない。

「・・・・・・・・・・・・・・おに・・・・・・・・・・・・・・・」

「なっ、何故ですか！？　私はメルエの為に言っているのに！」

そんなサラに、メルエがリーシャの腕の中に収まりながらぼそりと呟いた言葉は、先程リーシャが教えたサラを表現する言葉だった。

「ふっ、あはははははっ。　そう言うな、メルエ。　サラが鬼になる時はもっと怖いぞ。」

「なっ、何を言うのですか！？　そんなに私は怖くありません！」

アリアハンを出てから、休憩と言えば、誰かとカミュの討論になっていたパーティーとは思えない程の和やかさ。
時にお互いをからかい、笑い合う。
それは、とても『魔王討伐』という絶望の旅へと向かう一行には見えないものだろう。

結局、この日もメルエの持つ＞魔道師の杖＜から魔法が発現することはなかった。
小さな肩を落とすメルエの頭を撫でながら、リーシャは宿屋への道を歩いて行く。

「何故、メルエは杖へと力を注ぎ込めないのでしょう？」

「・・・さぁな・・・いずれにしても、メルエが感覚と才能だけで

発現させていたものが、少し頭を使わなければいけないようになったということだろう。」

メルエとリーシャの後ろ姿を見ながらサラとカミュはメルエの魔法が何故発現しないかを考える。

しかし、この二人も、杖から魔法を発動させることが初めてだったにもかかわらず成功させている。　初めから出来る者には、できない者ができるようになる過程が解らない。　何がキッカケとなるのか、どうすれば魔法力というものを認識し思う通りに動かせるのかをメルエに教えることは彼ら二人には初めから無理だったのかもしれない。

「今日は、宿屋の台所を少し借りて、メルエの好きな物を一品だけ作ってやる。」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

残念そうに俯いているメルエに、リーシャが慰めの声をかけている。
それにも力なく頷くメルエを心配そうに見つめるリーシャ。
それは、どこから見ても親子の構図であろう。
しかし、それを言えばリーシャが怒りを露わにすることが解っているだけに、サラは口にはしなかった。

翌朝、まだ城下町の店なども開いていない時間に、カミュ達一行は城門の前に立っていた。
それは、『できることなら、昼前には＞アッサラーム＜へ向かいたい。』というカミュの言葉からだった。
朝の鍛練を終えた一行は、朝食もそこそこに城へと向かっていたのだ。
高くそびえ立つ城門の両脇には、朝早いからなのか、若干眠そうに立つ二人の兵士が経っていた。

「カミュと申します。　ロマリア国王からのご依頼の報告に上がりました。　お取次ぎをお願致します。」

仮面をつけたカミュが門番に取次ぎを頼む。
『ロマリア国王』という単語に、半ば欠伸をしていた兵士がその表情を引き締め、応対を返してきた。

「わかった。少しそこで待っていろ。」

カミュ達を訝しげに眺めながらも、その職務を果たす姿は、城下町へと続く門を護る人間よりも上の兵士なのかもしれない。
初めてロマリア城を訪れた時とは違うその兵士に、リーシャはそう感じていた。

しばらくの間城門の前で待たされ、カミュ達の背中の方から町の喧騒が聞こえ始めた頃、城の中から先程の兵士が戻ってきた。

「中に入れば、案内役がいる。その者について行け。」

「・・・・ありがとうございます・・・・・」

やはり、以前の兵士より上の人間なのかもしれない。
今回は謁見の間に続く道の案内役まで手配していたのだ。
その事実にリーシャとサラは驚くが、カミュは何か思い当たる節があるのか、表情を変えることはなかった。

城門をくぐり、城内に入ると、そこには以前に謁見の間で見たことのある文官が張り付いたような笑顔を浮かべ、待っていた。

「カミュ様ですね・・・・国王様がお待ちです。　こちらへ・・・・」

「・・・・はい・・・・・」

以前とは余りにも違いすぎる対応にリーシャやサラは何か不快感を感じる。
何が彼等を変えたのかなど、考えなくとも解る。
『金の冠』だ。

カミュ達が、国宝と言ってもいい『金の冠』を取り戻したという情報がこのロマリア城に既にもたらされているのだろう。
だからこそ、サラの頭には『何故？』という疑問が浮かぶ。

何故、この城にその情報がもたらされたのか。
それが、リーシャにもサラにも解らない。

そんな疑問を頭に残しながら、一行は謁見の間へと足を踏み入れる。
そこには以前と同じように、国王と王女、そして大臣が待っていた。

「　よくぞ戻った、『勇者』カミュよ。　貴殿の働き、褒めて遣わす。　」

謁見の間に入り、玉座の前で跪いたカミュ達に国王が声を上げた。

その言葉もまた、以前ここに来た時とはかなり違いがある。
それがまた、リーシャとサラの心に影を背負わせる。

「はっ。　こちらが『金の冠』です。　お確かめください。」

「大臣！」

袋から『金の冠』を取り出し、国王へと差しだすカミュを見て、国王が大臣に指示を出す。
恭しく掲げたカミュの手から、歩みよって来た大臣に『金の冠』は渡り、そのまま国王の手に戻って行く。

「ふむ。　確かに。　これぞロマリアの『金の冠』じゃ。　よくぞ取り戻した。」

「はっ。」

手渡された冠をしげしげと眺め、それが本物であることを確信した国王は、自分の頭の上という本来あるべき場所に戻した。
どれ程、冴えない老人であろうと、その冠を被れば、一角の者へと変貌する。
ましてや、人を見る目というものを備えている生まれながらにしての王となれば、尚更であった。

「これより、ロマリア国は、そなたを『勇者』と認めよう。　援助も行う。　何なりと申せ！」

「・・・いえ、援助の方は謹んでお断りさせて頂きます。」

「　なっ、なんと！　」

気前よく援助の約を与えた国王は、表情一つ変えずにその申し出を断ったカミュに目を見張った。
彼(か)の英雄オルテガでさえ、各国から莫大な援助を受け、旅をしていたのだ。
それでも、志半ばで、その旅に終止符を打ったのだ。

援助失くして、『魔王討伐』という人間離れした旅が続けられるわけはない。
魔物を倒すその武器も、魔物の脅威から護るその防具も、そしていざという時の為の道具ですら、自らの懐からゴールドをださなければいけなくなるのだ。

「　し、しかし、そなたの父オルテガでさえ、各国から援助を受けていたのだぞ。」

「・・・恐れながら・・・オルテガという人物と私は別人でございます。　私には、後ろに控える従者もおりますので・・・・・」

サラは驚きに顔を上げてしまった。
そこには、頭を下げ、謁見の間に敷かれる赤い絨毯を見ながら国王と接するカミュの姿があった。

その内容は、初めて、本当に初めて、リーシャやサラを共に旅する仲間として認めたことを意味するものだった。
『従者』といったことは何度かある。
しかし、自分と父であるオルテガの違いにリーシャ達を上げたのだ。
それは、『一人旅を続けたオルテガと違い、自分には仲間がいる』と宣言したと同じである。
それも、一国の国王への発言としてだ。

「ふむ・・・・・なるほど、仲間と力を合わせ進んでいくということか・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あい解った。そなたの言葉、このわしの心に響いた。じゃが、この国宝を取り戻してくれた『勇者』に何も与えないという訳にもいくまい。」

カミュをじっと見て、何かを思案するように考えていた国王は、ふと思いついたように口を再度開いた。

「・・・ふむ。　ならば、この先お主たちはどこへ向かう?」

「　はっ。　まずは＞アッサラーム＜へ行き、情報を得ようと思っています。　」

これからの行き先を尋ねる国王に、カミュは淀みなく応える。
その姿に、国王は少し目を細めた。

「・・・ならば、その先の＞イシス＜へも足を踏み入れることとなろう。　その時の為、わしが『文』を渡しておこう。　それを＞イシス＜を治める女王に渡せば、色々と優遇してくれるであろう。」

「・・・・・有難き幸せ・・・・・・・」

それは、通行許可証と同じものとなる。
一国の国王が『認めた者』として他国に入ることができる。
その国との関係が友好的な国であれば、それは身分を証明する手形となり得るのだ。

「・・・・ふむ。　それだけでは、ちと物足りぬな・・・・・おお、お主、見たところ『盾』を所有しておらぬ様子じゃな?」

「・・・・はい・・・・・」

カミュの盾は、後ろに控えるリーシャが持っている。
そのリーシャの盾をサラが持っているのである。

「大臣！　あれを！」

「はっ。」

国王から指示を出された大臣は、後ろに控える文官に耳打ちをし、
その文官が扉の奥へと消えて行くのを見ていた。
文官が戻ってくる間、間が少し空いてしまったが、カミュ達全員が
床から視線を外さなかったため、誰一人口を開くことはなかった。

やがて、戻ってきた文官の手には、それほど大きくはない盾が乗せ
られた盆があった。
その盆ごと大臣が受取り、カミュの前に置いて行く。

「それは、＞うろこの盾＜と呼ばれる盾じゃ。　魔物の頑丈な鱗を
張り付けたもので、魔物の攻撃は勿論、魔法への耐久力もあると云
われておる。」

「・・・・・・・」

顔を上げ、目の前に置かれた盾を見ると、それは、カミュですら見たこともない代物であった。
鉄を薄く伸ばしたものに、一枚一枚魔物の鱗を張り巡らせたもの。
それは、銅でできている＞青銅の盾＜よりも頑丈にできていた。
国王の話を信じるのであれば、その上、魔法への耐久性もあるという。

「今は、この地方に鱗を持つ魔物が存在しないため、貴重な物となっておる。　お主ならば、その盾を有効に使うこともできよう。
この城にあっても宝の持ち腐れとなるだけじゃ。」

「・・・有難き幸せ・・・・国王様のご寛大なお心、有り難く頂戴いたします。」

＞うろこの盾＜を恭しく掲げ、再び頭を下げるカミュ。
後ろに控えるサラは、そんなカミュの姿が常識的な姿と知りながらも、どこか違和感が胸に残っていた。

「うむ。　他に何か望みはないか？　お主の願いとなれば、横にいる王女の婿として迎えてやっても良いぞ。」

「「　！！　」」

国王の申し出に、リーシャとサラは顔を勢いよく上げてしまう。
それ程、驚くべき発言だったのだ。

アリアハンの英雄オルテガの息子とは言え、カミュは平民である。
その他国の平民を、王女の婿として王族に迎え入れるというのだ。
リーシャやサラでなくとも驚くだろう。
リーシャの隣で小さく跪くメルエだけは真意が分からず、不思議そうにリーシャを見てはいたが・・・・・

「・・・・では、国王様にお尋ねしたきことがございます・・・・・」

「ん？　なんじゃ？　申してみよ。」

黙って頭を下げていた、カミュが突如顔を上げたことに、若干の驚きを表した国王ではあるが、興味を示したのか、カミュの発言を許した。

「・・・・では・・・・・・国王様は＞ノアニール＜という村をご存じでしょうか？」

「「「「「　！！！！！　」」」」」

満を持して開かれたカミュの口から出た単語に、国王に王女、そし

て大臣の他にリーシャやサラに至っても、驚きに息を飲んだ。
カミュからその単語を口にするとは思っていなかったのだ。

しかし、リーシャやサラは、それを心のどこかで望んでいたのかもしれない。
驚きはしたが、その後の返答が気になり、無礼とは知りながら国王に視線を向けてしまっていた。

「ん、ううん。　ごほん。　ノ、ノア・・ニールじゃったか？
これ、大臣。　我が国にそのような村があったかのう？」

「えっ？　ご、ごほん。　確か・・・ロマリア大陸の最北端に・・・そのような村があったような・・・・・」

リーシャとサラは愕然とする。
これが、国を預かる者達の態度なのだろうか。

この答え方は、すでに＞ノアニール＜で起こっていた事を知っていたと言っているようなものだ。　にもかかわらず、国王に至っては自国の村として認識すらしていないと言う。
それが、国を預かる者として、どれほど恥知らずな行為に当たるのかが解っていない。

「・・・確かに、我が国の最北端にそのような村があったと聞いていますが、すでに滅びたという報告もあります。　勇者殿、それが何か？」

動揺が走る謁見の間。
国王の目は泳ぎ、大臣は慌てる。
そんな中、謁見の間にはいながら一言も発していなかった女性が口を開いた。
王女である。
この国の指針を示し、それを部下たちに行わせている、この国の頭脳と言ってもいい女性であった。

「・・・いえ・・・それであれば、結構です。」

王女の瞳には厳しい光を宿していた。

王家は＞ノアニール＜の状況を知ってはいる。
だが、それがなんだというのだ？
他国から来た旅人ごときが、国政に口を出し、内部干渉をするのか？

という言葉を、王女の瞳は語っていた。
その瞳を見て、カミュは諦めた。

村が復活したという情報も、その内この城に届くだろう。
そうなれば、今まで十数年取れなかった税をここぞとばかりに取り立てに行くのであろう。
それが、重税となる。
しかも、村人は自分達の時が止まっていた事など知らない。
ロマリア国がいう重税の理由が理解できない以上、＞ノアニール＜の村人達の不満は高まるだろう。　下手をすれば、暴動が起きる可

能性もある。

カミュは、そのことを告げることも諦めた。
もし、そうなったとしても、この王女が何か良い案を出すだろう。
それが、村人を更に苦しめる内容になるかもしれないが・・・・

「そうですか・・・ならば、謁見はこれにて終了ですわね。　では、こちらが＞イシス＜女王への文です。　大臣から受け取ったのであれば、早々に立ち去りなさい。」

「・・・・・では、失礼いたします・・・・・・」

深々と頭を下げたカミュは、立ち上がり、数歩国王に向かって後ずさった後、身を翻して謁見の間を出て行った。
その後を三人の従者が追って行く。

「・・・・・・あの者達、＞ノアニール＜まで行っておったか・・・・・」

「おそらく、あの方達が行ったとなれば、＞ノアニール＜の呪いも解けたのでしょう。　人を派遣させます。　その上で、これからの事を検討しましょう。」

呟くように漏れた国王の言葉に、すかさず隣に座る王女が答えた。
王女の提案に頷きを返し、大臣は派遣するための人選を頭の中で考えていた。

「・・・しかし、＞ノアニール＜のことを他国に話すなどされれば・・・」

「その点は心配いらないでしょうね。　あの方達はそれほど愚かではありません。　もし、他国へ我が国の情報を漏らせば、一国を敵に回すこととなり、とても『魔王討伐』等出来なくなることは解っていましょう。」

「姫様のおっしゃる通りかと・・・今はまず、＞ノアニール＜の確認と税率の設定について話し合うべきかと。」

王女の言葉に同意を示し、大臣が国王に提言を繰り返す。
一つ目を瞑った国王であったが、もう一度開いた瞳は一国を預かる王としての瞳であった。

「わかった。　＞ノアニール＜の件は、王女に一任する。　早急に確認の後、税率を設定し直せ。　全て十数年も眠りについていた者達ばかりだ。　国政に不満を持つ者などおるまい。」

「父上のお心のままに・・・・」

国王としての威厳を放つロマリア王に、大臣たちは跪き、王女もまた瞳を下げた。
＞ノアニール＜の行く先が、カミュの予想とそう変わらないものとなった瞬間であった。

「・・・・カミュ・・・・・」

「・・・・カミュ様・・・・」

リーシャとサラの呼びかけ。
それは各々の中で同じような感情が蠢いている証拠。
国王の言葉に、ロマリア国へ対する不信感と絶望感を持ったのであろう。

「・・・・はぁ・・・・アンタ方が何を考えているのかは解るが、この城下町を出るまで吐き出すな。」

「・・・・??・・・・」

溜息と共に吐き出された言葉に、カミュのマントの裾を握っていたメルエは小首を傾げてリーシャとサラの二人を見ていた。

一行は、武器屋や道具屋に寄ることもなく、ましてや闘技場など見向きもせずにひたすらロマリアの町の出口となる門へ向かって歩いて行く。
その間、誰一人として口を開く者もなく、そして、リーシャとサラに至っては、顔を上げることもなかった。

＞カザーブ＜よりも、＞ノアニール＜よりも活気に溢れる街並み。
人々の表情には笑顔が浮かび、笑い声と大きな呼び込みの声が聞こえてくる。
そんな人々の営みという素敵な喧騒にもかかわらず、リーシャとサラの心は沈んで行った。

「・・・カミュ・・・・・ロマリア国王も王女も＞ノアニール＜のことは知っていたんじゃないか？」

ロマリアの門を抜け、門番からの嫌な視線を無視して、カミュ達一行は平原を北東へと歩き出す。　ロマリアで貰った地図を広げ、先頭を歩くカミュに、リーシャは重苦しい口をようやく開いた。

「・・・・そうだろうな・・・・」

「　な、ならば、何故？　何故、ロマリア国家は＞ノアニール＜を救おうとしなかったのですか？」

地図から顔を上げることもなく、カミュはリーシャの言葉を肯定した。
そんなそっ気のない答えに、サラは勢いよく抗議する。

しかし、リーシャにしても、サラにしても、自分が疑問に思ったことをカミュに抗議するという行為自体がおかしなことだということ

は解っている。
だが、彼女達の様に、謁見の間で発言を許されない者ならば、仕方のないことだと言えよう。

「・・・今の国の状態はアンタ方も見ているだろう？　国家は疲弊し、辺境の村からの搾取でようやく国としての体面を繕っている状態だ・・・」

「そ、それは解ります！　でも、あれでは、余りに酷い。　＞ノアニール＜自体がロマリア国の村ではないかのようではありませんか！？」

カミュの続けた言葉を、またしてもサラが真っ向から対抗する。
リーシャは瞳を瞑り、メルエはサラの剣幕に怯えてカミュのマントに包まってしまった。

「・・・では、聞くが、あのロマリア王女が、＞エルフの隠れ里＜に交渉に行くと思うのか？」

「そ、それは・・・・」

「行く訳がない。　行くのは、アンタ達も見た高圧的な兵士だろう。
それでは行き着く先はエルフとの全面衝突だ。」

「！！！」

カミュが言ったことは決して大袈裟な話ではない。
むしろ現実に限りなく近い話であろう。
そして、それが現実となれば・・・・

「エルフの数が減ったとはいえ、元々『人』が刃向える存在ではない。　長期的な戦争となるだろう。　唯でさえ疲弊した国なんだ。　下手をすれば、ロマリア国家自体の存続にかかわってくる。」

そう。
エルフとの全面戦争を行えば、まず間違いなく多くの『人』が死に、更に国は疲弊し、多くの国民が苦しむこととなる。

「・・・一部だけを見れば、国王や王女が行ったことは非人道的に映るかもしれないが、国家を預かる者として、一部の国民だけを護ればいいと言う訳じゃない。　＞ノアニール＜という村の人間を切り捨てでも、他の国民を優先した結果だ。」

「・・・な、ならば・・・カミュ様は、ロマリア国王様の判断は正しかったと言うのですか？」

カミュの言葉は、サラには国王を擁護するもののように聞こえてい

た。
国民を護るために国民を見捨てる。
それが国家として正しいとはサラにはとても思えないのだ。

「・・・さぁな・・・それこそ、俺に聞くこと自体が間違っている。
俺は国王でもなければ、国の重臣でもない。」

「・・・・そんな・・・・・」

カミュの言葉は、サラを突き放すようなもの。
サラの頭の中は真っ白になって行く。

自分が信じていた国家像。
アリアハンでは、聖霊ルビスに選ばれた人間が王族として国家を成し、『人』を聖霊ルビスの代わりに護り、導いていくと教えられていた。
その王族が護るべき『人』を見捨てているなど、サラは理解したくはなかった。

しかし、サラは頭の片隅にある想いに気付かない振りをしているだけなのだ。
『聖霊ルビス』に『人』の守護を託されたのは『エルフ』であるという話を・・・
それは、サラの信じるルビス教の教えを根底から覆すもの。
だからこそ蓋をしていたのだ。

それが、まるで禁断の箱の様にゆっくりとその蓋を開けて行く。

『人々』の守護者は王族ではなく、『エルフ』。
ともすれば、＞ノアニール＜の人々を護るのは『エルフ』。
その『エルフ』が原因だとすれば、＞ノアニール＜の呪いは、唯の罰。
親が子供を叱りつけるような、唯の罰則なのではないか・・・・

ならば、『王族』とは、『僧侶』とは何のか？
サラの頭はもはや許容範囲を超え、オーバーヒートを起こしていた。
目の前に立つカミュの姿が歪んでいく。
自分の信じていた理想と偶像と共に歪み、崩れて行く。

「・・・サラ・・・気をしっかり持て。　あの時、私はサラに言ったはずだ。　これが『人』の全てではない。」

気を失ってしまいそうになるほど、視界の歪みが酷くなった時、サラを引き戻す声がかかり、自分の方に暖かな温もりが感じられた。
肩に添えられた温もりを中心にサラの視界が戻って行く。

それは、サラが憧れ、目指すべき者の一人である女性の声。
いつでもサラが迷い、苦しんでいる時に手を差し伸べてくれる声。
サラが進むべき道を指し示すことはせずとも、もう一度道を探す勇気をくれるリーシャの声だった。

「・・・はい・・・そうでした・・・・」

軽く首を振り、サラは意識を覚醒させていく。

リーシャの言うとおり、自分もあの時、『自分が変わること』を否定しないと宣言したのだ。
こんなことで意識を失う訳には行かない。

「・・・・・・・サラ・・・・・・・・・痛い・・・・・・・？」

「　えっ？　だ、大丈夫です。　少し眩暈がしただけです。　どこも痛くありませんよ。　」

サラの身を案じる純粋な少女。
その心配そうな瞳にサラの決意は更に堅くなっていく。

「・・・＞アッサラーム＜までは、かなり時間がかかる。　何日かは野宿になるだろうな・・・」

サラとリーシャのやり取りを無視するように、いや、意図的に流すようにカミュが地図に目を落とした。
それが、カミュなりの優しさなのかもしれない。
最近は、メルエだけではなく、リーシャやサラに対しても小さな気遣いを見せるカミュの変化をリーシャは好ましく思っていた。

「　まぁ、仕方ないだろうな！　今までが恵まれていた方だ。　さぁ、サラ、メルエ。　行こう。」

「・・・・・・ん・・・・・・・・・」

「　はい！　」

意図的に声を張り上げるリーシャ。
それに笑顔で応えるメルエ。
そして、胸の内に新たなる決意を灯したサラが元気のいい声を返す。

地図を持つカミュを先頭に、その裾をメルエが握る。
そんなメルエに優しい視線を送るリーシャ。
そして、その横をサラが歩き、彼等は新たなる土地を目指す。

ロマリア城？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これで第3章は終了です。
この次はまた装備品一覧を更新致します。

第４章はアッサラームにイシスがメインでしょうか？
頑張って書いていきます。

ご意見、ご感想をお待ちしています。

※勇者一行　装備品一覧（前書き）

装備品を更新します。
あまり変わり映えはありません。

※勇者一行　装備品一覧

装備一覧

名前：カミュ

【職業】：勇者
※アリアハンの英雄の息子として生まれながらにして『魔王討伐』という重責を負う。

【年齢】：１６歳
※既にアリアハンから出て数か月の日数が経過している。

【装備品】
頭）：サークレット
胴）：鉄の鎧・改

盾）：うろこの盾
※ロマリア大陸には存在しない魔物のうろこを使用してつくられているため、国家の財宝として保管されていたものをロマリア国王から賜ったもの。
武器：鋼鉄（はがね）の剣
所持魔法：メラ
ホイミ
ルーラ
ギラ
アストロン

名前：リーシャ・デ・ランドルフ
職業：アリアハン宮廷騎士
戦士
※宮廷騎士として修業を重ねてきたので、大抵の武器防具の使用が可能。
年齢：不明
※別段歳を取り過ぎている訳ではないが、この時代の女性は早くに

嫁ぐ傾向があるため、自身の年齢に若干のコンプレックスを持っている様子がある。

装備：
頭）なし

胴）鉄の鎧・改

盾）青銅の盾
※＞バリィドドッグ＜に盾を破壊されたサラに自分の＞青銅の盾＜を渡したため、今リーシャが装備している盾は本来カミュが持っている筈の盾である。

武器：鋼鉄（はがね）の剣

所持魔法：なし
※魔法力がないため、契約・行使ともに不可能。
※魔法に対しての憧れは強く、持って念じるだけで魔法を使用できる付加価値のある武器に興味を示すが、それによる失敗から二度と使わないと心に決めている。

名前：サラ

職業：僧侶
※日々、精神的に成長を続ける。
※人を教え導く者になることが目標であり、いつしか、その目指す者の一人が常に隣に立つ戦士リーシャになっていることにまだ自覚はない。

年齢：１７歳

装備：
頭）僧侶帽

胴）みかわしの服
※以前から来ている法衣と同じように青く染められた生地でできており、見かけは依然とあまり大差がない。

盾：青銅の盾
※＞バリィドドッグ＜との戦闘で破壊された為、リーシャが装備していた盾を譲り受けた。

武器：鉄の槍
※日々のリーシャとの特訓により、ようやく人並の腕前になっている。
※カミュ・リーシャといったアリアハンでも上位に入る使い手しか見ていないサラは自分の腕前が一般兵士より上になってきていることに気が付いていない。

所持魔法：ホイミ
　　ニフラム
　　ルカニ

マヌーサ
キアリー
バギ
ピオリム

名前：メルエ

職業：魔法使い
※魔法の才能は『人』としてはずば抜けている。
※主に感覚と才能のみで呪文行使をするため、魔法力の操作や応用などはまで出来ていない。

年齢：不明
※見た目は８歳～１０歳。
※奴隷として売られていた為、幼い頃に親から全く教育を施されていない可能性が高く、世間の常識や読み書き等、多くのことを知らない。

装備：
頭）とんがり帽子＆アンの花冠
※カミュに買ってもらったメルエのお気に入り。
※帽子にはアンが作った花冠が掛けられており、それは不思議なこ

とにかなりの時間が経っているにもかかわらず、未だに枯れる様子はない。

胴）アンの服
※＞カザーブの村＜にてトルドから貰ったアンの着ていた服。
※実は＞みかわしの服＜と同じ生地で作られており、トルドの妻がアンの為に作ったものである。

盾）なし

武器）魔道師の杖
　　毒針
※カミュがメルエの魔法暴発を防ぐために買い与えた物。
※当初、満面の喜びを示してはいたが、自分の思い通りに魔法が発動せず、今はメルエにとって憎むべき杖となりつつある

所持魔法：メラ
　　ヒャド
　　スカラ
　　スクルト
　　ルーラ
　　リレミト
　　ギラ
　　イオ
　　ベギラマ
※＞ベギラマ＜は魔法暴発の恐れがあるのでカミュに禁止されている。

※勇者一行　装備品一覧（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ついにアッサラーム・イシス編に次回から突入します。
やっと物語も少し進みました。
ここまでで、５５万字って・・・・（汗
完結するまでの道のりは果てしなく遠いです。

まさに「果てなき旅路」ですね。

イシス地方？（前書き）

ＰＶが３０万を超えていました。
本当にびっくりです。
読んでいただいている方々、本当にありがとうございます。

副題の件ですが、アリアハンやロマリアは大陸名を書けたのですが、そういえばこの後の大陸名を知らないことに気がつき、「地方」という名でタイトルとしました。　どこかに？の地図で大陸名を書いているものとかないですかね・・・・

イシス地方？

カミュ達一行は、ロマリアを東に向かって歩いて行く。
日は高く上り、すでに正午は過ぎていた。

太陽が真上より西に傾きかけた頃、一行の前に大きな橋が見えてきた。
それは、アリアハン城とレーベの村がある大陸とを結ぶ橋と大差のない物であり、サラはその橋の壮大さに思わず見とれてしまう。

「はぁ～、大きな橋ですね・・・」

「そうだな。　アリアハンにあるあの橋よりも大きなものだな・・・」

バコタの叔父が基礎を築いたあの橋よりも大きい。
それが、サラの感嘆の声に反応したリーシャの率直な感想であった。

もしかすると、自分達が考えているよりも、アリアハンは技術的にも文化的にも他国から遅れているのかもしれない。
＞鉄＜の様な特産品もなければ、鉄を鍛える技術もない。
防具にしても、魔物の皮を伸ばし、形を作った物しかない。

「・・・もしかすると、アリアハンは他国から色々な意味で遅れているのか・・・？」

そんな疑問が思わずリーシャの口から零れてしまう。
それは、祖国に対しての誇りは揺るがないまでも、その誇りである祖国が他国から文化的に遅れているという微かな哀しさが窺えるものだった。

「・・・確かに、文化や技術はかなり遅れているのかもしれない。
だが、この橋に関してはそうとは言えないだろうな。」

「・・・どういうことだ・・・？」

リーシャの考え通り、『文化の遅れ』を肯定したカミュに、リーシャは肩を落とすが、言葉の中に出てきた橋に関しての言葉に疑問を投げかける。
そんなリーシャに少し溜息を吐きながらもカミュは言葉を続けた。

「・・・アリアハンのあの橋は、海から近い。　川となって海に流れ込む激流と海水とがぶつかる場所にある橋だ。　この橋とは違い、川の流れは相当に激しい。」

「・・・それは・・・」

「つまり、そのような川の状況の中であれほど大きな橋をかけたこと自体が凄いことだと言うことですか？」

言い淀むリーシャの代わりに答えたのは、未だに橋の壮大さに目を奪われているサラであった。　メルエも橋を物珍しそうに見上げている。

独特のアーチを描く橋は、メルエの目には不思議なものに映っていた。

「・・・そう言うことだ。　この地方の人間があの場所で橋の土台を作れと言われても、そうそうできるものではない。　それだけ、あの橋の土台を築いた人間が素晴らしい発想と技術を持っていたと言うことだろう。」

「・・・カミュ様・・・」

カミュの言葉に、サラの頭にあの柔和な笑顔を浮かべる骨と皮だけになった老人の顔が思い浮かぶ。

自分の甥とその嫁、そしてその子供をも惨たらしく殺害されて尚、世界を救う一助となる為にカミュに＞盗賊のカギ＜を手渡したあの老人だ。

「・・・だが、それも個人の話だ。　アンタの言うとおり、完全に

他国との関係を断ち、技術や文化の交流を拒否したアリアハンの文化が遅れていることは事実であり、おそらくあの国はこれからも進歩は望めないだろうな。」

「・・・・・・」

カミュの言うとおり、鎖国前もアリアハンの武器と防具は今とほとんど変わりはない。
つまり、文化や技術の向上はこの先もそれ程変化はないと言ってもいいだろう。
それよりも自分の祖国であるアリアハンを『あの国』呼ばわりするカミュがリーシャの頭に血を上らせていた。

「しかし、カミュ様が『魔王』を倒せば、再び他国との交流を持って、文化や技術も進歩するのではないでしょうか？」

「・・・はぁ・・・アンタは自分達を見捨てるように交流を断った者を許すことができるのか？　アリアハンは自国を護るために他国との交流を断った。　そんな国を平和になったからと言って相手をする国があると思うのか？」

「・・・それは・・・」

カミュの言うとおり、世界中の危機の中、自己の為だけに他者を見

捨てた者の末路などたかが知れている。
最悪、世の中が魔物の脅威から解き放たれた時に、攻め滅ぼされることもあるだろう。
唯でさえ、戦闘に使う武器・防具を生産する能力も加工する技術もないのだ。
ならば、他国からの侵略に抗う術など、皆無に等しい。

「・・・その為のお前だろう。　カミュ、お前が『魔王討伐』に成功すれば、アリアハンの功績になる。　それが世界交流への復帰を可能にする切り札だ。」

「・・・えっ・・・？」

サラは驚いた。
サラの後ろからかかったリーシャの言葉は、今までのリーシャのものではなかった。
アリアハンという国に誇りを持ち、その行いは正当であるという認識を持っていた宮廷騎士。　それが、サラが考えても納得できないような内容を口にしたのだ。

「・・・お前の父オルテガ様は世界でもその名を知られる英雄だ。
その息子であるお前が世界を救ったとなれば、アリアハンは『魔王』を倒した国となれる。」

リーシャの顔に表情はなかった。

唯淡々と事実を話しているだけ。

「・・・俺にそのつもりはない。　俺はあんな国の為に旅をしている訳でもなければ、あんな男の代わりになるつもりもない・・・・」

「　くっ！　アリアハンはお前の祖国であろう!?　」

リーシャと同じように表情を失くしたカミュが話す内容に、ついにリーシャの怒りが爆発した。

「・・・俺に愛国心や忠誠心を求めるアンタの頭の中身がよく解らないんだが・・・」

「・・・ほぉ・・・それは、暗に私が馬鹿だと言いたいのか？　私に『かしこさ』が少しもないとでも言いたい訳か？」

「・・・・リーシャさん・・・・・」

怒りが爆発し、剣を抜きかけたリーシャの話の内容が急遽大幅に逸れた。
そんなリーシャの言動にサラが溢した声は、どこか呆れを含ませている声だった。

「・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・食べる・・・・・・？」

そんなリーシャとカミュのやり取りを傍で聞いていたメルエが、おもむろに肩から提げたポシェットに手を入れて取り出した物は、＞カザーブ＜で盛り上がった話題の物だった。

「メルエ～～～～～！」

「！！！」

地の底から響くような声。
その声にびくりと身体を跳ねさせたメルエは、急いでカミュのマントへと包まって行く。
あれ程、緊迫していた一行の空気はどこか和やかなものに変わって行く。

「・・・もういいか・・・？　先に進むぞ・・・」

「カミュ！　これだけは言っておく。　お前がどんなに否定しようと、世界中の人間はお前をアリアハンが送りだした『勇者』と見る。　そして、オルテガ様の息子と言う事実も変えようのない事実だ。」

身を翻し、歩き始めようとしたカミュに、後ろからリーシャの声がかかった。
それは、先程までような怒気を含ませた声ではない。
どこか諭すような、そんな声量だった。

「・・・アンタに言われなくても、今まで生きてきて、それは嫌と言うほど知っている。」

「・・・カミュ様・・・」

サラには、何故カミュがここまで父親であり、世界的な英雄であるオルテガを拒絶するのかが理解できない。
自分の両親は、＞レーベの村＜に住む商人だった。
そんな普通の両親であっても、サラは両親を誇りに思っているし、敬愛もしている。
故にカミュの発言とカミュの心情がサラには推し量ることができなかったのだ。

一行は、会話もなくなり、橋を渡って行く。
橋の上から振り返ると遠くにそびえ立つロマリアの城。
前を向くと、遠くに広がる平原と森。

それは広大な光景だった。

「・・・・・・・・・・・・広い・・・・・・・・・・・・・・・」

「そうだな。　世界はとても広い。　メルエも私もまだ見たことのない世界が広がっているんだ。」

リーシャから手を離したメルエが橋の手すりにつかまり、そこから見える見果てぬ大地を眺めている。
そのメルエが呟いた言葉に反応し、メルエの後ろから同じ光景を眺めていたリーシャが、発した言葉は、サラの心に残って行った。

「・・・・・カミュ・・・・・・あれは私の幻覚なのか？」

橋を渡り終えた先に広がる平原に足を下ろした一行の前に奇妙な光景があった。
その光景にリーシャが前を歩くカミュへと声をかけるが、それはどこか呆然としたもの。

「・・・・何がだ・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・ねこ・・・・・・・・・・・・」

「あれっ？　メルエは、猫は知っているのですね？」

振り返ったカミュはそっけなく答える。
リーシャの傍からカミュの傍へ移動していたメルエが呟きを溢し、その呟きにサラが思わず反応してしまう。

「　お、お前達は、なんでそんなにのんびりとしていられるんだ！？　猫だぞ！　猫が空を飛ぶのか！？　」

どこか和やかな空気を纏う三人に苛立ちを隠せないリーシャは混乱も表に出しながら声を荒げた。
そんなリーシャにメルエは小首を傾げて見上げ、カミュは呆れたように溜息を吐く。

「・・・アンタは毎回毎回魔物が出てくるたびに取り乱すつもりか？　水辺でなくても＞かに＜の魔物は生息するし、＞きのこ＜そっくりな魔物も存在する。　猫のような空飛ぶ魔物がいても何も不思議ではないだろう。」

「・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・変・・・・・・・・・？」

カミュは溜息を吐きながら、ここまでのリーシャの行動をなぞって行く。
更にはメルエの追い打ち。
そして、後ろでは半笑いのサラ。
リーシャは逃げ道を失くしていく。

「だ、だから、変なのは空飛ぶ猫だろ！？　メルエは猫が空飛ぶところを見たことがあるのか！？」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

そんな追い詰められたリーシャの言葉に、メルエは目の前に手を上げ、今見ている空飛ぶ猫を指差してリーシャを見上げた。

「　そ、それは、今初めて見たと言うことだろう！？　くそっ、この中で常識的な考えを持つのは私だけなのか！？　」

「・・・・・それは、心外だな・・・・・俺たちから見れば、アンタこそ一番常識からかけ離れている言動をしていると思うが・・・・・」

「カ、カミュ様。　とりあえずは目の前の魔物に集中しましょう。
確かにあれは初めて見る魔物に違いはありません。　リーシャさんも、相手は魔物なのですからどんな魔物が出てきても不思議ではありませんよ。」

リーシャの混乱した言動に、少しむっとしたように眉を顰めたカミュであったが、後ろからかかったサラの提案に一つ頷き、背中から剣を抜き、構えを取った。

リーシャも諦めたのか、腰の剣を抜き、目の前で前足をバタつかせながら飛ぶ猫に向かって構えを取った。

＞キャットフライ＜
リーシャの言うとおり、顔や身体は猫そのもの。
しかし、猫と違うところは、その前足に大きな水掻きのような翼が生えていること。
その前足を動かすことによって空を飛んでいるのだ。
まさしく猫とコウモリの身体を交配させたような魔物であり、生息地はロマリアの東に位置する地方でよく見受けられる。

「　カミュ！　そっちの二匹は任せた！　」

先程まで混乱していたリーシャが剣を立て＞キャットフライ＜目掛けて駆けて行く。
出てきた＞キャットフライ＜は全部で四匹。

魔物にもその生息地の住み分けがある。
何故かは解明されていないが、大体同程度の強さを持つ魔物達が地方地方に固まって生息する。
それは、種族を護って行くための魔物の中での暗黙の了解なのかもしれない。
地方を移動した魔物達は、強力な魔物に縄張り争いで敗れることとなるが、稀にその中で生き残った魔物は、その地方の風土やそこに住む魔物達に適応するために進化していくことになる。

「メルエ、魔法の準備を。」

「・・・・・・・・・」

前へ出て行ったリーシャとカミュの後方で、サラがメルエに呪文詠唱の準備に入るように指示を出すが、メルエは自信なさげに眉を顰めたまま項垂れていた。

メルエはロマリアを出た後も休憩の度に魔法の練習を行っていたが、一度も杖の先から魔法が発動することはなかった。
メルエは今、自分の魔法に対する自信は皆無に等しい。
カミュがメルエの為にと買い与えた杖は、奇しくもメルエの自信を根こそぎ奪ってしまうものと化していたのだ。

「大丈夫です、メルエ。　今度はきっとできます。　メルエは私よりもずっとずっと魔法の才能があるのですから、メルエに出来ない

訳がありません。　落ち着いて。」

そんなメルエの表情に気が付いたサラがメルエの前にしゃがみ込み語りかける。
いつも自分に勇気ををくれるリーシャの様に、いつも自分に優しさと安らぎをくれるメルエに対して。

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

それでも尚、自信なさ気に頷いたメルエは力なく右手に持つ杖を掲げ、＞キャットフライ＜に照準を合わせる。

そのときであった。

「　フニャ――――――――――――――――！！　」

突如、＞キャットフライ＜の内の一匹がメルエとサラの方向に顔を向け、何か奇妙な鳴き声を上げた。
それは、距離があるにもかかわらず、サラとメルエの頭の中へ入り込んでくるように響く。

「・・・・・・・・・・ギラ・・・・・・・・・・・・」

＞キャットフライ＜の鳴き声に驚いたサラを余所にメルエが杖を掲げたまま詠唱に入った。
何度となく自身の指から発したはずの魔法を唱えたメルエであったが、杖は何の反応も示さない。
杖の先を憎々しげに睨み、再度メルエは呪文を詠唱する。
それでも杖は沈黙を守り続けた。

「・・・・・・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・・・・・・・」

「メ、メルエ・・・・・・」

何度も何度も呪文の詠唱をする訳でもなく、右手に持った杖を振ったメルエは、そのまま以前と同じように杖を投げ捨てた。

「メルエ、駄目です！」

「・・・・・・・・・ギラ・・・・・・・・・・・・・」

杖を投げ捨てたメルエが怒りにまかせて右手を掲げ詠唱を始める。
それを察したサラが、メルエを止める為に叫ぶが、もはやメルエの感情を押し止めることはできなかった。

「・・・・・・???・・・・・・・」

「えっ？」

予想とはかけ離れた結果に、サラは奇妙な声を上げた。
メルエも自分の右腕を不思議そうに眺める。

メルエの魔法が発動しないのは、杖を媒体とした時だけだったはず。
しかし、今、杖を投げ捨てて自らの腕を掲げ詠唱したにもかかわらず、メルエの腕に何の変化も見られない。

「・・・・・・うぅぅ・・・・・・ぐずっ・・・・・・」

「メ、メルエ・・・・・・・・・はっ！　も、もしかして・・・・・・」

自分が完全に魔法が使えなくなってしまったことに、遂にメルエは泣き出してしまう。

自分が自分である証。
それがメルエにとっては魔法だったのだ。
それが使えない。
自分は用済みとなる。

そんな考えに陥っているメルエにどう言葉をかけて良いものかを悩むサラであったが、何かに思い当ったのか、顔を上げ、メルエの肩

に手を置いた。

「大丈夫、大丈夫です、メルエ。　今、あの魔物が使った魔法によってメルエも、たぶん私も魔法が使えなくなっているだけです。　あの魔物を倒せば、また魔法が使えるようになりますから！」

「・・・ぐずっ・・・・・サラ・・・・うぅぅ・・・・・ホント・・・？」

「本当です。　私はメルエに嘘は言ったことはありませんよ。　大丈夫。　メルエはここで待っていてください。　私もカミュ様達とあの魔物を倒してきますから。」

肩に手を置いたサラの言葉にメルエはようやく顔を上げる。
サラの話す内容を、涙で滲む視界を拭いながら聞いていたメルエが、サラに確認を取ると、優しく力強い笑顔が返ってきた。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・ぐずっ・・・・・・・」

そんなサラの笑顔に鼻をすすりながらもしっかりと頷くメルエ。
そのメルエを見たサラは、もう一度メルエに笑顔を向けた後、背中の槍を構え、＞キャットフライ＜と対峙しているカミュとリーシャの下へと駆けて行った。

サラの背中を滲む視界で見送った後、メルエは投げ捨てた＞魔道師の杖＜をとぼとぼと取りに行く。
今、別の魔物が出てこない限り、もはやメルエの身に危険もなければ、出番もない。
杖を拾ったメルエは、その場に座り込むように、カミュ達の闘いを眺めるしかなかった。

サラがカミュ達の下へ辿り着いた時には、すでに二匹の＞キャットフライ＜が地面に落ちて絶命していた。
残る魔物は二匹。

「サラ！　メルエはどうした！？」

「後ろで控えてもらっています！　おそらく、私もメルエもこの魔物が唱えた＞マホトーン＜によって魔法を封じられました。今、メルエは魔法が使えません。」

サラの聞きなれない言葉にリーシャは驚くが、槍を構えたサラの魔物を見据える視線に、自身も戦闘に集中することにした。

如何に新たな地方の魔物とはいえ、カミュ達が三人そろっている状態。

しかも、二対四という数的有利も崩れた中、＞キャットフライ＜はもはや死への秒読みが始まっていた。

サラが突き出す槍をひらりと避けた＞キャットフライ＜にリーシャの剣が一閃する。

それも避けようと身をよじった＞キャットフライ＜であったが、避けきれずに翼に小さな傷を作られた。

飛ぶ魔物にとって、翼は生命線である。

翼を傷つけられた＞キャットフライ＜はうまくバランスを取ることができず、ふらふらと飛び上がろうとするが、再び突き出されたサラの槍を避けることはできなかった。

「ギニャ――――――――――――――――――!!」

猫の様な、いや、まさしく猫の叫び声をあげ、サラの槍を胸に受け入れた＞キャットフライ＜は絶命し、地面へと落ちて行く。

一匹を倒したサラとリーシャが振り向くと、カミュもまた、最後の一匹となった＞キャットフライ＜の首を刎ねた所だった。

「サラも大分腕を上げたな。　これなら安心だ。」

剣を鞘に納めながらリーシャがサラの所へ近づいてくる。
サラの成長を心から喜んでいるのだろう。
それがリーシャの顔に浮かんだ笑顔が象徴していた。

「・・・それで、メルエがどうしたんだ？」

「あ、は、はい。　メルエの所に戻りましょう。」

その笑顔をすぐに引っ込め、リーシャは先程サラが言ったことを確かめるように声を出した。　その言葉にメルエのことを確認するように振り向いたサラは、遥か後方で平原に座り込んでいるメルエを視界に収め、ほっと安堵の溜息を吐いた。

魔物の体液を振り払ったカミュは、移動を開始したリーシャ達の後ろをついてメルエの下へと戻って行く。
全員が自分の所へ歩いて来ていることに気が付いているにもかかわらず、メルエは座り込んだまま、歩いてくる面々の顔を眺めていた。
それが、メルエの受けた哀しみの度合いを示しているようだった。

「メルエ、大丈夫でしたか？」

「・・・・・・・・・」

サラの問いかけにもメルエは何一つ答えない。
その双眸からは未だに哀しみの涙が流れていた。

「・・・・いったい、どうしたんだ・・・・・？」

リーシャとサラの会話が聞こえなかったカミュに現状を把握することはできていなかった。
何一つ話さず、ただ涙を流して座り込むメルエにカミュは困惑するしかない。

「何か、あの魔物がサラやメルエに魔法をかけたらしい。」

「・・・・マホトーンです・・・・」

先程、リーシャに対して、確かに魔法の名を伝えたはずなのに、それを口にしないリーシャの言葉をサラが言いなおす。
その魔法の名を聞いたカミュが、今の現状になっとくしたかのように表情を変えた。

「・・・・＞マホトーン＜か・・・・」

「それで、メルエは落ち込んでしまって・・・・」

未だに座り込み、地面を眺めるメルエをリーシャが優しく抱き締める。
リーシャには、何となくメルエの苦しみが理解できたのだ。
役に立ちたいと願っているのに、役に立てるものがない。
そんな自分の無力さを歯がゆく思ってしまっているのであろう。

それが、メルエにとって、ただ魔法だけが存在意義として考えているのだとしても、自分も闘いの中で役に立つ武器を失った衝撃は、リーシャの考えていることが根底にあるのだ。

「・・・はぁ・・・大丈夫だ。　もう魔法は使えるようになっているはずだ。　今回はメルエが杖から魔法が出せないこととは別だ。　試しに杖を媒体にしなくてもいいから＞メラ＜を唱えてみろ。」

「・・・・・・・・・」

溜息交じりのカミュの言葉にも、メルエは何も言わずに首を横に振るだけだった。
それが、サラにも不思議だった。
サラは、てっきりメルエが全く魔法を使えなくなってしまったと勘違いし、落ち込んでいるのだとばかり思っていた。

＞マホトーン＜

教会が保持する経典の中にある魔法の一つ。
唱えた術者の魔法力によって、対象の魔法力の流れを狂わせ、呪文の詠唱を不可能にする魔法。　それは、術者の魔法力の効果範囲を抜けるか、術者の死によってしか解除することはできない。
術者が自ら解く場合はそれには当てはまらないが。
また、術者の魔法力によって、相手の魔法力を抑える為、極端に力量の差がある者に対してはその効力は薄く、全く効果がない訳ではないが、余程運が良くなければその効力を発揮することはない。

「・・・・メルエ・・・・私達はメルエが魔法を使えなかったとしても変わらないぞ。　魔法が使えようと使えなかろうとメルエはメルエだ。」

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・・・・」

「ほら、おいで。」

だがメルエはサラが思っていたような簡単なことで落ち込んでいる訳ではなかったのだ。
おそらく最初はそうであったのであろう。
しかし、魔法が使えないことにより、魔物と戦う三人の姿を後方からただ眺めるだけとなった時、座りこんでいるだけで何もできない自分を感じた時に、メルエの小さな胸を違う感情が締め付けていたのだ。

それは孤独。

そのような感情には、慣れていたはずだ。
もの心ついた頃から誰からも愛された記憶はなく、そして誰にも必要とはされてこなかった。　口を開けば『うるさい』と殴られ、黙っていれば『気味が悪い』『うっとうしい』と殴られる。
挙句の果てには『奴隷』として売られた。

メルエのこの数年間の人生は常に孤独であった。
それが、馬車の幌の中で一人の青年に出会ったことによって、彼女の人生が急変する。
優しさを知り、愛を知り、そして仲間ができ、友まで出来た。
そんなメルエにとって、『孤独』と言うものは、既に当然のことではなく、恐れさえ抱くものとなっていたのだ。

手を広げ柔らかく微笑むリーシャの顔が更に歪んでいく。
先程に比べ、更に大粒に変わったメルエの涙は地面へと吸い込まれた。

「・・・・・・うぅぅ・・・・・・ぐずっ・・・・・・・・」

「さぁ、ほら、おいで、メルエ。」

いつもと違い、なかなか自分の胸に飛び込んでこようとしないメルエに、リーシャは微笑みながら再度促す。
もはやメルエの瞳にリーシャの姿は映らない。
目を瞑ったまま、立ち上がったメルエはリーシャの胸に飛び込んで行った。

「大丈夫。　大丈夫だ、メルエ。　メルエは何があろうと私達と一緒だ。　いつでも私が傍にいる。　それはメルエと私の約束だ。」

「・・・・・・・・・・ぐずっ・・・・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・・」

リーシャは、メルエの表情を見た時、メルエの胸の中にある『孤独』という感情を読み取ったのだ。
なぜなら、それはリーシャもまた幼い頃に経験した感情だからだ。

自己の能力に無力さを感じ、そして孤独に陥る。
それは、リーシャがアリアハンで父親に剣を習っていた頃のこと。
そして、早く父に追いつこうと無我夢中で剣を振るっていた頃のこと。

彼女は父親に剣を教わり、同じ年代の子供の中ではずば抜けた才を発揮していた。
それは、男女を問わない程の才能。
彼女に勝てる子供がいないどころか、まともに剣を合わせることができる子供すらいなかった。

子供は時として残酷である。
自分達より特出する存在は排除しようとする。
当然幼いリーシャはその対象となった。

誰に話しかけても何も返ってこない。
そんな孤独な日々。

しかし、リーシャには剣があった。
父サブリナの下、鍛練を重ね、大人顔負けの実力を保持するようになっていく。

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・ぐずっ・・・・・」

「ん？　もう、落ち着いたか？」

父が死んだ時、リーシャは己の無力さに苛まれた。
何故、自分には父について行くだけの力量がないのか？
リーシャがついて行った所で、何が変わる訳ではなかったかもしれない。
それでも、リーシャの頭にはそれが後悔となって行った。

父が己の命を賭して護った者達もリーシャの家であるランドルフ家に対し、感謝をするどころか、今まで以上の冷遇をするようになる。
元々下級貴族の出であったランドルフ家が宮廷騎士隊長になることを快く思っていなかった人間たちだ。　命を救われようが、『アイツが勝手にやったこと』と括ったのだろう。
自分一人ではなく、その場にいた大勢がそう思ったのだから、自分がそう思っても当然。
『人』は数が多くなると、自己の中の良識が狂うこともあるのだ。

大人がそうなのだ。
子供達は、大人の背を見て育つ。
当然リーシャへの対応も尚一層冷たいものへと変わって行った。

父も死に、友もいない。
爵位も剥奪され、住む家もなくなった。
リーシャが抱えた感情は『孤独』。
唯一人、昔からランドルフ家に仕える老婆だけがリーシャの心の支えであった。

メルエにはそんな老婆すらいなかった。
故にリーシャにはメルエの感情が朧気ながらにも把握することができたのだ。

「杖は自分で拾ったんだな。　偉いぞ、メルエ。　ゆっくり行こう。
　メルエが魔法を使えるその日まで、私がメルエを護ってやる。
だが、メルエが魔法を再び使えるようになった時は私をメルエが護ってくれ。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・護る・・・・・」

「ありがとう。」

ゆっくり自分の胸からメルエを引き剥がしたリーシャがメルエの目を見て語る内容に、メルエは真剣に頷き、宣言する。
この姉であり、母である女性を護ると。

「・・・・日が傾いてきたな・・・・今日はこれ以上は進まず、この辺りで野営地を探す。」

「そ、そうですね。　まだこの先＞アッサラーム＜までの距離が解らない以上、無理をする必要はありませんね。」

リーシャとメルエの姿をカミュは茶番だとは思わなかった。
彼もまた『孤独』を知っている人間だったからだ。
サラも同じである。
それぞれの『孤独』の度合は違えど、このパーティーは『孤独』の怖さを全員が体験していたのである。

「メルエ、サラと一緒に薪探しをしてくれ。　私とカミュは食料を取ってくる。」

「・・・・・・ぐずっ・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・」

平原から少し森の中に入った場所でちょうど良い場所を見つけ、聖水を撒いているカミュを横目に、リーシャは先程から自分の手をしっかりと握るメルエに声をかける。

一瞬、寂しそうな表情を見せたメルエであったが、鼻をすすりながらもしっかりと頷いた。

リーシャの手を離したメルエの反対の手を今度はサラが握り直す。

「さぁ、メルエ、行きましょう。」

「・・・・・・ん・・・・・・・・」

サラに手を引かれ、メルエは森の中に入って行く。

サラとメルエだけであれば、先程遭遇した＞キャットフライ＜の＞マホトーン＜のような魔法を浴び、窮地に陥るかもしれないと考えたリーシャがカミュに提案したが、カミュは『サラに＞鉄の槍＜を持たせるならば問題ない』と相手にしなかった。

カミュから見ても、サラの力量の向上を認めているのだ。

そのカミュの想いを理解したリーシャは、心配は拭えないながらも了承する。

それぞれがそれぞれに分担された仕事をこなし、野営地へと戻ってくる。
カミュはその手に豊富な果物と川魚を、リーシャはうさぎを数羽その手に持っていた。
サラとメルエは両手に抱えるように木の枝を持っている。
その様子では、魔物に出会うことはなかったようだ。

しかし、カミュもリーシャも気がつかなかった。
メルエの表情が浮かないものであることに。

カミュが火を熾し、リーシャが調理を始める。
カミュが取って来た果物にメルエが手を伸ばし、それをサラが窘める。
先程楽しく二人で薪集めをしていたにもかかわらず、メルエはサラに対してふくれっ面を見せる。

その表情がおかしく、そして可愛く、サラは思わず吹き出してしまう。
メルエが若干の不満顔を見せたのも一瞬だった。
すぐに眉を下げ、そして俯いてしまう。
そんなメルエの様子に、笑顔を作っていたサラも表情を曇らせ、ほんの数刻前に遭遇した出来事を思い出す。

薪を拾いに出たサラとメルエは、順調に枯れ木を集めていた。
この森に人が立ち入ることはあまりないのかもしれない。
枯れ木は至る所に落ちていて、二人の腕にはすぐに抱えきれない程の薪となる枝が集まった。

日も陰り始め、森を満たす闇が濃くなってきたことからサラは薪集めを終了し、カミュ達の待つ場所へ戻るため、メルエに視線を向けた。

メルエも薪集めに集中し、抱えきれない程の枯れ木がメルエの両腕を満たしていた。
それでも、昼間の戦闘での事が尾を引いているのか、更に枯れ木を拾おうとして手を伸ばすが、地面に落ちている枯れ木を拾い上げる前に抱えているものが落ちてしまう。

落ちては拾い、拾っては落ちるという、何とも滑稽な仕草を繰り返すメルエにサラの表情に笑顔が浮かぶ。
若干の苛立ちを浮かべるメルエの表情が更にサラの表情を緩めて行った。

故に気づくのが遅れてしまう。
メルエの後方に立つ木の上から目を光らせている魔物の姿に。

「ニャーーーーーーーーーー」

木々を集めることに集中しているメルエに飛びかかるように降りてきた魔物。
それは、昼間に遭遇した＞キャットフライ＜だった。

「！！」

「メルエ！！」

飛びかかってくる＞キャットフライ＜。
メルエの名を叫ぶサラ。

咄嗟のことに反応が遅れたメルエであったが、＞キャットフライ＜の後ろ脚はメルエが抱える枯れ木を吹き飛ばしただけであった。
弾き飛ばされた枯れ木を放り出し、メルエが倒れ込む。
＞キャットフライ＜の攻撃を避けたのは、メルエが身につける＞みかわしの服＜の効力なのか、それともその服の所有者であった『アン』の加護なのかは解らない。

しかし、幸運にもメルエの身体に傷はできなかった。
安堵の溜息を洩らしたサラは、素早く背中から＞鉄の槍＜を抜き、構えを取る。
メルエもまた倒れ込みながらも、リーシャに結んでもらった紐をとき、背中に背負っていた＞魔道師の杖＜を構えた。

「・・・・・・・・・ギラ・・・・・・・・・・」

構えて早々にメルエが呪文の詠唱を行う。
しかし、例の如く、メルエの持つ＞魔道師の杖＜は何の反応も示さない。

「・・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・・」

苛立ちを含ませた声で、メルエが再度違う呪文を詠唱する。
それでも＞魔道師の杖＜は先程と同じように何の反応も示さなかった。

「フニャ――――――――――」

メルエが苛立ち、杖を地面に放った時、昼間の戦闘で聞いた猫の威嚇のような叫び声が森の中で木霊した。
杖を放り投げたメルエが自身の右手人差し指を＞キャットフライ＜に向け呪文を詠唱するが、それも昼間と同じように何の効果も生み出すことはなかった。

「・・・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・うっうっ・・・・・・ぐずっ・・・・・・・」

昼間同じように、自分の得意とする魔法が発動しないことにメルエは泣き出してしまう。
メルエにしてみれば、サラやカミュが言うには、昼間の魔物を倒せば使えるようになると言われていたのに、今まさに使えないのだ。
自分が永遠に魔法を使うことが出来なくなったと思っても仕方がないのかもしれない。

「メルエ！　大丈夫です！　また＞マホトーン＜に罹ったただけです。　メルエは私の後ろに下がっていてください。」

泣き出してしまったメルエと＞キャットフライ＜の間に素早く身を投じてきたサラが、手にする槍の切っ先を＞キャットフライ＜に向けながらメルエに指示を出す。
涙を拭いながら杖を拾ったメルエがサラの後ろに移動した。

「大丈夫。　大丈夫です、メルエ。　私が絶対にメルエを護って見せますから。」

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・」

上空で翼をバタつかせて威嚇を繰り返す＞キャットフライ＜は一匹。
周囲を見渡してもこの魔物しか見当たらない。
仲間を呼ぶ気配もないことから、サラは自分が倒すことに決意を固

めたのだ。

「やぁ！」

「シャ――――――」

サラが突き出す槍を＞キャットフライ＜は軽やかに避ける。
その避け方を見れば、若干の余裕が窺われた。
しかし、サラもリーシャの訓練に耐えてきたのだ。
これで終わる訳はない。

「ふん！」

突き出した槍を切り返し、＞キャットフライ＜を叩き落とすかのように、槍を振り下ろす。
その速度は、やはりもはや通常の兵士が繰り出すものを越えていた。

「シャ――――――――――――――」

先程とは違い、余裕などない避け方でそれを辛うじて避けた＞キャットフライ＜は、そのまま槍を持つサラの右腕に牙を剥いた。

「きゃ！」

「！！」

＞キャットフライ＜の牙によって抉られたサラの右手から鮮血が飛び、後ろで見ていたメルエが息をのむ。

サラの血液が付いた牙を一つ舌舐めずりした＞キャットフライ＜は、一瞬嘲笑うような笑みを浮かべ、次の攻撃の為に上空に舞い上がった。

次で決めるつもりなのだろう。

空を飛ぶ魔物はその攻撃方法が似通っている部分がある。

上空から一気に下降し、そのスピードにより、相手を息の根を止める攻撃を好んで使うことがあるのだ。

「大丈夫。　大丈夫です、メルエ。　そんなに心配しないでください。　そして、泣いても駄目ですよ。　私なら大丈夫ですから。」

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・」

自分の後ろですすり泣くような嗚咽を漏らすメルエに、サラはゆっくりとした優しい声をかける。　サラにも解っていたのだ。　今、メルエが流しているその涙は、自身が魔法を使えないことによって招いたサラの危機に対してのものなのだということが。

「ギニャ――――――――――」

メルエがサラの名を溢したその時、上空に舞い上がった＞キャットフライ＜がサラ目掛けて急降下を始めた。
もはや、＞キャットフライ＜の目にはサラしか映っていなかった。
その後ろにいる少女は＞マホトーン＜によって、魔法を封じ込められているのは先程証明されていた。

しかし、＞キャットフライ＜は知らなかったのだ。
今自分が敵対しているもう一人の少女が、能力の優秀な者達が集まったパーティーの中でもずば抜けた『かしこさ』を誇る僧侶であることを。

「バギ」

先程＞キャットフライ＜に抉られた筈のサラの右腕からは、もはや血が流れ落ちてはいなかった。傷の深さから未だに痛々しい傷跡は残っていたが、傷口は塞がり止血はされている。

サラは、＞キャットフライ＜が上空に舞い上がり、メルエに話しかけているその間に、自身の腕に＞ホイミ＜をかけていたのだ。
時間もなかったことから、傷口を塞ぐだけの簡単な詠唱ではあったが、そこでサラは自身に＞マホトーン＜の効力が及んでいないことを確認し、真っ直ぐに自分に向かってくる＞キャットフライ＜にその右腕を掲げ、詠唱を行ったのだ。

「ギャシャ――――――――――」

サラの掲げられた右腕を中心に、空気が暴れ始める。
真っ直ぐと降りてきた＞キャットフライ＜はその風の暴走をカウンター気味に受けることとなった。真空と化したその風の刃は、＞キャットフライ＜の身体を切り刻み、生命線であるその翼にも無数の傷を付けて行く。

「やぁ！！」

翼を切り刻まれ、辛うじて生きてはいても、虫の息といった状態で翼をバタつかせる＞キャットフライ＜にサラの槍が突き刺さる。
断末魔の叫びを上げる余裕もなく、サラの槍によって胸を貫通された＞キャットフライ＜の目から光が失われた。

「・・・・・・・・サラ！！・・・・・・・・」

「わっ！？」

＞鉄の槍＜を引き抜いたサラの背中に、珍しく声を荒げたメルエが抱きついてくる。
バランスを崩し、倒れ込みそうになるのを必死でこらえ、サラはメルエの方向に態勢を変えた。

「メルエ、大丈夫でしたか？」

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・・痛い・・・・・・・・・？」

メルエの安否を窺うサラの言葉を無視し、メルエはサラの右腕を取り、何度も傷跡を確かめる。

「ふふっ、大丈夫ですよ。　・・・・・ホイミ・・・・・・・・ねっ？
もう傷跡も消えました。」

「・・・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・・・・」

メルエに微笑みながら、再度自分の右腕にホイミをかけ、サラは傷跡を消していく。
その様子を見ていたメルエの頬には、まだ涙の跡がくっきりと残って入るが、笑顔で頷いた。

「・・・・・・・・・・・・ごめん・・・・・なさい・・・・・・・・・」

「　えっ？　」

笑顔で頷いた筈のメルエの表情は、顔を上げた時にはもう雲っていた。
そして、そのまま小さな声で謝罪の言葉を漏らす。
一瞬メルエが何を言っているのか理解できなかったサラであったが、＞魔道師の杖＜を握るメルエの右腕に力が籠っていることに気が付き、その理由を理解した。

「・・・メルエ、焦る必要はありませんよ。　私もメルエの魔法の才能を疑ったことはありません。　メルエは凄いのですよ。　それこそ私などよりも。」

「・・・・・・・・でも・・・・・・・・・・・魔法・・・・・・出ない・・・・」

サラの言葉にも、メルエは俯いたままだ。
サラは少し考えるそぶりをした後、戦闘で投げ捨てた枯れ木を再び拾いながらメルエへと語りかける。

「そうですね。　きっと、私やリーシャさんがメルエにいくら『大丈夫』と言っても、メルエは納得しませんよね。　私もそうでしたから・・・・・」

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・も・・・・・・・・・？」

不思議そうに小首を傾げたメルエに、拾った枯れ木を渡し、今度は落ち葉を拾い始めた。
杖を背中に結び直し、サラから枯れ木を受け取ったメルエは、落ち葉を掻き集めるサラをしばらく呆然と眺めていた。

「はい。　私も自分に自信がありませんでした。　う～ん、自信がないのは今も同じですかね。　でも、信じるようにしました。　私には神父様やリーシャさんが信じてくれるような能力がきっとあるのだと。」

かき集めた落ち葉を、サラは先程倒した＞キャットフライ＜の上にかけて行く。
それは、死体を見たくないためなのか、それともサラなりの供養なのだろうか。

サラは、メルエに『自分が変わった』と言っている。
それは、何も魔法に関することばかりではない。
僧侶としての資質。
それは、他者に言われても納得などすることはできなかった。

剣の腕なら、リーシャは勿論、カミュの足元にも及ばない。
魔法にしても、カミュが＞ホイミ＜を使える以上、僧侶としてパーティーに同道する意味がない。

それでも、リーシャはサラが旅に必要だと言ってくれる。
カミュにしても、最近は衝突こそあれ、『アリアハンに帰れ』とは言わなくなった。

それは、極端ではあるが、同道を認めてくれたことになるのではとサラは思っていた。

「私もまだまだ未熟者です。　あぁ、全然駄目ということです。」

「・・・・・サラ・・・・・・・ダメ・・・・・・・？」

メルエの為にもう一度言い直したサラの言葉に、メルエが反応する。落ち葉を魔物の死体にかけ終わったサラは今度は、自分が持つ枯れ木を拾い集め出した。

「ふふふ。　ええ、駄目ですね。　だから、メルエと同じようにたくさん練習しますし、鍛練もします。　私が自分に自信を持てるように。　そして、私を信じてくれた人達に胸を張れるように。」

「・・・・・・・・メルエ・・・・・・・も・・・・・・・・？」

確かにサラは変わったのだろう。
アリアハンを出た当初であれば、このようなことを口にすることはなかった。
彼女の目的はただ一つ。
魔物への『復讐』だけだったからだ。
僧侶として、人を導く姿に憧れを持ってはいただろうが、それを目

標にすることはなかっただろう。　まして、自分が倒した魔物の死後の姿を落ち葉で隠すという、情けをかけることは間違いなくなかった。

「そうですね。　メルエは凄いということは私もリーシャさんも、そして一番カミュ様が知っています。　でも、それは、メルエが自分に自信を持てるぐらい練習を重ねて行った結果だと思います。」

「・・・・・・・・・練習・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・」

「ふふふ。　私も嫌ですよ。　リーシャさんは私を『鬼』と言っていましたが、鍛練の時のリーシャさんは『悪魔』ですよ。　それこそ『魔王』の様です。」

サラの言葉にメルエの子供らしい答えが返ってくる。
それがサラには可笑しく、思わず軽口が出てしまう。

「　あっ！？　今言ったことはリーシャさんに言っては駄目ですよ。
私とメルエの秘密にしていてくださいね。」

「・・・・・・・・・」

「ほ、本当に言っては駄目ですよ。」

「・・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・・・」

自分の言った軽口の重大さに気が付いたサラは、メルエに口止めをしようとするが、返ってきたのは、無言の視線であり、更にサラは慌ててしまう。
念を押すように枯れ木を集めることを中断してメルエを見るサラに、ようやくメルエの首が縦に振られた。

「と、とにかく、練習や鍛練は私も嫌ですが、そのままでは私など何の役にも立たなくなってしまいますからね。」

自嘲気味に笑うサラは、ようやく拾い終わった枯れ木を両腕に抱え、立ち上がる。
顔を上げたサラは、いつの間にかすぐ横に立っていたメルエに驚いた。
メルエは何かを宿した瞳でサラを見上げている。

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・護った・・・・・」

「えっ!?　は、はい。　本当にメルエを護ることができて良かったです。」

「・・・・・・ありが・・・・とう・・・・・・・・」

小さくお辞儀をするように頭を下げるメルエの姿にサラは目頭が熱くなる。

自分はメルエを護れたのだ。

アリアハンを出た時には、戦闘などできなかった。

回復呪文が使えるだけ。

手に持つ武器も＞聖なるナイフ＜のみであったし、その使い方も知らなかった。

そんな自分が、大切な仲間であり妹の様な存在であるメルエを護ることができた。

それが、サラにとってどれほど自信になることだったであろう。

「・・・・・・メルエも・・・・・・・・サラ・・・・・・・・護る・・・・・」

「うっうぅ・・・・・は、はい！　その時はお願いします。」

メルエの言葉に、サラの涙腺が緩んだ。

どこか自分に線を引いている様子すらあったメルエが、自分を護ることを宣言したのだ。

それは、サラにとってこの上ない喜びであり、そして自分がここまでしてきたことが間違いではなかったことを証明するもの。

それがサラには嬉しかった。

「さ、さあ、メルエ。　戻りましょう。　余り遅くなっては、リーシャさんとカミュ様に心配をかけてしまいますよ。」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

二人は、両手に抱えきれない程の枯れ木を抱え、野営地へと向かって歩き出す。
サラは上機嫌で歩くが、その横を歩くメルエの表情は浮かない物だった。

そんな経緯があったため、メルエが悩んでいることがサラには解っていたのだ。
本来メルエの様な年頃の少女が悩む悩みではない。

それでも、メルエはそれに対して真っ直ぐ向き合おうとしているのだとサラは気付いていた。　ならば、ここではもう自分が口を挟むことが許されないのだということ。

「・・・ん？　メルエ、どうした？　果物はもう食べてもいいぞ？」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

取って来たうさぎや魚を調理し終えたリーシャが、いつもと違い果物に手を伸ばしていないメルエを不思議に思い声をかけるが、返ってきたのは気のない返事であった。

その後も、終始元気のないメルエをリーシャが気遣いながらも食事は終わり、聖水の効力がよく効いていることから、皆が眠りにつくことにした。

「・・・・・・・またか・・・・・・・・」

森の木々も寝静まる真夜中。
カミュは目を覚ます。

皆が眠れるといえども、火を消す訳にはいかないため、カミュやリーシャが何度か薪を補充しながら朝を迎えるのだ。

そして薪を火にくべて安定させた後、周囲を見渡すと案の定、一人足りない。
いつも野営の度に夜中に居なくなってしまう少女がいないのだ。

「・・・ん？　カミュ、どうした・・・・？」

「・・・また、メルエがいない・・・」

カミュの声に反応し、身体を起こしたリーシャの問いかけに、すでに立ち上がり剣を背負ったカミュが答える。
その答えを聞いたリーシャも立ち上がり、頭の傍に置いておいた剣を腰に差した。

「・・・・・別方向を探すか・・・・・？」

「・・・・・いや、俺やアンタの横は通っていないはずだ。　いくらメルエの気配が探れないとはいえ、傍を通れば流石に気付く。」

カミュの言う通り、メルエの動きは夜中にカミュやリーシャですら感じる事が出来ない。
しかし、それでも傍を通っていれば、何度となく野営を行っている二人が気付かない訳はないのだ。

「・・・・ならば、あっちの方角か・・・・」

リーシャが指し示す方角はメルエが眠っていた方角。
そして、それは夕刻にサラとメルエの二人で薪拾いに行った方角だった。

メルエはすぐに見つかった。
リーシャが差した方角へ少し歩くと、小さく呟くような声が聞こえてきたのだ。

「・・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・・・」

メルエを見つけたリーシャが駆け寄ろうとしたところをカミュの手が制した。
不満そうにカミュを見上げるリーシャであったが、もう一度メルエを見たリーシャは、その足を止めるしかなかった。
何度も何度も小さく詠唱を呟き、右手に持った＞魔道師の杖＜を目の前の木に向かって振るメルエの姿はリーシャでも声をかけることをためらう程のものだったのだ。

「・・・・・・・・メラ・・・・・・・・・・」

詠唱する呪文を変えては杖を振る。
しかし、結果は変わらない。

杖は何の反応も示さず、メルエの詠唱は霧散していく。
何度も何度も詠唱しては杖を振り、肩を落としては詠唱する。
リーシャがそのメルエの姿を見始めて、何度目だったであろうか。
詠唱と同時に振った杖が何の反応も示さないことに苛立ったメルエが、杖を投げ捨てた。

「・・・・・・うぅぅ・・・・・・・・うっ・・・うっ・・・・・・・・」

「メ、！！！」

泣き出してしまったメルエの傍に駆け寄ろうとしたリーシャを再びカミュの手が制した。
今度こそ『何故だ!?』という思いが込められた視線でリーシャはカミュを睨みつけるが、カミュは手を挙げたままメルエを見ているだけだった。
仕方なくリーシャはメルエに視線を戻す。

しばらく嗚咽を溢していたメルエではあったが、再び投げ捨てた杖に歩み寄り拾い上げた。
そして、呪文の詠唱を始める。
何度も何度も。
自分を護ってくれるカミュやリーシャ、そしてサラに対して胸を張れるように。
いつでも自分が彼らに笑顔を向けられるために。

それから、どれくらいの時間が経ったであろうか。
リーシャがもはや数えることを止めてしまうほどにメルエは杖を振っていた。
それでも一度もメルエの持つ＞魔道師の杖＜が反応することはなく、ついにはメルエ自身が座り込んでしまう。
精も根も尽き果てたかのように、メルエはそのまま横に倒れた。

「メ、メルエ！！」

流石に今度はカミュが制することはなかった。
リーシャに続いてカミュもメルエの傍へと駆け寄って行く。

リーシャがメルエの傍に辿り着くと、杖を握ったまま地面に倒れ、小さな寝息を立てるメルエの姿があった。
その姿にリーシャは安堵の溜息を洩らし、カミュもまた胸を撫で下ろしているような様子を見せる。

「・・・・カミュ・・・・・」

「随分、魔法力を消費しているな・・・・・メルエの身体から魔法力が出ていることは間違いないんだが・・・・・・・メルエは俺が運ぶ。」

メルエの様子を見て何かを溢したカミュであったが、眠っているメルエを起こさないように抱きかかえ、来た道を引き返し始める。
リーシャもそれ以上の追及をカミュにぶつけることはなく、カミュの後ろについて野営地へと戻って行った。

何故メルエが急にこのようなことをし始めたのかはリーシャには解らない。
もしかすると、昼間の戦闘が影響しているかもしれないし、『孤独』を感じたメルエがとある道を歩み始めてしまったのかもしれない。

『孤独』を拭い去るために『強さ』を求めてしまったリーシャの様に。

それは、カミュの腕の中で小さな寝息を立てる少女にしか分からないもの。

彼女が何をどう考え、どこへ向かって行くのか。

彼女が歩む道の先に『幸せ』という光があることをリーシャは祈ることしかできなかった。

イシス地方？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

やっとアッサラームに向かう一行です。
長々と書いてしまい、皆様にも歯がゆい想いなどをさせてしまっているのではないかと思っていますが、こんなペースでこれからも進んでいくと思います。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

戦闘？【イシス地方】（前書き）

たくさんの方々に読んでもらい、本当に嬉しいです。

今回はかなり短めです。
アッサラームはかなり長くなると思いますので、その前哨ということで。

出来ますれば、皆様の頭の中にドラクエ？のフィールド音楽である「冒険の旅」を鳴らしながら読んで頂けると嬉しいです。

戦闘？【イシス地方】

カミュを先頭に歩き出す一行。
カミュとリーシャに挟まれるようにサラとその手を握るメルエが歩く。

＞キャットフライ＜と対したあの夜が明け、すでに一日歩き続けたがまだ＞アッサラーム＜は見えてこない。
もう一晩を野宿で明かし、一行は陽が昇ると同時に歩き出したのだ。

メルエはその晩も、皆が眠りについた後に一人で魔法の練習を行っていた。
あらかじめ予想していたカミュとリーシャは、メルエが起きだすのを確認した後、メルエの様子を見に行っている。

魔法が思うように使えない今のメルエは、魔物が現れた時の対処が危うい。
故にカミュとリーシャが常に傍に控え、いざという時にすぐに行動できるようにしていた。

何度も何度も杖を振り、肩を落とすメルエは、カミュの瞳にはどう映っていたのであろうか。　リーシャもしかり。

自身の魔法力が枯渇するまでそれを繰り返し、強制的な眠りにつくメルエ。

朝起きると何故か皆と一緒に寝ていることに不思議そうに首を傾げてはいたが、聡いメルエはすでに気が付いていたのだろう。

自分が最も頼りにする者達が見守ってくれていることを。

故にその日も意識がなくなるまで杖を振っていた。

そんなメルエも今はサラの手を握りながら、しっかりと前を向いて歩いている。

広く広大な大地を真っ直ぐと見据え、まるで未来へと続く自身の道を遠く見るように。

メルエの瞳に自信とは違う何かが宿り始めていることは、カミュもリーシャも気が付いていた。　リーシャはそれが不安要素になってはいるが、カミュは違っていた。

今まで、無邪気な子供の様に魔法を使い、魔物の命を奪い、人の生命すらも脅かしていたが、今のメルエは違う。

自身の才能だけでできていたものが出来なくなった。

その事がメルエを変えつつある。

遊び半分で使用できたものが、頭で考え、感じ取らなければいけないものとなり、メルエは必死に何かを考え、結論を出そうとしている。

それが、カミュには頭上に輝く太陽の様に眩しく見えていたのだ。

それぞれの想いを持ち、個々に輝き始めた内面を解き放ちながら一行は南へと歩き進める。

「カミュ！」

「・・・・囲まれたか・・・・・」

後方を歩くリーシャの声に、周囲を見渡したカミュが舌打ち気味に呟く。
森を横目に歩いていた一行であったが、その森から不穏な気配が近付いてきていた。

「・・・カミュ様・・・」

「サラ！　サラはカミュの方へ、メルエは私の方へ来い！」

メルエとサラを背に護るように剣を抜いたカミュは、森から目を離さない。
リーシャが後方からサラとメルエに指示を出し、その指示にメルエがリーシャの下に移動した。

「・・・カミュ様・・・」

「・・・来たぞ・・・」

カミュの声と共に森から現れたのは、予想通り敵意を剥き出しにした魔物だった。
その体躯は大きくカミュやリーシャの倍近くもある。
それが三体。

「・・・・・???・・・・・」

「さ、猿なのか・・・・・」

その魔物の風貌を見て、メルエは首をかしげ、リーシャはいつものようにただ驚いている。
この女性は、動物と魔物の境界線が曖昧なのかもしれない。

「グォォォォォォォォォォォォォ！！」

剣を構えながらも呆然とする一行を前にして、一体の魔物が両手を広げ、自身の胸を叩きながら雄たけびを上げる。　それは威嚇を込

めたもの。
その雄たけびを合図に三体の魔物は一斉にカミュに向かってきた。

「カミュ！！」

三体の巨大な猿がカミュへ向かって、メルエの身体並みに大きな拳を振り上げる。
その魔物の行動に反応したリーシャが叫び声を上げた。

その声に反応したのか、それとも最初から攻撃を予想していたのか、カミュは魔物の拳を紙一重で避け、その腕に＞鋼鉄の剣＜を振るった。

ガキ――――――――ン

「なっ！？」

しかし、腕を斬り捨てるつもりで放ったカミュの渾身の一撃は、あり得ない音と共に弾かれた。　それも、魔物の身体にではなく、その身体を覆っている体毛にだ。

＞暴れザル＜
イシス地方に生息する巨大な猿。
人間等に遭遇すると、その巨体を生かした力任せの攻撃で暴れ回る

ことから、この地方ではそう呼ばれている魔物である。
特出した特技がある訳ではないが、その力は人間を遥かに超えており、まさしく暴力と言っても過言ではない程の力を有する。
力任せの攻撃の方が目立つが、その巨大な体躯を覆う体毛は非常に堅く、並みの武器では傷一つ付ける事が出来ない程の強度を誇る。

「カミュ様、下がってください！」

瞬時に飛び退いたカミュに、後ろで詠唱の構えに入ったサラから声が飛ぶ。
カミュに腕を攻撃された＞暴れザル＜はその腕を自らの舌で舐め取った。
体毛により弾かれたようになったカミュの剣ではあったが、その体躯に傷は付けていたようだ。
しかし、それが今の状況では仇となる。

「グォォォォォォォォォォォ！！」

傷つけられた怒りで再度雄たけびを上げた＞暴れザル＜は、距離を取ったカミュに突進していく。
そこでサラの詠唱が完成した。

「バギ！」

＞暴れザル＜に向けられたサラの右腕から真空と化した風が巻き起こる。
カミュに向かって突進してきた＞暴れザル＜はその魔法をまともに受けることになった。

一行の誰もが仕留めたと感じた。
身体を覆う体毛が切り刻まれ、＞暴れザル＜の体液が飛び散ったのを見た故に。

「グォォォォォォォォォォォォ！！」

しかし、＞バギ＜をまともに受けたはずの＞暴れザル＜は、ただその怒りを増しただけだった。
確かに体毛はあちこちが切られているが、それは人間でいう散髪をした程度。
身体も切られ体液が滲んではいるが、それは切り傷があちこちにできた程度だったのだ。

「ぐおっ！」

「カミュ様！！」

怒りに身を任せてサラ目掛けて振り抜かれた＞暴れザル＜の拳は、咄嗟に割り込んできたカミュの＞うろこの盾＜に直撃する。

盾でも勢いを殺しきれず、カミュはくぐもった声を上げて吹き飛んだ。

カミュが自分を護るために割り込んできた。
この驚愕の事実を認識することもできない程、サラは困惑に陥る。
ここまで、これ程魔物に苦戦した覚えがない。
リーシャやカミュに護られながら戦ってきたといえども、サラも一人で魔物を倒せるようになってきていたのだ。

そんなサラの胸に生まれかけていた小さな自信が揺らぎ始める。
カミュですら歯が立たない。
自分の持つ唯一の攻撃魔法も通用しないのであれば、どうすればいいのだ・・・・

「ギラ」

そんなサラの困惑を余所に、カミュが吹き飛ばされながらも、右腕を＞暴れザル＜に突きつけ、灼熱呪文を詠唱する。
その詠唱と共に、カミュの右腕から熱風が巻き起こり、着弾した＞暴れザル＜の足元を炎で満たしていった。

「はぁぁぁぁぁ！！」

足元から立ち上る炎に巻かれ、暴れるように身を捩る＞暴れザル＜にリーシャが剣を突き入れる。　リーシャの後ろに居たメルエもサラの横に移動をしてきていた。

しかし、突き入れたリーシャの剣もまた、雄たけびを上げた＞暴れザル＜の左腕によって弾き返された。
体毛が焼け、肌が露出している部分もあるが、それでもまだ＞暴れザル＜は生きている。
カミュの＞ギラ＜の灼熱も、この魔物の体毛を焼くのが精いっぱいであったのだ。
そして、その隙をついたリーシャの剣も弾かれた。

『万策尽きる』

ロマリアから出て、まだ数日しか経っていない。
新たな大陸に足を踏み入れた一行は、目的の町に着く前に大きな試練と相対することとなったのだ。

「・・・・・・・・ギラ・・・・・・・・」

だが、絶望色に彩られた表情を浮かべる一行の中で、まだ諦めない者が一人。
それは、最も幼き少女。
結びつけられた紐を解き、その杖を大きく掲げた後、呟くような詠唱と共に振り下ろす。

先程、カミュが唱えた呪文と同じもの。
しかし、術者が違えば、その威力も異なる。
メルエとカミュでは、本来の魔法使いとしての質が違うのだ。

もし、このタイミングでメルエの魔法が＞暴れザル＜に直撃していれば、形勢は逆転したかもしれない。

しかし、無情にもメルエの杖の先から熱風が巻き起こることはなかった。

「・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・」

再び杖を振るメルエ。
しかし、杖は何の反応も示さない。
意を決したように、メルエは杖を投げ捨て右手を突き出した。

しかし、その数度の無駄となってしまった詠唱の時間は、虚を突かれた＞暴れザル＜に態勢を立て直す時間を与えただけとなってしまった。
残る二体の＞暴れザル＜が自分達に杖を向けていた少女に向かって突進を始める。
そして、杖を捨てたメルエが右手を掲げた時、その内の一体がもう目の前に迫っていたのだ。

「メルエ――――――!!」

「!!」

間に合わない。
カミュもサラもそう思った。
巨大な猿の巨大な拳が唸りを上げてメルエに振り抜かれる。

ドゴン！！

凄まじい衝撃音を上げ、＞暴れザル＜の拳は何かを吹き飛ばした。
吹き飛ばされたものは、地面を数度跳ね、回転しながら転がり、そして動かなくなった。

「・・・・・・・・・・あ・・・あ・・・・・・・・・」

それは、メルエではなかった。
メルエは咄嗟に駆けてきたリーシャによって押され、尻もちをついていた。

そう。
メルエの遥か向こうに転がり、今地面に伏したまま動かなくなったのは、メルエを護ると約束していたアリアハン屈指の女性戦士。
メルエの姉であり、母の様なリーシャだったのだ。

余りの出来事に、メルエは呆然と動かなくなったリーシャに視線を向け、うわ言の様な言葉を口にするだけ。
それは、未だ拳を握る＞暴れザル＜を前にして、するべき行動ではない。

「　グォォォォォォォォォォォォ！！　」

雄たけびと共に両拳を合わせ、＞暴れザル＜がそれをメルエ目掛けて振り下ろそうとハンマーの様に高々と掲げる。
リーシャが護った命は風前の灯だった。

「・・・・・・・・・・・リー・・・・・シャ・・・・・・・・・・・」

うわ言の様に何度もその名を口にするメルエに、今自分が置かれている状況を把握することはできない。
＞ギラ＜によって焼かれた怒りを露わにする一体に苦戦中のカミュにメルエに近寄る時間は与えられなかった。

「ラリホー！！」

カミュが、＞暴れザル＜の攻撃を避けながら、その顔を珍しく歪めたその時、カミュの後方に居たパーティー内最強の補助魔法使いの声が響いた。

カミュが声の方向を振り返ると、そこには両手をメルエの傍にいる二体の＞暴れザル＜に突き出したサラの姿。
リーシャが吹き飛ばされ、動かなくなった場面でようやく混乱から解き放たれ、自分のやるべきことを理解した僧侶が立っていた。

「グォォォ・・・・・・・・・・ＺＺＺＺＺＺＺＺＺ・・・・・・」

メルエに向かって両腕を天高く掲げていた＞暴れザル＜は、そのまま仰向けに倒れて行く。
もう一体も、メルエへと駆け寄ろうとしていた態勢のまま、前のめりに倒れた。
そのまま、鼾なのか鳴き声なのか分からない音を立て、二体の魔物は眠りについたのだ。

＞ラリホー＜
教会に安置されている経典に記されている補助魔法の一つ。
生物の脳内に干渉し、強烈な睡魔を与える魔法。
おばけきのこの＞甘い息＜と同じ効力を持ち、その魔法で眠りについた者は、多少の衝撃では目を覚まさなくなる。
魔物に対して力で劣る人間が、本来その場から逃げ去る為に使う魔法とも云われているが、術者と被術者との力量がかけ離れていると効果が薄くなるため、実際は使いどころが難しい魔法とも云われていた。

「・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・・・」

自分の目の前から脅威がなくなったメルエは、吹き飛ばされたリーシャの傍へと駆け寄って行く。　メルエの目には涙が浮かび、それは母を求めて駆け寄る子供の様な姿であった。
駆け寄り、メルエが見たリーシャの姿は、頭から若干の血を流し、青白い顔で横たわる痛々しいものだった。

「・・・・息はしていますね・・・・・・よかった・・・・・頭の傷も、転がった時に擦れたもの・・・・・・気を失っていますが、大丈夫です。」

今にもリーシャに抱きつき泣き出しそうなメルエの横から、先程魔物を眠りにつかせたサラがリーシャの状態を落ち着いて診察する。

もし、メルエがいなかったら、この状況に混乱し、何をして良いか分からなく、あたふたとしていたのはサラであったろう。

しかし、リーシャが吹き飛ばされ、それを呆然と見ているメルエを見た時、サラの意識は覚醒された。

「・・・・・・・リーシャ・・・・・・・」

青白い顔で横たわり、見える傷にサラの＞ホイミ＜を受けているリーシャの姿を見るメルエの目つきが変化していく。

俯いているため、それがサラには解らなかった。

「・・・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・・こっち・・・・・・・・・」

リーシャを背に立ちあがったメルエは、未だに奮闘中のカミュへ呼びかけるが、その声は呟くように小さく、隣にいるサラにしか聞こ

えないもの。

「　カミュ様！　隙を見て、こっちに来て下さい！　」

メルエの意図が何かも分からず、ただ、メルエの身体を覆う憶えのある気配にサラはカミュへ下がるように指示を出す。

その声に『無茶を言うな』とでも言いたげにちらりと視線を動かしたカミュもまた、メルエの纏う気配に何かを察し、目の前で拳を振るう＞暴れザル＜に向けて＞メラ＜を放つ。

＞メラ＜の火球に若干の怯みを見せた＞暴れザル＜の隙をついて、メルエ達の下へと戻った。

「・・・・そいつは大丈夫なのか・・・・・？」

「あっ、は、はい。　気を失っていますが、骨が折れた様子もありませんので、大丈夫だと思います。」

「・・・・なんて頑丈な・・・・・・」

戻ってきて早々にリーシャの心配をするカミュに、サラは驚いた。

しかし、サラの返答に失礼極まりない回答をするカミュに、場の雰囲気にそぐわない笑みが零れる。

「・・・・・・・・・・」

その間も、メルエは自分との格闘を演じていた。
メルエの瞳にある物は、『怒り』ではない炎。
それは『決意』。

そして、メルエを取り巻く風。
それは『魔力』。

メルエは、久々に見るそれをごく自然に受け入れていた。
カミュと初めて会った晩に見た風。
カミュが『魔力の流れ』と言っていたものが、それ以来メルエには見えていなかった。

自分が契約をする時も、そして詠唱を行い魔法を行使する時も。
ただ漠然と契約を行い、意識せずとも魔法が行使される。
それが当たり前だとメルエは思っていた。

しかし、それは大きな間違いであった。
メルエの内にある『魔法力』。
それを『魔力』として、魔法の行使の為に使うには、その流れを肌で感じ支配しなければいけない。
今、メルエは初めてそれを感じているのだ。

「・・・・・・メ、メルエ・・・・・・？」

急激に変わったメルエの雰囲気に、先程笑顔を溢したサラの表情が不安気に変化する。
そのサラの声にも気がつかない様子で、メルエの意識は自分の内へと入って行った。

「　！！　」

おもむろに杖を掲げ、カミュの＞メラ＜から立ち直り、怒りを露わにする＞暴れザル＜へと照準を合わせる。
メルエは自分の内から腕を通る『魔力』を感じていた。
今までは、ただ杖を振り詠唱するだけ。
故に、詠唱と共にメルエの身体の内から発生した『魔力』は腕を通るが、メルエの持つ杖へとは渡らず、霧散していたのだ。

腕から流れる『魔力』を杖の先へと流しこむようにメルエは意識を強くする。
視線は＞暴れザル＜から外さずに。
自分がこれから口にする呪文に必要な魔力ははっきりとは分からない。
だが、メルエには説明はつかないまでも、その量の調節はここまで無意識にしてきていたのだ。

一度は暴走してしまった『魔力』。
ならばあの時の感覚より少なくすればよい。
メルエは教育というものを施されていない。
しかし、決して生来頭が悪い訳ではないのだ。
いや、むしろ『かしこさ』で言えば、サラと同等かそれ以上のものを持っているはずである。

「・・・・・・・・・・・・ベギラマ・・・・・・・・・・・・・・」

杖の先に行き渡った『魔力』を確認し、最後の詠唱という合図と共にそれを解放する。
今まで、メルエの詠唱に何の反応も示してこなかった＞魔道師の杖＜は、まさに今この時を待っていたかのように、持ち主の魔力を魔法という形で解放した。

凄まじいまでの熱風。
それは、メルエの後方に控えていたカミュやサラの髪の毛すらも焦がすのではないかと感じる程の熱量だった。

それがメルエの持つ＞魔道師の杖＜から迸り、こちらに向かって駆けだした＞暴れザル＜に向かって着弾し、先程のカミュの＞ギラ＜とは比べ物にならない程の炎を生み出す。
それは、まさしく炎の海。
＞西の洞窟＜で見た時よりも大きな赤い海。

「　グギャオォォォォォォォ！！　」

カミュですら初めて見るようなその凄まじいまでの炎に包みこまれた＞暴れザル＜は、まるで大海原の波にさらわれていくように、炎の中に消えて行く。

「・・・・・・す、すごい・・・・・・」

「・・・・・・・・」

目の前に広げられた凄まじい光景に、カミュもサラも言葉を失っていた。
魔法の行使が終わっても尚、杖を下げないメルエの後ろ姿は、どこか大きく見える。

炎の海が風にさらわれ引いて行ったその後には、体毛も焼かれ、丸焦げになり絶命している一体の＞暴れザル＜であった肉塊が転がっていた。
その酷い姿にサラは再び言葉を失う。

サラは、先日メルエに言ったように、メルエの魔法の才能を疑ったことなど一度もない。
だが、逆にこれ程の才能があることも気がついてはいなかった。
恐ろしくなる程の才能。
実際、現存する魔法使いが持つ灼熱系の最強呪文は＞ベギラマ＜と言っても過言ではない。
古の賢者が残した魔法を知らない限り、今メルエが行使した呪文が『人』にとって最強の灼熱呪文なのだ。

それをこの歳で行使するメルエ。
そして、おそらくサラがアリアハン宮廷で見かけたことのある、どの魔法使いよりも『魔力』を持ち、その魔法の威力も桁違いであるだろう。
現に、『勇者』として世に送り出されたカミュが行使する魔法より

格段上の威力をメルエは持っているのだ。

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

「・・・・・メルエ・・・・・もういい。」

一体の＞暴れザル＜を倒したメルエは、その杖を眠りについたままのもう二体に向けて詠唱を始めていた。
それを見たカミュが止めに入ると、先程までの雰囲気とは違う、いつものメルエが若干頬を膨らませて振り返った。

「・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・ぶった・・・・・・・・・」

眠った魔物に対して攻撃する理由がリーシャの仇撃ちなのだ。
そんなメルエにサラの表情はやっと緩んだ。

「・・・メルエ・・・気持ちは解りますが、今はリーシャさんを安全な場所で横にすることが一番大事です。」

「　！！　」

メルエへとかけたサラの言葉に、今度はカミュがその表情を変化させる。
それは、驚愕。
目を見開き、今にも叫び出しそうなほど口を開けるカミュに、サラは少し眉をひそめた。

「な、なんでしょうか・・・・カミュ様・・・・？」

「い、いや。　何でもない。　その戦士は俺が背負おう。」

眉をひそめ、睨むようにカミュを見るサラに、カミュは表情を戻してリーシャを背負う準備をする。

カミュが驚くのも無理はない。
眠っているとはいえ、＞暴れザル＜はまだ生きているのだ。
それを見逃すことを良しとするばかりか、攻撃を主張するメルエを抑える発言をしたのだ。

それは、魔物への『復讐』に凝り固まっていたサラの心の変化以外何物でもない。
今、魔物への『復讐』よりも、仲間の身の安全の方が優先されるということ。
それを彼女は別段、苦渋の決断という訳でもなく、小さな笑顔を作りながらメルエに告げていたのだ。

「・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・痛い・・・・・・・・？」

「傷は全て直しましたから、後は目を覚ますのを待つだけだと思いますよ。　その後でリーシャさん自身から身体の具合を聞くしかなさそうですね。」

リーシャを背負ったカミュの後ろを、手を繋いだ姉妹の様にサラとメルエが続いて行く。
サラを見上げて質問するメルエの顔に先程までの雰囲気は欠片もない。
自分が魔法を使えたことの喜びよりも、今はリーシャの身を案じるメルエにサラは安堵に近い想いを持つことになる。

カミュは、＞暴れザル＜が出てきた森から少し離れた森の入口の木陰にリーシャを寝かせ、一行はそこで休憩を取ることにした。

リーシャは、陽が落ちる頃まで目を覚まさなかった。
日ごろの疲れが溜まっていたのか、寝息は安らかであったが、一向

に目を覚まさないリーシャにメルエの不安は募り、メルエはリーシャの傍を片時も離れようとはしなかった。

サラが近くの小川から汲んで来た水で布を冷やしリーシャの頭に乗せるのを不思議そうに見ていたメルエであったが、その行為を自分がすると主張し始め、それからは、気温で布が温くなると水で濡らし直しリーシャの頭に乗せるのはメルエの仕事となっていた。

「・・・・一度＞ルーラ＜でロマリアまで戻って、宿をとった方がいいかもしれないな・・・・」

陽が傾き始めても目を覚まさないリーシャに、カミュが小さく提案を溢す。

ここまでの道のりを無にしてでもリーシャの身を案じているカミュにサラは驚くが、カミュにしてみれば、このままここに置いておくわけにはいかない以上、そうするしか方法がないということだったのであろう。

目を覚まさないリーシャを横目に、陰ってきた陽の光を感じたカミュは、野営の準備の為、食料と薪となる枯れ木を探しに森の奥へと入って行った。

メルエが何度目かも憶えていない布の交換をしている最中に、ようやく件（くだん）の女性が目を覚ます。

「・・・う、ううん・・・」

「・・・・・・リーシャ！・・・・・・・・」

リーシャの声に布を水に入れていたメルエが視線を向けると、そこにはゆっくりと目を開けるリーシャが映る。
それを見たメルエは、水から勢いよく手を取り出し、身を起こしかけたリーシャへとしがみ付く様に抱きついた。

「うわっ！　な、なんだ、メルエ。　驚かせるな。」

「・・・・・・・リーシャ・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・」

勢いよく抱きついてきたメルエを窘めるが、リーシャの声が耳に入る様子もなく、リーシャの名を何度も口にしながら涙を流すメルエに、リーシャは戸惑ってしまった。

「あっ！？　リーシャさん！　良かったです・・・・・・・なかなか目を覚まさないので、心配しました。」

「サラか・・・・・ここは・・・・・・」

メルエの声を聞き、笑顔を向けながらこちらに歩いてくるサラを目にし、リーシャは自分が何故こういう状況にいるのかを思い出そうと頭を捻る。
しかし、リーシャが思い当たるよりも早くに正解はサラの口から出た。

「メルエを庇って、あの大きな猿の魔物の攻撃を受けてしまったリーシャさんは、そのまま気を失ってしまって・・・・・」

「な、何!?　私は気を失っていたのか!?」

サラが口にした事実は、リーシャの戦士としてのプライドを大いに傷つけるものだった。
確かにメルエを庇い、無防備な状況で魔物の攻撃を受けたとしても、それで気を失い、しかも丸半日以上も眠りこけていたなど、恥じ以外何物でもない。

「・・・・・リーシャ・・・・・・・・痛い・・・・・・・?」

「　はっ!?　そ、そうです。　どこか痛む所や、おかしいところはありませんか?　一応外傷は直しましたし、念のため身体全体にホイミをかけておきましたけれども。」

リーシャの答えに、リーシャの考えていることが何となく理解できたサラは何と声をかけるべきか悩んでいたが、メルエの直接的な問いに、本来真っ先に尋ねるべき問いを思い出し、慌てたように声をかける。

「・・・いや・・・少しふらつくぐらいで、別段おかしなところもなさそうだ。　しかし、失神したとは・・・・・・」

サラの問いかけにしっかりと答えるが、その後に再び苦々しく表情を顰めて呟きを洩らす。
その表情がリーシャの考えていることを如実に表していた。

「・・・・・・リーシャ・・・・・・・・ありが・・・とう・・・・・・」

「ん？　いや、メルエ、いいんだ。　メルエが無事でよかった。」

リーシャに抱きついたまま、その胸で溢したメルエの言葉に、今まで歪んでいたリーシャの表情も暖かなものに変わって行く。
既に＞とんがり帽子＜を取っているメルエの明るい茶色の髪を、愛おしそうに撫でるリーシャの表情は母そのもの。

そんな言葉が喉まで出かかったサラであったが、口にしてしまえば暖かな笑顔になっているリーシャの顔を再び歪ませてしまうと思い、

口をつぐんだ。

「しかし、あの後、どうなったんだ？　カミュが魔物を倒したのか？」

「いえ、魔物を倒したのは、メルエです。　メルエが杖から＞ベギラマ＜を唱えて魔物を焼きました。」

「　何!?　メルエ！　＞ベギラマ＜を使ったのか!?　大丈夫か!?　どこか痛むところはないか!?　」

サラが話す驚愕の真実も、＞西の洞窟＜でメルエの被害を見ているリーシャには別の恐ろしさを思い出させるものとなる。

メルエが＞魔道師の杖＜から魔法を使えたという事実よりも、魔法の反動によるメルエの身体を心配するリーシャに、サラの顔に濃い笑顔が浮かぶ。
しかし、それは幼いメルエにとっては不満だった。

「・・・・・・・・・・魔法・・・・・・・・・・出た・・・・・・・・・・」

「　ふふふ　」

不満そうに涙で濡れた瞳でリーシャを見上げ、頬を膨らますメルエ。
そのメルエの姿に、サラの口から優しい笑い声が漏れる。

「ん？　ああ、そうか！？　良かったな、メルエ。　では、メルエが気を失った私を護ってくれたのだな。　こちらこそ、ありがとう。」

「・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・」

メルエの不満顔に、ようやくメルエの快挙に気が付いたリーシャは、その快挙を喜び、そして丁寧にお礼を言う。
最も認めてほしかった人物からの評価に、メルエの瞳から涙がこぼれ、再びリーシャの胸へと顔を埋めてしまう。

「その後、気を失ったリーシャさんをカミュ様が背負ってここまで運んで、今に至るわけです。」

「　何！？　私はカミュに運ばれたのか！？　」

サラの言葉にリーシャの表情が再度歪む。
それは羞恥からなのか、それとも屈辱からなのかはサラには判断できなかった。

「・・・・しかし、私もまだまだだな。　魔物の攻撃で気を失うとは・・・・こんな無様な状態ではとてもじゃないが、『魔王討伐』など夢物語になってしまう。」

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・とう・・・ばつ・・・・・・？」

悔しそうに歪めたリーシャの言葉に、顔を上げたメルエが不思議そうに首を傾げる。
自分の溢した言葉が生み出したメルエの行動に、リーシャもまた不思議そうにメルエを見た。

「ん？　メルエ、なんだそれは？　何故私が討伐される？」

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・ま・・おう・・・・・？」

「メ、メルエ！　そ、それは言わない約束ですよ！」

疑問に思ったリーシャの問いに反応したメルエの答えは、サラの顔色を失わせるのに効果絶大だった。　それは、あの夜メルエに口止めしたはずの軽口。
メルエもはっきりと頷いたはずなのに・・・・・
そんなサラの心中を余所に、ゆっくりとリーシャの視線がサラへと移って行く。

「・・・・・どういうことだ・・・・・・サラ・・・・・？」

「い、いえ。　ど、どうして私に聞くのですか？　言ったのはメルエですよ！」

問いただす為に、低く、地獄の底から響く音の様な声をリーシャは出し、その恐怖からサラは先程メルエに言ってしまった自分の失言を忘れてしまっている。

「・・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・ごめん・・・・・なさい・・・・・」

「　今更遅いですよ！　」

サラとの約束を思い出し、頭を下げるメルエではあったが、それは既に遅すぎた。
ゆっくり立ち上がるリーシャに足が竦みながらも、メルエに叫ぶサラの声は涙声になっていた。

その後、食料と薪を拾って帰って来たカミュが見たものは、頭を押さえながら蹲るサラと、その横で先程まで眠っていたはずの人間が仁王立ちしているという奇妙な光景だった。

戦闘？【イシス地方】（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

やはり、書く身としても、この量だとどこか物足りませんね。

おそらく次話でアッサラームに到着すると思います。

ご意見、ご感想お待ちしております。

アッサラームの町？（前書き）

最近サクサク話が進みます。
カミュ達一行を書くことがとても楽しいんです。

アッサラームの町？

夜が明け、カミュが取って来た果物を朝食として口に運んだ一行は、再び森を出て南へと歩を進める。

「メルエ！　一人で先に行っては駄目だといっただろう！」

いつもと違う隊列。
メルエを先頭に、それを窘めながら追うリーシャ。
最後尾にはカミュといった、いつもとは逆の順に一行は歩き出していた。

メルエの表情は、地上を照らす太陽のように輝いている。
いつものように自分を窘めながらも優しい笑みを浮かべるリーシャがいることが嬉しい。
青白い顔をして横たわるリーシャを見た時、メルエは呼吸が止まりそうになった。
それ程、今のメルエにとってリーシャという存在は大きくなっているのだ。
それこそ、自分が魔法を使えるようになったという喜びすら忘れる程に。

「カミュ様、少しよろしいでしょうか？」

「・・・・ん・・・・？」

そんなメルエを遠目に見ていたカミュに声がかかる。
少し前を歩いていたサラが振り返り、不安そう表情でカミュを見ていた。

「・・・・メルエは・・・・メルエは・・・・・いったい・・・・・」

「・・・・・・」

サラは立ち止まり、カミュに話し始める。
その内容はカミュには大方予想できてはいたが、サラ自身の中で話すことが整理できていないようだった。

「・・・・あのメルエの魔法の才は、一体何なのでしょうか？」

「・・・・・・・・」

カミュは黙して何も語らない。
それは、サラの言葉を無視しているのではなく、何を言いたいのかを探っているようだった。

「・・・・・メルエは・・・・・『人』なのでしょうか・・・・・」

「・・・・・・・」

遠まわし遠まわしに話してはいたが、サラが言いたいのはこれだった。
メルエの異常な程の魔法の才能。
それは、サラから見て、『人』として規格外なものであった。
サラの言葉の中に、若干の畏怖があることもカミュは気が付いていた。

「・・・・カミュ様・・・・・？」

「・・・・その質問は、あの戦士からも受けたが・・・・・何故、俺に聞くんだ？」

何も言わないカミュに、不安になったサラがカミュの名を口にしたのと同時に、ようやくカミュの口が開いた。
それは、単純な疑問。
サラが求める答えではなかった。

「えっ!?　リーシャさんもですか?　そ、それで、カミュ様は何と答えられたのですか?」

リーシャがサラと同じ疑問を以前にカミュにしていたという事実にサラは驚いた。
以前に同じ疑問を持ったリーシャが、今はメルエとあれ程笑顔を交わしている。
それは、カミュが答えを知っていたからなのではないか?
そう思わずにはいられなかった。

「・・・・答えなどない・・・・・俺もアンタ方と同じように、メルエの素性は知らないからな。」

「で、では、何と!?」

「・・・・『メルエが＞エルフ＜や＞魔物＜であったとしたら、態度を変えるのか?』と聞いた。」

「!!!」

それは、サラの胸に突き刺さる言葉だった。
自分でもどこか考えることを拒否していた言葉。
メルエが『人』でなかったとしたら、自分はどうするのだろう。
その答えは、まだサラの中で結論が出ていなかった。

「・・・・・そ、それで、リーシャさんは何と・・・・・？」

「・・・『＞エルフ＜であろうと＞魔物＜であろうと、メルエは自分の妹だ』ということらしい。」

「・・・・そうですか・・・・・」

サラはどこか納得してしまった。

リーシャなら、まず間違いなくそう答えるだろう。

それは何も、メルエに限ったことではない。

もし、サラがスラム街の出身だとしても、それこそ『魔物』だとしても、リーシャはきっとそう答えてくれるだろう。

しかし、サラはリーシャの様に答える自信がない。

「・・・アンタはメルエが『魔物』だとしたら、『復讐』の対象として、メルエの息の根を止めるのか？　その手でメルエを殺すのか？」

「　そ、それは！？　」

続くカミュの言葉が、サラの胸を鷲掴みにした。

それは、昨日の夜からサラが人知れず悩んでいた内容。

リーシャに作られた頭のこぶを摩りながら考えていた内容だったからだ。

「・・・・そう言えば、アンタに言うのを忘れていた・・・・・」

「えっ!?」

そんな自分の苦悩の中に入り込んでいたサラに、不意討の様にカミュの言葉がかかった。
その内容に『まだ何かあるのか?』とサラは密かに身構える。

「・・・・・ありがとう・・・・・」

「えっ!?」

しかし、カミュから出たものは、人間が相手に感謝の意を表す言葉。
サラは咄嗟のことで、その意味が全く分からない。
カミュが自分に頭を下げているということ自体が驚愕に値するものであるが、その行為が意味することに全く覚えがなかったのだ。

「・・・・アンタがいなければ、あの時メルエは死んでいた。
アンタの咄嗟の判断がメルエの命を救ったんだ。　俺は何もできなかった。　本当に感謝している。」

「あ、あ・・・・・」

サラは理解した。
カミュは、昨日の戦闘での事を言っているのだ。

メルエに向かって行った二体の＞暴れザル＜。
呆然とするメルエに振り上げられた、太い幹のような腕。
その時は何も考えていなかった。
『メルエが死んでしまう』
その想いだけで、サラは呪文を詠唱した。

そう、サラにとっても、メルエが死んでしまうということは耐えられないものなのだ。
それにサラは気が付く。
もし、メルエが＞エルフ＜であったら、もし＞魔物＜であったら、
その想いは変わるのだろうか？

「・・・メルエが何者なのかは解らない。　だが、メルエもきっとアンタには感謝しているだろう。　そして、今度は必死にアンタを護ろうとメルエは動くはずだ。　今のメルエを見ていれば、アンタも解っているんだろう？」

カミュの言葉に、サラの瞳から自然と涙がこぼれていた。
あの森での夜、メルエは確かにはっきりと自分に告げていた。
『サラを護る』と。

きっとカミュの言うとおり、メルエはサラが窮地に陥れば、我が身を挺してサラを護ろうとするだろう。
例え、魔法が暴走し、その身が焼け爛れたとしても。

それは、『予想』ではなく『確信』。
サラにも、メルエがそう行動することは理解できた。
ならば、自分ができることは？
メルエは何者だろうと構わないと今すぐに言えない自分がいる。
しかし、逆にメルエが何者だろうと死んでほしくない、傷ついてほしくないと思う自分もいるのだ。

「・・・すぐに答えを出す必要はない・・・が、アンタがもし、メルエに対して危害を加えようとするならば、俺と敵対することだけは憶えておいてくれ。」

「・・・・カミュ様・・・・」

カミュはメルエが何者であろうと、メルエにつくことを宣言した。
それは初めから解っていた事。
カミュは『魔物』だろうが『エルフ』だろうが、それによって見方を変える人間ではない。
むしろ『人』に対しての見解が一番厳しい人間だ。

自分よりもメルエを取ることは当然だろう。
いや、そうではない。
もしかすると、サラがメルエと対峙した時、カミュやリーシャは悩み、その行為を思い直すように説得を試みるだろう。

それでもサラの意志が変わらないのならば、リーシャは涙を流しながら剣を抜くに違いない。　カミュもまた表情こそ変えないものの、その胸中に複雑な想いを持ってくれるかもしれない。

サラは、厳しい目を向けるカミュを見ながら、何故か自分の胸に湧き上がる予想が間違っていない自信があった。
ならば、後は自分が結論を出すだけだ。

「・・・・胸に刻みつけておきます・・・・いつか・・・・いつか答えを出します。」

「・・・・ああ・・・・」

そこで二人の会話は終わった。

『サラは変わった』とカミュは思う。
アリアハンを出たばかりの時であれば、迷わなかったのかもしれない。
それこそ、強力な魔法を使い、人間離れした才能を見せるメルエに対し、畏怖の念を強め、警戒を怠らなかっただろう。

『カミュは不思議な人だ』とサラは思う。
カミュは『人』だけでなく、どんな種族でも先入観で判断しない。
出会った時、『僧侶は嫌いだ』と言っていた。
それでも、自分の行動を色眼鏡を通して見ている訳ではなかった。
意見の相違、価値観の相違から衝突することはある。
それでも、サラの行動の中で感謝に値するものがあれば、頭を下げ

る。
それは何もサラに対してだけではない。
基本的にカミュの瞳は本質を見る。
それこそが『勇者』と呼ばれる所以なのかもしれない。

「・・・・・・・・・・・はやく・・・・・・・・・・・」

そんな物思いに耽っていると、前を歩いていたメルエが戻ってきて、サラの腕を取って先へと促しに来る。

「あっ!?　は、はい。　行きましょう、メルエ。」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

我に返ったサラの言葉に笑顔で頷いたメルエは、サラの手を握った。
そんなメルエに、サラは胸の内にある想いを抑え、にこやかに歩きだした。

カミュから見れば、サラの中ではすでに答えなど出ているのだ。
彼女が、メルエを切り捨てることなど出来はしない。
後は、その折り合いをどこで着けるかだけなのだ。

それぞれの想いを胸に一行は歩き出す。

メルエの目から見て、何故かサラいつもと違うように思う。
サラの手を握って歩きながら、何気なくサラの方を見ると、西の方からくる海風になびく髪を押えながらもにこやかに前を向いていた。

「・・・・・・・サラ・・・・・・・怒ってる・・・・・・・？」

「えっ！？　何故ですか？」

いつもと違う＝怒っている
という図式はメルエならではであろう。
そんな公式が解らないサラは、唐突にかかったメルエの言葉に驚き、問いかけた。

「・・・・・・・・・昨日・・・・・・・・・」

「昨日・・・？　あっ！？　そ、そうですよ、メルエ。　あれは二人の秘密と言ったではないですか！？」

メルエの中でサラが怒る理由など一つしか思い浮かばない。
メルエが何を言いたいのかが思い当たらなかったサラは、不思議そうに首を傾けた後、思い出したようにメルエへと視線を向ける。
サラのその言葉にびくりと身体を震わせたメルエは、小さく謝罪の言葉を繋いだ。

「　もう！　『秘密』は簡単に話してはいけないのですよ。　今度からは気を付けてくださいね。　」

「・・・・・・ん・・・・・・リーシャ・・・・・あく・・ま・・・・言わない・・・・・」

「　メ、メルエ！　言った傍から口にしては駄目ですよ。　」

秘密という言葉の意味をメルエは知らなかったのかもしれない。
そう思い、サラがメルエにその言葉の持つ意味を教えると、神妙に頷いたメルエがとんでもない言葉を溢す。

「・・・・ほう・・・・『魔王』だけでは飽き足らず、サラは私を『悪魔』呼ばわりしていたのか・・・・・・」

メルエの言葉を抑えようと口を開いたサラの後方から、地獄の使い

のような声が響く。
メルエの方を向いていたサラの顔色が失われていく。
振り返ることは許されない。
それはすなわち『死』に直結しかねないからだ。

「さ、さあ、メルエ。　い、急ぎましょう。　今日中には＞アッサラーム＜につかなければいけませんからね。」

結果、サラは気付かなかったふりをすることに決めた。
メルエの手を握り、そのまま南へと進路を取って早足で歩きだしたのだ。

「ま、待て！」

自分の方を振り返りもしなかったサラの行動に驚いたリーシャは、少しの間呆然とサラを見ていたが、慌てたように追いかけはじめる。
昨日までのどこか重苦しい雰囲気はどこにもなかった。

そんな三人のじゃれあいを、後方からどこか呆れた表情を作ったカミュが見守る。
地図を片手に、周囲の警戒を怠ることはしていないが、メルエの笑顔を見ているカミュの表情は若干柔らかなものへと変わって行った。

「ん？　どうした、メルエ？」

あの後、リーシャから制裁を加えられたサラと共に歩いていたメルエが、不意にリーシャの足にしがみついてきた。

休憩を挟みながら歩き続け、もはや太陽も西の方角に沈み始めた。辺りは暗闇が支配の手を伸ばし始め、森の方角からはフクロウの声が響く。

「・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・」

「ん？　何がだ？　本当にどうした、メルエ？」

リーシャの足にしがみついたメルエは首を横に振るばかり。

歩きだそうとしないメルエに、リーシャはしゃがみ込んでメルエに

視線を合わせた。
何事かと、カミュやリーシャもリーシャの下へと近寄ってくる。

「・・・・とりあえず町に入ろう・・・・」

「・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・・」

そう。
カミュ達の目の前には、夕焼けに染まる＞アッサラーム＜の町が見えている。
ここまで旅をしてきた中で初めて見る、城下町以上に栄えた独立した町。
町の門を隔てても聞こえる喧騒が、その町の繁栄を物語っていた。

しかし、その町に入ることを拒む者がいる。
今、リーシャの足にしがみつき、涙目で首を横に振るメルエだった。
メルエは一向に動こうとしない。
それればかりか、リーシャにしがみ付き、リーシャすらも動かそうとしないのだ。

「メルエ、どうしたのですか？　疲れたのなら、早く町の宿に向かいましょう。」

「・・・・・・・・・」

サラの言葉にもただ首を横に振るばかりのメルエに、リーシャもサラも困り果ててしまう。
唯一人、カミュだけは、そんなメルエの姿を少し冷たい表情で見ていた。
そのカミュの表情に気が付いたリーシャは嫌な予感が働く。
まさか、メルエに冷たい言葉をかけることはないとは思うが、何をカミュが言い出すのかが分からない。

「・・・・・ここが、お前の暮らしていた場所なのか・・・・・・？」

「「　！！！　」」

身構えていたリーシャですら、カミュの言葉に驚いた。
サラは目を見開き、口を開けて放心状態になっている。
それ程、驚愕の内容だったのだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・わかった・・・・・メルエは俺のマントの中に入っていろ。　町に入ったらそのまま宿屋に向かう。」

カミュの言葉に固まってしまったように動かないメルエを見て、溜

息交じりにカミュはマントを広げる。
自分がどれだけ嫌がったとしても、この町に入らないという選択肢がないことを理解したメルエは、俯きながらカミュのマントの中へと移動する。

「・・・・メルエ・・・・・」

肩と頭を下げ、カミュのマントへと歩くメルエの姿は、リーシャやサラの胸に小さなしこりを残す。

もし、カミュの言うとおり、この町がメルエの暮らした場所ということであれば、メルエはここの生まれで、メルエを奴隷として僅かな金額で売り払った親もこの町に住んでいるということになる。

メルエが町に入るのを嫌がるのだから、メルエがその親に碌な扱いを受けていなかったのだろう。　そのような親がいる町に入るのだから、メルエが恐怖にも似た感情を持つのは当然だろう。

メルエの心には、頼りになる人間として、リーシャやカミュの存在があることは間違いはない。　しかし、幼い頃から植え付けられた心の傷は拭えない。
どれ程、カミュやリーシャが強くとも、メルエの心にある親への恐怖の方が上なのだ。

「・・・・・・・・・・行くぞ・・・・・・・・・・・・」

メルエのマントの中にくるみ、傍から見てもマントが膨れてはいるが、中に誰が入っているのかも分からない状態で、カミュは町の門へと向かっていく。

万が一、町の門を警備する兵がいた場合、不審に思われる可能性もあるのだが、その場合はカミュが何とかするのだろう。
それはリーシャもサラも疑いもしなかった。

「ようこそ、アッサラームの町へ！」

しかし、リーシャとサラの心配も杞憂に終わる。
にこやかに対応してきた男性は、門の前にいたカミュ達一行に気が付き、門を開けてくれた。そのまま、街の中に入ると、にこやかな笑顔を向けてくる男性を見ると、この町を訪ねてくる旅人はそう珍しいものではないのだろう。

町の中に入ると、カミュのマントの中でカミュの足にしがみつくメルエの力が強まるのが感じられた。
メルエにしてみれば、奴隷として売られるまで、町の外には出たことがなかったのであろう。そして、幼さゆえ、自分が暮らす町の名を覚えていることもなかった。

しかし、奴隷として売られ、馬車から見た景色。
孤独を当然として受け入れていたメルエにとっても、不安を隠しきれない状況で見る景色。
初めて見る、育った町を外から見た景色をメルエは憶えていたのだろう。

故に、町の外に一行が辿り着いた時に、その景色が自分の記憶と寸分の狂いもなく重なり、以前は感じたこともなかった恐怖がメルエの心を支配したのだ。

「はぁ・・・・凄いですね・・・・・」

町に入ってすぐにサラが声を漏らす。
その言葉通り、夜の帳が降り始めた町は、喧騒が広がっていた。
今まで歩んできた町や村では考えられないこと。

通常であれば、陽が落ち始めると店仕舞いなどをはじめ、暗闇が支配しはじめる頃には、外に出ている人間等皆無となる。
それが、この町では違ったのだ。
昼の状況を見たわけではないが、もしかすると昼に外に出ている人間よりも多いのではないかと思う程、町は人であふれかえり始めている。

「・・・・まずは、宿屋に向かう。　情報収集はそれからだ。」

周囲を興味深げに見ているサラに、冷たいカミュの言葉が飛ぶ。
我に返ったサラは、自分の行動を恥じ、顔を俯かせながらカミュの後を追った。

「こんばんは！　旅人の宿へようこそ！　三名様ですか？」

宿屋はすぐに見つかった。
入口を入ってすぐ右手に、宿屋の看板をぶら下げた大きな建物が見えていたのだ。

これ程の大きな町であれば、旅人も多く訪れるのであろう。
宿屋の中も綺麗に整頓されている。

「・・・・・・いや・・・・・・・四人だ・・・・・・・・」

宿屋の主人の問いに、カミュは若干マントを広げ、メルエの腕を見せる。
その行為に驚いた主人であったが、隠したままであれば、三人分の料金で済んだところを、わざわざ見せるカミュの紳士的な行為に表情を緩めた。

「四名様ですね。　あいにく二部屋しか空いておりませんが、よろしいでしょうか？」

このような大きな宿で、二部屋しか空いていないはずはない。
しかし、大きな宿であればこそ、急な客に対応できるように部屋を空けておくのだろう。

「・・・構わない・・・・ただ、一部屋は三人が入れる大きめの部屋を頼む・・・・」

「畏まりました。　では、お一人様7ゴールドで、全部で２８ゴールドとなります。」

カミュの要求に考えるそぶりもなく応える主人の様子が部屋に余裕があることを示していた。　カウンターに袋からゴールドを取り出したカミュに主人は部屋の鍵を渡す。

「夕食は食べられますか？」

「　何？　」

ゴールドを受け取った主人の言葉に、真っ先に反応したのはカミュ達一行の食の番人であるリーシャだった。
宿と食事はセットである。
それを伺いを立てるということは食事を出さない可能性があるということだ。

「・・・・・食事は出ないのか・・・・・・？」

「お客様は、この町は初めてでございますか？」

リーシャの問いかけに主人は若干驚いた様子を見せる。
それが、この町に何度も訪れる旅人が多いことを意味していた。
カミュは静かに主人に向かって頷く。

「そうでしたか。　では、夜の町をご覧ください。　この町が本領を発揮するのは夜でございますので。　先程の私の問いかけも、この町に来た旅の方の中には、夜の町で食事をされる方も多く、その方々には食事分だけ料金を割り引きさせて頂いていましたので。」

一行は主人の話にようやく納得がいった。
つまり、この町は夜に動き出すのだ。
その為、それを楽しむ人間も多いのだろう。

「・・・・・食事の用意は頼む・・・・・・」

「畏まりました。　では、食事ができましたらお呼びいたします。」

カミュの言葉ににこやかにほほ笑んだ主人を置いて、一行は部屋へと向かった。
部屋への階段を上っている最中に不意にリーシャが口を開いた。

「カミュ、お前は町で情報収集をしてきてくれ。　私はメルエを見ている。　サラもカミュについて行ってやってくれ。・・・・・・・・・メルエ、おいで・・・・・」

「・・・・・・・・・」

リーシャの提案に、カミュが答える前に、カミュのマントからメルエが飛び出し、リーシャの足元にしがみ付く。
その様子に、カミュもリーシャの提案を飲むしかなかった。

「・・・・わかった。　メルエを頼む・・・・・・・・」

「ああ、食事も変更することを主人に言っておく。　私達の分だけを作ってもらうようにするから、サラ達は外で食べてこい。」

情報収集に時間がかかることを考慮に入れるリーシャに多少驚きを見せるが、カミュはその提案にも素直に頷いた。
サラは逆に戸惑ってしまう。

今まで、カミュと二人で行動したことなどないのだ。

おそらく、カミュは一言も自分から話すことはないだろう。
口を開けば、衝突を繰り返してきた相手にどう接すればいいのかがサラには解らなかった。

「リ、リーシャさん、何故あんなことを!?」

部屋に荷物を置いてからすぐ出るというカミュの言葉に荷物を置きに部屋へと入った途端、サラはリーシャに噛みついた。
そんなサラの言葉に驚いたような表情を見せながらも、メルエの着替えを手伝っているリーシャが口を開く。

「ん？　私がついて行ってもいいんだが、サラも知っての通り、私は交渉事にはあまり適していない。　私が行くよりも、サラが一緒に行った方が情報収集に役立つだろう？」

「そ、それだったら、カミュ様一人でもいいじゃないですか!?」

リーシャの言い分は尤もだった。
リーシャが交渉に向かないことは周知の事実だ。
しかし、それはサラがついて行く理由にはならない。
別段カミュ一人でもいいはずなのだ。

「そうかもしれないが・・・・他人から話を聞くのに、カミュの態度ではな・・・・サラが共に居れば、相手も少しは心を許すんじゃないかと思ったんだが・・・・・」

メルエの着替えを終えたリーシャがサラに視線を向けながら呟いた言葉に、サラはぐぅの音も出なかった。
確かに、カミュが人から話を聞くことはするが、あの無表情で問いかけられれば、それに快く対応してくれる人間は限られるだろう。
ならば、リーシャの言うとおり、自分が横にいることで多少なりとも軽減できる可能性がある。

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・きらい・・・・・・・？」

「そう言う訳ではありません。　確かに許せない部分もありますが・・・・・・」

サラは最近のカミュを量りかねていた。
相変わらず、『人』も『魔物』も区別しない。

しかし、それに対するサラの気持ちの中に以前の様な抑えきれない怒りが湧いてこないのだ。

「私は、少しメルエとのんびりさせてもらう。　それに・・・・サラ、『魔王』や『悪魔』の言うことを聞かなければ、どうなるか解っているんだろう？」

「　リ、リーシャさん！　」

リーシャの顔には意味ありげな笑みが浮かんでいる。
『まだ根に持っていたのか！？』
とサラは驚かずにはいられない。

サラからすれば、自分に向かって『鬼』と表現したリーシャが怒る道理はないのだ。
『自分の事は棚に上げて』ということだ。

「・・・・・サラ・・・・・・言ってない・・・・・・・・」

「　メルエも！　もう遅いですよ！　」

それに対し、リーシャに露呈した原因であるメルエが必死に弁解するが、それは既に遅すぎる。
泣きたくなる気持ちを抑えて、サラは部屋を後にした。

リーシャとメルエを宿屋に置き、カミュとサラは夜の＞アッサラーム＜を歩く。
夜とは思えないほどの賑わいを見せる町は、サラにとってとても新鮮な物だった。

アルコールを含み、大きな声で笑う人々。
そんな人々を店へと誘う男達に、その横で妖艶な笑みを浮かべる女達。
どれもこれもがサラにとって初めてのことで、サラはしきりに周囲を見渡していた。

「・・・・武器屋があるな・・・・」

「　えっ！？　」

前を歩くカミュが、不意に見つけた看板に声を洩らす。
そして、そのまま武器屋の中に入って行くカミュに驚きの声を上げながら、サラも店の中に入って行った。

「　おお！　いらっしゃい！　」

「・・・・・武器を見たいのだが・・・・・・」

「　ん？　おう、初顔だね。　アンタ、昼間に変な奴に、何か売りつけられたりしなかったかい？」

武器を見たいというカミュの顔を見て、武器屋の主人は妙な事を口走る。
ぼったくりでもあるというのだろうか。

「どういうことですか？」

「おお、こんな可愛い娘さんまでいるとは・・・・いや、この町は人が多いからな。　妙な商売をする奴もいるのさ。　あっ、うちはちゃんとまともだぜ。　武器の値段もロマリアで売っている物は同じ値段だ。」

何か、目の前で主人が口を開くほど怪しさが増していく。
サラは、『可愛らしい』という部分に反応し、少し頬を赤らめていたが・・・・

「・・・・親父・・・・これは・・・・・？」

「ん？　ああ、それは＞鉄の斧＜って代物だ。　木こりが使う斧を少し加工した程度のものだが、その切れ味、破壊力は折り紙つきだぜ。」

カミュが持ち上げたものは、本当に『斧』そのもの。
店主が言うように木こりが使うような単純な斧とは違うが、＞シャンパーニの塔＜で出会ったカンダタの持っていたような斧とも違う。
ハルバードと呼ぶにはお粗末であり、ただの斧と呼ぶには手が込んでいる。
＞鉄の斧＜とは言い得て妙なものだった。

「・・・・あの戦士・・・・＞斧＜も使えると思うか・・・・・？」

「　えっ！？　リーシャさんですか？　え～と・・・・何でも使えるのではないでしょうか？　」

カミュの問いかけに、サラは戸惑いながら答えるが、その頭の中には＞斧＜を振り回すリーシャの姿が浮かぶ。　それはまさしく『悪魔』か『魔王』。

「・・・・・親父・・・・・いくらだ？」

「　おお！　買ってくれるのか？　２５００ゴールドだ。」

サラはその金額に驚いた。
＞鋼鉄の剣＜の倍以上なのだ。

「・・・・・高いな・・・・・・＞鋼鉄の剣＜が二本買える・・・・・・」

「しかし、正規の値段だぜ。　何処に行っても、この値段で売っているはずだ。」

カミュの言葉に店主が反論する。
その口ぶりに慌てた様子が全くないことから、言っていることは真実なのだろう。
ただ、カミュやサラの感じた通り、値段が高い。
＞鋼鉄の剣＜より、格段攻撃力が高い訳ではないだろう。
それなのに倍以上の値段がすることに抵抗感を感じているのだ。

「・・・・ふぅ・・・・わかったよ。　うちは夜しか営業してなくてね。　夜の町だから、武器屋に足を運ぶ酔っぱらいは少ないんだ。
２２００ゴールドでいいよ。　悪いがそれ以上はまけられない。
俺にも生活があるんでね。」

「・・・・・・・・・もらうよ・・・・・・・・・・」

店主の言葉は事実だろう。
その上で、カミュ達に値引きをすると言っているのだ。
流石のカミュも、値引きまでさせておいて買わないという選択肢は選べなかった。
それが、サラには微笑ましかったが、その＞鉄の斧＜を持ったリーシャを想像してしまうと、どうしても血の気が引いてしまう。

ゴールドを支払った後、その商品を宿屋にいる人間に届けてくれるように交渉すると、意外にも店主は快く了承してくれた。
部屋の番号と、リーシャの名前、そして簡単に書いた手紙を渡し、カミュとサラは店を後にする。

「お客さん！　アンタ方、もう劇場には足を運んでくれました？」

「　きゃ！　」

店を出てすぐ、突如横からかかった声に、サラが驚きの声を上げる。
視線を移すと、そこには手揉みをしながら、奇妙な笑みを浮かべる男が立っていた。

「見た所、アンタ方初めてだね？　アッサラームに来たのなら、一度はベリーダンスを見て行かないと！　ああ、女の子でも見ていけるダンスだよ。」

「ベリーダンスですか？」

「ああ、この町の名物さ。　この町には、綺麗な女性が集まってくるからね。　それこそ、お譲さんみたいなさ。　そんな綺麗どころが躍るダンスだよ。　一度見て行っておくれ。」

明らかにお世辞に近い男の言葉に、サラは顔を赤らめる。
サラの容姿は整っている部類に入るだろう。
しかし、片田舎と言っても過言ではないアリアハンの僧侶として育ったサラは、この町にいる女性の様に垢抜けてはいない。

「・・・・・・時間があれば、寄らせてもらう・・・・・・」

「是非、後で寄ってください！」

男の言葉を意に介さないカミュのそっけない言葉にも、愛想笑いを浮かべながら男は勧誘を忘れない。
サラは、男とカミュを見比べて、カミュを慌てて追った。

サラにとって、自分の容姿を褒められたことは、育ての親である神父からしかなかった。
故にそれはじわじわと自分の胸に嬉しさと恥ずかしさにを混ぜた物として湧きあがってくる。　それは、サラもまた女性である証拠だった。
それが表情にまで出てしまっているが、そのサラの小さな喜びは、すぐ目の前に現れた者によって潰されることとなる。

「　あら、お兄さん。　結構いい男じゃない？　」

前を歩くカミュの前に立ち塞がるように現れた妖艶な女性。
綺麗な髪を長くなびかせ、元々整った顔立ちは化粧という魔法をかけ、更に美しくなっている。　着ている服もどこか露出が高く、否が応にも女を感じさせるものだった。

「・・・・・・・」

「　？？　無口な人なのね。　そんなお兄さんでも笑顔になるわよ。私と気持のいいことをしない？　」

「　なっ！？　」

立ち塞がる女性を突き飛ばすこともできず、その場に無言で立つカミュに、その妖艶な女性はサラが絶句してしまうような言葉を投げかける。

「　『ぱふぱふ』なんてどう？　」

「　えぇぇぇぇ！！　」

妖艶な女性の投げかける言葉の意味を理解したサラは、大きな叫び声をあげる。
しかし、カミュは無言なまま。
その不思議な光景に、女性は少し驚いたように目を開いた。

「・・・まず・・・聞きたいんだが・・・・それは何だ？」

「「　えぇぇぇ！？　」」

カミュが呟いた言葉に、今度は女性とサラの言葉が重なる。
女性の提案を『知らない』というカミュに二人とも驚いていたのだ。

女性は、耳年増が多い。
同じ年齢の男と女でも、興味の問題があるのかもしれないが、知識は女性の方が高い可能性がある。

「お、お兄さん。『ぱふぱふ』を知らないのかい？　そりゃあ、勿体ないね・・・こんな可愛らしいお嬢さんを連れているのに・・・・・」

「そ、そんな・・・・」

先程の男に続き、サラから見ても女として完成されている妖艶な女性に『可愛い』と言われ、サラの頬は紅潮する。
しかし、その女性の視線に気が付いた時、サラの血の気は一気に下がった。

「・・・う～ん・・・・まぁ、これじゃあ仕方がないかね・・・・」

「なっ！？」

その女性の視線の先は、サラの顔ではなく、もう少し下。
サラの法衣の前掛けに刺繍された十字架の先当たり。
つまり、それはサラの胸部であった。

咄嗟に、サラは自分の胸を護るように両手で隠す。

「・・・それじゃあねぇ・・・・まぁ・・・・やりたくても出来ないわね・・・・・」

「し、失礼な!?」

その女性は、サラの胸の膨らみをしみじみと眺め、とても残念そうに眉を下げて感想を洩らすが、それはサラにとって屈辱的な言葉だった。

サラとしても、同年代の人間より、若干劣っているとは感じているが、他人が憐れむ程だとは思っていない。

「わ、私のは、成長途中なのです!?」

「・・・まぁ・・・そうだね。　歳が二桁になったばかりじゃ、そんなもんさね・・・・」

「なっ!?」

サラの反論に、何か思い当たったように女性が溢した言葉は、サラの心を更に抉る一言だった。　彼女が言うには、サラはメルエとそう歳が変わらないということになる。

サラは、こう見えてもカミュより年上だ。

「し、失礼ですよ！　私は１８です！」

「えっ！？」

「はぁ？」

我慢の限度を超えたサラの叫びに、今度は女性とカミュの声が重なる。
カミュが聞いた時のサラの歳は１７だったはずだ。
いつの間にか、二つも離れていることにカミュは驚いたのだ。

「へ、へぇ～、１８なのかい？　私とそう変わらないじゃないか。
それじゃあ、尚更厳しいね・・・・・私が１８の頃にはこんなだったからね・・・・」

「ぐっ！？」

サラの歳を聞いた女性は、一瞬サラの剣幕に怯むが、余裕の笑みを取り戻し、自分の豊かな胸を持ち上げながら、挑発的な視線をサラに送る。
サラは、その様子を悔しそうに睨むが、遠巻きに見ているしかでき

なかったカミュには、女性がサラをからかっているようにしか見えなかった。

「・・・・私だって・・・・」

「まぁ、気にすることはないさ。好みも人それぞれだからね・・・・アンタの方が良いって奴もどこかにいるさ。」

それは、サラの望みを真っ向から否定する言葉。
もうそっちの望みはないのだから、別の視点で進めという何とも怒りが湧いてくるような助言であった。

「ぐぐぐぐ」

「可愛らしくて、いいじゃないか？」

悔しさに歯を噛みしめるサラに、妖艶な女性は最後の追い打ちをかけた。
それは、からかいであったが、からかいとは受け取れないサラの感情は爆発する。

「カミュ様！！行きましょう！こんな失礼な方の話を聞く必要などありません！」

「ふふふっ、人間、図星を突かれると感情が高ぶるのよね・・・・」

「・・・・・初見の人間をからかうのは、そこまでにしてくれないか・・・・・」

怒りの炎を宿したサラの発言に、尚もからかうような言葉を投げる女性に、ようやくカミュが間に立つことにした。
このままだと、感情を抑える事が出来なくなったサラが、女性目掛けて＞バギ＜でも唱えそうな瞳で睨んでいたからだ。
それは、おそらくカミュの過剰な心配ではなかっただろう。
サラの視線は人を殺しかねない物だった。

「ふふふ、お兄さん、『ぱふぱふ』をする気になったの？　その子には出来ない事を色々としてあげるわよ？」

「　カミュ様！！　」

溜息交じりのカミュに、余裕の笑みを浮かべる女性は、尚も言葉の端でサラを挑発する。
その言葉をまともに受けたサラは、憎しみと怒りを混ぜた視線をカミュにまで向ける。

「・・・いや、それが何なのかは知らないがやめておく・・・・・・それよりも、『メルエ』という名前を聞いたことはないか？」

「はぁ？　なんだって？」

カミュは、この女性が若いながらも、この夜の町でそれなりの情報力を有していると見ていた。　夜の町に立ち、色々な男に声をかけているのだろう。　必然的に噂話などは数多く耳に入ってくる。その上でカミュは、この先の進路の目安になる『魔法のカギ』等の情報ではなく、『メルエ』という少女のことを尋ねたのだ。

「・・・・『メルエ』という少女を知らないか・・・・？」

「ん？　メルエ？　どっかで聞いたことあるね。　どこだったかな・・・・」

暫し考えるように唸っている女性をカミュは無言で見詰め、サラは未だに敵意剥き出しの視線を向けている。

「　ああ！　そうだ。　あのおばさんの所のちびっこの名前が『メルエ』と言ったね、確か。　そう言えば、最近見ないね、あの子。　毎朝、あの劇場の裏で洗濯していたけど。」

「「　！！　」」

やはり、メルエはこの町の出身だったのだ。
メルエはここで親に迫害され、そして売られたのだろう。
妖艶な女性が見ていた光景がそれを物語っている。

「・・・・その『おばさん』とは・・・・・・・？」

「う～ん。　どっかにいるはずだよ・・・・」

もはや、女性の興味はカミュから失せていた。
サラをからかうことにも飽きたのか、次に声をかける男性を探すように周囲に視線を動かしている。

その時、カミュの後方で罵声が飛んだ。
どうやら、酔っぱらいの男性に、酔っぱらいの女性がぶつかったようだった。
罵声に振り向いたカミュとサラが見たものは、尻もちをつく女性と、その女性に悪態をつき、唾を吐きかける大柄な酔っぱらいの姿だった。

「ああ、あれだよ。　あのおばさんが、お兄さんが聞いていた『メルエ』ってちびっこの母親だよ。」

後ろに立っていた妖艶な女性が、今まさにカミュ達の視界に入っている酔っぱらいの女性を指差しながら、声を出す。
そして、その言葉を最後に、新たに見つけた男に悩ましい声を出しながら近づいて行った。

カミュ達の視線の先にいる女性は、唾を掛けられた部分を薄汚れた服でふき取り、ふらふらとよろめきながら立ち上がり、視点が定まっていないような瞳で歩き出す。

サラには、それがとてもメルエの母親には見えなかった。
色こそメルエに似てはいるが、手入れすらされていないような、バサバサの髪。
いつ洗ったのかも分からないような薄汚れた服。
そして、何よりも、大量のアルコールを摂取していると一目でわかる姿。
どれを取ってもメルエに結びつく所が何もないのだ。

「・・・・・・・・カミュ様・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・行くぞ・・・・・・・」

『宿に戻りたい』
そんな微かなサラの願いも、女性に視線を向けたまま歩き出すカミュの姿に潰えてしまった。　カミュの歩く先にいる人物は、メルエの母親と呼ばれた女性唯一人。
故に、カミュの目的はサラでなくとも解るものだった。
しぶしぶと続くサラ。

「・・・・・申し訳ない・・・・・・・少し話を聞かせてくれませんか？」

ふらふらと歩く女性には、すぐに追いついた。
仮面をつけたカミュの言葉に振り向く女性。

その女性を間近に見て、サラは尚のこと驚いた。
近づいただけでも解るアルコールの臭い。
長年飲んできたのであろう。
アルコールによって爛れた肌は、その女性の年齢を不透明にしている。
もちろん良い意味ではない。

「・・・・・なんだい・・・・・アンタ達は・・・・・？」

女性の声は肌と同じように、アルコールによって焼け爛れていた。

アッサラームの町？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

出しました『ぱふぱふ娘』

こんな感じにしてみましたが、皆様のお気に召したかどうか・・・・

あの親父も出そうか悩んだのですが、カミュがあの娘について行く姿がどうしても想像できなくて・・・・サラにまた哀しい役目を・・・

次話はかなり重く、シリアスになる可能性があります。

ご意見、ご感想をお待ちしています。

過去～メルエ～（前書き）

今回もまたやってしまいました。
心を強く持って、お読みください。

過去～メルエ～

ここ＞アッサラーム＜は、夜にその真価を発揮する。
町に人が溢れ、それぞれの願望という名の欲望が交差する。
財ある者は己の欲求を満たすためにこの町を訪れ、また貧しき者は己の願望を叶える為にこの町を訪れる。

彼女は後者だった。
貧しき家に生まれ、幼い頃から教育を施されずに畑仕事などを手伝わされていた。
母親譲りの整った顔も、貧困な食事と、貧相な衣服によって見る影もない。

そんな生活に嫌気が差し、彼女は１３で生家を出た。
目指すは、近隣の国にもその名が轟く＞アッサラーム＜。
その町は、将来を夢見る若者が集まる町。
自分の夢や欲望を叶えることのできる町。
逆に、その分絶望や孤独を味わうこともあるが、それは若者達には分からない。

「　そうかい！？　アッサラームに行くのか！？　何もしてやれないが頑張れよ。」

両親は反対しなかった。

数年前に彼女に弟ができていた。
一家を支える若い男子の誕生。
それに両親は狂喜した。

それと同時にできた苦悩。
食糧難だ。
子供二人を養っていくにはあまりにも貧しい。
候補としては、元は整っている娘を奴隷として売りに出すか、娘を捨てるかの選択肢しかない。

故に、アッサラームに行くと彼女が両親に伝えると、諸手を挙げて喜ばれる。
これで、変な罪悪感に苛まれることなく、口減らしができると。
彼女は、両親から何の餞別も貰うことなく、生家を出た。

アッサラームについてすぐに、彼女は近くにある劇場に住み込みで働くことになる。

劇場に出入りしている女性を見ていると、まさに夢の国にいるようだった。
『自分もああなりたい。』
アッサラームに入ってすぐに見たその光景に、彼女は一人の踊り子

に衝動的に声をかけていた。

「　ん？　アンタも踊り子になりたいってのかい？　ふ～～～ん、まぁ、容姿はそこそこか・・・・・・ついてきな！　」

彼女は運が良かったのだろう。
話しかけた女性。
それが、この劇場の座長の奥方だったのだ。

着る物もみすぼらしく、生まれてこの方化粧などをしてきたことのなかった彼女は、その奥方や気のいい先輩方におもちゃにされながらも、変貌していく。
その姿は、『本当に自分なのか？』と疑ってしまう程の物だった。

「へぇ～、物は良いと思ってはいたが、ここまでとはね。　アンタ、いい踊り子になるよ。」

「　は、はい！　よろしくお願いします！　」

鏡越しに、変貌した彼女を見ながら唸った奥方に、彼女は深々と頭を下げる。
これから待っている自分の生活を夢見ながら。

彼女の名はアンジェ。
貧しい家を出て、都会で夢を掴もうとする、どこにでもいる若い女

性。
そんな彼女の物語である。

「アンジェ！　何してるんだい！？　私達の服は洗ったのかい！？」

「はい！　もう、外に干してあります！」

「アンジェ！　私の靴はどこ！？」

「はい！　すぐお持ちします！」

夢と現実は違う。
ましてや、アンジェは夢を掴むための道を見つけたばかり。
そんな女性が、踊り子として舞台に立つ事などできるわけがない。
やっていることは、ほぼ全て雑用。
先輩方の衣裳の洗濯から、荷物運びまで、一番若いアンジェの仕事

であった。
先輩方は厳しく、まるで『自分をいたぶって楽しんでいるのではないか？』と疑ってしまうほど、自分に仕事を投げかけてくる。
それでも、アンジェは必死に働いた。

ここでは、働いた分、しっかりと食事が与えられる。
それが下働きだとしてもだ。
そのことが、この劇場がいかに豊かかを示している。

踊り子でＮＯ．１やＮＯ．２などになれば、それ相応の報酬が入る。
その踊り子見たさに劇場に足を運んでくるのだ。
指名などの制度はないが、劇場の出口には、帰りがけに劇場の踊り子の人気投票の様なものが行われ、それによって踊り子にも格差が出てくるのだ。

「アンジェ！　何してるんだい！？　私が舞台に出るよ！　しっかり見ておきな！」

「はい！」

お客から人気が出る人間というのは、外面だけがいい訳ではない。
心に余裕が出てくるのか、自分の後釜を作るためなのか、後輩への配慮も怠らない。
それが、アンジェが辛くとも苦しくとも、この劇場を出ていかない理由の一つであった。

アンジェを可愛がってくれる先輩は、ＮＯ．１の人気ではなかった。

常にＮＯ．２からＮＯ．４近辺を上下する人間だったが、アンジェは彼女の教えを受けることに決めた。
それは、彼女の踊りがとても綺麗だったのだ。

その先輩は、決して見目麗しいとは言えない容貌だったが、その踊りの美しさ、華麗さに人々は魅了されていた。
彼女の人気は、その容姿によるものではないことは、周知の事実。
故にアンジェは彼女に憧れた。

アンジェは、いつしか彼女が舞台に立つその時間までに、全ての雑用を終わらせ、彼女の出番を舞台の袖で見つめることが多くなった。
そして、自分の踊りを食い入るように見つめるアンジェの視線に気が付いた彼女は、アンジェの面倒を良く見、可愛がるようになっていく。

「アンジェ！　違う！　そこはそうじゃなくて、こう！」

「はい！」

アンジェが雑用を終えるころを見計らって、踊りの稽古をつける。
基本、踊り子は、自分の才と先輩の踊りを盗むことによって成長する。
盗んだ踊りを自分なりに変えていきながら自分独自の特徴として完成させるのだ。

もちろん演目によっては決まった踊りを一糸乱れずに踊る必要もある。

しかし、ただそれだけしかできなければ、表舞台に立つことはできないのだ。

稽古は深夜にまで及ぶことがあったが、文句も言わずに一心不乱に踊り続けるアンジェに、先輩である彼女も苦笑しながら付き合うことになっていた。

そして、月日は流れる。

アンジェに踊りを教え、この町での暮らし方を教えてくれた先輩は、昨年の結婚を機に劇場を引退した。

彼女は、お客とは別に男性を見つけており、幸せそうな笑顔を見せながら、アッサラームを出て行った。　夫の故郷に戻り、主婦として生きて行くらしい。

「　アンジェ、これからはアンタの時代だよ。　アンタがこの劇場を盛り上げて行くんだ。　頼んだよ。　」

「はい！」

別れ際にアンジェの髪に、自分の髪に差していた髪飾りを付け幸せそうに微笑む彼女の笑顔は、アンジェが見た中でも一番の美しさを誇っていた。

そして、いつしかアンジェも幸せな結婚というものに憧れを持つようになる。

先輩が去って、数年。

アンジェは、この劇場の顔となっていた。

常にＮＯ．１とＮＯ．２を争う相手もできた。

レナと呼ばれる踊り手がライバルだった。

アンジェより若干遅くに入って来た娘であったが、当時のＮＯ．１に気に入られ、生来の容姿の美しさと快活さを表し、めきめき頭角を現した。

踊りが綺麗なアンジェ。

たまのミスも愛嬌として許されるレナ。

互いが違う個性を発揮し合いながらも、劇場を盛り上げて行く。

ライバルと認め合いながらも、年の近い二人は仲が良かった。
踊りのことについて論議しながら夜を明かすこともあり、そんな時は、仲良く座長の奥方に叱られた。

そんな自分が夢見たような生活をアンジェがしていた頃、もう一つの夢がアンジェの下に予期せずに転がり込んできた。

『お客からの熱烈なアプローチ』

それは、アンジェにとっても日常茶飯事なことであった。
プレゼントが届けられたり、花束が届いたり。
手紙が入っていたり、アンジェが家に帰る頃に待ち伏せをしていたり。

そんな日常にある鬱陶しい客の一人と思っていたアンジェであったが、しかし、その客の熱烈なアプローチは手紙だけだったのだ。
花束もプレゼントもない。
待ち伏せもないから顔も見たことがない。

しかし、手紙だけは毎日届くのだ。
最初は、話しかける勇気もない貧乏で不細工な男なのだろうと思って、読まずに捨てていた手紙であったが、毎日毎日続く手紙に辟易し、一度その手紙を開封した。

「・・・・・・・・」

そこには、とても貧乏で教育を受けていない人間が書くことができるとは思えない綺麗な字でアンジェへの想いが綴られていた。
アンジェも、この劇場に来るまで読み書きはできなかった。
それでも、『客からもらうカードが読めなきゃ嫌われるよ』という先輩の言葉に懸命に学び読めるようになった。　しかし、書く字はお世辞にも綺麗とは言えない。

そんな綺麗な字に興味を持ったアンジェは、その手紙を読み始める。
中に書いてあったのは、どこにでも有り触れた言葉。
決してアンジェの心を動かす物ではなかった。
それでも美しい文字は人の心を動かす。

「どんな殿方がこれを書いたのだろう。」

そんな疑問が沸いたアンジェは、毎日届く手紙を楽しみにし始める。
最初は胸に響かなかった有り触れた言葉も、毎日毎日美しい文字で書かれていると、アンジェの心に残って行った。

そして、ついに、アンジェはその相手に返事を書くことにした。
それは異例のこと。
一人一人の客に返事を書いていたりしたら、踊り子などやってはいけない。
それでも、アンジェはその手紙の送り主に会いたくなった。

返事をしたため、それを客からの手紙を受け取る受付の人間に手渡す。
それからは、アンジェの心は一日どきどきと鼓動が速く、早く明日にならないだろうかと踊り中も上の空の状態であった。

「アンジェ！　ほいよ。」

「ありがとう。」

そして待ちに待った翌日。
アンジェの手に今日の客が持ってきた手紙やプレゼントが手渡された。
それを受け取り、他のプレゼントを見向きもせずに、アンジェはみすぼらしい封筒に入った手紙を探し出す。

それはすぐに見つかった。
他の手紙とは一線介したように、何の装飾もされていない封筒。
待ちきれないようにアンジェはその封筒を破り、中身を取り出した。
そこには、アンジェから返事が来たことに対しての喜びが紙一杯に広がっており、会う日時、場所は全てアンジェに任せることが書かれていた。
その男にしてみれば、そうすることでもう一度アンジェからの返事を貰うことを狙っていたのかもしれないが、恋愛経験など皆無に等しいアンジェは嬉々として自分の都合を綴り、その日のうちに返事を送った。

待ちに待った男との逢瀬の日。
アンジェは、めかし込む様子を不思議に思うレナの言葉をあしらいながら、外に出た。

劇場に住みこみ始めてから、アンジェは昼のアッサラームに出るなど、洗濯物を干しに出る時だけだった。
久しぶりに見る昼のアッサラームは、静かで穏やか。
夜の喧騒が嘘の様な佇まい。
それが、新鮮で、アンジェの心は更に浮き出す。

「あの・・・は、はじめまして。」

夢見るように、周囲を見渡していたアンジェは、唐突に自分の世界を壊した声に一睨みする。そこに立っていたのは、線は細いが、もやしのようではなく、気が弱そうだが、自分の考えを持っていなさそうではない、何とも不思議な男が立っていた。

「貴方が・・・？」

「はい。アンジェさんがデビューする前から見ていました。お、お会いできて、こ、光栄です！」

顔はとても整っている。

身なりも、今日の為に新調したのだろうか。
プレゼント一つ添えない手紙を毎日送ってくるような貧しい生活を送っている様子ではなかった。

その日から、アンジェは非番の日等は、この男に会うことにした。
その男の顔はとても整っており、笑顔が実際の年よりも大分若く見えるものだった。
実際の歳はアンジェよりも二つ三つ上だろう。

そして、アンジェを魅了したのは、その声。
歌でも歌うかのように心地よく耳に入ってくる声にアンジェの心は奪われた。
基本的に、劇場の下働きの男か、いやらしい目で見てくる客しか男を知らないアンジェは、日々を重ねるごとにこの男にのめり込み始めた。

そして、月日を経て、アンジェは男と共に暮らし始める。
男は、親もなく親戚もいない。
アンジェと同じようにこの町へ夢と希望を持って出てきた若者だった。
昼は町の清掃を行い、夜は劇場に通う。
そう言う毎日を送ってきた男だけに、ゴールドを蓄えている訳はない。
必然的に生活はアンジェの収入によって賄われていた。

「じゃあ、アンジェ。　今日も頑張って。」

「ええ、貴方もお仕事頑張ってきてちょだい。」

それでも、男はアンジェと暮らす為に、夜も働き始めた。
アンジェを想う気持ちは本物だったのだろう。
夜の町でバーテンの様な仕事につき、朝方まで働く。
そんな姿を見ていたアンジェもまた、ひた向きに踊りを踊った。

「アンジェ、僕はアンジェが好きだ。」

「私もよ・・・」

日々、お互いに愛をささやく二人の間にも月日は流れる。
暮らし初めて数か月。
踊り子としてのアンジェの人気に陰りが差し始める。

基本、踊り子の恋愛は隠蔽しなければいけない。
誰か他の男の物になったと知れれば、その人気は急降下していく。
しかも、アンジェの相手は元客だ。

『何故自分ではないのか？　自分の方が豪華なプレゼントを贈っていたのに。　自分の方が何度も足繁く通ったのに。』

そんな想いが常連の中に広がり始めたら、それは踊り子として命取りになる。
アンジェはライバルだったレナに大きく差を広げられる。
それでも、純粋にアンジェの踊りを愛してくれるファンのおかげで、アンジェの人気は踏みとどまっていた。

アンジェの相手の男は、アンジェに結婚を申し込むことはなかった。
それは、未だに自分の収入が安定していなかったかもしれない。
もしかすると、アンジェに踊りを辞めてほしくなかったからかもしれない。

「アンジェと僕の子供が欲しいね。」

そんな男から、ある夜言葉が洩れた。
それは、アンジェにとっても嬉しい言葉。
自分と愛する男との間の子供。
その子供ができれば、自分はいつしかの先輩の様に幸せな笑みを浮かべて、この男と結婚ができるのではないだろうか。

「そうね。　私も貴方との子供が欲しい。」

アンジェの答えに、嬉しそうに歳より幼い笑みを浮かべた男はアンジェを抱きしめる。
男の腕の中に包まれながらも、アンジェは喜びと幸せを噛みしめていた。

それから数年。
アンジェはまだ劇場で踊っている。
男との間に子供はできていない。
アンジェが石女（うまずめ）なのか、男に種がないのかは解らない。
それでも、数年間身体を重ねても、ついぞ子供がアンジェの中に宿ることはなかった。

それでも男の態度は変わらない。
アンジェには優しい笑顔を向け。
夜の町でも、懸命に働いていた。

そんな男の姿に、アンジェは心を痛める。
自分のせいだとは決まってはいないが、それでもアンジェは責任を感じてしまう。

「アンジェ姉さん。　ここはこれでいいですか？」

「えっ！？　あ、ご、ごめんよ。　もう一度踊ってくれるかい？」

劇場でも、上の空になってしまうことが度々あった。
今アンジェの前で踊りを披露しているのは、彼女の下で踊りを学ぶ若者。
彼女はＮＯ．１のレナでもなく、現在ＮＯ．２の踊り子でもなく、踊り自体が美しいアンジェの舞台を袖から食い入るように見ていた。
その姿に昔の自分を重ねたアンジェは、自然と笑いがこみ上げ、その娘を呼び寄せ、自分がしてもらったように自分付きの練習生としたのだ。

「ほら！　そこの足が違う！　何度言えば解るんだい！」

「は、はい！」

自分がされたように厳しく、それでいて暖かく指導をして行くアン

ジェ。
そのアンジェの想いが伝わっているのか、娘も必死でついて行こうとする。
それは、娘が止めようとする明け方まで続いた。

アンジェも自分を教えてくれた先輩の様に、娘が止めない限りは教える。
その代り、本当に危ないと思えば、強制的に止めさせ、休ませていたが、この日は娘の調子も良かったのか、空は白み始めていた。

「ひゃ！」

娘を部屋まで連れて行き、アンジェも自宅へ戻ろうと、劇場の裏口を出た時、思わず驚きの声を上げてしまった。
そこには一つの籠。
裏口の横に、小さな小さな籠が置かれていた。

「なんだい。驚かせないでおくれよ。誰だい、こんな所にプレゼントを置いたのは。」

大方面と向かってプレゼントを渡せずに、名前の書いたカードと共にプレゼントを置いて行ったのだろうと思っていたアンジェは、籠

の中身を見る為にかがみ込む。

「！！！」

確かにカードはあった。
しかし、書いてあった文章は、アンジェの予想を遥かに超えたものであり、そのカードが示す籠の中にあった物も、アンジェの想像を飛び抜けたものだった。

「・・・・・赤ん坊なのかい・・・・・？」

そう、中にいたのは生まれて間もないだろう赤子。
綺麗な毛布に包まれ、幸せそうな寝顔を浮かべている。
時折、むにゃむにゃと口を動かし、手を開いたり握ったりしてはいるが、よく眠っている赤子だった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～

心優しき方へ

この子は私の子供ではありません。
この子はとある女性から託された物です。

その女性は血だらけになりながらもこの子を私に託しました。
おそらく、その人はこの子の母親だったのでしょう。
自分の命を賭してまで子供を護り、その場で息絶えました。

しかし、私には、子供を養える余裕はありません。
その女性が血を吐きながらも私を信じてくれた事を裏切るようになってしまいますが、私には幼子を養う能力もなければ、何かに襲われることになった女性の子を育てる覚悟もありません。

この町の、この劇場であれば、生きていけるのではないかと思い、
連れてまいりました。
どうか、この子を育ててあげてください。

この子の名は『メルエ』と言うそうです。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～

「なんだい、これは！」

その文を読んで、アンジェは思わず叫んでしまった。
それは、この手紙を書いた人間の無責任さに対しての怒り。
自分の身を挺してまで子を護り、必死で『人』のいるところまで戻り、託して息だえたというのに、託された人間は、まるでそれが迷惑とでもいうように、ここに捨てて行ったというのだ。

この安らかに眠る赤子の母親が、何に襲われたのかは解らない。
それは、『魔物』かもしれないし、盗賊などの『人』かもしれない。
それでも、血だらけになる程に痛めつけられたということは、自分より力量が上なのか、それとも数が上なのかのどちらかだろう。

それでも、我が子を護り、傷一つなく人里まで連れてきたのだ。
その母親の心を無にするような行為にアンジェは怒りを覚えたのだ。

「こっちは、子供が欲しくても出来ないっていうのに・・・・・・!!!・・・・この子、別に劇場で育てなくてもいいはずじゃ・・・・私と彼で育てれば・・・・・」

アンジェの頭の中に、不意に浮かんだ自分自身に対する提案。
それはとても甘美なものだった。
これで、二人の間に子供ができる。

ここ＞アッサラーム＜は夜の町。
見目麗しい女性が必須となる。
その為に、奴隷商人から幼子を買い、踊り子や娼婦に育てるということが当然の様に起こっている。

しかし、どれ程、アンジェが子供を欲しているとはいえ、まさか奴隷商人から奴隷を買う訳にはいかない。
だが、この赤子は、見た目は生まれたばかり。
劇場内の人間以外には、自分の子供として通るはずだ。

「メルエっていうのかい？　アンタは今日から私の子供だよ。」

そんな言葉を掛けながら急いで籠を抱き上げ、アンジェは家路を走る。
胸に湧き上がる喜びを抑えることなく、笑顔を浮かべながら・・・・・

「アンジェ！？　その子は・・・・・・」

「劇場の裏口に捨てられていたんだよ！　この子は私と貴方の娘として育てようよ。」

興奮気味に扉を蹴り開けたアンジェの姿に驚いた男は、そのアンジェが両手に抱える籠の中身に更に驚いた。

そんな男に満面の笑みを浮かべ、アンジェは先程自分が考えた事を男に向かって息継ぎもせずに言いきった。

「・・・その子は捨て後なのかい・・・？　へぇ～。　結構良い布で包まれているね。」

「ええ。　なんでも、襲われた母親が託した相手が捨てて行ったらしいのよ。」

赤子を包む布が上質なものであると確認している男に、アンジェは先程の手紙を手渡す。
その手紙を読み終わった後に、顔を上げた男の表情は笑顔だった。

「そうだね、アンジェ。　僕達で育てよう。　はじめまして、メルエ。　今日から君のお父さんだよ。」

「ふふふ。　おはよう、メルエ。　今日からお母さんになるアンジェよ。」

目が開いているのか、開いていないのか分からないが、目を覚ました様子の赤子に対し挨拶をする二人。　その様子はどこにでもいる夫婦の様な、微笑ましく、暖かい姿。

それから数年、アンジェは忙しかった。
近くに子供が生まれたばかりの母親の噂を聞きつけ、母乳を一緒に上げてもらえるように、ゴールドを渡し頼みこみ、明け方から眠る生活だったのを、仕事が終わってすぐに眠り、夜泣きをするメルエをあやし、ミルクを与える。

しかし、それはアンジェにとって確かな幸せだった。
男も未だに結婚を口にしないが、メルエをあやす表情は優しいものだった。

劇場で踊り、その傍にメルエを置く。
子供のいない座長夫婦も、おおっぴらに許可しないまでも、黙認するという形でそれを遠巻きに見ていた。

そんな幸せは、突如として変貌する。

それは、アンジェと競っていたレナという踊り子が、しつこく付きまとう客に嫌気が差し、劇場を飛び出してしまったことから始まった。

レナはここ最近悩んでいた。
しつこい客が、待ち伏せをし、家までついてくる。
プレゼントの中に、見るのもおぞましい物が入っている等、彼女は踊りを踊る精神状態ではなくなってきていたのだ。　そして、ついに劇場を去って行った。

突如消えたＮＯ．１に劇場はひっくり返したような騒ぎとなった。
今や押しも押されぬＮＯ．１となったレナの代役はいない。
かつては人気を二分していたアンジェも、その人気に陰りが差していた。

「アンジェ。　アンタの下に付いているあの娘はどうなんだい？」

「　えっ！？　」

そう。
いないのなら、作るしかない。
それが、この夜の町＞アッサラーム＜において、この劇場が常に一番輝いている理由。
上の者が年老いていっても、すぐにそれに代わる若い娘が出てくる。
それを育てるのも踊り子の役目なのだ。

「え、ええ。　踊りなら、もう舞台に出しても大丈夫でしょう。後は慣れの問題かと。」

「そうかい・・・・・なら、今日からあの娘にも舞台に立ってもらうよ。　アンジェ、しっかり見てやんな。」

アンジェの目から見ても、アンジェが可愛がっているその娘は、生まれついての器量良し。
そして、アンジェが先輩から受け継いだ踊りを必死の想いで我が物にしようとしている。
そんなアンジェの答えに、満足そうに頷いた奥方は、今日の舞台に立つ人間を読み上げた。

そう、その日から、アンジェの生活が様変わりを迎える。

アンジェの育てた娘が舞台に立ち始めてから数日が経った辺りから、アンジェと暮らしていた男が夜の仕事をサボるようになってきた。
メルエは『はいはい』をするようになり、目が離せなくなってきたアンジェは舞台に上がる頻度も少なくなってくる。
それに伴い、収入も下がり、アンジェの手元に入ってくるゴールドも減るのだが、そのゴールドもまた、いつの間にか無くなっている。
アンジェはメルエにとって必要な物や食料などを買い、戸棚にゴールドを仕舞っていたが、いつの間にか戸棚の中が空っぽになる。
初めは盗賊が出たのかと考えた。

しかし、周辺の家に被害はない。

ならば、該当者は一人だけ。

そのことに思い至ったアンジェは、共に住む男を問い詰めるが、答えは白々しい嘘。

誰にもでも解るその嘘を平気で突く男にアンジェは呆れた。

「何に使っているんだい！？　貴方、最近仕事にも行ってないみたいじゃないか！？」

「　だから、ゴールドは取ってないって言ってるじゃないか！？仕事だって行っているさ！　」

「　嘘言いなさんな！　私は知っているんだよ！　」

「　うるさいな！　」

何度か繰り返される罵声。

最後に捨て台詞を吐いた男は家を出て行った。

そして、その日から男が家に帰ってこないことが多くなる。

たまに帰ってくるのは、アンジェがいないとき。

今ではつかまり立ちを始めたメルエがぼうっと見守る中、戸棚からゴールドを取り出し、そのまま町へと出て行く。

アンジェの生活は崩れ、それと共にアンジェの心もボロボロに崩れて行く。
そして、決定的なことが起こった。

「なんだって!?」

久しぶりにアンジェのいる時に戻ってきた男を見て、アンジェは心底喜んだ。
『また自分の所に戻ってきてくれたのだ』と。
男に新しい女ができたのではないかと言うことぐらいアンジェにも解っていた。
故に、男が飛び出してからは、メルエを劇場に連れて行くことなく、踊りに集中した。
また、昔の様に美しい踊りを踊れば、人気も上がり、収入も上がる。
そうすれば、あの男は自分の所へ戻ってくると。

しかし、帰ってきた男の言葉は、アンジェが待っていたものとは遠く離れたものだった。
それは、アンジェとの離別の宣言。
そして、それは衝撃の結果を生む。

「私は嫌だよ！」

「アンジェが嫌でも、僕はもう二度と君に会うことはない。今、僕の傍にいる女性がね、僕の子供を身籠ったのさ。」

「えっ！？」

男の言葉を了承しないアンジェに告げられたのは、厭らしい笑みを浮かべた男の言葉。
その言葉にアンジェの視界が黒く染まって行く。
もはや、アンジェの視界に何かが入り込むことはなかった。

「その女性は、若く美しい。しかも上品なんだ。きっと僕との子供はかわいいに違いないよ。」

「なっ！？　こ、ここにいる『メルエ』だって私と貴方の娘じゃないか！？」

男が視界に入ってこない状態にもかかわらず、アンジェは必死の抵抗を繰り返す。
それを聞いた男は、更にあざ笑うかのような表情を浮かべ、吐き捨てるように呟いた。

「はっ！　僕と君の娘だって？　その捨て子がかい？　良い布で包まっているから、どこかの貴族の子供かもしれないって思っていたけど、ここ数年全く捜索している様子もない。」

「・・・・まさか・・・・・」

アンジェは驚愕した。
男が言っている内容は、メルエの身なりが良かったから引き取ったというのだ。
メルエを探しにきた人間から礼を貰う為に・・・・・

「　悪いけど、そんな子供は僕の子供ではないよ。　子供が出来ないのは僕のせいかもしれないから、今まで黙っていたけど・・・・そうではないことが分かった以上、そんな捨て子を自分の子供と思うつもりはない。　それと、もう舞台でも華がなくなった君と暮らすつもりもないから。」

「・・・・そんな・・・・・」

その言葉を最後に男は出口へと向かう。
その後ろ姿をアンジェは呆然と眺めていた。

出口へと向かう男の足元に、それまで指を咥えながら座っていたメルエが立ちあがり、男に向かっていく。

「・・・・・あぁ～・・・・・・・」

「　！！　なんだよ！　汚い手で触るな！　」

自分の足元を掴むメルエの手を足を振ることで払いのけ、男はそのままメルエを蹴り飛ばした。　男に蹴り飛ばされ後ろに転がるメルエ。
ようやくその身体が止まった時には、大きな声を上げて泣き出した。

男が出て行った後には、呆然と座り込む女性と、大きな泣き声を張り上げる赤子が残る。
その日から、女性の虐待が始まる。

結局男は、＞アッサラーム＜の町を出て行った。
それもそのはず。

男の子供を身籠ったのは、アンジェが可愛がっていたあの娘だったのだ。
娘もまた、身籠った身体で男と共に逃げるように＞アッサラーム＜から消えていた。

ＮＯ．１が去り、次代のＮＯ．１までもが居なくなった劇場は大慌てだった。
誰もアンジェに同情してくれる人間等いない。
そんな話は、この夜の町には溢れかえっているのだ。

呆然としているアンジェに舞台に上がる仕事が回ってこなくなってきた。
座長も、その奥方も、これを機会に踊り子の世代交代を進め始めた。
アンジェにしたって、まだ若い。
しかし、十代の頃の様に華がある訳ではなかった。

必然的に、家にいることが多くなる。
仕事もなく、収入もない。
僅かなゴールドでアルコールを買い、ひたすらそれを飲みつくす。

「・・・あぅ・・・・・あぁぅ・・・・・」

「　うるさいね！　」

母親に近寄ろうと、おぼつかない足取りで歩くメルエを容赦のない

平手が襲う。
メルエはすでにミルクではなく、食料を口にし始めている。
しかし、アンジェのアルコールに消えて行くゴールド以外、食料を買うゴールド等余っていない。

アンジェに頬を打たれたメルエが泣き叫び、その泣き声にアンジェの神経は更に逆撫でされる。　仰向けになりながら泣き声を上げる赤子をアンジェは組み伏せ、更にその手を上げた。　何度も何度も振り下ろされる平手に、メルエの頬は真っ赤に腫れあがり、泣き疲れるまで、その虐待は続く。

メルエが立ちあがり、一人で歩けるようになり、自我が目覚め始めた頃。
メルエは一切口を開かなくなった。
目は光を宿しておらず、食料を与えられていないため、その身体は痩せ細っていた。

その姿は、外に出てアンジェのアルコールを買いに行く時に、そのメルエの姿を見かけた劇場の座長夫妻が、『良く今まで生きていたものだ』という想いを持つ程のものであった。

そして、座長夫妻は、メルエの為に仕事を与えることにした。
それは、劇場の下働き。
それは、踊り子の服を洗い、踊り子の身の回りを世話するもの。

「メルエ！　アンタ、しっかり働いておいでよ！」

「・・・・・・・・・」

「なんだい！？　何か喋りなよ、気味が悪いね！」

座長夫妻の話を聞いたアンジェは、嬉々としてメルエを劇場に送り込む。
多少なりともゴールドが入るのであれば、それでいいと思ったのであろう。
メルエにそれを伝え、黙ったまま頷くメルエに、再びその平手を打ちすえる。

座長夫妻は、そんな変わり果てたアンジェに驚き、そして哀しんだ。
あの、踊りにひた向きで、明るく笑うアンジェは、もうどこにもいないのだと・・・・

メルエはその後数年、劇場で下働きを続けた。
下働きの給金は１０ゴールド。
それは、全てアンジェのアルコール代へと消えて行く。

メルエの食事事情を心配した座長夫妻は、メルエに賄いの様なものを毎日与えていた。
その為、痩せ衰えていたメルエの身体にも、次第に肉付きが戻り、年相応の少女の姿になって行く。

一度、メルエのその変貌を疑問に思ったアンジェが、座長に詰め寄り、メルエの食事はいらないから、食事分も給金に反映させろと言ったことがあるが、座長は頑として受け付けなかった。

もう、あの優しく微笑むアンジェはいない。
優しく、それでいて厳しく教えていた娘に裏切られたあの日から、アンジェは別人に変わってしまった。

そんなアンジェから、メルエの身を護るのは座長夫妻の仕事となっていた。
護ると言えば、聞こえはいいが、実質は『人』として生きていけるようにすること。
ただそれだけだった。

「メルエ！　何やってんだい！　こっちに洗い物がまだ残ってるだろ！」

「本当に鈍臭い子だね！」

小さな手で、必死に洗濯をしているメルエの頭を小突き、その桶の中に新たな洗い物を大量に入れて行く。
そんな行為に対しても、泣きもせず、ただ焦点の合っていない瞳を向けるメルエに踊り子たちの神経が逆撫でされる。

劇場の踊り子たちからも、謂れのない暴力を受けるメルエを座長夫妻はただ見ているだけだった。それは、世間の厳しさを教えるためなのか、それとも何か別の目的があるのかは解らない。
メルエは、ただ黙々と洗濯を行い、それを干し、そして舞台を掃除する。
踊り子の態度は、その下にいる練習生にも波及し、下働きをしているくせに踊りを学ばないメルエは、格好の攻撃の的となる。

家にいてはアンジェに殴られ、劇場にいても、食事は与えられるが、更に大勢から謂れもない攻撃を受ける。
メルエに居場所などなかった。

そんなある日、メルエはアンジェに呼ばれた。
呼ばれることは珍しいことではない。

アルコールがなくなった時、劇場から給金が出た時などは、必ずアンジェに呼ばれる。
何も考えることなく、アンジェの前に顔を出したメルエは、そのアンジェの顔を見て驚いた。
笑顔だったのだ。
それも優しい笑顔。
メルエが物心ついた時から一度も見たことのない笑顔。

「メルエ。　アンタ、今日は劇場に行かなくてもいいよ。　私についてきな。」

「・・・・・・・・」

笑顔のまま、メルエに向かって『仕事にいかなくてもいい』と言うアンジェの言葉に、しばらく首を傾げていたメルエであるが、初めて見る母親の笑顔に恐怖を感じ、ゆっくりと首を縦に振った。
素直に頷くメルエに、機嫌よく身支度を整えるアンジェは、黙って頷くメルエを叩くことはなかった。

「行くよ、メルエ！」

「・・・・・・・・」

アンジェに手を引かれて歩き出すメルエは、劇場の前を通らないように、町の外へと連れ出される。
初めて見る町の外。
それは、メルエの目に強烈に焼き付いた。

町の門を出た左手に、一台の馬車が止まっていた。
薄汚れた幌に、くたびれた馬。
そして、その馬の手綱を引く男は、屈強で大きい。

アンジェは躊躇なくメルエの手を引きながら、馬車の傍に立っている男に近づいて行く。
そこで、初めてメルエの胸に恐怖が湧きあがった。
メルエの目から見ると、山の様に大きな男達が三人。
手綱を握る男も含めると、四人。
それは、家と劇場の往復しかしてこなかったメルエにとって初めて見る光景であり、初めて見る生物。
それがメルエには怖かった。

「おお、来たか！？　約束の２０ゴールドだ。」

「どうも・・・・じゃあ、頼んだよ。」

男からゴールドを受け取ったアンジェは、引いていたメルエの手を男へと引き渡そうとする。　ゴールドを支払った男の手がメルエへと伸びた時、メルエは動いた。

「なっ！？」

「おいおい、頼むぜ・・・・」

アンジェは驚いた。
メルエは、男の手を嫌がり、自分の足にしがみ付くように抱きついてきたのである。
あれ程、怒鳴り、殴り、罵倒してきた自分にしがみつくメルエにアンジェは驚いたのだ。

「ほら！　こっちはゴールドを払ったんだ。　てめぇは俺達のもんなんだ。　さっさと来いよ！」

しがみつくメルエを強引に引き剥がし、メルエを連れ去ろうとする男達。
それは奴隷商人と呼ばれる男たちだった。
メルエが働いて貰える給金は１０ゴールド。
その倍の２０ゴールドでアンジェはメルエを売った。
たった二月分の給金だ。

奴隷商人に引き摺られるメルエの目を見て、アンジェは初めて後悔した。
メルエの瞳が怯えを見せていたのだ。

自分にどれだけ怒鳴られ、どれだけ叩かれても、死んだ魚の様に生

気のない瞳をしていたメルエが怯えている。
まるで、自分に助けを求めるように・・・・

「メ、メル・・・・・」

その先の言葉は繋げなかった。
言葉を発して何になるというのか。
引き止めるのか？
このゴールドを突き返し、メルエを取り戻すのか？

それはおそらく不可能。
奴隷商人が一度ゴールドを支払えば、そこで契約は成立する。
その契約を覆すことはできない。

「・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・」

その声を聞いた時、アンジェは自分を呪い殺したくなった。
初めて聞いたメルエの声。
泣き声以外、話そうともしなかったメルエが、今、話すことも咎めていた自分に向かって助けを求めるように言葉を発したのだ。

母親としての仕事など、あの時以来何もしていない。
むしろ、メルエが生きているという事実が不思議な程の事を繰り返し行ってきた。
それでも、メルエはアンジェに助けを求めているのだ。

アンジェを母親と信じ、アンジェだけがこの場で自分を救ってくれる存在だと信じて疑わない。　そんな自分を信じきったメルエの瞳をアンジェは見ていることができなかった。
故に視線を外す。
それが、この後、自分を生涯苦しめることになる行為だとは知らず。

アンジェが視線を外している間に、メルエは男達の手によって馬車の中に入れられた。
視線を背けたアンジェを見て、メルエは諦めたのかもしれない。
馬車に入るまで、アンジェの耳にメルエの泣き声も、叫び声も聞こえなかった。

「　よし、行くぞ！　」

馬車に乗り込んだリーダー格の男の合図に、手綱を引いていた男の手が動き、ゆっくりと馬車が動き出す。　＞アッサラーム＜から北の方角へ向かっていく馬車は、その先にあるロマリアに向かって行くのかもしれない。
それは、もうアンジェには関係もなく、立ち入ることのできないこと。

「・・・・・・メ、メルエ・・・・・・・うぅぅ・・・・・・・」

馬車の後ろ姿が小さくなっていく。
そこで、初めてアンジェは涙を溢した。

あの時、男に裏切られ、可愛がっていた後輩に裏切られても涙一つ見せなかったアンジェが、今涙を抑えきれずこぼしている。

それは、哀しみの涙なのか、後悔の涙なのか、それとも懺悔の涙なのかは、アンジェしか解らない。

過去～メルエ～（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

メルエの謎のほんの一部です。
しかし、また重く暗い話になってしまいました。
何か、自分でも書いていて鬱になりそうな内容でした・・・・
しかし、これも構想内の話。
頑張ります。

ご意見ご感想をお待ちしております。

アッサラームの町？（前書き）

アッサラームで三話もかかってしまいました。

カミュとサラは、一件の酒場のテーブルについていた。
二人の前には、先程声をかけた女性が注文した酒を呷り、出てきた料理を口に入れている。

酒場で酒と食事の代金を肩代わりすることを条件に、カミュ達は彼女の話を聞けることとなり、彼女のいう酒場までついてきたのだ。

彼女は、聞いていた通りにメルエの母親だった。
ただ、義理のではあったが・・・・・

「まぁ、そんな話さね。」

「そ、そんな話!?」

グラスに酒を注ぎながら、ぼそりと呟いたメルエの母親と名乗る女性の言葉に、サラが勢いよく立ちあがった。
サラにとって、それは『そんな話』で許されるような問題ではない。
それこそ、目の前の女性を八つ裂きにしてしまいたい程の怒りを覚えた。

「貴女は・・・・貴女は・・・・メルエをなんだと思っているのですか!?」

「私の娘さね。　娘なんだから、何をしようと私の勝手だろ。」

サラの怒りの発言も、この女性にはまさにどこ吹く風。
返って来た余りの言葉に、サラは絶句する。
隣に座るカミュの瞳もかなり厳しい目つきになっていた。

「よりにもよって、『人』を・・・・『人』をたかだか２０ゴールドで売り払うなんて・・・」

「はっ！　メルエはそのお陰でアンタ方と一緒にいることができたんだろ？　感謝こそされ、恨まれる謂れはないね。」

「メルエは・・・メルエは殺されるところだったのですよ！！」

「　！！！　」

その時サラには見えなかった。
目の前の女性の目が一瞬見開かれたことを。
女性の物言いに激昂し、周囲の視線も気にせずに叫ぶサラにはそれに気が付く余裕などなかったのだ。

「・・・・・もういい・・・・・・」

「・・・・カミュ様・・・・・」

激昂するサラを抑え、口を開くカミュ。
そのカミュの言葉に、目の前の女性も落ち着きを取り戻す。

「ど、奴隷なんだから、何をされても仕方ないんだろ？」

「・・・・そうだな・・・・それもこれもアンタが招いたものだ。
メルエには、ここで幸せに暮らすという可能性もあったはずだ。
それを潰したのはアンタだろ？」

「・・・・カミュ様・・・・・」

カミュは、先程の女性の動揺を確かに見ていた。
それでも、自分の胸の内に湧き上がる黒い衝動を抑えることはしなかった。
自分の叫びを抑制したはずのカミュが、女性に向かって冷たい言葉を投げかける姿をサラは呆然と見守るしかできなかった。
カミュは、先程まで被っていた仮面を取り外している。
もはや口調に遠慮などどこにもない。

「・・・・話はそれだけだな・・・・・」

カミュは腰の袋に入っているゴールドをいくらかテーブルに置き、立ち上がる。
それは、メルエの義母であるアンジェとの会話を打ち切るものだった。

「・・・メ、メルエは・・・・メルエはアンタ方とは話すのかい・・・・？」

背中を向けるカミュに、テーブルを見つめたままアンジェは呟いた。
アンジェの頭には、未だにメルエとの別れの場面がこびり付いて離れない。
あの、救いを求める瞳が、救いを求める言葉が・・・・・

「・・・・・ああ・・・・・・」

「・・・アンタ方には・・・笑顔を見せるかい・・・・・？」

いつからだろう。
メルエがアンジェに笑顔を見せなくなったのは。

まだ、アンジェに口を開いてくれていた頃。
言葉を知らず、声を洩らすだけだった頃は、確かにメルエはアンジェに笑顔を向け、アンジェの傍に近寄ろうとしてくれていた。

「・・・・・ああ・・・・・・」

「・・・そ・・・そうかい・・・・・・・・うぅぅ・・・・・・」

カミュの返事に、アンジェは机に崩れる。
カミュやサラに聞こえないように嗚咽を漏らし、顔を上げることはなかった。

アンジェは、あの日、あのメルエを奴隷商人に引き渡したその日から、摂取するアルコールの量が一段と増えていた。
いくらアルコールを飲んでも、あのメルエの瞳が忘れられない。
あのメルエの声が耳から離れない。

あの日から、アンジェの心に自分を裏切った男も、自分を裏切った娘も浮かんでくることはなかった。　浮かぶのは、全てメルエのこと。

他人の乳を懸命に飲むメルエの姿。
腹を満たし、満足そうに目を閉じ眠るメルエの姿。
自分の姿が見えなくなると泣き、自分が近寄ると輝くような笑顔を向け笑うメルエ。
裏切られ、自暴自棄になり、その捌け口をメルエに求めた自分に、それでも笑顔を向けるメルエ。
叩いても、叩いても、真っ赤に腫れあがった頬をしながらも、自分に手を伸ばすメルエ。

そして、最後に必ず、あの怯えたメルエの瞳と、助けを求めるメルエの声がアンジェを襲うのだ。　気が狂いそうだった。　何度も死のうと考えた。
メルエを奴隷として僅かなゴールドで売り払った立場にもかかわらず、その安否に思い悩む自分を許せなかった。

故に、自分の前に出てきた、今のメルエの保護者が、自分がメルエにした行為に激昂し、叫び声を上げる姿を見て、感極まった。
メルエは今、幸せかどうかは別にしても、自ら笑顔を見せることを躊躇うことはないのだ。

「・・・・・・行くぞ・・・・・・」

「・・・・・・はい・・・・・・」

テーブルに伏せるアンジェを残し、カミュとサラは酒場を後にする。
サラの心には暗い影が残った。
それは、あのメルエの母親と名乗る女性が行った行為に対する怒り。
だが、今サラを苦しめているのは、『僧侶』という身分でありながら、あの女性を許すことも導く気も起きずに、ただ『殺してやりたい』という想いを持ってしまっている黒い自分に対してのものだった。

サラの復讐の対象は『魔物』であり、『人』ではない。
『魔物』の脅威に怯える『人』の未来を救うのがサラの目標なのだ。
あの女性も、大まかに括れば、その『人』であることは間違いがない。

この世の中に生きている『人』は少なからず『魔物』の脅威に怯えている。
それでも、サラはあの女性が『魔物』に襲われていたとしても、それに救いの手を差し伸べる気持ちは微塵もなかった。
そんな自分をサラは許せなかったのだ。

「・・・・ついてきたのが、アンタで良かった・・・・」

「えっ!?」

宿屋への道を歩きながら、ぼそりと呟いたカミュの言葉に、自分の思考の中に入り込んでいたサラは、弾かれたように顔を上げた。

「・・・・あの戦士が隣にいたら、あの母親は、俺が止める前に叩き切られていたかもしれない・・・・」

「えっ!?　そ、そんな、いくらリーシャさんでも、それは・・・・」

カミュの言葉に反論しようとするサラであったが、自分の頭の中でその事を想像すると、決して強く反論できるものではなかった。

「このことを・・・・リーシャさんには話すのですか・・・・?」

リーシャは間違いなく激昂するだろう。
それこそ、殺しかねない程に。
それは、サラにも予想ができた。

「・・・話さない訳にはいかないだろうな・・・・あの戦士は、この情報を掴むために俺を外に出したんだろうから・・・・・」

「えっ!?　そ、そうなのですか？　次の目的地に関する情報のことではなかったのですか？」

「・・・アンタは、あの戦士が、そこまで頭が回ると思っているのか？」

カミュの言葉に、サラは再び答えに窮する。
サラはてっきり、＞ノアニール＜で聞いたオルテガの足取りを追うために外に出たと思っていた。
＞魔法のカギ＜という物を求めて＞アッサラーム＜に向かったオルテガがどこへ向かったのか。
それが解らなければ、自分達の行動もここまでが限界となるのだ。

サラが戸惑っている間に、二人は宿屋の入口に到着する。
そのままカミュは宿屋の階段を上がり、サラ達が泊まっている部屋の前に辿り着いた。
部屋のドアをノックすると、中からリーシャの声が聞こえてくる。

サラは、そのリーシャの声で、自分の中を渦巻く黒い衝動が幾分かの落ち着きを見せて行くのを感じた。

「で？　どうだったんだ？」

「・・・・メルエは・・・・・？」

「もう寝た。　疲れていたんだろう。　食事をして湯浴みを終えたら、もう寝ていた。」

メルエの状況を聞くと、リーシャは優しい笑みを浮かべて、膨らんでいる一つのベッドに視線を向ける。
サラは、『これこそ母親が我が子に示す母性ではないか？』と思う。
メルエの身を案じてその身を投げ出し、優しい笑顔を向けメルエを労わる。
そんな表情ができるリーシャがサラは好きだった。

「・・・・そうか・・・・下で話す・・・・」

「・・・・わかった・・・・サラ、メルエを見ていてくれるか？」

カミュの発言に、リーシャが問いかけた内容が、重く、苦しい話だと理解したリーシャは、サラにメルエのことを頼み、カミュと共に

階下へと降りて行った。

残されたサラは、メルエのベッドに近寄る。
そこには、あどけない表情で眠るメルエ。
この町に入ることを拒む程、メルエの心は傷ついていたのだろう。

「・・・メルエ・・・私は、メルエを護りますよ・・・」

サラの呟きは、灯りを消した部屋の闇に溶けて行く。

「・・・・カミュ・・・・・・・今、その義母親(はは)はどこにいる・・・・・・？」

「・・・行ってどうするつもりだ？　斬り殺すつもりか？」

宿屋の一階部分にあるラウンジの様な場所で、カミュは先程メルエの義母に聞いた話を、着色などせず、そのままリーシャに伝えた。

案の定、リーシャは話の途中から、その身体を震わせ始め、カミュの話が終わった時にはその震えが収まっていた。

夜中に差し掛かり、宿屋のラウンジの灯りも消されている。

真っ暗な中、月明かりに照らされたテーブルで、表情の見えないリーシャの呟きは、サラではないが『悪魔』の呟きに聞こえるようなものだった。

「お、お前は！　お前は許せるのか！？　メルエを・・・メルエをそんな目にあわせた人間を許せるのか！？　メルエはお前にとって何なのだ！」

「・・・・・・・」

「カミュ！」

リーシャは、カミュがサラに話した予想通り、激昂した。

怒りに震えていた肩は、その震えを収め、目は怒りに染まっていた。

その怒りは、抑えようと口を開くカミュへと向けられる。

リーシャは自分でも理不尽であることは承知していた。
それでも、胸の奥から湧きあがる怒りを抑えることができなかったのだ。

「・・・・メルエに関しては、アンタと同じだ・・・・だが、許す許さないは、俺達が決めることじゃない。　それを決めていいのは、メルエだけだ。」

「・・・・カミュ・・・・・」

リーシャは自分の中で暴れ回っていた怒りの炎が鎮火していくのを感じた。
それは、カミュが言った言葉。
『メルエに関しては、リーシャと同じ』というもの。
何度も確認してきたはずだ。
カミュがメルエを大切に思っている事など、リーシャも解っていたはずなのである。
それでも、聞かずにはいられなかったのは、カミュが余りにも冷静だからだった。

しかし、それは間違いだった。
最近の表情があるカミュを見ていたリーシャは忘れていたのだ。
カミュが怒る時、興味がない人間と対する時、その表情がなくなることを。
今のカミュの表情は『無』。
リーシャを見てはいるが、見てはいない。
それが、カミュの怒りの度合いを顕著に表しているものだった。

「・・・・すまない・・・・・感情的になりすぎた・・・・・」

「・・・・それが・・・・・アンタだ・・・・気にするな・・・・・」

「　なにっ！？　」

カミュの怒りに気が付き、素直に頭を下げるリーシャに対し、表情を失くしたままカミュは失礼千万なことを口にする。
カミュの言い分では、まるで自分が常に感情むき出しで突っ走っている頭の悪い人間の様に聞こえる。

失礼な言い分に顔を上げたリーシャは、カミュの表情が変わっていないことに気が付く。
もし、カミュがリーシャをからかっているのだとしたら、口端を上げるような仕草をしているはずだったが、そんな素振りは少しもない。
つまり、カミュの発言は、リーシャを馬鹿にしていたのではなく、本心からそう思い、それを悪いこととは思っていないということなのだろう。

「・・・・決めるのは・・・・・メルエだ・・・・・」

「・・・お前は・・・この町に・・・そんな親の下にメルエを置い

て行くつもりなのか？」

続くカミュの言葉にリーシャは恐怖した。
カミュは自分達が怒りを覚えるような親の下へメルエを置いて行くつもりなのか。
メルエを大事に思っているのにもかかわらず、メルエが幸せになる可能性をつぶすつもりなのかと。

「・・・それも・・・メルエが決めることだ・・・」

「あっ！？　ま、待て、カミュ！」

リーシャの追随にも、同じ回答をし、カミュはそのまま外へ出て行った。
一瞬カミュの行動を掴みきれなかったリーシャは反応が遅れるが、慌ててカミュを追って外へ飛び出した。

夜の喧騒はまだ続いている。
町の灯りは灯り続け、夜だというのに昼の様な明るさを誇る。
月明かりはその人工的な光に阻まれ、地上に降り立つことはない。
外に出てカミュを探すと、宿屋の裏手に向かって歩いて行くカミュの姿を見つけ、リーシャはその後を追った。

「・・・・・お前は・・・・・・よく月を見上げているな・・・・・・」

「・・・・もう・・・・話は終わったはずだ・・・・」

宿屋の裏手という、町の灯りが届かない場所で月を見上げるカミュに、リーシャは後ろから語りかけるが、それに対するカミュの答えは、簡素な拒絶だった。
それでも、今のリーシャはめげない。

「まだ終わっていない。　お前は、メルエがその義理の親の下に戻り、再び虐待を受けたとしても、それを無視することができるのか？」

「・・・・・・・」

「　カミュ！　」

リーシャの問いに黙して語らないカミュに、リーシャの我慢も限界に達した。
そのリーシャの叫びにカミュはゆっくりと振り返った。
その表情にリーシャは驚く。
無表情でもない、笑顔でもない。
そこにあるのは・・・・・

「・・・俺は、親というものが解らない・・・・アンタは、親は子を愛するものというのが、当然なのだろうな・・・・」

「 なっ!? 当たり前だろ!? 」

カミュの呟きが、リーシャの胸を抉る。
『何を当然のことを言っているのだ?』と・・・

「・・・子供にとって『親』とは、何があっても自分を護ってくれる象徴だ・・・それは、たぶん産まれ落ちた時から植え付けられているんだろう・・・・」

「・・・カ、カミュ・・・・」

突然語り出すカミュ。
リーシャは戸惑った。

「・・・どんなに傷つけられても・・・どれ程痛めつけられても・・・どれだけ突き放されても。　子供にとって、頼る者は自分の親しかいない・・・・」

「・・・・・・」

もはや、リーシャは言葉すら発することはできなかった。
カミュが何を話すのか解らない。
しかし、身体を襲う寒気はまるで周囲の気温が急激に下がったのではないかとすら思わせる。

「・・・『自分が何か悪かったのではないか?』『言う通りにしていれば、笑いかけてくれるのではないか?』『辛いと言っても助けてくれないのであれば、我慢していれば哀れと思い、抱きしめてくれるのではないか?』と常に考える。　絶対の保護者である『親』が自分を傷つけるのは、自分が悪いからだとな・・・・」

「・・・・・・」

リーシャの歯が噛み合わない。
カミュが語る内容に恐怖すら感じる。
『怖い』
『逃げ出したい』

とリーシャの脳は足へと指示を出すが、足は動かない。

「・・・・だが・・・・それでも・・・・それでも報われない時、最終的に子供が何を思い、どう考えるのか・・・・アンタに解るか？」

「・・・・・・・」

カミュがリーシャの目を見据えた。
リーシャは恐怖のあまり、首を横に振ることしかできなかった。

「・・・・・『他人』だ・・・・・」

「　！！！　」

「・・・・・これは、『親』ではない・・・・・ただの『他人』と認識する・・・・」

哀しすぎる。
それは、父親であるサブリナの愛を一身に受けて育ったリーシャに取っては、考えたくもないものだった。

「・・・メルエはその認識をするのが早かったんだろうな・・・」

「　そ、それ・・・」

『それは、誰と比べてだ！？』
と言おうとして、リーシャは思いとどまった。

そんなことは解りきっていること。
おそらく、今カミュが話した内容は、メルエではない。
そう。
カミュ自身の体験なのだろう。

カミュは生まれながらにして『勇者』としての責務を負わされた。
アリアハンの英雄オルテガの死が決定的になった時、それは『次代の』とか『勇者候補』とかではなく、カミュの存在自体が『勇者』ということを義務付けられたのだ。

おそらく、オルテガの父オルテナも、オルテガの妻ニーナも、カミュが『勇者』として生きて行くために厳しく接したのだろう。
リーシャよりも幼い頃から剣を学ばせ、魔法を学ばせる。
剣を学ぶときには、怪我など付き物だ。
魔法にしたって、実戦で使えるようになる為にはそれ相応のリスクを背負うこととなる。

何度も傷つけられては立ち上がることを要求され、立ち上がれば再び傷つけられる。
リーシャの場合は、自分で学びたいと父に話したことがきっかけであり、父の剣も厳しかったが、娘であるリーシャを傷つけることは

なかった。
ましてや、剣を握った途端、討伐隊への同道などを求められることもなかった。

それでも、幼いカミュは親であり、祖父である、ニーナとオルテナに救いを求めていたのだろう。　それは、カミュがメルエにルーラの話をしていた時の内容に表れていた。
おそらく、カミュはあの時から、ニーナとオルテナを『他人』として見るようになってしまったのかもしれない。

「・・・メルエが・・・それでもまだ、あの義母を母として見ているのなら、俺が口を挟む問題じゃない。　メルエはあの女性を、まだ本当の母親だと思っているはずだ。」

「・・・なに・・・？」

「あの女性は、捨て子であったことをメルエに言っていない。」

そう。
カミュが話を聞いた限り、メルエの義母であるアンジェは、メルエが自分の本当の娘ではないことを話してはいない。

メルエは、最後の最後まで、アンジェを母と思い、親と思い、救いを求めていた。
それは、カミュもサラも知らない。
奴隷商人に引き渡されるとき、救いをアンジェに求めているのだ。

もし、カミュの言うとおり、メルエがアンジェを『他人』として見ているとすれば、あの時、救いを求めて母を見つめた自分の瞳から目を逸らされた時からかもしれない。

「・・・カミュ・・・お前は・・・・・」

「後は、メルエの判断に任せる。」

その言葉を最後に、カミュは自室へと戻るため、宿屋の入口に入って行った。

取り残されたのは、リーシャ唯一人。

「・・・・カミュ・・・・・お前は、メルエがお前より母親を選ぶとでも思っているのか・・・？」

リーシャの呟きはカミュの耳に届く筈もなく、夜の闇へと溶けて行く。

先程感じた冷気などどこにもなく、町の喧騒が遠く聞こえていた。

「カミュ！　これは何なんだ！？」

翌朝、まだベッドに入っていたカミュの部屋を強引に開け、怒鳴り声を上げたリーシャが入って来た。
その後ろには眠そうに目を擦るメルエ。
そして、寝癖も直しきっていないサラがその後ろについて来ている。

何故そこまでして、自分の部屋に突入してきたリーシャについてきたのか。
それがカミュには皆目見当もつかなかった。

「・・・・何があった・・・・・？」

「何ではない！　昨日は聞きそびれてしまったが、これは何だ！？」

リーシャが怒鳴り声と共にカミュに突き出した物は、昨晩カミュが購入した物だった。
サラがそれを手にするリーシャを想像し、身震いした物。

そこで、ようやくカミュも事の顛末を理解した。
朝起きたリーシャが、部屋に置いてある包みを見て、昨日武器屋が持ってきたことを思い出し、サラを叩き起こして事情を聞くが、要領を得ないためにカミュも部屋に突入してきたということだろう。
メルエは騒がしさに目を覚まし、皆が部屋を出て行くからついてきただけのようだ。

「・・・見て解らないのか・・・＞鉄の斧＜という武器らしい・・・」

「だから！　何故それが私の下に届けられたかを聞いているんだ！？」

ベッドから身体を起こすが、出ようとはしないカミュに一歩近づき、リーシャは唾を飛ばして詰め寄って行く。
メルエはサラの足に手を置きながら、その包みを興味深げに眺めていた。

「・・・・・手紙を添えておいたはずだが・・・・・・」

「『アンタの武器だ』の一言しか書いていないこの紙のことか！？」

「・・・・・カミュ様・・・・・・」

一枚の紙を振り回すリーシャが叫ぶ内容を聞いて、サラは溜息を溢した。

『いくら何でも、それはないのでは？』と・・・・・・

リーシャの為に買ったとはいえ、少しばかりの説明はあって然るべきだとサラは思っていた。

「・・・・・斧は使えないのか・・・・・？」

「そう言う問題ではない！　私には、＞鋼鉄の剣＜がある。　他の武器も使うことはできるが、剣が一番得意だ。　得意な武器を使用していた方が戦闘の時には役に立てる。」

宮廷騎士ともなれば、どんな武器にも対応することができるように求められる。

それは、戦場で自分の得物が破損する可能性もあるからだ。

その場合、近くに落ちている武器、または敵から奪った武器で対応しなければならない。

その為に、騎士・戦士はほぼ全ての武器の対応性を求められるのだ。

しかし、リーシャの言うとおり、それぞれに得意分野というものが

ある。
それは、幼き頃より訓練を積んだ武器や、訓練の中で自分の戦いにあった武器などだ。
それがリーシャにとっては剣なのであろう。

「・・・・そうか・・・・似合うとは思ったのだが・・・・・」

「・・・ほぅ・・・・・・・お前は、私にはこのような無粋な斧を振り回すのが似合うというのか？」

「・・・・そこの僧侶もそう言っていたぞ・・・・」

サラは突然振られたことに、驚き、咄嗟の反論ができなかった。
ゆっくりと振り返るリーシャの手には、＞地獄の鎌＜ならぬ＞鉄の斧＜。
カミュの発言に怒りが湧き上がって来ているリーシャは、すでにその包装を解いていた。

「・・・・・サラ・・・・・？」

「　い、いえ。　な、何故、私なのですか！？　に、似合い過ぎていて怖いなとは思いましたが、言ってはいませんよ！」

振り向くリーシャへの恐怖からなのか、髪の毛が所々跳ねているサラは、不用意な発言を溢してしまう。　言い出したカミュですら、そのサラの発言に表情が固まってしまった。

「・・・ふふふ・・・・そうか・・・・サラが私をどのように思っているのかが良く解った。　拳骨くらいでは足りなかったのだな・・・・・」

「　ふぇっ！？　」

笑顔を見せながら、リーシャは包装を解いた＞鉄の斧＜を構え、サラへと一振りする。
間の抜けた声を上げたサラの目の前にリーシャが振るった斧の切っ先が落ちてくる。

「・・・ほぉ・・・」

「・・・・・・おお・・・・・・・・」

そのリーシャの斧捌きに、ベッドからカミュが嘆息を漏らし、リーシャの傍にいたメルエは感動の声を上げた。
心なしか、斧に向けられるメルエの瞳は輝いていた。

「・・・・サラ・・・・覚悟はいいな・・・・・？」

「　えっ、えっ、えぇぇぇ！？　」

斧の切っ先をサラに向けたまま、呟くリーシャの言葉に、ようやくサラの意識が現実に戻された。　今自分が置かれている状況を認識し、部屋中に響く程の大声を上げる。

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・すごい・・・・・・・・」

「　ん？　メ、メルエ、危ないぞ。　今は斧を持っているんだ。危ないから下がっていろ。」

『その切っ先を仲間に向けているのは誰だ！？』

とサラは叫びたかった。

輝く瞳を向け、近寄ってくるメルエに注意を促すリーシャをサラは恨めしそうに見つめる。

メルエは斧という武器を持った人間を『カンダタ』しか知らない。

それは、メルエが加わって初めての強敵。

あの塔での戦闘は、幼いメルエの心にもしっかりと残っていた。

メルエが敬愛する、カミュもリーシャもあの大男には敵わなかった。

そんな大男が持っていた武器である＞斧＜を軽々と振るうリーシャがメルエにはとても頼もしく見えたのだ。

「・・・・・・リーシャ・・・・・・・つよい・・・・・・・・？」

「ん？　もちろんだ。　例え、武器が剣ではなく、この斧だとしても、カミュ程度であれば負けるようなことはない。」

「・・・・・・・カミュ・・・・・・・より・・・・・・・・？」

「ああ！　カミュが私に一度も勝っていないことは、メルエも知っているだろう？」

「・・・・・・・・」

メルエの問いに、胸を張って答えるリーシャ。
そのリーシャの問いかけに、一度カミュの方に視線を向けたメルエは、大きく首を縦に振った。　そんなメルエの姿に少し表情を歪めたカミュの姿をサラは横目で見てしまう。

「・・・・どうでもいいが・・・・・その＞鉄の斧＜は使わないのか？」

「　い、いや、ちょっと待て・・・・う～～ん・・・・」

「・・・・・・・すごい・・・・・・・・・すごい・・・・・・・・・」

顔をしかめながらも、問いかけるカミュに、先程までの勢いがなくなったリーシャは考え込むそぶりを見せる。
傍で目を輝かせているメルエの視線が気になっているのだ。
この町に入って初めて見せるメルエの笑顔。
その笑顔がリーシャの回答次第によっては消えてしまう可能性がある。

「そ、その斧は、結構な値段がするのですよ。　カミュ様も私もそれを使えるのはリーシャさんしかいないと思っていましたし。」

「・・・そうだな・・・それに、＞鋼鉄の剣＜では、この周辺の魔物には苦戦することはこの前の戦闘で解っただろう？」

切っ先が外れたサラが、斧の値段を口にし、それに同調するようにカミュが斧の必要性を説く。　見事なコンビネーションだった。

「　そ、それならば・・・カミュ、お前はどうするんだ？　」

「・・・・・俺は、斧は使えない・・・・・」

明らかに嘘である。
サラはそう思った。
『勇者』として育てられたカミュが、斧という武器を使用できないはずがない。

それはリーシャにも解っていた。
カミュの今までの行動を見れば、それぐらいのことは解る。
剣を失った時、サラの持つ＞鉄の槍＜を扱っていた。
それは、そこいらの兵士では太刀打ちできない程の腕であることは間違いないものだった。

そこまで考えて、リーシャは思い当たる。
先程のリーシャの言動の中にその答えはあった。
おそらく、カミュはリーシャに剣の腕で劣ることを良しとしていないのであろう。
剣で劣る者が武器を変えた所で変わらない。
カミュは、剣を極めるつもりなのかもしれない。

「・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・おの・・・・・・・いや・・・・・？」

「　ん？　そうだな・・・・わかった。　この＞鉄の斧＜は私が貰おう。」

返答をしないリーシャに、その下から心配そうに眉を下げたメルエが尋ねる。

そんなメルエの頭に手を置いて、リーシャは笑顔でその斧を武器とすることを了承した。

「・・・・・・ん・・・・・・・」

その答えに、メルエはくすぐったそうにリーシャの手を受け入れ、そして笑顔で頷く。
メルエの笑顔に、その場にいた三人の表情も緩んでいく。

「・・・・・で・・・・・・いつまで、俺の部屋に居座る気なんだ・・・・？」

「あっ！？　す、すみません。　すぐに出て行きます！」

和やかな空気を破るカミュの一言。
その言葉に、サラは自分の身なりに気が付き、大慌てで部屋を飛び出していく。
その後に続くメルエ。
そして最後にリーシャが残った。

「・・・・カミュ・・・・・昨日の話は、メルエにするのか？」

「・・・・いや・・・・あの義母が会いに来ない限り、こちらから

出向く気はない。」

その答えに満足そうに頷いたリーシャは、カミュの部屋を出て行く。
誰も居なくなった自室で、しばらく天井を見つめていたカミュは、
ベッドから出て、身支度を整え始めた。

朝食を取り終え、一行は再び＞アッサラーム＜の町に出る。
そこは、昨晩カミュ達が見た光景とは何もかもが違っていた。

喧騒など何もなく、人も疎らにしか歩いてはいない。
昨晩酒に酔ったものが吐き出した嘔吐物やゴミをその少ない人間で
清掃を行っている。
とても、昼間の町とは思えない

「・・・・メルエ・・・・大丈夫か？」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

外に出た途端、メルエの声に元気がなくなる。
カミュのマントに包まっているためメルエの表情は見えないが、カミュのマントの中から聞こえてくるか細い声がサラの胸を締め付ける。
それと共に、再びサラの心にどす黒い感情が湧き上がり、サラは苦しむのだ。

カミュ達は、リーシャの＞鋼鉄の剣＜を引き取ってもらうために、昨晩訪れた武器屋に向かうが、そこは店仕舞いをした後だった。

「そう言えば、夜の間しか営業していないと言ってましたね。」

「・・・・そうだったな・・・・・」

昨晩武器屋が言っていた事を思い出したサラとカミュは、他の店が空いていないかどうかを確認するために、周囲を見回す。
そんな二人の姿に状況を判断したリーシャが、左手に武器屋の看板が見えていることを伝え、一行はそちらの方に移動することにした。

「おお！　私の友達！　お待ちしておりました！」

武器屋の入口を入った途端、カウンターにいた主人らしき男性に声をかけられる。
それは、とても初対面の人間に対する対応ではなく、リーシャは驚いた。

「カ、カミュ・・・・この店主は知り合いなのか？」

「・・・・全く知らない・・・・・」

昨晩、知り合いになったのかもしれないとリーシャが声をかけるが、かけられたカミュの反応は酷く冷たいものだった。

『何かあったのか？』
とも思ったが、横にいるサラも首を横に振ったことから、カミュが言っていることが本当であることを知る。

「お客様は、皆さん私の友達！　どうぞ好きなだけ見て行ってください！」

気のいい笑顔をむける店主に、リーシャは『そう言う物なのかもしれない』と思うことにし、店の中を見回すと、今朝論議の種となった武器が飾ってあるのを見つけた。
＞鉄の斧＜に目をつけたリーシャを店主が目敏く見つける。

「おお！　お目が高い！　それは＞鉄の斧＜という武器です。今ならなんと、４００００ゴールドです！」

「よ、４００００ゴールドだと！！」

リーシャは驚愕する。

まさか、自分の為にとカミュ達が買ってきてくれた武器がそれ程の高値をつけるものだったとは思いもしなかったのだ。

それ程の金額を支払ってでも、自分の為に武器を調達してきてくれたカミュ達に自分が吐いてしまった暴言を悔やんだ。

「・・・・す、すまない・・・・カミュ。　ま、まさか、それ程価値のある物だとは知らなかった。」

「えっ！？」

「・・・・はぁ・・・・・」

素直に頭を下げるリーシャに、サラは驚きの声を上げ、カミュは呆れの溜息を吐く。

サラにしても、まさかリーシャがこの店主の言うことを鵜呑みにするとは思わなかったのだ。　いくら、値段を知らないとはいえ、４００００ゴールドは余りな値段だ。

昨晩、カミュ達が訪れた店で『昼間はぼったくり店などもあるから気をつけなさい』というようなことを言われていたため、カミュとサラはすぐに合点がいった。

「友達！　買ってくれますか！？」

「・・・・・いや、いい・・・・・・」

「おお！　友達、とても買い物上手。　私、困ってしまいます。では、２００００ゴールドに致しましょう。　これでどうですか？」

「なにっ！？」

カミュの断り文句に、言葉と反して左程困った様子も見せずに発した店主の言葉に、リーシャは驚きの声を上げる。
それもそのはず、いきなり半額になったのだ。
それでも２００００ゴールド。

「・・・・・いや、いらない・・・・・」

「おお！　これ以上まけると、私、大損してしまいます！　でも、あなた友達。　では、１００００ゴールドに致しましょう！　これ

ならいいですか？」

「　なんだと！　」

更に半額。

もう、当初提示した金額の四分の一になっている。

徐々に湧いてくるリーシャの怒り。

「・・・・・・いらないと言っただろう・・・・・・」

対するカミュは辟易していた。

人の話を聞かない人間と対することが苦痛な事など、カミュは経験済みだ。

それでも、その中でもこれは余りにも酷かった。

「おお！　あなた、酷い人。　私に首吊れと言いますか？　・・・わかりました・・・では、５０００ゴールドにしましょう。　これならいいでしょう？」

「・・・・・この・・・・・」

もはやリーシャの我慢も限界だったが、それに気が付いたサラが必死にリーシャの身体を抑え、それを見たメルエもカミュのマントか

ら顔を出し、リーシャに飛び付いた。
メルエの場合は、リーシャを止めるという理由ではなく、サラが抱きついたから自分もというような単純なものであったが。

「・・・・先程から、俺は買わないと言っているのだが・・・・」

「そうですか、残念です。　またきっと買いに来て下さいね。」

断りを入れるカミュに、肩を落とす店主は、それ以上値段を下げることはしなかった。
カミュやサラは、昨晩＞鉄の斧＜の正規の値段を聞いていたことから、店主が最後に言った値段が正規の倍の値段であることを知ってはいたが、リーシャは違った。

５０００ゴールド以上値段を下げないということは、それが正規の値段だと勘違いしてしまったのだ。
急に大人しくなったリーシャに、サラはその拘束を解き、それと同時にメルエもカミュのマントの中に戻って行った。

カミュが買わない代わりにリーシャの＞鋼鉄の剣＜の引き取りを頼むと、店主はちょっと複雑そうな顔をしていた。
それでも、大変意外なことに、その引き取り価格は正常な価格であったのだ。
店主の言う値段にカミュはしばらく驚いていたが、問題がないことを認識し、＞鋼鉄の剣＜を渡し、ゴールドを受け取った。

「・・・それでも、５０００ゴールドもするものだったのだな。カミュ、ありがとう。　この斧は大事に使わせてもらうよ。」

「　えっ!?　リ、リーシャさん・・・それは・・・・」

「・・・ああ、そうしてくれ・・・」

リーシャの言葉を慌てて訂正しようとするサラの言葉を遮って、カミュが真面目な顔でリーシャに答える。
そのカミュに大きく頷いたリーシャは、斧を背中に担ぐように結びつけ、歩き出した。
サラは、一度『いいのですか?』というようにカミュを見るが、カミュが何も言わないことから、リーシャの後を追うことにした。

「それで、カミュ。　この町を出たらどこに向かうんだ？」

「あっ！？　そ、そうですよ。　昨日の夜は、その情報を聞きそびれてしまいました。」

町を歩きながら、次の目的地を聞くリーシャの言葉に、サラは思い出したかのようにカミュに視線を向ける。

「・・・アンタが、変な女と言い争っていたからな・・・・」

「そ、それは・・・」

カミュは昨日のサラと妖艶な女性の会話を言っているのだ。
そのことにサラは言葉が詰まった。

「ん？　何だそれは？」

「な、なんでもありません！」

会話を聞いていたリーシャは、疑問を口にするが、咄嗟に反応したサラの発言に、目を丸くしていた。

サラの慌てぶりが何かあったことは確実であるが、それは追求するほどでもないことなのは、カミュの口ぶりから解る。
結局リーシャは、柔らかな笑顔を向け、再び町を歩きだした。

「ん？　＞カギ＜？　・・・・・ああ・・・・十何年前に、オルテガという人間がカギを求めて南に向かったらしい。　まぁ、あの人間なら、例え＞魔法のカギ＜がなくとも道を切り開いただろうけどな。」

「・・・・・・・」

「・・・南へ・・・・」

情報収集のため、町の中を清掃する人間に話を聞いて行く。
日も高いこともあり、アルコールを摂取している人間もおらず、皆まともに相手をしてくれる。　清掃の合間であることから、視線を向けずに話す人間もいるが、思い出す為に頭を捻ってくれる者もいた。

何人目かの男の話の中で、ついに＞オルテガ＜の名が出てきた。
その足取りは、南だという。
この＞アッサラーム＜の南と言えば、正直地図には徒歩ではいけないようになっている。

「・・・カギ・・・？　う～ん。　カギが関係するかどうかは解らないが、この町の南西にある砂漠の更に西に＞イシス＜という国があるそうだよ。　古い国らしいから、そういう不思議なものがあるかもしれないね。」

更に他の男に話を聞くと、少し興味深い話が返ってくる。
先程の男の話と組み合わせると、オルテガが向かった場所が見えてきた。

＞イシス＜
それは、ロマリア王からその国に入るための書状を頂いた国。
『必ず行くことになるだろう』と言われた国でもあった。

これで、行く先は決まった。
そう思ったリーシャとサラは、続くカミュの言葉に驚いた。

「・・・・・一度、ノアニールに戻る・・・・・」

驚きの声を上げるリーシャとサラの二人を無視し、カミュはさっさと＞ルーラ＜の詠唱準備に入る。　メルエは既にマントの中でカミュにしがみついている。

驚きの声を上げ固まる二人であったが、＞ルーラ＜を使うことのできる二人が先に行ってしまえば、＞キメラの翼＜がない以上、自分達は完全に置き去りになってしまうと気付き、慌ててカミュの腕に掴まった。

「・・・・・ルーラ・・・・・」

カミュの詠唱と共に、一行の身体が魔力を纏い、上空へと投げ出される。

メルエの故郷でもある＞アッサラーム＜が急スピードで小さくなり、そして見えなくなっていった。

アッサラームの町？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

今回は、前半の話と、後半の話のギャップがちょっと激しかったかもしれません。

次は女王が治める＞イシス＜！

頑張って更新していきます。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

イシス砂漠？（前書き）

区切りのいいところまでいけたので更新いたします。

お気に入り件数が、１９５件になっていました。
すごく嬉しいです。
皆様、ありがとうございます。

「おい、カミュ！　なんで、＞ノアニール＜に戻る必要があったんだ！？」

ノアニールに戻った一行は村の様子に若干の驚きを覚える。
それは、カミュ達が出て行った時と比べると、村人の表情の輝きが失われているように感じたからだ。

これが、カミュが恐れていた事。
おそらく、カミュ達が出て行ってすぐに、ロマリア王国はこのノアニールに足を踏み入れたのだろう。

「・・・・・・」

「おい！？　聞いているのか？」

カミュは周囲の変貌を気にも留めず、リーシャの問いにも答えることなく、ある一点に向かって迷いなく歩を進める。
その姿に、リーシャは先程より、大きな声を上げた。

メルエもノアニールに着いてから、リーシャに手を引かれるように村の中を歩いている。
＞アッサラーム＜というメルエにとって嫌な思い出しかない町を出たからだろうか、メルエの表情は晴れやかだった。
そのメルエと共に笑い合うサラ。

無表情に歩く男に、その男に向かった怒鳴る女性、そしてその横を笑いながら歩く少女達。
村の人間から見れば、異様な一向に映ったことだろう。

「・・・・ここは・・・・・」

結局、カミュはリーシャの問いに答えることなく、目的地へと辿り着いた。
そこは、ノアニールを出る際に買い物をした武器屋。

「お！　いらっしゃい。　あれ？　アンタ達は・・・・また来てくれたのか？」

「・・・・＞みかわしの服＜をくれ・・・・・」

カミュ達の顔を覚えていた店主は、その笑顔を営業のものから、自然なものへと切り替える。　そんな店主に向かって発したカミュの言葉に、リーシャとサラは首を傾げた。

「ん？　それはいいが・・・・なんだ？　破れちまったのか？」

「・・・・いや、今回は、その人間と、俺の分を頼む・・・・・」

てっきり、メルエかサラの分の服が破れてしまったのかと思った店主の言葉を否定し、カミュはリーシャを指差す。

「おい！　カミュ、説明しろ！？　私はいらんぞ。　この＞鉄の鎧＜がある。」

「・・・・・・・はぁ・・・・・・・・アンタは本当に馬鹿なんだな・・・・・・」

自分の分の＞みかわしの服＜を買うと宣言するカミュに、リーシャは反論をするが、胸を張って答えるリーシャを心底馬鹿にしたような溜息をカミュは吐いた。

「　なんだと！？　メルエも、もうその種はいい！」

カミュの物言いに頭に血が上ったリーシャは、カミュの言葉に自分のポシェットを探ろうとするメルエに大きな声を上げた。
びくっと身体を震わせたメルエは、サラの後ろに隠れてしまう。

「・・・・・アンタは、その装備で砂漠を渡る気なのか・・・・・・？」

「・・・・いけないのか・・・・・？」

「　あっ！？　」

カミュの本気の溜息に、リーシャは少し戸惑いながらも、先程より萎んでしまった声量で声を出す。　それは、まるで悪いことをしてしまった子供が、その事を問うようなものだった。

しかし、リーシャの横で、メルエを庇いながら事の成り行きを見ていたサラは、カミュが何を言おうとしているのかに気が付く。

「・・・・アンタがそれで良いのなら、もう何も言わないが・・・・そのまま砂漠に入れば、アンタ、死ぬぞ？」

「　なに！？　」

「リ、リーシャさん・・・・砂漠には、日差しを避ける場所がありません。　常に直接日光に当たり続けているため、異常な熱を持ちます。　カミュ様の言うとおり、＞鉄の鎧＜などを着たまま砂漠に

入るのは、自殺行為に近いかと思います。」

カミュの中途半端な説明をサラが補足する。
その内容に、リーシャは驚いた表情を浮かべた。
その驚きの大半が、＞鉄の鎧＜を着ていることで生じる問題よりも、カミュが自分を心配し、その装備を変えようと思ったことに対してだったのだが・・・・

サラの言うとおり、砂漠は一面砂の場所。
基本的に、木が生えている場所もなければ、水が湧き出している場所もない。
そんな中を永遠と歩かなくてはいけない。
炎天下の中で歩くのであれば、気温は異常なまでに跳ね上がる。
そして、日差しを遮る物がない以上、陽が落ちるまで永遠と直射日光をその身に受け続けることになるのだ。　着ている物には熱が溜まり、汗となった水分塩分は身体から抜け落ちる。　もし、＞鉄の鎧＜などを着ていれば、汗によって錆びがつくだろうし、その熱により肌を焼いてしまう可能性もある。

「・・・・・・そうか・・・・・・・」

「・・・・理解したなら、さっさと寸法を合わせてくれ・・・・」

カミュの言葉ではなく、サラの言葉で納得したリーシャは、自分の考えが至らなかったことに肩を落とし、そのリーシャに追い打ちをかけるカミュを睨みつける。

カミュと、リーシャの寸法合わせが終わり、後は待つだけとなる中、メルエはぼうっと店から見える人の営みを眺めていた。
その先に目をやると、メルエと大差ない程の歳の子供達が駆けまわっている。

そんなメルエの視線の先に気が付いたサラが、その心を痛める。
自分も感じたことのある孤独感。
サラも親なしの孤児であったことから、アリアハンの子供の輪には入れなかった。
たまに人数合わせで入れてもらえたとしても、話しかけられもしない。
それは、小さな子供の心には辛い経験である。

「・・・・メルエ・・・・メルエは、歌を知っていますか？」

「・・・・・？？？・・・・・・」

サラは、メルエの過去を知っているため、メルエが劇場で下働きをしていた事を思い出し、劇場で流れる歌などを知っているのかを聞いたのだ。
不意に自分に掛けられた声に、慌てたように振りかえったメルエは、サラの言葉に小首を傾げた。

「・・・・私は、小さな頃、たくさん歌を謡っていました。　私もいつも一人でしたから・・・・」

「・・・・・・・う・・・た・・・・・・・・？」

「　はい！　これでも、神父様に褒められるぐらいには上手に謡えるのですよ。　」

少し自嘲気味に笑うサラにメルエの首が更に曲がる。
そんなメルエの姿に笑みを柔らかくしながら、多少誇張気味に話すサラは＞ノアニール＜に明るい光を降り注ぐ太陽の様に暖かかった。

不思議そうに見上げるメルエと視線を合わせたサラは、その口を開き、謡い始めた。
それは、教会の人間なら誰でも知っている歌。
礼拝の時に僧侶たちが謡う歌だった。

「・・・・・・・・・」

突然謡い始めたサラにメルエは目を丸くするが、その声の美しさに、瞳が輝き始める。
サラの声は美しかった。
それこそ、メルエの沈んだ心を再び浮き上がらせる程に。

「ど、どうでしたか？」

「・・・・・サラ・・・・・・・すごい・・・・・・」

「　そ、そうですか？　ありがとうございます。　」

謡い終わったサラが、少し恥ずかしそうにメルエに視線を向けると、明らかにメルエのサラへの視線が変わっていた。
それは、リーシャが＞鉄の斧＜をサラに向けた時に見た物と同じもの。

「・・・・・・・メルエ・・・・・・・・も・・・・・・・・」

「えっ！？　あっ、は、はい！　メルエも勿論謡えますよ！　今度一緒に謡いましょう。　私も数多く知っている訳ではありませんが、私の知っている歌をメルエにも教えてあげます！」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

サラの言葉に笑顔で頷いたメルエの表情を、そんな二人の後ろから、カミュとリーシャは見つめていた。
サラの意外な才能に驚いた二人であったが、サラとメルエの交流にそんな驚きも忘れ、心に暖かな風が吹いていく。

「できたぞ。着て見てくれ。」

そんな中、ようやく、カミュとリーシャの＞みかわしの服＜が出来上がった。
カミュとリーシャが試着室へと向かう。
その間もメルエとサラは、鼻歌のように笑顔で歌を口ずさんでいた。

「なんだこれは！！」

「　ぶっ！　」

試着を終えたカミュが試着室から出てきた後、遅れて出てきたリーシャはかなりの大声を店主にぶつける。
その声に反応し、慌てて視線を向けたサラは、謡う為に吸い込んでいた息を盛大に吹き出してしまった。
隣のメルエの目も大きく見開かれている。
カミュに関しては、呆れたような溜息を吐くばかりだ。

「　な、なにか不都合があったかい？　」

「　『なにかあったか？』ではない！　」

店主はリーシャがこれ程怒りを露わにする理由が分からず、その理由を聞くが、カミュ達三人はその理由がはっきりと分かった。

「　何故、私のはスカート状になっているのだ！？　」

「　えっ！？　」

そうなのだ。

リーシャが着ている＞みかわしの服＜はメルエが着ている物や、サラが着ている物と同じように、スカート状になっている。
それも、サラは長いスカート状になっているが、背の高いリーシャの物は短い丈になってしまっていた。

「　ぷっ、くくくっ・・・・・・」

「・・・・サラ・・・・何がおかしいんだ？」

リーシャの女性らしい姿など、エプロン姿しか見たことのないサラは、その意外性がつぼに入り、笑いを堪え切れなかった。
その笑い声を聞き逃すことのなかったリーシャがゆっくりとサラに振り返る。

リーシャの表情に、あれ程堪えることが困難であった笑いもサラの腹に引っ込んだ。
笑いを止めたサラから再び視線を店主へと移したリーシャに店主の顔も青くなっていく。

「・・・・・はぁ・・・・・・悪いが、店主。　これは、女性ではあるが、騎士なんだ。　俺の様に動きやすいように仕立てなおしてくれるか？」

「　えっ！？　ああ、そうなのか？　鎧を着ていたから、そうなのかと思ったが、寸法を取ったのは家内なもんでな・・・・・すまな

いが、もう一度仕立てなおすよ。」

いきり立つリーシャの口が開くよりも早くにカミュが店主へと声をかける。
目の前に迫った脅威から救い出してくれる声に縋り付くように、店主は慌てて奥へ引っ込もうとする。

「まっ、待て！　私はまだ脱いでいないぞ！」

奥へ引っ込もうとする店主を追いかけるリーシャ。
その姿は、滑稽以外何物でもない。

「・・・・・・・・ふふ・・・・・・・・・」

そのリーシャの姿に真っ先に反応したのは、メルエ。
声を出して笑う事など今まで皆無に等しかった少女が笑った。
カミュはメルエの姿に目を細めるが、サラの最後の紐は切れてしまった。

「ふっ、ふふふ・・・・・ふふ・・あはは・・・・・ふふ・・・・あははは・・・・・」

我慢していた笑いは、もう止まらない。

メルエと笑顔を見比べながら、サラは笑い続ける。
メルエの顔に笑顔が戻ったことへの喜びに、メルエに笑顔を戻したリーシャの姿に。

それは、奥まで響いており、仕立て終えたリーシャが戻って来た時に、報いを受ける事にはなるのだが・・・・・・

一行は、＞ルーラ＜で＞アッサラーム＜に戻り、カミュとサラがもう一度町に入って旅支度を整える。
町の人間に話を聞き、砂漠の旅に必要な物資を買って行く。
必需品である水や食料。
特に水は多めに購入した。
また、昼は差すような日差しが降り注ぐが、陽が落ちると凍えるような寒さへと気温を落とすということから、数枚の毛布も購入する。

町に入りたがらないメルエは、町から無事カミュとサラが戻ってきたことに安堵の表情を浮かべ、花咲くような笑顔で二人に向かって行く。
メルエの表情を見たサラは、そのメルエの心に表情を曇らせるが、すぐに笑顔を浮かべ、メルエを迎え入れる。

メルエという楔で、このパーティーが繋がり始めていた。

砂漠へと入って、数刻。
雲一つない空からは、容赦ない日差しが降り注ぎ、一行の身体から水分という要素を根こそぎ奪って行く。

「・・・・・・・・・・・・お水・・・・・・・・・・・・・・・」

「だ、駄目ですよ・・・・・先程飲んだばかりじゃないですか・・・・・」

カミュとリーシャに挟まれながら歩くメルエは、手を握るサラに向かって喉の渇きを訴えるが、休憩も碌に取れない中、先程メルエに水を飲ませたばかりであるため、サラが窘める。　そのサラも、直射日光の影響を否定できない状況にあった。

＞アッサラーム＜で購入した水は、移動する邪魔にならない程度であるが、通常よりもかなり多めに準備してはいた。
しかし、一行の予想以上の気温の上昇の為、その減るスピードもまた通常の倍以上であったのだ。

そのため、幼いメルエや体力の乏しいサラに優先的に水を回していた。
必然的に、カミュとリーシャは水を口にすることが少なくなる。

「・・・メルエ・・・・カミュ様もリーシャさんも、メルエの為に水を口にしていないのですよ。　あまり我儘を言ってはいけません・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・・」

サラの忠告に、眉を下げながらも神妙に頷くメルエの姿に、サラは疲れた表情を見せながらも笑顔を浮かべた。

「・・・メルエに関しては、飲みたい時に飲ませてやれ・・・・・・」

「　またそのようなことを！　・・・・カミュ様は、メルエに甘すぎます・・・・喉が乾くのは皆同じです。」

サラとメルエのやり取りに振り返ったカミュの言葉は、サラにとって聞き捨てならないものだった。　サラにしてみれば、カミュはメルエを甘やかし過ぎなのだ。
例え子供といえど、我慢する時は我慢させなければいけない。
それが、故意的に食事や水分を与えないという虐待でない限り、サラはメルエの躾だと思っていた。

「・・・・・・・・・・・・・おに・・・・・・・・・・・・・・」

「　だ、だから、私は鬼ではありません！　メルエの為を思って言っているのですよ！　」

「サラ・・・そんなに興奮すると、体力がすぐになくなるぞ・・・・私やカミュのことは余り気にするな・・・・水分を取れない状況には慣れているとは言わないが、経験があるからな。」

ぼそりと呟くメルエの言葉に過敏に反応するサラ。
そんなサラに、今度は後ろから声がかかった。
リーシャは、＞アッサラーム＜で購入した布を頭に乗せて歩いていた。
カミュやリーシャは、サラやメルエと違い、その頭に帽子を被ってはいない。
故に、二人とも布を頭に乗せてこの砂漠に入ったのだ。

「・・・・・・皆さんは・・・・・・メルエに甘すぎます・・・・・それではメルエは我儘な大人になってしまいますよ・・・・・」

「・・・・・・・・・・だいじょうぶ・・・・・・サラ・・・・・・・・・いる・・・・・・・・・」

リーシャの言葉にも納得のいかないサラは、流れ落ちる汗を見ながら一人呟くが、その呟きはサラの手を握るメルエにしっかりと届いていた。

自分の名が出たことに不満を見せずに、自分の行く末には、カミュとリーシャ、そしてサラがいるのだということを信じて疑わないメルエに、サラは汗とは違う水分が流れ落ちそうになる。

その後、陽が高くなり、体力も衰えて行く一行の前に容赦なく魔物が現れる。

＞キャットフライ＜に＞バリィドドッグ＜。

以前相対した魔物達ばかりであったが、その中に＞暴れザル＜がいないことに、サラは内心安堵していた。

『もし、今の状況で＞暴れザル＜を相手にしなければいけないとなると、正直全滅も覚悟しなければいけないかもしれない。』

サラはそうまで考えていた。

周囲は見渡す限り『砂』。

砂漠であるため当たり前のことではあるが、身体からの水分と共に歩く気力すらも奪って行くような景色に一行は辟易し始めていた。

サラには、右も左も分からず、ましてやどちらが北でどちらが南なのかも分からない。

自分がどこを歩いて、どこに向かっているのかも分からない中、ただ前を行くカミュの背中を追って足を動かしていた。

「・・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・」

「ん？　どしたのですか？」

そんな中、不意にサラの手を握るメルエが口を開いた。

見上げるようにサラを見つめながら声をかけたメルエの表情に浮かぶ物は『困惑』。

それが何を意味しているのかが分からないサラは首を傾げるしかなかった。

「・・・・・・・・・・あれ・・・・・・・・・・」

「えっ!?　どれですか・・・・・・・・・あれ?　何か・・・・・・砂から出ていますね?」

メルエが指し示す方角に目を向けると、今までと同じような何もない砂が広がっていたが、その一点の場所に、不思議な物が見えた。
まるで砂の中から飛び出すように何かが出ている。

「・・・何でしょうね・・・」

「・・・・・・メルエも・・・・・・・」

それが気になってしまったサラは、その場所へと歩を進める。
真っ先に気が付いたメルエもまた、サラの後を追って隊列を外れてしまった。

近付いて行くと、その飛び出していたものが徐々に見えてくる。
それは長細い管の様なものの先に丸い物があった。

「・・・・う~ん・・・・・なんでしょう?　えっ!?　きゃあああああ!!」

「　!!!!　」

すぐ傍まで近寄った時、その細い管が動き出した。
管の先についていた丸い物が開き、見えたのは『眼球』。
突如ぎょろりと開かれた瞳に、サラは叫び声を上げる。

サラの後ろについていたメルエもまたサラの叫び声に驚き言葉を失ったが、次の瞬間には、サラは跳ね飛ばされ、自分も宙に舞っていた。

出て来たものは『かに』。
＞カザーブ＜の村周辺で見かけたような巨大なハサミを持つ『かに』であった。
サラは文字通り、この『かに』が砂の中から飛び出してくる勢いで跳ね飛ばされていたが、宙に舞ったメルエは違う理由であった。

サラとメルエが隊列を崩し、違う方向に向かっていることに後方を歩くリーシャはいち早く気付いていた。　前を行くカミュを止め、サラ達の後方からその様子を窺っていたのだ。
そして、サラが魔物に弾き飛ばされると同時に、メルエに駆け寄り、その身体を抱き上げて飛び退いたのはリーシャだった。

「　勝手に隊列を離れてはダメだろ！　」

「・・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・・」

リーシャから叱責を受けたメルエは、そのリーシャの腕の中で小さくなっていく。

サラは甘い甘いと言ってはいるが、リーシャとて何もかもを許している訳ではない。
叱る時には叱り、優しく包む時にはそれ以上ない程の愛情を注いでいるのだ。

しかし、サラに言わせれば、何故メルエは助け出したのに、自分は魔物に跳ね飛ばされたのかと抗議するかもしれないが、それは自業自得というものだろう・・・・

「カミュ！　魔物だ！」

「・・・アンタ達は、魔物を見つけると近寄らなければ気がすまないのか・・・・？」

リーシャの叫びに、溜息を洩らしながらカミュは背中の剣を抜いた。
相手は明らかに堅い甲羅に覆われている魔物である。
サラの補助魔法がなければ、実際の戦いでも苦戦することが必至なのにもかかわらず、弾き飛ばされたサラは砂の上で気を失っていた。

＞地獄のハサミ＜
カザーブ周辺に生息する＞軍隊がに＜の上位種に当たる魔物。
山の中などに生息する＞軍隊がに＜とは違い、砂漠地方の砂の中で生息する。
直射日光の強い砂漠において、砂の中に身を隠すことによってその身を護り、砂漠を通る人間や動物を砂の上に出した目玉で確認し捕

獲する魔物である。
その強力なハサミは＞軍隊がに＜以上の物で、一度そのハサミで挟まれると、その身を抜くことは不可能であると云われている。
万力の様に締め上げ、挟んだ物を文字通り『ぶった斬る』。
その行為から、このイシス地方では＞地獄のハサミ＜という名で呼ばれるようになった。

その＞地獄のハサミ＜が二体。
今や、その体躯の全貌を砂の上に晒している。

カミュは抜いた剣を持ち、魔物へと突進した。
ただ、斬るだけであれば、その甲羅にヒビも入れることはできないだろう。
故にカミュは剣を寝かせ、そのまま突き刺すように突っ込んでいった。

ガギッ！

「くっ！」

乾いた音を立ててカミュの剣が止まった。
甲羅に突き刺さった剣は、その刀身の先が甲羅に刺さっただけであった。
カミュの突進力に貫通力を持ってしてもそれまで。

反撃のハサミを警戒し、カミュが素早く剣先を引き抜き、後ろに跳ぼうとするが、意外にも＞地獄のハサミ＜の反応は早かった。

「くそっ！」

カミュが飛び退くタイミングに合わせて出された＞地獄のハサミ＜のハサミはカミュの横っ腹を殴りつけた。
たたらを踏むように一瞬よろけたカミュであったが、剣をもう一度構えなおす。

「メラ」

尚も攻撃を加えようとする＞地獄のハサミ＜に対して、カミュの指が上がり、火球の呪文を唱えた。　火球は見事に魔物の顔面を唱えるが、それは＞地獄のハサミ＜からすれば、少し注意が逸らされた程度の物。
むしろ、それによって怒りを露わにする＞地獄のハサミ＜の攻撃は加熱していくはずだった。

ただ、カミュ以上の攻撃力と破壊力を持つ者にとってすれば、その隙ができれば十分だったのだ。

「カミュ！　どいていろ！」

カミュの蔭から現れたのは、＞アッサラーム＜で購入した一振りの斧を高々と掲げたリーシャ。

「うおおおおおおおお！！」

ひらりと道を空けたカミュの横を駆け抜け、＞地獄のハサミ＜の両腕の間も抜け、その手に持つ斧を力任せに振り下ろす。

「ギャオォォォォォォォォ！！」

リーシャの腕から渾身の力を込めて振り下ろされた＞鉄の斧＜は、＞地獄のハサミ＜の飛び出した目玉と目玉の間に深々と突き刺さる。いや、それは突き刺さるというものではなく、『粉砕』と言った方が正しいのかもしれない。

＞鉄の斧＜が突き刺さった部分を中心に、＞地獄のハサミ＜の甲羅はヒビが入り、粉々に砕かれている。

一度大きく両腕についたハサミを高々と掲げ、一体の＞地獄のハサミ＜は絶命した。

まさに『会心の一撃』。

リーシャは新しく自分の武器となった＞鉄の斧＜で＞地獄のハサミ＜を一撃のもと倒してしまったのである。

その光景に、カミュは勿論のこと、メルエまでもが後方で目を丸くしていた。

「　クギャァァァァ！！　」

それは、もう一体の＞地獄のハサミ＜も同様であった。
共に人間と相対していた仲間が一瞬で死に追いやられたのだ。
パニックの為なのか、残った＞地獄のハサミ＜は奇声を発する。

「　くっ！　何か魔法を行使したのか！？　」

「・・・・・・・スクルト・・・・・・・・」

奇声を上げたと同時に、＞地獄のハサミ＜の身体は淡い光に包まれる。
その光景に、リーシャが魔法の行使を示唆するが、その答えは意外な方向から届いた。

「・・・・・スクルトか・・・・・・・もう俺やアンタの攻撃は受け付けないかもしれない・・・・・・」

「　何！？　ど、どうするのだ！？　」

メルエが魔物を包む光を見て、その魔法の名を口にする。
それが間違いではないことを確認したカミュが、リーシャに不用意に近づかないよう警告するが、リーシャは他の対応が思い浮かばな

い。

「・・・・・あの僧侶の＞ルカニ＜があればいいが・・・・・それがないとなれば・・・・」

「・・・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・・」

「・・・ああ。　メルエ、やれるか？」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

カミュの言葉を最後まで言わさずに、手に持つ＞魔道師の杖＜を掲げたメルエは、カミュの問いかけに大きく頷いた。
横で見ていたリーシャも心配そうにメルエを見るが、メルエの自信を取り戻した表情にその勇姿を見守ることにした。

「・・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・・・」

「　ギャ！？　」

まるで、＞スクルト＜によって自分の絶対防御を誇っているように掲げていた＞地獄のハサミ＜の片方の腕が、メルエの持つ杖の先か

ら発せられた冷気によって凍りつく。
何が起こったのか解らないような瞳を自分のハサミに向けた＞地獄のハサミ＜にリーシャの斧が一閃する。

「　ギャオォォォォォ！！　」

凍り付いたハサミはリーシャの一線で根元から砕け散るように斬り飛ばされる。
いくら防御力を上げていようが、凍り付いた物は皆同じとなるのだ。

痛みと怒りに燃えた＞地獄のハサミ＜の腕は、斧を構えなおしたリーシャへと振り抜かれるが、そのハサミももう一人の人間によって阻まれた。

手に持つ＞鋼鉄の剣＜を力を込めて振り落とし、弾かれると解っていてもそのハサミの軌道を変えたのはカミュだった。
カミュの剣で弾かれたハサミが砂に突き刺さる。
それを抜こうと躍起になっている＞地獄のハサミ＜の周囲には、すでにカミュもリーシャもいなかった。
あったのは、圧縮された空気だけ・・・・・・

「・・・・・・・・・・イオ・・・・・・・・・・・・」

呟くような詠唱と共に、＞地獄のハサミ＜の目の前にある圧縮された空気の塊が弾け飛ぶ。
周辺が色を失ったかのように白く染まり、凄まじい轟音と共に全て

を弾き飛ばした。
＞地獄のハサミ＜が見た、この世で最後の景色は真っ白で何もない世界だった。

「お、おい、カミュ・・・メルエの魔法は以前よりも威力が上がっているのか？」

「・・・・・・ああ・・・・・・・そうみたいだな・・・・・」

＞暴れザル＜と対した時の＞ベギラマ＜の威力を知らないリーシャは、メルエの魔法の威力に驚き、カミュへと問いかける。
その時、カミュが浮かべた表情は、リーシャの胸に残ることとなる。

『驚きと哀しみと後悔が入り混じったような表情。』
後にリーシャは、その時のカミュの表情をこう表現していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、ああ・・・凄いなメルエ。　もう、本当にちゃんと杖から魔法が使えるんだな？」

＞とんがり帽子＜を脱ぎ、頭を差し出してくるメルエ。
今メルエが手に持つ＞魔道師の杖＜を購入してから遠ざかっていた褒め言葉とその報酬である頭を撫でてもらうことを切望しているのだ。

そんなメルエの様子に苦笑を浮かべながら、リーシャはメルエの頭に手を乗せ、優しくその髪を撫でてやる。
気持ち良さそうに目を細めながらも、リーシャの言葉に誇らしげに頷くメルエ。
それは、メルエ流の自己の存在を主張する方法なのかもしれない。

魔物がいた場所には、もはや何もない。
唯一魔物が存在していたと感じられる物は、弾け飛んだハサミと周囲を満たす焦げくさい臭い。　そして、散らばった甲羅の一部であろう。

「・・・・しかし・・・・あの僧侶は何とかならないのか・・・・・？」

「あっ！　そ、そう言えば、サラは大丈夫なのか？」

メルエを撫でるリーシャを余所に、カミュは後方で未だに意識を取り戻さず、砂の上に寝転がっているサラに視線を向け溜息を洩らす。
リーシャは、カミュの言葉を聞き、ようやくサラの存在を思い出し、慌ててサラの下へと駆け寄って行った。

「・・・・・・はぁ・・・・・・・」

「サ、サラも疲れていたんだろう・・・・・許してやれ・・・・」

サラの下に辿り着いたカミュは盛大な溜息を吐く。
そんなカミュに場違いの様な弁明を繰り出すリーシャ。
そして、何事かも分からずに首を傾げるメルエ。

サラは眠っていたのだ。
初めは間違いなく、弾き飛ばされた衝撃で気を失っていたのだろうが、途中から幸せな夢でも見ているのだろうか、笑顔を浮かべながら眠りこけていたのだった。

「・・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・ねてる・・・・・・・・・・？」

「い、いや、メルエ。　あの魔物が、眠りにつく魔法でも唱えたのではないか？」

「・・・・とても＞ラリホー＜を唱えたようには見えないがな・・・・」

サラの表情を見たメルエがぼそりと呟いた言葉に、リーシャがサラの弁護のために慌てて理由を作り出すが、それもカミュにばっさりと斬り捨てられた。
カミュの容赦のない言葉に、言葉が詰まってしまったリーシャは、カミュに対して強い視線を向ける。　まるで『余計な事を言うな！』とでも言いたげに・・・・

「・・・・どうでもいいが、さっさと起こしてくれ・・・・・このままだと、陽が落ちるぞ。」

カミュの言葉通り、すでに太陽はてっぺんを過ぎている。
買い物などを済ませてから歩き出した一行は、正直砂漠に入るには時間が遅すぎたのだ。
陽が落ちれば、砂漠の気温は氷点下になることもある。
とてもではないが毛布一枚でやり過ごせるものではない。
しかも、砂のど真ん中で毛布一枚で寝転がるわけにもいかないのが現状である。

「どうするつもりなんだ、カミュ？　私が言うのも何なのだが、このままだととてもではないが陽が落ちる前に＞イシス＜の城に辿り着けるとは思えないが？」

「・・・・・今は西ではなく南に進んでいる。　当初から今日中に＞イシス城＜に着く気はない。」

サラを揺さぶりながらもカミュにこの後の進路について尋ねるリーシャに驚きの回答が返ってきた。
サラを起こす作業をメルエに委ねたリーシャは、立ち上がってその答えを返してきたカミュを見据える。　『何を言っているんだ？』と。

「では、どこに向かっているというのだ？　私達は＞イシス＜に行くために歩いていた訳ではないのか？」

「・・・はぁ・・・アンタはどこまで考えなしなんだ？　これほどの広大な砂漠を一日で歩けるとでもいうのか？」

質問を質問で返す非礼。
そんなカミュの態度にリーシャの怒りが沸点を迎えた。

「　だから、どこに向かっているのだと聞いているんだ！？　」

「・・・ふぅ・・・＞アッサラーム＜で、この砂漠の南に一人で暮らす変わり者の老人がいると聞いた。　まずはそこに向かう。」

「　何！？　それは、確かな情報なのか！？　」

リーシャの心配事は尤もである。
不確かな情報であれば、リーシャ達はこの半日余計な労力だけを使ったことになる。
それこそ、真っ直ぐ西に向かっていた方が良いという程に。

「・・・＞アッサラーム＜の商人の中にも＞イシス＜と商売をして

いる者がいた。　そいつが＞イシス＜に行く途中で必ず立ち寄り、物を売っていると言うのだから本当のことだろう。」

「・・・そうか・・・すまなかった。　それで、そこまではどのくらいかかるんだ？」

「・・・馬車で半日というのだから、夜には着けるだろう・・・」

「・・・わかった・・・」

カミュとリーシャの会話が終わる頃、ようやくサラの意識が戻る。いや、眠りから覚めたと言った方が正しいのかもしれない。

自分が眠っていた事を、言葉少なにメルエから聞いたサラは、飛び起きたように立ち上がり、カミュとリーシャに頭を下げた。

リーシャは苦笑しながらも気にしないように手を振り、カミュは呆れたように溜息を吐きながらも、サラの失態を追求することはなかった。

それが、サラには尚のこと心苦しい。

サラは、また自分自身のレベルアップを心に誓うのだ。

一行はそのまま、南へと進路を取り、休憩も碌に取らぬまま歩き続ける。
途中では、＞キャットフライ＜に＞バリィドッグ＜、そして先程遭遇した＞地獄のハサミ＜等に遭遇したが、名誉挽回を胸に誓うサラが行使する＞ルカニ＜や＞ルカナン＜によって防御力を上げることを阻止された＞地獄のハサミ＜は、強力は破壊力を持つ＞鉄の斧＜を持つリーシャの敵ではなかった。

ある一体の＞地獄のハサミ＜をメルエが魔法で倒した時、不意に呟いたリーシャの言葉は、一行を凍りつかせた。

「・・・ふと思ったんだが・・・メルエの＞ヒャド＜でできた氷を口に含めばいいんじゃないのか・・・？」

「「「　！！！！　」」」

メルエが作り出す冷気によって出来上がった氷は、基本的に空気中にある水分を凍らせたものだと云われている。
それならば、それを口に含めば、喉の渇きも潤わせることができるのではないかというのだ。　これには、カミュも『何を馬鹿な事を』と斬り捨てることができなかった。
ただ・・・

「・・・・それで、＞ヒャド＜の対象はアンタでいいのか？」

「　な、なに！？　何故そうなる！？　」

溜息を洩らしながら言葉を発するカミュに、リーシャはまた何か自分が変な事を言ってしまったのではと思うが、それを素直に認めることを良しとせず、声を荒げた。

「・・・こんな砂漠のど真ん中で＞ヒャド＜を使うのなら、凍らせる相手がいなければ氷などできないだろう・・・そうすれば、『魔物』に使用するか、『人』に使用するかのどちらかだ。　岩もなければ木もない。　アンタ方は魔物を凍らせた氷を口に含むことができるのか？」

「　そ、そんなことできませんよ！　」

「・・・そうだな・・・流石に魔物の身体についた氷を口に含むのには抵抗があるな。」

カミュの言葉に真っ先に拒絶するサラ。
リーシャもまた顔を歪ませながら呟いた。

「・・・ならば、必然的に言いだしたアンタが人柱になってくれるんだろう？　アンタについた氷を口に含むのも抵抗はあるが・・・・・すまない・・・・アンタの犠牲は極力無駄にしないようにするさ・・・・・」

「　なっ！？　なんだと！？　」

「・・・・・・・・・・・・・・ごめん・・・なさい・・・・・・・・・・・・・」

「　メ、メルエまでか！？　」

カミュの言うことに含む部分もあって、その部分にリーシャは反応したのだが、その後に続いた言葉にメルエが同調したことによって、話が自分が思っている遥か斜めに進んでいることに気が付いた。

サラは例の通り、炎天下の砂漠で額に汗を浮かべながらも、くすくすと笑っている。

そこで、リーシャは自分がからかわれていることに思いが至った。

「～～～～～～！！　お前たち！　私が今の状況を何とか出来ればと真剣に考えていたのに、何なんだ！」

強い日光にも負けぬリーシャの叫びが周囲に砂しかない砂漠に響き渡る。
メルエは素早くカミュの後ろに隠れ、サラはその笑みを引っ込める。
唯一人、口端を上げたままのカミュが、『時間を取られた。　先を急ぐ。』と何事もなかったかのように前を歩きだした。

やりきれない思いを胸に残し、自分の一歩前を歩くサラを睨みつけるリーシャ。
その視線に気が付きながらも、サラは隣のメルエに話しかけながら歩く。
その額に日光による暑さのせいだけではない汗を浮かべながら・・・・

辺りが薄暗くなったかと思ったら、砂漠はすぐに闇に覆われる。
陽と共に落ちた周囲の気温は、肌寒いをすでに通り越し、刺すような寒さに変わっていた。

メルエはその寒さに震え、すでにカミュのマントの中に潜り込んでいる。
サラとリーシャも服の上に購入しておいた毛布をかけ、寒さを凌ぎ

ながら歩いていた。

そんな一行の前についに目的地であった一軒の家が見える。
それは、本当に小さな家。
砂漠の南の果てに位置し、その家の後ろには雄大な山がそびえている。
山から流れた水によって堀の様なものを作り、魔物の侵入を防いでいたのであろうが、その堀を満たす水も、今や腐り果て、毒素を撒き散らしているのではと思う程の色をしていた。

「・・・・カミュ・・・・本当にここがその家なのか・・・？」

「・・・・カミュ様・・・・・？」

その家の佇まいに、リーシャとサラは疑問を呈す。
それは無理もない。
そこは、『人』が住む場所では決してないと思われるような場所であるからだ。

「・・・・・入ってみればわかるだろう・・・・・」

堀を満たす腐った水は、異様な臭気と瘴気を撒き散らしている。
その堀にかかった一つの橋を渡り、カミュ達は建物の玄関の戸を叩いた。

「・・・・・誰じゃ・・・・・・？」

中から返ってきたくぐもった声。
それが、サラの恐怖心を煽る。

丁重に自分の身分を名乗ったカミュの言葉に、ゆっくりと扉が開いて行く。
中から出てきたのは、一人の老人。
それは、リーシャやサラが考えていたような者ではなく、人の良さそうな笑みを浮かべる優しげな人物であった。

イシス砂漠？（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

よくよく考えたら、ドラクエって登場人物に老人って多いですよね。
やはり、時代の先駆者に敬意をというメッセージが籠められていたのでしょうか？
考えすぎですかね・・・・

ご意見、ご感想をお待ちしています。

イシス砂漠？（前書き）

いつも皆様のご感想に励まされ、勇気づけられています。
本当にありがとうございます。

イシス砂漠？

「こんな砂漠の果てにどのような御用かの・・・・？　商人には見えんが・・・」

『立ち話もなんですから』
という言葉と共に、老人はカミュ達を家の中へと招き入れた。

「・・・はい・・・まずは突然のご訪問、大変申し訳ございません。私達は＞イシス＜の城に向かう途中でして。　途中、陽も落ち、気温も落ちて来た時に、このお宅が目に入り、厚かましくも、一晩の宿をお願いすることはできないかと思い、戸を叩かせて頂きました。」

仮面を被ったカミュが、嘘の話を作り上げ始めた。
そのことにサラは一瞬顔を顰めるが、カミュの言葉を真っ向から否定することは、気温が氷点下に下がっている砂漠に放り出される可能性があることであるため、サラは口を開くことはなかった。

「ほぉ、それは、それは・・・・ここから、＞イシス城＜まではまだ丸一日掛かりますからの。　狭い家ではあるが、疲れを癒しなされ。」

「・・・・・・ありがとうございます・・・・・・・」

カミュの言葉を信じ、老人は快くその願いを聞き入れた。
その老人の優しい笑顔にサラの心は痛む。
それと同時に、世界を救うために旅する『勇者』といえども、一晩の宿を取るために相手を騙すしか方法がないという現実に落胆する。

「しかし、今の＞イシス＜にどんな御用かの？　新しく士官するつもりなら、今は無理だと思うが・・・・・そうではなさそうじゃのう・・・・・」

家の外でカミュ達の衣服に付いた砂を払わせてから、老人は椅子を勧めた。
椅子に座った一行の前に暖かな飲み物を置いた老人は、カミュ達を一通り見廻してから、疑問を口にする。

それは、あたかも＞イシス＜の番人であるかの様な物言いに、カミュとサラは表情を引き締めた。　もし、この老人が＞イシス＜と通じるものであれば、下手なことを話すことはできない。

「　私達は、＞魔法のカギ＜というものを求めて＞イシス＜に向かう途中でな。　」

「　リ、リーシャさん！　」

「・・・この馬鹿・・・・・」

しかし、そんな二人の思慮を余所に、いつもの様に相手の疑問に素直に答える正直者の姿だった。　その発言に、サラは慌て、カミュは顔を顰める。

＞魔法のカギ＜は、云わば伝説の域に入る代物である。
ともすれば、それは『国宝』として扱われていてもおかしくない。
実際に＞魔法のカギ＜は＞イシス＜にあるという話も出ている。
つまり、リーシャの言葉は、＞イシス＜の『国宝』を狙っていると言っているようなものなのだ。

「ほっほっほ。　実に真っ直ぐな回答が返って来たものじゃ。　いや、何、そなた等もそこまで警戒する必要はない。　儂はもはやあの国とは何の関係もない老いぼれじゃよ。」

「・・・・・・では・・・・以前は＞イシス＜で・・・・・・」

「ふむ・・・・先代の女王様の下で文官としてお仕えをしておった・・・・」

警戒を強めるカミュ達を柔らかな笑顔で制した老人の過去を聞いたカミュ達は、心底驚いた。　まさか、そこまでの高官だとは思って

いなかったのだ。

＞イシス＜は代々女王が治める国として知られている。
何故か、イシス王家には男子が生まれない。
その時代の女王が懐妊すると、それは例外なく女子であるのだ。

その女王の下で文官として働くのであれば、大抵は女。
しかし、この老人は見るからに男であった。
ならば、それなりの能力がなければ仕える事など不可能なのである。

「先代の？　今の女王様は若いのか？」

「・・・ふむ。　数年前に先代の女王様が原因不明の奇病で身罷られた。　現女王様はまだお若い。　そうじゃのう・・・お主はいくつなのじゃ？」

空気が一瞬張りつめた場をもろともせずに、リーシャは老人の言葉に疑問を呈す。
リーシャの姿に若干の呆れを滲ませながらも、老人の問いかけの的が自分であることに気が付いたカミュは正直に質問に答えた。

「・・・・・・16です・・・・・・・・」

「おお！　そうか・・・・・ならば、アンリ様と同じ年じゃのう・・・・・」

「「「・・・・アンリ様・・・・・？」」」

老人は現女王とカミュの歳を比べる為に問いかけたはずだ。
しかし、歳を答えたカミュを遠い目で見つめる老人が発した名前は聞いたことのない名前だったのだ。

「おお・・・すまぬ・・・軽々しくも女王様のお名前を口にしてしまった・・・聞かなかったことにしてはもらえぬか・・・・？」

「・・・・畏まりました・・・・・」

老人は無意識にその名を口にしていたのだろう。
改めてカミュ達に頭を下げ、口外しないことを願った。

「ふむ。　では、その代わりと言っては何だが、お主たちは＞魔法のカギ＜を求めているのだったな？」

「・・・・・・はい・・・・・・・」

カミュは苦々しく顔を顰めて答えた。
リーシャの不用意な発言によって情報の収集が困難になったことを

内心かなり怒っているのかもしれない。

「ならば、＞イシス城＜の北にある＞ピラミッド＜に向かいなされ。」

「「「・・・・・・ピラミッド・・・・・・？」」」

カミュ達三人の声が合わさる。
聞き覚えが全くない単語に揃って疑問を持ったのだ。

「うむ。　代々のイシス王族が眠る場所じゃ。　そこに＞魔法のカギ＜が奉納されていると云われておる。　まだ、誰も発見した者はおらんがな。」

「・・・・・・・」

誰も発見したことのない鍵。
それはまさしく伝説。
それが存在する可能性よりも、存在しない可能性の方が高い代物である。
その現実に三人は声を失った。

オルテガが歩んだ道を辿って来たはずである。
＞ノアニール＜や＞アッサラーム＜で聞いた話によると、オルテガ

もその鍵を求めていたはずある。
しかし、その鍵の伝説は今も尚、語られているということは、オルテガがそれを手にしていない証拠と言ってもいいだろう。

あのオルテガでも手に入れることができなかった物。
いや、それは、手に入れることができなかったのではなく、『存在しなかった』のではないかという疑問が三人の頭に浮かんだのだ。

「それでも、まずは＞イシス城＜に向かいなされ。　ピラミッドに入るにしても、それは今現在唯一の王族である女王様のお許しが必要じゃからのう。」

「・・・・・ありがとうございます・・・・・」

実際、イシス王家が眠る＞ピラミッド＜と呼ばれる巨大な墓には、イシス王家代々の宝物が安置されていると云われており、それを狙う者達が後を絶たない。

もし、カミュ達がこの老人の話を信じ、このまま＞ピラミッド＜に向かったとすれば、＞イシス＜国家から『墓荒らし』のレッテルを貼られ、国敵とされることは間違いないだろう。

「・・・おお・・・・今夜は狭苦しい家ではあるが、ここで休んでいきなされ。　余程疲れていると見えるからな・・・・」

カミュ達から視線を外し、柔らかな笑みを作りながら話す老人の視線の先には、先程まで湯気が出ていたカップを両手で持ちながら舟を漕いでいるメルエが座っていた。

慣れない、砂漠という歩き辛い土地を一日歩き続け、更には何度も戦闘を繰り返してきたメルエの疲労はピークに達していたのだろう。

「・・・重ねてお礼を申し上げます・・・」

「よいよい。　こんな場所に人が訪ねて来ること自体、多くはないのじゃ。　儂も久しぶりに若い者と話ができて楽しませてもらった。」

奥の部屋の床に毛布を敷き、購入していた毛布をかけてメルエを寝かせる。

その横で身体を横たえたサラもまた、襲いかかる睡魔に負け、すぐに眠りについた。

今に残ったのは、老人とカミュとリーシャの三人。

老人が差しだした暖かな飲み物のおかわりを受け取り、再び口を開いた。

「しかし、何故貴方の様な高官が、このような場所で暮らしているんだ？」

「・・・・ふむ・・・・」

国こそ違いがあれど、国家に仕える者として、リーシャの口調はカミュ達へ向ける物と大した違いはない。
そして、リーシャは貴族。
アリアハンでは、『尊い人間』とされる者である。

「・・・・・まぁ、簡単に言うと、追い出されたんじゃの。」

「・・・・・・・」

リーシャの問いかけに、少し躊躇しながらも理由を口にする老人のその意図をカミュは掴みかねていた。
訝しげに老人を睨むカミュには、老人が身の上話をする理由が解らなかったのだ。

「追い出された?」

「・・・ふむ。　先代の女王様はそれはそれは素晴らしきお方じゃった。　あの方が在位している間は、＞ピラミッド＜に盗みに入る輩もいなかった。　しかし、若くしてお亡くなりになられた。　その原因も解らん・・・」

「・・・・・・・」

リーシャは老人の話に聞き入って入るが、カミュは未だに老人を睨むだけ。
何でもないような事の様に話してはいるが、決してその国の高官だった者が、他国の、それもただの旅人に話す内容ではないのだ。

「・・・残されたのは、まだ歳が二桁になったばかりの王女様だけじゃった。　すぐに女王として即位なされたが、幼子故、政（まつりごと）などできはしない。」

「・・・・・傀儡・・・・・ですか・・・？」

ようやく口を開いたカミュの方に視線を戻した老人は、目を瞑り、溜息を吐くように頷いた。　リーシャは正直、話について行くことが困難になりかけている。

「・・・先代の夫。　つまり、現女王様の父君は早くして亡くなられておる。　女王様はお一人じゃ。　父君の母、女王様の祖母に当たる者が今、実際に＞イシス＜を動かしているといっても過言ではないだろう。」

「・・・・・・何故・・・・それを私達に話したのですか・・・・？」

ついにカミュはその疑問を口にした。
王家の内情まで話したこの老人の考えが解らないのだ。

「・・・ふむ。　お主が疑うのも尤もなことじゃな・・・今話した内容を考えれば、儂は国家の反逆者の様なものじゃな・・・」

「・・・確かに・・・」

ようやくリーシャもカミュの話す疑問の意味を知ることとなる。
国家に仕える者が、他国の者にその内情を話すなど、裏切り行為以外何物でもない。
思いつくまま、感じた感情を口にするリーシャではあったが、アリアハンの内情等を軽々しく話した事はない。

「・・・儂は、現女王様であるアンリ様がお生まれになる前から、イシスに尽くしてきた。　アンリ様の周囲には同年代のご友人などおられない。　いつもお一人であった。　それは女王となった今も変わらんじゃろう・・・いや、今の方が酷いかもしれん。」

「・・・・・・・」

「・・・今のアンリ様は、女王として玉座に座っておられるだけじゃ。　幼い頃から利発なお方じゃったから、すでに国政にかかわれ

る程の知識は持っておられよう。　しかし、それを周囲の人間が許さない・・・お主たちがイシスを訪れるのであれば、アンリ様の話し相手になってはもらえぬか？」

カミュは、老人の話の内容を全て信じたわけではなかった。
とてもではないが鵜呑みに出来る内容ではない。
一国に仕える者が、それだけの理由で内情等を話す訳がない。

「・・・そういうことだったのか・・・・わかった・・・私の様な者で役に立つかどうか分からないが・・・・」

しかし、カミュの隣に座る脳筋戦士には疑う余地すらなかったようだ。
そんなリーシャにカミュは盛大な溜息を吐く。

「・・・はぁ・・・・謁見の間で発言すら許されないアンタがどうやって女王陛下と会話をするつもりなんだ？」

「　うっ！？　」

カミュの容赦のない言葉に、リーシャは声に詰まる。
カミュの言うとおり、リーシャ等は謁見の間での自主的な発言は許されていない。
それこそ、女王様から話しかけられたとしても直答は許されていな

いのだ。

「・・・・・それで・・・・・・・それだけの理由ではないのではないですか?」

もう一度老人に戻したカミュの視線は、凍てつくような冷たさだった。
無表情に睨むカミュの姿に、一瞬老人は怯みを見せるが、流石にそこは数十年＞イシス＜に文官として仕えてきた男、今までの優しげな瞳を消し、カミュとしばし睨みあった。

「・・・・若いのに・・・・・良い瞳をしておるの・・・・流石は『オルテガ』殿のご子息と言ったところか・・・・・」

「「　!!!　」」

睨み合いの均衡を崩したのは老人であった。
その老人が溢した単語に、カミュとリーシャは驚きを見せる。

カミュ達はその事をこの老人に話したこともない。
アリアハンから来たことすらも話していないのだ。

「そう警戒するでない。　お主たちの旅は既に世界各国に伝わり始めておる。　ロマリア国王が各国にその旨を伝える伝書を流したの

じゃろう。」

「・・・・・・・」

「その話は、この小さな家にも届いておる。　そしてこの時期に＞魔法のカギ＜を求めて＞イシス＜に来る者ならば、その者達に間違いないだろうとは思っておったが、儂の目をまだ曇ってはおらんかったようじゃな。」

老人の話はカミュとリーシャにとって驚きの連続だった。
ロマリア国王がそこまで便宜を図るとは思ってもみなかったのだ。
各国へカミュ達のことが伝われば、各国の城に上がることが、かなり容易になってくる。
またその逆に弊害も多くなってくるが・・・・

「・・・お主があの『オルテガ』殿のご子息であれば、我が国である＞イシス＜を変えることも可能じゃろう・・・・いや、国家を変えることは出来なくとも、アンリ様のお心を変え、真の女王国家を再生させる一石となってくれるじゃろう。」

「・・・・私は『オルテガ』とは何の縁もありませんが・・・・・」

「カミュ！？」

老人が本当の目的を話し出すが、その内容にカミュの表情が益々失われていく。
そして出た言葉は拒絶。
自分が『オルテガ』と血縁であることすら認めないものだった。

その言葉に真っ先に反応したのはリーシャ。
最近は、カミュのその生い立ちを理解し始めてはいるが、それでも自分の父を父と認めないカミュの考え方にはどうしても納得がいかないのだ。
それも、その父は全世界で名が知られる者であり、リーシャが祖国として愛するアリアハンの英雄である男なのだ。

「・・・ふむ・・・そうか・・・お主も・・・・・いや、言うまい。　＞イシス＜に行く必要性はお主も解っておろう。　後はお主がアンリ様にお会いしてから考えてくれればよかろう。」

「・・・・・・・・・」

「・・・カミュ・・・」

カミュの言葉の中に老人は何かを見たのだろう。
故にその先を語ることはなかった。
ただ、『＞イシス＜に行って女王に謁見せよ』というのみだった。

暫し、睨み合っていた両者であったが、老人が席を立ち寝室へと入って行ったことによりその睨みあいも終了する。

「・・・カミュ・・・」

「・・・今、アンタとあの男について議論するつもりもなければ、する意味もない。　アンタと俺は違う・・・・」

老人がいなくなっても席を立とうとしないカミュにリーシャが話しかけようと声をかけるが、それに対して返ってきたカミュの答えは完全な拒絶。
『オルテガ』に関して、リーシャと話す意味も気持ちもないというものだった。
その答えは、リーシャに『怒り』の感情を湧き上がらせるのではなく、『哀しみ』を胸に残した。

その後、会話もなく二人は就寝する。
リーシャは先日＞アッサラーム＜で聞いた話を思い出す。

カミュにとっては、１６年間共に過ごした祖父や母でさえ、今や『他人』として見ているのだ。　ましてや、顔を見たこともなければ声も聞いたこともない者である『オルテガ』を父として見ることは果たして可能なのかと・・・
しかも、『オルテガ』はカミュが母や祖父を『他人』として見なければ生きてはいけない元凶と言っても過言ではないのだ。

自分の中の憧れの存在である『オルテガ』という英雄。
自分の仲間であり、アリアハンが『魔王討伐』の命を下した『勇者』であるカミュの父としての『オルテガ』という存在。
リーシャの中で、その同一であるはずの存在が結びついて行かない。
リーシャは眠りにつくまで、その事に頭を悩ませる事となる。

翌朝、老人の提案により、一行は朝日が昇る前に＞イシス＜へと向かうこととした。
老人の話では、この家から＞イシス城＜までは丸一日。
途中で魔物との戦闘や、咄嗟のアクシデント等があれば、当然その進行速度は変わり、予定が狂って行く。

基本、老人がいう日数は、馬車での行動を基準にそれを徒歩に直したものである。
つまり、馬車であれば魔物との戦闘を計算には入れない。
故に眠い目を擦るメルエを無理やり起こし、一行は砂漠へと出たの

だ。

「アンリ様はとてもお美しい方じゃ。　くれぐれも懸想等せぬようにの。」

別れ際に老人がカミュに告げた一言は、一行を大いに困惑させた。
リーシャやサラは、『カミュ』と『恋』という単語が全く結びつかないことに。
カミュは、昨日の話から全くかけ離れたその内容に。
メルエは、知らない言葉が出てきたことに。

そんな各々の表情を見て、淡く微笑んだ老人は、『気を付けて』という言葉で一行を送り出した。

老人の家から離れた一行は、真っ直ぐ西へと進む。
まだ太陽が昇りきっていない砂漠は肌寒く、メルエはカミュのマントに包まりながら進み、その後ろをサラとリーシャが歩いて行く。

そんな涼しげな砂漠に突然の熱気が発現した。
カミュがその熱気の方向に視線を向けると、＞メラ＜級の火球がカ

ミュ達に向かって複数飛んできていたのだ。

「伏せろ！」

珍しいカミュの大声に、リーシャもサラも驚きよりもその指示に従うことを優先させた。
身を伏せた一行の上を火球が飛んでいく。
涼しかった砂漠を熱気が包むが、自分の頭すれすれを飛んで行った火球にサラは自分の身体が冷えて行く思いを持つ。

「魔物か！？」

飛び去った火球を後ろ目に立ちあがったリーシャは、背中の斧を構え周囲を警戒する。
マントからメルエを出したカミュもまた背の剣を抜き、構えを取った。

一行の左手の砂煙の中から現れたのは二体のムカデ。
ロマリアで生息していた＞キャタピラー＜のような固い殻で覆われているようには見えないが、その身体は毒々しい色をし、相手を威嚇するような模様が浮かび上がっている。
その姿はムカデというより芋虫のようなものだった。

一体のムカデがカミュ達に向かって口を大きく開いたかと思うと、その口から先程カミュ達に向かって飛んできたような火球を吐き出した。

カミュ、リーシャ、サラの三人はそれぞれ自分が持つ盾でその炎を防ぎ、メルエはカミュの後ろに控え、＞魔道師の杖＜を握っていた。

「カミュ！　突っ込むぞ！」

「・・・・わかった・・・・・」

盾で火球を防いだリーシャは、斧を片手にムカデに向かって駆けだす。
リーシャの言葉に頷いたカミュもまた同じムカデに走り込んだ。

＞火炎ムカデ＜
イシス砂漠に生息する魔物で、その体躯に火を纏う。
その口から『火の息』を吐き出し、敵を襲う。
背にある殻の様なものは、＞キャタピラー＜とは違い、それほど硬くはなく、剣等の攻撃も可能ではあるが、その身に纏う熱気に容易に近づくことが出来ない。

一体の＞火炎ムカデ＜を斬りつけるカミュの剣が足を斬り飛ばす。
怒りに燃える＞火炎ムカデ＜の口から＞火の息＜と呼ばれる火球が飛び出しカミュを襲った。

火球が直撃し、炎に包まれるカミュ。

一瞬気を向けたリーシャに、＞火炎ムカデ＜の尾の様な部分が襲いかかった。
咄嗟に盾で防いだリーシャではあったが、その身体は浮き上がり、後方に下がって行く。

火球に包まれたカミュは、その手に持つ＞うろこの盾＜で火球を完全に防いではいたが、一度態勢を立て直すためにメルエとサラのいる後方まで位置を下げた。

「・・・・・・・・ベギラマ・・・・・・・・・」

カミュ達が下がってきたことを確認したメルエが、手に持つ＞魔道師の杖＜を＞火炎ムカデ＜二体に向けて詠唱を行った。

杖の先から凄まじい熱風が巻き起こり、＞火炎ムカデ＜に襲いかかる。
魔物の周辺に着弾した熱風は火炎へと姿を変えて、魔物の周囲を火の海と化した。

「・・・・・・・メルエ・・・・・・・」

杖の先から発現させた光景に、リーシャは思わず息を飲んだ。
リーシャに魔力のコントロール等のことは理解できない。
ただ、その方法を身につけたメルエが更なる才能の開花をさせたことは間違いないということは解ったのだ。

真っ赤な海の、炎という波が引いて行き、魔物の残骸があるだけとなると予想していた一行の前に信じられない光景が広がる。

「・・・・・・馬鹿な・・・・・・」

「・・・そ、そんな・・・」

その光景が信じられないとでもいうように言葉を洩らすリーシャとサラ。
メルエも目を見開き、そこにあるはずのない姿を見つめていた。
炎の波が引いて行ったその場所には、全く変わらない姿の＞火炎ムカデ＜が鎮座していたのだ。　いや、むしろその身に纏う熱気を増し、カミュ達と対する時よりも凶暴になっているようにさえ見える。

「・・・・メルエ、おそらくあの魔物には、火炎の魔法は通用しない。　その身に纏う熱気に変えてしまうのかもしれない。　使うなら＞ヒャド＜か＞イオ＜にしろ。」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

自分の魔法が通用しない相手など、メルエは今まで相対したことはなかった。
どんな魔法でさえ、何らかの効果を与えていたのだ。

それは、メルエの心に恐怖を植え付けた。

それでも、カミュの言うとおり、もう一度杖を掲げ直し、詠唱を始める。

カミュとリーシャはそれぞれの武器を構え、メルエの詠唱と共に駆けだす用意をしていた。

「・・・・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・・・・・・」

「バギ！」

しかし、カミュ達が駆けだすその前に、メルエの呪文行使に被せるようにサラの詠唱が完成した。

メルエが放った冷気が一体の＞火炎ムカデ＜に襲いかかり、その無数にある足を凍らせていく。　身動きが取れなくなった魔物が息つく暇もなくその周囲の風が真空と化した。

凍り付いた足が切り刻まれ、砕け散るように飛び散って行く。

「ギャオオオオオオオオオオオオ！！」

凄まじい雄たけびを上げた一体の＞火炎ムカデ＜が前のめりに倒れた所に、＞地獄の鎌＜ならぬ＞鉄の斧＜が振り下ろされる。

それ程硬くはない殻を突き破り、＞火炎ムカデ＜の体内に食い込んでいく斧はそのままその体躯を二つに分けてしまった。

身体を二つに分けられた＞火炎ムカデ＜は、その体躯を数度くねる

ように動かし、体液を撒き散らした後に絶命する。
残るは一体。
先程のサラの＞バギ＜により、体躯に無数の切り傷をつけた＞火炎ムカデ＜はその傷口から体液を流しながらも、必死に砂の中に隠れようともがいていた。

「バ・・・！！」

「・・・もう、いいだろう・・・・？」

その身を隠そうと必死な魔物に向け、もう一度腕を掲げ、呪文の行使を試みるサラの右腕が戻ってきたカミュによって掴まれる。
それは、これ以上の攻撃を認めないというカミュの意志の現れ。
サラとカミュが暫しの間、睨み合うことになる。

「・・・・・・・・わかりました・・・・・・・・・」

「・・・・・・・」

睨み合いの後、サラの腕は下げられた。
その事にリーシャは素直に驚きを表す。
それは、カミュも同じだったのかもしれない。

すでに＞火炎ムカデ＜は砂の中に入ってしまっている。
これ以上追う意味はもうない。
しかし、サラは、サラの攻撃を邪魔したカミュに文句一つ言うことはなかったのだ。

「・・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・・・」

「はい？　あっ・・・・さあ、メルエ行きましょう！」

自分の中でも消化しきれていなかったのだろう。
若干険しい表情をしていたサラを心配し、声をかけて来たメルエを見た途端、サラは表情を改めた。　いつものサラの表情に戻ったことに安心したのか、メルエはサラの手を取り、再び西へと歩き始めた。

「・・・・カミュ・・・・私も認めなければいけないのかもしれないな・・・」

「・・・・・・何をだ・・・・・・？」

不意にかかったリーシャの声。
それは、カミュにとって、全く理解できない呟きだった。

「・・・・・・サラの成長をだ・・・・・・・」

リーシャにとって、サラもメルエと同じように妹の様なものだった。
いつも一人で苦しみ、悩み、答えを出せずに涙するサラ。
しかし、いつからだろう。
彼女が自分の力で立ち上がり、自分の瞳で物事を見始めたのは・・・
・

リーシャは今まで、それを感じてはいたが、はっきりと認識はしていなかった。
今、サラは間違いなくこのパーティーに必要な存在になっている。
それは、サラには解っていないかもしれない。
しかし、リーシャは・・・いや、カミュもまたその事を認めているだろう。

「・・・ふぅ・・・アンタは相変わらず、余り進歩は見えないようだがな・・・・」

「 な、なんだと!? 」

しかし、この二人の真面目な会話はあまり続かない。
失礼千万なカミュの言葉に、瞬時にリーシャの頭に血が上って行く。

「・・・・相変わらず、頭に血が上りやすい・・・・・」

「ぐっ・・・・・」

「・・・先を急ぐぞ・・・・夜が更ける前に＞イシス＜に着きたい。」

カミュの反撃に言葉に詰まってしまったリーシャを置き去りにカミュも西に向かって歩き出す。　悔しそうに歯がみするリーシャは、そのカミュの後ろ姿を睨みつけるが、先程のカミュの言葉を思い出し、その表情を緩めた。

カミュは、リーシャが口にしたサラの成長に関しては否定しなかった。
それが、カミュの成長なのかもしれないとリーシャは一人納得するのであった。

一行は、ひたすら西へと歩を進める。
途中では、様々な魔物との遭遇があったが、一度戦えば、その魔物

との闘い方も見えてくる。　特にサラはその対処法を考え、時にはカミュやリーシャに指示を出す場面なども出てくるようになっていた。

やがて陽も落ち、砂漠に闇のカーテンが敷かれる頃に、ようやくカミュ達の頬に湿り気のある風が当たるようになってきた。

「・・・・・水場が近いな・・・・・・・」

「あのお爺さんは、オアシスの傍に＞イシス城＜はあるとおっしゃっていましたね？」

湿り気のある風に目的地が近いことを悟ったカミュとサラは口を開くが、カミュのマントに包まり寒さを凌いでいるメルエは限界が近かった。
老人の住処からここまでの間に遭遇した魔物の数は、おそらくメルエが加入して以来最大数となっているはずだ。

もはや、カミュ一行の中でなくてはならない存在になっているメルエの魔法は、その魔物達との闘いにおいてもその効力を発揮していた。
ただでさえ、砂漠に直接降り注ぐ日光により体力を削られていく中での呪文の行使は、幼いメルエにとって酷なことであったのだ。
その為、陽が陰りはじめた頃からの戦闘では、カミュは極力メルエに魔法を使わせなかった。　それでも、メルエの状態は限界ぎりぎりになっているのだ。

「行こう、カミュ！　早くメルエを休ませてやりたい。」

「・・・・わかってる・・・・・」

そんなメルエの状態を一番気にかけていたのはリーシャだ。
自分が魔法を使えないことで、その魔法力の低下による苦しみが解らない為、尚のことメルエへの心配が強い。
途中で抱きかかえて歩こうとしたが、それはサラに止められた。

『これから先もメルエと旅するつもりなら、メルエが弱音を吐くまでは駄目です。』

というサラの強い言葉に、リーシャは何も言えなかった。
事メルエに関しては、サラは完全な躾役になっている。
本当にメルエの為だけを思って言っているのが解るだけに、『鬼のようだ』と思いながらも、リーシャはその言葉に従うことにした。

そんな一行の前に、ついに目的地である＞イシス城＜が見えてくる。
雲一つない空に輝く月灯りに照らされ、神秘的に輝く城は、一行の脳裏に焼き付いて行く。

「・・・・・綺麗ですね・・・・・・」

「・・・・ああ・・・・これ程までに神々しい城は私も初めてだ・・・・」

オアシスを背にそびえるその城を見上げ、リーシャとサラが溜息を洩らす。
その城の麓には明るい営みの光を溢す＞イシス＜の城下町。
城を囲む城壁とは別に、城下町を囲む防壁がそびえ立っている。

通常、アリアハンでもロマリアでも城下町は城の城壁内につくられることが多い。
だが、＞イシス＜は城と町は別の物として存在している。
より、オアシスの水場に近い所に城が立っているが、その在り方がこの国の王族の在り方を表しているようだった。

「・・・・・・・・まず町に入り、宿を探す・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

疲れきっているメルエは、カミュの言葉に一つ頷くと、視線を上げずにカミュのマントを掴みながらその後を歩く。
リーシャは、そんなメルエとサラを見比べ、サラが溜息と共に頷くのを確認すると、カミュの足元からメルエを抱ぎあげた。

「・・・・・・・・・・??・・・・・・・・・・」

不思議そうに自分を担ぎ上げた人物の表情を見ていたメルエであったが、それが母の様に慕うリーシャであり、浮かべている表情が笑顔であることに安堵し、瞳を閉じて行く。

「・・・・すみません・・・・メルエがそこまで疲れているとは・・・・」

リーシャの腕の中に納まると同時に小さな寝息を立て始めたメルエを見て、サラの胸に罪悪感が湧いてきた。

「いや、サラは正しい。　この先の旅はもっと厳しいものになることは間違いない。　それに、メルエも解っているさ。　その証拠に、何一つ弱音を吐かなかった。」

「・・・・・そうだな・・・・・・」

優しい笑みを浮かべながらメルエの顔を覗き込むリーシャの言葉に、珍しくカミュが賛同の意を示した。
それは、サラの考えを誰も否定していないという証拠。
サラの言うとおり、辛く苦しい旅になることは、幼いメルエですら感じているのだ。

「・・・はい・・・メルエ、ごめんなさい。　今日は、本当によく頑張りましたね。」

リーシャとカミュの言葉に未だ罪悪感を抱えたままサラは頷き、リーシャの抱くメルエの帽子を取って髪を撫でながら、今日のメルエの頑張りを讃えた。
そして、一行は＞イシス＜の町へと入って行く。

イシス砂漠？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

また、イシスに辿り着けなかった・・・・・

本当は、イシス城までを一話にしたかったのですが、少し区切りがおかしいかなと思い二話に分けました。

ご意見ご感想をお待ちしています。

イシス城？（前書き）

アクセスが４０万を超えておりました・・・・
本当にありがとうございます。

お盆前の最後の投稿となります。

イシス城？

イシスの町に入って、サラは驚くことになる。
町は活気に溢れていた。

いや、活気に溢れているとは言えないのかもしれない。
夜とはいえ、人の往来が激しい。
そして、皆同様に何かに焦っているような表情を浮かべている。

それは、決して＞アッサラーム＜で見た、夢と希望の詰まった活気ではなく、＞ロマリア＜で見たような充実した活気でもない。
どちらかと言えば、＞みかわしの服＜を買う為に戻った時の＞ノアニール＜に似た雰囲気であったのだ。

「　カミュ！　まずは宿屋だ！　」

「・・・・・わかってる・・・・・・」

周囲を見渡すサラの様子を見たリーシャが、そのサラではなくカミュへと口を開く。
実に理不尽な物言いではあるが、カミュはそれに黙って頷いた。
サラもメルエを心配するリーシャの胸の内を理解し、すぐさまカミ

ュ達の後を追う。

宿屋はすぐに見つかった。

いつもの様に部屋を三部屋取り、今回はサラとメルエを同室に、リーシャとカミュは個室となるように配分された。

「カミュ様。メルエは私が見ています。リーシャさんとカミュ様のお二人は情報収集を。」

「なに!?」

部屋に入ろうとするカミュに、サラが口を開き、その内容にリーシャはメルエを取り落としそうな程に驚きを表す。

完全な意趣返し。

まるで、＞アッサラーム＜で受けた自分の苦しみをリーシャに投げ返すようなサラの姿にリーシャは愕然とした。

しかし、実情は違ったのだ。

サラもまた、明らかに疲れを露わにしていた。

おそらく、湯浴みを済ませた後には、食事も取らずに、メルエと共に深い眠りに就くことだろう。

それがサラの表情に明確に表れているのだ。

「サ、サラ！　・・・・・わ、わかった。　一度メルエを起こして湯浴みをさせてやってくれ。　砂と埃で汚れているだろうからな・・・それと軽くでもいいから食事もとらせてやってくれ。」

「はい。」

まるでメルエの母親の様なリーシャの言葉に、サラは柔らかな笑みを浮かべて頷く。
カミュはそんな二人のやり取りを横目で眺め、自分の部屋へと荷物を置きに行った。

未だに釈然としない表情を浮かべるリーシャではあったが、疲れきっているサラを休ませるためにも、一度サラ達の部屋のベッドにメルエを寝かせた後、自らの部屋へと入って行く。

メルエは案の定、サラと共に湯浴みをした後、食事を取りながら舟を漕ぎ出した。
せっかく洗った髪をスープの中に浸してしまうのではと心配したサラがメルエを部屋へと連れて行く。

そして、サラとメルエの二人は、食堂に戻って来ることはなかった。
メルエを寝かせたサラもその横で添い寝をしている最中に、本格的に寝入ってしまったのだろう。

「・・・・・・食事が終わったなら、もう一度町に出る・・・・・・」

「 ん？　ああ、わかった。 」

最後の肉の切れ端を口に放り込んだリーシャは、テーブルの上に残った食器を片づけて行く。　メルエが残したものはカミュが食べ、サラが残した物はリーシャが食していた。

「 うぐ・・・・もぐ・・・・それで、カミュ？　何処へ行くつもりだ？」

「とりあえず、この国の現状を把握しなければ何もできない。」

口の中の物を飲み込み、問いかけるリーシャの方を振り返ることなくカミュが答える。
＞イシス＜に入る前に会った老人の話がこの国でどういった意味を持つ言葉だったのかをカミュ達は確かめなければならない。
その為にも、今この町がどういう状況なのかを把握する必要があるのだ。

「わかった。　では行こう。」

食器を片付け終えたリーシャと共に、夜の町へと踏み出した。

宿屋を出た右側。
＞イシス＜の町の門を入ってすぐの場所に墓地がある。
＞カザーブ＜の村とは違い、その墓地は教会と隣接はしておらず、
小さな柵で囲まれた簡素な墓地であった。
そこに男が一人立っている。

「おや？　旅の方ですか？　貴方たちにもこの声が聞こえますか？」

「「　？？　」」

墓地の横を歩くカミュ達に突然かかった声。
それは、墓地に立つ一人の男からだった。
語りかける内容が全く理解できないカミュ達は、首を傾げるが、そ

んなことに興味を示さずに男はそのまま話し続けた。

「ここにいると、死者達の声が聞こえてくるようです・・・・・私達もいずれ土に還って行くのでしょうね・・・・」

墓の上に輝く星空を眺めながら、そんな事を話し出す男にカミュは曖昧な答えを返し、二人はその場を後にする。
残された男は、立ち去るカミュ達を気にした様子もなく、そのまま夜空を見上げていた。

「カミュ・・・・・あれは一体何だったんだ?」

墓場から離れた所で、カミュに真意を問いただすリーシャの表情は困惑を極めていた。
あの男が何を言いたかったのかがリーシャには皆目見当もつかなかったのだ。

「・・・・さぁな・・・・どうにせよ、俺には関係がないことだ・・・・俺は自分が土に還れるとは思っていない・・・・・魔物の腹の中か、もしくは魔法で骨すら残らないかのいずれかだ。」

「・・・・・カミュ・・・・・・」

まるで自分を嘲笑うかのような表情を浮かべるカミュにリーシャは言葉を失った。
それ程にカミュの語る内容はリーシャに取って胸に詰まるものがあった。

自分にまともな『死』などあり得ない。
魔物と対峙し死ぬか、魔物の使う魔法にて殺されるか。

しかし、リーシャも気がついてはいなかった。
カミュの言葉の中には、『人』によって殺される可能性も示唆していた事を・・・・

再びカミュ達は夜の町を歩き出す。
各店はすでに店仕舞いを終え、それぞれの家へと入って行っていた。

それでも、町には人が往来している。
そんな中、カミュはふと、何人か人間がお互いを軽く罵りながら、ある場所に入って行くのが見えた。

それは、塀に囲まれた場所で、下へと続く階段を降りて行っている。

その姿を見て、リーシャは頭の中である場所と結びつく。
人が狂気と化す場所。
それは、＞ロマリア＜にあり、カミュ達三人の心に重い影を背負わせた場所である。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「　カ、カミュ！　こ、ここは止めておいた方がいいと思うぞ。」

その階段をじっと見つめたカミュへのリーシャの悲痛な叫びは、無言の拒否を受け霧散した。　そのままカミュはリーシャを振り返ることなく、階段を降りて行く。

「　ようこそ！　血肉湧き躍る『闘技場』へ！　」

『やはり！』
リーシャは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。
そこはリーシャの予想通り、ロマリアが行っていた国民不満の捌け口となる場所であった。

兵士たちが捕獲した『魔物』同士を戦わせ、生き残るものを予想して賭け事とする。
それは、魔物を悪と考えるリーシャやサラにしても吐き気がするほどおぞましい物だった。

血走った目をして、狂気じみた叫び声を上げる人間。
生死を賭けて己の身を傷つけ合う魔物に罵声を飛ばす人間。
どれもこれも、リーシャが信じていた人間像を根底から覆す光景なのだ。

「さあ、次の試合が始まってしまいますよ。貴方の予想がピタリと当たれば、大儲け間違いなし！」

「・・・・・・カミュ・・・・・・出よう・・・・・・」

アナウンスに応じる周囲の声に、心が沈みこんでいくような感覚を覚えたリーシャは、言葉少なにカミュへと懇願するが、その願いも無駄に終わってしまう。

確かに、この『闘技場』によって、国民の不満は幾分かは解消されるだろう。
そして、賭け事というものは常に胴元に利益が出るように作られている。
配当はあるだろうが、それ以上に掛け金が多いのだ。
その回収された掛け金は、運営費を差し引いても一日当たりで莫大な金額となるだろう。
それは、この『闘技場』全体を揺らす程の怒声にも似た歓声をあげ

る人の多さが物語っている。

では、その莫大な金はどこへ行くのか。
それはもちろん国家にである。
国民の不満も解消し、尚克、税収には劣るものの、相当な金額が国家へと入ってくる。
これ以上の施策があるだろうか・・・・

「おや？　アンタ方見ない顔だね？　旅人かい？」

「・・・・・・ああ・・・・・・・」

カミュの後ろを、顔を歪ませながら歩いていたリーシャの耳に前方からの声が入ってくる。
ふと顔を上げると、青年とも中年とも言えない歳の頃の男がカミュへ話しかけているところだった。

「そうかい！　凄い『闘技場』だろう？　ロマリアにもあるらしいが、ここ程ではないらしいからな。　しかも新しい！」

「・・・・・・・」

男の言うように、この『闘技場』は＞ロマリア＜にあったものより、一回り大きい物だ。

そして、まだ制作されて数年と言ったところなのだろう。
『闘技場』特有の血生臭さが染み付いてはいなかった。

「ここには、一度だけ女王様もお見えになったことがあるのだ。
あの若くお美しい女王様がだぞ。　まぁ、すぐにお帰りになられてしまったが・・・・」

「・・・・・一度・・・・・？」

＞ロマリア＜国王は、他人に国政を放り投げてでも通うことを切望していた。
それがたったの一度ということに、カミュは疑問を覚える。
それはリーシャも同様であった。

「この国は、神聖なる女王様の治める国。　神聖でお美しい女王様が我々の住むこのような下界の町に降りてこられるなど、数十年に一度なんだ。　それが、この『闘技場』ができたばかりの時に視察に来られた。　それがどれ程凄いことかは旅人のアンタには解らないだろうがな。」

「「・・・・・・・・」」

男は悦に入ったような表情を浮かべ、虚空を見上げて話す姿は、どこか空恐ろしい物に感じる程のものだった。

自分が生きて来た世界とは、また違った価値観のある国なのではないかとさえ、リーシャは考える。

「・・・・ただ・・・・」

「「　???　」」

しかし、ふと表情を曇らせた男は、そのまま言葉を続ける。
その内容に、リーシャだけではなく、カミュまでも驚きを露わにする。

「・・・・先代の女王様は美しいばかりでなく、国民を第一に考えるお方だった。　国民は皆笑顔で過ごし、そして、外敵に怯えることもなかった・・・・・」

突然話し始めた男の内容。
それは、決して他国からの旅人に話す内容ではなかった。

男の様子を訝しげに見るカミュの瞳にも、男の発言に何か思惑があるようには見えない。
つまり、国民感情の中に、抑えることのできない不満があふれ始めている証拠と言っても過言ではない程の国家の状況が見て取れた。

「・・・・今は、税金も高い。　この『闘技場』に来る人間も少な

くなる一方だ・・・代々の女王様がお守りしてきた＞ピラミッド＜にも墓荒らしが横行し、もはや王家の宝もないのではないかと噂される程・・・この国はどうなるのだろう・・・・」

「・・・・・そこまでに・・・・・・・」

カミュは静かに男の傍に近寄り、声をかける。
うわ言のように不満を漏らし始めた男を軽く制したのだ。

「・・・・・周囲の兵士がこちらに注意を向け始めています・・・・」

「はっ!?　す、すまない・・・・・今の言葉は忘れてくれ・・・・」

カミュが言うように、魔物対策という建前によって『闘技場』に配備されていた兵士が、見慣れぬ服装のカミュ達と、男の会話に疑念を持ち、注意を向け始めていた。

このまま、男が話し続ければ、その不満は熱を持ち始める。
そうなれば、当然声量も大きくなり、兵士達の耳にも入って行くだろう。
そうなれば、男は間違いなく国家反逆罪となる。
それを聞いていたカミュ達も同様に処罰される危険性もあるのだ・・・・

「・・・・・出る・・・・・・・」

慌てて離れて行った男を見送り、カミュは『闘技場』を後にするため、身を翻して出口への階段を上って行く。
今の男の話を消化しきれていないリーシャは、ただカミュの背中を追うことしかできなかった。

「カミュ！　どういうことだ？　この国はどうなっているんだ？」

『闘技場』を出て、町に入ってからリーシャが前を行くカミュへと疑問を投げかける。
それは、リーシャにとっては当然の行為だったのかもしれないが、当のカミュにとっては呆れる行動だった。

「・・・・・なぜ俺に聞く？・・・・・俺は、終始アンタと共に行動してきたと思うが？」

「そ、それは・・・」

老人の家にいる時も、話を聞いていたのはカミュとリーシャの二人であるし、今も片時もリーシャと離れて行動したことはない。
頭に入れた情報量はカミュもリーシャも変わらないはずなのだ。

それでもリーシャはカミュへと問いかけた。
生来、リーシャとカミュでは、その情報の処理方法も、処理スピードも、理解の度合いも違うのだ。
リーシャにだってそれは解っている。
それはカミュも同じであろう。
その証拠にカミュの口端はいつの間にか上がっていた。

「くっ・・・・い、今までの話を私の中で考えても答えは出ない！」

「・・・・ふぅ・・・・あの老人が言っていただろう・・・・女王は幼くして即位し、周辺の者達の傀儡となっていると・・・・・」

悔しそうに顔を歪め、それでも理解しておきたいという気持ちを誤魔化すことのできないリーシャは、素直にカミュへと答えた。
その言葉を聞いた途端、カミュの表情はいつもの無表情へと戻り、周囲に漏れないように音量を絞った声でリーシャへと話し始めた。

「・・・税を上げたのも、周囲の人間の政策だろう・・・おそらくだが、女王は印を押す仕事しか与えられていないのではないか？　その証拠に、一度『闘技場』に来ている。」

「・・・『闘技場』とそれに何の関係が・・・」

カミュの話す内容がリーシャには未だに理解しきれない。
いつも思うが、カミュは回りくどいのだ。
リーシャの様な人間には結論だけを言えば済むはずである。

しかし、カミュはそれをしない。
結果が出る過程から始めるのだ。
それは、逆に言えば、リーシャに本当の意味での理解をさせようとしているとも見ることができる。

「・・・『闘技場』には一度しか来ていない。　それは、施策として作った物が女王の命であると示す為ものだ。　だが、すぐに席を外し帰ったという。　おそらく見ていることができなかったのだろう。」

「・・・・・・・」

「通常であれば、女王陛下が観覧するのであれば、特等席を用意し、

それなりの時間を過ごさせる。　しかし、自分はただ印を押しただけで、何ができるのか、それがどういう物なのかも分からない状態で連れてこられた物が、あの人間の狂気を映し出す場所であれば、通常の神経の者は持たないだろうな・・・・」

サラも初めて『闘技場』を見た時は、その腹にあるもの全てを吐き出した。
リーシャにしたって、目の前が暗くなっていく感覚を味わっている。
魔物と対峙し、何度も魔物を殺してきた者達であってもそれ程の衝撃を受けるのだ。
ましてや、宮廷という温室で育てられた人間にとっては、世界が一変してしまっても可笑しくはない。

「・・・・では、カミュ。　お前は、女王は何も知らなかったと言うのか・・・・・？」

「・・・はぁ・・・アンタは今までの話を聞いていたのか？」

自信をなくした表情を浮かべながら聞くリーシャに、カミュは更なる追い打ちをかける。
その言葉に一瞬むっとした表情を見せるが、怒りを抑えカミュをもう一度見るリーシャに、カミュはゆっくりと話し出した。

「・・・あの老人は・・・宮廷から追い出されたと言っていた・・・先代から仕えてきた敏腕文官は、幼い女王を担ぎあげ摂政政治を行

うには邪魔だったのだろう・・・それに、幼い子供は大人の都合に振り回されることは、アンタも＞アッサラーム＜で知っただろう？」

「・・・・・カミュ・・・・・・」

「ここは、＞アッサラーム＜ではないし、相手はメルエの様な捨て子でもない。　俺達に如何こうすることなどできない。」

やっと理解が出来始めたリーシャは、今まで数々の難題を越えて来た目の前に立つ『勇者』へと伺いを立てるが、それは無碍に斬り捨てられた。

確かにカミュの言うとおり、国家の問題にカミュの様な平民。しかも、他国の人間が入る余地などありはしない。

「・・・カミュ・・・お前なら・・・お前なら何とか出来るのではないか？」

それでも納得の出来ないリーシャが発した言葉は、カミュの顔から表情を消し去った。
カミュにとって、それは最も言われたくない言葉だったのかもしれない。

「・・・・アンタ方が求める、『そういう存在』にも限界はある・・・・『人』を救うために川に飛び込むことや、『尊い貴族様』を救うために魔物の群れの中に放り込まれることはできる。　だが、国の問題を一個人で何が変えられるというんだ？　そんな事ができるのならば、当の昔にやっているさ・・・・・・」

「　はっ！？　す、すまない・・・・そういうことではない・・・・そうではないんだ・・・」

無表情に戻ったカミュの顔を見、その発言を聞いたリーシャは、自分の口から出た言葉がどういう意味を持っていたのかに気が付いた。
それは、リーシャが意図していたものではなかった。

自分が伝えたいこと。
自分が問いかけたいことが正確に相手に伝えられない。
リーシャは自分の不甲斐なさに哀しさすら浮かんできていた。

「・・・ただ・・・・先代の女王が・・・・何故死んだのか・・・・」

「・・・・何・・・・・？」

リーシャの表情に気が付いたのか、カミュは溜息を吐きながら言葉を続ける。
それは、またしてもリーシャを混乱に陥れるものとなった。

「・・・傀儡が必要である前に、賢王は邪魔となる・・・」

「・・・先代の女王か・・・？」

「・・・ああ・・・現女王を傀儡にすることを目論む人間であるならば、それなりの下準備は必要だ。　いきなり倒れた女王に代わって、即座に幼い王女を即位させ、その権力を握る事など不可能に近い・・・・・」

カミュが言っている結末にリーシャもようやく辿り着く。
それは、一国の国情としては最も醜悪なもの。

「・・・・・女王が殺されたとでも言うつもりか・・・・・？」

「・・・・毒殺にしろ・・・・暗殺にしろ・・・・足がつかなければ問題はない。」

淡々と語るカミュの言葉のないように、リーシャは身震いする。
それは、途方もない罪。
一国の王の謀殺など、死を持っても償う事などできはしないのだ。

「・・・しかし・・・あの老人は奇病で亡くなったと言っていたぞ！」

「・・・あの老人は『男』だ。　＞イシス＜は代々女性国家と云われているとも言っていた。　男であるあの老人が、緊急事態とはいえ、女王の部屋に入る事などできないはずだ。　ならば、女王に近しい者達が入り、状況を確かめて皆に報告する。」

「・・・それは・・・」

「・・・中の状況がどういうものであれ、実際見た者しか知らないということだ・・・・」

カミュの言うことは、もう予想や想像という枠を超えている。
実際、まだ城に上がっていない状態にもかかわらず、リーシャにもその光景が鮮明に思い浮かべることができた。
とても、１６歳の青年が考えつくものではない。
改めてリーシャはカミュが恐ろしく思え、また哀しく感じた。

「　な、ならば！　その証拠を掴めば・・・」

「・・・それは無理だ・・・『毒殺』であれば、もう確かめる術はない。　まさか、十年以上前に使用した毒物を後生大事に持ってはい

いないだろう。・・・・『暗殺』だとしても、それを実行した者達はすでにこの世にはいない可能性すらある。」

「・・・そんな・・・・」

カミュの言うとおり、毒殺の証拠など残っている訳がない。
暗殺にしても、依頼したものだとすれば、依頼された人物は口封じのために殺されている可能性もある。
万が一、徒党を組む者たちだとしても、この近辺にいない可能性が高い。

「・・・どちらにせよ・・・俺達ができる事など何もない。」

「・・・・・・カミュ・・・・・・・・・」

リーシャにしても、甘いことは重々承知している。
本来ならば、これはサラの発するべきものだ。
しかし、リーシャもこれまで遭遇してきた出来事から、『救うことができるのであれば、何とかしたい』という騎士精神にも似たような感情を湧き上がらせていた。
それは無残にも叩き壊されることとなったが。

その後、終始無言で宿屋へと帰ったカミュ達は、それぞれの部屋に入り、朝を待つ。
リーシャはベッドに入ってからもなかなか寝付くことはできなかったが、それでも砂漠を歩き続けた疲れからなのか、自然と意識が吸い込まれていく。

その頃、一人起きだす人物がいた。
自分の隣に眠る幼い少女に一度顔を向けた後、寝巻きから自分の服へと着替え、外へと出て行った。

夜空には星が瞬き、もはやかなり夜も更けているためか、人も町に皆無の状況である。
その町から町の外に出る少女。
未だに眠るメルエと共に就寝したサラである。

サラは、カミュとの情報収集をする役目をリーシャに託した。
それには、三つの理由があったのだ。

一つは、そのまま。
身体が疲れで言うことを聞かなかったということ。
メルエと同様、炎天下の中歩き続け、魔法を行使していた疲れが町に着いた安心感からどっと出て来ていたのだ。

二つ目は、町に着く前に遭遇した＞火炎ムカデ＜との戦闘。
あの時、サラは一匹の魔物を逃がした。
それは、カミュに止められてしまったからではない。

あの時、サラの目には、傷を負いながらも必死に身を隠そうとしている＞火炎ムカデ＜の姿がメルエの姿と重なってしまったのだ。

傷を負いながら、その身を護ろうと必死にあがく姿が、親からの虐待を受ける子供の姿に見え、その手を下してしまった。

魔物が子供であれば、弱いものに手を上げる親が自分ということになる。

「・・・・何が正しかったのでしょうか・・・・」

サラは、自分のした行為が正しいと胸を張ることはできない。

聖職についている僧侶として、教会の教えに背く行為をしてしまったのだ。

それは、聖霊ルビスの子としては裏切りに等しい行為。

しかし、その事を考えていた途中に、自分の手を引くメルエの姿を見た時、サラは自分の行為を否定も出来なくなってしまった。

魔物を逃がしたにもかかわらず、メルエがサラに向ける顔は笑顔だった。

アリアハンで魔物を故意に逃がしたとなれば、それは決して許されることではない。

むしろ非難の対象となり、住民からは白い目で見られ、アリアハン国民として生きて行く場所を失うこととなる。

「・・・・・私は・・・・・・私はどうすれば・・・・ルビス様・・・・・」

サラは夜空に輝く星達を見つめ、胸の前で手を結ぶ。
祈るように、そして救いを求めるように。

サラはそのまま町の外へと出て行く。
カミュとの情報収集をリーシャに押し付けた三つ目の理由を実行するために・・・・

夜が明け、朝食の時には、眠そうに目を擦るメルエとサラの二人が降りてくる。
カミュとリーシャはすでに席に着いており、顔を洗い終わった二人が席に着くのを待っていた。

朝食を取り終えた一行は、昨晩カミュとリーシャの間で話題の上がった女王と謁見するために＞イシス城＜へと向かう。

＞イシス城＜は町とは別になっており、一度北側の出口から町を出なければならない。
町を横切る一向の前に、一件の家が見える。
本当に何気ない家。
しかし、一行の目を引いたのは、その家の前に立つ一人の男。

男は玄関の前で、ぼうっと空を見上げている。
日差しの強い太陽の光に目を細める訳でもなく、手をかざす訳でもない。
ただただ空を仰いでいるだけだった。

「おい、カミュ・・・一体あれは何をしているんだ・・・？」

「・・・はぁ・・・だから、何故俺に聞く？」

その不思議な男を横目で見ながら、リーシャが前を歩くカミュへと声をかけるが、カミュは『またか？』とでも言いたげに、溜息を吐きながら振り向いた。

もはや、リーシャの頭の中には、『解らないこと＝カミュに聞く事柄』という項目が成り立っているのだろうか。
それが、ここ最近はかなりの頻度となっていることにカミュは溜息を洩らしたのだ。

「・・・貴方達は旅人ですか・・・？」

今まで空を仰いでいた男が、不意に視線をカミュ達の方に動かし話し始めたため、メルエは驚きのあまりカミュのマントの中へと隠れてしまった。

「先程から、空を仰いで何をやっているんだ?」

「・・・・・おい・・・・・・」

疑問に思ったことを口にしなければ気がすまないリーシャに、カミュは呆れてしまう。
それはサラも同じであった。
余りにも不躾なリーシャの言葉であったが、男は大して気にもせず、笑顔を浮かべた。

「私はソクラスといいます。こうやって空を見上げながら、夜が来るのをただ待っているんです。」

「・・・夜を・・・?」

男から出た、一行の予想を遥かに超える奇妙な言葉に、サラは疑問を洩らしてしまう。
ただ、空を仰いで夜を待つことに何の意味があるのか解らない。

ソクラスと名乗った男は、そのまま再び空を仰ぎ見る。
会話はそれだけ。
リーシャの疑問が晴れるわけはない・・・

「・・・カミュ・・・さっきの男は一体何だったんだ?」

男が立っている家から離れ、町の出口に当たる門をくぐる辺りで、ついにリーシャが疑問をそのままぶつける。
その相手は、やはり彼女の疑問解消機である、表情の少ない青年であった。

「・・・だから・・・何故俺に聞く?」

「・・・私にも解りません・・・カミュ様はお解りなのですか?」

「・・・・・・・メルエも・・・・・・・・・」

カミュがリーシャに先程と同じ答えを返した時、一歩後ろにいたサラが同じ疑問を口にしたことで、メルエも同じ様に答えるが、メルエに関しては周りの人間がカミュに答えを求めたため自分も口にしただけであって、内容を理解している訳ではないだろう。

「・・・・はぁ・・・・陽が落ちれば夜が来るということだろう・・・・」

「当たり前ではないか！　真面目に答えろ！」

カミュのやる気のない答えに、リーシャの怒声が響く。
余りと言えば、余りの言葉。
陽が落ちれば暗くなるのは当然と言えば当然なのだ。

「・・・俺やアンタにとってみれば、それは余りにも当然の結果だろうが、それを不思議に思う人間もいる。」

「・・・どういうことですか・・・？」

怒鳴るリーシャを無視するようにカミュが続けた言葉は、サラにも理解できなかった。
常識という物を幼い頃から擦り込まれている二人には全く理解できないのだ。

「・・・アンタ方は、夜の後に朝が来ることや、太陽がなくなれば夜が来て月が輝くことの理由を明確に説明できるのか？　俺はできない。」

「「・・・・・・」」

カミュがサラの疑問に答えるように、視線も向けずに話す言葉にリーシャもサラも言葉が出てこなかった。
確かに、『当然だ』『常識だ』と言うことはできる。
しかし、『何故？』と問われれば、その理由を明確には答えることが出来ないのだ。

「・・・あの男は、他の人間が『常識』として考える事を放棄したことを考えているんだろう。　それに答えが出るのかどうかは解らない。　そして、その答えが、『常識』というものに囚われている人間に通じるかどうかもな・・・・」

「「・・・・・・・・」」

もはや、リーシャもサラも言葉が出ることはなかった。
カミュの言うとおり、夜が来る理由をリーシャやサラは鼻で笑うかもしれない。

「・・・メルエの魔法にしたって、俺やアンタにはおそらく生涯を賭けても理解はできない。　『魔法が使えれば杖に魔力を通すことは当然できる』というように思っていた俺やアンタにはな・・・・
メルエは、俺達には見えない何かを掴んだのかもしれない・・・・」

「・・・・・・・メルエ・・・・・・・・？」

自分の名前が出たことに、不思議そうに首をかしげてカミュを見上げるメルエの頭を撫でながらカミュは前にそびえ立つ＞イシス城＜を見上げた。

「・・・ただ・・・これから先は・・・・俺達の常識など一切通用しない旅になるだろうな・・・・」

「・・・・・カミュ・・・・・・・」

『これが本当に自分より年下の男が考える事なのか？』

リーシャはそう感じずにはいられなかった。

カミュの生い立ちはリーシャも知っている。

その生い立ちは決して平坦なものではない。

彼は隠してはいたが、先程の男の様に『常識』を『常識』とは認めない人間だったのだろう。　それは、この世界では異端。

メルエの頭を撫でながら城を見上げる青年をリーシャは複雑な想いで見ていた。

サラもまた、リーシャとは違う複雑な想いを抱いている。

サラが『常識』と考えていたものが、この旅で通用したことがない。

その度に悩み、苦しむ。

カミュが言うには、それこそが『当然』だというのだ。

それがサラをまた悩ませていた。

町の門を出て、一度外へと一行は歩き出す。
町の門から真っ直ぐ続く石畳の道が、目の前にそびえ立つ＞イシス城＜の城門へと伸びている。

カミュを先頭に、メルエ、サラ、リーシャといういつもの順序で一行は＞イシス城＜へと向かう。　その間、一行は誰一人口を開くことはなかった。
いや、メルエだけは、にこにこと笑顔を浮かべながら、強い日光を浴びていた。

「　ここは、＞イシス城＜だ。　何用だ？　」

「・・・・アリアハンから来ましたカミュと申します。　女王様への謁見をお許し頂きたく登城致しました。　お取次ぎをお願い致します。」

城門に辿り着くと、両脇に控える門兵が手に持つ槍を交差させ、カミュ達の進行方向を遮る。　その門兵にカミュは目的を話し、懐に入れておいた＞ロマリア＜国王の書状を手渡す。

カミュから手紙を受け取った門兵は、その書状の刻印が＞ロマリア国＜のものであることを確認し、城の中へと入って行った。
しばらくの間待った後、一行は奥へと通されることとなる。

城の中で一行を待っていたのは一人の若い女官。
威風堂々とはいかないが、それでもその女官は、この仕事に誇りを持っているような立ち振る舞いである。

女性が王位に就くこの国では、自然と女性の権力が高くなる。
その中でも、宮廷で女王の傍に仕えるということは、とても誇りなことなのであろう。
それがカミュ達を先導する女官の身体から溢れていた。

「・・・・貴方方も＞ピラミッド＜の探索のご依頼に来たのですね・・・・」

そんな女官が振り返りもせず、口を開く。
それは通常ではありえない。
いくら女性上位の国とはいえ、客人を引率するものが、客人の内情を探ることは失礼な行為であることは万国共通なものだからだ。

「・・・・・はい・・・・・・」

「・・・・何と無謀な・・・・今や魔物すら住処とする場所・・・・幾人もの墓荒らしを飲み込んできたイシス王家の尊い方々が眠る場

所へ・・・・・」

カミュの返答を嘆かわしげに溜息を吐く女官は、その足を緩めることなく、顔だけを俯かせた。

リーシャもサラも、その女官の言葉が胸に刺さった。
＞魔法のカギ＜というものを求めてとはいえ、他人の安らかな永久なる眠りを妨げる行為であることは否めない。
それは本当に『人』として正しい行為なのか。
それが、サラには解らない。

「・・・・気をつけなさい・・・・王家の力はとても強い。　＞ピラミッド＜には魔法の使えない場所があると云われている・・・・」

「・・・・・・・魔法が・・・・・・・・？」

『魔法が使えない』という言葉にメルエの肩が震える。
そんなメルエの肩に手を置きながらリーシャが口を開いた。
魔法の有無は、正直このパーティーの死活問題に係わってくる。

しかし、リーシャの疑問に女官が答えるよりも前に、一行は女王のいる謁見の間への扉を開いていた。

そこは謁見の間というには余りにも広く開けた広間。
周囲は開け放たれ、砂漠の中にある城にも拘わらず、オアシスの傍に立つことから心地よい風が謁見の間に入ってきている。

「女王様、アリアハンのカミュなる者をお連れ致しました。」

カミュ達を先導していた女官は、前方に一礼した後に脇へと身を引いて行く。
必然的に前方への視界が開けたカミュ達の目に玉座が映る。

「・・・・そなた達が、ロマリア国王が言っていた『勇者』か・・・？」

視界の先にある玉座に座る女性がこの＞イシス＜を治める女王。
歳は、ここに来る前に会った老人が言っていたようにカミュとそう変わらない程の若さ。
そして、何と言っても、その美しさは、もはや神格のレベルに達しているのではと思わずにはいられない程のものだった。

サラとリーシャは無礼と知りながらも、その視線を玉座に座る女王から外すことが出来ない。　それ程の美貌であったのだ。

カミュ程ではないが、黒くしなやかな髪は綺麗に切り揃えられ、肩に付くか付かないかという所で同じ長さに揃っている。
前髪も眉の所までで切り揃えられており、その黒い髪を引き立たせるように金のサークレットの様な冠をかぶっている。

瞳は切れ長ではあるが、リーシャとは違い、吊り上がってはいない。
唇は薄く、口は小さい。
鼻は高すぎず、低すぎず。
一つ一つのパーツであれば、リーシャもサラも引けを取らないが、それら全てが集まった時の完成度が余りにも違ったのだ。

「・・・・『勇者』と呼ばれるようなことはまだ何も成してはおりません・・・・」

女王の姿に唖然としてしまっているリーシャとサラを余所に、仮面を被ったカミュが、玉座の前に跪く。　カミュの行動を見ていたメルエもまた、カミュの一歩後ろで跪き頭を下げる。

「・・・そなたは、あの『オルテガ』殿の息子とか？　同じように魔王討伐という旅をしていると聞くが、相違はないか？」

「　はっ！？　『魔王討伐』などいらぬことを・・・・他の国は知らぬが、我が＞イシス＜は魔王等、恐れるに足らず。　女王様のお美しさに魔王すらもひれ伏すというものを！　」

頭を下げるカミュへ再び声をかけた女王の言葉を聞いた直後に、ようやくリーシャとサラは、この謁見の間に女王以外の人物がいる事を理解した。

それは、女王が座る玉座のすぐ横に立つ老婆。
若く美しい女官達が立ち並ぶこの謁見の間において、異彩を放つ人物。
おそらく、この女性が玉座に座る女王の祖母に当たる人物なのだろう。

その権勢は相当なものなのであろう。
一国の王の言葉を遮って話す姿は、その老婆の権力を物語っていた。

「・・・アリアハン国王様からは、『魔王討伐』の命を受けております・・・・」

「それは、そなたの意志か？　それとも『オルテガ』の呪いか？」

「「「　！！！！　」」」

カミュの発言に被せるように発した女王の言葉に、メルエ以外の一行は全員息を飲んだ。
それは、一国の王としてはとんでもない爆弾発言。
とある国が英雄と崇める者を侮辱する言葉であり、その国が『勇者』として送り出した者を疑う言葉。

何よりも『呪い』という言葉が指し示す意味をリーシャとサラは量りかねていた。
唯一人、カミュだけは違った。
どの国にいても、謁見の間で顔を上げたことのない男が、イシス女王を真っ直ぐと見つめていたのだ。

「・・・女王様のお言葉の意味が、私の様なものには・・・」

珍しく言葉を濁すカミュの胸の内の動揺をリーシャは見た。
この旅で、誰一人、カミュの本質を突いた者はいなかった。
それが、初対面の人間の最初の発言がそれであったのだ。

「・・・解らぬと申すか？　・・・そなたは、この世の『人』を救うために自らの命を犠牲にすることに何も感じてはおらぬのか？」

「・・・・・・・・・」

故意的に言葉を濁し、会話を打ち切ろうとするカミュの目論見は脆くも崩れ去る。
女王は敢えて理解していないふりをするカミュへ、追いうちの様な言葉を繋げた。
それに対し、カミュは沈黙で答えるしか方法はなかった。

「・・・そなたは自殺志願者か？　それともただの戦闘好きなの

か？　魔物を打ち倒す自分に酔っているのか？」

「・・・・・・・・・」

「・・・そなたは・・・・そなたは・・・・自分の意志で生きたいとは思わぬのか？」

最後の女王の言葉は、どこか切実な想いが籠っていた。
この女王は、先日カミュ達が会った老人の言うように、非常に聡明で、非常に優秀な人間なのであろう。
カミュの物言い、カミュの瞳を見て、その内情を正確に把握していた。

「・・・・私は、そういう存在ですので・・・・・」

暫しの沈黙の後、口を開き絞り出すように紡いだ言葉は、リーシャもサラも聞いたことのある、あの哀しい言葉だった。
その言葉にリーシャの顔が歪む。
カーペットを睨みつけ、悔しそうに歪めるその表情の内にどんな想いがあるのか、それはリーシャにしか解らない。　いや、リーシャにも解らないのかもしれない。

「・・・・・そなたも・・・・・私と同じなのですね・・・・・・」

「さ、さあ！　女王様はお疲れです！　そなた達は＞ピラミッド＜探索を願い出ていましたね。　許可します。　本日の謁見はここまで！　さあ、女王様、こちらへ・・・・」

カミュの言葉に反応した女王の言葉は、呟くように小さい。
その声が聞きとれたのは、横にいる老婆とカミュだけであった。

呟くような言葉を発した後、押し黙ってしまった女王に対し、傍の老婆は慌てたような声を上げ、一方的に謁見を打ち切る。
カミュ達に＞ピラミッド＜の探索の許可を与えた後、女王を伴って早々に謁見の間の奥にある扉を開け、中へと入って行ってしまった。

「・・・・カミュ・・・・・行こう・・・・」

女王がいなくなったことで、発言が可能になったリーシャが未だに跪いているカミュへと声をかける。
その空気はとても重苦しい。

サラはこのような空気を今まで味わったことがなかった。
どれ程偉い国王や、エルフの女王の前にいても、サラにこのような空気が及ぶことはなかった。　ここで初めてサラは気付くのだった。

どんな時も、どの場所でも、自分達の前にカミュが立っていた。
他国の国王や、他種族の女王からのプレッシャー。
そして、険悪な態度を取る兵士や、『勇者』一行として見る老人からの容赦のない言葉や罵声。

そういったものから、自分達はカミュによって護られてきたのだということに・・・
このサラよりも年下の青年が前に立つだけで、パーティーに及ぶ空気はまるで濾紙を通ったように澄んでいく。

「・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・」

「・・・・・ああ、行こう・・・・・・」

しかし、今メルエの呼びかけに、ようやく女王がいなくなったことに気が付いたかの様な素振りを見せるカミュに、後ろの人間を護る余裕はなかった。
カミュ自体が放つ空気が既に重いものであったのだ。

「・・・・・＞ピラミッド＜に向かうのならば、子供らが謡う童歌を聞いて行きなさい。　私には全く理解できないが、＞ピラミッド＜の謎を解く鍵が隠されていると云われている。」

玉座に背を向け歩き出した一行に、先程カミュ達を先導してくれた

女官が口を開いた。
もはや、謁見の間にはカミュ達とこの女官しかいない。

しかし、例え誰も聞いていないといえども、＞イシス＜の中枢となる女王の傍に仕える女官が、その王家の先祖が眠る墓の謎を他国からの旅人に教える事自体がサラには不思議に思えて仕方がなかった。

それはカミュも同じであったのだろう。
明らかな疑惑の目を、この若い女官に向けている。

「・・・訝しがるのも解る。　私は幼い頃に、そなたの父『オルテガ』殿に命を救われている。」

「「「　！！！　」」」

暫し、カミュと睨み合っていた女官であったが、ふっと息を洩らした後、その経緯を話し始めた。　再び出て来た『オルテガ』の名に、カミュの顔が歪んだ。

「幼い頃、家族で砂漠を歩いていた私は、周辺に住む魔物に襲われた。　戦う術のない私達は逃げることしかできなかったが、魔物に回り込まれてしまいどうすることも出来なくなった時に、『オルテガ』殿に救われた。　父はその前に死んだがな・・・」

女官が話す内容は、この時代にはよくある出来事。

家族で商売のためか、移住のためかは解らないが、この＞イシス＜に向けて歩いていたのだろう。　そこで魔物と遭遇した。

カミュ達であっても、＞イシス＜に到着するまでに相当の数の魔物と遭遇していたのだ。

おそらく、この女官の父親は、妻と娘を逃がす為に単身魔物に戦いを挑み命を落としたのであろう。　そして、その後逃げようとする二人の前に、『オルテガ』が現れたというのだ。

「・・・息子であるそなたに恩を返すのは筋が違うかもしれぬが、返す相手亡き今、これぐらいしか私には出来ぬ。」

そう言って、呆然とする一行を置き去りに、女官は謁見の間を出て行った。

リーシャもサラもすぐには動けなかった。

彼女達にとって、『オルテガ』という存在は、女官の話通りの人物であるのだが、これまでのカミュの言動、そして、先程この謁見の間を支配した重苦しい雰囲気の原因となった女王の言葉が二人の心を縛りつけ、思考を停止させていたのだ。

その後、謁見の間の横にある部屋にいた二人の子供に、童歌を謡ってもらい、サラがその歌詞を書き留めてから、一行は＞イシス＜の城を出た。

いつもより重苦しいパーティーの雰囲気に、メルエは頻りに首を傾げている。
カミュを見、その表情がいつもと変わらない物の何かが違うことに首を傾げ、サラを見ては、その眉間に皺が寄っていることにまた首を傾げる。

「・・・メルエ、おいで・・・」

そんなメルエの姿にリーシャが声をかける。
首を傾げていたメルエは、リーシャの呼びかけに振り向き、その手を握るためにリーシャへと駆け寄って行った。

一行はそれぞれの胸に、それぞれの想いを抱え、太古からイシス王家が眠る壮大な建造物へと向かうため、北へと歩を進めて行く。

イシス城？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

久々の少し長めの文となりました。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

ピラミッド？（前書き）

ついにピラミッド・・・・
長かった・・・・・
開始から１０ヶ月以上も経っていました。

今回は少し長めです。

「アンリ！　余計なことは話さなくてよろしい！　貴女は＞イシス国＜の女王なのです。　私の言うことを聞いていればそれでいいのです！」

アリアハンという辺境の貧しい国が送りだした二度目の勇者との会見を終えたアンリは、祖母であり、イシスの家老でもある老婆に連れられ、自室に戻された。

「・・・・申し訳ありません・・・・・」

「ふん！　勘違いはしないよう。　貴女は唯の女王なのです。政（まつりごと）には口を挟まぬよう。　ましてや、自国の内情を旅の者に話すなど以ての外です！」

自室に投げ出され、高圧的な言葉を吐き捨てた後、老婆は部屋を去って行く。

残されたのは、＞イシス＜という国家の名ばかりの女王。

本来、その美しさと優しさを慕われ、多くの国民から支持を受ける筈の存在。
そして、現女王である彼女にはその才が確実に引き継がれていた。
母である先代女王の持つ指導力や人々を纏め惹きつける神々しさ。
更には、先程までいた祖母である老婆の持つ賢しさ。
その全てが、彼女には受け継がれていたのだ。

しかし、それが今まで表に出ることはなかった。
傀儡として担がれ、実質の権力は祖母が握っている。
彼女には女王であるという仮面しか手渡されなかった。

「・・・・あの人も・・・・・私と同じ目をしていた・・・・・」

一人残った部屋の中で、備え付けられていた鏡台の鏡に映る自分の瞳を眺め、アンリは呟く。　この部屋は母である先代女王が使い、死んだ部屋。
この部屋にある全てが母の形見なのである。

アンリの呟いた言葉。
それは、先程謁見の為に部屋に入って来た四人の旅の者を見て感じたことであった。

代表して自分の前に跪いた青年の瞳を見た瞬間、アンリはその瞳の中に自分が持っている感情と同じものを見た。

それは『絶望』と『諦め』。

故に、初対面にも拘わらず、あのようなことを問いかけてしまった。
彼は何の為に旅を続けるのか？
彼の胸に『希望』はあるのか？
あるとすれば、何を見て『希望』としているのか？
そんな疑問が次々とアンリの頭に浮かんでは消えて行った。

「・・・・でも・・・・・何か違う・・・・私とは何かが・・・・・」

そう。
アンリはアリアハンが送りだした『勇者』の中に自分を見た。
その想いは、アンリの発言に驚いた彼が顔を上げ、その瞳を再度見た時も変わらなかった。
しかし、彼女の悲痛な叫びに対し、彼が最後に発した言葉。
その時にアンリは違和感を覚えたのだ。

『・・・・私は、そういう存在ですので・・・・・』

その言葉を発した『勇者』と称される存在の瞳は先程までとは宿している光が違った。
その光の違いが何なのかがアンリには解らないが、違うことだけは肌で感じていた。

「・・・・それに・・・・あの娘も・・・・・」

もう一人。

アンリの頭に浮かんだ少女。
驚きに顔を上げる『勇者』を心配そうに見つめていた幼い娘。

その娘の瞳もまた、アンリと同じものを宿していた形跡をアンリは感じていた。
おそらく通常の人間にはその違いが解らないだろう。
それが、アンリがこの砂漠の王国である＞イシス＜の正当な継承権を有している証拠なのかもしれない。

「・・・でも、あの娘はもう違う・・・『希望』と『喜び』に満ちていた。」

アンリは鏡に映る自分の顔を見ながら一人呟き続ける。
謁見の間で自分と相対している青年を心配気に見つめ、隣で跪く女性戦士の手を握っていた少女は、その瞳を自分に向けて来たのだ。

その瞳はとても攻撃的な瞳。
今にも叫び出しそうな程に怒りに燃えた目をしていたのだ。

『自分の大好きな人間を虐めるな!』

という瞳を見て、アンリは言葉に詰まった。
おそらく、あの少女は、アンリと同じような『絶望』と『諦め』の中を生きていたのだろう。そして、その中から引き出し、救いだしてくれたのが彼なのかもしれない。

それがアンリにはとても羨ましい。
どれ程願ったことか・・・

この『絶望』と『諦め』に支配された世界から救い出してくれる存在が現れる事を・・・

「・・・・私は・・・・・母上様・・・・・」

彼女は確かに母の愛を注がれて育ってきた。
しかし、その幸せも、この世界に産まれ落ちて数年後には断ち切られてしまう。

イシス女王の突然死。
それがアンリの世界を一変させた。
母の死に際し、彼女は即位の儀式を済ませ、すぐさま女王として玉座に座ることとなる。
右も左も解らなかった彼女は、祖母である女官に頼らざるを得なかったのだ。

しかし、今にして思えば、不思議なことばかり。
先代女王である母は、公的には『病死』とされた。
しかし、アンリはその日の午前中まで元気な母を見ていた。
とても突然命を奪う病魔に侵されている様子などなかったのだ。

そして、最も不可思議なのは、アンリは母の死体を一度も見てはいない。
死後の葬儀の際もその姿を見ることはなく、何よりも、母の死体は火葬されたのだ。

＞イシス＜では、王族の遺骸はその身体から水分抜き、ミイラとされる。

それは、古人が王族は甦るという考えがあったことが原因とされるが、それがこの時代まで風習として残っていたのだ。

しかし、母である女王は例外的に火葬された。
何かを隠すように燃やされ、骨だけになった母との対面。
それは、幼いアンリの心に大きな疑惑として残っていた。

「・・・・あの人は・・・・どうやって前を向いたのでしょう・・・・」

アンリが＞イシス＜の女王としてではなく、一人の人間として想いを馳せた青年は、前方にそびえ立つ途方もなく大きな太古の建造物を仲間と共に見上げていた。

「・・・・・・・・・・おおきい・・・・・・・・・・」

「・・・・そうですね。　予想以上です。　これ程の物を何百年も前に建造したとは俄かには信じられませんね。」

自分の何百倍もの大きさを誇る建造物を、首を直角に曲げながら見上げるメルエの横で、サラはその建造物を建てた＞イシス王家＜の威信を目の当たりにし、驚きを漏らしていた。

「凄いな。　イシスという国は古からこれ程の技術と文化を持っていたのだな。」

「・・・・・行くぞ・・・・・」

同じように＞ピラミッド＜を見上げていたリーシャの横をカミュが通り過ぎて行く。
未だに首を直角に曲げているメルエの背中を押し、リーシャがその後に続いた。

「止まれ！！　ここは＞イシス国＜の所有地だ。　許可証はあるのか？」

カミュ達が＞ピラミッド＜の入口に差しかかった時、その小さな入口の前に門番の様に兵士が二人立っていた。
良く見ると、その横には、急造で作り上げた掘っ建て小屋があり、この兵士達が寝食をそこで行っていることが窺われる。

「・・・・・女王陛下及び、筆頭文官の方から許可は頂いております・・・・・・・」

「・・・ふん！　許可証に間違いはないな・・・では、四人で６００ゴールドだ！」

「「　はぁ！？　」」

その門番の兵士達に、許可を受けている旨を伝えながらカミュが渡した許可証を眺めていた兵士が続けた言葉は、リーシャとサラの予想を遥かに越えたものだった。

ゴールドを要求する兵士達を唖然と見る二人を余所に、カミュは当然のことのように腰の革袋に手を伸ばす。
それをまるで不可思議な生物を見るようにリーシャは眺めていた。

「・・・確かに・・・しかし、アンタ方も物好きだな。　こんな場所にはもう何一つ宝物などありはしないのによ。」

カミュからゴールドを受け取った兵士は、その数を数え終えると、カミュ達に呆れたような、それでいて蔑むような瞳を向けていた。
サラからしてみれば、自分達の国の王家が眠る古代の建造物に無闇に人を入れ、その上、入場料の様なものまで要求する＞イシス国＜の方に呆れを感じてしまうものだったのだが。

一行は、兵士達の不愉快な視線を無視し、＞ピラミッド＜の中へと足を踏み入れる。
そこは、もはや観光地の様になっており、薄暗くはあるが、道の端には火が灯され、視界が開けていた。
砂漠の中心の様に容赦のない直射日光を浴びている時の様に焼けるような暑さを感じることはなく、むしろひんやりと肌寒さすら感じる程の気温である。

「・・・・もはや、王家が眠る墓の様相ではないな・・・・・」

辺りには、人が何人も通った形跡が色濃く残されている。
それは、決して全ての人間が生きて帰っている訳ではないことも示されていた。

「・・・魔物に食われたのか・・・・？」

「・・・・その様ですね・・・・・」

道端の向こうに、白骨が転がっている。
その白骨の様子を見ると、まだ新しい物だ。
この＞ピラミッド＜に巣食う魔物に襲われ、命を落とした後に食されたのだろう。

それが、今の＞イシス王家＜の在り方を示していた。
王家の墓にある財宝を切り売りするような行為。
横行する墓荒らし対策として、門番を立てたが、それでも中に入ろうとする者が後を絶たず、その結果、入ろうとするものから通行料を取ることで採算を取ろうとしたのだろう。

現女王の威光が下々まで及んでいないことを隠すためとはいえ、余りにも外道な行為。
王家が誇る先祖の霊に対して、敬意を欠くその行為は、一行の胸に

複雑な想いを起こさせる。

カミュは、そんな白骨など見向きもせずに真っ直ぐ続く道を歩いて行く。
メルエはそんなカミュの背中だけを見つめ歩き、その後ろを周囲を見渡しながらサラが続く。　最後尾に周囲を警戒しながらリーシャが歩いていた。

「・・・・・??・・・・・」

どれ程歩いただろうか？
不意に立ち止まったカミュの背中を、首を傾げて見上げたメルエは、余所見をしながら歩いていたサラに後ろから衝突される。

「　あっ！？　」

サラよりも体重の軽いメルエは、後ろからの衝撃に前へと押し出された。
転ばぬように、前に立ち止まっていたカミュのマントを掴もうと手を伸ばすが、その手は空しく空を切り、メルエは倒れ込むように更に前へと出て行った。

ガコン！！

その瞬間、メルエが手を突こうとした床が消えた・・・・
石畳が敷き詰められていた白い床の一ヶ所が消え、真っ暗な闇がまるでメルエを誘うように口を開ける。

「　メルエ！！　」

咄嗟に手を伸ばすカミュの手は虚空へと落ちて行くメルエの服の裾をしっかりと握りしめた。　間一髪のタイミングであった。
空中に浮かぶように掴まれたメルエは、自分に纏わりつくような闇に恐怖を覚える。
ゆっくりと上げられ、足がしっかりとした床に付いた瞬間、後方から血相を変えて近づくリーシャの胸に飛び込んで行った。

「・・・・注意して進め・・・・・」

「　も、申し訳ありません！　」

メルエの行方を見守った後、カミュは鋭い視線をサラへと向ける。
久しく見ていなかったカミュの冷たい視線に、サラの背筋に冷たい汗が流れる。

自分の不注意で、メルエを危ない目に合わせてしまった。
それが、サラに恐怖を植え付けたのだ。

「・・・メルエ・・・ごめんなさい。」

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・嫌い・・・・・・・・・」

「はうっ!!」

リーシャに抱かれるメルエに向かって頭を下げたサラに対し、メルエは以前よく発していた言葉を口にする。
涙目で訴えるような言葉は、サラの胸を深く抉った。

「ふふっ。　メルエ、無事だったのだ。　あまりサラを責めてやるな。」

「・・・・・・・・・・こわか・・・・・った・・・・・・・・・・・・・・・」

サラを庇うリーシャの言葉に、メルエの頬は瞬時に膨れ上がった。
最近、サラの指導の下、言語のボキャブラリーが増え始めているメルエは、頬を膨らませたまま、自分の感じた恐怖をリーシャへと訴

える。

「そうだな。　サラも注意しろ。　ここは何があるか解らない場所だ。　行動一つで死に繋がることもある。」

「・・・・はい・・・・・本当に申し訳ありません・・・・・」

リーシャからも注意を受けたサラは、もう一度メルエに頭を下げたまま俯いてしまう。
メルエはサラの謝罪を受け入れる様子を見せ、サラの手を握るために近づいて行く。

「・・・・それを、アンタが言うこと自体が驚きだがな・・・・」

「・・・カミュ・・・何が言いたい・・・？」

しかし、それで終わらないのが、このパーティーだった。
サラに注意を促すリーシャに、若干の呆れを見せながら呟いたカミュの言葉は、リーシャを豹変させる。

「・・・・今までの経験から物を言ったまでだ・・・・この中で一番、アンタが行動に注意を払ってほしいと俺は思うが・・・・」

「・・・ほぅ・・・カミュ・・・それは、私に喧嘩を売っているのだな・・・・」

カミュの口端は上がっていない。
つまり、それはからかいではなく、事実なのだ。
リーシャには認識はないが・・・・

「・・・マヌーサに掛かり、仲間を攻撃したり・・・きのこと間違えて眠りに就いたり・・・アンタが行ってきた数々のことを知っていれば、当然のことだと思うが・・・・」

「ぐっ！？　古いことをいつまでも・・・・」

カミュから言われた言葉に、リーシャの頭にもようやく合点がいった。
反論する意欲も削がれていく。
そんな二人のやり取りに、サラとメルエの顔にも自然と笑みが浮かび始めた。

「カミュ！　それで、どっちに進むんだ！！」

これ以上の問答は自分が不利になるだけということを理解したリーシャは、四方に分かれた道の行く先をカミュへと問いかける。

そんな八つ当たり気味のリーシャの反論にも涼しげな顔で答えようとするカミュの表情がリーシャの苛立ちを更に濃い物として行った。

「・・・・アンタはどっちだと思うんだ・・・・？」

「な、なに!?　うっ・・・右だ・・・若しくは左だ・・・・・」

カミュの答えはリーシャの意表を突くものであり、答えに詰まるリーシャであったが、自分が思った方角を示す。　そこには、以前の失敗からなのか、ある種の保険を掛けているようではあったのだが・・・・

「・・・・ならば、このまま真っ直ぐ進むべきなんだろうな・・・・」

「　なんだと!?　私は右か左だと言ったはずだ！　」

「・・・・・だから、右へも左へも曲がらずに進むべきじゃないのか・・・・・・・・？」

その頃には、カミュの表情に変化が出ていることにサラは気が付いていた。
あれは、カミュがリーシャをからかっている時のものだ。

確かに、サラもリーシャが右か左だと言うのであれば、カミュの考え通り、真っ直ぐ進むべきではないかと思う。
それ程、カミュやサラの頭の中には、『リーシャの指し示す方角＝行き止まり』という方程式が信憑性を持っていた。　いや、確立されていると言ってもいいだろう。

「　ぐっ！？　右だ！　行ってみれば解る！　」

「・・・・・リーシャさん・・・・・」

カミュの表情の変化に気が付いたリーシャは、もはや後には引けない。
自分の心の中に『もしかすれば、また行き止まりかもしれない』という想いがないとは言えないのだが、目の前で口端を上げるカミュを見ては、そんな弱気を口にする訳にもいかなかった。

「・・・・はぁ・・・・わかった・・・・急ぐ訳でもない。」

からかってはいたが、ここまで意固地になるとは予想していなかったのだろう。
カミュは一つ溜息を吐いた後、リーシャが指し示す右へと歩み始める。

その後を、二人のやり取りを不思議そうに見ていたメルエが続き、

未だに怒りに震えるリーシャを促してサラが後を追った。

「「「・・・・・・・・」」」

「・・・・やはりか・・・・・」

右へと進んだ一行は、その先一本道となった通路を歩いた。
そして行き着いた先は、やはりカミュとサラが想像していた場所であり、リーシャが一抹の不安を抱えた場所。
右へも左へも、そして前にも進むことが出来ない『行き止まり』であった。

「　わ、わたしは、右か左と言ったぞ！　」

「・・・・・リーシャさん・・・・・」

暫し呆然と高くそびえる壁を眺めていたリーシャであったが、我に

帰った後、先程掛けた保険を切り札として出すが、流石のサラもその言葉に溜息しか出てこなかった。

「・・・・・・・・・・・・はこ・・・・・・・・・・・・」

「あっ!?　メ、メルエ!!」

リーシャに対して溜息を吐くカミュとサラを余所に、今まで不思議そうに三人を見ていたメルエが何かを見つけ走り出す。
メルエの動きに気が付いたサラはメルエに視線を向けるが、そんなサラの横をすり抜けるようにメルエはある一点へと向かって走り出していた。

メルエが見つけた物。
それは、俗にいう宝箱であった。
宝物が納められる箱。

煌びやかな装飾が施されていないことから、それ程高価な物が入っているとは思えないが、それでも＞イシス王家＜の遺体と共に納められている以上、ある程度の価値のある物の可能性を否定することはできない。

「メルエ！　勝手に開けるな！」

メルエの行動に、珍しく語気を荒げたカミュではあったが、その声

はメルエには届いていなかった。　小さな笑顔を作り、その箱に手を掛けたメルエは、そのまま勢いよく箱を開け、そして表情を曇らせた。

「・・・・・・・・ない・・・・・・・・・」

「　えっ！？　あれ？　本当に空っぽですね・・・・」

メルエの開けた箱の中身を、追いついたサラが覗き込むと、そこには何も納められていなかった。　箱の底がそのまま見えるだけ。

メルエにしてみれば、洞窟や塔などで見つけた箱は、＞西の洞窟＜でアンとギルバードの遺骨の傍にあったあの箱だけだった。
その中身は、『エルフの至宝』と謳われた『夢見るルビー』。
それは、強烈にメルエの心と頭に残っていたのだろう。
『あの様な綺麗な物が入っているのでは？』と思ったメルエは喜び勇んで箱を開けたのだ。

「・・・・はぁ・・・・近年は墓荒らしが横行していたという話を聞いていなかったのか？　そんな場所で、入口に程近い所にある宝箱の中身が抜かれもせずに残っている訳がないだろう。」

眉を下げ、見つめるメルエに、カミュは深い溜息を洩らす。
カミュの言葉の内容が理解できたサラは、納得はするが複雑な想いを抱いた。

王家の人間が死後も苦労することのないようにと、遺体と共に納められた財宝を盗んでいくという行為に釈然としない想いがあったのだ。
それは、結果的に、今自分達が行っている行為に結びつくことに気が付き、また落胆する。

「・・・サラ、余り深く考えるな。　我々が進む道に必要な物がここにある。　ただ、それだけだ。」

「・・・・・でも・・・・・」

サラの表情を見て、彼女が何を考えているのかを察したリーシャが、サラへと声をかける。
それは、根本的な救済にはなり得ない言葉ではあったが、その言葉がリーシャ自体もまた、サラと同じ葛藤を持っていることを示していた。

それでも、サラとは違い、リーシャは自分の目的の為に割り切ることのできる経験があった。　それは、一朝一夕に培われたものではない。

勿論、リーシャの中に死者への敬意がない訳ではない。
それは、＞シャンパーニの塔＜で死者の衣服に火をつけるメルエを窘めたことからも窺える。
だが、リーシャにとって、死者への敬意よりも、アリアハン国王からの命である『魔王討伐』というものの方が重いものであるというだけのこと。

「さあ、カミュ、行こう。　次は左の道だ。」

「・・・・アンタは・・・・この状況でまだ、左へ進むつもりなのか・・・・・？」

「　当たり前だ！　」

サラを促し、先へと進もうとするリーシャの言葉に、カミュは驚きを示した。
まさか、自分が指し示した方角が、案の定『行き止まり』であったにもかかわらず、保険として発した左の道へと進むことをまだ頑固に主張するとは思っていなかったのだ。

「「「・・・・・・・・・」」」

「・・・・もういいだろう・・・・今回は、アンタに聞いた俺が悪かった・・・・・」

元の十字路まで戻り、再度入口から見て左の方向に歩き出した一行が辿り着いたところは、先程と入って来た方角が違うだけの『行き止まり』だった。

サラは、リーシャがある意味、カミュよりも勝る能力を持っていることを認めるしかなかった。　閉ざされた道を見つけるという才能を・・・・・・

「・・・・・・・・・・・はこ・・・・・・・・・・・・」

「　メルエ！　開けるなと言っただろう！　」

落胆を示すリーシャの横から、先程と同じように何かを見つけたメルエが走り出す。

メルエの姿に先程よりも大きな声でカミュが怒鳴るが、すでにメルエは、再び見つけた宝箱に手を掛けていた。

「・・・・・・・・・・・ない・・・・・・・・・・・・・」

「また、空っぽなのですか・・・？」

落胆し、眉を下げるメルエの後ろから、先程と同じようにサラが覗き込むが、宝箱の中身もまた、先程と変わらず底が見えるだけであった。

「・・・その前に・・・メルエ、勝手に何でも手を掛けるな。」

「うっ・・・・・ごめん・・・・・なさい・・・・・」

緊張感に欠けたサラの言葉を遮り、カミュがメルエの瞳を見つめた。その目は真剣であり、顔を上げたメルエもカミュが真剣に自分に向かって注意をしていることを悟る。

叱られたことに、こみ上げる哀しさを堪えてカミュに頭を下げるメルエの瞳に涙が溜まって行く。　カミュは、瞳を緩め、溜息を吐くことしかできなかった。

「・・・カミュ・・・剣を抜け・・・」

「「「　！！！　」」」

そんな、メルエとカミュのやり取りの中、今まで自分の指し示す方角の行き先に落胆していた筈のリーシャの声が響く。

何かを押し殺すような、何かから身を隠すような低い声は、リーシ

ャがカミュに怒りを向けているのかと錯覚してしまうものであった。
実際、サラは『こんな場所で、また?』と考えてしまっていたのだが・・・・

しかし、リーシャの身体は、カミュにではなく、この行き止まりへの入口に向かっている。
それが示すことは一つしかあり得ない。
魔物の襲撃である。

「ゲゲゲッゲ」

斧を構えたリーシャの横に、背中から剣を抜いたカミュが並び立った時、入口の方から何か喉を鳴らすような音が聞こえて来た。

そして、次第にその全貌が見えてくる。
赤黒い色をし、長い舌を床に付くほど垂らした魔物。
色以外であれば、ここに来る前に見たことのあるような魔物だった。

＞大王ガマ＜
その名の通り、カエルの魔物の中でも最上種に位置する魔物である。
カエル系の魔物の頂点に立つだけあって、その跳躍力は群を抜いており、跳躍から繰り出される攻撃もまた、他のカエル系の魔物とは桁違いの威力を誇る。
群れを成すことが多く、大抵は同種の者と行動を共にすることが多い。

「ゲコッ！　ゲゲゲ」

カミュ達『人間』の匂いに釣られて出て来た＞大王ガマ＜は三体。
天井がある＞ピラミッド＜の中では、自慢の跳躍力も半減するとは言え、決して侮ることはできない。

「カミュ！」

「・・・・わかった・・・・・」

しかし、アリアハンを出てから、彼らもまた、すでに数え切れない程、魔物と対峙してきた。　その度に、前線で剣を振るっていたのは、彼等二人。
自分の名前を呼ばれるだけで、相手の意図することを理解し、静かに頷く相手の姿で自分の意図が伝わったことを理解する。

「メルエ！」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・」

それは、後方に控える二人とて同じ。
自分達がする役割を理解し、それを確認し合う。

彼等は、すでにパーティーとしての基礎を築き始めているのだ。

カミュ達一行という食料を見つけ、喜び勇んで飛びかかろうとする一体を、先に飛び出したリーシャの斧が牽制する。
後ろ脚をたたみ、跳躍への力を溜めた＞大王ガマ＜の太腿部分をリーシャの斧が掠め、その体液を飛び散らせた。

「　ゲギャ――――――――！　」

叫び声にならぬ奇声を発し、＞大王ガマ＜が後方へと後ずさるが、斧を振り抜いたリーシャにもう一体の＞大王ガマ＜が飛びかかってくる。
しかし、それに気が付いたリーシャに焦りは見られない。

「　ピギャ――――――――！　」

飛びかかってくる＞大王ガマ＜がリーシャへと伸ばした両腕は、リーシャの目の前ですっぱりと消え失せ、その体躯が床へと叩き落とされる。

そして、リーシャの視界を覆うように現れた背中。
カミュである。

リーシャより一歩後に駆けだしたカミュが横合いから剣を振るったのだ。

「・・・・・はぁ・・・・・流石に隙が多過ぎだ・・・・・」

「お前こそ、出てくるのが遅過ぎだ！」

背中を向けながら溜息を洩らすカミュに向けて放ったリーシャの言葉は、語気こそ荒いもののその表情には笑みが浮かんでいた。

カミュに腕を斬られた＞大王ガマ＜は同族の中へと戻って行くが、それは後方に控える二人にとって恰好の的となる。

「・・・・・・・・ベギラマ・・・・・・・・」

カミュとリーシャが下がるのを確認し、見える三体の魔物に向けてメルエが＞魔道師の杖＜を掲げ、詠唱を行う。

詠唱の完成と共に、杖の先から凄まじい熱風が巻き起こり、三体の＞大王ガマ＜に着弾。

魔物の周囲を炎が覆い、飲み込んでいくかに思われた。

「・・・・・・・・・・！！！・・・・・・・・・」

しかし、メルエが放った現時点での最強呪文に飲まれたのは、リーシャの斧で生命線である太腿を傷つけられた一体だけ。
残る二体は、熱風の着弾と同時に両脇へと跳躍していたのだ。

無傷の一体が伸ばした舌が、メルエの腕から＞魔道師の杖＜を弾き飛ばす。
少し前の様に自ら投げ捨てた訳でもなく、乾いた音を立てて転がる杖を、メルエは反射的に追ってしまう。

それは、サラという庇護を離れてしまうことと同義。
狙い澄ましたように＞大王ガマ＜が飛びかかって行く。

「メルエ！！」

サラの叫びに自分の状況を察したメルエは、拾い上げた杖を掲げる余裕もなく、目を瞑った。　直後に自分に訪れる痛みと衝撃に恐怖しながら。

「・・・ゲ・・・・・ゲ・・・・・コ・・・・・」

しかし、メルエに訪れたのは、衝撃でも痛みでもなく、途切れ途切れに聞こえる魔物の苦悶の声だった。
恐る恐る目を空けたメルエの視界に飛び込んできたのは、彼女が最も頼りとする人間の一人。　常に表情を変えず、自分を導いてくれる青年。

「・・・・・勝手に動くな・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・・」

飛びかかったカエルを横一線の剣筋で斬り捨てて、若干呆れた目を向けるカミュだった。
カミュの注意に、深く頷いたメルエは、そのマントの中へと潜り込む。
どんな場所であっても、自分にとって最も安全で安心できる場所へと。

「バギ！！」

メルエをマントの中へと迎え入れたカミュが残る一体に目を向けた時には、すでに戦闘は終局を迎えていた。

サラがその腕を掲げて唱えた呪文によって、両腕を失っている＞大王ガマ＜は切り刻まれていく。　床や壁にその体液を飛ばしながら吹き飛んだ＞大王ガマ＜に止めの一撃をリーシャの斧が加えて行く。

もはや、断末魔の叫びすら上げる事の出来ない＞大王ガマ＜は数度の痙攣をした後に沈黙し、その活動を停止した。

「メルエ！　無事か！？」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

魔物の身体から斧を抜いたリーシャがカミュの下へと近づく。
リーシャの問いかけに、カミュのマントから顔だけを出したメルエはリーシャに向かって満面の笑みを浮かべながら頷くのだ。

「でも、メルエの魔法が効かないなんて・・・・」

「そうだな・・・ここの魔物は、ここにしか生息しない魔物なのかもしれないな。　注意して進むことにしよう。」

和やかな雰囲気の中、サラは斬り捨てられた魔物の死骸を見ながら、胸に湧き上がった不安を口にする。
サラの言葉に少し考える素振りをしたリーシャが答えるが、それを若干呆れた表情を浮かべながら見る視線に気が付いた。

「　な、なんだ？　私は、何か可笑しなことを言ったか？　」

「・・・・いや、言っていることはまともだ・・・・ただ、この『行き止まり』に来ることになったそもそもの原因はアンタだということを忘れないでくれ・・・・・」

「ぐっ！　べ、別段、魔物はここだけに出てくるわけではないだろう!?　あのまま真っ直ぐ進んだとしても、魔物と遭遇していた可能性はあるはずだ！」

カミュの表情に自信なさげに問いかけるリーシャに容赦ない言葉が降り注ぐ。
それに過剰に反応するリーシャの言葉は至極当然のことではあるが、サラにはどこか滑稽に映ってしまう。

「・・・・・サラ・・・・・何か面白い事でもあったのか・・・・・・？」

「い、いえ！　な、なにもありません！」

くすくすと笑うサラを振り返るリーシャの表情は、サラの笑いを消すには十分な威力を誇っていた。　風切り音が鳴りそうな程、首を横に振るサラの姿は蛇に睨まれた蛙の如し。

「・・・・・・どうでもいいが・・・・・先に進むぞ・・・・・・・」

「　ど、どうでもいいって！　カミュ様が原因なのですよ！」

リーシャとサラのやり取りを興味なさ気に流し、先へと進もうとするカミュの背中に、サラの悲痛な叫びが轟いた。

一行は、元の位置に戻って、カミュが指し示した通り入口から真っ直ぐ続く道を歩きはじめる。　しばらくは一本道となっており、迷うことなく進む一行であったが・・・・

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

再び、行く先に迷う十字路に出る。
先頭で立ち止まったカミュを不思議そうにメルエが見上げ、サラは不安そうな瞳でカミュの背中を見つめていた。

「　こ、今度こそ、左じゃないかと思うんだが・・・・・・・・」

「・・・・リーシャさん・・・・」

『本当にこの人はめげない』
半ば尊敬に変わりつつあるサラの想いは、リーシャへと向けられた。
どれ程、失敗をしようと前へと進もうとする意思。
おそらく、カミュもそれに気が付いているのだ。
ただ単に、意固地になった自分の考えを押し付けようとしている訳ではなく、仲間を大切にし、その行く先を示唆することができればと真剣に考えている結果だからこそ、皮肉は言うが、それを糾弾したりしないのではないかとサラは考えていた。

「・・・・・左ではないとしたら・・・・・・？」

いや、それはサラの思い過ごしかもしれない。
カミュは、リーシャの推測から本当に正しい道を見出そうとしているだけではないだろうか。

「うん？　あ、ああ・・・・左ではなかったら、今度も真っ直ぐじゃないか・・・？」

「・・・・・・そうか・・・・・・・」

若干自信なさ気に聞こえるリーシャの声であったが、その言葉を聞いたカミュは、迷わず右へと進路を取る。
カミュの態度に一瞬驚愕の表情を浮かべたリーシャだが、悔しそう

に唇を噛んだ後、少し肩を落としてカミュの後を追った。

サラはそのリーシャの表情に複雑な想いを抱くが、よくよく考えれば、カミュの行動はある意味当然の結果であり、考え方によってはリーシャがパーティーの行く先を示唆していることになることに気が付き、そのまま歩き出す。

見方によれば、カミュはこのリーシャの特異な能力を頼りにしているのだ。
確かに行く先が解る相手よりも、『行き止まり』が解る人間がいる方が行動の幅が広がる可能性がある。

それを今のリーシャに告げたとしても、怒りの矛先が自分に変わるだけなので、サラは黙っておくことにしたが。

右に進路を取った一行は、そのまま道なりへと進む。
その先には、大きな銅像が立ち、まるで何かを護っているかの様に一行を見下ろしていた。

「墓の守り人か・・・・」

「・・・凄いですね・・・本当の人のようです。」

墓の番人。
王家の復活の為、その遺体と財宝を護る銅像。
それは、とても古の人間が作ったとは思えない程の完成度を誇っていた。

「・・・・・・・」

その銅像の完成度に驚くリーシャとサラに、カミュは何かを言いかけるが、何かを飲み込むように口を噤み、先へと進む。

銅像があった場所から、更に道なりへ進むと、上へと続く階段が現れる。
この辺りから、所々にしか明かりが灯されていないことから、侵入者が限られてきていることを示唆していた。
壁にかけられた火から、買っておいた＞たいまつ＜に火を移し、一行は階段を上って行く。

基本、この＞ピラミッド＜に入ってからは、十字路の様な別れ道が出現しない限り一本道が続く。　侵入者を拒むように道は細く、自然と縦に伸びるような隊列を組まざるを得なかった。

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

再び現れた別れ道。
その前で佇む一行。
流石に今度は、いくら視線を向けられようとも、リーシャは言葉を発しなかった。

「・・・・・・どっちだ・・・・・・・・？」

「・・・何故、私に聞く・・・私が道を示しても、その方向には行かないのだから、お前が決めれば良いだろう？」

堪りかねたように、振り向きざまにカミュはリーシャへと視線を送るが、それに対してのリーシャの答えは、素っ気ないものだった。

「・・・・・・アンタは、メルエと同じ年頃の子供なのか・・・・・・？」

「・・・・・・・リーシャ・・・・・・メルエと・・・・・・・同じ・・・・・・？」

呆れを含んだ溜息を洩らすカミュ。

自分の名前が出たことに反応し、リーシャを振り返るメルエの純粋な瞳。
それが、リーシャを追い詰めて行く。

「ぐっ！　今度こそ右だ！　私は言ったぞ！　まさか、今度もそれを無視して進むつもりか！？」

「・・・・・はぁ・・・・・わかった。　いい加減、自分の能力に気がついてくれ。」

再び盛大な溜息を洩らしたカミュは、リーシャの指示通り、右へと進路を取る。
若干の諦めを匂わせながら・・・・

しかし、そんなカミュやサラの予想に反して、リーシャの指し示した方角には道が続き、やがて、下へと降りる階段が現れた。

「　ほ、ほら、言った通りだろ！　」

「・・・・・でも・・・・・また下へと降りるのですか？」

階段を見つけ、子供のようにはしゃぐリーシャの横で、不安を隠しきれないサラが呟き、カミュの表情も概ねそれに同意しているようであった。

それでも、そこに階段がある以上、降りて見なければいけない。
＞西の洞窟＜では、上っては下り、下りては上るを繰り返した先に、目的地が現れた。
故に、胸に一抹の不安と、何故かとても嫌な予感を抱きながらも、サラは階下へと降りて行った。

「・・・・・・・・・はこ・・・・・・・・・」

下りた先は、少し開けた空間で、そこに二つの宝箱が鎮座していた。
カミュのマントの裾を握っていたメルエが、目敏くそれを見つけ、先程カミュから受けた注意を忘れて駆け寄って行く。

「　メルエ！　カミュに駄目だと言われただろう！　」

「・・・！！！・・・」

宝箱に駆け寄るメルエに、慌てたように声を荒げてリーシャが駆け寄る。
先程のカミュの真剣な瞳を思い出したメルエが、宝箱の前で踏み止

まった。

メルエに追いついたリーシャが、宝箱とメルエの間に入るように立ち、メルエへと少し怒ったような表情を向け、その行為を窘め始めた時、その場に異変が起こった。

サラは、リーシャがメルエを窘める姿を微笑ましく見ていたが、突如横に立っていたカミュが駆けだしたことに驚く。　彼女は、メルエとリーシャの直線状に立っていた為、その異変に気がつかなかったのだ。

「　どけ！！　」

ザクリ！！

猛スピードでリーシャの下へと駆け寄ったカミュが、珍しい程の声を上げ、リーシャを吹き飛ばしたのが見えた後、その音が全員の耳へと入った。

それは、身の毛が逆立つような音。
鋭い刃物が肉に突き刺さるような音。
鋭い牙が、生きている生物の肉を食い破るような音だった。

「　カミュ！！　」

リーシャを突き飛ばし、メルエの前に代わって立ったカミュの腹部に、何かが牙を立てている。　それは、先程メルエが駆け寄ろうとした物。
本来貴重品が納められている筈の『宝箱』であった。

ブシュウウウウウ

その箱の様な物がカミュから離れたと同時に、カミュの腹部から盛大にその生命の源である赤い液体が吹き出し、床を真っ赤に染め上げた。

＞人喰い箱＜
その名の通り、人を食す箱である。
何故、この魔物が生まれたのかは解明されていない。
長い年月が経過した宝箱に、そこで命を落とした者達の怨念が宿り、魔王の魔力の影響で魔物化したものという説もある。
『宝箱』と勘違いして近づいた人間をその鋭い牙で突き刺し、喰いちぎる。
その牙の鋭さは、肉食である魔物の中でも上位に位置し、凄まじい攻撃力を誇る。

「・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・？」

自分の目の前でゆっくりと倒れて行くカミュをメルエは信じられな

い物を見るように眺めていた。
メルエの中で、カミュは絶対的強者なのだ。
どんなことからも逃げることなく、どんな敵でも倒れることはない。
そんなカミュが、真っ赤な血を噴き出しながら倒れて行く。
それがメルエには信じられなかった。

それは、サラにとっても同じことだった。
どんなに皮肉を言われても、どれ程衝突を繰り返しても、この世で唯一『魔王討伐』への道を歩める存在であるカミュは、倒れることはないと心のどこかで考えていたのだ。

『勇者も人だ』
と言いきったリーシャも、心の奥ではカミュと『死』という単語は繋がっていなかった。
それが、今崩れて行く。

「サラ！　カミュに回復魔法を！」

それでも、一番先に現実に戻ったのは、やはりリーシャだった。
『カミュが自分を庇った。』
その事実に困惑しながらも、目の前で箱の渕に生える牙をカタカタと鳴らす魔物に斧を構える。

「は、はい！　メルエ！　早くこっちへ！」

「・・・・・・カミュ・・・・・・？・・・・・・カミュ・・・・

・・？」

リーシャの声に我に返ったサラが、回復を行うためにカミュへと近寄り、自分の背にメルエを移動させようとするが、メルエは、床を真っ赤に染め上げてピクリとも動かないカミュの傍を離れようとしない。

「　カタタカタタッタタタ　」

そんなメルエを＞人喰い箱＜は見逃さない。
奇妙な音を立て、その牙の生えた口のようなものを開け、メルエへと襲いかかる。

しかし、メルエの覚醒は、＞人喰い箱＜の考えを大きく超えていた。

「・・・・・・・・・ベギラマ・・・・・・・・・」

＞人喰い箱＜に向かって上げたメルエの顔に浮かんでいる表情。
それは、純粋な怒り。
リーシャの時とは、また少し違うその感情は、メルエが掲げた腕から発した熱風の量が物語っていた。

カミュやリーシャに禁じられていた、触媒を解さない魔法の行使。
しかし、本来魔力の流れを認識し始めたメルエには、すでに触媒を必要とはしていなかった。

メルエが放った熱風は、大きく開けた＞人喰い箱＜の口の中へと吸い込まれていく。

「　アバババ、ゴバゴバ　」

直接体内に取り込まれた熱風は＞人喰い箱＜の内部にて炎の海と化す。
瞬間的に閉じてしまった口の中で燃え盛る炎に、＞人喰い箱＜は奇妙な音を発しながら、黒煙を吐き始める。

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・」

「　ああ！　任せろ！　」

地面でのた打ち回りながら黒煙を吐く＞人喰い箱＜を冷たく見下ろしたメルエは、呟くようにリーシャの名を呼ぶ。
メルエの意図を把握したリーシャは、手に持つ＞鉄の斧＜を高々と掲げ、渾身の力を込めて＞人喰い箱＜へと振り下ろした。

派手な音を立て、砕け散る木片。
所々黒く焦げたそれは、＞人喰い箱＜であったものの一部。

リーシャの渾身の力を込めた一撃は、寸分の狂いもなく＞人喰い箱＜に突き刺さり、粉々に粉砕したのだ。

「サラ！　カミュは！？」

辺りに散らばった木片が動かないことを確認したリーシャは、未だに倒れて動かないカミュの下へと駆け寄るが、そこには、必死に＞ホイミ＜をかけ続けるサラの姿があった。

「・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・」

「＞ホイミ＜では追い付きません・・・・深く抉られ、内臓が傷ついていて・・・血が止まらないのです・・・・・」

心配そうにカミュの名を呟くメルエに、先程までの様な眼の光はない。
そして、その横でカミュの腹部に手をかざすサラの声も悲痛に震えていた。

「で、では・・・・カミュは・・・・・・カミュは、死んでしまうというのか！？」

「・・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・だめ・・・・・・・・・」

パーティー唯一の回復役であるサラの魔法でも回復しないというの

だ。
それは、即ち死に繋がるということ・・・・・・・
リーシャの叫びの意味を理解したのだろう。
傍に座るメルエの瞳から大粒の涙が零れ出す。

「　サラ！　何とかならないのか！？　」

「・・・・・・・くっ！・・・・・・・大丈夫です・・・・・・
カミュ様は絶対に死なせません。」

こんな時にリーシャの様な戦士に出来る事など何一つない。
それがリーシャの胸に無力さを突き刺す。
故に、無茶なことだと解っていても、サラに大声を上げるしかなかった。

そんなリーシャの叫びを聞き、一瞬悔しそうに顔を顰めたサラであったが、噛みしめた唇を開き、絞り出した言葉は、サラにしては珍しい強気な発言であった。

ピラミッド？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

少し中途半端な終わりかなとも思ったのですが、ここまでにしました。

ピラミッドは次話も続きます。

＞イシス編＜は結構かかりそうです。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

ピラミッド？（前書き）

今回も結構長いです。

最近は車の中の音楽がドラクエ？のＣＤになっています。

何週目になっても飽きがきません（笑

ピラミッド？

湿気の少ない建造物の中、外の気温とはかけ離れた涼しい空気が支配する。
リーシャが破壊した＞人喰い箱＜であった木片が散らばるフロアの中央部分では、『人』の希望である青年が静かな寝息を立てて眠っていた。

その青年の胸の上で、涙の跡を色濃く残した幼い少女もまた眠りにつき、先程までで魔法力を大量に使用した法衣を纏う少女もまた、少し前に倒れるように眠ってしまった。

唯一人、この場で何もできず、見守ることしかできなかった女性が、魔物の巣食うこの場所で見張りを兼ねて起きていたのだ。

メルエの頬に残る涙の跡を見ながら、リーシャは先程一行を襲った混乱を思い出す。
それは、まさに阿鼻叫喚と言っても良い状況であった。

血が止まらず、床を満たしていくように流れ出るカミュの命の灯。
一向に目を開かないカミュに、涙を流し、最後にはリーシャやサラですら聞いたこともない声を上げて泣き出すメルエ。

メルエが泣くことを見るのは初めてではない。
しかし、声を上げ泣き叫ぶという姿は、リーシャもサラも初めて見た。

それは、リーシャが倒れた時と違い、サラが安心できる言葉をかけなかったため。
メルエにとって、事、怪我等に関しては、サラの言うことは絶対なのだ。
サラが『大丈夫』と言えば、心配の必要はない。
しかし、カミュに対してはどこか弱気な発言をしたサラを見たメルエは、困惑し、絶望した。

「大丈夫です！　メルエ、大丈夫！　絶対にカミュ様は死なせません。　私を信じてください！」

メルエが泣き叫び、リーシャが絶望に呆然とする中、そんな二人を強引に現実へと戻したのは、先程と同じように珍しい強気な発言をするサラであった。

その瞳は、どこか自信のない揺らぎを見せるが、その奥にある炎はまさしく『決意』。
以前、リーシャが倒れた時に、メルエが宿した瞳の炎とそっくりなものだった。

「・・・・・えぐっ・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・・えっぐ・・・・・」

「メルエ、私はメルエに嘘を言ったことはありませんよ？　私がメルエに『大丈夫』と言ったのなら、『大丈夫』です。」

サラの強い声に、泣き叫んでいたメルエが、嗚咽を繰り返しながらもサラを見つめ、その視線を受けたサラは、尚も強く頷いた。
そのサラの様子が、どこか危うく、しかし、どこか頼もしい。
リーシャは、以前カミュと話したように、サラの成長を認めなければいけないと場違いな感想を持っていた。

「し、しかし、サラ・・・・どうするつもりだ？　＞ホイミ＜では無理なのだろう！？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「・・・・・・・・カミュ・・・・・・・えぐっ・・・・・・だめ・・・・・」

我に返ったリーシャの問いかけに、悔しそうに俯くサラを見て、メルエは再び涙を溢し始める。

「・・・・大丈夫ですよ・・・・＞ホイミ＜でなければいいのです・・・・・・」

「・・・サラ・・・？」

顔を上げたサラの表情はいつになく厳しい。
それは、意見や思考の食い違いから、カミュと相対する時のサラよりも厳しいもの。
その表情に、メルエは若干の怯えを見せ、リーシャは疑問を感じずにはいられなかった。

一度、胸の前で大きく印を切り、胸の前で手を合わせたサラは、その手を天高く掲げ、未だにじわじわと血が滲みでているカミュの腹部へと押し当てる。

「　ベホイミ！！　」

サラの詠唱と共に、サラの手に平だけでなく、腕の肘部分までが淡い緑の光に包まれていく。　その光の強さは、＞ホイミ＜の比ではない。
サラから放たれた淡い緑色の光は、カミュの腹部を起点にカミュの身体を包んでいく。

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

今まで見たこともない不思議な光景に、リーシャとメルエは言葉を失った。

＞ホイミ＜では、傷を癒すスピードよりも、傷つけられた内臓から滲みだす血液の喪失の方が早くなってしまっていたが、今サラが唱えた＞ホイミ＜の上位魔法である＞ベホイミ＜の癒しの力は、カミュの血液の流出を許さず、内臓の傷を塞ぎ、更には腹部に開けられた穴をも塞いでいく。

「・・・・ふぅ・・・・・よかった・・・・成功した・・・・よかった・・・うぅぅ」

腕を包むように覆っていた淡い緑色の光が消えた時、カミュの腹部の傷も綺麗に消えていた。カミュの傷跡を確かめたサラは、安堵からなのか、声を詰まらせて嗚咽を漏らす。

「・・・・・・・カミュ・・・・・・・だいじょうぶ・・・・・・？」

「ぐずっ・・・・は、はい！　もう大丈夫ですよ。　傷は治りました。　後は少しずつ＞ホイミ＜をかけて行けば、目も覚めると思います・・・・うぅぅ・・・・」

不思議な光景を間も辺りにし、カミュの傷跡も消えたことで、メルエは回復関係で最も信頼を置いているサラへと、カミュの容体につ

いて尋ねた。
鼻をすすりながらも、満面の笑みでメルエに答えるサラであったが、サラの答えを聞いたメルエの双眸から再び大粒の涙が流れるのを見て、自らも再び嗚咽してしまう。

「ふふふ。　ありがとう、サラ。　よくやってくれた。　もう、立派な僧侶だな。」

そんな妹のように思っている二人の可愛らしい姿に頬を緩めたリーシャが、サラへと労いの言葉をかけながら、二人の傍に腰を下ろした。

「・・・わ、私も、初めてだったので・・・心配で・・・心配で・・・」

「ああ。　それでも、サラがしてくれたことに変わりはない。　サラのしたことは、この世界にとっても本当に重大なことだ。　自信を持て。」

「・・・・・・・・・・サラ・・・・・・・ありが・・・・とう・・・・・・」

＞ベホイミ＜
教会が保持する経典内に記載されている上位の回復呪文。

その効力は＞ホイミ＜を遥かに凌ぎ、瀕死である人間の傷も癒すと言われている。
古の賢者の使用した回復呪文が経典に記載されていない今、事実上は僧侶が使用する最上級の回復呪文であると言っても過言ではない。

この魔法の習得。
これが、＞イシス＜の町で情報収集をリーシャに押し付けることになった三つ目の理由であった。彼女がメルエの状況を知り、そしてカミュへと宣言した僧侶としてのレベルアップ。
その必要性を強く感じ始めていたサラは、あの砂漠の途中に一人で住んでいた老人の家でも、そして＞イシス＜の町でも、夜、全員が寝静まってから、経典を手に持ち契約の儀式を行っていた。

そして、それが契約できたのは、昨日。
あの＞イシス＜での夜だった。

契約はできたが、行使をしたことがない魔法。
それをこの土壇場で使用するという行為は並大抵の勇気ではない。
それを成功させたサラが、感極まり涙を流すことをリーシャは誇らしく思った。

「ぐずっ・・・・は、はい・・・・でも・・・本当によかった・・・・」

「・・・・・・サラ・・・・・・・」

リーシャの言葉に、更に涙を溢すサラに、メルエが飛び付く。
サラの薄い胸の中で泣くメルエを強く抱きしめ、サラは今自分の立ち位置を確立したことを改めて感じていた。

「ふふふ・・・ぐずっ・・・メルエ、まだカミュ様に＞ホイミ＜をかけてあげなければいけません。　もう少しでカミュ様も目覚めると思いますから、カミュ様のお傍で待っていて下さい。」

「・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

しばらく抱き合っていた二人ではあったが、涙を拭きながら話すサラの言葉に、メルエが小さく頷き、サラの胸から離れ、横たわるカミュの傍へと移動していく。
その間、リーシャは、周囲の警戒をしながらも、二人を穏やかな気持ちで眺めていた。

「サラ。　ここで少し休んで行こう。　カミュも言っていたが、ここでの探索はそう急ぐものじゃない。　ゆっくりカミュが起きるのを待とう。」

「あっ、は、はい。」

リーシャが腰を落ち着けたことにより、サラの胸の中の焦りは皆無となった。

カミュの命の鼓動は消えていない。
今は、身体が失われた血液の回復をしているだけ。
ならば、後はその回復を待つだけなのである。

先程まで、この場所で抱き合い涙を流していた二人は、今深い眠りについている。
片方は魔法の行使での疲れの為。
もう片方は、極度の不安とその解放による泣き疲れの為。

「・・・サラも、メルエもどんどん成長していく・・・私はこのままでいいのだろうか・・・」

静かな寝息が響く、古の建造物の中でリーシャの声だけが闇に溶けて行く。
それは自問自答。
妹の様な二人の成長を頼もしく感じると共に、寂しさも感じ始めていた。

「・・・・うっ・・・・・」

そんな物思いに耽っていたリーシャの耳に、先程までの騒動の原因でもある青年の声が入って来た。
目を開き、身体を起こそうとしたのだろう。
しかし、胸の上で眠るメルエの存在に気が付き起きるに起きられない状態で、困ったように再び身体を横たえるカミュを見て、リーシャは口元を緩めた。

「まだ寝ていろ。　お前は死にかけたんだ。」

「・・・・・ああ・・・・・・アンタの代わりにな・・・・・・・」

「　ぐっ！　」

微笑みながらカミュの顔近くに座り込んだリーシャの声に、視線だけを向けたカミュは一瞬自分の身に起こったことに想いを巡らし、皮肉気に口を開いた。

それは、間違いない事実。
＞人喰い箱＜の前にいたのは、カミュではなくリーシャだった。
メルエを窘めるリーシャは＞人喰い箱＜に背を向けた状態であった。
であるならば、本来、カミュが受けた傷はリーシャが受け、生と死との狭間を行き来していたのはリーシャであった可能性が高いのだ。

「・・・・すまなかった・・・・お前のおかげだ・・・・・・」

「・・・・・俺も生きている・・・・・アンタが受けたとしても、生きているということだろう。」

頭を下げるリーシャに、驚いたように目を開いたカミュが呟いた言葉は、遠回しながらもリーシャが気にかける必要がないことを伝えるものだった。

「後でサラによく礼を言っておけよ。　サラがいなければお前は死んでいたのだからな。」

「・・・・・・ああ・・・・・・・」

リーシャの言葉に素直に頷くカミュに、リーシャも驚きを浮かべる。彼がここまで素直に頷くとは思っていなかった。

眠っているメルエをカミュの胸から太腿の位置まで移動させ、カミュに膝枕をしてもらうように眠らせてから、カミュは身体を起こした。

「それと、今回は私が救われたから、強くは言えないが、お前はもう少し自分の身体を気にかけろ！　お前はこの世界に住む『人』の

希望なんだ。　私とは違う。」

身体を起こしたカミュに、リーシャが声をかける。
その内容は、『勇者』として送り出されたカミュの責任を追及するものであった。

「・・・・俺もアンタも同じ『人間』だ。　生まれた家が違うだけで、『人』としての価値に違いなどない・・・・それに、俺はこの旅は『死への旅だ』と言ったはずだ。」

「　な、なに!?　ならば、お前は今生きているのも余計なことだとでも言うのか!?　サラがあれ程必死になってお前を救ったことを余計な世話だとでも言うつもりか!?　」

冷たく細められた視線を発し、カミュが口にした言葉に、反射的にリーシャは激昂してしまう。サラがあれ程までに強い決意を示し、勇気を振り絞って魔法を行使した後、その安堵から大粒の涙を溢した姿が、カミュにとって無駄な事と片づけられることがリーシャには我慢ならなかった。

「・・・はぁ・・・どこをどう聞けば、そういうことになる?
あの僧侶が回復呪文を唱えたことによって命を繋ぎ留めたことに関しては、感謝している。　俺が言っているのは、この旅の途中で、どこでどういう死に方をしようと覚悟はできているということだ。」

「ぐっ・・・だが、それも間違っているだろう！　お前はこの世界の『勇者』なんだ。　オルテガ様に代わり、魔王を討伐できるのは、お前しかいないんだぞ！？」

リーシャは頭に血が上っていて気がつかない。
カミュが素直にサラに対して感謝の意を示していることを。

それは、カミュが唯の死にたがりではないことを示している。
命を繋ぎとめてくれた者に対しての素直な感謝。
それは生への執着とは少し違う想い。
それが何であるのかは当の本人すら気がついていないのかもしれない。

「・・・アンタが言うように、俺は『そういう存在』だ。　ただ、魔王を討伐できるか否かは、解らないこと。　この世界にいる以上、俺はそれを求められ、それ以外の生き方は許されないだろう。　旅は続ける。　だが、その先が『魔王討伐の成功』なのか、『死』なのかは俺の判断でできるものじゃない。」

「・・・・・・・」

「・・・アンタが慕う『オルテガ』という存在と俺は別だ。　『オルテガ』にできたこと全てを俺に求めないでくれ・・・・・アンタが慕う存在ですら成しえなかった事を俺ができるとは思わないことだ。」

カミュの淡々とした口調に、リーシャは言葉を発することができかった。
ただ、リーシャの心の中では、あらゆる感情が蠢く。

『違う』
『こんな問答をする為に、言葉を交わしたのではない』と。

「ち、ちがっ・・・・・いや、もういい。　ただ、カミュ。　お前が自分の死をどういう風に考えているのかは解ったが、メルエの顔を見てみろ。」

「・・・・・・・」

自分の胸にある想いを伝えようとして、リーシャは諦めた。
今の自分では、正確に想いをカミュに伝える事が出来ないと感じたからだ。
故に、リーシャは視点を変えることとした。

「メルエの頬に残るその跡こそ、お前が考えるべきものだ。　お前は、自らの『死』を受け入れる覚悟はあるのだろう。　だが、メルエにはお前の『死』を受け入れる覚悟などない！　お前はそれを解っているのか！？」

「・・・・・・・・・」

「私とて、目標は『魔王討伐』という使命だが、お前の言うとおり、それが必ずしも実現できるとは思っていない。　いや、実現するために最大限の努力はする。　しかし、この旅がそのような甘い旅ではないことぐらいは百も承知だ。」

一度、自分の胸の中にある説明できない感情を吐き出し始めたリーシャの言葉は止まらない。カミュが口を開く間を与えないように、言葉を捲し立てて行く。
カミュの目には先程までの冷たい光はもうない。
あるのは、『困惑』『焦り』。
まさか、この頭の固い戦士からこのような事を言われるとは思っていなかったのであろう。

「だが、カミュ。　メルエはお前に『魔王討伐』を無理強いしているのか？　メルエがお前を『勇者』として見ているのか？　確かにお前の使命は成功するかどうか解らない『魔王討伐』だ。　それでも、その先にある未来が『お前の死』では駄目なんだ。」

「・・・・・・・・・」

「私は、お前を一人の人間として見ていたかと問われれば、アリアハンを出た時は確実に見ていなかった・・・・・いや、今でもどうかわからない・・・・・しかし、メルエは違う！　メルエにとって、

お前はカミュなんだ。　それを今日実感した。　メルエだけは血の気を失うお前を見て『カミュの死』というものを連想し、絶望していた。　私やサラは、『勇者の死』としてしか見ていなかったのかもしれない・・・・・」

リーシャの頭は下げられ、話の途中からはもうカミュと視線を合わせられなくなっていた。
自分でも収集がつかない程の想いが、零れ出している。
それは『懺悔』のようにも聞こえる。

「・・・すまない・・・もう何を言っているのか解らないな・・・とにかく、お前は自分の身をもう少し考えてくれ。」

「・・・・・・・・」

もはや、自分でも何をどう話したのか、それがどういう意味だったのかが理解できなくなってしまったリーシャは、最初にカミュに掛けた言葉をもう一度口にすることで口を閉じた。

カミュは黙して何も語らない。
ただ、目の前で下を向いている頭の固かった女性戦士を見ていた。

「・・・アンタはどこまで変わって行くつもりだ・・・・？」

「な、なんだそれは!?」

不意に口を開いたカミュの言葉にリーシャの思考が追い付かない。
リーシャが今まで必死に話した内容など無視したように話すカミュの顔を見る為にリーシャは俯いていた顔を上げた。

「・・・・・俺の頭が追い付かない・・・・・・」

「ば、馬鹿にしているのか!?」

「・・・はぁ・・・その辺りは変わらないんだな・・・」

「ぐっ!」

カミュとリーシャのやり取りに先程までの重苦しいものはない。
あるのは、会話と同様に軽い空気。

「・・・それに、アンタも以前にメルエを護るために身を挺したはずだが?」

「あ、あれは、身体が勝手に動いたんだ!」

カミュの表情に先程と違った余裕が戻って来ている。
そんなカミュにリーシャが敵うはずもない。
いつものように、後手後手に回ってしまう。

しかし、そんな軽い空気も変化する。
次のカミュの言葉が、周囲の時を止めたように空気を固めてしまう。

「・・・・ならば、俺もそれと同じでいい・・・・」

「 は？ 」

カミュが言うこと。
それは、リーシャがメルエを救った時のように、リーシャを救うために無意識に飛び込んで来たというのだ。
リーシャは、ここまで、様々な難局をカミュが越えて来たのを見ている。
＞ノアニール＜でも＞エルフの隠れ里＜でも＞カザーブ＜でも、彼は、やり方はどうあれ、そこに住む者の心を救ってきた。

しかし、＞ノアニール＜の村の住人を救うためにカミュが身を挺するとは思えない。
＞エルフ＜は＞人＜であるカミュの救いなど必要としない。
＞カザーブ＜のトルドに対しては、もしかしたらカミュは動くかもしれないが、想像が難しい。

ということは、カミュが無意識に助けたリーシャは、カミュの周囲

にいる人間の中でも違う意味を持っているということになる。
その事にリーシャの理解が追い付いていかない。

「・・・う・・・・う～ん・・・・・・」

カミュの目を見つめ呆然としているリーシャの横で、眠りから覚醒する声が聞こえ始める。
ゆっくりと顔を上げ、目を擦るのは、カミュを死の淵から生還させた功労者。
傷が塞がった後も、＞ホイミ＜をかけ、カミュの覚醒を速めたサラであった。

「　はっ！　も、申し訳ありません。　カ、カミュ様、どこか具合の悪いところはありませんか？　一応、一通り＞ホイミ＜をかけておきましたが・・・・・」

顔を上げて、真っ先にカミュの身を案じるサラ。
それは、先程リーシャが言っていた『勇者』として見ているものなのか。
それとも、『カミュ個人』を見て発しているものなのか・・・・・

「・・・いや、大丈夫だ。　アンタには本当に助けられた。　ありがとう。」

「ふぇ!?　い、いえ。　そ、僧侶として当然のことをしたまでです。　私もカミュ様を・・・『勇者様』を救うことができて嬉しく思います。」

「・・・・・・・・」

カミュが示す感謝の意を受け、サラは眠気が吹っ飛んで行く。
何度かカミュの感謝を受け取りはしたが、カミュと感謝が未だに結びつかないのだ。
そして、その後に続けたサラの言葉が、リーシャの表情に微かな影を差す。

「・・・・・うっ・・・・・」

周囲の騒がしさに、パーティー最後の少女も眠りから覚醒する。
カミュの太腿から顔を上げ、何度も目を擦り、開いた目に飛び込んできたカミュの顔に、メルエは輝くような笑顔を浮かべる。

「・・・・・・・・カミュ!・・・・・・・・・」

「ふふふ。」

カミュの首に巻きつくように抱きついたメルエを、サラは微笑みを

浮かべながら見つめ、カミュはメルエを複雑な想いを持って迎え入れていた。

それは、先程のリーシャの言葉。

『メルエにとってお前は＞カミュ＜なんだ！』

それは、カミュが初めて受ける見解。

自分を『アリアハンの勇者』としてではなく、ましてや『オルテガの息子』としてでもない。純粋に『カミュ』として見られることは、カミュには初めての体験だったのだ。

この純粋で小さな少女は、『アリアハン』という国も知らなければ、『オルテガ』という存在も知らないのだから、当然の事なのかもしれないが、カミュはこの後、メルエとどう接していけばいいのかが解らなかった。

「今まで通りでいい。　メルエにとってそれが『カミュ』なんだ。」

「「　？？？　」」

そんなカミュの困惑顔を見ていたリーシャが口を開き、その会話の内容が理解できないサラとメルエが仲良く首を傾げた。

「・・・・はぁ・・・・時々、アンタが解らなくなる。」

「　お前は、私をどう見ているんだ！！　」

自分の胸の内をリーシャが悟ることは、今回ばかりではない。
カミュが、胸の内で悩み、表情に出さないまでもその悩みに苦しんでいる時、必ず現れるのは、この女性戦士であった。

カミュに『脳味噌まで筋肉でできているのでは？』と揶揄される程に軽率な行動に出ることも多い反面、人の心の機微には敏感。
そんなリーシャという存在が、カミュは時々解らなくなっていた。

「・・・良く解りませんが・・・カミュ様、もう少し休んで行かれますか？」

「・・・いや。　アンタのお陰で、体調も大分戻った。　このまま探索を続ける。」

カミュとリーシャのやり取りが理解できないサラではあったが、カミュの身を案じ休憩を示唆した。そのサラの言葉をさらりと流したカミュは、そのまま探索するために立ちあがる。若干のふらつきを覚え、血液流出による貧血状態であることが解るが、時間が解決してくれるとカミュは、そのまま自分の状態を把握していた。

＞人喰い箱＜の牙を受けたカミュの腹部の＞みかわしの服＜のは大きな穴が空き、マントや服には乾いた血液がべったりとこびり付いている。
結果論にはなるが、もし、カミュが身に着けている防具が＞鉄の鎧＜であれば、カミュは死に繋がる程の怪我にはならなかったのかも

しれない。

「・・・・・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・・・いたい・・・・・・？」

「ん？　ああ、大丈夫だ。　メルエ、血で汚れている部分のマントは握るなよ。」

「・・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・・」

少しふらついたカミュを心配そうに見上げるメルエの瞳は、純粋に『カミュ』を心配しているもの。それがカミュにとっては不思議な光景に見える。
それでも、そんなメルエの手が汚れる事を心配するカミュの心もまた、メルエを妹のように思っている証拠なのだ。

かなりの時間をこの空間で過ごした一行ではあったが、再びこの古の建造物の中に眠ると云われる『魔法のカギ』を求めて歩き出す。

彼等四人を取り巻く空気は、ゆっくりとではあるが、確実に変化を起こしていた。

「「「・・・・・・・・・」」」

「・・・前言は撤回しよう・・・アンタは何も変わらない・・・・」

カミュの一大事で、一行は忘れていた。
彼等が＞人喰い箱＜のある場所を目指すきっかけになったのも、全てリーシャが指し示した方角へと歩いてきたからだということを。
その行き着く先など、決まっている。
『行き止まり』であった。

「　くそっ！　」

「　あれ？　なんでしょう？　壁に何かついていますが・・・」

吐き捨てるように言葉を吐くリーシャの姿を横目に、サラは自分達の行き先を遮るようにそびえる壁に小さく丸いボタンの様なものが付いているのを見つけた。

「・・・・・なんだこれは・・・・・」

「・・・・・・・おす・・・・・・・・？」

「　ちょ、ちょっと待て、メルエ！　何でもかんでも無闇に触るな！　また、誰かが傷ついたらどうする！　」

目を凝らすカミュを見上げたメルエが、壁に付いているボタンを押そうと指を伸ばすのをリーシャが慌てて止めに入る。
リーシャの言葉に、先程のカミュの姿を思い出したメルエは、眉を下げ、俯いてしまう。

「　あああああ！！　も、もしかしたら・・・・」

「な、なんだ、サラ。　突然大声を上げるな。」

しょんぼりと俯いてしまったメルエを慰めようと手を伸ばしたリーシャの後ろから、サラが素っ頓狂な声を上げた。
そのサラの大声に全員が驚き、サラへと振り返る。
一斉に視線が自分に集まったことに驚いたサラであったが、呼吸を整え、自分の考えを話し始めた。

「＞イシス＜のお城で聞いた童歌ですよ。　あの子供達は、『まんまるボタンはお日様ボタン。　小さなボタンで扉が開く。　東の東

から西の西。』と謡っていました。」

「ん？　それが何か関係があるのか？」

人の心の機微には素早い回転を見せるリーシャの頭ではあったが、サラの話す謎解きのようなものにはその回転力を全く発揮しない。

「・・・・・なるほどな・・・・・・このボタンが、その扉を開く鍵だというのか？　では、『東の東から西の西』という部分は？」

対して、カミュには何か納得がいったようだ。
困惑顔のリーシャを置いて、カミュとサラの話が始まる。

「そこが、まだ解りませんが、きっとここ以外にもボタンがあるはずです。」

「何が、何だというのだ！？　私にはさっぱり解らないぞ！」

勝手に進むカミュ達の話に置いて行かれてしまい、リーシャは癇癪を起こしていく。
メルエはというと、ピラミッドの床を歩く、小さな小さな生物に興味を引かれたらしく、しゃがみ込んで、行列を作る＞蟻＜を眺めて

いた。

「・・・アンタはこの先どっちに行けばいいと思う・・・・？」

「　な、なに!？　それとこれとどう・・・・・・先程の曲がり道を左だな・・・・」

リーシャの言葉を無視して問いかけるカミュの目が真剣なものであることを見たリーシャは、反論するのを諦め、自分が思った先を指し示す。

「・・・だそうだ。　とりあえず行ってみる・・・」

「そ、そうですね。　わかりました。」

躊躇なくリーシャの指し示した方角に移動しようとするカミュの考えが解っただけに、サラは戸惑うが、その意図を測りきれていないリーシャは、ただ、自分の意見がすんなり通ったことを喜んでいた。

リーシャが指し示した方角は、計四方向。
その全てが『行き止まり』であった。

その事に肩を落とすリーシャであったが、カミュやサラはその事を責めるような言葉は発しなかった。
むしろ、改めて見直したような視線を送ってくるサラをリーシャは不思議に思っていた。

「・・・これで四つ目ですね・・・」

「・・・ああ・・・」

リーシャが指し示した方角にある『行き止まり』は、最初に辿り着いた時と同じように、細い道の先が壁となっており、その壁にも全く同じ丸いボタンが取り付けられていた。

「・・・おそらく、このボタンが最後ではないかと思います。　ここまでの道は一本道でした。　そこで二手に分かれて同じボタンが二つ。　一番最初に見たボタンもその手前の別れ道の先にもう一つのボタンがありました。」

「・・・・『東の東から西の西』か・・・・」

「　何だと言うんだ!?　解るように説明してくれ！」

サラとカミュの会話はどんどん進んで行く。
それにリーシャとメルエは置いて行かれていた。
いや、関心を示さないメルエと違い、リーシャは聞いていても理解が出来ない。

「・・・この＞ピラミッド＜の入口から考えて、このボタンがある場所が、東の方角でしょう。　そして、東側にある二つのボタンの内、最も東にあるのがこのボタン・・・・」

「・・・東側にある東のボタンを押した後に、西側にある西のボタンを押せば・・・」

サラの推理は、カミュの考えているものと同じだった。
四つのボタン。
ピラミッド内で、東側に二つ。そして西側に二つ。
童歌がカギとなるならば、指し示す内容はそれしかない。

「・・・お前達は、意図的に私を無視しているのか・・・？」

サラとカミュの話が進み、説明を求めるリーシャの声等聞こえない素振りを見せる二人にリーシャの癇癪が爆発しそうになる。

それにサラは慌てた。

「い、いえ！　そのようなことはありません！」

「・・・アンタに話した所で、理解できないだろうからな・・・」

「カ、カミュ様！！」

弁解しようとするサラの言葉を遮って、口を開いたカミュの言葉は辛辣。
そのような事を言われれば、リーシャでなくても、通常の人間であれば怒りだす。
案の定、リーシャの肩は震えていた。

「そんな事、聞いてみなければ解らないだろう！！」

「・・・何事にも適材適所がある。　こういうことは他人に任せておけ。」

激昂したように叫ぶリーシャに対し、何も感じてはいないように、カミュは言葉を返した。
それは、サラにしてみれば、恐ろしい発言。
そのままリーシャの背にある＞鉄の斧＜で首を刈られてしまうので

はないかとすら考えた。

「・・・カミュ・・・お前は、私は考える事に向いていないと言うのか!?」

「・・・アンタは向いていると思っていたのか・・・?」

怒りに燃えるリーシャの顔を、本当に不思議そうに見るカミュの表情は、先程まで恐怖に強張っていたサラの顔を微笑みに変えてしまう程に自然なものだった。

「・・・・・・・リーシャ・・・・・・・たべる・・・・・・?」

「~~~~~~!!　もういい!!　やることがあるなら、さっさとしろ!」

カミュ達の会話を眺めていたメルエがポシェットから例の種を取り出したことで、この問答は終了した。

最後にメルエの帽子を取り、その頭に軽く拳骨を落としたリーシャは、不貞腐れたように後ろを向いてしまった。

不貞腐れたリーシャに謝罪をしているメルエを余所にサラとカミュは再び＞ピラミッド＜の謎解きを始めた。

「おそらく、カミュ様の言うとおり、この『東の東』に位置するボタンを押した後、先程見た『西の西』に位置するボタンを押すのではないかと・・・・・」

「・・・押せばどうなる・・・・？」

「そ、それは、わかりません・・・・・もしかすると、罠のような物が出てきてしまうかもしれませんが・・・・・」

サラの推理はカミュの考えと同じもの。
ただ、その先に何が待っているのかは予測が出来ない。
それをサラに問いかける形となり、自分の意見に賛成の手を上げてくれないのを見て、サラの自信は萎んで行ってしまう。

「・・・やってみなければ解らないか・・・・・・メルエ！！」

俯いてしまったサラを横目に、呟くそうな言葉を漏らしたカミュが、リーシャの傍にいるメルエを呼んだ。
カミュの声に首を向けた後、メルエはカミュの下へとてとてと走ってくる。

「・・・・メルエ、そのボタンを押していいぞ・・・・・」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

カミュの言葉に表情を笑顔に変えて頷くメルエ。
それを見たサラは血相を変えた。

「　カミュ様！　メルエにさせるおつもりですか！？　」

「・・・・心配するな・・・メルエの身に何か起こるようなことはない・・・・・」

「・・・・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・おす・・・・・・・・・」

サラの心配は尤もなことだ。
押した途端ボタンの場所から弓矢が飛び出してくるかもしれない。
床が抜け、下へ落とされるかもしれない。
そんな危険な役をメルエにさせようとするカミュが信じられなかった。

「カミュ、お前はまた私に同じ言葉を言わせるつもりか？」

「・・・・・死ぬことはない・・・・・・」

サラとカミュのやり取りを見ていたリーシャの呟きは、低く小さなものだったが、嫌な汗が出る程の迫力があった。
そのリーシャの声を聞いたカミュは視線を合わせようとはしない。

「し、しかし、メルエが押す必要はどこにもありません！」

「・・・・・・・・・・・・もう・・・・・・・・・おした・・・・・・・・・」

「えぇぇぇぇ！！」

尚も反論しようとするサラの耳に、信じられないような事実が響く。
丸いボタンに指を伸ばし、それを深く押しきったメルエがカミュの足元から声を発したのだ。サラは、そのメルエの姿を確認し、大袈裟な驚きを表すが、彼女の心理的にそれは決して大袈裟なものではなかったのかもしれない。

「押してしまっては、もうどうしようもないな・・・メルエの身は大丈夫だったし、次に行くんだろ、カミュ？」

「リ、リーシャさんも何を落ち着いて！　どうしようもないではありません！」

ボタンを押したことに満足そうな笑みを浮かべるメルエの手を引いたリーシャは、カミュの方へ視線を向けるが、サラはそれを許すことができなかった。

「サラ、そんなに怒るな。　もう、押してしまったものはどうしようもないだろう？　次はサラが押せば良いじゃないか。」

「　私が押したかった訳ではありません！　」

「・・・・・・・・・・おに・・・・・・・・・・」

「　何故ですか！？　」

いつものように、とても生死を賭けた場所でのやり取りとは思えない空気が広がり始める。
いや、実際、メルエにはそのような感覚はないのかもしれない。
ただ、カミュ達が行く場所に行かないという選択肢がないだけなのだろう。

それでも、先程のカミュの一大事は彼女にとって、生まれて初めて『死』というものを実感した瞬間であった。

未だ興奮冷めやらぬサラを連れ、再び最初に見つけたボタンの場所へと戻って行く。
その間にも、魔物との戦闘もあったが、出てきた魔物は＞火炎ムカデ＜や＞大王ガマ＜であり、一行を死の淵をに落とすようなものではなかった。

「またメルエが押すと、サラが怒るから、次はカミュが押せ！」

「・・・・・・・うぅぅ・・・・・・・・」

「　に、睨んでも駄目です！　」

リーシャの言葉に、メルエが恨めしそうにサラを睨む。
サラは一瞬怯みかけるが、気丈にメルエを見つめ返した。

「・・・・・・わかった・・・・・・」

カミュがボタンの前まで進み、そのボタンを奥まで押し込む。

ガゴン！

ボタンが押し噛まれると同時に、どこかで何かが開くような音が聞こえた。
それは、ボタンがあった壁を見つめる一行の遥か後ろの方。
その音は一向全員の耳に確かに入って来た。

「カミュ、今のは？」

「・・・・・・わからない・・・・・・・とりあえず、音のした方に向かう。」

いつものように、カミュへと問いかけるリーシャの言葉に律儀に返した後、先頭をカミュが歩き、一行は音が聞こえた場所に向かって歩き出す。
その先に彼等が求める＞魔法のカギ＜があることを信じて。

「しかし、『オルテガ』様の軌跡を辿ってここまで来たが、＞魔法のカギ＜という物は、これからの旅に必要な物なのか？」

「・・・・・・・・」

「リ、リーシャさん・・・」

カミュを先頭に、東と西のボタンへと続く通路の中央から延びる一本道を歩いている時に不意に溢したリーシャの言葉に、カミュは絶句した。
サラも同様に、溜息を吐く。

「　な、なんだ!?　私は何か変な事を言ったのか？　」

「・・・・・いや、もういい・・・・・」

「リーシャさん。　＞魔法のカギ＜自体が本当にあるのかどうかすら解りません。　いえ、＞魔法のカギ＜を求めていた『オルテガ』様が＞イシス＜を訪れて尚、その伝説が伝えられ続けていることが、その存在を否定している可能性の方が高いのです。」

カミュが疲れたように視線を前に戻したことで、代わりにリーシャの前を歩くサラが口を開く。すでにメルエは、リーシャの手からカミュのマントに移っている。
何度も言うが、メルエにとって、カミュ達と共に居られればその理由等はどうでもいいものなのだ。

「では、一体何の為に？」

「『オルテガ』様の軌跡を探るためです。『オルテガ』様が何故＞魔法のカギ＜を求めたのか。そのカギを何に使うつもりでいたのか。それを知るためにも、＞魔法のカギ＜の有無はとても重要なのです。」

二人が話している間も、歩は進む。
サラの言葉に納得したのか分からないリーシャの曖昧な声が返ってきた頃、カミュの前には開かれた扉があった。

かなり分厚い鉄でできているその扉は、とても人間の力で開くことは不可能に思われる。
それが壁に押し込まれるように開かれている。

「先程のボタンの仕掛けでしょうか？」

「・・・ああ・・・そうだろうな・・・・」

大きく重い扉だった物を見上げながら呟いたサラの言葉を、カミュが肯定するように頷く。
そして、その二人を残し、前へ進む者がいた。

「・・・・・・・・・・はこ・・・・・・・・・・・・」

「メルエ！！」

前方に見える一段上った祭壇の様な場所に見えた物に興味を示したメルエである。
再び、宝箱に向かって、とてとてと駆け出すメルエを、リーシャが追って行く。

「メルエ！　何度言えば解るんだ！　いい加減、私も本当に怒るぞ！」

「・・・・・・・・・うぅぅ・・・・・・・・・」

祭壇を駆け上がろうとするメルエの服を捕まえたリーシャが、メルエの向きを変え、怒りの瞳を向けた。
その瞳を見たメルエは、自分が本気で怒られていることを知り、目に涙を溜め始める。

「いいか、メルエ。　メルエはまさか先程カミュが死の淵を彷徨ったことを忘れたわけではないだろう？　あの後、誰もメルエを責めなかった。　だが、敢えて私は言おう。　あの時、カミュが瀕死の怪我を負ったのは、カミュの言うことを聞かずに宝箱に近寄ろうとしたメルエの責任だ。」

「「「　！！！　」」」

祭壇の麓で、向き合ったリーシャとメルエ。
後ろから近づいてきたカミュとサラの二人は、リーシャの言葉に驚いた。

リーシャの言うとおり、あの時の事で誰もメルエを責めはしなかった。
傷を負ったカミュも、本来傷を負うはずだったリーシャも、そしてメルエの躾役であるサラでさえも。

しかし、それは間違っていたのかもしれない。
故に、リーシャは心を鬼にしてメルエと向きあう。
己の罪を自覚させるために。
メルエ自身の成長の為に。

「あのまま、もしカミュが死んでしまっていたら、メルエがカミュを殺したことになる。　メルエが取った行動はそれ程のことだ。
それにも拘らず、同じ行動をするということは、メルエがこの中の

誰かを殺したいという事なのか？」

「・・・・・・・・・ちが・・・・・・・・・」

「　では何故同じ事をする！　カミュだけではなく、私もメルエにそれは駄目だと言ったはずだ！」

メルエに辛辣な言葉を投げかけるリーシャ。
その言葉に反論しようとするメルエの言葉に被せるように、語気を荒げ、怒気を隠そうともしない。
メルエの瞳に溜まった涙は、すでに頬を伝っている。

「・・・・・・ごめん・・・・なさい・・・・・・・ごめ・・・・・・・」

「いいか、メルエ。　私達は、この先もメルエと旅をして行きたい。
その為に私達はメルエに話している。　何もメルエの嫌がることをしたい訳ではない。　メルエと旅を続けるために必要だと思ったことを言っているんだ。」

リーシャの言葉が自分に向けられていること。
いつも優しく微笑むリーシャの瞳が本気の怒りを表していること。
それが、自分が起こした行動に原因があること。
それを理解したメルエは、涙で滲んだ瞳をリーシャに向けながら、

何度も謝罪の言葉発する。それは、見ていて痛々しい程の姿。

実際サラは、リーシャの怒りに驚く反面、当然のことと考えていたが、メルエの表情を見た時に、何故か罪悪感が胸を襲っていた。

「解るな、メルエ？　ボタンの時のように、カミュも私もメルエを護れる状況である時には、メルエにボタンを押させてやるし、宝箱も開けさせてやる。　だから勝手に動くな。」

「・・・・・・・・・・」

メルエの肩に置き、念を押すように語りかけるリーシャに、メルエは力強く頷いた。

サラはその様子を痛々しく見守っていたが、ふと隣を見て、再び驚いた。

隣に立っていたカミュの表情がとても優しいものだったのだ。

リーシャとメルエのやり取りを、とても優しい表情で眺めるカミュ。

驚いていたサラであったが、そのカミュの表情に、自然と自分の表情も緩んで行くのが解る。

カミュがリーシャとメルエに何を見たのかは解らない。

ただ、その瞳は、アリアハンを出たばかりの時に自分達に向けていたものではない。

それが、サラにはとても嬉しかった。

リーシャの胸でしばらく泣いていたメルエが落ち着いたのを見計らって、カミュが宝箱へと近づいて行く。
その後ろをリーシャに手を引かれたメルエが続く。

宝箱を見下ろしたカミュが、背中から剣を抜き、宝箱を数回小突く。
それに対し、何の反応も示さないことを確認し、カミュは振り返った。

「・・・・・メルエ・・・・・・開けてもいいぞ・・・・・・」

カミュのその言葉に、メルエは手を握っているリーシャを見上げ、そのリーシャが頷いたことを確認し、カミュに護られるように宝箱の前にしゃがみ込んだ。
宝箱の渕に手をかけ、ゆっくりとそれを開いて行く。

「・・・・・・？？？？・・・・・・」

そこにあったのは、宝箱の大きさに似合わない小さな物。

「・・・・・・＞魔法のカギ＜か・・・・・・・？」

「・・・・これが・・・・・」

メルエが宝箱から取り出したものは、本当に小さな鍵。
それは、奇妙な形をした鍵だった。

＞魔法のカギ＜
古来＞イシス＜の国宝されていたものであり、門外不出とされていた。
その鍵自体に解錠の術式が組み込まれており、魔法の力によって扉や宝箱にかかった鍵を開ける事が出来るように作られている。
何代も昔の＞イシス王＜がその力を危惧し、自分の遺体と共に、＞ピラミッド＜に封印した。
何時しか、国宝として保持していた＞イシス＜ですらも伝説として語り継がれる物になり下がり、今までその存在が明るみに出ることはなかった。

「・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・」

「！！・・・・メルエ・・・・それを仕舞って、後ろに下がっていろ・・・」

＞魔法のカギ＜を手渡そうとするメルエから受け取ろうと動いたカ

ミュが、何かの気配に気が付き、メルエを後ろに下がらせる。
メルエは、カミュの言葉の真剣さに、すぐさま＞魔法のカギ＜をポシェットへと押し込み、後ろに控えるサラの傍まで下がる。

「　カミュ！　」

「・・・わかっている・・・王家の護人か・・・」

自分達を取り巻く不穏な空気を感じ、背中の斧を手に構えたリーシャの叫びに反応したカミュの呟きはサラの首を傾けさせた。
しかし、そのサラの疑問もすぐに恐怖という形で解消される。

「　ひぃぃぃ！　」

「　サラ！　恐れるな！　」

カミュ達の数歩前の地面から突如飛び出した物。
それは、人の手。
その余りにも奇妙な光景に、サラは叫び声を上げる。

地面から突き出された手は、人の手の形はしているが、肌は見えない。
白であったであろう包帯の様なものが巻き付いた腕が地面から次々と突き出されてくる。

「メルエ！　呪文の準備だ！」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

カミュの指示にメルエが頷いた頃には、地面から突き出された腕は、その全貌を露わにしていた。腕と同じように、全身を包帯で覆いつくすように巻いている人型の魔物。
いや、あれは正式には魔物とは言えないのかもしれない。

「・・・あれは、『人』ですか・・・？」

「・・・正確には、『人』であったものだ。　王家の兵士だろう。
女王の死に殉じた者達。　そして、いつしか蘇る女王とその財宝を護る『護り人』・・・。」

その魔物の姿を見たサラの率直な疑問に、剣を構えながらカミュが答える。
それは、決してサラが望んでいた答えではない。

カミュの言葉通りであれば、目の前に現れた者達は、自分達の責務を全うしている誇り高き騎士なのだ。
サラは、そこに迷いを感じる。

＞ミイラ男＜
全身の臓器全てを取り出され、包帯で包まれた後、湿気のない所に放置され水分を抜かれたミイラである。
本来、＞イシス王家＜の女王の死後にその身を護る兵として共に安置される。
その使命は甦る女王の兵となること。
そして、それまでの間女王の遺骸を護ること。
復活の際に使用する財宝を守護すること。
の三つがあり、死後はその呪いとも言える使命だけを忠実に守り通す。

「・・・カミュ様は、あの『人』達も葬り去るのですか・・・・？」

故に尋ねてしまう。
返ってくる答えなど解っているはず。
しかも、この質問は、サラ自身もとても理不尽なものであることは承知している。
目の前に現れた者達が、もはや、『人』という括りではないことも。

「・・・ああ・・・俺に敵意を向ける以上、倒し続けるさ・・・・・・俺は『死』すらも認めてもらえないようだからな・・・・」

しかし、カミュの答えはサラの想像の遥か斜めを行っていた。

そして、カミュの表情。
薄い微笑。
今まで見たことのないような、『哀しみ』とも『喜び』とも受け取れるような、本当に小さな小さな笑み。

「・・・・カミュ・・・・・」

「・・・行くぞ・・・メルエ、＞ベギラマ＜の準備を！」

カミュの表情を見、言葉を聞いて驚いたのは、サラだけではなかった。
リーシャもまた、一瞬ではあるが、カミュを見て呆けた表情を浮かべた。

カミュが言ったことは、回復したカミュと二人で話した内容。
それは、自分の言葉がカミュへと届いていた証拠。
その事実にリーシャは驚いたのだ。

カミュはメルエへの指示と共に＞ミイラ男＜へと走り込んで行く。
それに気が付いたリーシャもまた斧を構えて駆けた。

「・・・・動きが遅い・・・・一ヶ所に集める・・・・・」

「わかった！」

近付いてきたリーシャに作戦を告げると、カミュは横に広がり始めた＞ミイラ男＜を誘導するように剣を振るう。
基本的にアンデットである＞ミイラ男＜の動きは、他のアンデット種と同じように遅い。
カミュへと腕を振り回すが、難なく避けられ、その腕を斬り捨てられていく。

カミュとは反対側に移動したリーシャも斧を振り回しながら、＞ミイラ男＜の活動範囲を狭めて行く。
そして、五体いた＞ミイラ男＜は、カミュの思惑通りに一ヶ所へと集められていった。

「メルエ！」

「・・・・・・ん・・・・・・・ベギラマ・・・・・」

カミュの掛け声にメルエが手に持つ＞魔道師の杖＜を掲げ、呪文の詠唱を行う。
メルエが振り下げた＞魔道師の杖＜の先から強烈な熱風が巻き起こる。
その熱風は、一ヶ所に集められた元『人』であった者達に、確実に着弾した。

ミイラ化し、完全に身体から水分を抜かれている者たちであり、更には長い時を経て来たため、包帯もかなり劣化している。
メルエの＞ベギラマ＜が巻き起こす炎の海に飲み込まれた瞬間、そ

の身体は勢いよく燃え上がって行った。

「・・・・・・あ・・あ・・・・・・」

唯一人、その光景を哀しげに見つめる人間。
それは、『人』を救うために旅出た者。
だが、そんな想いとは相反する『復讐』の炎を胸に灯す少女。
サラは、自分の中で生まれる葛藤をその燃え盛る炎の中に見ていた。

カミュとリーシャがサラとメルエの下に戻った時には、既に戦闘は終了していた。
激しい炎の中で悶えていた＞ミイラ男＜五体は、その身体を消し炭へと変化させる。
後に残ったのは何とも言えない臭いと、焼け焦げた包帯の様な残りカスだけだった。

「サラ、余り考え込むな。　私達は前へ進まなければいけない。
過去を護る彼等とは見ている先が違うのだ。」

「・・・・・・・はい・・・・・・・・」

呆然と燃えカスを見つめるサラの肩に手をかけたリーシャが語りかけるが、サラはどこか上の空の様な返答を返す。
そんなサラに溜息を吐きながら、カミュは歩き出す。

実際、目的であった＞魔法のカギ＜は入手したのだから、メルエの持つ＞リレミト＜の魔法で＞ピラミッド＜からの脱出をしても良かったのだが、今のサラの状態を考えると、危険を含んでいる可能性の方が高いため、歩いて出る事を考えたのだ。

カミュを先頭にメルエ、サラ、リーシャの隊列で出口へと戻って行く。

道中で魔物との戦闘は行うが、それにサラはほとんど参戦していなかった。
何かを考えるように俯き、決意をしたように顔を上げては、魔物を見て再び悩み出す。

そうやって歩いている途中、サラは突然床が無くなったような錯覚を起こす。

「　え！？　」

考えに没頭していたため、自分に起きた状況が掴みきれない。

しかし、それは錯覚ではなかった。
サラが踏み出した先の床は見事にまで消え失せていた。

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・」

バランスを崩し、そのまま落ちて行こうとするサラに気が付いたメルエがその手を掴んだ。
しかし、サラよりも体重の軽いメルエがサラの落下を食い止める事などできるはずがない。
重力に従い下へと落ちて行くサラと共にメルエも落ちて行った。

「メルエ!!」

そして、当然のようにそのメルエ服をリーシャが掴むが、加速の付いた二人を支えることは不可能だった。

「ちっ!?　メルエ！」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・スクルト・・・・・・・・」

落下の瞬間、舌打ちと共に叫ばれたカミュの言葉に反応し、メルエが唱えた魔法は、パーティーの守備力を上げるもの。
以前、＞シャンパーニの塔＜での落下の際に使用した方法を取った

のだ。

「・・・・・はぁ・・・・・」

落下を確認したカミュが、溜息を一つはいた後、三人が落ちて行った穴に飛び込んで行った。

ピラミッド？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

ピラミッド編、２話でも終わりませんでした。

果てしない・・・・

頑張って書いていきます。

ご意見、ご感想をお待ちしています。

ピラミッド？（前書き）

遅くなりました。
やっと更新です。

そして、気付けば、ユニークが４００００人を大きく超えていました。
本当にありがとうございます。

今回はかなり長めです・・・

ピラミッド？

アンリは玉座で呆けていた。
彼女の前には、跪く四人の人間。
先日、＞ピラミッド＜探索の許可を貰いに来たアリアハンの輩出した勇者一行である。

アンリがこの謁見の間に来る時に、呼びに来たのは祖母である老婆ではなかった。
若く優秀な女性文官。
幼い頃に父を魔物に奪われ、母と共に逃げている時に、この＞イシス＜を目指していたオルテガに救われた女性であった。

謁見の間についてアンリは驚愕の余り、声を出すことができなかった。
この１０年間、アンリの行動を束縛し、この国を思うがままに動かしてきた祖母が、近衛兵達に拘束され、喚いていたのだ。

そして、玉座の向かいに、頭に蒼い玉が埋め込まれたサークレットをつけた黒髪の青年が跪き、その後ろには、従者である三人が同じ姿勢で跪いている。

何よりもアンリを驚かせたのは、その『勇者』と呼ばれる青年の前に投げ出されている縄で縛られた二人の小汚い男たちだった。

「・・・・それで・・・・・この者達は・・・・・？」

ようやく絞り出したアンリの言葉は、震えている。
自分が十数年の間、胸の内に仕舞っていた物が開封されることを恐れて。
何より、自分の問いかけに対する『勇者』一行の答え次第で、自分が下さなければならなくなる言葉を恐れて。

このアンリの恐怖に関しては、まず、落とし穴に落ちた後のカミュ一行の行動まで遡る。

「・・・・ここは・・・・・・」

メルエの＞スクルト＜のお陰で、身に傷一つなかったサラがその場で立ち上がり、辺りを見渡す。その横にリーシャが立ち、そのリー

シャの腕の中にはメルエが抱きかかえられていた。

「・・・・・はぁ・・・・・・」

「・・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・・・・」

溜息の方向を見ると、上のフロアから穴を飛び降りて来たカミュが立っている。
リーシャの腕から下りたメルエが、カミュの傍へと駆け寄り、そのマントの血で染まっていない部分を掴む。

「ここはどこだ、カミュ？」

「・・・何度も聞くが、何故それを俺に聞く？　俺がこの＞ピラミッド＜に入ったのは、アンタと同じく初めてのはずだ。」

カミュの存在を確認したリーシャが、いつものように『わからないこと』をカミュへと問いかける。そんなリーシャに明らかな溜息を吐きながら、カミュは律儀に答えて行く。

「お前にも解らないのか・・・」

「・・・下を見てみろ・・・」

カミュですら分からないことに肩を落とすリーシャに、カミュは言葉をつなげる。
その言葉の指し示す、このフロアの地面に視線を向けたリーシャ達三人は、そこにあるものに驚き、声を上げる。

上のフロアと違い、明かりがついていないこのフロアでは、足元も暗闇に覆われていた。
そこに、カミュの持っている火をつけた＞たいまつ＜を向けると、自分達が今まで踏みしめていた物が、その全貌を現した。

人骨。
それは、フロアの地面一面に敷き詰められるように広がる、夥(おびただ)しい程の人骨だった。

「・・・・こ、これは・・・・」

「・・・王家の宝を狙って来た、墓荒らしのなれの果てだろう・・・」

サラが発した驚愕の言葉に、カミュが答える。
そして、その答えは、おそらく間違いはないだろう。

＞ピラミッド＜の上のフロアには様々な仕掛けがなされていた。
至る所に仕掛けられていた落とし穴。

宝箱に混ざった＞人喰い箱＜
そして、ボタンの謎。
おそらく、あのボタンを何の考えもなく押した者達は、このフロアへと落とされていたのだろう。

「・・・ここにある人骨は、魔物にやられたでしょうか・・・？」

「カ、カミュ！　も、もしかして、この者達はここから出ることが叶わずに朽ち果てた者達ではないのか？」

サラの疑問。
リーシャの推測。
それはあながち的外れなものではない。

ここに落とされるということはここに魔物が多数いる可能性が高く、また出口がない可能性も高い。それはカミュ達もまたここから出る事が不可能であることを示すものだ。

「・・・可能性はあるだろうな・・・メルエ、試しに＞リレミト＜を使ってみてくれ。」

「・・・試しに・・・？」

サラとリーシャの疑問に頷いて答えたカミュが、メルエに向けて発

した言葉にサラは首を傾げた。カミュの言葉の中にある『試しに』という言葉が引っ掛かったのだ。

『試しに』と言うことは、カミュの中では可能性が限りなく低いということに他ならない。サラは＞西の洞窟＜でメルエの唱える＞リレミト＜を体験している。

メルエの＞リレミト＜はしっかりと成功し、一行を洞窟の外へと運んだはずだ。

ならば、何故、メルエの魔法を疑うことを言うのかがサラには理解できなかった。

「・・・・・・メルエ・・・・・・・・できる・・・・・・・」

そんなサラの疑問はメルエの中にもあったのだろう。

若干頬を膨らまし、カミュを見上げるメルエの瞳がそれを語っていた。

「いや、別段メルエを疑っている訳じゃない。」

「・・・？？？・・・」

そんなメルエの瞳を受け、珍しく戸惑った表情を見せるカミュがメルエを見下ろしながら、自分の見解を話し出す。

「＞イシス＜の城にいた若い文官の話を覚えているか？」

「・・・もしかして、あの『魔法が使えないという場所』ですか？」

カミュが話し始めた内容に、仲良く首を傾げるメルエとリーシャ。
その横にいたサラが自分の感じた答えを話し始めた。

カミュは、首を傾げるメルエの肩に手を置いたが、同じく首を傾げるリーシャには、白い目を向け溜息を吐いた。

「・・・ああ・・・今まで歩いてきた部分には『魔法が使用できない場所』というものはなかった。　アンタに掛けてもらった魔法で俺が生きているのが証拠だろう。」

「　えっ！？　あ、は、はい！　」

『サラのお陰で生きている』
その言葉は、サラの胸を熱くさせた。
自分が成し得たことの大きさ、重さを噛みしめる事が出来たからだ。

「・・・ここにいる白骨の中には、魔法を使える者も居たはずだ。
それが＞リレミト＜を使用せずにここで朽ち果てている。　まぁ、＞リレミト＜自体を使えなければ仕方ないがな。」

「・・・ということは・・・どういうことだ？」

カミュとサラの話がいまいち理解できないリーシャは、再び首を傾げる。
そのリーシャを見て、メルエも首を傾げていた。
ただ、メルエの表情は困惑ではなく、笑顔ではあったが・・・・

「・・・歩いて出口を探るしかない・・・・そして、魔物と遭遇してもメルエの魔法は期待できないということだ。　それに、怪我をした場合も同様。　ちょっとしたものなら＞薬草＜で何とかなるが、死に直結するような怪我となれば、諦めるしかない。」

「　なに！？　メ、メルエ、本当に魔法が使えないのか！？　」

今やっと、カミュとサラの話の内容の端が見えたリーシャは、慌てた様子で、メルエへと声をかける。メルエも、カミュの物言いに再び頬を膨らまし、その手に持つ＞魔道師の杖＜を高々と掲げた。

「・・・・・・・・・リレミト・・・・・・・・・」

「・・・・やっぱり・・・・」

本来であれば、メルエの詠唱と共に、魔力で編まれた光が一行を包

み込むはずであったが、その光がメルエの杖から一向に出てこない。
それを見たサラは、カミュの予想が正しいことを知り、愕然とする。

「・・・・うぅぅ・・・・・・・・リレミト・・・・・・・・」

また杖が言うことを聞かなくなったことに唸り声を上げ、メルエは再び詠唱を行うが、結果は同じだった。
以前のように魔力の流れが解らない訳ではない。
魔力はしっかりと杖へと流しこんでいるはず。
それは、＞マホトーン＜にかかった時とは違う感覚だった。
まるで、自分の中から取り出した魔力を、周囲を取り巻く壁が吸い込んでしまったような感触。それがメルエを不安にさせた。

「・・・そんな顔をするな・・・メルエのせいではない。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

慰めるようなカミュの言葉に、哀しそうに頷いたメルエは、カミュのマントの中に入り込んでしまった。

「・・・そうだな。　元々歩いて入って来たものだ。　歩いて出るしかないな。」

「えっ！？　リーシャさんは、出口がないかもしれないという話を聞いていましたか？」

メルエの姿を見ていたリーシャが前向きな発言をするが、それを聞いて、サラは驚きの声を上げる。今まで、自分達の話していた内容を聞いていたのかと・・・

「き、聞いていたぞ！　だから出口を歩いて探すしかないと言ったのだ！」

「あ、い、いえ・・・すみません・・・」

軽口を叩いてしまったサラであったが、猛烈なリーシャの反論に、思わず謝ってしまう。
正確には、サラの方が正しいのだろう。
現に、リーシャの慌てた表情を見る限り、とても憶えていたと思えない。

「・・・はぁ・・・聞いていたとしても理解できなかったということか・・・・」

「　なんだと！！　」

サラとリーシャのやり取りに、いつものようにカミュが溜息を洩らす。
白骨が辺り一面に敷き詰められた場所で繰り広げられるやり取りは、どこか間の抜けたような、このパーティーらしいものだった。

「・・・それで、アンタはどっちに進めばいいと思う・・・？」

「あっ！　そ、そうですね。　こういう時こそリーシャさんですね！」

「そ、そうか？　う～ん・・・そうだな・・・右だろうな。　よし！　右だ。」

リーシャの怒りをさらりとかわし、カミュが発した発言に、サラも何かを思い当たり、リーシャに視線を向ける。
そんな二人の視線を受け、満更でもないような表情を作ったリーシャは、少し考えた後、一方を指差し、その方角を示した。

「・・・わかった・・・・」

「あっ！　お、おい！？　私は右と言ったはずだぞ！？」

リーシャの指し示す方角を見たカミュは、静かに頷き、歩き出す。

リーシャが指し示したものとは真逆の方角へと。

抗議の言葉を発するリーシャを余所に、当然のことのようにサラがカミュに続く。

メルエがリーシャを見上げた後に、その手を握って先を促す。

何か釈然としない想いを抱きながらもリーシャは歩くしかなかった。

歩いても、歩いても続く道。

しかも、地面には、その土の色が見えない程に白骨が敷き詰められている。

歩きにくい道を歩く度に削られていく体力。

そして、サラの予想通り、この場所には数多くの魔物が生息していた。

いや、正確には魔物ではなく、この＞ピラミッド＜の番人でもある＞ミイラ男＜であった。

メルエの魔法が使用できない分、カミュやリーシャが剣と斧を振るって駆逐していくしか方法がない。

しかも、魔法の使えないメルエという存在は、言い方は悪いが、戦

闘に措いて言えば『足手まとい』と言っても過言ではない。常にメルエを護る必要がある分、サラは積極的に戦闘に参加できない。

四体、五体と＞ミイラ男＜が出現する中、カミュとリーシャはお互いの背中を護りながら戦う以外方法はなかった。

「・・・ふぅ・・・もう何体目だ？」

「・・・さぁな、数えるだけ無駄だ・・・」

最後の一体を＞鉄の斧＜で吹き飛ばしたリーシャが、息を整えながら溢した言葉が、この地下で遭遇した魔物の数を物語っていた。

「メルエ、大丈夫ですよ。　この場所から出たら、また魔法は使えるようになりますから。」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

自分が『足手まとい』になっていることは、幼い子供ながらも理解しているのであろう。

カミュ達がそんな素振りを全く見せていないのにもかかわらず、戦闘を重ねるごとにメルエの気持ちは沈んでいった。

そんなメルエに声をかけるサラもまた、かなりの疲労感を見せていた。
足の踏み場もない程に敷き詰められた白骨の上を歩くのである。
必然的に、時間と共に脆くなった白骨を砕きながらの徒歩となる。

歩く度に、『バリッ』と音を立てて砕けて行く物。
それは、かつては『人』であった物のなれの果て。
それは、体力というよりも、サラの心から気力を失わせるような音だった。

「サラこそ、大丈夫か？　少し休むか？」

「・・・いえ、大丈夫です。　まず、ここから出ない事には・・・」

心配そうに声をかけてくるリーシャに対して上げたサラの顔は、血の気を失い、どこか虚ろな瞳をしていた。そのサラの表情に、休憩よりもここから出る事が先決であると判断し、リーシャは強く頷く。

その時だった。

「　えっ！？　きゃっ！　」

出来るだけ、白骨の上を歩かないように注意して歩いていたサラの片足が地面を踏み外した。急に襲ってきた浮遊感に驚きの声を上げたサラであったが、叫ぶ間もなく一行の前からその姿を消していく。

「サ、サラ！！」

「・・・・またか・・・・・」

慌てふためくリーシャ。
前を歩いていたカミュは振り返った後、再度起こった出来事に溜息を洩らす。

「・・・・・・・・・かい・・だん・・・・・・・・・・・・・」

サラが消えた場所に移動したカミュとリーシャに、メルエが地面を指差し、何かを伝えている。メルエの指差す地面を見ると、更に地下へと続く階段が見える。

白骨が敷き詰められ、その上に更に白骨が重なり、長い年月と共に薄い膜のようになっていたのであろう。それにサラは気がつかなかったのだ。

「サラ！　大丈夫か！？」

「・・・・・・はい～～～・・・・・・」

階段の下を覗き込んだリーシャの声に、地下からどこか間の抜けたサラの返答が返ってくる。木霊のようなそれに、メルエの瞳が輝いた。

「・・・・・・サラ・・・・・・・」

「は～～い・・・・いたた・・・・・」

いつもより若干大きなメルエの声にも律儀に返事をするサラ。
それが面白かったのか、メルエが笑顔でカミュに振り返る。

何が面白いのか。
何がメルエを笑顔にしているのかが理解できないカミュはメルエに反応を返す事が出来ない。しゃがみ込み、隣のメルエの肩に手を置きながら、階段の下を見つめた。

そんなカミュの反応に、表情を不満顔に変化させたメルエが可笑しく、サラの無事を知り、気の緩んだリーシャが笑顔を溢す。

「・・・・出口とは関係なさそうだが、行ってみるか・・・・・？」

「そうだな。　もしかすれば、出口に繋がる為の道なのかもしれない。」

「・・・・はぁ・・・・アンタがそう言うのなら、間違いなく関係のない場所なんだろう。」

「　なんだと！！　」

サラが下に落ちたにも関わらず、二人が話す内容はそれを心配している素振りはない。
それはサラを信用しているからなのか。
それともサラを心配する必要性がないのか。

メルエは、二人の掛け合いを不思議そうに見上げながら、それでも二人の醸し出す雰囲気に笑顔を浮かべていた。

「・・・・・・・・・いく・・・・・・・・・・・？」

「ん！？　あ、ああ、そうだな。　カミュ！　先に降りるぞ！　」

メルエが手を引くのに気付いたリーシャは、カミュに言葉を吐き捨て、そのまま階段を下りて行った。リーシャに奪われた＞たいまつ＜の光を失い、カミュの周囲を闇が支配する。
軽く溜息を吐いたカミュもまた、地下へと続く階段を下りて行った。

「サラ、大丈夫だったか？」

「あっ、大丈夫です。　少し、腰を打ちましたが、足に擦り傷ができたくらいです。　でも、ここもやはり魔法が掻き消えてしまいます。　＞ホイミ＜が使えませんでした。」

下に着き、照らした＞たいまつ＜の明かりがサラの顔を映し出すと、その安否をリーシャが確認する。

サラは階段を転げ落ちた時に、所々打ったのだろう。身体のあちこちを摩りながらも、今パーティーが抱えている問題となっている『魔法の使用の可否』についてを口にした。

「・・・この先に何があるか解らないが、とりあえず進んでみるしかないだろうな。」

「そうですね。　もし、何もなければ、またこの階段を登ればいいのでしょうし。」

サラの無事を確認し終えた後、カミュが＞たいまつ＜で照らし出された先を見据えながら口を開き、それにサラも同意する。
先程の落とし穴と違い、戻ることが可能な分、気持ちが楽なのだろう。

実際、一行の前に続く道は一本道であり、リーシャの意見を聞かなくとも、進むべき方向は明白だった。

別れ道のない迷路の様な通路を歩く一行の前には、予想と反して魔物の襲来はなかった。
実際、先程の階段を下り、このフロアに入ってから、魔物の姿は見ていない。
それは、死して尚、この建造物を包む王家の能力なのか。
それとも別の理由があるのかは解らないものだった。

「　こ、ここは・・・・」

「・・・す、すごい・・・」

歩いた先にあったものは、カミュの予想通りの『行き止まり』であった。
だが、この建造物の中で辿り着いた、数多くの『行き止まり』とは様相がまるで違う。

壁面に刻まれる古代文字。
古代文字と共に描かれている様々な絵画。
そして、中央に位置する場所には祭壇の様なものがあり、それを上った先には大きな棺が安置されていた。

「・・・王の棺か・・・」

カミュが溢した言葉通り、ここが＞イシス王＜の眠る場所なのであろう。
それが何代前の＞イシス王＜なのかは解らない。
しかし、ここが特別な場所であることは一目で分かった。

「カミュ！！」

「！！」

カミュとサラ、そしてメルエが祭壇を見上げていると、最後尾にいたリーシャの切り裂くような叫びが三人の耳を劈いた。

ボゴッ

カミュの足元から急に飛び出て来た腕。
それは、先程嫌という程に対峙した＞ミイラ男＜と同じような登場の仕方。
一ヶ所違うことと言えば、土の中から出て来た腕に巻かれている包帯の様な布の色が腐食したような色をしていることだった。

「メルエ！　私の後ろに。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

魔法が使えない今の状況ならば、メルエは戦う術がない。
誰かが護らなければ、メルエの身が危なくなることを理解しているサラがメルエを自分の後ろに隠すように立つ。

「カミュ！　一気に叩くぞ！」

＞鉄の斧＜を構えたリーシャは、その魔物との距離を詰めて行く。
少し前に遭遇した＞ミイラ男＜の時と同じように、動きが緩慢なその包帯を巻いた魔物に肉薄したリーシャは、渾身の力を込め、手に持つ＞鉄の斧＜を横薙ぎに振り抜いた。

ブン！

しかし、それはその魔物の胴体を斬り分けることはできず、数切れの包帯を宙に舞わせて空を斬る。
ここまで、様々な強敵を切り裂いてきた自分の斧に手ごたえが何もないことに驚いたリーシャではあったが、もう一度その魔物と対峙するために斧を構えなおす。

「　カミュ！　先程の『護り人』とは違うようだ。」

「・・・ああ・・・」

＞マミー＜
イシス王家に仕える兵士が王に殉じてミイラとなり、ピラミッドに埋められるのとは違う者達。それは、元々イシス軍の高官や、イシス国の英雄と呼ばれた者のなれの果て。
その者達は、生きたままの身体に包帯を巻きつけられ、王の遺骸と共にピラミッドに安置される。
長い年月を経て、気候や気温の影響を受けてミイラとなることの出来る者は、その中の一部。大抵の者は死に絶えた後に腐り、朽ち果てて行くが、この者達はその苛酷な条件を全て乗り越え、『生き仏』となった者。
一般の兵士達より、元々武力や頭脳が優れていた者達である。
その戦闘力は＞ミイラ男＜を遥かに凌ぎ、その動きも長い年月を経て来た者とは思えない程に機敏であり、生きたまま包帯をされ、長

い年月を掛けてミイラとなるため、その包帯はその過程で腐食した肉がこびり付き、どす黒い色を放っている。

「サラ！　メルエを頼む！」

「は、はい・・・・・で、でも・・・・何か、数が益々増えているようですが・・・」

リーシャの叫びに答えたサラは、リーシャと対峙している＞マミー＜の後ろの地面から次々と包帯で巻かれた腕が出てくるのを見て、声が震えはじめる。
サラの言うとおり、地面から次々に突き出された腕は徐々にその全貌を地上に出してくる。
それは、リーシャが対峙している＞マミー＜と同じ様な、生前その武勇を誇っていた者と、殉死している一般の兵士であった＞ミイラ男＜だけではあったが、その数はカミュ達四人の数倍の数に膨れ上がって来た。

突然の多数の来訪に、サラだけではなく、リーシャもカミュも驚きに目を見開く。
今まで、魔物の集団に襲われたことはあるが、このように突然その数を増やした事など一度もなかった。

『何故？』
カミュ達三人が疑問に思ったその答えは、意外な所から出てくることになる。

「・・・・・・・・・・・・・これ・・・・・・・・・・・・・・」

「メ、メルエ！　そ、それはなんですか！？」

サラの後ろに居たはずのメルエが、そのサラに向かって、何かを掲げて来たのだ。
それは、金色（こんじき）に輝く鉤爪のような物。
＞カザーブ＜の村の武器屋で見かけたが、誰一人興味を持たなかった＞鉄の爪＜によく似たものであった。

「なっ！？　メ、メルエ！　また私との約束を破ったのか！！」

サラの驚きの声に気づき、次々と現れる＞マミー＜や＞ミイラ男＜を牽制しながらサラの下に戻ったリーシャが、鋭い声をメルエに向ける。
同じように戻ったカミュもまた、リーシャと同じ事を考えていたようで、メルエに向かって厳しい視線を送っていた。

「・・・・・・・」

しかし、いつもならリーシャの怒声や、カミュの厳しい視線に眉を下げて俯くメルエであるが、この時は違っていた。

『むっ』としたように頬を膨らませ、首を横に何度も振る。
それは、幼いメルエなりの否定。
自分は約束を破ってもいないし、カミュの言葉を軽く考えてもいないという主張。

「・・・・・・・・おち・・・てた・・・・・・・・・」

「落ちていただと!?　メルエ、嘘をつくなら、もう少しましな嘘をつけ。」

メルエが発した言葉を受けたリーシャは、その信憑性の低さに愕然とし、メルエを窘めるような言葉をかけるが、当のメルエの頬は一段と膨れ上がった。

「・・・・・・リーシャ・・・・・・・・嫌い・・・・・・・・」

「なに!?」

『ぷいっ』と横を向いてしまったメルエが口にした言葉は、いつもはサラが受ける言葉。
その言葉を初めて受けたリーシャは、何か言い表せない程の不安が胸に湧き上がる。
包帯を巻いた魔物達が徐々にカミュ達との距離を詰めて行く切羽詰まった状況にそぐわない和やかな雰囲気が流れるが、その雰囲気を

カミュが打ち砕いた。

「メルエ！　それはどこで見つけた！」

「！！・・・・・・・あそこ・・・・・・・・」

カミュの鋭い声に、膨らませていた頬を萎ませてメルエが指し示した場所は、棺へと続く祭壇の麓。そして、今まで棺に気を取られて気がつかなかったが、大きな棺の脇に小さな宝箱が口を開いている。

「おい！　俺とコイツで敵を防ぐ。　その間にアンタはメルエを連れて、あの祭壇の上にある宝箱の中に、それを戻して来い！」

「わ、わたしですか？」

「アンタ以外に誰がいる！」

「は、はい！！」

思いがけない大役に、瞬時に疑問を口にしてしまったサラであったが、その自分を信用しているような、以前のカミュであれば考えられない言葉に、決意を込めた表情に戻り、力強く頷いた。

「カミュ、あれは何だ？」

「・・・おそらく、『王家の宝』だろう。　王家の棺があり、その横に安置されているのだから、王の復活に必要な物とされているはずだ。　それを手にし、盗み出そうとする者には『護り人』達が立ち塞がる。」

カミュとリーシャに近づいてくる『護り人』と呼ばれる元武人達から目を離さずに呟くカミュの言葉に、リーシャの表情が引き締まって行く。
これからは、魔物対人間の闘いではない。
お互いの存在意義と誇りを賭けての戦い。
それをリーシャは察したのだ。

「・・・王の亡骸に、王の秘宝。　それを護る番人か・・・カミュ！　ここが正念場だ！　足を引っ張るなよ！」

「・・・はぁ・・・アンタこそ、容易く魔法に翻弄されないように気を付けてくれ・・・」

後ろのメルエとサラが祭壇に向かって駆けだす気配を感じたリーシャとカミュは、お互いに憎まれ口を叩き合いながらも、その表情に皮肉気な笑みを浮かべ、迫り来る＞マミー＜と＞ミイラ男＜に向か

って己の武器を構えて突進していく。

「メルエ！　その『爪』をしっかりと持っていて下さいね。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

祭壇に向かって駆けだしたサラとメルエであったが、そう簡単に王が眠る場所には近寄ることはできない。メルエの手を引くサラの前の地面から二つの腕が突き出され、地面から一体の＞ミイラ男＜が出現する。それが、＞マミー＜でないということや、一体であるということは、サラの運なのか、それともメルエの運なのか。

しかし、本来、戦闘を魔法主体で行う二人にとって、魔法が使えない今の状況では＞ミイラ男＜一体であろうと強敵であることに間違いはない。

ましてや、サラは背に付けている＞鉄の槍＜での戦闘も可能であるが、幼いメルエは武器によって魔物と対峙できる能力など皆無である。

つまり、これは、サラと＞ミイラ男＜の一対一の戦いとなるのだ。

「やあ！」

背にある＞鉄の槍＜を構え、その槍を＞ミイラ男＜に突き出す。
サラの突き出した槍は、＞ミイラ男＜の左腕に突き刺さる。
しかし、動く屍となっている＞ミイラ男＜に痛覚等存在しない。
槍の突き刺さった左腕を大きく振るうことで、サラの槍を己の身体から抜き去った。

未だにサラの胸には、元『人』であった者に刃を向ける事に若干の抵抗があった。
しかし、それ以上に、サラの中にある『誓い』の方が重きを成していたのだ。

サラは、あの＞アッサラーム＜での夜、一人静かに眠るメルエの髪を梳きながら、『メルエを護る』という誓いを月夜に立てたのだ。
もし、ここで、サラがこの＞ミイラ男＜への攻撃を躊躇し、相手の攻撃によって倒れるようなことがあれば、被害はサラだけではなくメルエにも及び、戦う術のないメルエはその命を落としかねない。

メルエに約束したわけではない。
しかし、サラの中の『誓い』はすでに自分の中だけのものではないのだ。
メルエに危害が及べば、それはサラの『誓い』を破ることになる。
サラの中で、それは約束を破ること。
つまり、メルエに嘘を吐いたことになる。

『メルエには嘘をつかない』

それは、サラの中での決め言。
大人の嘘を数多く聞いてきたであろうメルエに信用してもらうためというのがキッカケではあったが、今はそれがサラの誇りになりつつある。

「大丈夫です。　メルエは私が護ります。」

メルエに『大丈夫』と言えば、サラには『大丈夫』にしなければいけない責任が発生する。
そして、それを遂行する程、メルエの中でサラの『大丈夫』の信用度が増していく。

『サラが大丈夫と言えば、絶対に大丈夫。』
そうメルエに思われることが、サラにとって誇りになりつつあったのだ。
サラの瞳に『決意』と『覚悟』の炎が灯る。

「　やあ！　」

再度突き出した槍は、先程貫いた場所より若干下に位置する＞ミイラ男＜の腋部分に突き刺さる。そして、＞ミイラ男＜が動き出す前に、サラがもう一度動いた。

「　ふん！　」

突き刺さった槍を、力一杯に上部へと引き上げる。
鋭利な矛先は、水分を含まない乾いた＞ミイラ男＜の左腕を斬り飛ばした。
サラの槍が指し示す方向へと、弾き上げられた乾いた腕は、数度回転し、地面へと落ちて行く。

「　えっ！？　きゃぁぁぁ！　」

「・・・・・・・サラ・・・・・・・・・」

しかし、痛覚のない＞ミイラ男＜にとって、腕がなくなった所でその動きを止める程のことではない。事実、サラが斬り飛ばした部分から、生きている者の証である血液が流れ出ることはなかった。

左腕を斬り飛ばされたことに、見向きもせず、＞ミイラ男＜は残る右腕を振り抜き、サラの身体を殴りつけたのだ。意表を突かれ、その拳をもろに受けたサラの身体は、メルエから離れてしまい、床に倒れ込む。
その手からは、＞鉄の槍＜が離れてしまい、唯一の武器すらも失くしてしまった。

床に倒れ込んだサラの方向に身体を動かし、ゆっくりとサラに近づいてくる＞ミイラ男＜。
その距離を考えると、床に落ちた槍を拾い上げる暇はない。
サラは、必死に状況の打破の為の策を考えるが、経験の少ないサラにそれは酷なことだった。

ポコッ

ポコッ

その時、サラが見上げる＞ミイラ男＜の後部から、何とも頼りない打撃音が聞こえて来た。
非力な力で壁を叩くような音。

メルエである。
自分の力では、打撃等の攻撃で敵に傷一つ与えられないことをメルエは知っていた。
故に、戦闘となれば、魔法が使える状況でも、忠告通り誰かの後ろに控えていたのだ。
魔法が使えなければ、自分が何の役にも立たないことを一番理解していたのは、他ならぬ、この幼き少女なのだ。

「・・・・・・・」

そんな少女が、非力な力を振り絞り、手に持つ＞魔道師の杖＜で＞ミイラ男＜の背を叩いていたのだ。頼りない音を発しながら。

サラが『メルエを護る』という誓いを立てたのと同じように、メルエもまた『サラを護る』と、あの＞アッサラーム＜へと向かう途中の森で誓ったのだ。

それは、サラにとっては幼いメルエが感じた事をただ口にしたようにしか聞こえなかったかもしれない。しかし、メルエの中では、それこそメルエとサラの約束だったのだ。

故にメルエは、サラに危害を及ぼそうとする＞ミイラ男＜を必死で叩く。

『いつも護ってくれるカミュやリーシャ、そしてサラの様に自分もサラを護るのだ。』と。

そのメルエの攻撃は、哀しいかな、＞ミイラ男＜の注意をメルエに向ける程の効果しかなかった。それは、メルエに危害が及ぶということ。

そして、サラの『誓い』が果たせないということ。

「やあ！！」

しかし、リーシャの虐待にも近い鍛練を受けて来たサラにとって、その小さな隙は十分過ぎる程の大きなものであった。

床に転がる＞鉄の槍＜を拾い上げ、その矛先を目の前で身体を捻っている者の首目掛けて振り切る。繰り返される鍛練の結果生み出されたサラの一撃は、寸分の狂いもなく＞ミイラ男＜の首筋に吸い込まれていく。

鋭利な矛先が食い込んだ、＞ミイラ男＜の首は、綺麗に落ちて行った。

ミイラとなることで、その身体を支える骨も脆く、サラの力でも容易く斬り落とすことができたのだ。

「メルエ！　こちらに！」

元々が死体なだけに、首を落とした所で活動を止めるとは限らない。
首が落とされたことで、今は動きが止まっている＞ミイラ男＜を確認し、サラはメルエを自分の後ろへと再度誘導する。

「やあ！！」

メルエが移動したことを確認したサラは、手にした槍を再び＞ミイラ男＜へと突き入れる。
動かない相手にすんなりと突き刺さった槍を、横薙ぎに振るい、その胴体を切り裂いた。

首もなくなり、腰から二つに分かれてしまった＞ミイラ男＜に、もはや戦う力など残ってはいなかった。その身体は、長い間囚われていた『呪い』が解かれ、崩れて行くように土に還って行く。

「・・・ふぅ・・・メルエ、ありがとうございました。」

「・・・・・・ん・・・・・・・・メルエ・・・・・・サラ・・・・・・護る・・・・・・」

土と同化していった＞ミイラ男＜を見届けたサラは、先程懸命にサラを護ろうとした幼い少女に頭を下げる。サラの謝礼を受け取ったメルエは、若干胸を張り気味で杖を掲げた。
その行為がとても頼もしく、とても可愛らしく、サラの頬は自然と緩んで行く。

「さあ、メルエ。　早くそれを箱に戻しましょう。」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

和やかな空気が漂いかけたが、後方から聞こえるリーシャの声に気を取り直し、メルエの手を引き祭壇を上り始める。
後方では、リーシャの声と、敵を吹き飛ばす盛大な音。
そして、カミュの振るう剣の風切り音と斬り飛ばされた『護り人』達の呻き声。

自分達に託された仕事をやり切るために、後方を振り返ることなく、サラとメルエは大きな棺の乗る祭壇を駆け登った。

祭壇を登りきり、大きな棺の横をすぎると、二人の前に大きく口を開いた宝箱が見えて来た。その宝箱は、ここまでの道程で見て来たものとは明らかに違う装飾がなされていた。
長い年月が経っていても、その装飾が褪せることはなく、丁寧に彫り込まれた紋章が見る者を魅了する。言わずと知れた＞イシス王家＜の紋章である。

口を開いた宝箱の中には、もはや原型は留めていないが、遥か昔は

とても高価な布であったであろう物が敷き詰められ、傍には同じような布が落ちている。
おそらく、今メルエが持つ、この黄金（こんじき）に輝く爪を包んでいた布なのであろう。

「さあ、メルエ。　それをこっちに。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・」

手を広げるサラに、メルエは大事そうに抱えていた物を手渡す。
手渡された宝を、傍に落ちていた布で慎重に包み、サラは宝箱の中に納めて行く。
しっかりと納まったことを確認し、メルエも頷いたことを見届けると、サラは丁寧に宝箱を閉じた。

カミュとリーシャにも限界が近づいていた。
斬っても斬っても、次から次へと湧いてくる『護り人』と称される者達。
一体何人の人間がこの＞ピラミッド＜に埋め込まれているのか。

その疑問すら湧いてこない程に、カミュとリーシャは無我夢中に己の武器を振るっていた。

それでも、カミュとリーシャは『人』。
いくら鍛練を積んだとしても、『人』である以上、体力にも限界がある。
ましてや、回復魔法すら使えない状況なのだ。

自然と、致命傷を避けようと神経を使うこととなり、通常では有り得ない程に擦り減らしていく。そして、それが『疲労』として蓄積されていくのだ。

「く、くそ！　カミュ！　大丈夫か!?」

その右腕を上げ、肉薄してきた＞マミー＜の首を斧で吹き飛ばしたリーシャがカミュの姿を横目で捉え、その安否を確認しようと声を張り上げる。

「・・・・・限(きり)がないな・・・・・」

＞ミイラ男＜の横合いの攻撃を、左手に持つ＞うろこの盾＜で防ぎ、前にいる＞マミー＜を袈裟斬りに斬り伏せたカミュは、倒れゆく＞マミー＜の後ろに見える多数の『護り人』の数に言葉を吐き捨てた。

「　弱音は聞かんぞ！　お前の考えが何なのかは解らないが、お前

はサラとメルエに何かを託したのだろう！？」

更に近寄る二体の＞ミイラ男＜を斧で吹き飛ばし、リーシャはカミュを振り返る。
その瞳には、疲労は見えるが、諦めは見えない。
未だに赤々と燃える炎は、カミュの目にも頼もしく映った。

「ならば、私達に出来ることは、サラとメルエがそれを成す時間を稼ぐことだ。あの二人ならば、必ずやり遂げてくれるさ！」

「・・・・本当に・・・・・・アンタはどこまで変わるつもりだ・・・・？」

いつものカミュの様に口端を上げて叫ぶリーシャの言葉に、反対にカミュは苦笑を浮かべ小さく呟く。その心に何が浮かんでいるのかは、すでにカミュから視線を外したリーシャには解らない。

そんな二人が、再び気を引き締め直し、前にそびえる『護り人』の壁に向かって、それぞれの武器を構え直した時、変化は訪れた。

「・・・おい・・・カミュ。　どういうことだ？」

「・・・はぁ・・・アイツ達を信じて、時間を稼いでいたんじゃなかったのか？」

今まで、カミュ達に群がって行くように、にじり寄って来ていた『護り人』達の動きが止まったのだ。何か操作をしていた糸が引っ掛かったように動かなくなった＞マミー＜達に疑問を呈すリーシャ。しかし、その疑問は、先程リーシャが発した言葉とは矛盾するようなものであり、カミュは思わず溜息を吐いてしまった。

「　どういうことだ！？　」

「・・・メルエ達が、あの国宝を無事元に戻してくれたんだろう。王家の宝が元に戻り、盗まれる心配がなくなれば、『護り人』の役目も終わる。」

動かなくなった＞マミー＜達から視線を外し、再度説明を求めたリーシャに、呆れたような表情を浮かべながらも、カミュが現状を話し出した。

カミュの言葉が終わりを告げるのを待っていたかのように、あれ程広間を覆い尽くしていた『護り人』達が土へと還って行く。まるで時間を巻き戻したようにその姿を消していく『護り人』達を呆然と眺めていたリーシャであったが、この原因を作ってくれた二人の安否を確かめるため、視線を祭壇の上に移す。

「　サラ！　メルエ！　」

そこで目にした物は、メルエを後ろに庇いながら目の前にある物を見上げるサラの姿であった。瞬時にサラとメルエの名を叫び、祭壇へと駆け出すリーシャを追って、カミュもまた抜き身の剣を片手に祭壇の上へと駆け出した。

メルエの見つけた『王家の宝』を元通りに安置し終えた二人は、祭壇の下で繰り広げられている死闘に視線を移す。

しばらくは剣を振るっていたリーシャとカミュであったが、突如剣を振るう相手の動きが止まったことにより、武器を下ろした。

そのまま土へと還って行く『護り人』達を見て、自分達がカミュから与えられた仕事を全うできたことを知り、サラはメルエの手を取って喜びを露わにする。

そんなサラの姿に、自然とメルエの表情にも笑みが浮かんだ時、二人の後方から不穏な音が響いた。

「サラ！　どうした！？」

大きな棺を見ながらメルエを背に隠していたサラに、リーシャが駆け寄る。
サラが身体を強張らせて見上げる棺の方に、リーシャが視線を移した頃には、カミュもその場に到着していた。

「・・・あ・・・ああ・・・・」

「なに？　何を言っているんだ？」

リーシャの問いに、言葉を発することすらできないサラの指差す方向に全員の視線が集まる。そこにあるのは少し開きかけた大きな棺。

そう。
開きかけているのだ。
奇妙な音を立てながら、その棺がゆっくりと開いて行く。

「・・・・メルエ・・・・」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

警戒したカミュの呼びかけに、素早く反応を返したメルエが、カミュのマントの裾を握り、カミュの後ろへと移動する。
リーシャも、震えるサラを後ろに庇い、訪れる何かに対処するために身構えた。

ガゴンッ

「・・・・??・・・・」

棺は完全に開いた。
しかし、サラが考えていたような事は何も起きない。

棺の蓋は天井に向けて大きくその口を開くが、中から何が出てくる訳でもなかった。
その現象が予想外だったメルエは、不思議そうに棺を見つめ、小首を傾げている。
先程まで、声も震えていたサラもまた、自分の予想が覆されたことによって、口を大きく開いたまま固まっていた。

「・・・カミュ・・・？」

「・・・・ふぅ・・・・ここで待っていてくれ。」

リーシャの問いかけに、一息溜息を吐いたカミュが、棺へと近づい

て行く。
『危険だ』と止めようと考えたリーシャであったが、この棺を背にして歩くことの方が危険である可能性が高く、いつでもカミュの傍に駆け寄れるように、サラとメルエを背に護り身構えた。

カミュが剣を構えながら棺へと慎重に近づき、大きな蓋の中を覗き込むように見ると、そこには更に予想を大きく外した物が入っていた。

「おい！　カミュ！　大丈夫なのか？」

「・・・・少し手伝ってくれ・・・・・」

中の様子を問いかけるリーシャに対し、返ってきたカミュの答えは、少し呆れた雰囲気を滲ませたものだった。
それが、リーシャとサラ、そしてメルエの表情に困惑を浮かべさせる。

恐る恐る近づくサラ。
その様子を見て、リーシャの後ろに隠れながら近づくメルエ。

再び深い溜息を吐いたカミュが、棺の中から何かを引き摺り出す。
その行為に、サラは悲鳴を上げた。
まさか、カミュが棺の中にある王族の遺骸を引き出すとは思わなかったのだ。

「サラ。　何を考えているのかは解るが、違うようだ。」

「え!?・・・・・『人』ですか・・・・・？」

悲鳴と共に目を瞑ろうとするサラに、リーシャの優しい声がかかる。
その言葉に、瞑りかけた目を再び開き、カミュが引き摺り出すものを確認すると、それはサラの言うとおり、『人』らしき影であった。

「　カミュ！　生きているのか？　」

「・・・・さあな・・・・あと二人入っている。」

一人を引き出し、祭壇に寝かせたカミュは、再び棺の中へと手を差し入れた。
カミュの言葉に、急ぎリーシャも棺に近づき、カミュの掴んだ物を引き出す為に棺の中へと手を差し入れる。

棺から出て来た者は、全部で三人の男。
着ている物は、粗末な物。
決して裕福とは言えない生活をしているのか。
それとも、明るい表の道を堂々と歩くことの出来ない事を生業にしているのか。

「・・・・・二人は気を失っているだけだと思いますが・・・・・一人は・・・・・」

「・・・そうか・・・」

引き出された男の状態を見ていたサラであったが、二人の息があることは確認できたが、残る一人は呼吸も止まり、身体も冷たく冷え切っていた。
それは、『死』を意味するもの。
その答えを聞いたリーシャは、少し目を伏せる。

「とりあえず、息のある二人を起こさない事にはここから出ることも叶わない。」

「そ、そうだな。　サラ、少し退いていてくれ。」

現状を冷静に話すカミュの言葉に、一度頷いたリーシャは、サラのサラの下げて男達の上体を起こし、後ろから羽交い絞めにするよう

な態勢を取る。

「　ふん！！　」

「　ごっ！　ごほっ！　」

そのまま、軽い衝撃を背に与えると、静かに眠っていた男が咳込、意識を覚醒させる。
その男を解放し、リーシャはもう一人の男にも同じ事をする為に背に回り込んだ。

「いやぁ、助かった。　突然、大量の魔物達に襲われて、棺に押し込まれた後は記憶がなくてよ。」

「すまねぇな。　ありがとうよ。」

意識を取り戻した男達は、今、カミュ達の前で地面に擦りつけるように頭を下げている。
それを、胸を撫で下ろすように見るサラ。
不思議な生物でも見るような視線を送るメルエ。
何か不穏な空気を感じ取り、苦虫を噛み潰したような表情を作るリーシャ。
そして、引き出した張本人であるカミュは、とても冷たい無表情を貫いていた。

男達が押し込められていた棺の一番下には、王家の紋章の入った小さな黄金の棺が納められていた。おそらくそれが本当に＞イシス王＜だった者の眠る棺なのであろう。
彼等を襲った＞マミー＜や＞ミイラ男＜は、王の復活の為の血と肉になるように、王の財宝を狙う者を生贄として捧げていたのかもしれない。

「それで、お前達はここで何をしていたんだ？」

「あ？　そりゃ、アンタ達と一緒さ。」

自分の問いに口を開いた一人の男の答えに、リーシャは露骨に顔を顰めた。
唯でさえ、仲間であるはずの男の死に対して、それほど感情を出さないこの男達にリーシャは良い感情を抱いてはいなかった。
それに合わせ、『魔王討伐』という栄誉ある命を受けている自分達

を盗賊紛いと一緒に扱われたことが、リーシャの頭に血を上らせる。

「リ、リーシャさん、落ち着いて下さい！」

「・・・・・リーシャ・・・・・・ダメ・・・・・・」

背に戻していた＞鉄の斧＜に手をかけたリーシャに、サラが慌てて声をかける。

それと同時に、メルエがリーシャの足にしがみ付いた。

幼いメルエですら、リーシャが何をしようとしているのかが解っていた。

そして、今リーシャがやろうとしていることが、＞シャンパーニの塔＜で教わった、『人』が忌み嫌うものであることを思い出し、リーシャを止めに入ったのだ。

「・・・・悪いが、俺達は王家の財宝目当てで入って来たのではない。」

正確には、カミュの発言は嘘である。

『魔法のカギ』という＞イシス国＜の国宝を欲して入って来たのだから、実際は目の前にいる盗賊と同じなのかもしれない。

「・・・じゃあ・・・はっ！？　お前達、まさか『追手』か？　くそ！　あのババア、まだしつこく追手なんかを寄越してきやがるの

か！」

「お、おい！」

カミュの半ば嘘に近い発言に、男の一人が過剰な反応を示す。
もう一人の男に窘められるが、＞イシス＜の内情を予想していたカミュ達には十分過ぎる情報だった。

「・・・詳しく話してもらおうか・・・・」

カミュの表情が更に冷たいものに変わって行く。
それは、横にいるサラに恐怖を思い出させる程のもの。
＞シャンパーニの塔＜で見た、『人』を人と思わない行為を行った時と同じものだった。

「は、はん！　何故、アンタ達に話さなきゃならない。」

「・・・話さないのなら、俺達の帰路に邪魔になるだけである以上、ここで殺していく。」

「カ、カミュ様！」

先程、仲間の失言を窘めた方の男が、カミュの威圧感に若干怯みながらも反論を返してくる。それに対するカミュの言葉は、そのまま実行に移すことが容易に想像できる程の冷たい声色。サラは、恐怖の余り、カミュの名を叫んでしまう。
それが、男の余裕を取り戻す。

「殺すなら、殺せばいい。　どうせ、話したとしても待っているのは『死』だ。　アンタ達が何者であろうと、俺達が話をするメリットがねえ。」

「　貴様ら・・・・」

男の物言いに、リーシャは更に頭に血を上らせるが、カミュは男の目を見て、気が付いた。
この男達も、数多くの修羅場を経験してきたのであろう。
歳の頃は、カミュどころか、リーシャの倍は生きているような姿。
カミュ達の予想が正しいのであれば、大罪を犯した者達である。
それなりの度胸と肝は座っているのであろう。

「・・・わかった。　とりあえずは、＞イシス＜に連れて行く。
その上で、お前達が犯した罪を告白しろ。　それが確認できれば、お前達の助命を口添えしてやる。」

「・・・カ、カミュ様・・・」

「へっ！　口では何とでも言えるさ。　俺達が、アンタを信用する理由がねえ。」

カミュの譲歩は、サラには予想外だった。
まさか、盗賊の助命を図るとは、誰が予想できたであろうか。
これには、リーシャも開いた口が塞がらなかった。

「・・・別に信用しろとは言わない・・・唯、言っておくが、俺はお前達を＞イシス＜に連れて行く。　それでも話さないのであれば、適当に罪をでっち上げるだけだ。」

「ああ？」

「・・・別段、お前達の罪が何であろうと、俺には関係がない。
王家の秘宝を狙ったものだとしても、王族の遺骸に触れたという罪だとしても・・・それこそ、先代女王の殺害だとしてもだ。」

「「　！！　」」

男達二人は、目を見開いた。
男達は、カミュが言う『話せ』という内容を履き違えていたのだ。
それは、『何をことなのか解らない』というものではなく、『何について言っているのかは解っているが、確認させろ』ということだ

ったことに初めて気が付く。

『コイツ達は、自分達の＞罪＜を知っている』

その想いが、男達の胸の中で大きな不安として生まれた。

「・・・・わかった・・・・約束は守れ。　俺達は、＞イシス国＜で話をする。　アンタは俺達の助命を女王に掛け合う。　それでいいな？」

「・・・・・ああ・・・・・・」

地べたに座っていた男は、カミュの目を見上げ、真剣な眼差しでその冷たい目を見つめる。

その視線を真っ向から受け止めたカミュは、しばらく後にしっかりと頷いた。

「　おい！　カミュ！　どういうことだ？　まさか、コイツ達は先代の女王を殺害した者達だとでも言うのか？」

「・・・・その、まさかということです・・・・」

状況を把握しきれていないリーシャは、カミュへ半ば怒鳴り声にも近い声を上げるが、それに答えたのは、横で呆然とカミュを見ていたサラだった。

サラにしては青天の霹靂のような出来事が起こっている。
口を開き、リーシャの問いに答えてはいるが、視線は虚ろで、人形のように立っているだけだった。

「・・・ふっ・・・あはっ・・・あはははは！」

「リ、リーシャさん!?」

「　!!!　」

その時、呆然自失なサラの答えを聞いたリーシャが突然、大声を出して笑い始めた。
今の話の内容に、笑う部分など何一つなかったはずだ。
それなのに、リーシャは、本当に面白い事でも聞いたように、大声で笑い出す。
そんな場違いな大笑いに、サラは我に返り、驚いたメルエは、リーシャの後ろからサラの後ろへと大慌てで移動していった。

「あはははは！　カミュ！　お前は間違いなく『勇者』だ！　あはははは。　誰が何と言おうと、お前がどれ程否定しようとも、お前こそが『勇者』だ！」

「・・・・何を・・・・・？」

突然笑い始めたリーシャを奇妙な物でも見るように振りかえったカミュに、リーシャがその笑いの理由を話し出す。
しかし、それはリーシャにしか解らない。
サラもメルエも不思議な物を見るようにリーシャを見ている。

しかし、リーシャの中では確固たる理由なのであった。
アリアハンからここまで、カミュと共に旅をしてきた。
その行く先々で色々な問題があった。

そして、それは色々な人間の手助けを得て、乗り越えて来た。
リーシャは今まで、それはたまたまだと思っていた。
今、救いだした人間が、大罪を犯した者達であるという事実を知るこの時まで。

「であれば、一刻も早くここを脱出しよう。」

しかし、それは違った。
リーシャが偶然と考えていたことは、数が多すぎる。
偶然も重なれば、それは必然になる。
カミュがいなければ、おそらくリーシャ達はアリアハン大陸すらも出ることはできなかっただろう。
そして、＞ノアニール＜を救うことも。
いや、まず第一に、メルエを救うこともできなかったはずだ。

そして、この＞ピラミッド＜でも。
＞イシス＜到着があと一日早かったら。
もし、あの時リーシャを庇ってカミュが傷つかなかったら。

もし、サラが足を踏み外さずに、落とし穴にも落ちなければ。
そして、再びサラが下へと続く階段を落ちて行かなければ。

そんな様々な偶然が重なった結果、今ここにリーシャ達はいる。
それは、カミュが『勇者』故の必然だったのではとリーシャは思ったのだ。

「・・・脱出するも何も、落とし穴を上らない限り、ここからが出られないのでは・・・？」

「はぁ？　アンタ達、落とし穴を落ちてきたのか？」

上機嫌なリーシャの言葉に難点を告げるように呟いたサラに、今尚、地べたに座る男がさも不思議そうに言葉を発した。

「　お前達は違うのか！？　」

「外からこの上のフロアに入る階段があっただろう？」

それは、カミュ達にとって救いの言葉となった。
もし、ここの上のフロアから直接外へ出る階段があるのだとすれば、これ程嬉しいことはない。

リーシャに言わせれば、それもまたカミュが『勇者』である為に起

きた必然なのかもしれない。

遺体となった男は、心苦しいが、そのまま放置することにした。
遺体を担いで抜ける事が出来る程、カミュ達に余裕はない。
ましてや、度胸と肝は座っているが、実力的にはカミュやリーシャの足元にも及ばないであろう足手まといを二人も増やしたのだ。

二人の男を立ち上がらせ、王の棺の眠る部屋から一歩出たその時、カミュ達は驚きで言葉を失った。

目の前には敵の山。
＞マミー＜や＞ミイラ男＜の大群が通路を覆いつくすように群がっていたのだ。

「　カミュ！　どうする!?　」

「・・・俺が一気に駆け抜けて、道を開く。　アンタは最後尾で他の人間を護りながら走ってくれ・・・・」

背中から斧を取り、身構えたリーシャの問いかけに、少し考えた後カミュが強行突破という危険な策を口にした。
強行突破は、成功率も低く、そしてリスクも大きい。

とても危険な賭けとなってしまう。

「わかった。　サラ！　メルエの手を引いて、合図と同時にカミュの背中だけを見て駆けろ！　メルエ！　サラの手を絶対に離すな！」

「　はい！　」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

しかし、方法が今はそれしかない。
リーシャもカミュも、先程の戦闘で、思っていた以上に疲労している。
ここで、無数に出現する『護り人』達を相手に出来る程の余力がある訳ではなった。

「　お前達も死にたくなければ走れ！　」

「「　わ、わかった！　」」

リーシャは、横にいる盗賊達にも声をかける。
リーシャの中で、この盗賊達は正直どうでもよかった。
冷たい言い方かもしれないし、残酷かもしれない。

しかし、リーシャの中では、サラやメルエの方が重要度は遥かに高い。
サラやメルエが『護り人』に捕縛されそうになれば、身を挺して護るつもりではあるが、この盗賊達が『護り人』達に囲まれようと、その時は見捨てるつもりだったのだ。

「・・・行くぞ・・・」

「はい！」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

カミュの小さな呟きに、サラは大きく返事をし、メルエも大きく頷いた。
更に後ろを見ると、リーシャも真剣な目で頷く。
そして、その少し前で佇む男二人も、怯えた目を向けながら何度も首を縦に振った。

「走れ！」

視線を前に向けたカミュが、珍しい程の声量で全員に向け、一気に駆けだす。
カミュが一歩を駆けだしたと同時に、サラがメルエの手を引き、メルエのスピードを気遣いながら走り出す。

その後ろを盗賊二人組、そして、その後ろを男二人がメルエを追い抜かしたり、突き飛ばしたりしないように睨みを効かせながら、リーシャが斧を構えて走り出す。

「メルエ！　その僧侶の手を離すな！」

「・・・・・・・・・」

カミュは、前方を囲むように立つ＞マミー＜を剣を振るうことで弾き飛ばし、伸ばしてくる＞ミイラ男＜の腕を、返す剣で斬り払う。
その奮闘によって開けた道をサラとメルエは必死に駆けた。
カミュが弾き飛ばした『護り人』が態勢を立て直す前に、その道を駆け終わらなければならない。それは、幼いメルエには過酷なことだった。
サラの手を握り、懸命に足を動かすが、土台となる足の長さがまるで違うのである。
次第に、メルエの手が引き千切れないようにサラのスピードが落ちて行く。

「サラ！！　メルエは任せろ！　今はカミュを目掛け、懸命に走れ！」

突如、サラの横から声が聞こえたかと思うと、自分の手からメルエの手が離れてしまったことに驚き、声の方向に視線を動かす。
そこには、メルエを抱き上げたリーシャが前を向いて走っていた。

「は、はい！」

「・・・・・・ごめん・・・なさい・・・・・・・・」

「ふふっ。　メルエ、しっかり口を閉じていろ。　舌を噛んでしまっても知らないぞ。」

リーシャの顔を確認し、サラは大きく返事をした後、全力でカミュの後を追った。
メルエを気にする必要がなくなった以上、サラの走りを邪魔するものは何もない。
先程よりも速い走りでカミュを追って行くサラを眺めたメルエは、リーシャの腕の中で小さく呟く。その声は、若干涙が混ざっているように聞こえた。。
そんなメルエに微笑みながら注意を促したリーシャもまた、すぐに笑みを消し、斧を片手で振り回しながら、カミュが通り終わったことにより狭まり出した『護り人』の隙間を広げて行く。

サラが落ちた階段を上った先でも、同じだった。
階段を上った先には、フロア全体を埋め尽くすのではないかと思われる程の＞マミー＜と＞ミイラ男＜。先に階段を上ったカミュが、階段周りの『護り人』を相手に奮闘しているのを見たリーシャがメルエを一度下ろし、＞鉄の斧＜を振り回した。

階段周りの『護り人』を一掃した一行は、再び出口に向かって走り出した。
カミュの後をサラ、その後ろを男二人、そして最後尾にメルエを抱いたリーシャ。

「　そ、そこを左だ！　」

進む方向は、外からこの地下の部分に入ったと言う、男二人が声で方向を示す。
その掛け声に頷きもせずに、カミュはその方向へと足を動かす。

サラも疲れている。
リーシャの息も切れて来た。
第一に先頭を走っているカミュは、少し前に死線を彷徨っていたのだ。

絶対的に血液が足りていないはずだ。
あれ程の怪我をし、あれ程の血液を流し出した。
その後、対した休憩もなく、戦闘をこなして来ている。
そして、最後にこの走りだ。
本来なら貧血を起こして倒れてもおかしくはない。

「階段が見えました！」

カミュが開いた前方に石畳の階段が目に入ったサラは、その表情に笑みを浮かべ、全員に聞こえるように報告を発する。
サラのその声に、後ろを走る男達にも、安堵の表情が浮かぶ。

「階段を駆け上がれ！」

階段の麓に辿り着いたカミュは、全員に先に階段を登るように指示を出した。
そして、当のカミュは、剣を構えたまま、麓に残り、にじり寄る『護り人』達を牽制する。

「・・・・カミュ・・・・・」

「いいから行け！」

カミュの横をサラが駆け抜け、その後を男二人が階段を駆け上がる。
最後に階段に到着したリーシャは、メルエを抱きかかえながら、カミュへ言葉を洩らすが、その言葉も、カミュの強い声に掻き消された。

『彼はまた無茶をしている』

リーシャはそれが歯痒くて仕方がない。
リーシャやサラのことに関して色々と言うカミュではあるが、ここまでの旅で、彼は一度たりとも二人を見捨てたことはない。
それが、『勇者』としての責務であり、資質なのか。
それとも、それこそがカミュ本人の人間性なのか。
リーシャは、ここに来てカミュという一人の人間を量りかねていた。

「・・・・すまない・・・・・アンタ達の平穏な眠りを妨げたことを謝罪する。」

リーシャも階段を駆け上がり、『護り人』達とカミュだけになった＞ピラミッド＜の地下の一室で、カミュは小さく頭を下げた後、階段を駆け上がった。

これで終わりだと思っていた自分達の思考が恨めしい。
駆け上がった階段の先に広がる光景に、カミュは安堵の一息を吐いて階段を上った自分の考えの甘さを悔いた。

「・・・・あ・・・・・・あ・・・・・・・・」

「「　も、もう・・・ダメだ・・・・」」

そこに見えたのは、＞イシス国＜の歴史的建造物である＞ピラミッド＜を囲むように埋め尽くされた魔物。
＞火炎ムカデ＜に＞地獄のハサミ＜。
＞ピラミッド＜内で遭遇した＞大王ガマ＜までいる。
その数は、カミュ達の倍やそこらではない。
まともにぶつかっては、命がいくらあっても足りない程のもの。

「　カ、カミュ！　」

「　ルーラを使う！　早く傍に寄れ！　」

カミュの方に視線を移したリーシャの目を見ずに、カミュは全員に向かって叫ぶ。
カミュの声に、全員の視線が魔物からカミュへと移り、同時にカミュの方へと駆け出した。
全員がカミュの身体のどこかしらを握ったことを確認したカミュが詠唱を紡ぎだす。

「　ルーラ！　」

呟くような詠唱ではなく、珍しく声の張った詠唱をカミュが行ったと同時に、カミュの魔力が全員の身体を包み込み、勢いよく上空へと跳ね上げた。

＞ピラミッド＜の地下からの出口である階段付近に群れを成して突進していく魔物達。
カミュ達は、まさしく間一髪で、魔物の牙を逃れたのだ。

「グォォォォォォ！！」

後に残るのは、魔物達の咆哮。
それは、カミュ達を逃したことの悔しさのためなのか。
それとも、自分達の強さを誇示するためのものなのか。

ピラミッド？（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

やっと＞ピラミッド＜編が終了しました。

第四章も残りわずか。

頑張っていきます。

ご意見、ご感想を心より、お待ちしています。

イシス城？（前書き）

少し遅れました。
本当に多くの皆様に読んで頂いていること、嬉しく思っています。
ありがとうございます。

イシス城？

現＞イシス＜女王であるアンリは、目を瞑り、話を聞いていた。
その胸の内に渦巻く葛藤と闘いながら。

男達が話している最中に喚くような声を上げる祖母を、近衛兵に命じて黙らせ、如何に自分達の罪を軽くしようかを考えたような男達の話を静かに聞いていた。

「・・・話はそれだけか・・・・？」

アンリは男達の声が途切れて、暫しの時間が過ぎてから、ようやくその双眸を開く。
その瞳の中にある光は、＞ピラミッド＜に向かう前にカミュ達と謁見した時のものとは全く違うものであった。
何かに怯えるようなものでもなく、何かに絶望しているものでもない。
それは、王の威厳に満ちた瞳。

その瞳が、男達の後ろに控える四人の旅人を射抜く。
一番前に跪くカミュと名乗る『勇者』。
そして、今回は最初からその『勇者』を護るように隣に跪き、その小さな手でマントの裾を握った少女がいる。
その少女は、他の人間と違い、真っ直ぐ自分の瞳を見つめている。
それこそ、一国の王であるアンリであっても、その者を傷つけることは許さないとでもいうような宣言に見える。
その姿にアンリは、少し瞳に宿る光を緩めた。

カミュは、＞ルーラ＜でイシスの町の中へと入った後に、突如倒れた。
あれ程の怪我をし、サラの＞ベホイミ＜によって、傷は塞がれたといえども、血液が圧倒的に足りなかったのだ。
その上で、戦闘を繰り返し、そして走った。
その連続した行動が、カミュの身体を確実に蝕んでいたのだ。

「・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・」

先頭を歩いていたカミュが、町に入った途端、糸が切れたように倒れたのを見て、真っ先に駆け寄ったのは、リーシャの手を握っていたメルエだった。
『自分の中の絶対的強者が倒れる。』
それはメルエに、＞ピラミッド＜内で感じた絶望を再び思い起こさせるものだった。

「　カミュ！　」

メルエの動きに気が付き、遅れて駆け寄ったリーシャが、サラを呼ぶ。
カミュの下に駆け寄ったサラが診察をした結果、貧血によるものであろうという結論が出た為、とりあえずは宿屋で休み、回復を待つこととなった。

宿屋の一室までリーシャがカミュを運ぶ。
先頭を歩くのは、サラ。
その後ろを二人の盗賊。
そして、その盗賊を警戒するように最後尾をリーシャが歩き、その横をメルエが歩いた。

一度、カミュが倒れたどさくさに紛れて逃げ出そうとした一人の男に気が付いたリーシャがメルエに指示を出したという経歴がある。
その際にメルエの＞魔道師の杖＜から発生した＞メラ＜の火球の大きさに、男達は逃げ出す気力すらも削がれていた。
故に、最後尾を歩くリーシャの横で、杖を向けて歩く幼い少女に、男達は怯えながら宿屋への道を歩いていた。

「・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・」

「ふふっ。　大丈夫ですよ、メルエ。　カミュ様も、目が覚めた後に、しっかりと食事を取れば元気になります。」

ベッドに横たわるカミュを心配そうに覗き込むメルエの姿にサラの頬は緩み、安心させるためにカミュの状況をメルエへと伝える。
サラの言葉に、視線をサラに移し、ゆっくりと頷いたメルエではあ

ったが、結局カミュが目覚めるまで、その場を離れようとはしなかった。

カミュは一晩眠り続け、その為、リーシャが一晩眠らずに盗賊二人の監視を続ける事となる。野営等の見張りでは、何度か夢の世界に旅立っていたリーシャではあったが、この日はその鋭い瞳が閉じられることは一度もなかった。

そのような経緯があり、メルエはカミュの傍を離れようとはしないのだ。

メルエの心には、＞ピラミッド＜内でリーシャに告げられた言葉が残っていた。

『カミュが瀕死の怪我を負ったのは、メルエの責任だ。』

自分の行動が起こしたカミュの現状。

それがメルエの責任感を生んでいた。

「・・・・ふっ・・・・・心配せずとも良い。　そなたの大事な者に危害を加えるつもりはないぞ。」

「・・・・・・・・」

少し表情を緩め、言葉をかけるアンリは、メルエが暫し時間をかけて頷いたことを確認すると、その表情を再び引き締めた。

「・・・・・今の話に相違はないか・・・・・・？」

表情を引き締め、王としての顔になったアンリに、側近達は若干の驚きを表す。
この数年、何かに諦めたように淡々と話をするアンリしか見たことはないのだ。
今のアンリが放つ威厳は、まさしく王そのもの。
その威光に、側近達は威圧されてしまっていた。

「な、何を言う！　女王は、この国を支えてきた老臣を疑うのか！？　それも、このようなどこの馬の骨とも知らぬ者達が連れて来た、盗賊の様な者達の話を！」

「・・・・・・応か否かを問うておる・・・・・・」

近衛兵に取り押さえられながらも、アンリへと反論を始めるが、その言葉を静かに聞いていたアンリが再び口を開いた時、老婆はこの女王が既に傀儡ではないことに気付いた。

「ア、アンリ・・・・まさか、この私を本気で疑うておるのか・・・・？」

「・・・・・・・・・」

不安になった老婆は、言葉を擦れさせながらアンリへと問いかけを発するが、それに対しても、アンリは鋭い視線を向けるだけで何も言わない。

謁見の間に緊張が走る。

全ての者達に、この場での発言権は認められていなかった。

今、この場で口を開いて良い者は、アンリとその祖母である老臣だけである。

「こ、このようなこと、許されることではないぞ！　この国の者ではない旅人が連れて来た盗賊の様な卑しい身分の者達の言葉を信じ、国の忠臣を排斥するなど、女王は正気を失ったと人心は離れることになるぞよ！」

懸命に自分を排斥することで起こり得るデメリットを説く老婆であったが、アンリはその言葉を聞いていないかのように、静かに瞳を閉じた。

「このような事を許すのであれば、この国の秩序は乱れ、いずれ崩壊に・・・・・！！！！」

「・・・お祖母様・・・・私が何も知らないとでも・・・・・・？」

再び口を開いた老婆の言葉は、途中で遮られた。
他でもないアンリの言葉に。
そして、そのアンリの行動は、この謁見の間にいる人間全てに驚愕の表情を浮かべさせるものであった。

アンリは、祖母である老婆の目の前に立ち、その言葉を遮ったのだ。
誰も、アンリが玉座を立ちあがった姿を認識できていなかった。
それこそ、顔を上げて一部始終を見ていたカミュやリーシャであってもだ。

カミュやリーシャはこの謁見の間にいる人間の誰よりも戦闘経験が豊富であり、その相手も人間の能力を遥かに超えた魔物である。
魔物が生み出すスピードを目で追い、攻撃や防御をしてきた二人ですら認識できない程の速さ。それは、時を止めてしまったのではないかと思う程のものだった。

「・・・・ア、アンリ・・・・・・」

カミュ達と同じように驚愕に彩られた表情を浮かべた祖母が、アンリを見上げる。
そこにいたアンリの瞳に浮かぶ物は、『哀しみ』と『決意』。
それは相反するものでありながらも繋がって行くもの。

「・・・・・・・・・」

「！！！！　そ、それは・・・・・・」

祖母を見下ろし、何も言葉を口にすることなく、アンリは自分の背に掛るマントを払い、着ている服の袖を二の腕付近まで一気に捲り上げた。

そこにあったのは、金色（こんじき）に輝く一つの腕輪。

カミュ達が＞ピラミッド＜内で見た、＞イシス＜の国宝が入っていた宝箱の装飾よりも凝ったものが彫られており、それは、太陽の光を受け、この謁見の間を眩く照らし出すが如く輝いていた。そして、その腕輪の中央に彫られている物は、イシス国の紋章。

「・・・これが妾（わらわ）の腕にあるということが、何を意味するのか・・・それが解らぬお祖母様ではあるまい。」

二の腕に輝く金の腕輪を見せていたアンリの言葉は、未だに祖母を気遣う節のあるものだった。自分の呼称に謙ったものを使用している部分にそれが見受けられる。

「・・・・ど、どうやって・・・・・それを・・・・」

「・・・・・・・母上が・・・・・・・・先代女王から妾（わらわ）が受け継

いだのじゃ。」

＞星降る腕輪＜

それこそが、＞イシス＜王家に伝わる表向きの国宝。

王位を継承する時に、先代女王から受け継がれる。

先代の女王が突然崩御した場合などは、遺骸となったミイラの棺の前で、継承の儀式を行い、嫡子が王位を継承した証としてその腕に身につけることになっていた。

そして、それは唯の宝飾品ではなく、絶大な付加価値を持っていた。

身に付けた者の「すばやさ」を天突く程に上げ、通常の人間では目で追うことのできない程のスピードでの行動を可能とする。

しかし、その効力を発揮するのも、王家の血がその腕輪と共鳴するためであり、王家以外の人間には唯の宝飾品と化してしまうという物である。

「・・・・そんな馬鹿な・・・・・・・」

祖母は認められない。

先代女王が死んだ時、その腕輪を真っ先に探した。

しかし、先代女王の腕になかった為、女王の部屋の隅々まで探し、それでも見つからないことから、娘であるアンリの部屋もアンリの身の回りも全て探しつくした。

それでも発見できなかった為、この高位の文官であった祖母は、『殺害を依頼した盗賊が盗んで行ったのだ』という結論に達した。

つまり、今、謁見の間にて縛り付けられている盗賊達が追われていた追手には、『口封じ』という目的の他に、『＞星降る腕輪＜の奪還』という使命もあったのだ。

「・・・・母は・・・・・先代女王は、お祖母様を一番信頼しておった。　故に、お祖母様を常に傍に置いておくために『相談役』という職を与えたのじゃ。　女王の責務は、あの偉大な先代女王をも苦しめ、蝕んでおった。」

「・・・・・あ・・・・ああああ・・・・・・・」

そう。
この先代女王の義母であり、現女王の祖母である女性が、その義理の娘の殺害を企てた最大の理由が、今アンリが話し始めたことだったのだ。

文官として長く＞イシス＜の国政に携わってきたこの女性は、＞イシス＜国内で一番の知識とそれを生かす才能を保持していると自負していた。
故に、女王からの信任も厚く、自分の息子を女王の夫とすることもできたのだと。

それが、息子である女王の夫が早くして病死した頃から様相に変化が見え始めた。
自分の能力と知識で女王の信任を受け、この地位まで上り詰めたという自負がある女性と反し、周囲の人間は『息子を出しにして、女王に擦り寄り、権勢を有した浅ましい者』としか映っていなかった

のだ。

故にその息子の死は、周囲の側近達の動きを活発化させる。
後添えに自分の息子を押す者。
ここぞとばかりに、女性を扱き下ろす様なことを女王に吹き込む者。
当初は、そのような事を鼻で笑って、気にも留めなかった女王であったが、日増しに増え続ける周囲の人間の言葉に、遂に女王は動かざるを得なくなった。

それが、この女性の中では『裏切り』に映ったのだ。
自分が懸命に仕えて来たこの十数年の時間は、女王にとって何の意味も見出す事の出来ないものだったのだと・・・・

「・・・・母上は、妾(わらわ)にお祖母様を恨むなとおっしゃった。　お祖母様程、この国を憂い、この国を想っている臣下はおらんと・・・・・」

「・・・・・・・じょ・・・・・女王様・・・・・・・・・」

もし、本当にアンリが先代女王の魂と会話をしたとするならば、自分はあの頃の側近達が噂していた通りに、浅ましく、汚らしい人間に間違いはない。
先代女王の義母であるこの女性は、毅然として自分を見下ろすアンリに先代女王の姿を重ね始めていた。

『相談役』に任命された時、『政務の場所から追いやられた』と感じた。

その為、それ以降、何かを話したそうに自分を女王の部屋へと呼び出す女王の命を、理由をつけ断り続けた。最後の方には、女王自ら義母の部屋に訪ねて来たが、それも仮病を使い、顔を見ることもしなかった。

アンリの言う通りに女王が考えていたとすれば、この国の行く末を義母と話し合い、方向性を見出そうと考えていた事になる。
それを自分は・・・・・・

「・・・だが・・・・それが、明るみに出た以上、妾の胸に留めておくわけにはいかん。お祖母様・・イシス国王である先代女王の殺害を企て、自らの手を汚してはいないとはいえ、実行の首謀者である以上、それは大罪・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

祖母をじっと見下ろし、口を開いたアンリの言葉は、誰一人口を開くことのない、静けさに満ちた謁見の間に響き渡る。
罪状を説き、一度瞳を閉じたアンリが言葉を途切った。

再び開いたアンリの瞳には、もはや『哀しみ』は残っていなかった。
あるのは、当代女王としての威厳に満ちた光。

「・・・そなたに、死罪を申しつける！」

『決意』と共に告げられた、老婆の処断。
それは、イシス国で最も罪深き者が告げられるものであった。

「・・・・・・・謹んで・・・・・・お受けいたします・・・・・・・」

暫しの静寂の後、孫娘の瞳を見ながら老婆は頭を下げた。
孫娘の瞳に宿る想いを理解し、自分が今、何をするべきなのかを悟ったのだ。
元々、女王の信を一身に背負った程の高官である。
まだまだ幼いと思っていた孫娘の成長を目にし、冷静さを取り戻した時、自分がすべきことを理解し、飲み込んだ。

「・・・・・・但し、その亡骸はミイラとし、＞ピラミッド＜に安置するものとする。　今この時より、他国の者が＞ピラミッド＜に入ることを固く禁ずる！　我が＞イシス国＜の礎を築いてきた者達の眠りを妨げる者は如何なる者であろうと許さん。　良いな！」

「・・・・・・ア、アンリ・・・・・・・」

繋げられたアンリの言葉に、もはや近衛兵の拘束も外された老婆は涙する。
先代女王の殺害という、許されない大罪を犯した自分を、＞イシス＜の礎を築いた者として扱っているのである。自らの母親を殺した人間なのにもかかわらず・・・

余談になるが、先代女王の時代は、他国の者ばかりか、イシス国民であろうと、王家の人間以外は＞ピラミッド＜へ入ることを許されてはいなかった。
故に、この地に＞魔法のカギ＜を求めて訪れたオルテガは、＞ピラミッド＜の立ち入り許可を得られず、＞魔法のカギ＜を手にすることは叶わなかったのだ。

「・・・・アンリ・・・・・・いえ、女王様・・・・・・一つお願いが・・・・・」

「・・・・・なんじゃ・・・・・・？」

近衛兵に抱え上げられた老婆は、自分の足で謁見の間にしっかりと立ち上がってから、涙で濡れる瞳をアンリへと向け、口を開いた。

「・・・私が言うことのできるものではありませんが・・・・この国を・・・イシス国をお願い致します。」

言葉の通り、自分の思い通りに作り変えて来た老婆にそれを言う資格などない。
しかし、この老婆が悪役に徹しきれていない部分が確かにあったのだ。
先代女王は、国を想う一番の人間として、この老婆の名を挙げた。
その理由は、この老婆が、国民から搾取した税や、＞ピラミッド＜

の通行料として取った物、そして闘技場等での利益金などを全て国庫に入れていたことからも解る。
決して私腹を肥やす為ではなく、国の蓄えとして保管されていたのだ。

魔王登場で疲弊する世界の中、それの討伐に向かうある国が送りだした英雄への援助に始まった国庫からの支出。
その討伐が不発に終わり、世界は再び魔物の脅威に落とされた。

そんな中、魔物に親を奪われた孤児たちの養育費は全て国庫から捻出されていた。
＞イシス＜の町では、皆重税に苦しんではいたが、アリアハンのようなスラム街はない。
皆全て等しく生活ができているのだ。
苦しいながらも生きて行くことはできる。
それが良い事なのか、否かは別としても、国民が絞り出した血税は、国民の為に使用されていたことだけは確かである。

それを、アンリは知っていた。

「・・・ふっ・・・・・誰に物を申しておる？　妾は歴代の女王の中でも五指に入ると云われた先代女王の娘であり、イシス国始まって以来の賢者と謳われた文官の孫であるぞ？」

「・・・・うぅぅ・・・・は・・はい・・・・・」

「・・・・お祖母様・・・・さらばじゃ・・・・・・連れて行け！」

アンリの言葉に涙を流し、何度も頷いた老婆を一瞥し、別れの言葉を発した後、アンリは近衛兵に命じ、祖母の退席を指示する。
退席を命じられた祖母は、名実共に『イシス国女王』となったアンリを眩しげに見上げ、一度深々と頭を下げた後、謁見の間を辞した。

残った者は、誰一人口を開くことができなかった。
今まで、この国を牛耳っていた者の罪の暴露。
それは、側近達の心に大きな穴を空け、自分を見失っていたのだ。

唯一人、カミュ達に＞ピラミッド＜の謎を伝えた人間だけが、その老婆の後ろ姿を複雑な表情で見送っていた。
彼女は、オルテガに救われたとはいえ、一家の大黒柱を失っていた。
その為、生活は貧しく、母の手だけでは、娘一人育てられない状況に陥っていたのだ。

その中、救いの手が伸ばされた。
それこそ、先代女王が崩御し、混乱を極める＞イシス＜の国でその手腕を最大限に発揮し始めたあの老婆なのだ。

初めは気がつかなかった。
新女王が孤児や、魔物により働き手を失った者達に援助を決定したのだと思っていた。
その恩返しという理由もあり、宮廷での士官を志したのだ。

だが、宮廷内に入った時、その中の様子は、彼女の考えていた物とは違っていた。
傀儡ということが一目でわかる女王。
権勢を想うがままにするその祖母。

彼女は、自分の恩人がその祖母であることに、複雑な想いを持っていた。

「・・・・・さて・・・・・・残るは、お前達の処遇じゃな・・・・・・」

「「　！！！！　」」

そんな周囲の人間を無視し、振り向いたアンリの顔は、厳しいものだった。
その表情に、びくりと身体を震わせた二人の男は、視線を後ろにいるカミュへと向ける。
『俺達は約束を守ったぞ』と言いたげに・・・・

「・・・・ふぅ・・・・恐れながら・・・・」

「　よい！　そなたの言うことは解っておる。　」

溜息を一つ吐いたカミュが口を開くや否や、アンリがそれを遮った。
その口調は穏やかではあるが、瞳に宿る光はとても厳しいものであった。

「お前達の内、王家の秘宝が入った宝箱を開けたのはどちらじゃ？」

突如口を開いたアンリの言葉に、最初は何を言っているのか理解できなかった男達であったが、その内容を理解した後、男の内一人が手を挙げた。

「・・・そうか・・・では、その秘宝自体を最初に手に取った者はどちらじゃ？」

続いたアンリの言葉は、謁見の間にいる人間全てを混乱に陥れる。
何故、今そのような事を聞くのか。
それが誰にも理解できなかった。

そして、内容を理解した男達の内、先程宝箱を開けたと手を挙げた男とは別の男が手を上げる。それを確認したアンリは、一度目を瞑り、そして口を開いた。

「・・・わかった・・・・・お前達が犯した罪は、このイシスを包む砂漠の砂よりも深い。　その大罪は、死をもって償う以外ない。」

「「　！！！　」」

アンリの言葉は、静かな謁見の間に響き渡る。
男達には、もはや反論する気力は萎えていた。
アンリの威光に委縮してしまっていたのだ。

実際は、何度も逃亡を企てた。
＞ピラミッド＜から出た時。
町に入った時。

しかし、そのどれも実行が不可能だった。
＞ピラミッド＜から出た彼等に待っていたものは、数え切れぬ程の魔物だった。
カミュの＞ルーラ＜でなければ、そこからの脱出は不可能。
故に、彼等はイシスの町に来る以外はなかったのだ。

そして、町の中での逃亡は、彼等が最も見下していた、幼い少女によって阻まれる。
その強力な魔法を持ってすれば、自分達等、すぐにでも灰と化してしまうことを知ったのだ。故にそこでも逃亡は成功しなかった。

「・・・だが、お前達の話が、このイシス国を解放に向かわせたことも事実・・・よって、イシス国内の永久追放を申し渡す。
今後いかなる理由があろうとも、イシス国内に立ち入ることを禁ず。
この謁見の間を出た瞬間から、二度とこのイシスの城及び、町への立ち入りも禁ず。」

「！！　ほ、本当か！？　約束する。　もう二度とこんな国には来ねぇよ！　」

「　お、おれも誓うぞ！　」

アンリの言葉を最後まで聞き終わった二人の男は、何度も首を縦に振った後、アンリが発した退席の命に従い、跳ねるように謁見の間を出て行った。
そして、残るはカミュ一行だけ。

「じょ、女王様。　お言葉ですが、あの者達を捨て置くことは、この国の為になりません。　先代女王の殺害など、前例のない程の大罪。　それを咎めもせずに国外に出すなど、イシスの沽券に係わります。」

静けさが支配する謁見の間で初めに口を開いたのは、あの女官。
アンリを呼びに来た者である。
アンリの祖母が決定した施策により命を拾われ、イシス国に全てを捧げる事を誓った者。
しかし、国を憂うその言葉は、続く女王の言葉で砕かれた。

「・・・良い・・・いずれにせよ、あの者達は、このイシスを出る事などできはしない。　いや、イシスの町から幾ばくも離れる事などできぬであろう。」

「・・・・ど、どういうことですか・・・・？」

毅然とした女王の話の内容が掴めない。
聞き返した女官に向かって、アンリは若干表情を緩めた。

「・・・あの秘宝には、王家の呪いがかけられていると言い伝えられておる。　その秘宝が納められている箱を開けた者と、秘宝を手にした者には呪いが及ぶとな。　その内容は詳しく伝えられてはおらぬが、王家の『護り人』の怒りを買い、そして魔物を呼び寄せてしまう呪いということだ。」

「「「「　！！！　」」」」

「・・・ふむ・・・・そなた達には、何か覚えがあるようじゃの？　そなた達の中に秘宝を手にした物はおるのか？」

アンリが語る『王家の呪い』の内容に、カミュ達全員が驚き、一斉に顔を上げてしまう。
その様子に、アンリは一行の中にその秘宝を手にした物がいるのかを尋ねた。

恐る恐る手を挙げたのは、サラ。
そしてそれに遅れるようにメルエも手を挙げた。
実際、もう一つ＞魔法のカギ＜と呼ばれる秘宝もあるのだが、アンリの言う『呪い』の内容が起こり始めたのは、黄金に輝く鉤爪に触れてからであった為、カミュは沈黙を通し続けた。

「・・・そうか・・・そなた達二人は、その秘宝に触れた後、この場に持って帰ってきたのか？」

「「・・・・・・」」

呪いの内容に恐怖したサラは、言葉を出せず、全力で首を横に振る。
元々口数の少ないメルエは、いつものように否定を表す為にゆっくり首を横に振った。

「・・・・・・・・・もどした・・・・・・・・・・」

首を振った後、その秘宝への対処をメルエが口にする。
直答を許されていない場面での発言にリーシャは驚くが、女王であるアンリの瞳は柔らかな光を湛えていた。

「・・・そうか・・・ならば問題はなかろう。　手にとっても、それを元に戻した場合、その者達の呪いは解かれる。　戻した者が別の者であった場合は、その者の呪いが解かれることはないがな・・・・・」

つまり、落ちていた秘宝を手に取ったメルエは、箱に戻す際にサラに手渡したとはいえ、共に箱に戻し、蓋を閉めた。
しかし、あの盗賊達は、盗み出す目的で取り出し、『護り人』達の怒りを買ったため、その秘宝を取り落とし、元に戻すことはできなかった。
故に、彼等に対する『呪い』はまだ活きていると言うのである。

確かに、一度は土に還って行った『護り人』達が再度登場したのは、あの盗賊達が合流してからということになる。何とも微妙な線引きではあるが、もし、カミュ達がこのイシスの町を出た際に魔物の大群が待ち受けていなければ、『呪い』は解かれたと言っても良いのだろう。

しかし、もしそれが事実だとすれば、あの盗賊達の末路は相当に悲惨なものとなるだろう。
逃げても逃げても現れる大量の魔物。
立ち向かうには数が多すぎ、逃げるには限がなさすぎる。
古代のイシス王家もとんでもない『呪い』を残したものだ。

「・・・そなた達には、礼を言う。　このイシスを長い眠りから覚まさせてくれた事を。　本日はこのイシスでゆっくりと休むが良い。」

「・・・・・・ありがとうございます・・・・・・」

再び玉座に戻ったアンリは、カミュ達一行に労いの言葉をかけ、本日の宿泊を認めた。
しかも、それは、イシスの町の宿屋ではなく、このイシス城の客間でという申し出だ。
それは、旅の者としての扱いではなく、イシスの国賓としての扱いに等しい。

畏れ多いその言葉に、カミュは遠慮をすることを失礼と考え、素直

に頭を下げた。
カミュが頭を下げたことにより、その隣に跪くメルエもまた小さく頭を下げる。
その様子に、アンリの表情は優しいものに変わって行った。

しかし、メルエは気付いていた。
頭を下げる前に見たアンリの瞳が潤んでいること。
まるで泣くことを必死に我慢するような、そんな気高い姿がメルエの心に焼き付いて行く。

「・・・カミュとやら・・・そなたに話したきことがある。日が落ちた頃、我が部屋に参られよ。」

そしてリーシャは聞いていた。
跪き、頭を下げるカミュの横を通り過ぎる時に呟いたアンリの言葉を。
それは、逢引の約束。
いくらアリアハンの掲げる『勇者』といえども、一国の女王と行って良いものではない。
はっと顔を上げたリーシャは、去りゆく女王と視線が合ってしまった。

この世と思えぬ程の美貌を持つ女性。
この女性にかかれば、如何に人間味の少ないカミュも虜になるのではないか。
そして、旅をここで終えてしまうのではないか。
そんな疑惑がリーシャの胸に残った。

イシス砂漠の西に太陽が沈み、城内を暗闇の支配が始まった頃、夕食を取り終え、湯浴みを終えたカミュが謁見の間から左に入った所にある階段を上り、一つの部屋の前に立っていた。

軽いノックの後、返答もなくドアが開く。
ドアを開いたのは、この部屋の主であり、この国の主でもある女王アンリその人であった。

「よう来た。　さあ、誰かに見られぬ内に中へ入れ。」

アンリの言葉に導かれるようにカミュは中へと入って行く。
部屋には、数多くの花々が飾られており、むせ返る様な花の匂いが部屋を満たしている。

「本来ならば、従者がここで寝泊りをするのだが、今宵は下がらせた。　これで、心おきなくそなたと話ができる。」

「・・・私のような者に、どのような話が・・・・」

部屋へとカミュを誘った後、部屋の扉に鍵をかけ、自らは中央に位置する場所に置かれているベッドへと腰かけた。
どこに行けばよいのか判断し辛いカミュは、アンリの対面に立ち尽くしている。

「ふっ。　そう身構えなくとも良いではないか。　ふむ。　まずこれをお主に。」

薄い笑みを浮かべたアンリは、ベッドの脇から何かを取り出し、カミュへと手渡す。
それを受け取る為に一歩前に出たカミュは、手渡された物に驚いた。

「・・・・これは・・・・」

「それは、このイシスに古来より受け継がれてきた物じゃ。　そなたが真の『勇者』であれば、これも役に立つじゃろう。」

アンリがカミュに手渡した物は、一冊の書物。
それは、ロマリアでカミュが持ち出した物と同じものだった。
書物といえど、ページは二枚しかない簡素なもの。
古の『勇者』が残した魔法の契約書である。

「・・・・このような物を・・・・・・」

「よい。　この国にあったとしても無用の長物じゃ。　そなたが手にした方が使い道もあろう。」

カミュは、手渡された物が、各国が保有する現存の魔法書の中でも希少性が高い物だということを理解し、驚きに顔を上げるが、アンリはそれを首を一つ横に振ることで答えた。

「・・・・そのような物のことはどうでもよい。　私は、そなたのことを聞きたい。」

「・・・私に、女王様を喜ばせる話などできはしませんが・・・」

女王の言葉に珍しく困惑を表すカミュの表情にアンリは少し表情を緩ませた。
それが、カミュにとっての辛い会話の始まりだった。

「・・・まぁ・・・良い。　では、問おう。　そなたの瞳には、『絶望』と『諦め』が今も尚宿っている。　それでも前に進むのはなぜじゃ？」

「・・・女王様のお言葉の・・・・」

「逃げ口上はなしじゃ。　真剣に答えてください・・・・・」

カミュは驚いた。
アンリの最後の言葉は、今までの様な口調ではなかった。
年相応のカミュと同年代の女性のもの。

今日、玉座に上り、謁見の間に広がる光景を見た時、アンリは『覚悟』を決めたのだ。
真の女王となるべく、その態度を毅然としたものに変え、そして前を向いた。

「・・・そなたは・・・そなたの瞳に宿っている物は、変わりつつある。　それは何故です？　何の為に、何を想って、そなたは前を向こうと決めたのですか？」

「・・・・・わかりません・・・・・」

「　そのような言葉・・・！！！　」

カミュの言葉に、自分の真剣さが伝わらなかったのかと怒りを露わにしようとするアンリの瞳に映ったのは、唇を噛み、悔しそうに俯

く一人の青年だった。
それが意味するもの。
それは、アンリの問いを真剣に受け止め、考え、それでも自分の変化の理由が解らないという意思表示に他ならない。

「・・・・そうですか・・・・・」

「ただ、女王様がおっしゃるように、私が少しでも変わったとしたのなら・・・・それは、身近にいる人間の変化を目の当たりにしたからかもしれません・・・」

残念そうに俯き、ベッドのシーツを強く握ったアンリの耳に絞り出すようなカミュの声が聞こえた。それは、彼なりに考えた結果の答え。
それが、アンリの顔を勢いよく上げさせた。

「・・・そなたの瞳には、若干の『希望』も含んでいます。　それが、そなたの中の変化に繋がっているのか。　それとも、そなたの未来を表しているのかは解りません。」

「・・・・・・・」

「そなたは、今、前を向いて歩いていますか?」

アンリの表情はとても優しい。
玉座に座っていた時のような張りつめたものでもなく、以前見たような全てに諦めたような生気のないものでもない。
とても慈愛に満ちたその優しい笑みにカミュは暫し見とれてしまう。

「・・・わかりません・・・」

「ふふふっ。　そなたは全て『わかりません』ですね。」

アンリの問いに先程と同じ答えを繰り返すカミュ。
しかし、その答えにアンリは、先程とは違う微笑みを浮かべていた。
整った絶世の美女の微笑みは、薄暗い部屋を明るく照らし出すような綺麗な微笑みだった。

「・・・本日、そなたの隣に幼い少女が控えていたのに気がついていますか？　あの者の名は？」

「・・・メルエと申します・・・」

微笑みを浮かべたまま、少し話題を移動したアンリにカミュは完全に飲まれていた。
例え女性であろうが、国の要人であろうが、気後れすることのないカミュがペースを乱されている。もしかすると、カミュは女王とい

う存在に弱いのかもしれない。

「メルエ。　素敵な名。　メルエはそなたを護っていました。　私やその他の外敵から。　彼女が何故、そなたを護ろうとしていたのか。　それが、そなたの中にある迷いを晴らしてくれるものとなるのかもしれません。」

「・・・・・・」

カミュは心底驚いた。

アンリの言葉は、種族こそ違えど、アンリと同じ女王としての立場を持つ女性が発した言葉と同じものだったのだ。

「そなたは、私と違い、色々な場所で、色々な物を見て行くのでしょう。　できれば、再びこの地を訪れてほしい・・・・・・そして、魔王討伐という使命を果たし、その迷いも晴れたのならば、この地で・・・・共に暮らしてはもらえないだろうか。」

「　！！！！　」

今度こそ、カミュは息が止まる程の驚きを見せる。

常に表情に感情を出さないカミュが、誰でも解る程の驚愕の表情を見せたのだ。

それもそのはず、アンリの発した言葉は求婚の言葉。
それも、ロマリアの王女が発したような打算に満ちたものではない。
その証拠に、俯いたアンリの褐色の肌は、暗がりでも解る程に赤らんでいるのだ。

「・・・何故・・・？」

「　わ、わかりませぬ！　ただ・・・色々な場所に行き、色々な物を見て、変わって行くそなたを見て行きたい。　そなたの瞳の色がどのように変わって行くのかを妾（わらわ）は見たいのです。　」

再び口調が変化したアンリに、カミュは目を丸くする。
これが、アンリの本性なのかもしれない。
威厳を見せる為のものでもなく、女性としての体裁を繕っているものでもない。
そして、ついにカミュの表情が崩れた。

「・・・くくくっ・・・申し訳ありません。」

「・・・むっ・・・女性の一世一代の真剣な想いを笑うなど、死罪に値するもの。」

カミュの仮面が剥がされたのと同様に、アンリの仮面も見事に剥がれて行った。

そこにいるのは、同年代の男と女。
１６という、子供と大人の境目にいる者。
それは、女王と旅人という垣根をも越えて行く。

「・・・・女王様・・・・・」

「　アンリです。　」

口を開きかけた、カミュの呼びかけに、不満気な表情を作り、自らの名を叫ぶアンリ。
それが、カミュの中でメルエと重なってしまう程、幼く映った。

「・・・そなたには、妾の名を預ける。　それが、そなたと妾の約定の証。　妾の夫となるか否かは別としても、再びこの地を訪れる事の約定。　良いな・・・？」

最後は若干不安気な表情を浮かべたアンリに、カミュは笑顔で頷いた。
カミュの笑顔。
それは、リーシャやサラですら数える程しか見たことのない希少な物。
それをアンリは一夜にして、生み出したのだ。

「・・・・・ただ、おそらく私は、アンリ様の意向に沿うことはで

きないでしょう。　この旅の先にあるのは、私の『生』ではないでしょうから・・・・・」

「　！！　そなたは・・・・・」

「・・・そして、もうよろしいでしょう？　アンリ様が、私に問いかけた問いは、自らに対する問い。　謁見の間での自分の決断に対する疑念。　私はそれを肯定することも、否定することもできません。」

余裕を取り戻したカミュは、アンリの内にある本来の姿を見出す。
今宵、カミュを呼び、問いかけた内容は、自問自答を繰り返したものだろう。
如何に国を前に進めるためとはいえ、自らの最後の血縁である祖母を処断し、死罪を告げた。それが果して正しかったのか。母親の仇といえども、アンリが幼い時にはとても優しかった祖母。

勉強も、政も、アンリは祖母に教わった。
イシス国随一の賢者と謳われた女性の指南を受け、アンリは育ったのである。
その祖母の命を奪ったのは、孫娘である自分だった。

カミュを見上げるアンリの頬を大粒の涙が伝う。
それは、後悔の涙なのか。
それとも、哀しみの涙なのか。

「・・・妾は・・・妾は・・・・」

そのまま顔を伏せ、大粒の涙を落すアンリ。
それは、あの謁見の間でメルエが見た『気高い姿をした女王』という衣を脱いだアンリの姿。祖母が謁見の間を出て行く後姿を見て、アンリは恨む気持ちが湧くことはなかった。
母を奪い、自分の自由さえ奪った相手にも拘わらず、アンリの脳裏には笑顔を浮かべる祖母の姿しか浮かんでは来なかったのだ。

必死に涙をこらえ、その場を終えて部屋に戻った時、アンリの胸に大きな穴が空いていた。
母親の霊に出会い、真実を知らされた時、アンリの心に『復讐』の二文字が浮かばなかったと言えば嘘になる。

それでも、母親の言う『恨むな』という言葉。
そして、母の信じる『忠臣』としての祖母の存在。
祖母の行う政治の裏に、数え切れぬ程の国民の苦しみがある反面、それと同様に数え切れぬ程の国民の命が救われている事実。
それが、アンリの心を幾度も思い留まらせた。

「 !!! 」

「・・・今宵だけで良い・・・・胸を・・・・・」

俯いて涙を流していたアンリが、突如、カミュの胸に飛び込んで来る。

それに驚き、戸惑うカミュであったが、一つ溜息を吐いた後、その肩を抱き、アンリに胸を貸した。

暗闇が支配する廊下で、一人の女性が苛々と指で腕を叩きながら、壁に背をつけ、立っていた。
カミュ達一行が宿泊を許された客間は二部屋。
勿論、一つはカミュの一人部屋であり、もう一つはリーシャ達三人の部屋となる。

その一つの部屋のドアの前で、その部屋に止まるはずの青年を待つ一人の女性。
それは、パーティー内で最強の攻撃力を誇るアリアハン屈指の女性戦士。

「・・・・・・どこに行っていた・・・・・・？」

暗闇の中、その部屋に近づいた影に視線を向けることなく発したリ

ーシャの言葉は、まるで地獄の底から響くような声。
自分の部屋のドアの前から突如かかった声に、カミュは顔を上げた。

「・・・ああ・・・・アンタか・・・・こんな夜更けに一体何の用だ?」

「お前こそ、こんな夜更けにどこへ行っていたんだ!?」

何事もなかったように口を開くカミュの態度が、リーシャの怒りの導火線に火を点す。
突如怒鳴り出したリーシャにカミュは溜息を洩らした。

「・・・・はぁ・・・・・アンタの機嫌は何で決まるのか、良く解らないな・・・・」

「な、なんだそれは!?　私の質問に答えろ!　お前は女王様の寝室へ行っていたのか!?」

もはや、リーシャの質問は『何処に行っていた?』というものではなく、その場所を断定し、確認を取っているだけのものになっていた。
そのリーシャの発している言葉に、もう一度カミュは深い溜息を吐いた。

「・・・・知っていたのか・・・・・？」

「　！！　やはりか！　女王様の寝室で何をしていた！？　」

「・・・・それをアンタに話す必要性がないが・・・・・」

最近、表情が豊かになり、感情を表に出すことの多くなったカミュを見続け、リーシャは忘れていたのだ。今目の前にいる青年が己に干渉されることを嫌うという性質の持ち主であることを。

「～～～～！！　お前は、アリアハンの掲げる『勇者』ではあるが、一国の女王と釣り合う身分ではないぞ！　そのように浮ついた気分では、とてもではないが、オルテガ様の遺志を継ぐ事などできはしない！　」

「・・・・・・・・」

無表情を強くしたカミュの返答に、リーシャの頭に血が昇る。
そんなリーシャが発した言葉は、カミュの感情を完全に削ぎ落としてしまった。

「・・・・変わったと思っていたが・・・・見誤っていたようだ・

・・・・」

「はっ！？」

カミュの冷たい表情と言葉に、リーシャの頭から一気に血の気が引いて行く。
自分は何を言ったのだ？
『身分』、『オルテガの遺志』。
そんな事が言いたくて、このドアの前で数刻もの間、苛々しながら待っていた訳ではない。
リーシャは自分の感情的な行動に嫌気が差した。

「ち、違うんだ。　そういう意味ではない！」

「・・・身分の違いで言えば、アンタと呼ぶことすら許されはしないのだろうな・・・・」

カミュは表情を失くしたまま、能面のような顔で、リーシャの脇をすり抜ける。
自分の横を通り過ぎるカミュの言葉を聞いた時、リーシャは思わずその腕を取ってしまった。

「・・・・まだ、何か用なのか・・・・・？」

腕を取られたことにも表情を全く変えずに振り向いたカミュの顔に感情は見えない。
まるで、その辺にある置物に触れた時の様なもの。
それに対し、リーシャは久しく感じていなかった恐怖を感じた。
それは、アリアハンで感じた『恐怖』とは異なるものであった。

「すまない。　そういうことではないんだ。　話を聞いてくれ。」

先程の失言を素直に謝罪するリーシャの言葉が、カミュの表情に変化をもたらす。
感情を表に出すことの多いリーシャではあったが、自分の発した言葉を即時に撤回することは珍しい。カミュはその事に驚いていた。

「・・・・・一体何なんだ・・・・・？」

「いや・・・つ、つまりだな・・・お前は・・・イシス国王である女王様の寝室で何をしていたんだ？　ぶ、無礼なことはしていないだろうな？」

もう一度振り返り、リーシャの目を見て立つカミュに、当のリーシャは視線を合わすことをせずに床に向かってつぶやき始める。

「・・・・無礼なこと・・・・・？」

「そ、そうだ。　お前が何か無礼を働けば、私達全員がイシスの国敵となるばかりか、お前を送り出したアリアハンまでもがイシスと敵対することになる！」

リーシャの言葉を聞き返すカミュに、リーシャは明らかに今思いついたような理由を話し出した。言っていることは当然のことではあるが、対外的には常に仮面を被るカミュがそのような事をしないことぐらい、リーシャにも解っているはずだった。

「・・・・無礼になるのかは解らないが、これを拝領した・・・・」

「そ、それは・・・？」

カミュが差し抱いた物は、一冊の書物。
いや、書物というよりも、表紙と背表紙しかない三枚の紙と言ってもいいのかもしれない。

「・・・この＞イシス＜に伝わる、古代の英雄が残した魔法書らしい・・・・」

「なに!?　とすると・・・・あの『勇者』しか使えない魔法のことか？」

差し出されたものを見つめながら問いかけるリーシャに対し、カミュは一つ頷いた。

古代の英雄。

つまり、時代と共に『勇者』として語り継がれている者達が残した遺産。

そして、今この時代でその魔法を使用できる者をリーシャは、目の前に立つ青年しか知らない。もしかすれば、リーシャが知らない土地にその魔法を使える者がいるかもしれないが、そのような者がいるとすれば、『魔王討伐』という宿命を背負うことになるのは明白である。だが、ここ十数年の間で、世界中で『魔王討伐』の旅に出た『勇者』の中で、国を挙げての者となれば、アリアハンの英雄オルテガとその息子であるカミュしかいないのだ。

「そ、そうか・・・それ以外は何もしていないのだな？」

「・・・先程から気になっているが、アンタの言う『それ以外の事』とは何を指しているんだ？」

カミュの答えを聞き、どこか安堵の表情を浮かべたリーシャではあったが、もう一度カミュに念を押した際に、聞き返された内容に再び苦い表情を浮かべた。

「　そ、それは・・・解るだろ！　」

「・・・・解らないから、聞いているんだが・・・・・」

少し慌てたように返答するリーシャであったが、冷静に、そして本当に理解できないかのように問いかけてくるカミュに絶句する。

「　くっ！　無礼なことだ！　」

「・・・いや・・・何度も聞くが、何が『無礼』に値するんだ？アンタが指し示す『無礼なこと』と言うのは何のことなんだ？」

絞り出すようなリーシャの答えにも納得の意を表さないカミュは、尚もリーシャを問い詰める。『うっ』と言葉に詰まるリーシャを見つめ、その答えを待つカミュの目を見たリーシャは俯きながら、言葉を呟いた。

「・・・・解らないのならば、もういい。　変な事を聞いて、すまなかった・・・・・」

「・・・・いいのか・・・・・？」

若干肩を落とし気味に言葉を洩らすリーシャに、もう一度問いかけ

たカミュは、本当にリーシャが言いたいことを理解していないようだった。
『つまりはそういう事なのだろう』とリーシャは思うことにした。
『自分の考えているようなことは起きていないのだ』と・・・・・

「あ、明日はもう＞イシス＜を出るのだろう？」

「・・・ああ・・・もしかすると、歩く旅はここらで限界かもしれないからな・・・」

誤魔化すように話題を変えたリーシャを訝しむこともなく、カミュはその問いに答える。
しかし、カミュが呟く内容に疑問を持ったリーシャは、首を若干傾げる仕草をした。

「どういうことだ？」

「この大陸以外に行くには、アリアハンの時の様な『旅の扉』がある訳ではない以上、『船』等が必要になってくるはずだ。」

律儀に答えるカミュの言葉に、『あっ！？』と声を上げたリーシャはようやくカミュの紡ぎだす意味を理解したようだった。
アリアハン大陸から出る為には、強い魔物達が蔓延る海域を渡る船ではなく、『旅の扉』という古からの移動手段を使ったが、この大

陸にその扉があると言う噂は聞かない。
ならば、絶壁のような山を登るか、それとも海を渡るかしか方法がないことは事実だ。

ならば、山に杭などを打ち込みながら登るよりも、多少魔物が出ようが、海を渡った方が安全である。ただ、問題はどこから船が出ているのかということと、今も尚、その船は出ているのかということだけである。

「船がどこから出ているのかは、見当が付いているのか？」

「・・・さあな・・・」

リーシャの疑問に、素っ気なく答えるカミュ。
その態度に、先程の問題での怒りが再び湧き上がるリーシャ。

「『さあな』とは何だ！？　この旅は、お前が行く先を決めなければ、路頭に迷うんだぞ！」

「・・・アンタには、考える頭はないのか・・・・？」

「　なに！？　私が考えるより、お前が考えた方が良いに決まっているだろ！　」

再び、頭に血が上り始めたリーシャが叫ぶ言葉は、全てをカミュに丸投げするようなものだったが、不思議とその言葉にカミュは不快感を覚えなかった。
それが何故なのかは解らないが。

「・・・はぁ・・・この城に居た人間の兄が、世界を旅することを夢見ていたそうだが、＞アッサラーム＜に行ったきり、その町に居付いたらしい。　その人物なら、世界を回る手段に心当たりがあるかもしれない。」

「な、なに？・・・・・・あの町に戻るのか・・・・？」

溜息と共に吐き出されたカミュの答えを聞いた瞬間、リーシャの頭から血が下りて行く。
再び、あの町に入る。
それは、リーシャにとって、あまり歓迎することのできない決定だった。

メルエの義母がいる町。
それは、メルエにとって、忌むべき記憶の眠る町ということ。
その町に情報収集のためとはいえ、入らなければいけない。
メルエは大丈夫だろうか。
そんな想いが、リーシャの表情に影を落とす。

「・・・心配するな・・・メルエをあの義母に会わせるつもり

はない・・・・」

豹変したリーシャの表情に、カミュの無表情が崩れる。
彼は知っているのだ。
この屈強な女戦士が、自分の悩みだけでこのような表情をしないことを。
彼女が悩む表情をする時は、決まって自分以外の人間を想ってのことであるということを。

「そ、そうか・・・仕方がないな・・・・どうしても寄らなければいけないのだろう？　私達がメルエを護ってやらないとな・・・・」

そんなカミュの考えが正しいことが、リーシャの言葉で証明された。
リーシャの答えに、少し笑みを浮かべたカミュは、小さく頷き、部屋へと入って行く。

ドアの前に一人残されたリーシャもまた、表情を引き締め、明日は苦しみに悩むであろう幼い少女の眠る部屋へと歩き出した。

「・・・船か・・・ふむ・・・・そうじゃな、もしかすると＞ポルトガ国＜に行くことになるかもしれんな・・・・・・」

翌日、旅立ちの報告の為に謁見の間に訪れた一行に、イシス女王であるアンリは呟く。
その姿には、昨日カミュに接したような気やすさはなく、威厳に満ちたものに変わっている。

「古来より、ポルトガは貿易で栄えた国と聞く。　貿易となれば船も必要となろう。　妾(わらわ)が文をしたためてやろう。」

いや、実際はカミュ達に心を許し始めているのかもしれない。
その証拠に、アンリの話す一人称が『妾』という自分を下げる為のものとなっているのだから。

「・・・・有難きお言葉・・・・・」

「むっ！　これ、カミュ・・・・・その言葉は止めよ。」

恭しく頭を下げるカミュに、端正な顔を曇らせたアンリは、一言苦言を呈した後、側近に筆を運ばせ、すらすらと文をしたため始めた。

「ふむ。　これでよかろう・・・・これ、そこの幼き者。」

しかし、アンリは書き終えた文を側近に渡すこともなく、今日もカミュの横で跪くメルエに向かって、声をかける。
昨日とは違い、顔を下げたまま赤い絨毯を見つめるメルエは、その言葉に気付かない。

「う～む。　これ、メルエ！　」

「　！！！　」

少し悩んだ様子の後、意を決したように、アンリはメルエの名を口にした。
突然呼ばれた自分の名に、メルエは驚き、弾かれたように顔を上げる。
本来なら、顔を上げる前に返事を返すのだが、幼いメルエにその作法など解ろうはずがない。

「ふむ。　近う寄れ。」

「・・・？？？・・・」

顔を上げたメルエにアンリは再び声をかけるが、メルエにはその内容が示す意味が理解できない。どうしたらいいのか解らずに、小首を傾げながらカミュの方に視線を向ける。

小声で『女王の近くに行けるか？』と聞くカミュの言葉に小さく頷いたメルエは、恐る恐る立ち上がり、ゆっくりと玉座に近づいて行った。

「もっと近う。」

ゆっくりと近づくメルエを歯痒そうに見つめ、アンリは再び声をかける。

一歩一歩ゆっくりとではあるが、しっかりと近づくメルエは、ついに、玉座のある祭壇の様な場所の麓に辿り着く。

作法の知らないメルエは、そこで跪くことなく、玉座に座るアンリを見上げていた。

「その者！　無礼であろう！　女王様の御前であるぞ！」

「　よい！　」

メルエの姿に、不快感を露わにした側近の一人が声を荒げるが、アンリは静かにそれを制する。そして、そのまま玉座を立ち、メルエの立つ場所まで下り、そしてメルエに視線を合わせる為にしゃがみ込んだ。

それは、一国の国王としては異例の行為である。

例え、昨日イシスにとって功績を残した者達であったとしても、その待遇は一国の国王として行ってはいけないものだったのかもしれない。

それでも、アンリはこのメルエという幼い少女と話をしたかった。

「・・・メルエでよいな・・・？」

「・・・・・・ん・・・・・・・・」

再び名を尋ねるアンリに、言葉少なにメルエは一つ頷いた。

後ろに控えるリーシャ等は、不安と心配で胸を押し潰されるような感覚を味わっていた。

「メルエ、そなたは『魔法使い』なのか？」

「・・・・・・ん・・・・・・・・」

アンリの問いかけに、今度は若干胸を張って答えるメルエ。

アンリの問いかけは、メルエの誇りでもあった。

「ふむ。　ならば、そなたにこれを送ろう。　手をこちらに。」

メルエの答えに、とても美しい笑顔を浮かべたアンリは、その懐から小さな指輪を取り出す。メルエは、何をするのか理解できな様子で、小首を傾げながらも、右手をアンリに向かって差し出した。

「これは、『祈りの指輪』と呼ばれる物。　この指輪を指に嵌め、聖霊ルビス様に祈りを捧げれば、その者の気力と魔法力を再び戻すと云われておる。　そなたは後ろに控えるカミュ達にとって、これからの旅でなくてはならぬ存在となろう。」

メルエには少し大きな指輪であったが、メルエの中指に通すと、その指輪は自然とその形状を変化させていき、メルエの指にすっぽりと納まった。
不思議そうにその様子を見ていたメルエは、もう一度アンリを見上げ、首を傾げた。

「この指輪は、そなたが皆を護ろうと強く願った時に、必ずそなたの助けとなろう。　祈りの捧げ方は、そなたの仲間の僧侶に聞くがよい。」

「・・・ん・・・・あり・・・がと・・・う・・・・・」

一国の国王に対する謝礼としては余りにも軽い。
その言葉に、女王の後ろに控える側近や文官、武官の人間達が眉をしかめるが、女王自身がとても美しい笑顔を浮かべていることから、何も言えずに黙っていた。

「ふふふ。　ただ、メルエ。　その指輪は何度もルビス様のお能力（ちから）に耐えることができる程の強度はない。　過信は禁物じゃぞ。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

笑みを浮かべながらメルエに注意を促すアンリに、メルエは真剣な表情で頷いた。
そんなメルエに、アンリの表情は暖かく美しい笑みを濃くした。

「それと・・・・メルエ、約束してはくれぬか？」

「・・・？？？・・・」

続くアンリの提案に、メルエの首が傾いた。
一国の女王と約束等、メルエには思い浮かばないのだ。

「旅が一段落する度にでも、この国に顔を出してくれぬか？　いや、最悪『魔王討伐』を成した後でも良い。　必ず、元気な姿を妾に見せておくれ。」

「・・・・・・ん・・・・・・・・やく・・・そく・・・・」

アンリの言葉を一つ一つ頭の中で消化し、内容を把握したメルエは、とても優しい笑顔を浮かべ、大きく頷いた。
サラやリーシャ、そして唯一の友である『アン』以外との約束。
それは、メルエの胸に暖かな風を運んでくる約束だった。

「ふふふ。　ありがとう、メルエ。　カミュを頼んだぞ。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

最後にメルエの耳元で囁いたアンリの言葉は、メルエにしか聞こえないものだった。
その頼みに、表情を真剣なものに変えたメルエがしっかりと頷く。

書き留めた＞ポルトガ＜国王への文も一緒に手渡されたメルエが、カミュの横へと戻りそのマントの裾を掴む。メルエに視線を送ったカミュに、メルエは花咲く笑顔を向けた。

町に戻り、目を覚ましたカミュの衣服を新調し、カミュの下へと持って行ったのはメルエだった。真新しいカミュの衣服を嬉しそうに

両手で抱え、カミュの下へと駆けて来たメルエに、カミュは薄く微笑んだことがメルエは嬉しかった。
メルエが微笑めば、カミュも薄く微笑む。
メルエが哀しそうに眉を下げれば、カミュもまた沈痛な面持ちとなる。
それをメルエは知っていたのだ。

「カミュ。　そなた達の旅は、とても険しく長い。　その中で様々な物を見、様々な出来事が起こるじゃろう。　それを妾（わらわ）へ報告する義務を課す。」

「「「　！！　」」」

その言葉に、カミュを始め、リーシャやサラも驚いた。
とても一国の女王が口にすることではない。
いや、国王という『唯我独尊』を自負する人間であれば、言う可能性もある言葉だが、リーシャもサラもこの若き女王が口にするとは思わなかったのだ。

「　な、なにか、不服があるのか？　」

「・・・・いえ、『魔王討伐』を果たした暁には、横に控えるメルエと共に、必ず女王様の下に、ご報告に上がります。」

自分の言葉に静まり返る広間。
そして、唖然とした顔で、自分を見上げる『勇者』一行の姿に、少々気不味い想いを抱いたアンリの問いかけに、少し時間を置き、苦笑のような表情を浮かべたカミュが頭を下げた。それに、サラは驚き、リーシャはどこか不満顔を表す。

「うむ。　決して、自分の身を蔑にするな。　そなたは、ここに必ず戻ってくるのじゃ。　良いな。　妾との約定、ゆめゆめ忘れるでないぞ。」

「・・・・・はっ・・・・・」

アンリの何か含みのある言葉に、カミュは静かに返答を返す。
それを不思議そうに見るサラ。
眉を顰め、表情を険しくするリーシャ。
嬉しそうに微笑むメルエ。
そして、そんな一行を暖かな瞳で見つめるアンリ。
それぞれがそれぞれの想いを胸に、女王との謁見が終了する。

「・・・カミュ・・・本当に昨夜は、何もなかったんだろうな・・・？」

城を出て、町に入ってから、珍しく先頭を歩くカミュの横に並び、リーシャが口を開く。
それは、昨夜と同じ問いかけ。
女王の最後の言葉が、再びリーシャの胸に疑惑を持たせたのだ。

「・・・『何も』とは、何のことを意味しているのかをはっきりさせてくれ・・・・」

そんなリーシャに溜息を吐いたカミュも、昨夜と同じ問いかけをリーシャへと返す。
カミュの言動に、リーシャは眉を顰めた。

「　も、もういい！　」

「・・・・？？？・・・・・」

リーシャの突然の激昂に、カミュの足元にいたメルエが驚き、カミュのマントに潜り込む。

そして、マントの隙間から、リーシャを不思議そうに見ていた。

「そ、それで、これからどうするのですか？　女王様の言うとおり、ポルトガへ向かうのですか？」

そんなリーシャの急変した機嫌による雰囲気を変えるように、サラが今後の方針をカミュへと尋ねる。一度サラへと視線を向けたカミュが、少し考えた後に口を開いた。

「いや、一度＞アッサラーム＜へ戻る。」

「　！！！　」

そのカミュの回答に驚いたのは、メルエ。
マントの隙間からリーシャを見ていた瞳が、カミュへと移った。

以前に初めて知った、自分が育った町の名前。
それが、再びカミュの口から出たのだ。
しかも、次の目的地だという。

『何故？』
そんな疑問と共に、メルエの身体は震え出した。
どんなに今がメルエにとって幸せな物だとしても、昔覚えた恐怖は消え去ることはない。
出来る事なら、行きたくはない。

しかし、カミュが口にした以上、どんなに自分が反対したとしても、決定事項である。
それが、メルエの顔を俯かせてしまう。

「メルエ、大丈夫だ。　今のメルエの傍には、私がいる。　それにサラも。　ああ、あまり必要ではないが、カミュもいたな。」

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・」

顔を俯かせたメルエを、カミュのマントの中から抱きあげる腕。
それは、メルエが姉のように慕う女戦士。
その口調はとても優しいが、どこか棘を含んでいた。

「ふふふ。　そうですよ、メルエ。　メルエが私を護ってくれるように、私も全力でメルエを護ります。　それにカミュ様もいますし。」

「・・・俺は、あまり必要ではないらしいがな・・・」

抱きあげられたメルエの瞳にサラが映る。
優しく、慈愛に満ちた表情で笑うサラに、メルエの震えは自然と治まって行く。
そして、サラの言葉に続けたカミュの答えが、メルエの顔に笑顔を生んだ。

どこか拗ねたような言葉に、自然とリーシャやサラの表情にも笑顔が浮かぶ。

「・・・・ルーラを使う・・・・」

自分に集まる生温かい視線を逸らすように、移動魔法の詠唱に入るカミュを見て、一行は慌ててカミュの下へと集まって行く。
リーシャの腕から下ろされたメルエも、カミュの腰にしがみ付き、笑顔でカミュを見上げた。

今、自分がいる事を許された場所。
今、自分を必要としてくれる場所。
そして、何よりも、今、自分が願っている場所。

「ルーラ」

メルエの視線に苦笑の様なものを返した後、カミュが詠唱を行った。
砂漠へと暖かな光を降り注ぐ太陽に向かって、一行は浮かび上がる。
そして、砂漠の東へと消えて行った。

イシス城？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

これで、一応、イシス編は完結です。

ただ、第四章はあと一話続きます。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしています。

アッサラームの町？（前書き）

今回は短く終わらすつもりが、結構な文字数になってしまっていました。
う～ん。短くまとめるのって難しいですね。

アッサラームの町？

メルエが、自分の記憶の中に良い物が何一つない町の門の前に辿り着いたのは、日が傾き始め、その町の本領を発揮することのできる時刻が近づき出した頃だった。

「カミュ様、もし、それ程お時間がかからないお話であれば、私はメルエと門の外で待っていますが・・・」

「いや、今晩一晩はここで宿を取る。　メルエ。」

メルエを気遣うサラの言葉に視線を向けたカミュは、少し表情を曇らせたが、マントを広げてメルエを呼び込む。若干怯えを見せるメルエは、眉を下げた表情のまま、カミュのマントの中に滑り込んで行った。

メルエは、カミュのマントの中に隠れ、宿屋へと向かって歩き出す。町は人で溢れ始め、いたる所に派手な明かりが灯り始めた。
これから、この町は一日で一番の活気に満ちて行く。

宿屋に着く頃には、太陽も西に沈み始め、活気を見せ始める町の人々を紅く照らし出していた。太陽が完全に沈み、この町を人工的な光が覆うのも、もう僅かである。

「カミュ、私はここでメルエと共に待とう。」

宿屋のカウンターで、部屋を取り終わったカミュにリーシャが声をかける。
それは、サラも予想できたものだった。

この町に入ってから、メルエは全く口を開かない。
それどころか、カミュのマントの中に隠れ、顔を出しもしない。
それが何を意味するのかは、リーシャにもサラにも解っていたことだ。

だからこそ、その後で口を開いたカミュの言動に驚いた。

「いや、荷物を置いた後は、全員で町に出る。」

「 な、何故だ！ 」

「 そ、そうです。 カミュ様もメルエの気持ちを理解しているのではないのですか！？ 」

カミュの言葉は、今、カミュのマントの中で震えるメルエをも、町に連れ出すというものだった。その言葉に、反射的にリーシャはカミュへと詰め寄り、サラもま疑問の声を上げた。

「・・・メルエを護るためだ・・・」

「な、なにっ!?　お前は、私の護衛では不安だとでも言うのか!?」

驚く二人に振り向いたカミュは、言葉少なに答えを返す。
しかし、その答えはリーシャには心外なものだった。

メルエを護るために連れて行くということは、メルエを護るリーシャを信頼していないということになる。それがリーシャには許せなかった。
リーシャは、剣の腕はこのパーティーの中でも一番であると自負している。
その自分の護衛が信頼できないということは、自分自身の存在価値をも否定されたと感じたのだ。

「・・・別にアンタの腕を疑っている訳じゃない。　アンタは気付いていないんだろうな？」

「　何をだ!?　」

溜息を吐き、リーシャに向かって話し出すカミュの言葉に、リーシャは気勢を削がれ、首を傾げた。それはサラも同様で、カミュの話す意図が掴めない。

「・・・アンタとイシスで情報収集をしていた時に立ち寄った闘技場でのことを覚えているか？」

「　ん？　どういうことだ？　」

「「・・・？？？・・・」」

カミュが繋げた言葉に、サラとメルエが仲良く首を傾げる。
イシスの町を歩いていない彼女達は、カミュの言っていることが理解できるわけもないが、共に歩いた筈のリーシャまでもが理解していないことに、カミュは眉を顰めた。
疑問を返しておきながら、カミュの表情の変化に気が付いたリーシャは、自分が発した言葉がカミュの表情を生んでいることに気が付き、言葉を詰まらせる。

「・・・はぁ・・・アンタには諦めざるを得ないな・・・」

「くっ・・・もういいだろう！　さっさと内容を話せ！」

明らかに呆れた表情に変わったカミュを見て、リーシャは我慢することを止めた。
そんなやり取りの内に一行はカミュの部屋の前まで到着していたが、鍵を解除し、ドアの中に入るカミュの後ろから、他の三人がぞろぞろと入って行く。
カミュは、そんな一行に一瞬怪訝な表情を浮かべるが、何も言わずに部屋の中に荷物を下ろした。

「・・・あの闘技場で、兵士を見たはずだ・・・」

「ん？　ああ！　あの兵士達のことか？」

カミュの部屋に入ったと同時に、マントの中からベッドへとメルエが移動する。
自分のベッドの上に靴を脱いで乗り、寝転がってしまったメルエを見ても、カミュは何も言わない。どちらかと言えば、優しげな表情を浮かべていた。

「・・・あれは、イシスの兵士だと思うか・・・？」

「　なに！？　」

怪訝な表情を浮かべるリーシャ。

サラは、まだ二人の会話について行く事が出来ない。

「イシスは、基本的に女性国家だ。　まぁ、末端の兵士が男である可能性もあるが、あの闘技場にいた物は、その服装や立ち振る舞いから見ても、まず間違いなくイシス兵士ではないだろう。」

「どういうことですか？」

カミュの話に、ようやくサラが口を開いた。
イシスという国家に、イシス兵士以外の兵が入っている訳はない。
もしそれが事実であれば、国家の問題となってくるはずだ。

「俺も、初めは闘技場に出る魔物対策の為に配備された兵士だと思った。　アンタ達は気付いていないかもしれないが、あの兵士達は、俺達が外に出てからも後ろを歩いていた。」

「　なに！？　」

カミュが言うこと。
それはつまり、自分達一行が尾行されていたということである。
しかも、兵士の姿をした者達に。
ならば何故？

「ピラミッドに入る時にはいなかった。　だが、町に戻り、翌日登城するまでの道程ではやはり付いて来ていた。」

「何故だ？　そいつ等は何者だ？」

カミュの言葉に疑問を投げかけるリーシャの声は慎重なものだった。
サラは言葉を発せずとも、視線だけはしっかりとカミュへと向けていた。
この場で、カミュの話に関心を示していないのはメルエだけである。
気持ち良さそうにベッドに横たわり、目を瞑っている。

「これは俺の想像にしか過ぎないが、ロマリアの兵ではないかと思う。」

「「　ロマリア！？　」」

カミュの話す内容は、リーシャとサラの考えの斜め上を行っていた。
何故、その国名が出てくるのかが理解できない。
その国との関わりは、すでに終わっているはずだ。

「・・・はぁ・・・忘れたのか？　俺達はロマリアにとっての汚点を見て来ている。」

「なに？」

「あっ！？」

溜息と共に吐き出されたカミュの言葉に、リーシャは答えへの道が全く見えていないが、サラは違った。カミュが導き出す答えへの道を歩き始めたのだ。

「サ、サラは解ったのか！？」

「えっ、は、はい。　何となくですけれども・・・・」

サラの声に振り返ったリーシャは、驚愕の表情を浮かべる。カミュと共に歩いていたリーシャが全く糸口すらつかめていないのに、宿屋で待っていたはずのサラが理解するということにリーシャは愕然としたのだ。

そして、いつの間にか寝転んでいたメルエが起き上がり、ポシェットを探っているのを横目で確認し、顔を上げたメルエを厳しい目で睨みつけた。

「ど、どういうことなんだ？　説明してくれ。」

「あっ、は、はい。　これは、カミュ様と同じように想像の域を出ませんが・・・」

「それでもいい。」

リーシャはカミュの話を聞くよりも、サラの方に説明を求めた。
回りくどいカミュの話を嫌ったのか。
それとも、小馬鹿にしたように話すカミュの話を聞いていることができなかったのかは解らない。ただ、説明を求められたサラは、一つ断りを入れると、ゆっくりと話し出した。

「カミュ様の言うとおり、ロマリアで私達は、ロマリア王国の恥部を見てきました。　カンダタ一味によって王家の冠が盗まれるというもの。　カザーブの村の惨状。　エルフとの争いを恐れ、ノアニールを見殺しにしている国家の状況などです。」

「・・・そうだな・・・」

サラが話し始めた内容に、リーシャは静かに頷いた。
確かに、今、サラが語った物は、広大な大地を領地としている国家にとって『汚点』や『恥部』と言っても過言ではない物である。

「しかも、王家の冠に関しても、そしてノアニールの村に関しても、解決したのはカミュ様です。」

「そうだな・・・・それがどう繋がるんだ？」

「・・・・はぁ・・・・・」

ここまでサラが話しても、納得しない。
サラが話す内容は理解できるが、それが先程カミュの話したようなものに結びつかないのだ。
ただし、それはリーシャの頭の中だけの話ではあるが・・・・
そして、そんなリーシャの問いかけに、横で黙っていたカミュは盛大な溜息を吐いた。

「くっ！　解らない物は、解らないんだ！」

「・・・・本当に『かしこさの種』でも食べたらどうだ・・・・？」

カミュに鋭い視線を向け、叫ぶリーシャに、カミュは一つの提案を出す。
そのカミュの言葉に、再びメルエが起き上がった。
そんなメルエに厳しい視線を向けたリーシャは、サラに続きを促した。

「あっ、は、はい。　国家の汚点とも言える問題を解決したのは、

例え『勇者様』といえども、他国であるアリアハンの送りだした者であるカミュ様です。　それは、ロマリア王国の威信にかかわる問題になります。」

「何故だ？」

「・・・・本当に・・・アンタは・・・・・・」

続くサラの話。
それでも理解できないリーシャに、呆れた視線を向けるカミュ。
そして、そんなカミュに怒りの瞳を向けるリーシャ。
アッサラームにある宿屋の一室は、異様な空気が満ちていた。

「国家で解決できなかった問題を、『勇者』とされている人間とはいえども、他国の年若い人間が、たった四人で解決したのです。
『ロマリアは何をやっていたんだ？』と周辺の国家に見下されてもおかしくないということです。」

「・・・・なるほど・・・・・・だが、それと、先程の兵士と何が関係するんだ？」

ここまでの話は理解した。
それを口に出したリーシャに、少しほっとした表情をしたサラではあったが、その後に続いたリーシャの疑問に驚きの表情を浮かべる。

「　えっ？　あ・・・えっ！？　」

「～～～！！　なんだ！？　サラまで私を馬鹿にするのか！？」

驚きと共に、声を上げてしまったサラの表情を見て、リーシャの顔に怒りが浮かぶ。
まさか、サラにまでそんな態度をされるとは思っていなかったのであろう。
そんな二人を見て、カミュは呆れの中にも、少し優しさを混ぜた表情をしていた。

正直言えば、カミュはリーシャの物分かりの悪さに辟易していた。
しかし、それ以上に感心もしていたのだ。
普通の戦士などの職業であれば、その旅の目的さえ知っていれば、後は道中で武器を振るうだけしかしない人間が多い中、この女性戦士はその姿勢が全く違う。

『自分が理解したい』という想いがないとは言わない。
ただ、それ以上にリーシャの真剣な様子の中には、他者を思いやる部分が見え隠れしている。
『自分が何も解らない』という状況では、いざという時に行動に迷いが出る。
そうなれば、自分以外の人間を護ることに支障をきたすと言いたいのだろう。

それはカミュの憶測の話である。

実際は違うのかもしれない。
だが、カミュはリーシャの怒りに燃えた瞳を眺めながら、自分の考えに確信を持っていた。

「・・・・はぁ・・・・つまりだ。　もし、アリアハンにとって、アンタ達宮廷騎士が何度も解決に向かい行動しても解決しなかった問題が、ぽっと出て来た他国の旅人によって解決されたとすれば、何を恐れる？」

「・・・・・・それは・・・・・・・・」

サラを問い詰めるリーシャに、苦笑を浮かべたような表情で溜息を吐き、リーシャが理解しやすいように、彼女の仕える祖国であるアリアハンを例え話に出し、カミュは話し始める。

「・・・・その旅人が、アリアハンの恥部を・・・・！！！！」

「・・・・はぁ・・・・ようやく理解できたようだな？　ロマリア王国は、俺達がイシスにて、その国情を吹聴しないように監視していたんだろう。　それは、俺達のことを全世界に報告したことからも解るはずだ。」

カミュの問いに答えようとしたリーシャが、自分が導き出した答えを最後まで口にする前にカミュやサラの話す答えへの道に辿り着い

た。
驚愕の表情を浮かべるリーシャに、一つ溜息を吐いたカミュは、そのまま現状において推測できるものを話し続ける。

「俺達の行動は、常にロマリアの監視下にあったということだ。全世界に通告したのも、先手を打って、俺達の口を封じる目的もあるだろう。」

「・・・それでか・・・だ、だが、こう言っては何だが、私はロマリアの兵士の一人や二人に遅れを取るつもりはないぞ！」

ようやくカミュが、何故メルエを宿屋に置いて行かないという選択に至ったのかが理解できたリーシャであるが、リーシャとて、ここまで数多くの魔物と対峙してきただけに、一般兵士相手でカミュに心配されることは心外なのには変わりない。

「・・・そんなことは言っていないと言っただろう。　アンタの力量を疑っている訳ではない。　ロマリア兵も強硬に出てくることはないだろう。　ただ・・・・・・」

「　？　」

リーシャが追求する言葉に、カミュは呆れたように呟くが、最後は言葉を発せずに黙ってしまう。

その様子に首を傾げるサラ。
サラは、てっきり、リーシャが考えているように、兵士が押し込んで来た時の心配をカミュがしているのだと思ったのだ。
しかし、謎解きや国家の思惑を考える事は不得意としているが、『人』の心の機微には驚く程に鋭い一人の女性は違った。

「・・・そうか・・・解った。　ならば共に行こう。　メルエ、カミュのマントの中でも、私の傍でもいいから、絶対に私達から離れるな。」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

カミュの尻すぼみな言葉に、何かを悟ったリーシャ。
リーシャは、先程とは違うとても優しげな表情を浮かべ、ベッドに座るメルエに向かって注意を促す。その言葉を聞いたメルエは、眉を下げたままではあるが、しっかりと頷いた。

「？」

理解できないのは、今度はサラの役目となった。
不思議そうにリーシャとカミュを見て首を傾げるが、メルエが頷いたのを見ると、『自分に出来る範囲でメルエを護ろう』と心に誓う。
リーシャが悟ったもの。

それは、カミュの心配が向かっている先だ。
リーシャが考えるには、それはメルエ。
カミュが言うように、リーシャの腕を疑っている訳ではない。
ただ、それでもメルエが心配なのだ。

もしかすると、あの義母が訪ねてくるかもしれない。
それこそ、リーシャが少し席を外した隙に、メルエが攫われるかもしれない。
メルエの魔法という強みを差し引いても心配なのだ。
それこそ、父や兄が抱く感情の様に。
それが、リーシャには何か嬉しく感じた。

「ほら、メルエ、行くぞ。　カミュ、町へ出るのは、食事が終ってからでいいのか？」

「・・・ああ・・・余り遅くならない程度であれば、それでいい。」

ベッドから降り、リーシャの手を握ったメルエに笑顔を浮かべ、そのままの表情でカミュへと問いかけるリーシャを見て、カミュは視線を逸らしながら答える。
『わかった』と返した後に、リーシャはサラを伴ってカミュの部屋を出て行った。
一人残されたカミュは、深い溜息を一度吐き、ベッドに腰かけた。

食事を取り終え、一行は宿屋を出る。
数多くの人々の往来と、それに伴う喧騒が混じるアッサラームの町。
それは通常の人間であれば、何かしら心躍る部分があるものだろう。
だが、一向にそのような浮ついたものはなかった。
神妙な表情で歩き出すカミュ。
そして、そのマントの中に身を隠すメルエ。
その後ろを歩くサラ。
そして、最後尾を周囲を警戒しながらリーシャが歩いた。

「カミュ、どこへ行くんだ？」

「・・・アンタ方が湯浴みをしている間に、宿屋の親父に聞いたが、イシスから来た人間が町の北の外れに居を構えているらしい。」

「もしかして、以前に訪れた、あのぼったくりのお店の近くですか？」

後方からかかるリーシャの言葉に、振り返りもせずにカミュは答えた。
カミュの答えを聞き、自分が把握している町の状況を頭に浮かべた

サラは、以前リーシャの＞鋼鉄の剣＜を売却した武器屋を思い出した。

予想を口にするサラに、一つ頷いたカミュは町の北外れにある武器屋の方角へと歩を進めた。行き交う人々を描き分けて進む中、マントの中で前を見ることもせずについてくるメルエを気遣い、ゆっくりと歩を進めながら。

「・・・ここですか・・・？」

サラが見上げた場所は、すでに店仕舞いを終え、看板を下げ終えている武器屋の隣。
二階建てになっている建物だった。
その辺りには、もはや人影も疎らで、街の喧騒もどこか遠く聞こえる。

「カミュ、この扉には鍵がかかっているぞ？」

その場所は、表札も何もない建物。

本当に人が住んでいるのかも分からないような場所だった。
そして、一階のフロアの横に、リーシャが言うように一つの扉がある。
それにはしっかりと鍵がかけられており、まるで、侵入者を拒むかのように立ち塞がっていた。

「・・・・はぁ・・・・カギを使うしかないな・・・・」

「えっ!?　そ、それは・・・」

その扉についた金具で何度かドアをノックするが、何の反応も示さないため、溜息と共にカミュは持っていた袋から＞盗賊のカギ＜を取り出した。

それを見ていたサラが、抵抗感を示す。
世界を救う旅を続ける『勇者』ともあろう人物が、盗賊のような真似をすることに抵抗を感じたのだ。
それは、リーシャも同じで、少し顔をしかめていた。

「・・・・これでは無理か・・・・」

そんな二人を余所に、カギを鍵穴に差し込んだカミュではあったが、その鍵が一向に回らない。カギが合わないことを確認したカミュは、数日前に手に入れたばかりのカギを代わりに取り出した。

「「・・・・・・・・・」」

もはや、リーシャとサラも何も言わない。
『明日の朝に出直せばいいのでは？』という疑問が浮かんだことは確かではあるが、実質そこまで時間がある訳でもない。
そして、以前、隣にある武器屋を訪ねた際にも、サラの記憶の中では、この扉はしっかりと閉まっていた。
故に、明朝に足を運べば、鍵が空いているという確証はない。
中にいる人間が起床していて、開けてくれる可能性はあるのだが。

ガチャリ

乾いた音を立て、カミュの持つ＞魔法のカギ＜が鍵穴で開店した。
解錠を終えた扉を押し開き、カミュは中へと足を踏み入れて行く。

中は、火は灯されているが、その数は少なく、薄暗い明りを灯している。
奥に見える階段に近づき、上の状況を確認したカミュは、一度振り返った後、その階段を上り始めた。

気は進まないが、リーシャとサラもその後に続く以外にないため、恐る恐る階段を上り始める。建物内に入ったことから、メルエもカミュのマントの中から顔を出し、リーシャの下へと移動していた。

「「「「・・・・・・・」」」」

階段を上った先に見える光景は、一行が考えていた物と様相が異なるものだった。
月夜が差しこむテラス。
そして、その横に扉がある部屋。

それは、宿屋の部屋の様に鍵の掛るドアで塞がれていた。
集合住宅のような建物にも拘わらず、ある部屋は一つ。
何とも変わった建物である。

ゴンゴン

テラスに差し込む月明かりがとても幻想的に映る中、その灯りに照らし出されたテラスに咲く花を見つめるメルエの肩にそっと手を置くリーシャ。
そんな二人を横目にカミュは戸口に掛る金具を叩いた。

暫しの時間が流れた後、ゆっくりと扉が開き、中年の男が一人顔を出す。
それがカミュの言っていたイシスに仕えている者の兄なのだろうか。

「ん？　なんじゃ、お主たちは？　外のドアにはカギをかけていた筈じゃが。」

出てきた中年の男は、不思議そうにカミュ達を見渡した後、少し怪訝な表情に変わった。
鍵をかけた筈のドアからの侵入者を快く迎えるはず等ない。
そんな男の問いかけに、リーシャとサラは苦い顔を浮かべた。

「・・・いえ・・・申し訳ありません。　下の扉には鍵がかかっていませんでした。」

「なに？　そうか。　かけたと思っておったが、失念しておったか・・・・・」

即座に返されたカミュの嘘。
その明らかな嘘に、自分の過失であることを納得してしまう男。
リーシャとサラは、驚愕の表情に変わった。

特にサラ等は、世界を救う『勇者』というものに、ある意味『幻想』に近い物を持っている。それが、アリアハンを出た時に出会った青年がカミュであったこともあり、微妙な変化を生んではいるが、サラの中の根本は未だ大きく変わってはいない。

『勇者たる者が、平気で嘘を吐く』
その事がサラにはどうしても許容できなかった。

「それで、こんな夜更けに何用じゃ？」

「・・・はい。　私達は先日まで、イシスに滞在しておりました。その際に貴殿の弟君にお会いし、貴殿が世界を回るために旅に出た旨をお聞きしました。」

納得はしたが、夜更けに訪れる旅人への警戒感を緩めない中年の男は、自分の問いかけに答えるカミュの言葉に、ついに警戒感を解いていく。

「そうか・・・イシスに。　あ奴は元気にしておったか？」

「はい。　貴殿の身を案じていらっしゃいましたが。」

「・・・あ奴には心配ばかりかけてしまうの・・・」

カミュの言葉に何かを懐かしむように遠い目をした男が、気付いたように、カミュ一行を部屋の中に通す。サラはどこか罪悪感にも似た感情を持ちながら中に入った。

「お主達は、旅をしておるのか？」

「・・・・・はい・・・・・」

ここは、カミュと男の交渉の場。
そこに口を挟む人間はいなかった。
リーシャですらも、もはや交渉の場に口を挟もうとはしなかった。
耳はカミュ達の会話に向いてはいるが、視線は部屋の中を興味深げにきょろきょろと見ているメルエに向いていた。

「そうか・・・私も、いつか東へ行ってみたいと思っておった。」

「・・・東へ・・・？　海に出るのではなく・・・・？」

男が呟いた言葉に、カミュが疑問を呈す。
カミュが考えていた方角とは違ったのだ。
男が言う事には、このアッサラームの東へと向かうという意味がある。
アッサラームの東側にそびえる険しい山脈を越えて行くということ。
それは、不可能に近い。

「ふむ。　船を使って海に出るのも良いが、東の国には面白い物が多いと聞く。　半ば伝説に近い＞ダーマの神殿＜等がその一つじゃな。」

「・・・＞ダーマの神殿＜・・・？」

男の言葉に反応したのはサラ。

サラはその名を聞いたことがあった。
僧侶を目指す人間にとっての『聖地』。
そこでは、その人間が持つ生まれながらの性質さえも変えてしまう程の能力を持つ神官がいると云われている。

「うむ。　しかし、東の国に行くには、ホビットだけが知っているという抜け道を通るしか手段がない。」

「・・・ホビット・・・」

＞ホビット＜とは、以前カミュ達が出会った＞エルフ＜族に属する種族。
その姿は『人』よりも小さいがその俊敏さや器用さは、『人』を遥かに凌ぐ者。
普段は、平和と食事を何よりも愛する大人しい種族であるが、いざとなれば、驚くべく芯の強さを見せる。

「この町より、少し北に向かった山肌にホビットが作った洞穴があるのだが、そこに住んでいる＞ノルド＜というホビットは、とぼけているのか、抜け道を教えてはくれぬのだ。」

「・・・他に東へと向かう方法はないのですか・・・？」

ホビットという種族を見たことのないサラは、若干の恐怖を感じる

が、男の話しぶりでは凶暴な生き物ではないようだ。
メルエは、その初めて聞く名前に興味を持ったのか、リーシャの手を握り、何かを聞きたそうな表情を浮かべるが、そんなメルエの視線に応える事の出来ないリーシャは、視線を逸らした。

「ない。　ここより東に向かう為には、その抜け道を通るか、それこそお主の言うように、船でも調達せねば向かうことはできないだろう。　やはり、＞ノルド＜が友と呼ぶポルトガ国王にお話し申し上げるしか方法はないかもしれんな。」

「・・・ポルトガ国王・・・」

ここにきて再び登場した国名。
それは、船旅をする為に寄ることが必須と言われた国。
カミュやサラの頭の中で何かが繋がり始めた。

「お主達に東に向かう気持ちがあるのなら、一度ポルトガには足を踏み入れるべきじゃろう。」

「・・・はい・・・貴重なお話をありがとうございました。」

「うむ。　旅の目的は何なのかは知らぬが、魔物が日に日に増えている。　気を付けて旅を続けられよ。」

礼を告げるカミュに、人の良い笑顔を向けた男に、一行は一度深く頭を下げ、部屋を後にした。リーシャの手を取っていたメルエも、移動と同時にカミュのマントの中へと入って行く。

外に出ると、月が少し雲に隠れたのか、テラスを照らす光が薄くなっている。

本当に淡い光だけが差し込むテラスは、暗い闇が広がり、先程まで幻想的に映し出されていた花々までもが、どこか萎れてしまったように禍々しく映っていた。

「・・・・・・・・・なにか・・・・・・・・・いる・・・・・・・・・・」

そんなテラスを一瞥し、階段を降りようと動き出すカミュのマントの中から顔を出したメルエが何かを呟いた。

その言葉に勢いよく振り返るリーシャとサラ。

しかし、そこは読みが広がっているだけだった。

「いないではないか。」

「・・・・・・・・・いる・・・・・・・・・・」

メルエに向かって否定を口にするリーシャに、メルエは頬を膨らませて反論した。

メルエがここまで強情になるということは、間違いなく、このテラスにカミュ達以外の何者かがいるということ。
それは、カミュだけではなく、リーシャもサラも理解した。

「・・・テラスに出てみる・・・・」

「えっ!?　で、でも・・・」

腰にしがみ付くメルエを少し剥がし、テラスへと足を向けるカミュに、サラは抗議を向ける。サラはかなり恐怖していた。サラが恐怖するというものは、ただ一つしかあり得ない。
暗闇が支配する夜に出現するもの。
カザーブの村にて、サラが見た怪奇。

「ふふふ。　サラ、怖いのか？　手を繋いでやろうか？」

「なっ!?　こ、怖くなどありません!」

そんなサラの様子にからかいを向けるリーシャ。
ここ最近、サラをからかうことが少なかったリーシャは、ここぞとばかりにサラに言葉を向け、挙句の果てには子供扱いをして手を伸ばす。

そんなリーシャの姿に憤慨したサラは、顔を背け、ずんずんと歩き

出す。
そして、カミュの前に出て、先頭を歩き出した。
その様子に、若干呆れ顔をしたカミュに、不思議そうに見るメルエ。
そして、笑いを堪えながら笑顔を作るリーシャ。
なんとも、闇の中に似つかわしくない雰囲気が流れる。
それは、唐突に終焉を迎えた。

「 なっ！？ 」

「 カミュ！ あ、あれは・・・」

先頭を歩いていたサラが絶句する声が響く。
その後ろを歩いていたリーシャが、サラが驚いた原因を視界に入れ、驚きと共にカミュへと振り返ったのだ。

「・・・・どう見ても・・・・・魔物だな・・・・・・」

カミュが答えた通り、テラスの縁付近に、ちょこちょこと動き回る一つの影が見える。
しかも、その影のシルエットは、決して『人』のものではない。
背丈こそ小さいが、頭の先から伸びる角。
そして、手元には、巨大なフォークのような形状の矛。
月明かりが少ないとはいえ、その姿は『魔物』であることに間違い

はないだろう。
しかし、何故、町の中に魔物が入り込んでいるのか。
町には、基本的に国からの守備兵が備えられており、どこの国にも属さない自治都市であるアッサラームにも自警団が備わっている。
このような魔物が町に入れば、かなり大きな騒ぎになるのは確実なはずなのだ。
それが、誰も気がつかない状況で魔物が侵入している。
町や城の安全対策を根底から揺るがすものであった。

「カミュ、どうする？」

「・・・放っておいてもいいが・・・そういう訳にはいかないだろ・・・」

リーシャの問いに、カミュの視線はある人物へと移った。
そこにいるのは、人を導き、悪を駆逐することを生業としている者。
今のその瞳は、目の前をちょこちょこと動き回る魔物を見据えている。

「当たり前です。『人』の営みの地である、町までもが魔物に侵されるなど、私は許しません。」

瞳は魔物に向けたまま、サラの口調は真剣なものに変わっていた。
その言葉に、視線を戻したカミュの瞳を見て、リーシャは薄く笑う。

『皆、変わり始めている』と・・・
以前のカミュであれば、この場を何の躊躇いもなく去っただろう。
サラの意見を聞く事などあり得なかった。

以前のサラであれば、カミュの言葉に憤りを感じていただろう。
魔物を発見し、『放っておいてもいい』等、『勇者』が発する言葉ではない。
しかし、サラはその言葉を容認して尚、自分の意見を発したのだ。

「ふふふっ。　メルエ、魔法の準備はいいか？　このテラスは広いがあまり無茶な魔法は使うなよ。」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

笑みを浮かべ、足元にいるメルエに注意を促すと、杖を構えたメルエが表情を引き締めて頷いた。
準備はできた。
後は、魔物と対峙するだけである。

「・・・・にゃ～ん・・・・」

「「「「　？？？　」」」」

その時、近づくカミュ達の存在にようやく気が付いたその魔物が、奇妙な鳴き声を発した。
カミュ達は、その突然の奇行に、揃って首を傾げる。

意味が解らない。
何故、猫の姿など何処にも見受けられない魔物が、猫の鳴き声を上げるのか。
そんな一行の姿を見て、小さな魔物も首を傾げる。
何とも緊張感に欠ける空気。

「ギッ!?　クソッ・・・・バケソコネタカ・・・・・・」

「「「「　！！！！！　」」」」

そんな空気を破ったのは、魔物の方だった。
そして、カミュ達一行全員が、息をのむ程に驚く。

魔物が『人』の言葉を使ったのだ。
それも、何の違和感も覚えさせない程に完璧に。
それは、知能が高い証拠。
魔物の姿は人型である。
それも、メルエと同じ頃の子供の様な姿。
それが、人語を理解し、使いこなす程の知能を持つ。

＞ベビーサタン＜
その名の通り、子供の様な容姿を持つ魔族。

その内に秘めた能力は未知数で。
数多くの魔法を所持していると言われている。
ただ、容姿同様に、中身も幼いのか、それら全てを使いこなしている姿を見た者はいない。
手に持つ武器は、子供が使うフォークをそのまま巨大にしたような矛であり、その先端は鋭く研がれ、人間の肉を容易く貫く。

「マァ・・・ドチラデモオナジダ。」

そんな言葉を発し、構えを取った＞ベビーサタン＜に、一行が我に返る。
虚をつかれた形となり、突き出すフォーク型に光る＞ベビーサタン＜の矛をカミュは咄嗟に＞うろこの盾＜で受け止める。

金属が壁に当たる様な鈍い音を立てて弾かれ、防いだカミュも数歩後ろへと後ずさる。
見た目はメルエと同じぐらいの子供の姿ではあるが、魔族の名に恥じぬ力。
カミュが後ろへ下がったのを見て、リーシャは気を引き締め直し、両手で＞鉄の斧＜を握って魔物に向かって行った。

ブゥン

リーシャの一閃は、小さな＞ベビーサタン＜の頭の上を通過する。
リーシャの動きを見て、咄嗟に屈みこんだのだ。

「メルエ！」

「・・・・ん・・・・・・ヒャド・・・・」

態勢を整えながら、後方で杖を構えるメルエへとリーシャは指示を出す。

リーシャの言葉に一つ頷いたメルエは、＞魔道師の杖＜を魔物へ向け、詠唱を行った。

メルエの杖の先から迸る冷気。

それは、真っ直ぐ＞ベビーサタン＜へと向かって行った。

「ギッ！」

しかし、その冷気は魔物の身体に届くことはなかった。

冷気に向かって、その左手に持った矛を振り抜いたのだ。

振り抜かれたフォーク型の矛が生み出した風圧により、＞ヒャド＜の冷気が霧散される。

しかし、それでも消しきれない冷気が、矛の先を凍らせるが、それも僅かな部分。

並みの魔法使いではないメルエの＞ヒャド＜だからこその威力ではあるが、それでもメルエの魔法が完全に防がれたのだ。

「・・・バ・・！！！」

そして、そんなメルエの横から、今度は、サラが呪文の詠唱に入るが、詠唱途中で＞ベビーサタン＜の動きを見て絶句した。
それは、サラが見たことのない詠唱の形。
何の魔法なのか、どれ程の威力があるものなのかも分からない。
ただ、軽視してはいけないということだけは理解できた。

「　み、みなさん！　身構え・・・」

「　イオナズン！！！！　」

サラの皆への警告は、＞ベビーサタン＜の詠唱に掻き消された。
その詠唱は、間違いなく人語。
人語での詠唱の為、『イオナズン』という魔法の名前だけがしっかりとサラの頭の中に残った。

「「「「　？？？　」」」」

どれ程の魔法なのかが分からない一行は、掻き消されたサラの声を耳にし、それぞれ身構えたが、いくら待っても＞ベビーサタン＜が振り下ろしたフォーク型の矛の先から、魔法が発動することはなかった。

メルエ等は、明らかに敵の前ですべきではない筈の、小首を傾げるという行動を取る。
幼い彼女から見れば、以前の自分の様に、自らの魔力を矛に流し込む行為が出来ないのだと映ったのかもしれない。

「　ギッ！！　」

「あっ！　ま、待て！！」

そんな一行の隙をつき、＞ベビーサタン＜は、テラスから外へと飛び出して行った。
真っ先に我に返ったリーシャが、飛びだした＞ベビーサタン＜の後を追うが、もはや飛び降りた後であり、横薙ぎに振った＞鉄の斧＜は再び空を斬った。

「　カ、カミュ様、町には大勢の人達が！　」

「・・・追うぞ・・・」

魔物が逃げ出したことに、呆然としていたサラだが、魔物の逃亡というものが齎す最悪の結果に思考が辿り着くと、勢いよく振り返り、カミュへ行動を促した。

カミュとて、一つの町が自分達の取り逃がした魔物によって『阿鼻

叫喚』の地獄絵図になることを望んでいる訳ではない。故に、踵を返し、部屋を横切った先にある階段に向かって駆けだした。その後ろをリーシャとサラが続く。

そして、メルエだけが取り残された。

表に出ると既にそこは『地獄絵図』と化していた。

広間に出た先の中央には＞ベビーサタン＜。

そして、その左手に持つフォーク型の矛の先は天ではなく地に向かっている。

そして、倒れ伏す男。

男の背中には、深々とフォーク型の矛が突き刺さり、その命の源である血液が湧き水のように地面へと流れ出ている。

それを円を囲むように眺める人々。

その野次馬達の表情には、驚愕と恐怖、そして絶望に彩られていた。

カミュ達が中央へと足を踏み入れた時、止まっていた時が再び動き出した。

「きゃあああああああああ！！！」

「ま、まものだぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

一人の女性が上げた悲鳴を皮切りに、次々と逃げ出す町人達。
前にいる人間を押し退け、倒れ伏した者を踏みつけ、我先にと逃げ惑う人々。
それは、『人』としてではなく、『生物』として当然な本能。
しかし、その姿がサラにはとても醜く見えていた。

子供を抱えて逃げる母親を押し倒し、その上を走る男。
自分より前を走る人間の髪を掴み、引き倒してでも前に出ようとする者。
その光景は、もはや知性や理性を持った『人』ではなく、本能に突き動かされている『獣』と同じ。＞ベビーサタン＜から目を離すことなく構えを取るカミュやリーシャとは違い、サラはそんな『人』であった者達を眺めていた。

メルエはその小さな足を全力で回転させ、階段を下りて行った。

『置いて行かれる』
その恐怖がメルエを突き動かしていた。
前を行くサラの姿が、メルエが階段を下りきる前に見えなくなった。
メルエの目に涙が浮かぶ。

メルエが外に出た時、そこは人で充ち溢れていた。
昔見た町でもここまで人々が一点に集中していたことはない。

「・・・・・・カミュ・・・・・・リーシャ・・・・・・」

自分に向かって押し寄せてくる人の群衆。
メルエは必死に前に進もうと足を動かすが、自分の倍近くの身長がある大人たちが半狂乱になって押し寄せてくる中を掻き分けて前に進むことは、メルエには不可能だった。

狂ったように腕を振るう男の肘を頭に受けてよろけ、押しのけて前に出てくる女に弾き飛ばされ、最後に、身体が曲がった所に足を受けて倒れた。

倒れたメルエを蹴り飛ばすように迫ってくる足に、メルエは、自分の腕で頭を庇い、蹲ることしかできなかった。
いつも自分を何からも護ってくれる三人は近くにいない。
メルエの胸を襲う孤独と哀しみ。

溢れ出てくる涙を抑えることはできず、地面には次々と雫がこぼれ落ちる。
背中を襲う衝撃、足を襲う痛み。
その全てが、メルエの恐怖を増長させた。

「・・・・・・サラ・・・・・・・・」

『メルエを護る』と宣言してくれた、優しく慈愛に満ちた笑顔を浮かべた僧侶の顔が浮かぶ。
いつも自分を包み込んでくれる女戦士。
そして、自分が最も安全な場所と思っている、周囲から『勇者』と呼ばれる青年。

彼等三人にとって、メルエとの時間は短い期間なのかもしれない。
だが、この幼い少女にとって、それが全てだった。
自分が生まれて初めて感じた、『生』という時間。
それを与えてくれたのは、彼等三人。

「・・・・・・うぅぅ・・・・・・・」

哀しみに涙を流すメルエの背中に再度衝撃が襲う。
それでも、メルエは、ゆっくりと立ち上がった。
自分が大好きな、自分の居場所に帰る為に。

転がった杖を拾い上げ、背中や肩に衝撃を受けてよろけながらも、前を向こうと必死に立ち上がる。その間も自分の顔や頭に痛みが走る。

そして、痛みを堪えながら、立ち上がったメルエの視界が開けた。
周囲の人間達が逃げ終わったのだ。

メルエの前に見えるのは、アッサラームの中央広場。
そして、突如現れた魔物・・・・

「メルエ！！」

普段叫び声など上げない無口な青年の声が広場に響く。
メルエと魔物の距離は、メルエが頼りにする三人と魔物の距離より明らかに近い。

自分の状況に気が付いて、メルエが杖を構えるのは遅すぎた。
＞ベビーサタン＜が逃げるために一点突破を目論んだ場所はメルエだった。
フォーク型の矛を構え、＞ベビーサタン＜が突進してくる。

その時、一つの影が動いた・・・・

カミュは後悔した。
これ程、自分の行動を後悔し、自分を許せないと感じたのは、何時

以来であろう。

『メルエがいない』

それに気が付いたのは、魔物を追い詰めるために、＞ベビーサタン＜を囲んだ時であった。

いつもなら、戦闘の時は同道する僧侶の後ろで杖を構えているメルエの姿が見えない。

その僧侶は、カミュやリーシャと同じように＞鉄の槍＜を構え、魔物を見据えている。

『メルエが心配』という理由で、自分は、宿屋に残るはずだったメルエを強引に連れ出したのだ。それなのに、今初めて、メルエの存在がないことに気が付いた。それにカミュは愕然とした。

「メルエは！？」

隣の女戦士に問いかけると、その女戦士の表情も急変する。

自分もこの戦士も、そしてあの僧侶も、魔物に気を取られ過ぎた。

『自分らしくない』

カミュは、そう唇を噛んだ。

普段なら、町の人間が魔物に襲われようが、特段気にする事等ない。

例え、アッサラームの人間が何人魔物に殺されようと、自分には関係がない。

そう考えていた。

だが、イシスで女王に言われたように、自分の中で何かが変わり始めている。

それにカミュは気が付いていた。
そして、それに戸惑い、必死に否定しようとしていたのだ。

「カミュ！」

自分の思考に陥っていたカミュを呼び戻したのは、顔面蒼白になっている女戦士だった。
顔を上げたカミュは、彼女の視線の先を見た時、表情を失くした。

そこにいたのは、埃と泥にまみれた服を払うこともせず、顔や腕に痣を作った少女が佇んでいたのだ。それこそ、カミュの後悔の原因となっている少女。カミュが生まれて初めて護りたいと考えた他人。

「メルエ！！」

カミュ達が囲んでいた＞ベビーサタン＜がメルエに向かって矛を向ける。
距離を考えれば、どうあっても間に合わない。
この旅で、カミュがそう思ったことは何度かあるが、それはカミュが間に合わないという状況だった。しかし、今は、メルエを護るべき人間三人全てが、間に合わない。

その時、カミュの視界の片隅に、一つの影が横切った。
野次馬のように集まっていた人間は、全て広場から散って行ったはずだ。
残されたのは、カミュ一行と魔物。

そして、最初に殺された男だけのはずだった。

ズブッ！

「　ゴフッ！　」

カミュがその影を視界に入れると同時に、肉に鋭い刃先が突き刺さる音と、配管が詰まったような音が広場に響く。

目を瞑ってしまっていたサラが目にした光景。
それは、一人の女がメルエにしがみつくように抱きつき、その背中に深々と矛が突き刺さっているもの。そして、その女性をカミュの様な冷たい視線で見下ろしているメルエの姿だった。

「・・・ごほっ・・・ふふっ・・・今更さね・・・・」

メルエの目の前で、大量の汗を掻きながら微笑む妙齢の女性。

それは、かつてメルエと共に暮らし、そしてメルエを奴隷として売り飛ばした女性。

魔物が襲ってくる瞬間、杖を振る時間もなく迫り来る矛を見ていたメルエに、突如衝撃が走った。抱きつかれるような人間の温かみと、アルコールの臭い。それは、以前のメルエが毎日傍で感じていたものだった。

「・・・・・・・ゴボッ・・・・・・・・」

突き刺さっていた矛が抜かれたのだろう。
苦痛に満ちた表情を浮かべ、僅かに血を吐いた。

「 ギッ！ 」

抜いた矛を再び向けた＞ベビーサタン＜は、背筋どころか、全身が凍りつく程の圧力を後方から感じた。

「・・・・誰に矛を向けている・・・・・」

静かな、とても静かな声が響く。
それは、何の感情も見いだせない程の冷たい声。
＞ベビーサタン＜は恐怖と共に振り向こうと身体を捩るが、ついにその声の主の姿を見ることは叶わなかった。

＞ベビーサタン＜の首が地面に落ちた。
しかし、それはこの場では些細なことだった。

「・・・・・メルエ・・・・マントを汚し・・・ちまった・・・ね・・・」

「・・・・・・・・・」

自分が吐いた血が掛かり、マントについた血痕を震える指で拭おうとするアンジェをメルエは無言で見下ろしていた。
冷たく、そして何の感情も見いだせない表情で。

そのメルエの瞳にリーシャは恐怖した。
以前、この町でカミュが話していた事。
『親を他人として見る』ということが、メルエを見て真実だと知った。

サラは、葛藤していた。
この町で許せないと思い、例え魔物に襲われても救う気なども起き

ないと考えていた女性が起こした行為に。
自分が何かに偏った視点で見ていたのではないかと。

「・・・・ふふっ・・・・そうさね・・・・あたしは・・・・ゴホッ・・・そんな・・目で見られる・・・・ことを・・・・」

「・・・・・・・」

カミュ達三人は遠巻きで見ているしかできない。
この女性の傷は、どう見ても致命傷。
例え、カミュを瀕死の状態から救い出したサラの＞ベホイミ＜でも、回復させることはできない。もっと高位の回復呪文であれば、何とか出来たのかもしれない。

それでも、自分のやるべきことをと考え、女性に近づき、サラは＞ベホイミ＜の詠唱を繰り返し行うが、傷は塞がらない。消えかけた命の灯が再び燃え上がることはなかった。

「・・・メルエ・・・・あたしが・・・あ・・・たしが・・・言えること・・・ではないけれど・・・・しあ・・・わせ・・・に・・・幸せ・・・に・・おなり・・・・」

「・・・・・・」

アンジェの絞り出すような最後の言葉も、メルエには届いているのかどうか解らない。
ただ冷たく、ただ空虚な瞳を、メルエはアンジェに向けていた。

「・・・・これ・・を・・・・・・」

最後の力を振り絞って、アンジェは自分の髪に刺さっていた髪飾りをメルエの髪に差した。
それは、若かりし日のアンジェが、憧れていた先輩踊り子から譲り受けた髪飾り。
最後まで幸せを運んでこなかったと思い込んでいた髪飾りであったが、アンジェは常に身に着けていた。

そして、アンジェの前にカミュ達が現れた時、アンジェは知ったのだ。
確かにこの髪飾りは、自分に幸せを運んできてくれていたのだと。
ただ、自分がその幸せを手放し、放棄したということを。

「・・・・・メルエ・・・・・・・」

最後に、本当に愛おしそうにメルエの名を呼び、その茶色の髪を撫で、笑顔を向けたアンジェの瞳が閉じられた。ズルズルと崩れるようにメルエの身体から離れて行くアンジェの姿を、何の感情も見出せないメルエが見下ろす。

「「「・・・・・・・・」」」

最後の最後で、母としての行動を起こした女性を、サラは責めることができなかった。
いつの間にか、サラの頬には大粒の水滴が流れ落ちている。
それは、＞ベホイミ＜をかけている最中だったか、それともメルエとアンジェの会話の間だったか。もうそれも解らない。その涙の理由もサラには解らなかった。

「・・・・・・・・」

そんなサラの涙を余所に、自分の身体から離れたアンジェを見下ろしていたメルエが、おもむろに自分の髪に手をやり、髪飾りを取り外した。
そして、そのままその手を高々と掲げた。

「メルエ！！」

しかし、その行為は、メルエが姉のように慕う女性に止められた。
ビクッと震えるようにメルエの身体が固まる。

「それを投げ捨てることは、私が許さんぞ！」

「・・・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・・・」

メルエに向けられるリーシャの厳しい視線。
その瞳を見上げ、悔しそうに唸るメルエ。
そして、メルエは、再びその手を動かした。

「メルエ！　それを投げ捨てたら、その時点で私とメルエの旅も終わりだ！」

「！！！　・・・・・うぅぅ・・・・ぐずっ・・・・」

投げ捨てようと振り上げた腕は真上で止まり、だらりと下げられた。
リーシャの言葉は、メルエにとっては最後通告。
これ以上ない程にメルエを絶望の淵へと落とす言葉だった。

「メルエ・・・・気持ちはわかります・・・・でも、それはここに仕舞っておきましょう？」

手と共に頭まで下げてしまったメルエの視界にサラの顔が入ってくる。
息を引き取ったアンジェの遺体を横たわらせ、手を胸の前で合わせた後、リーシャの叫びに委縮してしまったメルエの肩を抱き、話し始めたのだ。

サラは、メルエの握りしめた手を開き、その中にあるアンジェの髪飾りを取り出した後、メルエが肩から下げるポシェットを指差し、優しく微笑んだ。
そのサラの笑みを受けてもメルエの首は縦に振られることはない。

「・・・・メルエ・・・・・」

思い詰めたように俯くメルエにサラはもはやかける言葉はなかった。
『気持ちは解る』とは言ったが、真にメルエの気持ちがサラに解る訳はない。
幼い頃、魔物によって親を失った孤児とはいえ、それまで受けてきた両親の『愛』は今でもサラの心の支えとなっている。
物心ついた頃から『愛』を知らないメルエの気持ちを理解することはできないのだ。

「・・・何にしても、メルエとの約束を破った俺達に何も言う資格などない・・・」

「・・・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・・・・・・・」

押し黙るメルエに、どうしたら良いのか解らなくなったサラの後ろから、サラとは違う歪んだ『愛』を受けて育った青年が歩み寄った。
その声の主を見上げるように、ようやく上げられたメルエの瞳には涙が滲んでいる。

「・・・・メルエ・・・・すまなかった・・・・」

「カミュ・・・」

「カミュ様・・・」

メルエの前に屈みこんだカミュは、一度メルエと視線を合わせた後、深々と頭を下げた。
その突然の行為に、リーシャもサラも言葉を失う。
何故カミュが頭を下げるのか。
それが二人には思いつかない。
しかし、頭を下げられた幼い少女は、カミュが頭を下げる理由が分かったのか、大粒の涙を流し始める。

「・・・・・・・・・・・こわ・・・・・かった・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・ん・・・・本当に、すまなかった・・・・・」

一言。
本当にたった一言呟いたメルエは、カミュの胸へと飛び込んで行く。
もう一度謝罪するカミュの言葉は、メルエの大きな鳴き声に掻き消された。

カミュの胸で泣くメルエの姿を見て、ようやくリーシャとサラの胸にも答えが浮かぶ。

『怖かった』

メルエのその言葉が何を意味するのかを。

魔物の存在に気を取られ、メルエの身を案じることを疎かにしていた。

全員が飛び出すスピードにメルエが付いて来ることが出来ないことは、＞ピラミッド＜からの脱出の際に解っていたことだ。

一人取り残されるメルエの胸にはどれ程の『哀しみ』と『恐怖』が襲いかかってきたことだろう。幼い頃の『恐怖の対象』であった女性と相対する時に、メルエの心を何が支配したのだろう。

あのメルエの無表情は、決して『他人』を見るものではなかったのだ。

『恐怖』

ただ、それだけがメルエの身体を固めていたのかもしれない。

「・・・メルエ・・・すまなかった・・・」

「・・・メルエ・・・ごめんなさい・・・」

未だにカミュの胸で鳴き声を洩らすメルエに、近寄ったリーシャが頭を下げる。

同時に、サラもまた深々と頭を下げた。

『メルエを護る』と本人の前で誓ったのだ。
それも、イシスからこのアッサラームに来ることを怯える今日の朝に。
それを破ってしまった。

メルエは無事である。
だが、それは今まで旅を共にしてきた三人が護ったものではない。
メルエが怖れたアンジェという義母がその命を賭して護ったのである。

メルエのすすり泣く声が、人々が消えうせた広間に静かに響く。

雲一つない青空、太陽がようやく大地を照らし始めた。

昨日の騒動の跡は、もはや町のどこにも見られない。

この町の良い所でもあり、冷たいと感じる部分。

自分に被害さえなければ、昨日起きた事象に気を取られている暇など、この町の住民にはないのだ。

今日もまた朝の清掃が始まり、陽が落ちれば、再び自分の夢を掴むための道が人工的な灯りによって照らされる。

そんな自分の夢に貪欲な人々が眠りに付く早朝。

一人の少女が、一つの墓標の前に立っていた。

その瞳は、昨晩この墓の下に眠る女性に対して見せた冷たいものではなく、何かを思いつめたような、そんな哀しい瞳の色を彩っていた。

この幼い少女が、何を思い、何を見ているのは、本人にしか解らない。

「・・・・・・・・・」

メルエは、暫くその墓標を眺めた後、無言で墓標に何かを掛けた。

それは、一つの花冠。

メルエが被る＞とんがり帽子＜に掛けられた物のように美しい出来栄えではないが、何種類もの花を輪にし作られた物。

メルエは、あの不思議な世界で、アンの作る花冠を完成までずっと眺めていた。

アンの様に作り方を教えてくれた師はいない。

見よう見真似なために、出来栄えもお世辞にも綺麗とは言えない。

それでも、メルエは今朝早く起き、これを作る為に野花を集めた。

「・・・・・メルエ・・・・・やはりここにいたのか？」

「！！・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・」

後ろから掛った声に、驚いたようにメルエは振り返った。
そこに立っていたのは、一人の青年。
メルエを絶望の淵から救い出し、この世に希望と夢を与えてくれた青年。

「・・・用は済んだか・・・？」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

カミュは、数刻前に例の如くリーシャに叩き起こされた。
『メルエがいない』と。
心配はいらないだろうと返すカミュに、烈火の如く怒りだしたリーシャを抑えるために、同じ様に叩き起こされたサラを含めた三人で町を探し始めたのだ。

リーシャの必死な姿の理由が解るだけに、カミュは不満を洩らさなかった。
昨日の件が彼女を苦しめているのだろう。

『メルエとの約束』を破った上に、メルエの行動を止める為とはいえ、そのメルエを置いて行くという脅しを使ったのだ。

何事も真っ直ぐに感情を出すリーシャだからこそ、あの場で口を吐いてしまったのだろうが、その事を悔やんでいる。起きた時に隣のベッドが空になっていたのを見た時、リーシャは血の気が引いたのであろう。その証拠に、カミュの部屋へと突入してきた時のリーシャの顔は、この世の終わりのように真っ青な顔をしていた。

「・・・メルエ・・・少し待っていてくれ・・・」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

そう言ったカミュは、メルエを待たせ、墓標の前に屈みこんだ。

暫し目を瞑ったまま、カミュは黙り込む。

昨晩、カミュの胸の中で泣くメルエを囲むように集まった三人の下に、一人の神父が近づいてきた。いつの間にか町の住民達の何人かは広間に戻り始めていたのだ。

『アンジェと最初に殺された男は、教会の墓地で安置する』と言う神父の提案をカミュ達は有難く受けた。アンジェも、もはや身寄りは誰もない。
誰もアンジェの故郷を知らないため、教会が引き取る形となった。

最初に殺された男をこの時、初めて三人はまともに見ることになる。
それは、カミュとリーシャには見覚えのある顔。
そう。イシスの闘技場で見た兵士だった。

カミュ達の監視のためにこのアッサラームに戻ったのだろう。
どのように戻ったのかは解らない。
＞ルーラ＜が使用できたのか。
それとも＞キメラの翼＜を使ったのか。

何れにしても、この町に入った兵士は、町の広間で起こった騒ぎに遭遇したのだろう。
そして、人の営みがある町の中に入り込んだ魔物を見た。
そして、立ち向かったのだ。

彼は、本当の意味での『兵士』だった。
ロマリア国から監視という役目を受けていた。
そして、このアッサラームという町は、ロマリア国領でもない独立した自治都市。
それでも、彼は力無き町の人間を護るため、単身で魔物に立ち向かった。
このアッサラームやイシスの周辺に住みつく魔物であれば、彼にでもどうにかなったのかもしれないが、昨日出てきた魔物は、見たことのない＞ベビーサタン＜。

力及ばずに彼は息絶えたが、彼が命と引き換えに作ったその時間が、

アッサラームに住む全住民の命を護ることとなる。

『どんな命を受けていようと、彼もまた誇り高き騎士だったのだな』

運ばれていく兵士の遺体に呟いたリーシャの言葉に、サラは再び涙を浮かべ頷いた。

＞ノアニール＜を出る時にサラは『人』の業を見、大いに悩んだ。

そんなサラに掛けたリーシャの『人の一部』という言葉。

醜い心も『人』であれば、この尊い心も『人』なのだ。

サラは、それが嬉しく、そして哀しかった。

「・・・行こう・・・メルエ。」

「・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

アンジェの墓標と、名も知らぬロマリアの兵士の墓標の前で目を閉じ終えたカミュは、立ち上がり、優しい表情をメルエに向ける。

一つ頷いたメルエは、もう一度アンジェの墓標に目を向けた後、カミュの手を握り、青い顔で半狂乱になっているであろうリーシャが待つ宿屋へと戻って行った。

アッサラームの町？（後書き）

読んでいただきありがとうございました

これで第四章も終了です。

次は装備品一覧を更新します。

ご意見やご感想を心よりお待ちしています。

※勇者一行　装備品一覧（前書き）

装備品一覧です。
そんなに大きく変化はないですね（汗

※勇者一行　装備品一覧

装備一覧

【名前】：カミュ

【職業】：勇者

勇者としての重き責務を負い、自分を殺す日常を送ってきていた。しかし、この旅に出てから、周りにいる人物達の変化を見て、自身が少しずつ変わってきていることに戸惑い、それを受け入れられずにいる。

【年齢】：１６歳

歳の割にかなり達観している部分もあるが、その歳の青年らしい負けん気も持っている。

【装備品】

頭）：サークレット

胴）：みかわしの服
ノアニールで手に入れた服は、ピラミッドでリーシャを庇う際に受けた攻撃で破損し、イシスの町に戻った際にサラとメルエで買い物に行き、新調した物。

盾）：うろこの盾

武器）：鋼鉄の剣
勇者として、祖父オルテナから全ての武器の鍛練は受けているが、アッサラームで鉄の斧を持つリーシャに語った内容からすると、剣を極めて行くつもりらしい。

所持魔法）：メラ
ホイミ
ギラ
ルーラ
アストロン

【名前】：リーシャ・デ・ランドルフ

【職業】：戦士（アリアハン宮廷騎士）
通常、戦士という職業は『考える』という行為をしない人間が多い中、彼女は常に考える。
自分の理解できないことを必死で理解しようとし、自分が知らないことを知ろうとする。
その姿勢には、カミュでさえも感心した。

【年齢】：不明

【装備】

頭）：なし

胴）：みかわしの服

砂漠を歩くためにノアニールで買い揃えた。

当初、女性ということもあり、防具屋の女房がスカート式の物に仕立てたが、背丈の大きさからミニスカートのようになってしまい、当のリーシャは相当慌てた。

盾）：青銅の盾

武器）：鉄の斧

カミュとサラがアッサラームの武器屋でリーシャ用として買った物。

当初は嫌がってはいたが、メルエの尊敬に近い眼差しとアッサラームに入ってから初めての笑顔を見て、自分の武器とすることを決める。

リーシャ自体は５０００ゴールドもする武器だと思っている。

所持魔法）：なし

魔法力が皆無なため、契約及び行使は不可能。

【名前】：サラ

【職業】：僧侶
『人の業』に悩む心優しき僧侶。
魔物を憎む心は消えてはいないが、現在は魔物を殺すということよりも優先される『誓い』が胸にある。

【年齢】：１８歳
アッサラームに入る前の森の中で誕生日を迎え、１８歳となった。
カミュよりも２つも上になったことで、若干歳上ぶる場面がある。
１８歳の女性としては、身体的に成長が遅く、その事を揶揄され激昂することがある。

【装備】
頭）：僧侶帽
胴）：みかわしの服
みかわしの服の上から法衣に付いている十字の刺繍がある前掛けを下げている。
盾）：青銅の盾
武器）：鉄の槍
リーシャの虐めに近い鍛練の効果もあり、今では魔物と一対一で対峙することも可能となっている。
本人は、カミュやリーシャという強者を見ているだけに、自分の力はメルエを護るのが精一杯だと思っている。
所持魔法）：ホイミ
ニフラム
ルカニ
マヌーサ

キアリー
ピオリム
バギ
ラリホー
ベホイミ

【名前】：メルエ

【職業】：魔法使い
メルエにとって、魔法の使用が可能な『魔法使い』という職業は、今や誇りに近いものとなっている。
幼い彼女の胸の中には、どこかでまだ『魔法』が自分の存在意義という考えが残っている。

【年齢】：7，8歳
メルエを拾った義母であるアンジェの話を辿ると、大よそそのぐらいの年齢となる。

【装備】
頭）：とんがり帽子
メルエのお気に入り、友であるアンの作ってくれた花冠が掛けてある。

胴）：アンの服
みかわしの服と同じ素材でできた服。

盾）：なし

武器）：魔道師の杖
　　毒針
リーシャを護るために『決意』を固めたメルエは魔法力の支配を完成させる。
その為、魔道師の杖の先から魔法の行使が可能となり、今では自虐的な魔法の行使とはなっていない。

所持魔法）：メラ
　　ヒャド
　　スカラ
　　スクルト
　　ルーラ
　　リレミト
　　ギラ
　　イオ
　　ベギラマ

※勇者一行　装備品一覧（後書き）

第五章もできるだけ早く、更新致します。

先日更新した最新話でＰＶが歴代最高になってました。

読んで頂いている方、本当にありがとうございます。

ご意見やご感想など、どしどし頂けると嬉しく思います。

ロマリア大陸？（前書き）

お待たせいたしました。

ロマリア大陸？

一行は門をくぐり、町の外に出る。

宿屋で朝食を食べる時、リーシャはしきりにメルエの世話を焼いていた。

本来、メルエの躾役であるサラが、食事の時はメルエの隣の席に座っていたが、リーシャにその場所を取られたサラは苦笑しながら戸惑うメルエを眺めていた。

「カミュ？　まずはどこに向かうんだ？」

「・・・・話に出て来た＞ノルド＜というホビットのいる洞窟へ向かう・・・・・」

メルエの手を引いたリーシャが、門を出てすぐにカミュへと問いかけを投げる。

良く晴れた空を見上げながら、カミュはそれに答えた。

カミュに釣られて空を見上げるメルエの表情は笑顔。

リーシャはそれが嬉しかった。

メルエの表情を見る限り、その表情の理由が『虐待を行われてきた

義母からの解放』というものではないことが解る。
メルエの中で、何かが変化したのだろう。
それが、アンジェへの認識なのか、それともメルエの気持ちなのかは解らない。
それでも、空を見上げ、両手を広げながら笑顔で青空を見ているメルエを見ていると、その変化が悪いものではないことだけはリーシャには解った。

カミュは、『親を他人として見ている』とメルエを評価した。
リーシャは、そうではないのではと考えている。
メルエは虐待を行うアンジェに諦めた訳でもはない。
ただ単にその『愛』を今尚欲していただけなのであろう。
故に、昨日アンジェにつかまり恐怖で身体を硬直させながらもその行為を見ていた。
メルエの髪を愛おしそうに撫でるアンジェを見た時に自分の中にあるアンジェの姿が崩れて行ったのかもしれない。それを見て、軽い混乱に陥り、感情的に髪飾りを投げ捨てようとはしたが、一晩ベッドの中で何かを考え、そして答えを出したのだろう。

「ふふふ。　メルエ、ほら。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

笑顔のメルエを見つめ、頬笑みを浮かべたリーシャは、メルエに向かって手を差し伸べる。
笑顔のままリーシャに頷き返し、メルエはその手を取った。
彼等の旅はまだ始まったばかり。

だが、確実に一人一人の心は変化していく。
それは成長なのかどうかは、本人達も解らないだろう。

前を行くカミュがアッサラームから北の位置にある森の中へと足を踏み入れる前に、何やら詠唱を始める。

「「「　？？？　」」」

カミュが詠唱を完成させるのと同時に、カミュの身体を淡い青色の光が包み込む。
その光は次第に大きく広がり、最終的には、サラやメルエ、そして最後尾を歩くリーシャをもすっぽりと覆う程のものとなった。
まるで魔法力のドームの中にいるような感覚を味わうが、それも一瞬のこと。
全員をすっぽりと覆い終わった青い光は、その色を失くしていき、次第に消え失せた。

突然の出来事に驚いた三人であるが、その不思議な光景に同時に首を傾げる。
そんな三人の表情を無視し、詠唱を終えたカミュはそのまま森の中

に入って行った。

「カミュ？　先程の魔法は何なのだ？」

森をしばらく歩いた後、少し休憩を兼ね木の根元に座り込んだ時、水筒の水を飲み終えたリーシャがカミュへと問いかけた。
サラもまた興味深そうにカミュを見上げ、メルエは水筒の水を美味しそうに飲んでいる。
メルエにとって魔法は特別な物であるが、別段それに興味を示す訳ではない。

「・・・トヘロスという魔法らしい・・・」

「・・・らしい・・・？」

周囲を見回り、木の根元に腰を落としたカミュがリーシャの問いに答えるが、その言葉にサラは妙な引っかかりを覚えた。
まるで他人から聞いたような言葉。
不明確な答えで、自分でも正しいのか解らないとでも言うような口ぶりに疑問を持ったのだ。

「もしかして、『あの夜』に女王様から拝領した魔道書の魔法か？」

「・・・何が言いたいのか理解はできないが、あの魔道書に載っていた魔法だ。」

「で、では、『勇者』様にしか使えない魔法というものですか？」

「・・・・・・・カミュ・・・・・・・ずるい・・・・・・・・」

カミュの言葉に思い至ったリーシャが、一部分を強調するように問いかけるが、カミュはそんなリーシャを不思議そうな表情で見た後、その問いを肯定した。
カミュが頷くのを見たサラが『古代英雄の残した遺産』という答えに辿り着き、カミュ専用という言葉に、水を口に含んでいたメルエが不満を漏らす。

「それは、どんな効果のある魔法なのですか？」

「そうだな。私達の周囲を包み込むように光っていたが、あれは何なのだ？」

頬を膨らますメルエを微笑ましく見た後、サラはその効力を聞き、自分達に効力を及ぼす為、リーシャもまたカミュへと視線を戻した。

「・・・簡単に言えば、＞聖水＜と同じ効果を持つ魔法らしい。魔

法力が包み込んだ部分には弱い魔物は近寄る事が出来ない。まぁ、余りにも力量が違う魔物には効果はないようだが。」

「・・・力量が違う・・・？」

カミュの回答に再び首を傾げるサラ。
しかし、流石に数多くの魔物と、宮廷騎士として対峙してきた経験のあるリーシャはカミュの発言を理解できた。

「サラ。　つまり、私達よりも強い魔物ということだ。　私達が相対したことのない魔物の中には、信じられない魔物もいるだろう。　今の私達ではどうしても敵わない魔物もいるのかもしれない。」

「えっ！？　わ、私達は『魔王』を倒すために旅をしているのではないのですか？」

サラはリーシャの口にすることに驚愕した。
まさか、生粋の戦士であるリーシャがこのようなことを言うとは思っていなかったのだ。

「確かに、私達の目的は『魔王討伐』だ。　しかし、今の私達が『魔王バラモス』に勝てると思う程、私は馬鹿ではないつもりだ。」

「・・・ふっ・・・」

リーシャが口にする言葉一つ一つが妙な違和感を持たせる。
サラには、それが何故であるか解らないが、カミュは横で鼻で笑うような態度を取った。
瞬時に鋭い視線をカミュに向けるリーシャ。
サラが縮み上がるような視線を受けても、カミュは口端を上げる仕草で笑っていた。

「このパーティーの力量はまだまだ未熟だ。　それは、何もサラやメルエのことだけではない。　カミュや、当然私もまだまだ未熟者の一人なんだ。　だが、サラも気付いているだろうが、私達の力量は、アリアハンを出た頃よりも確実に上がっている。」

「は、はい。」

カミュに向かって苦虫を噛み殺したような表情を浮かべたリーシャが言葉を続ける。
その内容はサラも感じていた事。
アリアハンを出た時には、サラが使えた魔法等たかが知れていた。
それは、何も契約をしてこなかった訳ではなく、契約ができなかったという理由があってこそなのだ。つまり、サラは、ここまでの旅の中で、新しい魔法の契約を可能とするだけの力量を備えたということに他ならない。

「今日明日にでも『魔王バラモス』を倒すべきなのは理解しているが、私達が魔王の居城に明日辿りつける訳ではない。　魔王と対峙する時、その力量を身につけていればそれでいいとも思っている。」

「はい。」

「・・・・・・・・・・メルエも・・・・・・・・・・・・」

リーシャの言葉に、納得したように真剣に頷くサラ。
そして、自分もと声を上げるメルエ。
そんな三人の姿を見て、カミュは水を口に含んだ。

カミュが習得した新魔法＞トヘロス＜により、森の中で魔物と戦闘を行うことはなかった。
途中、＞キャットフライ＜と出くわしはしたが、カミュの周囲を包む雰囲気をあからさまに嫌がり、一行に襲いかかることなく逃げて行った。

魔物との戦闘もなく一行は森の中を進み、森の先にある山肌にぶつかる。

そびえ立つ山肌は、険しい外観を表し、東へと向かう者をはっきりと拒んでいるようだった。

「カミュ様。　あれではないですか？」

「・・・・・・・・・あ・・な・・・・・・・・・・・・」

しばらく山肌に沿って歩む一行は、陽が高く上りきった頃、その横穴を見つけた。
先頭を歩くカミュに何かを発見した旨を告げるサラの言葉に、メルエもその方向へと視線を向け、その存在を告げる。

メルエの言葉通り、木が生い茂り見えにくくはあるが、確かにぽっかりと山肌に穴が空いている。それは、人が立って入れる程の大きさで、明らかに人工的に掘られたことが解るものであった。

「・・・入るぞ・・・」

穴の内部を少し確認したカミュの言葉に、一行は軽く頷き、洞窟内へと足を踏み入れた。

その洞穴は、入口こそ明かりが日光しかないものであったが、内部は所々に火が灯され、カミュ達が＞たいまつ＜を使用する必要はなかった。

「魔物の気配が全くありませんね。」

「そうだな。　これ程の洞窟内に魔物がすみつかないとは。」

サラが口にしたように、この洞窟内には不思議と邪気に満ちてはいなかった。
＞西の洞窟＜にあった『聖なる泉』の周辺の様な聖なる空気に満ちている訳ではないが、邪悪な気配は一切しない。

サラの呟きに答えたリーシャが言うように、これ程の規模の洞窟内であれば、魔物が住処として好むものと言ってもいい。
しかし、これ程邪悪な気配がしないとなれば、魔物が一匹もいないと言ってもいいのだろう。

「・・・・あれは・・・・・？」

周囲への警戒を弱めて、そのまま一本道を進む一行の前に、一段と大きな明かりが見えた。
先頭を歩くカミュが漏らした言葉に、全員が前方を注視すると、そこには一段と明かりの強くなっており、生活感のある家具などが置かれた部屋が見えた。

「こんな場所に、人が住んでいるのか？」

「そ、そのようですね。」

その奇妙な様子に当然の疑問を口にするリーシャの言葉をサラが肯定した。
家具は、手作り感のある木でできた物で、テーブルと椅子が一組。
誰かが住んでいたとしても、一人住まいの可能性が高いことが見受けられた。

「なんだ？　アンタ達は？」

きょろきょろと周囲を見渡していたメルエは、急に聞こえた声に驚いたが、声と共に奥から現れた姿にそれ以上の驚きを表す。

それもそのはず。
奥から現れた、先程の野太い声の持ち主は、顔面を覆い尽くす程の髭を蓄えた男。
肌は浅黒く、腕は太い。
しかし、メルエが驚いたのはそこではない。
身長がメルエとそう変わらないのだ。

「・・・アリアハンから来ましたカミュと申します。　東の大陸に渡りたく、ホビット族のノルド殿という御仁を探しております。」

「ほぉ・・・」

表れた小人と思われる中年の男にカミュは軽く頭を下げた後、目的を話し始める。
例の如く、カミュが話し始めたことで、後ろに控えるリーシャとサラは口を開くことはしない。メルエもまた急ぎリーシャの下に戻り、リーシャの後ろに隠れるようにしながら、興味深げに小人を見ていた。

「私がその＞ノルド＜だが、東の大陸に渡る方法など知らんぞ。」

「・・・・そうですか・・・・」

正直な話、ノルドと名乗る小人は驚いていた。
エルフ族に連なる者といえども、ホビット族は所謂小人である。
それも、同じく小人族であるドアーフ族とは違い、強大な力もない。
通常の『人間』であれば、その姿を見て侮り、罵ることもある。

それが目の前の若者にはない。
どんなに表面を繕っていても、内面で考えていることは滲みでてくる。
いや、それがこのホビット族の特技の一つなのかもしれない。
相手が考えている事など、良く解る。
現に若者の後ろに控える、僧侶帽を被った少女は、通常の『人』が考えるようなことを頭に浮かべているようだった。

「アンタは何者だ？」

「・・・申し訳ありません。　おっしゃっている意味が理解できませんが・・・・」

カミュを不思議な生き物を見るような目で見ていたノルドは思わず、その疑問を口にしてしまった。突然掛けられた言葉に、今度はカミュが困惑を示す。
そんなカミュの姿を見て、ノルドの顔は自然と緩んで行った。
彼は、本当にノルドの言葉が意味する内容に思い当たるものがないのだろう。
つまり、彼にとって、ホビット族という種族を蔑視する理由がないということ。

よくよく彼の後ろに控える者達を見れば、その表情の奥に困惑や驚きが見えるが、侮蔑や嫌悪のような不愉快な物は何一つない。
青年と同じぐらいの背丈がある戦士の様な女性は、初めて見る生物への純粋な驚きがあり、その足元でちらちらこちらを見ている幼い少女の目は、単純な好奇心が露わになっている。
最も『人』としての色が濃い僧侶でさえ、『人』以外の生物に対する『恐れ』こそあれ、侮蔑の視線を向けてはいないのだ。

「悪いが、アンタ達の言う『東の大陸への道』はここにはない。」

「・・・・では、どこに・・・・？」

少し緩んだ表情のまま、ノルドが口にした言葉に、カミュは純粋に疑問を呈す。
そのやり取りに、ノルドは思わず笑い声を洩らした。

「ははは。　アンタはあの方達によく似ているな。」

「・・・・あの方達・・・・・？」

ノルドの頭に浮かぶ二人の人物。
それはカミュと同じように、自分を特別視しない瞳を持った二人の男。
一人は、一国の王という『人』の世界で最高位に値する地位を約束されながらも、見聞を広めるために世界を歩いた男。
そしてもう一人は・・・・

「アンタはアリアハンから来たと言っていたな？」

「・・・・はい・・・・・」

ノルドの口ぶりが、カミュの頭に嫌な予感を感じさせる。
そして、それは現実のものとなる。

「『オルテガ』という人物を知らぬか？」

「　！！　」

「　オルテガ様もここに訪れたのか！？　」

予想通りのノルドの言葉。
しかし、予想はしていても、その名が出たことにカミュの眉は顰められる。
ノルドは、その表情に『嫌悪』を見た。
いや、『憎悪』に近いのかもしれない。

青年が黙してしまったことにより、後ろに控えていた女性の戦士が口を開く。
相手に物を尋ねる物言いではないが、彼女の心に見下しているような感情がないため、それがこの女性の人柄なのだろう。若しくは、育ってきた環境なのかもしれない。

「ほぉ・・・何やら関係がある人間か？」

「カミュ様は、その『オルテガ』様のご子息です。」

今度口を開いたのは、最も『人』らしい僧侶。
その口調も生来のもののようだ。

彼女の生い立ちが、何に対してもどこか遠慮をしてきたものなのだろう。

いつもはカミュの出自を口外することを控えているサラであったが、ここではっきりとカミュの出自を告白した。それは、オルテガの息子というステータスがあれば、このホビットが東への道を教えてくれるのではないだろうかという考えがあったためだ。

「そうか。　ならば、その瞳も合点が行く。」

「では、東への道も・・・」

「いや、オルテガ殿は、東へは行ってはいない。　確か、ポルトガから船に乗ったという話だ。」

一人頷いたノルドの姿に、サラはもう一度東への道を尋ねるが、返ってきた答えは期待通りのものではなかった。
ノルドの話では、オルテガは東の大陸には徒歩ではなく船を使って渡ったということ。

「まぁ、今は海の魔物の凶暴化によって、連絡船などは出ていないかもしれないがな。」

そして、続いた言葉は、サラだけではなく、リーシャをも絶望へと

落とすものだった。
徒歩で歩く道もなければ、海を渡る船も出ていない。
それは、『魔王討伐』の旅の終わりを意味するのだ。

「さぁ、私はそんな道は知らないんだ。　帰った、帰った。」

愕然とするサラを追い出すように、ノルドは手を叩きながら一行を穴の外へと誘導する。
言葉こそ邪険な物であるが、その対応は一行の歩調に合わせた物で、トコトコと歩くメルエに優しい視線を送り、微笑む場面などもあった。

メルエもまた、微笑まれたことによって、ノルドと視線を合わせて微笑み返す。
幼い彼女にとって、初めて見る種族ではあるが、そこはやはりメルエであった。
誰に対しても何の先入観もない。
『自分に微笑んでくれる』
その嬉しい行為だけで、メルエは心を許す。
いや、最大の原因は、カミュかもしれない。
メルエの傍にいるカミュが敵対心を表していない。
それが、メルエの中の方程式なのかもしれない。

「カミュ、どうするんだ？」

穴から抜け、森に出た一行は、目的地を見失い途方にくれる。
そんな中、口を開いたのはパーティー最年長の女性だった。
しかし、それは、方向性を示すものではなく、そのパーティーのリーダーである青年に方向性を求めるという、何とも他人まかせなものだった。

「・・・一度ポルトガに行くしかないだろう。　東の大陸へは『船』を使うしかない。　今現在、ポルトガから船が出ているかどうかは解らないが、行ってみるしか選択肢が残っていないはずだ。」

「・・・そうですね・・・」

そんなリーシャに、軽く溜息を吐いたカミュの言葉は、一時的な代替案だった。
サラもまた、カミュの言う通りに、選択肢が一つしか残っていないことを理解し、同意を示す。胸の前で腕を組んだリーシャも、そんなカミュの言葉に小さく頷き、一行の方向性が決定した。

「しかし、カミュ。　ポルトガにどうやって行くのかは知っているのか？」

「はっ！？　そ、そうですね・・・肝心のポルトガへの道を知らない事にはどうにもなりません。」

方向性は決まったが、そこへ行く方法がリーシャもサラも思いつかない。
故に、今回も、全てをカミュへと丸投げすることになる。

そんな二人の言葉にもう一度溜息を吐いたカミュは、少し離れた所で、木を見上げているメルエに視線を向けた。
メルエにとって、三人の会話の内容には興味がない。
三人が行く場所にただ付いて行くだけ。
もはや、メルエが恐怖を抱く場所などどこにもないのだ。

「・・・ロマリアの西に関所があるらしい。　その関所に行ってみる・・・・」

「そ、それは・・・もう一度ロマリア城に上がるということですか？」

ロマリアの西にある関所というのであれば、当然ロマリア国が管轄する関所となる。

ロマリア国とポルトガ国を結ぶ関所を無断で通過するわけにはいかない。

しかし、サラも、そしてリーシャも、ロマリア城に上がることに拒絶感があった。

自分達の監視のために兵士を送り込んだ国。

しかし、その兵士は任務の全うよりも、『人々の生活の守護』という兵士としての道を選び、その尊い命を落とした。

リーシャとサラの心に影を落としているのはそのことだった。

「・・・必要があれば、そうする・・・」

カミュはそう言うが、必要がない訳はない。

それこそ、強引に関所を突破すれば、一行は晴れて犯罪者となり、ロマリア国が大義名分を掲げて討伐を命じることができるようになるのだ。

「わかった。　では、まずロマリア城に向かおう。　メルエ！　行くぞ！」

「・・・・・・ん・・・・・・」

行く場所も、方向性も決まった。

もはや、後は動き出すだけだ。

リーシャは、未だに木を見上げ、この森に住む小動物を嬉しそうに

眺めているメルエを呼び寄せ、森を抜けるために歩き出す。

サラはまだ何か思うことがあるのか、思い詰めた表情を浮かべるが、リーシャと共にカミュも歩き出したことに気が付き、慌ててその後を追うこととなる。

カミュの『トヘロス』の効果が切れたためなのか、ロマリア領へと向かう一行の前には再び『魔物』が襲いかかってくる。

＞キャットフライ＜に＞暴れザル＜等が大半で、＞暴れザル＜に対してはサラの＞マヌーサ＜や＞ラリホー＜といった補助魔法で撹乱した後、止めをメルエの攻撃魔法で刺すといった形で倒していった。

＞キャットフライ＜に至っては、イシス地方の魔物と相対し、＞ピラミッド＜内部で死線を潜りぬけて来たカミュ達にとってもはや敵ではなかった。

＞キャットフライ＜が＞マホトーン＜を唱える暇もなく、カミュとリーシャがその翼を切り落とし、サラがその胸を突き刺した。

力量の差に怯え、逃げ出す魔物をカミュは追うことはせず、リーシャもまた、その魔物の姿を遠目に見ながら構えを解く。

唯一人、サラだけは未だに魔物を逃がすことに抵抗感を持ってはい

たが、その魔物を追うことはせず、苦々しい表情を浮かべて見つめていた。

一行は、ロマリア領とイシス地方を結ぶ大きな橋の手前で野営を行い、翌日の陽が昇り始めたと同時に、その橋を渡り始める。

「メルエ、いつまでも見ていると日が暮れてしまうぞ？」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・」

橋から見える雄大な大地。
それをメルエが橋の手すりの下から眺めている。
朝日の輝く川。
その先に広がる大地。
そして遠くそびえ立つ山々。
それは、本当に幻想的な光景だった。

皆が橋を渡って行く間、カミュのマントから抜け出したメルエは、その光景をまるで目に焼き付けるかの様に眺めていた。
その姿を、どこか哀しげに見つめるサラ。
メルエと共に、後方から遠い目で見つめるカミュ。
このままではいつまで経っても前に進めなくなるのではと感じたリーシャが、手すりを掴むメルエに声をかけ、手を伸ばした。
リーシャの言葉に、振り向いて頷いたメルエは、その手を掴む。

この橋を渡りきれば、そこはロマリア領。
様々な事があった大地にカミュ達は再び降り立った。

厭味たらしい門番を相手にせずに城下町内に入った一行は、その活気に驚いた。
カミュ達が初めてこの城下町を訪れた時も、その活気に驚きはしたが、ここまでのものではなかったはず。
それがサラには不思議であり、少し困惑の表情を表すが、彼女の同道者はどこか納得がいったような表情を浮かべていた。

「カミュ。　この活気は何なのだ?」

そんなサラの疑問と同じものを感じたリーシャが、例の如くカミュへと問いかける。
その問いに、振り向いたカミュは、これもいつも通り深い溜息を吐いた。

「・・・税率でも下がったのだろう・・・」

「なに？　どういうことだ？」

そして、これまたいつも通り、リーシャはカミュの言葉が指し示す結論に到達できない。

しかし、カミュの一言で、サラはその結論に達することができた。

「つ、つまり、ノアニールから税を取り立て、この城下町の税を軽減させたということですか？」

「・・・おそらくな・・・・」

カミュの予想。

それは、復活したノアニールの住民に重税をかけ、その分『お膝元』である城下町の税を軽減させたというのだ。税が下がれば、人々の暮らしに余裕が出る。余裕が出れば、人々の消費力が高まる。消費力が高まれば、店などにも活気が出る。店に活気が出れば町に出てくる人間も増えると言った良い循環になっているということだった。

「な、ならば、逆にノアニールの村は、どんどん寂れて行くではないか！？」

「・・・周辺国の視線が集まるのは、この城下町だけだ。　国領の

田舎であれば、ある程度は無理が利くのだろう。　逃げるにしても、国外には出る事などできないのだからな。」

「そ、そんな。」

ようやく理解に及んだリーシャの投げかけに返すカミュの言葉は、サラを絶句させるような内容だった。ただ、国を切り盛りするということは、サラが考えているような綺麗事だけでは無理なこともまた事実なのである。

「・・・・・・・」

「・・・メルエ、呆けているとはぐれるぞ・・・」

カミュのマントから手がいつの間にか離れ、周囲を興味深そうに眺めていたメルエにカミュが呼びかけ、その声に気が付いたメルエがカミュの下へと戻ってくる。
メルエですら、この活気に驚きの表情を浮かべたのだ。
メルエが育った場所は、夜の町＞アッサラーム＜。
それでも尚、メルエが驚いたことに、今のロマリア城下町の雰囲気が解るだろう。

「・・・城に上がる・・・」

メルエが戻ったことを確認したカミュは、ロマリア城へと続く街道を真っ直ぐ歩いて行く。
その後ろをメルエとサラ。そして最後尾をリーシャという順で、一行は城へと向かった。

「ほう・・・勇者カミュよ、よく戻った。」

「はっ。　ロマリア国王様におかれましても、ご健勝のことお慶び申し上げます。」

謁見の間に通された一行を待っていたのは、以前と変わらず玉座に座る二人の王族。
ロマリア国王と、ロマリア国の施策を担っているであろう王女である。

「して、此度は如何様な用向きじゃ？」

「はっ。　この先の旅を続けるに当たり、ポルトガ国への入国をお許し頂きたく、参上いたしました。」

跪くカミュの、仮面をつけた会話は進む。
その間、カミュの後方に控えたリーシャ達三人に出番はない。
顔を上げることもせず、ひたすら床に敷いてある赤い絨毯を見つめ続ける。

「ほぉ・・・ポルトガとな・・・」

「はっ。」

その時、カミュの言葉に少し考える仕草をする国王の横の玉座に座る王女が、何かを思いついたような表情を浮かべた。

「ポルトガは貿易で伸し上がってきた国。　『船』を手に入れるおつもりですか？」

「・・・いえ・・・『船』を手に入れる程、私達に余裕はございません。　もし、定期的に船が出ているのであれば、乗船させて頂こうとは考えております。」

国王に代わり口を開いた王女の言葉に、カミュは律儀に答えて行く。
カミュのその言葉に、王女は、カミュ達が＞イシス＜においても、国からの援助を断ったことを知った。実際は、そのような申し出がなかったのだが、『勇者』という存在が各国を訪れるのは、援助の願いが第一目的であることが多いからだ。

「なるほど。　良いでしょう。　西の関所の守兵には、貴方方のことは伝えておきます。」

「・・・有難き幸せ・・・」

「しかし、ポルトガと我が国を隔てる通路には、その昔に鍵をかけておるはず。　それはどうするのじゃ？」

国王を差し置いて、カミュ達に許可を出す王女の言葉に、カミュは若干驚きを見せるが、すぐに表情を戻し、丁重に頭を下げた。
しかし、会話に乗り遅れた国王が、一つの危惧を口にする。
カミュは、国王の言葉にもう一度顔を上げた時に、国王へと視線を向ける王女のどこか歪んだ笑みを見た。

一国の王女といえども、それはカミュが先日相対した、絶世の美女が浮かべる微笑みとは真逆の物。慈しみと優しさにあふれた微笑みと違う、どこか黒い影が伴う微笑み。

「確かに、あの扉の鍵はもはやこの国にはありませんね。」

「ならば、この者達もポルトガへと渡ることはできぬであろう。」

王女が口にした言葉は、カミュ達一行を驚かせたが、その後に続いた国王の問いに返答した王女の言葉は、絶望すら感じるようなものだった。

「いえ。　私達は、この者達に許可を与えたのです。　その後のことをどうするのかは、この者達の仕事。　私達には関係ございません。」

「・・・・・・・」

許可は与えた。
そこへ行くのは許すが、その扉を開き、ポルトガへと渡る方法は、自ら考えろ。
という王女の考えにカミュは言葉を失った。

もしかすると、あの朝にカミュが王女に発した言葉を、根に持っているのではとも思ったが、この聡明な国の独裁者がそのような些細なことで嫌がらせをするなどということは、カミュには考えられなかった。
そこが年若いカミュの限界なのかもしれない。

「・・・ポルトガへの入国のご許可を頂き、有難き幸せ。　関所に関しては、私どもの方で思案いたします。」

「そうですか。　ではご用も済んだ様子。　これにて・・・・・」

「・・・お待ちください・・・」

カミュがもう一度頭を下げたことにより、王女が謁見の幕を下ろそうとするが、その声を顔を上げたままのカミュが遮った。
王族の言葉を遮るなど、罪にも値するほどの行為。
それを、仮面を被ったままのカミュがするということに、後ろに控えていたリーシャとサラも驚きを表し、思わず顔を上げてしまった。

「まだ何かあるのか？」

そう問いかけるロマリア国王に対し、一度瞳を閉じ、一息空気を飲み込んだ後、カミュは口を開いた。
その言葉は謁見の間の空気を凍らせた。

「・・・アッサラームで一人の兵士が命を落としました・・・」

「「　！！　」」

カミュの言葉に、リーシャとサラは息を飲んだ。
まさか、カミュがその事を口にするとは思わなかったのだ。
ロマリアの監視ではないかというのは、カミュ達の推測でしかない。
推測の域を出ないものを、疑惑の相手にぶつける事の愚かしさを知らないカミュではないはずだ。しかも、相手は一国の王族。王族に疑念をぶつけるなど死を覚悟しているとしか思えない。

「・・・それが、なにか・・・・？」

「・・・その兵士は、アッサラームやイシスまで我々の後を付いてきていました・・・」

「それは、我々ロマリア国が差し向けた者とでも言うつもりですか？」

カミュの話す言葉に、徐々に表情を険しくして行く王女。
反対に、ロマリア国王や大臣の表情は若干青ざめ、狼狽が手に取るようにわかる。
リーシャやサラが見ても、この国の実権の在処は一目瞭然だった。

「・・・いえ。　そうは言いません。　ただこれを・・・・」

「　！！！　」

カミュが差しだした物。
それは、王女ですら表情を変えるものだった。

それは、アッサラームのあの夜。
アンジェの遺体を運ぶリーシャやサラとは別に、兵士の遺骸を教会まで運んだカミュがその兵士の胸の中で見つけた物だった。

「・・・それは、兵士の身分証です・・・」

「「「・・・・・・・・・」」」

各国の正規の兵には身分証がある。
傭兵や使い捨ての兵などと違い、正規兵は国の所有物だからだ。

「・・・その兵士は、アッサラームの町で、町の住民の命を護るため、町に入りこんだ魔物と戦い、そして命を落としました・・・」

「　！！　」

身分証を大臣から受け取り、若干顔をしかめた王女ではあったが、

カミュが続けた言葉に息を飲んだ。国王はもはや灰のように佇むだけであった。

「兵士の亡骸はアッサラームの教会の墓地に埋葬されました。　その兵士の尊い犠牲により、町の住民の犠牲は皆無となりました。」

カミュの言葉に、リーシャやサラが反論の視線を向ける。
確かにリーシャやサラが考えている通り、アッサラームで犠牲はあった。
メルエの義母であるアンジェその人である。

「・・・どんな命を受けていたのかは解りませんが、自国から受けた命よりも、他国の町に住む住民の命を優先させたその兵士の死を、お伝えしないことは、色々とお力添えを頂いたロマリア王国に対する無礼に当たると思い、お持ちいたしました。」

「・・・・・・・」

リーシャとサラの視線。
そして、どこか哀しげな光を宿すメルエの視線を受けながらも、カミュは言葉を続ける。
そのカミュの目を見つめる王女の表情に、もはや狼狽は見えない。
未だにうろたえる国王と大臣とは違い、その表情はまさしく一国を束ねる王族の顔。

「・・・叶うことならば、その兵士の勇気と優しさにお褒めのお言葉を・・・」

最後にカミュはそう締めくくった。
その言葉がカミュの本心なのかは解らない。
ただ、その兵士に対してリーシャやサラが感じた『人』の一部をカミュも感じていたのかもしれない。
そう、リーシャは考えた。

「・・・話は解りました。　確かにこれはロマリアの身分証。　よくぞ持ち帰ってくれました。　大義であった。」

「はっ。」

暫しの逡巡の後、王女が口にした言葉。
それは、暗にカミュの言葉を全面的に認めたことになる。

カミュ達の監視のためにロマリアが兵を送ったこと。
それを明確に言葉にはしていないが、カミュ達がそのように考えていることは王女にも伝わっているはず。つまり、周囲の人間には解らなくとも、カミュ達に向かっての肯定ということになる。王女もそれを理解しての発言なのだろう。

「・・・・では・・・・」

「こ、これにて謁見を終了する。」

カミュが頭を下げたことを確認した王女が、未だに狼狽を見せる大臣に視線を送り、それを受けた大臣は慌てたように謁見の幕を下ろした。

謁見の間を出て行くカミュ達一行の背が消えた後、王女は深い溜息を吐いた。
それは、どんな意味を持つものなのかは、隣に座る国王には解らない。

「父上・・・この兵士は、身寄りのない者。　ただ、このままでは国の沽券に係わります。　直ちにアッサラームに使者を向け、遺体の引き取りを。」

「・・・うむ・・・」

王女の言葉に、頷く国王。

再び国王としての威厳を戻した国王は、傍に立つ大臣に視線を送り、それを受けた大臣は人選や手配の為、席を外す。
必然的に国王と王女の二人となった謁見の間に静けさが広がる。

「今回はしてやられました。　まさかあのような形で報告してくるとは・・・」

「これからは、あ奴等の行動を監視することが難しくなるのぉ。」

一つ溜息を吐いた王女に、国王が思案気な表情を浮かべ、言葉を発する。
狼狽が顔に出やすく、交渉に向いていないといえども、そこは一国の国王。
これまでのカミュと王女の会話で、それが齎す弊害に思い至っていた。

「そうですね。　しかし、心配はいらないでしょう。　すでに各国へは通知済み。　彼等の行動は逐一世界に届くことは間違いないでしょうから。」

「ふむ。　しかし、あ奴等はポルトガに入国できるのか？」

「それも心配はいらないでしょう。　あの者達ならば。」

国王と王女の会話は続く。
カミュ達一行のこれからについて。

初めてこの謁見の間に現れた彼等を見た時、とてもではないが『魔王討伐』は無理だろうと国王も王女も感じていた。
それが、『金の冠』を取り返し、ノアニールの村を解放し、そして今、イシスへの旅を終えて新たな土地を目指して歩き出している。
王女は自分の胸にある彼らへの期待が会う度に大きくなっていることに気が付いた。

おそらく、彼ら自身は、周囲が感じる程の大きな『成長』を実感してはいないだろう。
しかし、彼等を一度でも見たことのある人間は、時間の経過と共に確かに変わって行く彼等を否が応でも感じずにはいられないのだ。

「・・・カミュ様・・・」

ロマリア城を出て、町の門へと続く街道を歩いている途中で、サラが口を開いた。

サラの声に振り向いたカミュに、リーシャが口を開く。

「何故、アッサラームでの犠牲を皆無と言ったのだ!?　お前は、あの女性は『人』ではないとでも言うつもりなのか?」

リーシャが発した言葉は、サラと同じもの。
謁見の間で疑問に思い、危うく反論の声を上げそうになったもの。

リーシャは、メルエの義母であるアンジェの死に様を侮辱するようなカミュの言葉が許せなかった。確かにアンジェがメルエに行ってきたものは許されることではない。
しかし、あの最後は、母としての確かな『愛』を感じるものだった。
カミュの言葉は、その『愛』すらも否定するようなもの。
それがリーシャには悔しかった。

「・・・はぁ・・・誰が何時そんなことを言った?　アンタが短絡的なことは知っていたが、いい加減にしてくれ。」

「　な、なに!?　」

そんな怒りに燃えるリーシャに向かって発したカミュの言葉は、溜息の混じった明らかな呆れ。もはや諦めの境地に達していそうなそれに、リーシャは目を見開いた。

「・・・メルエ・・・」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

リーシャの視線を無視し、カミュはメルエを自分の下へと呼びよせる。

呼ばれたメルエは、先程までの会話で下がった眉のまま、カミュの下へと駆け寄ってくる。

カミュのマントの裾を掴み、見上げるメルエの帽子を取り、軽く頭を撫でる。

くすぐったそうに目を細めたメルエの表情から哀しみが少しずつ消えて行った。

「・・・あれは、俺の責任だ。　あの兵士が負うものではない・・・」

「・・・カミュ様・・・」

カミュに言わせれば、それはカミュ達一行の責任であり、あの兵士が背負うものではないという事なのだろう。

カミュがメルエの動向に注視し、メルエと共にあの広間に出ていたら、アンジェの命が散ることはなかったのだ。

それが、カミュの胸に残る懺悔。

「・・・あの時、メルエと共に宿屋に残ると言ったアンタの意見を無視し、メルエを連れて行くことを強行したのは俺だ。　あの義母(はは)親が死ぬことになったのは、そんな俺の独断の責任。」

「・・・・カミュ・・・・・」

カミュの表情は、今までに見たことのない程の悲痛なもの。
それがカミュの後悔の深さを物語っていた。
リーシャはそれが理解できた。
カミュを胸の奥で苦しめている後悔が・・・

「・・・・・・・・わらっ・・・・・・てた・・・・・・・・・・」

「・・・・メルエ・・・・・？」

そんな苦しみの表情を浮かべるカミュに声をかける事が出来ないリーシャとサラ。
その時、不意に口を開いたのは、カミュのマントの裾を握る幼い少女。
アンジェに庇われ、その命を救われたアンジェの義理の娘であるメルエだった。

「・・・・・・・はじ・・・・めて・・・・・・・・」

「・・・メルエ・・・」

悲痛な表情のカミュに、何とか伝えようと一所懸命に話すメルエにサラの目から涙があふれ出す。それが、何の涙なのかはサラにすら解らない。
ただ、メルエの哀しみを含んだ必死な表情がサラの涙を誘うのだ。

「・・・・・メルエ・・・・・に・・・・・・・・」

「わかった。　わかった、メルエ。　もういい。　もういいんだ。」

メルエの頬を水滴が流れる。
そのあふれ出る涙を見た時、リーシャが動いた。
メルエを後ろから抱き締め、その髪に顔を埋める。
メルエは、あの町を出てから哀しみの表情を見せることはあっても、決して泣くことはなかった。それを見たリーシャは、カミュの言うように『アンジェを他人として見ている』という言葉が、どうしても頭から離れずにいた。違うと思っていても、頭の片隅では『やはりそうなのでは？』という想いが抜けなかった。

だが、それは間違いだったのだ。
メルエは、しっかりとアンジェの最後の笑みの意味を理解していた。
故に、前を向いて歩いていたのだ。
カミュ達と出会い、喜びと楽しみを知ったメルエは、あの義母を許

せない気持ちはあっただろう。それは、髪飾りを投げ捨てようとする行動が示している。
しかし、それでもアンジェが最後に伝えようとしたものは、メルエの心に届いていたのだ。
リーシャはその事実に涙した。

「・・・メルエ・・・ありがとう・・・・・・・・・すまない。」

しゃがみ込み、後ろからリーシャに抱かれるメルエに視線を合わせたカミュは、相反した単語をメルエへと伝える。
自分を気遣ってくれたことへの感謝。
そして、護ることができなかったことへの謝罪。
それは、メルエだけでなく、メルエの義母をも護れなかったことへの謝罪だった。

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

涙を流しながらも、しっかりと頷くメルエに、サラの涙は加速する。
一人の幼子を中心に涙する集団は、活気あふれた城下町で異様な光景だった。
次第に周囲の注意がカミュ達一行に向けられることとなり、それに気が付いたカミュは門へと向かい歩き始めた。

「・・・・・・・・・・行く・・・・・・・・・・」

「あ、あぁ。　そうだな。　行こう、サラ。」

「は、はい・・・・ぐずっ・・・・」

メルエの言葉に立ちあがったリーシャは、サラへと声をかけ、三人は歩き出す。
周囲の奇異の視線を無視し、ただ前を歩く青年の背を追いかけて。

「ここは、ロマリア管轄の関所だ。　どのような要件だ？」

ロマリア城下町を出た一行は、ロマリア城から北西へと歩き、一夜を明かした後、この場所に辿り着く。
そこは簡素な関所だった。
守番となる兵士が一人。
そして、ロマリアとポルトガを結ぶであろう通路の入口と見られる場所は建物で覆われており、ロマリア王女の言っていた通りの扉が

ある。

「アリアハンのカミュと申します。　ポルトガへの入国許可はロマリア国王様と王女様に頂いております。」

訝しげにカミュ達を見つめる兵士に、仮面を被ったカミュが頭を下げる。
兵士の怪訝は当然の感情。
カミュ達のパーティー構成は、青年一人に女性が一人。
そして、まだ女性とは言い切れない少女の様なものが一人に、明らかな幼子が一人。
とても、『魔王討伐』等に向かう人間達には見えない。

「・・・確かに・・・しかし、この通路のカギは、当の昔に失われている。　カギを壊し中に入ろうとしても無駄だぞ?」

カミュから許可証を受け取り、中身を確認した兵士の言葉は、これもまた王女が話した内容と同じものだった。
扉は大きく、その周囲にはとても高い塀を持つ建物が覆っている。
扉は鉄製で、とても人間の力で破壊できるものではない。

「・・・カミュ様・・・どうするのですか?」

「流石にあの扉は、私でも壊せないぞ?」

「「・・・・・・・」」

小声でカミュに問いかけるサラの問いにカミュは振り向くことはなかったが、リーシャが発した言葉に、思わずカミュは振り返ってしまった。
同じく、疑問を呈したサラであっても、そんなリーシャを呆然と見つめてしまう。

「な、なんだ？」

「・・・はぁ・・・何でもない。」

自分に向けられる複数の視線にたじろぐリーシャに、カミュは溜息を洩らした後、兵士が護る通路への入口へと歩いて行った。

「どうするつもりなのでしょう？」

「・・・・・・・・カギ・・・・・・・・・ある・・・・・・・・・」

「　メルエ！　」

カミュの行動を不思議に思ったサラが口にした疑問に答えたのは、リーシャの手を握っていた少女だった。
メルエの答えと、入口の扉に辿り着いたカミュがメルエを呼ぶ声が

重なる。

「ん？　あっ！」

「そうか！」

カミュの下へと駆け寄り、肩から提げたポシェットの中身を探るメルエの姿を見て、ようやくリーシャとサラにも合点がいった。
何故、あれの存在を忘れていたのだろう。
その伝説となりつつあった道具を手に入れるために、＞ピラミッド＜と呼ばれる古代建造物へ入ったのだった。

メルエが今、ポシェットの中を確認しているのは、その＞魔法のカギ＜を取り出しているのだろう。基本的にカギ等の小物はメルエのポシェットに入っている。それは、メルエが持つことを主張したためでもあるが、メルエの方が激しい動きがない分、落として無くすことはないだろうというカミュの考えもあったのだ。
そこで、リーシャに持たせたりなどしたら『あっという間に、どこかに消えてなくなりそうだ』という余計な一言を付け加えたため、リーシャが激昂したのはまた別のお話。

カチャリ

メルエから＞魔法のカギ＜を受け取ったカミュが、扉の鍵穴にそれを差し込む。

カギを回すこともせずに、周囲に乾いた音が響いた。

「な、なんだそのカギは！？」

黙って成り行きを見ていた兵士が、十年以上前に紛失された鍵が開く現場を目撃し、言葉を失っている。もはや、徒歩でポルトガに渡ることは出来ないであろうとさえ思われていた問題が、今日の前で解決されたのだ。それも、まだ年若い四人の人間によって。

「・・・いくぞ・・・」

「・・・・・・ん・・・・・・・・」

守番に軽く一礼した後、重い鉄製の扉を開けたカミュは、その中へと入って行く。

カミュから返された＞魔法のカギ＜を大事そうにポシェットへと戻した後に、メルエが続いて行った。

「・・・ロマリアも、他国からの魔物の流入を恐れて、交流を閉じていたのですね。」

「・・・そうだな・・・」

カミュ達の後を追う前にサラが溢した言葉に、リーシャが一つ頷き、歩き出す。
サラの言う通り、元来この関所は関税などの徴収のためにあったものであったが、魔物の横行が激しくなり、そして世界の希望である一人の青年の死によってその門が閉じられることになった。

それは、他国からの強力な魔物の流入を恐れて、＞旅の扉＜という門を閉じたアリアハン国の様に。

今遭遇した、信じがたい出来事に呆然と佇む守番の横をリーシャとサラが通り過ぎ、十数年ぶりに開かれた重い扉を潜って行く。
そして再び、重厚感のある音を立て、その扉は閉められた。

しかし、もうその扉は誰もが開けられる扉。
他国との交流を再開させる、古い体質を破壊するような音を立てて閉まって行く扉を眺めながら、守番は我に帰った。

『誰も開ける事が出来なかったこの扉は、未来へと繋がる扉となるのかもしれない』

そんな誰にも言うことのできない不思議な想いが胸に湧き上がる。
不思議な感覚の余韻を残したまま、守番は報告の為にロマリア城に向かって歩き出した。

ロマリア大陸？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回は、戦闘もなしでしたが、次話には新たな大陸ですので・・・
新たな敵との遭遇を早く書きたいところです。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

戦闘？【ポルトガ地方】（前書き）

今回はかなり短めです。
この先を書いてしまうと、何か中途半端だったので、ここで留めました。

戦闘？【ポルトガ地方】

カミュ一行は地下に降りたところにある、長い直線の通路を歩いていた。

ロマリア王国とポルトガ王国は険しい断崖絶壁の山々に隔たれている。

そして、山々の隙間のようにぽっかりと空いた場所には、海から流れ込む大きな河が広がっていた。

ロマリアの関所を抜けた場所は地下への階段があり、地下へ降りた場所は、その河の真下に位置する。そこに地下通路が作られていた。

ロマリアとポルトガが友好関係を結んでいた頃、その行き来には流れが急な河であることから橋を架けることもできず、渡し船が必要であった。しかし、急な河を渡る渡し船の為、物資などの運搬はスムーズには行かない。

その為、その河の下にトンネルを作ることによって人々の往来をスムーズにしようと考えた両国の国王が多数の人員の犠牲を払いながらも建設を継続し、完成させた通路であった。

それが、今から約百年程前の話である。

カミュを先頭に、直線に延びる通路を歩く。

＞たいまつ＜に照らされた通路は、十数年使われなかったこともあり、埃にまみれてはいるが、魔物達の放つ邪気を感じさせない。

それが解るのであろう。
カミュの後ろをサラと、その手を握るメルエが歩く。
二人は所々で笑顔を見せながら、歌を口ずさんでいた。

ノアニールでサラの歌を聞いたメルエは、それからほぼ毎日、サラに歌をせがむようになっていた。サラが謡った歌を聞き、自分も口ずさむ。いつしか、文字や言葉を覚えるよりも早く、その音程を物にし始めていた。そこは義理とはいえ、世界で五指に入る歓楽の町＞アッサラーム＜の劇場でＮＯ．１の地位に手をかけた踊り子の娘ということかもしれない。

そんな陽気な二人の後ろを歩くのは、アリアハン屈指の騎士。
先頭を歩きながらも、時々振り向き、メルエの様子を確かめるカミュを見ながらリーシャは考えに耽っていた。

『カミュは変わった』

それが、今リーシャの頭の中にある想い。
徐々に変わりゆくカミュを見てはきたが、これ程に感じたのは始めたかもしれない。
そう考えたのは、ロマリア城での一件。

『・・・叶うことならば、その兵士の勇気と優しさにお褒めのお言葉を・・・』

カミュは謁見の間で、玉座に座る二人の王族に向かってそう語った。
初めは気にも留めなかった。
リーシャには判別できなかったが、カミュは何らかの交渉をしていたのではないかと思っていた。あの兵士のような、自分達の監視に対しての抑制。それの交渉をする為にあの兵士の死を美化した形で

国王に告げたのではないかと考えた。
しかし、それは、謁見の間を後にした時に、間違いだと気が付いた。

『・・・あれは、俺の責任だ。　あの兵士が負うものではない・・・』

そう語るカミュの表情を見て、リーシャは自分の浅はかさを悔やんだ。
カミュは心からそう感じていたのだろう。

自国の民でもないアッサラームの町民を救うために散った一人の兵士の命を尊いと。
それでも尚、失ってしまった一つの命は、その兵士が負うものではなく、その場に居合わせた自分が負うものだと。

アリアハンを出た頃のカミュであれば、間違いなくそんな考えをすることはなかったと、リーシャは断言できる。
『自分には関係のないこと』で済ませてしまっていただろう。
魔物と戦い散った兵士の命を『自分の力量も解らぬ馬鹿な男』と吐き捨てていたかもしれない。
メルエを庇って死んだアンジェを『自分の命よりも他者の命を優先した人間』と嘲笑ったかもしれない。
それこそ『無意味な死』と。

何がカミュを変えているのかは解らない。
ただ、カミュは確かに変わっていた。
魔物の命の重みを語った少年は、今まで蔑んだような瞳を向けていた『人』の命の重みをも体感しているのかもしれない。

それがこの先、カミュをどんな風に変えていくのか。

それはリーシャにも解らない。
ただ、その変化がもたらす可能性は広がったのではないかとリーシャは思っていた。

「・・・・・・・・シャ・・・・・・・・」

「ん？　どうした、メルエ？」

考えごとに耽っていたリーシャは、近くから聞こえて来た声で思考から戻される。
ふと足元を見ると、若干頬を膨らませたメルエがリーシャを見上げていた。

「・・・・・・・・いっぱ・・・い・・・・・・・よん・・・・だ・・・・」

「ん？　ああ、すまない。　少し考え事をしていたみたいだ。」

自分に向かって頬を膨らませるメルエを見て、リーシャは苦笑する。
おそらく何度もリーシャの名を呼んだのであろう。
自分を無視するように歩くリーシャに、哀しみを感じていたのか、目には涙まで溜めていた。リーシャは、そんなメルエの帽子を取り、軽く髪を撫でてやった後、メルエの手を握り直し、先頭でこちらを振り返っているカミュの後を追って歩き出した。

一行が地下通路を歩き終わり、階段を上った先は、ポルトガ領だった。
一段上がった場所にあるその関所の名残から見える広大な大地は見るものを魅了した。

大地の中央には、高くそびえ立つ巨大な山。
その周辺を樹海の様な森が円を作るように囲む。
そしてはるか遠くに見える海。
貿易国であるポルトガ城はその海の近くにあるのだろう。

「凄い光景ですね。」

「・・・・・・・・・・ひろ・・・い・・・・・・・・・・・・・」

「そうだな。　とても美しい。」

その光景を見たサラがメルエに感動を伝え、メルエが目を丸くする。
そんな二人に微笑みながら、遠くを見据えるリーシャ。
三人の髪をはるか遠くから吹く海風が撫でて行く。

「・・・・行くぞ・・・・・」

三人を一度振り返ったカミュが先を促し、広大な大地へと降りて行く。
新たなる大地への旅立ち。
彼等は、また一歩『魔王討伐』への道を踏み出した。

「お、おい！　カミュ！」

「・・・ああ・・・」

新たなる大地に降り立ち、地図を確認しながら、海の方へと進む一行の足取りを止める気配。その気配に気づいたリーシャが、気配のする方向に目を凝らし、驚きの声を上げる。
リーシャだけではなく、そちらに視線を動かしたカミュもまた、驚きに目を見開いていた。

サラの手を握るメルエは、サラの後ろに隠れてしまい、サラは武器を構えることも忘れ、その奇態な生物に驚きの視線を向けていた。

カミュ達の方向にゆっくりと近づいてくる四体の魔物らしき影。

それは、大きな人面に手と足が生えたような奇態な生物。
全体的に腐敗したような肉に顔面を持ち、その顔面から小さな手足が生えている。
その右手にはメルエの＞魔道師の杖＜のような木の杖を持っていた。

＞ドルイド＜
古代の僧侶と云われる者の名。
『聖霊ルビス』を信仰している教会に属している訳ではなく、独自の神を信仰する云わば『異教徒』であったため、人の町から追い出され、森や山の中で独自に生活をしていた。
その教えも独特であり、『人』を神への生贄として捧げるため、人の町での罪人を匿って、その者を生贄としたり、生贄の為に奴隷商人から奴隷を買ったりしていたと伝えられている。
いつしか、その存在が『人』の間で忘れ去られた頃に現れた魔物。
その身体は、数多くの人間の死肉でできており、多くの人々の無念が顔となって死肉に浮かび上がったと云われている。
生贄の死肉でできているのか。
それとも、ドルイドと呼ばれた僧侶たちの死肉でできているのか。
それは解らないが、森の奥から出てくるその姿を恐れた人々から『ドルイド』という僧侶の名称をつけられた。

「カミュ！　来るぞ！」

「・・・ああ・・・」

斧と剣を構えたリーシャとカミュは、それぞれ奇態な魔物へと向かっていく。
その二人の姿に我に帰ったサラもまた背中から＞鉄の槍＜を構え、メルエを後ろに庇う。
メルエをまた、杖を高々と掲げ、詠唱の準備に入っていた。
しかし、そんな一行の出鼻は大きく挫かれることになる。

「@%＃&@」

一体の＞ドルイド＜に向かって斧を振り上げたリーシャに、その魔物は手に持つ杖を向け、人語ではない詠唱を行ったのだ。
咄嗟の行動に、カミュがリーシャの方向に割り込んでくるが、それも間に合わない。

リーシャの周囲の空気が真空と化し、鋭い刃となって襲いかかって来た。
庇うように入って来たカミュが＞うろこの盾＜を掲げるが、それも襲いかかる真空の刃を全て防げるわけではない。

「　くっ！　」

自分の皮膚を切り裂いて行く風に苦痛の声を洩らすカミュ。
そして、その後ろにいるリーシャもまた斧を持つ手を切られていた。

「・・・一度下がるぞ・・・」

「わ、わかった。」

真空の刃がある程度落ち着いた時に、カミュが振り返ることなく発した言葉に、リーシャも一つ頷き、二人はサラとメルエがいる後ろに下がった。

「だ、大丈夫ですか？　ホイミをかけます。　こちらへ。」

戻ってきたカミュとリーシャの身体のいたる所から血が流れているのを見たサラが、二人の身体に＞ホイミ＜をかけて行く。
淡く光る、緑色の光が二人の患部を包み込み、傷を癒す。

「サラ、ありがとう。　もう大丈夫だ。　それより、カミュ。　あれは＞バギ＜か？」

「・・・アンタ・・・魔法の名を憶えていたのか？」

「な、なんだと！？」

サラの治療を受けたリーシャは、視線を＞ドルイド＜から外すこと

なく、カミュへと問いかけるが、同じく＞ドルイド＜に視線を向けていたカミュは、そのリーシャの言葉に心底驚いたように目を見開き振り返った。
その態度が、リーシャの怒りを誘った。
魔物を前にした者達の雰囲気ではない、その空気がサラとメルエに安心感を与える。

「ふふ。　リーシャさんのおっしゃる通り、あれは＞バギ＜です。
何故、魔物が経典の魔法を使えるのかは解りませんが・・・・」

戦場には似合わない空気に少し笑顔を見せたサラであったが、瞬時にその表情を引き締め、四体の＞ドルイド＜へと視線を向けてリーシャの考えを肯定した。

サラは、魔物が魔法を使うことは理解している。
以前遭遇した＞ホイミスライム＜が経典にある＞ホイミ＜を使用した。
それは、サラの中にある常識を大きく覆す出来事だったのだ。

しかし、サラは、＞エルフの女王＜からこの世の真実とも言える話を聞くことになる。
それがサラの世界観を根底から揺るがして行くのだ。
＞エルフの隠れ里＜で聞いた話がサラの中で大きく影響している証拠に、サラは＞ドルイド＜が＞バギ＜を使用したことに、あの時程のショックを受けてはいなかった。

「カミュ！　あの四体にバギを連発されたら、近寄ることが出来な

いぞ？」

「・・・・一人が囮になるしかないな・・・・」

方針を尋ねるリーシャの言葉は、サラもカミュも聞き慣れた。
全てをカミュに丸投げしているように聞こえはするが、それはリーシャ自身が、自分が考える事に向いていないことを理解してのこと。
それは、自分が独断で行動した結果、待っていたのが仲間の危機であるというものへの恐怖と言ってもいいだろう。それをカミュもサラも理解しているのだ。

「囮！？　まさか、またお前がやると言うんじゃないだろうな！？」

「・・・他に誰がいる・・・？」

しかし、提示された策は、一人を危険に晒す物。
そして、それを聞いたリーシャは、再び自分を危険に晒そうとする青年に咎めるような視線を送る。その視線に怯む様子もなく返されたカミュの言葉は、リーシャの表情を歪めてしまった。

「お前は・・・・」

「だ、大丈夫です。　カミュ様とリーシャさんは、そのまま魔物達

に向かってください。　＞バギ＜の詠唱を確認したら、盾を構えて頂きますが、何とかなると思いますので。」

カミュの発言に表情を歪めたリーシャは、何かを言おうと口を開くが、それはサラの言葉に阻まれた。最近、時として見せる、サラの強気の態度。それは、今やリーシャの中では確固たる地位を築いていた。

「何か策があるんだな？」

「はい。」

自分の問いかけに、強く頷くサラに、リーシャは小さく作った笑顔で頷き返す。
少し前で魔物を警戒しているカミュと頷き合った後、リーシャとカミュは＞ドルイド＜に向かって駆けだした。

突如動き出したカミュ達に、＞ドルイド＜達は一斉に杖を向ける。
基本的に死肉でできた＞ドルイド＜達は動きが遅い。
遅いが故に魔法を使用できるようになったのか。
それとも、魔法を使う故に更に動きが遅くなったのか。

一体の＞ドルイド＜がリーシャに向かってその杖を振り上げ、先程と同じような詠唱を行う。
その動きを見たリーシャは、手に持つ＞青銅の盾＜を構え、真空の刃の衝撃に備えた。

詠唱が完成したドルイドの杖先から風が狂ったように吹き荒れる。
リーシャの持つ＞青銅の盾＜に乾いた金属音と共に襲ってくる相当な衝撃。
真空と化した刃が青銅でできた盾を削って行く。
盾では防ぎきれなかった風の刃がリーシャの頬をかすり、肉を切り裂いた。

「　ぐっ！　」

暴風が終わり、盾をおろして、駆けだそうとしたリーシャは、自分に向かって再び杖を上げるもう一体の＞ドルイド＜の姿を見た。
先程の＞バギ＜をまともに受け、リーシャの左手に装備されている＞青銅の盾＜はもはや盾としての機能を全うできる程の性能がないことは見て解る。

『まずい』

そう考えたリーシャの前に＞うろこの盾＜を構えたカミュが立ち塞がった。
最初の＞バギ＜をまともに受けたカミュの盾ではあるが、流石はロマリアの宝物庫にあった盾だけあり、その強度は＞青銅の盾＜を遥かに凌ぐ。
魔法にも、その防御力を発揮するという言葉通り、盾を覆う魔物のうろこには傷一つなかった。

「@%＃&@」

「マホトーン！！」

魔物の詠唱が始まり、もう一度来る衝撃にカミュとリーシャが身構えた時、後方から呪文の詠唱が聞こえた。それは、このパーティー内最強である補助魔法の使い手。
そして、常に成長を続ける年若い僧侶。

魔物の詠唱に被せるように唱えられたその呪文は、固まっていた四体の＞ドルイド＜を不思議な光で包み込む。
その効力は、実際にサラやメルエがアッサラームへと向かう途中で体験したもの。
相手の魔法力を乱し、その行使を阻害する魔法。

カミュとリーシャに向けて振り下ろした＞ドルイド＜の杖からは何も生み出さない。
サラの＞マホトーン＜が確かに効いた証。

大きな顔面を困惑に歪める＞ドルイド＜達は、それでも奇声を上げ、先程と同じような人語ではない詠唱を行うが、その杖の先からは何も生み出されはしなかった。
魔法が使えない以上、もはやリーシャやカミュの相手ではない。
死肉の集まりであるその身体の動きは遅く、武器は手に持つ杖だけ。
そのような魔物に遅れを取る程、カミュやリーシャは弱くはなかった。

「やぁぁぁ！」

「ふん！」

瞬く間に自分の近くにいた一体を斬り捨てたリーシャが、カミュへと視線を向けると、カミュの方も一体を片付け終わっていた。
残るは二体。
残った＞ドルイド＜達に、それぞれの武器を構えたカミュ達の頬を熱された空気が撫でていく。
その原因が何であるかを悟った二人は、瞬時に後方へと飛んだ。

「・・・・・・ベギラマ・・・・・・」

もはやその二体をカミュ達が相手をする必要はなかった。
後方で闘いの成り行きを見ていたパーティー内最強の魔法使いが、小さな手に持つ＞魔道師の杖＜を振りかざし、魔道書に載る最強の灼熱呪文を唱えたのだ。

「グモォォォォォ」

二体の＞ドルイド＜達は、成す術もなく炎の海に飲まれていく。
身体を象っている死肉が焼けて行く臭いが、平原に広がる。
その異臭に顔を顰めるメルエではあったが、カミュとリーシャは、その炎を武器を構えたまま眺めていた。

二人のその表情は、とても似通っている。
驚きと哀しみと後悔が入り混じったような表情。
それは、奇しくも、イシス砂漠で見せたカミュの表情を表現したリーシャの言葉通りの表情だった。

「サラ！　マホトーンも使えるようになったのだな？」

「・・・アンタ・・・魔法名を憶えているんだな・・・？」

「お、お前は、先程から何が言いたいんだ！？」

戦闘が終わり、リーシャとカミュは、サラとメルエのいる後方へと歩み寄る。
その途中で、こちらに視線を向けたサラに語りかけるリーシャの言葉を、本当に不思議そうに眺めて後にカミュの吐き出したものが、再びリーシャの心に怒りの火をつけた。

「あっ！？　は、はい。　少し前に覚えたばかりですが、うまくいって良かったです。　時には魔封じにかかりにくい者もいるようですけれど。」

「そうなのか？　まぁ、何にしてもよくやった。」

カミュへと怒りの視線を向けるリーシャに慌てて声をかけるサラ。
そんなサラの言葉を聞き、あの中でもしかするとまだ＞バギ＜が使えた魔物がいたかもしれないということに想いが及ぶが、リーシャは笑顔でサラの健闘を讃えた。
その言葉に嬉しそうに微笑むサラの横で頬を膨らます一人の少女。

「・・・・・・メルエも・・・・・・」

「ん？　そうだったな。　メルエもよくやった。」

不満顔で、自分の成果を告げてくるメルエに苦笑しながらも、リーシャは帽子を取ったメルエの頭を優しく撫でてやる。
その手を嬉しそうに目を細めて受け入れるメルエを、サラも微笑みを浮かべたまま眺めていた。

「・・・マホトーンの効力は絶対ではない。　これから先は、あの魔物のように魔法を使用する魔物も多くなるだろうな。」

「そうだな。　色々と対策を練る必要がありそうだな。」

そんな三人のやり取りを見ていたカミュが発した言葉に、リーシャの表情も真剣なものに変わって行く。この先の闘いでは、カミュやリーシャが先頭を切って魔物に飛び込んで行くだけでは必ずしも万全とは言えないことをリーシャも理解したのだ。

「とりあえずは、ポルトガに向かいましょう。戦闘では、私もメルエもいます。私達の用途の違う魔法とお二人の剣を交えれば、出来ない戦闘方法はないと思いますから。」

「・・・・・・」

「あ、ああ・・・そ、そうだな。」

深刻な表情を浮かべるカミュとリーシャにメルエの帽子を被せ終わったサラが口を開く。

その内容に、カミュは驚いたような表情を浮かべ、リーシャは何故か口籠った。

それは、サラの成長を目の当たりにしたからなのかもしれない。

今のサラは、アリアハンを出たばかりの時の様な、力のない少女ではない。

自分で槍を取って闘い、魔法で仲間を援護する。

それが少しずつ、本当に少しずつ、サラの自信となって行っているのかもしれない。

それにカミュとリーシャは驚いたのだ。
しかし、カミュとリーシャには、サラの真実の『誇り』がどこにあるのか解ってはいない。
いや、サラにさえ、それが何なのかは理解していないかもしれない。

サラの『誇り』。
それは、今、サラの手で被せてもらった＞とんがり帽子＜を嬉しそうに掴み、サラの手を握って来た幼い少女。
ここ最近、メルエは、戦闘となれば、必ずサラの傍に寄ってくるようになっていた。
それは、カミュ達が前線に向かうためであることも確か。
しかし、カミュ達が魔物へと向かった時に頼れるのはサラだと感じていることに他ならない。

『誰かに頼られる』
そんなことは、サラは生まれて初めての経験なのだ。
幼くして両親を亡くし、町の教会の神父に育てられた。
そして、旅立つまで神父に『愛』を注がれ、旅立ってからは、常にカミュとリーシャに護られていた。サラ自身が誰かを頼る人生を歩んで来ていたのだ。
そんな自分が生まれて初めて頼られた。
それがサラの心の奥で責任感と変わって行ったのは必然だろう。

「・・・・行くぞ・・・・・」

「あ、ああ。」

メルエと共に笑顔を浮かべるサラを眺めながら、物思いに耽っていたリーシャにカミュの声がかかった。
その言葉が号令となり、一行は再び平原を南に向かって歩き出す。

「しかし・・・派手にやられてしまったな・・・」

ポルトガ城への道を歩きながら、リーシャは自分の左腕に装備していた＞青銅の盾＜を眺めながらしみじみと呟く。その言葉通り、先程の戦闘で＞バギ＜をまともに受けた＞青銅の盾＜は、元々の綺麗な円の形を崩し、所々欠けてしまっている。削れられた部分を中心にヒビのような亀裂が入り、もう一度大きな衝撃を受けた途端に、粉々に粉砕されてしまうことは誰の目にも明らかであった。

今の一行は、隊列を組むというよりも、一纏まりになって歩いている。
行列を組むよりも、先程相対した＞ドルイド＜に遭遇した場合、対処しやすいというリーシャの考えがあったからだ。そのリーシャの考えにカミュも頷いたことから、一行はまとまって歩いている。先頭がカミュであることには変わりはないが。

「私の盾をお使いになりますか？」

「いや、大丈夫だ。　どちらかと言えば、私よりもサラの方が危なっかしいからな。」

しみじみと呟くリーシャに向かって、サラが自分の左腕に装備している＞青銅の盾＜をリーシャへと差し出す。元々、この盾はリーシャのものだったはずであり、それを返すだけということがサラにとっては当たり前のことだったのだが、それはリーシャに笑顔で断られた。サラにとってどこか不満が残る言葉を添えて・・・

「・・・危険の度合いは、アンタもそう変わらないだろう・・・？」

「　なんだと!?　」

不満顔のサラの代わりに、前を歩いていたカミュが口を開いた。
そこからはいつものやり取りが始まる。
この二人の掛け合いは、アリアハンを出た頃から全く変わらない。
徐々に変わって行く四人の心情。
その中にも変わらない物があることにサラは微笑んだ。

「・・・いつも、相手の魔法の影響を受けるのはアンタだ・・・まぁ、盾があろうとなかろうと魔法の影響は受けるだろうがな・・・」

「　ぐっ！　古いことをいつまでも言うな！　」

古い話をいつまでも蒸し返すカミュにリーシャは激昂する。
そんなリーシャに振り向いたカミュの口端もまた、いつものように上がっていた。

「・・・ポルトガに行けば、新しい武器や防具も手に入るだろう。」

「そ、そうですね。　ポルトガであれば、目新しい商品等があるかもしれませんね。」

リーシャの怒気を、いつものように右から左へと流したカミュが口にした言葉に、サラは慌てたように両手を振りながらリーシャに声をかける。

「ふん！　そうだな。　イシスでは気候のために新しい防具などを見ることはできなかったが、貿易で栄えたポルトガであれば、何か面白い物があるかもしれないな。」

「・・・・・・・・メルエも・・・・・・・・・・・・」

気を取り直したリーシャの言葉に、今まで黙って皆を見上げていたメルエが自分もと声を上げる。
そんな幼い我儘にリーシャは苦笑した。

メルエにとって、このパーティーと共に行く買い物はとても楽しいイベントの一つであった。
幼い頃から物を買い与えられた事など一度もないメルエにとって、生まれて初めてカミュによって買い与えられた、今頭の上に乗っている＞とんがり帽子＜は『アンの花冠』も相まって、一番の宝物となっている。

そんなメルエは、新しい土地での買い物には、『自分にも何か買い与えられるのではないか？』という期待を持ってしまうのだ。
大好きな人間から与えられる喜びを知ったメルエに、期待するなという方が無理な話であろう。

「ふふ。　メルエには、これ以上ない程の防具が揃っているだろう？」

「・・・・・・・」

そんなメルエの姿に苦笑を浮かべながら、リーシャが窘めるが、当のメルエの頬は膨れて行った。『ずるい』とでも言いたげに頬を膨らますメルエに、リーシャは困ったような表情を見せ、メルエの頭を撫でた。

「メルエは、アンの服は気に入らないのか？」

「　！！！　」

頬を膨らませていたメルエは、リーシャの言葉に顔を上げ、力一杯に首を横に振る。
リーシャの言葉は、それこそ『ずるい』言葉だろう。
メルエの心情を理解した上で、その心情を利用しているのだ。
しかし、リーシャは、最近になって感情を豊かにしてきたメルエを止める術を、これ以外に持ち合わせてはいなかった。

メルエは、喜怒哀楽を表すようになった。
＞カザーブの村＜に向かうあの森の入口で出会った時と比べると、本当に雲泥の差である。
まだ、リーシャ達三人にしかその表情を見せることはないが、怒る時は頬を膨らませて、顔を背ける。
哀しい時には目に涙を一杯に溜め、楽しい時には花咲くように微笑む。
そんなメルエの変化がリーシャは嬉しい反面、少し寂しくもあった。

メルエの感情は豊かになった。
初めて会った時とは比べようもなく。
そして、わずか数日前に母親を失った幼子とは思えない程に。

確かに、メルエにアンジェの最後の想いは届いていた。
そして、それをメルエは受け止めた。
だが、その死を悲しみ、塞ぎ込む程には、メルエの中でアンジェへの『愛』は戻ってこなかったのだろう。いや、初めから、そのような物はなかったのかもしれない。
それが、『愛』を受けて育ってきたリーシャには哀しく感じたのだ。

「メルエが着ている『アンの服』以上の防具は、おそらくここにはないぞ？」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

残念そうに俯くメルエの頭を軽く撫でてやったリーシャは、再びその手をとって歩き出す。
メルエが『愛』を知らないのであれば、自分こそが伝えてやろう。
そう堅く胸に誓って。

そんなリーシャとメルエのやり取りを、微笑みを浮かべながら見ていたサラもまた、心に誓っているのだ。
『どんなことからも、メルエを護る』と。
それもまた一つの『愛』。

そして、興味なさげに前を向いて歩いている青年もまた、変化を始めている。
初めて覚えた『他人への情』。
だが家族からの『愛』を知らない彼は気付かない。
それは、もはや肉親を想う『家族愛』に酷似した情だということを。

「さあ、行こう。」

「はい。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

それぞれに、それぞれの想いを胸に、新たな大地を再び歩き出した一行の肌を徐々に湿った空気が撫でて行く。

それは、海が近い証拠。

目的地である『ポルトガ城』が近づいている証拠だった。

戦闘？【ポルトガ地方】（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

かなり短かったので、少しお叱りを受けるかなと思っています。

ただ、今回の文章を読んだ方々の頭の中に、ドラクエ？の音楽「冒険の旅」と「戦闘のテーマ」が流れていたら嬉しいなとも思っています。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしています。

ポルトガ城？（前書き）

いつの間にか、ＰＶが６０万。
そして、ユニークが５万人を超えていました。
本当にありがとうございます（涙

しかし、ついに、やってしまいました・・・
それが何かは、後書きで・・・・

ポルトガ城？

一行が、海が見える高台にそびえるポルトガ城に辿りついたのは、夕日も沈み、辺りを闇が支配し始めた頃だった。
何度かの休憩を挟みながら歩いてきた一行であったが、何度か魔物と遭遇し、戦闘を行ってきた。その魔物達は先程苦労した＞ドルイド＜の他に＞バリィドドッグ＜や＞マタンゴ＜。
何度か遭遇したことのある魔物ばかりであった。

＞ドルイド＜には、サラの＞マホトーン＜で魔法を封じた後、カミュやリーシャが斬りかかり、魔法が封じきれていない＞ドルイド＜に関しては、相手より先にメルエが魔法を唱えることで駆逐していった。その他の魔物は、何度か対峙したことがあるだけに、注意点なども把握しており、苦労することなくここまでの道を歩いて来ていた。

「・・・今日の謁見は無理だな・・・」

「そうだな。　一晩の宿を探そう。」

カミュ達一行は、夜の闇が支配する城下町へと続く門で門番に身分を証明する『イシス女王の文』を見せ、中に入る許可をもらう。

城下町はすでに夜の静けさが広がっており、町の外には人影はない。
アッサラームの様な夜の町を見て来たサラは、これが普通の夜なのだと改めて実感することになった。

宿屋は城下町に入ってすぐ右手に見えた。
宿屋へと足を進めて行くリーシャ達を余所に、カミュはある一点に気を取られたように視線を向けた。そこは、その宿屋の放牧地の様な場所。通常であれば、馬などの家畜が放されている場所。

「カミュ！　宿屋はこっちだぞ。」

「・・・ああ・・・」

先に行ったリーシャがカミュへと声をかけ、その声に返事を返したカミュが続いて宿屋へと入って行く。
その宿屋の床には、酔っぱらった兵士が寝ていた。
その姿にリーシャやサラは眉を顰め、サラは明らかな嫌悪を見せる。
しかし、メルエはそう言う光景を見慣れているのか、ちらりと視線を向けたきり、視線を元に戻す。

「いらっしゃいませ。　旅の宿屋にようこそ。　四名様ですか？」

宿屋のカウンターに着くと、カウンター越しに初老の男が一行に営業的な笑顔を見せる。
しかし、宿屋の看板は出ていたものの、その中には、武器屋や道具

屋の看板などもある、いわゆる集合店舗。モールと呼ぶには狭いが、この世界にある主要な店は、この建物の中に揃っていた。

「ここは宿屋ではないのか？」

「いえ、宿屋だと思いますが・・・」

リーシャの疑問は尤も。
宿屋の看板は出ていて、カウンターこそあるが、肝心の宿泊する部屋がどこにもないのだ。
上の階に続く階段がある訳でもない。
長屋の様な平屋の中にあるカウンターだけを見れば、誰しもそう思うだろう。

「あははは。　大丈夫ですよ、お客様。　宿泊するお部屋は、別棟にありますので。」

「そ、そうか。　いや、すまなかった。」

リーシャとサラの会話が聞こえていた宿屋の主人は、苦笑しながら、その疑問に答えた。
小声の会話を聞かれていた事に、若干顔を赤らめたリーシャは、素直に頭を下げる。

「・・・四人だ。　最低でも二部屋の用意を頼む。」

「畏まりました。　一部屋は一人部屋で、もう一部屋は大部屋でよろしいですか？」

リーシャやサラの状態を無視し、カミュは交渉を始める。
商人らしい笑顔を作りなおした主人は、カミュの言葉を聞き、空いている部屋の状況を見た後に提案を出す。
主人の言葉に一つ頷いたカミュは、腰の革袋からゴールドを出し、カウンターに置いて行く。ゴールドを確認した主人から部屋のカギを貰ったカミュ達は、別棟にあると言われる部屋の場所を聞き、移動を開始した。

「・・・オヤジ・・・外の放牧地は、何の為にあるんだ・・・？」

「はい？　ああ、あそこは馬が一頭いますよ。　それが何か？」

移動を開始するリーシャ達とは別に、カミュが宿屋の主人に奇妙な質問をぶつけた。
その内容が一瞬、何のことか理解できなかった主人は、呆けたような表情を浮かべるが、質問の意図は見出せなくても、意味を理解し、自分が知っていることを話す。
その答えに、『そうか』と一言呟いたカミュは、三人とは別の方向へと歩き出した。

「お、おい。　カミュ？」

突然のカミュの行動に驚いたリーシャが、その後ろをついて歩き出す。

必然的に、リーシャの手を握っていたメルエもカミュの後を付いて行くことになり、残される形となったサラが慌ててその後を追って行った。

月明かりが照らす、柵で囲まれた牧草地。

そこは、それ程広さがある訳でもないが、馬一頭を飼うにはもったいない場所であった。

扉を開けその場所へと出た一行が目にした物は、予想に反した物。

カミュはその光景を知っていたようで、表情一つ変えず眺めていたが、先程の宿屋の話を信じていたリーシャとサラは驚きに目を見開いた。

「・・・・・・・・・・ひ・・と・・・・・・・・・・・・？」

メルエが呟いた言葉。

それが今、リーシャとサラが驚いている光景。
月明かりに濡れる、柵に囲まれた牧草地。
そこにいたのは、一頭の馬ではなく、一人の男。

「カ、カミュ？　馬はどうしたんだ？」

「・・・はぁ・・・何故俺に聞く？　俺もアンタも、ここに初めて訪れたことに変わりはないはずだが。」

いつものようにカミュへと尋ねるリーシャの言葉に、カミュは溜息を吐く。
最近になって、カミュも気が付いたのだが、ここ最近は、リーシャがカミュに訪ねた時、サラもまた疑問の視線をカミュへと向けた。

サラは決して頭の弱い人物ではない。
しかし、リーシャと同じように『常識』という名の縛りが強い人間でもあるのだ。
故に、自分の思考が動き出すキッカケをカミュへと求める。

「おや？　貴方達は旅人ですか？」

「そ、そうですが・・・ここにいる筈の馬は？・・・・・・貴方は？？？」

月を見上げていた男が視線を動かし、カミュ達の存在に気が付き、言葉を洩らす。
それに答えたのは、カミュやリーシャの後ろで、身を隠すように佇むサラであった。

「・・・私は・・・いえ、いいのです。　それより貴方達は、サリアンという女性を知っていますか？」

「ふぇ！？　し、知りません！」

正体不明の男が視線を向けた先は、男の質問に答えたサラ。
何かに脅えているサラは、その視線に驚き、反射的に答えた声は、意外な程大きなものだった。

「そうですか。　ああ、サリアンは元気でいるだろうか？　愛しのサリアン。でも、今は、もう会うことも、話すことすらも出来ない・・・」

サラの答えに対して興味を持った様子もなく、男は独り言のように言葉をつぶやき、夜空を見上げる。既にカミュ達に興味を失ったように、星空を見上げる男に、カミュは一つ溜息を吐いた後、踵を返し、室内へと戻って行った。

リーシャも疑問に思う所がなかったわけではないが、おそらくこの男に、今何を聞いても自分に理解できる言葉は出てこないように感

じ、カミュの後を追うことにした。
当初からそれほど興味を持っていなかったメルエは、そこにいたのが『人』であったため、尚更興味を失ったのか、振り返りもせずに、その場を後にする。

残ったサラは、その男が醸し出す雰囲気が、自分が知り得る『人』の物でないことには気が付いていた。最初は、幽霊と呼ばれる魂だけの存在なのかと考えていたが、何故かそれ程恐怖が浮かばない。
『自分が僧侶としての本領に目覚めたのでは？』などと、安易に考える程、サラは馬鹿ではない。それであるならば、おそらくこの男は『人』なのであろう。ただ、どこかが歪んでいる可能性はあるのだが。

放牧地を後にした一行は、町の北側にある、宿屋の別棟へと移動する。
建物の二階部分が宿泊の部屋となっているようで、一階部分はテラスの様になっていた。
二階部分に上がり、一人部屋の鍵をカミュが持ち、大部屋の鍵をリーシャが持って、一行はそれぞれの部屋へと分かれて行く。

「にゃ～ん。」

「　！！　」

カミュが部屋に入ると、先客がいた。
小さな先客は、カミュが入ってきたことに驚いたように、部屋の隅へと移動していく。

一瞬アッサラームで遭遇した出来事を思い出したカミュではあったが、カミュの存在を恐れるように部屋の隅へと移動していった小動物を見て、警戒を解いて行った。

「・・・すまない・・・先客がいるとは知らなかった。　危害を加えることはない。　ただ、ベッドだけは使わせてくれ。　後は好きにして構わない。」

「にゃ～ん。」

通常の客ならば、宿を取った部屋に、動物が入っている等、クレームの原因となる。
しかし、カミュはその先客である小さな猫に対し、軽く頭を下げた後、その猫に部屋での就寝の許可を取ったのだ。

カミュの言葉が理解できたのか、その猫は、一つ鳴き声を上げると、部屋の隅で丸くなった。その様子を見て、軽く微笑んだカミュは、衣服を脱ぎ、部屋着に着替えた後、ベッドに入る。そして、そのまま眠りに落ちて行った。

眠ってからどれくらいの時間が経っただろう。
アッサラームを出てから、ベッドで眠ることのなかったカミュは、熟睡と言っていいほどに深い眠りに落ちていた。

しかし、そこはアリアハンという一国が掲げる『勇者』。
空が明るみ始めた頃に、先程まで一切なかった『人の気配』に気づき、意識を覚醒させる。
ふと、目を開けると、窓から差し込む朝日が眩しく、その光に慣れるまで、部屋全体を見渡すことはできなかった。

「 ！！ 」

間違いなく『人の気配』である故に、手元に＞鋼鉄の剣＜を引きよせ、いつでも抜けるように身構えていたカミュの目が慣れ、部屋全体を見渡せるようになる。
そこにいたのは、間違いなく『人』。
昨晩、猫が眠りについていた、部屋の隅にある椅子に一人の女性が座っていた。

何かに怯えるように、そして、何かにひどく悲しむように座っている女性に、カミュは剣から手を放し、ベッドから降りた。

「・・・いつ入って来た・・・？」

「 はっ！？　あ、すみません。 」

突然響いたカミュの言葉に驚きを露わにした女性は、飛びあがるように椅子を立ちあがった。
その様子に、害がないと判断したカミュは、部屋着のまま、女性の対面にある椅子に腰かけた。まだ、陽が昇ったばかりである。リーシャ達が起きだすには、まだ少しの時間があるだろう。

「・・・いや、いい。　ただ、アンタは何者だ？　部屋に鍵はかけておいたはずだが。」

「えっ！？　あ、あの・・・・・」

カミュの言葉に、女性は言いにくそうに口籠る。
盗賊や娼婦のような類の人間ではないようだ。
それが解っているだけに、カミュの声は比較的穏やかな物であるはずだが、それでも女性は何かに怯えるように口を噤んでしまった。

「・・・はぁ・・・アンタがどう考えているのか知らないが、俺は金を払ってこの部屋を借りた。　それが、朝起きてみれば、見知らぬ人間がいるとなると、疑問に思うのは当然だろう。」

「・・・・はい・・・・」

穏やかな口調で続けるカミュの言葉に対しても、女性の顔は俯いて

行くだけ。
これには、カミュもほとほと困り果てた。
続ける言葉が見つからないカミュ。
黙して何も語らない女性。
時が止まったように、部屋には沈黙が流れる。

だが、時は突然動き始める。
それは、カミュの予測が間違っていた事を示す。
そんな者の来訪を意味していた。

「カミュ！　着ているものを出せ！　洗濯をす・・・・・・・・・・・・！！！！！」

「きゃあ！」

「・・・・鍵はかけていたはずだが・・・・」

突然開いた扉と共に、部屋へと乱入してくる一人の女性。
部屋着のままで洗濯物を片手に入って来たのは、言わずと知れた女性戦士。

しかし、リーシャの言葉は最後まで綴られることはなかった。
寝ていると思っていたカミュが起きていて、視線の先には、一人の女性。
それがリーシャの思考を止めてしまったのだ。

「・・・アンタ、メルエからカギをとってきたのか・・・？」

「はっ！？　何のつもりだ！　お前は、女性を部屋に連れ込んでいたのか！？」

カミュが溜息交じりに洩らした言葉は、リーシャの怒声に掻き消される。

憤怒の表情を目覚めさせたリーシャは、ずんずんとカミュの下へと向かっていった。

そんなリーシャの剣幕に、尚更怯えた女性は、カミュの後ろに隠れるように身を隠す。

それがリーシャの怒りに、更なる油となって投入された。

「お前は何をやっているんだ！！！　この旅が何の旅なのか解っているのか！！」

「・・・はぁ・・・人の話を聞け・・・」

カミュの胸倉を掴むような勢いで迫ってくるリーシャの迫力にも、カミュは溜息を吐くばかり。しかし、この場にその行為を諫める僧侶や、言葉少なに感想を漏らす魔法使いの少女はいない。

「いいだろう！！　説明してみろ！　生半可な言い訳であれば、

その首、ここで叩き落としてやる！」

「・・・・はぁ・・・・・」

熱くなったリーシャを止める役目を担う人間がいない以上、彼女を落ち着かせるには、彼女が欲している情報をカミュが提供する以外方法はない。
何かに諦めたように溜息を吐くカミュは、一度目を伏せた後、リーシャに向かって口を開く。
カミュの中での一番の変化はこれかもしれない。アリアハンを出た頃であれば、『アンタには関係ないことだ』の一言で片づけていた事。
今はそれを、溜息を吐きながらも一から説明する。
それは紛れもない変化。
しかし、それにリーシャは気が付いていないのだろう。

「昨晩、この部屋の前で、俺はアンタ達と別れたはずだ。」

「ああ。　その後にこの娼婦を呼んだのか？」

話を聞くと言っていたのにもかかわらず、リーシャはほとんどカミュの話を聞いていない。
もはや、自分の頭の中で決定された事項を確認しているだけの様な物言い。
そんなリーシャの言葉に、流石のカミュも顔を顰めた。

「・・・言葉に気をつけろ。　俺は、アンタ達と行動している人間だ。　しかし、この女性は違うだろ？　見も知らぬ女性を『娼婦』呼ばわりするとは、人間性を疑うな。」

「ぐっ・・・ち、違うのか？」

カミュの視線に自分が発した言葉が見当違いである可能性を感じたリーシャは言葉に詰まる。そして、そんなリーシャの問いかけに、無言のままでいるカミュを見て、自分の考えが間違っていることを知った。

「す、すまない。　確かにカミュの言うとおり、初見の人間を『娼婦』呼ばわりするなど、有るまじき行為だった。　本当にすまない。　許してくれ。」

「あっ、い、いえ。　いいのです。　そう思われても仕方ありません。」

自分の考えが間違っていることを知ったリーシャは、素直に頭を下げる。
先程まで上り詰めていた血液は、頭から下がって行き、その胸には後悔が占めて行った。

頭を下げられた女性は、慌てたように手を振り、リーシャの頭を上げさせようとするが、途中で横にいるカミュの手が伸びて来たため、それは中断された。
カミュの方へ視線を移した女性は、カミュと目が合う。
その瞳は、まるで『気の済むようにさせてやれ』と物語っているようだった。

「・・・アンタ達と別れてからこの部屋に入り、すぐ眠りについたが、その時にはこの部屋に俺以外の人間はいなかった。　鍵もかけたから、その後に人が入る訳もない。」

「そ、そうか。　私が入る時も鍵はかかったままだったしな。」

顔を上げたリーシャを見て、カミュは話の続きを始めた。
先程、未だに眠るメルエのポシェットから持ってきた＞魔法のカギ＜でこの扉の鍵を開けた経緯のあるリーシャは、カミュの言葉に一人納得する。

「・・・やはり・・・アンタは・・・・・」

「ん？　あ、ああ。　サラもメルエもまだ眠っているからな。　眠っている内に洗濯を済ませておいてやろうと思ったが、ついでにお前の物もとな・・・」

珍しいカミュの視線を受け、リーシャが少したじろぐ。
先程、この部屋に入って来た時の怒りなど、どこへやら。
やはり、この二人だけでは、会話が一向に進まない。
サラの調停か、メルエの横やりがなければ、会話が別方向へと進んでしまうのだ。

「・・・あ、あの・・・」

「ん？　ああ、そうだったな。」

一行に前へと進まない会話に、女性が口を挟む。
二人の会話が始まるキッカケとなった当事者である女性が口を挟むというのも、また変な話ではあるが、カミュは、その女性の言葉で、リーシャとの会話を打ち切った。

「大変失礼だが、貴女は『盗賊』の類か？」

「・・・本当に失礼な物言いだな・・・少しは考えて話してくれ。」

「　う、うるさい！　」

会話を打ち切られたリーシャが、女性に対して、とんでもない質問をぶつける。

リーシャの言葉に、カミュは先程の様な強い視線ではないものの、強度の呆れを含んだ視線を向け、溜息を吐いた。

「い、いえ！　滅相もありません。　私はこの町に住む者です。」

「そ、そうか。　重ね重ね、すまない。」

自分の言葉を否定した女性に対し、再び頭を下げるリーシャ。
基本的に盗賊の類だとすれば、素直にそれを認める訳がない。
それでも、女性の言葉を素直に受け取ったリーシャは、言葉とは違い、その可能性を信じてはいなかったのだろう。

「・・・この女性に関しては、アンタより、俺の方が知りたいぐらいだ。　昨晩は確かにこの部屋には誰も・・・・・！！！」

「ど、どうした、カミュ？」

リーシャの言動に再び溜息を吐いたカミュは、元の席に戻り座りなおした女性を見ながら、話を戻していく。しかし、昨晩のことを思い出そうとした時、何かを思いついたように、部屋中に視線を巡らし始めた。

そのカミュの様子を不思議そうに眺め、言葉をかけるリーシャ。
反対に、女性の方はどこか哀しみを浮かべた表情を作る。

「・・・アンタ・・・あの猫か・・・？」

「・・・・・・はい・・・・・・・」

カミュは、昨晩自分以外で、この部屋にいた生物を思い出した。
そして、それが結論へと導く。
それは、余りにも突拍子もなく、そして余りにも非現実的な答え。
しかし、カミュには、それしか答えを導き出すことができなかった。

そして、それは、対面に座る女性の首が静かに縦に振られたことで現実となる。
隣に立つリーシャは会話に付いて行けてはいない。
その証拠に、『これほど驚きに彩られたカミュの顔も珍しい』と別次元の感想を抱いていた。

「私の名は、サリアンと申します。　このポルトガに暮らす者です。」

「・・・それが、何故猫に・・・？」

「何？　猫？　おい、カミュ。　何のことを言っているんだ？」

自己紹介を始めたサリアンと名乗った女性に、カミュが核心を問う。
しかし、会話に置いて行かれたリーシャが口を開いたことにより、再び会話が中断される。
もはや慣れてしまったカミュではあったが、少し厳しい視線をリーシャに送った。

「・・・最後まで聞いて、解らなければ、説明してやる。　今は黙って話を聞いていてくれ。」

「ぐっ！　わ、わかった。」

カミュに釘を刺されるように黙らされたリーシャは、悔しそうに顔を歪めながらも、大人しく一つ残っていた椅子に腰かける。
『洗濯はいいのか？』と思わず聞きたくなったカミュではあったが、それを口にするとまた話が前へと進まなくなる為、思い留まった。

「・・・で・・・何故猫に？」

「は、はい。　ある夜私達は、海辺に浮かぶ小島にある『恋人たちの憩い場』と呼ばれる場所で夜空に輝く星達を眺めていました。」

「私達・・・・？　あっ、いや、すまない・・・」

話の続きを促したカミュに一つ頷いたサリアンは、何かを思い出すように語り始めた。
最初の一言に引っかかりを覚えたリーシャが疑問を洩らす。
だが、即座にカミュの視線を感じ、口を閉じた。

「あの夜は、前日から続いた雨も上がり、澄んだ空気が広がる綺麗な星空でした。　私とカルロスは愛を語らいながらその星空を飽くことなく見ていたのです。」

「「・・・・・・」」

恋人の事でも想っているのだろう。
サリアンの表情は『哀しみ』よりも『愛おしさ』に溢れていた。
それを見たカミュとリーシャは、余計な口を挟むことをしなかった。

「しかし、そんな私達の幸せの時間は、夜空を飾る星達の中に見えた何者かによって妨げられました。」

「・・・何者か・・・？」

今度はカミュが口を挟む。
斧カミュの疑問に、今まで『思い出』に浸っていた筈のサリアンは、表情を『哀しみ』へと変化させ、静かに頷いた。

「はい。　光輝く星達の中に異様な光が見え、初めは『流れ星かな？』と思ったのですが、それは、私達へと次第に近づき、その異様な風貌が見えました。」

ここでひとつ話を途切り、サリアンは深く息を吸い込んだ。
まるで、今から話すことへの覚悟を示すかのように。

「それは見たこともない魔物でした。　小さな体で、片手には大きなフォークの様な武器を持ち、私達の前に降り立ったのです。」

「「　！！！　」」

サリアンの話に、カミュとリーシャは驚きを露わにした。
それは、まさしくカミュ達がアッサラームで戦った魔物。
メルエの義母アンジェの命を奪い、ロマリアの兵士の命をも奪った魔物。

「魔物に怯える私を庇うように立ちはだかったカルロスに向け、その魔物は大きなフォークの様な武器を掲げました。　『殺される』。
そう思った時に私達の身体を光が包み込みました。」

「・・・呪いか・・・」

驚いているカミュ達を無視し、話続けるサリアンの話は、カミュをある結論へと導いた。

『呪い』
それは、多種多様な物。
有名な物で言えば、呪われた武具などがある。
それを装備した者は、呪いの影響から様々な害を受ける。

その他で言えば、イシスのピラミッドで遭遇した＞黄金の爪＜もその一部であろう。
王家の呪いとも言うべきものがかかっており、それを手にした者を死ぬまで呪い続ける。

「・・・はい・・・ただ、カルロスは何ともなかったようです。
私だけが猫の姿にされました。　幸いカルロスは私を庇うために背を向けていたことから、私が猫に変化されたことに気がつかなかったようです。　私は、猫の姿になったことで、カルロスの前から逃げました。　あのような姿をカルロスだけには見せたくはなかった・・・」

サリアンは、そのまま顔を俯かせ、嗚咽を漏らす。
その様子をリーシャは痛々しく見ていた。

「・・・その魔物は、おそらく俺達が排除した。　それでも呪いが解けないということは、術者の影響を受けない呪いか・・・・厄介だな・・・・」

「・・・そ、そうなのですか？　私は、一生このままなのですね・・・ああ、カルロス。」

カミュの呟きに、サリアンは絶望の表情を見せる。
リーシャは、サリアンの表情を見て、カミュへと厳しい視線を投げかけた。
『言い過ぎだ』とでも言うように睨むリーシャに、カミュは一つ溜息を吐く。

「しかし、男の方は無事だったのか？」

「・・・わかりません。　羞恥の余り、あの場所を逃げ出した私には、その後のことは・・・しかし、カルロスは私と違い、姿を変化させられてはいませんでした。　私達へ武器を向けた魔物も、奇妙な笑い声を残し、すぐに飛び立ってしまったので・・・・」

「・・・殺された訳ではないと・・・・？」

カミュの言葉に、サリアンは一つ頷く。
男の方の身を訪ねたリーシャは、聞くことは聞いたが、その先が示す結論に到達することはできていなかった。必然的に視線はカミュへと向かう。

「私は、ご覧の通り、太陽が昇れば人間の姿に戻ります。　人間の姿になった時に、この町を隈なく探しましたが、カルロスの姿はありませんでした。　もう、この町にはいないのかもしれません。」

「「・・・・・」」

がっくりと肩を落としたサリアンを、カミュは眺めることしかできなかった。
リーシャもまた、カミュの瞳を見て、自分達が解決できる問題ではないことを知った。

「・・・話は解った・・・」

「あっ！　申し訳ありませんでした。　旅の方にこのような話を・・・」

話の終了を告げるカミュの言葉に、今さらながら自分の置かれた立場を理解したサリアンは、カミュとリーシャに頭を下げ、部屋を出て行った。

残された二人に何とも言えない感情が残る。
リーシャの胸にあるもの。
それは魔物に対しての『憎悪』。
そして、何もできない自分への『もどかしさ』。

「カ、カミュ・・・」

「悪いが、今の俺達には何もできない。　ただ、あの女が言っていたカルロスという男は間違いなくこの町にいる。　それだけは確かだ。」

そんな自分の不甲斐なさと、何とか出来ないかという想いを瞳に乗せたまま、リーシャはカミュへと問いかける。
『何か自分達に出来ることはないか？』と・・・

しかし、カミュの口から出た言葉は、リーシャの願いを斬り捨てる物。
ただ、その中にも、微かな希望は残されていた。

「なに？　恋人の方も、この町に残っているのか！？」

「・・・アンタは昨晩の話を聞いていなかったのか？」

「・・・昨晩・・・？」

リーシャの問いかけに答えるカミュの言葉は、いつものように回りくどい。

故に、リーシャには核心に迫る結論が導き出せなかった。

「・・・はぁ・・・昨晩、あの放牧地にいた男が言っていただろ？
『愛しのサリアン』と。」

「！！　で、では、あの男がカルロスなのか！？」

カミュが結論を切り出したことにより、ようやくリーシャもそこに至ることができた。
そして、その現実に驚くとともに、『そうか・・・よかった。』と薄く微笑むリーシャに、何故かカミュの表情も優しいものへと変わって行った。

「・・・ここからは、想像の域を出ないが・・・おそらく、あの男は女とは反対に、昼は馬の姿になっているのだろう・・・」

「な、なに！？」

しばし、リーシャを見ていたカミュは、もう一つの結論を口に出す。
それは、希望を見出していたリーシャにとって、再び心を沈めてしまうようなものだった。

「・・・宿屋の主人は、あそこにいるのは馬だと言っていた。　つ

まり、あのオヤジは馬しか見ていないのだろう。　あの放牧地へ人が入って行けば、あのカウンターからなら見えるだろうからな。」

「では、あの男も、サリアンと同じように動物に変化する呪いをかけられたと言うことか？　それも、サリアンとは真逆に、日中に動物に変化する類のものだと？」

「・・・ああ・・・」

カミュの考えは、リーシャの気持ちを更に沈めて行く。
それでも、確認の為に問いかけるリーシャに、カミュもまた、何かを思いつめた表情で頷いた。

「・・・カミュ・・・この話は・・・・」

「・・・ああ・・・あの僧侶と、メルエには話すことはない。」

リーシャの最後の言葉。
それをカミュは理解していた。
この話を聞けば、サラの魔物への『想い』は更に強くなってしまうかもしれない。
メルエにしても、純粋なだけに、どんなことを考えるのか、予想が出来ない。
故に、二人はこの話を胸に仕舞うことにした。

二人が黙り込み、しばらくの時間が流れた時、不意にカミュの部屋の扉がゆっくりと開かれた。それは、本当にゆっくりと、遠慮がちに少し開かれ、それに気付いたカミュとリーシャが視線を向ける。カミュに至っては、警戒のために再び剣に手をかけていた。

「・・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・・？」

しかし、ほんの少し開かれた扉の隙間から、見えた顔に、カミュは剣から手を離した。
遠慮がちに中を除く瞳は、もはや見慣れた物。
それは、カミュが唯一、自らこの旅に連れて行くことを決めた少女。

「・・・どうした、メルエ・・・？」

「・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・いない・・・・・・・・・」

未だに扉を全部開けることをしないメルエは、リーシャやサラに『男性であるカミュの部屋には軽々しく入ってはいけない』とでも言

われているのかも知れない。
まぁ、いつものリーシャの行動を考えると、サラの言葉なのだろう。

少しだけ覗いた場所に、カミュの姿を確認したため、それ以上扉を開かないメルエには、リーシャの姿は見えない。故に、カミュへと自分が目覚めた時に気が付いたことを告げているのだ。

おそらく、リーシャと同じベッドで眠っていたのだろう。
起きた時にリーシャの姿がないことを不思議に思い、そして不安になったのだ。
故に、カミュの部屋へと向かった。

「メルエ？　私はここにいるぞ。」

「・・・！！・・・・」

ほんの少し扉を開け、その隙間から中を覗いていたメルエは、中から突然聞こえたリーシャの声に驚き、ゆっくりと扉を更に開いて行く。

完全に部屋の中を一望できるぐらいまで、扉を押し開けたメルエは、カミュが座っていた椅子の横でこちらを見ているリーシャを見つけ、その表情を笑顔に変えた。

「・・・・・・リーシャ・・・・・・・」

扉を開け放したまま、とてとてとリーシャに向かって駆けてくるメルエをリーシャが優しく包み込む。それは正に母親の様な暖かさを持つものだった。

「どうした、メルエ？」

「・・・・・・リーシャ・・・・・・いな・・かった・・・・・」

抱きしめたメルエに問いかけるリーシャが見た物は、若干頬を膨らませたメルエ。
それは、自分が起きるまで、傍にいてくれなかったことを糾弾しているようにも見える。
そんなメルエの表情に、リーシャは思わず苦笑した。

「ふふ。　カミュの服も洗濯してやろうと思ってな。　カミュ、服を出せ。　メルエ、一緒に洗濯をするか？」

「・・・・・・・ん・・・・・・・」

メルエの頭を軽く撫でたリーシャは、カミュへ服を出すように指示を出し、共に洗濯をすることをメルエに提案する。
そのリーシャの提案に、メルエは表情を笑顔に変え、大きく頷いた。

普通、このくらいの歳の子供であれば、家事などをすることを嫌がるものだ。
しかし、そんな常識は、この幼い魔法使いには通用しない。
カミュ、リーシャ、サラの三人と共に何かをするということが、メルエにとっての幸せの一部なのだ。中でも、幼い頃から行っている洗濯というものであれば、メルエが足を引っ張ることにはならず、本当の意味で共に行うことができる。
それがメルエには嬉しいのだ。

「うん。　では、私は主人に言って、洗濯道具を借りてくる。　メルエはカミュの服を貰ってから下に降りてきてくれ。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

リーシャの言葉に大きく頷いたメルエを見て、柔らかく微笑みながら、リーシャは階下へと降りて行った。
リーシャの後ろ姿を見送った後、メルエがカミュへと両手を差し出す。
それは、カミュの服を渡せという意味。
そんなメルエに、カミュもまた苦笑を浮かべながら、昨晩着替えた服をメルエへと手渡した。

基本的に、ノアニールを出てから、何度か洗濯をしてきたが、一度たりともカミュは自ら洗濯をすることはなかった。
それは、何も、カミュが洗濯という行為自体を拒否した訳ではない。
ノアニールの頃から、カミュの服を洗うことはメルエの仕事となっていたのだ。

そして、何故か、メルエはそれを譲らない。
当のカミュ本人に対しても。

洗濯道具を借りて来たリーシャと共に、別棟の外に出て洗濯を始めたリーシャとメルエをカミュはただ眺めていることしかできなかった。
本当に楽しそうに微笑みながら手を動かすメルエ。
微笑むメルエに、優しい笑顔を浮かべながら、その顔にまで付いた泡をとってやるリーシャ。
それは、どこから見ても、家族が見せるような日常の一コマ。

カミュは、幼い頃、アリアハンでそのような光景を傍目で見ることしかなかった。
事実、カミュが母親であるニーナと洗濯をしたという記憶はない。
だからこそ、メルエとリーシャの姿が微笑ましかった。

リーシャとメルエが赤の他人であれば、カミュはそれを鼻で笑っただろう。
リーシャやメルエがどうでもいい人間であれば、カミュはリーシャの行為を『偽善』と感じただろう。
だが、カミュにとって、もはやメルエは他人ではない。
そんなメルエを笑顔にするリーシャという存在に、素直に感謝の念を持ち始めていた。

「リ、リーシャさん！　た、大変です。　衣服が・・・衣服が盗まれています・・・あれ？」

そんな穏やかな空気は、部屋着姿で、髪を梳かしてもいない僧侶の乱入で弾け飛ぶ。
目が覚め、リーシャもメルエもいない部屋。
更には衣服まで全てがなくなっている。
それに気が付いたサラは、大慌てで階段を下りて来たのだ。

「あははは。　サラ、以前に私は言ったはずだぞ。　女性がそんな姿で人前に出るものではないと。」

「えっ！？　あ、あああああああああ！！」

リーシャとメルエが手元で行っていることに気が付いたサラは、呆然とその行為を見ていたが、笑い声と共に発したリーシャの言葉に我に帰る。

確かに、メルエが加入する前のレーベの村で、サラはリーシャにそのような忠告を受けていた。そして、改めて自分の姿を見ると、部屋着は乱れ、へそが丸出しになっており、髪の毛は纏まっておらず、あらぬ方向に飛び散っている。
同じ部屋着を着ていても、リーシャもメルエを身なりをきちんと整えているだけに、サラの姿の異常さは際立っていた。

己の姿を確認したサラは、大声を上げ、部屋へと戻って行く。
その姿にリーシャは盛大に笑い、メルエもまた、声を出して笑った。
世界を救うために旅を続け、様々な困難に立ち向かう者達の、ほんの僅かな休息。
そんな穏やかな空気は、ポルトガの城下町を吹き抜ける海風に乗って、空を舞って行く。

宿屋のカウンターに部屋のカギを返した後、カミュは昨晩訪れた放牧地へと向かう。
その後ろ姿にサラやメルエは首を傾げるが、リーシャは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

「ヒヒーン！」

「・・・やはりか・・・」

放牧地に入ると、昨晩男がいた場所に、一頭の馬がいるだけ。
それは、カミュの予想が間違っていなかったことの証明。
まだ、この馬が昨晩の男であることや、昨晩の男がサリアンの言っていたカルロスという恋人であることは証明されてはいないが、リーシャは既にそれを事実として受け止めていた。

何故なら、その馬はカミュを見つめ、哀しそうに一声鳴き声を上げたのだから・・・
その悲痛な叫びが、リーシャの胸を打った。

訳の分からないという顔をしていたサラとメルエを促し、カミュ達は放牧地を出た。
向かうは、ポルトガ城。

ポルトガの城下町は、西に長く伸びる。
城下町と城との間には大きな港が存在し、そこには数船の漁船が繋がれてはいるが、朝の漁業を終えて戻ってきたという様子ではない。

「やはり、ここにも魔物の影響はあるのですね。」

「ああ、海には強力な魔物が住んでいるからな。」

港の様子を見て、サラが呟く内容にリーシャも同意を示した。
『寂れている』
それが正直な感想だろう。

カザーブ等の村とは違い、城下町であるため、活気はある。
しかし、それが、ポルトガ本来の活気ではないことぐらい、余所者であるサラにも理解できた。ポルトガ国のメイン収入である貿易が行われていないことが一目瞭然だからだ。

ゼロではないだろう。
しかし、頻繁に船が往来していないことは間違いがない。
本来であれば、この様な昼近くであれば、船からの荷降ろしや、今朝獲って来た魚等を売る声等で、賑わいを見せているはずだろう。

「・・・・・・・お魚・・・・・・・・・・」

「ん？　メルエは魚が好きなのか？　よし。今度は私が魚を使った料理を作ってやろう。私の故郷アリアハンも海辺の国だ。魚料理も婆やにみっちり仕込まれたからな。」

少なからず水揚げされた魚達を売っている店を横目に見ていたメルエを見て、リーシャは笑いながら胸を張る。
別段、メルエは魚を食すことが好きだとは言っていない。
ただ、未だに生きている魚達を目にすることが少なかっただけに、物珍しさに声を上げたのだ。それでも自分を想って笑顔を向けてくれるリーシャに、メルエは嬉しそうに微笑み、大きく頷いた。

港を抜けると、一行の前に大きな城門が見えて来た。
貿易国ポルトガの全盛期の勢いを残す城の佇まいは、城門にもしっ

かりと残されていた。

見上げなければ全貌が見えない程の大きな門。

そして、鉄でできているであろう大きな扉には、細かい装飾が施されている。

アリアハンの城門は、周囲は鉄であったが、扉自体は木でできていた。

それが、ポルトガとアリアハンの国力の差を如実に表している。

「・・・アリアハンのカミュと申します。　国王様への謁見をお願い致しましたく、お伺いいたしました。」

「・・・アリアハンから・・・？」

門番をしている二人の兵士に軽く会釈し、カミュは名乗りと共に、アリアハン国王から拝領したカミュの身分を証明する証文を門番へと手渡す。

それを受け取った兵士は、聞き慣れぬ国名に軽く首を傾げながらも、証文に目を通す。

「・・・確かに・・・しかし、どのようにしてこの国に・・・一度ポルトガを訪れたことがあるのか？」

「・・・いえ・・・ロマリアの西にある関所を通って、ポルトガに入国させて頂きました。」

「「　なに！？　」」

兵士達の疑問、そして驚きは当然の結果であろう。
この十数年間、ポルトガは陸の孤島となっていた。
ポルトガから他国に行くとなれば、船で海を渡る以外は、ロマリアと接するあの川を渡らなければいけない。
その関所は、十数年前に閉じられたままだったのだ。
それが開かれた。
それはロマリアが国交を回復させたことに他ならない。

「い、今、取り次いでくる。　暫し、待たれよ。」

カミュの顔を驚愕の表情で見ていた兵士の一人が我に返り、城内へと入って行く。
もう一人の兵士は、未だに驚きの表情を浮かべながら、カミュ達一行を一人一人眺めていた。

暫くして、城門の前で待っていたカミュ達の下へ、兵士と共に文官らしき人間が現れた。
おそらく、国王との謁見等の取次ぎをする者なのであろう。
もう一度、カミュからアリアハン国王からの証文を受け取り確認し

た後、訝しげに四人に視線を向ける。

その視線は決して心地よい物ではなかった。
端的に言えば、『侮り』に近い視線。
年若い青年と、三人の女性。
その内一人は明らかな幼子だ。

魔物が横行するこの時世であれば、文官の危惧は当然のものであり、国王の傍に仕えるものならば、なくてはならない猜疑心。
それを理解しているからこそ、リーシャは不愉快な気分になりながらも何も言わない。
メルエもリーシャが何も言わないことから、その文官の視線を避けるようにリーシャの背中に隠れた。

「・・・こちらは、イシス国女王様からの紹介状です。　ご確認を・・・」

「　何と！　イシス女王様からの紹介もあるのか？　」

カミュ達を舐めるように見る文官に埒が明かないと感じたカミュは、先日イシス女王であるアンリから受け取った紹介状を文官へと手渡す。
思いがけない名を聞いた文官は、疑いの瞳から驚きの瞳へと変化させていく。
素早く紹介状を広げ、その中身を確認した後、文官の表情は穏やかな物に変わっていた。

「大変失礼いたしました。　ご無礼をお許しください。」

「・・・いえ。　今の世では、貴殿の態度こそ、国を護る姿勢と考えます。　お気になさらずに。」

深々と頭を下げる文官に、カミュも一つ頭を下げる。
それは、一種の社交辞令。
しかし、そんなカミュの言葉に、文官は軽い笑顔を作った。

「国王様との謁見の準備を致します。　どうぞ、こちらへ。」

「・・・ありがとうございます・・・」

文官から、アリアハン国王の証文とイシス女王の紹介状を受け取ったカミュは、軽く頭を下げ、文官に導かれるままに城の中へと入って行く。
その後をリーシャが続き、その手を握ってメルエが続く。

先程の文官の態度に若干腹を立てていたサラは、文官の変貌ぶりに頭が追い付かなくなり、また、最もあの態度に怒りを露わにすると思われていたリーシャが何も言わないことを不思議に思っていた。
常に仮面を被り続け、こういう視線に慣れているカミュや、元々国家に属する立場であったリーシャの様な考え方は、平民の出であり、教会という、ある意味閉塞的な場所で育ったサラにはできなかった

のだ。

「よくぞ参った。　そなたが、英雄オルテガの息子カミュであるか？」

「はっ。　ポルトガ国王のご尊顔を拝し、恐悦至極に存じます。」

謁見の間には、玉座が一つ。
その横に大臣らしき小太りの中年男が控えるだけ。
その玉座に座っていた歳の頃３０代後半に見える若い国王が、床を見つめるように頭を下げるカミュへと声を落とした。

「ふむ。　そなたの願いは？」

「・・・はっ。　この先の旅の為、ポルトガ国からの船での出港の許可を頂きたく。」

単刀直入なポルトガ国王の言葉に、一瞬カミュは驚き、声を詰まらせた。
だが、今のカミュは仮面を被っている。

そのまま何事もなかったかのように言葉を続けた。

「ほぉ・・・出港の許可とな？」

「はっ。」

一度顔を上げたカミュは、国王の瞳に何か違和感を覚える。
ここまでの旅で、いくつかの国を回ってきたが、このポルトガ国王の瞳は、他の王族の物とは一線を介していた。

「ふむ。　しかし、今、この国の港からは定期船などは出ておらん。港を見て解ると思うが、貿易船なども年に数回。　そなた等の希望には添えぬと思うが？」

「・・・では、次の貿易船とは・・・・」

予想はしていたが、それが国王自らの口から聞いたことにより、カミュだけではなく、後ろに控える三人の表情にも僅かばかりの影が差す。

カミュの問いかけに、気を悪くした様子もなく、ポルトガ国王は傍にいる大臣に視線を送る。その視線を受けた大臣が、少し考えるような素振りを見せた後、口を開いた。

「先日、船が港から出たばかりでありますので、早くても一年後かと。　しかし、ここ最近は海の魔物の凶暴化も進んでいますので、それも希望的観測に過ぎません。」

「・・・だそうだ。」

もう一度視線を戻す国王の目には、明らかに落胆に肩を落とす勇者一行の姿が映った。
『もしかすると、彼等の旅は、行き詰まっているのかもしれない。』
国王は、そう感じていた。

「ふむ。　そなた等は、東の大陸へは足を運んだのか？」

「・・・いえ・・・まだにございます。」

突如掛けられたポルトガ国王の言葉に、カミュは何を言われたのかを理解するのに数秒を要さねばならなかった。
カミュの否定の言葉に、ポルトガ国王は、髭の生えていない顎を一撫でしてから、再度口を開く。

「別段、船がなくとも東の大陸には渡れよう。」

「はっ。　そのような噂を耳にしましたが、その道が見つかりませんでした。」

顔を上げて答えるカミュの目を、国王は見つめる。
その瞳の奥にある何かを探し求めるように。

「ふっ。　ノルドの奴か？　暫し待て。」

カミュの瞳を見ていた国王が一つ笑うと、大臣に目配せをし、持ってこさせた文箱を開いて、何やら書き始める。
下を向いたままのリーシャ達三人は、謁見の間で何が起こっているのかが解らない。
ただ、今までのカミュと国王とのやり取りが、何かしら進展しそうだということだけは理解できた。
国王の口調が変化していることは、リーシャだけが気づいていた。

「ふむ。　これでいい。　これをノルドの奴に渡してみよ。」

「・・・はっ・・・」

大臣経由で手渡された文を、両手を掲げて受け取ったカミュは、どこか気の抜けたような返事を返す。カミュの中で、このポルトガ国王が、今まで謁見した国王とは違うということが確定された瞬間だった。

「よし。　カミュと申したな。　そなた等に命を申し渡す。　東の大陸に行き、そこの名産である『黒胡椒』を持ち帰って来い。　さすれば、このポルトガは国を挙げて、そなたを『勇者』と認め、支援することを約束しよう。」

「・・・はっ・・・」

カミュの返答は、相変わらず、一国の国王の前で発するものではなかった。
どこか、釈然としない想いがあるのだろう。

「できぬか？　東の大陸は、ここの魔物より強い。　しかし、そなた等の使命は『魔王討伐』のはず。　魔物程度にそなた等の行動が止められたのであれば、『魔王討伐』等夢のまた夢ではないのか？」

『なんて失礼な物言い』
サラは、後ろで控えながら、そう感じていた。
一国の国王が、世界を救う為に立ちあがった青年にかける言葉ではない。
しかも、『黒胡椒を持ち帰れ』等、国王の我儘でしかないではないか。
サラは、赤い絨毯を見つめながら、怒りを感じていた。

『黒胡椒』

それは、ある地方にしかない調味料。
その他の地方では、調理に使う調味料は塩が基本。
いや、正確に言えば、塩しかないのだ。

サラにしても、その名は知っていても、実物など見たことはない。
昔は、アリアハンに入港した商船がたまに持って来ていたが、その価値は、庶民が手を出せるレベルのものではなかった。
その一粒は、黄金一粒と同価値とまで言われていたのだ。

「『黒胡椒』を手に入れる方法は、そなたに任せる。　そなたが持ち帰った分、全てをこの私が買い取ることを約束しよう。」

その『黒胡椒』を一粒買うだけでも、黄金が一粒必要なのだ。
そのような資金を与えもせずに、手に入れて来いなど、横暴にも程がある。
元金がなければ、仕入れる事などできないことは、常識の範疇。
それすらも理解できない王族なのかとサラは憤った。

しかも、カミュ達の使命が何であるかを理解しておきながら、自分の我儘を優先して命を下すなど、サラからしてみれば、最低の人種と映った。

しかし、サラは気がつかない。
そもそも、一国を担う王族に対し、そのような考えが浮かぶ時点で、もはや以前のサラではないのだ。
『王族は人の守護を、聖霊ルビスから委ねられた選ばれし者』
という教え自体に、疑問を感じ始めている証拠であった。

第一、カミュはすでに、アリアハン国王から同じような命を受けているのだ。
少ない資金、貧弱な物資での『魔王討伐』という命を・・・・

「はっ。　確かに承りました。」

カミュの返答は、先程よりもはっきりとしたもの。
そんなカミュの声を聞きながら、リーシャは考えていた。

憤るサラとは対照的に、リーシャは落ち着いている。
それは、感じ方の違いに他ならない。
リーシャは、このポルトガ国王の言っていることにどこか違和感を覚えた。

この国王は、カミュ達の目的を確かに聞き、理解している。
これから先の旅に、必ず船がいることも理解しているのだろう。
その上で、尚、自分達に東の大陸への道を示したのだ。

「では、そなた達が我が前に『黒胡椒』を持ち帰って来ることを楽しみにしているぞ。」

「・・・必ず・・・国王様の御前に・・・」

リーシャが感じた違和感は、カミュも同じ様に感じていたもの。
そして、カミュは国王の言葉を受けることにした。

それは、この国王の瞳の色に何かを感じたからに他ならない。
今まで見て来た王族の物とは違い、どちらかと言えば、自分達に近いその色に。

カミュ達が謁見の間を去り、そこにまだ若い部類に入る国王と、大臣が残される。
一つ溜息を吐いた国王に、傍に立つ大臣の顔に苦笑が浮かぶ。

「昔を思い出されましたかな？」

「・・・ふっ・・・俺には、魔王に挑む腕も度胸もなかったさ。」

大臣の言葉に、どこか哀しく、どこか優しい表情を浮かべたポルトガ国王は、謁見の間から見えるポルトガ港を眺めた。
数々の品と、そして数多くの人が旅立った港。
そして、今や何も送り出すことのなくなった港を・・・

ポルトガ城？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

前書きで書きました失態と言うのは・・・（汗

実は、今回出てきた猫にされた女性。
この女性のゲーム内での名は「サブリナ」！
お分かりですね・・・
そう。リーシャの父親の名です。

まさか、ここで自分がつけた名があだになろうとは・・・
もはや、元アリアハン宮廷騎士隊長の名はかえられません。
ですので、別の名をつけました。
大変申し訳ありませんでした。

ご意見、ご感想など、心よりお待ちしております。

～バーンの抜け道～（前書き）

ｙｏｕｔｕ○ｅで拝見させて頂いている、ドラクエ音楽をピアノで弾いている方が、コンサートをやると言うことを知り、是非行こうと開催場所と時間を確認してみると・・・・

大阪・・・

それは、ちょっと流石に・・・・・

「すぎやまこういち」氏とアレフガルド交響楽団のコンサートを見に行きたいです。

～バーンの抜け道～

「カミュ。　このままあのホビットの所へ向かうのか？」

「・・・いや、武器屋に寄る・・・」

鉄でできた重い城門が開かれ、カミュ達一行は城下町へと踏み出す。城門が重い音を響かせながら閉じられると、その前に門番の兵士が二人立ち、再びポルトガ城に静けさが戻った。

町へと続く港を歩きながら、リーシャはカミュへと今後の方針を尋ね、その問いにカミュが間髪入れずに答えを返した。

「そうか。　私の盾も新調しなければならないしな。　ん？　サラ、どうした？」

「　えっ！？　あ、いえ・・・なんでもありません。」

カミュの答えに満足そうに頷いたリーシャであったが、ふと隣を歩くサラの様子が変であることに気づき、声をかける。

実際、サラは謁見の間からここまで、パーティーの最後尾を歩き、一言も言葉を発していない。サラが何かを考え込み、悩んでいる時の行動であることは、ここまでの旅でリーシャには解っていた。

サラは、城門前での文官の態度に始まり、謁見の間での国王の発言に複雑な想いを持っていた。
それは、サラの心に刻みつけられている『教え』と相反する物。
何故、自分はここまで憤りを感じるのか。
しかも、それは人類の保護者であると教えられた王族に対して。
それがサラを悩ませる。

「サラ？　行こう。」

「あっ！　は、はい。」

しかも、その悩みは、目の前でにこやかな表情で声をかけてくる女性戦士も含まれていた。
何故、自分はこれ程までに憤りを感じるのに、沸点が低いと言っても過言ではない筈のリーシャがここまで穏やかなのか。
サラは、それに疑問を感じ、そして、その事実が自分の聖霊ルビスに対する信仰心の薄れなのではないかという恐怖に襲われる。

サラは『聖霊ルビス』への信仰が、自分にとっての唯一の物だと信じている。
いや、その事を今、リーシャやカミュに話せば、彼等は鼻で笑うだろう。
しかし、サラはそれに気付かない。
当の昔に、自分の中での優先事項が変化している事実に。

「・・・・・・メルエも・・・・・・・・」

「あはは。　アンの服以上の装備品はここにはないと言ったろう？」

買い物に行くという事実を知ったメルエが、この城下町に辿り着く前にした言葉を繰り返す。自分を物欲しげに見上げてくるメルエに、リーシャは声を出して笑いだした。

その内に、一行は港を通り抜け、城下町へと入った。

昨晩に訪れた集合店舗へと向かう。

宿屋や武器屋に、道具屋がひしめく様に揃うその場所は、陽も高くなったためなのか、人で溢れていた。

「・・・ここに置いてある盾で、一番良い物は・・・？」

数ある店の中で、カミュが立ち寄った場所は、集合店舗の中でも一際小さな武器と防具の店。カミュが向かった先が、何故このような小さな店なのか、リーシャもサラも理解できなかった。

他に大きな店が近くにある。

そこは客も多く、品揃えも良いように見えた。

それでも、カミュはその店を一瞥しただけで、迷わずにこの店に向かって歩いてきたのだ。

「ん？　おお！　いらっしゃい。　盾か？　そうだな・・・やはり、

この＞鉄の盾＜だろうな。　少し重さはあるが、その分防御力は高い。」

「・・・そうか。　合わせてもらえるか？」

「もちろんさ。　装備してみて、具合を確かめてくれ！」

店主がカウンターに置いた＞鉄の盾＜をカミュは手にとってみる。
小さな店で、来客も少ない割に、その＞鉄の盾＜は埃も被らず、その光沢を誇っていた。
それは、この武器屋の主人が手入れを怠っていないことの証明。

「・・・これを二つくれ・・・」

「ありがとう！　２４００ゴールドになるよ。」

カミュはカウンターにゴールドを置き、主人はそのゴールドを確認した後に、カミュとリーシャの具合を聞き、調整の為、奥へと入って行った。

「・・・この盾はアンタが使え・・・」

「えっ！？　これを私がですか？」

「お、おい。　カミュ、その盾は・・・」

奥へと入って行った主人を見送った後、カミュはその手に持っていた＞うろこの盾＜をサラへと手渡した。カミュから盾を受け取ったはいいが、サラはカミュのその行為に戸惑っている。それは、おそらく、少し顔を歪めているリーシャが考えていることと同じ物が原因なのであろう。

「・・・誰から貰ったものであろうと、盾は盾だ。　その盾よりも良い物があれば、そちらに替える。　後生大事に貧弱な装備のまま旅を続けて、死ぬつもりはない。」

「ぐっ！」

リーシャが考えていることを理解したカミュが、先に釘を刺した。

そう。

カミュが持っていた＞うろこの盾＜は、ロマリア国王から賜った物。

一国の宝物庫にあった程の物である。

それをカミュは、『貧弱な装備』と吐き捨てたのだ。

「・・・アンタには、＞鉄の盾＜は重すぎる。　＞うろこの盾＜な

らば、防御力の割に軽く、扱いやすいだろう。」

「あ、は、はい・・・ありがとうございます。」

一瞬、血が頭に上りそうになったリーシャではあったが、続いたカミュの言葉を聞き、その血は急速に下がって行く。
カミュの言葉の中に、サラの事を考えている節が多分に見受けられたからだ。

確かにサラの細腕では、＞鉄の盾＜を装備することはできないだろう。
例え、手につける事が出来ても、それを掲げて、魔物からの攻撃を防御することは難しい。
そして、この辺りの魔物の攻撃でさえ、もはや＞青銅の盾＜では心許ない事は、リーシャが持つ盾の有り様が物語っている。
しかも、これから先の旅となれば、更に強い敵と遭遇することはまず間違いはない。

「さぁ、できたぞ。　もう一度、手に嵌めてみて、具合を確かめてくれ。」

リーシャが、複雑な想いでカミュとサラのやり取りを見ていると、奥から主人が戻ってきた。持っている二つの＞鉄の盾＜をカミュとリーシャにそれぞれ渡し、二人が具合を確かめている様子を真剣に見守っている。
少しでも具合が悪ければ、再び直すつもりなのであろう。

「・・・俺の方は、これで大丈夫だ・・・」

「私も大丈夫だ。」

具合を確かめ終わった二人が、不備がないことを告げると、主人は人の良さそうな笑みを浮かべ、『そうか』と一言呟いた。

「・・・この二つの＞青銅の盾＜を引き取ってくれるか・・・？」

手に＞鉄の盾＜を装備し終えたカミュは、リーシャとサラの持っている＞青銅の盾＜を指差し、主人に尋ねるが、主人はその盾を一瞥し、苦い表情を作った。

「う～ん。　そっちの盾は引き取れるが・・・悪いが、アンタの方の盾は、買い取ることはできないな・・・まぁ、処分していいというのであれば、ゴールドは支払えないが、引き取らせてもらうよ。」

「これは、ダメか・・・」

サラの方の盾は、正直無傷に等しい。
カンダタの斧の攻撃を受けたこともあるが、かすかに傷らしき物が

付いているだけである。

それに対し、リーシャの盾は、もはや原型を留めてはいない。
所々が欠け落ち、表面は傷だらけになっている。
それは、何も、ポルテガ城下町に辿り着く前に遭遇した＞ドルイド＜が放った＞バギ＜だけが原因ではない。

彼女は、ここまでこの盾で、自分だけではなく仲間達を護って来た。
＞キズモ＜の放つ＞メラ＜からサラを護り、同じ様に＞さまよう鎧＜の剣撃からもサラを護った。
アッサラームに向かう途中では、＞暴れザル＜の暴力からメルエの命を護っている。
あの時、咄嗟にこの盾を＞暴れザル＜の拳と自身の身体の間に滑り込ませたことによって、リーシャもまた命を繋げたのだ。

『買い取ることはできない』とまで言われた＞青銅の盾＜の姿は、言うなればリーシャの身代わり。彼女のここまでの行動を意味するものだった。

「・・・それでいい。　悪いな。　売り物にならない物を引き取らせて。」

リーシャの盾の経緯を知っているからこそ、カミュは一言も不平を口にしなかった。
暫し、しみじみと盾を見つめていたリーシャは、＞青銅の盾＜を一撫でした後、カウンターに置く。同じようにサラも自分の盾をカウンターに置いた。

「いや、こちらこそ、すまないな。　ん？　そう言えば、アンタ達は兜を被っていないんだな？　頭を護るのも重要だぞ？」

「・・・何か、良い物があるのか・・・・？」

カミュ達一行を見て、主人は何かに気が付き、その内容を口にする。
その内容通り、カミュ達一行は頭を護る物を装備してはいない。
サラは僧侶帽、メルエは＞とんがり帽子＜を頭に乗せているが、それは敵からの防御を考えての装備ではない。

「これなんて、どうだ？」

「・・・これは・・・？」

主人が取り出した物は、小さな兜。
頭頂部をすっぽりと覆うように、頭に乗せるようなものだった。

「それは＞鉄兜＜さ。　鉄でできているだけに、多少の重さはあるが、女性でも被れる重さだし、結構防御力もある。」

「・・・＞鉄兜＜か・・・おい、アンタが被ってみろ。」

「　えっ！？　また私ですか？」

「・・・・・・サラ・・・・・・・ずるい・・・・・・」

主人から＞鉄兜＜を受け取ったカミュは、それを再びサラへと手渡す。

カミュにしてみれば、メルエには無理だろうが、サラであれば、もしかすると可能かもしれないという考えだったのだが、ここまで黙って買い物を眺めていたメルエは、再びサラに物が与えられることに不満を漏らし、頬を膨らませていた。

「・・・オヤジ・・・この娘に合う物は何かないか？」

「う～ん。　子ども用の物はなぁ・・・・」

メルエの言葉と表情に苦笑しながら、カミュは主人へと声をかけるが、主人の言葉は期待に沿うようなものではなかった。

その言葉に、メルエは肩を落とし、リーシャの足元に戻って行く。

何とも言えない罪悪感がカウンター付近を支配する。

「あ、あの・・・少し重いですが、動くことに支障を来すほどではありません。」

「・・・そうか・・・ならアンタはそれを被れ。」

「・・・・・サラ・・・・・・・ずるい・・・・・・・」

皆の空気が固まっている中、＞鉄兜＜を被ったサラが、その具合を口にする。
サラの言葉に、カミュはそれを装備するように指示を出し、リーシャの足元から少し顔を出したメルエが再び不満の言葉を洩らす。

「えっ！？　で、でも、私には、この帽子が・・・・」

「サラ。　ここから先は、自分の身を一番に考えるんだ。」

僧侶である自分の身の証である＞僧侶帽＜を脱ぐことに抵抗感を持ったサラが、＞鉄兜＜を脱ごうとするが、それは隣に立つリーシャによって止められた。
ここから先の魔物相手では、それこそカミュの言うとおり、貧弱な装備では命を落としかねない。それは、リーシャも良く理解していたのだ。

「・・・でも・・・」

「・・・はぁ・・・そんなに嫌なら、その＞鉄兜＜を覆うように＞僧侶帽＜を被ればいいだろう？」

「おっ！　そう言うことなら、手伝うぞ。　少し形状は変わってしまうかもしれないが、時間をもらえれば、手直ししてみよう。」

納得がいかずに肩を落とすサラに対して発したカミュの提案に、意外なほど武器屋の主人が乗り気を見せる。
彼にしてみれば、久しぶりの上客なのかもしれない。
＞鉄の盾＜というこの町で一番上等な盾を、即決で二つ購入し、そのまま＞鉄兜＜も店主の提案を受け入れる形で購入しようとしている。

ただ、この主人は、根っこから人の良い人間なのであろう。
自分の提案を一も二もなく受け入れるカミュ達に対し、ふっかけたり、粗悪品を売りつけたり等ということを考えてもいなかった。

ただ、ただ、久しぶりに現れたやりがいのあるお客に対し、目を輝かせている。
『自分ができる可能な限りのことを提供し、満足して旅に出てもらいたい。』
商人としての本来の輝きに満ち満ちていた。

「その兜、私も貰おう。　ほら、サラ手直しをしてもらえ。　カミュはどうする？」

「・・・・俺はいい・・・・・」

それでも、決心がつかず、悩むサラをリーシャが後押しする。
そのついでに、カミュへも伺いを立てるが、カミュはその首を軽く横に振った。

「・・・・・・・・・・むぅ・・・・・・・・・・」

「・・・今回はメルエに新しい物はないが、次の町ではきっと何かあるだろう・・・」

リーシャがサラと共に武器屋の主人の方へ行ってしまった為にカミュの下へと移動したメルエは、カミュのマントの裾を握りながら不満気にむくれていた。
そんなメルエの頭を一撫でしたカミュは、苦笑を浮かべながら慰めの言葉をかける。

もし、その言葉をリーシャやサラが聞いたのなら、少し驚いた表情を見せたのかもしれないが、メルエにとってはカミュがそう言う言葉を言ってくれることに違和感はない。
少し拗ねたような表情をしながらも、こくりと頷いた。

「ありがとう。　また、寄ってくれ。」

主人の気の良い声に見送られ、カミュ達は武器屋を後にする。
装備品を充実させ、新たな大陸への準備を済ませた一行は、城下町を抜け、平原に出るために歩いた。その途中で、未だに膨れているメルエをサラが慰めるが、逆効果になってしまったことは、また別の話。

「・・・一度、アッサラームの近くまで戻る・・・」

城下町を出たカミュ達は、海風が吹く平原に立っている。
潮風は強く、未だにその匂いに慣れないメルエが、若干顔を顰める様子が可笑しく、サラは微笑んだ。

カミュの言葉に、一行はカミュの下へと集って行く。
一度訪れた先が目的地である場合、彼等は歩く必要などない。
それぞれがカミュの一部を掴んだのを確認すると、カミュが詠唱を開始した。

「・・・・ルーラ・・・・」

四人の身体をカミュの魔法力が包み込み、上空へと浮き上がらせる。
暫し上空に停止していた四人の身体は、方角を決定したように、南東へと進路をとり、消えて行った。

アッサラームの町の近くに降り立った一行は、そのまま町に入ることをせずに、北東へと進路をとって歩き出す。

基本的に＞ルーラ＜という呪文の効力は、街や城等にしか発揮することはない。
それは、『人』の頭の構造故なのか。
洞窟や塔などは、一度訪れたことのある場所であったとしても、＞ルーラ＜によってその場所に移動することが出来ない。

陽が落ち始めていた事もあり、ノルドが住む洞窟を覆うような森の中へ入った所で、カミュ達は野営をすることとなる。
カミュの＞トヘロス＜の呪文が、周囲を神聖な空気で包み込み、その中で火を熾して眠りに付く。見張りは、カミュとリーシャで交代しながら行うが、魔法の効力がある以上、余程の事がなければ、魔物が近寄ることもない。
最近では、カミュの傍よりもリーシャの傍で眠ることが多くなったメルエの髪を梳きながら、リーシャは一人夜空を見上げる。

『アリアハン大陸にいた頃より、確かに私達の視野は広がった・・・』

夜空を見ながらリーシャが思うこと。
それは、自分達の成長。
特にサラの視野の広がりは、顕著だった。
しかし、果たしてそれがいい方向に向かっているものなのか。
それがリーシャには解らない。

決して悪い物ではないと感じてはいるが、サラの様な僧侶にとって、その職務を遂行するに当たり、今の心理状態が正しいものなのかと問われれば、リーシャは即答できない。
自分にしても、宮廷騎士としての誇りは失っていないが、その視点に微妙なズレが生じていることは自覚している。

『私達がこの先の旅で見て行く物は、どのような物なのだろう？』

そんな恐怖にも似た感情がリーシャの胸の中で広がり始めている。
誰しも自分が変わって行くことを自覚することは怖い物だ。
そして、この先の時間で、その変化の度合いが更に大きくなって行くという可能性が高ければ、それは恐怖となる。
今のリーシャがそうなのかもしれない。

『魔王討伐』
それが、彼女等の最終目的であることに変わりはない。
それは、この先も揺らぐことはないだろう。
ただ、それは何のためなのか。

そして、そこに向かうのが誰のためなのか。
それは変化していくのかもしれない。
リーシャは、自分の膝元で眠るメルエのあどけない表情を眺めながら、そう考えた。
月は明るく、森に茂る木々たちの間から一行を照らす。
それは、彼等の未来へ続く明るく照らす光なのか。

翌朝、朝食を取り終えた一行は、ノルドの洞窟の前へと歩き出す。
もはや、カミュの唱えた＞トヘロス＜の効果は切れていたが、遭遇した魔物達は、カミュ達の放つ何かを敏感に感じ取り、戦わずに逃げ出すことが多かった。

逃げる魔物に追い打ちをかけることは、誰一人しない。
サラであっても、その姿を苦々しく眺めるだけで、魔物の背に魔法をぶつけるような真似はしなかった。
何かを耐えるように、拳を握り締めるサラの背中をリーシャが軽く叩き、一行は歩き出す。

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・いたい・・・・・・・・・？」

「えっ!?　あっ・・・大丈夫ですよ。　ありがとうございます、メルエ。」

サラの苦痛を表すような表情に、メルエが心配そうに声をかけ、その手を握った。
自分の手を突如包み込んだ暖かさに、サラは偽りではない微笑みを浮かべ、メルエと共に歩きだす。その姿にリーシャもまた、微笑みを浮かべた。

「なんじゃ？　また来たのか？　ここにはそんな道はないと言ったろう？」

洞窟に入り、奥に進んだ所にある居住区に入りこんだカミュ達を、その小さな男は待っていた。発する言葉の刺々しさと反し、その表情はどこか優しく、四人を迎え入れる。

「・・・・こちらを・・・・」

「・・・・・・」

自分達の前まで移動してきたノルドに対し、カミュはポルトガで貰った王の文を手渡す。
半ば予想はしていたのだろう。
ノルドは、別段疑いの眼差しを向けることなく、その文を受け取り、中を開いた。
しばらく文に目を通したノルドは、一つ目を瞑り、息を大きく吐いた。

「・・・やはり、アンタは、思った通りの『人間』だったな・・・」

その瞳は真っ直ぐカミュを射抜いている。
カミュはその視線を受け止めてはいるが、その真意は掴めていない。
ノルドの考えていたカミュの『人物像』。
それは、おそらくこのパーティー以外の人物は、すべからく感じるものなのかもしれない。

「他ならぬポルトガ王の頼みとあらば、致し方なし。　さぁ、ついて来なされ。」

暫し、カミュの瞳を見つめていたノルドは、意を決したようにその口を開き、一度メルエに優しげな微笑みを浮かべた後、その横を通り過ぎ、居住区を出て行った。

「・・・カミュ・・・・」

「・・・行くぞ・・・・」

予想外の急展開に戸惑うリーシャの視線を受けたカミュは、一度全員の顔を見渡し、ノルドの後を追って歩き出す。その後をそれぞれの顔を見合わせた三人が続いて行った。

「ふむ。　そこで、待っていなされ。」

居住区を出た先にある、大きな石の壁の前に立っていたノルドは、出て来たカミュ達を確認すると、その足を制止させた。
ノルドの声に何かを感じた四人の足が止まる。
『何が起きるのか？』と不安な表情を浮かべるサラに反して、メルエの目は期待と好奇心に輝いていた。

メルエの好意的な視線と、他の三人の訝しげな視線を受け流し、ノルドは助走を取るように数歩後ろへ下がり、そのまま石の壁に向かって突進していった。

ドシ――――ン！！

小さなその肩を石壁にぶつける音が洞窟内に響き渡る。
それは、相当な衝撃なのか、石壁はきしみ、洞窟の天井からは小石や砂がパラパラと降りかかって来た。

ドシ――――ン！

先程よりも大きな音を立て、ノルドが石壁に体当たりをする。
石壁はきしみ、『ビシッ』という音を立て、大きな亀裂が生じた。

余りの出来事に口を開けて、呆然と佇むリーシャとサラ。
期待と好奇心が、憧れや羨望に変わって行くメルエの瞳。
カミュは唯、目の前で起こっていることを素直に受け入れていた。

ドシ――――――ーン！

止めとばかりに、大きな助走をとって、走りだした小さなノルドの身体が石壁と接触した瞬間、あれ程強固な壁であった石壁が、亀裂ができた所を中心に粉々に弾け飛んだ。
以前、アリアハン大陸を出る時に＞魔法の玉＜を使用した時のように、壁が瓦礫へと変わって行く。

「さぁ、行きなされ。　これが＞バーンの抜け道＜への入口だ。」

＞バーンの抜け道＜
彼等ホビット族の英雄とも言えるバーンが作ったと云われる抜け道。
それは、高くそびえ立つ険しい山々の間をくり抜く様に作られ、東の大陸と西の大陸を結ぶ唯一の陸路である。

この道は本来、バーンと同じホビット族しか知らず、その一族が護っている。

「・・・・・すごい・・・・・すごい・・・・・」

呆然とするリーシャやサラとは別に、メルエは感動に目を輝かせ、ノルドの近くへと駆け寄って行く。今度はノルドが驚く番だった。

ホビット族という異種族に嫌悪や侮蔑を露わにする人間を数多く見て来た。

その中に、稀にノルドの友であるポルトガ王やカミュのように、差別することなく接する人間はいるが、これ程純粋な好意を向けてくるものは、彼の人生の中で初めての経験だったのだ。

「・・・・・・・すごい・・・・・・・」

「あ、ああ。　ありがとう。」

ノルドと同じぐらいの視線の高さから、尊敬に似た眼差しを向けてくるメルエに、ノルドは大いに戸惑った。

彼は、ホビット族の中での異種であった。

バーンの末裔ということもあり、同種から迫害されることはなかったが、その巨大な力は恐れの対象となったのだ。

本来、同じエルフ族で括られる＞ドワーフ＜とは違い、力が強い訳

でもないホビット族の中で、山々を切り裂き、洞窟を掘る力を有し、それを封鎖する岩壁を破壊することができるノルドは自然と同種から孤立していった。

そんな中出会ったのが、未来のポルトガ国の玉座に座ることを約束されていた一人の青年であった。彼の瞳は優しく、暖かであった。人間から、侮蔑や嫌悪の視線しか受けて来なかったノルドにとって、ある意味恐怖の対象であった『人』という種族への見方が変わった瞬間でもあった。

しかし、今それ以上の暖かな瞳を受けている。
それは、ノルドと同じ高さの視線。
ノルドの１０分１も生きていない程の少女。

「ふふ。　メルエ、その御仁にお礼を。」

「・・・・・ん・・・・・ありが・・とう・・・・・・」

メルエに戸惑っているノルドを見て、我に帰ったリーシャが、メルエのはしゃぎ様に微笑み、感謝の意を表す。リーシャの言葉を受けたメルエが一つ頷いた後、ノルドに向かって頭を下げるのと同時にリーシャも、小さな大人に向かって頭を下げた。
その二人の様子に、ノルドの戸惑いは、拍車をかける。

「い、いや。　いいんだ。　頭を上げてくれ。」

「・・・いえ。　本当にありがとうございました・・・」

「あっ！　す、すみません。　本当にありがとうございます！」

両手を振って、リーシャ達の行動を止めようとするノルドの言葉を遮って、一番近くにいたカミュまでもが頭を下げ、全員がノルドに感謝する姿に、遅まきながら我に帰ったサラも慌てて頭を下げた。

サラの姿を見たノルドは、もはや戸惑うことを止めた。
彼等は、そういう『人』なのだ。
ノルド自身が多く見て来た『人』の姿が、『人』の全てではないことは、若き日のポルトガ王や、カミュの父親であるオルテガを見て知っていた。
しかし、その後十数年間、『人』と接することを避けて来たノルドは忘れていたのだ。

「・・・では・・・」

「あ、ああ。　東の大陸に入れば、ここよりも強力な魔物が住むという。　このバーンの抜け道は、魔物の侵入を防ぐ役割もしている。
気を付けて行かれよ。」

カミュが再び、頭を下げたことで、ノルドの頭は完全に覚醒した。
この抜け道を護る本来の意味を告げ、注意を促す。

それに対し、もう一度頷いたカミュは、そのまま抜け道の奥へと進んで行く。
その後をサラ。
そして最後にリーシャと、その手を握るメルエが続く。

最後に通り過ぎるメルエが、リーシャの手を握っている反対の手をノルドに軽く振った。
その事に、軽い驚きを示したノルドではあったが、ゆっくりと顔に微笑みを作り、ノルドもまた、メルエに対し、軽く手を振り返す。
ノルドの行動を見てにこやかに微笑む少女を見て、ノルドは自分が数十年、いや百余年の間、この抜け道を護って来た意味を理解した。

「この時の為に・・・この世界に生きる全ての者達の希望の為に・・・この抜け道があったのかもしれんな・・・」

カミュ一行の背が奥へと進み、見えなくなってから呟いたノルドの言葉は、洞窟内に反響し、静かに消えて行った。

ノルドが開いてくれた＞バーンの抜け道＜は、魔物の気配など一切

なく、澄んだ空気に満ちていた。　通常は、洞窟内などは魔物が好んで済みつくのだが、この洞窟は違っていた。

それが、ホビットのようなエルフ族の特性なのか。
それとも、何か術式が組まれているのかは解らないが、カミュ達一行は何の障害もなく、東の大陸への道を歩いて行く。

「あっ！　カミュ様、あれは？」

それ程距離を歩くことなく、前に進む道が途切れた。
緩やかに下る道ではあったが、一本道であったため、道を誤ること等はなかったはず。
それは、サラが見つけた何かによって証明された。

「・・・梯子か・・・」

「上るのか？」

それは、壁に立てかけられるように立つ一つの梯子。
それは、上部へと続いていた。

「・・・はぁ・・・一つ聞きたいんだが、ここまで来て、これを上らないという選択肢がアンタの中には存在するのか？」

「ぐっ・・・いや、すまない。」

リーシャの呼びかけに、心底呆れたように溜息を吐いたカミュの声が、リーシャに心に突き刺さる。確かに、一本道を歩いてきた先にあった梯子であれば、その先にあるのは、ノルドを信じるのならば、東の大陸へと繋がる出口しかあり得ない。

「あっ！　ま、まずは、カミュ様が先に行ってください。」

「　？　」

「そ、そうだな。　カミュ、お前が先に行け！」

何かに気が付いたように、突然声を出したサラに、カミュは首を傾げるが、サラの様子に何かを感じ取ったリーシャが、カミュを先に行かせる後押しの声をかける。

「・・・わかった・・・」

リーシャの剣幕に、カミュは意味が理解できないながらも、素直に頷いた。

もう一人、全く意味を理解できないメルエは、大きく首を傾げなが

ら、その様子を眺め、先に行こうとするカミュに柔らかな笑顔を向けた。

メルエに一つ頷いたカミュを先頭に、一行は梯子を上って行く。
だが、梯子の上に光は見えない。
本当に出口へとつながっているのか疑い始めた時、カミュの手が固い何かに当たった。
それは、自然の鉱物ではない硬さ。

「・・・木の蓋か・・・・？」

「カミュ！　何かあったのか？」

上に行くカミュが止まってしまったことによって、後方から上り始めていた三人の動きも停止してしまったことに、リーシャが疑問を投げかけてくる。
その言葉にカミュは何も返さず、自分の行く手を遮った蓋らしき物を確認していた。

「カミュ様、大丈夫ですか？」

明かりが途切れ、手元すらも怪しくなったこともあり、すぐ後ろから上って来ていたサラにもカミュがしていることは解らない。
故に、カミュへと声をかけるが、その時、サラの目に急激な明かりが飛び込んできた。

余りの明るさに目が眩み、思わず梯子を掴んでいた手を離してしまいそうになる。

それは、地上の光。

太陽が昇り切り、大地を照らす明かりが、光の届かない洞窟内を照らしたのだ。

カミュが予想したとおり、それは、木でできた蓋の様なものだった。

カミュが力を込めて、それを上部に押し上げる。

長年、誰一人開ける事のなかった扉なのだろう。

まるで地面と結合してしまったのではないかと錯覚を起こす程に重い扉が、『メリッ』っというような剥がれる音を立てながら開いた。

「・・・手を取れ・・・」

「あっ!?　あ、ありがとうございます。」

差し込む光に慣れるまで時間のかかったサラの目に入って来たのは、既に上り終えたカミュが差しだす手。サラは突如出されたその手に驚き、戸惑った。

以前のカミュであれば、このような行為は考えられない。

手を差し伸べるカミュの表情に、何の感情も浮かんでいない所は、アリアハンと全く変化はない。しかし、最近は、サラにもカミュの変化は認識できるほどまでになっていた。

理想や思想。

全てにおいて、サラとは交わることのない程にかけ離れた『勇者』

という存在。
それは、サラが信じていた『勇者像』とは全く違う存在。
未だに相容れない部分は多分に残されている。
おそらく、この先の旅でも、彼とは対立することは多いだろう。
それでも、少しずつ、自分達の目的が一つに定まり始めている。
サラはそんな気がし始めていた。

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・早く・・・・・・・・・」

「あっ!?　ご、ごめんなさい。」

カミュの手を呆然と眺めていたサラに、後ろから不満の声が聞こえる。
それは、サラのすぐ後ろを上って来ていた、このパーティー最年少の魔法使い。
上を見上げ、頬を膨らませている表情は、初めて会った時には考えられない程、豊かなもの。それこそ、彼ら全員の変化の原因となっているものなのかもしれない。

「ふふふ。　メルエ。　そうサラを責めるな。」

その小さな少女の後ろから上って来た、アリアハンの女性戦士の表情も柔らかい。
サラ、メルエと順番にその手を取って、引き揚げたカミュの手が、最後にリーシャへと伸びる。

自分へ伸ばされた手を見て、一瞬驚きの表情を浮かべたリーシャであったが、すぐに、小さな笑みを浮かべ、その手を取った。

最後のリーシャが大地に降り立った後、カミュはもう一度木の蓋を閉めた。
そして、その上を草木で覆い、更に大きな石を乗せる。
その行為が、魔物が入り込まない為のものだと理解したリーシャとサラは、何気なく見ていたが、メルエは、石を押すカミュを手伝うように、一緒になって、石を蓋の上へと押していた。

「ふふふ。　カミュ、ここからどの方角に進むんだ？」

石を押し終わり、満足そうにカミュへと笑顔を向けるメルエに微笑んでいたリーシャがこの後の進路について、カミュへと尋ねるが、その問いかけに、地図を開いたカミュは短く答えるのみだった。

「・・・南だ・・・」

カミュの言葉少ない返答に、もはや慣れてしまっていたリーシャや

サラは、一つ頷き、進路を南にとって歩き出す。

＞バーンの抜け道＜の出口は、西の大陸と東の大陸を隔てる険しい山脈を抜けた山道にあった。故に、一度山道を抜けてから、進路を南に取る必要性があり、一行はカミュを先頭に山道を下って行く。

「カミュ！」

「・・・ああ・・・」

一行が傾斜の緩やかな山道に入った頃、最後尾を歩くリーシャの声が響く。

同じように、リーシャが感じた気配を感じ取っていたカミュが、背中の剣を抜きながら返答を返す。

それは、以前遭遇したことのある様な気配。

姿は見えずとも、自分達を見つめているような視線をカミュやリーシャは感じたのだ。

カミュの行動に、マントの裾を握っていたメルエが素早くサラの後ろに移動する。

もはや、戦闘時のメルエの定位置となりつつあるその場所で杖を構えるメルエの表情は、厳しく、魔法使いとしての顔になりつつあった。

「カミュ様！　来ます！」

カミュ達から少し遅れは取ったが、同じ様な視線を感じ取ったサラは、その気配が急速に近づいてくることをカミュへと告げ、背中の槍を構えた。

「　！！　」

サラの言葉に斧を握る手に力を込めたリーシャの目の前の景色が一瞬歪んだ。

怯んだリーシャの頬を熱気を含む空気が通り過ぎたかと思うと、歪んでいた景色に変化が見える。熱気を含む空気が急速に収束し、その形を形成していった。

「　盾を構えろ！　」

「　！！　」

その光景に見とれていたリーシャは、カミュの叫び声に我に返り、

咄嗟にポルトガで新調した＞鉄の盾＜を前方に向けて構える。
リーシャが盾を構えるのとほぼ同時に、その盾を強い熱気が包み込んだ。

鉄でできている盾を通じて、自分の左手に伝わってくる熱さに、苦痛の表情を浮かべながら、リーシャはカミュ達がいる場所へと移動する。
自分の身に何が起きたのかが理解できていないリーシャではあったが、まずは状況把握のため距離を取ったのは戦士としての経験なのかもしれない。

「カミュ様、あれは？」

「＞シャンパーニ＜の近くで遭遇した魔物に近いが、異なる物と考えた方がいいだろうな。」

カミュ達の下に戻り、熱された盾を下ろしたリーシャが見た姿。
それは、以前＞シャンパーニの塔＜に向かう途中で遭遇した＞ギズモ＜によく似た魔物。
煙の様な姿に、中央に映る目と裂けたような口。

「・・・・・・ベギラマ・・・・・・」

以前＞ギズモ＜と遭遇した際、＞ギズモ＜を倒したのはサラだった。
それは、魔法をある意味自分の存在価値と考えているメルエには屈

辱だったのだ。
故に、誰かが仕掛ける前に、リーシャが戻ってすぐ、メルエは手に持つ杖を目の前に浮かぶ二体の魔物に向け、呪文を唱えた。

「なに！？」

「！！！」

しかし、ここまで数多くの魔物の命を奪ってきた最強の灼熱呪文は、まるで魔物の身体に吸収されていくように掻き消えた。
それは、イシス砂漠で遭遇した＞火炎ムカデ＜を彷彿とさせるものだった。

＞ヒートギズモ＜
ギズモと同様、その繁殖方法及び、生態は解明されていない。
霧の様な煙の集合体であるギズモと異なり、その身体は熱気を帯びた空気によって形成されている。その熱気は人間の身体を容易く焦がす程のものであり、それを象徴するかのように、形成された煙は赤々とその温度を露わす。
自らの熱を外に放出するかのように、＞火の息＜を吐きだし、敵を焦がす魔物。
故に、その身体に火炎や灼熱の魔法は効力を発揮しないのだ。

「・・・・・・・・・・うぅぅぅ・・・・・・・・・・」

再び、自分の魔法が効かない敵を前にし、メルエは悔しそうに唸り声を上げる。
目の前に敵さえいなければ、和やかな空気が流れる一コマではあったが、未だ敵は無傷。

「メルエ！　悔しがるのは後だ！　メルエは氷結の魔法も使えるはずだろ！」

「・・・・・・ん・・・・・・・・」

悔しそうに唸るメルエを窘め、前を向かせる声はリーシャのもの。
握っている斧を構えたまま、視線を向けずにかかるリーシャの声に、メルエは小さく頷いた。

「　カミュ！　あの魔物は、武器では倒せないのか！？　」

「・・・解らない・・・ただ、形状を保っている限り、その核となる部分があるのは間違いないだろう。　そこを叩けば、何とかなるかもしれない。」

以前遭遇した＞ギズモ＜は、全てサラの唱えた＞バギ＜によって一掃している。
一度剣を振るったこともあったが、霧の様な存在を撒き散らしただけに終わっていたのだ。

「・・・だが・・・あの系統は、メルエやその僧侶に任せた方が無難だろう・・・」

「は、はい。　任せて下さい！」

「・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・やる・・・・・・・・」

リーシャの問いに、自分の考えを語ったカミュであったが、それはあくまで可能性の話であることを付け加えた。
続いたカミュの言葉に、任されたことの喜びを感じ、胸を張って答えるサラであったが、何かに対抗意識を剥き出しにしたメルエに阻まれる形となる。

「　メルエ！　」

その時、もう一度＞ヒートギズモ＜が裂けたような口を大きく開き、小さな火球を吐き出す。
それが、メルエに向かっていることに気が付いたリーシャが、再び盾を構えてメルエの前に立ちはだかった。

「・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・・・」

＞鉄の盾＜で火球を受け止めたリーシャの足元から、狙い澄ましたような冷気が、未だに口を開いている＞ヒートギズモ＜に寸分の狂いもなく突き刺さる。

「　グモォォォォォ！　」

＞ヒートギズモ＜の熱された身体に突き刺さる冷気。
それは、熱と冷気の闘い。
水を蒸発させ、氷さえ溶かす＞ヒートギズモ＜の身体をメルエの放った冷気が包み込む。

勝者は、冷気だった。
通常の魔法使いが唱える＞ヒャド＜であれば、こうはいかなかったかもしれない。
しかし、メルエが唱えた＞ヒャド＜は＞ヒートギズモ＜を形成する熱気を帯びた空気を包み込み、それを凍らすことで固定させた。

凍り付いた＞ヒートギズモ＜は、空中を漂うことが不可能になり、重力に従ってそのまま地面へと落ちる。落下のスピードと、地面の固さによって、落ちた瞬間に凍り付いた＞ヒートギズモ＜は粉々に砕け散った。

「　よし！　よくやった、メルエ！　」

「私も、負けられません。　バギ！」

自分の足元で、杖を構えていたメルエに、軽く視線を送るリーシャに、メルエが頷く。
その様子を見ていたサラが、今度は自分の番とばかりに、もう一体残っている＞ヒートギズモ＜に向かって片手を上げ、呪文の詠唱を開始した。

しかし、サラの唱えた真空は、＞ヒートギズモ＜を完全に消滅させるに至らなかった。
熱された空気を切り裂き、確かにその体積を減少させたのだが、＞バギ＜ではその威力が不十分であったのだ。

「・・・・くそ・・・・」

「はっ！？」

若干自分の身体を削り取られた＞ヒートギズモ＜は、怒りを露わにし、その口をサラに向けて大きく開く。
サラがそれに気付いた時は、すでに火球が吐き出された後だった。
迫り来る火球に目を瞑りそうになるサラの目の前に突如現れた影。
リーシャと同じようにポルトガで新調した＞鉄の盾＜を前に掲げ、後ろにいる人物を護るように立ちはだかる大きな背中。
それは、『勇者』らしからぬ『勇者』。

「メルエ！」

「・・・・・・ん・・・・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・」

盾を前方に構えながら、小さな魔法使いへと声をかける。
メルエは一つ頷き、再びリーシャという大きな背中に護られながら、
＞ヒートギズモ＜に向けて杖を振るう。

再び放たれた、熱気を帯びた空気さえも凍りつかせる程の冷気。
それは、＞火の息＜を吐き出した余韻に浸っていた＞ヒートギズモ
＜を正確に射抜く。

「　やぁぁぁぁ！！　」

メルエの＞ヒャド＜によって徐々に凍りついて行く＞ヒートギズモ
＜を象る熱した空気を、リーシャの斧が一閃する。
冷気によって凍りついていた部分が、粉々に弾け飛び、＞ヒートギ
ズモ＜から生命という炎を奪い取った。

「・・・ふぅ・・・・いつまでも、同じ呪文が通用すると思うな・
・・・」

「は、はい。　申し訳ありませんでした。」

魔物の脅威が去り、盾を下ろしたカミュが、一度振り向きざまに放った言葉は、サラの心を抉った。自分を護ってくれたということに感謝の意を表そうとした矢先の言葉だっただけに、サラはただ、謝ることしかできない。

カミュにしても、ここ最近のサラの成長を認めている節があることはリーシャには解っていた。故に、カミュにとっては何気ない一言だったのであろう。

ただ、基本的に、このパーティーの中で劣等感を少なからず抱えているサラにとって、リーダー的存在であるカミュから告げられた言葉は、意外な程に重かったのだ。

「・・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

「えっ!?　あ、は、はい。　ありがとうございます。　メルエ、凄いですね。」

そんな自分の世界に陥っているサラに対し、帽子を取ったメルエが近づいてきた。

最近は、リーシャやカミュからの労いだけでは満足せず、メルエはサラに対しても労いを要求するようになっていた。

以前は、自分に対して、どこか線を引いているような感があったメルエが、無防備な姿を晒して来ることに嬉しさを感じていたサラだが、この時のサラの表情はどこか引き攣りを見せる。頭を撫でられながらも、サラの様子を不思議に思ったメルエは、しばらくの間小首を傾げていた。

山道を下りきり、一行は山々を取り囲むような森の中に入る。
木々が生い茂り、果物や昆虫などが豊かなこの森には、数多くの小動物が生息していた。

生まれて初めて見る昆虫や小動物に、目を輝かせたメルエが、所々で立ち止まり木々を見上げるため、一行の進行速度は明らかな遅れを見せる。
最初は、そんなメルエの行動を窘めていたリーシャであったが、窘められる度に、とても哀しげな表情を見せながら、振り返り振り返り進むので、カミュへと伺いを立てるしかなかった。

一息溜息を吐いたカミュが、一つ頷いたことにより、メルエが立ち止まり見上げた時は、暫しの休憩を挟むこととなった。
その為、一行は陽が高い内に森を抜ける事はできず、当然のように森の中で野営を行うこととなる。

「メルエ。　私と薪になる枯れ木を取りに行きましょう。」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

サラの呼びかけに、近くにいた『りす』から視線を外し、小さく頷いたメルエは、サラの手を取り、森の中へと入って行く。
その後ろ姿を一人の女性が心配そうに眺めていた。

食事も取り終え、火の番をしているリーシャ以外が眠りにつく。
サラとメルエが拾って来た薪を火にくべながら、夜空を見上げた。
木々の葉の隙間から差し込む月明かりが、ささやかな明るさが眠っているメルエの顔を映し出していた。

その様子に微笑むリーシャの視界に、もぞもぞと蠢く姿が入って来た。
『魔物の襲来か？』と、傍にある斧に手をかけるが、それはリーシャのよく知っている人物。毛布を掛けながら眠っていたサラであった。

「どうした？　眠れないのか？」

「えっ！？　あ、いえ。　少し、用を足してきます。」

リーシャが起きているとは思わなかったのかもしれない。

通常、野営の際に見張りとして起きているのはカミュとリーシャの二人だけ。
サラやメルエは、目を瞑った後は、差し込む朝日の眩しさで目を開くまで、目覚めることはないのだ。

「そ、そうか。　ついて行こうか？」

「いえ。　大丈夫です。」

サラの言葉に、多少の戸惑いを見せたリーシャであったが、夜の森という危険から、付き添った方が良いかを尋ねる。サラはそれにも首を横に振った。

そのまま、森の中へと入って行くサラ。
しかし、リーシャはサラが何かを持って森の中に入って行った事に気が付いていた。

「・・・本来なら・・・そっとしておいた方がいいのだろうな・・・」

サラが消えて行った方向を眺めながら、一言呟いたリーシャは、そのまま＞鉄の斧＜を持ち立ち上がった。
カミュの＞トヘロス＜がかかっている以上、この場所は基本的に安全ではあるが、強力な魔物であれば、＞トヘロス＜が作りだす結界に似た物を越えてくる。

一瞬逡巡を見せたリーシャであったが、『もし魔物が入り込めば、カミュが目を覚ますだろう』と考え、サラが消えて行った方向に歩き出した。

サラはすぐに見つかった。
それ程離れていない場所で、座りこんでいるサラを見て、リーシャは本当に用足しに出て来ただけだったのかと考えたが、見えないながらもサラの周囲を取り巻く雰囲気を感じ取り、もう一歩近づく。

「サラ。　何をしているんだ？」

「　！！　リーシャさん？」

突如後ろから掛けられた声に、飛び跳ねるように振り向いたサラは、暗闇に浮かぶ人影と聞き覚えのある声からその人物を予想した。
徐々に近づいてくる人影は、サラの予想通りの人物。
姉のように厳しい所もあれば、母のように優しい部分もある、サラにとって憧れであり、指針となり得る存在。

「魔法の契約か？　何も今でなくてもいいだろうに。」

「いえ。　私は未熟ですから・・・・」

サラの隣に座ったリーシャは、隣に座るサラを中心に描かれた魔法陣を見て、溜息を吐く。
確かに、このような夜中でなくてもいいはず。
しかし、それをサラは物哀しい表情を作り、否定した。

自分が未熟者だからと。
自分が足を引っ張っているのだからと。

そんな事を溢す、このもう一人の妹の様な存在に、リーシャは言わなくてはいけなかった。

「サラ。　強くなる為に、今よりも成長するために、こうやって魔法の契約をするなとは言わない。　だがな・・・・焦るな。」

「・・・・リーシャさん・・・・」

寝ていた場所に＞僧侶帽＜を置いて来ていたサラの頭に手を乗せ、リーシャは苦笑を浮かべる。濃い蒼色をした癖のない髪の毛は、リーシャの手を受けて乱される。髪が乱されることを気にする余裕もないほど、サラの気持ちは沈んでいた。

リーシャを見上げる瞳は、自信を失い、潤みながら揺らぐ。

アリアハン教会から持ち出した経典を持つ手は、小刻みに震えていた。

「昼間のカミュの言葉を気にしているのか？」

「・・・・・・・」

リーシャの問いかけに、無言の肯定を返すサラ。
そんなサラに、リーシャの苦笑は強くなった。
『あの捻くれ者め』と、ここにはいない青年に呪詛を唱えながら、もう一度サラへと視線を戻す。

「気にするな。　アイツは、ああいう言い方しかできないだけだ。」

「・・・・・・・」

先程とは違い、若干興味を引いたように視線を向けるサラに、リーシャは軽く微笑む。
慈しむように、そして勇気を与えるように。

「サラの成長を一番感じているのは、おそらくカミュだ。　サラがカミュを救った。　それはカミュもしっかりと受け止めている。」

「・・・そうでしょうか・・・もしかしたら、要らぬお世話だったのでは・・・」

「ふふふ。　私と同じ疑問を持つのだな？　私もそう思って、カミュを問いただした。　その時、カミュは、はっきりと『感謝している』と答えたぞ。」

「　えっ！？　」

リーシャの言葉に自信なさげに俯いたサラは、続けられた言葉に驚き、弾かれたように顔を上げる。そこに見えたのは、本当に暖かい笑顔。その顔を見た時、サラは自分の胸の中を蝕んでいる内容は、全てリーシャに気付かれていることを感じた。

「サラ？　私達は、何度もサラに助けられている。　私も、メルエも、そしてカミュも。　サラがこの旅に同道してくれていなければ、私達は当の昔に命を落としていただろう。」

「・・・・そんな・・・・・」

「大袈裟ではないぞ。　サラがいなければ、私が殴られた後、メルエは殺されていたとカミュから聞いている。」

「！！」

そう。
あのアッサラームへの道中、一行が遭遇した＜暴れザル＜によって齎された危機。
それは、全滅の危機と言っても過言ではないものだった。
そんな中、一行を救ったのは、サラが放った魔法＞ラリホー＜。

その後、あのカミュが、サラに向かって丁寧に頭を下げた。
それが今、サラの頭の中で鮮明に思い出される。

「確かに、攻撃魔法では、サラはメルエに遅れを取るかもしれない。
だが、攻撃魔法があれば、補助魔法等はいらないのか？」

「・・・そ、それは・・・」

「違う。　サラの回復呪文。　そして補助呪文。　それがあって、初めて私は前線に出ることができる。　『怪我をしても、サラが癒してくれる』『硬い敵でも、サラが事前に何とかしてくれる』と思うからこそ、私は前に立てる。　それは間違いか？」

「・・・リーシャさん・・・」

サラの目から、止めどなく溢れる熱い水。
それは、嬉し涙なのか。
それとも、リーシャにこのような事を話させてしまったことへの悔し涙なのか。

「『焦るな』と言っても、サラは行動するのだろうな？　だが、無理はするな。」

「・・・はい・・・」

「私達の傷を癒すのも、私達の闘いを楽にするのも、サラの仕事だ。私は、そんなサラを頼もしく思っている。　おそらく、メルエも・・・そしてカミュもな。」

そう結ばれた言葉に、サラはゆっくりと頷く。
そして、その後一向に上がらないサラの顔をリーシャが胸に抱いた。
抑えるような嗚咽は、次第に大きさを増し、今まで溜めていた不安を吐き出すようにリーシャの胸を濡らしていく。
表情にも、態度に出したことのないサラの不安は、ようやく表に出る機会を与えられ、発散されることとなる。

「落ち着いたか？」

「・・・・はい・・・・ぐずっ・・・・」

しばらくの間、リーシャの胸で泣いていたサラがようやく顔を上げる。
腫れぼったく赤くなった瞳が、サラの溜まっていた不安の大きさを表していた。

「・・・リーシャさん・・・」

「ん？　なんだ？」

サラの涙を拭ってやったリーシャは、何かを問うように上げられたサラの顔を見つめた。
言い辛そうに、そして何かを考えるように歪んだサラの表情に、まだ不満が溜まっているのかもしれないと考える。
しかし、そんなサラの口から発せられた言葉は、リーシャの予想を遥かに超えた物だった。

「・・・リーシャさんは、カミュ様を認めているのですね・・・」

「ん？　あ、ああ。」

自分の予想を超えた問いかけに、リーシャは戸惑いながら、ゆっくりと頷いた。
サラは不思議そうにリーシャを眺め、その視線を受け止めてリーシャは口を開く。

「確かに・・・アリアハンを出た時よりも、カミュという存在を認めているのだろう。　ここまで旅をして来て、私はカミュが『勇者』だと認めることにした。」

「・・・それは、初めから・・・」

開かれたリーシャの口から出た言葉に、サラは驚いた。
カミュが『勇者』であることなど、当初から解っていたことだ。
リーシャが仕えるアリアハンという一国家が認めているのだから、当然なのだろう。

「いや。　私は、アリアハンを出る時は、カミュを『勇者』とも『オルテガ様の息子』とも認めてはいなかった。　あんな捻くれた人間がそんなはずはないとな。」

「・・・・・・・」

「だが、ここまでの旅で、カミュが成してきたことは、語り継がれている『勇者』と呼ばれる者達の残した偉業から見ても、遜色はないものだ。　そして、それは何もカミュ一人の力ではない。　周囲の人間や、そのタイミング。　それは、カミュが『勇者』だからこそ掴む可能性なのではないかと思う。」

「『勇者』ならではの・・・・」

サラにとっても、リーシャの語る内容は、予想の遥か斜めを行っているものだった。
『勇者』という定義。
それをサラは考えたことすらなかった。
サラが教えられてきた『勇者像』。
それがサラにとって全てだったのだ。

「ああ。　カミュの考え方は、未だに理解できない部分が多い。　理解したくもない物もある。　ただ、ここまでのカミュの行動に、私は非を唱えることはできない。　あの盗賊に関する処置を含めても・・・・」

「・・・あ・・・・あ・・・・」

サラは思い出す。
自分の身体を固めた、あの恐怖を。
『人』が成す行為だと思えない程に、冷酷で酷いもの。
それをリーシャは容認すると言うのだ。

「確かに、あの行為は酷い。　ただ、カミュの怒りは理解できるんだ。　そして、私やメルエが感じた物と同じ『怒り』を、カミュも感じていたということで、『カミュも人なのだ』と感じた。」

「・・・それは・・・」

「『人』の救世主とされる『勇者』ではあるが、その『勇者』もまた『人』なんだ、サラ。」

リーシャの言葉は、本当にここまでの旅でリーシャが肌で感じた内容。
『勇者』という種族ではなく、『人』が選び出した人間の呼称だということ。
それに対し、サラは言葉が出てこなかった。

サラにしても、『勇者』が『人』ではないと考えていた訳ではない。
だからこそ、＞ピラミッド＜内であれ程懸命になったのだ。
しかし、カミュを自分と対等の存在だと思ったこともなかった。
リーシャは、生まれた家の格式こそ違うが、同じ人間であることは理解している。

そして、最近では、王族に対してですら畏怖を感じなくなりつつあるサラにとって、唯一の畏怖の象徴。
それが『勇者』であるカミュだったのだ。

「私は、カミュが魔王討伐に向かって歩く中で起こる事を見届ける義務がある。　時にはそれを諫め、時に対立することもあるだろう。
　それでも・・・・私はあの年若い『勇者』の全てを否定することは止めた。」

「・・・リーシャさん・・・」

サラとは違い、リーシャはカミュを自分と対等の『人』であることを認めたのだ。
いや、アリアハンを出た時からの口調を考えれば、それは当然の事なのかもしれない。

それでも、サラはその事実に驚いた。
カミュに旅の仲間として見て欲しいと願っていたサラは、いつしか自分さえも、カミュを仲間とは見ていなかった。
その事実を突き付けられたのだ。

「サラ。　ああ見えて、カミュは少しずつサラを認め始めているぞ。
　サラがメルエと薪を拾いに行く時も、それにあの＞ピラミッド＜でも、サラを信じていた。　カミュを全面的に認めてやれとは言わない。　だが、そろそろ、カミュという人間を見てもいい頃だと、

私は思う。」

「・・・・リーシャさん・・・・・」

サラへと語るリーシャの顔は、慈愛に満ちていた。
自分はこれから先に続く果てしない旅路の中で、一体どれ程、この女性に導かれるのだろう。
人を導くことを生業とする僧侶が、一戦士に導かれるというのも奇妙な話。
いや、『人』というものは、こうやって、年長者に導かれ成長していくものなのかもしれない。

「・・・・リーシャさんは、いつ頃からカミュ様の事を・・・・」

「ん？　なんだ？」

しばらく呆然とリーシャを見つめていたサラが、呟くように洩らした言葉が聞き取れず、リーシャは思わず聞き返す。
そして、続く言葉を聞いて、身体を振るわせ始めた。

「や、やはり！　レーベの村を出た頃から、カミュ様とそういうご関係になられていたのですね！」

「・・・・・・サラ・・・・・・」

自分が以前考えていた事が、やはり正しかったのだという盛大な勘違いを始めたサラは、先程からは真逆の笑顔をリーシャに向けた。
しかし、その言葉を聞いたリーシャは、そのまま顔を俯かせ、肩をふるわせ始める。

「・・・・やはり、サラには攻撃面でも役に立ってもらわなくてはいけないな・・・・せっかく起きたんだ・・・・夜明けまで時間もある。　さあ、背中の槍を構えろ。　朝まで稽古をつけてやろう。」

「　ふぇ!?　な、なぜですかぁぁぁ!?　」

翌朝、ボロボロになったサラと、自分の汗を爽やかに拭くリーシャの姿が野営場所で確認される。追い打ちのように、途中で交代の為に起きたカミュに色々と小言を言われ、サラはその場で気を失ってしまった。
その為、一行の出発は、昼を大幅に越えた頃になる。

～バーンの抜け道～（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

しかし、いつまで経っても、先に進みません。
まだ、ババラタにつかないのか！？
というお叱りの声が聞こえてきそうです。

ご意見、ご感想を心より、お待ちしております。

戦闘？【バハラタ周辺】（前書き）

今回は短めです。

戦闘？【バハラタ周辺】

カミュ一行が野営地を出る頃には、陽は高く上っていた。

あれから、野営地では、一つの事件が起こっている。
それは、パーティーの中で最も遅い起床となった少女の目が開いたことから始まった。

身体を起こしてから、何度も目を擦り、覚醒を果たしたメルエは周囲を見渡して自分の家族を探す。その姿は雛鳥が親を探すものに欲にており、見ていてほほえましい気持ちになるものであった。
通常であればの話だが・・・

しかし、覚醒を終えたメルエの瞳に飛び込んできた光景は、とてもほほえましいものではなかったのだ。

カミュの前で、跪く様に座り込んでいる、メルエが慕う僧侶の姿はボロボロだ。
その横に座っている、これもメルエが母の様に慕う女性戦士は、どこか不貞腐れたような顔でカミュを見上げていた。

カミュが何かをリーシャとサラに何かを語りかけているが、少し離れた場所で眠っていたメルエにはその声は届いていない。

故に、メルエの胸に不安が募っていく。

そしてメルエの不安は現実のものとなる。

身体を起こし、三人の下へと、とてとて駆け出したメルエの瞳に、

ゆっくりと横に倒れていくサラの姿が映ったのだ。

それは、メルエの胸に、驚きと共に絶望を感じさせるもの。

「サラ！？」

「！？」

駆け寄ろうとするメルエの足が絶望で止まってしまった時、リーシャとカミュの叫び声が森の中に響いた。

「・・・・・サラ・・・・・・・サラ・・・・・・・」

リーシャとカミュの叫び声に、再び動き始めたメルエの足は、真っ直ぐ横になるように倒れ込んだサラへと向かう。

メルエの登場に、カミュは少し驚いた表情を見せるが、リーシャはどこかバツの悪い顔を作った。

「少し気を失っただけだ。　心配するな。」

「・・・・・・・・・ほんと・・・・・・・・・・・？」

メルエの中で、治療に関して最も信頼できるのはサラなのだ。
例え絶対的強者であり、最高の保護者として見られているカミュであったとしても、事、治療に関しては、サラには敵わない。

故にメルエの口から出た言葉は、再確認のようなものだった。
そして、メルエの言葉に『心外だ』とばかりに顔を顰めたカミュが、一つ溜息を吐いた後、倒れたサラの状態を細かく確認する。

所々にある擦り傷や、切り傷に＞ホイミ＜をかけ、もう一度メルエのほうを向いて『大丈夫だ』という言葉を発したことで、ようやくメルエは納得したように頷いた。

「・・・・・・・・ま・・もの・・・・・・・・？」

しかし、頷いた後に、顔を上げたメルエの瞳は怒りに燃えていた。
自分の大事な姉であり、友にもなり得るサラをこのような姿にした者への純粋な『怒り』。

それは、感情という『人』として当然の物をようやく持ち始めたメルエにとって、ようやく芽生えたもの。

そのメルエの瞳を見て、カミュは柔らかく目を細めたが、傍で見ていたリーシャの表情は、大きな変化を見せる。
それは、どこか『恐怖』にも似たもの。

「・・・いや、この僧侶をこんな状態にしたのは魔物ではない・・・」

「カ、カミュ！！」

怒りに燃えるメルエと視線を合わせるようにしゃがみ込んだカミュは、サラをこの状態にした者の正体を語り始めるが、それに慌てたのは、リーシャ。

「・・・？？？・・・」

『魔物でなければ、誰なのだ？』

そう言いたげに小首を傾げるメルエに、カミュは一つ大きな溜息を吐いた。

カミュが溜息を吐いたことで、メルエの視線はリーシャへと移る。

純粋な疑問を向けるメルエの視線を受け、リーシャは声に詰まった。

「この僧侶を、これ程に痛めつけたのは、そこにいる戦士だ。」

「カ、カミュ！！」

カミュが真実を告げる。

その言葉に、ようやくリーシャは声を出すが、それは唯、名を呼ぶだけに留まる。

そう。
それは、とある少女の視線を受けたため。

カミュの言葉を聞くように視線を向けたメルエの瞳が、もう一度リーシャへと戻って来る。
それはとても厳しいもの。
母親が子供を叱る時に見せるような瞳だった。

「・・・・・・リーシャ・・・・・・・・だめ・・・・・・・」

「うっ！？」

厳しいメルエの視線にリーシャがたじろぐ。
それはいつもとは逆の立場。
初めて受けたメルエの厳しい瞳に、リーシャは泣きたくなってきた。

「・・・・・・・だめ・・・・・・・・・」

「そうだな。　何があったかは知らないが、鍛錬にしては行き過ぎだ。　アンタはこの僧侶を、ここで脱落させたいのか？」

メルエの言葉に乗って相手を諌める。
この方法もいつもならリーシャが行う筈のもの。
それが、今は自分に向かっている。

「それは違う！！」

「ならば、完全に行き過ぎだ。　忘れるな。　コイツは『僧侶』だ。
戦士でもなければ武闘家でもない。　武器を持ち、振り回す身体
能力をアンタや俺と一緒に考えるな。」

「・・・・・ごめん・・・なさい・・・・・・・いう・・・・・」

カミュが口にする言葉は正論。
しかし、リーシャは少し驚いていた。
カミュの言葉は、サラをしっかりと仲間として見ている証拠。

以前、カミュには『自分達を仲間として扱え』と約束させたことはある。
あれから、ほぼ毎朝、カミュと模擬戦を行ってきたが、リーシャは一度たりとも負けたことはない。

つまり、あのときの約束は、継続されているということ。
しかし、今のカミュの表情や態度を見る限り、そんな約束などの拘束もなしに言葉を発しているように感じた。
それが、リーシャには嬉しかった。

「・・・・・ごめん・・なさい・・・・・・いう・・・・・・・」

しかし、そんなリーシャの小さな喜びの時間はすぐに弾け飛ぶ。
再び口を開いたメルエの言葉は、珍しく強いものだった。
そんな初めて受けるメルエの言葉に、リーシャは何か言いようのないものが込み上げて来る。

「わ、わかった。　サラが起きたら謝っておく。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・」

リーシャが諦めたように答えると、ようやくメルエの瞳が柔らかなものへと変わって行った。最後には笑顔に変わったメルエの表情に、リーシャは安堵の溜息を吐き、サラの頭に水で濡らした布を載せたカミュもまた、その表情を優しいものへと変えていく。

「しかし、これで出発は昼過ぎになるだろうな。」

「ぐっ！？　す、すまない。」

カミュが何気なく呟いた言葉はリーシャの胸を抉って行く。
カミュの言葉は別段リーシャを責めるようなものではなかったが、

唯淡々と現状を語るそれは、事実であるが故に、尚更リーシャの罪悪感を刺激するのだ。

「・・・・・カミュ・・・・・・・・だめ・・・・・・・」

表情を曇らすリーシャへの助け舟は、意外な場所から飛んできた。立つ位置を変え、今度はリーシャを護るように立つ小さな背中は、先程までリーシャを糾弾していた幼い少女のもの。

「・・・メルエ・・・」

「わかっている。　別に責めている訳じゃない。」

小さな背中を愛おしい者を見るように見つめるリーシャの呟きは、メルエに向かって溜息を吐きながら答えたカミュの言葉に掻き消された。

「ただ・・・この僧侶はアンタが診ていろ。」

「わかった。」

「・・・・・・・メルエも・・・・・・・」

横になって寝息をたてているサラの看病は、リーシャの仕事となり、メルエはそれに付き合うように、サラの傍へと駆け寄っていく。

ただ、当のメルエは、しばらくはサラの頭に乗せる布を濡らしたりしてはいたが、その内にサラの胸の上で眠ってしまったことは、また別のお話。

そのような小さな出来事があったのだが、昼近くになって目を覚ましたサラには、一連の流れを知る由もない。サラが目を覚ましたことに気がついたリーシャが、突然頭を下げたことに驚いたサラが『私が、まだ未熟なのがいけないのです』と返答してしまったため、この話は、そこで終わりを告げた。

サラに遅れて目を覚ましたメルエが、サラに向かって可愛らしい笑顔を向けた理由が理解できないサラではあったが、その笑顔は自然に心を温めるようなものだった。

「カミュ様？」

サラが起き、食事を取った後に一行は、再び森を出る為に歩き出した。
森は深く、密集した木々は、人間の方向感覚さえも失わせる。

そんな中でも迷いなく歩くカミュの背中を追って歩いてきていたサラは、突然カミュが背中の剣を抜いたことに驚いた。

『カミュが背中の剣に手をかける』＝魔物の襲来
この構図が成り立っている一行ではあるが、サラの感覚が間違っていなければ、今、周囲に魔物の気配は感じられない。

「・・・・動くな・・・・・」

剣を静かに構えたカミュは、呟くような小さな声をこぼす。
その声に圧されたように動きを止めたサラと、その手を握るメルエとは別にリーシャも＞鉄の斧＜を構えた。

リーシャが武器を構えたことによって、サラも再び周囲への警戒を強める。
しかし、サラが感じるものは、風を受けた木々のざわめきと小動物の鳴き声、そして虫達の羽音などだけであった。

「・・・羽音・・・？」

不自然ではないと思われていた森の音で、その中に一つ引っかかるものが存在することに、サラは眉を顰めた。

それもそのはず。

元来、虫の羽音などは、人間の耳元を飛んでいない限り、聞こえてくることなどあり得ない。つまり、それは『異常』なのだ。

「　ふん！　」

そのことにサラが気づいた瞬間、カミュの持つ＞鋼鉄の剣＜の剣先がサラとその手を握るメルエの目の前に振り下ろされた。

驚いたメルエが目を丸くし、口を開けたまま固まってしまったサラの目の前に何かが落ちてくる。それが、巨大なハチの姿をした魔物であることに気がついた時には、一行は既に同じ姿の魔物の群れに囲まれていた。

＞ハンターフライ＜

アリアハン大陸に住む＞さそり蜂＜やカザーブの村の周辺に生息する＞キラービー＜の上位種に当たる魔物。上位種なだけに、そのすばやさは下位の二種を凌ぎ、巨大な羽を震わせて飛び回る。尾には巨大な毒針を所有し、人間の身体を麻痺させ、その後に体液を食す。

その数は三体。
カミュ達を取り囲むように羽音を響かせている。

「　カミュ！　針に気をつけろ！　」

「・・・はぁ・・・それは、こっちの台詞だ。」

飛び回る＞ハンターフライ＜に斧を振りながら、リーシャはカミュへと振り返って注意を促すが、カミュは周囲への警戒を怠らずに溜息を吐く。

「　！！　」

「　@#（9&）　」

そんなカミュの態度に何かを言い返そうと口を開きかけたリーシャの耳に奇妙な音が聞こえてくる。それは羽と羽を擦り合わせたような音。生来持つ人間の生理的な部分を刺激する不快な音だった。

「　下がれ！　」

思わず耳を塞いでしまったサラやメルエに声を飛ばすカミュ。

メルエに至っては、声と共に首根っこを掴まれ、宙を舞った。

何かに受け止められたメルエは、そこがカミュの腕の中であることに安堵し、先程いた場所に目を向け、そしてその光景に驚いた。

「・・・・・・・ギラ・・・・・・・・？」

「・・・ああ・・・」

カミュの腕の中で呟いたメルエの言葉にカミュが一つ頷く。

一行の頬に突き刺さるほどの熱風が周囲を支配し、その熱風を生み出している赤い海が広がっている。メルエの放つ＞ベギラマ＜程の威力はないが、通常の人間なら丸焦げになりかねない程の灼熱。

「　メルエ！　無事か！？　」

二人の下にリーシャとサラが駆け寄る。

リーシャの立ち位置は＞ギラ＜の攻撃範囲からずれていたが、サラはメルエが宙に舞ったと同時に自身の身を後方に下げていたために、手に火傷を負った程度のもので済んでいた。

「サラ。　前に唱えた、『魔法を封じ込める呪文』は使えるか？」

「えっ！？　あ、は、はい。　しかし、あの魔法は、必ず効くとは限りません。」

自信の手に＞ホイミ＜をかけていたサラに、リーシャが問いかける。
その内容にサラは答えるが、それはリーシャにとって期待通りのものではなかった。

ただ、サラの言っていることは事実。
＞マホトーン＜は、必ずその効果を敵全てに及ぼすものではない。
生来魔法の効きにくい種族もいれば、個体ベースでも差はある。
更には運次第で効かないという事もあり得るのだ。

「それでもいい。　もう一度＞マホトーン＜の詠唱を頼む。」

「　は、はい！　」

少し肩を落としたリーシャを余所に、カミュがサラへと声をかける。
一瞬、その言葉の内容に、驚いたような表情を見せたサラであったが、すぐに表情を戻し、大きく頷いた。

昨晩、リーシャがサラに語った内容。
カミュがサラをしっかり見ており、認め始めているという事実。
それが今、サラにもはっきりと分かった。
サラの尚一層の成長が不可欠であるということは当然ではあるが、
ただ、それは順を追って行けばいいことなのである。

「炎が晴れるぞ！」

「はい！　マホトーン！」

目の前に広がっていた炎の海が、潮が引いていくように消えていく。
それを見たリーシャの掛け声と共に、サラの詠唱が完成した。

＞ギラ＜による炎によって、カミュ達の身も焼かれたと考えていたであろう＞ハンターフライ＜は、一箇所に集結していた。
故に、三体の魔物は、サラの呪文行使の恰好の餌食となる。

「@#（9&）」

一体の＞ハンターフライ＜が先程と同じ羽音を立てたことで、一行は一瞬身構えるが、その魔法が発現しないことが確認されてからの行動は速かった。

「やぁ！！」

自分の身に起きたことを理解できていない＞ハンターフライ＜が再び羽を擦り合わせ、魔法の行使を試みるが、その結果は変わらない。
それでも尚、羽を擦り合わせようとする＞ハンターフライ＜ではあったが、三度目の時間が与えられることはなかった。

リーシャが一閃した＞鉄の斧＜は寸分の狂いもなく＞ハンターフライ＜の胴体を斬り分ける。
透明な羽と共に斬り裂かれた身体は、バラバラと地面に落ち、活動を停止させた。

「ふん！」

斧を構え直して振り返ったリーシャの目に、＞鋼鉄の剣＜で＞ハンターフライ＜を突き刺すカミュの姿が映った。

一息ついたリーシャは、再び自分の耳に飛び込んで来た羽音に、弾かれたように視線を向ける。そこにいたのは、羽を震わせる＞ハンターフライ＜。そして、徐々に纏わり付いてくるような、熱気を纏った空気が収束されていく。

「・・・・・・ベギラマ・・・・・・」

だが、その熱風は、リーシャの後方から吹いて来た、もう一つの熱風によって押し戻される。リーシャの目の前で攻防を続ける二つの熱風は徐々にその位置を変えて行った。
それは、リーシャ側へではなく、魔物側へと・・・・

「キュイ――――――――――！！」

羽音とも叫びともつかない奇怪な音を立てて炎に飲み込まれていく魔物を、カミュはいつものように、どこか哀しげな表情を浮かべて見ていた。

＞ギラ＜と＞ベギラマ＜の威力には雲泥の差がある。
しかし、本来の所有者であると云われている魔物が唱えるものと、人間が唱えるものとでは、その性能に違いが生じてくることもまた事実。

つまり、例え＞ベギラマ＜と＞ギラ＜であろうと、通常の魔法使いが使った＞ベギラマ＜であったのであれば、魔物が唱えた＞ギラ＜と拮抗することはあっても、押し返すことは無いと言っても過言ではないのだ。

そのことをカミュは知っていた。
カミュが今見ている光景。
それが、メルエの異常性を表しているという事実が、カミュを苦しめていた。

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

「あ、ああ。　よくやった。」

炎の海が引き、丸焦げとなった＞ハンターフライ＜の死体だけとなったのを確認したメルエが、帽子を取って、カミュへと頭を向ける。
しかし、いつもと同じようにメルエの頭を撫でるカミュの表情は優

れない。

今、カミュの手を受け、気持ちよさそうに目を細める少女にこの能力を与えてしまったのはカミュ自身である。もし、カミュがあの時に、メルエを魔方陣に入れなければ、メルエが魔法を契約することもなかった。

それは、他の人間と同じように『普通』として暮らしていく可能性を奪ったのに等しい。

魔法を知ってしまったために、その異常性が表に出てしまったメルエには、もう二度と『普通』に暮らす機会は訪れないだろう。

その事実がカミュを苦しめる。

「カミュ。　迷うな。　お前が迷えば、メルエが苦しむ。」

「　！？　」

メルエは、カミュの次にリーシャの下で頭を撫でてもらい、今は最後のサラの場所へと移動していた。

無表情の中にも、何かに悩む雰囲気を察したのであろう。

リーシャがカミュへと声をかける。

何時になっても慣れぬ、自身の心の中を見抜かれるという感覚に、カミュは顔を勢い良く上げてしまう。

そんなカミュの行動に苦笑したリーシャが話し出すが、その内容は、カミュを心から動揺させた。

「私は、以前にお前に言ったぞ？　『メルエが何者であろうと、あの娘は私の妹だ』と。　お前は違うのか？」

「・・・いや・・・」

自分の問いかけをカミュが否定したことに、満足そうに頷いたリーシャの顔は、とても優しい笑みが浮かんでいた。

「ならば、何を悩む？　メルエが妹ならば、あの娘が私達の傍を離れることはない。　この先、どれ程の事実が明らかになろうと、私達がメルエを護ってやればいい。」

「・・・ああ・・・」

自分の言葉に、驚きの表情を浮かべたままのカミュを見て、『本当に彼の頭の中に、自分の言葉は届いているのか？』という疑問を持ったリーシャではあったが、再び頷いたカミュにもう一度笑顔を向ける。

「さあ、行こう。　私達の妹に『船』と大海原を見せてやるためにも『黒胡椒』を手に入れなければな。」

「・・・アンタは変わり過ぎだ・・・」

「　な、なんだそれは!?　」

メルエに海を渡る船を見せてやることを考えながら話をしていたリーシャに、カミュはようやくいつもの調子を取り戻す。

そのカミュの言葉に、向きになって反論しようとしたリーシャであったが、さっさと背を向け、メルエとサラの方向に歩き出すカミュが一言小さく呟いた声を聞いて、苦笑に近い表情を浮かべた。

『・・・ありがとう・・・・』

リーシャの耳には、確かにそう聞こえた。

「・・・お前も、相当変わったのだぞ・・・」

そんなリーシャの呟きは、誰の耳にも届かない。

歩き出した一行は、引き続き森の中を歩いて行く。
その間、魔物との遭遇はかなりの数に及んだ。

ほとんどが＞ヒートギズモ＜や＞ハンターフライ＜であった。
初見の時と同じような戦い方を行い、それらの魔物を駆逐していくのだが、メルエの魔法の行使に、もう、カミュの表情は動かなかった。
カミュの中で、確固たる想いが固まったのだ。

「・・・・・・・・・うみ・・・・・・・・嫌い・・・・・・・・・」

それは、リーシャがメルエに船のことを話したことから始まった。
『船』という単語が、いまいち理解できずに、メルエはその説明の中にあった『海』という単語に顔をあからさまに顰める。

別段、船が手に入ると決まった訳ではない。
ただ、『黒胡椒』が手に入れば、大きな資金が手に入る。
一国の国王が、手に入れた『黒胡椒』全てを買い取ると宣言したのだ。
一粒が黄金一粒と同価値と謳われた代物だ。
とすれば、一粒、二粒では話にならないが、有り金全てを投入すれば、それなりの数量の確保は間違いないだろう。

リーシャは、その資金で『船』を買うつもりなのだ。
ただ、彼女は、このパーティーの財布をカミュが握っていることを失念しているのだが・・・

「あはは。　メルエは潮風が苦手なのか？　しかし、船の上から見る海は、きっと素晴らしいと思うぞ。」

「そうですね。　陸地が全く見えず、見渡す限り全て海という景色は、どのようなものなのでしょう。」

「・・・・・・・・・うみ・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・」

メルエの顰め顔を無視するような形で、リーシャとサラの会話は進んでいく。
リーシャもサラも、船には乗ったことがないのだ。
故に、まだ見たことのない光景に夢を巡らす。

そんな一行が森を抜けたのは、既に陽も完全に落ち、周囲が夕陽の名残りの明かりのみとなった頃だった。
足を前に出す度に、周囲の明かりが薄れ、闇が広がっていく。
後方の森が小さくなった頃には、辺りを完全に闇が包み込む夜と化

していた。

「リ、リーシャさん。　＞たいまつ＜を灯した方が良いのではないですか？」

「なんだ？　怖いのか、サラ？」

一歩前を歩くカミュの背中さえも見辛くなった時、サラが意を決したように、後ろを歩くリーシャへと声をかける。
そんなサラの声に、どこか意地悪い笑顔を浮かべ、リーシャはサラをからかうが、その一言に向きになったサラは、メルエの手を引いて、ずんずんと歩き出した。

その時、先頭を歩くカミュが、突然立ち止まった。

「カミュ様？」

「・・・・・・・・・なに・・・・・・・・・？」

前を歩くカミュが立ち止まったことによって、必然的に止まらざるを得なくなったサラとメルエが、前を歩くカミュへと声をかける。
しかし、カミュは、そんな二人の問いかけに答えることなく、警戒感とは違う何かを身体に纏い、周囲を見渡す。

「どうした？・・・・・・ん！！」

三人の動きが止まったことで駆け寄ってきたリーシャもまた、カミュと同じように顔を顰めながら周囲を見渡し始める。

「カミュ・・・・・死臭だ。」

「・・・ああ・・・」

そう。

それは、カミュもリーシャも何度か嗅いだ事のある臭い。

生物として、受け入れることができない臭い。

生物が死に絶え、自然の摂理によって腐敗した後に漂う臭いに他ならなかった。

それは、この近くに、死体が何の弔いもされえず放置されている可能性を示唆している。

「しかし、この近くには、魔物はいないのでしょうか？」

カミュとリーシャが溢す言葉の指し示すものを感じ取ったサラは、頭に浮かんだ疑問をそのまま口にした。

それは、今の時代であれば、最もな疑問。

通常、このような平原で『人』が死ぬということは、魔物に襲われたものが大半であり、魔物に襲われたということは、その肉は全て食され、腐敗する部分が残らないことになる。

つまり、それ以外の可能性としては、『人』が『人』によって殺され、魔物が寄り付かない場所に放置されたということ。

「・・・・・・・・なにか・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな疑問をカミュに投げかけたサラの手を握り、今まで小首を傾げていたはずのメルエが、ある一方に顔を向けたまま、小さく呟いた。

それは、もはやサラでも認めざるを得ない通告。

人外の者の来訪。

「 構えろ！ 」

カミュの言葉とともに、四人は陣形を立て直す。

メルエが見ていた方角に向かって、前をカミュとリーシャが。

その後ろにサラとメルエという、現状で最高の布陣。

ズズズズ・・・

「 うっ！ 」

構えを取ったまま一点を見据える四人の耳に、何か重い物を引きずるような音が聞こえてきた時、先程まで微かにしていた死臭が、強さを増して行った。
引きずる音が大きくなればなるほどに強まる死臭に、思わずサラは口元を押さえる。
それ程に強烈な臭いだったのだ。

「ウゥゥゥゥゥ・・・アァァァァ」

そして、一行の視界に、その姿がはっきりと映ったとき、カミュですらも、口元を押さえずにはいられない程の臭気を放っていた。

＞くさった死体＜
その名の通り、死して尚、放置されていた人間の遺体に宿る怨念が魔王の力によって、その肉体とともに彷徨いだした魔物。
脳まで腐敗が進み、もはや意識などはない。
人の血肉を食し、腐敗の進行を緩めるためだけに人間を襲う。
ただ、死体なだけに、その動きは緩慢であり、集団に襲われない限り、逃げることは可能である。

「ごほっ・・・カミュ！　どうする!?」

目の前まで迫ってきた＞くさった死体＜の放つ強力な死臭に、リー

シャでさえむせ返る。
＞くさった死体＜の数は三体。
魔物とはいえ、元は唯の死体。
焼き払うことや、斬り伏せることは可能だろう。

しかし、今のメルエに魔法を使わせることは、不可能に近い。
余りの臭いに、メルエはサラの背中に顔を埋めてしまっていた。
当のカミュでさえ、辛うじて右手で剣は握ってはいるが、左手は鼻と口に当て、眉を顰めているのだ。

「ここから、南に行けば、バハラタという町があるはずだ。　ごほっ・・・俺が＞ギラ＜を放つ。　アンタは後ろの二人を連れて、全速力で南へ走れ！」

「仕方ないな・・・サラ！　聞いたとおりだ。　カミュの詠唱の完成と共に、南に向かって走るぞ！」

三体の＞くさった死体＜を見据えながら声を絞り出したカミュの言葉に、リーシャは後方の二人に指示を出す。魔物から逃げるということに一瞬、抵抗感を感じたサラであったが、『相手は元は人間だった者』と考えることにし、頷いた。

しかし、肝心のカミュの詠唱がなかなか完成しない。
実際、自分達の周囲に立ち込める死臭は、意識を遥か彼方に飛ばしてしまう程の強さなのだ。呪文の詠唱を始めても、その臭気によって、集中力が続かない。それは、あのカミュであっても苦しめられていたのだ。

「・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・」

一向に状況が好転しない中、突如、今まで顔を埋めていたメルエの声が周囲に響く。
その声に、リーシャは、咄嗟に左手に装備している＞鉄の盾＜を掲げた。

「　ぐはっ！　」

構えた盾に襲い掛かる、凄まじいまでの衝撃。
それは、アッサラーム付近で遭遇した＞暴れザル＜の一撃に勝るとも劣らないもの。
盾で完全に防いだとはいえ、リーシャの身体は宙に浮き、サラとメルエの位置まで弾き飛ばされた。

通常、人間は、自分の持っている力を１００％使用することなど不可能である。
それは、強固なものに、１００％の力でぶつかれば、自分もまた多大なダメージを負うからであり、無意識の内にその力をセーブしているのだ。
それをしない時、それは捨て身の時以外にあり得ない。

しかし、＞くさった死体＜に痛覚はない。
故に、自身の腕や身体が壊れようとも、お構いなしなのだ。
常に１００％の力での行動。

それが、元は人間でありながらも、リーシャ程の戦士を吹き飛ばした所以である。

「ごほっ・・・カミュ！？」

「わかっている！　ギラ！」

リーシャの問いかけに、答えたカミュの声は、珍しく苛立っている。自分の力を思うように引き出せないことが、カミュの苛立ちとなっているのかもしれない。
リーシャと違い、自分の意思で、後方に飛んだカミュは、着地と同時に呪文を行使した。

一箇所に集まった＞くさった死体＜の前に着弾した灼熱呪文は、炎を立ち上らせ、カミュ達と＞くさった死体＜との間に、炎の壁を作り出す。

「　走れ！　」

「「「　！！　」」」

カミュの言葉と同時に、他の三人が一斉に背中を向け、南に向かって走り出す。

「ギラ！」

一歩遅れてスタートを切ったカミュは、振り向き様に、もう一度＞ギラ＜の呪文を行使し、炎の壁をもう一層作り出した後に、駆け出す。

途中、サラの後方を懸命に走るメルエを抱きかかえたカミュは、夜の闇を走った。

＞ギラ＜の炎が晴れたとき、そこには、三体の＞くさった死体＜が放つ死臭と、腐った肉の焼けた異臭だけが残されていた。

戦闘？【バハラタ周辺】（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

まずは、申し訳ありません。
次話はバハラタと言っておきながら、バハラタに辿り着きませんでした。

戦闘を書いていたら、それなりの文字数になってしまって・・・
次話は間違いなく、バハラタになると思います。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしています。

バハラタの町？（前書き）

にじファンで最近ドラクエ小説が多くなってきたな・・・と感じました。
私が書き始めたときは、連載作品など、三作品ぐらいだったのに・・・
やっぱり、自分の中で独自のドラクエ世界を持っている人はたくさんいたんだなとしみじみ思う今日この頃です。
数が多くなると、私の小説など、埋もれてしまいそうですね（汗

バハラタの町？

魔物というよりも、『人』であった者達から逃げ切った一行の前方に、高い石壁に囲まれた町の佇まいが見えてきた。

町の南には海が見え、東には海へとつながる大きな川が流れている。その川から枝分かれしたように、町の中へと続く小さな川が見えた。

＞自治都市バハラタ＜

アッサラームと同じように、どこの国にも属さない都市。

名産品である『黒胡椒』という巨大な資金源を持ち、国家との交渉も可能とする巨大都市である。

しかし、今、カミュ達の目の前に見える町は、灯りも疎らで、華やかさの欠片もない。

本来は、陽が落ちれば、町に住む多くの住民達の夜の営みが始まっているはずなのにも拘わらずだ。

「ずいぶん静かだな。」

「そうですね。」

静まり返る町の様子にリーシャが声を漏らし、それにサラが神妙な表情で返答する。
ただ、サラの傍に近寄って来たリーシャに対し、サラの手を握っていたメルエがあからさまに顔を顰めた。

「・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・いや・・・・・・・・・」

「な、なにっ!?　なぜだ!?」

リーシャから逃げるようにカミュの下へと走り去るメルエに、心からの動揺を表すリーシャが叫ぶ。しかし、メルエは更に逃げるように身を隠した。

「・・・何か臭うな・・・」

「・・・リーシャさんからですね・・・」

「な、なに!?」

自分が『臭い』と言われたことに驚いたリーシャは、自分の衣服の臭いを嗅ぐが、それ程の異臭を放っている訳ではない。だが、確かに、リーシャを基点として、先程カミュ達の意識を飛ばすほどの威

力を誇った死臭が漂っていた。

「・・・・・・・・・・リーシャ・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・」

「くそっ！　どこからだ？　カミュ！　どこだ！？」

カミュの背に隠れるように、自分の方へと呪詛を投げかけるメルエに、リーシャはパニックに陥っていた。理不尽としか言えない言葉をカミュにぶつけるリーシャを、サラは唖然として眺め、カミュは大きく溜息を吐く。

「・・・アンタの盾からじゃないのか・・・？」

「なに！？」

「あっ！」

カミュの呟きに、慌てて自らの左手にある＞鉄の盾＜を見るリーシャであったが、立ち位置的にリーシャより早く、その盾を見ることのできたサラは驚きの表情を浮かべ、すぐに嫌な物を見たように顔を顰めた。

また、カミュの後ろに隠れるメルエは、その盾を見た瞬間に、完全

に身を隠してしまう。

「こ、これは！？」

リーシャが自らの盾を見て、驚きの声を上げる。
だが、他の三人は、誰一人口を開こうとしない。
そればかりか、カミュですら、いやそうに顔を顰め、微妙に距離を取り始めた。
まるで、何かに怯えるように後ろに下がるメルエを見て、サラもリーシャから距離を取り始める。

「・・・お前達・・・」

盾を見たリーシャは、その盾の惨状よりも、他の三人の対応にショックを受けた。
メルエに至っては、もはや顔すらも見せてくれない。

リーシャの盾に付いていた物は『腐肉』。
＞くさった死体＜の攻撃を盾で受けた際に付着したのだろう。
腐りきった肉体は脆く、しかも自身の肉体が壊れることに苦痛を感じない者の攻撃の為、盾で受け止めたその腕の肉がごっそりとこびり付いたのだ。

「リ、リーシャさん・・・私達は、さ、さきに宿屋に行っていますね。」

「ちょっ、ちょっと待て！」

サラの言葉は、サラらしからぬ冷たい言葉。
その表情は引き攣った笑顔を見せ、その身体は、今やメルエと並ぶ程後方へ下がっていた。

「・・・宿屋に入る前に、その盾だけは洗った方が良さそうだな・・・」

サラの言葉に焦りを見せるリーシャに、追い討ちをかけるカミュ。
その言葉に、流石のリーシャも肩を落とした。
もはや、メルエはカミュの後ろではなく、サラの後ろに移動し、リーシャから遠く離れてしまっている。

「・・・はぁ・・・アンタは、メルエを連れて、宿屋で宿を取っておいてくれ。」

「私がですか！？」

軽く溜息を吐いたカミュは、腰に下げていた革袋をサラへと渡す。
手に、ずっしりと重い革袋を受け取ったサラは、革袋とカミュを見比べながら驚きを表していた。

「・・・・・・・・・いく・・・・・・・・・」

「メ、メルエ～～～～～」

戸惑うサラに対し、一刻も早くこの場を去りたいメルエが、先を促すようにサラの衣服を引っ張った。灯りも疎らな夜の町の入り口に、リーシャの哀しみの声が響き渡る。

サラがメルエを連れて宿屋の宿を取り、リーシャは近くの川で盾にこびりついた腐肉を洗い落としてから、護衛のように付いてきていたカミュと共に、宿へと入った。

その頃には、サラもメルエも湯浴みを済ませ、眠りに落ちていた。リーシャを待っていようと思っていたのだろう。

二人で寄り添うようにベッドの上で毛布も掛けずに横になっている二人を見て、リーシャは笑みを浮かべる。

そんな二人の脱いだ衣服を自分の物と一緒に洗い、ついでとばかりに、着替え終えたばかりのカミュの衣服も奪う。それら全てを洗い、干し終えた後、ようやくリーシャも眠りに就いた.

翌朝、昨晩洗った衣服が乾くのを待ち、着替えてから一向はバハラタの町を歩き始めた。
町は、昨晩感じたものが偽りでないことを示すように、静まり返っている。
大都市とはいえ、アッサラームとは違い、バハラタは夜の街ではない。
故に、朝日が昇ったこの時こそ、『黒胡椒』で賑わう商業都市の本領を発揮するはずなのだ。

「何か、考えていたものとずいぶん違いますね。」

「何かあったのだろうか？」

町の中を見渡したサラが、自分の頭の中にあったイメージとのギャップを口にし、同じ様に不思議に思っていたリーシャが、疑問を口にする。

周囲を見渡すと、昨晩よりも人は多いが、相変わらず活気がない。
重い腰を上げ、ようやく店を開くように活動を始めた人々の表情にあるものは、『戸惑い』と絶望にも似た『諦め』。
それは、町の住民全ての表情に表れていた。

「・・・まずは、武器屋に向かう・・・」

「えっ!?　またですか!?」

そんな町の住民の表情を見て、逆に戸惑いを見せるリーシャとサラの横を通り抜けるカミュの言葉に、サラは軽い抗議にも似た声を上げた。

「・・・メルエの顔を見てから、同じ事を言ってくれ・・・」

「・・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・嫌い・・・・・・・・・・」

抗議にも似た声を上げるサラに対し、どこか情けない声を出すカミュの発した言葉を受けて、サラはカミュの足元へと視線を移す。

そこにいたのは、新しい町での買い物を楽しみにしていた一人の少女。

ポルトガの城下町では何も買い与えられなかったことを、本当に残念に思っていたメルエは、不満を漏らすサラに対し、いつものような可愛らしい拒絶の言葉を溢した。

「い、いえ。　メルエ?　私は、そのような意味で言った訳ではあ

りませんよ？」

「・・・・・・・・・」

「そ、そうですね。　まずは、メルエの装備を整えないと！」

自分の弁解の言葉に対しても疑惑の視線を向けてくるメルエに、サラは大いに慌てる。
実際、メルエの装備は、現状を見る限り、最高の物を揃えているはず。
それは、サラはもちろん、リーシャやカミュに至るまで理解していた。
それでも、この幼子の我儘を許してしまう辺りが、幼子と接する機会が極端に少ない生活をしてきた三人の甘さなのかもしれない。

「ふふふ。　サラのお許しも出たことだし、メルエの買い物に向かおうか。」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

そんなサラとメルエのやり取りを優しい顔で見ていたリーシャの呼びかけに、表情を笑顔に戻したメルエが大きく頷く。
ほっと胸を撫で下ろしたサラが最後尾となり、宿屋の向かいの位置にある『武器と防具』の絵が描かれた看板を掲げる店へと入って行

った。

「　いらっしゃい！　」

木戸を開けて中に入ると、店主らしき人間の威勢の良い声が聞こえてくるが、リーシャは入ってすぐの場所に立てかけられている、ある物に目を奪われた。

「お、おい・・・カミュ、これは・・・」

「お客さん！　目が高いね。　それは＞鋼鉄の鎧＜と言って、うちにある物の中でも最高の鎧だ。　鍛えてある分＞鉄の鎧＜よりも丈夫だし、その分軽くもなっている。　間違いなく、お勧めの品だよ。」

立て掛けられていた鎧に釘付けになっているリーシャが、鎧から目を離さずに発した言葉に、店主が素早く反応を返す。その表情は、営業的な笑顔が張り付いているが、どこか妙な雰囲気を滲ませる物だった。

「カミュ、これはいいんじゃないか？」

「・・・はぁ・・・メルエの表情を見てから、もう一度言ってみて

くれ。」

「・・・・・・・・むぅ・・・・・・・・・」

店主の言葉を聞き、カミュへと伺いを立てるリーシャに、カミュは溜息を交えて、先程サラに対して発した言葉を再び口にした。
リーシャが、カミュの話の中に出てくる少女へと視線を移すと、そこには頬を膨らませ、上目遣いに睨むメルエがいる。今度は、リーシャが慌てる番となった。

「い、いや。　これはな・・・わ、わたし達の装備も充実させなければ、メルエを護ることができないだろう？」

「・・・・・・・」

しかし、リーシャの弁解に対し、メルエは『ぷいっ』と顔を背けてしまう。
そんな様子に、カミュはもう一度、深く溜息を吐いた。

「親父、この鎧は、調整はきくのか？」

「お、おお。　まぁ、鋼鉄（はがね）だから少し時間はもらうが・・・半日・・・いや、明日の朝までには調整しておくさ。」

カミュにしても、今着ている＞みかわしの服＜では、装備として心許なかったのも事実。
故に、リーシャが熱望している鎧を購入する方向で話を進め始めた。
そのことに対し、先程以上に頬を膨らませたメルエには視線を向けないようにしてはいたのだが・・・

「では、俺とコイツの分を頼む。　あとは、この娘に合うものは何かないか？」

「ありがとう。　じゃあ、試着してみてくれ。　それと・・・その娘か・・・？　う～ん、そうだなぁ。　その娘は魔法使いなのかい？」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

カミュが自分の事を話し始めたことを感じ、メルエは目を輝かせ、店主の問いかけに対し、杖を掲げて大きく頷いた。そんなメルエの様子に、店主は柔らかな笑みを浮かべたものの、少しの間考えるために唸りだす。

「・・・・！！・・・・そうだ！　この盾なんてどうだ？」

「「「・・・盾・・・？」」」

カミュにとって、店主の答えは予想を大きく超えた物だった。
それは、リーシャやサラも同じで、カミュと同じ様に、どこか間の抜けた声を出す。
メルエに至っては、首を大きく傾けていた。

「ああ。　まぁ、魔法使いが盾というのも変に感じるかもしれないが、この盾は特別でな。　ほら、お嬢ちゃん。　この盾を左手に嵌めてごらん？」

「お、おい！？」

店主がメルエに盾を差し出すのを見て、リーシャが抗議の声を発する。
店主が取り出した盾は、メルエには大きすぎたのだ。
楕円形に近い形のそれは、中心より少し上に宝玉が嵌め込まれており、その大きさはメルエの身体の半分を覆い尽くしてしまう程の物であった。

「なに、大丈夫さ。　支えておいてやるから、左腕に嵌めてみな。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

リーシャの心配を軽くあしらって、店主はカウンターから出て、メルエへと近づいていく。
初めて身に着ける盾という物に、興味を示したメルエは、言われるがままに左腕を店主へと差し出した。

店主が＞魔法の盾＜の裏側にある取っ手をメルエの左腕に嵌めていく。
その大きさと裏腹に、それ程重い物ではないのか、店主が軽く支えているにも拘わらず、メルエはしっかりと左腕で盾を装備し終えた。

「なっ、なに！？」

「えっ！？　ど、どういうことですか？」

装備し終えたメルエの左腕にある盾を見て、リーシャとサラは驚きの声を上げた。
メルエの左腕に嵌められた盾は、その瞬間に柔らかな光に包まれたのだ。
驚きの声を上げるメルエの腕の中で、光に包まれた盾は、その形状を大きく変化させていく。光と共に、収縮されていくように縮んでいった盾は、やがてメルエの腕にしっかりと収まる程の大きさへと変化し終えた。

「・・・・凄いな・・・・・」

「持ち主によって、その形状を変化させる。　故に＜魔法の盾＜。
　力のない魔法使いにも装備できるように術式が組み込まれているらしい。　まぁ、その分、数も少ない貴重品ではあるがな。　それに、この盾は、抗魔力もあるんだそうだ。　魔法に対する防御力も、他の盾とは比べ物にならんぞ。」

感嘆の声を上げるカミュに対し、どこか得意気になって話す店主。
しかし、その話の内容は、十分な物であった。

自分の腕に装備された盾を見て、とても嬉しそうに微笑むメルエ。
このパーティーの中で、盾を持っていなかったのは、メルエだけだったのだ。
故に、皆と同じ様な物が持てたことが、メルエは嬉しかった。

「で、でも・・・貴重品であるならば、それなりのお値段では・・・？」

「そ、そうだな。　そんな余裕は私達にはないぞ？」

「・・・・・・・・・むぅ・・・・・・・・・」

そんなメルエの喜びも、店主の言葉を聞いていたサラの問いかけと、リーシャの答えによって急速に萎んでいってしまう。

「いや、貴重とは言っても、定期的に仕入れられるからな。２００ゴールドにはなるが、法外な値段ではないはずだ。」

「・・・先程の鎧は・・・？」

「ん？　ああ。　＞鋼鉄の鎧＜か？　あれなら２４００ゴールドでいい。」

しかし、店主の答えは意外な物だった。
あれだけ、神秘的な盾にもかかわらず、唯、鉄を鍛えただけの＞鋼鉄の鎧＜より安いのだ。
それは、仕入れる物か、自分で作る物かの違いなのかもしれない。
それでも、メルエの盾とリーシャとカミュの分の鎧で、合わせて６８００ゴールドとなる。
それは、やはり、旅を続けるカミュ達にとっては高価な物だった。

「・・・それなら、先程の話通り、鎧を二つとその盾を貰おう・・・」

「おう。　ありがとうよ。　じゃあ、寸法を見るから、一度試着してみてくれ。」

購入を決めたカミュに、精一杯の営業的な笑顔を向けた主人は、リ

ーシャとカミュの試着具合を見るために、何やら道具を取り出していた。
リーシャは、目を輝かせながら、その鎧を手に取る。
買い与えられることが決まったことに、メルエは笑顔を浮かべ、自分の手にある盾をサラに見せるために近づいて行った。

一度寸法を合わせた後、カミュはここまでの道中で倒してきた魔物の部位を道具屋に売るために出て行った。

「この町は、いつもこんな感じなのか？」

「ん？」

カミュが戻るまでの間、寸法を見てもらっていたリーシャが、町に入ってからの疑問を何気なく店主へと尋ねる。リーシャの鎧の具合を見ていた店主が顔を上げるが、その表情がわずかに曇った。

「そうですね。　この町は、商業都市と聞いていましたけれども。」

「あ、あんた達、町長に雇われた人じゃないのか？」

「どういうことだ？」

リーシャの問いかけに乗るように口を開いたサラに、店主は訝しげな視線を向け、若干失望に近い声を出した。そんな店主にリーシャの疑惑は強まる。

「おかしいと思ったんだ。　盗賊一味の討伐の為に雇った割には、女子供だけだし。」

「　な、なに！？　」

店主が口にした言葉は、リーシャの逆鱗に触れる物だった。『女』であるというだけで、騎士として蔑まれることは、リーシャにとって我慢ならない物の一つ。それは、今も昔も変わりはない。

「リ、リーシャさん！」

「・・・・・・・・だめ・・・・・・・・・」

激昂しそうになるリーシャを、サラとメルエの二人掛りで止めに入る。

そこでようやく、店主も自分の口にしたことの意味を理解した。

「す、すまない。　そ、そういう意味で言った訳じゃないんだ。」

「ならば、どういう意味だ！」

本来ならば、サラや幼いメルエの力で抑えられるリーシャではない。
それが、語気を荒げるだけで済んでいるのは、リーシャが自ら感情を抑えているためであろう。

「こ、この町は、そちらのお嬢さんが言うように、商業都市として栄えた自治都市だった。　それが私達、町民にとっての誇りでもあったんだ。」

「・・・・・・」

リーシャの怒りから逃れる為に、店主は語り出す。
このバハラタという、一国家にも負けぬ程の権勢を誇った町の現状を。
それは、リーシャやサラにとって、身に詰まされる物であった。

「それが、数ヶ月前に突如現れた盗賊達にめちゃくちゃにされた。
この町の基盤となる『黒胡椒』の売買で得た利益の大半の金を要求さている。」

「・・・盗賊・・・？」

店主の話の中に出てきた一つの単語が、サラの頭のどこかに引っかかった。
それは、サラの心の中の忌まわしき記憶を呼び起こさせる単語。

「そのようなもの、突っぱねれば良いではないか！？」

「断ったさ！　町長を中心に、町民全員で断固として拒否した。だが、その度に、町を荒らされる。　その内、この町に旅人はおろか、『黒胡椒』を仕入れに来る商人まで寄り付かなくなった。　資金源が減っても、要求は減らない。　俺達に何をしろって言うんだ！」

『理不尽な要求は断れ』というリーシャの言葉は、店主の悲痛な叫びによって遮られた。
それは、力ある者が言える言葉だと。
それは、余所者だから言える言葉だと。

「町長が、周囲から傭兵等を雇って、盗賊討伐を依頼もした。　それも、全て返り討ちだ。　あいつ等のアジトは掴んだが、それも無駄だった。　町の周りには、盗賊達に殺された傭兵どもの死体が転がり、夜な夜な歩き回るという噂が立ち始め、ますますこの町に足

を運ぶ人間が少なくなる・・・」

「・・・そんな・・・あの魔物は・・・」

昨晩サラたちが遭遇した、＞くさった死体＜は、この数ヶ月で死んだ者達だと言う。
どれ程の無念を持って死んで行ったのかを考え、サラの気持ちは沈んでいった。

「アンタ方が久々の客人だ。　もう、この町も終わりかもしれない。
町から人も消え、『黒胡椒』の生産も儘ならなくなるのも時間の問題だ。」

「・・・その・・・盗賊の名は・・・？」

強い焦燥感を覚えながらも、力む身体を抑え、サラは疑問を口にする。
それは、盗賊という単語を聞いたときからサラを襲っている不安。

「名？　その名前を聞いて、どうするんだ？　アンタ方がこの町を救ってくれるのか？」

対する店主の言葉は、純粋な疑問というよりは『諦め』。

唯一の男性であったカミュがいない今、店主の前にいるのは、戦士のような姿をしているとはいえ、若い女性と、見るからに子供と思われる二人。
とてもではないが、何人もの傭兵を葬ってきた盗賊達を討伐できるとは思えなかったのだ。

「何が言いたい？　私達にはできないとでも言うのか？　私達は・・・」

「・・・そこまでにしておけ・・・」

店主の態度に、静かな怒りを燃え上がらせたリーシャの言葉は、後方の入り口から掛かった、勇者と呼ばれる青年の声に阻まれた。

魔物の部位を売却し終えたカミュが、そのままリーシャの横を抜けて、カウンターの前に立つ。『先程までの会話を聞かれていたのでは？』と、店主は多少の怯えを見せるが、何も言わずにゴールドをカウンターに置いていくカミュを見て、安堵の表情を見せた後にゴールドを数え始めた。

「・・・確かに・・・＞鋼鉄の鎧＜は明日の朝までに仕上げておくから、明日にでも取りに来てくれ。」

「・・・行くぞ・・・」

店主の言葉に対し、興味なさ気に頷いたカミュは、身を翻して店を出て行った。
その後を、自分の左腕を掲げながらメルエが続き、どこか釈然としない思いを残したまま、リーシャとサラが歩き出す。

「くそっ！　何なのだ、あの店主は！」

「・・・リーシャさん・・・」

店の外に出ても、リーシャの怒りは収まらない。
実は、『女』として侮られた事よりも、サラやメルエの凄さを知りもせずに店主が馬鹿にしたことを対してリーシャは怒りを露にしていた。

サラは既に、リーシャが見てきたどの僧侶よりも『人』を救ってきた。
どんな僧侶よりも、自分自身のことを悩み、現実と理想の歪みに苦しみながらも、必死に前を向き、そして歩いている。

この若い僧侶をリーシャは誇りに思い始めていた。

そして、メルエは、この町に住むどの人間よりも辛く苦しい過去を持ちながらも、今、様々な物を貪欲に吸収しようと動き始めている。それは、成長を続けるパーティーの中でも群を抜いており、例えそれが、『皆に置いて行かれないように』という理由であったとしても、自分自身で未来を掴む為に必死になっている証拠に他ならないのだ。

そんな二人を、何も知らない人間が侮ったこと。
それは、肉親を嘲笑されたのに等しい程の怒りを、リーシャの中に生み出した。

「・・・はぁ・・・傍から見れば、女と子供のいる旅人だ。それに、町の武器屋に認められる必要はないだろう？」

「くそっ！　サラやメルエは唯の子供じゃない！　私や、それこそカミュ、お前よりも優れているんだ！」

「・・・リーシャさん・・・」

溜息と共に吐き出されたカミュの言葉に反論するように、怒鳴り声を上げるリーシャを見て、サラは心底驚いた。てっきり、自分を『女』として侮ったことに怒りを覚えているのだと考えていたのだ。
それは、カミュも同じだった。

「・・・アンタは・・・・」

「な、なんだ!?　カミュ、お前は腹立たしくなかったのか!?」

どこか呆れたように、それでいて、いつもよりも優しい表情を浮かべるカミュを見て、リーシャは思わず噛み付いた。

「・・・はぁ・・・メルエや、その僧侶の実力はアンタや俺が知っている。　それ以上に何が必要なんだ?」

「カ、カミュ様・・・」

再び盛大な溜息を吐いた後に呟いたカミュの言葉を聞き、サラはもう一度、驚愕の表情を浮かべることとなる。
カミュの言葉、それはある意味でリーシャの言い分を、全面的に肯定したことを示す。
そして、サラを旅に必要な人間として認めたということになるのだ。

「・・・それで・・・?」

「な、なんだ?」

会話を一段落させたカミュは、もう一度、リーシャへと視線を戻す。
まるで、『まだ、何か言いたいことがあるのだろう？』とでも言いた気に。
しかし、その視線を受けたリーシャは、カミュの意図することが理解できないでいた。心の機微に敏感なリーシャも、カミュの少ない言葉で全てを理解することはできなかったのだ。

「・・・盗賊とは、あの＞シャンパーニの塔＜にいた人達でしょうか？」

戸惑うリーシャの代わりに、口を開いたのはサラ。
武器屋の店主の話を聞いたその時から、自分の胸の中で渦巻いている不安を吐き出した。

「・・・さあな・・・」

「し、しかし・・・もし、あの盗賊であったのならば、この町の惨状に対する責任の一端は、私達にもあるということになります！」

サラの不安の一つはそれだった。
あの塔で、カミュ達は盗賊団の頭を取り逃がしている。
その結果、盗賊団は生き残り、再び悪事を重ねているのだとしたら、その責任はカミュ達にあると言っても過言ではないのだ。

「・・・ふぅ・・・言っておくが、俺はそこまで責任を負うつもりはない。」

「・・・そんな・・・」

いつの間にか、カミュの表情は、いつものような無表情に戻っていた。
それは以前によく見た、冷たく突き放すような物。
そんなカミュの表情に、サラの身体は自然と強張りを見せる。

「アンタがどう考えるのかは知らないが、俺は、この世の全ての凶事を背負える程の存在ではない。」

「・・・それでも・・・それでも、町の人達は苦しんでいます！」

無責任にも聞こえるカミュの言葉は、サラの中の何かに火を点けた。
カミュとサラが醸し出す不穏な空気に、今まで自分の左腕を嬉しそうに眺めていたメルエも顔を上げる。

「それこそ、俺には関係のない話だ。」

「カ、カミュ様！」

サラを冷たく見下ろし、突き放すような言葉を放つカミュに、今度はサラが噛み付いた。
それは、アリアハンを出た頃ならば、日常茶飯事であったやり取り。
しかし、最近はめっきり影を潜めていたものでもあった。

「カミュ様は『勇者様』です。　私は・・・私は、そう信じています。」

「・・・・・・」

ただ、サラは信じ始めていた。
あの夜、リーシャがサラに語った内容を。
それは、カミュが『勇者』であるが故に起こる『必然』というもの。

「カミュ様の最終目的は『魔王討伐』。　私はその旅で、できる限りのお手伝いをします。　ただ、その旅の途中で苦しんでいる人達も救うことができるのならば、できる限り救いたいのです。」

「・・・・・・・・」

「・・・カミュ・・・」

いつもと同じだと思われていた二人のやり取りは、微妙な変化を見せ、違う方向へと動き出す。それでも、変わらぬ無表情なままでサラを見下ろすカミュの名を、リーシャが小さく呟いた。

「・・・誰に何を依頼された訳ではない。　話はそれからだ・・・」

「カミュ様！」

しばしの沈黙の後、カミュが呟いた言葉に、サラが喜びの声を上げた。
決して、カミュは肯定した訳ではない。
しかし、盗賊の討伐を依頼されれば、それを考慮する余地があることを示唆したのだ。

「・・・だが・・・これだけは覚えておけ。　今回は、メルエを救った時とは違う。　アンタには相当な覚悟が必要になるはずだ。」

「・・・覚悟・・・？」

しかし、最後に呟いたカミュの言葉の意味が、サラには理解できない。
何故、自分に『覚悟』が必要なのか。
何故、この町の人を救うことが、今までのものと違うのか。

それが、サラには全く理解できなかったのだ。

「・・・カミュ・・・」

だが、リーシャは違った。
サラの心に歩み寄ったようなカミュに対し、顔を緩めたのも束の間。
何かを警告するように呟いたカミュの言葉に、思い当たる物があるように、一瞬顔を顰めた後、何かを悟ったように、何かを思いつめたように、表情を引き締めた。

再び町を歩き出した一向は、バハラタという町の姿を改めて見る事になる。
町の大通りに人影は少なく、疎らに歩く人々の顔は、総じて生気を失っている。
この町に漂う全てに絶望したような空気は、このバハラタという町を完全に変貌させていた。

「ついに、町長の孫娘が攫われたらしい。」

「えっ！？　いつ？」

「昨日らしい・・・陽が落ちる前だとよ。」

「この町も、もう終わりか・・・・・出て行く準備をしたほうが良さそうだな。」

そんな物悲しい雰囲気が漂う町の片隅で、これまた不穏な臭いが漂う話が聞こえてきた。
先頭を歩くカミュは気にも留めずに歩くが、後ろを歩くサラはその内容に顔を顰める。

町人の話が真実だとすると、これまで、町を荒らされたことはあっても、人が攫われた事はなかったのかもしれない。しかし、盗賊達の要求していることに全面的に答えない町に業を煮やしたのだろう。
町の長である者の孫娘を攫ったというのだ。

「カミュ様！」

「・・・サラ・・・今の私達は、何もできない。」

焦る気持ちだけが先立つサラは、前を歩くカミュへと声を上げるが、それを止めたのは、サラが最も頼りとする女性だった。

「リ、リーシャさん・・・ですが！」

「サラ。　私達には何の情報もない。　盗賊達を討つにしても、そのアジトも分からない。　今は情報を集めるのが先だ。」

リーシャの言うことは尤もな話だった。
『何かをしなければ』という気持ちばかりが焦り、今のサラには現状が見えていない。
それをリーシャは指摘した。

「・・・はい・・・」

「・・・サラがどう考えているのか分からないが、おそらくカミュは、そのために動いているんだろう。」

「　えっ！？　」

「装備を整えた私達には、この町での用事は『黒胡椒』しかないはずだ。　だが、カミュに店を探して歩いている様子はない。」

リーシャのその言葉に、ようやくサラもカミュが歩きながら周囲を意識していることに気がつく。基本的に、カミュは目的地へと迷わ

ずに突き進む。それは、アリアハンを出た時から、町の中であろうと、広野であろうと変わりはなかった。
だが、今のカミュは何かを探して歩いているというよりは、周囲の人間を観察しているようにすら思える。

町人の会話を気にも留めていないように感じたのはサラだけであった。
事実、カミュのマントの裾を握って歩いているメルエですら、いつもと違う様子のカミュを小首を傾げながら見上げていた。

「・・・サラ・・・私からも一つ言っておく。」

「は、はい。」

「今回に限っては、私はサラの行動に異議を唱えることもしないが、同時にカミュの行動や言動を止める気もない。」

「　えっ！？　」

サラは、目の前にいる姉のように慕う女性の発する言葉の意味が全く理解できなかった。
カミュの言葉は、いつも端的でその全てを推し量ることが難しい。
しかし、サラがリーシャの語る内容を理解できないというのは、あの時以来だった。

メルエを救った時。
『今のお前の言葉が、おそらくこれから先、お前を大いに苦しめることになるだろう。』というリーシャの言葉が、サラには理解できなかった。
しかし、その後、リーシャの言っていた通り、サラは自分の発した言葉に苦しめられることとなった。いや、それは今も尚、サラを苦しめている。そして、それはこれから先もサラを大いに苦しめることになるだろう。

リーシャが、敢えてサラに告げるということは、おそらくそういうことなのだ。
今回の件で、サラがカミュの行動を止めなければいけない場面が出てくる可能性があるということ。しかし、その時にリーシャは味方にならないと釘を刺されたのだ。

「さあ、行こう。」

「・・・リ、リーシャさん・・・」

リーシャはそれ以上何も話そうとはしなかった。
それが、尚更にサラを不安にさせる。
暫しの間、呆然とリーシャの背中を見ていたサラであったが、徐々に小さくなるリーシャの背に我に返り、その後を追って駆け出した。

「あら珍しい。　貴方達は旅人なのね。　ようこそバハラタへ。」

町を一周するように歩いていた一行の横をすれ違おうとした女性が、カミュ達の姿を見て、足を止めた。元来、この町の全ての住人が彼女のような者なのだろう。商業都市として栄えている町にとって、物を買いに来る人間は歓迎するものであり、全てはそのような旅人達のお陰で成り立っていると言っても過言ではない。
故に、旅人を歓迎するのだ。

「この先には、『聖なる川』があります。　そこで身を清めなさると、きっと良い事があるでしょう。」

そんな一言を残して、女性は軽く頭を下げた後、カミュ達の前から離れて行った。
カミュ達が、町の外で見た、町に入り込んでいる細い川。
それは、この町より遥か北東にある＞ダーマの神殿＜付近から流れる川の分流であり、古来より、このバハラタでは＞聖なる川＜と呼ばれ、住民達を色々な意味で護ってきた川である。
飲み水になるだけでなく、その川の水には魔よけの効果もあると云われており、また丈夫な子を授かるという逸話まで存在する。
また、このバハラタの名産である『黒胡椒』の栽培も、この川の水なしでは成し得ないものであった。

「・・・・・」

女性の言葉に一瞬顔を顰めたカミュではあったが、何も語ろうとはせずに、女性が指し示した＞聖なる川＜の方向へと歩を進めた。

「　グプタ！　待つんじゃ！　」

「　タニアは私が助けます！　」

一行が＞聖なる川＜の畔に近づくと、一人の老人と若者の言い争う声が聞こえてきた。
若者の行動を諫める老人と、血気に逸る若者というような構図がピタリと嵌る。

その二人の様子に、暫し呆然としてしまったリーシャとサラを余所に、カミュは無言で二人へと近づいていく。リーシャ達と同じ様に、言い争う二人の剣幕に驚いていたメルエは、慌てたようにカミュのマントの裾を握り直し、遅れないように早足で歩き出した。

「今、人を雇う準備をしている。　それまで待つのじゃ！」

「タニアは私の恋人です！　そんな見ず知らずの傭兵崩れ等に頼るつもりはありません！」

話を聞く限り、この老人がバハラタの町長なのだろう。
そして、おそらくこの若者が、攫われた町長の孫娘の恋人。

孫娘を救う為に、傭兵を雇おうとする老人と、自ら、恋人を救おうとする若者。
両者の言い分は平行線だった。

「・・・すみません・・・」

そんな中、何に遠慮することなく、カミュが割り込んでいく。
後方から慌てて近づいてきたサラは、そんなカミュに驚いた。

「はっ！？　これは、旅のお方・・・お見苦しいところを見せてしまったようで。」

「・・・いえ・・・」

カミュの存在に気がついた老人は、町長としての体裁を繕い直す。
それは、ババハラタという巨大都市の長としてあるべき姿。
例え、自分の孫が誘拐されてといえども、彼はこの巨大都市の住民を束ねる者。
それは、一国の王に値するものであり、今のこの老人の姿は、それを凌駕する程に気高い。

「・・・どうかなされたのですか・・・？」

カミュが老人へと問いかけたときには、カミュの後ろには三人の仲間が立っていた。
傍から見れば、女と子供。
しかも、老人に問いかけているのは、先程老人と言い争いをしていた若者よりも更に年若い少年と言っていいほどの男。

しかし、長きに渡り、この巨大都市ババハラタを纏め上げてきた老人には、一目でその者達の纏う空気が違うことが理解できた。
とても自分の何分の一しか生きていない者が纏う空気ではない。

「・・・貴方達は・・・」

「旅の者です。『黒胡椒』を求めてこの町に入ったのですが・・・」

「そうですか。　申し訳ない。　この町で、今『黒胡椒』を取り扱

えるのは、私の店だけです。　しかし、この状況では・・・」

カミュ達の返答に、老人は申し訳なさそうに俯いた。
彼が町長となり得た理由の一つ。
それが『黒胡椒』であった。
若い頃に、『黒胡椒』の栽培に成功した彼は、その財力を生かし、国家との交渉などを行ってきた。そして、一国家とも対等に渡り合える彼を町の住民は担ぎ上げたのだ。

「・・・旅のお方・・・このようなことをお頼みするのは、筋違いだということは重々承知した上でお頼み申す。」

「・・・・・・・」

「私の孫娘が、盗賊共に攫われたのです。　どうか・・・どうか救っては下さらぬか？」

サラは、自分の望んでいたように、依頼をする老人に、実際は驚いていた。
ノアニールとは違い、自分達は『勇者一行』だとは名乗っていない。
それなのにも拘わらず、女と子供が混じる自分達に依頼をするということは、冷静に考えてみると、明らかに異常なのである。

サラは気が付いていないのだ。
自分達がどれ程の苦難を歩いてきたのか。

『カミュやリーシャに護られているだけで、自分は足手まといになっている』と感じているサラには、自分がどれ程成長しているのかが実感できていない。
見る者が見れば、このパーティーの経験と決意は自然と察することができる。
もはや、カミュ達はその域に片足を踏み込んでいたのだった。

「　そのような、見ず知らずの旅人に頼る必要はありません！　私が必ずタニアを救って見せます！　」

「あっ！　グプタ！」

そんなサラの思考は、こちらを向いた老人の後方から掛かった若者の叫びによって弾けた。
サラが顔を上げたときには、その若者は駆け出しており、一直線に町の出口へと向かっていた。その後姿を唯呆然と見つめることしかできない老人。その背中は先程まであった、町長としての威厳の欠片もなく、サラにはとても小さなものに映る。

「ああ・・・グプタまで行ってしまうとは・・・どうすればいいのじゃ・・・・」

「・・・盗賊のアジトは、分かっているのですか・・・？」

そんな老人に救いの手を差し伸べたのは、サラの予想外の人物だった。
この町の惨状を『関係ないこと』として吐き捨てた人物。
サラは、自分が望んだことなのにも拘わらず、その不思議な光景を呆然と見つめていた。

「救いに行って下さるのか!?　盗賊達は、川を渡った先にある洞窟をアジトとしておる。　そこに孫娘も捕らわれているはずです。」

「・・・分かりました・・・ただ・・・私達の防具が、明日の朝に仕上がる筈ですので、出発は明日の朝となるでしょう。」

「そ、そんな・・・・武器屋の主人には、私の方から話をしておきます。　昼過ぎには出来上がるようにさせますので、どうか、出発を早めてくださらぬか?」

そんなやり取りを見ながら、リーシャはサラとは違うことを感じていた。
『勇者であるが故の必然』。
それが、リーシャの頭から離れないのだ。
このバハラタに入るのが、あと一日遅ければ、あの若者は死んでいたのかもしれない。
昼過ぎにここを出れば、旅慣れた自分達であれば、あの若者に追いつくことも可能である。
例え、追いつけなかったとしても、盗賊達に殺される前に救い出す可能性は高いだろう。

もし、ポルトガから船が出ていたら、自分達はこの町を訪れてはいない。
そんな偶然が重なった結果。
それが、カミュが『勇者』であることの証明なのかもしれないという思いが、リーシャの中で、一段と強まっていった。

「・・・分かりました・・・装備が整い次第、出発いたします。」

「おお！　ありがとうございます。　では、私は早速、武器屋に掛け合って参ります。」

カミュの返事を聞き、泣き出しそうな程に喜びを表した老人は、そのまま武器屋へと早足で向かっていった。

「カミュ様！　ありがとうございました。」

老人が見えなくなってから、サラは、カミュへと深く頭を下げた。
その声に振り向いたカミュは、そんなサラの様子を冷たく見下ろし、リーシャは何処か哀しげに見ている。三人の様子を不思議そうに見ているメルエが、しきりに首を傾けている中、カミュが口を開いた。

「・・・覚悟は決めておけ・・・」

「は？」

たった一言。

カミュが発した、その一言に、サラは間の抜けた声を出す。

未だに理解できない、カミュの言う『覚悟』が指すもの。

それは、この先でサラを大いに苦しめることとなる。

バハラタの町？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

いよいよ、バハラタ本編突入です！

第5章に入ってから、何話目だよ！とお感じでしょうが、お許し下さい。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしています。

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？（前書き）

ＰＶが７０万を超え、お気に入り登録も３００件となっていました。
本当にありがとうございます。

最近、ＰＳ２版のドラクエ?を再プレイし始めましたが、「プチヒーロー」が何度倒しても仲間になりません（涙
というか、「プチシリーズ」自体が全く仲間になりません。
一度で良いから、仲間にしたい（涙

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？

グプタは走っていた。
バハラタの町が掴んだ盗賊のアジトは、＞聖なる川＜を二度渡った先にある名も無き洞窟だった。グプタはそこを目指し、ひた走っていた。

盗賊一味の名は＞カンダタ一味＜。
地続きにあるロマリア大陸で大きく活動をしていた賊だ。
近年、海を渡り、この大陸にも勢力を伸ばし始めていた賊ではあるが、その頭目となる『カンダタ』自身は、ロマリア大陸を住処としていたため、この東の大陸ではそれ程派手な活動をしてはいなかった。

「・・・はぁ・・・はぁ・・・」

それが変化したのは、ここ最近。
何故か、頭目である『カンダタ』が、この東の大陸へ移動してきたことから、一味の大きな動きが始まった。バハラタに来る商人達の荷台の強奪に始まり、ついにはバハラタの町への脅迫に至るまでのものとなってくる。

「　クキャ――――――――！！　」

「くそっ！　来るな！」

グプタは商人であり、魔物と戦う術など持ち合わせてはいない。
稀に、行商人の中には、盗賊や魔物から売り物である商品を護るために武器を手にして戦う商人もいる。だが、グプタは根っからの商人であった。

ありくいの様な数匹の魔物に囲まれながら、グプタは逃げ道を探していた。
基本的に、力量に差があるものからの逃亡は不可能に等しい。
それでも、わずかな隙を見逃さぬように、グプタは駆け出した。

しかし、魔物は、その長い舌を巧みに使い、グプタの逃げ道を塞ぐように回り込む。
回りこまれた際に傷ついたグプタの腕からは、赤い血が滴り落ちていた。

＞アントベア＜
アリアハン大陸に生息する＞おおありくい＜の上位種に当たる魔物である。
＞おおありくい＜と同じように長い舌を持ち、その舌で相手を捕食する。
しかも、上位種というだけあり、その体毛は＞おおありくい＜よりも硬く、その色素も異なっている。

「魔物なんかに構っている暇は無いんだ！」

「――――!!――――」

回り込んだ＞アントベア＜に体当たりをするように駆け出したグプタに対し、虚を突かれた形となった＞アントベア＜は、思わず、グプタに道を開けてしまった。
目の前に開かれた道を、グプタは脇目も振らずに突き進む。
それは、彼のような、魔物と対抗する力の無い人間が、魔物と相対したときにできる唯一の方法が成功したことを意味していた。

息が切れることも構わずに、グプタは走り続ける。
陽が真上に位置する頃に、彼は一度目の＞聖なる川＜を渡った。
渡った先にあるのは森。
この森の先にある離島に存在する、カンダタ一味のアジトに行くためには、、もう一度、この＞聖なる川＜を渡る必要があった。

グプタは、この＞聖なる川＜を重視してはいない。
基本的に彼は、生まれも育ちもバハラタではないのだ。

もし、＞聖なる川＜がバハラタに伝わる通りのものであるのならば、自分もタニアも今の状況に陥ってはいないはずだとグプタは考えていた。

彼は、小さな村で、五人兄弟の末っ子として生を受けた。
小さな村で自給自足の生活を続ける一家にとって、五人目の子供は、決して喜ばしい物ではなかった。
グプタと名付けられた彼の着る物は、全て上の兄弟のお下がり。
そして、食事に関しても、既に両親の手伝いをしていた兄弟達の残り物を食す毎日だった。

それでも、口減らしのために捨てられたり、奴隷として売られることがなかっただけでも幸せだったのかもしれない。しかし、年が１２を過ぎた時、グプタは生まれた家を、夜逃げ同然に出て行った。

『ゴールドさえあれば』
『豊かでさえあれば』
という夢を持って。

そして、彼が目指した場所は、夜の町でも、大国の城下町でもなく、商業で成り立っている都市である＞バハラタ＜。そして、彼が志した職業は『商人』だった。

「わしの店で働きたい言うのか？」

「はい。　これからの時代で生き残ることができるのは、商人だと思っています。」

グプタが門を叩いたのは、＞バハラタ＜という異質な町の中でも、一店舗しかない『黒胡椒』を販売している店。様々な商売が盛んなバハラタでも特化した商売を行っている場所であった。

「このような、魔物が横行する時代では、商いなどは衰退していく一途であるのにか？」

「・・・私はそのように思いません。　例え、魔物が蔓延ろうとも、人が生きている以上、物の需要は決して無くなる事はないと思います。　そして、境遇が厳しく、貧しくなれば貧しくなる程、人は贅沢を求め、趣向に走るはずです。」

『黒胡椒』の店の店主であり、この商業都市の町長でもある初老の男は、目の前に跪く少年に、驚きの目を向けた。この店に奉公したいと言って来る者は、彼の商売が大きくなるほどに増えてくる。一人で商いをすることに限界を感じていた店主ではあったが、彼の商人としての眼鏡に適う人物は、一人として現れなかった。

それが、このような年端も行かぬ少年によって崩されるとは思ってもみなかった。

彼の下に来た若者は皆、『いつか誰かが世界を救ってくれる。そうなれば、商人の時代だ』という者ばかりであった。しかし、『商人とは、そのような不確かな未来を見る者では駄目だ』と店主は考えていた。

先を見なくては商売にはならない。

しかし、その『先』と呼ばれる未来は、他力本願である不確かな物であってはならないのだ。それを、この少年は、既にこの歳で理解している。そのことに店主は驚いた。

「わかった。　しかし、私の商売は農作業から始まる。　ただ単に物を仕入れて売る商人ではないぞ。　それでもいいのか？」

「はい。　幼い頃より、農作業はしてきております。」

そして、このバハラタで、いや、この世界で唯一の『黒胡椒』を育てて売る店の跡取りとなる男が生まれた。

それからのグプタは懸命に働いた。
朝早くから畑に出て、夜は盗賊対策のために警備に出る。
それもこれも、彼の夢のため。
彼には、いつかこの店を出て、自分の店を持つという野望があった。
それまでは、この新たな需要を掘り起こし、莫大な財産と地位を築いた男の下で学び、資金を貯めることに全てを費やすつもりだった。

しかし、そんな彼の野望をも打ち砕く者の出現が、グプタの描く未来図を大きく変えていくこととなる。それが、この『黒胡椒』屋の店主の孫娘に当たるタニアであった。
幼い頃に両親を失ったタニアは、歳が近いということもあり、グプタに笑顔を向けるようになっていく。畑仕事をしているグプタに食事を持ってくるのも、店番をしているグプタにお茶を入れてくれるのもタニアであった。

奉公先の孫娘であるタニアに対し、懸想することもできなければ、邪険にすることなどできようはずのないグプタは、大いに戸惑った。しかし、いつでも優しい笑顔を向けてくれるタニアに、淡い想いを持つなという方が無理な注文であろう。淡い想いは、日を追うごとに強まり、その想いはタニアに届く。そしてその日は訪れた。

「私は、タニアを愛してしまいました。　これ程のご恩を受けておきながら、本当に申し訳なく・・・」

「おじいちゃん。　私はグプタを本当に愛しています。」

意を決して、グプタとタニアは主人と相対した。
それこそ、この店から追い出されることも覚悟して・・・
そして、もしそうなったとしたら、『二人でこの町を出よう』とまで決意していた。

「くっ・・あはは！　そんなことで、何をそこまで思いつめている？　このわしが、そのことに気が付いていないとでも思っていたのか？　あはははは。」

しかし、歳を取ってから、一人娘であるタニアの母を授かり、既に年老いていた主人の反応は、決意を固くしていた二人の予想を大きく逸脱したものだった。

「・・・おじいちゃん・・・？」

「グプタ！　お前は既に、わしの孫も同然じゃ。　それが誠の孫となるだけの話。　だが、わしの大事なタニアの婿となるのだ。　それはつまり、この店の跡取りということ。　ならば、今まで以上に厳しい修行を覚悟しておけよ。」

不思議なものでも見るように目を見開くタニアを見ながら、主人はまじめな表情に戻した後、グプタへと語りかけた。

『この町を出て、自分の店を開く』というグプタの野望は、この瞬間、完全に消え去った。しかし、それは悲しむべき事ではない。何故なら、それと同時に、生まれた家を出た時に持っていた、グプタの『幸せの定義』もまた、変化した瞬間だったのだから。

そんな幸せへの道を歩み出した二人を襲った悲劇。
厳しい修行の中、泥のように眠っていたグプタは、タニアの身に降りかかった事件に気が付くことはなかった。

例え、気が付いていたとしても、『商人』であるグプタに何ができた訳でもない。

最悪、グプタの命はその時に失われていたかもしれない。
それでも、『愛する人間の危機に何もできなかった』という事が今、グプタを突き動かしていた。

何度目かの魔物との遭遇を、逃亡という形で切り抜け、＞聖なる川＜に架かる二本目の橋を渡る頃には、グプタの身体は満身創痍といった状態であった。

橋を渡った先に広がる大きな森。
旅慣れた冒険者達であれば、その中を動き回ることも可能であろう。
だが、グプタは『商人』。
しかも、地図やコンパス等の道具は持ってきてはいなかった。

森の中に入ったグプタは、何度も方向を見失い、自分の立ち位置すらも分からなくなる。魔物と遭遇しては逃げ、方向を見失っては魔物とかち合う。それでも前に進むグプタの目に、岩肌の側面にぽっかりと空いた穴が飛び込んできた。
疲れ切っていたグプタではあるが、愛しい人間の身を案じ、陽が陰り始めた森から、陽の光が届かない洞窟へと足を踏み入れた。

後になってみれば、森を彷徨ったこの時間が、グプタの明暗を分けるものだったのかもしれない。

「おいおい。　このアジトに何の用だ？」

「ぎゃはははは！　なんだ？　このお坊ちゃんは？　よく見りゃ、傷だらけじゃねぇか。」

洞窟に入り、グプタはここでも大いに彷徨うこととなった。
至る所に、魔物達の姿があり、逃げる度にグプタの身体の傷は増えていく。人の手が入れられた洞窟の壁は、石を積み重ねたものであり、見渡す限り同じ光景が広がる場所をグプタは彷徨い続けた。

彷徨う中、ようやく発見した下のフロアへと続く階段を下りた先で、グプタは二人の人間と遭遇する。

「タニアを返せ！」

「タニア？　ああ・・・もしかして、昨日攫ってきた、バハラタの町長の孫のことか？」

その二人は、身なりから見て、盗賊であることは間違いない。
ならば、それはカンダタの子分となるはず。
そして、グプタはその二人に叫ぶ。
『愛しい者を返せ』と。

しかし、それは『自分達こそが強者』と考えている、このならず者達にいやらしい笑みを浮かべさせる程度の効果しかなかった。

「お前は、あの孫の男か？」

「ぎゃははは！　残念だったな。　あの女は大事な人質だ。」

「タ、タニアに何をした！？」

いやらしい笑みを浮かべる男達の言葉に、グプタは最悪のイメージを思い浮かべてしまう。頭や腕、いや、身体中から血を流し続け、鬼のような形相で叫ぶグプタに、カンダタの子分たちは、先程とは違う、おぞましい表情を浮かべて口を開く。

「あぁ？」

「安心しな。　まだ何もしてねぇよ。　まぁ、これでもまだ、バハラタ側が俺達の要求を突っぱねるのなら、あの女がどうなるかは知らねぇけどよ。」

弱者であるはずのグプタの態度に、若干の苛立ちを見せた子分が凄む中、もう一人の子分がグプタの言葉に答えた。その内容に安堵したのも束の間。その後のことを考え、グプタの表情が凍り付く。

グプタの主人である、バハラタの町長は、おそらく自分の愛する孫娘よりも、自分の町を優先させるだろう。彼が任された町に住む人間は、カンダタ一味の登場により、その数を大幅に減らしたとはいえ、そこは大都市。夜の町であるアッサラームや、ロマリア城下町にも引けを取らない程の人間が生活をしている。その数多くの住民の苦しみと引き換えに、自分の孫娘を救うとは到底思えない。

それをグプタは理解していた。
また、その決断をする、主人の苦しみも理解していたのだ。
おそらく、グプタも立場が立場であれば、同じ様な選択をしていたであろう。
故に今、グプタは、たった一人でここに立っているのである。

だが、その事実が指し示す未来は一つ。
愛するタニアの身に降りかかる不幸である。
『死』という結末は、ほぼ確実。
更には、『死』に至る前に、『死』よりも辛く苦しい物が待っていることだろう。

「くそっ！　そんな事をさせるものか！」

「ぎゃははは！　じゃあ、どうするんだ？　まさか、俺達に挑んでくるつもりか？　ただでさえ傷だらけの身体なのによ。」

いきり立つグプタを嘲笑うかのように、口元を歪ませる子分達は、自分の腰にある武器に手を掛けた。着の身着のままで出てきたグプ

タには、それに対抗する術はない。

「もういいだろう？　こんな馬鹿、さっさと殺しちまうぜ。　人質は、あの女一人でいい訳だし、俺は男には興味なんかねぇぞ。」

「ぎゃはは！　それは俺だって同じだ。　じゃあ、悪いが死んでもらうとするか。」

グプタの態度に苛立っていた子分の一人が、武器を鞘から抜き放つ。それに追随するように、もう一人も武器を抜いた。
グプタの命運も、今まさに尽きようとしていた。

「逃げるなよ。　一思いに死んだほうが楽だぜ。」

「くそっ！」

言葉と共に振り下ろされる剣を、紙一重で避けたグプタの腕が、ぱっくりと斬り裂かれた。滲み出るように流れる血液が、洞窟の床へと落ちていく。

「逃げるなと言ってるんだ！」

「　！！　」

一度は辛うじて避けたグプタであったが、横合いから飛んでくる、もう一人の剣を見て絶望した。『避けられない』と感じたグプタは、目を瞑ることもせず、自分に向かってくる剣先を呆然と見つめる。

その時、諦めかけていたグプタの瞳に映る剣先の動きが止まった。『何事？』と思い、顔を上げたグプタが見たものは、先程自分に向かって剣を振るったであろう男が、首から上を失い、倒れていく姿だった。

グプタが目の前で起きた出来事に困惑する数刻前。

カミュ達は、焦っていた。

町長の計らいで、カミュ達の装備品は昼前までに仕上がっていた。武器屋にて、その装備を受け取る際に見た店主の表情に、再びリーシャは怒りを覚える。

そこに表れていたのは『疑惑』と『侮り』。
『このような奴等に何ができるのか？』という疑念と、『何故、自分がこのような奴等のために無理をしなければいけないのか？』という侮り。
それを正面から見たリーシャが、再び怒りを露にしたのは、仕方がないことなのかもしれない。サラもまた、店主の表情を見て、顔を顰めたことがその証拠だろう。

装備品を受け取った一行は、町長の見送りを受けて、バハラタを後にする。
幼いメルエがいることから、歩く速度は速めはするが駆けることなく、町長から聞いた＞アジトの洞窟＜を目指した。

「カミュ・・・もしかすると、あの男は走り続けているのではないか・・・？」

「・・・ああ・・・急ぐぞ！」

陽が高くなる頃に、ようやく＞聖なる川＜に架けられた、一本目の橋に差し掛かったカミュ達は、途中で見えてくると考えていたグプタの背中が一向に見えてこないことに焦りを感じ始めていた。

人間、歩いて一日以上かかる距離を走り続けることは到底不可能である。
カミュ達は、そのことを考慮に入れてここまで歩いてきたのだ。
だが、幼いメルエがいるとはいえ、旅慣れたカミュ達の足で追いつ

けないとなれば、可能性は一つしかない。
不可能だと思われていた行為を、グプタが行っているということ。
そうであれば、差は縮まるばかりか、広がっていく可能性すらあるのだ。

「メルエ！　抱き上げるから、舌を噛むなよ！」

「　行くぞ！　」

サラの手を握っていたメルエを、リーシャが抱き抱えるように持ち上げ、カミュの言葉と同時に、一行は駆け出した。
『方角はカミュが示してくれる』
そんな、信用とも言える思いを持つリーシャとサラが、カミュの速度に置いて行かれぬように懸命に走る。

一行が二度目の橋を渡り、その先の森を抜けた場所にある洞窟に辿り着いた時には、陽は落ち、辺りを闇が覆い始めた頃だった。

「カミュ、急ごう。」

洞窟の手前で、メルエを下ろしたリーシャは、息を切らせながらも、早々に中に入ることをカミュに進言する。それに一つ頷いたカミュが無言で中に入り、その後をメルエが続く。ここまでの道を走り、もはや疲労困憊に近いサラも、不満を口にすることなく洞窟へと入って行った。

「・・・どっちだ・・・？」

「な、なに！？」

洞窟内に入ったカミュが、後ろにいるリーシャに問いかける。突然の問いかけに、リーシャは驚きを表すが、サラは何か得心が行ったのか、納得の表情を浮かべていた。

「や、やはり、このような場所では、リーシャさんが頼りですね。」

「な、なに！？　そ、そうか？・・・・・・まずは、真っ直ぐだな。」

入ってすぐに、三方向へと分かれる場所に出たことで、カミュは方向を探る為にリーシャに問いかけたのだ。カミュの意図を察したサラが、追従するようにリーシャに問いかけると、少し気を良くしたようなリーシャが得意気に方向を示した。

「・・・わかった・・・」

言葉とは裏腹に、カミュは右へと進路を取る。
そのことに驚いたリーシャの表情は、怒りへと変化していく。
しかし、その後をサラとメルエが続いて歩いて行ったため、リーシャは口を開くことができなかった。

カミュが進んだ先は、先程と同じ様に三方へと続く道が分かれていた。
『そら見ろ』とばかりにカミュを見るリーシャに対し、溜息を吐いたカミュは、再びリーシャへと道を尋ねる。

「ここは、左だな。」

「・・・わかった・・・」

『今度こそ』と得意げになって道を指し示すリーシャの言葉に、一つ頷いたカミュは、真っ直ぐ進んでいく。そのことに、今度こそ怒りを露にしたリーシャがカミュへと怒鳴るが、当の本人は、涼しい顔で歩き出していた。

「「「・・・・・・・」」」

「ほら見ろ！」

リーシャの指し示す方角ではない方向へ進路を取り続ける一行ではあったが、進む先進む先、全てが同じ様な場所であった。流石のサラも、目の前に広がる光景に言葉を失い、自分の指し示した方角に行かないことを非難するようにリーシャが声を上げる。

「カミュ様・・・・そろそろリーシャさんの言う方向へ進んでみてはどうですか？」

「そうだ！」

サラの援護を受けて、リーシャは強気になりながらカミュへと訴えかける。

後方からの言葉に、大きな溜息を吐いたカミュは、『わかった』と一言呟いた後、リーシャの指し示す方角へと足を向けた。

同じ様な場所を歩きながら、逐一リーシャの意見を聞きながら進む一行であったが、不意にカミュの足が止まったことにより、三人に緊張が走る。
それが、魔物の襲来を意味することは、全員が知っているからだ。

「カミュ！」

「・・・また、実体のない魔物か・・・」

斧を手にしたリーシャが、カミュへと声をかける。
カミュが呟いた言葉通り、気配はあるが、実体が見えない。
バハラタ周辺で遭遇した＞ヒートギズモ＜のように、実体の掴めない魔物の可能性を考え、全員が各々の武器に手を掛ける。

この洞窟は、盗賊のアジトであるが故に、回廊の至る所に火が灯され、周囲を明るく照らしている。カミュは、その灯りに照らされた壁に、奇妙な影を見た。

「　！！　」

「な、なんだ、あれは！？」

灯りに照らし出された影は五つ。
壁に映っている影は、本来カミュ達四人の物以外あり得ない。

だが、壁には別の物がもう一体ある。
明らかに異常であった。

「メルエ！　サラの後ろに！」

リーシャの声が響き、もはや定位置になりつつあるサラの後方へと、メルエは下がった。
その間に、カミュも背中から＞鋼鉄の剣＜を抜き、戦闘態勢に入る。
壁に映し出されていた影は、そのまま壁から抜き出るように、一行の前にその姿を現した。

＞あやしい影＜
魔物の中でも特異中の特異な存在。
様々な魔物の影を映し出してきた壁などに記憶されていた物が、魔王の影響を受けて、生命を得た物と云われている。
その生態や構造は、全く解明されてはいない。

「ふん！」

突如として、目の前に現れた魔物に、リーシャは反射的に斧を振るう。
力任せに振るわれた斧は、影のような魔物を分断した。

「・・・やはり駄目か・・・」

「カミュ！？　どうする！？」

リーシャが斧で両断した影は、何事もなかったように、その形状を戻していく。
カミュはある程度予想していたようだが、リーシャは自分の攻撃が全く通用しなかったことに狼狽し、カミュへと声をかけた。

「くっ！」

「カミュ！」

カミュへと視線を動かしたリーシャの瞳に、カミュの目の前に移動した＞あやしい影＜が映り込む。音もなく移動した＞あやしい影＜の振るった腕が、咄嗟に顔を庇ったカミュの右腕に食い込んだ。
黒い影が流れるように払われたカミュの右腕に、四本の筋ができた瞬間、その筋から真っ赤な血液が噴出す。それを見て、リーシャは叫び、メルエは目に涙を溜めた。

「カミュ様！　リーシャさん！　一度後ろへ！」

後方でメルエを護る皿からの声に、リーシャとカミュが、一度態勢を整える為に後方へと下がる。カミュへと攻撃を繰り出した＞あや

しい影＜は、様子を見るように漂っていた。

「カミュ様、こちらに。　ホイミ！」

「・・・すまない・・・」

「カミュ！？　どうする！？」

カミュの腕に＞ホイミ＜をかけ、傷を癒すサラの横から、リーシャが先程の言葉を繰り返す。
その時、小さな影が動いた。

「・・・・・・メルエ・・・・・・・・やる・・・・・・・・」

「なに！？」

リーシャの腕を引くように、自分の存在を誇示するのは、パーティーが誇る魔法使いの少女。右手に＞魔道士の杖＜を持ち、上目遣いに見上げる瞳は自信に満ちていた。

「しかし、魔物の特徴も解らないのに・・・」

「・・・・・・・新しい・・・・・・・・・おぼえた・・・・・・・・」

「なに！？」

サラの苦言に対して、メルエの発した言葉は、リーシャを軽く驚かせる。
久しぶりに聞いたメルエの言葉。
それは、新たな魔法との契約を済ませた証。

「・・・わかった・・・メルエ、頼む。」

「・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

カミュの言葉に、嬉しそうに頷いたメルエを見て、サラも軽く溜息を吐く。
サラは、自分では気づいていないが、カミュがこう言う以上、メルエの魔法が発動された後は、必ずカミュがメルエを護ると考えていることを、サラは信じているのだ。
故に、それ以上の苦言を言うことはない。

「仕方ありません。　ですが、呪文の行使のタイミングは私が計ります。　カミュ様とリーシャさんは、その間、魔物の注意を逸らしてください。」

「・・・わかった・・・」

「よし。　サラ。　メルエ。　頼んだぞ！」

魔物に視線を向けながら、カミュとリーシャに指示を出すサラを、リーシャは頼もしく見ていた。あのカミュでさえ、今のサラの言葉に反論を示さない。それは、サラを信用している証。戦闘において、自己の判断のみで動いていたはずのカミュが、他人の判断を受け入れているのだ。それがリーシャには、眩しく映った。

「では、メルエ？　いいですね？」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

カミュとリーシャが、再び＞あやしい影＜と対峙するために、前線へと躍り出る。
それを確認したサラが、メルエに視線を送り、問いかけた。
サラの瞳を真っ直ぐ見ながら頷くメルエに、サラは柔らかな笑顔を浮かべて頷き返した。

「　やぁ！　」

リーシャが、＞あやしい影＜に斧を振るう。
しかし、先程と同じ様に、確かに分断した影は、再び形状を戻し、元の影へと戻っていく。

「下がれ！」

斧を振り切ったリーシャに、カミュの檄が飛ぶ。
リーシャを押しのけるように割り込んできたカミュは、その左手に持つ＞鉄の盾＜を掲げ、今まさに振り抜かれようとする＞あやしい影＜の腕を受け止めた。

盾に来る衝撃など、何一つない。
ただ確かに＞あやしい影＜の攻撃は、カミュの盾を掠めたのだ。
その証拠に、金属を擦るような音が洞窟内に響き渡る。

音だけで、自分が攻撃を受け止めたことを確認したカミュは、そのまま、右手に持つ＞鋼鉄の剣＜を振り下ろした。それでも、やはり＞あやしい影＜にダメージを与えた様子はない。袈裟斬りに斬り裂かれた＞あやしい影＜の胴体が揺らぐ。
その時、二人が待っていた声が響いた。

「メルエ！」

「・・・・・・ん・・・・・・・メラミ・・・・・・・・・」

「！！」

「くそっ！」

サラの叫び声、そして、それに応じたメルエの詠唱。
詠唱の完成と共に、＞魔道士の杖＜の先から発生した物は、リーシャの身体を硬直させた。
横にいるリーシャの様子に、顔を歪めたカミュが、リーシャを抱えるように飛び、メルエの魔法の攻撃範囲から脱出する。

メルエの杖の先から出たのは『火球』。
しかし、それは信じられない程の大きさだった。
メルエの『メラ』の形状は、カミュのそれよりも大きい。
ただ、今、メルエが唱えた物は、その比ではなかったのだ。

＞メラミ＜
火炎系魔法『メラ』の上位魔法に当たる。
古の賢者が残した魔法以外では、魔道書に載っている火炎系魔法の最上位に当たる魔法だ。その威力は＞メラ＜を遥かに凌ぎ、通常の魔法使いであっても、ある程度の魔物を一撃でしとめることが可能な程の威力を誇る。

「――――――」

メルエの杖から放射された火球は、真っ直ぐ＞あやしい影＜に向かい、直撃する。
叫ぶ暇もなく、自身の身体以上の大きさの火球を受けた＞あやしい影は＜一瞬の内に消えうせた。そのまま、火球は壁に直撃し、凄まじい音を立てて弾けた。

「　くっ！　」

「・・・な・・・な・・・・」

指示を出していたはずの、サラですら言葉が出てこない。
リーシャは呆然と、＞あやしい影＜がいた場所を眺め、カミュは苦々しく壁を見つめていた。

火球が衝突した壁は、焦げた跡と共に、焼きついたような黒い影が張り付いていた。
それが、＞あやしい影＜だった物なのだろう。
凄まじい程の高温で瞬時に焼かれた影は、そのまま壁へと焼き付いたのだ。
メルエの使った魔法は、それ程の威力があった。

「・・・・・・・ん・・・・・・・」

「ああ、よくやった。」

いつものように、自ら帽子を取り、頭を差し出すメルエの頭をカミュが撫でる。
その手を嬉しそうに受け入れるメルエを、リーシャは心配気に見つめていた。

「・・・・・・・ん・・・・・・・」

「ん？　ああ。　その前に、メルエ、約束してくれ。」

自分のところに駆け寄ってきたメルエが頭を差し出す姿を見て、リーシャはメルエと目線を合わせるように、しゃがみ込んだ。そんなリーシャの行動に、メルエは不思議そうに小首を傾げる。

「今の新しい魔法は、広い場所で使うこと。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・」

口を開いたリーシャが発した言葉が、魔法を禁ずる物ではなかったことに、メルエは即座に頷いた。そんなメルエに優しく頷いたリーシャは、もう一度口を開く。

「もう一つ。　この魔法は、サラの指示の下で使用すること。」

「・・・・・・・」

もう一つの注意は、メルエにとって理解が難しい物だった。
故に、大きく首を傾げる。
メルエの姿に苦笑したリーシャは、説明を付け加えた。

「あの魔法は、強大すぎる。　あれを使った時に、私やカミュが巻き込まれてしまったら大変だろ？」

「・・・・・・ん・・・・・・」

リーシャが、優しい表情を浮かべて、メルエに語る。
その内容に、少し考えるそぶりを見せたメルエは、真剣な表情に戻り、大きく頷いた。
メルエは、『自分が制御できる』とは言わない。
メルエにとって、カミュもサラも、そして今、自分に笑顔を向けるリーシャも自分を導き、護ってくれる信用できる人間だからだ。

「よし。　メルエ、よくやった。」

もう一度メルエの頭を撫でるリーシャの考えは別のところにあった。
今、メルエが唱えた＞メラミ＜という魔法は、余りにも強力すぎる。

魔物相手でも、一瞬の内に焼き尽くしてしまう程に。
もし、それを『人』に向けて唱えたのであれば、ひとたまりもないだろう。
とすれば、メルエを『殺人者』としてしまう。
それは、リーシャにとって、どうしても避けたい事柄だった。

「・・・先を急ぐ・・・」

「そうですね。　行きましょう、メルエ。」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

そんなリーシャの考えは、メルエ以外の二人には届いていた。
メルエの魔法の威力に一番驚いていたのはサラである。
だが、サラは、既に心に決めているのだ。
『メルエを護る』と。

それは、メルエの素性が明らかになった時、どうなるか分からない。
もし、メルエが『人』でなかったとしたら、おそらく、悩むだろう。
苦しむだろう。そして、泣く事になるかもしれない。
それでも、自分はこの幼き少女を護る為に、全力を尽くすに違いない。
サラは、そう考えていた。

一行は、先へと進む。
リーシャの指し示す通りに進んでいくと、徐々に景色が変わっていく。
三方に分かれる道が二方になり、やがて一方向になった。

「カミュ様、あれは扉ではないですか？」

「・・・ああ・・・メルエ・・・」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

行き止まりかと思われた進行方向には、暗闇で見え辛いが、扉のような物が佇んでいる。
それを確認したカミュは、後方でリーシャの手を握るメルエを呼ぶ。
カミュに呼ばれたことにより、カミュの横へと移動したメルエが、肩から掛けられたポシェットに手を入れ、＞魔法のカギ＜を取り出した。

カチャリ

乾いた音を立て、一行の進行を妨げる扉の鍵が解かれた。
扉を開けて潜った先には、再び同じ様な回廊が存在し、リーシャの出番となった。
『左だ』と答えるリーシャの言う通りに歩を進めていくと、一行の前に、ついに行き止まりが広がる。

「ここが最後のようですね。」

行き止まりであることを確認したサラが、周囲を見渡すが、周囲を照らす灯りが弱く、隅々を確認できる程ではない。カミュが袋に入れておいた＞たいまつ＜に火を移し、周囲にかざしたことにより、奥に下へと降りる階段が視界に入って来た。

「この下か。」

「急ぎましょう。」

階段に近づき、下の様子を確認するリーシャをサラが急かす。
サラの言葉に、リーシャはカミュへと視線を送るが、カミュは一つ頷き、階段を下り始めた。待ちきれないようにサラが続き、メルエとリーシャが最後に降りる。

リーシャは、今見た、カミュが頷くときの表情が頭に残った。

それは、以前＞シャンパーニの塔＜で見せたものと同じ表情。
あの時は、メルエの瞳に浮かぶ『憎悪』の欠片に関して不安を覚えたリーシャに対して見せたもの。今回は、サラの焦りに対してのリーシャの不安だった。

そして、カミュの表情が何を意味するのか。
それをリーシャは理解していた。
この後、サラは苦しみ、悩む。
そして、その悩みはカミュへと矛先を変えるかもしれない。
それでも、カミュはその感情を受け止めるだろう。
己を犠牲にしても・・・
それが、哀しかった。

「逃げるなと言ってるんだ！」

階下に降りたサラの耳に、何者かの叫びが入ってくる。
視線を向けたサラは、息を呑んだ。
一行が救おうとする対象であるグプタが、今まさに振り上げられた剣を、その身に受けようとしていたのだ。

「あっ！」

サラは息を呑んだ。
救おうとしていた者が、目の前で息絶える姿を想像して。

バシュ

肉を斬り裂くような音が洞窟内に響き、それと共に真っ赤な血液が噴出し、飛び散る。
しかし、それはサラが予想していた血液ではなかった。
サラの視界に入った物。
それは、いやらしい笑みを浮かべながら地面に落ちていく首と、首から上を失い、天井に向かって噴水のように血液を吹き上げる身体。

そして、それを手に握る＞鋼鉄の剣＜で斬り落とした『勇者』の姿であった。

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

最近、この小説の話の中で「過去～アン【エルフ】～」が一番好きだと言って下さる方がいました。あんな暗い話なのに・・・
皆様の中で、お気に入りの話とかありますでしょうか？
読んで頂いている方々の中に、お気に入りの回があったとしたら、これ程嬉しいことはありません。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしています。

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？（前書き）

今回も少し短めです。
次話がとてつもなく長くなりそうなので、区切りました。

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？

血飛沫を上げて倒れていく人であった物。
その後ろで唖然とした表情を浮かべるもう一人の盗賊は、首を失くし倒れていく同僚の姿から視線を外す余裕もなく、先程その同僚の首を斬り落とした＞鋼鉄の剣＜によって切り伏せられた。再び空中に迸る真っ赤な液体を、サラは何か別世界の物のように見ていた。

グプタに武器を向けていた二人の人間は、もはや身動き一つしない。
それが示すもの。
それは『死』。

「・・・あ・・・あ・・・・・」

「何事だ!?」

サラが呆然とその光景を見ている方向から、騒ぎを聞きつけた盗賊達が現れた。
隣の部屋のような場所の扉を開け、出てきた三人の男達も、己の武器を抜く暇もなく、斬り捨てられていく。
世界を・・・そして『人』を救うと信じられている『勇者』によって・・・

一人目は、素早く間を詰めたカミュの持つ＞鋼鉄の剣＜で首を突かれ、一瞬の内に絶命した。二人目は、倒れゆく同僚の陰から現れたカミュに対応する暇もなく、肩から腰に掛けて斬られ、数秒の痙攣の後、その命を落とす。最後の一人は、同僚が瞬時に死に絶えたことを確認し、腰の武器に掛けた腕をカミュに斬り捨てられた。空中に飛んでいく自らの腕と、傷口から噴き出す血液がその男の見た最後の光景となる。首の後ろから侵入した＞鋼鉄の剣＜は振り抜かれ、胴と頭を分断したのだ。

「「「・・・・・・」」」

一瞬の内に、生きていた『人間』が、物言わぬ肉塊へと変わっていく。

その光景に、サラだけではなく、リーシャも言葉を失っていた。

魔物相手に何度も剣を振って来た。

しかし、魔王の出現により、人間同士の争いが無くなった頃に宮廷に入ったリーシャは、まだ人を斬ったことがなかった。

故に、自分の腕を『人』に対して試したことはない。

ならず者とはいえ、人々を恐怖に陥れていた盗賊達を、カミュが次々と斬り伏せていくのを見て、リーシャは初めて自分たちの能力の高さを知ることになる。

自分たちは、もはや、余程のことがない限り、『人』に対して遅れを取ることがないのだと。

「・・・・あ・・・・あ・・・・・」

何かを言葉にしたいのだが、声が出てこないサラは、先程と同じように言葉にならない何かを口にするが、それはカミュへは届かない。
サラの身体が完全に硬直し、動かないのだ。
それは、自分が信じて来たものが崩れ去った瞬間。

『カミュが『人』を殺したのでは?』と＞シャンパーニの塔＜でも考えた。
しかし、あの時は、その後にカンダタ自ら、部下の首を斬り落していたことから、まだ息があったのだと無理やり思い込むことにしたのだ。

『人を殺す』
その行動は、当然『忌み嫌われる』行為である。
そして、『人』を至上としているルビス教では、最も罪深き行為に当たるのだ。
それを『人の世界』を救うと伝えられる『勇者』が行った。
サラの頭の中は、完全な混乱状態に陥っていた。

「・・・・・・・カミュ・・・・・・・だ!!　　うぅぅぅ・・・・・」

そんな中、最後の一人を斬り捨てたカミュに向かって口を開いたのは、メルエだった。
メルエは、＞シャンパーニの塔＜でリーシャから『人を殺す者は、忌み嫌われる』と教わった。故に、カミュを止めようとしたのだ。
しかし、その言葉は、最後まで告げることが許されなかった。
後ろから伸びてきた手が、メルエの口を塞ぐ。

少しの間、身を捩るようにしていたメルエであったが、その手がリーシャの物であると理解した後は、哀しそうにカミュの背中を見つめていた。

「・・・カミュ様・・・何故・・・・？」

サラがようやく絞り出した言葉は、メルエのような片言の言葉。
それ程、サラは、今見た光景にショックを受けていたのだ。
そして、何かを言おうと再度開いたサラの口は、振りむいたカミュの姿に閉じられてしまう。

振り向いたカミュの顔には、真っ赤な血液が付着し、その血飛沫は、カミュの衣服にも飛んでいた。魔物との戦闘においても、その体液が付着しないように攻撃を行うカミュにしては珍しいもの。それが、カミュの『覚悟』を顕著に表わしていたのかもしれない。

「・・・何がだ・・・？」

一度、振りあげた＞鋼鉄の剣＜を一気に振り下ろし、剣についた血液を振り払う。
床に飛び散った血液は、一直線に床を濡らす。
それが、サラには自分とカミュを隔てる境界線に見えた。

「・・・な、なぜ・・・なぜ・・・こ、殺したのですか・・・・？」

それでも、勇気を振り絞ってカミュへと問いかける。
サラの身体は、硬直が解けた代わりに、小刻みに震えだしていた。
それは、『恐怖』。
畏怖する者としてのカミュではなく、純粋な『恐怖』の対象として
サラはカミュを見ていたのだ。

「・・・サラ・・・」

「・・・・・」

小刻みに震えながらも、前に立つカミュへと問いかけるサラに、リーシャは心配そうな視線を向け、メルエは眉を下げながら、二人を見ていた。

「・・・逆に聞きたいが、アンタはここに何をしに来たんだ・・・？」

「え？」

暫し無言でサラに視線を投げた後に呟いたカミュの言葉が、サラの思考を完全に止めてしまった。カミュが何を問いかけているのかがサラには理解できない。何故、問いかけていたはずの自分が逆に問いかけられているのかが解らないのだ。

「・・・アンタは、そこで伸びている男と、町長の孫を救いに来たのか・・・？」

「え？　な、なにを・・・」

完全にサラの方に身体を向けたカミュの持つ＞鋼鉄の剣＜は、血液を振り払ったとはいえ、『人間』の血液と脂で気色悪い程の光沢を誇っていた。
その剣の姿にサラの顔から血液が下がっていき、尚更カミュの質問の意味を考えることができなくなっていた。

グプタは既に気を失っている。
初太刀が迫る緊張感と、それから開放された脱力感で、意識を手放したのだ。

「・・・カミュ・・・」

「・・・ふぅ・・・」

サラが固まってしまったことに、リーシャが間に入ろうと声を発し、そのリーシャの声を聞いたカミュは、呆れ果てたように溜息を吐きだした。
カミュのその行為が、サラを思考の淵から引き摺り出す。

「と、当然です。　グプタさんとタニアさんを救うために、私はここに来たのです。」

「・・・・・・・」

覚醒したサラの言葉に、再び視線を動かしたカミュの瞳は、背筋が凍ってしまうのではないかと思うほど冷たいものだった。
その瞳にたじろぐサラは、隣のリーシャへと視線を動かすが、そこにあったのは『憐れみの視線』。リーシャがサラを見つめるその瞳には、サラを労わるような物が混じっていたのだ。それにサラは混乱する。

『何故？』と・・・・

「・・・アンタは、俺に言ったはずだ。　『バハラタという町を盗賊から救いたい』と。」

「え？」

混乱に陥ったサラは、続いたカミュの言葉に、更なる混乱へと落ちていく。
『何が違うのか？』『その前に、それが何故人殺しに繋がるのか？』
そんな疑問は、サラの口を吐いて出ることはなく、頭の中で渦巻い

ていった。

「俺はアンタに言ったはずだ。『今回は、メルエを救った時とは違う』と。」

「な、なにが違うというのですか？　そ、それと、『人』を殺すことがどう繋がるというのですか！？」

カミュの意味不明な言葉に、ついにサラは爆発した。
叫ぶように口を開けて睨むサラを、カミュは未だに冷たい瞳で見つめたいた。
メルエはもはや口を開かない。
リーシャの陰に隠れるように身を隠し、サラとカミュを不安そうに見ていた。

「メルエの時は、あの奴隷商人さえ退ければ良かった。」

「い、今だって、そうすれば良いではないですか！？」

カミュの言葉に、サラは噛み付く。
頭に血が上り、前後不覚に陥っている。
メルエは、こんなサラを初めて見たのだが、リーシャは一度見ている。
それは、アリアハンを出て間もない時。

あの森で、カミュがルビスの教えを真っ向から否定したときだ。

「アンタは、本当にあのバハラタという町一つを救う気はあるのか？」

「あ、当たり前です。」

冷たく、射るような視線を真っ向から受けながらも、サラはカミュの言葉にしっかりと頷いた。それを見るリーシャの顔が歪んでいく。彼女には、これからカミュが話す内容が見えているのだ。

「ここにいる盗賊が生き残った場合、その怒りはどこに行く？」

「は？」

「・・・カミュ・・・」

ついに確信に踏み込んだカミュの言葉に、リーシャは不安を口にした。

ちらりと視線を動かしはしたが、カミュはリーシャの眼差しを無視し、話を続けた。

「メルエの時に、俺に斬られた者達の報復は、俺達に向かったはずだ。　例え、奴隷として手に入れたはずのメルエに向けられたとしても、俺達が護ってやれば良かった。」

「・・・はっ！？」

サラは決して馬鹿ではない。
頭に血が上って、冷静な判断ができないだけなのである。
順序だてて話すカミュの言葉に、サラの瞳は大きく見開かれた。

「・・・だが・・・ここで、俺達があの盗賊達を痛めつけるだけで逃がせば、報復は俺達を雇ったであろうバハラタの町に向かう。俺達があの町に住むのなら何とかなるが、俺にそのような生活は許されてはいない。」

「・・・そ、それは・・・」

「であれば、俺達があの町を離れた後、あの町は地獄絵図になるだろう。　男達は殺され、女達は犯される。　報復である以上、あの町が存続する必要はない。　金目の物は奪われ、人は絶えるだろう。」

カミュが話すことは、正直『極論』である。
しかし、サラにはカミュの言葉を否定できなかった。

可能性はゼロではないのだ。
いや、むしろそうなることは必然であろう。

「俺は、アンタに言ったはずだ。『覚悟を決めろ』と。町長の孫娘とその恋人を救うだけならば、この盗賊達を生かすことはできる。だが・・・以前もアンタに問いかけたが、その後にこの盗賊達が犯す罪の責任をアンタはどう取るつもりなんだ？」

「・・・そ、そんな・・・」

サラは救いを求めるようにリーシャに視線を送った時、この問題で孤立しているのは自分だけなのだということを知ることになる。
リーシャの瞳は、サラを心配している色を湛えつつも、厳しく強い光を宿していたのだ。

そしてサラは思い出す。
バハラタでリーシャが告げた、あの一言を・・・

『今回に限っては、私はサラの行動に異議を唱えることもしないが、同時にカミュの行動や言動を止める気もない。』

それは、今、サラの目の前で起こっている出来事を予想しての物だったのだろう。
リーシャも知っていたのだ。
あの町を救う為には、『人』を殺めなければいけない事を。

「アンタに『人』を殺せとは言わない。　これは俺の役目だ。　だが、アンタはこの事実から目を背けることは許されない。　何故なら、アンタは、その先にある町の住民の平穏を望んでここにいるからだ。」

「・・・し、しかし・・・」

「アンタがどれほど否定しようと、それが事実だ。　アンタが『人』を救う為に、魔物を根絶やしにしようと願うのと同じ様に、町一つを救うということは、その脅威を根絶やしにする必要がある。　その脅威が『魔物』だろうと『人』だろうと、することは同じだ。いや、思考がある分、『人』の方が厄介だろうな。」

サラは、もう何も口にできない。
何を発すれば良いのかすら解らない。
カミュの言い分は納得できない。
しかし、否定もできないのだ。

「・・・カミュ・・・お客様だ・・・」

そんな茫然自失なサラから視線を外したリーシャは、カミュの背後から現れた数人の盗賊を見て、カミュへと声をかける。
その声は、哀しみに満ちていた。

『サラは、もうここでは役に立たないだろう』
リーシャはそう考えていた。
いや、もしかすると、『もうこの旅を続けることすら無理かもしれない』とさえ思っていた。
それ程、サラの衝撃が伝わってきたのだ。

「なんだ、てめぇら!?」

「おい！　なんだこれは!?　てめぇがやったのか!?」

数人の盗賊達が姿を現し、その先頭にいた二人が目の前に広がる惨状を目にして、怒りを露にした。首がない死体が二つ倒れ、離れた場所に二つの首が転がっている。他の三体は、それぞれ斬り口は違うが、総じて呼吸を止め、生という鎖から解き放たれていた。

五体の死体とその物言わぬ肉塊から溢れ出た血の海に立つ青年を見て、奇声を発し、数人の男達は武器を抜いた。
それは、怒りからなのか、それとも『恐怖』からのものだったのか。
それは、もはやこの数人の男達ですら考える時間はなかった。

「　ベギラマ　」

右手を突き出したカミュが発した一言が、数人の男達の人生の幕を下ろす。

カミュの右手から迸った熱風は、カミュへと一直線に向かってくる男達の前に着弾し、その場所を炎の海と化した。

炎の大海原に飲み込まれていく盗賊達。
周囲に木霊する、『人間』が発するとは思えない悲鳴。
それと共に周囲を満たす、肉を焼く異臭。

全てがサラの脳を麻痺させていく。
もう既に、カミュが殺した『人』の数は十人に及んでいる。
『人の世界』を救う『勇者』が起こす惨劇。
サラの頭の許容範囲では、理解することが適わない程の出来事。
サラは目の前が真っ暗な闇に覆われていくような感覚に陥る。

「て、てめぇら・・・誰に牙を剥いたのか解ってやがるのか!?」

「・・・お前達が誰であろうと、興味はない・・・」

もはや、半分以上腰が引けた状態で、一人の男がカミュへと言葉を投げかけるが、それに対する返答は、冷たく、男達に避けることができない『死』への道を指し示す物だった。

「くそっ！　俺達がカンダタ一味と知って・・・・・」

「もういい。俺様が相手をしてやる。」

『死』への恐怖に、再び叫び出す一人の盗賊の言葉を遮る者が一人、後方から大きな斧を持って現れた。その者が持つ斧は、カンダタが持っていたハルバードの様な物ではなく、どちらかといえば、リーシャが持っている＞鉄の斧＜に近い物だった。

「へっ・・・てめぇらも運がなかったな。　兄貴が相手じゃ、死んだも同然だ。」

「兄貴！　こいつらの仇を討ってくれ！」

斧を持った筋肉質の巨漢が前に出るのと反比例に、先程まで叫んでいた盗賊達は後ろに下がっていく。
彼らは知っているのだ。
この巨漢の男の戦いの傍に居れば、巻き込まれて命を失うことを。

＞殺人鬼＜
カンダタ一味には、様々な人間が集まってくる。
食うに困って、集った者。
用心棒崩れが、己の欲望を満たす為に身を寄せた者。
そして、その中でも、純粋に『人を殺す』ということに愉悦を見出す者が稀に存在した。幼い頃から他者よりも力が強く、他者を虐げて育った者は、当然集団での生活はできなくなっていく。そして、そんな中で自分を示す方法を知らぬ者達が行き着く場所は『殺人』。
自分の力を誇示しているうちに人を殺し、人を殺した自分に対する他者の怯えの瞳に愉悦を感じた者の成れの果て。それが＞殺人鬼＜

である。

「小僧！　構えな。　ここまで派手にやらかしたんだ。　当然、覚悟はできているんだろう？　俺様を退屈させるなよ。」

「・・・覚悟・・・？　アンタのような木偶の坊を相手にするのに、『覚悟』など必要なのか？」

斧を肩に乗せて挑発する＞殺人鬼＜に対し、返って来たのは明らかな『挑発』。
カミュらしくない言葉に、リーシャですら驚いた。
＞殺人鬼＜は、カミュの挑発に対し、口元に厭らしい笑みを浮かべて、肩から斧を下ろす。
覆面によって覆われている為、表情こそ見えないが、リーシャやサラが見れば、生理的な嫌悪を示すほどの笑みだろう。

「そこまで啖呵を切ったんだ。　殺されても文句はないんだろう！！」

言葉を言い終わると同時に、＞殺人鬼＜はその斧を大きく振り回すように、横殴りの一撃をカミュへと向ける。

ガィィィン

予想以上の速度を持ったその一撃は、カミュではない者が持つ＞鉄の盾＜によって防がれた。

「・・・思っていた程の威力はないのだな・・・」

左手に装備した＞鉄の盾＜で横殴りの斧を受け止めたのはリーシャ。巨漢の男の一撃を受け止めたにも拘らず、その身体は吹き飛ばされることもなく、微動だにしない。

「なんだぁ？　今度は女か？　いいぜ・・・たっぷりと痛めつけた後に、楽しませてもらうさ。」

「・・・おい・・・」

自分の一撃を受け止めたのが、斧と盾を構えてはいるが、歳若い女であることを確認した＞殺人鬼＜は口元を醜く歪まし、涎すら垂らしそうな笑みを浮かべた。

＞殺人鬼＜に対して、嫌悪感を露にするリーシャにカミュは声をかけるが、リーシャから返ってきた言葉に驚かされることとなる。

「・・・カミュは下がっていろ・・・こいつのような者の相手は、本来、騎士である私の仕事だ。　お前はそこで見ていろ。」

「・・・アンタ・・・」

カミュの方に視線を向けることなく＞殺人鬼＜を睨むリーシャの、＞鉄の斧＜を持つ右手は小刻みに震えている。リーシャの言うとおり、町を脅かすならず者の討伐は、本来国家に仕える騎士達の仕事の一つである。如何に自治都市であり、どこの国にも属さない町とはいえ、民の平穏な生活を護ることは騎士の誇り高き仕事の一つ。

だが、リーシャは人を殺めたことはない。

彼女は『覚悟』を決めたのだ。

『この者を殺す』と。

しかし、心と身体は一つではない。

決意をしても、その行為を行う事に躊躇いはあるのだ。

それでも、リーシャは前に出た。

常に汚れ役を買って出る、哀しい青年の代わりに・・・

「へっへっへ。　なんだ？　女、てめぇ、震えてるじゃねぇか？　怖がることはねぇ。　少し痛いかも知れねぇが、すぐに楽しくなるさ。」

下衆な笑いを零す＞殺人鬼＜の後ろから、これまた下衆な笑い声を上げる盗賊達の姿にも、リーシャは激昂することはなかった。

静かに、ゆっくりと気持ちを落ち着けていく。

「・・・最後の言葉は言い終わったのか・・・？」

そして、再び瞳を開けたリーシャの瞳は、確かな輝きを宿していた。
手の震えも、いつの間にか治まっている。
リーシャが、唯の『戦士』から、誇り高き『騎士』へと変化した証拠であった。

「ちっ！　気に食わねぇ。　女は言いなりになってりゃ良いんだ！！」

リーシャの態度に腹を立てたのか、＞殺人鬼＜は手に持つ斧を再び振り回す。
大きく振るった斧が、唸りを上げてリーシャへと振り下ろされた。
しかし、その斧は、リーシャには届かない。

動きをしっかりと見ていたリーシャは、頭上に＞鉄の盾＜を掲げ、＞殺人鬼＜の一撃を防いだのだ。先程、リーシャの発した言葉が虚勢ではない証拠に、振り下ろされた斧を受けても、リーシャの身体は揺らぎもしなかった。

「　やぁ！！　」

頭上に掲げた盾を払うように横へずらすと、その予想外の力強さに、＞殺人鬼＜の身体は斧と一緒に横へと流れる。
それを見逃さずに、リーシャは＞鉄の斧＜を振り下ろした。

ブシュュュ

浅く抉られた＞殺人鬼＜の肩口から鮮血が噴き出す。
思ったより手応えがないことに、瞬間顔を顰めたリーシャではあったが、再び表情を引き締め、斧と盾を構え直す。

「くそっ！　てめぇ！　もう許さねぇ！　殺してやる！」

「　！！　」

弱者だと見下していた女に傷つけられた事に激昂した＞殺人鬼＜が、斧を両手に持ち替え、矢継ぎ早にリーシャへと攻撃を繰り出す。
リーシャは、その全ての攻撃を＞鉄の盾＜と＞鉄の斧＜で捌いていく。
盾で防御し、斧で弾く。
それは、カミュにはない、対人の訓練をしてきたリーシャならではの戦法。

幼い頃から、人との訓練は欠かしたことはない。
それは決して『人』を葬るための訓練ではなかった。
『人』を護るための鍛錬が、今、護るべき『人』を殺すことに使われている。
それをリーシャは苦々しく思う。
しかし、リーシャの中で違う想いもあり、それが今、リーシャを奮

い立たせている。
それが、リーシャが変化した原因なのかもしれない。

「　死ねぇぇぇ！！　」

怒りに駆られた大きな叫び声をあげながら、振り抜かれた＞殺人鬼＜の斧は、リーシャの盾が滑り込む前に、リーシャの首目掛けて襲い掛かった。
その光景にメルエは目を瞑ってしまう。
大好きな姉が殺されてしまう。
それは、メルエにとって絶望に近い物だった。

ギィィィン

しかし、首を刈られるような、肉を切り裂く音ではなく、洞窟内に響いたのは乾いた金属音だった。
予想外の音に、再び目を開けたメルエが見たものは、首を曲げ、男の斧を頭に被った＞鉄兜＜で防いでいたリーシャの姿だった。

「なっ、なんだと！？」

渾身の一振りを頭で受け止められ、首の骨を折ることもなく、左右に首を曲げて構え直すリーシャを見て、ようやく＞殺人鬼＜は自分の中に芽生えつつある感情に気が付いた。

それは、幼い頃から一度たりとも感じたことがないもの。

『恐怖』

自分の力量では、到底及びも付かない者へ抱く感情。

そして、それに駆られれば、自身の身体がまるで違う者に操られてしまったのではと感じる程に言うことを聞かなくなるもの。

それを＞殺人鬼＜は生まれて初めて感じていた。

「うぉぉぉぉ！！」

恐怖に駆られた＞殺人鬼＜は先程とは毛色の違う叫び声を上げて、リーシャへと斧を振り下ろす。しかし、リーシャという『戦士』に飲まれてしまった＞殺人鬼＜に、もはや勝ち目などあろうはずがない。

ガィィィィン

凄まじい金属音を上げて＞鉄の盾＜で弾かれた＞殺人鬼＜の斧は、その右手と共に大きく横に振られ、自身の身体をがら空きにさせてしまう。

その隙を見逃すリーシャではなかった。

「やぁ！」

遠心力を利用するように、振り下ろされたリーシャの斧は、＞殺人鬼＜の左肩口から胸を通り、右足太ももまでを大きく斬り裂いた。
斧を振りぬいたリーシャの動きから一拍遅れるように、＞殺人鬼＜の肩口から胸に掛けて傷口が開く。それと同時に血飛沫が天井に向かって噴き出した。

誰が見ても致命傷。
もはやこの＞殺人鬼＜の命は残り数秒という程の物。
それは、リーシャもまた『人』を殺したということになってしまう物であった。

その青年が動くまでは・・・

「　ふん！　」

「なっ！？」

突如自分の前に現れた影に、リーシャは驚きを表す。
今まで、二人の戦いを静観していた青年が、抜き身の剣を構えたまま、自分と＞殺人鬼＜の間に入ったかと思うと、血飛沫を上げる＞殺人鬼＜の首を一閃したのだ。

一瞬宙に浮いた＞殺人鬼＜の首は、リーシャの斧を受けた時の驚きの表情のまま、地へと落ちていった。そして、先程以上の血液を首から天井へと噴出させる。
その血液は、完全に＞殺人鬼＜の命を奪った証。
それをリーシャは呆然と見つめていた。

「カ、カミュ！　な、何をする！？」

我に返ったリーシャが、カミュへと詰め寄った。
己の獲物を取られたというような馬鹿げた理由ではない。
己の覚悟を汚されたという気高い怒り。
しかし、振り向いたカミュの表情に、リーシャは二の句を繋げることができなかった。

「・・・アンタが被る必要はない。　これは、俺の役目だ・・・」

「・・・カミュ・・・お前は・・・」

哀しく、そして儚く脆い表情。
そして、カミュの口から出た言葉に、リーシャの胸は締め付けられる程、居た堪れない想いを抱いた。

「あ、兄貴が・・・ば、化け物！」

「ひぃぃぃ！」

首から上を失くし、仰向けに倒れゆく＞殺人鬼＜の体躯を茫然と見

ていた盗賊達は、一人の叫びを皮切りに、恐怖を張り付けた表情を浮かべ、我先にと逃げ出し始める。

「ふん！」

しかし、力量に差があるものから逃げ出すことなどできない。
冷徹に、何の感情も見いだせないその青年は、逃げ出す盗賊達を背中から斬りつける。
噴き出す血液。
悲鳴と共に倒れゆくならず者。
そこは、まさに地獄絵図であった。

周囲に血の臭いが充満していく中、一人のならず者を除き、全ての盗賊達が息絶えた。
首と胴を分断された者。
胸から盛大に血液を流す者。
肩口から斬り裂かれ、身体がほぼ半分になっている者。
その形態は様々であるが、皆総じて『死』という概念を受け入れた肉塊となった。

「・・・・・」

「ひぃぃぃ！　た、たすけてくれ！」

マントに返り血を付着させ、人間の血液と脂で妖しく光る剣を突き

付けるカミュに、残った盗賊が許しを乞う。しかし、それを見下ろすカミュの瞳は、とても冷たく、何の感情も見出すことが出来ないものだった。

「・・・カミュ・・・」

リーシャは、悔しそうに顔を歪める。
カミュの胸に宿る哀しい考えは理解しているつもりだった。
しかし、それは甘かったのだ。
彼が自分の存在をどう感じているのか。
それをリーシャは測り間違っていた。

「・・・・・・・カミュ・・・・・・・・・・だめ・・・・・・・・・・」

誰しもが茫然とカミュを見つめる中、一人の少女が行動に移る。
リーシャが前に出てから、目の前で起こる惨劇の一部始終を瞬きせずに見続けたメルエが、カミュの腰に後ろからしがみ付いたのだ。

「・・・メルエ・・・」

振り返るカミュの瞳は冷たく、一度たりともメルエに向けたことのないもの。
それに対し、一瞬メルエの身体が硬直する。
それでもメルエは、口を開いた。

「・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・・やる・・・・・・・・・」

「・・・・・・」

何かを決意したように、手に持つ＞魔道士の杖＜を掲げるメルエを見るカミュの目が変化を起こす。その目から冷たく突き放すような光が消えていった。

「・・・いいんだ・・・メルエはこんな事をしなくてもいい・・・」

盗賊に剣を突き付けながらカミュが呟くように言葉を漏らす。喉元に剣を突き付けられている男は身動きが出来ない。
メルエは、その男を一瞥した後、もう一度カミュに向かって口を開いた。

「・・・・・・・カミュ・・だけ・・・・・・・・だめ・・・・・・・・・」

「メルエ・・・」

その言葉に、リーシャはメルエの胸にある想いを理解した。

メルエは、未だにリーシャが話した内容を信じている。
『人殺し』は『忌み嫌われる者』。
それをメルエは信じているのだ。

故に、『人』を殺したカミュは、他人から忌み嫌われることになる。
それはメルエにとって、我慢できないものなのだろう。
自分の大好きな人間が、他者から忌み嫌われ、遠ざけられる。
それでも、自分だけはこの青年が大好きであることを伝えたい。
自分を救い、自分に『楽しさ』と『喜び』と『幸せ』を教えてくれた、この不器用で優しい青年に。
それが、メルエの言葉に表れていたのだ。

「・・・いいんだ。　俺はそういう存在だ・・・」

「・・・・・・むぅ・・・・・・」

「　カミュ！　」

それでも、メルエのその想いはカミュに届かなかった。
カミュの口から出る哀しい言葉。
その言葉に、メルエは『むっ』としたようにむくれ、リーシャがカミュの名を叫ぶ。

会話は終了したとでも言うように、視線を盗賊に戻したカミュの姿に、メルエはリーシャの腰に抱き付き、顔を埋めてしまった。
メルエの幼い思考で懸命に考え、決意した言葉は、無碍に斬り捨て

られたのだ。

「・・・・・うぅぅ・・・・・・・」

「メルエ・・・」

リーシャの腰にしがみつき、嗚咽のような唸り声をあげるメルエの背をリーシャは優しく撫でた。メルエは、自分の想いを懸命にカミュへと伝えた。しかし、その想いは届かない。そうなれば、この自分の大好きな青年にこの想いをどのように伝えれば理解してもらえるのかが、今のメルエには解らない。

自分の大好きな青年が『忌み嫌われる者』になることは嫌だ。
それが、既にどうしようもないものであれば、自分だけでも味方であること、そして、例え誰が嫌おうとも、自分だけは大好きであることを伝えたい。
だが、その方法がメルエにはもう思い付かないのだ。
その悔しさに、メルエは唸っていた。

「・・・バハラタの町長の孫娘はどこにいる・・・」

「ひぃぃ！」

一度振るったカミュの＞鋼鉄の剣＜から、こびり付いた血痕が男の

顔に飛び散る。
自分の顔に、先程まで生きていた同僚の血液が付着し、男は悲鳴を上げた。
その悲鳴がしばらく放心状態になっていたサラを覚醒させた。

「　はっ！？　こ、これは・・・」

自分の目の前に広がる惨状。
目を覆っても、その立ち込める臭気に吐き気をもよおしそうな空気の中で、佇むカミュとへたり込んでいる盗賊。そして、その後ろでリーシャにしがみつくメルエとその背を撫でるリーシャ。
その光景にサラは絶句した。

「・・・話さないのなら、それでもいい。　お前の死が早まるだけだ・・・」

「ひぃぃ！　は、はなす。　話すからたすけてくれ！」

喉の皮を切り裂き、血液が流れる温かさを感じた男は、両手を挙げてカミュへと命乞いを繰り返す。男の言葉に剣を引いたカミュは、続く言葉を待つように、冷たい瞳で男を見下ろしていた。

「お、女は、あそこにある牢に入れてある。　ま、まだ何もしてねぇ。　本当だ。」

男が指さす方向には、男達が出てくるために開け放たれたままになっている扉があった。
その部屋の中に牢があり、その中に閉じ込めているのだというのだ。

「・・・案内しろ・・・」

「わ、わかった。　こ、殺さないでくれ・・・」

カミュの剣が引かれたことにより、立ち上がった男は、震える足を懸命に前へと出しながら、部屋に向かって歩き出した。
その後をカミュが続き、腰にしがみついたままのメルエを抱きかかえるようにリーシャも歩き出す。残されたのは、サラ一人。血溜まりに１０人以上の死体が転がる中、サラは一人の青年の背中を眺めることしかできなかった。

「・・・開けろ・・・」

「は、はい！」

後ろに剣先の感触を感じながら、男は辿り着いた牢の端にあるレバーに手をかけた。
レバーを下ろすと、轟音とともに鉄格子が上がっていく。
中には、一人の女性。
これが、ババラタ町長の孫娘なのであろう。

自分の目の前の鉄格子が上がっていくのを不思議なものでも見るように茫然と眺めている。
その姿は年相応で、１７，１８の歳の人間を最近カミュとサラしか見ていないリーシャにとって、とても幼く見えるものだった。

「あ、案内したんだ。　た、たすけてくれ！」

「・・・・・」

鉄格子を開け終えた男は、カミュへの命乞いを再開する。
そんな男を冷たく見下ろしながらも、カミュは視線をリーシャへと動かした。
カミュのその視線が意味することを理解したリーシャは、メルエを連れたまま牢の中に入っていく。

「あ、貴女達は・・・？」

「貴女の祖父から依頼を受けた。　立てるか？　外では恋人も待っている。」

鉄格子を見ていたような不安気な瞳をリーシャに向けたタニアは、リーシャの口からグプタの存在を聞き、表情を驚きのものへと変化させる。
祖父である町長が自分を救うために、個人的に傭兵などを雇う可能性は考えていた。
実際に救いに来た傭兵が、年若い男と年若い女性、そして年端も行かぬ少女であることに驚きはしたが、それ以上に『商人』であるグプタもまたこの洞窟に来ていることに驚いたのだ。

「グプタも・・・グプタも来ているのですか！？」

「ああ。　多少怪我はしているが、命に別条はないはずだ。」

タニアの問いかけに対するリーシャの返答に、タニアは安堵の溜息を吐いた。
溜息を吐き終えたタニアは、再び顔を上げ、周囲に視線を巡らす。
そして、明らかな落胆の表情を浮かべた。

「グプタなら、外で気を失っている。」

「ああ・・・・グプタ・・・・・」

リーシャの言葉を聞いたタニアは、そのまま立ち上がり、牢屋の外へ駆け出して行く。
救いに来てくれたリーシャ達に感謝の意を表すこともなく、現状を推し量ることもなく、唯々愛しい人間に会いたいという想いを吐き出すように・・・・

リーシャの脇を抜け、外へと飛び出していくタニアを見て、リーシャは複雑な表情を浮かべた。外に出た彼女がどのように反応し、自分たちをどのように見るのか。リーシャにはそれがある程度予想できた。

「・・・今度はカンダタの場所に案内してもらおう・・・」

「そ、そんなことができるわけ・・・!!」

タニアが去った方向を見ることもなく、カミュはへたり込む男に次の指示を出した。
その指示に拒絶を表そうとする男は、再び突き付けられた＞鋼鉄の剣＜の剣先に言葉を飲み込んだ。

男を先頭に、外へと出たリーシャは、意識を取り戻したグプタとその身体を支えているタニアの表情を見て、自分が考えていた予想が外れていないことを知る。
二人の顔に張り付いているものは『恐怖』。
周囲に散らばる『人』であった者達の残骸とその残骸から流れ出た赤黒い血液の中で、お互いの身体を抱き合う二人は、分かりやすい程の感情をカミュへと向けていた。

「・・・リーシャさん・・・」

それは、ここまで共に旅してきたルビスに仕える僧侶も同じだった。
疑惑と混乱。
そしてそれ以上の恐怖という感情を、リーシャの横に立つ青年に向けていた。

全身に傷をつけていたグプタに回復呪文を掛けたのだろう。
グプタの身体から傷は消えている。

「私達は、これからカンダタの下へ向かう。　サラは二人をバハラタまで送ってやってくれ。」

「えっ！？」

サラの言葉に視線を向けたリーシャの口から出たものは、サラの思考を迷走させる。
自分を二人の護衛とすること。
それは、カミュ達三人でカンダタという、盗賊の頭目の場所へと向かうこと。
即ち、自分が見限られたことを意味していると、サラの頭は理解した。

『人を殺す』という罪を受け入れ、それを行うことを覚悟したリーシャ。
他人から忌み嫌われる行為であることを信じているが、それでも自分の大好きな人間の為に自分もその罪を被ることを覚悟したメルエ。
そんな中、サラは意識を飛ばしてしまうだけだった。

そのことで、カミュは見切りをつけたのかもしれない。
『町一つを救う』ということを軽く考え、それを『人の世界』を救う『勇者』に願った自分の覚悟の低さを見限って・・・・

「・・・わ、わたしも・・・」

「いや。　その二人だけでは、この洞窟からバハラタまでの道程は厳しいだろう？　町に無事送り届けてこそ、救ったことになるんじゃないか？」

言葉は柔らかい。
しかし、リーシャの言葉は、サラには違うように聞こえた。
『ここから先では、お前は役に立たないから、早々に帰れ』と。
サラは言葉を発することが出来ない。

カミュはもう、サラの方向を見ようともしない。
メルエはリーシャの腰にしがみつき、サラの方に顔を向けない。
そして、リーシャは『町へ帰れ』と言う。
そんな自分の意識の中で、四面楚歌の状況を作ったサラを救いだしたのは、意外な人間の言葉だった。

「い、いえ。　わ、わたしたちは、自力で町まで帰ります。」

「そ、そうです。　ここまで来ることもできたのです。　タニアは私が命をかけて護ります。」

それは、カミュの方へ『恐怖』の視線を向けていた二人の男女。
慌てたように立ち上がると、じりじりと後退するように、カミュ達から距離を空け、階段の方へ動いていた。

常識的に考えれば、グプタのような戦う術のない者がこの場所まで来ることができたことが奇跡に近い。それなのにも拘わらず、更に戦う術のないタニアという女性が増え、それが成せる可能性は行きよりも低くなることは明白なのだ。

「・・・待て・・・」

「「　！！　」」

グプタとタニアの行動を止める声は、彼らの恐怖の対象である青年から掛った。
その声に身を固くした二人は、後退する足を止め、二人の下へ一歩一歩近づく足に息を飲んだ。

「・・・どうしても行くと言うのなら、止めはしない。　気休めにしかならないだろうが、身体にこれを振り掛けてから行け・・・」

しかし、恐怖に身を強張らせる二人の前に差し出された手の上には、二つの瓶があった。
それは、教会が販売している水。
魔物をある程度寄せ付けないようにする＞聖水＜と呼ばれる品物であった。

「あ、あの・・・」

「・・・少なからず、魔物から身を隠す役には立つだろう・・・」

恐怖の対象であった者から差し出された物をグプタは訝しげに見つめる。
その視線をさして気にした様子もなく、むしろ当然のことのように受け止めたカミュは、再度声を掛けた後、グプタの手のひらに小瓶を置き、踵を返した。

「・・・行くぞ・・・」

「・・ああ・・」

「・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

カミュはリーシャの横を抜け、へたり込んでいる盗賊に剣を突き付けながら、声を出す。
その声に、小さくリーシャが反応を返し、その足元でメルエも小さく頷いた。
そして、三人は奥へと歩き出す。

「ま、待ってください！　わ、わたしも行きます！」

三人の後姿をしばらく見ていたサラは、意を決したように前を歩くカミュへと声をかける。
しかし、そのサラの声にカミュは振り返りも、言葉を返しもしない。
それでもサラは三人に追いついた。

「サラ。　無理をする必要はないぞ。」

「い、いえ。　行きます。」

隣に駆けてきたサラに、心配そうな表情を向けるリーシャに、サラは力無く頷く。
しかし、リーシャはサラの瞳の中に確かな物を見た。
それが何なのかは解らないが、サラの中で何かが変化していることだけは、リーシャにも理解できたのだ。

先頭を歩く男が大きな扉の前に立ち、その扉に付いている金具を三回叩くと、中から二度叩く音が聞こえてきた。今度は、金具を一度叩くと、大きな音を立てながら扉が開きだした。

扉が開ききり、中の様子が徐々に見えてくる。
とても洞窟の中にある空間とは思えない調度品が並んではいるが、その中にいたのは十人にも満たない男達と、見たことのある筋肉質の大男だけだった。

「な、なんだてめぇら！？」

扉を開けた男が、カミュたちの姿を見て、驚愕の声を発する。
この扉は大きく厚い。
故に、外での騒動が一切聞こえなかったのであろう。

「・・・カンダタに用がある・・・」

ここまでの道を先導していた男を突き飛ばし、姿を露にしたカミュが、剣を突き付けながら要件を告げる。カミュ達の登場に、後ろで笑い声を上げていた男たちの視線が集まり、種類の違う喧騒が空間を支配し始めた。

そして、満を持したように、一人の大男が立ち上がった。

再び対峙する、アリアハンの『勇者』とロマリアの『義賊』。
この戦いが、一行に新たな変化を巻き起こすことになる。

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

そして、私の書く話の中で、お気に入りの話をお教えくださった方々、本当にありがとうございました。
とても励みになります。

ご意見やご感想を、心よりお待ちしています。

～カンダタ～（前書き）

今回はとても短いです。
本当は入れるかどうか迷った話ですが、書いてみました。

～カンダタ～

彼に親はいない。
いや、人間として生を受けたからには、父親と母親は存在するのだろう。
しかし、この男は、物心ついた頃にはスラム街でゴミを漁る生活をしていた。
娼婦が客の子を身篭り、出産と共に捨てたのかもしれないし、魔物等に親を殺された孤児だったのかもしれない。ただ、彼が自我を持ち始めたときには、世界という枠組みは彼にとって、とても厳しい物だった。

眠る場所もなく、廃屋や建物の影で眠り、昼間は町の人間が捨てたゴミを漁り食い繋いだ。その頃には、既に魔王の登場によって魔物が凶暴化しており、町には孤児があふれている。国領にある町や村の孤児達へ手を差し伸べる国はなく、町の至る所で倒れ付す死体が転がり、空腹の為に身動きすらもできない子供達が壁に背をもたれて死んでいっていた。

毎日毎日、その日を生きる為に、ゴミを漁り、物を盗んだ。
町に出ては、人ごみに紛れて財布を盗み、店に並ぶ品物に手も掛けた。
時には、同じ様に飢えに苦しむ子供と争い、叩きのめして、食料を奪ったこともある。

そこまでの想いをして、彼は生き残ってきたのだ。

「俺は、何の為に生まれてきたのだろう。」

そんな疑問を繰り返しながらも、空腹を訴える身体。
幼い彼には、その訴えに応えるために、行動するしかなかったのだ。

その内、碌な栄養も取っていないにも拘らず、彼の身体は年齢以上の成長を見せる。
同年代の子供達から比べても、明らかな異質。
身体は大きく、力も強い。
そして、それは彼の食糧確保を容易にしていく。

大人と争っても負けることのない力。
盗みを行い、捕まったとしても、それを振り払うことのできる力。
彼は、生まれながらの素養として、それを持っていたのだ。

「ほら、これを食えよ。」

「えっ？」

そして、彼は自分と同じ様に、スラム街で生きる子供達の分まで食料を調達するようになる。
最初は、唯の気まぐれだった。
たまたま、果物を売っている店から掴んだ物が一人で食すには多かっただけ。
それを、寝床への帰り道の端で座り込んでいる子供に与えただけだった。

それでも、与えられた側から見れば、彼は英雄となっていく。
誰にも『優しさ』を受けたことのない孤児達が、初めて受けた『好意』。
それは『感動』となり、『憧れ』に変わっていく。

「お兄ちゃん」

次第に自分をそう呼び、ついて回る人間が増えてくる。
そこで初めて、彼は自分に名がないことに気付くのだ。

そして、彼は自分で名付けた。
遥か昔に、貧しい者達の英雄となっていた義賊の名を。
私腹を肥やす者達から私財を盗み、貧しい者達に分け与えたと云われる者の名を。

その名は『カンダタ』

「また、おめぇらか・・・」

椅子に座っていた大男が、ゆっくりと立ち上がり、カミュ達の方へと身体を向けた。
カミュ達とカンダタとの間に、視界を遮る障害物はない。
自然と、カミュとカンダタの二人の対峙という構図が出来上がっていく。

「・・・身代金目当ての誘拐か・・・アンタも落ちたな・・・」

「・・・・・・・」

カンダタの目が細められる。
カミュの顔に浮かぶのは、明らかな『失望』。
それは、カミュがカンダタという人物を買っていたことを証明していた。

しかし、カンダタの視線は、カミュの表情には向いていなかった。
カミュ達と対峙した時、カンダタは驚きの余り、不覚にも声を上げそうになったのだ。
それは、＞シャンパーニの塔＜で自分達を追い詰めた人間が現れたというようなものではない。いや、むしろそれは、カンダタ自身も何処かで予想していたことだった。彼が驚いた物は、そのようなものではなかった。

それは、カミュ達が纏う空気。

先頭に立ち、自分をじっと見据える青年の顔は、あの塔で対峙した時とは比べ物にならない程に精悍なものに変わり、厳しく張り詰めた雰囲気を纏っている。そして、それなのにも拘わらず、何処か穏やかな印象すら受けるのだ。
全てを否定し、刺々しい空気を纏っていた者ではない。
とても強い意志を持つ男の顔。

その後ろに控える女戦士の顔もまたカンダタを驚かせた。
あの塔では、自身の誇りと何かに板ばさみになっているような、迷いが見えた瞳は、強い光を放っている。それは、単純な『怒り』という感情ではない。何かとても強く、そして深い信念に基づいた光。

その足元にいる少女からは、長年魔法使いと対峙してきたカンダタでさえ、遭遇したことのないような魔力を感じる。本来、カンダタは魔法が使えない為、魔力を感じ得る事はないはずであるが、それでもこの身を刺すような危機感は、経験豊富なカンダタだからこそ理解できるものなのかもしれない。

最後に控えている僧侶。
あの塔では、間違いなく一番足手まといになると考えた人間であった。
それは今も変わりはない。
ここで戦闘になれば、この僧侶が確実に足を引っ張るだろう。
しかし、今はまだ揺らいでいる彼女の瞳の奥に、何かがあることはカンダタに見えていた。
それが何なのかまでは理解できなかったが。

「・・・悪いが、アンタ方にはここで死んでもらう・・・」

「・・・ほう・・・」

先頭に立つ青年が持つ、抜き身の剣には、赤黒い血液が付着していた。

自分の記憶にある一行との違いに驚きはしたが、瞬時に気持ちを切り替えたカンダタは、その剣に付着する物の意味を理解する。

「外の奴等を殺したのか？」

「・・・ああ・・・」

カンダタの質問に、表情も変化させず返答するカミュ。

その返答に、カンダタの目は、更に細められた。

「『人』を殺すなんて、僧侶様のすることとは思えねぇな？」

「！！」

カンダタは、意図的に最後尾にいる人間に声をかける。

予想通り、その少女は、カンダタの言葉に身を竦ませ、身体を強張らせた。

一行の調和を崩すという目論見は成功したようだ。

「・・・外の連中を殺したのは、俺一人だが・・・？」

「・・・そうか・・・」

しかし、一人の青年の答えが、カンダタの目論見を粉砕する。
そして、この時、カンダタは全てを悟った。

この青年の『覚悟』を、そして『哀しみ』を。
そして、この年若い青年に課せられた『使命』を。

＞シャンパーニの塔＜で彼らを目撃した時、カンダタは彼らをロマリアからの討伐兵だと考えた。しかし、それにしてはパーティー編成が奇妙すぎる。年若い、まだ少年と言っていい青年が一人。その他は全て女。そして、その内一人は、明らかな幼子。そんな一行を不思議に思うよりも、カンダタは『ロマリアもここまで落ちたか』と考えた。

しかし、剣を交えて、その考えは浅はかだったことを知った。
彼らの実力は本物だった。
青年の剣は、粗削りだが的を得ている。
女性剣士の腕は、カンダタが相対したどの国の騎士よりも上だった。
そして、幼子と思っていた子供が唱える魔法は、カンダタが見た魔法使いの中でも常軌を逸していたし、最も足手纏いだと思った僧侶の唱える補助魔法は気の抜けないものだった。

故にカンダタは不思議に思ったのだ。

『これ程の者達が、何故ロマリア等の下に付いているのか？』と。

「そうか・・・そういうことだったか。」

その謎が今解けた。
彼らが再び自分の前に現れたことによって。

ロマリアが雇った兵士だとすれば、この場に現れるわけがない。
それを、海を渡ったのか、それとも山を登ったのかは知らないが、
この東の大陸に姿を現したということは、彼らは別の目的のために
旅をし、その途中で依頼を受けたということなのだろう。

これ程の実力を備えた者たちの旅。
それは・・・・

「・・・・・・」

「まさか、お前みたいなガキがな・・・・そりゃ、俺も歳を取るわけだ・・・・」

カンダタの自白のような言葉に、一同を取り巻く時間が止まる。
彼の周りにいる部下までもが、カンダタが何を言い出したのか解らずに固まっていた。

一度微かに笑ったカンダタは、再び顔を上げ、じりじりと立ち位置

を動かしていく。
明らかにカミュ達を警戒したようなその動きに、カミュ達もそれぞれの武器を構え、カンダタとある程度の距離を保ちながら、時計回りに立ち位置を動かしていく。
カンダタの子分たちは訳が分からないながらも、カンダタの大きな背中の後ろで同じように動いていた。

そして、その位置が最初の位置に比べ、１８０度変わった時、ようやくカンダタは動くのを止め、ようやく口を開いた。

「てめぇら・・・後ろの扉から逃げろ。」

「「「「「　えっ！？　」」」」」

カンダタの言葉に後ろを移動していた子分達全員が呆気にとられた表情に変わる。
天下の盗賊と言われ、数々の猛者を打ち破って来た自分たちの棟梁が、突如として弱気な発言をしたのだ。

カミュ達に警戒感を与えながら、移動したその先は、先程カミュ達が潜ってきた扉。
この部屋の唯一の入り口であり出口でもある扉だった。
カンダタはこのためだけにここまで移動を続けたのだ。

「・・・行け・・・」

「な、なんでだ？　俺達も一緒に戦う！」

ハルバードを手に構えながら、振りかえることなく指示を出すカンダタに、子分の一人が反論する。その声を切っ掛けに、子分達が次々と勇ましい言葉を口にした。

「・・・今のコイツ達には、束になっても敵わねぇ。　お前達はここから逃げ、盗賊家業から足を洗え。　小さな農村ででも行けば、耕す土地ぐらい残っているだろうさ。」

今カンダタの後ろにいる部下は、全部で7人。
それは、カンダタ一味の幹部であり、今では最後に残った一味。
実際、＞シャンパーニの塔＜での出来事を切っ掛けに、カンダタ一味から離れるものが続出した。

飛ぶ鳥を落とす勢いだったカンダタ一味は、一度の挫折もなく、国家を脅かす組織となったのだ。しかし、そんな一味がある一行に負けた。しかも、年若い女達と戦ってという噂が流れ始め、カンダタ一味はロマリア大陸でその権勢を著しく失ったのだ。
そんな中、カンダタが根城としていたロマリアから、多くの兵団が討伐に出てきた。
それは、昼も夜も関係なく、一味は次第に疲弊していく。
そうなれば、自分の欲によってついて来た者達、中でも『楽をして暮らしていきたい』と願っていた者達は、次々と一味を去って行った。
夜逃げ同然に、朝にはいなくなっていた者。
律儀にカンダタに話をして出て行った者。
様々ではあったが、一味は全盛期の三分の一にも満たない数へと減

っていった。
残ったのは、カミュが殺したような、人を殺すことに快楽や愉悦を感じる者達。
そして、今カンダタの後ろにいる幹部7人だけであった。

「今更、そりゃないだろ！　俺達は、ずっとアンタと一緒にやってきたんだ！」

「そうだ。　罪を償うときは、一緒のはずだ。」

カンダタは、後ろから掛る言葉に、口元を緩めた。
後ろにいる彼らこそ、彼が『カンダタ』という名を名乗ることになった原因。
あのスラム街で自分の下に集まってきた最初の子分達。
生きるために物を盗み、生きるために人を傷つけ、時には殺したこともある。
それでも、皆でその罪を背負い、それでも生きていこうと決意した仲間だった。

「・・・お前らは、俺の子分だ。　子分を護るのも、上にいる人間の務めだ。　もう、俺達のような盗賊が生きていける時代は終わるんだ。　これからは真っ当に生き、今までの罪を償っていきな。」

「　くっ！　」

「俺たちだって、あんたと同じだ。　今更、真っ当に生きることなんてできやしない。」

カンダタの言葉の意味は理解できない。
しかし、その『覚悟』は理解できた。
自分達の仰いできた男は、ここで死ぬつもりなのだと。

「「「「　！！　」」」」

「　くっ！　」

「・・・逃がすとでも思っているのか・・・？」

そんな主従の間に割って入って来る者。
とても冷たく、抑揚のない瞳を持つ男。
顔には血液が付着し、カンダタが手に持つハルバードで防いだその剣は、血と脂で異様な光を放っている。カンダタを斬りつけるというよりも、その後ろにいる子分達を標的としているような瞳に、子分達は言葉を失った。

「・・・逃がせないとでも思っているのか・・・？」

「！！」

カミュの剣を受けた態勢のまま、静かに言葉を紡いだカンダタは、そのハルバードを振りあげ、カミュの剣を上へと弾く。その力に剣とともに後ろへと弾かれたカミュの横から一陣の風が吹き抜ける。

＞鉄の斧＜を構えたリーシャである。

しかし、カミュを吹き飛ばしたカンダタは、その反動を利用し、ハルバードを大きく振り抜いた。回転とともに横合いに振り抜かれたハルバードは、駆け寄ってくるリーシャの身体に向かって吸い込まれていく。

ガィィィィン！

とっさの判断で、＞鉄の盾＜を構えたリーシャは、その盾でカンダタのハルバードを受け止めた。その威力で踏鞴を踏むが、吹き飛ばされも倒れもしないリーシャに、カンダタは少し驚きの表情を見せる。

「やはり、腕を上げたみたいだな。　お前ら！　さっさと行け！」

リーシャに少し微笑んだカンダタは、表情を戻した後に、後ろにいる子分達へと叫んだ。

瞬時に緊迫した空気に凍りついていた子分達は、その叫びに我に返り、眉尻を下げた表情のまま一度カンダタの背中を見つめた後、扉を抜けて駆けていった。

「アイツ達は、汚れ仕事はしてねぇ。　盗みはしたが、人は殺してねぇ。」

「・・・そんな言い訳が通用すると思っている訳じゃないだろ・・・？」

出て行く子分達を苦々しく見ていたカミュに、カンダタは言い訳のような言葉を発し、そんなカンダタをカミュは冷たく見下ろした。

「まぁな。　だが、それは、お前たちも同じだろうが。」

「・・・俺だけだ・・・」

例え、相手が盗賊であろうと『人殺し』は『人殺し』。
そう言うカンダタに静かに答えたカミュの言葉に、カンダタは薄く微笑む。

『こいつも同じ』
罪を全て被ろうとする想い。
それは、自分もこの年若い青年も同じなのだと。

「まさか、お前らのようなガキが、世界を救おうとする勇者様一行だとはな。」

「・・・・・・」

カンダタは全てを察していた。
カミュ達が『魔王討伐』という使命を受けて旅をしていること。
それが『人』を救う為の旅であること。
そして、その使命の『重み』にではなく、『意義』に対して苦しんでいるということまで。

「お前が救う『人』の中には、俺達のような人間は入っていなかったということか。」

「何を言う!!　お前達のような人間が救われるか!」

カミュの目を見ながら口を開いたカンダタに眉を顰めるカミュの代わりに、横合いからリーシャの言葉が飛んだ。

「違いねぇ。　だがな・・・国を担う人間達が救われるのも、俺からしてみりゃどうかと思うがな。」

「なに!?」

続いたカンダタの言葉に、リーシャは完全に頭に血が上った。
宮廷に上がっていたリーシャにとって、決していい思い出のない人間たちではあったが、それでも盗賊ごときに名を辱められるということが頭に血を上らせる。

しかし、カンダタの言い分は的を得ていた。
彼は、国に密やかな住処をも奪われた人間だからだ。

その日の食料を盗み、奪って過ごした幼年時代を抜けたカンダタ達は、成長した後は、それぞれ些細ながらも仕事を始めた。
それは、店番であったり、畑仕事の手伝いであったり、物運びだったりと様々であったが、日々の食料を手に入れるささやかな賃金を得ていたのだ。

それは、唐突に終わりを告げる。

「兄ちゃん!　ここに兵士が入ってきた!」

「ああ?」

子分の一人がもたらした情報。
それは、このスラム街に国の兵士が入ってきたという物だった。

カンダタ達は、その日の食料を手に入れるための金は、日々の仕事で稼いではいたが、住処を調達するまでには至ってはいない。
故に、彼らの住処はスラム街のままだった。
身寄りのない子供達で固まって暮らす、数少ない屋根のある場所。
そこは彼らにとって、唯一のオアシス。

それが一瞬の内に消え去った。

魔王登場により、国は疲弊していく。
疲弊すれば、その分割りを食うのは国民。
そんな結末が、このスラム街であったのだが、国はそれを良しとはしなかった。

国の象徴である城の麓である城下町では、スラム街の存在は他国に国の内情を晒すことになる。故に、まるでスラムに住む人間はロマリア国民ではないとでも言うように、排除に動きだしたのだ。スラム街に入ってきた兵士たちは、スラム街にいる人間の性別は関係なく、城下町の外へと放り出す。その中で若い女がいれば『奴隷に』と引っ張っていき、抵抗する男がいれば、容赦なく刺し殺した。

成長したとはいえ、まだ幼いカンダタ達になす術はなく、その行為を行う国の要人と兵士が魔物にさえ見えていた。
そして、ロマリア城下町にはスラム街が無くなった。

町を追い出されたカンダタは、子分達を護るために魔物と戦い、力をつける。

いつか来る復讐の時を待つように。
その間に、『魔王討伐』という目標を掲げ、一人の青年がアリアハンを出立した。
その噂を聞いたカンダタは、その青年が自分と変わらぬ歳であることを知り、鼻で笑っていた。

『何の為に、誰の為に旅に出るのか』と。

国の要請で出立した英雄が護るものは、国の威信と要人達。
そんな奴が世界を救ったところで、自分達のような人間に救いはない。

案の定、その青年は途中で命を落とし、その援助のために国庫からの財を吐き出した国は、更に国民を痛めつける。
次第にカンダタの周りには、人が集まっていった。
英雄では救えぬ、その手からこぼれた人間達が・・・

「仕方ねぇ。　俺に付いてきな。　俺らは『義賊』。　弱い者の味方だ。」

自分を英雄とは思わない。
英雄が救えないものを救おうと意気込むわけでもない。
ただ、自分を頼りにして来る人間を切り捨てられなかった。

そうして立ち上げた『カンダタ一味』。
初めは、その意気込み通り、貴族や豪商を相手に盗みを行い、貧し

い町で金を使い落していく。そんな事をしていたが、組織が膨れ上がって行くほど、その想いは揺らぎ始め、見えなくなっていった。

そして、ようやく晴らせた恨みの一つ。
ロマリアの『金の冠』の強奪。
それが、一味の衰退の始まりだった。

肥大し、見えない隙間が生じていた組織が崩れるのは脆かった。
カンダタが知らぬ商売を行う者達は多く、それを咎め静粛していった時、残ったのは最初から自分の傍にいる7人だけだったのだ。

「・・・アンタがどんな育ちで、どんな人間なのかに興味はない。ただ・・・全て、俺が背負おう・・・」

「・・・カミュ・・・」

「・・・カミュ様・・・」

色々な想いを宿して発したカンダタの言葉は、彼の半分も生きていない青年が正面から受け止めた。その瞳に嘘はない。彼は、心からそう思っているのだろう。
そして、カンダタは笑った。

「ふはははははっ！　俺達の命をお前が背負うのか!?　その頼りない背でか？　お前の背に何が背負える？」

「・・・・・・・」

カンダタは、問いかけるように、試すようにカミュを見つめる。
カミュは黙して何も語らない。
しかし、カンダタは解っていた。
『既にこの青年は何かを背負い始めている』と。

それは、おそらく彼の後ろにいる者達。
そして、カンダタには見えない何か。
それを背負い始めたこの青年は、これから先数多くの『無念』『期待』『希望』『憎しみ』を背負って行くのだろう。

「・・・ありがとよ・・・じゃあ、始めようか。」

「・・・ああ・・・」

先程のカンダタの一撃で粉砕された机が無くなり、広々とした空間が広がった中で、カミュとカンダタが構えを取る。
そこには、誰も入り込むことなどできなかった。
例え、リーシャであろうと。

英雄の手からこぼれた者達を必死で護り続けてきた『勇者』とその英雄が救うことのできなかった者達を救おうとする『勇者』の戦いが今始まる。

～カンダタ～（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

討伐される者の言い分。
それを描きたかったのですが、考えていた物よりも大分短くまとまってしまいました。
このくらいだと、ボリューム感が本当に寂しい・・・
次話は、長くなると思いますので、閑話ということで読んで頂くと嬉しいです。

ご意見、ご感想を心よりお待ちしております。

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？（前書き）

連日投稿です。
思っていたより、短く纏まってしまいました。

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？

「おりゃぁぁぁ！」

カンダタの振るうハルバードが、カミュの髪先を掠め、数本の髪の毛が宙を舞う。
それでも、自分の渾身の一撃をかわされたカンダタは驚きと共に盛大な舌打ちを鳴らした。

「ふん！」

力を込めた一撃をかわされ、身体が泳いだところをカミュの＞鋼鉄の剣＜が振り下ろされる。
しかし、その剣は、ハルバードの柄によって防がれた。

正に一進一退の攻防。
カンダタは、この短い期間で自分の場所まで駆け上がってきた青年の成長の早さに驚く。
対するカミュは、それでもまだ、この大男を超えられていないことに苦虫を噛み潰す。

「そりゃ！」

一瞬の隙を突いたカンダタの一撃が、＞鋼鉄の剣＜を持つカミュの右腕を切り裂く。
飛び散る鮮血。
それほど深くはない傷だが、その衝撃にカミュは剣を落としそうになる。

「・・・・・・・メ・・・！！　うぅぅ・・・・・・・・・・」

「・・・メルエ、駄目だ・・・」

カミュの危機に、後ろで控えていた幼き少女が杖を振りかざした。
しかし、詠唱を紡ぐその口は、その横に立つ女性戦士によって塞がれた。
これは、『勇者』同士の戦い。
例え、盗賊であろうと、仲間の命を護るために戦うカンダタに、リーシャにも思うところがあったのだろう。
今、この戦いに、割り込んではいけないと。

自分の口を塞ぐリーシャに対して、メルエは疑問と若干の怒りを含めた瞳を向けるが、リーシャは静かに首を振る。この戦いは、見ているだけしかできないのだと。

「・・・ホイミ・・・」

「ちっ！　そう言えば、回復魔法も使えるんだったな。」

カンダタと距離を取ったカミュが、右腕に左手を重ね詠唱を行う姿を見て、カンダタは忌々しげに舌打ちをした。淡い緑色の光がカミュの傷を癒していく。血液が止まり、傷が塞がって行く。

「一撃で仕留めなければ駄目か。」

「・・・易々とはさせないさ・・・」

先程の表情とは全く違う笑みを浮かべたカンダタは、再びハルバードを高々と掲げた。
カンダタの笑みを受け、カミュもまた薄い笑みを返す。

『今日のカミュは良くしゃべる』
そんな場違いの感想をサラは考えていた。
まるで別世界のもののような『人』と『人』の殺し合い。
その中で、笑みを浮かべあう二人。
そんな心情がサラには全く理解できなかった。
命のやり取りをしている中で、相手を気遣う余裕などサラにはない。
『魔物を殺すこと』
唯、それだけを考えて、槍を振い、呪文を唱えた。

そして、サラは硬直する。
『カミュは、魔物を殺す時に、今の自分と同じ思いを抱いていたのではないのか？』と。

抵抗感と拒絶感。
それでいて、その行為を行うことを否定はできないという事実。
そして、その行為を行わなければいけない立場に思い悩んだのではないか。

「余り時間をかけられねぇ。　お前を殺った後に、後ろの連中も殺らなければいけないんでな。」

「・・・・・・」

サラが思考に没頭している間に発したカンダタの一言は、周りの空気を凍らせた。
その一言を耳にしたカミュの表情が変わったのだ。
いや、変わったのではなく、失われたと言った方が正しいかもしれない。
表情を失ったカミュが纏う空気もまた様変わりしていく。

「・・・いいねぇ・・・ようやく本気になったか？　迷うな！　お前はもう既に決めているはずだ！　相手は俺だ・・・必死に護ってみろ！」

カンダタのハルバードが再び振り抜かれる。
その速度は常人ではかわせぬもの。
しかし、もはやカミュとて常人の域からはみ出した存在。
左腕につけた＞鉄の盾＜によってその攻撃を受け止める。

凄まじい衝撃を受けながらも、カミュの冷たい瞳がカンダタを射抜く。

「・・・ギラ・・・」

剣だけの勝負と考えていたリーシャ達は、カミュが詠唱を行ったことに驚いた。
唯一人、カンダタを除いて。

「おりゃぁぁぁぁ！」

＞ギラ＜の熱風を身体に受けながらも、カンダタはハルバードを振り回す。
本来ならば、対象の前に着弾し、炎の海を広げる＞ギラ＜という魔法を、自ら振るう武器によって吹き飛ばしたのだ。

「「「「！！」」」」

余りの出来事に、カミュだけではなく、リーシャ達でさえ言葉を失っていた。
カンダタの腕や顔には火傷こそあるが、死に至るような傷はない。
魔法を使う者にとって、それが如何に尋常ではなく、如何に恐るべきことなのか、それをメルエもサラも感じていたのだ。

「さぁ、再開だ。」

「　！！　」

自分の前にあった熱風が霧散したことを確認したカンダタが、カミュに向かって突進して来る。その体格に似合わない速度に、カミュは虚を突かれた形となる。

『武器を振われる』と＞鉄の盾＜を構えたカミュを嘲笑うかのように、カンダタは武器を振るわず、その肩を勢いそのままにカミュの腹部へとめり込ませた。

「　ぐふっ！　」

一瞬、呼吸ができなくなるような感覚に陥ったカミュは、そのまま後方の壁に激突する。

息を吸い込むことのできないカミュの目の前は火花が散ったような輝きを放ち、視界が奪われた。

「じゃあな、勇者様。」

視界の戻らないカミュの頭上に振り下ろされるハルバード。

カミュが激突する瞬間に素早く駆けより、カンダタがその武器を振り上げていたのだ。

対人の殺し合いに関しては、カンダタの方が経験は上。
実戦という括りであれば、リーシャよりも上なのだろう。

「・・・・・・・ヒャド・・・・・・・・・」

「なに!?」

確実に仕留めたと確信したカンダタは、周囲への意識を完全に飛ばしていた。
先程から自分とこの青年の戦いに割り込んでこないとは言え、彼らは仲間。
その事を忘れることはなかったのだ。
しかし、勝ちを確信した時に、その注意が逸れてしまった。

カミュの危機に、身体が動いてしまったリーシャの腕が、自分の体から離れたことで、メルエは杖を振るったのだ。
メルエにとってみれば、リーシャの考える矜持や、カミュとカンダタの誇り等、全く関係がないし、意味もない。自分の大切な人間が危機に陥っている。その理由だけで、自分が魔法を使うことに何の躊躇いもないのだ。

「くそっ。」

カンダタが振り下ろしたハルバードの刃の部分は凍り付き、冷気の衝撃を受けた軌道は横へとずれる。カミュの脳天に向かって振り下

ろされたハルバードは、カミュの顔の横の壁に食い込まれた。
目の前の火花が収まったカミュは、カンダタの腹を力一杯蹴り飛ばし、距離を取る。
腹部に受けた衝撃で、壁から抜けたハルバードと共に後方へと下がるカンダタは、呼吸を整え、もう一度武器を構えた。

「・・・メルエ、ありがとう・・・だが、もう大丈夫だ。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

未だに杖を構えるメルエの傍に近づいたカミュは、メルエを背に庇うように立ち、メルエへと声をかける。それは、勝負の邪魔をしたことへの叱責ではなく、感謝の意を表す言葉。そのカミュの瞳はメルエには見えないが、感謝の言葉とともに吐き出したカミュの言葉が、これ以上のメルエの介入を認めないことを示唆していることにメルエも気がついた。
それに、メルエも小さく頷いたのだ。

「ふはははははっ！　参った、参った。」

「・・・・・・・」

そんな二人を遠くから見ていたカンダタは、盛大な笑い声を発した。

それを見つめるカミュの瞳が再び変化する。
しかし、それは先程のような凍りつく色ではなく、何かに燃えるような瞳。
それが表すのは『決意』。
先程の『怒り』とは違う感情。

「よし、よし。　それがお前の本気の目なんだな。　別に全員でかかってきてもいいんだぞ？」

「・・・俺一人で十分だ・・・」

カミュ達を侮るような言葉とは裏腹に、しっかりと構えを取るカンダタに向かってカミュは飛び出した。ハルバードによる迎撃に備えるように＞鉄の盾＜を構えながら突き出した剣は、カンダタの予想を遙かに超える速度だった。

「　くっ！　」

カミュの剣がカンダタの頬を掠める。
ぱっくりと切れた頬から流れ出る血液の色が、カミュやリーシャやサラと同じような人間であることを示していた。

カミュの剣を辛うじて避けたカンダタは、カミュに向かってハルバードの柄を突きだす。
振り回す時間はないと考えたのだろう。

柄がカミュの顔面に直撃する前に、鈍い光沢を持つ盾がカミュの顔を覆い隠した。

「やぁぁぁぁぁ！」

横薙ぎに震われる＞鋼鉄の剣＜。
それをハルバードの刃で受け止めたカンダタは、今日何度目になるか分からない驚きの表情を浮かべた。

『コイツは、戦いの中で成長している』
カンダタがそう感じるのも無理はない。
先程までのカミュであれば、カンダタは傷を受ける気はしなかった。
後ろにいる三人が協力し、四対一の戦いであれば、カンダタに勝ち目は露ほどもないだろう。しかし、『カミュ一人であれば何とかなる』と考えていたカンダタの思惑は、今まさに崩れ去ろうとしている。

「・・・カミュ・・・」

それは、リーシャも同じだった。
カミュとカンダタでは、まだ実力が違うと思っていた。
＞シャンパーニの塔＜でカンダタと戦ってから、自分達は様々な強敵と戦ってきた。
そして、その間も鍛錬を欠かしたことなどない。
＞ノアニール＜の周辺では様々な魔物と戦い、＞アッサラーム＜周

辺では巨大ざるとの戦闘で生き残り、＞イシス＜では護り人達との命のやり取りを切り抜けた。そして、カミュを見れば、再び＞アッサラーム＜に戻った時に、今まで見たことのない魔物も一振りで斬り倒した。

それでも、対人という括りでは、カミュはまだカンダタに届かないと考えていた。
それは間違いだったのかもしれない。
カミュの成長の速度は凄まじい。
それこそ、焦りを感じるほどに。
それは、リーシャの考えを大きく超えるものだった。

「　いやぁぁぁ！　」

「くっ！　くそっ！」

珍しく声を張り上げて振るうカミュの剣は、その『覚悟』と『決意』と『想い』を乗せ、カンダタへと振るわれる。その剣の重さは、カンダタが今まで受けてきた攻撃の比ではなかった。それは、カンダタの気持ちの問題かもしれない。しかし、現にカミュの剣を受けているカンダタは、その攻撃を捌き切れなくなっていた。

剣を弾いて、ハルバードを振りあげた時には、カミュの次の剣が迫ってくる。
要するに、カンダタには攻撃に転じる時間がないのだ。
矢継ぎ早に迫ってくるカミュの突きを何度目かに弾いた後、自分の視界はカミュの手に覆われた。

『しまった！』
とカンダタが思う間もなく、手を広げたカミュの詠唱が完成していた。

「　ラリホー　」

「　！！　」

それは、以前メルエを救うためにサラが唱えた経典の魔法。
相手の脳神経に作用し、強烈な睡魔に襲われる呪文。
効果は相手によるが、不意打ちのように唱えられた魔法がカンダタの神経を蝕んでいく。
カンダタは、以前カミュが唱えたような＞メラ＜や先程唱えた＞ギラ＜のような攻撃呪文だと思っていた。その思い込みがカンダタの運命を変えていく。

「　ふん！　」

「　ぐはっ！　」

＞ラリホー＜の効力によって、意識が朦朧とし始めたカンダタの肩に、＞鋼鉄の剣＜が突き刺さった。元来の筋肉質な身体によって、刃を途中で止めてはいるが、剣が深々と刺さっている限り、軽傷で

はない。

「・・・終わりだ・・・」

強烈な眠気と、怪我による意識の混濁の中、カンダタは膝を着いた
自分目掛けて振り下ろされる血と脂で光る剣を見た。
その瞬間、誰もがカンダタの最後を予測していた。
顔を歪めるリーシャも、カミュのような感情の見えない瞳で見つめ
るメルエも。
そして、カンダタ本人も。

ギシィィ！

しかし、それは、カミュの振り下ろす剣を受け止めた音によって破
られた。
カンダタを庇うように掲げられ盾。
それは、以前はカミュの左腕に装着されていた物であり、カンダタ
の故郷である国の国王から賜った物。

そして、その盾の現在の所有者は一人。

「・・・何をしている・・・？」

「そ、それは・・・」

カミュが冷たく見下ろす人物。
それは、『人』を殺すという光景に言葉を失い、自分が望んだ未来がその行為なくては成し得ない物であることに自分を見失っていた僧侶。
そして、今までカミュとカンダタの戦いを茫然と見つめていたサラだった。

「ぐっ・・な、なんだぁ？」

「う、動かないでください。　それ以上は、死に至ります。」

朦朧とする意識の中、目の前に見える青色が何か分からずに声を出し、動こうとするカンダタをサラが押さえつける。それは、この盗賊の命を心配してのもの。

「・・・どけ・・・」

「ど、どきません！　も、もう勝敗は決しました！」

血と脂で光る剣を突き付け、冷やかに口を開くカミュの姿に、サラは気丈にも言葉を返す。その声は震えきっており、カミュという人物へ抱いている『恐怖』を如実に表していた。

「・・・サラ・・・」

「・・・・・・」

サラの気配にリーシャが気付いた時は、既にサラが駆けだした後だった。

だが、初めから、リーシャはサラの行動を止める気はなかった。

それは、バハラタの町で口にしている。

今回の自分の役目は『見守ること』だけだと。

メルエはよく解らない。

カミュが剣を抜き、敵対している人物であれば、それは『悪い者』。

カミュは自分に敵対する者にしか牙を剥かない。

それは『魔物』であろうと『人』であろうと変わりはないのだ。

故に、そんなカミュの敵を救おうとするサラの行動が解らない。

「・・・アンタは、何をしているのか理解しているのか・・・？」

「そ、それは・・・」

冷たく見下ろすカミュが持つ剣は、カンダタではなく、サラに向けられている。
それが、サラの行為を糾弾していることを示していた。

「・・・ぐっ・・・嬢ちゃん、コイツの言う通りだ。　退いてくれ。」

「ど、どきません！　もう良いではないですか！？　そこまでして死ぬことに意味があるのですか！？」

「・・・アンタが望んだことだろ・・・」

ようやく戻ってきた意識は、痛みをはっきりとカンダタの頭に届けていく。
痛みを堪えながらサラを押し退けようとするカンダタを、サラは再び抑え込んだ。
そして、そんなサラの叫ぶような問いかけに、カミュの冷たい回答が響く。
『目を背けるな』と。

「し、しかし、この人は部下に言いました。　『真っ当に生きて、

罪を償え』と。　それならば、バハラタの町が襲われる可能性もないはずです！」

「・・・嬢ちゃん・・・」

「・・・アンタは、なにも考えていないんだな・・・」

サラの言葉に、驚いたように見上げるカンダタとは別に、カミュの瞳は変化していった。
それは、先程までの凍るような冷たい瞳ではなく、憐れむような瞳。
哀しみを湛え、それでいてこの先に続く何かを見据えているような瞳だった。

「な、なにがですか！？　考えています。　考えて、考えて、それでもこの人が死ぬ意味が見出せないから、ここにいるんです！」

「・・・サラ・・・」

そんなカミュの変化が熱くなったサラには見えない。
確かにサラは、カミュが『人』を殺した瞬間を目撃したその時から、自分が望んだものや自分が想像していた未来に伴う『覚悟』と『リスク』を考えて、考えて、考え抜いた。
しかし、それは、カミュから見ればまだ表面上で考えただけのものだった。

「・・・アンタは、それを背負うことができるのか・・・？」

「は？」

辛そうに歪めたカミュの顔を見て、サラは拍子の抜けた声を上げる。
事実、カミュの言っていることが理解できない。
それは、リーシャも同じだった。
ここから先でカミュが語る内容は、リーシャにも解らないものだった。

それが理解できているのは、この場ではカミュと、そして当事者であるカンダタだけ。

「・・・おい・・・」

「・・ああ・・」

カミュの視線を受け、カンダタは一つ頷いた。
それが何を意味するのか。
それがサラには解らなかった。

「バハラタの町長の娘を攫ったのは、前と同じように部下の独断な

のか？」

「いや。　あれは俺の命令だ。」

「　！！　」

サラは、もしかしたらとは思っていた。
もしかして、またこの頭目は知らなかったのではないかと。

「・・・『義賊』が聞いて呆れるな・・・」

「違いねぇ。　だが、今のこの一味には、その道しか残されていないのも事実だ。」

剣を突き出すカミュと、肩から血を流し続けるカンダタとの会話の先がサラには読めない。
それが全て自分に向かってくる刃先になるとは思いもよらなかった。

「・・・アンタは、こんな奴等を救ってどうするつもりだ・・・」

「そ、それでも・・・それでも殺す必要は・・・」

カミュの目がもう一度サラへと向かう。
その目には冷たい光はなく、もはや哀しみしか映し出されていなかった。

「・・・バハラタだけじゃない。　コイツ達が犯してきた罪によって親を奪われた者や子を奪われた者もいただろう。　自分の大事な者を殺された者も凌辱された者もいるだろう。　アンタは、そういう人間に対して、どう申し開きをするつもりだ?」

「・・・そ、それは・・・」

カミュが再び口を開いたその言葉は、サラの胸に大きな杭となって突き刺さる。
考えたこともない事柄。
『人』の命を救ってまで、受ける仕打ちにサラの頭は混乱していく。

ふと視線を向けると、リーシャまでもが唖然とした表情になっており、それを予想していなかったのは自分だけではないことを知るが、その足元で眉尻を下げてこちらを見つめるメルエの瞳を見て、サラは凄まじい衝撃を受けた。

彼女もまた、カンダタ一味によって『酷い死』という未来へ進まなければならなかった一人なのである。

「・・・この男の首を俺達が持っていかなければ、カンダタという

盗賊を逃がしたことはすぐに広まるだろう。　その後に待っているものは、『憎しみ』という対象を失った人間の視線だけだ。」

「　え？　」

そこで、カミュは一つ目を瞑った。
カンダタという強敵もすでに戦う力は残っていないためにできる行動。
そして、一つ溜息を吐いた後に呟くように出したカミュの言葉は、サラを奈落の底へと落して行った。

「・・・アンタが俺に向けていたような『憎しみ』だ・・・」

「　！！！　」

「カ、カミュ！」

自分の復讐の的である『魔物』という存在に慈悲をかけるカミュに、サラが感情的になっていたことは確かである。アリアハンを出てから、＞シャンパーニの塔＜辺りまで、『魔物』という諸悪の根源を見逃がすカミュに対し、サラは『憎悪』に近い感情を持ったこともある。

『これが勇者のすることか？』
『何故、自分を苦しめた魔物に慈悲を与えるのか？』

という想いは、『憎しみ』となってカミュへと向けられていた。
その事実は、自分の中だけで消化していると思っていたサラは、その事実にカミュが気付いていたことに驚き、言葉を失う。

そして、カミュが語る事実。
『憎しみ』の対象になり得る物は、何も魔物だけではない。
その対象が『人』である者もいるのだ。
ならば、サラがその人間に対して行った慈悲の行為は、『憎しみ』を持つ者にとって許し難い事。それこそ、『憎悪』の念を抱くほどに・・・・・

サラの頭の中は、もはや混沌状態に陥っており、思考を止めざるを得なくなる。
その結果、サラの口から出たのは感情論。

「そ、それでも・・・救いたいのです！」

「・・・はぁ・・・その結果、アンタだけではなく、後ろの戦士やメルエまでもがその視線を受けることになってまでもか？」

「　！！　」

サラの思考が再開する。
自分を糾弾しているだけに考えていたカミュの言葉は、後ろにいる二人の身まで気遣うものであったことに驚きよりも衝撃を受けたのだ。

自分だけならまだしも、リーシャやメルエまでもが『憎しみ』の対象となる。
その事実に、サラの胸は?き乱された。

「・・・アンタにそれ程の『覚悟』があるのか・・・?」

「・・・あ・・・あ・・・」

「嬢ちゃん、ありがとうよ。　もういい。」

最後の言葉と共に向けられたカミュの瞳に再び冷たい光が宿る。
『覚悟』がないのなら出てくるなと。
下がって見ていろと。

「・・・もう一度言う。　どけ・・・今ならコイツを殺すだけで、全てが終わる。　『殺人』という責を負うのも俺一人で足りる。」

カミュがもう一度剣を振り上げた。
その剣を見上げたサラの目に光は失われていた。

そんなサラを哀しそうに見つめるリーシャ。
そして、全てを受け入れるように右腕でサラをどかし、目を瞑るカンダタ。
時間がゆっくりと流れていった。

「　待ってください！！　」

そんな緩やかに進む時間を破る叫び。
それは、カンダタに再び覆いかぶさるように身を呈した僧侶から発せられた。

「サラ！」

「・・・・・スカラ・・・・・・・」

もはや突き下ろされたカミュの剣は止まらない。
叫ぶリーシャ。
急遽、杖を掲げ呪文を唱えるメルエ。
しかし、間に合わない。

「ぐっ！」

「はっ！」

誰もが間に合わないと思った時、サラと剣の間に大男が割って入る。
カミュの剣は、カンダタの肩を突き刺し、貫通する。
致命傷ではないが、カミュの抉られた左肩の傷で朦朧とする意識を奪うには十分な物だった。

「あ、あ・・・・べ、べホイミ・・・・・」

「・・・おい・・・」

自分を庇うように肩に傷を受け、気を失ったカンダタに、サラは慌てたように＞ベホイミ＜をかける。サラの二の腕までも覆うような緑色の光は、以前にカミュを瀕死の状態から救いだしたようにカンダタの傷を塞いでいく。

そんなサラの後姿に、静かに剣を引いたカミュが声をかける。
その声にびくりと身体を震わせたサラは、カミュの方を振り返らずにカンダタの治療に専念した。

「・・・何度も言わせるな・・・どけ・・・」

「・・・カミュ・・・サラ・・・」

再度厳しい言葉を投げるカミュに、堪らず駆け寄ろうとしたリーシャの足が止まった。

「・・・わかっています・・・わかっています!!」

「・・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・」

絞り出すように吐き出すサラの声。
その声に、リーシャの足下からメルエが顔を出した。

「『人』も『エルフ』も・・・・・・・そして・・・・そして、『魔物』も生きているということも・・・・その命が、掛け替えのない一つの命だということも。」

「・・・・・・」

「・・・サラ・・・」

淡い緑色の光に包まれながら絞り出すサラの声は、既に涙が混じった物だった。
塞がって行くカンダタの傷口に、落ちていく水滴。
その背中をカミュは無言で見つめる。

「・・・私の信じて来たことが、この旅で全く通用しないことも・・・」

「「「・・・・・・・」」」

涙と共に吐き出されるサラの想い。
それは、ここまでの旅で悩み続けた先で辿り着いた答え。
認めたくはなく、認めることを拒み続けた答え。
自分の全てを否定し、自分の存在意義となる根底までも揺るがす答え。
サラはそこに到達していたのだ。

「それでも・・・それでも！　私は『人』を救いたい！　例え、その結果、『人』から恨まれることになろうと・・・『人』から蔑まれようと・・・私は救える命を救いたいのです。　『人』の可能性を信じたいのです。」

「・・・アンタの独断で、メルエが同じように見られてもか・・・？」

「・・・それは・・・」

叫ぶサラの決意に、カミュが止めを刺す。
それが一番サラの心を傷つけていること。
自分の我儘で、幼いメルエを『憎しみ』の対象としてしまうことに。

「・・・・・・・・メルエ・・・・・・・・・大丈夫・・・・・・・・・」

「・・・メルエ・・・」

そんなサラの迷いは、サラの下へ歩み寄ったメルエの一言で、霧を払ったように晴れ渡った。メルエの顔に浮かぶのは『笑顔』。サラが何を心配しているのかを正確に理解している訳ではないだろう。それでも、メルエにとって、カミュとリーシャと、そしてこの悩める姉であるサラがいれば、それ以外はどうであっても良いのだ。

「・・・リーシャさん・・・」

「私も大丈夫だ。　サラが考え抜いて出した答えだ。　私はそれに従おう。」

そんなメルエの後方に移動して来たリーシャへ視線を送ると、この姉のように慕う女性戦士は強く厳しい瞳を向け、力強く頷いてくれた。
残るは、最後の一人。
今、自分に笑顔を向ける幼い少女を護るために、自分を糾弾した青年。

「・・・カミュ様・・・」

「・・・元々、俺はそういう存在だ・・・」

見上げた青年の瞳に、もはや冷たい光は宿っていなかった。
その光は、憐れみでも哀しみでもなく、強く優しい光。

「・・・カミュ様は、私に『思考がある分、人の方が厄介だ』とおっしゃいました。ですが、私は思考がある分、人は強いのだと思うのです。」

「・・・・・・」

カミュの瞳を真っ直ぐ見つめるサラの瞳はもう揺らがない。
その瞳に宿る強い光。
それは、『人を導く』という生業を持つ僧侶の光。

本来、迷い、悩み、惑う人々を救い、そして道を指し示す者の宿す光。
その光に、カミュは自然と微笑んだ。

「思考があるから、道を踏み外すこともありますが、やり直すこともできます。　私は、そんな『人』の心を信じたい。」

それは、サラの素直な気持ち。
そして、サラ自身の変化がもたらした言葉だろう。
『復讐』という念に駆られて動いていた自分自身を見つめ直した結果。
もう、彼女の瞳は『憎悪』に燃えた炎を宿してはいない。

「・・・アンタが『覚悟』を決めたのなら、それでいい・・・」

「は、はい！」

カミュの微笑みを受け、サラも精一杯の笑顔を見せる。
これから待つ厳しい道を全て受け入れる慈愛の微笑みを。
このパーティーを包み込む可能性を示す程の温かな微笑みを。
それは、心を冷やしていた人間にも届いていく。

「・・・ありがとうよ・・・精一杯、真っ当に生きて行くように努力するよ・・・」

「目が覚めたのですか！？」

サラの腕から施される暖かな慈愛の光を受け、カンダタは目を覚ました。
後半の言葉しか、彼は聞いていない。
だが、自分はこの足手纏いと侮っていた少女に間違いなく救われたことを知る。

「この！　『努力する』ではない！　お前は、真っ当に生きなければいけないんだ！」

今まで、優しい瞳をサラに向けていたリーシャの目が吊り上がる。
本当の優しさを持ったサラの心を受けて尚、真っ当に生きることをしない可能性を口にするカンダタに怒りを覚えたのだ。

「・・・サラの・・・私の妹の『決意』を無駄にするな！」

「・・・リーシャさん・・・」

「　ふっ。　」

リーシャの激昂に、サラは涙を流し、カミュは軽い微笑を浮かべる。
メルエも『むっ』としたように頬を膨らませ、カンダタを睨んでいた。

「わ、わかった。　必ず、アンタ方に後悔をさせないように、精一杯生き抜いてみるさ。　俺が罪を償うのは、かなり後になってしまうようだな。」

「・・・アンタへの『憎しみ』は、この僧侶が全て背負うそうだ・・・」

「　ふぇ！？　」

貫かれた肩の傷も癒え、しっかりと動く手のひらを見つめながら、カンダタは呟いた。
物を盗み、人を傷つけ、人を殺めてきたこの手で何ができるのかと。
そんなカンダタの自嘲の笑みは、剣に付く血糊を拭き終え、剣を背中に収め終わったカミュが口を開くことによって、驚きへと変わる。

突然の言葉に、サラは素っ頓狂な声を上げ、リーシャは軽い笑みを浮かべる。
メルエは、自分の肩から掛る水筒から出した水で濡らした布をカミュへと渡し、顔に付いた血痕を拭きとるように促していた。

「ふっ。　ふはははは！　ありがとうよ。　このカンダタ。　死

ぬ気で生き抜いて見せるさ。」

「何だそれは。　随分矛盾した話だな。」

「・・・アンタがそれを言うのか・・・？」

今までこの男が犯した罪の全てが許される訳ではない。
それでも、カンダタは救われた気がした。
この『人間』達が救う世界ならば、きっと弱い者も救われる世の中なのかもしれない。
現に彼らは、国家が殲滅できなかった、弱い者の脅威である＞カンダタ一味＜をたった四人で壊滅させたのだ。

『生きて罪を償おう』
カミュの呆れたような溜息を受けて、怒りを露にするリーシャを見ながら、カンダタの胸に新たな希望が宿る。
『この者達の為にも、恥じぬ一生を終えよう』と。

「・・・アンタ達が歩む道に幸あらん事を・・・」

「「「「・・・・・・・」」」」

立ち上がったカンダタは、一度カミュ達に深々と頭を下げる。
そんなカンダタの様子に誰一人口を開くことなく、同じような視線

を向ける。
顔を上げたカンダタは、カミュ達の瞳を見て、もう一度微笑んだ。

「・・・もう会うことはないかもしれねぇ。　それでも、俺はアンタ方の無事を祈り、どこかで必死に生きていくことを誓う。」

「・・・・・・・・」

「が、頑張ってください！」

カンダタの誓いに何も返さないカミュの代わりに口を開いたサラの言葉は、どこかずれた物であり、くすくすと笑うリーシャを一睨みするサラの表情に、この部屋に入って来た時のような迷いはない。

『じゃあな』という軽い別れの言葉を残し、カンダタは部屋を出て行った。
彼のこの先の人生は、決して平坦な道ではない。
むしろ、今まで歩んできた道よりも険しく、過酷な道なのかもしれない。
それでも、もう道を踏み外すことはないだろう。
サラはそう信じて疑わなかった。

アジトの洞窟（バハラタ東の洞窟）？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

カンダタの結末はこんな感じです。
これで第五章も残りわずか・・・

さぁ！　ダーマだ！

ご意見、ご感想を心より、お待ちしております。

バハラタの町？（前書き）

やっと五章も終わりです。
改めてみると、これで既に６８話目。
９０万文字を超えました。

でも、序盤・・・（汗

バハラタの町？

一行が洞窟の外へと出た時には、既に日も傾き、西の空へと沈みきる寸前であった。
地平線に微かに顔を出している太陽が、周囲を一日の最後を告げる真っ赤な光で照らし出し、カミュ達が進む森の中をも燃えるような赤に染め上げていた。

リーシャの手を握りながら歩くメルエは、反対の手で何度も目を擦りながら眠気を必死に我慢している。その様子に柔らかに微笑むリーシャ。そして、迷いが晴れたような、晴れやかな顔で見つめるサラ。

そんな和やかで優しい空気が流れる中、戦闘を歩くカミュの表情だけは、いつも通り厳しい物だった。それは、何も周囲を警戒しているというだけの物ではないのだろう。
彼ら四人に待ち受けている物の厳しさ、そして辛さは、この寡黙な青年にしかわからない。
十数年、その視線に耐え、そしてそれでも前を向いて歩いてきたこの青年にしか・・・

「あの二人は、無事にバハラタに辿り着けたでしょうか・・・」

「うん？　この辺りで姿を見ないんだ。　陽が落ちる前に町へと辿り着けたのではないか？」

森の中を歩き続けながら、ふと思いついたように口を開いたサラの言葉に、リーシャが周囲を見回しながら答えた。それは、酷く冷たいように感じる答えであったが、実際、当の本人達が『自力で帰る』といった以上、リーシャ達に今更どうすることができるわけでもない。

「・・・他人の心配をしている暇はないようだ・・・」

「「　！！　」」

サラとリーシャの会話に割り込んできたカミュの呟きに、サラとリーシャは身構える。
例の如く、カミュが背中の剣に手を掛けた。
戦闘の合図である。

「サラ！　メルエを頼む！」

「は、はい！」

眠そうに目を擦っているメルエの手をサラに委ねたリーシャも、背中に縛りつけてある＞鉄の斧＜の紐を解く。カミュが背中の剣を完全に抜き去ったとき、その魔物は現れた。

「ま、また＞きのこ＜か！？」

「・・・はぁ・・・まだあれを食すつもりなのか？」

出てきた魔物の姿に、リーシャは身構えていた身体の緊張を緩め、呆然とした声を上げるが、カミュの呆れた溜息交じりの言葉に、鋭く吊り上った瞳を向けた。

＞マージマタンゴ＜
ノアニール西の洞窟で遭遇した＞マタンゴ＜の上位種であり、おばけきのこの最上位種に当たる魔物である。同じ様な＞甘い息＜という特性も持ちながら、それ以外の固有の技も使う魔物であり、この周辺では要注意の魔物として伝えられている。

その＞マージマタンゴ＜が二体。
そして、おおありくいのような姿をした＞アントベア＜が一体。
魔物の群れとしてはそれ程多い訳ではないが、初めて遭遇する魔物に対し、緊迫した空気が流れた。

「　はぁ！　」

先行したのはリーシャ。
＞鉄の斧＜を構え、魔物に突進していく。
何か突発的なことがあっても良いように、左手にはしっかりと＞鉄の盾＜を構えていた。

「＃％３“＊」

リーシャが自分に向かって来たことを確認した＞マージマタンゴ＜は人語ではない何かを発する。それは、奇声にも近い叫びであった。
しかし、リーシャとて、ここまでの旅で数え切れない程の魔物と対峙し、淘汰してきた。
故に、その奇声が何を示すのかを感じ取り、咄嗟に足を止めて盾を掲げる。

「　くっ！　」

「あ、あれは・・・」

サラは、リーシャの掲げる＞鉄の盾＜を襲う現象に驚く。
それは、メルエが得意とし、最も使用頻度が高い魔法。
対象を強い冷気が襲い、凍らせてしまう魔法＞ヒャド＜だったのだ。

冷気を受けた＞鉄の盾＜は、完全に凍結することはなかったが、周辺の気温を一気に下げ、所々霜を下ろしたように白くなった盾を構えるリーシャの息をも白くしていた。

「　下がれ！　」

「＃％３“＊」

カミュの叫びと、残るもう一体の＞マージマタンゴ＜の奇声が同時に響いた。
手に持つのも厳しいほどに冷たく冷え切った盾を下げた所にもう一度の詠唱。
リーシャの吐く白かった息が凍り付き始める。

「　メルエ！　」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・メラミ・・・・・・・・・」

その時、後方に控えるサラの声が聞こえ、それに応えた幼い少女の杖が光る。
サラという守役の許可を得たメルエの詠唱と共に、その杖から大岩程の火球が飛び出し、リーシャに向かって奇声を上げた＞マージマタンゴ＜を襲った。

「　くっ！　」

凍りつく戦士の横を通り過ぎる火球の熱によって、盾を包む霜は溶け、リーシャの周りの空気も熱を戻し始める。
しかし、それは『魔物』でなくとも脅威な程の熱量。
自分の頬を掠めるほどの熱気に、リーシャはたまらず横へと転がった。

「　ウキャ――――――――――――――――！！　」

耳障りな奇声を発し、＞マージマタンゴ＜は火球に飲み込まれ、瞬時にその身を焼かれていく。残ったのは、地面に焼き付けられた＞マージマタンゴ＜であったであろう影。太陽が差さない夜にも拘らず、メルエの杖から飛び出した巨大な火球が発する光によって作られた影は高熱によって地面へと焼き付けられたのだ。

「「　――――――――――――――――　」」

余りの光景に呆然と立ち尽くす魔物たちは、その光景を作り出した少女が自分達に手に持つ杖を向けていることに気がつくと、我を忘れて逃げ出した。

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・メ・・・・・」

「メルエ！　もう大丈夫です。　これ以上は魔法を唱える必要はありません。」

もう一度詠唱を始めたメルエを、その司令官であるサラが止めた。
逃げ出す魔物と、自分の杖を手で下ろそうとするサラを見比べたメルエは、一度小首を傾げた後、静かに頷いた。

魔物を故意的に逃がすこと。
それは、昔のサラでは考えられないことだった。

「・・・・・・」

魔物の姿が見えなくなるまで、見送ったサラの表情は厳しい。
頭ではわかっているつもりだ。
しかし、心がまだ付いてはいっていない。

『命』は『命』。
だが、もし、サラの目の前で『人』を食す魔物がいたら、彼女はそれも『生きるための食事』と割り切ることができるのか。
答えは『否』。

『全ての人を護りたい』
しかし、その願いを強く思えば思うほど、『人』以外の種族へと目が向いてしまう。
何も、生きているのが『人』だけではない事を、この旅でサラは嫌

というほど知ることとなった。故に、『ただ＞人＜だけが良ければいいのか?』という疑問がサラの頭の中から離れないのだ。

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・」

「あ、は、はい！　凄いですね、メルエは。」

考えに落ちていたサラを、帽子を取って頭を突き出してくるメルエが現実へと戻す。

気持ちよさそうにサラの手を受けるこの幼い少女は、物の善悪にまだ疎い。

おそらく、カミュ達が敵として認識したからこそ、呪文を唱え、信頼しているサラが止めるから杖を下げたに過ぎないのだ。

この小さな少女に、物の善悪を教える時、どのように教えればいいのかが今のサラには分からない。アリアハンを出た当初であれば、迷いなく妄信的に信じていたことを教えただろう。だが、今は自分ですら迷っている事柄を教えることに抵抗感があるのだ。

「メルエ、良くやった・・・・だが・・・・サラ！　どういうつもりだ！」

そんな悩みを抱えながらメルエの頭を撫でていたサラの方向へ、前線に向かっていた二人が戻ってくる。しかも、その内の一人は、見るからな怒気を隠しもせずにサラへと向けていた。

「　えっ！？　」

「『えっ！？』ではない！　私を殺すつもりか！？」

メルエの＞メラミ＜という魔法の行使するタイミングをサラに委ねたのはリーシャ。
しかし、今の戦いにおいては、そのタイミングが極めて微妙であったことは明白だった。自分の頬を掠めて行った＞メラミ＜に心底肝を冷やしたリーシャは、その焦りを怒りへと変えてサラへとぶつけていたのだった。

「えっ！？　あ、いえ。　そんなつもりは・・・・・ただ・・・・」

「ただ・・なんだ！？」

口ごもるサラに掴みかからんばかりに近寄ってくるリーシャに若干怯え、後ろへと後ずさりながらサラは口を開いた。リーシャの後ろでカミュの表情も厳しい物であったことから、緊迫した場面であるっことが分かるにも拘らず、サラの口から出た言葉は一同を唖然とさせた。

「い、いえ・・・メルエの放つ＞メラミ＜の威力なら、凍りついた

リーシャさんの盾や身体も溶かしてくれるかなと・・・・・」

サラがその言葉を発したときのカミュの表情は見物だった。

『本気で行っているのか？』とでも言う様な唖然とした表情。

「・・・・・その前に・・・・・・消えて無くなってしまうだろ！」

「はぅっ！」

一瞬サラの言っている意味が理解できなかったリーシャは、しばし呆然としていたが、ゆっくりと頭の中が明瞭になっていくと共に、小さく肩を震わし、そして叫んだ。

リーシャの心からの叫びは、夜の森に木霊する。

びくりと身体を震わせたメルエは、カミュの下へと大急ぎで逃げ出した。

そして、静寂の戻った森に、リーシャの制裁を受けるサラの叫びが再び木霊する。

一行が＞バハラタ＜の町に辿り着いたときは、もう周辺には月の光しかない夜中であった。町の灯りも消え失せ、宿屋が灯す光だけが残っている。
町へと入った一行は、そのまま宿屋へと向かった。

「ああ、いらっしゃい。　昨日と同じ部屋でいいかい？」

宿屋のカウンターで、うつらうつらと舟を漕いでいた主人から部屋のカギをもらい、適当に湯浴みなどをした後、サラとメルエは食事を取ることもなく眠りに付いた。
二人にとって、この日は忘れられない物になるだろう。

サラは当然としても、メルエもまた、『人』が死んでいくのを目の当たりにしたのだ。
自分の義母であるアンジェの死を目の前で見てはいるが、自分が慕う人間が犯した事項がその死とは違い、決して許されない事であることは既に学んでいる。
幼く、色々なことを学んでいる途中のメルエにとっても、その心の中では色々な葛藤があるのだろう。

二人の寝顔を見ながら、リーシャは考え続けた。
窓からは綺麗な月明かりが入ってきている。
月明かりに照らし出されたリーシャの表情はとても暗い。

『自分達の進んでいる道は正しい道なのか？』

そんな疑問がリーシャの頭に浮かんでは消えていく。

『魔王討伐』というまだ見果てぬ道程。

そこへと向かって、ひたすらに歩んでいるはずが、自分達はかなりの回り道をしているようにも思える。

盗賊に国王の証を盗まれた王の依頼によって盗賊と戦い、『エルフ』という異なった種族の手によって眠りに付いた村を救う為に、洞窟も彷徨った。

世界の英雄である＞オルテガ＜という人物の軌跡を追うために、砂漠の王国に入り、その国宝であるカギを取る為、歴史的建造物を探索し、その王国の過去のしがらみをも取り除いた。

そして、盗賊の被害に苦しむ町一つを救う為に、再び盗賊と対峙もした。

「・・・これも、アイツが『勇者』であるが故か・・・」

そんな独り言を呟きながら、リーシャは外へと出て行った。

騒ぐ胸の中の焦燥感を取り払う為に。

「また月を見上げているのか？」

そして、リーシャは再び出会うのだ。
自分達が、『冷酷』で『無関心』だと考えていた人物の『悩み』と『苦しみ』に。

「・・・また、アンタか・・・」

「またとは何だ！？　失礼な奴だな。」

世界を救う『勇者』として、人間の希望として歩み出した青年は、一人月を見上げていた。
星達が輝く中、大地を明るく照らす月を見上げるカミュを見た時、リーシャは何故か涙が溢れ出そうになった。

何故だかはわからない。
ただ、カミュのその姿がとても哀しく、そして儚かったのだ。

「・・・後悔しているのか・・・？」

カミュの横へと立ち、同じ様に月を見上げたリーシャがぼそりと呟

く。
その言葉が示すのは、あの洞窟内でのこと。

「・・・いや・・・」

「！！」

視線をカミュへと戻したリーシャは確かに見た。
暫し返事に窮したカミュが、視線を落とし、自分の右手を眺めている姿を。
その時、この戦士は全てを悟ったのだ。

カミュの言葉を信じるのであれば、彼は今まで人を殺したことはない。
＞シャンパーニの塔＜で、彼が殺したといっていい程のことはしてきた。
だが、それでも彼等はまだ生きていた。

そして、今回のケースと全く違う部分。
それは、カミュの感情だろう。
＞シャンパーニ＜の時のカミュにあったのは、明確な『怒り』。
しかし、今回は覚悟の上の『殺意』だった。
人を殺すことを自覚した上での物。

「なっ！」

「胸に何でも抱え込むな・・・この旅を歩むのは、何もお前だけではない。」

この年若い『勇者』の苦悩を悟ったとき、リーシャの身体は意識せずに動いていた。
自分よりも年下のこの青年は、何もかもを抱え込む。
まるで、それが自分の存在意義だというように。
まるで、自分がその為だけに生かされているとでも言うように。

故に、リーシャは青年を抱きしめた。

「既に、お前が歩む道は、私が歩む道だ。　それはこの先も変わらない。　お前が背負う物を共に背負おう。」

「・・・・・・・」

リーシャの頬を涙が伝う。
この青年の背に圧し掛かっている大きな責任に。
そして、それを誰にも背負わせまいとする、その大きな心に。

『何故、自分は気付けなかったのだ』
『何故、アリアハンは彼一人に背負わせたのだ』と・・・・

二人を照らしていた月が、流れてきた雲によって隠れた。
暫しの間、お互いの姿さえ見えない暗闇が辺りを満たしていく。

「・・・そろそろ離して欲しいんだが・・・」

「　はっ！？　す、すまない・・・」

雲が流れ、再び月が顔を出した頃、ようやくカミュが口を開いた。
カミュの言葉に、今自分が強く抱いている存在に気が付き、改めて自分が何をしたのかを認識したリーシャは、慌てたようにカミュから腕を離し、目を泳がせた。

そんなリーシャに対し、小さな微笑みを浮かべたカミュを見た時、リーシャの胸にある想いが浮かんだ。

『この青年こそ月なのだ』と。
人々が寝静まり、誰も見ることのない場所で輝く月のように、彼もまた人知れぬ場所で輝く者。そして、人が見ようとはしない場所で、苦しみ、悩み、それでも前へ進もうとする者の道を静かに照らし出す者。

その光は、目を向けることのできない程の眩しさではない。
それでも、温かく、そしてとても静かに輝く光。
それがカミュという『勇者』なのだろう。

リーシャの憧れていたオルテガという人間は、『太陽』のような存在であった。
眩いばかりに輝き、全ての人々にその熱を伝える程の光を放つ者。
それは正に『英雄』の定義。
『英雄』と『勇者』の違いが、リーシャには明確には解らない。
それでも対極的な存在にも拘わらず、その存在の強さに変わりはない。
太陽が必要であるのと同じように、月もまた必要なのだ。

「・・・・・・」

自分と同じ存在のような『月』を再び見上げるカミュの横顔をリーシャは見つめる。
そして、心に誓うのだ。

『私は太陽となろう』と。
カミュは、オルテガでは照らし出すことのできなかった者達の道を、静かな光で照らして行く。ならば、自分は、その『月』の帰り道を明るく照らし出してやろう。彼が背負う物によって凍えそうな時には、その心を溶かす光を降り注いでやろう。メルエという小さな太陽と共に、この青年に光と熱を届けよう。

「明日はどこに向かうんだ？」

「・・・宿屋で話を聞いていただろう・・・？」

「ならば、＞ダーマ＜に向かうのか？」

実は、宿屋で部屋に向かう一行は、一人の旅人とすれ違った。
その時の旅人の話の中にあったある名前を聞いた瞬間、疲れ切っていたサラの顔が上がったのだ。それは、彼女のような僧侶にとって、神聖な場所。

＞ダーマの神殿＜
精霊ルビスに最も近い場所として、ルビス教の聖地とされている神殿。
長い年月の修行を終えた僧侶が最後に辿り着くと伝えられている場所。
そこにはいる『教皇』と呼ばれる人間が、ルビス教徒の頂点に位置する者と云われている。
別名『転職を司る者』と謳われるその人物は、人間の中に眠っている才能を掘り起こし、その人間に別の道をも示すことができる程の力を持っていると云われている。
ただ、長い歴史の中で、＞ダーマの神殿＜の存在は知っていても、実際に辿り着ける者はおらず、半ば伝説となっていた。

旅人の話によれば、このバハラタの遥か北にある山を登りきったその先に神殿があると言うのだ。実際、その旅人が辿り着いたわけではないため、その信憑性は限りなく低い。
それでも、その話を耳にしたサラの瞳は輝かんばかりに見開かれ、

何かを期待するような眼差しでカミュを射抜いていた。
それをリーシャは思い出したのだ。

「・・・実際に存在するかどうかは怪しい。　だが、行かないと言う選択肢があるとは思えないが・・・」

「ふふふ。　そうだな。　あれだけサラが期待しているんだ。　その真偽だけでも確かめなければな。」

カミュが行き先を決めるということに対し、サラの意見を尊重したことが、リーシャには可笑しかった。それは、嫌なものではなく、何処か微笑ましい物ではあったが・・・

「ならば、もう寝ろ。　明日も早くから出立するのだろ？」

「・・・ああ・・・」

リーシャの問いかけに、頷いたカミュの返事の歯切れが悪い。
そのことに、リーシャは少し嫌な空気を感じた。

「何かあるのか？」

「・・・いや・・・」

歯切れ悪く否定するカミュを一睨みすると、溜息を一つ吐いたカミュが、重い口を開いた。それはとても厳しく、そしてとても優しい物。

「明日、アンタ方は、今まで受けた事のない物を目の当たりにするだろう・・・」

「・・・カミュ・・・」

今、カミュの口から漏れたもの。
それは、おそらくあの洞窟内で、カミュがサラへと警告したあの視線。
『憎しみ』に近い『嫌悪』。
それは、もはや『憎悪』と呼んでも差し支えないほどのもの。
そして、この年若い『勇者』が十数年間受け続けてきたものである。

「心配するな。　私も、『負』の感情を受けて育ってきたのだ。」

「・・・・・・」

カミュの心を理解したリーシャが、重苦しい雰囲気を払うように、

胸を張って答えるが、カミュは視線をリーシャに向けたまま何も語らない。
その瞳にあるのは、『哀しみ』。

「・・・わかっている・・・お前が受けてきた物に比べれば、私が感じてきた物など児戯に等しい・・・」

「・・・・・・」

カミュの視線を受け、一度顔を伏せたリーシャは、再び視線をカミュと合わせるために顔を上げた。

「だがな・・・だが、お前が歩む道を私も歩む。　お前が悩み、苦しむときは、私も共に悩もう。　そして、お前が辿り着くその先を私は見届ける。　それが私の『使命』だ。」

「・・・・・・」

再び顔を上げたリーシャが発した言葉に、カミュは一瞬目を見開いた。
ここまでの十数年間、ここまで真っ直ぐにカミュという存在を見たものはいなかった。
誰一人、カミュをカミュとして見た者もおらず、ましてやカミュの心に踏み入ろうとした者もいない。

「・・・くっくっ・・・」

「な、なんだ？」

呆気に取られたような表情を浮かべていたカミュが、突如として笑い出す。
何かを押し殺すような笑いに、リーシャは戸惑った。
そして、それは次のカミュの言葉で焦りに変わる。

「・・・くくっ・・・まるで、婚姻の誓いのようだな・・・」

「なっ！？　な、なに！？　ち、違うぞ！」

今まで見たことのないような、心から楽しそうに笑うカミュに驚くよりも、先程自分の口から出た言葉を思い出したことによる焦りが勝ってしまったリーシャは、夜中にも拘らず大声を上げて否定を繰り返す。

暫し、笑い続けるカミュに、苛立ってきたリーシャが掴みかかろうとした時、ようやくカミュは笑いを納め、踵を返し宿屋へと歩きだした。
やり場のない怒りの矛先を失ったリーシャは、憮然とした表情を浮かべ、カミュの背に向かって声をかける。

「私はいい。　サラも大丈夫だ。　ただ、メルエだけは、お前が護るんだ。」

「・・・わかってる・・・」

リーシャの言葉に振り返ったカミュの表情は、いつものような無表情に戻っていた。
しっかりとリーシャの瞳を見つめ、大きく頷いたカミュは、振り返ることなく宿屋へと向かっていった。

リーシャは、もう一度だけ、この世界の夜を照らす月を見上げてから宿屋へと戻っていく。優しく静かな月の光は、宿屋へと続く道を照らし、二人が宿屋に入った後に雲に隠れた。

サラは上機嫌で身支度を整えていた。
今朝、目を覚ましたサラに、リーシャが継げた言葉。

『次の目的地は＞ダーマ＜だ』

このバハラタで『黒胡椒』という物を手に入れることができたのならば、もはやポルトガへ戻り、船を手に入れるべきである事は明白である。

それでも、自分の願いを聞き入れ、＞ダーマの神殿＜へと進路を取ってくれたことに感謝すると共に、まだ見ぬ聖地への期待が胸に膨らんで来ていたのだ。

未だに眠そうに目を擦っているメルエが顔を洗うのを手伝ってやり、服を着せてやる。

『一刻も早く、＞ダーマ＜に向かいたい。』

そんな気持ちが滲み出ているように動くサラを見て、メルエは頬りに小首を傾げていた。

「・・・あ・・・ありがとうございました・・・」

しかし、そんなサラの弾んだ胸は、宿屋の主人の挨拶を見た瞬間に萎んで行った。

身支度を整えたサラとメルエを見て、リーシャはそのまま宿屋を出

ることをサラに告げた。
今まで、朝食を取ってから出立するのが通常であった。
今朝は、朝日が昇る前という訳ではない。
それでも、直ぐに宿屋を離れようとするカミュとリーシャに、サラは違和感を覚えたのだ。それも、宿屋の一階に下りた瞬間に分かった。
サラの景色が一変していたのだ。

「・・・・・・・・・」

宿屋に宿泊していた者達の視線。
宿屋の主人の怯えたような作り笑い。
全てが、サラの知らない景色。

「・・・メルエ・・・」

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

余りにも様変わりした町の風景に呆然としていたサラの耳に、メルエを呼ぶカミュの声が入ってきた。慌てて視線を移すと、カミュがマントを広げてメルエを中へと誘っている。それは、まるで何かからメルエという大切な者を護るように・・・

何から護っているのか。
それが解らないサラではない。

宿屋のラウンジの四方八方から突き刺さる視線を受けながら、サラは宿屋の外へと駆け出した。

そこは『別世界』だった・・・・

「・・・これが、アンタの選んだ道だ・・・」

「はっ！？　カ、カミュ様。」

町に出たサラが見たもの。
それは賑わいとは掛け離れた町の風景。
まるで珍獣でも見るように寄り添いながら宿屋の出口を見ている女達。
『怒り』とそれ以上の『恐怖』を瞳に宿らせながら、宿屋を囲むように散らばっている男達。その腰には、それぞれ種類は違うが、皆武器を携帯していた。

おそらく、グプタとタニアがこの町に辿り着いた時に、一部始終を町の人間に話したのだろう。カミュが盗賊とはいえ、『人』を容赦なく切り刻み、死に至らしめたこと。そして、その死体が流し続ける血液の中を平然と立ち、次の殺人を犯して行ったこと。

もしかすると、グプタとタニアは、洞窟から出て森を歩いている途中で、洞窟から出てくる盗賊らしき人間を見たのかもしれない。
自分達を苦しめた盗賊達は殺したい程に憎い。
故に、それを見逃した人間達に強い疑念と怒りが湧いてくる。
だが、自分達で抗い、その盗賊達を殺すことはできない。

それは、自分達の心の中に、色々な抵抗感があるから。

『人』を殺してもいいのか？
自分達を苦しめた盗賊であるが、この盗賊達にも家族がいるのでは？
人が流す血液、死に至る傷口から溢れ出す様々な物を見たくはない。

そんな人々の中に存在する迷いや恐怖。
それは『人』であれば、当然の物。
故に、その上で『人』を殺すという行為をする者を必然的に恐れる。
そして、理解できない物として同じ様に括るのだ。

今のカミュ達は、カンダタ一味のような盗賊と同類。
『人』を殺すことを厭わず、ましてやその様な外道に情けを掛けた者。
それが今、町の人間達の持つ、勇者一行の評価なのだ。

「・・・そ、そんな・・・」

覚悟はしていた。
カミュがあの洞窟で言っていたことを理解もしていた。
だが、それはやはり現実感のない物だったのだ。

今、自分に向けられている視線。
それは、とても『人』が『人』に向けるようなものではない。
孤児として、汚い物を見るような視線を受けたことは何度もある。
それこそ、そのような視線の中で育ったといっても過言ではない。
だが、これは別格だった。

「サラ！　これがサラの決意の先にある光景だ。　だが、これが『人』の全てではないことをサラは知っているはずだ。　サラの信じる『人の強さ』とはそれ程脆いものなのか？」

「　はっ！？　」

俯きそうになる顔を、強引に持ち上げられたようだった。
サラの横に立ち、周囲の男共に警戒の瞳を向けるリーシャは、サラに厳しい言葉を投げかける。『人の弱さ』と『人の強さ』は別なのだと・・・

「い、いえ！」

サラはこの旅で、数多くの『人の弱さ』を見てきた。
しかし、それと同時に、数は少ないかもしれないが『人の強さ』も見てきたのだ。

国敵・神敵となろうとも、誰も恨まず、世の行く末を案じた老人。
死して尚、霊魂となっても自分の友を護る少女。
そんな心優しい少女を失いながらも、真実を受け止め、前を向いて歩く男。
例え、町で一人になろうとも、町を救う為に残った老人。
祖母によって実の母を殺されたにも拘らず、最後には国の為に立ち上がり、王となった女性。そして、その罪を悔い、全てを受け入れた老婆。

受けていた使命があるにも拘らず、他領である町の住民を救う為に立ち向かい勇敢に戦った兵士。
そして、養女として引き取った娘を虐待し続けたことを悔い、苦しみぬいた末、最後には身を挺して少女の命を救った女性。
その全ては、サラの中に確かな柱となっている。

「さあ、前を向け！　サラの決意した道が間違ったものであるとは、ここにいる誰もが思っていはいない。」

「・・・・・・・・・」

リーシャの言葉によって、再び顔を上げたサラの目に、カミュのマントの中から少し顔を出したメルエの笑顔が映る。『大丈夫』とでも言うように、優しい笑顔を向けるメルエの表情を見て、サラの瞳が涙で潤んだ。

「は、はい。」

「よし。　さあ、カミュ、行こう。」

涙で滲んだ瞳のまま、大きく頷いたサラを見て、リーシャがカミュへと出発の合図を送る。その言葉に一つ頷いたカミュは、周囲を警戒しながらも、この町で唯一つの『胡椒屋』へと足を進める。

小さなメルエを護るように歩くカミュ。
その後をサラが続き、そして、サラを護るようにリーシャが歩く。
それは、魔物への警戒と同じ程の慎重さであった。
リーシャに向かって力強く頷いたサラではあったが、内心は複雑だった。
『人』と『魔物』が同等の存在であることを認め始めている自分に対しての想い。

頭では理解し始めている。
心でも納得し始めてしまっている。
だが、心の奥底に未だに住み着いている、幼いサラの心がそれを拒んでもいるのだ。

「・・・・・・・・サラ・・・・・・・・・・？」

「はっ！？　だ、大丈夫ですよ。　さあ、行きましょう。」

一人考え込むサラを心配そうに見つめるメルエの視線に気づき、サラは自分の気を奮い立たせるように、メルエへの決まり文句を口にする。
『大丈夫』と言えば、大丈夫でなければいけない責任を伴うこと。
逆に、それを利用しなければ、再びサラは迷走し始める危険性もあったのだ。

「あ、貴方達は・・・・」

黒胡椒を販売している店の中に入ると、一行が救った男がカウンターに立っていた。
グプタは、先頭で店に入ってきたカミュの顔を見るや否や、引きつった表情に変わり、言葉を詰まらせる。それは、恐怖なのか。それとも何かに対する負い目なのか。

「・・・『黒胡椒』が欲しんだが・・・」

「・・・・・・」

カミュの発言にも、口を開いたまま動かないグプタに、彼の中に残る大きな衝撃をサラは改めて思い知った。その瞳に浮かぶのは怯え。それはとても、自分たちを救ってくれた『勇者』に向けるものではない。

「　ひっ！　」

そんなグプタの姿を茫然と見つめていたサラの耳に、陶器の割れる音と、女性の短い悲鳴が飛び込んでくる。そちらに目を向けると、予想通りの人物がカミュ達を見て立ち尽くしている。サラ達が自分たちの立場を犠牲にしてまでも救った女性、タニアである。

「・・・はぁ・・・」

二人の姿を見て、カミュが吐いた溜息に、再び二人は身体をびくりと震わした。
それが、もはや二人に話をしても無駄だということを知る。

「・・・悪いが、店主を呼んでくれないか・・・？」

「て、店主は私です。」

カミュの言葉に、若干腹を立てたかのように、グプタは口籠りながら反論を返した。
その態度に、サラは、グプタが決して自分たちに良い感情を持っていないことを知る。
サラの胸に広がる何とも言えない『哀しみ』。

「わ、私達は、お爺ちゃんからこの店を譲り受けたんです。」

「・・・では、町長はどこだ・・・？」

「「　ひっ！　」」

グプタとタニアが向ける感情は、カミュにとって十数年間受け続けた物。
リーシャやサラのように心に衝撃を受ける程の物ではない。
しかし、カミュは何故か怒りを覚えた。
それが何故なのかは、おそらく理解してはいないのだろう。
ただ、感情を吐き出すように低い声で尋ねるカミュの迫力に、グプタとタニアは再び短い悲鳴を上げた。

「お、お爺ちゃんなら・・・・せ、聖なる川の・・・方です・・・・」

カミュの冷たい瞳に呑まれてしまったように、操り人形の如く話すタニアの言葉を聞き、カミュは踵を返す。
カミュが店外へと出て行くことで、若干空気を和らげた二人であったが、やはりその根本は変わってはいない。それはつまり、リーシャやサラに対しても程度は違うとしても、同様の感情を持っていることを示していた。

「行こう、サラ。」

「は、はい。」

リーシャの促しに、釈然としない想いを持ったまま、サラは店を後にする。

それが、自分が選んだ道であったとしても、やはり二人の瞳に映る物が受け入れ難かったのだ。

カミュを追って、＞聖なる川＜と呼ばれる、この村の第二の象徴とも言える川へと辿り着いた時、既にカミュはそこに立つ一人の老人と相対していた。

「すまない・・・本当にすまない・・・」

リーシャとサラが近づいた時に聞こえてきたのは、繰り返される老人の謝罪。

言葉と共に、深々とカミュへと頭を下げ、何度も何度も謝罪を繰り

返す老人を見て、サラの頭は混乱し始める。

「・・・当然の事でしょう・・・」

「それでも・・・それでも・・・」

冷たい瞳で老人を見下ろすカミュ。
それでも、この町の長たるこの老人は、何かを言おうとして、涙に言葉を詰まらせる。
リーシャは、そのやり取りで、老人の心中を察した。

「・・・『黒胡椒』は、この革袋一杯に入れております。　お代はいりません。　孫娘を救ってくれた礼と、せめてもの罪滅ぼしに・・・」

顔を上げた老人の瞳は涙で滲んでいた。
しかし、その瞳にある光はとても強い。
それは、このバハラタという巨大都市の長としての瞳。

「・・・・・・」

「・・・どうぞ・・・」

『勇者』と『自治都市の王』の瞳が交差する。
一瞬の間の出来事ではあるが、その短い時間で、彼等の会話は終了した。

「・・・わかりました。　有り難く頂き、早々に町を出ましょう・・・」

「・・・申し訳ない・・・」

口を開いたカミュの言葉に、サラは言葉を失った。
それは、カミュの言葉だけではなく、その言葉を否定せずに謝罪する老人に対しても驚きを隠せなかったのだ。

彼は、タニアという娘の祖父である前に、この巨大商業都市＞バハラタ＜の長でもある。
実際には、彼だけはカミュ達が行ったことの本当の意味を理解しているのだろう。
盗賊の根絶やしがこの町を救う唯一つの方法であったということを。
故に、グプタとタニアの話を聞いても、その行為を咎める事はなく、『殺人』という大罪まで犯しながらも町を救おうとした人間が、敢えて盗賊の棟梁を逃がしたことの意味も理解したのだ。

だが、彼のような経験豊富な人間は少ない。
それをこの老人は知っていたのだ。
この＞バハラタ＜という町は、盗賊という脅威を無くし、再び動き出そうとしている。

やっと落ち着きを取り戻そうとする町民の心を、再び掻き乱すことが、得策ではないことを考え、小を切り捨てる決意をしたに過ぎないのだ。

「・・・ただ、申し訳ないが、その『黒胡椒』は預かっていて欲しい・・・・」

「は？」

最善の道を模索し、それを受け入れられたことに胸を撫で下ろしていた老人は、カミュの申し出に引き攣った顔を上げた。
カミュの申し出が、自分の思惑から大きく離れていく物だったのだ。

「・・・我々は、このままある場所に行き、そして戻ってきます。
その時にそれを受け取らせて欲しい・・・」

「で、では、再びこの町に訪れるということですか・・・？」

老人の表情に焦りが浮かぶ。
できることならば、カミュ達には、二度とこの町に足を踏み入れて欲しくはない。
それが、この町の長たる老人の願いなのだろう。

「・・・カミュ・・・・」

「・・・・・・・」

その老人の気持ちは、後ろに控える二人にも確かに伝わっていた。
リーシャは、昨日カミュが月を見上げながら呟いた事の本当の意味を知り、サラは自分が選んだ道の本当の険しさを知った。

確かに『人』は救われた。
だが、それは受け入れられないのだ。
それが、サラが選び、三人が認めた道。

「・・・承知しました・・・ただ、これは店ではなく、私の家で預からせてもらいます。　できますれば・・・」

「わかっています。　再び訪れる際は、月が昇る頃にお伺い致します。」

カミュの変わらぬ視線を受け、老人は静かに頷く。
そして、続けようとした言葉に、カミュが被せたものを聞き、安堵の溜息を吐いた。

もう一度深々と頭を下げた老人は、革袋を持ち、町へと戻っていく。
その後姿を見ながら、サラの気持ちは再び落ち込んでいく。
『自分の選択は本当に正しかったのか』と。

「・・・カミュ様・・・」

そして、彼女は問いかける。
自分が信じ始めている『勇者』という存在に。

「・・・あれは、俺の行為に対する物だ。　アンタが気にする物じゃない・・・」

だが、返って来たのは、たった一言。
今の老人の対応は、『殺人』という罪を犯した自分が受ける物だと。
それは、自分の役目だという一言。

しかし、サラは気付いている。
それだけではないということを。

「・・・アンタは『覚悟』を決めたはずだ。　この先の旅で、その『覚悟』が変わらない限り、この視線から逃れることはできない。
それでも・・・いや、いい。」

「・・・カミュ・・・」

何かを言いかけ、そしてカミュは言葉を飲み込んだ。

そんなカミュを、リーシャは哀し気に見つめる。

「わたしは・・・」

そして、カミュの問いかけの意味を理解したサラは、再び口籠もる。
あれだけ心を決め、そしてカミュへと啖呵を切った筈なのに、いざその悪意と言っても過言ではない物を受けた途端に、その『決意』が萎んで行く。
そんな自分の心が醜く、情けないものに感じ、サラは何も言えなくなってしまった。

「・・・カミュ・・・」

「・・・ふぅ・・・俺が知っている『僧侶』という存在は、自分の枠内だけで考えるような人間ばかりだった。」

「え？」

再び俯いてしまったサラを見て、リーシャはカミュへと視線を送る。
その視線を受けたカミュが、一つ溜息を吐いた後に語り始めた内容は、サラの理解が追いつけないものであった。

「・・・アンタの考えは甘い・・・」

「うっ・・・」

カミュが何を言おうとしているのか側からないサラは、追い討ちのようなその言葉に、言葉を詰まらせ、再び俯いてしまう。

「だが、甘いからこそ救われた者も、俺達の手の中にいるはずだ。」

「・・・・・・・ん・・・・・・・・・」

カミュが言葉と共に開いたマントの中から、顔を出したのはメルエ。
救い出したのはカミュであるが、実質救おうとしたのはサラ。
サラの想いがなければ、そのまま奴隷として命を落としたであろう少女。

「アンタは感謝をされる為に、メルエを救ったのか？」

「い、いえ！」

カミュの突然の言葉に、サラは反射的に首を振った。
メルエを救うときは無我夢中だった。
それが、後に自分を苦しめることになったが、あの時カミュに言っ

た言葉は、サラの本誌からの言葉。

「アンタの想いを誰一人理解しなくとも、そこの脳筋戦士とメルエが知っている。」

「・・・カミュ様・・・」

その言葉を最後に、カミュは歩き出した。
その背中を呆然と見つめるサラの背中を、リーシャが優しく叩いた。
リーシャの顔を見上げ、一つ頷いたサラも歩き出す。

彼等の歩く道は、険しく、そして果てしない。
誰一人見定めることは適わず、そして、誰一人理解することのできない道。
この『遥かなる旅路』の先にあるものを誰も知ることはできない。

バハラタの町？（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

この話の中で、リーシャとカミュの場面は結構好きなんです。
自分のイメージですが、なんか二人らしいな・・・と
まぁ、製作側の勝手なものですが（笑

ご意見、ご感想を心よりお待ちしています。

※勇者一行　装備品一覧（前書き）

カミュ達の装備品一覧です。
少し、装備品は変わりましたね。

※勇者一行　装備品一覧

装備一覧

【名前】：カミュ

【職業】：勇者
意図せずに出くわす場面の一つ一つがこの青年であるが故の『必然』ということが、彼が『勇者』であることを証明し始めている。

【年齢】：１６歳
既にアリアハンを出てから、一年の時が経過しようとしている。

【装備品】
頭）：サークレット
胴）：鋼鉄の鎧

盾）：鉄の盾

武器）：鋼鉄の剣
その剣の腕は、着実に進歩している。鍛錬の相手であるリーシャもまた、飛躍的にその力量を伸ばしていることから、本人は気付いてはいないが、既に『人』としての枠から外れ始めている。

所持魔法）：メラ
ホイミ
ギラ
ルーラ
アストロン
トヘロス
ベギラマ
ラリホー

【名前】：リーシャ・デ・ランドルフ

【職業】：戦士（アリアハン宮廷騎士）
騎士としての誇りや、戦士としての矜持よりも大切な物を、その瞳に宿し始めている。
戦士としての力量は、既に『人』としての枠を超えていることに気付いている。

【年齢】：不明

【装備】
頭）：鉄兜

胴）：鋼鉄の鎧

盾）：鉄の盾

自分の身だけでなく、仲間の命も救った＞青銅の盾＜は原型を把握できないほどに破損し、ポルトガの町で新調した。

武器）：鉄の斧

通常、斬るというよりも叩き割るという使い方が正しい＞斧＜ではあるが、日々の手入れのためか、この刃先は鋭く、魔物の硬い皮膚や体毛なども容易く斬り裂く。

所持魔法）：なし

魔法力が皆無なため、契約及び行使は不可能。

【名前】：サラ

【職業】：僧侶

『人の業』に悩む心優しき僧侶。

ついに、自己のなかにある魔物への復讐という念を乗り越え始めた。

この世界で生きているものが、人だけではないことを認め、それでも人を救いたいと願う。

人の弱さを見せられ続けながらも、その中にある人の強さを信じ、前へと進んでいく。

【年齢】：１８歳

【装備】

頭）：鉄兜
鉄兜の上から、僧侶帽を被る形で装備している。

胴）：みかわしの服
みかわしの服の上から法衣に付いている十字の刺繍がある前掛けを下げている。

盾）：うろこの盾
鉄の盾へと装備を変えたカミュから譲り受けた物。
本来は、ロマリア宝物庫に保管されていた貴重な品。
カミュの鋼鉄の剣での一撃を防ぐほどの防御力を持つ。

武器）：鉄の槍

所持魔法）：ホイミ
ニフラム
ルカニ
ルカナン
マヌーサ
キアリー
ピオリム
バギ
ラリホー
ベホイミ
マホトーン

【名前】：メルエ

【職業】：魔法使い
その魔法力は規格外であり、もはや普通の暮らしをすることは困難なほどの異常性を持つ。

【年齢】：7，8歳
身長などは7，8歳にしては小さな方で、知識や行動も幼いことから、もしかするとそれ以下の年齢なのかもしれない。

【装備】
頭）：とんがり帽子
メルエのお気に入り、友であるアンの作ってくれた花冠が掛けてある。

胴）：アンの服
みかわしの服と同じ素材でできた服。

盾）：魔法の盾
何かを買って欲しいとねだるメルエにカミュが買って与えたもの。
持ち主によって、その形状を変える盾。
また、抗魔力にも優れ、魔法による攻撃からの防御力も高い。

武器）：魔道師の杖
　　毒針

所持魔法）：メラ
　　ヒャド
　　スカラ
　　スクルト

ルーラ
リレミト
ギラ
イオ
ベギラマ
メラミ

※勇者一行　装備品一覧（後書き）

第五章も、これにて終了です。

次話もできるだけ早く更新するように致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2430o/

新訳　そして伝説へ・・・

2011年12月7日01時56分発行